神宮司廳藏版

古事類苑

法律部三

古事類苑刊行會


LIBRARY
MAR 23 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

古事類苑

法律部第三册目錄

法律部四十八
下編下
博弈
法律部四十九
下編下
追捕目明附
法律部五十
下編下
囚禁上
法律部五十一
下編下
囚禁下溜附

法律部五十二

下編下

赦宥

法律部五十三

下編下

訴訟上

法律部五十四

下編下

訴訟下

法律部五十五

下編下

訴訟人

法律部五十六

下編下

訴訟文書
法律部五十七
下編下
告訴
法律部五十八
下編下
聽訟上
法律部五十九
下編下
聽訟下
法律部六十
下編下
拷訊 斷罪附
和解

古事類苑

法律部四十八

下編下

博弈

博弈禁令　三
簡取　宿　打子　一〇
自訴　訴人　褒美　二一
家主　地主　隣保　二四
廻簡博弈打　三一
手目博弈打　三四
搢紳處刑　三六
武士處刑　同
僧侶處刑　四四
幼者處刑　四七
女子處刑　四八
博弈債　四九
博弈具　五二
三笠附 前句附 冠附　五八

取退無盡頼母子講　六八
富突陰富　七五
寺社富突　八〇
影富　九四
棒引紋附　九七
賣引かるた　九九
賭的　一〇三
雜博弈　一〇四
博弈雜載　一一一

古事類苑

法律部四十八

下編下

博弈

德川幕府ニ於テハ、博弈ハ嚴禁スル所ニシテ、胴取幷ニ宿ヲ特ニ重罪トシ、之ヲ遠島ニ處シ、胴取、宿ノ家主、宿ノ兩隣、五人組皆罪アリ、而シテ取退無盡ト、三笠附トハ、其罪博弈ト同ジ、凡テ無盡ヽ、年月ノ期限ヲ定メ、毎月一會、或ハ數月一會等ニ金錢ヲ募集シ、中リ鬮ノ者ニ幾分ノ金錢ヲ付シ、既ニ金錢ヲ得タル後モ、會期中ハ出金スルコトナルガ、取退無盡ハ、金錢ヲ得テ後ニ出金スルニ及バザルコトニテ、博弈ト異ナルコトナケレバ、頭取及ビ宿ハ、亦遠島ナリ、

三笠附ハ、モト俳諧師ヨリ出デタルモノニテ、元祿ノ頃、前句附ト云フコトアリシガ、是ハ俳諧點者ヨリ、下ノ句一句ヲ出シテ、多クノ人ニ上ノ句ヲ附ケサセ、其巧拙ニ由リテ、點數ヲ定メ、甲乙ノ賞ヲ行フ、其賞品ハ、布帛或ハ、器物ヲ以テシ、布帛器物ヲ要セザル者ニハ、金錢ヲ與フ、此事盛ンニ行ハレシガ、更ニ爲シ易カランガ爲ニ、點者ヨリ上ノ句ノ初ノ五字ヲ出シテ、次ノ七字五字ヲ諸人ニ附ケシメ、之ヲ冠附トモ、笠附トモ云ヘリ、寶永ノ頃ヨリ冠ノ五字ヲ三樣ニ出シテ、各七字五字ヲ附ケテ勝敗ヲ決スルコトアリ、之ヲ三笠附ト云フ、其後五字ノ冠ヲモ出サズ、下ノ七字五字ノ句ヲモ止メテ、只數ノ文字ヲ封ジ、暗ニ此數ヲ計リテ札ヲ入レ、其數ノ中レルヲ勝トシテ金錢ヲ與フルコトヽナレリ、是ニ於テ博弈ト毫モ異ナルコト

ナケレドモ、猶ホ元ノ名ヲ存シテ三笠附ト謂フ、故ニ點者、金元、并ニ宿ハ亦皆遠島ナリ、此三笠附ノ弊害ハ、一時甚シカリシモノト見エテ、御定書百箇條ニハ之ヲ博弈條ノ首ニ置ケリ、」

又富突ト云フモノアリ、是モ古クヨリ行ハレシガ、元祿五年之ヲ禁ゼシカド、全ク其跡ヲ斂ムルニ至ラズ、享保十五年ニ至リ、仁和寺門跡、其館宅修復ノ爲メ、幕府ニ請ヒテ、毘沙門天ノ富突ヲ、護國寺ニ於テ、三年間興行セシヨリ以來、寺社ニ於テスルモノ多シ、谷中感應寺、目黑瀧泉寺、湯島天神ノ如キ尤モ其名アリ、文政天保ノ頃ニ至リテハ、次第ニ增加シテ、數十箇所アルニ至レリ、サテ其法ハ、初メ番號ヲ記シタル紙札ヲ賭者ニ與ヘテ、期日ヲ約シ、其日ニ至レバ、寺社境內ニ席ヲ設ケ、孔ヲ穿チタル方數尺ノ函ヲ置キ、賭者ノ姓名番號等ヲ記シタル木牌ヲ、其中ニ投ジ、上下左右ニ之ヲ搖動シ、而シテ後錐ヲ以テ、其木牌ヲ刺シテ之ヲ取リ、初メニ出デタルモノヲ以テ、第一ノ中リ鬮トシ、賞金百兩ヲ與フ、但シ其醵金ノ數ハ一定セザレドモ、多キモノハ千兩ニ至ル、然ルニ文化ノ比ニ至リ、富札ノ仲買ト云フモノ出デ、密ニ講元ト謀リテ、富札ヲ買ヒ占メ、價ヲ數倍ニシテ賣リシカバ、貧者ハ之ヲ買フコト容易ナラズ、是ニ於テ影富ト稱スルモノ起レリ、影富一ニ第付(ダイヅケ)トモイヒ、寺社ニテ興行スル富ノ出番、卽チ中リヲ以テ、ソノ富ノ中リト定メ、谷中感應寺影富ナド丶稱シテ、初メハ公然之ヲ行ヘルモノヽ如シ、而シテ本富ノ興行アル每ニ、影富ノ札ヲ買ヒタル人ノ爲ニ、直チニソノ中リ番數ヲ錄シ、オハナシ、オハナシト大呼シ、市中ヲ行賣スルモノ、亦數十人アリシト云フ、

棒引紋附トハ、一紙ニ俳優ノ紋四十餘描キタルモノヲ以テ、賭者ヲシテ其上ニ墨ニテ棒形數箇ヲ描カシメ、一箇ニ就キテ錢四文ヲ出サシム、而シテ其鬮ニ中リタル時ハ、其醵金ノ數ニ應ジテ、賞金ヲ與フルナリ、是全ク三笠附ト同ジ、此他寺社建立講、融通講、謙德ナドヨリ、福引、ヨミガルタノ如キ、至テ輕キ者ト雖モ、苟モ博弈ニ似タルモノハ、幕府屢、令ヲ發シテ禁ジ

タリ、又賭的ハ、武藝ニ屬シテ、從前ハ禁ゼザル所ナレド、此時ノ方法ハ、大ニ博奕ニ類スルヲ以テ、亦之ヲ禁ゼリ、

〔武家諸法度〕一可レ制二群飮佚游一事

合條所レ載嚴制殊重、耽二好色一業二博奕一、是亡國之基也、○中略

右可下相二守此旨一者也

慶長廿年七月

〔諸士法度〕一結二徒黨一、致二荷擔一、或妨をなし、或落書、張文、博奕、不行儀之好色、其外侍に不レ似二合事業不レ可仕事、○中略

右可下相二守此旨一、若於二違犯之族一者、糺二其咎之輕重一、急度可レ被レ處二罪科一者也、

寛永十二年十二月十二日

〔積徳編下〕一濱松駿河ニ御座之節も、博奕ハ諸惡の根元と有之御意ニ而、御城下之義ハ不レ及レ申、四ヶ國之御領内を御法度ニ被二仰出一、關東御入國之砌り、御當地之義ハ不レ及レ申、惣じて關八州ともに、北條家の柔弱なる仕置故、僧俗男女の差別なく、おしはれて博奕を打と是ある段御聞ニ達し、板倉四郎左衛門〔後任二伊賀守一〕其外御物頭衆兩人被二仰付一、嚴敷御法度に仰出され、其節ニは盜賊など多く候處ニ、其盜人共をば牢舍など被二仰付一候得共、博奕を仕もの共をば暫らくも御宥免なく、捕へ次第片はし御成敗被二仰付一しとなり、其節淺草邊ニ而、博奕打候者を捕へ、五人ともに其所に獄門ニかけらるゝを、御鷹野御成之節是を御覽遊ばされて還御以後、博奕吟味ニ掛るもの共を御城へ召て、御直に被二仰渡一けるハ、惣じて科人を仕置して、其首を獄門ニ掛さらし置も、諸人見ごりの爲にてあるなれば、五人一座の博奕ならば、何月何日何方ニおゐて如レ斯有レ之と札に書し、其所計に限らず、何方ニ而も人立多き場所へおしさらし置やうにと仰付らるゝ

を以て、其已後之義は、十人一座にてさらへ候へば、十ヶ所へ遣し御仕置ニ仰付られ、首を其所に掛置候ニ付、二三年が間ニ博弈沙汰止ける也、其後島田彈正町奉行之節も嚴敷吟味之處に、博弈之訴人出て、同心共を差遣し、六拾人召捕候處、中ニ五十歲計の坊主壹人有レ之候ニ付、彈正其坊主に向ひて、其方は頭を丸め候身にて、別而不屆也、元來は醫師か、出家か、何者ぞと尋候處、坊主申は、私親は武州忍之城主、成田殿ニ而、連歌之執筆役を勤る處、成田殿身上果られ、其後親も浪人にて相果候ニ付、私義浪人と罷成、渡世之仕方なきゆへ、博弈仲間へ入り、燈かき立、湯茶を持運び候を役にいたし、食事をもらひ世を送り申候、博弈と申者は、いか樣ニ仕候哉存せずと申ニ付、博弈仲間共江尋ね申處、坊主申通ニ付、彈正坊主に申は、其身連歌師の子が實正ならば、そこにて一句仕り候へとありければ、

朝霜やまだとけやらぬ繩手道、彈正聞て、此發句に對し、繩をときゆるし、向後之義は、博弈之座江交りを止め、食物なくば、町年寄共方へ廻り致してなり共貰ひ候やうにと申渡すニ付、彼方此方と徘徊致し、心安く渡世せしとなり、

〔正寶事錄四〕諸國海邊御高札御文言御觸連判

條々○中略

一博弈、總而賭之諸勝負、急堅可レ爲二停止一事、

右之條々、可レ相二守此旨一、若於二惡事仕一は可二申出一、急度御褒美可レ被レ下候、科人は罪之輕重にしたがひ、可レ爲二御沙汰一者也、

寬文七年閏二月十八日　　奉行

右如レ此之御高札、今度諸國海邊浦々江御立被レ成候間、町中家持、借屋、店借等迄、爲二申聞一、自今以後、此旨急度相守可レ申候、若相背者有レ之候はゞ、如何樣之曲事にも可レ被二仰付一候、爲二後日一町中連判之

手形差上申候、仍如件、

寛文七年未三月廿三日　　町中連判

御奉行所

〔公事方御定書上〕日本橋、淺草橋、常磐橋、芝車町、筋違橋、麹町高札、

定○中略

一博弈之類、一切に禁制之事、○中略

右條々可相守之、若於相背者、可被行罪科者也、

正徳元年五月日　　奉行

〔享保集成絲綸錄二〕享保十一午年正月

日本橋計江立候高札

覺

一三笠附點者金元、幷宿致候者、句拾ひ等、

一博弈打頭取、幷博弈宿致候者、

右之族、當正月ゟ相止候ものハ、可差免候間、彌此以後急度相愼可申候、若不相止ものハ當人ハ流罪、或ハ其品により死罪可申付候、句拾ひ等ハ身體取上、非人手下江可差遣候、

右之通ニ候間、當正月以前之舊惡は可差免候間、正月以後迄も不相止族於在之は、何者にても町奉行所江密々可訴出候、急度御褒美金可被下候事、

但同類之内たりといふ共、訴出勿論自分之舊惡をも自今於相改は、其科を免し、是又御褒美可被下候事、

一如此申付候上ハ、都て家主、幷名主、五人組之もの共申合、常々心掛致吟味、疑敷もの於在之ハ早

早可訴出候、外ゟ訴人在之、博弈頭取、三笠附點者、金元、幷右宿いたし候もの召捕候はゞ、其屋敷取上、家守在之バ、家主ハ家財取上ゲ、百日之手鎖かけ、兩隣、幷五人組、家財取上ゲ、名主町内江は、急度過料可申付候事、

右之趣可相心得、万一科なき者、意趣ヲ以於申出は、吟味之上急度可申付者也、

享保十一年午正月

〔享保集成絲綸錄四十七〕享保十一午年正月

一諸博弈打之儀ニ付、今度日本橋江高札建候間、認趣見可申候、右札文言猶又相渡置候間、名主支配切りに板に書付、目立候所に建置、年月過候とも忘却無之樣に、諸人に見せ可申候、名主支配多く候はゞ、二ヶ所にも三ヶ所にも建置可申候、

右之通町中可觸知者也、

正月

〔季達宿禰記〕元祿十五年十二月七日癸未、自兩傳奏一紙到來、司狀云、此一紙自關東到來之由、自所司代松平紀伊守被出之間、家人、從者、幷知行所、又催方諸司、觸知行所等、固可相守之旨、可下知云々、

御松平紀州所出之一紙記左、立文也

覺

博弈打候儀、從前々御法度之處、今度御扶持人之内、其外にも、博弈打候者有之、不屆ニ付而段々御仕置被仰付候、向後彌相愼、博弈一切不仕候樣、組中支配々々、幷召仕等迄、急度可被申渡候、町中在在江も、博弈堅不仕候樣、可被相觸候、以上、

午十一月

〔續泰平年表〕天保十三年三月廿五日御觸、近來武士屋敷ニ而博弈致候者有之由相聞候、寛政之度被仰出候趣相守、急度可申付旨、最寄相達置候間、銘々召

仕共堅制止ヲ加へ、嚴重ニ可申付は勿論候得共、若等閑之儀於有之は、町奉行火附盗賊改組之者相廻し、屋敷ニ踏込召捕候様申渡置候間、可被得其意候、

〔月堂見聞集二十五〕一六月〇享保十七年十八日、今度御法度之博弈打之者共ニ被仰渡候、

三條通東洞院東へ入町錢屋勘兵衛借屋

手錠預ヶ　近江屋善兵衛略〇中

右九人、被仰渡相濟、手錠ニて町之者へ相渡し、右町々へ召連歸り候樣ニ被仰付、追付服部牧右衛門、山本藤九郎、稻田孫右衛門、右町々にて二十杖ツヽ敲キ候上、悲田院之者共相濟、洛外境迄、但洛中之分拂、

烏丸御池上ル町播磨屋治郎兵衛手代

牢舍　宗助略〇中

右八人、町々にて二十杖ツヽ敲、拂右同斷、略〇中

松原室町西へ入町醬油屋平右衛門借家久兵衛家主

牢舍　松屋源兵衛

右源兵衛儀、無御構出牢、過料十貫文、五人組二人手錠御赦免、一人にて過料三貫文ツヽ、

建仁寺新地森下町平野屋伊兵衛借座

阿波屋孫兵衛略〇中

右之拾人者共、洛中洛外御拂、西ノ御出居外迄目付衆雜色衆送ル、此分は廿杖無之、其代りニ縄付ニテ引カル、

右之者共、博弈打之者共、其上當四月廿八日、圓山凉阿彌方ニて、右人數之內博弈打候處、座敷之次ノ間ニて板敷ヲ放チ、下より手目をいたし候儀、負候者共詮義いたし、及口論候由、目付山本藤九郞牢屋敷にて、五月廿九日より、右之者共毎日呼寄、口書ヲ取、閏五月十八日、御前へ被召出、牢舍又

は手錠にて御預ヶ被成候處に、今日敲拂、又ハ追放被成候、

〔德川禁令考後聚行刑條例二十四〕寛政八辰年四月廿三日

京都ニ而博弈御仕置之事

對馬守江一座御渡

先達而評議いたし被申聞候、京都町奉行掛、笹屋町五丁目菱屋源七父、足折源四郎事、源兵衛一件御仕置之內、博弈宿致し候もの地主、前々ニ御咎申付候先例無之、地面建家共壹人之所持ニ付、地面取上ニ不及候事、

一博弈いたし候もの敲之事

禁裏御座所之儀故、敲入墨敲之ものは、前々より洛中洛外拂申付候仕來ニ候處、其儘差置候而ハ仕來ニ振候ニ付、仕來之通洛中洛外拂たるべく候得共、左候而ハ、博弈之御仕置殊之外重く成候間、一同不及敲、例之通過料可申付候事、

右之外者、京都町奉行伺之通申渡候、此以後も京都ニ而博弈御仕置之儀ハ、前書之趣可被相心得候事、

四月

〔公裁隨筆上〕一博弈一件吟味心得方之事

博弈一件吟味いたし候にも、御仕置當り凡之目當無之候而は、不都合に而、且は吟味可詰ものを、其なりにいたし候ては、不宜候間、左に出之、○中略

京都ニ而は、博弈御仕置別段之取計有之候事、○下略

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

享保十六年極追加

一都て三笠附、博弈打、取退無盡、御仕置一件之內、遠島もの五ヶ年過御赦有之節、御免之儀可相伺

事、

延享二年極 但所拂以上之御仕置もの博弈一通に候はゞ、右同斷相伺可申事、

〔科條類典 下四〕延享元子年九月

博弈一件ニ而遠島ニ成候者、御赦ニ伺候儀御尋ニ付申上候書付、　評定所一座

去ル五日被仰聞候、博弈一件ニ而遠島被仰付候もの、唯今迄五ヶ年過御法事之御赦ニ相伺、御免被成候、右一件之內、其當座過料等ニ而相濟候ニ付、伺不申候、

一取退無盡御仕置一件之內、江戶拂、將亦博弈一件御仕置之內、博弈催候世話ハ不致候得共、合力金貰候もの中追放、御仕置此度御定書ニ相成申候、此類向後御赦有之節、五ヶ年過候得バ、相伺候積ニ御座候、以上、

子 九月

〔德川禁令考後聚 三十九 赦律〕御仕置輕重ニ付赦免年數之事

一所拂拾壹ヶ年以上赦免可申付事 ○下ヶ札略

是者前々より所拂ニ不限、追放遠島ニ至候迄、大赦有之候節ニ至、先例ニ見合赦免有無致評議申上何御仕置ハ何ヶ年位より以上と申定も無之、尤品輕キハ四ヶ年目より赦免之儀申上來候得共、御定書ニ、都而三笠附博弈打、取退無盡御仕置一件之內、遠島もの五ヶ年過御赦有之節、御免之儀可相伺事、但所拂以上之御仕置ものも、博弈一ト通ニ候ハゞ、右同然ニ相伺可申事と有之、博弈之儀者惡事之內ニも輕キ品ニ付、右體之御定も有之候儀故、其餘之及不屆候もの、六ヶ年以下ニ而赦免相成候而ハ右御定之御趣意ニ齟齬いたし候間、博弈類之外ハいづれ拾ヶ年も過候上赦免被仰付相當ニ可有之、乍然所拂ハ御仕置も輕く候間、右之內ニハ犯科之品格別品輕キも可有之、右等ハ前書博弈御定をも見合、六ヶ年以上ハ被赦候而も可然哉ニ付、先例

筒取
宿
打子

をも見合、評議之上相認申候、

〔德川禁令考後聚敎律三十九〕度々御仕置相成候もの之事〇中略

一一旦御仕置相成、同罪再犯および候もの、御仕置之輕重ニ應じ赦免可申付事、

但博弈ハ別段之事

是者律追加六ヶ條同罪及再犯候もの、不正唐物、又は盜之外ハ、貳拾年以上ハ御免、但博弈ハ再犯之論無之事と有之、〇中略但書之儀ハ律文取直し、評議之上相認申候、

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

一博弈打筒取并宿（享保十一年極）　遠島

一博弈打候者（同）　家財家藏取上候程之過料、家藏無之者ハ五貫文、或ハ三貫文過料、

〔享保集成絲綸錄四十七〕承應四未年〇明曆元年三月

一かるた、博弈、諸勝負、堅御法度之由度々御觸被成候處、此頃ハ猥ニ罷成候由御聞取候間、此上相背者於有之ハ、當人之者共ハ急度曲事ニ可被仰付候、并宿之儀是又曲事ニ可被仰付候事、〇中略

八月

〔科條類典下四〕享保十巳年伺

諸博弈頭取、金元、宿、句拾等、并訴人之事、

覺

一三笠附點者、金元、同宿致候もの句拾ひ、

一ばくち打頭取并博弈宿致候もの、

右之族、正月迄之舊惡ハ被差免候間、自今心底を改、諸ばくち可相止候、若不相止ものハ不屆至極ニ候間、當人ハ流罪或ハ死罪、句拾等ハ身體取上、非人手下ニ可差遣候事、

附札

此流罪、死罪之儀、是程ニ不被仰付候而ハ、諸博弈十ノ物一ツ二ツも減じ申間敷候、〇中略此外博弈打と名付候ハ、輕重共夥敷事ニ可有之候、非人手下江遣候儀も難仕、遠島申付ケ候而も如何ニ御座候間、博弈打之儀ハ札之面ニ書出し不申候、右ばくち打之分ハ、唯今迄御定之通、身代限家藏迄取上可申候、家藏無之ものハ、右ニ准じ過料可申付候、〇下略

〔政談秘書 一〕一天明五巳年十二月五日、井上河内守樣江左之通伺差出、

領分寺院ニ而博弈之沙汰御座候はゞ、承糺候上、役人差遣、不埒之者集居候ハゞ召捕吟味仕候心得ニ御座候、且又御朱印地之寺院ニ而、右體之儀御座候ハゞ猶ニ承糺候上、無案內、役人差遣、不埒之者召捕候而も不苦儀ニ候哉、御朱印地之儀ニも御座候間、此段御問合申上候、以上、

十二月五日　石川若狹守家來　松本武右衛門

御附札

御領分寺院ニ而博弈之沙汰有之候ハゞ、御朱印地ニ而も、並地ニ而も、先住持御呼出し之上、御糺有之、申口次第ニ而、咎輕重有之義ニ而、尤博弈打候者ハ勿論、宿致候者も、重キ御仕置候間、宿致候寺院御糺有之方与存候、博弈沙汰而已ニ而無案內寺院江踏込候而召捕候義ハ、時宜ニ寄可申候間、兼而難及御挨拶候、

〔天保集成絲綸錄 百〕寛政六寅年三月

三奉行江

博弈御仕置御定之內、當分左之通、

博弈打候もの　重敲〇中略

右之通可被申付候、此外之儀ハ只今迄之通可被心得候、

三月

〔春波樓筆記〕人間感

弈は下の賤しき愚人、酒食の外樂しみなし、故に之を好む者多し、十人にして勝者は一人なり、負者九人盜となるより外しかたなし、先達白川侯權を取られし時、博弈の宿は死罪、其一座の者は遠島と有りければ、其頃は一向博弈なし、

○按ズルニ、松平定信執政中、博弈宿ヲ死罪、一座ノ者ヲ遠島ト定メシコト、當時ノ法令ニハ未ダ見當ラズ、姑ク疑ヲ存ス、

〔夢語〕今博弈の御仕置といへば、皆遠流などに處せらるゝよし、近來法ゆるかせにや、博弈は下人の業の樣に成て、十か半は是をなすやう也、しかれば彼この祭、愛の市などになきはなし、殊に霜月酉の市などは傍若無人不憚事にぞある、是如此なれども、さして制す人もなく、御咎もなし、しかれば下人は此市は御免の博弈にて、身の祈禱にもなるなど心得て、誰憚ることなく往來人の立つどひ中には僞り誑らかされて貪りとられ、主親の心にそむき、身のよるかたなく成ものなども出來るとや、こはそもいかに斯る事にや、博弈の事は御條目にものせられて重きいましめなるを、かくゆるかせより各人々の業のやうに心得、御法度の事ともしらざる類あるべし、是よりみな人倫の道をやぶり、惡黨にも入るなり、又斯免しゆるかせよとおもへば、喧嘩口論などより事起りて、いさゝかの勝負事などにも、ある時はたゞちに御科に處せらるゝ類あり、是は常にゆるかせより起る事にて、下々はすべき事のやうに覺え居る也、然るをたゞちに罪に處せらるゝは敎ずして罪するやう也、たゞ法に有て政事に害也、しかれば其罪に成しものはその事にても人々はしらざれば夫よりもてあしきもの共は、事なければ幸にまぬかれて、やはり是をする也、何卒此儀は嚴敷制せられたきか、然れども今世に普く成し事

なれば、一がいに罰せば甚人多く損すべし、先法を嚴に觸わたされ人々に示ほどこして、さて其事の行わたりて人々も辨へし後、いまだ是をせば是をもて世のいましめとし、人に知るやうに仰付られんか、御入國のはじめ專博弈盛なりしを、其博弈打ども召とられ、江戸所々に獄門にかけられしより、たゞちに止けるとぞ、是はいまだ江戸廣からざる時の事也、其後又博弈はやりて專にありしかば、天和中御旗本にて七八人遠島に仰付られしとぞ、玄かれども止ず、元祿ごろ御先手へ博弈改仰付られて禁せられき、今とては此制もうとければ今專なり、是を詮議して遠島にも仰付られば誠に限有まじ、然らば御慈悲の御賢慮有べき事ぞ、博弈の御仕置はみな遠島のやう也、かくては御旗本も下賤の無宿ものもみな同罪也、然れ共此一科のうち其輕重あり、巧る有、惡あり、過あり、淺深有べし、然れば士たるものゝ辨有べきは、其御咎も又輕重あらんことあるべき事か、是等及び八虐の外ならば、其人により、其罪により、笞杖の耻をもていましめ、或は律などによつて口せ、又近流などにも處せらるゝか、又は下賤の博弈の御仕置等は、耳そぎ或は面に入墨するか、又は信州松本邊の掟のやうに、其身一生は穢多の手下などにするかなど、輕重夫々によつて罪せられば、遠島にせらるゝより耻かく事のつらく、人人の見こらしめとも成べし、尤其罪深きは遠流などなるべし、然らば耻あつていたるものも有べく、人をいましめ敎るの御慈悲成べし、此博弈の儀はいにしへをもて末を見るに、今嚴敷禁せられば一旦は止べし、然れども利にはしり間に遊ぶ人情いつしか又起るべし、何卒此起らぬやうに御計策も有べきものか、いづれ末に中屋敷も町々も組合正敷立ば、おのづから其吟味に成てやむべきか、是人情の遊ぶところなれば、無理に押は又災發るべし、古へより、碁、將棊、雙六の類有て、いにしへの帝も寛蓮と圍碁のかけものなし玉ひ、玄宗も貴妃と朱三朱四の賭ものあり、玄かれば行末の治を思はんには、何ぞ一色は諸人の鬱を散ずべき徒然を凌ぐた

よりにゆるされば、却て治のたすけ成べし、然れども四五人も集りなどし、あるひは私に賽の目をかぞへんなど、亦は金錢其外過分のかけものなどする事は嚴敷禁せられば、是又治國の爲ならんか、然れども非法久しき時は又逸すれば、以前のごとく折々は博弈改仰付られて、在在迄も嚴敷改られん事か、

○按ズルニ、此書ハ天明七年ノ著ニシテ、作者詳ナラザレドモ、寛政二年、コレヲ執政松平定信ニ上リシ由、ソノ跋ニ見エタリ、

〔天保集成絲綸錄百〕寛政六寅年六月

御勘定奉行江

博弈賭之勝負之儀、前々より御制禁之處、今以不相止、在々ニ而ハ博弈又ハ紛敷賭之勝負いたすもの有之趣相聞、不屆之事ニ候、右ニ付猶更無油斷手代等相廻し召捕、一同糺之上ハ、手鎖過料敲重敲等、時日を不移咎申付候樣可致候、尤簡取有之歟、又ハ定式ニ宿いたし候もの歟、廻り簡ニ而も三四度ニ及び候博弈之類ハ召捕置、咎之儀早々奉行所江可被伺候、尤私領ニ而も、御料所幷他給江引合候儀有之候共、掛合之上勝手次第、其家之仕置申付、且又小給所家來等も不差置分ハ、最寄之御代官江村役人より申立、御代官ニ而咎之事等も別紙之通達置候間、得意嚴重ニ可被取計候、

右之通當分取計可申旨被仰出候間、御代官江可被申渡候、私領より御料之引合ニ而掛合有之節も、簡取又ハ宿、或ハ廻り簡三四度ニおよび候類ハ、御代官より伺いたし、其餘ハ引合有之候とも、私領手限ニ濟候樣ニ早々可及挨拶旨、是又申渡可被置候、

六月〇又見ニ御仕置筋御書付留

〔公裁隨筆草〕一博弈一件吟味心得方之事

博弈一件吟味いたし候ニも、御仕置當り凡之目當無之候而は、不都合ニ而、且は吟味可詰ものを、其なりにいたし候而は不宜候間、左ニ出之、
博弈筒取、又は貸元、或は三笠附之點者、幷金元宿等いたし候もの、取退無盡之頭取、同ク宿、此外惡義ニ而手目博弈いたし、又は博弈を渡世同樣ニいたし候もの之類は、遠島程之見込ニ而吟味いたし可然事、
宅を貸遣、廻り筒之博弈爲致候もの、又は德用ニ泥ミ地面貸遣、小屋掛抔いたし、三笠附相催、地代金請取候類も、前ヶ條同樣之心得ニ而可然事、

〔公裁隨筆五〕一博弈一件吟味心得方之事

一博弈吟味心得之事
享和三亥十一月、公事方奉行衆御書執左之通、
博弈一件御仕置當之儀、寛政六寅年申達候趣、會得被致達候面々も有之哉ニ相聞候間、委敷次第左ニ申達候、
一筒取有之博弈いたし候もの、筒取共一同召捕候節は、吟味之上相伺可被申候、野田等ニ而名住所も不存もの、筒取いたし居候博弈江加り打子ニ成候迄之白状ニ而、糺之上筒取幷手合之もの、不相知類、十二ヶ月も不相立内之儀ニ候得ば伺ニ不及重敲可被申付候、右體之博弈打候ものは度數之差別は無之、たとへ筒取有之博弈之打子而已貳度、廻り筒之博弈二度いたし候もの、都合四度ニ而三度以上ニ候得共、不及伺重敲被申付不苦候、
一廻り筒之博弈ニ候ハヽ、三度より以上之分ハ吟味詰被相伺、二度迄之ものは不及伺重敲可被申付候、
右之通可被相心得候、今般改候譯ニは決して無之、寅年之書面事荒く解違有之候而は如何ニ付、

猶申達候事、

〔公裁随筆 一〕一博弈一件吟味心得方之事

博弈一件吟味いたし候にも、御仕置當り、凡之目當無ㇾ之候而は、不都合にて、且は吟味可ㇾ詰ものを、其なりにいたし候ては不ㇾ宜候間、左に出ㇾ之、〇中略

筒取之打子ニ成候節坪振いたし、又は取退無盡闘振世話人之類は、凡江戸拂程之當りを以吟味之事〇中略

めくりかるた、又は廻り筒博弈壹兩度いたし、吟味中逃去候ものは、追而召捕候節は、敲之上所拂程之見込に而可ㇾ然事、〇中略

めくりかるた、又は廻り筒簺博弈いたし、吟味之上口書取ㇾ之村預中逃去候後、被ㇾ召捕候もの有ㇾ之時、博弈いたし候不届は重敲ニ當候得共、逃去候不届も有ㇾ之候間、一等重ク、敲之上所拂程之見込ニて吟味いたし可ㇾ然事、

〔德川禁令考後聚 二十四 行刑條例〕文化元子年九月廿一日

博弈致し候者村預ヶ、歸村後欠落いたし候ニ付、御仕置評議之事、

めくりかるた、又ハ廻り筒簺博弈いたし候ニ付、吟味詰之上、口書相濟、村預ヶ歸村申付置候處、一旦逃去、此度被ㇾ捕候もの有ㇾ之、右博弈いたし候不屆ハ重敲ニ相當候處、御定書ニ宿預ヶ申付置候もの、欠落いたし候はゞ、本罪相當より一等重く可ㇾ申付と有ㇾ之候間、如何可ㇾ申付哉、及御相談候、

右石川左近將監持參、一座相談之上所拂と評議相決、

〔一話一言 四十〕神田旅籠町名主中村氏書留抄書

丑〇享保六年六月十一日

一神田新銀町米屋十左衛門店大工七兵衛、博弈宿いたし候に付、家之前に三日さらされ、家財御

取上、家主過料之事、

此時より、家財御取上にてさらし者初る、

〔享保通鑑 四〕享保六辛丑年七月

一日本橋北二丁目ニ而博奕宿を致候者、其店之路次入口ニ、筵ニ而圍、繩張を致し、腰繩ニ而さらし、名主大屋五人組番人、

制札

室町三丁目新九郎店 與兵衛

此者御法度之博奕宿を致、金銭を貰取、不屆ニ付、三日晒之上家財不ㇾ殘取上ル者也、

七月廿六日

〔御仕置例類集 三ノ四〕寛政元酉年十一月

鳥居丹波守殿御差圖 御勘定奉行 根岸肥前守掛

一下總國加村ニ而召捕候無宿新八外壹人吟味

無宿 新八

仙太郎

右之もの共儀、大酒博奕を好、野合原中ニ而、無宿共を集、或は往來之百姓を勸、博奕を渡世ニ致し、其上南村七郎兵衛勘之丞儀博奕を嚴敷制候故、此もの共渡世薄候迚、遺恨を含、勘之丞方江踏越、あばれ、或は七郎兵衛江致二口論一懸候始末、不屆至極ニ付、兩人共遠島、

右御仕置附

右御定書ニ、あばれもの御仕置之ヶ條ニ、所々ニ而あばれ候ニおゐては、敲之上中追放と有之候處、此もの共はあばれ計ニも無ㇾ之、博奕を渡世ニ致し候不屆も有ㇾ之、博奕渡世ニ致し候は博奕打

筒取幷宿等ニも準可申、右御定は遠島ニ御座候間、兩様之悪事を束、重キ方ニ付、兩人共遠島、

〔御仕置例類集二ノ七〕文化元子年御渡

火附盗賊改戸川大學伺

一無宿政之助初筆博弈いたし候一件

芝無宿
政之助

右之もの儀、身上難取續候迚、宅ニ而人集め、倶々手合ニ加り、廻り筒ニ而五六拾錢賭之簺博弈兩度いたし、宿錢貰ひ受、又ハ三田新堀埋り候場所、或ハ廣尾在村名不覺野田ニ而、廻り筒簺博弈數度いたし候段不屆ニ付遠島、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、野田等ニ而廻り筒簺博弈いたし候不屆も有之候得共、身上難取續候間、宅ニ而博弈いたし徳用取可申と存、一同申合、此ものも手合に加り、廻り筒ニ而五六拾錢賭之簺博弈兩度いたし、宿錢と名付、兩度に錢八百文貰請候段、重之不屆ニ御座候、寛政三亥年、五拾文以下廻り筒ニ而博弈いたし候もの之宿御仕置之儀ニ付、評議仕申上候趣ニ見合、此ものハ風と寄合座興同前ニいたし成候筋ニハ無之全催設候義に付、博弈打宿之御定を見合、伺之通遠島、

朱書
評議之通濟

〔德川禁令考後聚三十 行刑條例〕嘉永三戌年十一月 國定村無宿忠次郎御仕置之事

國定村無宿忠次郎、品々悪事いたし候一件、吟味仕候趣申上候書付、

池田播磨守

國定村無宿忠次郎儀、長脇差を帶、合口等を所持、子分之もの共をも引連歩行、品々悪事いたし候趣相聞、去ル卯年、水野越前守殿御勤中、召捕方之儀御沙汰之趣も有之、兼而關東在々爲取締差出

候御代官手附手代共江、嚴重手配申渡置候ニ付、關內立廻り候節ハ右出役共おゐても、精々穿鑿仕候得共、是迄同類又ハ子分之もの共而已召捕、忠次郎ハ其時々關外江逃去、行衞不相知候ニ付、猶探索罷在候處、上州田部井村宇右衞門方ニ立隱罷在候趣を以、今般御代官青山録平、勝田次郎、竹垣三右衞門、林部善太左衞門手附手代共、右宇右衞門一同召捕差出候ニ付、右ニ引合候もの共之內、重立候分ハ、猶夫々爲召捕、其餘差紙を以呼出、一同打合、吟味仕候趣、左ニ申上候、

國定村無宿
忠次郎
戌四十一歲

戌十月十九日入牢

此忠次郎儀、無宿之身分ニ而、長脇差を帶、又ハ合口等所持、博徒共を數多子分ニいたし、上州田部井村たつ宅、其外最寄國々所々、野田山林等、又ハ右村宇右衞門申合、溜井浚ニ事寄、橫行ニ小屋場取立、同類多人數手合ニいたし、筒取貸元ニ成、筵博弈相催、元居村清五郎、無宿安五郎等江、代貸元をも爲致、其節々てら、口之子、或ハ上ゲ錢と名付、金錢受取、其上博弈渡世、頭取、或ハ差配と唱、此もの江無沙汰ニ博徒共寄合、博弈相催候節は、長脇差を帶踏込、其場ニ有之金錢奪取、安五郎江ハ右差配差免、所持之こま札一ト通與遣、又ハ無宿佐與松儀、手目博弈いたし、村々百姓共を欺、多分之金錢掠取候趣及承、博弈渡世風儀ニ拘り候抔申聞、首代と名付、金子爲差出、殊ニ子分之內無宿文藏儀博弈賭錢取引之儀ニ付、無宿伊三郎と口論之上、打擲ニ逢、殘念之由咄聞候を承り、子分之もの右樣打擲受候を打捨置候はゞ、伊三郎之强氣ニ臆し候抔、他之嘲を受候も口惜敷儀と心得、右憤りを可爲晴と、文藏江助力およひ、同國境村地內おゐて同人俱々伊三郎を及殺害、追而右文藏儀關東取締出役之ものニ被召捕候節ハ、文藏を可取戾と多人數申合、得物等携、右出役旅宿同國木崎宿近邊、三ッ木迄押參り、又ハ右田部井村又八宅借受、同類其外呼集、博弈相催候砌、兼而此ものの兄弟之契約いたし置候、無宿淺次郎、幷同人子分之もの共不相越、不審之儀と存居候折柄、取締出役爲捕方立越候趣、右宇右衞門爲知越候ニ付、逃去候得共、其節右淺次郎伯父、同國八寸村勘助

儀、右出役道案内ニ成罷越候由、追而承込、右ハ淺次郎及變心、勘助江内通いたし候より、同人差口ニ而、右體手配相成候儀と相疑ひ、淺次郎を呼寄、右次第を以相咎、其分ニ難差置、若存命罷在度存候はゞ、勘助首級を携參、申披可致抔、強勢ニ申掛候故、淺次郎儀終ニ伯父勘助を及殺害候仕儀ニ相成、剩無宿長兵衛儀、信州路おゐて、同國中野村、忠兵衛忰原七ニ被及殺害候趣承込、仇討可致と子分之もの共數多引連、鎗鐵砲等携押參候砌、右道筋大戸御關所有之、往來差支候迚、右御關所を除山越いたし候段不恐公儀いたし方、殊右體品々及惡事候身分、召捕方探索可遁ため、取締出役道案内等心得居候もの共江金子相送、追而病氣附、右宇右衛門方江罷越養生中、兼而密通いたし居候、同國五目牛村、仲右衛門養母とく、其外妾同樣ニいたし置候まちを呼寄、看病爲致、立隱れ罷在候始末、旁重々不屆至極ニ付、上州大戸御關所近邊ニおゐて、磔可申付候哉、

但上州大戸村其外惡事之村々、科書捨札爲建候樣可仕候、

御仕置之儀

國定村無宿
忠次郎

右文藏倶々伊三郎を及殺害、又は文藏召捕相成候砌、同人を可取戻と、取締出役旅宿近邊迄押參り、或ハ佐與松より首代と唱金子爲差出、其外博弈等いたし候儀も有之候得共、淺次郎疑惑を含、同人心底可見屆と、伯父勘助首級を携參、申披可致抔申聞候より、淺次郎儀、終ニ勘助を及殺害候仕儀ニ相成候段ハ、差圖および爲殺候も同樣之儀ニ御座候間、差圖いたし人を殺させ候もの下手人之御定江寄、伯父を爲殺候儀ニ付、舅伯父伯母兄姉を殺候もの之本罪ニ而引廻之上獄門程ニも相當り可申、大戸御關所を除山越いたし候方、重之犯科ニ御座候間、關所難通類山越いたし候もの於其所磔と有之御定、幷天保五午年、曾我丹後守御勘定奉行勤役之節伺之上御仕置申付候、數宮村無宿彥太郎儀、上州數宮村啓藏外六人宅、表入口建寄有之候戶を明立入、鐵炮脇差衣類、

自訴 訴人 褒美

其外品々盗取、殊右鐵炮を持、碓氷御關所を除山越いたし候始末、重々不屆至極ニ付、鹽詰之死骸、御關所近邊ニおゐて磔申付候例をも見合、磔ニ相當、然處年來長脇差等帶、惡事いたし候ものニ付、文政九戌年之御書付をも見合、御關所近邊おゐて磔と御仕置附仕、上州大戸村、幷惡事之村々江科書捨札爲建候積申上候、

但磔御仕置之儀、其場所江科書捨札爲建候ハ、當然之取計にハ御座候得共、右體犯科重疊之もの、惡事之村々江科書捨札爲建候先例ニ御座候間、本文之通申上候、

〔御定書百箇條〕三笠附、博奕打、取退無盡御仕置之事、

享保十一年極
一博奕打筒取幷宿　訴出候者　同類たりといふ共其科をゆるされ、御褒美、銀貳拾枚

從前々之例追加
一三笠附、博奕打、取退無盡之儀、町内名主五人組等訴出候はゞ、當人幷家主ハ御仕置に申付、地主は地面不及取上、急度叱、宿之兩隣五人組名主一町内之もの、不及咎、

但在方も右同斷

〔享保集成絲綸錄四十七〕寛文四辰年十月

覺

一博奕之儀、兼而ゟ御法度候間、自今以後仕、金銀、財寶、衣服とられ及難儀者有之ハ、不寄何時可訴訟、然上ハ其科をゆるし、とられ候もの取返し可遣事、○中略

十月

〔天明大政錄三〕大目付江

博奕懸之諸勝負、前以御法度之處近來一統に相ゆるみ、博奕賭之勝負出候儀、色々名目を付而、武家屋敷寺社又は茶屋幷辻等に於て、右體之儀致候之趣相聞候、已來右體之儀有之候はゞ、急度可申付候、尤吟味糺之上ハ、懸合之先々迄茂無用捨相糺仕置可申付候、尤右體之不埒之者有之候は

ば、害に奉行所江可訴出候、急度御褒美可被下候、同類の内たりとも、訴出自分舊惡をも改めるにおゐては、是又御褒美可被下候、

右之趣、町方は辻々に建置、在方ハ高札場、又は村役人宅前等ニ張置、町役人、村役人、五人組とも、組合切ニ申合、直々改可申候儀、武家ニ而ハ家來幷末々の部屋々々に至るまで、無油斷相改メ、寺社にても同斷申合、互ニ改可申候、

右之趣、御料、私領、寺社領、町方迄も、不洩樣可被相觸候、

申正月 〇天明八年

〔德川禁令考後聚二十四 行刑條例〕博弈自訴之者取計方之事 寛政九巳年五月六日

土佐守殿、三村吉兵衛江被仰渡候趣傳達、

博弈打候もの自訴之儀、自訴より起吟味に相成候ものは、御仕置も輕く可相成者勿論之儀ニ候、吟味取懸候節欠落いたし、吟味中自訴いたし候ものにも、假令バ最初ハめくり博弈と申立候處、自訴ニ而篤博弈之儀顯候抔と申樣成類、何れにも自訴故吟味も明白ニ分り、御仕置も相立候ものの抔ハ、仕儀次第自訴ニ相立、御仕置輕く可相成候得共、一通捕方之節逃去、吟味中自訴いたし候類者、自訴には不相立、御仕置輕くハ不相成方ニ相心得候樣被仰渡候、

〔德川禁令考後聚二十四 行刑條例〕博弈自訴之儀ニ付申上候書付 寛政九巳年

書面先例も有之候間、是迄之通、都而右類自訴相立候積相心得可申旨、被仰聞承知仕候、

巳閏七月十九日　評定所一座

先達而評議仕申上候、大久保甚兵衛火附盜賊改之節相伺候、深川永代寺門前仲町文次初筆博弈一件之内、同町卯之助外二人自訴難立譯御尋有之、右之もの共ハ吟味ニ相成候を承り、自訴致し候儀ニ付、自訴ニハ難相立趣申上、其通御仕置相濟候、然ル處去ル寅年、長谷川平藏相伺候、武州下

高輪村新左衞門店八五郎、廻り筒之博奕致し候段不屆ニ付、重敲可申付處、自訴いたし候ニ付、敲と相伺一座評議之上、本罪は重敲之ものニ候得共、自訴いたし候ニ付、一等輕く五十日手鎖と申上候例も有之候間、今一應評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀自訴いたし候もの、御仕置寛み候儀ハ、御定者無御座、盜物質ニ取、又者買取候もの之御定ニ、町觸之節於訴出候ニハ、其品取上不及咎と有之候得共、右者自訴之引當ニハ難相成、僉議事有之時、同類又ハ加判人之内より早速致自訴、謀計之もの共相顯ニおゐては、本罪相當より一等輕く可申付旨之御定も御座候間、自訴いたし候もの有之節、右自訴ニ付外不埒之者相顯候類者勿論、其趣意右御定にも引合候ものハ、自訴之もの御仕置之儀ハ、御法度之儀相辨罷在、右御法度を背博奕致し、右手合之内より露顯可致樣子ニ候得バ、追々右手合之者ハ自訴さへ致候得バ、御仕置ゆるみ候儀と存量り訴出、ゆるかせにも相成可申候、近年別而過料手鎖之分をも、敲重敲ニ申付候樣、嚴重ニ被仰出候御趣意ニも相違仕候間、都而右博奕之儀ハ、自訴之もの申口より吟味ニ相成、或者重立候もの之御仕置相立候類者、右御定見合取計、吟味ニ相成候を承り訴出候分ハ、自訴ニハ不相立方御取〆にも可然哉と評議仕、申上候儀ニ御座候、

但去ル寅年長谷川平藏相伺候、武州下高輪村新左衞門店八五郎儀、廻り筒博奕いたし候を自訴仕候ニ付、一座評議之上一等輕く、五十日手鎖と申上候例書をも御渡被成候、然ル處右一座評議之書上相添、御下ゲ之吟味書致返上、其後右吟味書御下ゲ無之故、八五郎自訴之次第吟味ニ相成以前訴候哉、同人自訴ニ付手合之名前相分候哉、外ニ別段之趣意も無之、自訴と申所ニ而已泥、一等輕く申上候得共、今般再應評議仕候處、博奕之儀、外惡事と違ひ、自訴いたし候得バ、御法度相背候とも御咎をも不蒙と、末々之もの心取寛み候而ハ、御嚴制之御趣意も相立申間敷儀ニ付、自訴ハ難立積り被仰渡可然哉と評議仕候儀ニ御座候、以上、

家主地主隣保

巳閏七月

〔科條類典下四〕寛保三亥年八月

博弈を催、てら金取候もの、〇中略

小船町壹町目
堀江町壹町目
名主
五人組

右之もの共、博弈之儀訴出候ニ付、吟味之上、博弈宿一件當人并家主ハ、定例之通御仕置申付候、

右之もの共訴出候より事起り、博弈之儀相知候ニ付、博弈宿之兩隣五人組名主壹町之咎メ不申付、地主共も地面取上ゲ不申急度叱り置、

右者依御差圖、亥八月十一日御仕置申付之、

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

享保二年
延享二年極

一博弈宿并筒取いたし候者之家主　身體に應じ過料之上百日手鎖

延享元年
寛保元年極

一同地主　屋敷取上

享保十五年
同十六年極

但五ヶ年過、元地主江返被下之、外にて致候もの之地主は、三ヶ年過返可被下、

享保二十年

附其日稼之者、商先にて當分博弈筒取致候類ハ、地主并所之者共咎不及、

享保十一年
延享二年極

一博弈打宿　兩隣幷五人組　　　　過料（身上に應じ）
　但在方者組頭五人組共過料（元文元年極）
（寛保元年　延享元年極）
一同名主　　　　過料五貫文（町方在方共）
（享保十一年　延享元年極）
一同町内　　　　過料三貫文（家主）
　　　　　　　　過料（向側小間に應じ）
　但在方ハ村高ニ應じ過料（從前々之例追加）

〔正寶事錄 一〕一如前々、かるた博弈、何にても諸勝負仕候事、堅く御法度ニ候間、左樣之者宿少しも仕間敷候、若於有之は、御穿鑿之上、家主之儀は不申及五人組迄、急度曲事に可申付候、
　丑二月（慶安二年）
右は二月十六日御觸、町中連判、

〔正寶事錄 一〕覺
一かるた博弈、諸勝負御法度之旨、前々ゟ連判之手形、町中ゟ差上申候趣、其町ニ而致寄合候而、家持之組々、毎月々々取分吟味致、其心得可有事、
一店借借屋之者共を、毎月々々家主方江呼集候て、かるたばくち、諸勝負堅不仕候樣ニ可申付候、借屋店借者共にも組々を致させ、自然左樣之徒者共有之ば、其組々借屋之者迄、急度可爲曲事之旨、彌可申付候、
　丑二月（慶安二年）
右は二月廿一日御觸、町中連判、

〔徳川禁令考四十八博奕〕明暦元未年三月

博弈諸勝負等無之旨帳面ニ記し、兩御番所江差上候事、〇中略

一家持ハ、組切ニ立合吟味可仕候、棚かり借屋之ものは、其家主江呼あつめ、僉儀致し、表棚裏棚之ものニ組々を仕、御法度相背不申候樣、堅く可申付候、常々無油断相改、其町々ニ帳面を作置、左樣之いたづら無之旨書記し、判形爲致、其上毎月兩御番所江參、右之段御帳ニ付置可申候、若相背もの於有之ハ、早々可申上候事、

八月

〔享保集成絲綸錄四十七〕万治二亥年九月

一諸事博弈諸勝負、幷ばいた遊女之類、此已前より度々堅御法度ニ被仰付處、此頃ハ猥に博弈打、或ハばいた、遊女之類抱置申候由、被聞召候間、自今已後ハ、家持ハ不及申、借屋店借り之者まで、拾人組を致、毎月組切ニ下々召仕之者ニ至まで、成程入念を、互ニ吟味可被致候、自然左樣之者有之ば、早々兩御番所江可申上候、隱置若横合より訴人於罷出者、其主は不及申、十人組迄急度曲事ニ可被仰付候旨被仰出候間、左樣ニ心得、此旨急度相守可被申候、

九月

〔正寶事錄三〕差上申手形之事

一吉利支丹宗門之事

一博弈諸勝負之事

一遊女之事

右三ヶ條、前々ゟ堅御法度之趣被仰渡、毎月町中家持は不申及、借屋店借等迄不殘穿鑿仕候、此度彌嚴密に被仰付候故相改候得共、左樣之者一人も無御座候、若相背、脇ゟ申上者御座候はゞ、何樣

之曲事にも可被仰付、為其仍如件、

寛文三年卯二月朔日

何町 月行事印

名主印

御奉行所

右同断手形、年々差上申候、

右三ヶ條證文、毎年二月と八月両御番所へ差上候處、寛文十三丑年ゟ年々三月と八月差上候様被仰渡候、

〔正寶事録 七〕覺

一從前々御法度之博奕、諸勝負、堅仕間敷候、相背者有之においては、本人は不及申、致宿候もの、并店五人組、曲事可申付候品ニより家主にも急度可申付候間、此旨相守致吟味、左様之者無之様可仕者也、

丑四月（貞享二年）

右は四月廿九日御觸、町中連判、

〔正寶事録 七〕覺

一大黒、其外からくり人形を拵、町中往還にて大勢人集をいたし、博奕ごときの商仕候ニ付、捕之牢舎申付候間、向後何方ニ而成共、右之ごときの商、其外博奕ニ似寄たる儀一切仕間敷候、若於相背者、當人ハ勿論、見のがしに仕たる其所之者迄、急度可申付者也、

寅八月（貞享三年）

右は八月十二日御觸、町中連判、

〔享保集成絲綸録 四十七〕寶永三戌年三月

一博弈仕間敷旨前々ゟ度々相觸、不用族ハ御仕置ニも申付候得共、又々頃日於町中所々近在之旅人なども集め、致博弈之由相聞不届候、近日同心共相廻し、博弈仕者召捕可申候、

一博弈之儀は、人大勢集候儀ニ候間、家主、五人組も心付可申儀ニ候之處、其通にいたし罷在候段不屆候、向後は町切に遂吟味、名主迄訴之、又は直ニ奉行所江も可申出候、若隱置外ゟ相知候はば、家主、五人組、名主迄可為越度候、○中略

右之條々急度相觸可申候、以上、

三月

〔享保集成絲綸錄四十七〕享保八卯年六月

鈴木平十郎御代官所武州兒玉郡上阿久原村
名主　加右衛門

銀拾枚

博弈幷博弈に似寄候儀はやり候に付、相止候樣にいたし度由、仕置之品了簡仕、其趣書付差出候、常々精出し候故、ヶ樣之儀ニも心附、奇特成事に候、依之為御褒美銀子被下之、

總而三笠博弈はやり候由ニ付、去頃ゟ於奉行所も令評議候處、此度加右衛門書付出し候趣と大概同樣ニ候、近々相觸候間、別而加右衛門支配之村者、外村々之手本にも成候樣に相心得、念入差引可申付候、近邊村々名主迄もとくと可申合候、

六月

〔科條類典下四〕享保二十卯年閏三月廿二日伺、同五月十六日伺之通御下知、

覺

博弈筒取差置候もの、屋敷地面取上、家守、五人組、名主、町内之もの共御咎メ有之候、是者重キ博弈筒取など仕候もの之御咎に御座候、今度相伺候通、旅籠町太郎兵衛儀は其日稼之輕きもの、

故、商に出候先に而、當分之博弈筒取仕、大博弈筒取とは譯違、輕き儀に而、地主、家主初、所之ものも不ㇾ存儀に御座候、左候得ば、重き博弈筒取同前之御咎に及申間敷候、然共家主儀は心付可ㇾ申處無ㇾ其儀ㇾ不念候間、唯今迄之通、家財取上百日手鎖御定之通可ㇾ申付ㇾ候、

一三笠附點者金元候ものも、都而太郎兵衛體之輕きものに而、外江罷出仕所に而不ㇾ存儀に御座候間、是又地主家主所江之御咎には及不ㇾ申、家主計右同様に可ㇾ申付ㇾ候、

右之通被ㇾ仰付ㇾ候而も、前々之ごとく、おしなべての博弈は相止、三笠附は御當地に無ㇾ御座ㇾ程薄く罷成候間、御仕置ゆるみにも罷成間敷候、此度右之通被ㇾ仰付ㇾ候はゞ、向後共に御定に致し置可ㇾ申候、依ㇾ之奉ㇾ伺候、

以上

閏三月

〔科條類典下四〕元文元辰年伺

三笠博弈有之村名主組頭咎之事

在方三笠博弈有ㇾ之村名主、組頭、五人組、御咎之儀、向後共ニ過料可ㇾ申付ㇾ事、

右之通、伺之上相極候、以上、

元文元年辰十二月

〔享保集成絲綸錄四十七〕享保八卯年十一月

諸博弈點者、金元、宿、且又數年博弈頭取にて、人も存候程之者召捕候はゞ、手錠を掛番人附置、他出ハ不ㇾ及ㇾ申、外之ものへ堅く出合せ不ㇾ申樣に嚴敷申渡、其所江預置僉議可ㇾ仕候、手懸りも有之處、不ㇾ致ㇾ白狀ㇾ候はゞ、拷問仕相尋、僉議落着之上、過料之儀ハ、自今金五兩以上、如何程成共金高ハ其樣子

次第、十五日を限り當人江一町之ものより爲致催促、過料差出させ可申候事、
但右過料日切り之內、當人を其一町之ものへ急度預置可申事、
一右十五日之日切之內、過料出し兼、不足候はゞ、當人をば非人溜江日限なしに預置、親類店請人、相店之者迄相懸り、不足金差出させ可申候、右之內及難澁、不屆之者ハ、奉行所江召連可罷出候、然らば此者共身體限り申付、夫ニ而も過料金高不足ニ候はゞ、當人一町之ものへ、十五日切に出し候樣、足シ金可申付候事、
一諸博弈打候者之儀ハ、爲科身體限り家藏迄取上可申候、家藏無之ものハ、右に准じ過料取上可申候事、
以上
十一月
〔公裁隨筆〕一博弈一件吟味心得方之事
博弈一件吟味いたし候ニも、御仕置當り凡之目當無之候ては不都合にて、且は吟味可詰ものを、其なりにいたし候ては不宜候間、左に出之、○中略
村內百姓家ニ而、筒取有之博弈いたすを不存村役共、五人組惣百姓共ニ、過料之見込ニ而吟味可致事、尤惣百姓共吟味は不殘名前を爲書出、惣代ニ而吟味可致事、
但百姓家ニ而廻り筒之博弈有之を不存名主、組頭、庄屋、年寄共は、急度叱り程之見込ニ而可然候、
〔御仕置例類集三ノ四〕寬政八辰年四月
松平伊豆守殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛
一羽州新町村源八博弈致筒取候一件

鈴木喜左衛門御代官羽州村山郡大石田四日町
百姓　彥助

右之もの儀、同所吉太郎致商候段任申ニ、地面貸置候處、右場所ニ而夜分博奕致宿候を不存罷在候段不埒ニ付、身上ニ應、過料之上百日手鎖、

右御咎附

右御定書ニ博奕打之地主。屋。敷。取上。五ヶ年過返し被下、外ニ而致し候もの地主は三ヶ年過返し被下候儀ニ御座候得共、在方は地借り店借共右地代店貸等ニ而、地主は年貢相納候儀ニ付、屋敷は難取上候間、家。主。之。御。定。江。引當身上ニ應じ、過料之上百日手鎖と申上、其通相濟候例有之候間、右ニ見合身上ニ應じ過料之上百日手鎖、

〔採要秘史 評定所撰紙寫 六〕店借之もの身上に應じ過料取立方之事、○中略

三田功運寺門前
家主　半三郎

一座談之もの

右之もの儀、博奕宿之五人組ニ付、身上ニ應じ過料申付候處、同町ニ罷在候親次右衛門方ニ致同居、家財無之候ニ付、右過料申付方之事、

寬政十午年七月十一日談之上、過料三貫文申付候積極ル、

廻筒博奕打

〔御定書百箇條〕三笠附、博奕打、取退無盡御仕置之事、

延享二年極

一廻り筒にて博奕打候もの　過料

但三度以上廻り筒いたし候もの中追放

〔天保集成絲綸錄 百〕寬政六寅年三月

三奉行江

博奕御仕置御定之內當分左之通○中略

廻り筒にて博弈打候もの　重敲

右之通可被申付候、此外之儀ハ、只今迄之通可被心得候、

三月

〔公裁隨筆專〕一博弈一件吟味心得方之事

博弈一件吟味いたし候にも、御仕置當り凡之目當無之候ては不都合にて、且は吟味可詰ものを、其なりにいたし候ては不宜候間、左ニ出之、○中略

廻り筒之宿四度程いたし候ものは、中追放程之見込ニ而吟味可致候、催不致候て、與風廻り筒之宿いたし、茶代抔貰請候ものは、重敲程之見込にて、且宿貸候計にて手合に不加ものも同樣之事、

〔天保集成絲綸錄百〕寬政三亥年七月

廻り筒ニ而博弈いたしたるもの、宿、所拂と申聞られ候評議、一體も不都合ニ可相成難心得ニ付、必竟ハ事實ニも可依と申達候處、前々之奉行伺之內ニも遠島過料も有之、科書之趣計ニ而ハ、其輕重之儀、文段不相分候處、吟味之始末、其節々之輕重相當と見込伺候而相濟候儀ニ付、事實ニおゐては、却而區々は無之との再評、是又何共難心得事ニ候、右樣ニ浮たる事を事實ニ可依と申たる儀ニは無之候、甲斐守差出候例區々なるハ、全事實ニおゐて相當之事とは不相見、紛候而區成ニ可有之候、縱令其節ハ事實相當故、右之通候共、文段ニ其趣難分上ハ今更何ヲ證據ニ相當と可申哉、都而科書ハ文段ニ而、右之輕重難分事ニ而ハ後々見合ニ可致筋ハ無之道理候、全後證と成べき事、申迄も無之儀ニ候得バ、伺有之品も勿論、手切ニ御答等科書右樣之心得ニ而ハ、以之外成儀ニ可有之候、無益なる文段ハ可成丈省略候而、右樣之趣ハ、心を用相分候樣可被致置事ニ候、

一此度甲斐守申立候輕賭之博弈致候もの、宿錢も不取、風と寄合候上之慰又ハ座興同前ニ而

差而品不宜と申ニも無之候、遠島ニ及間敷候、扨又廻り筒之方ハ、宿之御定無之候得共、筒取同様之趣意歟、或ハ渡世同様いたし候而、其外ニも事實ニおゐて品不宜ハ、博弈之宿ニ而遠島たるべく候、

右之所不紛様ニ心得被居、其度々、右之事實被入念、尤科書ニも、其次第ハあらはし置候様ニいたし候はゞ可然事と存候、此段計對又一應可被申聞事、（此儀ハ事實によるべしとは申たる事に斷候）

〔張紙留〕享和三亥年十一月二日

一廻り筒幷博弈宿三度いたし、其身も手合ニ加り、宿錢不取もの之事、

是ハ松平丹波守御預所、役人吟味詰相伺候處、差當先例不相見、去ル亥年（寛政三年）廻り筒博弈宿御仕置之儀ニ付、一座申合之趣申上置候書付ニ、筒取又は渡世同様等ニいたし候類、品不宜ハ遠島、其外宿錢も不取、與風寄合、慰又は座興同前之ものハ遠島ニ不及積りと有之、本文博弈宿ハ催設ざる儀とハ難申、殊ニ筒取有之、博弈之宿いたし候ものハ、宿錢も不取宿之度數ニ不拘遠島之例ニ而御仕置難決ニ付、享和三亥年十一月二日、左近將監より一座江及談判候處、筒取有之博弈いたし候節之儀ハ、筒取遠島ニ相成、其宿いたし候事故、不屆之品違候得共、筒取無之、其上宿錢も不取上ハ、別段之儀ニ付、手合之もの一同中追放申付候積り評議相決、

〔張紙留〕一廻り筒博弈宿四度いたし、宿錢ハ勿論、手合ニも不加もの之事、

是者松平丹波守御預所役人吟味詰、松平兵庫頭江相伺候處、差當先例相見不申、御仕置難決ニ付、一座江及談判候處、去ル亥年（寛政三年）廻り筒博弈宿御仕置之儀ニ付、一座申合之趣申上置候書付ニ、筒取又は渡世同様等ニいたし候類品不宜ハ遠島、其外宿錢も不取、與風寄合、慰又は座興同前之ものハ遠島ニ不及積りと有之、其上去ル未年ニ評議御下ゲ被成候池田筑前守火附盜賊改之

節相伺候、武州幸手宿、下吉羽村幸七借地平吉儀、兩度迄宅貸遣、貳拾錢賭之めくり博弈爲致候段、不届ニ付、敲之上地主幸七江引渡可申哉と相伺、評議之上、伺之通と申上候例も有之候間、本文博弈宿之儀も四度には候得共、宿錢も不取、手合ニ加候儀も無之ものニ付、手合之もの共一同、中追放申付候積り、

右は文化元子年四月廿一日、一座評議之上決、

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

従前々之例
一手目博弈打候者　遠島

〔科條類典下四〕一手目博弈打候もの　遠島

朱書
是ハ唯今迄之取計を以相認申候

〔科條類典下四〕金子可語取ため、手目かるたいたし候もの、

檜木町貳町目三郎兵衛店
喜兵衛方ニ居候
和田宗仙

享保十九年寅五月廿三日入牢

右宗仙儀、甚左衛門町家主善助と心安出入、金子持參いたし候段存居候付、宗仙知ル人喜兵衛、六兵衛と申ものゝ申合、善助江ハ金持候田舎ものゝ參居候間、少々金子持參候而手目かるたを仕かけ候ハヾ、五拾兩も百兩も語り取可申旨、善助を勸、本所元町料理茶屋江連參、右喜兵衛、六兵衛、田舎金持ニ成罷越、手目かるたを初、善助持參金子拾四兩、喜兵衛勝取り善助歸候跡ニ而、三人之もの共配分いたし候、依之善助御役所江訴出、詮議之節、宗仙致欠落候得共、間もなく其身より申出候、畢竟博弈頭取と申筋ニハ無之、金子語取可申巧ニ、手目かるたを勸メ、金子を取配分いたし不屆ニ候間、死罪ニ可罷成ものニ候得共、欠落以後、自分と罷出候故、其身之惡事ハ勿論、其外御仕置之

筋も相立候間、遠島可申付旨依御差圖、翌卯四月八丈島江流罪、

〔德川禁令考後聚二十四 行刑條例〕寛政八辰年御渡 京都町奉行菅沼下野守伺

一佛具屋町魚店下ル町、大和屋庄右衛門同居、惣兵衛手目博弈致し候一件、

佛具屋町魚店下ル町和泉屋五兵衛借屋大和屋庄右衛門同居兄
惣兵衛

右之もの儀、同類申合、手目博弈相催、去卯五月以來六ケ度田舍ものを相謀、同類倶々拾文より五拾文迄之取引ニ而、廻り筒長半博弈を打手段を以、勝取候金銀木綿九疋賣拂候代金共、都合金拾貳兩、銀六拾八匁五分程之内、貳朱判錢ニ兩替いたし、金貳兩貳朱、銀三拾三匁程ハ、世話料又ハ酒代等ニ差遣、金七兩、銀貳拾貳匁、錢五百文ハ、同類之もの分ケ取、其餘之金銀錢ハ不殘給物等ニ遣捨候段不屆ニ付、遠島、○評議書略

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政五丑年十二月

松平伊豆守殿御差圖 町奉行 小田切土佐守掛

一武州足立郡與野村甚之助人殺一件

野田文藏御代官所武州足立郡與野村燈明院地借豆腐屋
半次郎

右之もの儀、手透之節は、在方市場にて、商人共江申勸、度々貳三錢賭之めくり博弈、又は惡錢致所持、手目博弈いたし、金錢衒取、其上手合之もの共江申勸、甚之助儀、金子持歸候途中待伏致し違背不相成樣彼是無體ニ博弈申勸、此もの筒取致し、五拾文ゟ五百文、又は壹貫文之賭錢ニ而、長半簺博弈相始、手目致し候ニ付、甚之助儀所持之金子拾三兩打負候間、可相止旨申聞候を不聞入候に付、同人逃去候處、松五郎儀追駈參、甚之助懷中江理不盡ニ手を入金子可奪取と及狼藉候故、甚之助儀松五郎を及殺害候砌、此もの、幷鹿之助、半次郎又四郎方同居○與野村百姓も駈付心外ニ候迚、此もの帶候脇差を拔、甚之助江疵付、一同逃去村方江立歸、右始末押隱罷在、剩右體博弈ゟ事起、甚之助儀松五

郎を及殺害候儀、後日ニ相顯候共、此もの幷手合之もの共江難儀不相懸様可致と彼是風聞取拵、手合之もの共江申聞流布爲致候段、巧成致方、重々不屆至極ニ付、獄門、○下略

搢紳處刑

〔反汗秘錄〕丑○寛政五年三月、公家衆被仰渡、○中略　西大路三位隆文卿廿三十八○中略

博弈いたし

右之衆中、江戸表ゟ關白殿江被仰遣候由ニて、當時愼候様被仰下候由、去十二月初の事なり、其後之御沙汰未考、

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

武士處刑

享保十一年極

一武士屋敷にて召仕博弈致候者　遠島

〔官中秘策〕二十八 武家之かゝり

一辻番人博弈宿致し、幷拾物を不訴出、私曲仕候ものハ引廻之上遠島、或ハ死罪、

〔御定書百箇條〕辻番人御仕置之事

寛保二年極

一辻番所におゐて博弈いたし候番人　遠島

〔科條類典〕下六 享保十三申年

一辻番所ニ而博弈宿致、幷拾物を不訴出、私欲ニ仕候辻番人之例、

阪倉町二丁目仁兵衛店
惣右衛門請負芝三田武士方組合辻番所
番人番頭　藤七

此もの儀、於辻番所博弈宿致候者ニ付、通例之通遠島可被仰付候哉、但辻番所之儀、屋敷内とは違、重々不屆ニ御座候、外辻番人共身こりのため引廻し遠島可被仰付哉、又ハ引廻死罪ニも可被仰付哉之段、享保十三年申十月十六日、松平左近將監殿江相伺候處、同十一月十八日、引廻遠島可申付旨御下知、相濟申候、

〔天保集成絲綸錄百〕寛政四子年九月

三奉行江

武家之家來、輕きかけの賓引、よみかるた打候もの、以來徒以上ニ候はゞ、博弈御定之通遠島、足輕中間ニ候はゞ、江戸拂申付候樣可致候、〇中略

右之通一統相心得、屆々不相成樣可被致候、

九月〇又見ニ御書付留

〔採要秘史九〕朱書寛政五丑年、松平伊豆守殿御書取御渡、

一武士家敷にて、召仕博弈致候節之儀ニ付評議、

去丑十一月七日、御渡被成候御書付、一覽仕候所、武家之召仕博弈いたし候もの、享保之度、屋敷内ニても、御咎格別之輕重有之、寶曆六年以來は、武家之召仕候へば、自他之差別も無之、遠島ニ相成來、百姓町人等博弈いたし候者は、御定之通過料申付、輕き賭ニ而も掛錢之多少ニ寄、御咎輕重有之、武家之召仕、徒士以上は、縱令輕キ賭ニ而も遠島ニ相成候も、全身分ニ寄候て之御咎ニ可有之間、武家之召仕ニ而博弈いたし候もの、身分ニ付候而之御咎相當之事實、尙評議仕可申上旨、被仰聞候、

此儀、寶曆以來、武家之召仕、博弈いたし候者、自他之無差別、遠島ニ相成候は、近例而已にも無之、寶曆以來之儀故、年來之仕來にも相當候間、御尋之趣御尤ニ御座候得共、御定書御文言ニは、武士屋敷ニ而召仕博弈いたし候者、遠島と有之候上は、主人之屋敷ニて博弈致候ものニ而、他江罷越博弈いたし候ものニ無之段は、御文言之趣ニ而相分り有之候故、元例をも相糺候處、右元例之松平主殿頭足輕定七儀、織田若狹守中間部屋江參、博弈致候ニ付、雜物取上候程之過料申付、若狹守中間は遠島相成候を見合候得ば、差別有之候段無相違間、寶曆以來之仕來ニ相成候

とも、右之段心付候上は、例不取用、御定江立歸評議可仕筋と、一同奉存候義ニ御座候、

朱書
此儀、日光奉行相伺候、野州今市宿市五郞、博奕いたし候一件之內、日光御門跡小人、梅原幸右衞門御仕置之儀ニ付、右之趣ヲ以評議仕申上候所、追々御尋有之、前書之通、是迄御定之引當方不行屆類有之候とも、寶曆以來年來自他之差別無之、遠島ニ相成候例も有之候間、已來之取計方取極、別段可相伺所、右梅原幸右衞門御仕置之評議江取交申上候は、申上方不行屆哉と奉存候、

依之、此度私共評議仕、心得之趣左之通ニ御座候、

一武家之家來、徒士以上之者、博奕いたし候はゝ、自他之差別無之、賭錢之多少にも不拘、遠島と相心得候樣可仕候、

朱書
右侍以上之義は、其身分江附候而も、博奕いたす間敷筋ニ付、本文之通相心得罷在候、

一足輕中間以下之儀は、主人之屋敷ニ而博奕いたし候者は遠島、他江罷越博奕致候はゝ、江戶拂申付可然儀と、相心得候樣可仕候、

朱書
右は主人之屋敷ニ而博奕いたし候者は、縱令足輕中間之輕キ身分ニ而も、主人屋敷ヲ博奕之宿ニいたし候義、右武家屋敷ニ而召仕博奕いたし候者之御定ニ而遠島、他江罷越博奕致候足輕中間之義は、科條類典ニ有之、右元例ニ引當、過料ニ而可然所、百姓町人之類、過料又は療治代之科に相當候者、江戶拂ニ相改候御書付伺濟も有之候間、本文之通相心得罷在候、

右之通相心得可然奉存候間、此段相伺申候、依之日光奉行差上候、野州今市宿八五郞博奕之義も、右評議之趣、御沙汰之上申上候樣可仕候、

寅八月

去ル廿日御渡被成候御書取、一覽仕候處、武士屋敷ニて、召仕博奕いたし候もの、遠島と有之御定

書は、科條類典之趣、并其頭之舊例ヲ以見合候得ば、主人屋敷ニ而博弈いたし候者、都而遠島とは、不相聞候所、此度一統遠島と評議仕申上候は、如何之趣意ニて候哉、今一應得と相糺可申上旨、被
仰聞候、

此儀、武士屋敷ニて、召仕博弈いたし候者遠島之御定ハ、享保十一午年之御書付ニ而相極、武士屋敷ニ而召仕と有之候上は、其屋敷之家來博弈致候者之御定と奉存候、科條類典ニ組入有之候、織田若狹守中間部屋ニ而博弈いたし、口論之上、人殺し一件之內、若狹守足輕龜井平左衞門、并小人半九郎は、吟味一通相濟、主人江引渡ニ成候趣認有之、博弈打候趣は認無之候得とも、右一件之內、松平主殿頭足輕荒木定七儀は、若狹守中間部屋江參博弈打、過料ニ成候上は、自他之差別も僅に相分、勿論御定御文言にても相分候事ながら、元例江も組入有之候儀故、縱令右前後例多く有之候とも、例之方は不宜、御定并科條類典ニ書載有之候元例を以、評議仕申上候儀ニ御座候、

寅九月

〔天保集成絲綸錄百〕寬政七卯年九月

三奉行江

武家之召遣、博弈御仕置之儀、別冊評議等之儀ニ本刑ハ居置、思召有之ニ付、暫之內是迄之通身分之高下、自他之無差別、何も一統遠島と可被心得候、○又見ニ御仕置御書付留筋

〔德川禁令考後聚三十九敎律〕三笠附、博弈、取退無盡等いたし候もの之事、

一三笠附、博弈、取退無盡、隱富等之類ニ而御仕置相成、外ニ惡事之品も無之ものは、御目見以上ハ拾壹ヶ年以上、其餘ハ武家出家平人之無差別六ヶ年以上赦免可申付事、

是者三笠附、博弈、取退無盡等ハ、御定書ニ都而三笠附、博弈打、取退無盡御仕置一件之內、遠島

もの五ヶ年過御赦有之節、御免之儀可相伺事、但所拂以上之御仕置ものも、博奕一ト通ニ候はゞ、右同然ニ相伺可申事と有之ニ見合、尤是迄出家御家人之厄介、或ハ百姓町人等ハ六ヶ年以上、御家人當主之儀ハ拾ヶ年以上赦免之儀申上、律十八ヶ條ニも博奕一ト通御仕置相成候もの、是ハ六ヶ年目より御免之儀可申上事ニ候得共、御家人之分ハ拾ヶ年過可申上、厄介人ハ武家之家來同様六ヶ年目より御免之積と有之候得共、享和二戌年青山故下野守殿御尋ニ付、御答之趣も有之候ニ付、右をも見合、且隱富之儀も一ト通賭事ニ見合、御免之儀申上候先例も有之候間、彼是を見合評議之上相認申候、

〔容山亭日記〕元祿十六年四月四日、小島與右衛門、津田吉左衛門、淸水平八、御下行御扶持方御取上ゲ、頭々心得を以、飢不申様可仕旨被仰出候、博奕之義と相聞候、

〔享保集成絲綸錄四十七〕享保六丑年八月

小十人岡野權次郎組
荻原彌右衛門

彌右衛門門番所におゐて、門番人幷他所よりも來り博奕いたし候體ニ付、彌右衛門父子罷越、相咎候處、燈等をけし、右一件之者共、垣壁を破り逃出候處を貳三人悴甚之助切付候由、兼而武士屋敷ニ而博奕等いたし候者有之由相聞候、其段ハ主人々々之吟味油斷なる故にて候、自今も無油斷致吟味、たとひ御直參たりといふとも、屋敷之内江來り博奕等いたし候はゞ、討捨ニ可仕候、此度一件之者共猥ニ武士屋敷江入込、博奕いたし候ニ付、死罪ニ被仰付候、

右之段彌右衛門江可被申聞候

八月

右之段岡野權次郎江申渡候、此趣被相心得、組支配江も可被申聞置候、以上、

右は御目見以上組支配有之分江計達之

〔科條類典下四〕(元)博弈御仕置并訴人等之部

享保十七年子九月九日入牢　松平主殿頭足輕　村田喜左衛門

同斷　右同斷　荒木定七

同斷　織田若狹守足輕　龜井平左衛門

同斷　同人中間　又助

同斷　同人小人　半九郎

右之もの共、當月七日夜、織田若狹守中間部屋ニ而博弈いたし、口論之上、人殺出入ニ付同人家來宮城惣右衛門、柘植兵大夫召連來ニ付、穿鑿之內牢舍、

右之內、龜井平左衛門、半九郎、吟味一通り相濟候ニ付、子九月廿日、若狹守家來宮城惣右衛門ニ渡遣ス、

右之內、荒木定七儀、他屋敷江罷越、御法度之博弈いたし、剩口論仕出し、重々不屆ニ付、雜物不ㇾ殘取上候程之過料申付、主人主殿頭方江渡遣ス、

右村田喜左衛門儀、他屋敷江罷越博弈いたし、其上口論仕出し、若狹守六尺杉右衛門を突殺候段重々不屆ニ付、依ㇾ御差圖死罪申付、

右又助儀、主人方にて兼而嚴敷申付置候を相背、人集メいたし、博弈頭取いたし不屆ニ付、依ㇾ御差圖遠島申付、

〔天明大政錄四〕戊申〇天明八年八月廿八日申渡之覺

御小性組戸川山城守組　金田惣兵衛

其方儀、七年巳前ゟ四年迄、春中度々宅江松田勝十郎罷越、妻まち妾とみ、其外手合加り、よみかるた又廻り筒賣引等致し、四年巳前勝十郎福島助十郎宅江度々相越、其方助市谷金五郎其外手合ニ

加り、廻り筒ニ而こま博弈致候段、御旗本之身分に有之間敷儀、不屆之至ニ候、依之遠島被仰付者也、

右同斷に付遠島被仰付候　寄合　福島助市

右同斷遠島　御書院番金田伊豫守組　水原善次郎

右同斷遠島　金田惣兵衛妻　まち

中追放　右同人惣領　金田榮太郎

押込　松田勝十郎　妾

中追放　松田勝十郎惣領　松田貞橘

右同斷　水原善次郎惣領　水原萬之助

右同斷　谷金五郎惣領　谷鐵五郎

但萬之助、鐵五郎儀者、拾五才迄親類共へ預置候事、

一福島助市殿ハ、當月何日土方彥助江御預人なり、

一松田勝十郎殿ハ、牢屋にて打首に相成候と申沙汰之由、病死とは不相聞候事、

山田肥後守

山村信濃守

菅沼新三郎

小普請組曲淵甲斐守組頭松田勝十郎次男　松田寶之進

父勝十郎不屆之儀有之、存命ニ候得ば、遠島被仰付候ものに付、寶之進儀中追放申付也、

御小性組戸川山城守組金田惣兵衛次男　金田金之助

御書院番金田伊豫守組水原善次郎次男　水原德之助

父共不屆之品有之ニ付、遠島被仰付候、依之三人共中追放申付、

但十五歲迄親類共へ御預置可申候

谷金五郎次男
谷總之助

山田肥後守

山村信濃守

菅沼新三郎

遠島　御小性組戸川山城守組金田惣兵衛妻　さみ

同斷　右同人中小性　幸田又吉

同斷　小普請組前田安房守組木田左京家來　直井幸助

同斷　御小性組秋元壹岐守組山田五郎作家來　岡晋藏

江戸拂　[illegible]附木原攝津守家來　吉田幸右衛門

急度叱リ　神田明神表門前眞助店七兵衛母　きよ

右名主　良助

同所四丁原八店　忠助

右同之通御仕置可申付候、已上、〇下略

〔徳川禁令考後聚二十四行刑條例〕嘉永二酉年四月二日木挽町重助寄子重吉初筆博奕一件

申渡

木挽町三町目與兵衛店人宿重助寄子　重吉

仁助

安五郎

僧侶處刑

其方共儀、御法度相背、畑中善良中間被ニ雇中、部屋內ニ而留吉外八人手合ニ加リ、百文貳百文賭之廻リ筒簺博弈致し候段不屆ニ付、遠島申付ル、

但出帆迄在牢申付ル〇中略

西丸奥醫師畑中善貞家來
石橋慶助

其方儀、賭事之儀ハ御法度之趣、幷近來別而嚴敷被ニ仰出ニ之趣精々中間どもニ江申渡置、時々見廻心附候旨ハ申立候得共、既屋中間重吉外拾壹人儀部屋內ニ而博弈相催候をも不ニ存罷在候段、心付方等閑故之儀、右始末不埒ニ付、押込五十日申付ル、

〔御仕置筋御書付留〕寬政七卯年八月十八日

御朱印地之者、博弈御仕置之事、

笹屋町足折源四郎事源兵衛、博弈筒取致し候一件、御仕置評議之內、樂人御仕置之儀ニ付、同七卯年八月十八日、安藤對馬守殿、秋山松之丞を以、一座ニ江御渡被ニ成候御書取、

樂人多豐後外二人御仕置之儀、御朱印配當米等有ニ之故を以、遠島を被ニ申聞ニ候得共、御朱印寺領有ニ之僧侶も都而御仕置無ニ差別ニ例ニ候上は、博弈ニ限り重り可ニ申筋無ニ之候間、多豐後外二人中追放申付候、向後寺院も御朱印地之有無ニ不ニ拘相當之御仕置可ニ被ニ申付ニ事、

八月

〔德川禁令考後聚二十四行刑條例〕享和三亥年御渡　刑例撰本行例

泉州上石津村庄次郎初筆博弈いたし候一件

西本願寺末寺
小堀縫殿御代官
泉州大鳥郡上石津村
永祥寺雲正同居弟
禮讓

同村
彥次郎

外三人

右之もの共儀、軽キ賭博弈勝負いたし、殊ニ禮讓ハ出家之儀、別而不届ニ付、同人ハ三十日押込、其餘之もの共ハ一同敲、

此儀一件之内、三右衛門外貳拾三人、同樣之博弈いたし候もの共ニ付、一同敲可申付もの共ニ有之、然ル處禮讓ハ出家之儀ニ付、先例相糺し候處、去ル子年脇坂淡路守手限伺之上、御仕置申付候、本所日蓮宗本法寺地中、本州坊孝善外二人儀、御法度相背、孝善自坊ニおゐて、順正、仁三郎、彦次郎等手合ニいたし、五拾文位迄之賭錢廻り筒之遙博弈いたし候段、出家と申、殊ニ寺持又ハ役僧代之身分にて、別而不届ニ付、脱衣中追放申付候例ニ見合、禮讓ハ寺持之儀ニも無之、殊ニ博弈之始末も格別品輕く御座候間、脱衣堺兩郷携、彦次郎外三人ハ伺之通一同敲、

評議之通濟

〔張紙留〕文化三寅年五月廿一日極

水野出羽守殿　　松平兵庫頭

一一寺之住職ニ而博弈いたし候もの、脱衣中追放之先例有之候處、今般一寺之住職ニ而四五錢賭之よみがるた致し候もの有之、百姓町人ニ候得バ、御仕置差別御座候得共、一寺住職之上ハ、よみがるたニ而も脱衣中追放ニ而相當可仕候哉、先例相見不申候間、此段及御問合候、以上、

寅五月

御書面去ル未年一座評議ニ御下被成候、池田筑前守火附盜賊改之節相伺候、武州西戸村幸左衛門初筆博弈いたし候一件、幷武州河原村八郎兵衛初筆博弈いたし候一件之内、拾錢貳拾錢賭又は四五錢賭之めくりかるたいたし候もの共、去ル寅年之御書付ニ而宿打子ともよみかるた之御仕置ニ相成、よみかるた、めくりかるたハ差別無之候處、同年一座

評議ニ御下ゲ被成候、曾沼越前守御勘定奉行之節相伺候、武州梶ヶ谷村西福寺灌空儀、壹貳錢賭之めくりかるたいたし候ニ付、脫衣江戶拂と相伺、評議之上、脫衣中追放と申上、其通相濟候例有之候間、脫衣中追放ニ而相當と存候、

寅五月

水野出羽守

〔御仕置例類集二ノ四〕文化四卯年御渡

大久保安藝守伺

一所化僧博弈御仕置之儀ニ付評議

緒附

大久保安藝守承付ニ申上候通相心得可申旨被仰聞、承知仕候、

辰五月十三日　評定所一座

書面所化僧博弈御仕置之儀、脫衣輕追放申付候樣可仕旨被仰聞、承知仕候、

辰五月十二日　寺社奉行

大久保安藝守

博弈いたし候一寺之看主御仕置之儀ニ付、松平兵庫頭ゟ掛合有之、取調候處、看主ハ寺持ニハ無之、所化僧ニ御座候、然ル處私共懸りニ而博弈いたし候寺持幷寺持ニ準じ候ものハ伺之上脫衣中追放申付候例ハ、數々有之候得共、博弈いたし候所化僧御仕置之例無御座候ニ付、取調評議仕候處、寶曆十三未年、土屋越前守町奉行勤役之節懸りニ而吟味仕候、武州下板橋宿知淸寺弟子眞悶、御法度相背、なめかた博弈いたし、伺之上脫衣中追放申付候例御座候得共、御定書ニ女犯之僧寺持ハ遠島、所化僧之類ハ晒之上本寺觸頭江相渡、寺法之通可爲致と有之、人殺御仕置ヶ條之内ニも、同宿體之僧人を殺候時ハ、俗人と差別無之、寺持ハ一等重く可申付と有之ニ見合候而も、寺持

所化僧之無差別、脱衣中追放ニ而ハ相當仕間敷哉ニ付、以來前書御定ニ準じ、所化僧之分ハ、寺持ゟ一等輕く、脱衣江戸十里四方追放申付候方相當可仕哉ニ奉存候間、右之趣を以、兵庫頭江も及挨拶候樣可仕候哉相伺申候、

此儀評議仕候處、女犯又ハ人殺之御仕置ハ、寺持之僧と、所化僧之差別有之候儀ニ付、博弈御仕置も差別無之候而ハ相當仕間敷間、寺社奉行申上候外、先例ハ差當相見不申候得共、御定書ニ同宿體之僧人を殺、或ハ疵附候科俗人ニ替り無之、但寺持ハ一等重く可相伺と有之ニ見合、所化僧之分ハ、寺持僧博弈いたし候御仕置之例、脱衣中追放ゟ一等輕く伺之通脱衣江戸十里四方追放ニ而相當可仕、尤遯り筋博弈三度以上いたし候節は、三度以上遯り筋致し候もの中追放之御定ニ而、寺持所化僧之無差別、脱衣中追放ニ而相當可仕哉ニ奉存候、

卯十一月

〔新張紙留〕一一寺之隱居ニ而かるた博弈いたし候もの、脱衣中追放、

右嘉永三戌年三月寺社奉行伺、一寺隱居之僧博弈いたし候もの御仕置評議之節極ル

幼者處刑

〔德川禁令考後聚二十四行刑條例〕幼年もの博弈咎之事　寛政九巳年六月廿六日

太田備中守殿御直、根岸肥前守江御渡、

但評定所一座江御下ゲ可被成處、急度一座立會ニも及間敷思召候由、右之趣肥前守より一座江申談候樣被仰聞御渡、

博弈御仕置之儀、當分敲ニ可申付旨、先達而相達候、然處幼年之もの之差別ハ無之候得共、博弈御仕置も敲ニ申付候上ハ、明和之度相達候幼年者敲御仕置書付之趣ニ准じ、無宿ニ無之幼年ものハ、過怠牢可被申付候、尤幼年者之事ニ候得ハ、人ニ被勧、與風致し候類ハ、其差別可有之事、

〔公裁隨筆〕一博弈一件吟味心得方之事

女子處刑

博弈一件吟味いたし候ニも、御仕置當り凡之目當無之候ては、不都合にて、且は吟味可詰もの
を、其なりにいたし候ては不宜候間、左ニ出之、〇中略
十五歳以下博弈御仕置は、敲ニ當候、無宿は大人同様取計、有宿之分は過怠牢申付可然事ニ候、
〔德川禁令考後聚二十四行刑條例〕文化五辰年御渡火附盜賊改大林類左衛門伺

野州無宿なを初筆博弈いたし候一件

野州無宿
なを

右之もの儀、重追放ニ相成候後も惡事不相止、御構場所江立入、其上堀之内在、村名不存野田ニ而、
百姓體之もの五六人手合ニ加り、廻り筒ニ而、拾錢貳拾錢賭之鉴博弈、數度いたし候段不屆ニ付、
五十日過怠牢舎之上、重追放、

此儀、御定書ニ、御構之地徘徊いたし候上、惡事いたし候もの、入墨以上ニ可申付惡事ニ候はゞ
死罪、入墨ニ可申付程之惡事無之ば、前之御仕置より一等重く可申付ど有之、此ものは、御構之
地江立入、廻り筒鉴博弈度々いたし候、御構之地江徘徊いたし中追放ニ可相成惡事いたし候
ものニ而、入墨之刑ハ無之候間、自本罪一等重キ御仕置、重追放ハ、入墨又は敲候上重追放と之
御定ニ見合、女ハ敲之御仕置先例無御座、入墨ハ申付候例有之候間、入墨之上重追放、

評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ二十八〕文政九戌年御渡

日光奉行伺

一野州文挾宿傳四郎外六人致博弈候一件

日光御領野州都賀郡文挾宿ニ罷在候年寄ニ而旅籠屋渡世右衛門方同居人傳四郎女房
やす

右之もの儀、宿裏外三ヶ村林野田山陰等ニおゐて簺致博奕候節、無宿勇七、彥兵衞、野州明神村吉藏外三人、其外名住所不存もの共致打子ニ、一人立筒取いたし、其度々寺錢取之、自己之德分ニ致、又は同國岩崎村、外貳ヶ村地內野田於山陰ニ博奕致候節は、同國板橋宿粂七外一人、其外名住所不存ものども致打子、夫傳四郎と代ル〳〵筒取致シ、同人〻寺錢配分請、同國長畑村地先野田ニ而名住所不存もの筒取いたし候節は打子ニ相成、同國板橋村外二ヶ村地內野田河原等ニ而は、右彥兵衞、其外名住所不存もの共手合ニ加り、廻り筒簺博奕度々致、其上宿役人幷家內之もの共〻、度々異見差加候儀をも不取用段、女之身分別而不屆ニ付、遠島、

此儀、夫傳四郎江代ル〳〵致筒取候儀も有之候得共、一人立致筒取德分取候ものニ付、一件之內傳四郎江引當候御定ニ而、伺之通遠島、

（朱書）評議之通濟

〔御定書百箇條〕三笠附、博奕打、取退無盡御仕置之事、

（從二前々一之例追加）一（仲間之者江金子合力之爲ニ中、博奕々催、合力金之內、內證にて自分も配分取候もの、）　遠島

但博奕催候世話は不致候へ共、合力金貰候者、中追放、

〔公裁隨筆（續）〕一博奕一件吟味心得方之事

博奕一件吟味いたし候にも御仕置當り凡之目當無之候ては、不都合ニて、且は吟味可詰ものを其なりにいたし候ては不宜候間、左に出之、〇中略

博奕場ニ而食物之世話致し、働料貰請候迄ニ而、手合ニ不加ものは、手鎖程之當ニ而可然候、〇中略仲ヶ間之もの江合力など可致心得ニ而博奕を催、右之內其身も配分取候類は、遠島程之見込を以吟味之事、

〔科條類典（下四）〕寬保三亥年八月

博弈を催てら金取候もの

小船町三町目七兵衛店治兵衛召仕　藤兵衛
堀江町三町目権兵衛店　與兵衛

右藤兵衛儀、武州榛澤郡高島村新兵衛江申談、與兵衛江てら金可遣旨申合、小船町一町目新七を宿ニ頼、御法度之博弈を催、てら金三兩壹分請取候而、與兵衛と兩人ニ而分取候段不屆至極ニ付、依御差圖藤兵衛儀ハ遠島、與兵衛儀ハ中追放申付之、○中略

右者依御差圖寅八月十一日御仕置申付之、

〔公裁隨筆四〕一博弈一件吟味心得方之事

博弈一件吟味いたし候にも、御仕置當り凡之目當無之候ては、不都合にて、且は吟味可詰ものを、其なりにいたし候ては不宜候間、左に出之、○中略

廻り筒之博弈三度以上いたし候もの、又は廻り筒之博弈は二度いたし候共、てら錢貰請候ものは、凡中追放程之當りニ見込之事、

〔御仕置例類集二ノ七〕文化二丑年御渡

日光奉行伺

一野州長畑村九右衛門博弈相催候一件

日光御領野州都賀郡長畑村年寄　九右衛門

右之もの儀源左衛門相頼候迚、御法度を背、伊勢講と名付、博弈相催、重立世話いたし廻り筒之塲

博弈いたし候始末、年寄役をも相勤候身分ニ而、別而不屆ニ付中追放

此儀吟味書之趣ニ而は、明神村源左衛門儀及困窮候故、博弈相催、勝候ものより合力錢貰請度

間、世話いたし吳候樣相頼候ニ付、伊勢講と名付、手合を可集と申談、助右衛門外貳人江ハ手合

ニ加候様申勧、博弈相催候趣ニ付寛政四子年評議ニ御下ゲ被成候、日光奉行相伺候野州七里村百姓孫右衛門儀、手合に加り不申候とも、八五郎儀難渋之始末難見捨、合力銭をも可貰請と存重立博弈之世話いたし、はくれ銭等取集、八五郎江相渡候段不届ニ付遠島と相伺、評議之上中追放と申上、其通相済候例ニ見合、此ものは、合力銭可貰請と存候儀ハ無之候得共、其身も博弈いたし、其上年寄之儀にも有之候間、例同様伺之通中追放、

朱書
評議之通済

〔的例貰紙之寫〕中追放

安永八亥十二月周防守殿御下知　一座懸り

一駿州岡一色村左十外十六人博弈吟味一件

水野出羽守領分駿州駿東郡岡一色村
百姓　左十

此左十儀、御法度を背、銭貳百文賭より貳貫文賭位迄之廻り筒ニ而都合四度籠致博弈候段不屆ニ付中追放、

〔德川禁令考後聚二十四行刑例〕文化十一戌年御渡　火附盗賊改并上左大夫伺

博弈之勝金と不存貰受候もの之儀評議

新吉原京町一町目家持遊女屋市兵衛召仕
佐七
外拾五人

右之もの共儀、貰ひ請候金銀ハ、不正之金銀ニ有之處、其儀ハ不存候とも、親并主人江も不申聞、右體金銀貰ひ請候段、次兵衛佐七ハ訴出候得共、一圓不埒ニ付、貰受候金銀取上、

此儀博弈ニ打勝候金銀とは不存、貰受候もの共ニ御座候、右ハ盗金貰受候と違ひ、取上ニハ及申間敷、併先例も有之候哉と相糺候處、博弈一件吟味數多之儀ニ御座候得共、打勝候金銭達先是迄相糺、取上候例無御座候間、貰請候金銀取上不及、佐七外拾五人儀無構段可申渡、

評議之通濟

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

從前々之例
一惡賽拵候者　入墨之上　重敲

〔科條類典 下 四〕寛保元酉年十二月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

極
一惡賽拵候もの　入墨之上　重敲

朱書
是ハ享保十三申年、內藤丹波守中間仁兵衛と申もの、手目賽拵賣出し候處、佐々木庄左衛門組廻り之もの、怪敷體之由ニ而召捕懷中相改候處、惡賽所持いたし候ニ付吟味いたし候處、手目賽細工いたし候段白狀いたし、不屆ニ付死罪ニ伺候處、入墨之上重敲、

懸紙

朱書
是ハ唯今迄之取計を以相認申候

〔公裁隨筆 續〕一博弈一件吟味心得方之事

博弈一件吟味いたし候にも、御仕置當り凡之目當無之候ては、不都合にて、且は吟味可詰ものを、其なりにいたし候ては不宜候間、左ニ出之、

惡賽を拵候ものは、入墨重敲位之見込ニ而可然候、尤博弈は不致惡賽拵候計之もの二候、

〔科條類典 下 四〕惡賽拵博弈打候者御仕置之事

赤坂風呂屋町彌兵衛店
權右衛門寄子
仁兵衛　下〇附札、略、

享保十三
申二月十八日佐々木庄左衛門方ゟ入牢

此もの儀、依御差圖佐々木庄左衛門より請取吟味仕候處、仁兵衛出所田中市郎右衛門知行、武州多摩郡三輪村百姓彥兵衛悴ニ而、去年七月御當地江罷出、內藤丹後守中間相勤、部屋ニ而手

目賽細工いたし、麹町邊武士方名ハ不存、中間清六と申ものニ、常之賽三ツ、手目賽三ツ、三百文ニ賣渡し、其外往還ニ而小間物賣貳人ニ、常之賽四ツ、手目賽四ツ、代錢四百貳拾四文ニ賣拂候得共、兩人共ニ名所も不存候、其外ニハ櫻田和泉町喜右衛門店、八郎兵衛と申もの知人ニ而候故、去年九月頃、兩度ニ常之賽四ツ、手目賽四ツ代六百文ニ賣渡し申候、此外ニハ何方江も賣渡不申候、懷中ニ有之候賽大小拾貳ハ賣殘りニ而御座候、當二月十八日、牛込御門之内通り候處佐々木庄左衛門組廻り之ものニ怪敷體之由ニ而被捕、懷中相改、惡賽所持いたし候ニ付、吟味逢候間、手目賽細工いたし候段、有體に申上候、不屆之儀仕、無申譯誤入候旨申之候、

一右之通手目賽拵候上ハ、定而仁兵衛博弈打候ニ而可有之候、同類等有體に可申旨僉議仕候處、在所ニ罷在候節、前方ハ少々宛之博弈打候得共、去年七月御當地江出候而ハ、曾而少之博弈も打不申候旨申之候、

仁兵衛請人、赤坂風呂屋町權右衛門も呼出し相尋申候處、寄子ニ相違無御座候、人主ハ櫻田原ニ罷在候、源左衛門と申ものニ而候處、當春より源左衛門行衛相知不申候、

享保十三年申九月御書付

右之仁兵衛入墨之上重ク敲、重而惡事仕候ハヾ、重キ御仕置可申付旨申聞、請人江可相渡候、

〔有德院殿御實紀附錄四〕博弈は、無智の民に盜賊を敎ゆるにひとしとて、重くいましめ玉ひし事、たび／＼なりけるか、○中略是まで、市店に博具をひさぐものありしが、これをもいたくとゞめられしとぞ、これよりして、庶人の惡風大に改れり、

〔天保集成絲綸錄百四〕寛政三亥年八月

町觸

博弈ニ限り用候かるた札は、賣買致間敷儀勿論ニ候處、心得違之者も有之趣相聞、不埒之事ニ候、

右之外ニも絕而博弈ニ而已用候品致賣買おひては、其品取上咎申付候間、其旨可心得者也、

〔和漢三才圖會遊戲十七〕樗蒲

按樗蒲其製古今不同、今所用者、本出於南蠻矣、用厚紙作之、外黑內白、而有畫文、青色（名巴字）、赤色（名伊須）、圓形（名於留）、半圓（名骨扶）之四品、各十二、共四ヿ八枚、其畫一則蟲形、（名豆牟）二至九畫數目也、十則僧形、（名仰）十一騎馬、（名謝牟末）十二似武將、（名岐利）其名目亦蠻語矣、

凡樗蒲賤民喜弄之、貴家皆不用之、總好博塞者、初一二錢賭、後出金銀爲之、衣服資財一時放下、而盜賊多出於此、

○按ズルニ、此ノ樗蒲トアルハかるたヲ云ヘルナリ

〔草茅危言五〕博弈之事

一博弈ハ、天下ノ大禁ナレドモ、相止ガタキ者ニヤ、市中ニ急度トシタル場所ヲカマヘ從テ、ヨリ集ルヤウニモ相聞ユ、又折々ハ官命逮捕アレバ忽チ消散シテ、事靜マレバ又集ルト聞ク、近來ノ嚴命ニテ勢大ニソゲタル由何トゾ此序デニ拔本塞源ノ方アリテ、再ヒ勢ヲ張ザルヤウノ仕方アルベキニヤ、凡ソ盜賊亡命敗子遂奴ノ類、天下ノ惡人落込所ハ皆博場也、故ニ此一ツヲ防ゲバ萬惡ノ樞トナリ、巢穴ヲ一掃スルノ功驗ヲ見ベク、ソノ方ヲ施サンニハ二箇條アルベシト愚意ニ定ル處左ノ通リ、

一先一箇條ニハ骰子博牌ヲ造ヲ嚴ニ禁ズルナルベシ、是モト國禁ナレドモ、此具ヲ製造シ賣買スルモノ市中ニ通チキヲ公ノ私ト云ヤウニ何ノ咎メニモ逢ザルハ、禁網宏濶太平ノ餘光トモ云ベケレドモ、是博弈ノ止ザル根源也、サスガニ看板ハ雙六ノ采、歌カルタニ托シオケドモ、近々ニ至リテハ公然ト博牌ノ看板ヲ出シタルモ往々見及ビタリ、又大博場ニテ牌ヲ用フルハ目驗アルヲ嫌ヒ、一度ヅヽカケ流シニスル故、一場中ニ夥キ牌ヲ費スコトトキク、ソノ上

京大坂ニテ製造シテ四方遠近ニ普ク傳播スルコト故、是ニカヽリ居ル工人商人モ夥シキコトナルベシ、畢竟ハ遊手空民ノ類ニテ人ヲ過惡ニ陷イルヽノ罪又甚シ、今コノ製造ヲ官ヨリ嚴ク禁ゼラレンニハ、天下ノ博勢ヲ減殺スルコト過半ナルベシ、骰子ハ雙六ノ用アレバ、此禁ハ紛ラハシキコトモアルベケレドモ、其法ヲ立テ、イカヤウトモ仕方有ベキコトナラン、又博事ハ俗人ノ好ム所ニテ、官衙ノ吏胥ニモ内々此好ミアル人多シ、偸ド聞及ビタリ、然レバコノ吟味アラントキ、カノ好メル人ナドソノ命ヲ受タラバ、掩藏阿黨ノ私アリテ、内分。請謁ノ事モ加ハリ、行屆カザルヤウニナリユクベシ、是ソノ人ヲ擇ムニ在ベシ、何分博事ニ根本タル博具ノ害ヲ一ツ除キオキタラバ、其末ハ制シヤスカルベシ、易ニ所謂豶豕之牙コレナルベシ〇下略

〇按ズルニ、此書ハ中井積善ノ著ニシテ、之ヲ執政松平定信ニ上リシハ寛政元年ナリ、

〔當世武野俗談〕菱屋おりつ、かるた名譽

兩國橋向本所一ッ目近所、茶屋町寄合茶屋にて、菱屋小左衞門と云もの有、かれが父は、常憲院様御代御出頭たりし柳澤松平甲斐守殿氣に入、定紋花菱の小袖上下をゆるされ、其家の名も菱屋と名乘けり、今の菱屋小左衞門が女房おりつと云は名高き女なり、瓜の仁助と云通り者の娘なり、兩國橋幾世餠の女房も、仁助娘にて、菱屋のかゝが妹なり、されば此りつ女の身にて幼少よりかるたをすき、上手にて、所々方々へよみうちにあるきけるが、近年いよ〳〵かるた高下共に花時(ハヤリ)屋々の分限者たち又は淺草邊寺町の和尚住持智識長老御歷人迄、此わざを第一にて、かるたの上手と呼べば、猿江の專念寺と云寺の住持、よみ好き妙を得たり、又砂村口百姓總右衞門は、專念寺に勝まさりの劣り有と云、兩替町會津や五兵衞は夫より海馬だけ强しなど、其内にて申あへり、彼菱屋おりつは是等の輩に勝負更に甲乙なき上手たり、尤鼎。札。をまきちらしたる時、一まいうち出すと其人の手跡に八。枚。何々といふ事、能にかけて見るよりもあ

きらけし、或人おりつに向ひ、其元かるた上手と申候得ども、凡かるたは繪付次第にて下手も上手も入まじきか、たとへ上手にても馬が十にもなるまじといひければ、おりつ答ていやいや左様にあらず、繪のあしきを取たる時こそ上手の入る所なり、あながち手前の勝つ事を思はず、役のなきあがりの安き方へ打込やうに致をもつて、よみ打の上手と申べし、おのれせひ勝んとするは下手なり、されば象戯圍碁といふものの上手の曰、勝んと思ふ事なかれ、負まじと思ふてかこむべしと云しとなり、まけまいと思ふは勝んと思ふ同じ心の様なれ共、其事甚意味有、名人の詞なり、又二が三には打れまじ、十が馬には打れまじと御申候得共、必ず打れるなり、下手は海馬(アマ)を二にも三にも打せ、上手は海馬(アマ)はあざに打釋迦は十のかはりに打ず、釋迦の場にて打事なり、たとへば二三打て次へ四とやる、其四なくて涯る、かへざれば、馬を打てきりとやる、四の替りに馬をはなすは、馬を四にも打なり、變を以て上手は自由に其繪をこなすこと、自然ふしぎの妙有と答けるとなり、今此おりつはかるた打の章まらざるはなし、

〔德川禁令考五十浄瑠璃并女藝者〕天保二卯年二月十九日

女浄瑠璃并花かるた之儀ニ付申渡○中略

花かるた、花合、又者歌舞妓役者紋畫抔と唱、めくり札ニ紛敷品種々拵、賣捌候者有之由、不埒之儀候條、以來賣買者堅爲相止、定見世と唱女浄瑠璃等之儀も、早々爲相止候樣可致、此上心得違之者有之、改方等閑ニ致し候はゞ、町役人共迄急度可及沙汰候、

右之通申渡間、町々不洩樣可申付旨、年番名主共江可申渡候、

卯二月

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、町中不洩樣、可申通旨被仰渡、奉畏候、爲御受御帳ニ印形仕置候、以上、

天保二卯年二月十九日

年番名主壹人宛（壹番組より二拾壹番組迄 品川新吉原町共廿壹組）

〔新張紙留〕博弈ニ相用候紋紙、其外めくり札賣拂候もの、先例過料、又ハ江戸拂ニ相成居、區ニ付、以來右類所業之輕重ニ不拘、江戸拂之積り、

右嘉永三戌年二月十三日火附盜賊改水野甲子二郎伺、南紺屋町吉郎兵衞店新助めくり札取扱候一件、御仕置評議之節極ル、

〔御仕置例類集一ノ六〕文化十四丑年御渡

火附盜賊改渡邊孫左衞門伺

一神田佐久間町三丁目次助店平兵衞

青物町吉兵衞店佐兵衞方ニ居候

藤藏

右之もの儀、買取預置候品は、博弈ニ相用候品と乍心付、買取賣捌候ハヾ利德も可有之と、右ニ泥み御法度之めくり札買取、預置候段不埒ニ付、過料三貫文可申付哉之旨、奉伺候處、病死、

此儀、先例相糺候處、寛政三亥年評議ニ御下被成候、長谷川平藏火附盜賊改勤役之節相伺候、京橋三拾間堀貳丁目善六店忠助儀、同店市右衞門任賴、紋紙判木摺出賣渡遣、右紋紙ニ而博弈致し候始末ニ相成、全く博弈相用ひ候品賣渡し遣、德用錢取り候段不屆ニ付、江戸拂ト相伺、評議之上伺之通ト申上、其通相濟、幷同六寅年評議ニ御下被成候、右同人相伺候、京橋弓町抱番人長四郎、外七人儀、博弈ニ相用、人之惡事ニ相成候品ト乍心付、德用餘分ニ可有之トかるた札買取、內々ニ而賣渡候段不埒ニ付、急度叱ト相伺、評議之上過料錢三貫文宛ト申上、其通相濟候例も有之、兩端ニ而勿論右例之內、忠助之方は長四郎外七人ゟ品不宜樣相見候得共、忠助御仕置之儀も、紋紙一通ニ買取賣渡候もの、例ヲ以相決候事ニ而、紋紙判木細工いたし候迚重り候譯

三笠附
前句附
冠附

ニ無㆑之、且又かるた札致㆓賣買㆒と紋紙賣買等いたし候と、差別も可㆑有㆑之哉と勘辨仕候處、品は違候とも、御法度之賭事相用候品賣買致し候段、趣意者同樣之儀ニ有㆑之、其上長四郎外七人評議之儀、博弈又はよみかるた打候もの御仕置、當分改候樣被㆓仰聞㆒候、巳後之例にも御座候得共、博弈御嚴制ニ付而は、前書例之内忠助ニ見合候方相當可㆑有㆓御座㆒候間、存命ニ候ハヾ江戸拂可㆑申付處、致㆓病死㆒候間、其旨可㆑存段一件之もの共江可㆓申渡㆒、

朱書
評議之通り濟

〔獨語二〕元祿の初の頃より、前。句。附。といふこと興れり、其法宗匠ゟ下の句を一句出して、多くの人に上の句を附させて、點に第一第二の品を命じて、甲乙の次第にしたがひて賞を行なふ、其賞は或は布帛、或は器物など、そこばくの直なる物を出す、布帛器物に望なき者は其直なる金銀を取る、此賞を得んとて、貴賤となく我も〳〵と句を附て、日々に點銀をつひやす、是則博弈の類也、此事盛に行はれて世の俗人皆是を好む程に、下の句に上の句を附るも猶むつかしとて、宗匠ゟ上の句の初の五文字を出して、次の七もじ五もじを諸人に附させる事になれり、是を冠。づ。け。とも笠。附。とも云、かく賤敷わざに成ぬれば、下部のわらは下すまでも俳諧と云事を知て、笠附して褒美どらんとする程に、調いよ〳〵賤しくなれり、寶永の頃より冠の五もじを三つ出して、三つの冠に各七文字五文字を附て勝負を分る事有り、是を三。笠。附。といふ、是いよ〳〵博弈に近し、其後五もじの冠をも出さず、下の七文字五文字の詞をも止て、只數の文字を封じて、外ゟ此數をはかりて札を入れて、其數のあたれるを勝として金銀をとらする事に成ぬ、こゝに至て正敷博弈なれども、本の名を存して、猶三笠附と云、此三笠附盛になりて、賤き者はいふに及ばず、士君子も是をなして得つかんとする程に、得はつかずして多くの財をつひやし身を失ひ、家を亡す者數を知らず、此事上に聞えて、享保の初よりきびしく三笠附を禁せらる、其後禁を犯して刑罰にあふ

者あれども、今に到る迄猶たえずと聞ゆ、和歌の流、其末變じて博弈となるべしとは、住吉玉津島の神もいかでかしろしめさん、淺ましく悲しきは俳諧のわざはひならずや、

〔市尹要覽四〕

三。笠。附。

一句　拾錢

卷頭　金貳兩

二勝　百文

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、

右二十一之內、何れ成とも書拔いたし封印、是を卷頭一勝之懷紙と名付、點者金元方ニ差置申候、付ケ候もの、右貳拾壹之內にて、此度之卷頭一勝者、是にて候半と存候得バ、三ッ點懸け申候て、三ッともニあたり候へバ卷頭一勝にて、定之通り金貳兩取申候、又二ッあたり、壹ッはづれ候へば、二勝と成り、錢百文取り申候事、

一三笠一句と申候ハ、此度之卷頭一勝、是にて可有之と存候を貳拾壹之內より三ッすぐり出し、料拾錢相添遣申候、是を一句と申候、

右之通付候もの三ッ共ニあたり候儀不定候事にて候得共、五ッ之うちにて、あて可申哉と存て、五ッすぐり出し遣申候を五車と申、是ハ一ッ分にて五拾文ヅヽにて、五ッ分貳百五拾文出申候、此上七車、八車、其上も右之割合ニ而出錢增申候事、

一句ひろひども、方々より付句取集め會所江持參仕、點者とう時付立合、封印致置候而、懷紙ひらき見申候、三ッともニあたり候ものどもへ、卷頭一勝金貳兩宛遣申候、二ッあたり申候ものどもへは、二勝百文ヅヽ遣申候事、

一所々より集り候ニ付、句之內三ッあたり、卷頭一勝多候得バ寄錢ニ而不足仕候間、點者金元よ

り手前金出し、あて候ものへ遣申候事、

一所々より付來り候句共を改見申候ものを、どう引付と申候、此どう引付、句共見申候ニ、巻頭一勝に當り候句多く相見申候得ども、點者金元損參候間、右封印之巻頭一勝外のど列座之句ひろひども不存候之樣引替申候、是博弈打之悪さいなでつかひ候類にて御座候、ケ樣ニ仕候を手づから三笠と申候事、

一右三笠寄錢にて勝出し候とも、毎度少々ヅヽは錢殘り德用御座候樣、點者金元手段仕候、若又寄り之内あたり少く候節、大分德用有之事ニ御座候、畢竟いづれの道にても、點者金元損不仕候事、

右三笠附之儀相尋候處此趣ニ申候、則書上仕候、以上、

享保九辰年三月

〔我衣〕貞享頃より正德享保ノ末マデ、町々ニ前句付、冠付トテ、點者ヨリ題ヲ出シテツケサセ、宜キニハ褒美ツカハシ、高下ヲシテ次第ニ甲乙有テ出ス、點者ヲ收月ト云、○中略正德ノ頃ヨリ、右ノ冠付ニナゾラヘテ、三笠付ト名附不宜コトハヤリタリ、前々ハ始ナレバ、諸人ノ合點仕安キヤウニ、冠付ノ題一ツヘ、句廿一句カキツケ、其廿一句ノ内ニテイヅレノ句々カ三句組テ出スト云コトヲ當テサセ、誠三句トモニアタリタルモノニハ金一兩ヲ遣ス、料ハ十文ニテ金一兩ヲ取ベシト思ユヘ、諸人欲ニフケリ、晝夜勤ヘ、是ノミ業トス、次第々々ニ流行テ、後ニハ冠付ノ句ヲ點者ヨリモ出サズ、懷紙ト名付、卷紙ノ内ニ和歌三神ヲ書、一、十一、十五、ナド、ヽ數計リヲ書テ封ジ、正面ニカケオキ、付ル者ハ帳面ニ右ノ一ヨリ廿一迄、數計三ツ宛組合セテ一句トナシ、右一句ノ内、三ツトモニアタレバ一番ナリ、二句アタレバ二勝トテ錢ヲツカハス、

三

和歌三神　六　廿一

カヨウニ毎日々々入カヘ入カヘカハルユヘ、諸人身上ヲ打テ難義ニ及ブ、後ニハ棒引トテ三、六、廿一ト、句ノ下ヘ棒ヲ五本モ十本モ引、十本ニテハ十句の料ヲ遣ス、金十両ヲトランガタメナリ、或ハ五車、七タルマ、十タルマトテ、

一	一	三
三　五車	二	八
五　代十句	三	九
十一	六　七タルマ	十一　十タルマ
	十五　代卅句	十四　代百句料
	廿	十五
	廿一	十七
		十九
		廿一

右之通ニ附ル者モ段々巧者ニナリ、金カケノ博弈ニナリ、堅ク御停止被仰付難有御事ナリ、元來是ハ博弈ノ類取巧出シタル物ナルヨシ、

夫賽ノ目ハ一ノ裏ハ六、合テ七ツ、二ノ裏ハ五、合テ七ツ、三ノ裏ハ四、合テ七ツ、都合三七廿一ナリ、一ヨリ六迄サヘアタラヌモノナルニ、増テ廿一ハアタルマジ、其上三句組合タレバ、凡五六百ニモナルベシ、アタラヌハ尤ナリ、當ルハ大ニ間違ナリ、今日本橋其外御高札場ニモ、三笠ノ點ハ嚴敷御法度之由、別ニ御高札出シヲミルベシ、

〔正寶事錄九〕覺

一俳諧點者連衆之内江褒美と名付、器財等をかけ、わざ之様ニ取遣りニ仕、畢竟博弈之勝負に似より、不宜相聞候、左様之取遣りを定、博弈わざ仕なし候儀ハ、向後無用ニ可仕候、若密々ニも左様之仕形仕、脇々あらわるゝにおゐては、可爲曲事候、勿論有來通之俳諧點者致し候儀は、其通候事、

丑十二月　元祿十年

右は十二月廿九日御觸、町中連判、

〔享保集成絲綸錄四十七〕元祿十五午年二月

一頃日俳諧點者之内、冠付と申看板を出し人集をいたし、其上褒美と名付、衣類器財等をかけ、業之様に取遣り仕、畢竟博弈之勝負ニ似よりたる儀仕候段相聞、不届思召候、早々看板引取せ、向後右之ごとく成儀一切不仕候様、支配ニ罷在候點者共江急度可申渡之旨、名主共江申渡之候、

二月

〔正寶事錄十〕寶永二乙酉年

覺

一頃日於町方辻々人集、博弈がましき儀致由相聞候段、前々停止之旨、度々相觸候所、不届之至り候、右之族急度可召捕候間、其旨早々町中江可相觸候、

一頃日俳諧點者之内、前句附之褒美と名付、博弈に似寄候儀致者有之由相聞候段、前々停止之旨、度々相觸候所、今以不相止候段不届之至候、向後右之ごとく成義一切不仕候様ニ申付、若相背もの於有之は、早速番所江召連可罷出旨、町中急度可相觸候、以上、

酉正月四日

〔正寶事録十一〕覺

一俳諧點者之内、前句附褒美と名付、博弈ニ似寄候儀致候由相聞候ニ付、停止之旨度々相觸候處、其砌ハ看板をも引候得共、程過候得バ、最初之ごとく看板を出、今以右之仕形有之由相聞、不屆候、向後ハ人を廻し召捕、家主迄急度越度可申付候間、此旨町中可觸知候、以上、

戊（〇寶永三年）正月十五日

右御觸町中連判

〔正寶事録十二〕覺

一前方度々相觸候通、町方ニ而富実、又ハ大黒つき、或ハ俳諧前句附、三笠付、抔名付ケ、博弈ケ間敷儀堅致間敷候、同心相廻し、右之族有之ば召捕させ、當人ハ曲事ニ申付、其所之家主五人組名主は可爲越度候間、此旨町中急度可相觸候、以上、

十二月（〇正徳元年）晦日

右は同日御觸

〔正寶事録十四〕覺

近來諸國在々所々ニ而、三笠附と申事はやり候由相聞え候、博弈同事ニ付、御料私領ニおゐて急度制禁可有候、惣而何事ニよらず、如此事相催候ニおゐては、其頭取并取持候もの共からめ置、早速可有注進候もの也、

未（〇正徳五年）九月

〔享保集成絲綸條四十七〕享保八（卯）年六月

覺

一三笠附并惣而博弈いたし候者、只今迄村方ニ有之候而も事六ヶ敷存候哉、総ニ三笠附并博弈

いたし候者之儀不申出候、依之自今其村々之名主可致吟味候、相名主有之村々ハ一同に申合、無油断遂吟味、三笠附いたし候者候はゞ其者分限に應じ、過料錢申付取上可申候、但三笠附之點者、金元宿頭取之者ハ、別而過料錢重く申付、句拾手傳之者ハ、右之者より輕く可申付候、員數之儀ハ、其名主致勘辨、不及伺申付可取之事、

一博奕宿頭取并博奕打之者過料右に准じ可申付候、是又員數之儀ハ名主致勘辨不及伺可取上之事、

一三笠附并博奕致候者、當人過料錢出之候儀難儀ものハ、地借りハ地主召仕ハ主人ゟ爲出可申事、

一惣而右類之もの名主吟味仕候事令難澁候歟、又ハ過料差出候儀相滯事有之ハ、御料ハ御代官私領ハ地頭江可訴之候、且又過料取上候節ハ不及屆候事、

一右過料錢取上候儀、年寄組頭立合帳面に記置、惣百姓村入用に可致、其拂方之儀ハ何入用に拂候段惣百姓江申聞候上、判形可取置事、

一三笠附并博奕仕候者度々過料差上候上、猶相やめざるものハ捕置早速可訴出事、

右之通今度相定候間、此旨名主共急度可相守候、此上役人見廻し可申候間、見のがし聞のがしに仕においては、名主組頭可爲曲事者也、

六月

三笠附博奕いたし候者、吟味之事ニ付、別紙書付之通相極り候間、關八州之分、御料私領共ニ右之趣を以可被申付候事、

但万石以上之面々ハ右之通名主ニ被申付候共、又ハ領分ニ家來も差置候付、役人ニ申付候共、勝手次第宜樣ニ取計可被申付事、

六月

〔享保集成絲綸錄四十七〕享保九辰年正月

一先達而申渡候通、俳諧點者之内、前句附、冠附褒美と名付、博奕ヶ間敷儀致候由、前々ゟ停止に有ㇾ之處、今以右之族有ㇾ之、其上近き頃者繪を書、俳諧と名付、看板を出し、人をあつめ、博奕同前之仕形之由相聞不屆候、自今右體之もの町内ニ於ㇾ有ㇾ之ハ、遂吟味召連可ㇾ罷出候、若隱し置、後日相知候共、其家主五人組名主ハ勿論、其町内江も急度過怠可ㇾ申付事、

一常之俳諧點者之内ニも紛敷仕形いたし候者も有ㇾ之由相聞江候、是又遂吟味、不埒之點者も有ㇾ之者、早々召連可ㇾ罷出、若其通ニ差置、脇より相知候はゞ、是又前條之通過料可ㇾ申付事、

右之通町中急度相守候樣、可ㇾ相觸候、以上、

正月

〔御定書百箇條〕三笠附、博奕打、取退無盡御仕置之事、

一三笠附句拾ひ 同十一年極　　遠島

一三笠附點者同金元幷宿 享保十一年極　　家財取上 非人手下

一三笠附いたし候者 享保十一年極　　家財家藏取上候程之過料、家藏無之者ハ五貫文或ハ三貫文過料、

一三笠附點者金元幷宿之家主 享保二年 延享二年極　　身躰に應じ過料之上 百日手鎖

一同地主 延享元年 寛保元年極　　屋敷取上

但五ヶ年過元地主江返被ㇾ下之外にて、致候もの之地主ハ三ヶ年過返可ㇾ被ㇾ下、享保十五同十六年極

附其日稼之者、商先にて當分博奕筒取致候類ハ、地主幷所之者共咎不ㇾ及、享保二十年

享保十一年 延享二年 極
一三笠附宿両隣并五人組　身上に應じ 過料
元文元年
但在方者組頭五人組共過料

寛保元年 延享元年 極
一同名主　町方在方共 過料五貫文

享保十一年 延享元年 極
一同町内　家主 過料三貫文

從前々之例追加
但在方ハ村高に應じ過料　向小間に應じ 過料

享保十一年極
一三笠附點者同金元并宿　訴出候もの同類たりといふ共、其科をゆるされ、御褒美 銀弐拾枚

但句拾札賣等を訴出、其手筋にて右のもの共を捕候はゝ、金五両亦は三両御褒美可被下候事、

從前々之例追加
一三笠附、博弈打、取退無盡之儀、町内名主、五人組等訴出候はゝ、當人并家主ハ御仕置に申付、地主は地面不及取上、急度叱、宿之両隣、五人組、名主、一町内之もの不及咎、

但在方も右同斷

享保十六年極追加
一都て三笠附、博弈打、取退無盡御仕置一件之内、遠島もの五ヶ年過御赦有之節、御免之儀可相伺事、

延享二年
但所拂以上之御仕置もの、博弈一通に候はゝ、右同斷相伺可申事、

〔科條類典 下 四〕(元) 博弈御仕置并訴人等之部

享保十巳年伺

諸博弈頭取、金元、宿、句拾ひ等幷訴人之事、

覺

一三笠附點者、金元、同宿致候者、句拾ひ、

一博弈打頭取、幷博弈宿致候者、

右之族、正月迄之舊惡ハ被差免候間、自今心底を改、諸博弈可相止候、若不相止者ハ不屆至極ニ候間、當人ハ流罪、或ハ死罪、句拾ひ等ハ身體取上、非人手下ニ可差遣候事、

附札

此流罪死罪之儀、是程ニ不被仰付候而ハ、諸博弈、十ノ物、一ッ二ッも減じ申間敷候、且又句拾ひ、非人手下ニ相渡候はゞ惡事は仕間敷候、若大勢ニ成、其內無覺束儀も候はゞ、彈左衛門方ゟ訴出候樣ニ可仕候、其節ハ去春之通遠島被仰付可然奉存候、畢竟句拾ひ御座候故、三笠附相止不申候、依之句拾ひ之儀ハ、札之面ニ書出シ申候、〇下略

〔一話一言四十〕神田旅籠町名主中村氏書留抄書

丑〇享保十八年十二月十日榜や

一前句附札出し候もの早々可取拂事、

〔天保集成絲綸錄百四〕文化元子年十一月

俳諧點者之內、前句附、冠付褒美と名付、博弈ヶ間敷儀致し候儀、前々ゟ御停止之上、別而享保九辰年嚴重御觸有之候、然處近頃五文字、折句、千句合抔ト唱、幼年ものニも可相成戲れ言を集、何程と代錢を極、勝負點致シ候もの有之由、右勝句之分書付ニ致し張出し景物と名付、傘風呂敷等之品、を差遣し、景物之名目ニ而品ニ而ハ不相渡、代錢ニ而夫々差遣、賭之勝負ニモ紛敷、不埒之至ニ候、

依之町々組合限、急度相改、若右體之儀有之ハ、早々可申出候、

子十一月

〔德川禁令考後聚（二十四 刑律例）〕寛政八辰年御渡 火附盗賊改森山源五郎伺

一武州幸手宿傳右衛門後家とめ方ニ居候、彌左衛門三笠附いたし候一件、

武州葛飾郡上高野村百姓傳右衛門地借 千太郎

右之もの儀、五郎次宅ニ而彌左衛門三笠附點者金元いたし候ニ付、日々罷越世話いたし、賃錢貰請候段不屆ニ付、家財取上江戸拂、

此儀三笠附世話やき之御定ハ無御座候得共、取退無盡鬮振せわやき家財取上江戸拂と有之御定ニ見合伺之通家財取上ゲ江戸拂、

朱書
評議之通濟

武州葛飾郡松石村百姓和助兄 清左衛門
外貳人

右之もの共儀、御法度相背、五郎次宅ニ而、彌左衛門三笠附點者幷金元いたし候ニ付、日々句拾ひいたし、賃錢貰請候段不屆ニ付、銘々所持之品取上、非人手下申付、穢多彈左衛門江引渡、

此儀三笠附句拾之御定ニ而、家財取上非人手下可申付もの二候處、此もの共ハ親掛り兄掛り之身分ニ而、銘々家內之もの共江は小商等いたし候旨申、三笠附句拾ひ致し候儀ハ相隱し隱在候と吟味書ニ有之、左候得ハ家財ハ無之もの共ニ付、伺之通所持之品取上、非人手下、

朱書
評議之通濟

取退無盡賴母子講

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

寛保元年極
一取退無盡頭取 幷宿　遠島

一取退無盡札賣　（同元年極）　非人手下（家財取上）

一取退無盡闔振世話役　（同）　江戸拂（家財取上）

一取退無盡いたし候者　（享保元年極）　家財家藏取上候程之過料、家藏無之者は五貫文、或は三貫文過料、

一取退無盡宿并頭取之家主　（享保十年・延享二年極）　身體に應じ過料之上百日手鎖

一同地主　（延享元年・寬保元年極）　屋敷取上

但五ヶ年過、元地主江返被下之外にて致候もの之地主は、三ヶ年過返可被下、（享保十五同十六年極）

附其日稼之者、商先にて當分博弈侗取致候類は、地主并所之者共咎不及、（享保二十年）

一取退無盡宿、兩隣并五人組、　（享保十一年・寬保元年極）　身上に應じ過料

但在方者、組頭、五人組共過料、（元文元年）

一同名主　（寬保元年・延享元年極）　町方在方共過料五貫文

一同町內　（享保十一年・延享元年極）　家並過料三貫文　向側小間に應じ過料

但在方は村高に應じ過料（從前々之例追加）

一取退無盡頭取并宿　（享保十一年・寬保元年極）　銀貳拾枚　訴出候もの同類たりといふ共、其科をゆるされ、御褒美、

但句拾札賣等を訴出、其手筋にて、右のもの共を捕候はゞ、金五兩亦は三兩、御褒美可被下候事、

從前々之例追加
一三笠附、博奕打、取退無盡之儀、町内、名主、五人組等訴出候はゞ、當人并家主は御仕置に申付、地主は地面不及取上、急度叱、宿之兩隣、五人組、名主、一町内之もの不及咎、

但在方も右同斷

享保十六年極追加
一都て、三笠附、博奕打、取退無盡御仕置一件之内、遠島もの五ケ年過、御赦有之節、御免之儀可相伺事、

延享二年
但所拂以上之御仕置もの、博奕一通に候はゞ、右同斷、相伺可申事、

〔享保集成絲綸錄四十七〕享保十六亥年十月

一近き頃、所々、寺々、茶屋、其外ニ而も人集いたし、取退無盡と號し、筋惡敷儀致候由相聞え候、總而ヶ樣之紛敷儀致間敷事ニ候、向後停止申付候、若相背右體之儀仕候者有之ば、其所より可訴出候、隱置、外より相知候はゞ、家主五人組名主迄可為越度候、

右之趣町中可觸知者也

十月

〔享保集成絲綸錄四十七〕元文五申年四月

一町中におゐて、取のき無盡と名附、三笠附同前之儀、所々に有之由相聞不屆候、右令停止候條急度可相守候、若於相背者可為曲事者也、

四月

〔享保集成絲綸錄四十七〕寛保元酉年四月

一取退無盡と號し、三笠博奕同前之儀有之由相聞候付、停止之旨前々相觸候處、今以不相止、近き

頭は、寺社建立講又ハ品々之講と名付、取退無盡いたし候付、右當人共相顯候分ハ召捕へ、此度御仕置申付候、向後右體之儀有之ハ、武士方寺社方町方在方共ニ遂吟味、當人ハ不及申、地主、家主、五人組、名主、一町内之者共迄、三笠博奕同前ニ咎可申付候條、常々心掛ケ吟味いたし疑敷者有之ニおゐては、早々可訴出候

右之通可被相觸候

四月

〔寶暦集成絲綸錄三十〕寛延二巳年五月

三笠附博奕頭取之者、遠島之分、五ヶ年過候はゞ、赦宥之時分可被書出候旨、先年相達候處、取退無盡ニ而御仕置相成候分も、向後右同樣ニ可被相心得候、

五月

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政二戌年四月　御勘定奉行 根岸肥前守掛

松平和泉守殿御差圖

一下總國古澤村新右衛門儀、同村名主太左衛門外五人儀を申立候一件、

榊原隼之助知行下總國豐田郡古澤村名主　甚兵衛

右之者儀困窮ニ付、難取續候迚、六會無盡と名付、御法度相背、取退無盡同樣之儀を企、殊ニ致宿候段、不屆ニ付、存命ニ候得者遠島、

右御仕置附

右取退無盡同樣之儀存付、同樣幷他村之ものを相賴、仕法書幷札を近村々江配り、此もの宅ニ而相催候積ニ而、事は不遂候得共、發頭之ものニ御座候間、取退無盡頭取幷宿遠島之御定ニ引當遠島、

〔御仕置例類集三〕寛政七卯年御渡

町奉行小田切土佐守伺

一頼母子と名附候、無盡吟味取計之儀ニ付評議、

當八月五日御渡被成候田沼淡路守家來内藤角馬儀、頼母子講と名附、無盡取立候一件御仕置之儀評議仕候趣、左之通ニ御座候、

一内藤角馬儀、不如意ニ而難儀致し、頼母子講と名附、無盡取立、講元ニ相成、料理茶屋借請、取退無盡ニ紛敷儀致し候段不屆ニ付、重追放、其外連中之者共も、夫々御咎之儀相伺申候、

此儀寛保元酉年之御書付ニ、取退無盡と號し、三笠博弈同前之儀有之、停止相觸候處、今以不相止、寺社建立講、又ハ品々之講と名附、取退無盡致し候ニ付、顯れ候分ハ御仕置被仰付候間、向後右體之儀有之バ、三笠博弈同前之咎可申付と有之、三笠博弈同前之仕方故、御仕置も同樣被仰付候儀ニ而、兼而連中之極無之、賭金會日を定候迄ニ而、望之ものハ札を買請、會日ニ罷出、當鬮之者江金子相渡、其日限之取計ニ致し候類は、三笠博弈同前故、右之類を取退無盡と相心得罷在候、本文内藤角馬一件吟味書之趣ハ、賭金幷人數之定有之、右取極候人數ニ爲合會日を定置、終會迄之内、連中不殘手取致し候積りニ而當鬮之者ハ、跡賭之代り手取金之内殘金致し、右金子貸附、利足を以跡賭を致し候積ハ、連中之者之申合ニ而、取退無盡とは難申、博弈、三笠附之類とも趣意違ひ可申候、然ル處武家之家來ニ而ハ、縦令頼母子無盡ニ而も取立候儀ハ、致間敷趣意を以、明和元申年評議之上、輕くも御咎附可然旨申上、其通被仰渡候儀も御座候間、前書角馬一件之儀も、一通之頼母子無盡ニ候得バ、角馬其外武家之分ハ押込、町人百姓ハ無御構ものニ候得共、都而無盡頼母子等之儀、名目ハ其通ニ而も、内實之取計ニハ、品々之不正も可有之哉、畢竟連中江損金を掛候趣意ニ候得バ、右ハ取退無盡之方江附候

而も可ㇾ然哉ニ付、此度角馬一件之儀も掛り土佐守儀、取退無盡ニ紛敷と見込吟味詰候儀ニ御座候間、右之趣意を以、一件御仕置之釣合等を見合、評議仕候得ハ、土佐守申上候御仕置附之趣相當ニ奉ㇾ存候間、伺之通被㆓仰渡㆒可ㇾ然哉ニ奉ㇾ存候、然ル處以來無盡頼母子之御仕置之儀、輕重心得之處は、別紙を以相伺申候、

卯十一月

〔御仕置例類集二ノ七〕文化七午年御渡

大坂町奉行伺

一攝州大石村源三郎、取退無盡ニ紛敷儀いたし候一件、

元池田仙九郎當分御預所
當時辻甚太郎當分御預所
攝州兎原郡大石村
藤四郎同居伜
源三郎

右之もの儀講。銀。と唱、人數を極、懸ヶ銀いたし候集高之内ニ而、番數を極、褒美之銀子相渡候ハ、御法度之取。退。無。盡。ニ紛敷儀ニ候處、最初喜兵衛申聞候仕法之内品を附、右講入相望候もの氣請之爲とは乍ㇾ申、閑院宮家士江及㆓應對㆒、右宮之普請料講と唱相企、月々會毎之褒美銀高之内ニ而宮江之普請料爲㆓相納㆒可ㇾ申と及㆓示談㆒、右之次第を以、備後國ニおゐて取組候儀、善左衛門倅左衛門、幷死亡縫之助江相勸、弐二をも閑院宮家士江爲㆓引合㆒、右宮家ゟ支配之御代官江掛合之儀申勸候始末、宮方之權柄を以、御法度を犯可ㇾ申巧之樣相聞、旁不屆ニ候得共、右取組之儀ハ、御代官ニ而聞屆無ㇾ之、未德用等も不㆓取得㆒儀ニ付、居村幷荷擔人之村方を構、大坂三鄕拂、

此儀寛政四子年、曲淵甲斐守御勘定奉行勤役之節、手限伺之上、御仕置申付候、野州東新井村百姓摠七儀、彥五郎任㆓申旨㆒、伊勢代參講と名付、講元ニ成、宅ニ而取退無盡同然之儀いたし候段不屆ニ付、中追放申付候例ニ見合、今般之源三郎ハ、宮家之名目を以相催候ハヽ、連入之ものも丈

夫に存可相整と取拵候儀も有之候間事ハ不遂候得共例同様中追放

（朱書）評議之通済

〔天保集成絲綸錄百四〕文化九申年九月

市中ニ而頼母子講と號し親類又ハ懇意之もの申合達變之節且ハ相續方之爲取計候ハ全く之頼母子ニ而跡掛金等も有之如何之筋も無之間右之類ハ是迄も差留候儀ハ無之處元四日市町書兵衞店甚兵衞横山町貳丁目與兵衞店友太郎柴井町喜兵衞店六兵衞淺草寺中日音院地借源八店寅次郎同店武兵衞右之者共儀融通講と相唱候無盡相催仕法帳面ヲ以連中申進メ追々加入人等相増往々大金引入候樣相成候はゝ自然と御法度之筋ニも可相成間心得違無之此上新規之企等決而不致樣得と申含其外町方江も自今右體新規之儀不致樣可申含候

申九月

〔御仕置例類集一ノ六〕文政二卯年御渡

火附盜賊改長井五右衞門伺

一常州下館下町平十郎三笠附ニ似寄候賭事之會元相企候一件

常州眞壁郡下館下町
百姓　平十郎

右之もの儀御法度相背大頼母子講と唱候賭事之會元いたし右番附紙を拵長右衞門庄右衞門六兵衞與吉其外名住所不存もの江相渡世話料差遣候對談ニ而爲取捌賭錢壹貫五百文ニ而金三百兩相渡候割合ニいたし殘金德用可致と相企候始末三笠附ニ似寄候仕方不屆ニ付遠島

此儀三笠附點者同金元幷宿遠島と有之御定ニ准し伺之通遠島

（朱書）評議之通り済

〔御仕置例類集一ノ六〕文政二卯年御渡

富突
隱富

火附盜賊改長井五右衛門伺

一常州下館下町平十郎三笠附ニ似寄候賭事之會元相企候一件

野州河内郡宇都宮宿
百姓　長右衛門
外貳人

右之もの共儀、平十郎致會元候、大類母子講と唱、賭事之番附紙取捌候樣申聞候迚、三笠附ニ似寄候仕方ニ有之處、同意いたし、御法度相背、右番附紙所々持歩行爲賭、世話料貰請候對談ニ而、未世話料不受取候得共、前書之始末一同不埒ニ付、家財取上、非人手下、

此儀三笠附句拾家財取上非人手下と有之御定ニ准じ、伺之通家財取上、非人手下、

評議之通り濟　一

〔埋草　五〕寛永十二年二月二日よりといへる落髮千句あり、牛井卜養作なり、その中に、

何札

富と貴とをばひ取がちやけふの春、といへる句あり、此賦もの富の札と付たるならんか、さらば寛永より富突といふ事ありとしるべし、

〔一話一言　十五〕講習餘錄（中略）富突

講習餘錄　寶永丙戌（○三年）晩秋二十六日夜、絅齋識の序あり、　九月廿六日より十二月二十一日まで、門人に會して講習せる語を筆記せり、（○中略）

頃日世俗ニトミヲツクト云テ、三錢五錢金銀ヲ大分ニモテハコビテ、一處ニアツメ、其内ニテ次第次第ノ高下トク分ヲ立テ、少々三匁ノ銀ニテ、一人ニテ三十兩五十兩取來ルモノアリ、バクチヲウチタルヨリ、ヌスミヲスルヨリハヤキ理ナル故、前後ヲカヘリミズモチハコブ、勿論世俗ノスル事ナレバ云ニ足ラネドモ、サレドモ財用ノ事ハ、天下ノ心ナレバ、コレラデモ皆國家ノ大事ト云モノニテアリ、頃日モソレハナニホド取テ來リタル、ソレハ外デ大分取タル物語、上下サワ

ギ立テ、ツカミトルヤウニナル、メン〳〵利欲ノ心ニナリ、吾私欲ヲワスレ、家業ヲシロナシ、メンメン其利ヲ得ント欲スル、先利ヲ得ルコトハサシヲキ、第一ソコネバ、ワガ私欲ヲツトメ、身ヲツツシミテスグル心ガウカレ心ニナリ、心ウワツキ、モハヤ他道ノタマカニ身ヲスルコトシトムナキキウニ、上下ノ心ソマツニナルベキコト、第一根本ノソコネ也、ヤガテニ、カヤウノ義御制禁モアルカ、ナニホドロ論、云ヒゴト等アリテ、事ヤマバ、其アトニ失ヒタルモノ大分利ヲトリタル者共ニ、此次ハナニトシテツカミトルコトアルベキト、面々ニイラザルコトニ智慧ツキラレバクチウタヌモノモ、バクチウチタキ心ニナリ、ヲヤノモノヌスマヌモノモ、ヌスミタキヤウニナルコト眼前也、コレ風俗根ノソコネル大病ナリ、サテサシアタリテノ利害ヲ以テイハヾ、タトヘバ一人シテ五匁ツヽミチイキ六千人ノ人ヲヨセルト、銀高ガ三十貫目也、一番ニ五十両トルヨリ、七十番マデノ次第ノツモリヲキクト、大ムネ十貫目ワケタル體也、ソノ餘十八九貫目ハ、サキノアツムル處ニヲキキタリテ、此方ヘカヘラヌコト、ミヘタルトヲリ也、只其内十貫目餘ハ、此方ヘモドルハ幾人ノ手ヘワタルゾト云ト、一ヨリ七十番マデナレバ、ヨフ〳〵七十人前ノ利トナル也、サアレバノコリ五千九百三十人ノ五匁ヅヽノ銀ハ、皆アノ方ヘステヽ、クルト云モノナリ、

○中略バクエキハ天下ノ御制禁、タノモシハ京都ナドハ御制禁也、

〔正寶事錄 八〕元祿五壬申年

覺

一比日町中にてとみつき講と名付、或ハ百人講と申、大勢人集をいたし、博弈がましき儀仕由相聞、不屆ニ候、向後左様之儀一切仕間敷候、若相背博弈に似寄たる儀仕者於有之ハ、本人ハ不及申、名主家主迄曲事ニ可申付者也、

申五月

右は五月十日御觸、町中連判、

〔正寶事錄 十一〕元祿十七甲申年　三月晦日、寶永と改元、

一頃日町方ニおゐてとみ付と名付博弈がましき義致候由相聞候、左樣之類停止之旨度々相觸候所、不屆之至、右之族急度可召捕候間、其旨早々町中可相觸候、以上、

正月

右之通被仰付候間、町中家持ハ不及申借屋店借召仕等迄、不殘可被相觸候、以上、

正月五日　町年寄三人

〔正寶事錄 十二〕覺

一前方度々相觸候通、町方ニ而富突、又ハ大黑つき、或ハ俳諧前句附、三笠付抔名付ケ、博弈ケ間敷義堅致間敷候、同心相廻し、右之族有之ば召捕させ、當人ハ曲事ニ申付、其所之家主五人組、名主は可爲越度候間、此旨町中急度可相觸候、以上、

十二月〇正德五年晦日

右は同日御觸

〔天明集成絲綸錄 四十八〕明和四亥年八月

博弈三笠附、取退無盡は勿論、富突抔と名附、博弈ケ間敷儀致間敷段、從前々相觸候處、忘却致候者其有之、中國筋ニ而ハ第一と唱、三笠抔ニ紛敷會合いたし候趣抔相聞候、御料所村々之儀ハ御代官御預り所役人心掛相糺召捕、嚴敷吟味致候間、私領ニ而も村役人江急度申付置、勿論搦違ハ不苦候間、其筋之役人心掛、疑敷者ハ召捕、吟味之上、一領一地頭限り之儀ハ、公儀御仕置ニ准じ、自分仕置申付、他所引合有之候はゞ可被相伺候、

右之通、領主地頭江可被相觸候、

八月

○按ズルニ、第一トハ下條引ク所ノ草茅危言ニ見エタル第一謙德ノ略ナラン、

〔天明集成絲綸錄四十九〕安永六酉年三月

富突抔と名附、博弈ケ間敷儀致間敷旨、前々相觸候處、福引、福富、其外品々名目を附、富突致、興行段相聞候、右體紛敷儀ハ、以來急度相止候樣、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭幷寺領社領有之寺社等不洩樣、村々江觸置候樣可致候、

右之通相觸候間、可被得其意候、

三月

〔天明集成絲綸錄四十九〕天明三卯年十一月

三奉行江

大和國村々ニ而、けんどくと唱、富ニ似寄候儀相企、村々之者致加入、張ニ金銭を費し、自農業も怠、一統困窮之基ニ可相成趣相聞候、前々ゟ寺社等願之上被仰付、富之儀ハ格別、其外右體不埒成儀、一切致間敷事候間、以來村役人共ゟ厳敷致吟味、右體之儀頭取候ものハ勿論、携り候者共有之候はゞ、其所之奉行所、其外御料ハ御代官、御預り所、私領ハ領主地頭江早々可申出候、若隱し置、外ゟ於相顯は、可爲曲事候、

右之趣、京大坂町奉行、幷伏見奈良堺奉行、其外山城、大和、河内、和泉、攝津五ケ國、御料ハ御代官御預り所、私領ハ領主地頭ゟ可被相觸候、

十一月

右之通可被相觸候

○按ズルニ、ケントクハ即チ謙德ニテ、富ノコトナリ、又見德ト書キタルモアリ、

〔御仕置例類集二ノ七〕文化四卯年御渡

御勘定奉行松平兵庫頭伺

一無宿長兵衛品々惡事いたし候一件

田口五郎左衛門御代官所
飛州大野郡高山壹之町村雲龍寺借屋
久左衛門
外壹人
次郎作借屋
藤十郎

右之もの共儀、隱富興行可致旨、久左衛門ハ發言、傳左衛門藤十郎ハ同意いたし、村内又作兵助宅ニおゐて興行いたし、殊ニ久左衛門、傳左衛門ハ、村内甚助、善助宅ニ而、廻り筒鬮博弈度々いたし候始末、一同不屆ニ付、久左衛門、傳左衛門ハ中追放、藤十郎ハ所拂、

此儀久左衛門傳左衛門ハ隱富興行いたし候不屆も有之候得共、廻り筒鬮博弈度々いたし候方重々不屆ニ付、廻り筒ニ而三度以上博弈打候もの中追放と有之御定ニ見合伺之通中追放、藤十郎ハ兵庫頭御仕置附ニ申上候前書長兵衛御仕置江引當候例之源左衛門ニ見合、是又伺之通所拂、

朱書 評議之通濟

長兵衛御仕置附ニ兵庫頭申上候例

天明四辰年評議ニ御下ケ被成候、大坂町奉行相伺候、播州美嚢郡下和田村年寄源左衛門儀、富興行之儀ハ難成段、兼而觸渡も有之候處、乍存利兵衛任勸、德用ニ拘、隱富を企、講元に相成興行いたし、乍纔德用配分いたし候始末、年寄役相勤候身分ニ而、旁不屆ニ御座候間、德用銀取上所拂と相伺評議之上伺之通と申上、其通相濟候、

〔御仕置例類集　ノ六〕御咎附ニ伊勢守申上候例

寺社富突

文化十四丑年、土屋讃岐守御勘定奉行之節、伺之上御咎申付候、上州勢多郡德川鄉百姓六七歲、粂助、勇助儀、村內永德寺本堂爲修復之ニ候迚、彌助申勸ニ致同意、賴母子講之名目ヲ以、隱富興行致候節、講元ニ加リ致世話、都合金貳分貳朱ヅヽ銘々貰受候段、一同不埒ニ付、右金取上、三人共三十日手鎖、

〔日次紀事 正月〕初七日、攝州箕面辨財天女（今夜諸人輳集、堂上突富闘、其法天女前置大櫃三箇、標第一第二第三也、其蓋上開小穴、今夕寺僧積置數千枚木札、參詣人使寺僧記己名於札上、而自穴入櫃內、或入一札、又二札及三札、共入三箇櫃各納了、大衆轉、而後寺僧以長錐自穴突之、數千枚中初度中一枚者取之、中一櫃之札稱一富、二三如是其次第[illegible]使錐中札無己名者不取之、然則得富如札之次第云、近世勝尾寺辨財天女堂亦有斯義、洛陽東山靈山天女堂前亦執行、〇又見嘉良喜隨筆、及滑稽雜談、）

〔和漢三才圖會 七十四 攝津〕箕面山瀧安寺　在箕面

每正月七日、於辨才天堂、數萬小木札書各姓名、納櫃、修法讀經畢、以錐突取於櫃孔中之者必得福、第二第三、亦然、謂之富札。

〔正享問答〕流行三笠付と言て、博弈同然の事有て、天下一同に堅き御停止なれど、寺より建立の爲とて願出れば、佛法の事は各別とにや、ゆるして富と言て三笠と同じき事を成さしむる事も有、是皆民に利心をすゝむる也、如斯にして博弈三笠を制したりとて止べきやうなし、只能根本に心を付べき事也、

〔續正寶事錄〕享保十五年四月廿一日、町年寄ゟ年番名主へ、

仁和寺御門跡御屋形向御修復爲助力、御當地於護國寺、三ヶ年之間、正五九月、毘沙門天富突之儀御願之處相濟、來月廿三日ゟ始候之間、町中右之趣可相心得候、此旨各方ゟ町々不殘樣可被申達候、以上、

戌四月

〔刺牌記〕紫芝園之西北三里、有護國寺、歲庚戌（〇享保十五年）九月二十三日、余（〇太宰純）閒居讀書、聞門外人聲

護詩、問於家人曰何居、家人曰、護國寺有刺牌戲、都人赴之也已、余曰然、吾固聞之、夫刺牌者、用木爲小牌二十餘萬、書戲者姓名居止、設大函五以藏之、欲戲者、先納銅錢十二文於場主、而後得投入牌一枚於函中、函亦以木爲之、方數尺、高稱是、蓋之中央有孔、方數寸、掩以木版、版之中央、又有小圓孔、可容錐柄、錐長三分、令可以刺牌一枚、而無餘、戲者咸集、投牌每函四萬餘、則納錢凡二百五十萬矣、於是蓋函、浮屠執錐、由木版圓孔直下刺函中、覺有所中、而引上錐、錐柄帶木版、出所刺牌於蓋之方孔、一人從旁視其牌、審其題名、乃呼曰、某處某甲、是人乃得賞錢十萬、〇卽百貫又刺一函、如初、每函一刺、五刺所出賞錢共五十萬、所留二百餘萬、場主收之、此其大略也、平安有仁和寺、皇子某法親王所主宮寺也、享保新政、凡海內神廟佛宇係官修造者、一切止其修造、於是仁和寺壞、而官不爲修之、寺僧因請開刺牌戲場於東都、收牌錢以葺本寺、朝廷聽其所請、寺僧乃奉毗沙門天王像於護國寺、以正五九月祭之、因爲此戲云、

〔江戸繁昌記　初篇〕千人會

札楮二牌、札爲原牌、楮爲影牌、其數一千、一楮値若干錢、豫刻日月、四散鬻之、醵若干金、至期盛原牌于匣中、匣上有孔、錐刺出之、百番爲額、以原照影、以一大醵付之於第一番者、餘醵分賦九十九番、各有差、國語名之曰富。蓋云乞食人家富落來、嗟夫天道畢竟以有餘補不足、貧人得之暴富、蓋此其所以名、予淺學未識漢土亦有此事、而何如名之、且名曰千人會、然聞近來札數倍蓰、處處比前細密殊極、自非貫習者、固不易辨識、則畢竟此名不當此名、

谷中感應寺、目黑泰叡山、湯島菅公廟、謂之都下三富、本日殿上先安一匣于兩楹間、階下施閑、不許闌入、人群漸湧、喧嘩洶々、撿點使至、警衛備姦、既而幹人並起、倒匣鼓底、點牌以納焉、擂鼓報警、僧徒誦般若經、蓋祓之也、乃一人出、執錐刷匣、未畢喧嘩寂矣、大風暴止、觀者眼張胸悸、而第一牌早在吏人之手、颺言其目、刺至三牌、風復漸起、濤還稍湧、且刺且呼、百番而止、誰知兒郎贖女郎之約、所恃在懷中一牌、

萬人肚裏之算、湊聚於一人之手、南阮暴富、北阮益貧、十年備作之傭、一旦享錦歸之榮、昨日典錢之婦、今日戴瑁瑇之飾、錢如泉、金如塊、既庶矣、富之哉、三富之外、今乃倍至數十所云、咄々怪事、近年有追昏狂奔叫過者、如呼如叱、予初不解其爲何物、既而聞之、是報場中今日所刺第一牌之目也、一字四錢、標之爲生、其狂奔者以速報爭先耳、○中略頭者入市見肆頭掛數箇招牌、題曰松竹梅、曰花鳥風月、曰何、曰何、中有智仁勇三字、問之亦千人會標識耳、予慨然嘆曰、三德之義大矣也哉、蓋逆億今日所刺目何、而厭中者智也、典衣賣劍、不算明日生計如何者勇也、不中自悔不怨天者仁也、然未知予說穩當不、

〔一話一言四十〕神田旅籠町名主中村氏書留抄書

享保十八丑年三月十三日喜多村

一仁和寺御門跡富突、只今迄護國寺に候處、丑五月より申正月迄、深川永代寺にて興行之事、

〔大成令四十二寺社〕享保十八丑年三月　寺社町

申渡　　仁和寺御門跡

右富突、只今迄於護國寺正五九月廿三日致興行候得共、當年五月より申年正月迄、深川永代寺境内ニ而、只今之通可致興行候、

三月

〔一話一言四十〕神田旅籠町名主中村氏書留抄書

六月十〇享保八年十七日廻狀

一高田毘沙門富突、永々二月、六月、十月廿八日、十一月廿五日、ならや、

一谷中感應寺富突、來寅年より三年、

〔大成令四十二寺社〕享保二十卯年七月　寺社町

申渡

一南都興福寺富、來ル廿四日致興行候、依之御當地町中ヱ相賦り候富札、町々家主店借り裏居迄、志有之者ヱ行渡候樣ニ致度旨、興福寺役人相願候、

七月

〔寶暦現來集二十〕文政三四年の比より神社佛閣願に任せ、富興行御免有之、二三十軒も富場所有之、古へハ谷中感應寺一ヶ所なり、其後目黑瀧泉寺、湯島天神、此三ヶ所ばかり御免あり、其外は停止之樣有之處、今ハ處々に有之、此三軒ハ、札數千枚にて、一ノ富百兩取、右ニ准じ留までハ金高減じ、札料も一枚一分なり、今流行の富ハ、札數も二万三万にて、直段七匁五分、中リ鬮一ノ富百兩なれば、留ハ三百兩など、、末の中り程金高上る、是は留の札迄札を賣る巧みと見えたり、扨又一ノ富何番と出ると、直にお囃シ〳〵と云て、江戸中觸歩行人あり、出番聞く人より、四文ヅヽ取て觸ありくなり、是等昔ハなきことなるに、さま〳〵珍しきこと共出來るものなり、

〔寬天見聞記〕谷中感應寺、目黑不動、湯島天神にて富興行あり、追々に江戸中の諸社諸堂にて興行はじまり、一月に廿四五會ほどありて、〇中略場所の大略は谷中、目黑、湯島、淺草八幡、同觀音、同三社、同念佛堂、同大神宮、同閻魔堂、同團子天王、同第六天、本所回向院、深川靈岩寺、新川大神宮、芝神明、愛宕山、西久保八幡、麻布東福寺、本銀町白旗稻荷、杉森稻荷、下谷六阿彌陀、白山權現、護國寺、根津權現、平川天神、茅場町藥師、品川天王、同庚申堂、これらを場所とす、月並二三會の所もあり、四季に行ふもあり、札の代銀、當り金の次第不同、五十兩より千兩までいろ〳〵仕方あり、會毎に寺社御奉行所より撿使來りて立會ことなり、此撿使の奴僕地中川前抔へ莚を敷て、富見物の者どもと博弈する事、幾席となく、見德賣、札賣、お囃賣、札買の見物、第附したる者の見物、群集する事おびたゞし、

此さかりの時は、文政の末、天保の初なり、

○按ズルニ、初メハ其口數モ多カラザリシガ、後ニハ其數次第ニ增シテ、天保五年ニ至リテハ七十餘口アリシト云フ、

〔富突を見るの記〕カク世ニ行ハルヽ、富ト云モノ見マク思ヒテ、霜月十日餘リ三ノ日(文政四年ナリ)ソラモ晴レ駿ニテ、小春トモイハン日ナレバ、湯島ノ御社サシテ至リヌルニ、御前ニ富トイフ文字カキタル箱ヲスヱタリ、サテ此ニモ彼ニモ人ノ群キテ、サヽヤキアヘリ、ソコヽト見ルニ、錢打ヨレル桃ノ紙ヒラニ數カキタルヲ手シテイヘラク、二分ノ黃金ニアシ三筋ヨリハ引ベウモアラズ、來ル月ハ二分ト半バニナリヌ、年ノ暮ニハ金ニ翼オヒ出ヌナドノヽメキアヘリ、又カタヘニハ財布ノ中ヨリ兩餘トウデ札トカユルモアリ、或ハコヽハ代リ高シ、杉森コソ二朱トイフ錢ニテ、百ノ金ニカユメリナド云ヒアリクヲ聞クモ、千五百バカリノ札ノ中ニ、ハヤ己レ中リ得タラン心ニヤト思フモヲカシ、シバシシテ鼓ノ聲ヒヾキケレバ、アタリサヾメキテ御社ノ御前ニ人人ツドヒヌ、サテ鼓ノ聲カズ〳〵聞ユ、御社ノ上ニハ、上下着タルモノ、彼方コナタ走リメグリナドシテ、ヤヽアリテ內ノ陣ニテ法師ノコヽラ出來テ、轉讀ノ大般若經アリ、事ヲハリテ寺社與力トカイヘル人ノイカメシキガ、從者アマタ從ヒテ御社ノ上クラニ着ヌ、次ニ別當ノ喜見院向ヒノ右ニツク、其傍ニ法師四人五人、袴ノミ着タルモノ二人居レリ、サテ右ノミハシノ本ニ名主ト呼テ、町ノコト司ルモノムレキ、其アタリニ火ノ事ノヨソホヒシタルモノ鐵棒ウチツキテ守リ居タリ、上下着タルモノ、木札ノ箱トウデヽ打カゾヘ、箕ニテ箱ノ中ニ入ル、其箱ヲ袴キタルモノヽクツガヘシ、フリ傾ケテ据タリ、其トキ法師ヒトリ錐モテ箱ノ穴アル處ヨリツキ入レ上ルヲ、又獨リノ法師ウヤ〳〵シク諸手ヲカケテ拔トリ、高ラカニ一ノ富五百三番ト呼ベリ、次ニ又同ジク錐モテツクヲ、上下着タルモノヽ取テ、二ノ富シカ〳〵ト呼ブ、ソレヨリ五十番マデ事同

ジ、サレド十番ゴトニ一タビ箱ハクツガヘシフリ傾ケテスエヌ、後一枚ヲツキドメト云ヘリ、是ニテ事ハツ、社ノ人々モ皆退出ス、打守リタル人々モコヽカシコ立去リ、物賣ルアキ人モ見世棚トリヲサメヌレバ、アタリイトサウ〴〵シク、只オトナフモノハ、松ノ梢ノ風ノミニナンアリケル、

〔舊記拾要集六〕明和七寅年七月御用覺帳書拔

一同月廿五日、甲斐守殿御懸リ、惣錄若村檢校相願、本所一ツ目辨天於拜殿、富興行致候ニ付、右見分出役之覺、

一甲斐守殿御番所江出役與力雙方兩人被召呼被仰渡候ハ、惣錄若村檢校本所一ツ目辨天於拜殿、富興行致候ニ付、罷越見分致申上候樣被仰渡、尤人立有之、込合候儀も可有之間、喧嘩口論無之樣取計、相勤候樣被仰渡、御書付ハ御渡無之、出役勤方心得書付、年番後藤三郎兵衞ニ御渡被成置候間、申談相勤候樣被仰渡候ニ付、三郎兵衞江致對談、書付請取、幷年番ゟ惣錄江相尋候趣之書付寫取、出役致候事、

辨才天於神前富突候節、罷出候世話役共名前、

辨天堂庵主 卽明庵

此もの富札突申候

惣錄 若村檢校悴 若村次郎右衞門〇以下人名略

向方年番後藤三郎兵衞方ゟ請取候、出役心得之書付、

一富札集高、初日計可承候事、

一富札致候節、幷富突之節、其席ニ罷在可致見分事、

一富當り候もの名前、不及承、札番付計可承事、

一富札ニ當り候もの江金子相渡候節、不及立合候事、

甲斐守於御番所後藤三郎兵衛
惣錄若村檢校江相尋候書付寫
惣錄若村檢校江御尋候趣書付

惣錄若村檢校江相尋候趣

一富突場所之儀、辨天堂之内、拜殿ニ富箱差置、富札爲突申候、
一見分出役差置候場所ハ、拜殿之次、内陣之方ニ差置候積ニ相心得罷在候、右之場所二間四方之場所ニ御座候、
一富札突候ものハ、辨天堂之脇ニ罷在候、庵主卽明庵と申出家突申候、
一此度之富興行、皆坐之もの計ニ御座候故、富札當り候ものへハ、惣錄於役所金子可相渡と兼而皆坐江申渡置候、
一初日始終共、富突之刻限ハ、九時興行と、兼而皆座江申渡置候、
一出役與力着服、羽織野袴之事、
一此方御番所御屆初日ニ付見分之趣書加、幷惣錄若村檢校方ゟ差出候富札一枚同番附一枚、御屆書ニ相添、下役年寄同心を以、御屆申上御懸甲斐守殿御番所江ハ、出役兩人共罷出、直御屆申上候事、

此方見分出役　下村彌助
下役年寄同心　濱田壽八
向方　松浦彌次右衛門
下役年寄同心　神田武八

一富興行之節、人立有之節之爲、町廻同心雙方四人、甲斐守殿於御番所、後藤三郎兵衛申渡有之候

事、

一富興行刻限、晝九ツ時之由ニ付、四時場所致參着候處、晝時頃德鐮ゟ案內有之ニ付、辨才天神前江罷越、富箱開札數富突候キリ相改候上、爲突申候、右之節德鐮若村檢校、其外相詰候檢校も、右席江罷出候事、

○按ズルニ、會席ニハ必ズ與力臨席スルナリ、

〔寺社奉行舊記〕御免勸化取計規矩幷申渡帳

寺社勸化願之儀ニ付、御書取之趣、評議仕申上候書付、〇中略

去ル戊年、〇寛政二年富突減方之儀、松平越中守殿より、追々被仰聞、取調申上、寬保寶曆之被仰出も有之候處、年久鋪儀ニ而、不相辨向も有之哉、近來御修復亦は勸化富興行等之願數多有之、就中富之儀は箇所多ニ相成、世上之風儀ニも拘候間、追々被減候筈ニ候、實々無據子細有之、願出候ハヾ、品ニ寄勸化開帳等は、御免も可有之候得共、可成丈少破之節修復を加、公儀江もたれざる樣ニ可致事專一ニ候條、可存其旨段、諸寺社江之被仰出御書付、同十二月中御渡被成、寺社一統江相觸、尤富之儀、興行中之向は、一ヶ年三度之積申渡、願相濟興行未致向は、一旦御免有之候事故、富興行之年序ニ至リ候ハヾ、勸化或は開帳等之內可被仰付候間、勝手次第可願出旨申渡、願書請取置候迄之向は、願書差戾候儀ニ御座候、〇下略

〔草茅危言〕五寺社之富之事

一富突場ノコト、他國ニテハ往々興行アリト聞及タレドモ、京大坂ノ地ハ巳前ヨリ堅キ官禁ナルニ、イカナル譯ニヤ、此十數年頻リニ官許ヲ得テ、方々ノ寺社ノ名目ヲ設テ、公然トシテ場ヲ開キ、富ノ札ヲ賣モノ街衢ニ相望ミテ、サテ〳〵見苦シキコト也、從來コノ事ニカヽリ居ル奸民空手モ夥キコトナリ、コレハ僥倖ノ大利ヲ以テ末々ノ細民ヲ煽惑シ、壓ノ恒產ヲ傾覆セ

シメ、媼婆婦女ノ微囊ヲ罄盡シ、人ノ心ヲ浮躁輕妄ナラシムルノ害擧テ云ベカラズ、又ハ第一。謙德ナド名付テ、諸國ノ在々ヲ回リテ渡世ヲナシ、貧民ヲ剝倒スモノ四方ニ遍子シ、是ヲ嚴ニ官禁ヲ加ヘテ、天下一統ニ停止アリタキモノナリ、且著ハシテ永制トシテ、後世マデ再ビ起ラザルヤウニコレ有タキ者カ、〇下略

〇按ズルニ、此書ハ中井積善ノ著ニシテ、之ヲ執政松平定信ニ上リシハ、寛政元年ナリ、

〔德川禁令考四十二富突〕寛政六寅年九月

松平肥前守より脇坂淡路守江問合挨拶

領分寺院江富興行差免之事

於領內富差免候而も不苦哉

書面富之儀、度々被仰出も有之、容易ニ御聞屆難成筋と存候、

〔南撰要類集五ノ八十九〕丑十四年〇文化四月五日、下野守殿江御直備後守上ル、

谷中感應寺外二ヶ寺富興行之儀ニ付、申上候書付、

永田備後守

岩瀨加賀守

博弈之儀、近來惣體相弛候趣、入御聽、町奉行幷火付盜賊改組之もの、繁々相廻り、博弈は勿論、隱富等紛敷諸勝負事、嚴敷遂穿鑿、召捕候樣、去子十二月九日、以御書付被仰渡候ニ付、組同心共江申付、追々召捕、御仕置申付候、然處谷中感應寺、湯島喜見院、目黑瀧泉寺、三ヶ寺富之出番を元に致し、影富又ハ第付、其外品々名目を付、專賭之勝負事致シ候もの共召捕候處、右之內ニハ、御家人又ハ御旗本抔、會元致候も有之、勿論度々御觸も有之、其度々町觸仕候處、前書三ヶ寺御免之富ニ習ひ、少分之賭事致候故、格別之御咎も有之間敷哉と、下賤之もの共ハ心得違致シ候哉、兎角相止不申、尤

三笠付、棒引之類ハ、近頃無御座候、外博弈之儀ハ、何も人集致シ、自ら人目にも掛り候事故、身分を
存候もの、先ハ手出しも不仕候處、此節之影富又ハ箒付之類ハ、會元有之、三笠付句拾ひ同樣ニ而、
賣子之者共持步行、其者と相對にて付候もの、心次第賭錢之多少ニ不依爲付、其日稼之輕き商人
共、商ひ先、又ハ途中ニ而も致易き仕法ニ致候故、下賤之女子共ニ至る迄、賭事致候樣相成、一體風
儀ニも拘り候間、此上組同心共江も精々申付、召捕候樣可仕候、然共畢竟三ヶ寺にて御免之富興
行有之候故、是迄度々御觸も有之候處相背、下賤之もの共心得違いたし、或ハ御家人等迄携り、御
仕置ニも相成候間、御差支之儀も無御座候ハヽ、右三ヶ寺之富、以來被成御差止候儀ハ相成間敷
候哉、左候へば前書隱富箒付之類ハ、自ら相止可申と奉存候、右は市中一統之風儀にも拘り候儀
ニ付、先御內慮奉伺候、以上、

丑四月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　永田備後守
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　岩瀨加賀守

〔寺社奉行舊記〕文政三辰年八月十五日、出羽守殿直伯耆守殿江御渡候御書、
宮門跡を始、御由緒之有之寺社富突御免之儀ニ付、存寄之趣被申聞候、是迄御手當筋之儀、品々願
出候向不少、其儘被差置候而は、往々公儀御厄介筋ニも可相成事ニ候間、何と歟主法も附不申候
而は相成間敷候、富突勸化願等之儀、是迄も品々沿革有之候得ば、いづれ後弊少樣規矩を立申度
事ニ候、此上富突勸化願等、是迄より手廣ニ被差免方之程合、ヶ所之多少、年限之長短等、如何程之
議定ニ而可然哉、何も評議を盡し、了簡之趣可被申聞候事、
〔寺社奉行舊記〕富突勸化之儀ニ付御書取之趣、評議仕申上候書付、
　書面評議仕候通可取計旨被仰聞、承知仕候、　　　　　　　　　　　松平右近將監
巳（文政四年）三月廿四日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　寺社奉行

宮門跡方を始、御由緒有之寺社、是迄御手當筋之儀品々願出候向も不少、其儘被差置候而は、往々公儀御厄介筋ニも可相成事ニ付、何と歟御主法も附不申候而は相成間鋪、富突勸化願等之儀、是迄品々沿革有之候得ば、いづれ後弊少様規矩を立、此上富突勸化願等、是迄より手廣ニ被差免方之程合、ヶ所之多少、年限之長短等、如何程之議定ニ而可然哉、評議を盡し了簡之趣可申上旨、御書取を以被仰聞候、

此儀取調候處、富突勸化之儀ニ付而は、御趣意も有之、追々改革被仰出候儀ニ候得共、宮門跡方を始、御由緒有之寺社等困窮之餘、不得止事、公儀御厄介筋之儀申出候様成行、際限も無之儀ニ付、富突等是迄より手廣ニ被差免候ハヾ、おのづから御厄介筋も相減可申、左候迚、以前之通相成候而は、又々後弊を生じ可申、御書取之趣御尤至極ニ奉存候間、得と評議仕候趣左之通ニ御座候、

一宮門跡方、幷大寺大社之分、

富突一之富、百兩迄、

一二十二社諸國一宮、幷御由緒厚き寺社之分、

富突一之富、五拾兩迄、

一御由緒薄き寺社之分

富突一之富、三拾兩迄、

右之通取極置、願出候節、糺之上相伺可申、右之外ニも格別之寺格或ハ舊跡ニ候歟、又は寺格舊跡等ニ無之候とも、無據譯柄等有之、願出候ハヾ、其節ニ勘辨仕相伺候様可仕候事、

一御由緒之儀は、寛政十一未年、脇坂中務大輔、寺社奉行勤役中勸化之儀ニ付、御書取之趣評議仕申上候節、御渡之例よりも御由緒有之寺社を厚き分と相心得、右例以下は薄き分と相心得取

許可申事、

一富突場所之儀、江戶、京、大坂、三ヶ所之外興行不相成候事、

一同年限之儀は、困窮之厚薄ニ寄、五ヶ年、七ヶ年限リ、格別譯立無據願ニ候ハヾ、品ニ寄十ヶ年迄は御免有之候事、

但年延願は、決而不相成候事、

一富突十ヶ所迄は御免之事

但谷中感應寺富突之儀は、十ヶ所之外と相心得可申事、〇中略

右之通規矩を定置、取計候ハヾ、是迄より手廣ニ相成、宮門跡方を始、御由緒有之寺社等迄取續出來、おのづから御厄介筋も相減可申、後弊を生じ候儀も有御座間鋪哉と奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被成候御書取一通、返上仕候、

十二月

〔德川禁令考四十二 富突〕天保十三寅年二月 越前守殿〇水野御下ケ

富突幷勸化之儀ニ付評議仕候趣申上候書付

書面富之儀、當時興行致し居候共、此上之年限等ニ無貪着、不殘差留候樣可仕候、且又勸化願之儀も、追而御差圖御座候間、夫迄ハ是迄之通可心得旨被仰聞承知仕候、

寅二月廿六日

松平伊賀守

寺社奉行

尾州熱田大宮司千秋駿河富興行願之儀、戶田日向守方ニ而取調之上、先達相伺候處、富興行之儀、今般享保寬政之御政事向ニ相復候樣厚被仰出之御趣意ニ基、突富一體之御處置、私共一同相談勘辨之上、別段評議致し可申上旨以御書取被仰聞候、

此儀突富興行之儀ハ、寬政度松平越中守殿御勤役中、以御書取被仰聞、江戶京大坂ニ而都合三

箇所之外ハ、興行不相成規矩ニ有之處、文政四巳年宮門跡方を始、御由緒有之寺社、御手當之儀品々願出、公儀御厄介筋ニも相成候ニ付、突富興行手廣ニ御免被仰出、尚同八酉年増箇所并三箇月溜仕法替ニ相成、一ヶ月興行ハ拾五口ニ候得共、惣體之口數四拾五口迄ハ差免候積伺濟ニ而、谷中天王寺、牛込寶泉寺并追々出格別段之廉を以御免被仰出候、日光准后御願、日光東叡兩山御救、増上寺御手當富、仁和寺宮、紀州熊野三山、尾州熱田、攝州四天王寺、太秦安養寺等富之儀ハ、右惣數之外ニ候處、去ル午年御沙汰之次第も有之、先役共一同評議之上、追々寛政度之元濟ニ復し候積を以、其砌興行致し居、并御免申渡未興行不致分共、夫々年限通興行爲致、來ル辰年迄ニ而、一同年限濟切候間、其以後御免無之積取計、來辰年ニ至リ其節之摸樣を以、時勢相當之御所置ニ御定有之候方事實を得可申哉之旨申上、去未年六月中、其通可取計旨被仰聞、當時右改革年限中ニ付、其後新規御免之儀ハ不申上、私共迄願出候分ハ夫々手限ニ而願書差戻候間、先達而御免ニ相成候分、前書午年取調之節ハ、都合七十三口有之候得共、次第ニ相減、當時興行中之分、別廉を加、江戸京大坂にて都合拾三箇所ならでは無之、右之分も來ル辰年迄ニハ不殘濟切候仕法ニ付、尾州熱田社興行願之儀も、夫々取調之上相伺候得共、今般御沙汰之趣、御尤奉存候間、猶勘辨評議仕候處、突當之儀、一體世上之風俗ニも相拘、素々可然筋ニも無之、享保之頃一旦停止をも被仰出候趣ニ候得共、御由緒之寺社、又ハ宮門跡方相續方自然無餘儀形勢と相見、享保之末より漸々突當興行御免も有之候哉ニ而、既明和より安永天明度ニ至リ、一旦數口ニ相成候得共、享保之末富興行御免有之候砌ハ、一ヶ年三度ヅヽニ而、貳箇所或ハ三箇所ニ相限、近來之如く數箇所一時ニ御免有之候儀ハ、是迄書留も無之程之儀ニ付、追々相減候仕法相立候外無之候處、前書之次第ニ而當時右改革中ニ付、來ル辰年迄之儀ハ去ル未年伺濟之通リ据置候外致し方無之候付、來ル辰年ニ至、都而寛政度之通惣數三ツと極可申哉之處、谷中天

王寺、牛込寶泉寺、富停止之節も興行致し候趣に相見、寛政以来改革之節も惣数之外ニ相成居、併右ハ何故と申儀も不相分、貧寺又は檀家少等之申立ハ、天王寺外壹箇寺ニ限候儀も無之、元より寺社助成筋ハ、堂舍破損等之摸様次第、代々事實相當之場合を以、被及御沙汰可然儀ニ而、年季明之節々、定式御免有之候而ハ、おのづから外寺社之妨ニも相成候筋可有之、一體之御所置相當とも難申哉ニ付、右両寺富之儀も年限相立候はゞ、一旦止切ニ致し候積を以、右之分をも差加、以来惣数五ツニ極、場所之儀ハ江戸、京、大坂三箇所之外不相成、右箇所之内品ニ寄、江戸ニ而四ツ、大坂ニ而四ツ之時も、右同様いづれニも惣数五ツニ相限、興行時節之儀ハ、春夏之内三度、秋冬壹度宛ニ割合候とも、又ハ江戸、京、大坂と振分ケ候節ハ、其節之摸様次第、相當之季節ニ割合候とも、一箇年五度之外不相増様勘辨之上取計、年延之儀ハ決而難相成、富金高之儀ハ其寺社御由緒之厚薄、并破損等之摸様ニ随ひ、一之富三拾両より百両まで、年限之儀ハ三箇年より十箇年迄、是又其節も勘辨之上、先例等ニ見合取調相伺候積規矩相立、

本文之通相成候得ハ、日光准后御願日光東叡両山御救富、并増上寺肆手向囲跡ニ付御手富富、三箇所興行之分ハ、来ル辰年迄之内年限ニ至リ、跡興行申立候ハ、同年詣富相止候迄、何箇年ニ而も不拘年数、是迄之仕法を以興行御免、来ル巳年より百両富壹ヶ所、拾ヶ年之間御免之積、去ル未年中申上置候得共、今般寛政度之振合ニ基キ、取計方夫々改革致し候上ハ、来ル辰年以後壹ヶ所ニ而も餘計ニ御免有之候ハ、不相當ニ付、右両富も同年直ニ止切之積相心得可申、尤前書両山御救富之儀ハ、當丑年季限ニ付、去子年中[illegible]興行[illegible]願有之、先達而築丹後守より伺之上、来ル辰年迄、是迄之通興行御免被仰出候間、右ハ其儀差置候様可仕候、且牛込寶泉寺富之儀も、来寅年限ニ付、當八月跡興行之儀、丹後守方江願書差出、右ハ本文ニも申上候通、起立ハ不相知候得共、前々より富御免之惣ニ而、惣数之外ニ相成居候得共、此度本文之通、規矩相立候上ハ、右富之儀も願之通拾箇年ハ難相成、来ル辰年迄是迄之仕法を以興行御免之積、谷中天王寺富之儀も、来寅年年限ニ付、跡興行願出候はゞ、右ニ准シ相伺候様可仕候、且本文興行中之分、拾三箇所之内、増上寺富壹箇所、去ル未年二月迄ニ而年限相済候處、同月中御又是迄之仕法を以、半箇年拾箇年年延之儀伺之上承届、日光准后御願江州叡本澁寶院富之儀者、来ル卯年迄ニ而御免之年限相済候處、去ル亥年中増所督御願有之候節、休會之分端下興行之儀、是又伺之上承届、来ル辰年ニハ相済不申候ニ付、右二箇所之富ハ同年迄之内江繰上興行爲致候様可仕候、○中略

右評議仕候趣、書面之通御座候、被成御渡候御書取、并戸田日向守伺書外書付二通返上仕、此段相

伺申候、

丑十一月

〔續泰平年表〕天保十三年三月八日、諸所之富興行を被停、

影富

〔遊歴雜記初篇下〕目黒金毘羅

近年ヨリ突富興行御免有之例月九日、都鄙ノモノ來集シ尤賑ヘリ、但是等ノ富ヲ免ゼラル、ト雖モ、中賣ト云ルモノ數十人冗方ト合體セシメ、不殘札ヲ買〆置、金百匹ノ札ヲ、買人次第ニテ一兩ニモ二兩ニモ素人ヘ賣レリ、是ニ依テ容易ノ者札買ヒガタキヲ以テ、何ノ頃ヨリカ、影富ト云コトハヤリ、內證ニテ元方ヲ爲ルモノ、武士町方ニ數多有テ、每月目黒谷中湯島三ケ所ノ一ノ富ノ出番ヲ以テ、影富ノ當リヲ定メテ、利德ヲ爭フ、此故ニ此一ノ富ニ當ラバヤト欲張ヲ、財貨ヲ費シ、身代ヲ打モノ夥シ、別テ江戸ノ場末ハ彌々盛ナリ、此影富ト云モノ出來テヨリ、欲深キモノハ、身上衰廢シ、甚ウシテハ、盗心ヲ生ゼリ、後ハ如何ナリユクコトナラン、笑止ノコトニコソ、

○按ズルニ、是ハ文化九年比ノ記ナリ、

〔寬天見聞記〕谷中感應寺、目黒不動、湯島天神にて富興行あり、追々に江戸中の諸社諸堂にて興行はじまり、一月に廿四五會程ありて、最初は富の出番とて賣あるきしが、是を停止せられて後はおはなし〳〵と云て、一の富の番のみ書付て賣ありく事、市中竪横數十人に及べり、是は富の札を買たる者の爲にあらず、第付(ダイヅケ)とて、一の富を當物として一錢二錢を賭にす、一文を八文にして取る割合にて、大欲の輩は大金を賭にするも有り、强欲のなす所淺ましといふべし、

〔聞のまにまに三〕天保十三年三月八日、今般富興行不殘差留候云々、神社佛閣再建修復等之儀に付て、富興行を願、免許を得て興行する處數十ヶ所に及ぶ、其札を賣もの、其數江戸に滿ておびたゞしきことなり、又私に陰富いふことなして札を賣るものあり、本富の當りを用ること故、何れの處の富にても突もの當日其富りを見て、知らするもの大路をかけありき、富の出番といふべきを、富に行ふ陰富の賣なれば、傳りて只叫鳴し〳〵と呼ありくを、人々心得て是を買ふ、博奕にひとしきことゞもなりき、

〔天保集成絲綸錄 百四〕文化八未年五月

大目付江

富実抔と名附、博弈ヶ間敷儀致間敷旨、前々相觸候處、近頃谷中感應寺影富と名附札賣出し、右富之中り番數を用ひ、金錢等相渡候もの有之、不屆之至ニ付、富札賣出し候者、幷買請候もの共、此度吟味之上、夫々御仕置申付候、猶又右體之儀於有之ハ、急度可申付候、下々迄心得違無之樣可被申付候、

右之通可被相觸候

五月

〔天保集成絲綸錄 百四〕文化十酉年十月

大目付江

去々未年、谷中感應寺影富と名付、札賣出し、右富之中り番數を用ひ、金錢等相渡もの有之夫々御仕置申付、猶又右體之儀有之ニおゐては、急度可申付旨、其節相觸候處、又候此度目黒瀧泉寺、湯島喜見院富之中りを用ひ、前書同樣之儀相催、右之内ニハ武家之家來札元等致シ候もの有之、別而不屆ニ付吟味之上、御仕置申付候、畢竟申付方等等閑故之儀と相聞、如何之事ニ候、此上右體之儀不致樣、去々未年相觸候通、家來下々ニ至迄、急度可申付候、

右之通可被相觸候

十月〇町觸略

〔御仕置例類集 一ノ六〕文政九戌年御渡

町奉行筒井伊賀守伺

一神田鍋町太郎兵衛店竹次郎父丑右衛門、富興行之節第°附°と唱候致賭事候一件、

神田鍛冶町太郎兵衛店竹次郎父
丑右衛門

右之もの儀、御法度相背富興行有之候節、一之出番江引當、第附と唱候賭事之元方いたし、吉之助外三人江、賭錢一貫文ニ付百文ツヽ世話料遣し、當之もの江錢相渡、多分之致德用、又は同店銀藏倅源次郎江品能申偽、同人宅二階借受、一両度相催、爲挨拶金一分二朱差遣、其上田安長柄同心川上籐吾跡番代取組願濟候迄、養育金之内追々ニ金五両二歩相渡し、未抱入茂不相濟處、大小を致所持、弓張挑灯并右箱江葵御紋を自分と相認、宅内江懸置候段、公儀を不恐仕方、旁不屆ニ付遠島、

此儀御仕置附ニ、筒井伊賀守申上候、本所清水町十右衛門店清兵衛ニ見合、町人之身分大小所持いたし、又は葵御紋付挑灯掛置候不屆も有之候得共、右ニ而御仕置重り候筋無之候間、伺之通遠島、

御仕置附ニ伊賀守申上候例

文化十四丑年、岩瀬加賀守町奉行之節伺之上御仕置申付候、本所清水町十右衛門店清兵衛儀、御法度相背、谷中感應寺外二ケ寺ニ而興行有之候、富江引當第附と唱候賭事之元方いたし、第を記候小札を拵、所々湯屋髪結床等江持參、名住所不存ものとも江爲附、又は知人千藏江賭錢一貫文ニ付百文充世話料遣し相賴、當四月ゟ六月迄、都合八度第附之元方致し、當之もの江錢相渡、凡八貫文程致德用、遣捨候段不屆ニ付遠島、

同町同
文次郎

右之もの儀、御法度相背、知ル人丑右衛門方江參、第附と唱候賭事江度々致賭錢候段不埒ニ付、過料三貫文、

此儀御咎附ニ、伊賀守申上候例之次郎吉同樣之ものニ付、伺之通過料三貫文、

御咎附ニ伊賀守申上候例

棒引紋付

文化十四丑年、永田備後守町奉行之節伺之上申付候、關口水道町源兵衛店弘平倅次郎吉儀、同所勘五郎持參り候、谷中感應寺之富一之出番を以、中を極、第附と唱候賭事之番附は、三笠附ニ似寄候仕形ニ有之處、同人相勸候迚御法度相背、百文賭候處、當ツニ相成、中り錢受取、遣捨候段、不埒ニ付過料三貫文、

〔賤のをだ卷〕紋付とて歌舞伎役者の紋所を集め、ひらにならべて板行にして、其中に一ツ紋を別に封じ張付て、扨紋一ツを何錢と定めて、戸々家々に持歩行、或ハ巡廻して、心々にその紋所に印を付遣はすなり、紋所二ツも三ツも一人にて付るものは、皆紋所主付てかの張付たる封を開きて、其紋所にあたりたるもの勝にて、其品を得たり、始はきせる、たばこ入樣の物なりしが、後は反物櫛笄袴地の類を出したり、樣かはりたる三笠付の類なり、御改正ハ〇寛政改年後は、こと／＼く其類は皆停止せられたり、

〔張紙留〕御相談書　山村信濃守

博弈いたし候もの有之、召捕吟味いたし候處、棒引紋付と名付、歌舞妓役者之紋を貳拾四、紙壹枚ニ摺候を、賣子江相渡シ、所々ニ而右紋江墨ニ而筋を爲引、尤紋壹ツ江貳拾四筋爲引、棒壹本ニ付鳥目四文爲差出、當り候得バ鳥目百八拾文差遣可申旨、此外右之出錢高ニ而、當り候もの江鳥目差遣候、右棒引紋付之親元をバ金元と唱へ、紋付之紙持歩行、外々之もの江申勸メ爲附候ものをバ賣子と名付、德用取申候、右之名目是迄無之候處、右仕方三笠附ニ准じ可申儀と存候、三笠附ニハ金元并句拾ひと申もの有之、此度棒引紋付ニハ金元且賣子と申もの有之候、右ハ名目替り候迄ニ而、全三笠附之致方ニ相聞候間、三笠附之御定を以御仕置伺方取調可申と存候、依之及御相談候、

申〇天明八年十一月

〔御仕置例類集三〕寛政三亥年御渡

火附盗賊改長谷川平藏伺

一棒引博弈致し候一件御仕置、三笠附之御定ニ准候儀、幷店借之者宿致し候節五人組之儀ニ付評議、

二葉町文右衛門店五番組人宿斎右衛門寄子文次、棒引致候一件、平藏別紙を以申上候趣ニ而紋紙棒引博弈之仕法ハ、紙壹枚ニ紋數四拾貳認、右之内本圖紋壹ツ、花圖紋三ツ有之、捧壹筋錢四文宛之割合を以幾筋も爲引、四百文ニ而棒百筋引、本圖ニ當り候者江ハ、錢拾貫文相渡、或ハ八文ニ而棒二筋引當り候者江ハ錢貳百文相渡し、花圖ハ、取錢折返相渡日無盡同樣之仕法ニ而、右紋紙之賣子も有之候旨、一件之者共申立候由、然處日無盡と申ハ、如何樣之仕法ニ御座候哉難相分候得共、一體之仕形、三笠附同樣之仕法ニ相聞、先達而も申上候通、淺草寺地中勝藏院地借孫八店九郎兵衛後家はな、養子岩次郎、幷同所三間町仙次郎店忠次郎儀棒引之金元致し候處、山村信濃守町奉行之節吟味之上、三笠附同樣之仕法ニ付、右御定を見合、一件之者共御仕置相伺、去々酉年評議ニ御下ゲ被成候故、信濃守見込通被仰渡可然哉と申上、其通相濟候儀も有之候ニ付、三笠附之御定ニ准じ、一件之者共御仕置之儀評議仕候、

一御定書ニ三笠附博弈之宿致し候者之五人組、身上ニ應じ過料と有之候間、家主ニ而も店借ニ而も組合有之者ニ而、三笠附博弈之宿致し候節ハ、右御定之通取計可然奉存候、然處是迄店借之者、博弈宿致し候節ハ、區々之例も御座候、一體店借之者ハ、多分五人組無之候間、右店借之者博弈宿致し候節ハ、其家主ハ御定之通御咎附致し、家主之五人組ハ、別段御咎にハ不及方可然哉ニ奉存候間、別紙長谷川平藏相伺候、二葉町文右衛門店五番組人宿斎右衛門寄子文次、棒引宿致し候一件之儀も、右之趣を以評議仕申上候、

亥四月
朱書
評議之通濟

○按ズルニ、本書棒引ノ法、張紙留ノ說ト異ナリ、

〔御仕置例類集三ノ四〕寬政元酉年十一月

鳥居丹波守殿御差圖　板倉周防守掛

一深川黑船稻荷社地ニ而三笠附ニ似寄候儀興行致し候一件

深川黑船町長兵衛店
權八

右之もの儀、去申三月中、源六其外之もの共申合棒引と唱、三笠附ニ似寄候儀、興行之會主ニ相成催候得共、德用薄相休、同九月中、深川黑船町稻荷社地ニ而、富五郎其外之もの共申合、同樣之儀致興行候段、不屆ニ付遠島、

右御仕置附

右當六月評定所一座江評議ニ御下ケ被成候山村信濃守相伺候淺草寺地中勝藏院地借孫八店九兵衛後家はる養子岩次郎一件、幷淺草三間町仙次郎店忠次郎一件之內、右岩次郎儀、去申二月ゟ同五月上旬迄喜八方宿ニ致し御法度相背、三笠附同樣之仕方ニ而、棒引紋附と唱、歌舞妓役者之紋所紙ニ摺候を賣子共ニ相渡、致金元、右紋所江墨ニて棒を爲引、棒壹本ニ付鳥目四文ツヽ爲賭、當候もの江四文ニ付百文ツヽ遣し、右之通去申九月上旬迄喜八方宿ニ致し候得共相斷候ニ付、其砌ゟ次郎兵衛方ニ而同樣之儀致し德用取候段、不屆ニ付遠島可申付哉と相伺、一座評議之上、伺之通被仰渡可然旨申上、其通相濟候例ニ見合遠島、

〔武家嚴制錄二十三〕馬市札

條々○中略

一ばくち、ほう引、雙六此外諸勝負禁制之事、〇中略

慶長七年六月朔日　常陸介
修理亮

〔正寶事錄 一〕覺

一前々ゟ被仰付候、ばくち、はふ引、けんねんし、かるた、何にても諸勝負堅仕間敷事、〇中略

子〇慶安元年二月

右は二月廿八日御觸、町中連判、

〔御定書百箇條〕三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

享保十六年極
一輕き賭之賣引、よみかるた打候者、　三十日手鎖

寬保三年極追加
但五拾文以上之賭錢にて候はゞ、博弈同然之御仕置、

同
一同宿いたし候もの　過料三貫文

寬保三年追加
但右同斷

〔科條類典 下四〕㊁三笠附、博弈打、取退無盡御仕置之事、

寬保二戌年十一月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

三笠附博弈打、取退無盡、御仕置箇條之內、

一輕キ掛ケ之賣引、よみかるた打候もの、　三十日手鎖

兩所懸紙
但五拾文以上之掛錢ニ候ハヾ、博弈同然之御仕置、
朱書
此ハ先達而伺相濟候得共、猶又評議仕候處、輕キ懸ケ之計ニ而ハ限も無ㇾ之候付、但書之通書加置可ㇾ然奉ㇾ存候付、懸紙ニ相認申候

極

一同宿いたし候もの　　過料三貫文

此所懸紙
但右同斷
朱書
是ハ右同斷

極

〔科條類典下四〕寛保元酉年五月十九日、御仕置申渡、

一武州粕壁宿、三右衛門方江大勢集り、よみかるた打候砌、同宿傳吉治右衛門口論いたし、及刃傷、怪我人有之、致即死候ニ付吟味一件、〇中略

大勢人を集、よみかるたの宿いたし、自分も一同よみかるたいたし、傳吉治右衛門口論之上、及刃傷、怪我ニ而即死之ものも有之候段、取計方別而未熟ニ相聞、旁不屆ニ付、

手鎖之上
過料三貫文　　同宿
三右衛門

三右衛門方江寄集り、よみかるたいたし候段不屆ニ付、

同宿
四郎助
金左衛門
市三郎
安右衛門
紋三郎
六兵衛〇下略

手鎖

〔天保集成絲綸錄百〕寛政六寅年三月

三奉行江

博弈御仕置御定之內、當分左之通、〇中略

輕き掛之賣引、よみがるた打候もの、　敲

但五拾文以上かけ錢ニ候はゞ　重敲

同宿いたし候者　敲〇中略

右之通可被申付候、此外之儀は、只今迄之通可被心得候、

三月

〔張紙留〕一博弈いたし重敲ニ相成候後、めくりかるた致候もの御仕置之事、

亥〇享和三年　九月五日一座評議之上不及伺、書面之通相決、

評定所一座

博弈いたし重敲相成候後、めくりかるた致候もの、儀ニ付、相伺候書付、

博弈いたし重敲ニ相成候後、輕キかけ之めくりかるた致候もの御仕置之儀評議仕候處、寛政六寅年三月御渡被成候御書付ニ、博弈打候もの重敲、輕キかけ之賣引、よみがるた打候もの敲、但五拾文ゟ以上之賭錢ニ候はゞ重敲と有之、めくりかるたも右よみかるた同樣之ものニ而、五拾文以下之賭錢ニ付、敲ニ相當候得共、博弈いたし一旦重敲御仕置ニ成候後、猶又めくりかるたいたし候ものニ而例相見不申候、寛政十一未年六月、菅沼下野守伺之上、御仕置申付候無宿文吉儀、先達而あばれ候依科ニ敲之上所拂御仕置ニ相成候後、無宿之身分ニ而長脇差を帶し徘徊いたし、殊ニ甚五兵衞娘ひさと密通いたし候由風聞有之候ニ付、罷越間敷旨、甚五兵衞申聞候處、惡名請候而ハ、身分難立候迚、夜中同人方江罷越、甚五兵衞と同道いたし立出候途中ニ而酒狂之上、不取留儀を事六ヶ敷申掛、又ハ可斬付所存ニハ無之候へ共、往來ニ而脇差を拔候段不屆ニ付敲申付、前科ゟ御仕置輕相成、且博弈いたし重敲ニ相成、又候博弈いたし候もの重敲ニ申付候例有之、博弈再犯之もの之御仕置重り不申、殊ニ博弈とめくりかるたとハ仕方も違候儀ニ付、輕キかけ之賣引、よみがるた打候もの敲と有之候御書付ニ見合、敲可申付候哉、以來之例ニも相成候儀ニ付、

賭的

此段相伺申候、以上、

亥八月

〔正寶事錄三〕覺

一勸進相撲、前々ゟ町中ニ而御法度ニ候間、彌其旨相心得、町中ニ而爲致申間敷候、附めつた的、町中ニ而爲仕申間敷事〇中略

丑〇寛文元年十二月廿二日

右御觸、町年寄衆ニ而、月行事致請判候、

〇按ズルニ、めつた的ハ、蓋シ賭的ノ事ナラン、

〔天保集成絲綸錄百四〕寛政十二申年八月

御勘定奉行江

近頃百姓共寄集賭的いたし候も有之趣相聞候、農業第一ニ可心掛處、百姓之身分ニ而賭的抔致し候儀、別而不埒之事ニ候、博弈賭之勝負事、御法度之儀は度々御觸有之儀候間、彌右體之儀不致樣堅可被申付儀ニ候、最寄御代官よりも及見候ハヽ早速召捕筈ニ候、尤外々より召捕候而は領主之申付方等も不行屆儀候間、隨分遂吟味可被申事ニ候、依而此段申達候、

右之通賭的致し候風聞有之候私領之分江、心得として可被達候、尤其最寄抔ニ而相違可然分は同前之事、右之通相達候上は、御料所ニおゐては、猶更右體之儀無之樣、御代官ども精々心付候樣、厚可被申渡候、

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政八辰年正月

松平伊豆守御差圖　町奉行 坂部能登守掛

一西久保三田町三原伊露賭的致候一件

雜博弈

四久保三四町新兵衛地借浪人幸七事
三原伊露

右之もの儀、先達而矢代的之儀ニ付、初鹿野河内守於御役所吟味之、賭之勝負紛敷儀致間敷旨申渡候後、的場江張紙差出、古來之通、弓法古實相守稽古いたし候様申渡有之趣書顯、賭もの取引も御免同様ニ相心得させ、諸家之家來を誘、多人數を相集、賭之取引を申敎、射術之式と心得候様ニ稽古爲致、席料貰ひ請候始末、重々不屆ニ付遠島、

御差圖

存命ニ候はゞ　中追放

右御仕置附

右差當相當之例相見不申候得共、御定書之内願不請儀を叶候體ニ申成、會所を建、掛札等出候もの、家財取上所拂と有之、此もの儀ハ、先達而初鹿野河内守御役所ニ而吟味有之、已來古法ニ少も不違様矢代的致候儀は、格別賭之勝負ニ紛敷、的興行致間敷旨申渡有之儀を、席料多可貰と存、河内守御役所ニ而吟味之上申渡有之候、古來之弓法古實之趣書顯し、御免同様之姿ニ取繕、諸家之家來を誘候始末、重々不屆ニ付遠島、

〔正寶事錄 一〕覺

一町中ニ而、碁、將棊、雙六、當座之慰ニも金銀之儀は不及申、蠟燭壹挺紙壹枚之諸勝負かけ堅仕間敷事、

一跡々ゟも度々如申觸候、かるた、ばくゑき、諸勝負、是又御法度ニ候間、仕間敷事、

辰〇承應元年　八月

右は八月十三日御觸、町中連判、

〔有德院殿御實紀附錄 四〕博弈は無智の民に盗賊を敎ゆるにひとしとて、重くいましめ玉ひし事

たび〳〵なりけるが、享保十一年正月、日本橋の邊に榜を立られ、こと更にその徒を制禁せらる、略○中これは近年の惡習にて、賭。博。長。半。三。笠。よみなどなづけて、さま〳〵の賭のあそびにふけり、身をほろぼし家を破る者多かりしかば、はては女兒の遊。戲。迄。少。し。も。博。弈。に。類。せ。る。は。と。ゞ。め。ら。れ。富突無盡講などいふをも禁せられぬ、是まで市店に博具をひさぐものありしが、これをもいたくとゞめられしとぞ、これよりして庶人の惡風大に改れり、

〔伊勢平藏家訓〕酒色財弈の事

一弈とはばくちなり、何事にても、金銀をかけ物にし勝負をしてなくさむは皆ばくちなり、かけ。的。かけ。碁。かけ。將。棊。かけ。雙。六。楊。弓。などの類、皆ばくちなり、ばくち事に勝てば又勝たくなり、まくれば重て勝たくなり、勝てもまけても、かちたひ〳〵とおもふてやめる心つかず、終には家も貧乏に成、身を失ひ家を亡す、愼むべし、

右酒色財弈の四品は、武士たる者は殊にかたくつゝしみいましむべし、禍の根本なり、

〔屠龍工隨筆〕丁。半。といふばくちは、いかに打ものにや、ふるき物語に見えたり、莊子に十六むさし、中將棊の獅子の居くひなどの樣におもはるゝなり、

〔當世武野俗談〕冬瓜仁右衞門

此もの博弈の場へ出て、段々利を得、大に出世し、此十六七年以前より本所三ツ目通り島杢十郎といふ御直參の屋敷地をかり、土場といふを立、長。半。博弈をして、己棟梁となりて、借元とやらんをいたし、大に富貴となり、古へ辻番の有樣は夢にもなく、吉原芝居に入込、大盡の體なりけり、

〔公裁隨筆〕文政十亥年豐後守掛　石原淸左衞門出

一河州富田林村伊兵衞盜いたし、幷同人父利兵衞博弈いたし候一件吟味、略○中同村百姓傳八弟　常松

伊兵衛倅 五兵衛
太兵衛倅 多吉
力藏倅 國松
與兵衛倅 石松

右之もの共儀、常松は村内利兵衛宅外六ヶ所、五兵衛は村内外四ヶ所、多吉は村内外三ヶ所、野田河原ニおゐて右利兵衛外六人、其外名住所不存旅商人共手合ニ加り、國松石松は村内外二ヶ所野田等ニおゐて、常松外五人手合ニ加り、一同四五錢より貳三拾錢賭之きんこ、其外かるた博弈丁半等度々いたし候始末、一同不届ニ付、五人共敲、

　但村役人江引渡

　書面きんこ、其外かるた博弈いたし候段、前書利兵衛同様之趣意ニ有之、丁半博弈も賽を以いたし候ニハ無之、有合候錢を握いたし成候趣ニ付、右はなんこと唱候博弈も同様之趣意ニ可有之、なんこ博弈いたし候ものハ、めくりかるた同様之御仕置當リニ相成候、度々之先例有之、然ル上は、前書伊兵衛御仕置附ニ引當候御書付ニ准じ何れも賭錢ハ五拾文以下ニ付、五人共敲、

〔嬉遊笑覽雜伎四〕博に錢もてなめかたとてすることあり、東海道の山路にて見しことあり、錢戲猶種々有べし、遊戲雙六に擲錢とあるも似たるもの也、

〔公裁隨筆〕文政十亥年豐後守掛　石原清左衛門出

一河州富田林村伊兵衛盗いたし、并同人父利兵衛博弈いたし候一件吟味、

　河州富田林村利兵衛倅伊兵衛、盗又は博弈致し候一件吟味詰相伺候趣令承知、御仕置之儀左ニ申達候、〇中略

右 利兵衛

右之もの儀、先達而博弈いたし候依科、兩度重敲御仕置ニ相成候後も不愼、宅井村内河原等ニおゐて、村内傳八弟常松外三人、其外名住所不存旅商人共手合ニ加り、四五錢ゟ二三拾錢賭之きんこ、其外かるた博弈度々いたし候始末、不屆ニ付敲、

但村役人江引渡

書面かるた博弈いたし候段は、前書伊兵衛同樣之趣意ニ有之、きんこと唱候博弈も、かるたを以いたし候由ニ有之、然ル上は右伊兵衛御仕置附ニ引當候御書付ニ准じ、此ものは再犯ニは候得共、右ニ而御仕置重り候筋ニハ無御座候間、敲、

〔續五元集下〕樗蒲乙ハ一間にあきるきり〳〵す

〔屠龍工隨筆〕樗蒲ハ唐の本にも出、日本にても今に出たり、もと樗と蒲の實をものに入れて、勝負をなしたるよりをこりてと、世もつていふは殊にあかりやあらず、よし夫を樗蒲いちといふこそ、市町にて店をかまへて打たるなるべし、必竟樗蒲の樣といはんがごとし、又遠鄙いなかの祭には、小家あまた軒をならべて隔蒲をなすなれば、蒲市たばこ市杯の心にて樗蒲市といひしにや、

〔玉勝間四〕四一半

今の世にばくやうにちよぼ一といふあり、樗蒲かも書に見えたり、

〔武家嚴鑑乾〕一チボイチ　下賤ノ者博弈ウツコトヲチボイチト云ハ、樗蒲打之訛ナリ、雙六ヲウツコトヲ樗ノタハムレト云ナリ、スゴロクハ博弈ノ本也、故ニ古ヘ是ヲ禁制セラレシナリ、

〔嬉遊笑覽四雜伎〕長崎歲時記正月二日條に、此日は市中家並晩起し、店先に簾をたれ家内賑ふ、男女小兒の戲れに、破魔弓、雙六、貓貝、手まり、はご板、紙打等なり、下賤の輩はスボ引、ヨセ、ケン、カンキリ、

カラハ筋打などして樂むものあれども、右は博弈に似たるとて、親々堅くこれは禁ずるもあり云々、この下に圖說あり、スポ引は實引なり、ヨセ以下は、みな錢を投る戲れにて、カンキリは常の穴一、カラは一名穴ボンと云は、穴の廻りにわをかきたり、筋打は江戸にてキズと云もの也、ヨセは小き木を地に立て錢を投るに、その木の本によるをよしとす、ケシは地にうづ卷をかき、投る錢その正中によるほどを勝とす、うつ錢をバッソウと名付、二文又は三文を鉛をもてかさねつける、バッソウは俗語かといへり、古錢家に、繪錢の厚きものを稱一玉と云る是なり、

〔享保集成絲綸錄四十七〕寛保元酉年七月

申渡之覺

一西瓜商賣之所々、幷揚場等ニ而、西瓜之貫目を引賭にいたし、博弈ケ間敷儀いたし候族有之由不屆候、自今急度相止させ可申旨被仰渡候間、西瓜商賣人ハ勿論、町々江可申渡候、

七月

〔南畝莠言上〕五雜俎に、昔人喜鬪茶、故稱茗戰、錢氏子弟取霅上瓜、各言子之的數、剖之以觀勝負、謂之瓜戰、然茗猶堪戰、瓜則俗矣、近比市中の者、柿をきりてその種の數をあてゝ勝負を觀事ありき、名づけてタチカキといふ、これを柿戰といふべし、

〔享保集成絲綸錄四十七〕寛保三亥年十二月

一俳諧前句冠付褒美と名付、博弈ケ間敷儀致候事、前々停止ニ候之所、此間ハなぞ附と申、褒美差出、三笠附博弈同前之仕方致候由、不屆ニ候、自今右體之者町中有之バ召連可罷出候、吟味之上急度可申付候、

右之通、町中急度相守候樣可相觸候、以上、

十二月

〔德川禁令考 博弈 四十八〕文政十三寅年閏三月二日

町々往還ニ而賭事致し候もの之儀ニ付、年番名主江申渡、（榊原主計殿方ニテ申渡）

南北小口年番 箔屋町名主 又兵衛
平松町同 彌左衛門
大傳馬町同 勘解由
本町四丁目同 文左衛門
馬喰町同 源兵衛
高砂町同 庄右衛門

近來神佛緣日、又は町々往還ニ而、往來人江賭錢爲致、圖を振、中り之もの江品物相渡、又者錢ニ而取引致候もの有之、不屆之至ニ付、追々召捕御仕置申付候、都而賭事は御法度之儀ニ付、町役人共打捨可置樣無之處、等閑之至不埒之事ニ候、依之以來右體之もの、見懸次第早速取押、月行事共より召連、月番之番所江可訴出候、尤組之ものをも相廻し、爲召捕候間、向後其所之町役人不存罷在候ハヽ、急度可及沙汰間、無油斷心付候樣可致、右之通町々不洩樣一統江可申通、

右申渡趣、證文申付、

〔續泰平年表〕嘉永元年八月十九日町觸（神佛緣日其外市中往還ニ而、賭錢致させ、圖な振、又は玉子吹抔と唱、景物を出し、其外賭物等致候義、是又一切致間敷）候、

〔閑窓自語〕弄蜘蛛語

土御門故二位泰邦卿かたられけるは、享保のはじめ、世に蠅とりくもとかやいふ虫をもてあそぶ事あり、風流なるちいさき筒に入れて、蠅のいる所へとばせてとらしむ、一尺二尺など遠くとぶをもて最上とす、よくとぶ蜘はあまたのこがねにかへてあらそひもとめ、蜘合をして博弈に

及ぶのあいだ、武家より制してやめしむとぞ、世にめづらしきもてあそびもありけるなり、

〔續泰平年表〕弘化元年四月廿一日町觸 近来市中多人數寄集、鷄市と唱、席料を取、鷄を賣買致し、又は鷄を爲ㇾ鬪合、右勝負ニ事寄せ、賭事等致候者有ㇾ之由相聞、不埒之至ニ候、向後右樣之儀決而致間敷候、

〔草茅危言五〕博弈之事

凡ソ盗賊亡命、敗子、逐奴ノ類、天下ノ惡人落込所ハ皆博場也、故ニ此一ツヲ防ゲバ、萬惡ノ藪トナリ、巣穴ヲ一掃スルノ功驗ヲ見ベク、ソノ方ヲ施サンニハ、二箇條アルベシト、愚意ニ定ル處左ノ通リ、略〇中一箇條ニハ町在トモ、毎年正月注連ノ内ニハ、人家ノ婦女兒童奴婢マデ打ヨリ、少々ノ勝負ゴトヲスルコト天下一統御免ノ事ノヤウニ心得テ、ヤヽ超過スレバ二月三月ニ接シテ後止コトモ也、必竟ハ小數ノコト故論ズルニ及バヌヤウナレドモ然ラズ、小兒輩ニ惡事ノ稽古ヲサセテ、年々功者ニナルヤウニ仕覺ヘサスルコトソノ害甚シ、後ニ大ナル博徒トナルコト是ヲ階梯トスル也、タヾサヘ數ヲ知ザル拙々ノ民ニ、惡事ノ階梯アレバ其害ニ遑ザカルコト知ベキノミ、愚播ナド都會ノ地ニ居ナガラ、幸ニ學校禮儀ノ場ニ長ジ、先子義方ノ訓ヲ受タル故、髫年ヨリ市童ノ定戯トスル、意錢、六圖、寶引ノ類、ツヒニ立交リタルコトナク、博牌ナドイカヾ數ヲ設タル物トモ知ズシテ皓首ニ及ベリ、モトヨリ學陋シク進明カナラズシテ、敢道ノ方モ行屆カザレドモ、先子ノ遺範儼然タル故、今膝下ニ長ズル所ノ兩男子モ、愚ノ幼時ノ如ク市井ノ俗習トハ世ヲ隔テタルガ如シ、因テ思フニ、習慣ノ性ヲ成スコト善惡兩途トモ然ルコトナレバ、世ノ惡習ニ染タルモノ、童ク化シテ頑凶無賴トモナルベキニ、ソレホドニモ無ハ民夷ノ良心泯ビザルモノ有ヲ見ベシ、サレドモ旣ニ惡事ノ階梯アレバ、十人ニ一人、百人ニ十人ハ頑凶ニ陷イルモ亦シルベシ、タトヒ百人ニ一人ニテモ、天下ノ廣キヲ准ズレバ夥キ人數ナルベシ、故ニ官ヨリ號令ヲ明ニシ、先民間正月ノ遊事ト云モノ、意錢六圖ノ微末マデ一切

禁止アリタシ、一町切ニトモ吟味セシメ違背ノ輩ハ罰金タルベシ、小兒ハタトヒ路ニ回リ聊ノコト有トモ、小心ニモ公禁ニテ表立タル所ニテハ咎メラルベキヲ合點セバ、自ラ愼ム心ニナリ、ヤヽ怜悧ナル兒ハ相耻テヤムヤウニモナルベシ、是過ヲ未萌ニ消シテ、知ズ識ズ帝ノ則ニ從ヒ、イツトナク惡途ヲ善途ニ改ムルヤウニナルベシ、是曷ニ所謂童牛之牿ナルベシ、

〔天保集成絲綸錄百四〕寛政二戌年六月

町奉行江

是迄加役方ニ而召捕候もの之內、博奕一通之者ハ勿論、博奕筋之儀相聞候者ハ、町奉行江引渡來候得共、以來ハ引渡候ニ不及、博奕一通之者ハ、幷詮議之手筋ゟ出候博奕筋之ものも、百姓町人之分ハ、手切ニ吟味致シ、御仕置相伺候樣可被致候、

五月

右之通、火附盜賊改江相達候間、可被得其意候、

〔德川禁令考後聚二十四行刑條例〕天保三寅年

野田ニ而博奕有之を不存所役人御咎之儀伺、

書面伺之通可仕旨被仰渡承知仕候

辰十二月十六日

評定所一座

當廿四日評議いたし申上候、大林彌左衛門相伺候、野州無宿なを、博奕いたし候一件之內、下總國新郷村村役人共儀、村內往還端ニ而博奕有之を不存迄ニ而、外之子細無之ものどもニ候得共、掛り見込ニ而吟味も詰候儀故、御咎付候樣申上、尤右樣之分御咎有無之儀ハ、追而評議之上可申上旨申上置、再應評議仕候處、御定書廻り筒ニ而博奕打候もの過料、三度以上廻り筒いたし候もの中追放ニ有之所役人御咎之儀は相見へ不申、併寛政六寅年御書付以來、博奕御仕置嚴重に相成

候儀ニ候得共、所役人迄右ニ准じ可ㇾ取計ㇾ儀とも不ㇾ相聞ㇾ上ハ、以來所役人共、御咎有無之儀ハ、催候場所、又は其事實ニ寄、其時々取計、尤諸向伺評議之節、右ニ准じ候樣可ㇾ仕哉ニ奉ㇾ存候、依ㇾ之心得方之儀、相伺申候、以上、

辰九月

〔舊章錄拾遺〕一慶安年中に日本橋に立ル落書〇中略

比日之落書

はやりもの、ばくち、玉川仙之丞、伊勢ぬけまいりに、本所のさた、

〔南嶺子〕二博弈は上古よりの禁なり、〇中略色に耽ものは利に志すが老て改る事あり、博弈は初より利によりて行ものなれば、老慾益つのりやむ時なく、博弈は利する時あり、人に利せらるゝ時あり、其利を懷ふ意增長しては盜賊心におつるより外なし、百錢已下の勝負も、千金万金の爭ひも、其意地一なり、たとへ毒に中られず共、毒魚と題せし河豚を食し、わづかの慰なりとて、樗蒲を弄し、法を忘れ、躬を顧ざるは、獸肉を食して神社にむかふよりは穢惡甚しかるべし、親子兄弟にても、わが勝べき意なくては、博弈の心にあるべからず、是より不孝不弟の情の原となり、つゐに人倫の道にはづるゝに至、かりそめにもその人を見ば、盜賊心ありと知るべし予が子孫に、もし是を好ムまでもなく、かりそめにもその席につらならば、予がための子孫にはあらず、〇下略

〔南嶺子〕三むかし、おのれを正しくさへすればよし、たとへ夜盜博弈の徒に交りたり共、おのれ是に染ざれば何の害かあらんとて、不正の友にも交りし人あり、五六年も立てば、その詞ばくち打の常語になれ、勝負ハ天にまかせて、奇巧さへせねば道にもそむくべからず、されば聖人も博弈といふものだもありとの教ありと、そろ〳〵かゝりて見、勝ばおもしろくまけぬれば取かへさんと思ひ、後は大博弈打と成しこ、古ォ物に書つたへたり、自然となれやすき物なれば、盜者と知て

はちかづく人なかるべけれ共博弈の人にはまじはるもあるべし、一錢二錢も千金万金も同理なりばくちを好人は盗賊とおなじ心に見て交を絶べし、況や學問せんと思ふ人に此心あれば、學問は決して成就せぬものなり、師となる人も、その徒とならば敎べからず、敎ても益なかるべし、

〔半日閑話十三〕安永五年十一月、當年癸酉花又村酉の町の路次に博弈を禁ず、參詣之人自ら少しと云、

〔天明大政錄二〕一箕浦、〇右源次甲斐の國府をへて信州飯田道を旅行せしに、民間の老若のいひしは、越中守様〇松平定信御老中に御成なされ、何となく惡風も改り、博弈はすきと止たり、雲助やうの者宿の中にて博弈も得せず、まして民間に至る迄、博弈ハ一切に制禁の御觸ありしより、遠に止しとぞ、

古事類苑

法律部四十九

下編下

追捕 目明附

捕犯人　一一五
捕逃亡者　一二八
於管轄外追捕　一三六
於寺社境內追捕　一四三
捕嫌疑者　一四五
犯人拒捕　一四九
以人相書搜索　一五一
追捕行賞　一五九
追捕人謫責　一六六
私人逮捕　一六七
私縱犯人　一七〇

附目明

目明名稱　一七二
目明制度　同

日明例

古事類苑

法律部四十九

下編下

追捕 目明附

德川氏ノ時、罪人ヲ追捕スルニ、其市街ニ關スル者ハ、町奉行之ヲ擔任シ、卽チ町同心等ヲ遣ハシテ之ヲ捕リ、寺社ニ關スル者ハ、寺社奉行之ヲ擔任シ、火附、盜賊、博奕等ノ犯罪人ノ如キハ、火附盜賊改ニ於テ專ラ之ヲ擔任セリ、又地方ニ於テハ、遠國奉行之ヲ擔任シ、其組同心等ヲ遣ハシテ之ヲ捕ル、而シテ罪人逃走スル時、其地ノ家主、五人組、及ビ名主、組頭等ニ命ジテ之ヲ搜索セシムルニ、日限尋、永尋等ノ例アリ、日限尋トハ、日數ヲ限リテ搜索スルコトニテ、卽チ三十日、五十日、一百日、六ケ月ノ別アリ、永尋トハ、日數ヲ限ラズ、永遠ニ搜索スルコトナレドモ、是亦制限アリテ、六十ケ年ヲ經タルモノハ、逮捕スルニ及バズ、而シテ之ヲ逮捕スルニ、私領地内ニ於テスルモノト、他ノ管轄地ニ於テスルモノトノ別アリ、若シ他ノ管轄ニ關スル時ハ、其領主ニ報ジ、然ル後之ヲ捕フ、サレド其事極メテ秘密ニ屬スルモノハ、直チニ之ヲ捕ヘ然ル後之ヲ報ズ、

物色シテ逮捕スル者ハ、謀叛、弑逆、及ビ關所破ノ犯罪者ニ限ル、而シテ之ヲ搜索スルニハ、家主、五人組、名主、組頭等ニハ命ゼズ、

〔江戸政要〕捕者之覺

一捕者有之節ハ、本當リ番ヨリ可罷出、自然人不足之節ハ、大中番ヨリ增人取可申事、

附急成時、捕者ハ尤當番ヨリ可「能出」事、

〔牢獄秘錄〕町中にて科人召捕候節之事

一何れ之町にても科人を町同心召捕ル節ハ、先繩をかけて、奉行所(南之組之同心ならば、南之番所へ遣ス、北之組之同心ならば北之番所江遣ス、是ハ町役人差添て行なり)町奉行所にて假牢に入るも有り、罪之次第に依りては、直に牢へ送らるゝ也、尤町奉行所に日々乞食一兩人宛出居候事故、入牢もの有之時は其段乞食早速傳馬町へしらする也、

一召とり茅場町大自身番に留置も有之、江戸中にて重科之科人を一夜ふた夜とめる自身番ハこの自身番に限る也、

〔萬治制法〕一喧嘩口論捕篭者并走リ者の事

取篭者の儀ハ、相定而如「法の」其役々の者可「捕收」、本人を遠不「可」推參」者也、雖「然其役人早速不「能來、令「延引」大事及はゞ、其所に有合の者共、僉議の上を以相圖捕の者來時可「渡事、

○按ズルニ、是ハ萩藩ノ制ニシテ、即チ大名ノ法ナリ、附記シテ參照トス、

〔享保集成絲綸錄 四十七〕盜賊人穿鑿條々〇中略

一盜人之贓物見出し、其屆在」之バ、早速名主五人組立合僉議を仕埒明べし、縦如何樣之もの申來といふとも不「可」謙略、若令「遲滯」其盜人於「致」欠落」ハ、名主五人組可「爲」曲事」事、

右之條々、御料私領寺社領共ニ、在々所々村切ニ名主百姓五人組、毎年正月十五日を限、此趣堅相守之候樣ニ、急度申付、手形可「取置」之、若令「油斷」於「不」申付」ハ、其地頭代官可「爲」越度」者也、

明暦三年酉正月

〔德川禁令考 三十一 不良者御〕寛文二寅年九月廿一日

盜賊召捕方之儀、諸大名江奉書、

頃日於在々所々盜賊有之而、遂穿鑿候處、同類多令欠落候、領內近邊小身之給所、御代官所等社領等盜人有之ば、寺社奉行町奉行御勘定奉行より可相達候間、早速家來被差遣搦捕之、町奉行所江可有注進候、縱從右之面々不申來候共、於致露顯は可被捕之候、先々江家來持參之證文爾通差越候之間、可被受取置候、勿論領分之儀は被改之、不審成者有之ば、召捕之旨趣可被申越候、次於領內鐵砲所持之族、穿鑿之覺書相添候間、是又被致承知、可被申付候、恐々謹言、

猶以少身之給所、御代官寺社領等より、直に申越儀も可有之候間、是又捕候樣可被申付候、以上、

九月廿一日　　稻葉美濃守

阿部豐後守

丹羽左京大夫殿〇以下宛名略

〔德川禁令考二十八 雜街使〕年月闕

捕者引渡方之儀ニ付被仰渡

御成之節、御先手見廻捕者引渡方之儀ニ付、御書付之事、

一遠御成之節、見廻被仰渡相廻候砌、見廻場之內ニ而、怪敷もの召捕候得ば、町奉行江可渡心得候得共、可相成候はゞ以來火附盜賊改江相渡申度旨、御先手より申上候處、町奉行火附盜賊改之內、時宜次第辨利之方江可相渡旨被仰渡候事、

御番衆廻捕者引渡方之儀ニ付、御書付之事、

一御番衆廻相勤候面々、唯今迄怪敷者有之候得ば召捕候處、以來博弈打候者をも見掛候はゞ心附召捕、向寄之町奉行火附盜賊改江可相渡旨達候得共、此以後は月番之町奉行幷火附盜賊改之內江相渡候樣、寬政五丑年、太田備中守殿、町奉行江被仰渡候事、

〔德川禁令考二十八 捕盜使〕寶曆九卯年十一月廿七日

四人召捕方手筋之儀奉伺候書付

一盜賊召捕方手筋之儀、何方ニ何樣之惡黨有之候由、風聞承及候而も、其者之人體不存、其上身上極手下之者共、召仕候樣成惡黨之分者、譬其者住居致候所江參候迚も、慥成儀無之候而は、召捕候儀も難仕樣之節は、其人を見覺、功者成者を見廻之手勢ニ致、右盜賊之粧を引出し不申候而は、召捕候儀難相成候、右之趣ニ仕候得ば、目明岡引差口之樣相聞候故、此儀難相決御座候、其筋存知候もの有之候はゞ、其者江とくと申談、其者を致同道候歟、又は右申上候通ニ、粧を引候樣ニ仕候而相糺、彌相違無之、怪敷儀も有之候はゞ、召捕候樣可仕候哉、尤四人之中ニ存知候者、召連罷越候而は、岡引之筋ニ相聞へ可申候得共、岡引と申候は、平人ニ而も、科人ニ而も、惡者壹人差定、岡引と名附、手引爲致、其者之罪を免シ、外科人を召捕候、此儀は決而不仕儀ニ御座候、惡黨何方ニ罷在候段承居、其儀存知候囚人を召連、居所江組之者差遣、召捕不申候而は、たとへ同類白狀ニ而も、外之惡黨共皆逃去申候、勿論召連候囚人罪之有之者を差免候筋ニ而は決無御座、外之惡黨之住居又は立場等江召連、承糺候迄之儀ニ而、右召連候囚人罪之輕重次第ニ、御仕置相伺候儀ニ御座候、ケ樣之趣ニ而、外惡黨之住所承糺候儀、如何取計可申候哉、〇中略

一宿有ニ而疑敷者と申取沙汰及承候節は、其所江組之者差遣候、是又右同樣之手筋を以承糺、彌怪敷儀ニ候はゞ召捕、是又其所より途中江引出シ召捕、繩懸候樣可仕候哉、尤其所ニおゐて、有增吟味仕、怪敷儀も無之は直ニ差免可申候、其場所ニ而難相分儀も候はゞ、私共役所迄召連罷越、吟味之上科無之者ニ候はゞ、差免可申候、ケ樣之儀、彌右之趣ニ取計可申候哉、

一てつくは場所小屋等ニ、無宿體之惡者かたまり居候事多御座候、然共何方ニかたまり居候哉、其段難相知御座候間、小屋或はてつくは場などへ吟味ニ入、其中ニ而怪敷者引出、途中ニ而繩懸召捕候儀、如何可仕候哉、

一途中追落等有之由及承、附込申候節、深夜ニ及時ならず、御家人體或は屋敷者體ニ而、一應差一兩人も連立、寺院或は屋敷門下、其外小隱脇江忍居、怪敷候得ば召捕、尤頭支配有之者ニ候はゞ、其段爲名乘承屆、其所ニ而譯相立、怪敷儀も於有之は、私共役所迄召連、樣子相尋、御家人ニ而彌怪敷筋も御座候節は、伺之上御差圖次第、吟味可仕候哉、怪敷儀も無之節は差免申候、御家人等ニ而も、右之趣ニ取計可申候哉、此所如何ニ奉存候、然共右體を僞誑之惡黨共ニ御座候節は、取逃口口此段取計難相決御座候、

一屋敷町家ニ不限、盜賊入其所ニ而召捕置候段、訴來候時分、捕方之者差遣候、召捕候儀如何可仕候哉、

　但其家内江踏込、召捕繩懸候儀は、前々より不仕儀ニ御座候、

一右惡黨、屋敷町家ニ而召捕置、爲知來候上、捕方之者差遣、先方ニ而召捕置候者を、直ニ此方江請取候儀は、如何ニ奉存候ニ付、其段承屆、屋敷ニ而は、門前ニ相待、町屋ニ而は、通ニ相待罷在、初捕候方ニ而追放候はゞ、於途中召捕候樣可仕哉、

　但町家ニ而右體之儀御座候節は、其町方より町奉行江可相達儀ニ御座候、然處を此方江相達候儀ニ御座候得ば、若筋違之樣ニも可罷成候哉、此所難相決御座候事、

一囚人吟味之内、同類馴合之者、及白狀候節、其者差遣候而も、宿有之者又は小屋等に居申候者は、其人體を不存候而は、たとへ其者住居江參候とて、難召捕御座候ニ付、白狀同類馴合等に御座候はゞ、其白狀仕候囚人を組之者召連、其場所江罷越、其人體を聢と見屆、召捕候樣仕度奉存候、乍然此譯合之御座候得共、一通ニ及見候節は、鬮引體に相見へ申候ニ付、此儀難相決御座候ニ付、如何取計可申候哉、

一御三家方家來、諸大名諸旗本之家來、途中ニ而身形等怪敷者見咎候節、惡黨ニ而も無之節、右之

者立腹致、却而見廻役人迷惑致候様成儀も、前々間々有之候様ニ及承申候、ケ様之趣を近頃は悪黨共、其格合能存知、實は悪黨ニ而候得共其場を偽、右之譯合申候ニ付差免遣候、ケ様之節は、慥怪敷體にも見請候はゞ、私共役所迄召連参候上様子相尋、怪敷儀も無御座候はゞ差免、其節彌怪敷儀も御座候はゞ、吟味可仕候哉、

右之趣共何も難相決御座候ニ付、奉窺候、以上、

卯十一月　　堀數馬

坂部佐大夫

火附盗賊改江

右書付大岡出雲守殿江差上候ニ付、寶暦十辰年二月十二日、松平右京大夫殿御渡候書付、

四人共奉公差口可致旨申候節、捕方ニ差出、差口致候得ば差免候段、名目者違候得共、目明同前之趣ニ紛敷候間、同類致白狀候節、召捕候儀は格別、差口奉公可致旨申候節、捕方ニ差出候儀は、先達而相達候通、彌可爲無用候、併組之者共、悪黨共を不見知候ニ付、其筋存知候手引無之候而は、難召捕由ニ候、以來其筋存知候者を手引させ、或は召連罷越、召捕候分は不苦候、尤人を定手引致させ、并囚人之科を免候儀は、堅可爲無用候、

一宿有之者も怪敷趣及承候節、右同様之手筋を以承糺、彌怪敷儀も候はゞ、召捕候儀、是又不苦候、

一博奕場小屋等江も吟味入、其中ニ而怪敷者引出召捕候儀、只今迄之通たるべく候、

一途中追落等有之由及承、附込候節、怪敷體に候はゞ、御家人ニ而も召捕候儀不苦候、尤御家人ニ而、彌怪敷筋候はゞ、其節可被相伺候、

一屋敷町家ニ候はゞ、町奉行江可訴出事には候得共、若心得違其筋々江不申立、追放候様成儀も有之候得ば、取逃候事ニ候間、屋敷町屋ニ不限、盗賊入召捕置候段訴來候はゞ、組之者差遣召捕

候樣可被致候、

一囚人之內同類馴合候者を、致白狀候節、其白狀致候囚人を召連、其場所江罷越召捕候儀不苦候、

一御三家方、幷諸大名、御旗本之家來ニ而も、身形惡敷歟、怪敷體ニ候はゞ、召捕糺候儀不苦候、

右之通可被得其意候、尤心得違無之樣、可被取計候、

二月

〔德川禁令考二十八捕盜使〕加役方役所幷組支配江申渡等之事

定○中略

一怪敷者改取候はゞ、たとへ小野郎體之者ニ而も、壹人ニ候はゞ、捕不申候樣可被致候事、

一武士屋敷、諸組屋敷、又は院內、社內圍有之內ニ、惡黨者有之由、被及聞候はゞ、此方江被申聞、差圖を被得候上、召捕候樣可被致候、理不盡ニ同心共差遣、召捕候事無用可被致候、

但途中より附込候はゞ、其時之樣子相考、差略可有之候、一度見失候上、追而呼出召捕候儀は、難相成候、其節ハ猶又其所々心附候樣可被致候、○中略

一寺內、社內、町屋等怪敷者有之節、同心共方江相賴申來候共、曾而不相越、各差圖請候上之儀ニ可致旨、被申渡候樣可被致候、

一惡黨居候場所、或風聞を承出候はゞ、其段被申聞、差圖請候上ニ而、召捕可申樣可被致候事、

一廻先身體怪敷、懷中其外所持之內、難相分儀有之候はゞ、其所之番所江預、改候儀ハ役所ニ可被致事ニ候、於番所嚴敷吟味相遂候筋ニ而ハ、曾而無之事ニ候、尤十手當候儀者、格別之強勢之働ニ而も有之候而、繩懸候儀も難相成體ニも候ハゞ、其節差略可有之事ニ候、此旨尙又同心共へも、急度可被申渡候、

但得と承糺候上當有之儀ハ、繩懸番所江預置可被申事、

一町方ニ而ゆすり者有之、若其場より召捕與候樣相賴候共、容易ニ罷越間敷候、町方ニ而不埒を申掛、致難儀候儀ニ候ハヽ、町奉行江可申出候、盜ヶ間敷筋相聞江候樣子、得と承糺候上ニ而、召捕候儀ハ、其節之差略可有之事、

一武家ニ而盜賊捕候節、相對ニ而追放、門前ニ而捕候儀有之由、前々及承候、左樣成儀ハ曾而有之間敷事ニ候、盜賊取候儀、申越候儀も有之候ハヽ、召捕候上、表立取扱有之事ニ候間、其趣可被相心得事、○中略

一水戶殿御屋敷前、水道橋より小石川御門外辻番所迄之内、繩懸候儀仕間敷候、尤腰繩も同樣之事ニ候、

一尾張殿、紀伊殿御屋敷前通、是又前條ニ準ジ可申候、

右之趣急度可被申合候、御役中不相知候共、後日ニ至及承候而も、其節承糺候間、此旨兼而左樣御心得、同心共江も御申渡可被置候事、

丑六月 ○年號未詳　松田彥兵衛

與力中

〔德川禁令考 二十八 捕盜態〕召捕方心得申渡置

申渡置候覺

一召捕方之儀、總而御權威にて江戶中武家方とも恐れ候事に候間、成丈いかつく無之樣ニ相心得、自身番其外町人百姓等ニ尋候節も、隨分神妙ニ應答致し、事相分さへ致候得ば、御用は相辨じ候事、

一乍然無禮有之輩は、自分は兎も角も、上江對し不恐ニ當候間、おこなしくとゞめ候て、以後を嚴敷申含候樣可致候事、

一少しも怪敷者は隨分咎可申候、捕候計ニ而も無之候、身形あやしく不埒ニ見へ候者は、盜賊火附等ニ無之候共咎候得ば、總體之響ニ相成、下々人柄を愼候樣ニ相成可申候、尤とくと相糺相違も無之樣子に候はゞ、差免可被通候、怪敷者召捕候には及不申候、

一捕者より申渡置候衆中之外、致休息湯茶等貰申間敷候事、

一博奕有之候所、町家百姓家は速ニ踏込可召捕候、武家屋敷は其近所辻番などにて、勤并頭姓名等密々相糺書留可被爲相見候、

卯五月

右之通相達置候處、猶不行屆事共有之候ニ付、猶又改申渡候、

〔御仕置例類集一ノ二〕文化九申年御渡

火附盜賊改松浦大膳伺

一奉行所ニ而申付候御仕置を不用もの召捕候節、引渡方之儀ニ付評議、

追放申付候後、御構場所江立入候もの幷入墨を消紛し候もの、私方江召捕、吟味之上、盜惡事不相聞候分ハ、是迄伺之上、町奉行江引渡來候得共、左候而ハ手數も相掛り候間、入組候儀ハ、其始末ニ寄、相伺候上引渡、外ニ子細も無之分ハ、以來不及伺引渡候樣可仕哉、尤町奉行江も懸合候處、彼方ニ而も差支無之旨申聞候、依之此段奉伺候、

此儀町奉行江引渡もの之儀、不及伺候而も差支之筋等無之上ハ、手數も相減候儀ニ付、伺之通可相心得旨被仰渡、勿論前科之儀、寺社奉行、御勘定奉行、掛々之分も可有之儀ニ付、右ハ夫夫元掛江是又不及伺引渡可申段被仰渡可然哉奉存候、

申三月

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三〕文政九戌年御渡

御勘定奉行 石川主水正 曾我豐後守 伺

一越後國江入込候無宿召捕方之儀ニ付評議

書面評議仕申上候處、石川主水正、曾我豐後守江被仰渡候旨被
仰聞、承知仕候、
戌十二月九日
評定所一座

附箋

御代官布施孫三郎、野田斧吉、大貫次右衛門支配所、越後國村々之儀は、海岸附湊等有之、諸國廻船致入津、賑ひ場所多候處、近來無宿ども入込致博奕、其外之惡事いたし、或は役人體に紛し、在町徘徊いたし、難題申掛、金銀ねだり取、農業之妨ニ相成、難儀およひ候趣相聞、捨置候はゝ彌增長可致、殊に此節關東筋嚴重之被仰渡も有之、別而上州續より惡黨入込ミ、一國中之御取締ニ拘り、且は村々難澁いたし候事ニ付、長脇差を帶し、又は鐵砲等持步行候ものは勿論、其外狼藉及不法候ものも、早速召捕吟味詰、私共迄相伺候樣仕度處、右三人支配所之儀、一村每に他支配他領入交り有之候間、銘々支配所限に而召捕候樣に而は、迚も難行屆候ニ付、折々銘々手附手代差出、同國内他支配地頭之無差別廻村爲致、右體之不屆もの見聞次第召捕、且支配所百姓町人共長脇差を不帶樣、厚く致世話、其上不相用ものは、外罪科之無有に不拘、是又召捕一同吟味詰、私共迄相伺候樣仕候はゝ、支配所は不及申、一國之御取締も行屆可申哉、勿論右出役爲致候手附手代共、手當之儀は、銘々御代官手限に而相渡、別段御入用には不申立樣可仕趣を以、取計方相伺申候、依之勘辨仕候處、右申立之趣、難捨置次第ニ付、此度右御代官共伺之通折々三人之手附手代差出、廻村爲致、他支配他領之無差別、惡黨共爲召捕、其外長脇差不帶樣、厚世話いたし候而も、不相用もの之儀も、伺之通爲取計、且此上甲信兩國、其外之儀も伺之通、關東向寄國々、右同樣之次第相聞、難捨置儀も有

之候はゝ、是又同樣爲取計候樣可仕哉、右は評定所一座江も申談候上、此段奉伺候、

此儀評議仕候處、越後國江入込候惡黨共召捕方等之儀、御勘定奉行ゟ相談有之、存寄無之旨及挨拶候儀ニ而、右は難捨置儀に有之、殊に御入用にも不拘候間、越後國江入込候惡黨共召捕方は勿論、此上甲信兩國、其外關東向寄之分とも、伺之通可取計旨、被仰渡可然哉に奉存候、

戌十二月

〔德川禁令考三十一 不良野宿〕文久元酉年二月朔日

浪人幷無宿體之者共、召捕方之儀に付御書付、

大和守殿御渡　三奉行江

此頃近在所々江浪人又は無宿體之ものとも徘徊いたし、無心ヶ間敷事共申掛、及不法候者も有之哉に相聞、不屆之事に候、向後右體之者共立廻候はゝ聊無用捨捕押置、早々可被申聞候、尤手餘り候儀も候はゝ、打捨候共不苦候、時宜に寄り鐵砲等相用候而も不苦候間、領之面々江も申合置、其次第に寄候而は、相互に加勢差出候樣可被致候、

一小身之面々知行所之儀は、捕押方等不行屆之儀可有之候間、最寄万石以上諸家陣屋等江注進いたし、右注進次第、面々城、陣屋等より召捕人數差出、前同樣取計候樣、兼而手筈可被申付置候、

一御料所幷寺社領取締向之儀は、最寄領主之面々心附候樣可被致候、

右之趣關八州御料、私領、寺社領共、不洩樣早々可被相觸候、

二月

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年正月、此月惡行ノ者切捨ヲ許スノ旨再達、

周防守殿渡書付　御府內晝夜廻りの儀に付ては、兼て相達置候次第も有之候處、不都合の儀も有之、去る亥年書面を以て、相達候通り、全く市中に於て、殺傷又は押借、其外惡行相働候もの

は搦捕に不及、其場にて直に切捨不苦候、其余酒狂等にて不法致し候もの、或は廻り人數へ對し、同樣の亂妨人ども、素より鎮靜を主といたし、搦捕可申は勿論の事に候へども、白刃等振廻し、手に余り捕押難く候はゞ、身分柄等の無差別、切捨不苦候、〇下略

〔公裁秘錄五〕一道中筋に而惡黨者召捕方之事

道中宿々往來之ものに紛れ、無宿體之もの集候而も、難改筋も可有之事に候、左候得ば右之内には、盗賊火付等惡黨ものも可有之候得共、宿中ゟ召捕訴出候事、殊之外稀成、是は惡黨をとらへ、御代官江差出候而も、吟味に付、宿中度々被召出、若江戸迄も被呼出、逗留雜用錢等相懸候儀を難儀に存、相捕候儀は一向不心掛、盗人追拂候得者、事濟候樣ニ心掛候由相聞候、向後は其所之御代官に而、吟味不手間取樣取計、宿中困窮に不相成樣に可致旨、御代官江申付候事に候間、怪敷もの及見聞候はゞ、早々召捕、其所之御代官江可訴出候、尤捕違等有之分は、少も不苦候間、得其意召捕可差出候、如此相觸候上は、宿中物入等をいとひ、追拂事之體候儀追而相聞候はゞ、可為曲事候、

右之通可被相觸候

右之通御書付出候間相觸候、此旨可相心得もの也、

丑六月廿九日〇年號未詳

伊賀
對馬

中山道美濃路共宿々
問屋
年寄

〔公裁秘錄三〕一一寺住職之僧、火附盗賊改に而召捕候節之事、

御書面之趣令承知候、正眞儀、當時之身分も一寺住職に而、是迄住職之身分之者、惡事いたし候

節、各方に而御吟味之先例無之候はゝ、拙者共方江御引渡有之候方と存候、

文化元子八月、戸川大學ゟ大久保安藝守江問合挨拶、

文政七八之頃、火附盗賊改長井五右衛門方に而惡事いたし欠落いたし候、一寺仕職を召捕同之上、水野左近將監殿寺社奉行之節、御同人方江御受取、御吟味有之候、欠落いたし候共、三日之内は欠落には相立不申哉に覺罷在候事、

〔草賊續記〕四月〇天保八年三日、自大坂着御屆ヶ書、

去月十九日、徒黨人之內、行衞不相知者、家來共へ申付候、密々市中近在爲相探候處、昨夜當表油掛町、美吉屋五郎兵衞と申もの、舊隱居所ニ大鹽平八郎父子ニ而も可有之哉、隱レ居趣、家來共內密承候處、其筋へ通達仕候はゝ、手延ニ相成、逃去可申も難計、且見知候人も無御座候得共、指急ギ候儀故、不取敢、堀伊賀守組同心、內山彥次郎へ、家來より申遣候處、同組同心四人程、同道仕罷越候ニ付、家來共九人一同申合、今晚右五郎兵衞店前後より召捕手筈仕候處、裏之方通路至而狹く、隱居之處雙方入口手丈夫ニ而、難踏込候へ共、何れ生捕ニ可仕旨、入口ゟ打破、押詰候處、如何仕候や、俄ニ火氣相發、甚敷燃立、平八郎父子之由、剃髮之方自殺仕、火中ニ入燃强一時ニ燒立、寄付兼候內、兩人共燒死仕候、兩町奉行出火ニ付相詰、見分仕候へ共、父子ニ相違無御座候趣申聞候、家來共より前文之趣申達、請差圖引取候段申聞候ニ付、此段御屆ヶ申上候、以上、

三月廿七日　　土井大炊頭

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年五月廿三日、賊アリ姉小路少將ヲ退朝途中ニ要撃ス、

去る廿三日夜、姉小路少將退出の砌、於朔平門邊、亂妨人有之、及刃傷、逃去候段、不容易儀に付、早早探索可致旨、夫々嚴重申付候間、此段相心得、家來末々迄嚴重申付、聊にても手掛り有之候はば、早々申出候樣可被致候、

捕逃亡者

右之趣万石以下以上共、不洩樣可被觸候、

右之通、於京都去る廿三日相達候間、此段向々へ可被達候事、

六月、薩藩ニ於テ姉小路少將ヲ殺害スル者ヲ捕フ、

京都より文通の寫

薩州にて姉小路殺害人、本人押捕置、此度會津藩へ掛合に相成候趣は、本人捕押相成候間、先日御不審を蒙り候家來の者、被差返候樣、掛合中の由、右本人は四辻氏家來の由、當時薩人伏見へ、三千人程登り居候由に御座候、

〔公裁秘錄四〕隱密風聞扎方、并捕方之儀、御代官手附手代江奉行所より申渡候節、御入用立方左之通、

一手附手代一日壹人、銀拾壹匁五分宛、

一遣捨雜用、一日錢三百文宛、

但右之外、川越飛脚賃、小買物代相立候事、

〔御定書百箇條〕科人欠落尋之事

一享保十二年極 主人を　家來

一同 親を　子に

一同 兄を　弟に

一同 伯父を　甥に

一寛保二年極 師匠を　弟子に

右之類江尋申付間敷事

一寛保二年極 事を巧、人を殺候もの、亦は鬪打、或は人家へ忍入、人を殺致欠落候はゝ、先近き親類之內壹人入

牢可申付、尋之儀ハ、三ヶ月不尋出候はゞ、猶又百日限尋申付、不尋出におゐては、尋申付候者之内にて近き續之もの中追放、殘之もの過料之上永尋可申付事、

但欠落者、親類有之候へ共、子方之者に候はゞ、右之内先壹人入牢申付、欠落もの、店請人、幷家主、下人組、在方にては名主、組頭等に尋申付、不尋出候はゞ、親類ハ出牢、尋申付置候もの共は、過料之上永尋可申付候、且亦親類壹人有之、親方之者に候はゞ、右之者共一同に尋可申付、猶不尋出候はゞ、親類は中追放、其餘之もの共過料之上永尋可申付候、

享保五年極
一喧嘩口論にて人を殺、致欠落候者尋之儀、六ヶ月之内尋申付、不尋出候はゞ、過料之上永尋可申付候、尤御仕置之もの一件之内欠落ハ、六ヶ月を限り不尋出候はゞ、殘もの御仕置可申付候、

寛保二年極
但親類入牢、預ヶ等之不及沙汰事、

延享四年追加
一欠落もの有之一件之内、右欠落者尋申付、三十日程見合、不尋出候はゞ、欠落者ニ不拘、當人致白狀候分ハ、御仕置可申付事、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

享保四年
寛保元年 極

一欠落奉公人　請人江三十日限尋申付、三切日延之上不尋出候はゞ過料

但取逃いたし候者ハ、六切日延尋可申付事、

〔天明集成綵綸錄四十八〕明和八卯年十二月

評定所一座江中略〇

一預之者ニも無之、尋計申付、外ニ子細無之分ハ、朱書ニ而、誰致欠落候ニ付、誰江日限尋申付置候、尤右ハ吟味之始末、可申上子細も無御座候間、落着之節、定例之通可申付ト相認候儀、可爲伺之通候、

十二月

(張紙留)岸本彌三郎御代官所奥州信夫郡入江野村修驗南覺院、百姓銀六儀、去酉十一月欠落いたし候ニ付、彌三郎方江村役人ヨリ相屆、日限尋申付有之、六ヶ月相立、永尋之儀彌三郎ヨリ曲淵甲斐守江伺之上、去戌十月六日、永尋申付有之候處、右南覺院、銀六兩人、松平右京亮懸り、盜賊一件引合ニ付、南覺院、銀六兩人、身寄之もの召連出候樣、呼出有之候間、同十一月三日、身寄之ものを村役人召連罷出候處、猶又右兩人行衛日限尋申付候ニ付、日限之度々右京亮方江被出相屆候儀、遠路之事故、路用等相懸り難儀ニ付、彌三郎方江日限之度々相屆候樣いたし度旨右京亮方江村役人願出候ニ付、御代官江爲相屆候例有之哉之旨、右京亮ヨリ根岸肥前守江問合有之候ニ付、一座評議之上、以來右體永尋申付候ものは、外吟味引合有之候共、別段日限尋不申付積ニ付、右村役人ハ尋可差免事、

但本文之一件ハ、南覺院、銀六欠落之儀、定例之通伺書江朱書を入、御下知も相濟一件落着之上、右京亮方ニ而申付候日限いまた六ヶ月不相立段、尋殘有之候間、本文之通極ル、

一右體永尋等申付候ものニ無之、吟味引合之內欠落いたし候もの之尋申付候節遠國ニ候はゝ、日限尋ハ其支配御代官領主江申達、彼地ニおいて六切爲尋、六ヶ月相立不尋出候はゝ、定例之答、永尋等も彼地ニ而爲申渡候積り、

右寬政三亥年、二月十一日評議極ル、

(張紙留)御料所百姓惡事無之貧窮抔ニ迫り、欠落いたし候もの日限尋申付、六ヶ月相立不尋出御代官御預所役人等ヨリ永尋伺候節之下知、以來左之通可認事、

書面誰儀、今以行衛不相知上ハ尋被申付置候もの共、度々日延之上、不尋出候段不埒ニ付、一同急度叱り之上、帳外ニ申付、尋ハ差免、證文取之被差出、跡株之儀ハ、御勘定所江相伺、舊離願出候

はゞ別段可被申聞候以上、

何月

右ハ寛政四子年二月伺之上越中守殿依御差圖相極ル、

但右之分幷是迄永尋申付置候ものも他領ニ而致悪事被捕候由ニ而先方ヨリ御代官幷御預所江懸合御料所ニ而之悪事無之帳外ニいたし置候ものは差構無之段可致挨拶旨御代官御預所役人江廻状を以申達置伊奈右近將監家來江も申達置候事、

〔御仕置例類集二ノ一〕文化元子年御渡

佐渡奉行伺

一於佐州欠落もの有之節取計方之儀ニ付評議、

附箋

書面伺之儀公事方御勘定奉行江問合外御料所同様可取計段佐渡奉行江被仰渡候旨被仰聞承知仕候、

子八月十五日　評定所一座

於佐州百姓町人等欠落いたし候もの有之節取計方之儀寳暦三酉年一國郷村御代官兩人支配ニ相成同八寅年同九卯年明和五子年三度佐渡奉行支配被仰付御代官より郷村引渡ニ相成候節地方取計方品々申送り有之候處欠落もの有之候節村役人訴出候得ハ三十日尋三度五十日尋一度百日尋一度永尋都合六切尋方申渡請證文印形取置候仕來之旨演說書を以申送候ニ付先役共支配ニ相成候而も右之振合を以是迄取計來申候然處外御料所之振合ニ齟齬致し候儀も無之哉爲念當五月公事方御勘定奉行江書面を以問合候處此度挨拶下ヶ札到來仕外御料所之もの欠落致し候節ハ三十日宛之尋六切申付不尋出候得ハ尋申付置候もの咎之上永尋申付候儀定例ニ有之五十日或ハ百日之尋と申儀ハ無之旨申越候間私共評議勘

辨仕候處、於佐州是迄取計方之儀ハ、先年御代官より引渡之節、演說書之趣を以、取計來候儀ニ而、外ニ何ニ而も見合候書留等も無御座候間、以來ハ五十日尋、百日尋相止、外御料所振合之通、三十日宛之尋六切申付、不尋出候はゞ、尋申付置候もの咎之上、永尋申付候樣可仕候、依之奉伺、

下ヶ札

本文咎之儀、一通之欠落人不尋出、永尋申渡候節ハ叱り、重キ譯合も有之候はゞ過料、又ハ急度叱り等之咎ニ相心得候樣可仕候、

此儀欠落もの取計方之儀、外御料所之取計と齟齬いたし候而ハ如何ニ付、猶又公事方御勘定奉行江問合、以來外御料所同樣ニ可取計旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

子八月

〔御仕置例類集二〕文化十酉年二月廿一日

尋申付方之儀ニ付相談書

御相談書

曲淵甲斐守
小長谷長門守

公事吟味もの之内欠落者、日限尋之儀、六切相立候而も、基本之一件落着迄ハ、何ヶ度も三十日限尋日延申付來ル處、左候而ハ多人數引合候一件等、格別吟味手間取候節、尋申付置候在方之者共度々出府致し、難儀不少候間、以來ハ六切目屆出候砌、追而呼出候迄無油斷可相尋旨申渡、繼添證文取之、其後ハ爲屆候ニ不及、一件落着之節、一同差紙を以呼出、咎之上、永尋申付候積、改革致し候方ニ可有之哉、及御相談候、以上、

酉二月

右文化十酉年二月廿二日、一座評議之上決、

〔新張紙留〕永尋之もの、人別帳名前相除候程合之事、村方欠落ものゝ内、永尋申付候分、宗門人別帳ニ年數無限書載來候由ニ而、植村駿河守殿御預所役人、心得方相伺、前々評議濟等も不相見候ニ付、今般評議之處、右ハ永尋申付候節ヨリ、大概六十ヶ年位も相立候分ハ、名前相除可然筋ニ付、其段申達候積り、

右文政六未年六月十八日、内寄合ニおいて、石川主水正、松浦伊勢守評議之上極ル、

〔公裁秘鑑〕一江戸宿江預之もの欠落尋方之事

文政十一子年三月九日、公事方奉行衆より達之趣左之通、

都而公事吟味物等ニ而、吟味中手鎖宿預、又者宿預申付被置候もの、欠落いたし候節者、差添人江戸宿江日限尋申付置、六切相立候上ニ而、差出之儀、被相伺候も有之候得共、江戸宿預ニ相成候上者、以來預之もの逃去、尋被申付候次第ニ至り候はゞ、其節直ニ差出之義可被相伺候、尤右者預ヶ申付被置候者共而已之取計ニ而、一件吟味中之もの迄可被差出事ニ者無之候間、可被得其意候、

以上、

〔公裁秘鑑〕一尋申付候もの江過料申付方之事

欠落人尋申付候儀、其者之親類、組合、村役人江尋申付候定例に而、近き親類に候共、他領之者江は先は不申付、且又欠落いたし候、當人ゟ目下之親類江は、決而尋方不申付事に候、落着之節、御下知、に而、重立候もの江、過料鐚何貫文、其外之もの共は急度叱りと御附札有之節、其重立と有之候は、欠落人之親類に候事、親類江は尋不申付節は、名主兩人以上有之候共、筆頭之名主江過料申付、名主庄屋も無之村方に候はゞ、筆頭之組頭歟、年寄之内江壹人過料可申付事、

是は秋月勇之進、從來取計來候由、評定所一統之心得ニ候、

〔德川禁令考後聚三十三行刑條例〕安政二卯年十二月

永尋之もの被召捕候迄不尋出、武家之家來御咎之儀ニ付相談書

御相談書　　井戸對馬守

久須美佐渡守、火附盜賊改之節、武家之家來預ヶ之者無之、出奔欠落等いたし候節、日限尋申付置候處、定例之日數相立候得とも不尋出候ニ付、永尋申付置候もの召捕候處、永尋申渡を受候者被召捕候迄、不尋出廉何樣之御咎ニ相伺可然哉、先例無之趣を以、問合候ニ付、取調候處、文政十二丑年永田與左衛門、火附盜賊改之節相伺、一座江評議ニ御下ヶ被成候、清水家老支配寄合朝比奈內藏助、長屋內ニ住居いたし候清水近習番朝比奈良助次男ニ而、同人厄介ニいたし置候、朝比奈重次郎、行衛日限尋之儀、伺之上、右內藏助江申付置候處、日數相立不尋出ニおゐてハ、如何可申渡哉之段相伺、評議之上、武家之家來等出奔いたし、武家江行衛尋申付置候分ハ不尋出候とも、右之廉を以御咎ハ不申付、永尋申付候儀ニ有之候間、永尋之儀、內藏助江被仰渡可然哉と申上、其通相濟候、評議濟有之、武家家來之儀ハ雜人とハ違、日限尋申付置候もの不尋出候節、永尋申付候迄ニ而、咎ハ不申付儀之處、却而永尋申付候後被召捕候迄不尋出廉を以、咎申付候樣ニ而ハ、本末不都合ニ付、右評議ニ見合、日限永尋之差別ハ有之間敷と見居、御咎之儀不及伺方ニ可及挨拶と、同役播磨守及相談候處、天保十四卯年、町奉行鳥居甲斐掛紀伊殿徒士、井口平五郎儀、永尋申付置候處、被召捕候迄不尋出候ニ付、急度叱リ相成候例有之、且日限相立永尋申付候ハ、未當人行衛不相知儀ニ而、追而可尋出も難計、差當不念無之儀ニ付、御咎ニハ及間敷候得共、今般問合之趣ハ、右例的當ニ付、御咎付候方相當ニ可有之旨申聞候ニ付、右平五郎御咎附一覽いたし候處、天保三辰年、町奉行筒井肥前守掛、田安殿小道具組頭山口又十郎儀、新組並之ものニ而、欠落いたし候旨屆、行衛日限尋申付置候處、同人被召捕候迄不尋出候ニ付、急度叱リ相成候例を引用有之、右ハ何れも伺之

上、御差圖相濟候例ニハ候得共前書評議濟ニ見合候而ハ、的當とも難申、且拙者御役所ニ而ハ、日限尋申付置候ものを、組之もの召捕候とも御咎不申付仕來ニ付、永尋中之ものハ、猶更御咎ニハ及間敷と見居候得共、右之通先例區々ニ而ハ差極難及挨拶候間、文政度一座評議濟、其外例書相添、此段及御相談候、

卯　十二月

御書面之趣、別紙書類をも、一覽勘辨いたし候處、永尋之もの被召捕候節ニ至リ、御咎申付候而ハ、本末不都合と之見込も御尤ニ候得共、文政度之評議濟ハ、全日限相立候節、永尋申付候迄之儀、且日限相立候節ハ、右體永尋申付候故、體裁も宜候得共、永尋之ものを被召捕候迄不尋出類ハ、咎無之候得ハ、外ニ申渡方も無之、小事ながら取締ニも拘リ可申間、伺之上、急度叱置候先例有之候上ハ、矢張急度叱リ置候方可然哉ニ存候、此段及御挨拶候、以上、

辰　四月　　寺社奉行

御勘定奉行

別紙例書

文政十二丑年

當十一月廿九日評議いたし可申上旨被仰聞御渡被成候、永田與左衛門相伺候、清水家老支配寄合朝比奈内藏助、長屋内ニ住宅いたし候、清水近習番朝比奈良助次男ニ而、同人厄介ニいたし置候、朝比奈重次郎行衛日限尋之儀、伺之上、當六月中右内藏助江可申付旨、清水家老江相達置候處、此節迄尋出不申候ニ付、前々申付來候日數相立、彌不尋出ニおゐてハ、如何可申渡哉之段相伺申候、

此儀先例相糺候處、差當相當之例相見不申、依之勘辨評議仕候處、一體吟味筋有之候、武家之

於管轄外追捕

家來等出奔いたし、武家江行衛尋申付置候分ハ、不尋出候而も右之廉を以御咎ハ不申付、永尋申付候儀ニ有之、今般之朝比奈內藏助儀ハ、先達而評議仕申上置候通、布衣をも被仰付候身分ニ候上ハ、旁重次郎行衛三十日宛六切相立不尋出候ハヽ、同人行衛永尋之儀、清水家老より內藏助江可申付旨、永田與左衛門より右家老江被申達候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

丑十二月

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和八卯年十二月

評定所一座江

道中奉行相伺候、奥州白河宿ニ而召捕候、無宿榊原刑部左衛門一件吟味之內、

橋本町四丁目藤右衛門店 彌五兵衛

七郎右衛門召連可罷出旨差紙を受、請書差出候上ハ、不取逃樣可心附處、無其儀、七郎右衛門致欠落、其上尋申付置候處、不尋出、旁不埒ニ付、過料三貫文、

右之通申渡候間、以來一座ニ而も其趣ニ可被心得候、

〔張紙留〕明和七年寅九月十四日

右近將監殿 美濃守 甲斐守 彈正少弼 江 御渡

三奉行江

一私領之もの吟味筋有之、御代官手代差遣召捕候節、是迄領主地頭江通達無之由ニ候得共、左候而ハ、領主地頭ニ而疑候筋も可有之哉、似役抔紛敷儀も出來可致哉ニ候間、以來ハ領主地頭江も通達有之候樣可被致候、尤隱密ニ而差遣候節、以前通達有之候而ハ捕方之差支ニも可相成候はば、手代共差遣候以後成共、通達置候樣可被致候、

九月

〔御仕置例類集一ノ二〕文化九申年御渡

浦賀奉行伺

一支配所内ニ而召捕候、盗賊之同類、他之支配所ニ罷在候節、捕方之儀ニ付評議、

私支配所之内、怪敷風聞之もの御座候節、召捕吟味之上、盗いたし候趣及白狀、右同類他支配之場所江罷在候節ハ、組之もの差遣召捕候儀ハ如何可仕哉、初鹿野傳右衛門勤役中、支配所之もの、他支配之場所ニ罷在、召捕候儀ニ付、奉伺候處、支配所之者、他所江罷越、盗惡事いたし候ハ、御屆申上候上召捕可申、尤差懸候ハヾ召捕候上ニ而御屆可申上、且又他所之もの、支配内江罷越、盗惡事いたし候ハヾ、御屆ニ不及召捕可申、勿論近郷之もの惡事相聞候とも、支配所之もの江不拘儀ハ、其御代官領主地頭江心附ケ候ハ格別、召捕候儀ハ致間敷旨、先達而被仰渡候處、前文之通支配所之もの拘り合同類他所ニ罷在候節ハ、如何相心得可申哉、例も無御座儀ニ付、此段奉伺候、

此儀寛政三亥年、日光奉行相伺候、惡黨幷怪敷もの捕方之儀ニ付、取計方之儀、評議仕申上候處、日光御神領ニ而、怪敷もの見掛、同心共召捕候節、逃去近邊御料私領江立入候はヾ、其支配領主地頭江申達置、同心共差遣為召捕可申、若申達候上ニ而ハ手延ニ可相成ものハ、直ニ附込召捕、其段跡ニ而可申達、尤右ニ引合候もの御料私領ニ有之節も前書之通可心得旨、日光奉行江被仰渡候例有之、右引合之ものニ見合、浦賀奉行支配所之内ニ而、召捕候もの之同類之儀、別段御屆ニ不及、其支配幷領主地頭江申達候上、組之もの差遣召捕手延ニ難相成ものハ、捕候跡ニ而可申達旨、被仰渡可然哉ニ奉存候、

申四月

朱書
評議之通濟

〔新張紙留〕（朱書）評議書留帳二十壹番
（朱書）文政三寅年（〇三年恐元年誤）九月、石原庄三郎伺、甲州鹽田村百姓傳右衞門、盜いたし候一件ニ付、大坂町奉行懸合答書、文政元寅年十二月、荒尾但馬守、彥坂和泉守ヨリ、右挨拶并下ヶ札、

御答書　佐久間備後守

（文化勘）一當地ニ而召捕候もの、江戶并支配國之ものニ無之、餘國御料私領之ものニ而、惡事も餘國ニ而致、當地并支配國ニハ拘り合無之趣、白狀いたし候者ハ、右人別差出候、御代官領主地頭江引渡候事ニ候哉、

（大坂）此儀餘國ニ而ハ惡事ニ候はゞ、人別差出候、御代官領主地頭江引渡候儀ニ而、取逃ニ限り、私領之分ハ、召捕候故を以、當地ニ而吟味仕來申候、奉行所有之向御代官所ハ、夫々江引渡候心得ニ御座候、

但本文之儀ハ、當表ニ而召捕候もの之儀ニ御座候、中國筋之儀ハ、小田切土佐守殿御勤役中、寬政三亥年、成瀨因幡守勤役中、同十午年、年來手當申付置候、盜賊共備中國江立入、土地之者も馴合居候由相聞候ニ付、前々より仕來之通り、組之者差遣、右盜賊并土地之ものも召捕、吟味詰御仕置申付候、尤其後伊豆守殿御書取、并御老中方ヨリ追々御下知之趣も有之候ニ付、當表吟味之引合ニ不拘、折々組之者共彼地江差遣、中國四國徘徊之無宿盜賊ハ勿論、中國筋土地之者、其所切之惡事ニ而も、組之もの召捕歸り候分ハ、當表ニ而吟味詰、御仕置申付候、當時之仕來ニ相成申候、此段乍序得貴意置候、

（文政勘）書面本文ニ、餘國ニ而も惡事ニ候はゞ、人別差出候、御代官領主地頭江引渡候と計有之候ニ付、右之趣ニ而ハ、人別差出候一支配并一領內之惡事ニ不限、他領之惡事有之者も、支配

領主地頭江御引渡有之候、仕來之樣ニ相聞候得共、三ヶ條目ニ、其表并外引合無之分ハ、夫夫江引渡し候、仕來ニ有之候趣ニ而ハ、此一ヶ條之儀ハ、一支配又ハ一領內ニ而惡事いたし候ものニ限リ可申哉、

但奉行所直支配之ものと、別段之儀ニ可有之哉、

此儀一支配一領內ニ而惡事有之候ものニ限リ、人別支配之御代官、領主地頭江引渡候儀ニ有之、奉行直支配所之ものも、一支配限之惡事而已ニ而、當表并支配國內ニ而ハ惡事無之分ハ、同樣ニ相心得罷在候、

一關東外之國々、私領之分ハ、寺社奉行江引渡候心得ニ候哉、

文化 大坂 此儀被仰聞候通之心得ニ御座候

書面關外國々、私領之分も、一領內之惡事ニ候はゝ、矢張領主地頭江御引渡ニ可相成哉、關外私領之儀、寺社奉行請持之場合ニ而、御引渡ニ相成候事ニ候はゝ、關東私領之ものハ、拙者共江御引渡ニ可相成筋ニ而、關內外之差別ハ有之間敷候得共、例相見不申候事、

此儀關外餘國私領之分も、一領內之惡事ニ候はゝ、御書面之通、其領主地頭江引渡候心得ニ御座候、尤他領引合有之惡事ニ而、寺社奉行衆江引渡候先例ハ、十三ヶ年以前寅年二月、飛驒國之者、紀州ニ而娘を被奪取候由を、當御役所江訴出、右ニ付紀伊殿當表屋敷詰役人迄相達、紀州之者呼出し相糺候處、右奪取候者ハ、何國之ものとも不相知候得共、其節之先役共ヨリ、寺社奉行衆江及懸合候處、其御地江差出候樣、任返書引渡候先例等も有之候間、一領內之惡事ニ無之分ハ、關內ニ候はゝ各樣、關外ハ寺社奉行衆江引渡方之儀御懸合ニおよび候心得ニ御座候、

一前書之通引渡候ハ、町奉行并遠國奉行有之場所之ものニ限リ候心得ニ而、餘國御料私領之者、

餘國ニ而之惡事ニ候とも、召捕候故を以、當御役所江引請、引合之もの遠國ニ候共呼出し、一件吟味詰候仕來ニ候哉、此儀町奉行幷遠國奉行有之場所ハ勿論、御料私領ニ而も、當地幷外引合無之分ハ、夫々江引渡候仕來ニ而、餘國之惡事ニ、餘國之引合有之分ハ、取計方其節相伺候心得ニ御座候、當表吟味物之引合ニ而ハ、遠國ものニ候共、呼出吟味仕來申候、

御書面餘國之惡事ニ、餘國之引合有之分、御取計方之儀、其節御伺可有之趣ニ候處、其後御伺濟之例有之候哉、承知いたし度候事、

此儀本文答之後、餘國之惡事ニ、餘國之引合有之類之異變伺濟等之儀、未無之候、

一召捕候もの、從來之無宿ニ而ハ、譬バ江戸其外之惡事白狀いたし、當地幷支配國ニ拘リ合無之節之取計方ハ如何ニ候哉、

此儀盜賊ニ限リ、召捕候故を以、當地ニ而吟味仕來、勿論江戸其外遠國奉行有之場所ハ、其節及懸合、仕儀次第ニ而、吟味詰申候、外之惡事ニ候はゞ、御料私領共、其節之仕儀ニ寄、取計候心得ニ御座候、

右之通御座候、以上、

寅九月　佐久間備後守

〔政談秘書三〕一他支配之者、私御代官所ニおいて盜いたし、差押候ハゞ、先方支配江ハ不引渡、私方ニ而入牢申付置、先方之手附手代爲立會、吟味詰、私一名を以相伺候様可仕哉、

但し盜いたし候者、私領之者ニ候ハゞ、差押品ニ寄入牢等申付置、先方江も懸合、一ト通始末致吟味、取計方相伺候様可仕哉、

御附札
書面本文但書共、可爲伺之通候、

一私御代官所之者、私領之者と申合、盜惡事いたし、私領ニ而被捕候類ニ而も、私領引合有之候は

ば私御代官所之者ハ、私方江引取置、其度々伺之上、取計候様可仕哉、

御附札　書面其方御代官所之者、私領江盗ニ入、先方ニ捕置候段、懸合有之候ハヽ、不及引取候、捕候其領主地頭ヨリ、奉行所吟味之儀可申立旨、可被致挨拶候、〇年月不詳

〔公裁秘錄 一〕一惡黨もの召捕方之事

惡事いたし候ものを召捕候時、他領江逃込候節者、其所之役人江懸合、先方ニ而召捕可引渡旨申聞候ハヽ請取、小給所等ニ而手當不行屆候はヽ、掛合之上附込召捕、其所之者ニ候はヽ、不取逃樣手當之儀、先方役人江申談、預置候共、又者支配所之もの、或者無宿に候はヽ、引取先御屆いたし置、直ニ吟味詰相伺、他支配、他領之ものに候はヽ、取計方相伺、重キ御役人之領分知行、江、逃込候者を召捕候はヽ、支配所之者ニ而も、其段早々御屆可申候事、尤支配所掛合無之候共、致盗惡事候者は、召捕入牢申付候心得に候事、人殺、就付、其外致惡事候もの、他支配、他領支配所内、或者支配所内之御朱印地寺院江逃込、先方より屆有之候はヽ、早速召捕引渡遣、支配所内之ものニ候はヽ捕置相伺、且支配所内に同類有之候はヽ、引渡候本人不取逃樣ヲ手當之儀、先方江掛合置、其段相伺可申事、一支配所之ものを殺候歟、盗賊ニ逢、他領之もの仕業之由、手懸相知候はヽ、右名前之もの不取逃樣、先方役人江懸合置、其段相伺候積、猥ニ他領江附込召捕候儀者、不可然事ニ候、支配所之もの申合、萬一徒黨狼藉有之者、可成丈手人數ニ而、召捕取鎮候樣取計、人數少ニ而手餘候はヽ、不及伺向寄之領主役人江懸合、足輕等借請、手代役人差添、召捕可然筋ニ候、

〔公裁秘錄 四〕一關外村々江火附盜賊改組之もの相越、捕物いたす節心得方之事、

天保二卯年奥州支配御代官より加役方組廻り之もの、捕物に相越節、心得方伺候處、同十二月廿三日、於評定所留役土屋鐵四郎相談之趣、左之通請書差出候ニ付、廻狀到來、

御請書

私御代官所内奥州村々江、永田與左衛門様同心召捕之もの有之罷越、亦者右村々之もの同心旅宿江呼出候儀、井與左衛門様より御代官所之もの呼出等之儀に付、夫々心得方御代官より奉伺置候處、以來右同心關外江相越候義、前以相分居候分、又は御代官所之もの、與左衛門様より御呼出之分は、御同人様より御奉行所江御通達有之候筈に候間、御代官江者御奉行所より御達可有之、尤在出先より關外江追込召捕候節は、同心より手附手代之内江及通達、同心旅宿より御代官所之もの呼出候節は、別段通達無之筈に付、關外支配有之候御代官之分江は、其旨可申通段、銘々御代官江可申聞旨被仰渡、承知奉畏候、仍御請書如件、

天保二卯年十二月廿七日

池田仙九郎手附　相澤萬吉印

島田帶刀手附　中村與次兵衛印

寺西藏太手附　土屋伴藏印

〔類例秘錄八〕御料所下總國千葉郡嶋田村百姓三郎兵衛儀、同國永尾村へ罷越候途中ニおゐて、水戸殿町方役人大竹次郎右衛門等召捕次第先而被仰聞候趣、役人共江相達、水戸殿國許江申遣し相糺候處、右三郎兵衛儀、人殺ニ拘り候義、相聞候ものニ有之、尤御料所之ものと不相心得、佐倉臼井村ニ而召捕候旨、御料所江踏込召捕候義者不致事ニ候得共、外ニ而召捕候義者、前々も有之義ニ候、乍去御料所のものに候得者、召捕候儀可及懸合處、不行届事ニ御座候、尚又糺之上者、深疑敷も無之義候間、近日村方江相返可申候、此段及御挨拶ニ候趣、役人共申聞候、右之通ニ付、此上水戸殿役場江村方呼出可有之哉も難計候間、譬呼出有之候而も不罷出、其段私役所江届出、差圖を請可申旨、嶋田村役人江申渡置候、尤大竹次郎右衛門外三人之もの共、水戸殿領分を離、遠方迄踏出召捕候儀とも有之、左候ハヽ村名等も兼而相分申儀ニ付、支配地頭之姓名をも承糺、懸合之上取計方も可有之處、其譯も無之、猥ニ御料所之ものを召捕參、右之通返書差越候迄ニ而、事相濟候義

於寺社境内追捕

と相心得、以來私支配所之もの猥ニ召捕候義有之候はゝ、御三家方ニ候共、公儀江被爲對不容易と奉存候、此上御城附江懸合候義如何可仕哉、返書并別紙共相添、取計方奉伺候、以上、

文化十三子年四月　竹垣庄藏

下ヶ札

本文三郎兵衛儀、水戸江入牢等申付候儀、且人殺一件之もの共差圖ニ寄、召捕候義ニ候はゝ、領分之もの共、一同打合之吟味等も可有之哉、返書之趣ニ而者難相分候間、是等之義も掛合ニ而可然哉、依之下ヶ札を以申上候、

書面并水戸殿御城附より返書之趣令承知候、此上御城附は、自分共より掛合におよひ、追而取計方申達べく候、且三郎兵衛を相返可申趣掛合有之候而も、取計方不申達内者、自分共より差圖無之候而者難受取段申達、先不受取積、其外役場より村方呼出し等有之候はゝ、伺之通相心得、其節取計方可被相伺候、以上、

子四月〇中略

其方御代官所下總國嶋田村百姓三郎兵衛儀、水戸殿町方掛役人より書狀を以、引渡有之候間、請取候上相糺被申聞候趣令承知候、右ニ付其趣を以、以來右體之儀無之樣、尚又御城附江申達置候間、可被得其意候、已上、

子六月

〔張紙留〕天明八年申十一月十四日、伊豆守殿近藤吉左衛門を以御渡承付いたし、同人を以肥前守返上、

申十一月十四日　柳生主膳正
久世丹後守
承

根岸肥前守
久保田十左衛門
寺社奉行

在方江立入候者召捕方之儀付申上候書付

寺社奉行ニ而、是迄寺社境内之外ニ而ハ、召捕候もの一切不仕事ニ有之候處、見極候引合之もの等、町方江入込候節ハ、其者其儘見通し遣候儀も如何之事ニ候得バ、右體之節、幷家來共廻り先ニ而見懸町奉行江及通達候も、手延ニ可相成節等ハ召捕可申、尤役人差添不申砌ハ無用ニいたし、其外一通之儀ハ只今迄之通仕來、猥りニ不相成樣ニ可心得旨、御書付を以被仰聞承知仕候、然上ハ同樣寺社境内ニ而召捕候ものも引合、境を越御府外在方等江逃去候節も、宥逃遣し候ハ同樣之趣意如何ニ付、役人差添候はゞ、御府外ニ而も同樣ニ相心得、其外一通之儀ハ、前書御書付之通仕來みだりニ不相成樣可仕心得ニ而罷有べき儀ニ奉存候ニ付、爲念此段申上候、

根岸肥前守

十一月

〔德川禁令考二十八捕盜條〕加役方役所幷組支配江申渡等之事

定〇中略

一上野御山内ニ而繩懸候事仕間敷候、若怪敷者ハ手を引、御山内を出候而繩懸可申候、
　但三枚橋より内、仁王門はづれ山下之邊ニ而、繩懸可申候、池之端内外共、御山内之心得ニ而、取計可被申候、
一増上寺山内、右之趣準シ可申候、〇中略
右之趣急度可被申合候、御役中不相知候共、後日ニ至及承候而も、其節承糺候間、此旨兼而左樣御心得、同心共江も御申渡、可被置候事、

捕盜疑者

丑六月〇年號不詳　松田彥兵衛

與力中

〔新張紙留〕日光奉行江捕もの相達、目籠入ニ而差出候節、宿村觸之儀ニ付、評議之事、

一日光御神領之もの、不屆有之、日光奉行江相達召捕、又ハ目安掛りニ而、同御神領之者相手取候內、手當申付、目籠入ニ相成候分とも、三千石以下知行之もの同樣、御勘定奉行ヨリ右宿村觸差出候積り、

是ハ一體日光奉行支配所之者、差出候事ニ付、御勘定奉行より、觸書差出候儀、不相當之樣ニ候得共、是迄觸書差出候例も多分有之、其上素々御勘定奉行請持國內之儀故、京大坂町奉行所ヨリ、支配國之もの、目籠ニ而差出候節、同心共差添差出、右同心江御褒美銀被下候振合同樣、取計候も却而如何ニ付、本文之通治定之事、

文政元寅年十二月六日、主計頭宅內寄合ニ而極ル、

〔御當家令條二十三〕覺〇中略

一在々所々堂宮幷山林にからまり、不審成もの於見出は相搦、庄屋幷一鄉之者相談之上、其所之地頭代官江可渡之、とらへ候儀難成候はゞ、其村之庄屋所江可申屆之、御褒美可被下之、然上は庄屋早速人を集め、入精可搦捕之、自然捕候儀難成候はゞ相慕之、おちつき所へ斷、搦捕候樣可仕、若聞のがし見のがし於令致欠落は、縱後日に聞候とも可爲曲事事、〇中略

右在々所々盜賊之族有之而、切々惡逆を致候事、給人之面々御代官之輩、油斷被思召候、堅相改惡黨穿鑿すべし、若令無沙汰、此後、惡人於有之は、其所之給人代官常々可爲不念候、此外御法度之儀、彌念入可申付者也、

寬永十四年丑十月廿六日

〔御當家令條二十三〕盜賊人穿鑿條々

一關東中在々所々御料私領寺社領共に、毎年五人組堅可申付之、耕作商賣をも不致、又は遠國江切々相越輩、博奕其外賭之諸勝負をこのみ、不似合衣類を著し、不審成者於有之は、早速可申出之、若隱置彼輩惡事をなし、脇より顯に於は、其者幷親子兄弟之儀は不及沙汰、名主五人組迄御穿鑿之上、隨科之輕重、可被行罪科、惣而一夜泊に他所江相越候といふ共、其行所幷用所之子細、名主、五人組に相斷之、可罷越事、

附盜賊人の訴人には、其同類より後日にあだをなすに付て致氣遣、不罷出候由、其聞有之、向後は地頭代官奉行所江、ひそかに以書付可差上之、御褒美被下之、あだを不成樣に、可被仰付事、○中略

右條々、御料、私領、寺社領共に、在々所々村切に、名主、百姓、五人組、此趣堅相守候樣に、毎年正月十五日を限、急度申付之、手形可取置之、若令油斷於不申付は、其地頭代官可爲越度者也、

明暦二年十二月日

〔御當家令條二十七〕覺○中略

一頃日江戸中、はし／＼火事出來候、あやしきもの於有之は捕之、支配方迄急度其子細可申達、同類たりといふ共、其科をゆるし、御褒美可被下之、自然見遁以來露顯候はゞ、可爲曲事由、面々支配方へ可被相觸者也、

延寶三年卯二月朔日

〔科條類典下五〕享保七寅年十一月

十月ゟ三月迄、日本橋計に立候高札、

覺

一火を付るもの召捕、町奉行所江可來事、
一火を付る者之在り所をしらば、早速可訴出事、
右之品々有之は、御褒美として此銀子三拾枚下さるべし、たとひ同類たりといふとも、其科をゆるし、此御ほうび下さるべし、怪敷ものは不慥成候とも、召連來るべし、若火を付るものを見のがし聞のがしに仕、追而相知候はゞ、其科おもかるべき者也、

寅十一月日　　　奉行

〔諸例類纂六〕天保十三年寅五月三日、大目付神尾山城守殿江差出、同十一日御付札を以御挨拶、
武家方家來之者江御疑念之筋有之、町御奉行廻り方之者、於市中主人其身之姓名ハ勿論、御疑念之筋一應之尋も無之召捕、直様大小袴等取上、縄懸ケ、最寄之名主方へ連行、足江鎖付之金物等被懸、取調之上、申口相分、最早御疑念之筋ハ無之趣ニ而被差戻相濟候而も、右様之始末ニ到り候上ハ、御用番様江御屆申上候筋ニ御座候哉、此段御問合申上候、以上、

脇坂淡路守家來
井口源左衞門

五月

御附札
書面ハ御聞置被申上候方可然存候、

一同十二日御用番堀田備中守殿御退出江、源左衞門持參、公用人木村軍左衞門面會、左様之例無之、取調手間取延引之旨、且內見之義申述候處、思召無之間、表へ差出候様被申聞、御表へ差出之、
私家來山田定左衞門と申者、去月十三日、芝口三町目伊勢屋藤兵衞と申者方へ無餘義譯ニ而金子引替ニ罷越候處、此節外場所ニ而多分之金子紛失之折柄ニ付、疑念之趣ニ而、遠山左衞門尉組同心、豊田磯右衞門、山本兵太夫、片山伊左衞門、瀧田源次郎、大声五郎右衞門、其外手先之者罷越、右藤兵衞宅ニおゐて、其身之姓名等ハ勿論、疑念之筋一應尋も無之召捕、直様大小等取上、縄掛、最寄同町名主深野長兵衞方へ連行、尙又縄懸直し、足江鎖付候金物等懸、取調

之上、申口相分、最早疑之筋無之趣ニ而差戻相濟候得共、右樣之始末ニ到候儀ニ付、此段御聞置被成可被下候、以上、

五月十二日　　脇坂淡路守

右ニ付、大小御目付衆へ右寫奉札差出之、

四月十三日、脇坂殿御番中ニ而左之通、

口上

私儀昨十三日、古金小判ニ而拾五兩貳歩、金貳兩、都合十七兩貳分持參、芝口三丁目伊勢屋藤兵衛方へ兩替ニ罷越候處、遠山左衛門尉樣御組之由ニ而四人其外手下之者五六人、同所へ罷越、上意之趣ニ而御召連ニ相成同町名主深尾長兵衛方迄大小取上、腰繩ニ而罷越、長兵衛方ニ而本繩懸、足江ハ鎖付差置、其上御組之者被申聞候ハ、此間ヨリ古金を致兩替、既ニ今日も古金兩替いたし候、右金子之義ニ付而ハ、此節之通用無之金子故疑敷、且此節外場所ニ而大金紛失有之、右之金子ニ相違有之間敷趣ニ而召捕候趣被申聞候處、右金子之義ハ、私妻之祖母ニ而、南八町堀万屋太兵衛と申者之母、三月十日病死仕候後見出し候金子ニ而、妻之母預り置候處女之義、并悴も年若之儀ニ付、私へ預候金子ニ御座候、當時通用も無之金子故兩替呉候樣母任申聞、兩替ニ罷越候義ニ御座候、右故前件之仕合、然處太兵衛、并母共御呼出ニ而金子之實否も相知れ、夫より私義引取候樣被申聞候處、右樣成義故、留守居江も申聞、差圖之趣を以引取可申旨相答置、家田清兵衛迄、荒增書面を以申遣、同人罷越候ニ付、右之趣相咄、御留守居へも相談之上ニ而引取ニ罷越候旨相賴置、其段出役江も申遣候處、右金子之義ニ付而ハ、最早相分候間、子細も無之引替候而も宜趣、且其上平兵衛江も被申聞、此段差障義之決而無之、御呼出ニも成不申旨呉々も被申聞、金子十七兩貳分、袴大小とも被相渡候ニ付、相

改請取候上ニ而、清兵衛同樣罷歸候、

四月　　　　　　　　　　山田定右衛門

〔新張紙留〕

ヒレ

書面伺之通、石川主水正江被仰渡候趣承知仕候、

酉八月廿二日　　　　　　評定所一座

捕方役人江手向候もの之儀ニ付、申上候書付、

書面申上候通、以來御仕置可相伺旨被仰渡奉承知候、

酉八月廿二日　　　　　　石川主水正

今般別紙を以、御仕置相伺候、佐州逃去候もの共之儀、彼地逃去候節、捕方として差向候、佐渡奉行組同心、其外船手之もの共江、手向いたし候段、全公儀江對し候不屆ニ而以後之御取締ニも可拘儀ニ付、再應先例相糺候處、右體捕方役人と乍存手向候もの之儀是迄之例、自分之惡事可顯を厭ひ、其人を可致殺害とて疵付、或ハ詮議したる人に遺恨を含手疵爲負候もの死罪、但切殺候はゞ獄門と有之御定ニ准じ、捕方之ものニ手向、疵付候へば死罪、不疵付ハ死罪ニも不相成儀ニ御座候得共、右御定ハ何れも公儀江對し候筋ニハ有之間敷、然レ共右御定同樣ニ相成候而ハ、御仕置之筋可然とも難申、一體捕方役人等江手向候ハ、全公儀江對し手向候筋之處、近來間々右樣之類有之、勿論長脇差等之惡黨共、召捕候節ハ、御威光を顯し申聞、差押候儀之處、無頓着手向候もの出來候樣ニ而ハ、御威光ニ拘り、不容易儀ニ付、厚勘辨仕候處、先例御仕置目當ニ見合候御定ハ、前書之通、何れも公儀江對し候筋ニハ有之間敷候間、右御定同樣ニ而ハ、相當仕間敷候ニ付、右より重く、以後捕方之ものと乍辨、刃物を以手向候ハ勿論、外品ニ而も、其節之仕儀ニ寄、手向候分ハ、一同死罪、疵付候ハゞ獄門と、御仕置取調相伺候樣可仕哉ニ奉存候、右ハ同役并一座江も相談仕候處、

一同存寄も無之候間、此段別紙を以申上候、以上、

申九月　　石川主水正

〔捕者帳〕一享保八年卯八月廿二日八ッ時過、元飯田町市郎右衛門店薬種屋三右衛門召仕又七儀、傍輩長助ニ手負セ、主人居宅土藏作り二階へ脇差を抜持取籠罷有候由、町人共訴出候ニ付、爲呼使、此方ゟ林與市郎、平野武左衛門、美濃守殿ゟ伊澤定右衛門、淺尾庄次郎都合四人罷越候處、二階へ取籠り梯子を引罷有候間、檢使請度旨、平野武左衛門場所より罷歸申上候ニ付、捕者に被仰付、爲增人、此方ゟ保田伴內、美濃守殿ゟ佐藤治部右衛門召連、私ども兩人早速罷越候處、一番ニ林與市郎梯子より二階へ上り候處を、左之額一ヶ所二階ゟ切付、其上胡椒之粉ふりかけ候ゆへ、梯子より下り申候、其內ニ治部右衛門、庄次郎、伴內儀、表庇へ上り申候而、二階東之窓ゟ佐藤治部右衛門、淺尾庄次郎、西之窓より保田伴內踏込申候、與市郎武左衛門、定右衛門儀ハ、二階梯子より上り、申候而召捕候段、私ども方へ二階より聲をかけ候に付、早速兩人二階へ上り、捕方吟味仕候處、佐藤治部右衛門儀は、右之方ゟ又七胴へ下手ニ組付、又七右之手共ニ組〆一ノ手仕候、治部右衛門儀、手疵負罷有、林與市郎儀、是又又七へ上ハ手ニ右より胴へ組付罷有二ノ手仕候、淺尾庄次郎儀ハ、左之方ゟ又七胴へ組附罷有候ゆへ、相二ニ仕候、保田伴內儀ハ、又七左之手首を持、伴內手負罷有候、平野武左衛門義、前ゟ又七首へ兩手をかけ罷有候、右之通一ノ手治部右衛門、二ノ手與市郎、相二庄次郎召捕候段、相違無御座候、已上、〇中略

大岡越前守組與力　荻野仁右衛門

檢使　諏訪美濃守組與力　後藤三郎兵衛

〔御仕置例類集一ノ十六〕文政五年年御渡

御勘定奉行松浦伊勢守伺

以人相書捜索

一武州小和瀬村八右衛門悴大八變死致し候一件

同村無宿
新五郎

右之もの儀、無宿之身分に而脇差を帯、博奕を渡世同様にいたし歩行、又は武州廣木村代五郎を、無宿小十及殺害、林次郎ヱ疵附候節、小十任頼新五郎其外之者共、一同手傳いたし、其上兼而捕方役人之手先と心得居候、小和瀬村大八儀、此ものを尋候趣承り、右は前書代五郎を及殺害、林次郎ヱ疵附候節之儀、露顯いたし候故之儀に可有之と相察候折柄後口ゟ可相待旨、大八鎗懸ヶ、木大刀を以打掛り候故、被捕間敷と存、脇差を拔打合、同人を殺害および候始末、不屆に付獄門、

（御仕置例類集一ノ十六）文政九戌年御渡

御勘定奉行石川主水正伺

一江川村無宿藤吉捕方役人、道案内之ものヱ疵附、其外悪事いたし候一件、

江川村無宿
藤吉

右之もの儀、無宿之身分に而、長脇差を帯歩行、下總國中田宿外貳ヶ村野田等に而、名住所不存もの共手合に加り、廻り筒、簺博奕いたし、又は同國上砂井村、市郎左衛門娘なつと密通および候上、市郎左衛門宅ヱ罷越、なつ不承知に候を、彼是申威し、無體に連出、其上武州幸手宿吉次郎差押懸候節、捕方役人手先と心得ながら、帯居候長脇差を以、猶之儘打掛ヶ被組伏、右之手被捻上候紛拔刃に相成候に付、左之手を持替、吉次郎ヱ切付疵為負候始末、不屆に付死罪、

（御定書百箇條）人相書を以御尋に可成者之事

一寛保二年極 公儀ヱ對し候重き謀計

一同 主殺

一同 親殺

一同　一關所破

一同　一人相書を以御尋之者を乍存閣置、又は召仕等にいたし不訴出者　獄門

但乍存請に立候もの同罪、吟味之上不存に決候共、主人請人共に過料、

〔御仕置伺御下知留〕明和五子年正月廿二日

主人并親江為手負逃去候者、人相書御觸之事、

松平周防守殿御渡

向後主人并親江為手負候もの行衛不相知候ハヽ、人相書を以尋可被仰付候間、得其意御定書江も書入候樣可被致候事、

正月

〔張紙留〕

向後人相書を以、御尋ニ相成候もの、最初親類村役人等尋申付置候共、人相書ニ而御尋之御觸出ニ候はヾ尋差免候積り、

但駿州富士郡、蓼原村、孫兵衛後家いちを切伏逃去候、與左衛門尋を申付置候、五人組尋差免候事、

公事訴訟手帳認方之儀ハ懸り名順候得共、向後懸り之名順ニ不構着帳之先名順次第ニ認可申事、

但帳外認方も右同樣之事

右之通、安永三午年五月廿五日、一座評議極、

〔御仕置例類集二ノ四〕文化六巳年御渡

稲垣信濃守申上候

一志州立神村藤三郎、繼母を及打擲逃去候ニ付、人相書を以尋之儀評議、
去巳十二月廿九日御渡被成候、稻垣信濃守領分、志州英虞郡立神村百姓久次郎忰藤三郎儀、繼母小りんを打擲致し逃去、同人相果候始末、并藤三郎人相ども信濃守家來申上候書付、一覽仕、則別紙人相書御觸案取調差上申候、尤御觸之上、右之もの有之段、月番之寺社奉行江申出、他之引合無之候はゞ、信濃守江引渡、他之引合有之候節ハ遂吟味、相伺候積、寺社奉行相心得可罷在候、依之右之趣信濃守江被仰渡可然哉ニ奉存候、

午正月

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ四〕文政五午年御渡

水野左近將監伺

一主殺逃去候節、右始末碇と見屆候者無之故を以、人相書御觸認方之儀ニ付評議、
去ル十四日御渡被成候、水野左近將監申上候、奥州白川本町旅籠屋甚左衛門後家もとを、下男周助儀殺候趣ニ付、人相書御觸之儀、左近將監申上候處、見留候ものも無之ニ付、御尋有之、尚又先例相添申上候得共、安永六年、御觸之節も、再御觸には殺候體と有之候間、此度之周助儀も、殺候趣治定も不致事に候得ば、右再御觸之節之通、もとを殺候體と認候方ニは無之哉、致評議可申上旨、被仰聞候、

此儀周助逃去候樣子は、もとを殺、金子盜取り候ニ無相違相聞候得共、見留候ものも無之、治定之儀無之段は、左近將監御答書ニ申上候例之文五郎同樣ニ有之、右體例も御座候上は、旁見とめ候ものは無之候とも、御觸出候方可然儀ニ付、今般之周助儀も、一體之始末治定無之もの故、御觸書之儀、前書文五郎再御觸書之御文體に倣ひ、奥州白川本町庄之助借屋旅籠屋甚左衛門

後家もとを殺し、金子盗取り候體にて逃去候、下男周助人相書と相直り候方、可レ然哉ニ奉レ存候、

午八月

朱書
評議之通濟

〔御當家令條三十四〕覺○中略

小山田彌市郎

小山田彌次右衛門

石川常右衛門

渡邊三郎兵衛

松野市郎右衛門

如レ此名字名共ニ
前方節々替候由

一年比三十一二程

一さかやき中びんにそり、

一顔長く、色あさ黒、きれいに見へ、鼻すじとをり、目はかつこうよりちいさく、びんぎわ入ずみ有レ之、

一しゝつき中くらゐ、せいはたいていより大キ成、

一衣類羽織黒はぶたへ、紋所丸之内八葉の菊、小袖ちりめん無紋もみうら、同黒羽二重むもんかきうら、黒はぶたへにて拵へり取、同黒羽二重兩面、

一刀黒さや、てつつば、梅花のやう成るすかし、

一脇差黒ざやこまか成さめ、つば無地てつ、柄糸むかじから茶、下緒紫、

右さかやきはそり直し、衣類は著かへ、刀脇指はさしかゆる事可レ有レ之、此書付之通之者有レ之ば留置、其所にて奉行、或地頭、或御代官ヱ申達、それより江戸町奉行所ヱ申越べし、若隱置候はゞ

たとへ後日に相聞といふとも、越度たるべし、江戸廻り之儀は當正月ゟこのかた、新規に宿をかし置候者之内、右書付之通うたがはしきもの有レ之ば、名名字書付、是又右のごとく可二申出一者也、

天和二年也
戌三月日

一小山田彌市郎事、最前も相觸候得共、當二月廿四日坊主に成、其後なでつけに致し候之由相聞候、ひたいをもたて、ちいさく仕候由ニ候間、入墨も見へ兼可レ申候、右之かいなに河内と云字を入墨にいたし候由申候、自然こと僧などの中へ紛入可レ有レ之候、御代官所私領并領内に有レ之、寺社領之内令二穿鑿一紛敷もの於レ有レ之は、早々江戸町奉行所迄可二申來一者也、

戌六月日

〔享保集成絲綸錄四十八〕貞享五辰年八月

當正月四日之晩、本多中務大輔家來錦織十郎右衛門世倅彌五郎を、山口儀右衛門と申若黨切殺欠落候、

一年頃貳拾八九

一せい中之男

一面體色淺黑ク、ひたいひらき、ほうすきをとがひほそく、口少しうば口かゝり、

一聲色しやれ聲ニきこえ候

一眼さるまなこかゝり

一中びん、もみあげ少有、

一肩いかり、腰少しほそく、志りふとく、足のこむらふとく有、

一手の大指兩方共まむしかゝり、惣體よき男ニ相見得候、

一脇指長サ貳尺貳寸、少そりあり、
一鞘黒ぬり
一こ尻り鐵ニ而、壹寸五分はり、
一柄長サ五寸五分、鮫親つぶよりはしり三ッ有、
一目貫銅さんしやう
一柄糸きかうちや
一つば丸く、鐵しんちうニ而、ちいさき露有、
一木綿布子貳ッ
　内壹ッこん堅島
　内壹ッかば色、紋所角切之内花びし、五所もん、
右之者、主人之子を殺、欠落候間、致穿鑿、不審成者於有之者留置、其所之奉行、或地頭、或御代官所江訴、それより江戸町奉行所江可申越候、御料私領ニ有之寺社領中、是又遂穿鑿可申出之、若隱置、後日にあらはるゝに於ては〔〇此間恐脱二三字〕可行罪科者也、
　八月

〔續百一錄〕延享三年十月二十四日、東國樣々廻狀、

十右衛門事
濱嶋庄兵衛

一せい五尺八九寸程　小袖くじらさしニ而三尺九寸
一歲貳拾九歲　見かけ三拾壹貳歲に相見え候
一月額濃ク引疵壹寸五分程
一色白ク齒並常之通

一鼻筋通り
一目中細ク
一鋭おも長なる方
一ゑり右之方江常にかたぎ罷有候
一びん中びん、中少しそり、元結十二程まき、
一迯去り候節、着用之品こはく、びんろうじ、綿入小袖、但紋所丸之内に橘、下に單物もへぎ色紬、紋所同斷、同白郡内ちばん、
一脇差長貳尺五寸、鍔無地ふくりん金、縁人摸様、さめゑんちう筋金有、小柄なゝこ、生物色々、かうがい赤銅、無地切羽、はゞき金、さや黒、小尻に少し銀ばり、
一はながみ袋もへぎらしや、但裏金入、
一印籠、但島のまき繪、
右之者惡黨仲ケ間に而は、異名日本左衛門と申候、其身は曾而左様に名乘不申候、　右之通之者於有之は、其所に留置、御料は御代官、私領は領主地頭へ申出、其より江戸京大坂向寄之奉行所江可申達候、尤見及聞及候者、其段可申出候、若隱置後日脇より相知候はゞ、可爲曲事候、
寅十月
〔御仕置例類集二ノ四〕文化六巳年御渡
道中奉行伺
一大坂町奉行掛吟味筋有之候、中山道本庄宿喜兵衛人相書御觸之儀ニ付評議、
榊原小兵衛御代官所中山道本庄宿旅籠屋喜兵衛儀、去々卯八月中、大坂表江罷越、攝州西成郡曾根崎新地三町目大和屋和吉代判甚藏口入、同國曾根崎村與三兵衛請ニ立、三ツ橋島村中島屋彌五

郎同居玄通娘さよもよを食賣女ニ召抱、右喜兵衞連歸候處、玄通ハ娘兩人を京都表江差立奉公ニ差出候儀と心得奉公先相違いたし候由を以、玄通儀右與三兵衞甚藏を相手取、大坂町奉行江訴出候ニ付、吟味いたし候處、喜兵衞儀さよ外一人、大坂表ゟ連歸候後立出行衞不相知趣ニ有之、然ル上ハ、同人儀福島御關所山越いたし候ものニ付、人相書御觸之儀、大坂町奉行ゟ可奉伺處、左候而ハ彼地支配國限ニ而一統江觸出し候儀ハ差支、殊ニ喜兵衞人相も彼地ニ而ハ難相分由を以、右御觸之儀、私共より相伺候樣、大坂町奉行より申越候、右之通差支之儀も有之、其上差跨候儀ニも御座候間、人相書之御觸有之可然奉存候、依之別紙人相書御觸案相添、此段申上候、

此儀寛政十午年、評議ニ御下被成候、京都町奉行相伺候趣を以、所司代ゟ相伺候、三條通中島町日光屋久兵衞元下人六太郎儀、久兵衞を殺し逃去候ものニ付、人相書觸之儀支配國之分ハ彼地より相觸、一統江ハ御當地ニ而御觸有之候樣申上候處、評議之上伺之通と申上、且御書取御渡被成候例も有之、大坂町奉行ニ而吟味仕候一件之儀ニ付、右兩例ニ見合取計候方差支之筋有御座間敷候間、今般道中奉行ニ而喜兵衞人相糺し書留候趣、大坂町奉行江相達、御城代江申立候筋ニ可有之旨申遣候樣道中奉行江被仰渡可然哉ニ奉存候、

巳十月

朱書評議之通濟

〔憲教類典四ノ二十九御尋者〕享保八癸卯年七月廿一日

水野壹岐守殿御渡

先頭人相書〇人相書、本書不載、を以相達候、内藤齋宮事召捕候間、不及相尋候、

七月

〔科條類典下六〕人相書を以御尋之ものを不存差置候もの

鎗町四町目主殺直助事權兵衛主人
喜兵衛申口

一私召仕權兵衛方より、新御番須田彦兵衛殿御知行所、武州榛澤郡荒川村五兵衛方江、刀一腰預ヶ置候由、右刀は深川萬年町庄兵衛店に居候、町醫師中嶋隆碩預被盗候刀之由、此度御糺ニ付彦兵衛殿より御吟味被成、去ル十二日之夜、彦兵衛殿御家來、小村藤右衛門と申仁被參、權兵衛を私に被預ヶ候、右權兵衛儀は、先達而申上候通、當二月初頃同所山本町喜左衛門店金左衛門妻、私方江罷越、田舍ゟ參候奉公人有之候、召抱申間敷候哉と申候ニ付、幸私儀舂米商賣致候ニ付、米杯舂候はヾ召抱可申候由致約束、則金左衛門請人に取、五兵衛と申もの下請人に而、當二月初頃ゟ三年季に金子五両に相定、取替金貳両壹分相渡し、當夏壹分相渡候積に而手形に取替金貳両貳分と相認候、相殘り貳両貳分は、勝手次第相渡可申候由申渡置候、

一權兵衛抱候儀、請人金左衛門事、久々所々に罷在、慥成ものに而、殊に江戸江初而奉公に罷出候もの之由に付慥に存、召抱置候處、權兵衛儀、此度被召捕、御詮議之上深川萬年町中嶋隆碩方に、前方直助と申相勤居候處、當正月十五日之夜、主人夫婦を切殺し致欠落候もの之由、初而承奉驚候、此外申上候儀無御座候、以上、

丑七月十八日　喜兵衛

右喜兵衛無御構

〔江戸政要〕捕者仕候節被下物覺

一刀脇指をさし候而罷在候を召捕候者ハ、可然道具一腰宛、一二共ニ可被下事、

一脇指さし候而罷在候者召捕候ハヾ、一二ともに惣並道具可被下事、

一小盗召捕候ハヾ、一手計可被下候、二手ニハ被下間敷事、

一無撿使呼使に罷越、若すまひ申者を召捕候ニハ不被下候、但其品ニヨリ了簡次第被下候義も

可ㇾ有之事、

一初而捕者仕候者ニハ、刀ニ而も脇指ニても被ㇾ下候事、

〔明良洪範續〕三江戸町奉行組與力同心召捕者有ル時、一番ニ向ヒシ者ニハ御褒美トシテ刀一腰、二番ニハ指添一腰賜ハリ、手負タル者ニハ、疵一ケ所ノ養生代金三兩宛下サレケル、是故ニ先ヲ爭ヒ、口論ニ及ビケル事度々有リシカバ、寛文年中、渡邊大隅守綱定其事ニ付申渡サレケルハ、召捕者コレ有ル時ハ、與力ハ進退ノ指圖ヲシテ同心ニ捕ヘサスベシ、萬一同心ノ手ニ餘リシ時ハ、與力モ働クベシ、且與力モ同心モ一己ノ働キヲスベカラズ、一致シテ働クベシ、一人功ヲナサントテ、同役ノ難儀ヲ見捨ル事ナカレ、互ニ助ケ合テ、一同ノ功ヲ立ベシト定メラレケレバ、夫ヨリ功ヲ爭フテ、口論及ブ事ナカリシト也、

〔捕者帳〕石谷將監殿御代

慶安四年卯七月廿四日夜
一丸橋忠彌　　御褒美　銀八枚ト刀一　此方同心 疋地六左衛門
　　　　　　　　　　　銀六枚ト脇差二　同 堀江喜左衛門

右者御茶水之上御中間町ニ罷在候、牢人徒黨一巻之者、弓打藤四郎案内ニ而、兩方ゟ同心廿四人前後二手ニ分參リ、先手ニ而召捕申候、則此方於御番所に御兩所御寄合、其上久世大和守殿、牧野佐渡守殿御出座ニ而、一二之者被ㇾ召出、御前ニ而御褒美銀被ㇾ下、其上將監殿ゟ一手ヘ時服貳、二手ヘ時服壹被ㇾ下候、

先手　辻小兵衛
檢使　原兵左衛門
　　　神谷金大夫
　　　羽田長右衛門〇下略

〔捕者帳〕長門守殿御代

寛文三年卯二月廿六日被
大工
一長兵衛

御褒美　金八兩　一　大隅殿方同心　橋本喜兵衛

金六兩　二　此方同心、手負　石井源五左衛門

金六兩　同　深手負　金井吉左衛門

右者南鍛冶町貳丁目次郎兵衛店之者、師匠之後家、并出居衆作十郎、世倅牛之助兩人、鎚かんなにて突殺シ、宿ニ取籠罷在候由、出居衆并所之者共、番所へ申來付、兩方ゟ同心六人召連、捕ニ参候處、戸口を細目ニ明ケ、足からみを戸之内ニならべ置、すまひ罷在候を、此方同心金井吉左衛門、石井源五左衛門、大隅殿方同心橋本喜兵衛三人之者ども押込候處、鎚かんなにて源五左衛門股壹ヶ所、吉左衛門脇腹壹ヶ所被突、深手負候所を、喜兵衛取付一手仕、則源五左衛門二手仕、召捕申候、

檢使　稻澤彥右衛門

關屋孫左衛門

〔御仕置例類集三ノ十八〕天明八申年七月

松平伊豆守殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一武州山田村ニ而召捕候鐵炮打新藏一件

伊奈攝津守支配所武州橘樹郡南綱嶋村野廻り　城田勘右衛門

右之もの儀、去未十二月廿七日、場廻リニ罷出、鐵炮之音承り、鐵炮打候同國王禪寺村百姓新藏を召捕候ニ付、御褒美可被下置哉と相伺、

御差圖

銀拾枚

〔舊記拾要集十〕享保八年卯十一月三日御用覺帳書抜

芝田町名主
庄次郎

今度火付五兵衛を召捕候ニ付、爲御褒美銀三十枚被下之、

右御書付、安藤對馬守殿御渡被成候、同五日、庄次郎呼出、御書付之通申渡、銀三十枚相渡ス、

卯十一月三日

〔御仕置例類集二ノ四〕文化十四年御渡

甲府勤番支配伺

一盗賊を捕候節、骨折候非人江鳥目爲取候儀ニ付評儀、

當地非人頭幷手下之もの共義者、常に怪敷もの等見請候得者差押、町方懸り同心共江申出候仕來ニ御座候處、去申六月十一日、御代官野田松三郎支配所、山梨郡東青沼村非人頭谷九郎手下番非人又兵衛、幷當時金手町歡安寺抱番非人同人手下長五郎と申もの申合、尤附居候處、同日夜八半時頃、荷物多分脊負ひ、金手町通行仕候もの有之候間、怪敷存聲掛候處、帶候脇差を拔切付候ニ付、右兩人之もの數ケ所手疵負候得共、差押置差出申候、右取押候もの、今度吟味詰御仕置伺帳面之通、格別骨折手疵負候儀ニも御座候得者、以後之勵ニも相成候間、右非人之もの共、當所欠所金之内を以、相應之御褒美被下候樣仕度奉存候、依之例書添奉差上候、

此儀火附を捕候非人江御褒美被下候、先例者有之候得共、一通ﾘ之盗賊を差押、御褒美被下候非人之例、差當相見不申、今般河内守差上候例も、附火致し候ものを、一同ニ差押候ものニ付、的例ト者難申、併町方抱番人等ニテ盗賊を捕候もの江、町奉行手限ニ而爲褒美鳥目爲取來候、度々之先例も有之、身分者違候得共、去申十二月、曲淵甲斐守伺之上、御仕置申付候、伊勢崎無宿右金太を召捕候、吉川永左衛門屆足輕兒島金左衛門儀、右金太を召捕候節、疵受候處不取逃、格別ノ骨折候ニ付、爲御褒美金三兩被下候例有之、今般之又兵衛外壹人も乍疵受、寅

吉を差押候者、同樣ニ御座候間、欠所金之内を以、鳥目十貫文宛爲取可申旨と仰渡可然哉ニ
奉存候、

酉 九月

朱書 評議之通濟

御勘定奉行

〔德川禁令考後聚三 高札揭示〕文政二卯年五月十二日

惡徒ヲ捕縛セシ者ヘ褒美給與ノ儀ニ付評議書

去月五日、評議可申上旨被仰渡御渡被成候、松平周防守伺書一覽仕候處、三州福釜村見廻り役十藏、同國高棚村百姓四郎吉、番非人大助儀、盜賊久米五郎を、疵受候迄相働差押、訴出候に付、御褒美之儀相伺候旨に有之、右被下錢員數、并出方等之儀も、取調可申上旨被仰渡候、

此儀周防守伺書に申上候例、越ヶ谷宿之内大澤町名主太郎兵衛定使久藏は、疵受候儀無之、今般之十藏外二人者、疵受候迄相働差押候に付、尙先例相糺候處、百姓に者相當之例相見不申、去ル酉年評定所一座江評議に御下ヶ被成候、甲府勤番支配相伺候、甲州東青沼村非人頭善九郞手下番非人又兵衛外一人申合、荷物多脊負、金手町通行仕候もの有之候間、怪敷存聲懸候處、帶候脇差を拔切付候に付、右兩人之もの、數ヶ所手疵負候得共差押候に付、彼地闕所金之内を以御褒美之儀相伺、評議之上右闕所金之内を以、鳥目拾貫文宛爲取可申旨、被仰渡可然哉之段申上、其通被仰渡候例に見合、三人之内十藏者重立候ものに而、身分も違候間、前書例之太郎兵衛同樣鳥目拾五貫文、四郎吉大助者、例之久藏同樣同拾貫文宛爲取可申旨、被仰渡可然哉奉存候、

且被下錢出方之儀も、例相糺候處、私共懸り之儀者、孝心又者奇特もの等江被下候分は、御金藏より受取相渡、惡黨共を差押候百姓或者非人等江爲取候鳥目者、過料錢之内を以、相渡候振合

に御座候得共、去ル丑年駿州沼津宿百姓權七儀、附火いたし候積多五郎右衛門弟勇吉を召捕候に付、御褒美之儀、備中守殿寺社奉行之節御伺有之候處、胡亂成もの等見受差押、吟味之上附火いたし候段、相顯候事に付、鳥目拾貫文爲ㇾ取候樣被ㇾ仰渡、右鳥目差出方過料錢に者無ㇾ御座、并町奉行取計方をも承合候處、盗賊等捕差出候町人共江御褒美爲ㇾ取候分は、兼而御金藏より受置候御入用金之內を以相渡候由に有之、右者向々仕來有之候儀に御座候間、今般之被ㇾ下錢も、出方之儀者、寺社奉行仕來之通被ㇾ仰渡ㇾ可ㇾ然哉に奉ㇾ存候、

卯五月

右下野守殿江上ヶ、伺之通相濟、

〔公裁秘錄四〕一惡黨もの召捕候もの江御褒美願之事

五條村番非人牢左衛門儀ニ付申上候書付　青山九八郎

私御代官所和州宇智郡五條村　牢番非人　牢左衛門　辰三十七歲

右之もの儀、去午年中より牢番いたし、入牢人共を朝暮勞、且支配所村々取締方之儀は、時々手附手代廻村爲ㇾ致ㇾ心付ㇾ候儀ニは候得共、牢左衛門儀も、近鄕迄取締方常々厚心掛、〇中略此度僞金取拵遣捨候もの、近鄕徘徊いたし候由之風聞承および、手配いたし晝夜心掛穿鑿いたし、差押候節も、三人之內兩人逃去候を追駈參、不ㇾ臆壹人ニ而差押、其段訴出候儀ニ付、以後勵之爲にも御座候間、何卒相應之御褒美被ㇾ下置ㇾ候樣仕度、此段奉ㇾ願上ㇾ候、〇朱書略

以上

辰〇天保三年　五月

御達似金銀拵候原手村無宿友藏外壹人を、和州五條村牢番非人牢左衛門差押候始末相糺、被ㇾ申聞ㇾ候趣、令ㇾ承知ㇾ候、伺之上、水出羽守殿依ㇾ御差圖ㇾ、左之通申達候、

其方御代官所和州宇智郡五條村
宰吾弁人　宇左衛門

右之もの儀、骨折相働候ニ付、金壹朱金拾遣捕候、原手村無宿友藏外壹人を差押候に付、爲御褒美
鳥目貳拾貫文爲取之、
右之通申渡、證文取之可被差出候、以上、
辰十月十六日　　　　　　　　　　　　内　隼人正印
青山九八郎殿

〔寬の須佐美〕御先手組與力士、依田佐介といへる、少し學問の志もありけるが、盜賊改役の道も功者にて、能勤たりけり、同士の友に語りしは、往來の道に出れば、盜賊は明らかに見ゆる物なり、悉く捕へば限りなし、困窮して盜賊をなす者を、悉く捕へば、下賤のたねは盡ぬべし、下の潤ふ樣に有ならば、刑人不可有、故に勝れて甚しき者を捕へて、其餘は事なければ見逃しにする事也と語りしとぞ、戸塚の邊に、盜賊六十人餘りありと聞へて、捕へ來るべしと、頭役向井氏命じてやられける、同心十人つれて行べしと有之ければ、多き盜賊を捕るに、十人連たりとて事足べきや、御威光を以て是を制するなれば、自身一人にても事足り申候とて、例の如く六人連て行、十二人捕へて歸りしかば、向井氏小勢にて多く捕へたりと賞して、褒美ものなど與へられしに、佐介是をうけず、御威光を以て所の者に申付捕へさせ候故、無人にても成る事に候、大勢とらへ候との御賞美、其意を得ず候、盜賊六十人計有之候へども、わざととらへ申さず候、近年取立きびしく、剰賦金多く、困窮に及び、止事を得ずして盜賊に及び候、村中みなとらへても止まじく候、向後盜をやむべきとならば、賦金等を免され、民の生業調候樣に被仰付候はゞ、盜賊は有まじく候と、細かに申ける、其由を若年寄本多伊豫守(忠freq)殿ニ達せられければ、尤のよしにて、吟味のうへ、賦金をゆるされ、盜人をもゆるし歸されけり、

追捕人讃賞

（御仕置例類集三　十六）寛政六寅年三月

安藤對馬守殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一上州信州村々盗賊為ニ捕方一差遣し候御代官手代共、不束之取計致し候一件、

河尻甚五郎手代勤向
御中間持格
古澤鎌太郎

右之もの儀、盗賊捕方として、上州、信州、村々相廻り候節、悪黨もの手掛り不ニ相知一候迚、穢多を手先にいたし、剰壹人立為ニ相廻一候節、添觸等差遣候故、穢多新太郎儀、品々法外之取計致候様相成候段、不埒に付、五十日押込、

右御咎附

右去ル卯年、桑原伊豫守御勘定奉行之節、手限伺之上御咎申付候、松平内藏頭家來、城下町同心久住勇助儀、中田村番非人要藏方ニ、盗賊三平罷在候段、非人頭次郎九郎悴八十郎申聞候迚、實否も不レ糺、非人共を召連、要藏方江為ニ踏込一候故、右之ものども手荒成取計いたし候始末に相成、不埒に付五十日押込申付候に見合、五十日押込、

雲笠之助手代
福富領四郎

右之もの儀、古澤鎌太郎存寄にて、穢多を先手にいたし、召連候はゞ、可ニ差留一處、悪黨もの手掛り不ニ相知一候迚、倶々召連剰壹人立為ニ相廻一、添觸等差遣候故、穢多新太郎品々法外之取計致し候様相成候段、不埒に付、五十日押込、

右御咎附

右前書古澤鎌太郎に見合、同様に御座候間、五十日押込、

布施孫三郎手代
北尾助市

岸本武太夫手代
田邊安藏
津田逸平

右之もの共儀、古澤鎌太郎福富領四郎、穢多を手先にいたし候趣、及見聞候はゞ可差留處、無其儀段、不念に付、急度叱、

右御咎附

右は前書両人に見合、心附方不行屆迄に御座候間、急度叱、

〔天保集成絲綸錄百四〕天明八申年十二月

大目付江

都而屋敷内ニ而盗賊召捕候ハゞ、頭支配江不及申達、直ニ月番之町奉行江可相屆候、尤町奉行より早速組之者差遣、請取候樣申渡置候、

右之通可被相觸候

十二月

〔天保集成絲綸錄百四〕寛政三亥年四月

大目付江

武士屋敷ニ而盗賊、或ハ狼藉もの等有之節、自分屋敷計之用意専ニ而、隣家其外近所等互ニ心附薄く候得バ、何も獨立候樣ニ而、人少成節抔ハ、取逃シ候類も可有之哉、兼而申合置候儀ニハ可有之候得共、猶亦近所之面々得と申談置、右申合之分、相互ニ一屋敷と心得、右體之節ハ、主人幷在合候家來をも召連參、鎮可申候、一體途中においても、法外之始末有之候得バ、討捨可申儀ニ候處、況屋敷屋敷江入候類ハ、猶以其分ニ可致筋ニ無之候、兼而銘々働之樣子をも御覽可被置ためにも候間、厚く可申合候、尤右申合外之場所江ハ猥駈參リ申間敷候、見物がましきものも有之候はゞ、

其者をも召捕可ㇾ申候、

但申合難ㇾ決儀も候はゞ、御目付江可ㇾ承合ㇾ候、

右之趣万石以下之面々分限高之多少ニよらず、最寄々々申合置候樣、可ㇾ被ㇾ達事、

〔天保集成絲綸錄 百四〕寛政三亥年四月

一防組合ども申合之場所ハ、其組合限り可ㇾ申合ㇾ候、

一防組合無場所ハ、辻番組合限リ可ㇾ申合ㇾ候、

但辻番組合、防組合とも隔り候場所ハ、其一町辻々限り組合と心得可ㇾ申候、

一召捕候もの有ㇾ之候節ハ、兼而御書付之通屆ニ不ㇾ及、町奉行、幷御先手加役之內江、最寄次第引渡可ㇾ申候事、

一主人他行之節ハ、家來計差出重キ役可ㇾ罷出ㇾ事、

〔續視聽草 初集 十〕盜賊稻葉小僧新助一件

一ッ橋御屋形目付方口記寫

一九月十六日夜四半時過、御馬役之者怪敷者見請、召捕置候段相屆、早速小普請方下役、幷闕番左衞門に申談、裏御門續御長屋取片付させ、目付方江請取入置、御物頭同心貳人、小人目付貳人、御小道具之者貳人、小人貳人、新組貳人勤番爲ㇾ致、尤徒目付本多吉藏、馬場藤左衞門罷越、御厩役所前に而、御馬役中川庄右衞門より、繩付之儘受取駕籠にて引取、

一御馬役中川庄右衞門宅に而、本多吉藏、馬場藤左衞門立會、召捕御馬飼十兵衞牛助呼出、吟味いたし口上取ㇾ之、目付松平源左衞門江差出如ㇾ左、

私共今晚四半時廻り御座候に付、四半時前相成刻限考度、御火之見ぉ上候處、御厩犬走り之方に、怪敷者影相見候樣子に付、右場所江罷越見候處、町人體之者罷在候に付、早速召ㇾ捕之、十

兵衛は其場所に召捕、念入番人付置申候、尤何方より立入候哉、承不申候、其外可申上儀、無御座候、以上、

天明五巳年九月　　御馬飼　半助

十兵衛

右御馬飼半助、十兵衛申上候趣、私立會承り候處、相違無御座候、御馬飼印形無之者に付、私印形仕候、以上、

御馬飼小頭　米澤瀨吉

本多吉藏殿

馬場藤左衛門殿

右に添家老衆用人衆へ差出ス書付、左之通、

一御厩御裏手犬走に而、御馬役支配之者、怪敷者召捕候に付、引取候處、被仰渡候、私共罷越御厩役所前に而、中川庄右衛門より搦捕候儘請取、增繩爲掛、唯板入駕籠、無滯引取、裏御門内御長屋に入置、念入番人附置申候、御馬役支配之内、怪敷者見出シ召捕候御馬飼半助十兵衛儀、一通相尋候處、右之者共今夜四半時廻り御座候に付、四半時前に相成、刻限考度御火之見江上り候處、御厩犬走り之方に、怪敷者罷在候に付、何者に候哉承り申候處、申方不相應、其上見知不申者に御座候に付、早速召捕、十兵衛儀、當番御馬下乘井原七藏へ注進申達、半助儀は其場に召捕之儘、罷在候處、御馬役支配之内、不殘罷出召捕、念入番人付置候由、尤何方よりも紛入候哉、其儀は承り不申候由、其外申上候儀無御座候旨申上候、依之銘々口上書別紙差上申候、以上、

九月十六日　　御徒目付　本多吉藏

私縱犯人

右書面之通相屆申候、依之申上候、以上、

馬場藤左衛門

九月十六日

御目付

〔享保集成絲綸錄四十七〕盜賊人穿鑿條々

明曆四戊年七月略○中

一町中ニ而ごろぼうとらへ候得ども、雜物取返し候とて、おひにがし候はゞ、追かへし候者之方より、爲過料鳥目拾貫文取上ゲ、其上曲事ニ可申付候、但往行之者、ごろぼうをとらへ、雜物取返候とて、追はなし候共、町之者出合とらへ候者、幷ごろぼう召連番所江可參候、見のがしに仕候はゞ、其町ヨリ爲過料鳥目拾貫文可出之候、已來見合次第とらへ、早々番所江召連可參事、略○中

右略○中無解怠可相守者也

七月

〔張紙留〕一盜人所々ニ而之盜之內、死罪ニ可成盜いたし候共、盜物を取戾候もの丶方ニ而之盜、死罪ニ不相成候得バ叱り、

一盜物を取戾候方之盜死罪ニ當候而も、死罪ニ不當候而も、盜人と直對談不致候ものハ叱り、

但直對談ハ不致候而も、其始末格別不宜儀も有之時ハ過料錢可申付候事、

右之通、天明五巳年十一月十一日一座評議極、

〔科條類典下四〕寬保元酉年六月

御代官長谷川庄五郎伺

飛州高山町山崎十郞右衛門、幷同町傳七、下岡本村宇右衛門方江忍入候、盜賊吟味一件之內、一

飛州大野郡下岡本村百姓　宇右衛門

酉三月十八日村預申付置候

右同斷　同村名主　吉四郎

右同斷　同村百姓　長八

右宇右衛門吉四郎長八儀、去申十月廿七日夜、宇右衛門土藏之内江盗人忍入候を聞屆、三人迄戸を立込置、吉右衛門名乗候上は、外貳人も承屆可申出儀に候處、盗人三人之者達而用捨致與候樣申付相談仕、紛失之品無之故、逃し遣候旨申之候得共、吉四郎儀、役儀も相勤候處、其段不申出、宇右衛門長八任相談、内證ニ而取計候段、不埒ニ相聞申候、依之右之者共村預ニ申付置候、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政六寅年三月

松平伊豆守殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一越後國出雲崎町邊ニ而捕候無宿市兵衛外三人盗致し候一件

榊原式部大輔御預り所越後國三島郡尼瀬村見廻り　百姓　玉右衛門

松平越中守領分同國蒲原郡五泉町　百姓　寅十郎

寺泊宿　百姓　九郎右衛門

右之もの共儀、盗賊市兵衛外三人之もの共を度々召捕、雜物取戻、内分ニ而逃し遣、其上被盗主より金子請取、右盗賊共江差遣候始末不埒ニ付、過料錢五貫文ツヽ、

右御咎附

右盗人を捕、雜物取戻、内證ニ而逃し遣候もの輕過料之御定ニ御座候處、此もの共ハ度々之儀、其上被盗主より請取候金子之内盗賊江遣し候段ハ、品不宜候間、過料錢五貫文ツヽ、

〔御仕置例類集三ノ十六〕寛政七卯年十月

安藤對馬守殿御差圖　評定公事　御勘定奉行　曲淵甲斐守掛

一武州榛澤村元百姓市之助、御構場所江立入及狼藉候一件、

數原通玄知行武州榛澤郡榛澤村
名主　傳兵衛
組頭　半兵衛

右之もの共儀、元同村市之助は村方帳外ニいたし候以後、不屆有之敲之上江戸拂ニ相成、村方も御構場ニ付、村內江立入あばれ候ハヾ捕置、可訴出處、無其儀却而市之助母はつ達而相歎キ、不便ニ存候段、兩度迄相手方江加印之侘證文差入、內分ニ而相濟し遣、既ニ市之助儀、又候同村喜左衛門方江罷越、狼藉および候上は、旁不埒ニ付、傳兵衛は過料錢拾貫文、半兵衛は同五貫文、

目明名稱

附目明

目明ハ、又岡引ト云フ、犯罪者ヲ探偵シ、或ハ逮捕スルコトヲ職トス、平人若シクハ曾テ輕罪ヲ犯シタルモノヲ用キル、蓋シ探索ノ便アルヲ以テナリ、

〔書言字考節用集人倫四〕目明

〔倭訓栞前編三十二〕めあかし　今官府盜賊を捕へ、赦して用るをいふ、目證の義也、日本紀に、三證をみたりのあかしびと、よめり、後漢書に、郊賊延裒等が馮魴が爲に捕られたる時に、魴曰、汝知悔過伏罪、今一切相赦、聽各反農桑、爲令作耳目、皆稱萬歲、是時每有盜賊、並爲裒等所發、无敢動者と見えたり、明律にいふ警跡也、集解に蓋以盜捕盜之法也と見えたり、

目明制度

〔德川禁令考二十八捕盜使〕寶曆九卯年十一月廿七日

囚人召捕方手筋之儀奉伺候書付

一盜賊召捕方手筋之儀、〇中略四人之中に存知候者、召連罷越候而は、岡引之筋に相聞へ可申候得共、岡引と申候は平人に而も科人に而も、惡者壹人差定、岡引と名附、手引爲致、其者之罪を免シ、外科人を召捕候、此儀は決而不仕儀に御座候、〇下略

〔京都御役所向大概覺書一〕目明遣候所々、幷町廻、風廻之事、

一正月　十六日禪林寺　廿一日東寺　廿三日知恩院　廿五日北野
一二月　彼岸中日
一三月　十九日嵯峨清凉寺　廿一日東寺壬生寺
千本念佛之内
寺内之櫻盛之節見合、奉行所江相斷、念佛初候日數、十日之内一日目明遣、
一四月　九日清水地主祭　卯日稻荷祭　午日下賀茂御蔭祭
酉日上下賀茂葵神事
一五月　朔日上賀茂競馬足汰　五日同所競馬　十五日今宮祭東照門跡御出日ニ付、日明ハ不遣、兩組與力同心廻り候、　十六日永觀堂　廿一日東寺　廿五日北野　晦日祇園御輿洗
一六月　七日祇園會　十二日東河原凉場　十四日祇園會　廿五日黑谷虫干幷糺凉場
一七月　七日六角池之坊立花　九日六波羅廻り幷清水　十八日御靈御出
一八月　朔日松尾相撲場　彼岸中日　十八日御靈祭禮
一九月　三日六孫王出輿　十一日同祭禮　十六日永觀堂　廿一日東寺　廿五日北野
一十月　十二日法花會式　十六日東福寺開山忌
一十二月　節分五條天神、但多春之内有之、
右之外目明出申候内、賀茂葵神事兩度、六孫王神事兩度、祇園御輿洗、目明出不申候、右之外矢數等有之節、又は群集之場所江は不時に目明遣之、與力日付計差出候儀も有之、目明出候町廻り

之時、出候人數兩組與力三人、同心小頭貳人、同心目付貳人、平同心六人、雜色町人罷出候、
但祇園會には兩組立會、與力六人、同心小頭貳人、同心目付貳人、平同心八人、幷町代罷出候事、

一目明之儀、前々ゟ入牢之ものゝ內、目明に可罷成囚人致吟味申付、町廻り先江編笠を著せ、腰繩に而差出候得共、寶永六丑年、赦有之三貫ノ八兵衞、坊主小兵衞と申もの出牢被仰付候故、其後目明に成候もの無之ニ付、差出不申候、○下略

〔寶暦集成綵綸錄 三十〕寶暦九卯年八月

火附盜賊改江

加役相勤候者、只今迄屹と致し候申送等も無之、先々取計候儀及承、又は加役相勤候者、時々存寄をも相加取計候由、依之總而取計之趣區々相聞候、已來は致來候儀にも、如何と存付候儀は相改め、不相知儀は、奉行所取計をも承合、難決儀も候はゞ相伺、とくと取〆り候樣、規格相極置可被申候、○中略

一囚人共差口可致旨申候得ば、組之者差添捕方に差出、差口致し候得ば、輕罪之者は無構差免、重罪之者は御仕置相伺來候由、都而目明シと申儀は無之筈候得共、目明岡引之筋とは意味違候儀と存、右之通取計來候由、同類白狀致候節、召捕候儀は可有之事に候得共、都而囚人共奉公に差口可致旨申候節、捕方に差出、差口奉公致し候得ば差免候段、畢竟名目は違候得共、目明同前之趣ニ而、紛敷候間、向後同類白狀致候節、召捕候儀は格別、差口奉公可致旨申候節、捕方差出候儀は、是亦可爲無用候、

右之通相心得、後々被仰付、加役へも屹と申送、已來取計區々に不相成樣、可被相心得候、

八月

〔天保集成綵綸錄 百四〕寬政元酉年四月

御勘定奉行江

總而四人共、差口可致旨申候節差免、目明し致させ候類之儀、堅く無用たるべき旨、先年も相達候處、近來目明し體之もの案内爲致、村方及難儀候儀も有之哉に相聞候、惡黨者爲召捕罷越候節、其村々庄屋、其外江案内爲致候はゞ、惡黨共居所は相知可申事に候、目明し、岡引等いたし候ものは、元々良民に無之候得共、御威光を假、村方ニ而及不法、ゆすりがましき儀、其外濫行可致は顯然ニ而候、其上惡者之力をかり搜求候儀、御政務におゐて有間敷事に候間、此旨組中江得と申含、在方江罷越候節、村々失墜有之筋、成たけ不致樣心を附、若於村方目明し體之もの、ゆすりがましきもの見かけ候はゞ、早速爲召捕候樣可被致候、御勘定奉行江も申渡、萬一組中、在出○在方出役之節、不法不正之事にも有之候ば、其所御代官江訴出候樣申付候間、被得其意、組之もの江も急度可被申付候、尤後々被仰付候加役江も、矦と申送候樣可被致候、

右之通火附盜賊改江相達候間、被得其意、御代官江可被申渡候、

寛政元酉年閏六月

〔法曹後鑑〕享和元酉五月十二日對馬守殿寺社奉行、御勘定奉行承附候樣御渡承附いたし同十四日返上

附箋

書面町奉行承付之通被仰渡候旨承知仕候、

酉五月十二日

寺社奉行
御勘定奉行

書面伺之通、取計可申旨被仰渡、且吉原町店廻りと申名目之ものも、向後差止可申旨被仰渡、承知仕候、

酉五月七日

小田切土佐守

根岸肥前守

盜賊火附改組之者ニ而、近頃手先と唱、目明同樣之ものを專ら召仕、捕もの等いたし候由右之內には、御構之もの立歸り候類も有之候由、一體目明之儀者、先年被仰出も有之候儀ニ付、右體之取計者有之間敷儀ニ而、加役方者勿論、私共組之もの共も、右類之もの召仕候儀相止候而者如何可有之哉、別紙風聞書一覽仕存寄可申上旨、御內々被仰聞候、依之評議仕候趣左ニ申上候、

一前々も被仰出有之、去ル酉年も總而惡黨ものを差免、目明し岡引等爲致候儀者勿論、右體に似寄候儀も有之間敷事に候間、彌以左樣之筋無之樣吟味いたし、紛敷もの有之候はゞ、召捕御仕置可申付候、尤組々之もの江も、常々申含、右に類し候儀、堅く不仕樣被仰渡候事ニ付、罪惡等之ものを免し置、右之ものを召仕候儀者、何れ之懸ニ而も致間敷筋に御座候、然處盜賊又者人殺之類、其外御法度を背候ものは、影を隱し忍び罷在候類の御差圖もの者勿論、懸り懸りに於て相搜し候節、其場所之儀可存もの等を不召連候而は、捕方行屆申間敷候得共、右者其土地之もの、幷町役人等、其事に臨み召仕相糺し可申處、加役方組之もの共は、近頃は人を極候而召仕候趣は、御渡被成候風聞書之趣に無相違相聞、前書目明岡引之趣意にも紛敷、勿論私共組之もの共は、兼而人を極メ置候と申儀者無之、事に臨み町役人之內差働有之もの、平町人ニ而も、其場所案內之ものを召仕、其時宜により、此度風聞書に有之名前之內を召仕候儀も御座候趣に有之候得共、右名前之もの共、向後不召仕候迚も、御用向差支候儀無御座候間、御渡之風聞書之もの共、一同爲召捕相糺追放立歸り之もの者不及申、不屆有之類、夫々御仕置申付、向後前被仰出候趣を以捕もの等之節は、其事に臨み、町役人、村役人、其外身元相知候者召仕候は格別、兼而人を極置、又は無宿同樣之ものを召仕候儀、堅く致間敷段、三奉行、盜賊火附改江も、被仰渡可然哉奉存候、

一風聞書之内、新吉原町店廻りと唱候五人之儀者、吉原町抱之ものニ而右者去ル卯年、坂部能登守町方勤役之節、取極申渡候儀に御座候、尤遊女屋共ゟ相應之手當いたし、近邊に住居爲致、吉原町之内尋もの等有之節、爲取計候ものに御座候處引移り入用等に差支住居來り候、他町に其儘罷在候間、組之もの共尋もの等之節も、彼等者住居も相知、差働も有之者故、申付外御用に召仕候儀も有之由に御座候、尤當時不埒之沙汰者不相聞候得共、吉原町抱之ものニ而、他場所に罷在組之もの共、他所捕之もの等に召仕候者、相當も不仕候間、以來は右之者共、一同吉原町内江爲引移、他所捕之もの等に召仕候儀者不致樣可仕候、

右之通奉伺候、伺之通被仰渡候はゞ、別紙御渡被成候風聞書之内、店廻り之外、住居相知候分者不殘召捕、私共兩御役所におゐて吟味之上、不届有之者は、御仕置申付候樣可仕奉存候、以上、

酉五月

酉五月十四日、對馬守殿尾島定右衞門を以、町奉行伺濟之趣を御代官中江も申達候樣被仰聞候間、此趣下野守ゟ申達、

都而捕もの有之節、目明岡引抔と唱ひ、無宿もの又は追放等に成候ものを、案内手先等に召仕候儀は致間敷旨、前々被仰出も有之、いづれも兼て心得可有之事に候處、近頃無宿追放立歸りもの等を手先にいたし、捕者之節召仕候も有之趣相聞、如何成事に候、手附手代等在方捕もの差遣候節、右之もの手先等に召仕間敷旨、猶又一同江可被申聞置候、

酉五月

〔享保集成絲綸錄四十八〕享保四亥年六月

火附盜賊博奕改之方に目明無之候、然所にせ目明體之者有之、町中ニ而あばれ不屆に候、依之此度右之者御仕置に被仰付候、自今町中江目明體之者相越候はゞ捕之、早速町奉行所江可申出旨

目明例

可ㇾ被相觸候、

六月

〔享保集成絲綸錄四十八〕享保五子年五月

申渡

一似せ目明之儀ニ付、町中江觸書之趣、諸人末々迄承知仕候之様に木札又は紙に成共相認、町中木戸、或は往還に、右札十日之内、只今ゟ早々出し置可ㇾ申事、

一右之外向後も急度相觸候事は、札に認出し置可ㇾ申事、○中略

五月

一目明しと申者、諸奉行所加役方共無ㇾ之事候間、前方相觸候處、此度那須屋仁左衛門と申者、加役方目明之由偽り、巧成儀を致し、町人方ゟ金子をかたり取候科に依而、仁左衛門儀は引廻し獄門、幷仁左衛門に被ㇾ頼町人共に金子出させ取持候、繩手權右衛門同類之者も御仕置申付、且又舊惡之防ぎと存、仁左衛門方江金子出し候町人共は、過料指出させ候、

右之通不届ニ付、御仕置に成候、自今は諸奉行所盗賊改等之方に、目明し之類彌壹人も無ㇾ之事に候間、町中其旨堅く可ㇾ相心得候、若此以後目明し役人抔と偽り、物取りねだりがましき事いたし候者有ㇾ之候はヾ召捕、早々月番之番所江可ㇾ訴出候、

右之趣、自今急度相守可ㇾ申者也、

五月

〔明良洪範十八〕大猷公ノ御在世ノ中、漸々豊ナルニツレテ、盜賊等多クナリシ、所々ニテ召捕ケル中ニ、棟梁ノモノ一人捕メトリテ、御詮議アリシニ、其名ヲ大草履組ト申スニ付、其所ヲ尋ヌルニ、其組ノ盜人皆々草履ノ鼻緒ヲフトク仕リ候テ、仲ケ間ノ相印ニ致シ候由白狀ニ付、此由ヲ言上

シケルニ、上意ニ夫ナラバ、小草履組ト云盗人アルベシ、相尋ヌ候ヤウニトノ事ナレバ、則其盗人ヲゴウモンシケレバ、案ノ如ク小草履組ト云組有テ、常ノ草履ヨリハチイサシ、足中ノ様ニ造リ、是ヲ仲間ノ印ニ致シ候由申シケレバ、其者ヲ目明シトナシ尋ヌケルニ、二タ組トモ残ラズ召捕ケル、假初ノ事ナガラ、凡人ノ及バヌ御智恵ナリトゾ、人々感ジ奉リヌ、

〔捕者帳〕

丑十〇三文年文四月廿八日　　一　由良金兵衛

一追放與兵衛　　呼使　　二　加藤新八郎

右是は駒込片町久右衛門店吉兵衛所罷在候を、目明香車理兵衛、火人牢右衛門訴人ニ而召捕、

〔反古の裏書　二〕僞金

輕罪の囚一等をゆるして、他賊の巣穴を探らしむる者岡引といふ、もろこしにもあることゝ也、役人より是を手先といふ、常に平人の如く人出入多き所に入込て、事を探り出し、是を手柄として、己が罪を減ずるにてぞありける、或日餘りに賊の手がゝりもなきまゝに、目黒不動に詣でけるに、ある茶店に入て酒打飲居ける次の間に客ありて、主をのゝしるやう、吾を似せ金遣ひとするやといひしが、やゝありて去けり、似せ金とは賊の手懸りなりと思ふにぞ、あるじに今去し人は何人といふに、始ての御客なるが、御拂の金子少し見にくかりし故に引替を願ひたれば、大に腹立給ひて、かくのゝしり給ひしなり、外に子細なしといひけり、手懸りにもならぬことなれば、さりけりとて立出て歸りぬ、其後二タ月三月立て四ッ谷邊にて、其人に逢ひけるが、俄に思ひ出さで、見覺えある人とのみ思ひてわかれけり、其後又一ト月計へて同じあたりにて逢けるが、風と思ひ出て、先きの日、目黒にて僞金遣ひとするやとのゝしりし人よと思ひて、其宿はいづこと、付てゆくに、鹽町といふ所に、格子戸立たる家なりけり、又一ト月計して四ッ谷邊に僞金を受取た

りといふ質やありて、彼岡引を頼みけり、俄に心當りもあらねど、先鹽町の人が心懸りなれば、探りてみけるに、此人は青貝を作るが商賣にて、多分の利ある人といふ、うり先を探るに實に青貝の粉を作るなり、他に怪敷ことなし、但し其うること他人よりやすしといふ、家にはあはび貝山の如く積ありて、日夜こち／＼とたゝく音するよし、手堅き人なりといふ、岡引いかんともすること能はで歸りけるが、外に手懸りもあらねば、又より／＼心を付て此人を探りけり、二ヶ月計が間、此人の遣ふ金を其先々と探りけるに、僞金二ッありけり、これは常の人にても忘らで遣ふことなれば、僞金遣ひと定がたかりしが、また一ト月計にて一ッ遣ひけり、それより青貝を作るより外なし、或時にこなたより、吾僞金を作らんと思ふが、如何にといひければ、大に驚ける色ありしが、其方の細工にては作ること能はずといひけり、是より手懸りと成て、ひたもの僞金の物語りをするに、數日ありて其方僞金を作らんと思はゞ、外に一細工ありて、人並に衣食の料を取る事を覺へ、不自由なく暮す上ならでは、忽ち人の怪みを受る者也、世の中の僞金師皆困究の餘り、俄に富をなさんとて、僞金を作る、いく日もあらで召取らるゝ、拙しといふべしといへり、こゝにおいて、いよ／＼僞金師たること極りたり、或日僞金二ッ三ッを持行て、吾これを作れり如何あらんといひて見せければ、これは拙しこれを見よとて、自ら作りし僞金三ッ四ッ出してみせけり、岡引笑ひて是は眞金なる物を、何ぞ僞金といはんといひて信せざりければ、初て鑄形を出し、ひそかに／＼といひけり、其夜召捉へて段々吟味せしに、吾天運盡て彼に欺かれぬれば言ひ解く術なし、此業を作す事十餘年、金を作ること千兩に近し、人の疑ひしことなし、近頃僞金師多く他人の作りたる中にも、大抵よく出來たるは取交て用ひしに、それより疑ひを受たるなるべし、年のよるに從ひ氣根薄く、自ら作るも物うくて、他人の手をかりたる報ひなれば、是非なしといひけり、同類あるべしとゝへば、かゝることをするに、同類あるやうなることにてはなし難し、

百事皆吾手一ッにてする程ならねば、忽ちあらはるゝといひけり、これは通用金より少し位を下げたるなれば、利分も薄し、但通用するとも通用金と多くも違ひなし、直段は半分にて出來る也といひけり、半分の直段にて利薄しとは如何とといへば、三ッ二ッかくれば、通用金より遙に上品に出來るよし申けると也、

〔憲の須佐美三〕一瓜の仁助とて、目あかしの類なるものあり、下町に大に家作して、弟子など多く持ける、遠國に有る惡黨とても、彼方より通達して搜しぬれば、則知れぬるよしにて有ける、目黒に行しもの、歸りに、町家へ腰かけて休み居たるに、女一人上り居て、うつぶしに成て泣悲を見て、其由を問ければ、或奥の女中代參に參られたるよしにて、佛前に拜み居るうちに、品々置たるものを、誰となく盜み取てさりしが、跡方もなかりし故、尋ぬべき樣もなく、歸りて主人へ言出すべき詞もなしとて、先程よりあの如くにふし沈みて居られ候、いたはしき事にこそと語りけるに、町人ふうの者壹人來て、鄰を借て休み居しが、是も見付て、いかなる事と問しほどに、先のあらましを語りしかば、哀れなる事かな、すべき樣も候べし、今少し御まち候へと言けるうちに、若き男一人通りけるを呼かけて、此女中は斯々の次第にてあるよし、代參をも得せず、難儀なる體也、御身世話して取かへして遣られ候へ、我は瓜の仁助也と言ければ、此者かしこまり、心得候とて、往てやゝ有て、其品を取揃へ持來り、彼是とたづね、手間取候よしを云て、彼者にわたしければ、則女に返しあたへけるとぞ、彼世上に手びろき事知るべしと、人の語りけるが、其儘に居らずして、私多く有て、寛保の比刑せられけり、

古事類苑

法律部五十

下編下

囚禁上

牢舍 牢舍遭火 出火放釋囚人 一八四
囚禁具 二〇一
掌獄 牢帳 二〇四
牢內法度 二〇七
牢內巡視 二一六
入牢方法 囚人屆物 二一九
入牢代人 二二八
囚人供給 同
囚人取扱 二三八
牢內雜事 二四六

古事類苑

法律部五十

下編下

囚禁上

禁獄ハ、德川氏ノ時ニ於テモ、既決囚、未決囚ヲ禁ズル所ナリ、江戸、京師、及ビ諸國ニ於テモ其設アリテ犯人ヲ囚禁ス、今江戸ノ牢舍ニ就キテ、其概略ヲ云ハンニ、牢舍ハ牢屋奉行之ヲ總管シ、鎰役、數役、小頭等ノ職アリテ、獄內ヲ監督ス、囚禁具ニ手鎖、ホダ、繩等アリ、手鎖ハ手ヲ禁ジ、ホダハ足ヲ鎖ス、牢舍若シ火ニ遭フ時ハ、囚人ヲ放釋シ、避難後更ニ預定ノ所ニ集ラシム、歸囚ハ其刑ヲ減ジ、歸ラザル者ハ刑ヲ加フ、牢內ニハ獄吏及ビ囚人ノ爲ニ、法度ノ設ケアリテ之ヲ撿束シ、恒ニ非違ニ備ヘ、夜間ハ殊ニ夜廻アリテ、之ヲ戒メタリ、又一箇月ニ數度牢屋奉行等牢內ヲ巡視ス、之ヲ牢內改ト云フ、入牢者アル時ハ獄吏囚人ヲ按撿シテ後、牢舍ニ入ルヽナリ、囚人ニ物ヲ贈ル者アレバ、獄吏品目ト現品トヲ對比シ、更ニ按撿ヲ加ヘテ後ニ囚人ニ付スルナリ、囚人ニハ筵ヲ與ヘテ之ヲ敷カシメ、衣類ハ毎年五月、九月ノ兩度ニ給シ、食糧ハ朝夕兩度ニシテ、汁ト菜トヲ添フ、行水ハ一箇月ニ數度アリ、月代ハ毎年七月、十二月ノ兩度ニ行フノ例ナレド、牢名主等ハ一箇月ニ一回之ヲ行フコトヲ得ルナリ、囚人疾病ニ罹レバ、醫師ヲシテ診察セシメテ、藥ヲ與フ、或ハ溜ニ於テ、加養セシムルアリ、或ハ親戚等ノ請ニ依リ私宅ニ於テ療養セシムル等一ナラズ、病囚死スル時ハ、罪ノ輕重ヲ以テ鹽詰ニシ、或ハ取捨又ハ非人ヲシテ取片付ケシム、牢內ノ囚人中ニ於テ牢名主、角役等ト稱スル者アリ

牢舍

テ、牢內ノ雜事ヲ行フ、新ニ入牢スル者ハ、ツル金ト稱シ、私ニ金子ヲ齎シ、牢名主ニ遺ル、然ラザレバ、酷使セラルヽノ弊風アリ、又新入者ハ、既ニ入牢セル者ノ爲メニ、死ニ瀕スルノ呵責ニ遭フ事アリ、又牢內ニ於テ、若シ恨ヲ懷カルヽ時ハ、夜間暗殺セラレ、唯病死ト稱シテ止ムモノ往々アリ、牢內ニハ酒煙草等ハ禁制品ナレドモ、賂ヲ牢舍ノ下男ニ送リテ、之ヲ得ル者アルニ至ル、故ニ幕府ニテハ屢〻此等ノ弊風ヲ矯正セントセシカド行ハレズ、囚人禁ヲ犯シ、或ハ破獄シ、又ハ他ノ非違アリテ、獄吏ノ譴責ヲ蒙リシコト往々アリシナリ、

禁獄ヲ德川氏ノ時ニハ、入牢又ハ籠舍ト稱シ、多クハ刑名ニアラザレド、幼者又ハ婦人ノ犯罪者ニシテ、本刑ニ處スルコトヲ得ザル者ヲ幽閉スルアリ、是ヲ過怠牢ト云フ、是ハ一ノ刑名トナレリ、

永牢ハ終身獄舍ニ幽スルコトニテ、是亦刑名ナリ、

揚屋(アガリヤ)入(イリ)、揚座敷入ハ、並ニ獄舍中ノ一室ニ拘禁スルヲ云フ、禁獄中ニ於テ頗ル寬待セラルヽモノニテ、罪ノ未ダ決定セザルモノモ是ニ入ル、凡ソ旗本五百石以上ハ御預ト爲シ、五百石以下及ビ御目見以上ノモノハ之ヲ揚座敷ニ入レ、其以下及ビ大名ノ臣下、僧侶、醫師等ハ之ヲ揚屋ニ入ル、婦人ニテモ御目見以上ハ揚座敷ニ入レ、以外ハ揚屋女牢ニ入レタリ、

〔易林本節用集 路〕籠舍(ロウシャ)

〔書言字考節用集 一乾坤〕檻(ロウ)匀瑞、所ニ以養一レ獸也、　籠(ロウ)和俗所レ用　籠舍(ロウシャ)本字、牢舍、　牢(ラウ)𢈪厩、閑ニ牛馬一曰レ牢、字彙、所ニ以拘ニ罪人一也、　牢獄(ラウゴク)又云ニ牢檻一、牢舍(ラウシャ)、牢屋(ラウヤ)俗作ニ籠屋一　獄屋(ゴクヤ)字苑、獄、牢ニ罪人ニ處、　獄舍(ゴクシャ)又云ニ獄犴一　囹圄(ヒトヤ)說文、所ニ以拘ニ罪人一也、　囚獄(同)牢獄、牢檻、獄犴、圜犴、均臺、皇全、

〔江都管鑰秘鑑 五〕牢中由來諸說

忝も享保の聖朝、大岡の淳吏に命じ、殊に牢中の艱困を御尋ましく〳〵ける事、人々の粗聞し所也、然りといへどもいまだ其實中の實をしらず、爰に又幸ひに官府の金鑰をかりて、享保年中石出

帯刀が大岡侯へ上書せし寫を見得て爰に寫し傳ふる也、

覺

一牢屋初めて御建被成候は、天正年中の頃常盤橋の外、只今奈良屋市右衛門幷後藤屋敷に牢屋出來、其後慶長年中、牢屋此所へ引ケ申候由承り傳へ候、其節の扣帳面等無之、尤繪圖面も無御座候、○中略

一四拾三年已前、天和三亥年、新規揚座敷出來仕候ニ付、場所無御座、牢屋敷罷成候同心居宅被召上、揚座敷御建被成候、○中略

一本牢四拾三年已前迄に、三方壁土藏作にて、前通りこうし付申候ニ付、殊の外囚人ども難義仕候ニ付、右揚り座敷御普請の節、前々ゟ帯刀申上、四方こうしに願ひ上、願の通り格子造りに被仰付候、其節の牢屋繪圖御座候ニ付、さし上申候、貳十三年已前、元祿十六年牢屋敷類燒ニ付、三方之町屋敷御取擴、牢屋建樣相替り申候、○又見二十三册起立部

〔江戸砂子〕一小傳馬町

囚獄　小傳馬町一丁目の北手御入國の砌、此邊に大榎四五株あり、其比の徒者を捕へ、此木の下に置る、大御番衆石出帯刀と云人、強情の士なれば、かれらを預させられしより、いつとなく其御役儀をつとめられしといへり、

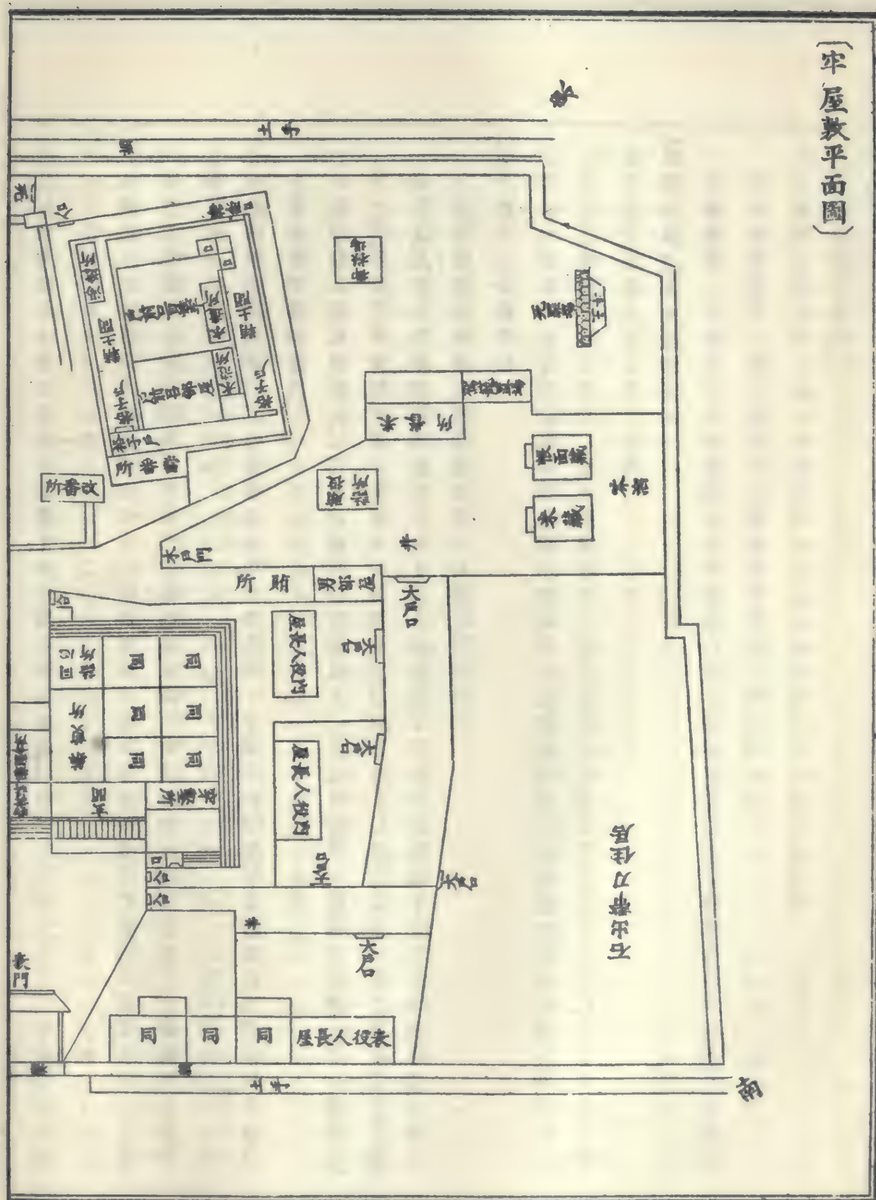
〔諸例類纂〕五牢屋秘事錄○中略

一牢繚檻內ニ牢有之、二重格子外牢さや之內に、同心番所有之、夜ハ不寢番有之、雪隱所々ニ有之候、右雪隱之下ハ、鐵ニ而格子ニ張有之候、下 如此鐵ニ而張り申候

一牢之字、公儀ニ而ハ牢と書候、穴冠をきらひ申候、昔ゟ右之通仕來り候、

〔干祿字書〕牢牢上俗下正

〔牢屋敷平面圖〕



〔憲教類典四ノ二 上囚獄〕元祿元戊辰年六月十九日

囚獄石出勘大夫江被仰渡覺

一牢配多候間、牢屋風吹ぬき候樣、所々格子可申付事、

〔江都管鑰秘鑑五〕覺○中略

一牢屋掃除等申付候ても、人息又は不淨所にて、惡敷香仕候間、牢屋二ケ所御座候ニ付、壹ケ月切に囚人ども入替へ、掃除等申付候はゞ、香も醒め然るべくと奉存候、○中略

享保三戊戌年閏十月十七日

坪內能登守

中山出雲守

大岡越前守

〔牢獄秘錄〕大牢。貳間牢。入牢者之事、

一大牢ハ宿有之者、貳間牢は宿無之者、依之俗に無宿牢と云也、

〔牢獄秘錄〕女牢入牢之事

一女牢ハ、西口之揚り屋にて、緣類有り、尤女之入牢は人數少故に、東西之分ちなし、尤數多入牢之時ハ、遠島部屋東之口揚り屋にも入る也、牢內之言葉に、女牢を女部屋と云也、

〔牢獄秘錄〕町奉行所假牢之事

一假牢ハ奉行所屋敷內に有也、先壹度假牢に入れ、其後南牢江入る、又本牢ゟ呼出し候科人は、先假牢に入置也、假牢に入る時は、是迄本繩にてモッコタにのせ來りても、小手をゆるめ、假牢に入る事也、尤白洲江呼出すには小手をゆるめ呼出す事也、

〔德川禁令考二十八 捕盜使〕假牢白洲訴所等取建之覺

○按ズルニ、南牢モ亦奉行所ニアルナリ、罪人假牢ニ入ルヲ俗ニシヤモ入ト云フ、

一假牢詰小屋ト云

九尺ニ三間四方程無之候而ハ、用辨致兼候、此内非人詰番居候所ハ別ニ仕切、尤板はめ丈夫ニ申付候、

〔記事條例　二〕文化九申年三月廿三日

本石町貳丁目重右衛門店
正九郎方旅宿致居候　德兵衛 申二十五歳

右之者儀、道中奉行ニ而、吟味筋有之由ニ而、捕渡之儀、兼而達有之候處、此方御番所江自訴致候ニ付、假牢江入置、〇下略

〔公裁秘錄　三〕一本所牢屋之事

石川左近將監殿
菅沼下野守殿
中川飛驒守

郡代附本所牢屋敷ニおゐて、牢舍いたし候節、囚人共氣絶いたし候歟、亦者歩行不相成樣罷成候得共、囚人共之内ニ而介抱爲致候仕來ニ候處、今般牢屋敷總體普請出來いたし、牢内より吟味所手遠ニ相成、囚人共ニ介抱爲致候儀者難相成候間、以來牢問之節は、非人人足相雇候樣取極申候、右者乍聊牢屋敷諸入用相增候儀ニ付、此段御達申置候、以上、

申八月

〔類例秘錄　六〕桑原伊豫守掛り 安永八亥年八月　柴村藤三郎外三人出

一穢多非人牢舍幷預等之儀ニ付伺、

書面穢多非人吟味之節、村預候者不申付、成丈穢多頭、非人頭へ預申付、實に預候而難差置入牢申付候はゝ、牢内を仕切、百姓町人江入込に不成樣致、牢賄等之入用も、穢多、非人、夫々頭へ申付

候積、勤番支配へ掛合候、尤同役中評議之上申遣候條可被得其意候、以上、

亥八月

〔京都御役所向大概覺書 二〕籠屋鋪間數牢數之事

一牢屋鋪坪數千百貳坪　東西三拾八間 南北貳拾九間

寶永五年子三月大火、小川牢屋敷類燒已後、翌丑ノ八月、三條新地ニ牢屋造畢、御入用銀高三百貳拾七貫貳百六拾目壹分五厘、但銀座運上銀ニ而相渡ル、

內

本牢 三間 六間　次屋 五間 八間半

但 西ノま貳間ニ三間 東ノま三間ニ四間 此內ニ詰牢壹間半四方

切死丹牢 三間 九間　次屋 五間 拾壹間半

但 南ノま三間四方 中ノま三間四方 北ノま三間四方

女牢 貳間 三間　次屋 四間半 五間

上リ座鋪 貳間ニ 三間半

上リ場 東西五間 南北六間　無請上リ場 貳間ニ 三間半　上リ場 貳間ニ 三間半

番所 東西貳間半 南北五間半

中門 明五尺 長サ八尺

囚人御詮議所 東西貳間 南北四間半

拷問所 壹間四方

木馬、貳ヶ所

表門長屋壹間中拾間　門明キ貳間
簀戸門貳ヶ所
牢賄屋鋪東西三間南北貳拾四間
内
食焼所梁行三間桁行拾間　牢賄加十郎居所共
春屋貳間三間　但勘定場共
柴部屋壹間貳間
南側外番部屋貳ヶ所　壹間貳間半宛

是は寶永六丑年八月、三條新地牢屋敷造畢ゟ、洛中藍染屋、山城國中、江州之穢多村々ゟ、外番相勤申候、晝四人、夜六人宛相詰申候、但藍染屋、幷江州筋之穢多は、番代銀を出シ、天部村、六條村之穢多共之内を賴、相詰させ申候、

〔科條類典下四〕大坂御城代江被仰遣候安兵衛取逃、吟味之次第幷口書御取寄可被遊趣書付、

石河土佐守

御當地南茅場町嘉左衛門店元德兵衛事、喜右衛門召仕安兵衛と申者、當正月廿八日、主人喜右衛門所持之金子百三両致取逃、同二月十九日、京都江登、夫ゟ同廿八日、其地江參、日本橋北詰義屋又兵衛を旅宿に致し罷在候處、同三月五日之夜、上本町四丁目之裏ニ居候髮結藤七と申者に誘引被出、右安兵衛と同じ旅宿に居候、名は不知坊主三人連にて、坂町遊女屋見物參候とて、非人之小頭ゑよの勘藏と申者に、右三人共に被捕、坊主は途中ニ而取逃し、安兵衛藤七両人に腰繩を付引連參り、藤七は差免し、安兵衛は天王寺に有之ゑよの頭吉次郎會所之下タ牢に入置、同月十五日、ゑかの大頭富田久右衛門江、安兵衛を引合同廿八日、松屋町之本牢江入、町奉行松浦河内守組與

力羽津元右衛門、仁木八郎左衛門致吟味、

〔法曹後鑑〕駿州嶋田陣屋入牢人取計

入牢人有之節取計方之儀申上候書付　野田松三郎

私御代官所駿州嶋田陣屋附牢屋無之、入牢人有之節取計方、其外先御代官仕來等之儀可申上旨被仰渡承知仕候、此儀去ル申年、先支配ゟ私方江郷村受取候節、陣屋附牢屋無御座候間、江川太郎左衛門、大原太郎右衛門江及掛合候處、先前支配之節ゟ入牢之もの無之、併入牢人有之節は、最寄同國田中本多伯耆守城附牢屋、又は駿府町奉行所江及掛合、同所牢屋江入牢爲致候積、相心得居候旨申送りニ御座候、然處同年田沼主殿頭上知、私支配所ニ被仰付、舊城附相良陣屋内建家侍屋敷御拂ニ相成候節、同所福岡町地内ニ有之牢屋壹棟、御拂相除申度段申上、伺之通御下知相濟候ニ付、万一入牢人有之節は、右牢屋江差遣候積御座候處、去亥十二月中、牢屋類燒仕候、依之以來入牢人有之節は、前條之通、伯耆守幷駿府町奉行所江掛合之上、入牢申付候積り、相心得罷在候、右御尋ニ付申上候、以上、

子八月〇年欠、未詳　野田松三郎

〔公裁秘錄三〕一新規牢屋取立願之事

文政八酉年御代官古山善吉伺、野州眞岡町出張陣屋牢屋取建伺差出候ニ付、村垣淡路守、遠山左衛門尉、曾我豊後守江、石川主水正より、戌年正月相談濟、

御相談書

古山善吉伺書一覽いたし候處、野州眞岡町出張陣屋ニ牢屋無之、吟味物無宿盜賊等、都而難手放者有之節、多分雜費相掛候儀ニ付、郡中入用を以、新規牢屋相建度願出、善吉取調之上、目論見帳繪圖面相添、相伺候ニ付、致勘辨候處、郡中一同之願ニ而、難儀之筋も不相聞、其上已後之取締ニも相

成候間、附札之通可_致_下知_と存候、依_之伺書、并目論見帳繪圖面相添、及_御相談_候、

戌六月

〔二老略傳〕九皐先生嗣錄

川越は松平豆州の舊領なり、豆州は武人故に獄をきびしく造たり、樫木を以格子の間、漸く手のひらを横にして通る程に作り、上下も左右も格子にまつらひ、又足かせあり、鐵を以て長さ三尺計に製し、常の人尺寸も動す事能はざる足かせ有、常に囚獄におく處なり、

〔德川禁令考後聚二法吏警務〕牢內取計之儀并同心勤方之事

一出火之節、手當之儀、牢內風筋惡敷有_之候節者、揚座敷者、并重病人、逆罪もの等ハ、駕籠ニ爲_乘、其外之囚人者、及候だけ者、珠數つなぎニ致し、牢內危相成候得者、風筋ニ寄り、兩番所回向院江爲_立退_候、尤至而急火之節者、繩掛不_申放遣し候、無_滯立歸候者、先例之通、重科之者ニ而も助命申付候間、心得違不_仕立歸候樣、帶刀申渡候、

〔諸例類纂五〕牢屋秘事錄〇中略

一出火之節、牢屋敷へ火懸り候へば、切はなし、本所回向院迄立退せ申候、火鎭り候而可_立歸_旨、石出帶刀申付候、其場より逃去り候者ハ、捕次第死罪也、罪なき者も、死罪申付候、立歸り候ものハ、死罪ハ遠島、遠島ハ追放、一段ヅヽ罪を輕く被_仰付_候、每度火事之節きりはなし候へば大方立歸申候也、

〔牢獄秘錄〕出火之節之事

一出火之節、牢內之科人皆々勝手次第ニ逃し候由申傳ふ事有りといへ共、是ハ大昔之事也、當時ハ入墨百敲位にて、輕キ科人ハ、出火之節勝手ニ立退せ、消火之後歸牢之ものハ、其罪一段輕く相成候、如何樣成近火ニても、遠島死罪重科之ものハ、矢張本繩に懸け、モッコウにのせ、乞

食にかつがせいだす事なり、尤平日牢外乞食小屋頭を長兵衛と云、

一近火之節ハ、右出帯刀、鎰役を呼、手當者死罪、遠島、重科を云、を心付候様に申付る、時に鎰役外さやに入、死罪遠島重科之人を、壹人宛外ざやへ呼出し、張番是に縄を懸、其後ニ牢庭江引出ス、此處に乞食人足モッコウにさし添待居る、乞食横目、乞食之内也科人三四人に壹人宛位之宛に差添る事也、依之其人足共に差添扣居る、死罪、遠島、重科之外ハ、皆縄なしに逃し遣ス、

一近火之節、揚り屋科人重科ハ、死罪遠島乗物之手當、兼々拵有りて、日雇請負人ゟ、重科之乗物かき、是も平日當置、早速に來る事也、

一牢内に大概重科之者ハ、總牢にて多き時三十五六人位、少き時ハ二十四五人位のもの也、

一牢内之總人數、大牢八九十人、貳間牢八九十人、東西共此位のもの也揚り屋三四十人、少き時、二十四五人、女牢多き時貳十人位のもの也、東西總牢の人數四百人位、少き時三百人位之もの也、右之手當にて、手當之重科人ハ少きもの也、

〔南撰要集〕寛政九巳年十一月○中略

下ケ札 別紙御問合○中川飛驒守問合へ銘々下札致し、返却いたし候、

午六月　村上肥後守○中略

一出火之砌、問合も有之節ハ、囚人共縄付ニ而爲立退候哉、急火之節ハ、如何取計候哉之事、

下札 牢内へ風筋悪敷有之候へバ、重病人并逆罪之もの有之節ハ、駕籠ニ乗セ、其外之囚人ハ、成丈稍へ出し、珠數つなぎニ爲致、牢内危成候時ハ、風筋ニゟ、兩奉行所并回向院へ爲立退候、急火之節ニハ、縄掛不申放遣、無滯立歸り候ものハ、先例之通重科之ものニ而も助命被仰付候間、心得違不致、立歸り可申旨辨之助申渡候、

〔記事條例　一〕明和九辰年三月二日

出火放釋囚人

一牢屋敷燒失ニ付、御番所牢屋同心詰所部屋ニ揚リ屋者は入置、并假牢ニ揚リ座敷者入置帶刀持ニ而、番人等者組之者附置候得共、當番ニ而も、心を附候樣申渡候事、

〔京都御役所向大概覺書二〕牢舖之事〇中略

一籠屋近所火事之刻、牢舍人のけ候節は、洛中町々より出し來候町之用人籠屋江罷越、繩取いたし候、

但出火之節、悲田院共、并天部村六條村穢多共牢屋江相詰候、

〔武藏鐙上〕爰に籠屋の奉行をば、石出帶刀と申す、しきりに猛火もえきたり、〇明曆三年正月大火既に籠屋に近付しかば、帶刀すなはち科人共に申さるゝは、汝ら今はやきころされん事疑なし、まことにふびんの事なり、爰にてころさんこともむざんなれば、しばらくゆるしはなつべし、足にまかせて、いづかたへもにげ行、ずいぶん命をたすかり、火も靜りたらば、一人も殘らず、下谷のれんけいじへ來るべし、此義理をたがへず、參りたらば、我身に替ても、汝が命を申助くべし、若又此約束をたがへて、參らざる者は、雲の原までもさがし出し、其身の事は申に及ばず、一門迄も成敗すべしと有て、すなはち籠之戸を開き、數百の科人をゆるし出して、はなされけり、科人どもは手を合せ淚をながし、かゝる御慈みこそ有がたけれとて、思々ににげ行けるが、火靜りて後約束の如く、皆下谷にあつまりけり、帶刀大きによろこび、汝等まことに義あり、たとひ重罪なればとて、義を守る者をば、いかでかころすべきやとて、此おもむきを御家老がたへ申上て、科人をゆるし給ひけり、〇中略其中に一人の囚人、しかも至て科の重かりしが、よき事に思ひて遠く逃のび、我古鄕にかへりしを、在所の人々、このものは助るまじき科人なるに、のがれてかへりしこそ怪しけれとて、つれて江戶へまいりければ、奉行がた大ににくませ給ひて、ころされしとなり、

〔明良洪範一〕寬文七年、大火傳馬町牢屋敷類燒ノ時、石出帶刀罪人共ヲ悉ク召出シ、申渡シケルハ、

今急ニシテ此所通ル可ラズ、汝等ヲ燒殺サンモ不便也、牢ヨリ出ス間、心ノ儘ニ立退ベシ火鎮リテ三日ノ中ニ歸ルベシ、其者共ハ申立テ命ヲ助クベシ、若亦逃隱レ歸ラザル者共、從類ニモ罪ヲ懸ケ、其身ハ何レニ忍ビ居ル共、日本中ヲ尋子出シテ、重科ニ行フベシ、十一年以前、丁酉ノ歲ノ大火ニ淺草橋ニテ大勢命ヲ失ヒシハ、汝等ガ類ノ牢舍人也、今度ハ帶刀ガ了簡ヲ承リテ、命惜シクバ立歸ルベシト申渡シ追放シケル、牢ノ燒シハ二月六日也、七日ニハ殘ラズ立歸リシ內、三人見エザリシ、是ハ腰ノ立ザル者ナリシ故、燒死タルニヤ、其後其事申立テ、其歸リシ者共皆赦サレ、其中必死ニ當ル者共ハ、薩摩ノ島ヘ流サル、

〔折たく柴の記下〕十一日〇享保元年正月にもまた火發して、延燒多かる中に獄舍もやけうせて、禁獄のものどもあまたにげうせたり、此中にも、獄中にある事、既に十六七年を經て、今は其罪犯も明ならず、そのゆかりの者共もなくなりて、今は其身を尋ね求むべからぬも又多し、其逃失せしをとらへ得し者の事は、いかにや罪すべきなど、奉行の人々より申す、此事いかにや有べきと、詮房朝臣〇間部問はれたりけり、獄に下されし者共、其本罪に輕重あるべければ、此たび逃うする事もなからむには、本罪によりて沙汰すべきは勿論也、然るに今かゝる事の出來たらむには、公法を犯すの罪小しきならず、されどかゝる時に、にげうせたらむには、一旦の難をのがるゝ事もやあると思ふは、下賤の者のよのつねの情也、多くの年所を歷て、罪犯も明らかならぬ者共、あまた獄中に禁められしに至ては、此年月の大赦常赦の度々、いかに其恩には洩たりけむ、然るを今一切に皆極刑をもて斷ずべき事、誠にあはれむべきの事にこそあれ、是より後もかゝる事共あるまじきにあらず、今より後は、かゝる時に獄をのがれざらむものをば、本罪より一等を減じて決せられ、のがれたらむものをば、本罪に一等を加へて決罰せらるべき由の法をたてられ、まづ其罪犯知るべからざるもの共、獄中にあるをば、皆々赦還され、次に其餘獄中をのがれざらんものども、

皆々罪一等を減じて決せられ、又次ににげうせたらむもの、行方知るべからざらん者、尋索めらる、事なかるべし、すべて此等の事出來しは、皆是奉行の人々、矜恤の心おはさぬが致す所也、返す返すもさかるべき事にあらずと答たりけり、此書の事猶今もあり、されど此議合ざる事にやありけん、某が申せし事の如くに沙汰ありしとも聞えざりき、

〔御定書百箇條〕牢抜、手鎖外し、御構之地江立歸候もの、御仕置之事、

寛保二年極
一牢屋燒失之節、放遣不立歸もの、　不立歸不及沙汰本罪相當之御仕置可申付

同
一右燒失之節、放遣立歸候はゞ、　本罪相當より一等輕く可申付

〔科條類典下六〕類燒之節牢屋致欠落候囚人、死罪ニ成候例、

南新堀町甚兵衛店市左衛門召仕
死罪　與兵衛

右與兵衛儀、小盗ニ付入牢之處、牢屋燒失之節、致欠落候ニ付、前之牢屋燒失之節欠落ものは、遠島ニ成候故、此度も遠島と伺候處、向後も此類死罪可仕旨被仰出候、

享保三年戌二月廿二日

〔法曹後鑑〕牢屋類燒ニ付囚人取計一件

天明六午年正月廿二日、牢屋類燒ニ付、石出帶刀方ニ而放遣候、御勘定奉行掛囚人共之內、銘々宅江罷越相屆候分は、卽日溜預ヶ申付候處、掛り宅江不罷越、回向院江立退候分は、同月廿四日、町奉行山村信濃守方ニ而、溜預申付置、二月十三日ニ至り、右之分於溜引渡可申間、明十四日請取之もの差出可申旨、信濃守ゟ伊豫守丹後守江達書被差越候處、先例不分明ニ付、安藤彈正少弼御勘定奉行勤役中、牢屋類燒之例承糺候處、溜江請取人差遣候儀無之由ニ而、牢證文溜證文等之寫被差越、其節は回向院江立退候分も、其掛り掛り江罷越相屆候樣、町奉行にて申付候ニ付、囚人ども掛り宅江罷越相屆候間、直ニ溜預り申付候趣ニ相聞候間、其趣を以、信濃守江再應掛合候處、請取人

可差出旨之達は、間違之由被申聞候ニ付、前書達書は相返、請取人は不差遣宅江相屆、其日溜預ケ申付候分は、其日を用ひ、回向院江立退、廿四日町奉行ニ而、溜預申付候分は、則廿四日之日を用ひ、且類燒之當日牢內ゟ呼出置候內、類燒ニ付、直ニ溜預ケ申付候分共、左之通牢證文、溜證文遣ス、且掛り宅ニ而、溜預申付候分は、町奉行江其旨達書遣し、伺書差上置分は、一等輕く可申付旨之伺書猶亦差上ル、振合左之通、

溜證文

無宿
佐兵衛
午貳拾六才

牢證文

巳十二月廿七日入牢

右之もの呼出之上、牢屋類燒ニ付、非人頭善七溜預申付もの也、

午正月廿二日　伊豫　囚獄〇中略

辰十月廿日入牢
巳四月十三日遠島申渡

無宿
運平事
友七
午三十歲

右之もの昨廿二日牢屋類燒ニ付、自分宅江立退候ニ付、非人頭善七溜江預遣もの也、

午正月廿三日　丹後　囚獄〇下略

〔德川禁令考後聚三十六司刑書道則〕盗賊御仕置段取評決之事

當三月四日、芝邊出火牢屋敷類燒之砌、放遣し立歸り候囚人御仕置之儀、火附盗賊改荒尾但馬守伺、評議御下ケ被成候ニ付、盗賊御仕置段取、左之通一座評議相決、以來段取之基本ニ取極置候旨、牧野備前守殿江申上置候事

死罪　入墨重敲　入墨敲

入墨重敲　入墨敲　入墨

入墨敲　入墨　重敲

入墨　重敲

重敲　敲　於レ溜五十日手鎖

敲　五十日手鎖　於レ溜三十日手鎖

非人手下　三十日手鎖　急度叱り

三十日過怠牢舍

但五十日ニ候ハヽ　五十日手鎖　三十日手鎖

右文化三寅年五月廿五日、評議極、

〔御仕置例類集一ノ二〕文化三寅年御渡

火附盜賊改荒尾但馬守伺

一御仕置相決候囚人、牢屋敷類燒之節、放遣立歸候に付、御仕置評議、

麻布今井三谷町嘉兵衛店四番組人宿藤三郎寄子　鐵五郎

右之もの儀、武家屋敷門内江立入、中間部屋入口建寄有之戸を明ケ這入、夜具合羽等盜取、逃出候砌見咎被捕押、右品捨置逃去、又は兩國橋廣小路に而、町人體之もの懷中之錢入候財布拔取、其外所々人立場に而、腰錢袂錢度々拔取候段不屆に付、入墨之上重敲可申付旨、戸川大學勤役中御差圖相濟、いまだ御仕置不申付ものに御座候、然ル處去ル四日芝邊より出火、牢屋敷類燒之砌放遣し候處、囚獄石出帶刀申渡を相守、無相違本所回向院江罷越候に付、存命に候得ば、敲之上宿藤三郎江可引渡ものに候段、一件之もの共江可申渡、

此儀明和九辰年評議に御下ケ被成候、長谷川平藏火附盜賊改之節相伺候、市ケ谷無宿谷五郎事金藏儀、身持不埒に付無宿に成、壹町家戸明キ有之處江這入錢盜取、人立場に而金錢入候巾

著鼻紙袋抜取、其外町家廓先談議場等に而雪踏盗取候段不屆に付、敲と可事伺處、同年二月廿九日牢屋敷燒失之節、放遣候處立歸候間、三十日手鎖之上門前拂と相伺、評議之上本罪入墨之上重敲に而相當可仕處、牢屋燒失之節放遣立歸候もの本罪相當より一等輕く可申付旨之御定に准じ、敲と申上其通相濟候例に見合、伺之通存命に候得ば、敲之上宿藤三郎江可引渡もの に候段、一件之もの共江可申渡、〇中略

番町無宿新次事入墨　権次郎

右之者儀、入墨重敲御仕置之上、人足寄場江入、其後引渡に相成、又は如元入墨之上江戸拂に相成候後も、御構場所不立去、其上盗不相止、武家屋敷門内江立入忍居、離レ土藏錠卸有之戸を押破這入、二階簞笥錠固鮮明ヶ、或は湯屋古著市場に而衣類帶其外品々盗取、其上往來に而町人體之もの江口論いたし懸棒に而打擲いたし著居候衣類合羽剝取、又は突當り懷中之金銀入候鼻紙袋拔取候段不屆至極に付、獄門可申付哉之旨、戸川大學勤役中御仕置奉伺置候ものに御座候、然ル處去ル四日芝邊ゟ出火、牢屋敷類燒之節放遣し候處、囚獄石出帶刀申渡を相守、無相違本所回向院江罷越候に付遠島、

此儀明和八卯年評議に御下被成候、中野監物火附盗賊改之節相伺候、川越無宿こりこう長吉儀、元柳橋に而中間體之ものを捕打擲いたし所々江疵付、木綿單物無體に剝取、同所に而無宿けんつう庄助と馴合、無宿あをさ申もの江口論いたし懸、木綿單物無體剝取、淺草寺町に而無宿善六坊主を打擲いたし疵を付、着し居候木綿引とき無體に剝取、或は湯嶋番屋に而衣類盗取、其外所々人立場に而、腰錢袂錢度々拔取候段不屆至極に付、獄門と相伺、評議之上伺之通と申上置候處、牢屋類燒之節放遣し立歸候間、御定之通一等輕く、遠島と猶又申上、其通相濟候例

に見合伺之通遠島、
朱書評議之通濟

〔諸例類纂五〕牢屋秘事錄○中略

一罪之輕重ニより、御手當足ニほだせ打置申候、

〔二老略傳〕九皐先生嗣錄

川越は松平豆州の舊領なり、豆州は武人故に獄をきびしく造たり、○中略又足かせあり、鐵を以て長さ三尺計に製し、常の人尺寸も動す事能はざる足かせ有、常に囚獄におく處なり、

〔牢獄秘錄〕牢屋敷見廻り之事

牢内名主非道にして、○中略名主不法に究る時は、牢内にて手錠又罪に依り、後へ手錠、兩ホダにて、外の牢へ替申付る也、

〔牢獄秘錄〕牢内繩之事

一揚り屋繩といふは、兩方の小手をゆるく縛る也、大牢貳間牢は、後ロ手に縛る也、

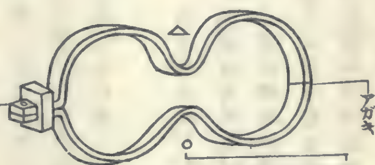
一切繩といふは、死罪ものに懸て打首になる也、此切繩と言は、わらの繩ふたすぢ合せてなひ合する也、

一此繩にも四通り程も有る也、但切繩ハ一ト通り也一張番懸ケ繩を習ふには、此四通りを心得るなり、先揚り屋繩、腰繩、片手繩、是は片手後ロへ廻らぬもの有之時は、片手繩にかけるなり、片手繩に懸る時は、片手を後ロへ廻シ縛り、片手は腰にゑばり付る也、かゝる生れのものは、切繩を懸る時も、矢張り片手は腰へゑばり付る也、

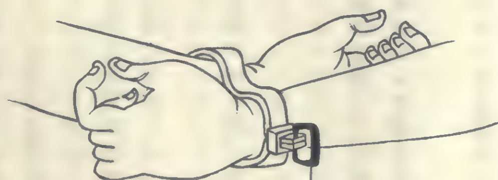
一揚り屋ものへ繩を懸ル時は、揚り屋緣類にて、張番繩を懸ル、女牢、大牢、貳間牢のものは、土間にてかける尤外ざやの内にてかける也、

〔牢獄秘録〕手錠圖

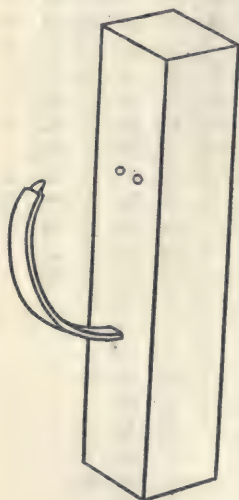

此穴へ錠おろす
此穴へ錠おろす


アガキ
此穴へ錠をおろす
一通り之手錠ニハ△此印之處より○此印之處へ封印付て家主へ預けニ成る也
牢内の手錠は女手錠とて殊之外かたき錠ゆへ此封印なしと云也

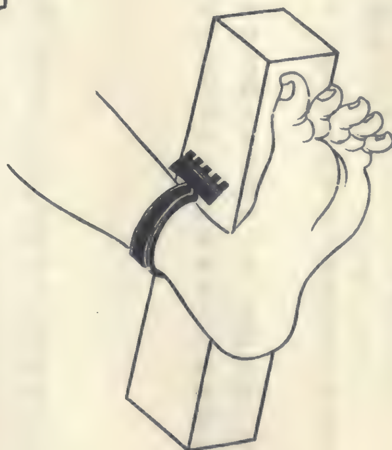

かねのあはせ目へ此かねをつける也


此錠ハつき錠也

ホダ圖



兩ホダといふは兩
足へ是のごとくか
けることなり



掌獄

一切繩を懸る時に立合候鎰役、平當番共、無刀にてさやの內ニ入立會ふ也、昔は脇差をさして立會しが、壹人無法之死罪人平當番之脇差をうばひとり、壹兩人も怪我せしゆへ、其後は無刀にて入候事になりたる也、

〔牢獄秘錄〕大牢貳間牢入牢者之事

一北町奉行懸リ之同心ゟ召取送リ來ル時は、科人縛りし繩白シ(是北町奉行の印之繩也)南之町奉行方は縛リ繩紺染也、御勘定奉行は、三ツぐり白繩也、本役加役は白細引にてきまりなし、又御呼出し、其外牢屋敷ゟ懸け出す繩は、皆々コン染之繩なり、是牢屋敷之繩とて、定りある事也、

〔明良帶錄　五〕囚獄(町支)三百俵高　同心五十八人

石出帶刀是なり、俗に牢屋奉行と云、都而罪人を取扱ふ事を司る、昔三年寄町與力組合持なり、石出は大番筋にて系圖門地正敷家なり、

〔續視聽草　二集八〕牢屋鋪年歷

由緒書

一先祖本多圖書常政、天正之比ゟ於三州權現樣江御奉公仕候、此筋は大御番組に而御座候由承傳候、此時星地と申苗字可名乘之由、御直に被仰出候由、然ル處石出は在名に而御座候ニ付御願申上、苗字相改候哉、其段碇と相知不申候、

其後大坂江御供仕候處、關東に盜賊亂妨多ク有之ニ付罷下リ鎭可申旨蒙上意被下候、自是囚獄に罷成候由申傳、御代々只今壹役義相勤來候、以上、

享保十年巳九月　石出勤助

石出左兵衛

〔御役所持場一件留書〕町奉行支配

高三百石　囚獄 石出帶刀

拜領屋敷　小傳馬町壹丁目北側不殘　米澤町貳丁目

高十人扶持　右帶刀幼年ニ付宿抱 神谷辨之助

高貳拾俵　貳人扶持　牢屋同心五拾人

拜領屋敷　神田鍋町貳丁目　貳百九拾坪　米澤町貳丁目　三百七拾坪

橋本町四丁目　百八拾坪

高貳拾俵　貳人扶持　同斷八人

但安永四未年百姓牢新規ニ相建候砌增

拜領屋敷無之

但願出し有之由　牢屋下男三拾八人

〔江都管轄秘鑑五〕覺○中略

一與力付置候義は、諸事與力共見分の上吟味いたし、大小に不依、早速私共承り候樣可仕候、牢內同心下男の義は前々ゟあしき沙汰承り候ニ付、粗吟味仕候へども、手放候儀故難及候段は、私ども不念にて迷惑仕候、此度一同に同心下男まで取替候樣にと存候へども、與力を付置候上は吟味のうへ不宜候ものは、早速取替品に寄申上、御仕置ニも可申付候、已上、

享保三戌年　坪內能登守

閏十月十七日　中山出雲守

大岡越前守

〔牢獄秘錄〕牢屋同心五十六人之內

鎰役貳人此節ハ、曾川藤藏、高松清次郎、　同助四人

牢帳

數。役。壹人牢屋ニてかぞへ役と云、敲候時數とりの役也、此節ハ石江小市とか云、當時ハ打役よりくり上り、中安兵助勤之、

打。役。四人拷問之時打役也、敲之時も打也、此時之打役中安兵助、高野榮助、杉本八十郎、吉田留吉四人也、

小。頭。貳人是惣牢之番人之小頭也、此節篠原三次郎、河原林甚四郎此兩人也、下當番所江壹夜壹人ヅヽ相詰、平當番五人相詰る也、交代は每日夕七ツ時也、此時牢內之科人數をかぞへ、惣牢を請取る也、但し一々牢內に入りて相改る也、此時牢內科人之內ニかぞへ役有りて壹人々々頭をかぞへ、私共何十何人と云、小頭承届、留メ口を出る也、此時留メ口外サヤニ交代して歸る、小頭壹人、平當番貳人、張番二三人扣へ居る事也、惣牢人數相改無相違請取之相濟、是迄之小頭歸る也、每日夕七時より翌七ツ時之詰也、

世。話。役。四人是も平當番と共ニ下當番所江相詰ル

平。番。此內にて御呼出しの時送り迎を勤、牢內にて平當番といふ、下當番所ニハ平日平當番三人、世話役壹人、小頭壹人相詰ル、都合五人也、

〔南撰要集〕寬政九巳年十一月○中略

下ケ札
別紙御問合○中川飛驒守問合へ銘々下札致し、返却いたし候

午六月　　　　村上肥後守

一傳馬町牢屋番人誓詞、如何樣之文言ニ候哉之事、

下札
誓詞文言別紙掛御目申候

〔御仕置裁許帳〕一主人を殺致欠落者之類附主人を切付ル者之宿仕者、

寬文十一年亥十月十四日

壹人角兵衞○中略

右之者江戶中引廻シ、日本橋ニ而三日晒、於淺草同十一月礫、

右之角兵衞、同類牢帳ニ無之、

〔一話一言二十一〕義士子供の事

一右同日○元祿十六年二月四日內匠頭○淺野家來切腹被仰付候者共之子ども之儀ハ、十五歲以上ハ遠島被

仰付、船出來之內揚屋敷入、幼少之者ハ十五歲迄親類へ御預ケ、其外剃而出家ニ成候者も有之

由、右悴共一卷此方御番所にて被仰付候、牢帳幷十五歲迄之御預ヶ證文、帳面ニ有之。〇中略

右件々は南町奉行所古文書より抄出せしよし、烏亭焉馬ニ得テ寫置、巳六月廿四日

〔南撰要集〕寬政四子年閏十二月十二日、掟書二冊共添、鳥居丹波守殿へ御直上ル、

牢屋敷取締方之儀ニ付奉伺候書付

池田筑後守

小田切土佐守

牢屋敷之儀、風聞御聞被成候間、則帳面壹冊御渡被成、實否之義相糺、風聞之通ニ候はゞ、勘辨致し、嚴重ニ相改候樣可致段、尤仕法之義ハ可申上旨、先達而被仰渡候間、猶又風聞等爲承候所、御渡被成候風聞書ニ書顯シ候通、不取締之儀も相聞候、前々ハ不束に候處、當時ニ至リ候而ハ、格別相愼、風聞書とハ相違仕候も有之、又ハ外ゟ推量を以認候故、事實を不存、如何敷聞請記候義も御座候へ共、一體前々之仕癖惡敷、不取締ニ相聞、尤近頃相愼候迚も、右流弊相殘候間、得と相改不申候而ハ、嚴重ニハ取締リ申間敷、右之內牢屋敷へ拘リ合、組與力共、石出帶刀、其外下役人共義ハ、帳面下札ニも申上候通、近來別而相愼、不埓之樣子も承リ不申候間、此もの共ハ、格別之糺ニ不及、此上改而嚴重ニ申渡、取締可申付候、且牢屋敷御入用金之義ハ、帳面下札ニ申上候通、町方御入用調御勘定方ニ而取調候樣可申談候、

一牢內囚人之儀ハ、掟書之趣度々申渡候へ共、畢竟無宿惡徒共故、掟書之趣も相守兼、品々風聞之通不束なる儀、今以不相止哉ニも相聞申候、畢竟牢屋敷下男共義も、別而可相守處、是以不人柄之もの多、此以後下男共取替、新規ニ相抱候而も、一體同樣之もの共ニ付、以來改而嚴敷申渡置、少ニ而も牢內へ携、猥成儀有之候はゞ、早速吟味仕リ、科重きハ、其節之始末次第取計、一通リ掟背き候ものハ、牢內鞘前へ引出敲申付候はゞ、取締可申候、囚人共も同樣、掟不相守ものハ、本罪

之外ニ、其時々是以右之通敲申付候はゝ、嚴重ニ相成可申候、

一下男共義、囚人ゟ金子兩替之儀世話相賴候とも、決而致間敷可申渡置候へ共、一體輕き者共之義、先ハ當座之勝手ニ相成候事有之故、自然と猥ニ相成可申哉、依之以來囚人ゟ内々金子兩替之儀等相賴候はゝ、早速其段申立、其金子ハ申立候者へ與遣候はゝ、内々相賴候筋ハ相止可申義と奉存候、

右之通ニ御座候、畢竟是迄惣體等閑ニ相過來候哉ニ相聞候間、此度右之通取極置、不束仕候ハヽ、早速其時々右之通取計候ハヽ、一同恐懼可仕、左候へば自ら掟之趣相守可申候、牢屋敷役人共も事改候義及見候はゝ、是以彌相愼、以來取締り宜相成可申哉ニ奉存候、依之御渡被成候帳面下札仕、并牢内前々之掟書寫、并此度尚又可申渡掟書按相添、此段奉伺候、

子閏十二月

〔南撰要集〕牢内取締之儀ニ付申上候書付

書面伺之通可仕旨被仰渡奉承知候

巳〇寛政九年八月二十二日

小田切土佐守

村上肥後守

牢内取締之儀ニ付、坂部能登守勤役中、銘々存寄之趣申上候處、猶一同申談可申上旨御書付を以被仰渡候ニ付、取調罷在候内、能登守御役替ニ付、猶又肥後守一同評議仕候趣、左之通ニ御座候、

一先達而被仰渡候通、牢内之樣子能存候もの呼出相尋候處、坂部能登守ゟ差上候風聞書之趣ニも申立候へ共、何も當時之儀ニハ無之、五六ヶ年或ハ七八ヶ年位も以前之義ニ有之、其上牢毎ニ右體打擲等迄致候儀ニハ無之、重モニ加役方囚人入候牢内之義と相聞申候、右譯ハ前々三奉行掛囚人、并加役方囚人共宿持并無宿夫々之牢ニ打混入候義ニ御座候處、山村信濃守、柳生主膳正

町奉行勤役之節、天明八申年、加役方ニ而も掛囚人罷在候、牢內見廻候樣被仰渡、其節ゟ見廻り有之處、牢屋敷ハ一體町奉行持場ニ有之、三奉行掛り之囚人共迄、加役方見廻り爲致候ハ筋違候義ニ付、加役方掛ハ囚人別牢ニ差置、右牢內計加役方見廻之節爲相見候樣、信濃守主膳正ゟ申渡、只今以別牢ニ入置候義ニ御座候、然ル處加役方ニ而ハ附人と唱、重キ惡事等無之もの、又ハ無罪之者牢內へ入置、目明シ同前ニ召仕、外之惡黨ものを差口等爲致候義有之由、右之外加役方廻り同心ニ附添步行居處を探り抔爲致候ものも御座候由之處、右之者共又候惡事致シ、加役方ニ而召捕候節ハ、前書之通、加役方囚人差置候牢へ入候節、以前差口被致吟味ニ逢候もの、牢內ニ而役人等致し罷在候へバ、右之意趣を以嚴敷打擲致候義も有之候由、夫も邂逅之義ニ而、入牢致候もの每々右體打擲被致候ニも無之由、左候へバ牢每ニ風聞書之通不埒之義共有之義ニも無御座候、何レニも加役方取締重モ之義と奉存候間、其段ハ猶口上を以申上候、乍併外牢內之義も不取締之儀決而有之間敷共難計御座候間、牢屋掛役人共へ風聞書を以相尋候處、右風聞書へ朱書を以別紙之通申聞候間、附札之通ニ可申渡與奉存候、尤是迄牢屋見廻與力御仕置もの等有之節ハ勿論平生一日之內一度ヅヽ、牢屋見廻り、牢內其外賄所等之樣子相改候儀ニ御座候處以來當分之內ハ、一日兩度程ヅヽも刻限を不定爲見廻、折々夜中も不時ニ見廻不埒之趣も有之候はゞ、早速申聞候樣可申渡與奉存候、依之此段奉伺候、以上、

巳七月

小田切土佐守

村上肥後守

〔南撰要集〕寛政九巳年十一月〇中略

下ケ札

別紙御問合〇中川飛騨守問合へ銘々下札致し、返却いたし候、

午六月

村上肥後守〇中略

一牢屋鍵ハ、何役之もの預り置候哉之事、

下札 牢屋同心之内四人鍵役申付置、鍵ハ當番ニ而預り置申候、

〔天保集成絲綸錄七十八〕天保三辰年十二月

書取

牢屋取締改革之儀、先達而被申聞候得共、當時取調中ニ付、追而及沙汰候迄ハ、牢屋同心下男等、不正之筋、且牢内囚人非道之儀等無之、食物并疊、或病人暖補之類迄も、能々行渡候樣精々入念可被申付候、其上ニも不屆成もの有之候はゞ、夫々咎等申付、蔓金并牢内買物等之儀も、隨分無油斷遂穿鑿、囚人附添人數等可成丈手薄ニ不相成樣吟味いたし、於呼出先も入念改候樣向々江も可被談候事、○中略

右之通相心得、猶何ヶ度も無油斷致詮議、取締不弛樣可被申付候事、

〔南撰要集〕牢内掟書

本牢當番所法度書

定

一牢番一日一夜ヅヽ、無懈怠相勤可申候事、

一不寢番之節、無油斷可相勤候、風雨之節、別而繁々牢廻り可仕事、

一牢名主并囚人と心を合せ、賄賂金取之、依怙贔負仕間敷候、尤囚人好身之ものニ被頼、何ニ而も申次間敷事、

一番代り之節、印形取替シ、受取渡可仕事、

一牢舍之もの方へ屆物之儀ハ、一ヶ月五百文ニ限之、其外品々持參候はゞ相改、當人呼出、物書立合可相渡候、尤手形ニ無之物、一切相屆申間敷事、

一下男牢鞘へ出入之節、無斷出入致間敷事、

一囚人入牢之砌、幷呼出歸り之節、衣類其外入念相改可申事、

一牢舍之ものニ付、輕き音物たり共受申間敷事、

一惣而御詮議もの有之砌、樣子承候共、堅他言仕間敷候、於番所取沙汰仕間敷事、

一口部屋之女と、不作法成儀仕間敷候、若左樣之者及見候はゞ、親類緣者たり共不隱置、此方へ可申聞事、

一遠國ゟ牢舍之もの煩候ニ付、預ヶ相成、江戶宿ニ罷在候內、知人緣者ニ有之候共、彼方へ參間敷事、

一醫師療治ニ參候時分、當番同心一人相添、煩候囚人入念樣子爲伺可申事、

一惣而群集之場へ參間敷候、惡所堺町木挽町へ參ル間敷候、勿論博奕諸勝負仕間敷事、

一於番所酒烟草無用之事

一埋門ゟ內へ諸掛リ役人ニ而も、案內無之候ハヾ猥ニ不可入事、

一出火之節、不限遠近不殘可相詰候、假令病氣忌中たりとも、步行相成候ものハ、不及其斷可罷出事、

右之條々堅可相守、万一相背もの於有之ハ、可爲越度もの也、

享保元申年十月

〔德川禁令考後聚二法吏囚獄〕牢內法度書之事

一牢內之法度相守、名主之申付相背申間敷候事、

一牢舍之者、座席上座下座と不相隔、込合不申候樣差置可申事、

一牢內御詮議ニ付引分ケもの者勿論、平生相牢囚人共と近敷雜談爲致間敷事、

一牢内ニ而役人共、相囚人共江吟味ヶ間敷儀申懸、内分ニ而窮迷等爲致間敷候事、

一あらひ錢、又者座錢抔と申懸、錢爲出申間敷候、尤宿々より屆候錢其當人江急度可相渡候事、

一囚人相煩候はゝ、不依何時當番江可訴候、勿論重病之者有之候はゝ、容體得と此方江可申達候、煎藥、幷丸散丹圓膏藥等迄、願候當人江銘々急度可相渡候事、

一博奕停止之事

一入牢之者、幷歸牢之者、呼出歸之者、此方ニ而改入候得共、萬一刃物筆墨金錢等、其外牢内法度之品持來候はゝ、早速此方江可訴候事、

一相囚人着類貸借、決而致間敷候、尤御仕置ニ出候者之衣類貰候迚、着申間敷事、

但出牢致し候者之衣類、上帶下帶ともニ一切留申間敷事、

一湯日、幷土用中凉、又者牢内出入之節、外鞘江出、牢之鐵物、錠之類、或者木切瓦等ニ至迄、牢内持運入申間敷候事、

右之條々相背候ハヽ、其御掛リ江申上、當人者不及申、名主役人迄も御咎被仰付候樣可致候間、急度可相愼事、

右者元文三午年五月、相極候事、

先年於牢内役人囚人共平囚人を難儀爲致、金子持入候得者取上、又者宜衣類着致し候得者押取、張番下男を頼、賣拂配分致し、宿々より之屆物等當人江はわづかならでは不相渡、其上博奕致し下男共右衣類賣拂、或ハ鳥目等調遣候ニ付、囚人共幷下男重き御仕置相成候間、以來右體之儀無之樣可致事、

右者寶暦七丑年七月、相極候事、

〔南撰要集〕當番同心へ申渡

一入牢者有之候節幷呼出ゟ歸牢いたし候囚人共衣類其外下男ニ改させ候義隨分入念改落無之樣可取計候、

一下男牢鞘出入之義其度々立合相改出入可爲致候、万一無斷下男牢鞘へ這入候はゝ急度可相糺候、

一囚人御賄食汁湯其外買物等牢內へ入候砌立合候當番一々相改候上可爲入候、

一湯日之節別而無拔目見張可相改候、

一惣牢揚屋揚座敷內外羽目板鋪板其外相改候義日々當番交代之砌當番鎰役一人立合入念可相改候、

一不寢番之儀時廻り牢廻りいたし風雨之節別而繁々可相廻候、

一先年於牢內役人囚人共新入之囚人金子持入候へハ取上又ハ宜衣類着居候へハ押取張番下男を相頼賣拂或ハ鳥目等調遣右之內致橫取又ハ過分之雇錢を取囚人共宿々へ內通之手紙等屆遣彼是牢內之掟を相背不屆至極ニ付死罪又ハ遠島御仕置ニ相成候義畢竟下男鞘出入之節改方不念ニ候故右體之始末有之候以來一同申合不埒無之樣可相勤候、

右之條々當番同心堅可相守候勿論諸口錠前其外掛り々々日々無懈怠入念可相改候事、

下男へ申渡

先年於牢內役人囚人共平囚人を爲致難儀金子持入候へハ取上宜敷衣類着いたし候へハ押取張番下男を相頼賣拂致配分其上博奕等致シ下男共右衣類賣拂或ハ鳥目等調遣右之內致橫取又ハ過分之雇錢を取囚人共宿々へ內通之手紙屆遣彼是牢內之掟を相背不屆至極ニ付死罪又ハ遠島御仕置相成候間右體之不埒無之樣可致事、

一賄所へ掛り候下男ども右御法度之趣ハ勿論朝夕囚人共御賄手當之儀ハ御定法之通急度相

守、不埒無之樣取計可申事、

一下男とも牢糀出入之節、當番同心立合無之候はゞ、出入仕間敷候事、

右之通相心得、懈怠無之樣急度可相勤事、

安永六年酉十二月

此度改而可申渡牢內掟書

囚人共へ申渡之覺

牢內囚人之儀、名主、添役、角役、三番役、四番役、五番役、本番、助番抔と、品々名目を付、右名目ゟ疊數厚薄居り所之廣サ狹サも自由ニ致來候由、囚人共ハ同樣ニ可有之所、右體之甲乙以來堅致間敷候、

一牢名主人數相增、以來在牢日順を以、古きものを順々可申付候、

一客座、中座、大隱居、小隱居抔と唱へ、名主之知人抔を爲居候由、以來堅致間敷候、

一屆物之錢、衣類又ハ何品ニ而も當人へ不相渡、名主へ取上置候儀有之由相聞候、いづれも當人へ相渡可申候、

一屆物之飯菜抔も、當人ゟ惣相牢之ものへ爲振舞候儀、名主差略不仕、當人心次第可致事、

一初而入牢之囚人を牢名主とも差圖いたし、きめ板ニ而强く敲き候由、以來決而致間敷候、

一惣而牢內掟書之儀、前々ゟ度々申渡置候所、是迄等閑に相心得、御法度之趣不相守も有之樣相聞候、猶又此度改而嚴敷申渡候間、若此以後內々ニ而紛敷儀仕り、元文三年申渡、幷此度申渡之趣、少したりとも相背き候ものハ、急度可申付候、

下男へ申渡之覺

一牢屋敷下男之儀ハ、囚人へ引合候義ニ付、先年ゟ申渡候趣堅く可相守儀ハ勿論之事ニ候、近年別而右申渡等閑ニ相心得候ものも有之哉ニ相聞候、此度改而急度申渡候間、尙又堅く可相守

候、

一囚人ども金子相隱シ持入候而、両替等相頼候とも、決而取次致間敷候、衣類賣拂之世話、宿々へ内通之手紙抔、前々掟之通、決而致間敷候、

一囚人ニ被頼酒抔買遣候義も有之様相聞候、右體之義決而致間敷候、

一惣而下男共掟書之義、前々ゟ度々申渡置候所、得と不相辨ものも可有之ニ付、尚又此度改而嚴敷申渡候、若囚人ども義、金子兩替之義相頼候はゞ、早速其段可申立候、其金子ハ取上、其者へ與遣可申候、若此以後内々ニ而紛敷義仕、安永六酉年申渡幷此度申渡之趣、少シたりとも相背候ものハ、急度可申付候、

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕享保四己亥年二月五日

亥二月五日、於羽目之間、水野和泉守殿、中山出雲守、大岡越前守、御呼被仰聞候ハ、牢屋江彌與力差越、諸事念を入申付候様、且又向後ハ一ヶ月分牢死、幷病人何人有之段、月番明ケ之もの前々諸色相場書差出候通、御月番江書付可差上候、諸事牢内之義、月番明ケ之者月番江申送リ候様に可致旨、御口上ニ而被仰渡事、

享保四亥年二月五日

〔科條類典上二〕享保十七年

御仕置伺書ニ入牢之月日可認旨之儀ニ付御書付

科人又ハ御仕置もの伺書付被差出候節、右科人名書之上ニ、何月幾日ゟ（揚り座敷入牢）と有之儀書付可被差出事、

右之通向後可被相心得候、以上、

二月

〔德川禁令考後聚二法吏部類〕牢内取計之儀、幷同心勤方之事、○中略

一牢改之儀、毎月四度、一牢宛囚人牢輸江出し、見廻リ與力、石出帶刀鍵役立合、小頭世話役之者、下男を召連、牢内江這入、法度之品幷破損所ニ而も無之哉、逸々爲相改候、

〔與力同心勤方大概〕牢屋見廻勤方之事

寛政十一未年書出
一牢屋見廻之儀、一兩日も間を置、又者病人等有之節、二三日も相續見廻リ申候、然處近頃御用多日々見廻リ病人有之候得者、容體醫師江承リ、以書面御願之儀申上候、

但去々巳年九月中被仰渡、一日ニ兩度ツヽ見廻り申候、

一品川淺草溜江私共之内引分リ、壹所ヅヽ江一ケ月ニ壹人宛見廻候處、天明八申年三月中被仰渡、一ケ所江私共兩人見廻リ申候、其段御屆申上候、○中略

一日々相廻リ候度々、賄所見廻リ食汁、其外見分仕、隨分入念麁末無之様、賄役ども江申渡候、

一總牢相改候儀、前々毎月朔日十五日兩度相改候處、近頃右之外兩度相改候様被仰渡、一ケ月ニ四度ヅヽ相改申候、尤前々私共江御渡被置候、御書付之趣、鎰役幷當番同心下男共江爲讀聞、囚人共江者牢内法度書之趣申渡、御屆申上候、○中略

右之通御座候、以上、

〔牢獄秘錄〕牢内夜廻リ之事

一夜ニ入、六ツ時ゟ、平當番牢屋同心也壹人、張番挑燈持なり壹人、日雇ふ牢屋敷にてテンマといふ、手間といふ心にや壹人、是ハ拍子木を打役也、是より時牢に廻りて、明ケ六ツ時迄打廻る、

〔牢獄秘錄〕牢内改之事

一五六日に一度ヅヽ、牢内改有之、此節外ざやの内江石出帶刀、幷見廻リ同心、牢屋同心、鎰役、平當番五六人扣へ居りて、科人不殘外ざやへ追出し、牢の中江ハ平當番三四人、張番六七人はいり

て、牢内を改むる也、是何ぞ牢内法度之品にても無之哉との事也、

〔牢獄秘録〕牢屋敷見廻り之事、（御目付衆壹ヶ月一度ヅヽ見廻り有之）

一毎日一度ヅヽ、晝夜之差別なく、御徒目付見廻りに來る事也、尤時刻之定りなく、不時に來る也、牢やしき外ざやの内に入り、揚り屋はじめ、口々に來り廻る時に、牢屋同心鎰役來りて、御徒目付衆御廻り之趣言つぐ、時に牢内名主申ハ、御煎湯も行屆まして、有難仕合と言、其時御徒目付申ハ、何ぞ申立る事ハ無之哉と言、名主申ハ、何も申立ル儀無之と答ふる時ハ、御徒目付、又々外之牢を見廻ルなり、但夜分ニ（何時とも不限深夜ニ來る事も有之）見廻に來る時ハ、外ざやの外より鎰番來り御徒目付御廻り之由を言也、夜分ゆへ外サヤの内へハ入らざる也、

一此節申立る儀有之旨申者有之候得バ、御徒目付則牢の入口江、其ものを呼出し、其譯合を聞時に其もの申ハ、私儀元來火付盗賊ニハ無之候得共、餘り拷問嚴敷候ゆへ、火を付候趣申候得共、全く左樣之儀無之由を申時、御徒目付、右之趣を手帳ニ留置、御目付衆江申立る事也、依之罪科定りても、又吟味かゝる事有之ハ此故也、

一此節申立候儀御座候由、牢内奥之方ゟ申ス者有時ハ、先其者を口元へ呼出し、いかなる儀と相尋る、時に其者申ハ、牢内名主非道にして、私衣類をはぎとりしと言、又嚴敷打擲せしと言時ニ御徒目付名主を呼、右之趣相糺し、無相違におゐては、名主を叱り、其當人ハ牢替（東之大牢ならば、西之大牢へ替る、大牢之ものを其隣之無宿牢へ牢替いたさせ候へば、名主同志隣へ聲をかけ〳〵ころさせるさ寄也、）申付、名主不法に究る時ハ、牢内にて手錠（又罪に依り後へ手錠）兩ホダにて、外之牢へ牢替申付る也、又申立候科人之方不宜共、科人計り牢替申付る事也、

一見廻り（町同心）毎日朝四ツ時分ニも相成候得バ、惣牢見廻り候事なり、

一御徒目付夜分之見廻り等有之ハ、牢内計り見廻る事ニハあらず、牢屋同心之勤方をも見廻る

爲也ト言也、

〔前撰要集〕寛政九巳年十一月〇中略

下ヶ札
別紙御問合〇中川飛騨守問合へ銘々下札致し、返却いたし候、

午六月　村上肥後守〇中略

一牢屋見廻之義ハ、何程之もの晝夜何度相廻候哉之事、

下札
牢屋見廻ハ、與力申渡、見廻らせ申候、一月ニ一度ツヽ、不時ニ見廻らせ申候、夜中も爲見廻申候、尤鍵役附添候、〇中略

一牢屋内改候義ハ、何役之もの如何樣之手續ニ而相改候哉之事、

下札
牢内改候儀ハ、一ヶ月四度ツヽ、牢屋見廻與力共兩人、神谷辨之助、石出帯刀立合、見張罷在、牢鞘内へ筵を敷、囚人不殘差出、牢内へハ小頭世話役之もの這入、牢當番之者も入、牢内疊諸道具逸々改候上、囚人衣類幷下帯共ニ右鞘内ニ而下男ニ爲改申候、

〔御仕置例類集一ノ三〕文政五午年御渡

火附盜賊改長井五右衛門伺

一同人組與力同心牢内爲見廻差遣候儀ニ付評議

書面之通評議仕申上候通、長井五右衛門江被仰渡候旨承知仕候、

未六月八日　評定所一座

去午十二月十九日、致評議可申上旨被仰聞、御渡被成候、長井五右衛門書面一覽仕候處、同人掛囚人共肌薄之もの多、吟味呼出之節、御仕着相渡候而も、翌日ハ外衣類ニ差替罷出候ものも有之候間、組之者牢内不見廻候而ハ取締方難行屆キ候ニ付、町奉行江追々懸合之上、組與力牢鞘内迄爲見廻候得共、大牢二間牢等、板羽目有之候場所ハ、内之樣子得ト相分兼候ニ付、與力江同心爲差添、

町奉行組與力見廻之節、同樣牢戶前口爲明、見廻候樣いたし度段相伺申候、

此儀天明八申年、堀帶刀長谷川平藏江被仰渡候、御書付之趣も有之候上ハ、五右衛門幷組與力牢內溜江も折々見廻掛之四人、病人、其外之義、心附候ハゝ子細無之候得共、與力ニ同心爲差添度由ハ、享保三戌年、町奉行組與力見廻リ方致出來候砌、下役をも可申付旨被仰渡候ニ付、實體なるもの兩人吟味仕申上候處、其後牢屋之御用與力一人、同心貳人御附屬被成候得共、同心ハ相止、與力兩人達可申旨、水野和泉守殿被仰渡候巳來同心牢內廻リ候儀ハ相止メ、然ル處文化元子年、小田切土佐守、根岸肥前守、町奉行勤役之節、牢屋敷門番人之儀、石出帶刀支配下男致來候得共、至而身輕之ものニ付、取締方安心無之故ヲ以、再應取調、伺之上、小石川養生所見廻、其外臨時御用掛等、與力致出役候節ハ、同心も兩人ヅヽ爲差添候仕來ヲ以、兩組ゟ同心貳人ヅヽ差出都合四人ニ而、晝夜壹人ヅヽハ牢屋敷門番所之儀引受、門番いたし候下男共之爲致取締、牢屋之儀も、與力共任差圖取計、享保度之趣意ヲも差含、古格不亂樣同心共計ハ不差違、尤去午十二月巳來ハ、當分之內爲取締、下役同心壹人立、與力ニ不差添候而も晝之內ハ稍之內外繁々見廻リ、夜分ハ四人出入之節、稍內江立入爲致候得共、素より牢內之儀ハ、町奉行主役之持場ニ有之、殊ニ町方同心共、前書之通リ牢屋敷門番所取締方をも引受罷在候上ハ、加役方ゟハ違可申、町奉行組ニ而も文化元子年迄ハ、與力計リ見廻致來候程之儀ニ而、同心不差添候而ハ、加役方與力見廻リ差支有之候儀共不相聞、且與力見廻之砌、牢戶前口爲明候樣致し度由も、左候而ハ町奉行組ゟ火附盜賊改組見廻リ方、更ニ差別無之樣相成、一體之於筋合、相當共難申候間、牢內見廻方是迄之通リ相心得候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

未二月

〔御定書百箇條〕溜預ヶ之事

享保七年 寛保二年極

一牢舎申付候者、最初ゟ溜江遣間敷候、乍併入牢之上、重病之者ハ、御仕置伺置候者にても、溜江遣可申事、

寛保二年極 但逆罪之者ハ病氣にても溜江遣申間敷事

〔官中秘策二十六〕一牢舎申付候者、最初ゟ溜江ハ不遣、病者行倒者ハ格別なり、

〔武家嚴制録二十〕京都諸司代板倉氏父子公事扱掟條々

掟〇中略

一籠舎之者之義、當座と過代人ハ可為自賄、殺害相極者ハ、從公儀賄申付也、是又殺害之義ハ、究罪理之間無是非也、存命之間ハ、二時之食物定有之上ハ、籠奉行無油斷可申付候、私欲以自分之遺恨、不依何之科、對籠舎之者、有公儀掟、非法之義仕懸候はゞ、奉行一廉曲事可申付事、

付近代まで京都作法之由にて、從雜色為籠舎之者、首代錢縄代申懸、鳥目取來候由ハ、當代此義令停止、籠舎申付過代之日數相濟、無異儀籠出義ハ、任法義上ハ、對何へも賃禮義より一切不可残、況や雜色も知行拜領仕、其上ニ右之鳥目取候義、非法眼前也、於背此趣ハ、雜色堅曲事可申付事、

〔江都管轄秘鑑五〕覺〇中略

一前々より新規入牢いたし候ものハ、牢の口にて裸かにいたし、懐中改め、其儘にて衣類着せ來候、左やうに不仕候へバ、牢内にて諸事申付義を不承知者可有之候ニつき、右之旨にいたし來り候へども、近頃ハ此段も為相止、尚又吟味仕懐中改め相濟候はゞ、早速衣類着せ候様可申付候、〇中略

享保三戌年閏十月十七日　坪内能登守

中山出雲守
大岡越前守

〔德川禁令考後聚（二法吏職務）〕牢内取計之儀（幷）同心勤方之事

一入牢之者有之節者、改番所ニ而、鍵役共當番同心立合、囚人名前、歲肩書等、入牢證文ニ引合、相改請取、牢鞘內江入、衣類爲脫、下男ニ爲相改候上、牢揚屋江入候、衣類之儀者、帳面ニ記置、翌日雙方番所江相屆、尤金子書物、其外牢內法度之品持參り候得者取上、懸番所江差出候、

但他懸り之分者、月番之番所江差出候、

〔牢獄秘錄〕大牢、貳間牢、入牢者之事、

一大牢ハ宿有之者、貳間牢ハ宿無之者、依之俗に無宿牢と云也、東之（大牢貳間牢）者、兩町奉行、御勘定奉行懸り之もの、西之大牢貳間牢共牢法皆同樣なり、先入牢之者有之時、町奉行懸ゟ送られ候得者、乞食鐵炮町の邊より先へ來り、表門ゟ乞食、牢入りイ（引）と觸込なり、是を廣間（石出帯刀役所之玄關之事を廣間と呼ぶ也、牢屋敷之もの張番などは御廣間と云也、）のに詰たる平當番（牢屋同心也）是を聞、張番にも申聞ル、又御勘定奉行懸りハ、直に牢內江連來る、本役（火附盜賊改役）加役も同斷也、○中略

一先入牢者を牢屋敷江連來り牢庭火之番所（此番所ハ、疊貳疊敷ニテ、口甚小キ番所なり、）前ニ引居置、時に火之番所前三尺通りの落間に、鎰番（牢屋同心）來り、科人を送りし人ゟ、科人之書付（此書付は、たとへば榊原主計頭殿懸り、武州埼玉郡、栢原村無宿龜五郎年二十二才と認メ有るを云、）を請取、落間の前ニ砂利少々有之處江科人を引居、其方ハ誰殿御懸りにて出所ハ何所、年何才と聞く、時ニ科人北御奉行樣御懸りニて、武州埼玉郡、栢原村、當時無宿ニて、年二十二才（○下文作貳十一歳）也ト云、時に右書付と引合、相違無之、背川藤藏（鎰役之名）慥ニ請取と答へて、右之科人送り來りし人を返す也、（是町奉行、御勘定奉行本役加役共、初而入牢之時如斯、）科人大勢なり共、一人々々如斯相改ル事也、

一火之番所ニ而、鎰役科人一々書面ニ引合せ請取、夫より外ざやの内に入ル、此時科人何人にても、見廻り壹人、（町同心之事也）下役壹人、（町同心）鎰役（牢屋同心）平當番貳三人、（同斷）張番、（牢屋下男の事也、科人壹人ならば、二三人、大勢ならば六七人も入ル也、是ハ衣類改ル役也、）等外ざやの内に入り、外ゟ外ざやの口をメル、此時鎰役（牢屋同心、牢屋之留口鎰を預ル故、鎰役と云）歟、科人共ニ向ひ申ニハ、御牢内ニハ法度之品有之、先金銀、刃物、書物、火道具類ハ相成らぬぞと言、時に張番へ差圖して、縄を解かせ、先衣類を相改、下帶（フンドシ）を改、髮ほぞき改、帶も改、其衣類へ下帶、草履はきもの（たば）つ共にくるみ、丸はだかのまゝ、此衣類をかゝへさせて、（大牢貳間牢共）留メ口を入ル也、（此改之時、金銀衣類にぬひ入有之時は、手にさはりても、張番ハ知らぬ顔ニ而入遣す事へ、揚り屋入牢ものゝ處には隠し有之通也、）扨科人何人にても、一々改メ畢りて、鎰番大牢（貳間牢ニ而も同じ）と呼ぶ、牢内ゟ名主ヘイト言、時に鎰番申ハ、牢入が有る、榊原主計頭殿御懸り、武州埼玉郡、栢原村、無宿龜五郎、年貳十一才と、段々如斯に讀、たとへば何人一件ものと云もあり、又何人之内入墨貳人ト云も有り、是其次第ニ寄るものなり、鎰番是を讀畢ルト、牢内名主御有難う御ざりますと言也、入墨もの加り居る時ハ、牢内にて、名主（留口の内ニ名主ト一番役が兩方ニひかへ居るなり）入墨サアコイ、マケテやるぞといふ、時に入墨ものハ先へ入事なり、初牢のものハ、留口を入ル時、内ゟサアコイト言て、留口はいる時、兩方ゟ入候もの尻をたゝく事也、（此たゝかれした時に初めて入牢のものハ、甚だ恐れて、肝をつぶすといふ也、入墨ものへ、まけてやるといふへ、この尻を兩方ゟたゝかぬ事ナ、まけてやるト言、）壹人々々サアコイサアコイト聲を懸け、入り畢りて平當番留口をメる事也、

一入牢之者ハ、大概日暮にて入る也、晝中に入るハまれ也、

一入牢之節、外ざやの内には、鎰番（又ハ平當番）科人に向ひ、御牢内法度之品々有之、先金銀刃物、書物、火道具類ハ不相成、若持參候はゞ可差出と言、（此時平當番之者、酒狂にて嚴敷叱り、其方つるさて持牢内へ金子など持參する事ハ無用なるぞ、もし持參致し候はゞ早々可差出也、万一後日ニ相知候へバ、不相濟事也ト言、是誠に酒狂之戯なれ共、初牢之者ハ、此言葉ニ驚き持參之金子出すものもこれあり、）此時左樣成品無之と言時ハ、何之子細なし、又平當番之者戯に威（ヲドシ）を、誠ニ心得、愚なる者ハ、此所にて金銀をさし

出す者も有之、此時この金銀差出し候時ハ、牢内ニ入リ、一ツ二ツ打れ候よし、尤牢屋同心、平當番誠に戯にて、金銀之儀を嚴敷吟味する樣に申ものも有之、是平當番人々の氣性にて、酒狂にても左樣之儀を申さぬ者も有之、此平當番ハ、衣類相改候役にてハ無之故、只慰に科人の氣性を遊び見る事也、尤此ごとき戯ハ鎰番之者度々制シ、科人驚く故不宜と申といへ共、平當番之者ハ、誠に戯に申也とて、笑ひ居る也、戯にハ誠に罪なる戯也、初而入牢之者には此事を能々申付け遣し可申候事也、此處ニ而金銀出し牢内にて出し候金銀無之時ハ、其人々牢内にて難儀する事なり、

一喧嘩にて入牢ハ、相手方を東（大牢歟、貮間牢歟、）西（大牢歟、貮間牢歟、）に引分入れる事也、

〔牢獄秘錄〕乞食穢多入牢者有之事

一乞食科有リて入牢之時ハ、貮間牢へ入ル、矢張一ト通之科人同樣ニ、モツソウ飯被下之、穢多入牢之節ハ、貮間牢江入ル也、食事ハ、新町（穢多頭彈左衞門屋敷之事を新町と云）毎日持參リ、張番ニ賴、牢内江入ル、（重箱へ詰持參ルといふ、）

〔箚撰要集〕寬政九巳年十一月（○中略）

下ケ札

別紙御問合（○中川飛驒守問合）へ銘々下札致し返却いたし候、

午

六月　村上肥後守（○中略）

一囚人入牢之節、如何樣之手續ニ而相改、入牢爲致候哉之事、

下札

改番所ニ而、鎰役幷牢番立合、下男ニ繩ヲ爲取、囚人名前、歲、肩書等證文ニ引合、牢莚之内へ召連、裸ニいたし、衣類幷口中、髮之内、足之裏迄、逸々下男に爲改、衣類抱させ、掛リ幷名前肩書年迄、牢内役人へ鎰役申渡、入牢爲致候、

〔地方落穗集十二〕牢舍被仰付候者、牢屋江召連候手代、心得の事、

一牢舍人都て七ッ時過て、牢屋江召連行ば、扶持方出ざるもの故、手代より此囚人今日晝支度致候まゝに付、支度申付られ候樣致度旨、牢役人へ願ひ遣すべきなり、左なくして七ッ過には、扶持方出ざる法なり、

〔牢獄秘錄〕女牢入牢之事

一女之入牢之時ハ、乞食之女房（是ハ女牢附人にて、乞食之女房一人ヅヽ、一ヶ月代りニ替り合て、女牢之内に居る也、）衣類を改る也、尤鎰番女牢之外ざや〔○此間有脫字〕女部屋と云、牢內之女名主ヘイト言ふ時に牢入り有、深川無宿さだと言時、牢內女名主ハイ御有がたうと答ふ、其時鎰番鎰を平當番ニ渡して、女牢の入口を明ケさせ、中に居る乞食女房出來りテ、緣類之上ニて、先下帶を改メ、是をのさせ、衣類を一ッ〳〵相改、帶髮をくづし改、改相濟て牢內江入る也、

牢內ゑゆすちりめん、羽二重等法度なりといへ共、きぬとさへ言時ハ、嶋ちりめんも、嶋きぬ、黑ゑゆすも、黑きぬといへば、たとひびろうどたり共かまいなし、是改候乞食之女房かく言立る事也、或時心得ぬ女房來りて改候時、黑ゑゆす帶也と言時に、鎰番いや〳〵黑きぬであらう、よく〳〵手にてさはり見ろと言に、矢張り繻子の趣を言ふ時に、鎰番さて〳〵なれぬ女かな、よくさぐりて見ろといふ時、女牢之內、女名主小ごえにて、黑きぬといひ候樣にをしへけるゆゑ、此乞食女房黑きぬなりとやう〳〵言ける也、

一乳のみ子有之女入牢之時ハ、此子も同く入牢させる事也、尤入牢之時、此子も相改る事也、

一懷胎にて入牢いたし候女ハ臨月に至り、牢內にて出產させ候事也、かゝる時ハ、付人女房世話いたし遣ス事也、

一先年江戶町中之女藝者かり取られ、貳百人餘り之入牢之時ハ、女牢に入り切らず、依之遠島部屋江入れ候事也、右女乞食一々是を改メ、名主代りに遠島部屋江ハ、女乞食入居たりしとぞ、尤

ツルハ此名主も餘ほどとり候よし、此囚者翌日出牢也、（此時張番之者、女囚者出牢之上、其宿々へ無心ニ行候事也、尤數多之牢入にて日暮より夜之八ツ過まで、夜にかゝりしよし、）

一女入牢之時も先召連來りて、牢庭火之番所前へ來る定ニ而、鎰番差添來りし者より、書付請取、一
一名所年を聞屆て、夫より牢內江入る事也、

〔地方落穗集十四〕牢屋見廻願書認方

乍恐以書付奉願上候

一半紙　二帖　一手拭　一筋　一錢　何程　一食物類　何品　〆幾品

右は先達て入牢仰せ付られ候、誰方へ書面の品々送り遣し度奉存候間、何卒御慈悲を以て、右誰方へ相屆候樣仰付られ下し置れ候樣、奉願上候、以上、

年號月日

何國何郡何村
願人　誰印
差添人　誰印
右宿何町何丁目百姓宿　誰印

宛所（宛名は時の掛り役人の名を認るなり）

〔記事條例一〕牢舍者江身寄之者より送り物致し候、右は何々はおくらせ、何々之品は不相成談之譯、荒增之處書取可申上旨、被仰渡候ニ付、左ニ申上候、

一衣類、帶、下帶、蒲團は相屆申候、
但夜着、蚊屋、枕等は、揚座敷者之外入不申候、

一錢之儀は一ヶ月五百文ニ相限申候

一半紙鼻紙手拭に限無御座候

一給物之分は何々と申定り無御座候、平生相屆候品、荒增左之通ニ御座候、

一苗字版　一煮染　一和會物類
一餅菓子類　一干菓子　一香の物類
一梅干　一干肴　一煮肴燒肴鹽肴
一味噌煮類　一削鰹節　一水菓子類
一なめ物類　一麩類　一胡麻鹽
一豆ゐり　一煮豆　一白砂糖氷砂糖
但酒并粉蕃椒からしの類、生葱之類前々より牢內江入不申候、
右之通御座候、以上、
卯〇寛政七年五月　神谷辨之助

〔德川禁令考後聚二法吏憲秘〕牢內取計之儀并同心勤方之事〇中略
一宿元より屆物之儀、品書ニ掛之押切相濟、牢屋鋪江持參候得者、當番物書請取、下男ニ爲持參、牢番同心立合、逸々相改、牢口迄當人を呼出、品書爲讀聞、相渡候、

〔江都管轄秘鑑五〕覺〇中略
一牢內囚人ども宿々より屆物の儀、只今までは帶刀方にて相改め、牢名ぬしへ相渡し候へども、向後ハ帶刀方にて改め濟候はゞ、與力立會、本人江直に相渡候樣可仕候、〇中略
享保三戌年閏十月十七日　坪內能登守
中山出雲守
大岡越前守

〔諸例類纂五〕牢屋秘事錄
一宿有之者ハ、衣類、多ニ而も木綿わた入、壹、宿々相願上ハ、何ヶ度も衣替入申候、小遣錢二百銅ヅ

ヲ、一ヶ月ニ三度迄ハ入申候、何も奉行所へ相願上ニ而、立合入申候、宿ゟ食類おくり物等も、奉行所へ願之上吟味いたし入申候、

〔牢獄秘錄〕屆物之事

一屆物遣し候事、俗ニ牢見舞といふて、町人共入牢有之ハ、牢内江飯肴等見舞ニ遣候事也、牢内ニ而ハ是を屆ル物と云ふ也、御科を蒙り入牢之もの江見舞と言法ハなき由なり、依之右屆物目錄證文ニも屆物と認る事也、

一屆物持參之ものハ、先牢屋敷玄關（是ハ牢内ニ而廣間と云也、張番なざハ是ハ御廣間と呼ぶ也、）脇にさしかけ有之處へ、品々差置、廣間番いたし候役人（牢屋同心也）江御屆物何々と相認、何町何某店誰、牢内誰々へ、居合候平當番之者張番ニ申付、品々を請取、牢庭江運ばせ、牢内に有之入物（大ざる屆物等入るざるのよし）持參り、（張番持參）飯も肴も是江明ケさせて、牢内江遣す也、但平當番此認メ有之目錄證文を持て、外ざや江來り、目錄之通り讀上ゲ、右屆物參候科人を、牢内中江呼出し置、右之段一々申聞、誰ゟ之屆物ト申渡す、其者御有難う御座ります と答ふ、時に張番之者共、屆物之品々牢内江遣す也、但是迄入來りし飯（或ハ半切り、又ハ四斗樽、又ハ餅屋の衛ひしやうゆ樽等也、）の入物、餅屋のになひハ格別、外之入物樽るひに候得バ留置、張番之餘德ニ相成也、

一屆物之飯ハ、只之飯ハ不₂相成₁、只之飯ならバ、上に菜を少し振かけ候得バ、なめしの積り故不苦、只之飯ハ牢内よりも被₂下₁たりし故に不₂相成₁趣也、依之屆物之飯ハ、先赤の飯、（さゝげあづき）茶飯、なめし、海苔めしの類宜敷、尤持參いたし、牢屋同心請₂取之₁、張番ニ申付、大ざるへ（牢内ニ有之大ざるなり）明させ、見廻り同心、牢屋同心、平當番三四人立會ニて、是を改其時張番此めしを十文字に割て、中ニ何も無之を相改、牢内ニ入遣ス、又むすび（ごまをつける）ならば二ッ三ッ、中をわり改、跡ハ其まゝ入遣す、

一屆物之内に、赤飯（こわめし也）幷とうがらしハ法度也、赤飯と餅のるひハ、牢内にてもだれ候品ゆゑ、

熱病に成るとて法度也、持行候へバ、隨分中へ入遣すといへ共、持參之人江、以來ハ不相成趣を申開ル、

一屆物に蕎麥なども遣す也、是ハのび候もの故、鐵炮町之邊ニ而そばやへ申付、四斗樽へ入つゆハ手桶に入て送る事なり、

入牢代人

〔御仕置裁許帳十〕人之娘を理不盡ニ奪取者、幷宿仕者之類、

寛文四年辰十月三日

壹人市郞兵衞　是ハ葛西篠原村之者瀨戶物町貳町目新五郞店勘左衞門娘を八兵衞と申者、木根川藥師ニ而奪取候者共之宿成ル故、當八月十六日籠舍被仰付候處、市郞兵衞、奪三郞を可尋出旨、手形仕候ニ付、同月十八日出牢、爲代弟十郞兵衞を同日籠舍、然處ニ尋不逢候由、十月三日申來ル付、弟を出牢候而入替ル、

右之者、辰十月十四日赦免、

囚人俸給

〔江都管轄秘鑑六〕一元祿十二卯年七月十七日保田越前守樣より被仰付候は、御預ケ牢舍幷無宿のもの御扶持方、卯七月朔日より、兩御番所樣火方御改め井戶新左衞門樣、盜賊御改中根主稅樣より、御預ケ人數高貳百八十八人、內七人女預り申候節、御扶持方高貳百八拾人組壹人に付米貳合五勺、女は壹合五勺、拾歲より內の男女、共に壹合貳勺五才に相極め、此米高四拾三石五斗八升七合五勺奉受取、其節御立合、〇中略

一同年卯年十二月十八日、御預り囚人雜用錢、同七月朔日ゟ同閏九月廿九日迄、御內借金三拾五兩と銀拾壹匁七分貳厘、壹人に付拾五文の積にて、奈良屋市右衞門樣ゟ奉請取候、

〔公裁秘錄三〕一本所牢內賄方之事

吟味中本所入牢申付候分、牢賄者伊奈右近仕來之通、自分賄ニ爲致、無宿は御入用ニ相立、郡代屋

敷取扱過料錢之内を以相渡申候、然ル處御仕置ニ而入牢爲致候分、又者入墨乾迄入牢爲致候分を自分賄ニ爲致、入用爲差出候而者不相當ニ付、右之分は御入用ニ相立、過料錢之内を以可相渡哉と、寛政八辰年十二月、久世丹後守江、伊奈友之助、大貫次右衛門、菅沼安十郎、竹垣三右衛門、小野田三郎右衛門連名ニ而伺候處、伺之通御下知相濟候、巳來支配所寺院幷社家等揚屋入申付候分、自分賄ニ爲致候而者、不相當ニ付、御入用ニ相立、郡代屋敷取扱過料錢之内を以相渡可申哉之段、伊奈友之助、大貫次右衛門、菅沼安十郎、竹垣三右衛門、小野田三郎右衛門連名ニ而、寛政十一未年四月、中川飛騨守江伺候處、伺之通御下知相添候、

但本所入牢いたし候寺社之分、御入用ニ相立候上者、都而遠國御代官ニ而茂、寺社揚屋入等いたし候分者、銘々自分賄ニ爲致、不相當之段者同樣之趣意ニ付、右例ニ而御入用ニ相立候方、相當之筋と存候事、本所牢屋敷ニ而入牢申付候儀者、難相成旨、文化三寅十月、伊奈友之助、大貫次右衛門、竹垣三右衛門ゟ、取計伺江御下知有之候、此取計伺之内ニ、支配所之者ニ候得者、村賄申付、江戸町方、其外他支配他領之もの幷無宿に候得者、取上物金錢同御拂物代、幷過料錢之内より賄入用遣拂、右ニ而不足之節者、御金藏より請取候積、尤賄入用壹人當、其外入用相立候廉々置證文御座候間、此上私共幷外關東同役共掛之分共、右置御證文幷仕來之通取計候積、此度御勘定所江伺候積と有之候、

但此伺相濟候哉難分候

〔京都御役所向大概覺書〕二 牢賄之事

一八人扶持　　牢賄加十郎

右八人扶持之事、牧野佐渡守殿、京都在役之時分迄は、二條御藏米ニ而被下候、寛文八申年、町奉行被仰付候節より、闕所銀ニ而相渡り、其後寛永元申年七月以來、又二條御藏米ニ而被下、牢舍人御

扶持方之内江積り込ミ罷成候、今以渡り方、右之通ニ候、牢舍人御扶持方米銀左ニ記之、
下男壹人給銀六拾目、下女貳人、但壹人四拾目宛、并有明之油代、其外牢賄方入用之物代銀等、闕所銀ニ而相渡候、年中牢舍人朝夕味噌鹽薪代共、加十郎方ニ而拵給させ候銀高、平均ニシテ大概壹年之積、

凡銀高四貫八百目程

此譯

五百五拾四匁程　　味噌五石五斗四升餘

但味噌百人ニ付、一日貳升宛、

貳百七拾七匁程　　鹽五石五斗四升餘

右同斷

百六拾六匁程　　汁ノ實

右汁ノ實、人數多少ニよらす、一日拾人ニ付六厘宛、但菜代不相渡候得共、加十郎方ニ而、米之ぬか等代かへ香物など拵置、折々給させ候由、

貳貫七百七拾貳匁程　　薪代

右者壹人ニ付一日壹分宛、但行水は七月十六日、牢舍人共不殘行水致させ候、朝夕食之湯わかし候以後、少々湯なとつかはせ候由、

百三拾目程　　油壹斗八升程

右は牢賄有明

百八拾目程　　椀代

右は牢舍人椀六拾人前程

七百貳拾目程

右は牢賄加十郎下男下女給銀、其外賄方之入用小買物、

一米高百三拾八石六斗程　　二條御藏米ニ而相渡り候

右者公儀扶持牢舎人、時により多少有之候、平均壹ヶ年貳万七千七百貳拾人程、但一日七拾七人程之平均、壹人ニ付一日五合扶持之積り、加十郎八人扶持も右之内江入、

右銀米加十郎方江請取候事

一牢屋舗一式關所銀ニ而、相渡候、入用銀高平均ニシテ大概壹ヶ年之積、

凡銀高七貫七百目程

此譯

六百貳拾目程　　七月十六日、牢舎人行水まかやき入用、

右は例年七月十六日、牢舎人共壹人江酒四合引飯壹合宛、鱠并鳥目五錢、菜代三分宛とらせ申候、

四貫目程　　青藥煎茶せんじ炭代

壹貫八百目程　　布子六拾程

七百八拾目程　　布帷子六拾程

貳百目程　　ちり紙代

右は巾着切目明シ、冬木綿布子、夏帷子并鼻紙とらせ由候、其外牢舎人之内、衣類無之者相願候得ば、木綿布子、布帷子調とらせ申候、且又牢舎人相願候節は、醫師申付藥爲用、藥料等とらせ申候、

三百目程　　油三斗六升程

右者牢屋番所有明

右銀雜色方江請取候事

右之通牢賄加十郎并牢屋入用一式、二口之渡り銀、大概壹ヶ年拾貳貫四五百目程、尤年により不同有之、但牢屋破損之節者、闕所銀ニ而御修覆申付候、右御修覆毎年は無之ニ付除之、

〔七十冊物類聚四十二〕下役共御手當之儀に付申上候書付

牢屋見廻
田中金左衛門
葛岡郡藏
金田總大夫

向方
志村茂七郎
村井傳大夫
平松兵次郎
金子平右衛門

去午十月廿九日迄

同月廿九日ゟ

右者天保十三寅年御改革以來、牢屋賄所米金并小買物御入用筋御無益無之樣、夫々立合無油斷厚心附候に付、小買物御入用高別紙之通減方相附申候、雜用錢之儀は、役人四人壹人に付一日拾六文、平四人壹人に付、拾五文宛ヲ以、鹽、味噌、薪、汁之實とも取賄候間、前々も先役共より申上候通、牢舍もの人數少之節は、不足相立候儀に而、殊に近年味噌薪共、追々高直に相成、今以引下ヶ不申候に付、殊更無油斷厚心附候得共壹人當少分之雜用錢に而、何分引足不申、毎年多分之不足に相成候儀に御座候、右は全味噌、薪、高直に相成候故之儀に御座候、計出し過米之儀は、昨年十一月中、牢屋敷類燒等に而、格外人數少に有之、其上御渡米之内計減舂減等も、存外相立候得共、殘過米貳

石九斗餘有之候儀に而、下役共御改革之御趣意無違失相守、出精骨折候に付、小買物御入用高相減、過米も有之候儀に御座候間、去ル午年三月中、被仰渡候通、下役共壹人江金五百疋宛、御手當被下置候樣、仕度奉存候、依之別紙四冊相添、此段申上候、右之通播磨守殿江申上候、以上、

未四月

後藤斧次郎

佐野十郎左衞門

牢舍扶持請拂計出過米高

一米三拾七石九斗六升三合

内

拾三石五斗壹升八合壹勺は、巳年請取高五百六拾貳石之内ゟ出過米、貳拾四石四斗四升四合九勺は、請取高之内ゟ午年江送りに相成申候、

一米四百石

是は午年中、牢舍扶持請取高

貳口

合米四百三拾七石九斗六升三合

内遣拂

一米三百七拾五石壹斗五升六合貳勺五才

差引

一米六拾貳石八斗六升七合七勺五才

未年江送りに可相成處

正有

一米六拾五石七斗六升三合
一米貳石九斗五升六合貳勺五才
　是は午年請取高之内ゟ出過米
　　但去多御張紙直段百俵に付金四拾両替、右過米代金三両壹歩銀七匁七分壹厘四毛、
一米貳拾四石八斗四升三合七勺五才
　請取過に付返納之分、未年江送りに相成申候、
右之通御座候、以上、
　未
　四月
　小買物御入用減方高
天明三卯年正月ゟ十二月迄小買物
一高銀三拾九貫三百五拾壹匁六分六厘五毛
此金六百五拾五両三分銀六匁六分六厘五毛
　但金壹両に付銀六拾匁之積
人數高八万五百三拾三人
　但壹人に付銀四分八厘八毛餘
安政五午年正月ゟ十二月迄小買物
一高銀貳拾六貫五百六拾壹匁三分壹厘壹毛
此金四百四拾貳両貳分三朱銀六厘
　但金壹両に付右同斷
人數高七万千八百五拾八人

但壹人に付銀三分六厘九毛餘

右見合去午年之方

銀拾貳貫七百九拾匁三分五厘四毛

此金貳百拾三兩貳朱銀貳匁八分五厘五毛、相成申候、

天保元寅年正月ゟ十二月迄小買物

一高銀三拾五貫五百七拾六匁三分九毛

此金五百九拾貳兩三分貳朱銀三匁八分九毛

但金壹兩に付銀六拾匁之積

人數高八万四千九拾五人

但壹人に付銀四分貳厘三毛餘

安政五午年正月ゟ十二月迄小買物

一高銀貳拾六貫五百六拾壹匁三分壹厘壹毛

此金四百四拾貳兩貳分三朱銀六厘

但金壹兩に付右同斷

人數高七万千八百五拾八人

但壹人に付銀三分六厘九毛餘

右見合去午年之方

銀九貫拾四匁九分九厘八毛

此金百五拾兩貳朱銀七匁四分九厘九毛、相成申候、

右之通御座候、以上、

未
四月

午正月ゟ十二月迄、牢屋御入用請取遣拂高、

一金貳百七拾四兩三分錢三百拾文

是は正月ゟ十二月迄四人雜用錢其外請取高

一金五兩貳朱錢五百七拾七文

是は正月ゟ十二月迄糠明俵拂代

貳口

合金貳百八拾兩錢四拾九文

此遣拂

合金貳百八拾四兩貳分貳朱錢六百七拾七文

右差引

一金四兩貳分貳朱錢六百貳拾八文　不足

右之通御座候、以上、

未
四月

〔公裁秘錄四〕御料所村々公事出入、幷盜賊一件、其外無宿御代官陣屋において入牢申付候節、諸入用立方、左之ヶ條丈ヶ者伺相濟可申事ニ候、

一牢扶持鹽、味噌、薪、賄諸入用、牢內衣類、藥代等、其村々入用ニ相立、私領之分者、是又私領より爲差出候事、

一無宿者右諸入用吟味之上、御入用相立候事、

一牢扶持、一日米五合、

但女者一日米三合ツヽ、

一鹽、味噌、薪、賄代、一日錢拾五文ヅヽ、

一藥代吟味之上、御入用相立候事、

一綿入代　　一袷代　　一單物代

一鼻紙代　　一手拭壹筋代

一御仕置ニ付、穢多非人之儀者、御料所内之分者、其役ニ申付、最寄ニ無之私領穢多非人申付候はば、御入用ニ相立候事、

但私領ニ而も、役ニ申付來候場所者、仕來之通其役ニ申付候積、

一牢番人無之陣屋之場所者、入牢人數ニ不拘、牢壹ヶ所ニ而、一晝夜三人宛、壹人ニ付賃銀壹匁ツヽ之積を以御入用相立候事、

但郡中割ニ仕來候場所者、仕來之通郡中入用之積、

一燈油者牢壹ヶ所、有明一ツ、一夜三夕五才宛ノ積を以、御入用可相立候之事、

一足輕之儀者、入牢人多、抱足輕ニ而引足不申節者、吟味之上、雇足輕壹人、一日賃銀貳匁宛之積を以、御入用ニ相立候事、

一飛脚之儀者、可成丈ケ致幸便ニ、實ニ無據節者、壹里貳拾文ツヽ之積御入用ニ相立候事、

一筆墨紙蠟燭代者、吟味に書取調候節計之、日數一日銀五分ツヽ、御入用ニ相立候事、

一妻子有之無宿之者、入牢中妻子非人、或者穢多江預ヶニ相成候節諸入用、其外吟味之上、御入用相立候事、

但飯米代、鹽、味噌、薪代等、本文無宿入牢中、諸入用立方之振合を以、吟味之上御入用相立候事、

〔諸例類纂 五〕牢屋秘事錄

囚人取扱

一御賄方之義ハ、朝五ツ、晝九時、兩度御賄被下、尤もつそふニ而盛候而、汁ハ四季之物隨分輕き品入申候、菜代ハ壹人前四文ヅヽ、一日分被下候、

〔德川禁令考後聚二法度書〕牢內取計之儀并同心勤方之事

一衣類之儀、無宿之分者、例年五月上旬、九月上旬、御仕着相願候得者、番所掛ツ者雙方より差遣、寺社方御勘定方掛り之分申立候得者、月番番所より相渡候、兩加役方掛り之分、其掛りより差遣、

但御仕着之儀、着破願候得者、其度々差遣候、

一宿有之候囚人者、右之通兩度ニ相調、懸々江申立候得者、宿元より屆候事、○中略

一朝夕食事之儀、當番同心下男ニ附添相改、爲入候、○中略

一行水之儀、五六七八月者、壹ヶ月六度、三四九十月ハ、壹ヶ月四度、正二十一十二月者、壹ヶ月三度宛、溜遣所江出し爲遣候、勿論遣候內者、當番同心內外ニ見張罷在候、

〔德川禁令考後聚二法度書〕囚人月代摘之事

一牢揚屋名主、添役兩人、壹ヶ月壹度宛月代爲摘候、

一遠島申渡在牢之もの、永牢之者、壹ヶ月壹度宛同樣爲摘候、

一七月十二月、總囚人不殘月代爲摘候、尤重病之もの者相除候事、

一月代之儀、手鎖を懸ケ、牢庭江差出爲摘候、髮結之儀者、月番町年寄江申付差出候事、

〔牢屋鋪朱書一〕天保十三寅年五月二日、月番町年寄方ニ而右年番名主江申渡、

在牢囚人遠島もの并佐州表江差遣候、囚人月代摘候髮結之儀、牢屋敷ゟ相達、南北町々江申付、町役ニ而髮結差出來候處、今般町入用減少、月觸ニ付而者、町役ニ而差出候儀者相止め、以來牢屋敷ゟ、最寄髮結相對ニ而相雇、賃錢之儀者、其度々人數ニ應じ、差遣候樣、牢屋見廻り石出帶刀ゟ申渡候間、右最寄名主共江申渡、兼而髮結共江も爲心得置候樣可致、○下缺

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、最寄不洩樣、早々可申通候、

寅五月

〔牢屋舖 一〕弘化二年巳七月六日、清水忠助を以御渡、寫取卽刻同人以返上、朱書

總四人月代摘之儀、奉伺候書付、
書面伺之通可仕旨、被仰渡奉承知候、
巳七月六日　石出帶刀

來ル十二日、總四人共例年之通、月代爲摘可申候哉、奉伺候、以上、

七月六日　石出帶刀

〔諸例類纂 五〕牢屋秘事錄○中略

一無宿之もの仕着を、夏ハさいみ帷子、冬は淺黄綿入被下候、

但無宿ハ無宿計別牢なり

一百姓牢以來麥飯を願候へば被下候、是ハ平生身をこなし、入牢ニ而白米計給候へば、都而惡敷可有之との御慈悲之上、麥飯被仰付候、○中略

一寒暑之節御手當ハ、外ニ替義無之候、夏ハ牢之際へ出し、格子之內ニ而凉ませ申候、是も伺之上ニ而、さや凉にも申候、冬蒲團宿より願候へバ入申候、扨ハ御法度ニ而御座候、火之類一切成り不申候、

一七月十二日、月代御免被成候、髮結月ニ六度ヅヽ入申候、何れ町役ニ而入申候、

但每月三度、湯ニ入申候、

一七月十四日、公儀より刺鯖そうめん、牢內不殘へ被下候、同十六日ニ、石出帶刀より胡麻煮之茄子遣し申候、○中略

一壹ヶ月あぶら錢貳百文被下、紙ハすきがへし大ばん二ッ切ニして八十枚ヅヽ、二〆、男ハ一〆、外ニちり紙、〇中略

一菜代、一日十二文ヅヽ被下、五節句壹人前十一文ヅヽ、盆そうめん代貳百文被下、此外宿より來ル錢共、役人取置候而、好むものを買遣ス、

〔牢屋鋪三〕朱書〇嘉永元年申八月十五日、淺井省吾を以御渡、ヒレ付致し翌十六日、同人を以返上、

囚人共凉中東西牢新規見張所出來仕候ニ付、御代金之儀申上候書付、「ヒレ

三村吉兵衛
小原小十郎
石出帶刀

先達而伺相濟候囚人共、凉中東西牢竹塀內江、新規見張所之義、仕樣注文之通、無相違出來仕候ニ付、右御代金貳兩三分銀五匁相渡候樣、年番江被仰渡御座候樣仕度奉存候、依之申上候、以上、

八月

三村吉兵衛
小原小十郎
石出帶刀

ヒレ付
書面東西牢新規見張所出來ニ付、御入用代金貳兩三分、銀五匁、兩御役所江二ッ割を以、牢屋見廻江相渡可申旨被仰渡、奉承知候、

申八月十六日　年番

〔憲教類典四ノ二十囚獄〕元祿元戊辰年六月十九日

囚獄石出勸大夫江被仰渡覺〇中略

一牢舍之もの、一ヶ月五度宛行水爲仕可申事、

一宿不ㇾ持候牢舍之もの、雜紙被ㇾ下事、

一年々秋に成候而、ぬのこ壹ッ宛被ㇾ下候得共、當年より貮ッ宛被ㇾ下事、

〔江都管鑰秘鑑五〕牢內敷物の事

牢內敷物の義、牢內一面に敷くにも及ばず、囚人の數に應じて敷候て、虫つき候か、またよごれ候歟の時は敷かへ可ㇾ申義と思召候段奉ㇾ承知候、莚よごれ候節、又は虫つき候節、早速取替候樣仕候はゞ、只今までのとふり板敷にて罷有候より、宜敷御座あるべくと奉ㇾ存候、右之通彌被ㇾ仰付候はば、囚人の數に應じ莚敷候樣可ㇾ仕候〇中略

戌閏十月〇享保三年

坪內能登守

中山出雲守

右之書上閏十月九日、坪內能登守詰番の節、中山出雲守申談、御老中水野和泉守殿へ上られたるよし、

覺

牢屋囚人ども敷物の儀、麁末に相成、疊に可ㇾ仕哉之旨申上候處、揚り屋同前の義にて候間、莚に仕、虫等にて損候節者、取替候樣被ㇾ仰聞、右莚の儀先年も御座候處、囚人ども難義仕候よしに付、相止め申候、只今までの通りにて差置可ㇾ申候、〇中略

戌閏十月

坪內能登守

中山出雲守

大岡越前守

右は閏十月十六日、水野和泉守殿へ上名にて差上候よし、

〔江都管鑰秘鑑五〕覺

一牢屋囚人へ爲給候汁の義、只今迄ハ樋にて牢內へつぎ込候ニ付、ひえ候間、向後ハ桶に成りとも入候て、牢の戸口ゟ桶のまゝ入爲給候之樣仕べく候、

一朝夕爲給候湯の外に望み候はゞ、不時に湯たべさせ候樣仕べく候、〇中略

一朝夕給物、幷藥調合の節、尤煎候せつ爲給候節も與力へ申付、吟味仕候樣可致候、〇中略

享保三戌年閏十月十七日　坪內能登守

中山出雲守

大岡越前守

〔南撰要集〕寬政九巳年十一月

村上肥後守殿　中川飛騨守

郡代付本所牢屋取計方規矩、此度取調候義有之候ニ付、傳馬町牢屋取計方之趣致承知度、別紙之通及御問合候、乍御世話箇條限御付札ニ而御申聞有之候樣致度候、勿論傳馬町牢屋囚人取扱一件ニ付、右御問合ニ相洩候義も有之候はゞ、尙御書加被遣候樣致度存候、以上、

巳十一月

下ケ札 別紙、御問合書へ銘々下札致し、返却いたし候、

午六月　村上肥後守〇中略

一囚人食事之儀ハ、朝飯晝飯共汁菜添候而爲食候哉、食事前後茶抔爲飲候義も有之哉之事、

下札 朝夕飯計にて、下男ニ爲持運、牢當番所ニ而、鍵役牢番立合相改、牢番附添罷越、牢內へ入遣し、尤汁之實ハ、菜大根、或ハ茄子之類、時之もの入遣候、

但煎茶之義も、一日兩度ヅヽ手桶へ入、下男ニ爲持運、牢番改付添罷越入遣候、菜之儀ハ無之、無宿役人囚人へハ、一日一人ニ三文ヅヽ、平囚人二文菜錢遣申候、尤宿有之ものへは菜

錢不遣候、

一右食事時節ニハ見廻リ、不食等之儀心付札差儀抔有之候哉之事、

下札 賄役之者、牢内見廻リ、重病之もの、酒食等好候ヘハ入遣候、

但白粥、雜水、小豆粥、願ニ從ひ入遣申候、

一暑氣之節、囚人共如何致蚊爲凌候哉、右手當ハ無之候哉之事、

下札 暑中蚊凌候手當無之候、但暑氣ニ相成候ヘハ、囚獄ゟ拙者共ヘ相伺、牢鞘内ニ筵を敷、囚人差出、夕七時迄涼ませ申候、尤一人ニ澁團扇壹本ツヽ渡遣ス、

一夏之内囚人行水、幷常々入湯幾日目程ニ爲致、如何樣之手續ニ取計候哉之事、

下札 入湯之節ハ、牢番見張罷在、行水爲致候、正二月ハ一ヶ月ニ三度、三四月ハ四度、五六七八月ハ六度、九十月ハ四度、十一十二月ハ三度、

但濕病之もの等ヘハ、日々荷桶ニ三四荷程ツヽ入遣申候、牢内落間と申所ニ而、行水爲致候、

一寒氣之節手當有之哉之事

下札 牢北側之格子、一面ニ紙ニ而張遣申候、尤重病之ものヘハ、德利ニ熱湯を入、口を致袋ヘ入遣候、

一囚人ども月代摘候義、逆上抔致候ものハ、其樣子糺之上、見屆候而爲摘候哉の事、

下札 名主添役遠島者、一ヶ月ニ一度ツヽ、爲摘申候、右之外月代摘申候義無之候、

但名主添役之外ニ、役人四人之内ニ、格別出精致候ものハ、一兩人ツヽ、月代爲摘申候、〇中略

一囚人衣類着破候節、如何之手續ニ而仕着遣候哉之事、

下札 夏冬兩度一統相調、其掛々ヘ申立候、

但無宿囚人へハ仕着、宿在囚人へハ宿仕着爲㆓相願㆒、宿有ㇾ之而も貧窮ニ而難㆓相届㆒旨申出候へバ、仕着爲㆓相願㆒候、尤兩度之外、鎰役共相廻リ、肌薄之者相調、右兩樣之内相願ハせ候、尤仕着病中抔ハ、着切候へバ、又々掛々へ申立候、○中略

一囚人ども、夜分ハ何時頃迄咄等爲ㇾ致候哉之事、

下札 六半頃迄ニ臥リ申候、咄等ハ爲ㇾ致不ㇾ申候掟ニ而有ㇾ之候、牢内役人兩人ヅヽ、不ㇾ寐番致し、鎰役幷當番見廻之節、聲掛候へバ、相替義無ㇾ之旨相答申候、○中略

右之通御問合申候、以上、

巳十一月

〔牢獄秘錄〕大牢貳間牢入牢者之事○中略

一牢内之者へ食事之儀、牢屋臺所ゟ相廻ル事也、(鎰番之懸りなり)モツソウ(曲物のまゝ、拔かずに物ごと遣ス、但はし付、)入人數だけ遣ス、又汁ハ手桶ニ入、モツソウ曲物の少し小サキ(是を汁モツソウといふよし)を付て遣ス、香之物ハぬか漬の大根なり、朝五ツ時ト、七ツ時ト兩度牢内へ入遣ス、此度ごと、吞湯も遣ス、但食物入遣す時、下役(町同心牢屋出役を云)壹人、平當番(牢屋同心)壹人立會ふ也、(又屆物ニてひものなど入候節ハ、臺所張番ニ燒物かゝり有ㇾ之て、このひものを燒て牢内江入遣ス事也、)

一水も限リ有リて入遣ス(但牢内ニ水入候四斗樽五ツ六ツも有ㇾ之由)

〔牢獄秘錄〕牢内之もの髮月代之事

一毎年七月一度宛、牢内之者不ㇾ殘髮月代いたさせ候事也、此節ハ揚リ屋もの女牢(是ハ比丘尼有ㇾ之也)髮月代致す事なりとぞ、此時にハ牢庭江石出帶刀上座に出(腰かけニ腰掛居ル)見廻リ(町同心同斷)壹人、牢屋同心、鎰役、平當番共二十五六人、張番拾人計リ罷出て、右牢庭江むしろを敷牢内之科人一ト立三十人位ヅヽ、手錠かけ呼出し(手錠不足ゆゑに、繩手錠し、)大盥に水を入、月代(張番壹人々々に頭をもみ遣ス也、)をぬらし、髮結(壹ヶ

年一度ヅヽ江戸中の髪ゆひ壹町方壹人ヅヽ家主さし添出るなり、其うしろへ廻り、髪月代とも剃結ふ事也、尤髪ゆひの後に差添之家主ひかへ居ル事也、此時病人ばかり牢内に殘るよし、此日ハ江戸中之髪ゆひ、早朝より牢屋敷の表門前ニ詰居る、尤髪結壹人に、家主壹人ヅヽ差添出る事也、

一平日髪計りハ牢内ニて互に結びあふ事也、又牢内名主壹番役と貳人位ハ、一ト月に一度ヅヽ月代剃ル事有之、是ハ如何成事にや譯不知、

〔牢獄秘錄〕牢内之もの湯遣ひ候事

一二十日に一度ぐらゐヅヽ湯を立、外ざやの内外の方張出し湯遣場尤牢屋壹處にて湯をわかし入遣に、大きなる風呂也、一ト立にて、五六人ヅヽも入る也、湯ぬるき時ハ又熱キを入て、遣ハせる事なり、

〔牢屋舗一〕弘化四朱書未年

南溜世話役囚人被下候、褒美錢之儀、申上候書付、　牢屋見廻

一錢六百文

右は牧野大和守殿掛、上總國山部郡細草村百姓熊藏、牧志摩守殿掛越前無宿入墨丈助儀、相溜囚人勢、病人等介抱心付方宜敷、褒美錢三百文ヅヽ、被下候旨、被仰渡候間、書面之鳥目可相渡旨、年番江被仰渡候様仕度、此段申上候、以上、

未九月　荻野勇藏

三村吉兵衛

〔有德院殿御實紀附錄九〕久圓〇河合いつの頃にか暮過てまかづるとて、高らかに唄うたひければ、玄關前の書院番所より、警衞のもの出てとがめしかど、猶ほこりかに事いひつのりしかば、からめとりて其よし訴へ申ければ、やがて獄に下さる、後罪をゆるされて、もとのごとくつかへけり、實は久圓うち〳〵の仰を蒙り、さるふるまひして獄につながれ、獄吏等が奸曲、又は囚人等が艱

牢内雜事

難のさまをも委しく探りえりて聞え上しかば、これよりのち獄中の事ども明らかに知召して、沙汰せられ、奸吏等もおそれて、囚人をからくすることとも少くなりしとなん、またおなじ頃のことにや、佐野友悦といへる坊主の賜成もの、逐電せし事ありしを、其下部のえらざることはあるまじとて、獄に下されしが、えらざる證あらはれてゆるされし後、成島道筑信遍をして其下部を召し、獄中のさまをとはせられけるに、囚人等が食物おろそかにして、えかも乏しきよしうれひ申ければ、やがて町奉行に、囚人等其罪の定らざるほどは、いまだ罪人にあらず、いかにもいたはりて、食物などよくとゝのへてあたふべしと仰下されしかば、其後囚人にあたふる飮食あらたまりて、折ふしは魚肉などをも食せしむることゝはなりぬ、

〔牢獄秘錄〕牢法之事

一大牢貳間牢牢法也とて、毎朝七ツ半時之廻り之時、大牢にて壹人大音聲に、寺社御勘定御役人中と、節(ふし)を付て永ク二タ聲いふ、時に牢内之もの一同に、エ、イ引と、大勢聲を立る事也、又過て六時之廻り之時、貳間牢にて壹人大音聲ニ、かしこ留(とゞ)りましたア引と、此儀何事なる歟、そのわけ合不ν知、ふしを付て、永ク四五度呼るなり、時に一同に牢内中エ、イ引ト、大勢にていふ也、毎朝斯のごとく、大牢にて七ツ半時之廻り之時呼る時ハ貳間牢にて六ツ時の廻りに大聲を上、此事大牢貳間牢にて、毎朝替りがはりに呼る事也、東西之牢如斯、揚り屋女牢にハ如斯の事なし、是ヲ牢内知らぬ人、世上に言ときの聲を上ると云也、

一朝夕食事のせつも、一同御有がたうといふ、是も同音にいふ故、時の聲を上るやうに聞ゆる也、

一御仕置ハ呼出し候後、鎰役此外に御沙汰ハないといふ時にも、一同にエ、イト言也、皆大勢にて呼るゆゑ、牢屋敷之近クニてハ、時之聲を上ると呼習すといへ共、全く左にあらず、

一御仕置者を呼出す時に、御仕置ニ相成候ものを、兩手を持てシツ〳〵ト言て、兩人にて留口を

出す、是牢法之由、

一牢内にてハ、雪隱江行事をツメト云、依之大便ハ大ヅメ、小便ハ小ヅメト唱ふ、是牢法也、

〔南撰要集〕寛政十二申年正月

未十二月十八日、攝津守〇太田殿御渡、伊豆守〇松平殿ニも御承知之旨被仰聞候、

傳馬町牢内、幷淺草品川溜之囚人共之内、遺恨有之もの入牢致候へバ、法外之取計致候由故、新囚人共直ニ病氣付、牢死之もの多く有之由、

一新入之入牢人有之候へバ、衣類幷下帶迄剝取、改之上入牢爲致候儀ニ候所、右裸身之囚人を土間へ下シ、牢内ニ積置候糠味噌之上水を全身へ塗付ケ、夜中衣類を爲着不申差置候故、寒中などー夜ニ病氣なるものハ、牢死半生ニ成候由、翌日ニなり、衣類を爲着候へバ、直ニ吹出もの致し、腫物ニ成候旨、扨大便爲給候儀有之候由、これを給候もの、大方ハはれ病出相果候由、生鹽を多分爲給、其後水を爲呑ざる儀も有之、是等ハ病人ニハ不相成候へ共、甚難儀致候由、其外存を割候と唱、囚人共大勢ニ而打擲致シ候由、尤右體之義無之樣、牢屋掛役人々も嚴敷心付候へ共、夜分之儀ハ、掛リ役人迚も立入候儀も不相成、規矩ニ付、多分夜中右體之義と存候旨、尤無宿牢之方ニ多分右體之事有之、百姓牢ハ取締宜由、宿在牢之方も先ハ宜敷候旨、新入之囚人を被引分、牢内之樣子得と御尋有之候はゞ、可相分、右體之頭取致候もの嚴敷不被仰付候はゞ、何時も相止申間敷候旨相聞候事、

申三月三日攝津守殿へ

小田切土佐守

根岸肥前守

右一覽評議仕候處、右ハ五ケ年以前辰年も同樣之儀有之候由ニ而、坂部能登守勤役中、土佐守一

同申合、存寄可申上旨被仰渡取調罷在候內、能登守御役替ニ付、土佐守、村上肥後守、猶又取調相伺候義有之候間、則右書面別紙入御覽申候、然共尙又牢屋敷へ掛ケ置候與力共へ申渡、內々爲相探候處、何レ之掛ニ而も新規入牢之もの有之節ハ、當番之鍵役罷出、名前歲付、其外入牢證文ニ引合相改請取、牢鞘へ連參、刃物其外如何之品持參不爲致候爲め、裸ニいたし、衣類帶下帶鼻紙等迄も巨細ニ相改、入牢爲致候義ニ有之、牢內ハ不殘板式ニ而、土間と申ハ無之候間、土間へおろし、糠味噌之水を惣身へ塗付候由之義ハ、風聞之趣難相分、一體無宿牢之義ハ、無宿計ニ而、假令盜賊類ニ無之候而も、元來惡黨故、無宿ニ相成候程之もの共ニ付、右牢名主と唱候ものも同樣之ものニ候間、通例之者之取扱ニ而ハ取締も行屆不申、且是迄も牢內不埓之致方有之候はゞ、役所々々へ呼出之節可申立旨、每月牢改之節ニ、掟書を以申渡置候儀之處、只今迄風聞書之趣を以、申立候ものも無之、牢屋掛之者共も、見請候儀ハ尙更無御座、尤夜中之儀も、當番之同心共ハ、格別離れ候場所ニハ不罷在候間、聲高候義有之候へバ、早速相越相糺候義之所、是迄右體之義無御座、四ケ年以前取計相糺候趣と、當時相變義無御座候、四掛之もの申聞候、且又風聞書ニ有之通、新入之四人引分ケ相尋候樣も可致候へ共、元來惡黨共之儀ニ付、右ニ乘じ遺恨を以彼是僞之義を申立、右ニ付牢名主其外を相糺候はゞ、名主迚も一體惡黨之儀ニ付、却而難取締義も出來可仕ニ付、新入之無宿四人を引分、牢內之樣子相糺候も不容易義ニ有之、依之再應勘辨評議仕候處、無宿牢之內、名主致候四人ハ不及申、其外入牢致居候者共へ、右風聞之趣可有之間敷事ニ候へ共、都而不屆之儀致候もの有之ハ、前書之通役所々々へ呼出之節ハ勿論、掛與力囚獄等廻之節、鍵役同心相尋候節も、急度可申立候、仇を不致樣致し可遣間、無遠慮可申上旨、別書掟書之外、別段ニ月々月頭ニ申渡、幷新入之ものへも、入牢之節被申付候樣、牢屋掛與力共爲申渡置候樣可仕奉存候、御渡被成候風聞書、幷去ル巳年奉伺候書付寫相添、此段申上候、以上、

但火附盜賊改掛之分ハ、別牢ニ有之候ヘ共牢屋ハ一體之義故、囚獄與力并同心共も、三奉行掛同樣心を付、取計候義ニ御座候、

申二月　小田切土佐守

根岸肥前守

申二月三日右同斷　右同人

加役方ニ而ハ、附人與唱候もの有之、重罪ニ無之、又ハ無罪之もの、一兩人ツヽ、牢內ヘ入置、加役方宅ヘ呼出之節、一同附添罷出、右呼出之往返之節も、牢屋敷を出放れ候ヘハ、外囚人と違、小手をゆるめ連參、宅ニ而も右附人專ら世話致シ、囚人共惡事之次第申陳候ヘハ、附人ゟ利害等申聞、惡事之趣申立候樣申進め候儀有之由、右類之もの惡事有之附人ニ無之、實ニ入牢致候節ハ遺恨等有之ものハ、風聞書等之類可有之哉ニ相聞候ヘ共、是を以囚人共申立候儀ハ勿論、牢屋掛り之もの共及見候儀も無御座候、一體牢內之儀ハ、罪惡有之ものを入置候儀ニ而、無罪之もの入牢爲致候と申義も相當ニ無之、牢屋役人共も右ハ加役方附人之趣ニ相心得罷在候而ハ、取締も不宜、其上加役方呼出之節、假牢ニ罷在候內、非人等を相賴、囚人共ニ被賴、買物等致遣候趣も相聞候間、去ル巳年、土佐守、村上肥後守ゟ申上候所、附人之義相止候而ハ、加役方牢內取締不行屆義も可有之哉、尙又致了簡可申上旨被仰渡、則別紙之通御答書差上候所、買物等致、又ハ囚人之宿ヘ通路等致候義相聞、右體之義其外不取締之義無之樣、加役方ヘ被仰渡、附人之儀ハ、其儘被差置候、右之通ニ付、尙又可申上筋ニも無御座候ヘ共、一體牢內之儀ハ、罪惡有之ものを入置候義ニ而、無罪之もの入牢爲致候と申儀も相當ニ無之、其上先達而申上候書面ニも有之通、時ニゟ追放もの抔も附人ニ相成、入牢致候義も有之、右之通ニ而ハ、何程心付候共、迚も取締行屆兼可申哉、且御定書にも、目明口問抔と名付候而、罪之疑敷者出來候時ハ、罪惡之ものを助ケ置、或ハ探し求、罪之有無を決斷致

候事、甚以不可然趣も有之候間、右附人之儀ハ、御差止メも有之可然奉存候、此段心付候故伺又申上候、

申二月

坂部能登守勤役中差上候風聞書寫

書面伺之通、牢屋掛之もの共へ可申渡旨被仰渡、奉承知候、

巳八月二十二日　小田切土佐守
村上肥後守

牢内ニ而囚人共内々役人有之、新入之もの御座候節ハ、手荒成取扱致候趣ニ付、樣子承合候所、左之趣ニ御座候、

一入牢被仰付候もの共之内ニ、役人之心ニ不任ものハ打擲等仕リ、至而手荒なる取扱致候趣ニ御座候、

此儀新入之もの有之節ハ、何町誰と申もの新入ニ有之、右之ものへ遺恨有之候ものハ無之哉之旨、牢名主ゟ相牢致シ罷在候ものへ承合、右牢内ニ遺恨有之もの無御座候節ハ、隣牢之名主へ新入有之候、牢内名主ゟ前書之趣問合、若隣牢ニ罷在候もの共之内ニ新入之ものへ遺恨等有之候ものも御座候へバ、其者ゟ名主役之ものへ遺恨之譯を申立候由、左候へバ其牢之名主ゟ新入有之牢之名主へ、右之譯申通候へバ、名主ゟ角役二番役抔と唱候ものへ申付、打擲其外手荒之取扱爲致候由、至而打擲被致候節ハ、難立候義も有之候へバ、番之もの參リ何故騷敷候哉と相咎候由、其節ハ牢法を相背候もの有之間、仕置致候由、牢名主相答候へバ、牢番之もの申候ハ、牢法相背候義不埒ニ候間、嚴敷仕置致候樣申付、其上打擲ニ逢候ものへ、手鎖抔掛候義も御座候由、右打擲致候節、右之通ニ仕候由、

朱書
此儀新入之もの有之候節ハ、鍵役當番請取、相改候上、入牢御證文之通、誰殿御掛リ何町誰年何歳と申義、牢内へ申渡候へハ、牢内役人居並、入牢爲致候、其迹ニ而牢内役人四人共、右新入四人へ誰樣御掛當日之入日肩書名前歳等當人ニ爲申、牢内ニハ筆墨等無之間、能覺罷在候樣牢内役人ども申付候儀ハ定例ニ御座候、右新入之もの牢内幷揚牢ニも遺恨等有之哉之儀承合痛候義ハ私共幷當番へも隠シ候義故、相知不申候、牢屋同心罷越牢法相背不埒ニ候間、嚴敷仕置致シ候樣申付、其上打擲ニ逢候ものへ手鎖掛ケ候儀ハ、決而無御座候、

一手鎖之儀ハ、牢屋敷役所ニ有之、亂心もの立騒、其外不法之儀致候ものへハ、鍵役當番相糺、取計候上、手鎖掛牢屋見廻中幷頭辨之助へ申聞候儀ニ御座候、當番同心取計ニ而手鎖掛候儀決而無御座候、

書面之通取計、猶心付可申候、

一牢内へ茶を入遣候樽を茶樽と唱、右之樽へ水を入、當人を押伏セ置、右樽を背中乘せ、二人ニ而右茶樽を持上ケ、脊中へ落し候由ニ御座候、

朱書
此儀私共日々相廻候へ共、右體之義願出候者も無御座候間、只今迄相知不申候、以來茶樽相止、手桶ニ入割蓋ニ致し、入遣可申存候、

書面樽ハ相止、割蓋之手桶ニ入差遣可申候、

一きめ板と唱候板有之、右之板を五六枚程下帶ニ而束候へハ、角物ニ相成候由、右角物ニ而脊中を打候義仕候由ニ御座候、

朱書
此きめ板と申ハ、桐之四分之板ニ而、長サ貳尺程、幅五寸有之、右ハ總四人名前幷牢内ゟ買物等、きめ棒と申錐の太き先之無之三四分出シ候ものへ柄を付、右板へきめ出申候、右きめ板之義ハ、以來夜中ハ取上候樣可仕候、

書面之通取計可申候

一雪隠之蓋を詰蓋と唱、栗板ニ御座候由、當人を押伏置、右之板ニ而二の腕を打候由ニ御座候、
（朱書）此義雪隠之蓋、栗厚板ハ相止、杉四分板ニ致し可申候、

書面之通取計可申候

一落間と申所へ連參り、ツル流と唱候、古盛箱へ、兩便を汲取爲給候由ニ御座候、右之外巴豆蕃椒を爲給候由ニ御座候、蕃椒之儀ハ、表向ニ而諸買物致候節買置候由、巴豆之儀ハ、右買物方之下男へ内々ニ而相賴買取候義も有之、又ハ呼出等ニ而假牢ニ罷在候内、非人を相賴候義も御座候由、
（朱書）此儀只今迄牢内ゟ買物差出候へハ、牢番同心相調、下男使之ものへ相渡、尤蕃椒之義ハ、調入遣候義ニ御座候へ共、以來蕃椒ハ相止、鍵役當番以來買物品々相改入遣候樣可仕候、非人之義ハ、善七、松右衛門呼出、嚴敷可申渡候、便用之義ハ、牢内役人へ嚴敷可申渡候、

書面蕃椒類ハ、是迄通入遣可申候、尤買物之品々ハ、鍵役幷當番之者共得と相改め、如何ニも無之品ハ、是迄之通致置、囚人ゟ下男へ相對ニ而賴候義等ハ爲致申間敷候、

一汁留と申數日汁其外鹽ケ之物を爲給不申、飯計爲給候義も御座候由、
（朱書）此義ハ牢屋見廻り中頭辨之助幷私共日々相廻り、御手當等之儀ハ勿論、其外相替儀も無之哉相尋申候、其外御目付方見廻等も度々有之候へ共、右體之儀願出候ものも無御座候故、相知不申候、

書面之趣聞置候猶此上心付可申候、

一落間へ差置晝夜爲立候而、或ハ冬向ハ四斗樽へ水を入、右中へ入置候杯も有之由ニ御座候、
（朱書）此儀右同樣ニ御座候

附札前ニあり

一右之通打擲致シ、或ハ非道之取扱仕候由ニ而、氣絶等致候ものも御座候由、其節ハ落間へ遣シ、水を掛置候へバ、生氣ニ相成候由ニ御座候、右體打擲も可致と存候節ハ、十日以前ゟ、躰儀ハ不快候間、藥相用度由、牢名主ゟ申立候由、強く打擲致候節相果候へバ、病死之趣ニ申立候積ニ而、藥願致し置候儀ニ御座候由、右體ニ致シ相果候ものも有之候節ハ、落間ゟ病人差置候處へ連參、重病之趣申立候由、病死之もの有之候而も、委敷ハ見分不仕候故、死骸ニ疵等有之而も、見出候義も無之由ニ御座候、

朱書
此儀ハ毎朝五時頃、醫師共牢内へ見廻り罷越、牢番同心立合、囚人病體見候上、藥相用候もの、幷病氣差重、御預ヶ等申上候ものハ當番鍵役へ逸々申聞、病體書へ醫師印形致シ、諸向へ御屆等差出候義ニ有之、鍵役當番日々相廻、譯樣體如何之旨、牢内役人へも相尋、當人へも少々も快哉之旨相尋候義ニ御座候、牢死仕候もの有之候へバ、早速醫師罷越、樣體見候上、病死致し候旨、鍵役當番へ相屆候ニ付、牢内ゟ下男改番所迄爲出、鍵役當番死骸相改、夫ゟ死罪場へ差置、牢屋見廻中、幷頭辨之助立合死骸改見分仕候上、諸向へ御屆申上候儀ニ御座候、既ニ去年鹽入大三郎殿懸り、芝無宿丹次郎牢死仕候節、死骸ニ怪敷儀有之、早速御吟味之儀申上候義ニ御座候、

書面囚人共藥相願候はゞ、醫師差遣シ、藥相願候囚人之脈體等得と爲見屆、實ニ病氣ニ候はゞ藥差遣、其外死骸改候義、幷鍵役當番等見廻り候義ハ、是迄之通取計可申候、

一入牢被仰付候ものツルと唱、金子を持參仕候、尤衣類帯等之縫目へ入、持參候ものも有之候へ共、牢屋敷ニ而相改取上候故、多分小粒を紙ニ包ミ、腹中へ呑込、牢内へ參候へバ、名主ツルを持參致候之旨相尋、持參致候旨相答候へバ詰番之ものへ申付、右小粒出候迄ハツル流と唱候處

箱へ便用爲致、盥箱之底を拔、御仕着帷子之切レニ而、底を付候ふるひにて漉取候へバ、三日目位ニハ、大便中ゟ出候由ニ御座候、右ツル金ハ名主方へ取上置、溜候へバ、ツル割と唱、名主其外頭役、角役、二番役、中座、親方帳代抔と相唱候役之もの共割取候由ニ御座候、右體之節ハ、博弈も致候由、尤賽は無之候へ共、膏藥ニ而賽之形を拵、六ツ目ニハ赤膏藥を入、賽ニ致候由ニ御座候、右之通ツル金持參仕候へバ、手荒成取扱も不仕候趣ニ御座候間、入牢被仰付候もの、多分持參仕候由ニ御座候、

朱書 此儀ハ私共心付候節ハ、不時ニ牢改致し、右金子其外如何之品ハ、早速取上、金子ハ當人相糺、他掛之分ハ、御月番御番所へ差上候義度々御座候、尚又此上嚴敷相改可申候、

書面之通取計可申候

一牢內ゟ質物を置候義相成候由ニ御座候、此義牢內ニ而はき溜候芥を樽へ入置、捨させ候節、右の內へ質物之品を入、下男ニ相頼申候由ニ御座候、

朱書 此義ハ牢內ゟはき溜候芥を樽へ入差出候節、牢番同心下男へ申付、非人人足ニ爲取捨候義ニ御座候へバ、以來ハ右芥捨候節ハ、鍵役當番立合相改候上爲取捨可申奉存候、

書面之通取計可申候

一ツル金にて錢を買候儀相成候由ニ御座候、

此義ハ下男相頼候へバ、壹分ニ壹貫文ヅヽニ定相場ニ而買與候由ニ御座候、

朱書 此儀ハ牢當番所ニ屆物錢入帳買物錢出帳と申、一牢限ニ致シ、出入相改、牢改之節、入帳出帳と相改候義ニ付、餘計之錢御座候へバ相糺候義ニ御座候、尤牢內へハ四文錢入不申、小錢計入遣申候、下男牢縮出入之節ハ、牢番同心一人ヅヽ差添罷越候儀ニ御座候、以來ハ尚更卒爾無之樣嚴敷取計可申候、

書面之通入念取計可申候

一酒も貮三分程ツヽ買置候由ニ御座候、

此義ハ下男相類候へバ、茶を入候樽へ入、表向ハ茶之趣ニ而買入候由、尤牢内ニ而ハ右之樽ニハ入置不申候、冬之内たんぽ德利と唱、湯を入相渡候德利有之、右之德利へ入替、名主其外役人共給候由ニ御座候、

（朱書）此儀も賄所ニ而賄役之もの立合、茶番下男へ申付、茶樽へ四人人數ニ應じ入遣シ、牢番同心立合、牢内へ入遣候義ニ御座候へ共、以來ハ前書申上候通茶樽相止、手桶蓋ニ致し、鍵役當番立合相改入遣可申候、尤酒之義ハ一牢へ一日百文ツヽ入遣候、其餘ハ爲買不申候、

書面之通取計可申候

一牢内ニ而烟草呑候儀相成候由ニ御座候、

此義ハ烟管一二本、打火道具有之、たばこほくち等ハ、呼出之節非人を相頼潛へ牢内へ呑湯入候節、湯桶之側へ參り呑候由、左候へバ湯之烟ニ紛候故相分不申候由、其外小刀、鋏、毛拔等も有之、右品々ハ名主所持致し罷在、尤名主呼出等之節ハ、頭役角役抔へ預置候由ニ御座候、

（朱書）此儀ハ風聞御座候ニ付、去年中不時ニ相改、右不正之品々取上、其後嚴敷相改候故、當時牢内ニ右體之品一向無御座候、

書面烟草等給候義ハ、別而不宜事ニ付、以來精々相改可申候、

一新入之者衣類、其外手拭、下帶等迄、新敷品ハ取上、牢内ニ有合候古き品を遣シ、取上候衣類ハ、名主其外役人致候もの呼出之節、着し罷出、假牢ニ罷在候内、非人抔へ相頼、妻抔之方へ爲持遣シ、或ハ質物ニ置候儀も御座候由、右體之義仕候故、牢内名主致候（此間有ニ脱文）出牢致候由御座候、

（朱書）此義ハ入牢被仰付候節、衣類帳へ銘々着致候衣類迄印（シルシ）置、御呼出ニ出候節ハ相改差出候義

ニ御座候、尤名主役人共外囚人衣類借受着致候ものも有之、其節ハ早速右衣類取上、當人どもへ爲相返、名主其外役儀取上、咎等も申付候義度々御座候、御呼出之節、假牢ゟ非人相賴妻抔之方へ衣類差遣、其外質物等ニ置候義、三年行御懸りニ而ハ決而無御座候、

但加役方御懸り囚人之內、度々入牢致候ものハ、御掛囚人附人と唱、外囚人同樣日々御呼出ニ罷出候節、牢屋敷ニ而鍵役當番銘々相改、加役方組同心へ相渡遣申候、然處牢屋敷を出離候へバ、小手をゆるし召連候義度々及見申候、右御役所假牢詰番非人罷在、囚人共入置候ニ付、附人囚人と唱候ものハ、色々囚人世話仕候故、外囚人宿々へも通達仕候義も可有御座哉、難計奉存候、呼出返り之節、銘々相改候へ共、加役方ハ、大方夜中大勢歸牢仕、其上新入等も日々御座候故、改落等も可有御座候、此上尙又嚴敷相改可申奉存候、加役方牢取締御座候樣仕度奉存候、

書面之趣聞置候、以來入念可申候、

一宿在之もの方ゟ屆物相願差遣候而も、錢其外紙類迄當人へハ相渡不申、名主方へ取上候由ニ御座候、

（朱書）此義宿ゟ屆物相願候ハ、御掛々之押切相濟、牢屋敷へ持參致候へバ、物書當番押切へ引合相改、牢番同心立合當人牢戶前へ呼出し、書面之通爲讀聞候上、當人共へ直ニ相渡申候、然處平囚人之儀ハ、右屆錢持居候而も自身買物等調候儀不相成候故、買物掛囚人へ相賴、菜之もの煮肴、其外油元結等調貫申候、名主取計差圖仕候儀ニ御座候、

書面平囚人共ハ、直ニ買物等之義申立候義不相成、仕來ニ而、牢內名主取計候はゞ、以來ハ買物之義相賴候囚人へ名主差添相願候はゞ、當人をも一應相尋候上調遣可申候、

一牢內ニ而牢紙二三枚程重ネ、いため紙を拵置、右之紙へきめ棒と唱候もの用向を相調メ、宿元

へ文通致候由ニ御座候、使ハ下男或ハ呼出之節非人抔へ相頼候由ニ御座候、右之紙をきめ紙。。。
と唱候由、都而悪もの共之儀ハ、新入ニ参り候而も、悪もの仲間之もの不レ絶牢内ニ罷在候義故、
客座抔と申處へ差置、或ハ役人不足之節ハ、直ニ役人ニ名主ゟ申付候由ニ御座候、其外左之通
ニ御座候、

頭役　角役（スミ）　二番役　三番役　四番役　五番役　本役　本役助　親方帳代　大隠居
若隠居　隠居並

此内三番役ゟ五番役迄を打混、中座と唱候由、

（朱書）此義いため紙拵置候而、遠島被レ仰付レ候もの共願先覺書ニ、きめ棒ニ而きめ貰所持致し罷在
候へ共、右いため紙先達而不レ殘取上ケ、只今ニ而ハ牢内ニ一切無二御座一候、都而無宿牢之儀ハ、
度々入牢致候もの多御座候故、新入ニ参候而も、其ものハ牢内掟も存罷在候故、名主ゟ下役
人へ申付候義も可レ有二御座一奉レ存候、牢内役人之儀ハ、

名主　添役　角役　貳番役　三番役　四番役　五番役　本役　本役助　詰之番
同助番　五器口番

右拾貳人牢内役人ニ御座候、大隠居、若隠居、隠居並と申義ハ、牢内ニ而名付候義と奉レ存候、一
通りニ而入牢致候もの甚難儀仕候由、此義ハ平生新入之もの痛候類、其義致間敷旨嚴敷申
渡置候義ニ御座候、右新入之内岡引と唱候もの御座候由、私共ニハ相知れ不レ申候へ共、牢内
ニ而ハ存罷在候故、其ものへ夜中痛候義も御座候哉、右岡引と申もの、一體悪黨ものどもニ
而、牢内ニ而被レ痛候而も、聲立候義ハ耻之樣ニも存候哉、聲立候義も無二御座一候、翌朝私共幷牢
屋見廻り、中頭辨之助相廻候節も、右體之義願出候ものも無二御座一候、其夜之内相牢囚人共と
和談致候哉ニ奉レ存候、日々入牢被二仰付一候新入囚人を、牢内ニ而痛メ候義ハ一向無二御座一候、

書面之趣聞置候

右之通惡ルもの共計牢內役人致シ罷在候故、一通リニ而入牢致し候ものハ甚難儀仕候由ニ御座候、右風聞及承候間申上候、以上、

四月十七日

右朱書之通ニ御座候、此上尙又私共前書申上候通、出精仕、以來卒爾無之樣勘辨仕取計可申奉存候、以上、

七月

一牢內役人之儀ハ、死刑以上御仕置もの有之候節、御證文を以、牢舍外ゟ鍵役共立合、御掛リ幷肩書名前申聞候へバ、名主役人、惣囚人名前肩書歲付等きめ板へ記置、請答仕差出申候、其外役人無御座候而ハ、惡黨もの共之儀ニ御座候へバ、我々我儘仕牢內取締不申、夜中抔別而混雜仕、取締不申ニ付、是ハ只今之通ニ而可被差置哉ニ奉存候、此間御下被成候風聞書、鍵役共得と打合評議仕候所、書面之通ニ御座候、則右風聞書返上仕候、以上、

七月二十七日

〔德川禁令考後聚附錄二〕牢內取計之儀幷同心勤方之事〇中略

一諸掛呼出囚人之儀、揚屋者ハ、羽がひニ而駕籠ニ乘せ、町人足ニ而差出候、平囚人者、本繩ニ而持籠ニ乘せ、非人人足ニ而差出、歸候得者、入牢者之通同樣相改、牢揚屋江入候事、〇中略

一買物之儀、牢內より調候品板ニきめ、當番迄差出候得者、寫取、下男ニ申付爲調、當番立合、逸々相改爲入候事、

〔諸例類纂五〕牢屋秘事錄〇中略

一牢內ニ久しく居候者を見立、名主ニ申付候、罪人能々下知を相守リ申候、尤重き罪人ハ名主不

申付候。○中略

一宿より参候半紙ハ、名主取上置、御呼出し之節五枚渡ス、手拭も取上置、火あぶり出候節、きやはんにしてもよろしく、おびたゞしく貯置候よし、

一金銀銭一切法度之所、内々つると称し、持来候を、名主取候て、衣類えり袖ニぬい入置候由、糸ハ表向願候事、針ハ内々ニ而調へし由也。○中略

一宿より送来る時、名主之前へ参、何ぞ好物可調と申、其元好物をといふ、再三辞退之上、蕎麥など調之數ハ二百文參るといへ共、至而少し也、酒も一升調候へバ、三合計来るよし也、

〔牢獄秘録〕大牢弐間牢入牢者之事。○中略

一牢内役人と云ふハ名主、壹番役、弐番役、すみの隠居、是ハ元入牢して名主もいたし候者、又々入牢致候節ハ、牢法も心得候もの故、すみの隠居となる也、ツメの隠居、ツメトハ、牢内ニ而雪隠の事を云、雪隠之邊ニ居る也、穴之隠居と云も有、次ニ三番役、四番役、五番役、此外に願かぞへ役とて夕方小頭来り、牢内の人数を改候時、牢内之科人壹人々々に勘定し、私共何十何人と云也、又朝夕之食事モツソウニ入る時に、此めしを壹人々々に分け遣ス役も有るなり、是迄を牢内之役人と云也、牢内名主ハ、罪之軽重に依らずして、名生役申付候事也、夫より以下ハ、名主之心得ニて役付候事也、

一牢内名主初メ、役人共ハ、畳壹畳に壹人ヅヽ、三番役、四番役などは、壹畳に弐人ヅヽ居る事也、又新入之入牢者ハ、向ふ通りとて、壹畳ニ八人七人位も置事也、尤牢内之板之間ハ有之共、畳を上ケ積置て、入牢人数に畳を引詰置事也、尤名主之氣性にて、夜分ハ科人共を寛やかに寝させ候も有り、夫きりに六ッケ敷申て有也、又届物等追々来り候へば、追々繰り上ケ、一畳ニ四人位も居る處江進す也、夜具蒲團等届物ニ而参り候得バ、則着せ候事也、

一牢内つるとて、金子持行、名主江出す時、名主是を請取て、すみの隠居、又一番役に相渡す、此者預り居り、餘程集りて役人中五番役迄にて割取ル由、

一牢内にて糸針、ひめのり、手ぬぐひ、半紙、元結、櫛油油髮等ハ表立て入る也、

一牢内に墨、筆、硯、はさみ、碁石、將棊、煙草の道具等ハ、嚴敷法度なれども、内々張番ニ頼、牢内ニ皆々有之候由、尤碁石ハ土、碁ばんハ紙也、五六日ニ一度ヅヽ、牢内改有之時ハ、是等之品々をかくし置事也、

一大牢に入り候者も、石出帶刀方江手を廻し頼み候得バ、鎰番來り、大牢ゟ呼出し、揚り屋江聲を懸、揚りやト言、時に名主内ゟヘイト挨拶有之、時に鎰役申ハ、此何と云もの子細有りて揚り屋江預ヶ候間、隨分丁寧ニ取扱候樣可致と申渡、扨科人江ハ、當人も我儘を致間敷と申渡、揚り屋江入ル、右大牢之者、揚りや江入られ候ハ、牢屋頭石出帶刀、幷鎰役之作略ニ候由、去れども御呼出しの時ハ、矢張本繩にかけて引出シ候由也、

一牢入之者、其宿江張番無心に行也、抑張番ハ、牢内之言葉ニ而、牢屋下男と云もの也、牢屋下男之給金ハ、壹ヶ年壹兩貳分也、入牢者有之時ハ、其宿江行て貰ひ候事也、依之半年も下男を致時ハ、貳拾兩三拾兩之金ハ出來候よし、去ながら元ゟ惡錢故、兎角遊び歩行て、金銀身に付ずと云也、先年火消人足箱崎靈巖島と、壹番貳番との大喧嘩ニ而、入牢數多有之時、張番四人にて、壹人前三十兩宛も取り候よし、

〔牢獄秘錄〕御呼出しの事

一御呼出し之時ハ、揚り屋ものハ、小手をゆるめしばり、乘物にのせる、又大牢、貳間牢の者ハ、うしろ手にしばり、モッコウにのせ出る、本役加役の呼出しハ、只しばり候計りにて歩行せ行、尤遠島死罪ハ、本役加役にても、モッコウにのせる、尤ホダをかけ、モッコウニのせるハ餘程の重罪也、夜盜押込、死罪等是也、片ホダにて呼出し候も有之、兩ホダにて呼出すも有之、ホダの儘にて、モッコウにのせ、此ホダをバ着ものヽ裾にてかくし貰ふ是かつぎ候乞食、又ハ横目のものにたのみて、かくしもろふなり、

一牢内呼出しの時ハ、朝めし前牢屋同心（平當番）外ざやの外にて、大牢（貳間牢にても、女牢にても、揚り屋にても、）と聲をかける、牢内より名主へイトいふ、時に平當番之者ハ御呼出しが有、何時何々、何町無宿誰と外よりいふ、めし後に張番平當番、さやへ入りて、御呼出しのもの共一々呼出し、縄をかける事也、此時ハ平當番脇差をさして居る也、牢庭にてモッコウにのせる、（御呼出縄かけ候時、張番衣類を改メ縄かけ、又歸牢の時も、同衣類改メ、牢内江入るといへ共、此時出入共初而入牢之節程多數ハ不改と云、）

〔牢獄秘鑑〕死罪もの打首有之時之事

一死罪もの有之時ハ、前夜町奉行より牢屋敷石出帶刀之玄關（脇副といふハ牢屋の言葉なり）に申來る、打首壹人ならば、半紙壹枚貳人ならば、半紙貳枚と、人數だけ半紙來り、（此紙を打首の時、首かみに當るなり、）何之國、無宿、誰と書付來る、是を張番（藥部屋懸り之張番ハ、藥間のうしろに居るなり、）藥部屋懸り、是を寫して、翌朝藥を牢内江遣す時に、この書付を小くして名主江遣ス、是名主より賴にて、貰もの有故也、

一鎰番さやの内に入り、大牢（貳間牢歟）と聲を懸る、名主内よりヘイトいふ時に、御仕置物が有、何之何之守殿（榊原主計頭殿歟、筒井伊賀守殿歟、）御懸りにて、武州埼玉郡柏原村無宿龜五郎年二十一才、八月二十六日之入牢といふ、時に名主、をりましたア（引、是牢法にてかろくいふなり、）何之何之守樣御懸りにて、武州埼玉郡柏原村無宿龜五郎年二十一才何月幾日之入牢外に同所同名ハ御ざりませんといひながら、キメ板（此キメ板に此事書て有之也、是をよみながら名主かくいふ也、此キメ板へかくとは、朝飯前平當番御仕置もの書付委敷書付、表向名主へ遣ス也、）を牢内板之間へ打付る也、時に御仕置ものを兩人して兩手をとらへ、シッ〳〵といひて留口へ押出す也、（牢名主御仕置に成候時ハ、自分ニ委細をよみ上て、外に同所同名は御座りません、私で御座りますト言て、牢内をいづるなり、）時に張番脇より切縄を懸る、（此時牢屋同心鎰役共、三四人も加居る、）縄かけ相濟て、揚り屋前縁類に腰をかけさせ、張番縄を取居る、此科人如斯壹人ヅツ呼出し、何人にても右之通り之始末ニ而、皆々死罪之もの呼出し相濟而、鎰役の申は、大牢、貳間牢、外に御沙汰はないといふ、時に兩牢之名主エ、イ（引）ト言ふに、牢内中兩牢一同にエ、イ

引トいふ也、

一外ざや与死罪之科人引出す時、火之番所（牢庭に有り、貳疊敷之處也、小番所也、前ニ三尺幅之砂利有る也、）に與力（町與力、爰ニ腰をかけ）扣へ居る所へつれ行、此前鎰役科人の名を呼、其方ハ御懸りどなたにて幾日之入牢にやと聞、科人申ハ、私ハ北之御前樣之（科人共、町奉行之事を北之御前樣とあがめ言也、）御懸りにて、何月幾日之入牢と言、時に鎰役聞糺し、宜敷旨をいふ時、與力何之何之守殿（是は月番之御老中方の名にて、或は水野出羽守殿御差圖を承れといふて、跡を言ふよし、）御差圖を承れ、何々の科に依り、死罪申渡すといふ、時に打役側ゟ立テトいふ、時に張番繩を持引立て、乞食に繩を渡す、（是迄張番繩を持役也、）乞食是を請取、俗にいふ地獄門の方江連行也、地獄門の内にて、乞食面がみをかける、（此かみは、背に奉行ゟ來りし半紙也、半紙を竪ニ面へ當テ額にてしばり、繩はわらの細き繩也、半紙なかばを前へかへす、則目かくしとなる、）扨面かみかけて後に、かの血たまり前のドダン場へつれゆく也、○中略

一牢内にて死罪に成べきものは、兼々心得て、白布にて脚半など用意し置也、尤牢内にしろ木綿いと、針等ハ、入レ候事故、この用意出來る也、

一牢内に御仕置もの有之時ハ、其夕方ゟ牢内一同に題目を唱る事也、但牢内にては念佛法度也、（是は念佛にては往生して、だいもくにて助るトいふ說也、日蓮上人油井ヶ濱にて助りしト云古事を用ひて、題目をとなへるは助りたしと云心のよし、）

一死罪之内引廻し（牢内にては、只引廻しといふ、）獄門、死罪は、科人之方に而ハ悅ぶなり、是娑婆之見をさめに、一度世間を見るといふて悅ぶ也、

〔牢獄秘錄〕牢内之者内々買物致方之事

一牢内之者藥類、菓子歟、酒抔求度と存する時ハ、張番へ賴む事也、尤極内々にて賴也、但牢内へ遣シ候節、平當番是を見付候へば、殊之外六ケ敷、その張番サヤ江入候事を留められ候事也、依之張番之者日中に求置、夜ニ入て、外さや与竹之先へ付て、牢内へ入遣す事也、日中ハ見張之同心有之故不ニ相成事也、（右買物買置候ても無ニ置處一ゆへ、切り場へかくし置事なり、）

一如斯之時、何品なり共買度と言時ハ、其代何之品にても壹分呉候事也、是を一抱と云、たとひ百文之買物にても、五百文之買物にても、一抱呉候事也、牢内に南鐐甚少く、皆壹分判の通用なり、是始末よきゆへと言也、牢内御呼出しの時、此もの乞食横目に頼みて、菓子、はみがき、鳥目など貰もらひ入り候事也、尤たもと衣類へ入る、

一酒などとゝのへ遣すには、小き德利に入て、外ざやの外ゟ小聲にて呼ぶ也、時に牢内にかんじんよりの先に、手拭付て、手ぬぐひ丸く丸めて付、内のかうしゟなげ遣す也、外ザヤの内江なげる、外ゟ張番この手拭に德利口をふつかりとして、酒の出ぬやうにするなり、をゆひ付て遣す也、

一牢内の者我が宿へ何ぞ屆物を賴む時ハ、少く紙へかきて、張番に渡す、但渡し候時、平當番に知れ候てハ不相成事ゆゑ、御呼出しにて出候ものへ、この書付持せ置也、張番繩懸る時に、内々手より手へ渡すこと也、

〔牢獄秘錄〕出牢之者、金子我家江送り遣ス事、
一出牢之者ハ、名主等も勤め居るもの故、金子溜め置、衣類之背中へ縫ひ込て持出す事也、又御呼出し之節、町奉行假牢之處にて、横目乞食に賴ミ、金子等宿へ送る事も有るなり、

〔牢獄秘錄〕牢内日々買物之事
一朝四時頃、平當番壹人、張番壹人牢内江入り、サヤの内より、今日之買物と言時、揚り屋、女牢、大牢、貳間牢、東西共にキメ板に書付出ス、先ツ糸針、白もめん、あまざけ、わらんじの類を、此板に書付て出す也、扨此あたひの鳥目入牢もの有之屆物之時、鳥目貳百文ツヽ、人々宿有之者送ル也、此貳百文毎日たまり居る錢にて、此買物を致す事也、尤此錢ハ誰彼と不究、惣牢一同の買物錢に成る也、依之宿なき者にても病氣其外ニてあま酒などと望みぬれば、則とゝのへ呉候事也、宿なきものハ屆ものの來らぬゆゑ、屆物錢なしといへ共、隨分買物ハ出來候よし也、これ毎日如斯に一度ツヽ、牢内の買物を晴ていたし候事なり、是有難き御惠みなりと、牢内にて皆々申あへり、

一御呼出し有之時、其科人御呼出し帰りに皆々買物いたし、乞食標目にたのみ衣類へかくし持帰る也、此時改候張番に、兼而牢内ニのこりし名主より頼むと云、今日誰々御呼出し之處、少々買物有之故、歸牢にて改メ候時、心して改メ候様にと頼也、張番心得て改ると言、尤初而の牢入と違ひ、ざつと改メ候事也、

古事類苑

法律部五十一

下編下

囚禁下 溜附

入牢例 二六五
過怠牢 二六六
永牢 二七〇
揚屋入 二七三
揚座敷入 二八二
詰牢 二八五
出牢 二八七
破獄 二八九
牢内不法處分 二九三
囚人護送 護送中逃亡 二九四
失囚處分 獄吏譴責 三〇五
劫奪囚人 三一〇
病囚取扱 下付病者於私宅 三一一
囚人死亡 囚人自殺 三一六

溜獄　三一八
雜載　三二〇

附溜

起立、構造　三二三
溜役人　三二五
溜內法度　三二七
溜預　三二八
溜囚人供給　三三二
溜囚人取扱　三三三
出溜　三三四
溜破　三三五
溜內不法處分　三三六

古事類苑

法律部五十一

下編下

囚禁下 溜附

入牢例

〔後見草 中〕三年の春〇明和比より、御藏門徒といへる邪法の沙汰さまざまあり、其法の信者なるよしにて、家富榮えける人々の家を孫子に讓り、目出度隱居なんどいへる者を初として、愚痴無智の婦か、に至るまで、公に數多召捕れて獄屋の内に繋がれたり、

〔耳嚢 下〕孝子其印を顯す事

是も予〇根岸守信留役之節、まのあたり見聞せる事也、安藤霜臺懸りにて、三笠附其外惡黨をなしたる者共遺恨にても有しや、名は忘れぬ雜司ヶ谷之在所、初魚村之者を箱訴の事有、名指ける箱訴故、呼出しけるに、年比七十計の病身に見へし老人也、中々三笠附などは勿論、惡黨抔可致者ならねど、定法故難捨置、入牢之事、霜臺より申渡けるが、右老人の忰三人跡に附添出けるが、惣領ハ二十才餘りの者成しが、進出て、親儀ハ御覽之通、年もより殊に病氣ニ而罷在候得バ、入牢抔被仰付なば、天年をも損じ可申、併御定法之御事ニ候へバ、私を入牢奉願候、親儀ハ、御免相願旨申けるに、其弟十三四歲に成が進出て、兄は當時家業專にて老親幼もの共養育仕候事故、我身入牢相願旨歎ければ、末子ハ漸九ッ十ヲ計成歟、何之言葉もなく、私入牢相願候迚、兄弟互に泣爭ひけるにぞ、霜臺も落涙にて、暫有無之事もなく、其席に在し留役、又ハ霜臺之家來迄、暫し袖をしぼりしが、其夜入牢申付て、翌日跡方もなき事に決して、老人も出牢申付て、無事に落着しぬ、

〔科條類典 下四〕

享保二十卯年十二月廿八日入牢　神田佐柄木町幸右衛門店 新助

神田田町貳町目、三郎右衛門店湯屋吉兵衛訴出候は、此間中、度々湯入候者之衣類紛失致し候に付、心を付罷在候處、昨夜五時分、右新助湯ニ參候者之衣類著替候を見付、捕置候由訴來に付、今日召出、吟味之上、右之通無紛ニ付、猶又穿鑿之内牢舍、

〔蜘蛛の糸巻追加〕祭禮萬度

天明五六年の比と覺ゆ、京橋弓町より藤棚の大萬度出で、町の木戸口に障りて、横になして通る程の物なり、此祭禮〇山王の時、警固の棒引、足輕と口論して、雙方入牢の者ありしに、長州の足輕七八人、入牢の中にて一人剛氣の者ありて、三日牢扶持を喰はず、牢役尋ねければ、我は主君ありて、扶持に預る身なり、たとひ餓死するとも、他人の飯は喰はずと云ひければ、長州の役人つたへ聞きて、吟味中入牢の足輕どもの、三度の食を牢内に贈りしに、吟味つまりて弓町の者三人遠島、其餘一件の者御咎ありて、足輕どもは無事に濟みぬ、飯を喰はざりし足輕は、長州家中にて三王五郎兵衛と異名せられ、祿もましけるとぞ、弘化三丙午年、件の一件より五十餘年歷て、再び傳馬町より、山王祭禮には、かならず出づる神祖御手張の獅子と唱ふる持夫の者町家の者と、かの棒引と口論打ち合ありて、雙方入牢ありしに、長州先例によりて入牢、足輕八人ときくへ三度の食を給ひしとぞ、

〔大成令 二〕定〇中略

一爲過怠籠舍之者、評定衆相談之上、日數を定、其日限相濟候はゞ、籠より可出之事、
附預り物永々舖不差置、急度懸穿鑿可濟之事、〇中略

寛永十二年十二月一日　讃岐守

大炊頭

〔牢獄秘錄〕敲之者之事〇中略

一女には入墨にても敲事なく、五十敲之罪ならバ、入墨之上五十日入牢致置、百敲之罪ハ、百日入牢致ス事也、

〔德川禁令考後聚〕三十六 司刑曹遵則 天保八酉年七月 過怠牢日數之内病氣ニ付出牢、又ハ溜預心得之儀ニ付掛合、

大草能登守殿　内藤隼人正

過怠牢申付置候もの病氣ニ付溜預申付、追而日數之内快氣いたし候節ハ、歸牢之上、右溜預日數を込相殘り候日數爲致在牢候哉、又ハ溜預中之日數ハ相除、前後在牢之日數を以差免候儀ニ有之候哉、先例承知致度、此段及御掛合候、以上、

酉七月

御書面之趣致承知候、拙者御役所ニ而過怠牢申付候もの、有宿ニ候得バ、出牢宿預申付、快氣之上、歸牢申付、殘日數牢舍爲致候例有之、溜預申付候先例、差當相見不申候間、牢屋敷相糺候處、松平伯耆守殿寺社奉行御勤役中、御同人御掛、三田寺町新義眞言宗長延寺ニ罷在候とよ儀、文政八酉年六月十八日過怠牢舍ニ相成、同九月十八日、病氣ニ付溜預、同月二十九日歸牢、十月朔日日數相立候ニ付出牢いたし候儀有之候旨申聞候者、右者百日過怠ニ而、溜預中之日數も籠り候儀と被存候間、尙寺社方江御掛合可有之哉ニ存候、此段及御挨拶候、

酉七月　大草能登守

〔德川禁令考後聚〕三十二 行刑條例 安永元辰年十二月十四日 拾五歲以下之者御仕置之儀ニ付御書付　三奉行江

一拾五歳以下之もの御仕置之儀、仕來之通十四歳より內之ものを幼年之御仕置申付、十五歳より大人之御仕置可申付事、

一幼年之もの敲之儀、十五歳以下ニ而も敲可申付事、

但御定書ニ、幼年ニ而致盜候もの大人之御仕置より一等輕可申付と有之候間、敲ニ當り候ものを敲候而ハ、右御定ニ相當不致候、無宿ニ而無之幼年之もの敲ニ當り候ものハ向後過怠牢可申付事、

右之通一統相心得、區々ニ不相成樣可被致候、

十二月

〔德川禁令考後聚行刑條例三十二〕寬政九巳年六月二十六日 幼年もの博奕咎之儀ニ付御書付

博奕御仕置之儀、當分敲ニ可申付旨、先達而相達候、然處幼年之者之差別ハ無之候得共、博奕御仕置も敲ニ申付候上ハ、明和之度相達候、幼年者敲御仕置書付之趣ニ准じ、無宿ニ而無之幼年者、過怠牢可被申付候、尤幼年もの之事ニ候得バ、人に被勸、無辨風と致し候類ハ、其差別可有之事、

巳六月

〔御仕置例類集三ノ五〕寬政三亥年七月

鳥居丹波守殿御差圖　町奉行 初鹿野河內守掛

一松屋町長兵衞疵付候一件　松屋町上納地孫右衞門店 善八方ニ居候 同人甥 初五郎

右之もの儀、伯父善八養育ニ逢罷在、同人所持之品追々盜出、七百文餘賣拂、食物ニ遣捨、猶又脇差壹腰盜出、長兵衞方江持參、買取吳候樣申候節、代錢築地邊ニ而可相渡旨申ニ付、同道致シ參候途

中子細不申聞所々爲手負候ニ付、聲立候得共、其邊之もの共立出候樣ニ驚候哉、長兵衞逃去候跡ニ落置候出羽庖丁を持罷歸候始末不屆ニ付、敲可申付處、幼年ものニ付三十日過怠牢、

（御仕置例類集三ノ五）寛政八辰年九月

戶田采女正殿御差圖　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一羽州大山村重右衞門姉いね致盜候一件

酒井左衞門尉御預所羽州田河郡大山村
無高百姓重右衞門姉
いね

右之もの儀、横內村與助、後田村次左衞門宅手薄之囲ニ候得共、右贄垣を破這入、衣類品々盜取、其外高寺村長右衞門、外六ヶ所百姓家留守之樣子故建寄有之戶を明這入、又者被雇候而家內之者見世ニ罷在候目合を見合、衣類度々ニ九拾壹品盜取致質入等、右代金五兩壹分餘不殘酒食ニ遣捨候段不屆ニ付、入墨之上百日過怠牢、

御差圖

死罪

右御仕置附

右御定書ニ、晝夜ニ不限戶明有之處、又者家內ニ人無之故、手元ニ有之輕キ品盜取候類、入墨之上重敲と有之ニ見合、且女之儀も入墨ハ申付、敲之儀者過怠牢可申付積、去ル酉年〇寛政元年評定所一座江伺之通被仰渡候儀も御座候間、入墨之上百日過怠牢、

（御仕置例類集二ノ二十三）文化七午年御渡

火附盜賊改大林彌左衞門伺

一牛込水道町城吉母くめ初筆盜いたし候一件

永牢

牛込水道町傳藏店城吉母くめ

右之もの儀、所々湯屋込合候砌、盗可致と入湯いたし、揚り場に脱有之候衣類帯等盗取、右品所持いたし、又ハ質入賣拂代金錢不殘遣捨候段不届ニ付、入墨之上百日過怠牢、

〔類例秘錄五〕石川左近將監掛り享和三亥年

一上州金井村數右衛門母たき博奕一件吟味伺

書面たき儀、吟味詰候義を以、重敲可申付處、女之義に付、過怠牢申付候段申渡、證文取之差出、吉川榮左衛門江申談、同人支配所岩鼻陣屋ニ而、入牢爲致置、日數百日相立候はゞ、不及伺可被差免候、以上、

亥二月

〔御仕置裁許帳一〕古主に慮外仕者附脇指を拔ゐだけ申者

元祿十一年丑十一月十九日

壹人浪人齋藤一八　是ハ淺草三間町十左衛門店之者、此者儀、古主松平五郎左衛門方ニ而、九歲之時ゟつかひ立候處、五年以前酉年暇を乞候付、無相違暇遣し、其後井上大和守方ニ相勤、構を請致浪人候之處、爲致歸參、孫吉十郎ニ付置可申由ニ而、五郎左衛門方ゟ大和守方江構之侘致候ニ付、構之儀早速被差免、五郎左衛門方江引取可申と致候處、孫吉十郎相果候付、五郎左衛門人多有之付、外江肝煎可遣由ニ而、扶持方なと遣シ置候處、歸參不仕成を遺恨ニ存由ニ而、度々五郎左衛門方江罷越、不屆之儀申、殊ニ當月十六日之夜參、惡口慮外致候付、手討ニも可仕と存候處、十七日之御名日致遠慮、捕置、御支配方江相達、米倉丹後守殿被仰候ハ、古主五郎左衛門ニ慮外之者ニ候間、永牢舍いたさせ、牢くだしにいたし、出牢不申付候由御斷ニ付、五郎左衛門家來高橋藤左衛門召連來ル付牢舍、

〔叢石十種二輯八〕浪華五俠罪案

永牢　　　　　　　　　　　　　　　　さんぴ　勘右衛門 年二十四才

午六月二十日〔十〇寛元年〕牢死、同夜引捨被二仰付一候事、

一此者厂金文七ㇾ同道仕、折々あばれ候得ども一分之働ハ不仕候、三年以前長堀問屋橋ニ而梅印千右衛門ㇾ同道ニ而相手壹人ヲ脇差ニ而手を負せ申候、その外傾城町ニ而折々あばれ、揩ありき候大脇差ハ、道具屋與兵衛ゟ借用仕候、手前ニ而所持不仕候故、詮議之時分欠落致候得共立歸り候事、

〔類例秘錄九〕一寛政二戌年十二月松平河內守ゟ

寺院本寺觸頭へ掛合之上、脫衣永牢申付候もの三衣取計方、

書面香雖寺連壽義、永牢御申付候はゞ、三衣ハ領主へ取上候筋ㇾ存候、

一右永牢之もの、於牢內死去之節、

死骸取捨御申聞、法類又ハ內緣之ものゟ相願候共、死骸引渡爲葬候儀難成候、

〔類例秘錄九〕土井大炊頭 一寛政九巳年、本庄甲斐守ゟ

領分之寺院女犯

書面延算寺良邊義、遠島相當之ものニ候得共、御領分ニ島無之候はゞ、永牢御申付候方ニ存候、

且及密會候尼ハ、三十日押込御申付候上、身寄之ものへ御引渡候筋ㇾ存候、

〔政談秘書三〕一文化十二丑年六月十日、吟味方與力原善右衛門江左之通問合、卽下ケ札ニ而挨拶申來、

其身後家ニ而罪有之、永牢申付候處右後家懷妊之儀相聞候、若出產も有之候はゞ、右母子如何取計可然筋ニ御座候哉、

但し後家ハ永牢、ハ三月申付、又懐妊ハ六月ニ到相分候得者永牢申付候はゞ、少し義と被存候、尤相手之ものハ、相知不申候事、

右之趣兼而心得罷在度、御問合申上候、以上、

六月十三日　稻垣對馬守家來　高橋杢

下ヶ札

御書面永牢之女懐妊之例ハ、相辨不申候、吟味中之女、牢内ニ而致出産候儀ハ相覺罷在候、相牢ニ女囚人無之節ハ、女非人附人ニ入置、女囚人壹人ハ不差置候事ニ而、出産之手當にハ、附添之非人女を世話致し、出生之子ハ乳放候迄ハ母子共牢内ニ差置、母病死ニ候得バ、非人ニ爲取遣候事ニ相心得罷在候得共、得と取調不申候而ハ急度御挨拶ハ致兼候、心得方御尋ニ付、下ゲ札ニ而得其意候、

〔無人島一件申渡〕御留守居松平内匠頭與力青山儀兵衛地借　町醫　長英

其方儀、年來蘭學を好、博く蘭書之理義を解譯致候に隨ひ、蠻國の政敎行居候樣に信用いたし罷在候處、イギリス人モリソンと申者、日本漂流之者を自國之船江乘、江戸近海江送來候旨風聞承、右モリソンは、唐土に留學致、學才有之候者に付、官祿重く被用候由兼て及承居候處、右體表に信義を唱、其身漂民を送來候は、漢語にも通じ候故ヲ以、阿蘭陀人之取次を省、直に彼國之事情を訴、交易之儀を歎願致候儀に可有之處、右之趣意御糺も無之、兼て御觸之通打拂被仰付候ては、御仁惠之御趣意に不相當、其上外國之恨を結び、不容易儀と存迷ひ、夢物語と題號致候書を著述致候段、全く御役筋之御聽にも達申度心底にて、致成候儀之旨は申立候得ども既世間江流布致、人心をも動し候仕儀に相成、三宅土佐守家來渡邊登呼出しに相成候趣及承候、其方儀も呼出可相成

も難計存候迄、病家先立廻り罷在候處、行衛穿鑿有之旨及承、安房守御役所江自訴致候得共、不憚
公儀致方、右始末不届に付、永牢申付候、○中略
右之通申渡候間、其旨可心得、
亥十二月十八日
右天保十年亥十二月十八日落着、大草安房守掛り、
但し同人病氣に付、筒井紀伊守御役所にて申渡、

〔南撰要集〕牢内揚屋内法度書

一牢内之法度相守、名主之申付相背申間敷事、
一牢舍之もの座席、上座下座と不相隔、込合不申候之樣、一樣ニ差置可申事、
一牢内御詮議ニ付、引分差置候ものハ勿論、平生之囚人をも近敷雜談爲致間敷候事、
一牢内ニ而役人共、相囚人共へ吟味ケ間敷義申掛、内分ニ而究明等爲致間敷事、
一あらひ錢、又ハ座錢抔と申掛錢爲出申間敷候、尤宿々ゟ屆候錢、其當人へ急度可相渡候事、
一囚人相煩候はゝ、不依何時當番へ可訴候、勿論重病人有之候はゝ、容體得と此方へ可申達候、煎藥幷丸散丹膏藥等迄願候當人へ、銘々急度可相渡候事、
一博奕停止之事
一入牢之者、幷歸牢之もの、呼出歸之節、此方ニ而改入候へ共、萬一刃物筆墨金銀等、其外牢内法度之物隱持來候はゝ、早速取上、此方へ可訴事、
一相囚人着類貸借、決而致間敷候、尤御仕置ニ出候もの衣類貰候迄、着し申間敷候事、
但出牢致候もの之衣類、上帶下帶とも二、一切留申間敷候事、
一湯日幷土用中凉、又ハ牢内出入之節、外糀出牢之鐵物、釘之類、或ハ木切瓦等ニ至迄、牢内へ持運

入申間敷候事、

右之條々相背候はゞ、其御掛へ申上、當人ハ不ㇾ及ㇾ申、名主役人迄も御咎被ㇾ仰付ㇾ候樣可ㇾ致候間、急度可ㇾ相愼ㇾ事、

元文三年午五月

三奉行江

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和四亥年十一月

御家人押込ニ相成候咎之者、數日揚屋江入置候ニ付、咎可ㇾ申付ㇾ候得共、令ㇾ宥免、咎之沙汰ニ不ㇾ及旨申渡候も有ㇾ之、無ㇾ其差別ㇾ咎申付候も有ㇾ之、區々ニ候、向後御家人之分ハ、數日揚屋江入候共、無ㇾ其差別ㇾ咎申付候方可ㇾ被ㇾ心得ㇾ候、尤以來不ㇾ紛樣ニ可ㇾ被ㇾ致候、

十一月

〔類例秘錄十〕一同年享和二年〇一八〇二七月十二日、安藤對馬守ゟ、（右同人〇[illegible]）

寺社吟味之節、申候紛敷候へば、入牢申付不ㇾ苦候哉、

書面御領分內之寺社御朱印地ニ候共、格別之寺格無ㇾ之分は、吟味筋有ㇾ之難ㇾ手放ㇾ者は、脫衣繩を掛、揚屋入御申付不ㇾ苦候、見極候惡事も無ㇾ之申條紛敷而已之義候はゞ、先預に被ㇾ申附、吟味之上我意不法申募候はゞ、其節揚屋入御申付候方と存候、且寺格之品ニ而、稀ニは揚座敷江遣し候も有ㇾ之候方、寺號委細と被ㇾ申聞ㇾ候上、取極可ㇾ及ㇾ御挨拶ㇾ候、

〔公事方手留〕曾我豐後守殿　榊原主計頭

心覺　曾我豐後守

武家之家來揚屋入之もの牢死之節ハ、雜人同樣御仕置當リ、輕重ニ寄、死骸取片付、取捨ニも申付、候儀ニ候哉、又ハ揚屋入之もの御仕置當リ輕重ニ不ㇾ拘、死骸取片付申付候哉之事、

下ヶ札

御書面武家之家來揚屋入之もの牢死之節、雜人同様御仕置當リ輕重ニ寄、死骸片付、又ハ取捨申付候仕來ニ有レ之候、

朱書

天保六未年六月、曾我豊後守ゟ榊原主計頭江問合候處、右之下ヶ札之通挨拶有之事、

但御家人ニ而も同様之事

〔牢獄秘録〕揚リ屋江入候者之事

一揚リ屋ハ、御目見以下、御家人、又大名、御旗本、陪臣、坊主、山伏等を入る事也、

一揚リ屋江入候者有レ之時ハ、先牢屋敷牢庭迄乘物にてかき入、火之番所前にて下る、時ニ鎰番牢屋同心揚リ屋入送リ來りし者ゟ、囚人之書付請取、番所前ニ而、囚人ニ向ひ、誰殿御懸りにて、年何十何才なる哉と聞、則右書付に引合せ、慥ニ請取候趣を申、送り之人を返し、當人ハ直に外さや江入れ、町同心壹人、鎰番壹人、平當番貳三人、下番貳三人付添入り、外さや外ゟ〆切、時ニ鎰番此時鎰番先囚人に向ひ、御牢内法度之品有レ之、先金銀、刃もの、書物、火道具類不二相成一と言渡、其後差圖して縄をとく也、の差圖にて、張番縄を解、冬ニ而衣類貳三枚有レ之節ハ、先下着一枚相改、是をきせ、跡一々相改、夏ニ候得バ、じゆばんもひとへ物も無レ之故、先下帯を相改、是を〆させ置、跡を改、髪をほぐし、後前江をり改メ見る、改相濟而、鎰番揚屋江聲を掛ケ、揚屋と言、内ゟ名主へイト答ふ、時に鎰番牢入リ有ル、何之何之守殿御懸リニ而、元菅沼新八郎家來泰五郎、何之何十何才と言、時ニ中ゟ御有難うといふ、時に揚リ屋入口を鎰番差圖にて、平當番ニ明ケさせる也、扨入牢相濟而、皆々外さやを出ル、

但揚り屋入候者、金子等衣類にぬひ入有之時、改候張番見付候而も、手にさはり候而も、少しも構ハぬ也、衣類ふるひ候時落候得バ、町同心牢屋同心も見張リ候事故、金銀取上に成也、尤此取上になる金銀ハ、不淨金ニ相成、御取上切リにて、見改候町同心、牢屋同心の德ニもならず、又改候張番之德ニもならぬ故、たとひ衣類にぬひ入れて有レ之と知れ候ても、改候時少し

東之揚り屋入口

ひらき戸

此處へ錠をおろす

此柱各漸三寸四角

此明き一寸五六分

西ノ揚り屋入口ハひらき戸東へひらく

ゑんがわ幅貳尺五寸計り

土間

もかまわぬ事也、張番知らぬ顔にて入遣ス、尤金子餘程有之樣子の時ハ、張番之者、翌日ニ成て、牢内名主ニ向ひ、内々にて、昨日入リ候者之ツルを一抱（一抱とは金子壹分之事也）くれ候へと云也、時に名主も心得て、夫々に遣し候事也、名主、此時張番ニ是をくれざる時ハ、此次牢入之時衣類之金子皆々ふるひ出すゆへに、牢内名主と張番とハ皆水魚の交りと云也、是ハ揚リ屋、女牢、大牢貳間牢共、皆牢内之名主と張番之者とハ皆々如斯と云、

一食事ハ、朝夕（朝五時分、夕七時、）貳度、但しゆとりめしにて、モッソなり、汁ハ手桶に入遣ス、尤揚リ屋之内に、人數だけ膳椀入て有之、こふのものハ、ぬかづけの大根なり、香湯水もかぎり有りて入遣ス、

揚リ座敷江入候節之事〇中略

一揚リ屋江入候者、死罪之節ハ、早朝鎰番、又ハ平當番外ざやの外ゟ、揚り屋と呼、内ゟヘイト答、（此返答總而牢内名主の役なり、）名早呼出シが有候、元何役何之誰と言時にヘイト言、暫くして此者を呼出ス、時に外ざや内にて、張番矢張揚り屋縄（揚り屋縄、切リ縄のわけ末ニ詳也、）をかけ、牢庭に引出し、乘物にのせ、六ッ半時頃ニハ牢屋敷を出す、（此乘物かく者は牢屋出入之日雇頭ゟ、日雇にて人を入ル事也、）町奉行へ連れ行、奉行所ニ而死罪之申渡濟て、又牢屋敷江歸す、歸り道にてハ、甚だ急ぎ歸リ、牢庭へ乘物おろす時に、張番此縄をとりて、外ざやの内江入レて、揚リ屋縄を解て、切リ縄をかける、（尤揚リ屋縄の上ゟまづ切縄をかけ、揚リ屋縄をとく也、）尤此時ハ、外ざやの内ニ、町同心幷鎰番、平當番等立合見張居ル、扨切縄にて平人同樣に縛候、時に牢庭に出す處、石出帯刀廻り同心、（町同心、）下役、（町同心也、）鎰番等立會にて、囚人を乞食ニ渡ス、是ゟ張番のかかりにてはなし、〇中略

一早朝呼出し、奉行所にて死罪言渡すハ、御目見以下ニても、餘程身分の重きもの計り也、身分輕キ揚リ屋もの丶死罪ハ、矢張平人同樣に、鎰番外さやゟ、御仕置ものが有、元菅沼新八郎家來誰五郎、當何之何才と言、時にヘイト言而出る事也、是外ざやの内にて、切縄をかけ引出し、火之番

所前へ引居る、時に火之番所に與力來り、月番御老中之名、何之何之守殿御差圖を承れ、何々之科に依て、死罪申付ルと言時に牢同心打役側ゟ立テト言、時に繩を張番引立、乞食、に相渡ス也、

〔兼胤公記〕寶暦五年十一月十三日、兩人詣關白殿〈道香○藤原〉申入云、八十宮一件ニ付、菅谷式部卿懸合之儀有之、昨日町奉行所へ呼出、直ニ役所ニ留置、牢屋へ可入候、併位階有之候者ニ候間、揚やへ入候而、不苦哉之由、町奉行共より申越候、理非善惡も未分、吟味中之事ニ候得共、法印辭退ニ不及候哉と存候、知門坊官岩波少進節も位階不辭、吟味中揚屋へ入置、僉議相詰候上、致辭退候間、吟味中不苦候、但若吟味事重嚴相成候ハヽ、可申越、段可申達哉之由申入、可爲其通被命、

〔諸例類纂五〕一明石侯御家來渡邊清三郎、町人を殺害候一件ニ付、町奉行より御呼出申來候節手當、并追而病氣ニ付御預、其後死去且亦御拔許之荒增、揚屋入用意、

一黑絹袷〈黑色之方宜由〉麻上下、且揚屋內ニ蒲團差當無之ニ付、小袖着込、

一小粒ニ而三步、黑き糸紙ニ而包、髮まげ之中江結込、月代ハ下地之儘、今日改而剃候而ハ惡敷ニ付、髮計結、

一下帶白絹ニ而、あたらしく改、

一懷中何も不入、半紙三帖計、手拭新らしく一筋、當人印形ハ、召連人持參

右ハ頭徒目付、足輕小頭八人、此外留守居并下役、

牢屋見舞

一蒲團其外着替等之義申來候品、直ニ差添遣ス、

飯〈柴飯、赤の飯、白飯は不相成、茶飯何ニても冨家飯遣候事、〉煮染、梅ぼし、干魚、

右樣之類

御預

一病氣ニ付御預被仰付候付、請取人警固以前之通、
一病中御呼出之節、御白洲内步行無覺束候はゝ、如何可仕哉之段、伺書差出候處、容體書步行之有無肝要認候樣、掛り申聞候事、
一容體書、五日めく差出候事、
一容體爲見分、檢使罷越候由之事、翌日急り候書ニ而病死いたし候

病死

一病死御屆、町奉行且御用番御老中方へ差出候事、
一病死爲見分、檢使與力壹人、同心貳人宛、兩町奉行より參候事、
御預幷醫師口上書差出、膳部差出之外、出入同心等相招、
一死骸取片付之義、伺濟ニ而取扱候事、

御裁許

一當人義重追放可被仰付處、令病死候ニ付、其旨被仰渡候事、

御差扣伺

一右ニ付御差扣伺如何可相心得哉之段、內意御用番御勝手江差出、翌日不及段御書取相渡候事、

欠所

一家財欠所ニ付、品々差出候事、
書面を以、尤品之義ハ內問合之上、
〔御仕置例類集二ノ三〕文化八未年御渡

長崎奉行伺

一異國唐國江漂流之もの歸朝之節、取計方之儀ニ付評議、

書面伺之通、曲淵甲斐守、土屋紀伊守江被仰渡候旨被仰聞承知仕候、

未二月二十三日　評定所一座

箋附

異國唐國江漂流仕候、日本人共、唐・紅毛船より連渡候得バ、吟味中揚屋江入置、彼ものども、生所其外之義委細ニ、其支配私領ハ、領主地頭江懸合相糺、吟味詰之趣相伺、御下知之上、長崎表ニ家來詰合無之面々ハ、家來呼寄、夫々引渡仕來候、然ル處、吟味中揚屋江入置、異國唐國彼他之様子、且國許出船沖中之次第、委敷吟味詰候間、彼是手間取、向々懸合候ニも、近國ハ格別、奥筋抔ハ、遠國之儀、領分手廣之場所、小前之糺方手間取、挨拶有之候後、取調相伺、御下知之上、引渡候迄ハ、數月相懸、漂流人共、長々揚屋ニ差置、番人附置、異國唐國之咄等不致候様申付、尤御仕置付候もの共とも違ひ候ニ付、其心得ニ而差置候得共、國所江引渡ニ相成候儀不相辨、大勢之内ニハ、揚屋ニ永く罷在、如何成行候哉と差迫り候様子ニ相聞、不揃之體ニ相成、變死又ハ病死仕候者も有之候間、勘辨仕候處、難風ニ逢、漸々地方江流れ寄候得共、異國唐國之内ニ而種々難儀仕、大勢之内、病死仕候ものも不少、相殘候もの共年月を經、日本江歸國仕候而も永々揚屋ニ差置、死失等出來仕、無罪之もの共、不便之義ニ御座候間、以後ハ吟味之上、宗門其外漂流之次第、疑敷様子も相聞不申、生所其外申立候通り無相違旨、向々ゟ挨拶有之候はゞ、諸事前々奉伺候御下知之趣を以取計、其節ニ相伺不申、支配領主地頭江引渡遣、口書幷異國唐國之様子書相添、其段申上候得バ、揚屋ニ永々差置不申、死失も稀ニ可有御座奉存候、勿論子細有之ものどもニ御座候得バ、是迄之通相伺候様可仕候、

下ケ札

本文漂流人、唐國江之漂流ニ而、右領主家來長崎表ニ詰合候向ハ、吟味中右家來江預ケ置、異國江漂流之者ハ、唐國ゟ送り來候共、詰合領主家來江預ケ不申、始終揚屋ニ差置候仕來ニ御座

候、○中略
此儀異國唐國江漂流いたし候日本人共、唐紅毛ゟ連渡候節取計方、是迄ハ永々揚屋ニ差置候故、死失之もの等出來いたし候ニ付、以後子細有之候分ハ格別、一通リ異國唐國江漂流いたし候迄之ものハ、長崎奉行ニ而吟味之上、子細無之ニ相決候ものニ候はゝ、前々御下知濟之趣を以、不及伺取計、御取締等寛み候筋無之ニおいてハ、引渡相濟候上、御屆申上候而も不相當之筋ニも相聞不申、其餘伺之趣も、先格等有之候義ニ付取計可申旨、被仰渡可然哉ニ奉存候、

未二月

〔御仕置裁許帳 一〕主人之妻を殺者之類

延寶五年巳十月十七日

壹人女きん　是ハ甲府殿扶持人、加左衞門女房、小普請奉行須田次太郎組、柴藤孫助召仕下女、此者忰七兵衞と申者、主人を當月十三日切殺致欠落候付、母成ル故揚リ屋ニ入、

〔翁草 百五十〕源氏坊天一等が事

有德院殿御代、享保の中頃、源氏坊天一と云者有、自ら故有る貴族と稱す、秋葉院南岳と云修驗者之に荷擔して、天一を恭く崇敬し、主君と仰ぎ、可然館をしつらひ、天一を是に居らしめ、頓て新家御取立と披露して、諸浪人を召集め、世上にも專ら取沙汰して是を信用するに仍、牢人共手寄を以申込、追々に抱へらる事超過して、竟に公聽に達し、天一南岳被召捕、揚屋入、段々御穿鑿有之由、其節の殿中御沙汰書之寫左之通、

一源氏坊天一 改號ニ吉種一　家老 南岳事 赤川大膳　用人 南部權大夫 本多權右衞門　番頭旗奉行 奏者番兼 石

黒齋大夫 番大夫事、本多主膳正近習勤、其後津輕采女方ニ勤候由、　同斷　福嶋右衞門 ○中略、

此外目見不致者三十三人有之由、天一儀揚リ屋へ被遣、只今御詮義專ら有之由、

揚座敷入

右御詮議之上、天一南岳等刑に行れしとやらん聞し而已にて、委事ハ不ㇾ知、但一向に所以なき事ならば、人信用すべからず、少しは據有し事の樣に傳へ承ぬ、

〔歎歲餘錄八〕寬政四年六月五日、松平越中守殿、北八町堀表門前の川へ、ある日釣を垂る僧あり、辻番の者相尋候へば、越中守殿江直に申上度事有ㇾ之よしニ付召とられ、即刻上リ屋へ入牢仰付られぬと聞ゆ、

〔類例秘錄九〕一享和二戌年十月、西鄕齋宮ゟ、(阿部播磨守)
領主へは百姓人別ニ而、三寶院御門跡配下修驗ニ相成候もの、仕置之義ニ付、三寶院役人ゟ品々掛合申越候趣、

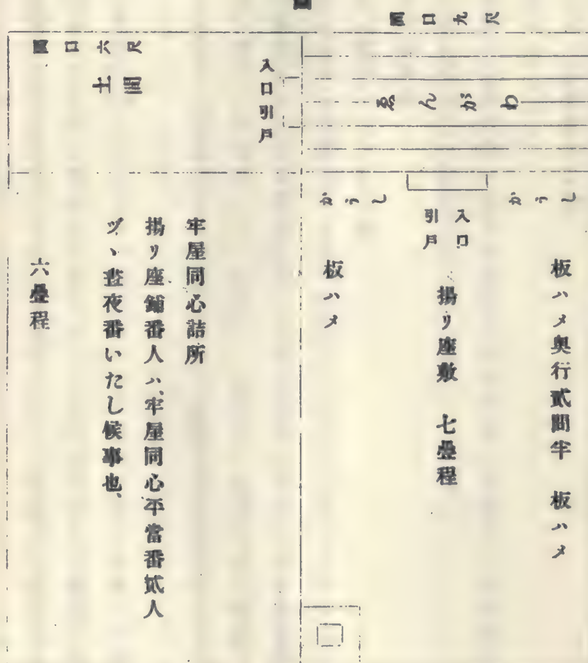
御書面幷別紙往復之書狀等、令ニ一覽一候、都而修驗等及ニ吟味一難ニ手放一ものハ、揚屋入申付、袈裟衣を爲ニ脫取一上置、追放等申付候節、渡遣し候義ニ而、手鎖ハ不ニ申付一事ニ候、左門義、多年年貢不納いたし、其外不埒之次第吟味詰、無ニ申披一由之口書致ニ印形一候はゞ、所拂御申付、拂遣し候節、袈裟衣渡遣候方と存候、且三寶院門跡役人へハ、左門義從來宗門人別帳ニ百姓と認印いたし乍ニ罷在一修驗之由自己ニ申立ハ難ニ取用一、地頭對シ不屆も有ㇾ之候ニ付、吟味中手鎖申付、袈裟衣を爲ㇾ脫候義ニ而、脫衣申付候筋ニ無ㇾ之、尤最初ゟ修驗ニ相分リ居候もの江手鎖等申付候心得ニハ無ㇾ之、知行內ニ罷在候修驗不屆有ㇾ之、仕置申付候後、其段觸頭へ申達候心得之旨、申遣候義不ㇾ苦筋と存候、

〔牢獄秘錄〕揚リ座敷江入候節之事

一揚リ座敷江入られ候ものハ、乘物にて揚リ座敷前迄來リ、爰にて下リ立處に、牢屋同心鎰番爰にて誰殿御懸りにて、年何才なる哉ときく、時に此者を送り來し者、誰殿御懸りにて、何之誰、年何十何才と認候書付を、鎰番江渡ス、鎰番此書付と、此もの之口上を聞合せて、送り之者へハ、鎰番何之誰慥ニ請取と云、扨又當人ハ揚リ座敷板之間へ上げ、下男(牢內にて張番と云)親方(下男之頭分)此處に

居て、衣類を改、先下帯ゆばんか、ゆかたか下ニ着たる品をよく改、是を着せ、衣類一々相改、此時町同心下役（下役とは、町同心之内先ッしんざん也といふ也、）貳人、鎰番貳人、平當番貳三人、外張番一兩人にて立會ふ也、改相濟而、揚り座敷江入れ、扨大牢之内輕キ科人兩人を付人とて此揚り座敷へ入る也、（此科人、此處迄手鎖にて、張番腰繩を押へ連テ、揚り座敷之前ニ而手鎖とり入候也、）此付人、食事等之節、給仕致し候事也、惣而揚り座敷之人之

揚り座鋪之圖



世話ハ、此付人致シ候事也、此付人十五日ニ一度、二十日ニ一度ぐらゐかはりあふ事也、扨又夜ニ入て、牢屋敷同心平ニ當番之者、蒲團一枚持參り、明日ハ屆物にて蒲團可參間、先今晩ハ是をかけて寢られよと言て貸遣候事也、尤翌日宿本ゟ蒲團紙手ぬぐひ等送り屆候事也、但此蒲團薬部屋懸り之下男いふ張番と相改メ、そこ爰をほどき、中を改メ、揚り座敷ニ入遣ス也、曾谷伯庵入牢之節如斯、

一揚り座敷へ入候人ハ、御旗本御目見以上之面々也、朝夕之食事本膳にして、坪平付也、此給仕大牢之科人致ス事なり、但食事一日ニ兩度ヅヽ也、朝五ツ時頃、夕七ツ時也、

一揚り座敷之者、牢死ニ而死骸宿元ヘ歸し候者ニ候得バ、則夜ニ入、牢屋裏門ゟ乘物持參り、揚り座敷之前迄入置、右之死骸ハ、付人揚り座敷之出口迄出し、是ゟ張番請取、其者請取ニ來リ候乘物かきニ渡し、乘物に入させる也、

〔諸例類纂五〕牢屋秘事錄

一牢屋作リ之儀ハ、西東三ヶ所有之候、

但揚り座敷ハ、六疊敷宛ニ而、四間有之候、尤揚座敷ハ、備後表ニ而、疊縁付、揚屋より惣牢琉球表無縁なり、

一右三ヶ所之内ニ、揚座敷有之候、

一揚り座しきハ、湯殿雪隱別段ニ付有之候、

是ハ御目見以上之入牢、日光膳椀、給仕盆等有之、給仕人ハ咎人之内より見出シ、番三人附置申候、

一揚屋ハ御目見以下陪臣、其外出家、山伏、醫師等入牢いたし候、○中略

一女ハ侍町人ニよらず、揚屋女牢別段ニ仕切有之候、揚座敷ハ一汁一菜、女ニ而も御目見以上ハ

諸牢

揚座敷出家、山伏、官々ニより、揚座敷も有之候、其外白狀之上ハ、一統罪人ニ罷成、御仕置濟候と

牢內差別無之候、○中略

一五百石以上ハ、大方御預、以下ハ揚座敷之ふり合、○中略

一女牢揚リ屋共無差別、揚リ屋ものと名付候計也、揚屋牢共ニ名主組頭隱居、其外役名あれ共、女

牢ニ而ハ來○本恐誤字役無之筈之處、男ノハ別ニ役名被仰付、役名を稱し、新入之者へは從上被仰付候との申

觸スよし、

〔御仕置裁許帳 一〕亂心之者

元祿三年午四月十日

壹人善的　是ハ池田帶刀組、內藤八左衛門知行所、武州駒引澤村ニ而捕來候者、穿鑿之內上リ座

敷ニ入、

右之者、同八年亥四月二十二日、牢死、死骸捨之、

○按ズルニ、本書上リ座敷トアレドモ恐ラクハ揚屋ノ誤ナラン、

〔類例秘錄 九〕寬政六寅年九月、菅沼下野守、三浦伊勢守（青山下野守）ゟ、僧正院家紫衣、其外重キ寺院吟味之節、差

出方之儀、

御書面僧正院家紫衣、其外重キ寺院神主ニ而も、吟味之節ハ、上椽へ差出、僧正院家、又ハ一宗之

本山幷神主等ニ而も、格別重キ身分之ものハ、揚座敷へ差遣、吟味中も上椽へ差置、其外之者ハ

揚屋入申付候得バ、下椽へ差出候、

〔國師日記〕一慶長十七年十月十八日、伊賀守殿十月十五日之狀來、內膳殿ゟ御屆、

一一筆令啓達候、一南都東大寺三倉へ盜人入申候儀、勅使申請、何樣之物紛失仕候通可相改旨、當

夏我等罷上候時分被仰出候間、則罷上申候、勅使之儀傳奏衆へ申入候處ニ、同時成共可被仰付

由ニ御座候事、一只今東大寺之五師無量壽院、我等所へ被參、三倉盗賊之儀、如御掟御改之様ニと申候、若此度緩々と御沙汰ニ御座候得ハ、以來共ニ迷惑之由被申候條、被成其御心得、御次而ニ可被仰上候事、

一勅使賄等之儀ハ、如此以前可申付也、叉右之三倉御改ニ、御奉行壹人可被下由、東大寺衆ニ申候事、

右之段以御心得被得上意重而御報奉待候、恐惶謹言、

十月十五日　板倉伊賀守

金地院
侍衆閣下

尙々三倉急度御改候ハ、失物之儀自然顯可申儀可有之かと、東大寺衆被申候、乍去然ル儀ハ不存由被申候、可被成其御心得候、以上、

一十二月二十日、三倉盗人之儀得上意候、猿澤之池之ハタニ、ツメロウヲコシラへ入置、往來貴賤之者ニさらし、爲奈良町人可致番御掟也、○中略

一同二十一日、三倉盗人之儀ニ付、加賀殿上野殿と連判之狀上ス也、

一書令啓達候、南都東大寺三倉盗人成敗之儀、彼寺先規之通可申付旨、最前被仰出候處、ケ様之惡人先例無之旨、何様にも公儀次第ニ被仰付候様ニと、寺僧衆連判之趣重而得上意候、然ハ爲見懲、猿澤之池邊ニ詰籠ニ入置、五十日も百日も往還之者ニ晒、奈良町人ニ番可申付旨御掟ニ候、可有其御心得候、恐惶謹言、

極月二十日　金地院　崇傳判
本多上野介　正純判

板倉伊賀守殿
人々御中

〔御定書百箇條〕輕惡事有ㇾ之もの出牢之上不ㇾ及ㇾ咎事

一手鎖過料戸〆等可ㇾ申ㇾ付輕き惡事有ㇾ之もの、吟味之内六十日以上入牢申付置候者之分ハ、出牢之節右咎可ㇾ申ㇾ付候得共、數日致ㇾ入牢ㇾに付令ㇾ宥ㇾ免候旨申渡、別に咎に不ㇾ及、同列之内不ㇾ致ㇾ入牢ㇾ科人ハ、相當之咎可ㇾ申ㇾ付事、（延享元年極）

但所拂、役儀取上候類ハ、何ヶ月入牢候共、宥免之沙汰有ㇾ之間敷事、

〔公事手留〕（主水正（石川）懸）大野村無宿坊主勸藏一件落着書物（○中略）

出牢證文

未何月幾日入牢　　大野村無宿坊主　勸藏　未二十八才

右之もの儀、下總國上矢切村外壹ヶ村地內野田ニおゐて、名住所不ㇾ存もの共手合ニ加り、廻り筒錢博奕度々いたし候始末不屆ニ付、中追放申付、追而佐州江水替人足ニ差遣候段申渡、溜預申付、令ㇾ出牢ㇾもの也、

〔遠島者一件〕　牧志摩守様　　遠山左衛門尉

遠島もの來月二日出船ニ付、貴様相懸之分三人出牢證文、來月朔日晩方、牢屋敷江可ㇾ被ㇾ遣候、（○中略）

九月二十一日（○嘉永二年）

〔御仕置裁許帳十一〕牢屋御修覆幷御普請出來、囚人入替りニ付、赦免之者、

延寶五年巳閏十二月十七日

壹人八郎兵衛（○中略）

右之者申四月牢屋御修覆移替りニ付、出牢、日本橋より五里四方追放、

〔御仕置裁許帳十一〕牢屋御修覆幷御普請出來囚人入替りニ付、赦免之者、

延寶七年未七月十九日

壹人甚兵衞　是は本村木町壹丁目九兵衞店、七左衞門出居衆、此者儀、盗人之出入ニ付、穿鑿之儀有之候處、當六月十一日、致欠落候に付、此者妻子先月二十三日、籠舎申付、此者を宿家主ニ尋出シ候樣ニと、日切手形申付候處、新吉原ニ而昨日見出シ、捕江候由ニ而召連來ニ付、穿鑿之內籠舍、

右之者新籠江四人入候ニ付、任先例申二月四日赦免、

〔舊記拾要集三〕元祿十二年卯七月廿五日御用覺帳之內書拔

一牢屋敷新規御普請出來ニ付、赦被行候覺、

卯二月六日入牢

一增上寺中門前貳町目九右衞門店彌五兵衞悴　無宿　權七

同日入牢

一鮫ケ橋千日谷半兵衞悴　無宿　左兵衞

右二人ハ此方御番所赦被仰渡候、但鳥目五百文ツヽ被下之、貳人之四人ハ白洲へ罷出申候、

一被仰渡之趣、今度牢屋新規御普請ニ付、御普請之奉行願申上候間、御老中江相伺出牢被仰付、并住宅無御構之候、無宿ニ而は、御當地ニ被差置間敷由、

卯二月二日入牢

一車善七手下　權兵衞

同三月十九日入牢

一無宿　八兵衞

右貳人は松前伊豆守殿於御番所赦、但江戸追放被仰渡候、鳥目員數同前之由、

何も具ニは牢帳ニ有

一右島目は町年寄江被仰付、手代八郎兵衞此方御番所江持參、當番之年寄同心請取之、當番之仲ヶ間下村彌助立合、相渡候を見申候事、

右之通御座候

蜂屋助大夫

年番詮議力與力江

〔記事條例二〕

諸掛囚人入牢之節、金子等持參、牢溜ニ而取上、御役所江差出候節、追而其當人出牢之節、渡遣も有之處、以來は縱令其者無構出牢いたし候共、右金子は御役所江取上候積可被取計事、

亥〇享和三年四月

〔御定書百箇條〕牢拔、手鎖外し、御構之地江立歸候もの御仕置之事、

寛保二年極
一牢拔出候者、本罪相當ゟ一等重く可申付、

但牢番人中追放

〔京都御役所向大概覺書二〕牢破り御仕置之儀ニ付御書付

一牢を破り逃出候科之儀、唯今迄は死罪之格ニ候得共、向後は牢を破り逃出候もの、前方過怠牢之者は、永牢に申付之、永牢之ものは、遠島にいたし、遠島之ものは、死罪ニ可被申付候、併死罪可申付族之儀は、左樣之節又可被相伺事、〇中略

一死罪に極候もの牢を破り追出候歟、宿預之もの致欠落候歟、又手鎖拔候ものは不及申、可爲死罪事、

以上

巳五月 但元祿十四巳年

〔翁草六十六〕牢拔ノ者之事

元文三四年頃、京師囚獄舍修復ノ事有、右普請中本牢ニ在處ノ囚人ヲ切支丹牢、請無シ牢、揚リ屋等ヘソレ〳〵ニ配分シテ當分入替ル、請無牢ヘ入候囚人ノ內ニ文七ト云盜賊有リ、彼者傍ノ囚人共ヘ密ニ申ケルハ、此牢ハ樣子有テ拔ラル、也、吾其術ヲ以先拔出ン、面々ガ科ノ輕重ヲ自ラ考テ命ニカヽル程ノ大科ノ者ハ我ニ從フベシ、運ニ任セテ仕課セナバ幸甚ナラン、若シ仕損ズルトモ所詮命ハ無キ物ナレバ、假令此上再犯ノ科ヲ重ヌル共、斬ラル、ヨリ上ノ事ハ無シ、而レバ徒ラニ刑ヲ待ンハ云甲斐無シ、又命ニ拘ラザル程ノ小科ノ輩ハ、愁ニ拔タテヲシテ仕損ジナバ、本科ヨリモ其科重キニ仍、斬レマジキ身ガ斬ルベシ、是大ナル無分別也、左樣ノ族ハ跡ニ止リテ相當ノ仕置ヲ待ガヨシ、但斯ク密事ヲ明スカラハ、此企ヲ注進スル歟、又聲ヲ立ナバ、立所ニ蹴殺スベシ、相構テ此企ノ妨ヲナス事勿レト云、殘ノ奴原聞之テ一々尤也、偖又汝ハ如何ナル術有テ此企ヲナスヤ、文七ガ云ク、吾ハ元銀山ノゲザイ也、故ニ土ヲ穿ツ事ヲ得タリ、此牢ヘ移リタル始ヨリ右ノ術心ニ浮ミタリ、其譯ハ此牢ニハ中ニ少シ土間アリ、是コソ天ノ與ヘト思ヒ付シ也、万ヅ我ニ任セヨト云、皆々文七ガ言ヲ信ズ、拐銘々ガ科ヲ自ラ測ルニ、半三郎、庄八、此外二人文七共ニ五人ハ難遁大科ナレバ、是等ハ示シ合テ彌出ルニ究ム、其餘ノ者共ハ輕科故跡ニ殘ルヽニ決シ、猶モ文七堅ク言ヲ番ヒテ夫ヨリヒソ〳〵ト支度シテ雨ノ夜ヲ待ツ、時シモ皐月下旬梅雨降シキリ、目ザスモ知ラヌ暗夜ニ、文七進ンデ件ノ土間ヲ堀カクル、古キ大釘ヲ引拔夫ヲ以テ堀シト云牢中ノ土間ナレバ、古來築固メテ磐石ヲ彫如シト雖、サスガ霖雨ニ少ハ地モウミ潤タルヲ便リニ、段々堀廣ゲテ、竟ニ吾身ノ摺出ル程ニヒラタキ穴ヲ堀課セヌレ共、牢屋構ノ內外ニハ番人共半時充ニ拍子木ヲ打廻リ、殊ニ短夜ノ最中ナレバ、兎角スル間ニハ拍子木ノ音喧ク中々拔出ン透間モ無リケレドモ、僅ノ間ヲ考テ、文七眞先ニ潛リ出テ、殘ル者共ヲ一人宛其穴ヘ首ヲ突込セ、首ダニ通レバ跡ハ自由也トテ文七外トニ在テ一人宛首筋ヲ捕ヘテ引ズリ出シ、五人出揃フト否、構ノ塀際

ニ在ル拷問場ノ柱ヘ飛着キ一壇ハ子テ塀ニ取付キ、易々ト塀ヲ乗越テ、散リ〴〵ニ行衛無ク迯失ヌ、尋ニ同類ノ内庄八、情思案シケルハ、斯迄仕課セヌレドモ、定テ草ヲ分テ捜サレナン、左スレバ、覚ニハ天ノ網遁レ難シ、迚モ不レ遁命ヲ一向今思究メテ速カニ注進セバ、其褒美ニ命ヲ助ル間布物ニ非ズ、所詮裏返ラバヤト獨ウナヅキテ、餘ノ者ト別レ、直ニ町奉行向井伊賀守役所ヘ馳来、御注進ノ者ニテ候ト呼ル、其刻限丑三ノ比ナレバ、門番寝耳ニ是ヲ聞付ケ、窓ヨリ様子ヲ窺フニ、其様在牢ノ者ト見エ、大量ナル怪敷體ノ者門前ニウヅクマリ居ル故、荒増ヲ尋テ急ニ當番ノ與力ヘ達ス、與力早速ニ先庄八ヲ捕ヘサセ、様子ヲ聞糺シテ、伊賀守ヘ告ル、仍夜陰ナガラ牢屋修復掛リノ與力木村勝右衛門ヲ呼寄、夫々ノ手當ヲ致サセ、其夜直グニ目付役ノ同心共ニ悲田院ノ者共略○注ヲ付ケテ八方ヘ遣シ、近國ヘ追々觸流シテ是ヲ捜索ム、而ルニ文七今一人ハ播磨歟、攝津歟ニテ捜出シ、同心目付是ヲ召捕テ皈ル、半三郎今一人ハ色々捜セ共覚ニ行衛知レズ、庄八ハ注進ノ功ニ仍助命セラレ、文七今一人ハ、重科故ニ一等刑重ク成、獄門ニ行ハレ、掛リノ役人木村勝右衛門事、牢内ノ土間ニ不心付、囚人ヲ入替候不念ニ仍、暫遠慮致、且ツ拷問場モ塀際ニ在シヲ、右之以後引直サレ候事、

此ニ記スル所ハ、庄八ガ白狀ノ趣ヲ以記之、

〔御仕置例類集三ノ十三〕寛政六寅年十一月　御勘定奉行

松平伊豆守殿御差圖　根岸肥前守掛

一備中國倉敷村ニ而盗致し候、無宿與吉外壹人幷相牢之もの共牢拔致し候一件、

野口辰之助御代官所　備中國小田郡宇角村百姓　庄兵衛

右之もの儀、矢掛宿ニ罷在候節、無宿共火を附可申と風聞有之故、穢多共儀、右無宿共兩人を川中

江追込、右之内無宿壹人相果候儀ニ付、領主ニ而吟味受居候内、穢多共儀、此もの差圖之趣申立候由承、欠落いたし、其段ハ押隱し、宇角村江歸住いたし候上松山町ニ而怪敷もの召捕候由承り知人ニも無之處罷越し、內濟懸合等致し遣、其外紛失物有之節、相賴候ニ任せ、盜賊を捕、被盜物取戾し遣し遣、且幸助儀、實體ニ相見候とて、出所も不糺世話いたし、仁七を賴、同人子分ニいたし、人別ニ加置、其上吟味中行步難叶候段申斷、牢拔ハ不致候得共、一旦相牢之もの申勸候ニ同意いたし、牢之格子を打破貰候始末、旁不屆ニ付江戶拂、

〔牢獄秘錄〕大宮無宿大次郎御仕置之事

一此頃大宮無宿大次郎といふ盜賊入牢したり、牢內に居て、態ト病氣と申立、食事五日六日も不食、是溜預けを願ふ所存也、此大次郎御呼出し之時、女牢前に待居たる時、女牢之內、白銀臺町多葉粉屋名ハ失念女房、渴屋にて衣類盜候者故、入牢いたし居たるに言葉を懸け、如何せしにや、深くも申かはせし由、依之大次郎儀、何卒溜江下らんと工夫せし由なり、食事等も不食ニ付、則牢內名主より此事を申立、品川の溜預ケになり、溜へ下り、品川ゟ御呼出しの時、乞食橫目に賄賂して高輪の茶屋江休ミ、ツメ江雪隱之事行度由にて、雪隱へはいりて、繩を繩も乞食橫目ニ賄賂せし故、やはらかく懸しとなり、○繩を下恐脫ニ切字、雪隱のそうじ口ゟ逃げ出し、夫ゟ白銀臺町たばこや女房が牢內にて、此女房出牢の事をいかゞして知りしと見えたり、此女も不敵もの故女牢の外さやにて、大次郎と喚合證たりしと見えたり、を尋ね、此女房を連て、甲州の方江出奔し、夜ハ步行、晝ハ泊り、或は堂社にてさまりし樣子也、甲州郡內領へ到り、何村と言しにや、此女のゆかりの處へ行、一夜を明し、最早是迄にげ延たれば、是ゟ晝も步行んとて、此家にてわらんじ買候處を聞に、向ふの垣根之內なりしと言、大次郎此家へわらんじとゝのへに行たる跡へ、江戶ゟ町同心の捕方來りて此女を見、めしとりて、大次郎の在家を尋るに、則向ふの家へわらんじとゝのへに行たりといふ故、此同心、小かげにて向ふを見れば、大次郎わらんじ調へ歸り來り、田甫道をぶら〳〵來かゝり、何心なくこの家へ入

んとする處を、同心聲かけめしとりたり、是々又々入牢致しける、〇中略扨大次郎と連れにげし女も又々入牢之たり、大次郎儀も餘程牢內に久敷居たる故、名主に成て居たるが、張番を頼み、のこ切を求めもらひ、牢內の柱を壹本切りたりしが、中々壹本位にては出られぬゆゑ、又翌晩に柱を、切らんと工みしが、其翌日御徒目付廻りし時、壹番役之もの牢內に牢破り之者有之由を申ス、依之御徒目付初メ驚キ、則大次郎を呼出し後ロ手錠所ホダにて、西之貳間牢へ牢替させたり、其後大次郎死罪に成、たばこや女房も、牢ぬけをかくまひし事を不屆成致方とありて、死罪に成たり、〇中略扨亦この時に大次郎のこぎりにて柱を切たる、そののこ切ハ、下男の平八と異名してからす平入といふ言もの、金子拾五兩取て、のこぎり一ッ入けるなり、此事露顯して、大次郎牢替之時、平八、牢屋敷を出奔すといへ共、御尋嚴しく、早速京橋の邊にて召捕られ、入牢して後死罪に成たり、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政元寅年御渡

町奉行岩瀨伊豫守伺

一無宿入墨鐵五郎外七人、於牢內及不法候一件、

無宿入墨
鐵五郎

右之もの儀、不屆有之入牢中、相牢之もの所持之衣類盜取隱置候處、相牢新助ニ被見顯、牢內ニ而いたし候役儀被召放候故、心外ニ相成、同人を打擲いたし憤を晴し、左候得ば右始末も吟味ニ成、御仕置之期を可延と、密々相牢之內七人申合置、當五月十七日曉八ッ時過新助熟睡いたし候樣子ニ付打擲は不致、可殺と右七人之內庄藏外三人一同新助江取懸押居、此もの手に而咽を〆候處、反ヲ返し聲立候ニ付、庄藏儀新助口江雜巾を押込、前齒貳枚打折及不法候段、不屆ニ付牢屋おゐて重敲、〇庄藏等處罰略

〔御仕置例類集一ノ三十六〕文政五午年御渡

町奉行榊原主計頭伺

囚人護送

一松田町吉五郎店亀吉、其外之もの共於牢内不屆致取計候一件、（穢多頭彈左衞門支配武州都筑郡早野村非人小屋頭牛助下小屋非人／長吏組建代長兵衞手下同郡鴨志田村非人同州多摩郡木曾村番非人宇吉抱非人）新助

右之もの儀、致附火候依、科引廻之上火罪御仕置可相成處、牢屋敷類燒之節放遣立歸候ニ付、永牢相成候身分ニ而、紙ニ而拵候鑿致所持、又は自分にてめくり札を拵、其外牢内落間疊之下ゟ、駒札并箸又は刃を附候鋸錐等見出候はゞ、早速可差出處無其儀、相牢重吉安五郎は遠島に相成、出帆も近寄候ニ付、致博奕可相別旨、同人申出候に致同意、此もの所持之帯襦袢を重吉江預ケ置、金壹兩借受、安五郎拵候鑿、并此もの所持之鑿ヲ以盤楓を坪皿ニ致、重吉外七人手合ニ而、百文貳百文賭之廻筒、長半、鑿博奕致兩度、牢内之掟を背候段、場所柄をも不恐致方、旁不屆ニ付於牢庭ニ重敲申付、猶又永牢申付置候樣、長井五右衞門江相達引渡、○評議書略

〔地方落穗集十二〕大切の囚人江戸へ召連候事

一人を殺せし者、其外大切の囚人を道中召連れるには、老中の證文相渡る、然れ共本紙は代官へ差置か、又は時宜に寄箱に入包みて役人の襟に掛け、寫しを以て宿々を通行することなり、借武士なれば駕籠乘物に入、戸前に錠を卸し、青網を掛るなり、網は下より上へ廻し、上にて留べし、囚人は羽掻縛なり、但し身分の格に寄品々有べし、百姓町人は目籠に入る、目籠は高三尺に作り、琉球莚にて裹み、前にて合せ、前にごき穴とて、親椀一ッ入程の孔を明け、下の臺は丈夫にして板にて張り、大小便の拔る樣に落し穴を明け、内には柱を一本立て、其柱に囚人を繫ぐなり、囚人は手鎖を掛、足に繩を打、口には箝（細き竹にて口の廣さより少し長く作り、苧縄を通して／くはへさせ、後にて結ぶなり、是は舌をかまざる爲也、）を含ませ、食事をする時は、囚人に附添ふ役人立合て、諸事念を入べし、尤も老中の證文に、道中宿々にて囚人計に食を喰せ候樣にとの文言ありて、宿々の役に勤ることなり、但し箇樣の囚

人には粥を喰すべし、右證文の寫しは、宿々問屋へ見せ、人馬幷に囚人食事の差圖をし、泊り宿にては宿役人共を呼寄せ、囚人を預け置、證文を取り、番人を嚴重に付させ、役人共にも詰させ、宿々火の用心嚴しく申付、若し急火の節は立退場等の手段迄心掛、宿役人共に申付、囲締り等よく〳〵差圖すべし、

囚人召連候役人先觸幷に江戸着心得の事、

一囚人を召連し節は先觸を出し、道中里數の考を以て、幾日何時頃江戸着の趣を以て、別紙に認め、先觸に添へ屋敷へ遣すべし、左すれば屋敷より役人出迎ひ、囚人の着を見掛ると、直に掛り奉行へ罷越、誰支配所何國何郡何村何の囚人何の誰、追付是迄召連罷越候旨、玄關帳面の侍を以て、用人まで申入るゝなり、

一囚人を召連し時は、江戸へ八ッ時少し前に着する樣に心掛べし、左すれば彼是する内退出の刻限に成、都合宜きなり、其心得なく遲く着し、夜に入ば、自分の屋敷に入置、夜番を附明朝登城前に申上るにより、諸事不都合なり、依て若し夜に入るべくと思はゞ江戸入口の宿場にて止宿致し、其趣を早々自分屋敷迄申通じ、明日江戸着の刻限等申合すべし、偖翌朝に成、隨分早く出立し、登城前に屋敷へ罷越べし、早き分はよし、又江戸入口迄餘り早き着にならば見合せ居り、退出の刻限を計り出立すべし、

一奉行屋敷迄通行の道筋、見付御門あらば、同道の手代、先へ馳拔、代官誰支配何國何郡何村何の囚人、手鎖にて目籠へ入、何奉行所へ何の誰召連罷通り候間、御門御通しなさるべく旨相斷り通行するなり、又奉行屋敷より牢屋へ通行の節は、掛りより御門番へ斷ありて通るなり、

一奉行屋敷へ囚人を召連し節は、先門内へは入ず、長屋へ引添へ籠を下置、先達て罷越せし手代、其外召連し者に守らせ置、玄關へ上り御召囚人只今參着仕候段、用人迄申達し、手前手鎖にて

召連候間、手鎖を外し腰繩にて、御白洲へ差出し申べく哉の旨相伺ひ、其上にて用人差圖次第に取計ふなり、惜用人の差圖あらば、籠の儘門內へ舁入、籠より出し縲口含を取、差圖の通にして出すべし、召連し手代は旅裝束のまゝにて出、白洲に於て奉行より命せらるゝ儀もありて、囚人には吟味の內入牢仰付らる旨申渡され、人を差添へ牢屋へ遣すなり、尤も道中手代も同道致し、外の者は出迎の手代召連屋敷へ歸り、夫々旅宿へ遣さるゝなり、

一掛り奉行より石出帶刀へ書付遣はさる、此書付は囚人差添に來りし家來持參す、手代は渡し濟し上は、屋敷へ歸る、是は屋敷よりの差圖にて、路次の警固するのみ也、帶刀方よりは囚人受取の書付出る、是は奉行より書付持參の者、受取て歸るなり、

一右體の囚人に限らず、手前手鎖を掛、奉行へ召連し節は、白洲の口にて外し、腰繩にて出すなり、左すれば奉行方にて別段手鎖を掛、牢屋へ送る也、代官方にては手鎖手封をするのみ、繩を用ゆることは伺の上ならではならぬことなり、又手前手鎖を外し奉行へ出すは、奉行の前を憚る謂なるべし、但し主殺し、親殺し不孝者等の重き科人は、手鎖の儘腰繩にて出すべし、是は至て大切の囚人なる故也、然れ共前方用人へ問合の上なすべし、

大切の囚人手鎖掛ヶ樣の事

一大切の囚人へ手鎖をかくるにハ、着服の外に而掛べし、常の手鎖人のごとく懷中に而掛る時は、手鎖に而胸を打自害する事あり、至て大切の科人は拜ミ手鎖にすべし、胸を打事ならず、いづれも用心の爲なり、

〔御當家令條三十四〕囚人傳馬宿次證文

囚人壹人、下總國今宮村より宿次馬にのせ、囚人計に食をくはせ、不ㇾ欠落樣に仕、泊りニ而は其所の者番をいたし、到江戶岡野平兵衛所江、急度可ㇾ送屆者也、

亥（○年號未詳）七月二日　豐後
加賀
右宿中

〔江戸政要〕科人送狀之覺

一此囚人何人、江戸ゟ何方江指越、何罪ニ申付候、道中馬にのせ、囚人計ニ喰をくはせ、不欠落候樣、其所之者番をいたし、急度可送屆者也、

年號月日　治左衛門　判
源左衛門　同
藏人　同
將監　同
備前　同
伊豆　同
右宿中

〔御觸幷御書付留　五〕東海道宿々本陣に而は、古來ゟ囚人宿不相勤候處、近年囚人宿に本陣可明置旨之先觸到來いたし、囚人宿之砌り申斷候而も、聞濟無之に付、無是非本陣に而宿いたし候儀有之候得共、日光御門主、勅使、御三家方御止宿有之候間、囚人宿いたし候得ば、跡に而清メ掃除等いたし、格別迷惑に付、以來手廣旅籠屋に而、囚人宿相勤度旨、宿々申立、右之趣無餘儀筋に候間承屆候、尤以來本陣江囚人可差置旨之先觸到來いたし候而も、可相斷段、宿々江申渡候、此段爲心得申達候、
右之趣可被得其意候

天明八申年二月

〔牢屋鋪三〕（朱書）天保十四年卯閏九月十四日、貫助を以御渡、翌十五日ヒレ付致し同人を以返上、（ヒレ付）

目籠出來仕候儀申上候書付　三村吉兵衛

此度奈良表江被遣候四人乘せ候目籠壹挺、今日迄出來仕候ニ付、見分仕候處、仕樣注文之通、無相違出來仕候、依之申上候、以上、

卯 九月十四日　三村吉兵衛

〔牢屋鋪三〕（朱書）天保十五年辰七月六日、忠助を以御渡、即日ヒレ付致し返上、（ヒレ付）

四人乘せ候駕籠新規出來之儀奉伺候書付、　石出帶刀

牢屋敷ニ而四人乘せ候駕籠之儀、七年以前天保九戌年三月中、六挺共御修復被仰付候處、當六月晦日、牢屋敷内ゟ出火有之、右駕籠不殘燒失仕候ニ付、六挺共新規出來仕候樣仕度奉存候、依之直段積申付候處、左之通御座候、

一駕籠新規　六挺

但壹挺ニ付金貳兩壹分貳朱五匁宛

都合拾四兩三分

右之直段ニ而、隨分入念丈夫ニ仕置可申旨、神田濱松町吉藏店總七申之候間、則仕樣書相添、此段申上候、尤引方之儀、再應相糺候處、此上引方無御座候旨申之候間、右直段ニ而新規ニ可被仰付候哉、奉伺候、以上、

辰七月　石出帶刀

仕樣書

一駕籠乘物新規　六挺

仕樣總體不殘檜ニ而、丈夫ニ組立、胴之板さわら板溢粘張内不殘青紙張、三方總れんじ、左右四所貫拔丈夫ニ打立、鐵物付外廻り屋根腰不殘黑溢上ゲ塗、腰廻り不殘鐵物付小鋲ニ而、丈夫ニ打立、包臺近江表ニ而包押へ、緣平竹小釘ニ而、丈夫ニ仕立、うら立根太丈夫ニ打立、藤弦丈夫ニ付、棒ごし萬力鐵物打〆棒もみ、其外不殘入念仕立可申候、

代金壹挺ニ付

貳兩壹分貳朱ト五匁宛

右合金拾四兩壹分三十匁

神田濱松町家主吉藏店
乘物屋

天保十五年辰七月二日　　總七印

御役所樣

（ヒレ）書面四人乘候駕籠、新規御入用不相當之儀も無御座候間、右出帯刀伺之通、被仰渡可然哉ニ奉存候、且御入用出方之儀は、先格之通、兩御役所ニツ割を以、相渡候樣可仕候、

辰七月　　年番

〔牢屋鋪〕（朱書）前同年○弘化三年午五月十日久野十馬を以御渡、承付同人を以返上、「ヒレ付」

目籠代金之儀申上書付　　三村吉兵衛

一金貳兩ト銀五匁　　佐州江被遣候目籠五挺一式代金
但壹挺ニ付貳拾五匁宛

右は此度佐州江被遣候、無宿共乘せ候目籠代金ニ御座候、右代金年番ゟ相渡候樣、被仰渡御座候樣仕度奉存候、依之申上候、以上、

五月十日　　三村吉兵衛

書面目録代金、兩御役所貳ッ割を以、相渡可申旨被仰渡、奉承知候、

午五月十日　　年番

〔公裁隨筆 樂〕一惡黨もの召捕候もの江雜用被下方之事

天明二寅九月、被仰渡書に、在々鄕中不審成もの參候歟、惡黨もの搦取、所之もの訴出可申候、尤江戶江召連候雜用、路用は品ニ寄、公儀ゟ可被下置旨、先年申渡置候處、近年惡黨もの抔、質物取候もの江理不盡申掛候樣成義いたし候由、粗相聞候、

右體之もの有之候はゞ、召捕直ニ訴出可申候、是又江戶江召連候路用雜用は可被下置候、○中略

右之趣支配所村々江被申渡、以來急度相守候樣、可被申付候、

朱書 此雜用被下方は、御府外之分に有之候、

〔驛鑑錄〕文政六未年掛合之上極ル

大坂町奉行ゟ江戶江四人差下し候節、人馬賃錢拂方之事、

同所ニ而は是迄御證文人馬之外差立候人馬之分をも、無賃ニ而繼立候處、京都町奉行所ニ而は、御證文人馬之外は不殘賃錢拂方有之候ニ付、道中奉行ゟ大坂町奉行江掛合之上、以來京都町奉行所取計同樣所司代御城代御證文之外は、賃錢相拂候積リ極ル、

〔公裁秘錄 四〕私領之者幷無宿御代官江申渡、江戶表江差出候節、御入用立方左之通、

一御料所之者差出候節ハ、諸入用相立不申候定例ニ候事、

但四人牢內賄之儀者、御料之者、幷私領之者共、御仕置申渡無之內者、其村々ゟ差出、御仕置申渡候上ニ而、差出候分は申渡候日ゟ、牢內賄入用鹽味噌薪、其外道中飯米代木錢御入用ニ相立候事、

附 御仕置申渡候上ニ而差出候共、御料所之者之分は、差添候手代、足輕、小もの等、道中入用は

定例之通、相立不申候事、

朱書
御料所之もの＝而も、支配違之もの差出候節は、附添候手代足輕小者共、道中諸雜用御入用＝相立候事、

一囚人道中木錢米代

一差添候手代三人扶持宛被下候事

但貳拾五里內は五割增、貳拾五里外は一倍之積、手附差添候節も右同斷、

一手代壹人＝付本馬壹疋宛

但支配所內は御入用不相立候事

一足輕御扶持方壹人＝付、壹人半扶持宛、

但囚人人數多＝而、抱足輕計＝而引足不申候節は、吟味之上、雇足輕一日銀貳匁ッヽ被下候積、

一手代、足輕、小もの共、木錢被下候事、

一筆、墨、紙、蠟燭代、一日銀五分ッヽ、御入用相立候事、

一目籠代 幷 人足賃

但目籠ハ壹挺＝付、代銀貳拾目迄、人足賃五街道は御定之一里當を以、御入用相立、其外は最寄之街道筋＝准じ、賃銀相立、尤支配所內は相除候事、

一船賃川越賃

但渡場有無吟味之上相立候事

一囚人雜物持送人足賃

但五街道は御定之一里當を以、賃銀相立、其外は最寄之街道筋＝准じ相立、尤支配所內は相

除候事、

〔道中秘書　下〕路雜用之事

中山道大宮宿友右衛門外三人路雜用之儀申上候書付　石川左近將監

早川八郎右衛門御代官所
中山通大宮宿旅籠屋　友右衛門
同　清兵衛
宿役人惣代名主　甚右衛門
榊原小兵衛御代官所
武州秩父郡久長村百姓　助右衛門

兩人とも代之もの出候得ば本人之名前認候事

右之もの共儀、友右衛門方江這入候盜賊無宿要助を差押訴出候ものに御座候、御定書ニ都村方ゟ狼藉、又は不屆ものゝ類、百姓心附召捕候節は、路用幷江戸逗留之入用公儀ゟ可被下之事と有之候間、路用幷江戸逗留之入用可被下置候哉奉伺候、

但過料錢之內を以、御渡候樣可仕候、

以上

亥〇文化十二年十一月

〔舊記拾要集　二〕寬保三年亥五月三日、御用覺帳書拔、

一寬保三亥年五月三日、仁杉幸右衛門、下村彌助兩人江被仰渡候ハ、京都西本願寺家來等之もの、御僉議之儀有之、京都町奉行所ニおゐて、遠島申渡、京都町奉行組與力兩人、同心六人、外ニ諸司代牧野備後守殿御家來差添、來ル五日六日頃到着いたし候間、兩人掛りニ致し可相勤候、且又先達而別所彌四郎從京都差下し候砌、請取候節之取計ニ可致候、向御番所ニ而彌四郎請取候節

之様子、承合可置旨被仰渡候ニ付、卽刻向御番所江下役平野藤五郎差遣、承合候之處、平日遠國ゟ參リ候囚人、渡リ者請取候通之趣ニ而、外ニ相變儀無之候ニ付、書留も無之由申來候付、卽刻幸右衞門向御番所江相越、三好助右衞門致對談候處、其節助右衞門當番ニ而罷在、彌四郎請取候得共、平日渡リ者請取候通之儀ニ而有之ニ付、其儀ニ付而之書留と申儀ハ無之由、平日渡りもの御番所ニ而取計候、定法之通ニいたし候由、勿論上方ゟ附參候與力江御請取被成候由御挨拶有之、尤京都御奉行ゟ御印狀、與力持參ニ付、此御返事被遣候ニ而、御請取被成候譯も相濟候由、其外馬場源四郎大坂ゟ着之節とても、右之通ニ而相濟候由、助右衞門申聞候ニ付、其段翌日書付を以御屆申上候事、

一五月十一日朝五時前、右囚人三人從京都着いたし候覺、

西本願寺堂達　玄可　廿三歲
同斷　了空　十七歲
西本願寺家來　魚崎清右衞門　廿三歲
〇中略

右之通召連來ルニ付、御番所ニ而改、囚人三人請取、白洲江入被仰渡相濟候而、直にはがいにいたし、先達而牢屋敷江申遣人足呼寄置、並牢屋同心貳人、此方より双方立合、年寄同心四人、平同心六人差添、揚リ屋江差遣候、尤駕籠は道中乘り來り候駕籠、直ニ牢屋敷江遣候、

一右囚人共着類雜物、幷金錢持參ニ付、改請取之、幸右衞門、彌助兩人より請取書、尤致判形遣し候、宛所は本多新左衞門一名ニ而遣ス、

一右三人之囚人、御番所前ニ而駕籠より出し、本多新左衞門、近藤與左衞門立合相改請取之、直ニ白洲江入、遠島出船之間、揚リ屋江入被置候段、被仰渡相濟、於白洲はがひに致し候、其節新左衞門、與左衞門儀、御裁許場奧廊下杉戸際江兩人共ニ差出し候處、囚人御請取被成候由、御頭御挨

拶有之、兩人共退出、

〔二老略傳〕九皐先生閑錄

事濟て後〇大内新助犯罪露顯落着後柳澤家川越の領地に囚を遣す、尤廣澤先生は差添て行、先生役人に命じて網乘物を丈夫にこしらへさせ、上に覆ふ青繩ふとく丈夫に仕度させたり、扨足輕六人取手のもの也中間數十人足輕の小頭二人、其跡は先生馬上にて行なり、武藏に至り、人家なき處にて、咎人の曰、小便籠のうちにては氣詰りて通せず、籠を出て小便いたしたしと云、先生ゆるさずしていはく、籠に二便の穴あり、籠を出す事ならずと云、小頭曰、大勢付添たり、何の恐れあらんと、先生の曰、汝等籠を出さばいだせ、予におゐて毛頭もゆるさず、强ていはゞ、從是歸るべしといふ故、皆恐怖して隨ひ行、其後咎人狂氣のまねして大にさけび、大音を揚げて既に籠をふみ破らんとす、先生曰、如何樣にさはぐとも苦しからず、籠を破るとも青網は破る事あたはぬやうに拵たり、網のうへよりすまきにして馬に付て行べしと下知し、馬より下り、咎人の籠に引添て行ゆゑ、咎人謀大に相違し、夫より靜に成しとなん、〇中略川越に到着し、藪田五郎左衛門ニ囚人を引渡し、受取渡の書狀を認て、飛脚二三里も行たらんとおもふ頃、俄に騷動す、〇下略

護送中逃亡

〔捕者帳〕

貞享二年丑ノ七月十七日
一浪人白井升庵　御褒美

此方同心
金井與惣左衛門

五番所
兩飛驒殿同心
右同断
中嶋長兵衛

右者天野市之丞組下、淺草新堀岩岸彌五兵衛地借、此者御穿鑿之儀有之、はかい付仕、乘物ニ乘せ、雙方ゟ年寄同心兩人ニ而、御番所ゟ揚屋へ召連參候砌、右之升庵小傳馬町壹丁目ニ而、乘物蹴離出、中嶋長兵衛脇指ニ取付候ヲ、兩人にてもぎ離シ繩ヲ懸、籠屋へ召連參候、

仁杉與兵衛

年番
增田四郎左衛門
辻九兵衛
荻野仁介

大坂無宿入墨
繁藏

失囚處分
獄吏譴責

〔御仕置例類集三ノ十三〕寛政二戌年十二月
松平伊豆守殿御差圖　町奉行　初鹿野河内守掛
一大坂無宿入墨繁藏、被縛候繩を外し逃去候一件、
右之もの儀、先達而盗致し候依科、入墨之上重敲ニ相成候得共、盗不相止死罪ニ可相成處、御赦ニ相成、其後入墨を消紛候ニ付、如元入墨之上江戸拂、又は江戸拾里四方追放ニ相成候ニ付、在方江立退候得共、給續兼知人ゟ合力受可申と、御構場所とは乍辨、御當地江立入候處、組廻り同心共ニ被捕、町役人とも江被預、御役所江被引連候節、可逃去と存附、足痛候旨申、僞駕籠ニ乘參候、途中被縛候繩之結目を駕籠江摺付緩之候ニ付、手を拔繩を外し、御役所前ニ而駕籠ゟ出し候節逃去、其上兩國橋際廣小路ニ而、名前不存無宿共より、盗錢之内と乍辨、壹貫六百文貰請候段、旁不屆ニ付死罪、
〔御定書百箇條〕牢拔、手鎖外し、御構之地江立歸候もの、御仕置之事、
寛保二年極
一牢拔出候者、本罪相當より一等重く可申付、
　但牢番人中追放
〔御仕置例類集二ノ十八〕享和三亥年御渡
御勘定奉行石川左近將監伺
一讃州小豆島之内、池田村瀧水寺外一ヶ所江盗賊押込候一件、
柘植又左衛門元御代官所
備中國窪屋郡倉敷村牢番

右之もの共儀、子位庄村穢多善助入牢中、番乍致同人儀倅仙助と牢抜之手段申合、又者牢外園之隅江鋸壹挺、仙助持參り隱し置候をも不心付、其上夜中疲候迚、兩人トモ睡、善助頭取牢格子を切抜、相牢之もの共一同牢抜いたし候を不存罷在候段、不埒ニ候得共、追而右善助幷牢抜いたし候、源藏兩人を捕差出候ニ付、令宥免兩人とも急度叱、

德兵衞
外壹人

此儀石川左近將監御咎附ニ申上候、權六ニ見合、牢抜いたし候もの共之内を捕候儀ニ付、伺之通急度叱、

朱書
評議之通濟

御咎附ニ左近將監申上候例

天明八申年、根岸肥前守御勘定奉行之節、手限伺之上、御咎申付候、越後國石瀨村百姓權六儀、牢番いたし乍罷在、無宿伊助五郎作任相賴、筆墨紙線香度々牢内江入遣し候故、相牢之もの共、牢抜之始末申合、右線香ニ而格子壹本燒切リ、直七外貳人牢抜いたし候處、其儀を不存段、不埒ニ付五十日手鎖、

〔御仕置例類集二ノ二十一〕文化七午年御渡

松前奉行伺

一松前福嶋村に罷在候東之助、人を殺盗致し候一件、

牢屋番
眞木吉助

右之もの儀、牢抜いたし候東之助を召捕候得共、牢番いたし罷在候上は、無油斷入念可心附處、稍牢屋根普請之節、土間江落散有之候釘を、東之助牢内ゟ拾ひ取、右釘を以牢之柱を連々彫抜、空虚にいたし置切、稍牢潜り戶を固辭外し、牢抜いたし候を不存罷在候段、心得方不行屆不念に付、三十日押込、

〔御仕置例類集一ノ五〕文化十二亥年御渡

長崎奉行伺

一肥後國大江村嘉助、異法執行候風聞有之候一件、

高木作右衛門御代官所
肥後國天草郡今富村年寄
富右衛門

右之もの儀、村内非人和右衛門江附添、長崎表江罷越候船中に而、同郡大江村嘉助任頼、爲逃去候手段に無之候とも、長崎表ゟ差遣候、役方之もの江不申聞、同人縛有之繩弛遣候段、心得違之至不埒に付急度叱り、

此儀一件之内嘉助同樣不念に付、伺之通り急度叱り、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ二十六〕文政五午年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一松田町吉五郎店龜吉、其外之もの共、於牢内不届之致取計候一件、

囚獄石出帶刀組鎰役
岩崎儀兵衛

右之もの儀、西大牢囚人名主龜吉儀、半紙を厚紙に張立、刃を附候錢を以裁切紙車を拵、牢内に差置、其外金子等所持候旨、清藏申立候に付、同役一同罷出相改候處、金貳兩貳歩、右車并花色絹貳反龜吉ゟ取上、見廻與力江差出、其節刃を附候錢不相見候處、秋本鐵右衛門、五十畑良助、牢内江罷越相糺候處、盛札之内ゟ見出候由に而、龜吉差出候を、良助請取候旨、申聞候はゝ、早速可差出處、無其儀、右體之品牢内ゟ出候而は、不取締に付、尋有之候はゝ、差出可申旨、同役相談之上、申立も不致、役所に差置、又は龜吉儀、銅に而庖丁之形に拵候品貳本差出候を、此もの請取候處、申立も不致取捨、

其節亀吉儀、牢内ゟ見出候由に而、金三両三歩差出候をも請取、帯刀一應申聞候とは乍申、役所江差出、或は西大牢敷板透候を、大工幸次郎貫を挽込み取繕候節、此もの并同役其外立合乍罷在、亀吉儀、鋸を以貫を引割候も不心付、又は當番之節、囚人共西貮間牢にて廻り筒長半、簺博弈いたし兩度、其外亀吉儀、木村榮三郎より絹裏地買入貰、又は亀吉重吉入牢之もの、隠持參り候金子多分取上、亀吉儀は、右金子之内、近藤忠三郎江預ケ、下男源助を頼、酒并木綿單もの等買入貰候をも不存罷在、其上清藏儀亀吉と牢抜可致と申合候段、清藏致申懸、見廻與力江申立、右庖丁刃を附候錢、其外金子等之儀も、同役共一同相談之上取計候を、此もの親族計り吟味有之候は、全見廻與力申立、万不審に存候迚、取昇一大事之儀申立度抔と、不容易儀を麁忽に申立候段、餘役筆頭相勤候身分、旁不届に付、江戸拾里四方追放、

〔御仕置例類集一ノ十九〕文政九戌年御渡

御勘定奉行石川主水正伺

一作州藤原村一件之内、同村源左衛門儀、相牢與總左衛門を及殺害候一件、

脇坂中務大輔御預所
作州久米南條郡藤原村牢番人
百姓　治右衛門
兵藏

右之もの共儀、牢番いたし候上者、無油斷可心附處、兩人とも居眠、牢内ニ而違變有之候をも早速ニ不存、殊治右衛門者牢番乍致、草履相作り、右ニ相用候小刀牢際莚之下ニ差置候故、與總左衛門見受、密ニ牢内江取入、相牢之源左衛門可及殺害といたし、却而右小刀を以同人ニ逢殺害候次第ニ至り候段、畢竟心附方等閑故之儀、治右衛門者別而之儀、一同不埒ニ付、治右衛門者五十日手鎖、兵藏者三十日手鎖、

此儀寛政六寅年、根岸肥前守御勘定奉行勤役之節、伺之上御咎申付候、豆州上多賀村平八儀、牢番ニ出候上者、取締第一ニ心附、刃物者勿論何品ニ而も牢内江不入様いたし、尤四人共相頼候とも、支配役所江申立、差圖可受處、竹ニ而きせるを拵與候様、幸七申聞、鎌を差出候節、牢内ニ右體之品可有之儀ニ無之上者、早速可申立處、無其儀同人申ニ任せ、きせる之形を拵入遣し、右鎌を牢格子之前に差置候故、幸七儀右鎌を掻寄せ、牢内江取入、平五郎江疵付候始末ニ相成候段、不埒ニ付五十日手鎖申付候例ニ見合、趣意者同様ニ付伺之通治右衞門者五十日手鎖、兵庫者三十日手鎖、

朱書 評議之通濟

〔七十冊物類集四十一〕朱書 嘉永七寅年〇安政元年八月廿一日、町奉行池田播磨守殿、御目付一色邦之助殿御立合、

申渡

囚獄 石出帶刀組同心 菊澤安太郎
齋藤万平
水谷周三郎
杉山政三郎
上原鐵次郎
橋本鎌左衛門

阿部伊勢守殿御差圖

其方共儀、當正月廿三日夜、泊當番ニ而四人共之内、八五郎を牢内より差出シ候節、引續藤吉其外のもの共立出候はゝ、捕押可申處、右之もの共及亂妨、安太郎外貳人は疵受、闇夜之儀ニ而彼是手延ニ相成候沖、藤吉外四人を取逃、殊ニ總吉義逃後れ、牢天井ニ隱れ居候をも不存罷在候段、牢番

人之詮無之、其上万平儀、鎰役一之助ゟ右出牢者之名前書、并牢戸前之鎰先江受取候共、開閉は鎰役立合候仕來ニ候處、清吉義挑灯を燈し來候迚、一之助も參り候儀と心得違いたし、牢戸前を明ケ、右體牢拔有之候仕儀ニ至候段、旁一同不屆ニ付、中追放申付之、○牢屋下男、牢番數辻番人等處罰ノ事略ス、

申渡　　　　囚獄　石出帶刀

其方儀牢内之儀ニ付而者、度々申渡置候義も有之、鎰役同心其外へも入念相勤候樣、精々可申付所、新島流人ニ而島拔致候、河内村無宿貞藏外拾人申合牢拔企、當正月廿三日夜、南槇町無宿八五郎溜預ケ相成候節、鎰役木村一之助義、持參可致鎰を、仕來ニ背、先江齋藤万平江相渡し候故、同人義心得違致し、戸前を明ケ、川下村無宿増入墨松之助、其外之もの共及亂妨、逃去候仕儀ニ至り、其上跡取締之儀も入念申付、心附旨者申候得共、二本松無宿總吉義逃後れ、牢天井ニ隱れ居、同廿五日曉首縊候をも不存、罷在候始末、畢竟常々申付心付方等、等閑故之儀不埒に付、阿部伊勢守殿依御差圖、押込申付之、

寅○安政元年十一月

劫奪四人

〔御仕置裁許帳三〕出家四人を奪取坊主に仕者

寛文七年未七月廿五日

壹人五左衛門　是は日下部五郎八知行所、武州猪俣村之者、同國用土村之御林ニ而、當五月松之木を切申に付、五郎八方ゟ死罪に申付候處を、用土村蓮光寺、中途に而奪取、坊主ニ仕候付、穿鑿之上籠舍、

右之者、未十一月廿六日死罪、

寛文七年未七月廿五日

壹人蓮光寺　是は用土村之出家、右之五左衛門を奪取申科ニ付籠舍、

右之者、申二月十五日赦免、

同年未八月四日

壹人妙恩寺　是は武州之内櫻澤村之寺持日下部五郎八知行、猪俣村百姓御用木剪取候科ニ付、其所江遣し行候處を、路次ゟ而用土村蓮光寺と申坊主、右之科人を衣を懸坊主にいたし候、此坊主も、其場に出合候ニ付、穿鑿之内籠舍、

右之者、申二月十五日赦免、

〔御仕置裁許帳七〕囚人を途中にて奪取者之類

拾七人　久大夫　源　七　助　六　仁兵衛　權右衛門（歳五十八）　九兵衛　三九郎　喜兵衛　作兵衛
　治　助　庄左衛門　傳兵衛　與五郎　傳　助　五兵衛　平十郎　權右衛門（歳三十）

右者淺草御藏小揚之者共、傍輩三右衛門と申者、昨十八日觀音祭禮之節あばれ候由ニ而、能勢總十郎目明シ在郷八兵衛捕候而、淺草馬道之町人共召連、同日總十郎方江參候節、同所森田町ニ而、此者共奪取候由ニ而、總十郎方ゟ御老中江被相達候ニ付、可致僉議之旨、御老中列座ニ而被仰渡候、依之御藏手代三宅喜八郎、布施喜右衛門、矢野六兵衛、鈴木又五郎、篠原兵助召連來ニ付、此者共段々遂僉議候得共、有體に不申上候故、穿鑿之内籠舍、

久大夫、喜兵衛、助六、權右衛門、五十八次助、此五人亥四月晦日、江戸中引廻シ於淺草獄門、

平十郎、權右衛門、此兩人は江戸十里四方追放、

佐兵衛、傳兵衛、此兩人は亥四月廿九日病死、

三十郎、傳助、庄左衛門、源七、五兵衛、與五郎、九兵衛、仁兵衛、此八人亥四月晦日赦免、

〔德川禁令考後聚二法吏職務〕牢內取計之儀并同心勤方之事○中略

一藥之儀、藥掛り下男ニ爲煮、一日ニ三度宛、物書當番之内附添參り、牢番同心立合、逸々病人名前

呼相渡候得者、牢內役人取計、銘々爲用候、

但重病人、或者手當もの江者、三度ニ不限度々入遣シ候、

〔牢獄秘錄〕大牢貳間牢入牢者之事○中略

一朝々牢內江藥を遣ス、牢內病人江遣ス事也五器穴ゟ此藥を入ル也、尤大牢ハ揚屋之方ニ五器穴とて、

竪八九寸 橫七八寸 如斯之形之穴、はめの板に切ぬき有、是を五器穴と云、貳間牢ハ外ざやねりべいの方に此穴有りと云、尤はめ板けやき也、揚り屋女牢はかうしゟ入れ遣ス、

一病人牢內有之候而望候時ハ粥を仕立テ遣ス也、尤病人江遣し候に粥、小豆粥、ぞうすい、麦めし等ハ、病人之望み次第遣し候事也、但是等を望候ニハキメ板桐之板にて、長サ貳尺五六寸、幅貳三寸位之板、牢內に四五枚ヅヽ入て有之、右望之品をきりの先のなれたるにて此板へかき出す也、に、錐にてかき付、張番に賴む、張番此事を牢屋同心鎰役へ申立て、此品々を遣し候事也、但キメ板ハ張番部屋にて湯をわかし、文字錐にて書たる文字也にかけ候時ニハ、桐之木故、元の如くになりて、文字きゆる也、

一牢內之者大病之節ハ、名主ゟ申出る也、如此之時ハ、醫師牢內に入て、樣子を見る事也、牢內ゟ大病にて如此申出る節ハ、最早一日しもたぬ程の大病なりとぞ、

一病氣にて食事等六七日も不食時ハ、其趣申立、當人之願に候得バ、名主ゟ溜へ下り度と願ふ也、鎰番此趣を石出帶刀に申シ、帶刀町奉行江申込て溜江下る也、

〔諸例類纂五〕牢屋秘事錄○中略

一病氣之節ハ、平日共ニ醫師兩人見廻り、日々容體書上ゲ有之候、其外藥種人參等被下候、外治壹人有之候、此三人町醫師ニ而宿賃一ケ月ニ壹兩三分被下候、平常牢屋懸り藥代ハ一ケ月限被下候、針治ハ御法度ニ候、

但病氣之もの御仕置當日迄、隨分御手當等、別而大切ニ取扱いたし候事、

〔南撰要集〕寛政九巳年十一月〇中略

下ケ札
別紙御問合〇中川飛騨守問合へ銘々下札致し返却いたし候、

午六月　村上肥後守〇中略

一囚人病氣之節、何役之もの病體見屆候上藥用爲致候哉、急病之節ハ、如何致候哉之事、

下札
牢名主病氣之もの申立、牢番立合樣子見候上、牢屋敷醫師へ見せ、藥用爲致候、急病之屆人名前爲讀聞、右品ハ牢番所前ニ而牢內へ入物へ移、改候上入遣候、

〔牢屋鋪三〕朱書天保十二丑年

德利暖補并薪代之儀申上候書付　牢屋見廻

囚人之內病人共江相渡候、德利暖補并熱湯湧立候薪代之覺、

一德利暖補數五拾　但木綿袋江入口星共一ニ付銀貳匁宛

代銀百匁

右代銀之義は、安永七戌年吟味之上、相調候直段ニ御座候、尤去年中相用候德利暖補割レ損ジ、用立不申候ニ付、新規ニ申付候、〇下略

〔類例秘錄三〕私掛甲府境町入牢人病氣之節、甲州遠光寺村非人頭善九郎江預之儀ニ付伺、

小野田三郎右衛門

私支配所ニ而盜其外惡事いたし、召捕候もの共、甲府境町入牢申付候處、甲州之儀は、一圓山國ニ而、多は至而寒氣强、夏は一旦に極暑ニ相成、寒暖不順之土地故、時疫流行いたし、別而寒氣之節は牢內ニ而嚴寒、時疫相煩候もの多有之、入牢人病氣之節、有宿之分は出牢村預等申付候得共、重科のもの并無宿ものは相煩候而も、無據入牢爲致置候ニ付、入牢人多キ節は、相牢之もの共、及難儀候由ニ相聞、中ニは藥用手當不行屆、絕命候ものも有之哉ニ付、以來右體之節は、私御代官所山梨

郡遠光寺村非人頭善九郎方江勤番支配、其外より候取もの差押候節、夫々役所より差出候迄之手當、補理置候儘成圍御座候間、村預難申付有宿無宿共、相煩之節は、右善九郎江預ヶ圍入申付置、療養爲差出候樣仕度奉存候、尤無宿之分は、右預中扶持米、鹽、味噌、薪代等、甲府境町入牢人並之通、御入用被下候樣奉存候、依之此段奉伺候、以上、

朱書本文善九郎へ預ヶ圍入申付候儀、同人相糺候處、差支之儀無御座、〇中略善九郎方江番非人差出申候、

文政十亥年正月　　小野田三郎右衛門

書面伺之通仕るべく候

亥正月

下付病者於私宅

〔御仕置裁許帳 十〕道中上下之飛脚方々ゟ誂之金子を紛失仕者

寛文十二年子十二月十日

壹人九兵衛　是ハ南傳馬町三町目新道彌市出居衆、方々ゟ大坂江遣候金子百三拾兩餘、宿彌市方ゟ此者ニ當六月五日荷物ニ入爲登申候處ニ、金子紛失仕候由彌市訴訟申ニ付、籠舍申付候處、相煩申ニ付、先月二十七日出牢、彌市ニ預ヶ置候處、本復仕候由、彌市訴訟申候間上リ屋ニ入、右之者、寅七月五日佐渡江流罪、

〔御仕置裁許帳 十〕入牢之者を預リ首を爲縊る者

貞享三年寅五月二十五日

壹人女ちう　是ハ赤坂裏傳馬町貳町目四郎右衛門店、須田太郎兵衛女房、夫太郎兵衛義穿鑿之儀有之、當二月十九日籠舍申付候處、籠內ニ而相煩候ニ付、養生之內預リ度由、妻子訴訟申ニ付、當月二十一日預ヶ遣候處、右太郎兵衛今日首縊相果候由訴訟來ル付、撿使遣召寄遂穿鑿候處

ニ自身首縊候ニ無紛候、不念成ル故、家主儀ハ閉門申付、忰庄大夫儀ハ漸十歳ニ罷成候故、太郎兵衛従弟四ッ谷傳馬町壹町目半兵衛店長兵衛ニ預ケ遣、此者儀ハ、夫太郎兵衛仕形不屆ニ付、上リ屋ニ入、

右之忰庄大夫、従弟長兵衛、幷太郎兵衛家主度々訴訟申出ル付、寅六月十七日預ケ遣ス、

〔御仕置裁許帳八〕似セ五人組似セ名主仕者之類、幷金子肝煎仕者、

元祿六年酉十月十二日

壹人　庄兵衛○中略

右之者、牢内に而强相煩候に付、養生之内預ケ申度旨、女房度々訴訟申に付、養生之内、庄兵衛女房幷家守請人南塗師町文右衛門に、酉十一月廿六日預ケ遣ス、

〔御仕置裁許帳八〕似セ五人組似セ名主仕者之類、幷金子肝煎仕者、

元祿六年酉十月十六日

貳人

作右衛門　是は青物町勘七家守

太郎兵衛　是は音羽町伊右衛門店之者

青物町太右衛門と申者、僉議之儀在之、能勢惣十郎方ゟ牢舍申付候處、牢内に而相煩候に付、養生之内所之町人に、惣十郎方ゟ預ケ置候處、先月廿三日致病死候、

〔御仕置裁許帳十二〕武士方中間相對にて古傍輩に繩を懸、宿に差置候者幷請人、

元祿八年亥十一月三日

壹人　德大夫　是は南八丁堀壹丁目新助店之者、此者儀右之七兵衛と相談之上、清兵衛に繩懸申候由詮議之上に而七兵衛申に付、穿鑿之内牢舍、

右之者煩に付、家主五人組に預ケ遣候所、元祿十年丑十月廿三日病死、

囚人死亡

〔御仕置裁許帳　五〕博奕を打者之類

元祿二年巳閏正月十二日

壹人　勘四郎　略○中　穿鑿之內、牢內申付候處、牢內ニ而相煩候付、養生之內預ヶ遣候處、氣分致本服候ニ付、今日召寄牢舍、

〔張紙留〕吟味中牢死、溜死之もの死骸之事、

死罪遠島ハ　取捨

下手人重追放以下ハ　取片付

右之通於一座申合候事

明和九辰年六月四日

〔牢獄秘錄〕牢死之者之事

一牢死致候程之病人ハ、牢內にて落間（三疊程敷ル、一段ひくき所なり、）に置、牢死之趣名主ゟ申出ル、牢內之者留口迄こもに乘せ、口元江出す、張番請取之、切場（御仕置にて打首有之場所之事なと云、）へ持行、爰ニ置、檢使來り、死骸相改、乞食へ引渡ス、此死骸アンカ（是ハ幅貳尺五六寸、堅五尺餘、高サ壹尺七八寸計りに竹にて組、リウキウ表にて包、戸板位の大サニ而、つり臺の樣なる物にのせて、此琉球包なを上ゟかぶせる也、）に乘、千住江捨に行也、但シ裏門ゟ持出ス、

一牢死之者輕キ科にても、町奉行御勘定奉行懸り之ものハ、宿へ死骸を不引渡、乞食に相渡し取捨るなり、（但乞食之手ゟ金子遣し貰候ハ、勝手次第也、尤千住へ行て相談する事なり、）本役加役懸りハ、其宿より死骸貰に出候得バ、隨分引渡しくれ候事也、

一牢內にて役人牢死致候得バ、其死骸死したる疊の上に置て、落間へハ置ずト云、

一牢內之病氣とハ、皆牢疫病也、是ハ數年人々をこめ置故、自然と人之身之息氣こもりて、此息氣を鼻に入れ候ゆへ、皆牢疫病に成ルト云、（寛政十一未年書出）

〔與力同心勤方大槪〕牢屋見廻勤方之事

囚人自殺

一牢死之者有之節、兩御番所御掛ニ候得共、私共辨之助立合見分仕、御掛之御番所江罷出、御屆申上候、他懸ニ而も立合見分仕、書面を以御屆申上候、且死體鹽詰被仰付候者有之候得者、是又私共立合、鹽詰申付見分仕候上、書面を以御屆申上候、

右之通御座候、以上、

〔御仕置裁許帳十〕流罪被仰付以後、牢死仕者之類、

元祿九年子三月七日

壹人佐右衛門〇中略

右之者遠流可申付旨、子六月十三日、秋元但馬守殿被仰付、右之者子六月晦日、牢死、死體捨之、

〔牢獄秘錄〕揚り座敷にて變死之事

揚り座敷に入候もの(名ハわすれたりといふ)其罪押込にて、死罪にも可相成もの故、其同類嚴敷御吟味有るに、此もの白狀致す時ハ、外ニ御旗本相應之者五六人身分にも可相障と存じ、此趣大牢ゟ入置貳人之附人江委細に相咄しけるゆゑ、兩人之附人も、外之御旗本方を出すまじき爲に、其身壹人自滅致したきとの心ざしをいとしく思ひしにや、夜分寢入しふりして居たりしゆへに、此者自分の帶にて、揚り屋之内かうしにむすび、首縊り死たり、依之兩人之附人ハ、貳ケ年入牢いたし、(是金子にても取りしと言ゆへ歟)また此夜之平當番貳人、御切米召放、五十日同役江預ケと成、宵番之平當番ハ、五十日遠慮被仰渡けると也、

〔一老略傳〕九皐先生嗣錄

亥の刻計に、牢番の足輕注進しけるは、咎人自害したるかと見えたり、宵より牢の内に立て、うごかずしてあり、まさしく自滅かと注進す、時に藪田と共に行て見るに、見分がたし、注進のごとく囚立て動かず、挑灯を以て照し見るに、牢格子の間せまくして見えわかず、自殺にまぎれなしと

溜獄

て、牢の口より入り見るに自害したり、その體胴繩をかけ置しに裸に成て、胴繩を上の格子に通し輪となし、夫に頤をかけ舌をくゐ死たり、手錠六筋の取繩ともに、ずた〳〵に切てあり、足かせは菱形になりたり、左の口脇より紅の糸のごとく、細く、血筋ながれて舌本を喰切、左の方に舌さかりあり、すさまじとも云んかたなし、

〔憲教類典四ノ五評定〕享保元丙申年四月八日

評定一座可被相心得候條々〇中略

一諸奉行所ゟ牢に入置候もの、事只今まではさして事むつかしからず候事に、五年も十年も事を決せず候故に、牢内にて死し候者年々に多く、又ハ火事等之時ににげうせ候者も有之、其本罪ハ輕く候も、大犯の罪に入り候ものも出來り、又ハ相手も有之同類も有之候事に、其相手同類等死失せ候而ハ、或ハ詮議之手掛りもなくして事決しがたく、或ハ存生之者計相當り、刑罪に行ハれ候てハ、片落なる事に似より候事も出、都て此等之類ハ、御仕置之爲に甚不可然事に候、自今以後ハ、牢ニ入置、百日過候ても決し難く候事ハ、是又其事之始末分明に書しるし、何も存寄之所をば、二筋にも三筋にも付札に記可被差出候事、

附古來より牢舍、又ハ過怠牢抔と申、其罪科を決斷し牢江入候事ハ、御仕置之一筋に成候處に、近來ハ其罪科も未決せず候ニ、詮議之間先ヅ牢江入置候もの共多なり來候歟、是又不可然事ニ候、人をも殺害盜賊之罪犯有之もの、又ハ其身を預可置所も無之者、又ハ本主人に預置候而ハ不可然候子細も有之者之類ハ、詮議之間牢へもいれ置候事も可有之候、此等之外に預置べき所も有之候もの、其罪科決せず、內ニ先ヅ牢江入置候事ハ、よろしく思慮有べく候事、

町奉行

〔憲教類典四ノ六評定〕寬延三庚午年九月

毎月在牢之者人數高書付被差出候節、六ヶ月以上吟味不相濟致在牢居候者有之候ハ、誰之掛りニ而何と申もの致在牢居候段、別紙に書付七ヶ月目可被差出候、

九月

〔德川禁令考後聚六御禁布令〕寶暦十一巳年四月十日

公事吟味物書付差出方之儀ニ付御書付

先達而相達候、公事吟味及六ヶ月候ハヽ、例之通被相屆、其後彌不相決、又候六ヶ月ニも及候はゞ何之譯ニ而落着不仕段、書付差出候儀、是迄六ヶ月以上被相屆置、當時又候六ヶ月以上ニ相成候分、此節不殘相調書付被差出、此以後ハ月々公事吟味もの頭書ニ差出候節、別紙ニ認差出候樣可被心得候、

明和八年十月十七日

入牢溜預ノ者數多無之樣可致旨御書付

三奉行江

入牢溜預之もの手間取不申樣隨分手廻いたし、吟味相分候はゞ、出牢申付、可成たけ宿預に而吟味相分け、入牢溜預多無之樣可被取計候、

嘉永四亥年二月二十九日

吟味物遲滯爲致間敷旨御書付

三奉行
火附盜賊改
江

近頃在牢之者兎角人數多相成居候ニ付而ハ、自然死失之者も不少哉ニ相聞候、重科ニも可被處分者、夫迄之事ニ候得共、左迄之罪狀ニも無之、輕科之者、非命之死を遂候儀者、如何にも可憐筋ニ

[illegible]

有之、尤何れも出精ニ而吟味物等遅滞者不致趣ニ候得共、猶此上精々勘辨を加へ、軽科にも可相成分ハ猶更之儀吟味物可成丈手繰いたし、一體ニ一際捗取候様取計可被申候、右之趣先達而町奉行江相達置候品も有之候得共、猶又達候間、一同心弛み無之様、厚申合可被置候事、

〔江戸政要〕牢手形之事

右之者令赦免間、令出牢者也、

月日　　ひとや

右之者令斬罪間、検使可相渡者也、

月日　　ひとや

右之者令牢死間、可捨者也、

月日　　ひとや

〔牢獄秘錄〕牢内ニ而毒藥之咄之事

一牢内にて一ふくとて毒藥を呑せ殺し候ハ此もの存命ニ候得バ、殊之外障りと成故殺す由世間一統之咄しなりといへ共、是ハ跡方もなき虚言にて、牢内に左様成事決而無之、此毒藥有之といふ人ハ、實正知らぬものゝ言初めしなりといへども、このそら言當時世間之人しらぬといふものなし、誠に毒藥有と思ひ居る事こそ愚成わざなり、また牢死するもの多きハ數年來牢内にこもり居て、風も通らぬ處にて、或ハ熱病に死しても、その儘に捨置故、自然と人之息氣、牢内の板にも柱にもうつりてわるぐさく、此臭氣をかぎ候事ハ、牢内一同之事故、初牢の者ハこの臭氣に當りて、疫病と成、是を牢疫病といふ也、この疫病にとりつかれしもの牢死之時ハ、牢屋敷にて一ふくもられしといふ也、是實說也、疑ふべからず、

一牢内ハ南之方かうしにて、兩脇東西はめ板、うしろの方ハ下之方かうしのうへに、はめ板を打つ

け、上の方ニかうし有、是ゟ北風吹入る也、

多ハ此の上のかうしに紙をはり、夏ハ此かうしの紙を破り、夏冬𪜈のぐといへども、牢内を吹ぬく風なきゆへに、人の息氣消ることなし、

〔鳥の鳴音〕十八日〇天保十年五月午時、義友春山子に逢ければ、嬉しさ譬へん樣なく、跡かたの事忙しく頼み、其夜北の府尹の訟庭へ馳せ行き〇高野長英其明る十九日、獄内へ引れける、頃しも五月中浣の事なれば、暑氣旺盛なるに、取わけ今歳は暑さ強く、高樓に登り窓戸を開き、納涼するだに凌ぎ兼ぬるに、況て日光も透射せず、風氣も流通せぬ、陰鬱の處に、數十人鱗次充塡してあることなれば、其熱さ堪へがたく、病人の臭氣、汚穢の諸物、一種異樣の臭氣となり、牢内に散滿するものから、其臭さ譬へん樣なく、久しく此中にあらんには、中々存活せんとは思はれず、さる上に昨日迄も健やかに在りし人の、今朝は病に斃れて死するもあり、今朝迄も歌ひつ笑ひつ、餘念なくありし人の、御用の聲と諸共に出る間もなく、一片の血烟となり消へゆくもあり、斯く目出度御代に生れ來て、斯る哀しき事を見たり聞たり、するもせらるゝも、皆これ前世の宿緣にありなん、去れ共今日は人の身の上、明日は我身の上と思へば、怖ろしさ身の毛もよだち、哀れさ涙に咽ぶばかりなり、然かはあれども、此處に在る者は、皆是れ殺人放火の潑皮、落魄無賴の惡棍なれば、物の情を知るべうもなく、互ひに勵み勵まされて、心の底を鬼となし、今病んで死するにも、自若として呻吟せず、今引れて斬らるゝにも、莞爾と笑て出行くは、昔し戰爭の世の中に、忠臣義士の死を恐れざる有樣も、斯くこそあらめ、善惡の二つは姑く論せず、今昇平の代に當りて、人心も柔弱なるに、斯る潔死の勇斷は、殊勝に見えて最とゝ憐れを催しぬ、扨獄内には斯る猛夫の寄合なれば、尋常一樣の法律にて治るべきに非ずとて、極めて殘酷の苛法を設け、只暴戾を以て屈伏せしむるゆゑ、起臥飲食言語も容易にはなし難く、こは如何せんと恐ぢ怖れぬ、去れども地獄の内にも極樂あ

る理りにて、我身に鬼心なければ、何れの里にも鬼人なく、牢内の大小頭目、假初めにも忠義の心を懐き、讒者の爲に陷しいれられ、無實の罪に沈みぬるを見て、深く憫れみ何くれとなく心を付けられ、厚く惠み勞はられ、起臥飮食も緩やかになりぬれば、是ぞ災厄中の徼幸にて、苦しき中にも凌ぎよく、疾くに死すべき身の、恙なく一日二日と日を送り、蟄する蟲の春を待つ心ちにて、一日千秋の思ひをなし、只管に官の御明斷をぞ待詫ける、然かはあれど讒者の訴へ手重にて、世間の取沙汰喋々しく、中々急に御取捌きのあるべしとは思はれず、其内或は反逆人なり抔唱ふる者もありて、己等は始めより手宛囚人と唱へ、殊の外重罪人なるよし傳へ聞きては、思ひもよらぬ事なりと驚きしが、天一方に私せざる事なれば、其内自然に官の御疑心も晴れなん、〇中略皆是れ天命なれば是非もなし、悠然として時を待べしと諦らめつゝ、倩ら我身を省みるに、〇下略

〔窻の須佐美三〕元祿年中、殺生の禁甚しかりける時、芝邊にて犬を切しものしれざりしかば、疑しきものは先執へて推問ありしかど、その證いまだ明らかならざる時に、薩摩の邸外に手紙に血附たるありとて差出す、その名薩摩の臣なりしかば、町奉行に差出して問れしに、その士の云、窻の中にて髭を剃候とて、面を餘ほど切て候、手元に紙なくして、折から見合候ゆへ、反古にて血を押拭ひ、窻に置しを、風の吹ちらして、窻の外へ落失候ゆへ、そのまゝにて置しとて、則疵をも見せつ、されども名の記したる紙に血の附たれば、先吟味のうち揚屋に往て居られよとありしかば、士云、某名記したる紙に血の付たるが、落去り候は運命に候、則御仕置に被仰付給るべし、揚屋へは得參るまじといふ、奉行これを聞て、もつともには候へども、證も跡もなきに、死罪に所すべき樣もなし、三度も吟味する法なればかく云たり、揚屋は旗本の面々も度々入置、事濟たる後少も恥辱なる事はなし、大法なれば入置ばかりなりとあり、士の云、さも有べく候へども、公儀は廣き事ゆへ、人々得心申候なり、吾國は小國にて、心も小く候へば、一度左樣の事にあひ候ては、朋友み

起立
溜道

な變りも斷申事に候得ば、おのづから主人へも召使がたく候、左候はゞ國をはなれ、他へ出る事は得せず候、いかなる死刑にも處せられ候へば大幸に候、若事濟出牢にては自殺より外なく候、此御情に今日重科に處せられ給へと、くれ〴〵と云しかば、奉行にも、古き大家の作法さもこそ有べく候へと感歎して、然ば吟味の中、留守居中へ預り申され候へ迚歸されつゝ、一兩度尋の上に濟たりしと、

〔先哲叢談續編十〕平賀鳩溪○中略

瀧澤曲亭贈一書、載鳩溪實不死淸室云、鳩溪喜怒不節、乘忿激勢、誤殿傷豪商之子、以至不可救、爲之幽逮、一權貴素愛才器、將救解之、竊爲其地、東都令堅執法不可、權貴回護百方告之、都令勢不可已、與衆相議、無能得其理解、屬吏與鳩溪善者、私告其實、鳩溪拍掌曰、善哉公等用意典刑、殺人者死、古今常法、不待縷々、若欲助命、則違法律、審治就戮、則喪天下可惜之人、不若相持兩端、得其處置、都令傳聞其言、告之權貴、懇請鳩溪、聽其裁畫、曰有一策於此、僕自製一帖麻藥、呑之則立死耳、然則聲言於未及決定罪狀而病死淸室、撿尸之後、傳致之家、門人等必葬埋耳、然則上不違法、中適垂救惠恩、下散怨者忿意矣、僕數日死、猶中山醇醪善醉於人、豈非良策乎、都令再告、遂從其言、鳩溪贈一封書於門人、取藥品家自製之、服藥而死、然固秘其事、不使之知、鳩溪自恥苟免、晦跡遠州、鬻口方技、文化之初有見之者、歲八十有餘、故曰鳩溪有罪死於獄中者、實非是矣、

附　溜

溜ハタメト云フ、非人ノ居ル所ニシテ、淺草、品川ノ兩溜アリ、溜預ハ重病者、及ビ幼者等ノ犯罪人ヲ囚禁シ置キテ、平愈及ビ生長ヲ待ツヲ謂フ、而シテ溜ニモ亦法度等アル事、獄舍ニ異ナラザレドモ、獄舍ニ比スレバ、寬ナルモノナリ、

〔德川禁令考後聚一附錄〕淺草溜起立之事

一貞享四年卯三月廿六日、北條安房守勤役之節、初而囚人兩人、非人頭善七江預申付、同五月廿三日、甲斐庄飛騨守掛リ、囚人一人相預、同年十月加役井戸新右衛門、中根主税より囚人相預、其節より追々預申付候得共、囚人纔ニ有之、圍之内江二間半ニ、五間之所拵、囚人共差置候處、其後預之者多人數ニ相成候ニ付、溜增地之儀、善七願出、元祿二卯年七月十一日、淺草松平兵部少輔揚畑屋敷ニ而、增地二十間ニ、裏打四十五間、溜添地相渡候、東江下水幅七尺、北江下水幅四尺、南江二十間、西江四十五間、傍示杭打相渡ス、

一右增地之內江壹之溜と唱、三間梁ニ七間一ヶ所、二之溜、三間梁ニ拾間一ヶ所、都合二ヶ所、合建坪五拾二坪、右普請自分入用ニ而相建、囚人共入置候、尤外ニ女溜、二間梁ニ四間之所相建候處、寶永七年ニ致破損候ニ付、其以後者女預ヶ有之節者、善七圍之內ニ差置候事、

一元文元辰年、善七自分入用を以、溜擴樣替致し、柿葺ニ而、本溜梁間三間、桁行拾間、二之溜二間四方、三之溜二間四方、建坪合五拾坪、

右之外、諸番屋共相建、其後寶暦十三未年、本溜朽損候ニ付、依田豐前守勤役之節、初而修復之儀願出、御入用金九拾五兩差遣、柿葺にて保惡鋪候ニ付、瓦松皮葺ニ申付、尤古來ハ行倒無宿之類重ニ有之、其後吟味之者多相成候間、手厚修復申付候、是より以來、當時ハ類燒井溜修復之儀願出候得者、見廻與力札之上、御入用金相渡、修復申付候、見合年月等例書後ニ記候事、

〇〇

一女溜之儀、寶永年中、大破後相止、女預之節ハ、圍內小屋頭共江順々ニ預置候處、不要害ニ付、寬延二巳年四月、能勢肥後守勤役之節願出、善七自分入用を以、女溜二間ニ三間、一疊敷宛圍五ツ補理、亂心者等入置候處、明和九辰年二月廿九日燒失以來、本溜同樣御入用金ニ而修復申付候事、

〔德川禁令考後聚附錄一〕淺草溜起立之事〇中略

溜總竹矢來、杉丸太柵矢來ニ相改ル覺書、

一溜總竹矢來ニ有之候處、寶暦七丑年十一月、土屋越前守勤役之節、矢來六十九間之所、新規ニ杉丸太柵矢來ニ仕替候ニ付、御入用金四拾六兩三分餘被下相建、其後安永三午年五月、曲淵甲斐守勤役之節、御入用金四拾九兩貳分餘被下、新規建直有之、寛政八辰年四月、小田切土佐守掛ニ而、御金藏渡御入用金四拾兩三分餘被下、修復有之候、右修復之節、繪圖面ニ致し、仕樣帳面を以、見廻り與力迄申立候ニ付、見分之上、月番之奉行江申聞、糺之上、願之通申付、普請中見廻り與力、下役同心、日々場所見分致し、皆出來之節、見廻與力見分之上、御入用金相渡遣候事、

〔德川禁令考後聚一附錄〕品川溜起立之事

一貞享四卯年九月廿六日、加役井戸新右衛門掛囚人一人始而相預、其後元祿四未年三月十二日、能勢出雲守掛、囚人一人始而預ケ申付、是より以後、諸奉行より預有之候得共、圍之內手下小屋を溜ニ拵入置候處、段々預ケ之者多相成候ニ付、溜地之儀、松前伊豆守、保田越前守江願出、元祿十三辰年七月十一日、溜地居小屋續ニ而、五百二十三坪四合餘相渡候事、

一右溜地江二間半ニ七間、總二階之溜、新規松右衛門自分入用ニ而取建、預ケ之者入置候處、同十五午年二月十一日、溜類燒ニ付、溜取建金願出、同三月八日、初而御入用金百兩差遣、二間半ニ五間之總二階有之、溜二ケ所取建、預ケ之もの入置、是より以來溜修復之儀願出候得者、見廻與力より申立、糺之上、御入用金ニ而修復申付候事、

但見合年月例書後ニ記候事

〔德川禁令考後聚二附錄〕後章 溜囚人取扱方之事〇中略

囚人取扱候小屋頭江溜番人等人數極候事

一溜掛手代小屋頭十四人ニ日而、々二人宛帳付所江相詰罷在、溜預并呼出囚人出入相改、其外諸訴向帳面取調候、

一溜上番人小屋頭十五人ニ而、日々二人宛相詰罷在、預囚人勞、總體取締心付、病人好候品帳面ニ記申出爲ㇾ給、呼出、囚人出入之節者、溜手代立合相改、毎夕手代一人、上番人一人、溜内江遣入、人數相改、其外損所等心附候、

一溜鍵番人小屋頭七人ニ而、日々一人宛相詰罷在、預囚人出入之節、開閉仕、錠口等時々相改候、

一溜藥役小屋頭二十八人ニ而、晝二人宛、夜二人宛相詰、預囚人病人藥煎、其外病人好候給物煮燒致し爲ㇾ給候、

一女溜上番人小屋頭七人ニ而、晝夜一人宛相詰、本溜上番人同樣取計候、

一溜預囚人呼出ニ附添罷在候、横目并諸訴ニ差出候小屋頭三十八人ニ而、日々八人宛壽七方江相詰候、

但御用多之節者、外小屋頭臨時ニ繰上ゲ相勤候、

一溜内名主役者、兩町奉行掛囚人之内ニ而申付、相囚人勞リ等申付候、但此名主役之儀寶暦六子年四月、松平右近將監殿御尋ニ付、番七松右衛門相糺候處、名主役申付候者、他掛リ相除、兩役所掛リ之内、吟味掛リ候者、是又行倒無宿共預ヶ候内、實體ニ相見、病人取扱宜敷可ㇾ致者を見立申付候旨、兩溜非人頭共申出候ニ付、其段土屋越前守申上候事、

〔德川禁令考後聚附錄二〕品川溜囚人取扱方、并手代等勤方之事、〇中略

一溜掛手代十二人、晝夜二人宛相詰、溜預呼出、歸溜等之節出入相改、其外諸訴諸帳面等取調、御用筋心付取扱セ申候、

一溜鍵役之者五人、是者晝夜一人宛相詰、囚人出入錠口〆リ心附候、

一見張番之者十八人、晝一人宛相詰、夜分者二人宛相詰、溜圍外半時代リ相廻ル、但加役方掛囚人有ㇾ之節者、五人相增、二十三人宛相掛リ、兩加役方掛有ㇾ之節者、五人增、都合二十八人相掛候事、

一溜内名主役之儀者、兩御役所掛囚人之内ニ而申付、相囚人勞リ等申付、尤名主役申付候得者、兩

見廻り與力江相屆候事、

〔德川禁令考後聚二附錄〕淺草溜內法度書之事

一溜內之法度相守、名主之申付相背申間敷事、

一溜內役人共、相囚人江吟味ヶ間敷儀申掛ケ、內分ニ而窮迷等爲致申間敷候事、

一博弈停止之事

一御吟味ニ付、溜內ニ而引分候者勿論、平生之囚人をも近付雜談爲致申間敷事、

一溜御預之者、并御呼出歸之者、此方ニ而改入候得共、万一刃物金錢筆墨等、其外溜內法度之品隱し持遣入候ハヽ、早速此方江可相達事、

一湯日、并土用中凉、又者牢內出入之節、中矢來內江出、古釘之類、或ハ木切瓦等ニ至迄、牢內江持遣入申間敷事、

一牢御預之者、衣類貸借、決而致間敷、出溜之者、衣類上帶下帶等留置申間敷事、

一囚人相煩候ハヽ、何時不限、此方江可相達、其上容體得と相糺、丸散丹圓膏藥等、申上願出候當人江相渡可申、尤病氣快氣之者ハ、早速此方江相達、無益之藥爲給申間敷事、

一溜內上座下座不相隔、込合不申候樣差置可申事、

一宿々より屆候錢、番人江相渡申候、且又洗錢座錢抔と申掛ケ、錢爲出申間敷候事、

一每月三度宛骨折錢、又者勞錢等遣候上ハ、猶又總囚人江行屆候樣可致事、

右之條々堅相守可申、若相背候ハヽ、其御掛樣江申上、番人者不及申、名主役人共迄も、御咎被仰付候樣可致間、急度相愼可申事、

但寶曆十辰年、牢舍格を以、多人數御預被仰付候節、牢內掟書ニ准じ、本文之通認、溜內江掛ケ置候、以前者行倒無宿之類計預り候ニ付、掟書等無之事、

溜預

右之通、善七書付差出候、文面之儘記置候、

〔御定書百箇條〕溜預ヶ之事

享保七年 寛保二年極
一牢舍申付候者、最初より溜江遣間敷候、乍併入牢之上重病之者ハ、御仕置伺置候者にても溜江遣可申事、

寛保二年極
但逆罪之者ハ、病氣にても溜江遣申間敷事、

〔御定書百箇條〕無宿かた附之事

享保九年極
一引取人無之ものハ　　門前拂

從前々之例
但病人ハ快氣迄溜預ヶ

〔江都管轄秘鑑六〕溜の摸様御穿鑿の事

享保三子年二月五日、水野和泉守どの御渡の御書付寫、

町奉行江

毎月被書出候牢舍の者、書付のうち、溜預りのもの書出し可被申候、但最初より溜へ遣し候もの、又ハ牢屋より溜へ遣し候ものハ兩樣ともに書載可被申候、

二月

覺

昨日被仰聞候兩非人溜の義、即日與力共へ差遣し見分爲仕候處、溜と申候ハ、長屋作りに仕、總板敷疊を敷、竈も內に有之、夜中ハあり明も所々に有之、晝夜ともに煮焼いたし、湯、茶、たばこ、藥等も給べ申度時分ハ、心儘に被下、寒氣の節ハ、焚火にもあたり居、風呂も幾度も入、第一牢屋と違ひ、格子一重にて、はれ〳〵といたし吹貫申候に付、あしきにほひ等曾て無御座候て、奇麗に御座候、其

うへ囚人の内、庭へも罷出候間、牢内とハ格別囚人のためにハよし、病人など養生には溜の方至極よろしく候旨申聞候、則兩溜の繪圖面二枚奉レ懸二御目一候、巳上、

二月　　　　　　　　　　　　　　　　中山出雲守

　　　　　　　　　　　　　　　　　　大岡越前守

右ハ若年寄有馬兵庫頭殿へ上られけるよし、されば此上書面の趣にてハ、溜人のもの多く可レ被二仰付一と思ひ之處、存じの外、同年五月十八日御用番戸田山城守殿には牧野因幡守、中山出雲守、水野伯耆守を中の間へ御呼、左の御書付御渡し候也、

一囚人ども非人溜へ遣し候儀ハ不レ宜事に候間、向後溜へ遣し申間敷候、併無宿行倒れ病人は遣し候て不レ叶ものニ候間、只今までの通り預け可二申付一候、

〔道中秘書十一〕溜預替證文之事

亥月　日直溜預　　　　　　　　　　　　幸吉子才

右之もの儀、淺草溜江預替申付、出溜申付もの也、

子正月晦日　　　　　主計役所

　　　　　　　　　　　　　　　　　　品川松右衛門

亥月　日直溜預　　　　　　　　　　　　幸吉子才

右之もの儀、溜預申付ルもの也、

子正月晦日　　　　　主計役所

　　　　　　　　　　　　　　　　　　車善七

〔公事手留〕主水正(石川)掛大野村無宿坊主勘藏一件落着書物〇中略

溜預證文

大野村無宿坊主
勘藏
未二十八才
未何月幾日入牢
右之もの儀、佐州江水替人足ニ差遣迄、溜預申付候もの也、
主水役所

〔舊記拾要集二〕享保七年寅八月十八日、御用覺帳書抜、
牢内四人重病ニ而、非人溜江御預被仰付候節、同心附遣候仕方、
一唯今迄ハ牢内ゟ重病ニ而、非人溜江被遣候四人之儀、出牢之御證文牢屋江年寄同心持參仕候ヘバ、直ニ其四人を出シ、非人江相渡遣申候、
自今ハ帶刀組同心を壹人宛差添遣可然儀ニ御座候、然共出牢之御證文御文言、只今迄之通ニ而ハ出牢已後、帶刀組同心を四人江差添申儀ハ如何ニ御座候、依之向後右御證文之御文言、別紙之通可被仰付候哉、書付奉入御覽候、
一只今迄ハ歸牢被仰付候節ハ、非人溜ゟ小頭一人四人江差添、御番所江召連罷出申候、
自今ハ歸牢もの有之節、御掛りゟ同心壹人溜江被遣、其四人を御番所江召連候樣ニ可被仰付候哉、尤歸牢之被仰渡相濟候上ニ而、牢屋江召連候儀ハ、只今迄之通年寄同心双方立合召連可然奉存候、
但御番所ゟ直ニ非人溜江御預被仰付候、無宿行倒もの亂心者之類ハ、溜江被遣候節、並被召出候節共ニ同心附候ニ及申間敷哉奉存候、
右之通向後可被仰付候哉、奉伺候、以上、
寅八月十八日　佐久間治右衛門
鈴木逸八郎

壹人誰　是ハ何町之もの

右之者牢内ニ而、強ク相煩候ニ付、非人頭江預申付候、溜江遣養生可爲致者也、

月日御名

右之通自今可被成候、以上、

〔御仕置例類集一ノ三十一〕文政四巳年御渡

火附盜賊改長井五右衛門伺

一麻布坂下町家主三郎兵衛方ニ居候、きち事きよ附火いたし候一件、

麻布坂下町家主三郎兵衛方ニ居候きち事きよ

右之もの儀、先達而遠島申渡、預ヶニ相成候處、來春ニ相成候得者出帆いたし候間逃去候訴いたし、江戸表江奉公ニ差出候由、權右衛門任申旨、三郎兵衛方世話ニ成罷在候處、女房ひさ儀、乳ニ腫物出來いたし、小兒も不相勝手傳等いたし、勝手向手廻不申候節被叱難居遂、遠島之儀故、親之元江便りも致し兼候間、附火いたし燒拂候はゝ、親許江立歸可申と居宅脇路次上ニ上り有之葭簀江附火いたし候段、幼年ニ而辨無之とハ乍申、右始末不屆至極ニ付、火罪御仕置ニも可奉伺處、十五歳以下ニ付遠島、

但十五歳迄溜預

此儀御定書ニ、子心ニ而無辨附火いたし候もの、十五歳迄親類江預ヶ置遠島と有之候處、此ものハ再犯之儀ニ付、御仕置相重可申哉と、再應先例相糺候處、差當相當之例相見不申候得共、寬政六寅年、評議ニ御下ヶ被成候、長谷川平藏火附盜賊改勤役之節相伺候、寄場人足阿波無宿榮藏事、入墨織藏儀、盜いたし候依科入墨敲之上、寄場江差遣置候處、右場所逃去、野田ニ而賽博弈いたし候依科、死罪御仕置ニも可相成處、十五歳以下ニ付、寄場入墨之上、重敲ニ相成候後、又候右場所逃去候段不屆ニ付、死罪御仕置ニも相伺可申處、十五歳以下之ものニ付遠島と相伺、評

議之上伺之通と申上候例有之、品ハ違候得共、幼年ニ而死刑ニ可相成罪狀之もの、再犯ニ而も
御仕置相弛候段ハ同樣之趣意ニ付、伺之通遠島申渡、出帆迄溜預、
朱書
評議之通濟

溜囚人供給

〔徳川禁令考後聚附二後鑑章〕溜內法度書之事○中略
扶持米御入用金銀錢請拂方之事
一享保八年卯正月十九日、三奉行掛溜御入用金者、一ヶ月切勘定ニ而、每月相渡、御扶持米者、三ヶ
月切勘定ニ而、一ヶ年四度ニ相渡候積、大岡越前守、中山出雲守勤役中、申渡有之候事、
一安永二巳年九月十四日、三奉行掛、加役方掛も溜御入用御扶持米、一ヶ月切勘定有之樣致度段
願ニ付、牧野大隅守、曲淵甲斐守勤役中、願之通諸掛り共以來一ヶ月切勘定ニ被下候事、
一加役方掛囚人御扶持米御入用金者、加役方役所ニて請取候事、但加役方溜預囚人御扶持之儀も享保三戌年迄ハ、町奉行ニ而一所ニ勘定仕拂致し候處、勘定等差障候間、以來御扶持米も加役方ニテ雜用金とも一所に請拂致し候樣致度旨、享保四亥年七月七日、大岡越前守、中山出雲守、并上河內守殿江申上候處、同月十九日、御同人御書付を以、伺之通被仰渡候、

〔江都管鑰秘鑑六〕溜の囚人扶持米の事
享保四亥年七月二日御用書、井上河內守殿町奉行より上られたる、溜の囚人扶持米の事伺ひの
書付、左に記す、
覺
加役方非人溜に差置候囚人ども、御扶持方米の義、去ル亥年までは、私共方ニ而一所に勘定仕拂
候處、御扶持米の義も、加役方にて雜用金と一所にいたし、受拂候樣仕度奉存候、御扶持米私方に
て、請拂仕候ては、御勘定差支申候に付申上候、已上、
七月　中山出雲守

大岡越前守

右の書付御老中方御評議の上、同十九日、井上河内守殿御直に、大岡越前守へ書付を以て、被仰渡有之、右扶持米は加役方掛りとなる、

町奉行江

加役方非人溜に差置候囚人ども、扶持方米の義、町奉行方にて請拂いたし候へば、指跨り候間、當年より加役方雜用金と一所に致し、式部山川安左衛門へ申渡候間、可被談候、

溜囚人取扱

〔德川禁令考後聚二 附錄〕淺草溜囚人取扱方之事

一預之者有之節者、手代井上番人立合、當人相改、衣類等帳面ニ記し、病人者醫師呼寄、早速藥相用ひ候事、

一諸掛り囚人呼出之節者、致手當相改差出候事、

一囚人每月六度宛入湯爲致、遣ひ湯も每日遣ひ候事、

一土用中溜鞘内ニ而爲凉、折々干飯等入遣し、寒中夜分粥杯入隨分勞候事、

一每月三度、手代上番人溜内江遣入、損所井法度之品相改、翌日兩見廻り與力迄屆候事、

一病死之者有之節者、手代上番人醫師立合相糺候上、掛り奉行所江訴出、見分之上、下知相濟次第、死骸片付、取捨等致し候事、

〔德川禁令考後聚二 附錄〕品川溜囚人取扱方、井手代等勤方之事、

一諸懸囚人取扱之儀者、溜預之者有之候節者、溜書物所ニ而、當人着類、井雜物等有之候哉、得と相改、溜掛手代之者、差添、溜内江入候、勿論病人、井疵人等相預候節者、早速溜醫師呼寄、藥相用候、

一預之者呼出之節者、溜掛手代溜内江罷越、呼出シ之趣當人江申聞、着類等相改、横目人足差添途中心附候樣申付、差出歸溜申付候節、右同樣相改、牢内江入置候事、

出溜

一一ヶ月ニ兩三度宛、溜內損シ所、又者法度之品有之哉、幷囚人着類、其外相改、翌日見廻與力江相屆、尤日々松右衞門、幷組頭溜掛之手代共、朝夕共相改相廻り候事、

一囚人每月六度宛、入湯爲致候事、

一溜預囚人共、土用入より冷氣ニ相成候迄、每年伺候上、晝四時より夕七時迄、溜鞘ニ而爲涼候事、

〔德川禁令考後聚二附錄〕溜〇淺草醫師之儀、囚人月代摘之事、

一溜醫師之儀者、善七自分入用を以、町醫を相賴置、每朝溜內江爲見舞、預急病人等有之節者、不限何時呼寄セ、療治爲仕、以前ハ兩人宛有之候處、預囚人人少ニ相成候ニ付、寬政三亥年中、伺之上、一人ニ相成候、藥種之儀者、善七方ニ而相調致調合、病症ニ寄、掛奉行所江人參相願、服用爲致候者も有之候、

一囚人月代摘之儀者、每年七月十二月兩度宛伺出、重病人相除キ爲摘候、逆上强難儀致し候もの者、臨時ニ伺出爲摘候、

〔德川禁令考後聚二附錄〕溜〇品川醫師之儀、幷囚人月代摘之事、

一溜醫師之儀者、最寄ニ罷在候町醫師を定賴置、療治方之儀者、日々兩度宛溜內も見廻、病人容體等を聞、藥調合仕、病人共ニ相用、疵人等有之候得者、洗藥膏藥等相用、病體之品ニ應じ掛り之役所江願、人參等相用、隨分入念療治致し、急病人等有之節者、早速呼寄、容體見候而、藥用致し候事、

一病死之節之取計方、善七同樣之事、

一溜醫師給分之儀ハ、松右衞門自分入用を以差遣候事、

一諸掛預囚人月代摘之儀者、行倒ものハ、三月五月九月、總摘之儀者七月十二月兩度、此外眼病ニ而相煩候者ハ、一兩人宛、臨時願候上爲摘候事、

〔公事手留〕出溜證文

溜破

未何月幾日入牢

右之もの令入牢出溜申付ル者也、

主水役所

〔御仕置例類集 三〕寛政九年巳年御渡

長崎奉行伺

一於肥前國長崎捕候無宿共、溜抜致し候一件

高木作右衛門御代官所
元肥前國彼杵郡浦上村中野郷
無宿 紋左衛門
外一人

大野村無宿坊主
勘藏
未二十八才

右之もの共儀、同類申合、又ハ一分ニ而盗致シ、五十敲、百敲、入墨、追拂、或ハ入墨百敲追拂等ニ成候上、構之地江立入候ニ付、追而佐州金銀山爲水汲人夫差遣候積リ、溜入申付置候處、數月ニ相成、難儀ニ候迚、兩人申合、溜を破抜出、外圍之堀を乘越逃去リ候段、不屆之至ニ付中追放、

此儀長崎奉行所之仕來ハ、重中輕追放之外、追拂長崎拂と申御仕置有之、追拂ハ長崎市中井郷中を構、長崎拂ハ、市中計相構、郷中ニ罷在候儀ハ差構不申儀之由、兼而承罷在候、右ハ御當地之御仕置ニ引當候得バ、追拂ハ江戸拾里四方追放、長崎拂バ江戸拂ニ准じ可申、然處此もの共構之場所江立入候科ハ、御構之地ニ徘徊いたし候者、前之御仕置より一等重く可申付旨之御定ニ見合、輕追放ニ相當リ候處、溜抜いたし候不屆も有之候間、牢抜出候もの、本罪相當より一等重く可申付旨之御定ニ見合、右本罪之輕追放より一等重く、中追放ニ相當り候間、此度相伺候御仕置之儀ハ、振れ候儀も無御座候得共、吟味之趣ニ而ハ、構之場所江立入候を召捕吟味之上、外ニ惡事無御座候ニ付、追而佐州金銀山水汲人夫ニ可遣旨申渡、溜入申付置候由有之、右之趣ニ而ハ、無罪之無宿之取扱ひニ而、水汲人夫ニ可遣旨申渡候儀と相聞、御構之地江立入候もの、

前之御仕置より一等重く可申付儀ハ相辨不申儀と相見申候間以來都而御構之地江立入候ものハ外ニ惡事無之候とも御仕置之儀其度々相伺可申

評議之通濟

溜內不法處分

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政六未年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一間々田宿無宿源太郎外三人於溜不屆之取計いたし候一件

石川主水正掛

間々田宿無宿　源太郎

右之もの義無宿彌太吉外貳人申合一同長脇差を拔引提野州佐川野村幸右衛門方江罷越金子可借受旨申懸候處同人逃去候ニ付手元ニ有之錢貳拾壹貫文盗取其上無宿鰲八外三人申合同國間々田村地內往來ニ而下總國古河宿庄兵衛江口論を仕掛同人を打擲いたし候上難題申懸金三分押而借受又ハ無宿巳之松申合同國橋宮村直左衛門方江鋸鑓子等持參錢借受度旨申懸不承知ニ候迚彼是事六ヶ敷申懸右鋸鑓子ハ取戻し錢四貫文押而借受其外博奕を渡世同樣ニ打步行手目博奕又ハ貸元等いたし候始末申立病氣ニ付品川溜預ニ相成候處迚も重キ御仕置難遁溜可逃去旨沖八外兩人江申聞候處同意いたし候ニ付當正月十九日夜外四人共熟睡いたし候透を見合石山安五郎ハ取崩候手桶之箍を延三筋合結付候先江小續を付溜艙外ニ有之行燈鐵網之損所ゟ火を移板切又ハ古綿等江小續之火を吹付溜內格子一本横貫とも燒切塊助目覺聲立候はゞ可殺と此もの沖八ハ塊助臥り候側ニ附添罷在石山安五郎儀燒切候場所ゟ潜遣所江出石山儀溜境開戸時壺を押へ外之艙內迄立出候處被見咎安五郎ハ下帶貳筋續合火を移取持參候を溜內江投捨候處古莚江火移燃立同人者溜內江這入石山ハ艙內ニ而溜番人共ニ

被捕押候始末不屆至極ニ付引廻之上火罪、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文政六未年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一間々田宿無宿源太郎外三人、溜おゐて不屆之取計いたし候一件、

石川主水正掛
凡達村無宿
揔助

右之もの儀、溜內世話役いたし、相溜四人源太郎外三人溜拔企候哉、其儀は不存、當正月十九日、夜五ッ半時頃臥ッ熟睡いたし、曉七時頃目覺候處、源太郎沖八儀臥り候側ニ附添罷在、溜格子之邊に而物音いたし、怪敷儀とは存候得共、聲立候はゞ如何樣之儀可有之も難計、怖敷相成候迚、其儘臥り居、既ニ石山外壹人儀、溜格子を燒切、溜稍內迄立出候仕儀ニ相成候段、世話役いたし候詮無之、旁不埒ニ附於溜五十日手鎖、

此儀御答附ニ、榊原主計頭申上候例之權六は牢番人之儀、今般之揔助は四人之內ニ而、世話役いたし候迄之ものニ而、殊ニ四人は聽し候趣意重モ之ものニ付、猶先例相糺し候處、差當り相當之例相見不申、享和元酉年、菅沼越前守御勘定奉行勤役之節、伺之上申渡候、豊前國齋藤村彌四郎儀、平六小右衞門及口論候節、一旦支人ニ立入候はゞ、如何樣ニも取鎮方可有之處、同人は强力故不及力候迚、其場を立退候始末不束ニ付、急度叱ッ可置處、日數入牢ニ付分宥免御答之不及沙汰段申渡候類例有之、尤溜內世話役は、牢內名主ニ准候もの之由、吟味書朱書ニ有之、一通り之身分ニも無之候間、例之權六ゟ輕く、彌四郎ゟ重く、於溜三十日手鎖、

朱書 評議之通濟

御答附ニ主計頭申上候例

天明八申年、根岸肥前守御勘定奉行之節、伺之上御咎申付候、越後國石瀬村百姓權六儀、牢番いたし乍ㇾ罷在、無宿伊助五郎作任ㇾ相賴、筆墨代線香度々牢內江入遣し候故、相牢之もの共牢拔之始末申合、右線香ニ而格子一本燒切、直七外貳人牢拔いたし候處、其儀を不ㇾ存段、不埒ニ付五十日手鎖、

古事類苑

法律部五十二

下編下

赦宥

赦律　三三九
會赦處分　三五一
會赦年限　三六七
赦帳　三七三
請赦宥 請出召　三七六
赦宥御教書　三七八
大赦　同
赦輕罪　三八〇
特赦　三八一
赦宥例　三八三
死後赦宥　三八七
降罪　三八八
不赦　三九一
雜載　三九七

古事類苑

法律部五十二

下編下

赦宥

徳川幕府赦宥ノ儀ハ寺社奉行、町奉行、勘定奉行、京都諸司代、遠國奉行、火附盗賊改ノ輩、先ヅ囚徒ノ名ヲ錄シ、之ヲ赦律及ビ先例ニ照準シ、赦不赦ヲ判別スルナリ、而シテ弑逆殺人放火強盗等ノ重罪者ハ、赦ニ預ルヲ得ズ、又其刑ニ從ヒテ、赦ヲ得ル年限ヲ立テタレバ、其年ニ至ラザレバ、亦赦ニ預ルコトヲ得ザルナリ、

赦宥ハ特赦ノ外ハ、朝廷幕府ノ慶弔アルニ方リテ、行フモノニシテ、卽位、改元、薨閤、將軍宣下、日光社參、幕府姻戚ノ結婚、將軍子女ノ誕生、將軍薨去及ビ年忌ノ法事等ノ如キ是ナリ、而シテ幕府ノ法事ニ於テスルヲ、法事ノ赦ト云フ、卽チ東叡山寛永寺、又ハ三緣山增上寺ニテ幕府ノタメニ法事ヲ行フニ際シ、現ニ刑網ニ在ル者ノ、親戚ヨリ此兩山ニ向ヒテ赦ヲ請ヒ、兩山ニテハ其名ヲ錄シテ、幕府ニ致ス、之ヲ廻赦帳、又ハ赦帳ト云フ、幕府ニテハ其赦スベキ者ヲ簡ビ、之ヲ法事ノ場ニ召シ、直ニ之ヲ釋スナリ、此外ニ赦免セズシテ、其刑ヲ降スモノアリ、亦赦ノ類ニ屬ス、

赦律

〔大赦律〕但朱書之儀ハ爲二御見合一今般認入候儀ニ御座候

赦ニ難レ被レ行罪狀之事

一人殺ニ決、白狀不レ致もの、

朱書
是ハ今般取調候箇條書之内、七ヶ條ニ相成申候、

一遠島ニ成、又候悪事いたし、島替ニ成候もの、

朱書
是ハ右同断、貳拾貳ヶ條ニ相認申候、

一一旦御赦ニ成、又候悪事いたし候もの、

朱書
是ハ右同断、貳拾七ヶ條ニ相認申候、

右三ヶ條前々より御免之例無之、年暦相立候而も赦免難成事、

一般ニ難成、赦免と難決状之事

一不忠不孝之科、其外君父江対し、非禮不法之刑ニ行れ候もの、

右之内、母之申渡を不用、幷離縁後養父方江罷越、我儘等申候類ハ、御免之例有之候事、

朱書
是ハ右同断、八ヶ條、評議之上取直認申候、

一三島派不受不施類之宗法を持、又ハ人ニ勧候もの、

右之内、携候ものハ御免之例有之候事、

朱書
是ハ右同断、拾七ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

一相手を片輪ニいたし候もの

右之内、遠島ニ相成候ものハ難成、追放ニ成候分ハ、三拾年以上ハ御免之積、

朱書
是ハ右同断、九ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

一牢屋敷類焼之節、放遣し立帰候もの、

右之内、死罪を被宥候分ハ、一般ニ難成、遠島以下ハ例ニ見合御免之先例有之候事、

朱書
是ハ右同断、貳拾八ヶ條之内ニ、評議之上取直相認申候、

一盗衒いたし候もの

是ハ向々より書上、前々ハ御免之例多有之、其後急度被仰渡ハ無之候得共、寛政三亥年、御法事御赦之儀ニ付、申上候書面之内、近來盜賊ハ、御赦ニ申上間敷旨之御沙汰も有之段申上、且右類之もの御赦ニ不相成旨、享和二戌、翌亥兩年所司代太田備中守殿被仰渡、以來、御赦ニ不書上旨、京都町奉行より申來候儀も有之、入墨又ハ敲ニ相成候盜賊、御赦之品無之ニ付、右同樣之惡事いたし、前々遠島追放等ニ相成、外ニ子細も無之ものハ、諸向より書上候とも、先ハ御免之儀申上間敷、

但當座之出來心ニ而、かたり又ハ手元ニ有之品を取候類、本心ニ立返り候儀も可有之、或ハ主親等之ため、一旦盜惡事ニ紛敷類も可有之事故、其始末次第之儀ニ付、評議之上可決事、

右之通、古律ニ有之候得共、追々取調之上、大赦ニハ、死罪ニ可成盜賊之分ハ難成、其以下ハ御免ニ成候積り相成候處、右盜賊之儀ハ、文化十三子年之大赦以來之先例等見合可決事、

朱書
是ハ赦免年數之儀、追加拾貳ヶ條ニ有之候間、右ニ基き、今般取調候箇條書之内、拾參ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

例ハ有之候得共難成赦免罪狀之事

一死罪可申付處、御赦ニ遠島追放等申付候もの、

是ハ御免之例有之候得共、一旦御赦ニ死罪を被宥候もの、又候御赦ニハ相成間敷間、御免之儀ハ不申上事、

朱書
是ハ今般取調候書條之内、貳拾七ヶ條ニ評議之上取直相認申候、

容易難成赦免罪狀之事

一人殺ニ無紛相聞候迄ニ而難決ニ付、遠島ニ成候もの、

是ハ御免之例有之候得共、右例的當之もの二候とも、評議之上可決事、

朱書
是ハ右同斷、七ヶ條ニ觸り申候、

一附火いたし、遠島ニ相成候もの、

但子心ニ而、火消出候を面白く存、附火いたし候類、貳拾年以上御免、愚昧亂心、又ハ自分之功ニ可致と火を附候類ハ難成旨、文政十一子年、大赦評議中取極り候間、事實勘辨之上可決事、

朱書
是ハ右同斷、十八ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

一當人之科ニ而、中追放申付、拾五歳迄親類江預ケ之内、出家願いたし候もの、

是ハ先例有之候得共、一體當人之科ニ付、父之科とハ譯違、いまだ其科ニ不被行ものニ付、科之次第評議之上可決事、

朱書
是ハ右同斷、三拾一ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

父之科ニよつて御仕置ニ相成候もの赦免之事

一父之科ニ而、遠島ニ成候もの、

是ハ年數之不依多少ニ例ニ見合御免之儀計申上、御下知之節ハ、御祝儀之赦ニ而も、遠島赦免出家可申付と被仰出候事、

朱書
是ハ右同斷、三拾ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

一同中追放ニ相成候もの

是ハ右同斷、御免之節出家ニハ不被仰付、直ニ御免ニ相成候事、

朱書
是ハ右同斷

一同遠島追放申渡、拾五歳以下ニ付、親類江預ケ中之もの、

是ハ右貳ヶ條同斷

朱書
是ハ右同斷

一同遠島追放ニ相成、又ハ拾五歳以下ニ付、親類江預ケ置候もの、大赦ニ書上候後、出家願出候節、右出家願ハ不被及御沙汰、其もの計引分ケ、御免之儀申上候節、先例ニ見合、遠島之ものハ出家可被仰付哉之段申上、追放之ものハ、出家之儀不申上事、

朱書
是ハ其節々、一時之取計ニ而、規則ニいたし置候程之儀ハ無之候間、今般取調候箇條之方ニ相除申候、

刑名ニ而ハ、難成赦免套ニ候得共、則其科を宥メ、又ハ其刑名を赦免可有之罪狀之事、

一一生之内押込

一永く御預ケ

一改易

一御切米御扶持方召放

右四ケ條御免之例有之候事

是ハ總而御赦ニ相成候ものハ、心底相改候得バ、其仕成候惡事之套、消候道理ニ相當り、又ハ前科之相手等江對し、再論不起、他之害ニ不相成類之ものハ、先例ニ見合、評議之上御免之儀可申上事、

朱書
是ハ今般取調候箇條書之内、弐ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

博弈御仕置御免年數之事

一博弈一通り之御仕置ニ相成候もの

是ハ六ケ年目より、御免之儀可申上事ニ候得共、御家人之分ハ、拾ケ年過可申上、厄介人ハ武家之家來同様、六ケ年目より御免之積り、

朱書
是ハ右同斷、四ケ條ニ、評議之上取直相認申候、

一無宿も一般ニ御免之儀申上、御免之節、行衛不知、身寄等不知類も、元居村役人、又ハ元一件引合等江申渡候事、

但行衛不知、無宿之儀ニ付、先年之伺ハ、留貳ノ帳ニ有之、且古律之内、問合挨拶振ニ行衛不知分ハ、御免之儀不申上と有之候得共、文化十三子年之大赦以來、本文之通り御屆申上候ニ付、申渡方無之、無宿多分ハ無之事、

朱書
是ハ右同斷、初箇條ニ籠り申候、

一遠島もの在牢中病死之もの

一御仕置申渡後、又ハ伺中病死之もの、

右貳箇條之類、前々三奉行ニハ御赦ニ不申上、遠國奉行申上之内も、同斷之ものハ御免之儀不申上、仕來之處、文政十亥十一月、伺之上、一般ニ御免之儀、相伺候積相成候事、

朱書
是ハ右同斷

一座頭

一非人手下

一穢多非人

右三ケ條、以來御免之儀相伺候積、文政十亥年十一月、伺相濟候事、

朱書
是ハ非人手下ハ右同斷二ケ條、其餘ハ貳拾ケ條ニ、評議之上取直相認申候、

右ハ大赦古律之内、伺之上、事替り候箇條ハ除之、新規之箇條ハ加之、當時專ら評議ニ可用綱目を記置候事、

〔赦律〕御赦取計方之事

一御赦有之候節は、前々御仕置相成候もの共、御赦被仰出候前月迄之分、人別科書可書出事、

一一旦御赦之節、書上難成旨御差圖有之候ものは、重而御赦有之候とも、書上申間敷事、

一御赦之もの書出候節、生死并當時之行衞等不及吟味書出、赦免之上相果候歟、當時行衞不相知もの共は、親類又は由緒有之もの等江、赦免之儀可申渡事、

一赦免之儀申渡候節、遠國之分は、其所御代官領主地頭江相達申渡、武家之家來も遠國に罷在候分は、主人江相達爲申渡可申事、

一遠島ものは、嶋方支配御代官領主江相達、於彼地申渡、出島相願候もの計、出島爲致可申事、

一御法事之節、兩山赦帳に付、其もの赦免に相成候節は、一件不殘取調之上、赦免に相成可然分は、赦帳に不附ものに而も、赦免之儀可申上事、

都而惡事之品不憚公儀を、又は御役筋に拘り候類、其外右等に不拘候とも非道不實、或は格別巧成取計等いたし候もの之事、

一都而惡事之品、不憚公儀を、又は御役筋に拘り、其外非道不實之類に而、格別品不宜分は赦免難成、其趣意品輕きは赦免可申付事、

但本文之類に無之候とも、巧之品格別不宜、人之害を成候類ハ、赦免難成事、

重き惡事に同意いたし、或は事を不遂もの之事、

一重き惡事發意、又は右に同意におよび事を不遂類、事を遂候得ば、死刑難遁程之ものは赦免難成事、

但自分と後悔、惡事相止、不遂事をは赦免可申付事、

罪狀不決に而、御仕置相成候もの之事、

一惡事無紛相聞候得共、申陳罷在候類は赦免難成、罪狀紛敷相聞候迄之ものに候とも、品重きは

赦免難成事、

主人親其外目上之もの江對し、惡事いたし候もの之事、

一主人親、其外目上之親類、支配役人、又は師匠等江對し、惡事いたし候類、赦免難成、右等之儀に拘り候とも、其趣意品輕きは赦免可申付事、

但村役人江對し候儀に候とも、支配請候名主江對し、役筋に付及不法候類、品不宜は赦免難成事、

人を殺、又は疵付候もの之事、

一申合、人を殺、何れ之疵に而相果候哉も難相分もの、并可殺心底に無之、又は相手に不法不實有之候とも、口論之上、事を設候仕成方に而、相手相果候次第に至り候類、赦免難成事、

但全之惡黨ものを殺候類は、赦免可申付事、

一相手不法理不盡之仕成方有之候ゟ事起、人を殺候類、御仕置之輕重に應じ、赦免可申付事、○中略

一人に疵附、相手餘病に而相果候もの、必餘病とも難決は赦免難成、餘病に相決候ものは、御仕置輕重に應じ、赦免可申付事、

一目上之もの之危難見捨がたく人を殺候類、御仕置之輕重に應じ、赦免可申付事、

一實子養子召仕、其外目下之ものに候とも、不筋を以殺候は赦免難成、短慮に而殺候類は、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

一可殺存念に而、人江毒飼いたし候もの赦免難成、疵附候とも、不筋之遺恨、又は利德を以可殺存念に而、人江疵附候もの赦免難成事、

一相手を片輪にいたし候もの、渡世も難成片輪にいたし候は赦免難成、其餘は御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

一人殺之手傳井荷擔いたし候もの、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

一人殺之手引いたし候もの、殺候當人出候においては、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

一差圖を請人を殺候もの、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

徒黨を結び强訴、又は門訴逃散、或は遺恨を以狼藉および候もの之事、

一徒黨を結び强訴、或は逃散等企候類、頭取に無之分、其外遺恨等を以及亂妨候類は、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

但地頭非分之儀等有之、强訴および候類は、頭取ニ候とも、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

一門訴之頭取いたし候もの、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

捕方役人江致手向候もの之事

一捕方役人と乍辨手向いたし候もの赦免難成、不辨分は、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

長脇差井脇差等を帶、惡事いたし候もの之事、

一長脇差井脇差等を帶し步行候無宿惡黨もの之類、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

盜又はかたり事等いたし候もの之事

一盜又はかたり事等、全賊刑之ものに候とも、身分柄に寄、又は子細有之、遠島或は追放に成、又は外惡事をもいたし、入墨敲之上追放に成候類、罪狀に應じ赦免可申付事、

外國人江引合惡事いたし、井唐物拔荷取扱候もの之事、

一外國人江對し惡事いたし、又は外國人と馴合、惡事いたし候類、赦免難成事、

一外國人江直引合は不致、唐物拔荷を取扱候もの、罪狀に應じ赦免可申付事、

密通又は强婬いたし候もの之事

一人之女房と乍㆑弁密會之儀申合、又は强婬可㆑致と仕成、或は夫江手向いたし候類、赦免難㆑成事、

一密通申掛候迄之もの、或は人之女房と不㆑存類、其外品輕きは、御仕置之輕重に應じ赦免可㆓申付㆒事、

一妹、姉、伯母、姪等と密通いたし候もの、赦免難㆑成事、

女犯僧之事

一女犯僧、一寺住職は勿論、所化僧に而も、赦免難㆑成事、

三鳥派不受不施類之法を持、并奇怪之儀申觸し候もの之事、

一三鳥派、不受不施類之宗法、其外異法を持、遠島に成候もの、赦免難㆑成、追放等に相成候は、罪状に應じ赦免可㆓申付㆒事、

一巧を以奇怪之儀を申觸候類、狐を遣ひ人を爲㆑惱、都而人之害に相成候は、赦免難㆑成、其外は罪状に應じ赦免可㆓申付㆒事、

附火いたし候もの之事

一幼年に而、無㆓思慮㆒附火いたし、遠島に相成候ものは、拾六ヶ年以上、赦免可㆓申付㆒、幼年に候とも、遺恨又は盗爲㆑可㆑致仕成候類は、赦免難㆑成、其餘大人愚昧之附火等は、赦免難㆑成事、〇中略

座頭并穢多非人等之事

一座頭盲人、座法之通可㆓申付㆒旨申渡、惣錄江引渡候もの、罪状に應じ、赦免有無評議可㆑致事、

一穢多非人、相當之仕置可㆓申付㆒旨申渡、穢多頭江引渡遣候分、平人同様罪状に應じ、赦免有無評議可㆑致事、

度々御仕置相成候もの之事

一御構場所立入候迄に而、外に惡事無㆑之もの、初度は江戸拂、江戸拾里四方追放、拾壹ヶ年以上輕

追放、中追放、重追放遠島は拾六ヶ年以上、赦免可申付、再度立入候は、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

一御構場所江立入惡事いたし候もの、あばれにも可准惡事之ものは赦免難成、其餘は御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

一一旦御仕置相成、同罪再犯および候もの、御仕置之輕重に准じ赦免可申付事、

但博奕は別段之事

一全之同罪再犯に無之候とも、盜かたりいたし、御仕置相成候後、ねだり事等いたし、御仕置相成候後、盜かたり等いたし、御仕置相成候もの、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

但盜かたり等いたし、入墨御仕置相成候後、猶又全之盜かたりいたし、一體之罪狀、死罪當然之ものは赦免難成事、

一同罪再犯には無之、前科とは別段之惡事に而、度々御仕置に相成候もの、罪狀に應じ赦免可申付事、

一度々御仕置相成候ものは、前科をも取調之上、赦免有無可決事、

但入墨敲等は、御赦之品無之候間、右に不拘、追放刑を以、評議可致事、

遠島に成、又候惡事いたし候もの之事、

一遠島に成、又候惡事いたし候もの、島替に相成候は赦免難成事、

御構場所不立去もの之事

一所拂追放等申付候處、不立去罷在候もの、御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

御仕置當不相當之もの之事、

一御仕置當不相當之もの、當然之御仕置當を以、赦免有無評議可致、尤入墨又は敲相當之もの、追

放刑に相成候は、當然之御仕置、入墨敲ともに、拾壹ヶ年以上、赦免可申付事、

牢屋并人足寄場を逃去候もの之事

一牢拔出候もの、并寄場逃去候もの御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

牢溜等におゐて惡事いたし候もの之事

一牢溜等におゐて之惡事、牢内等を不憚仕成方いたし候は、赦免難成、其餘は御仕置之輕重に應じ赦免可申付事、

一旦御赦相成候もの之事

一一旦御赦に成、又候惡事いたし候ものは、赦免難成事、

一御赦に本罪之一等を宥候類、死罪を宥候類は難成、遠島追放等を宥候分は、本罪に應じ赦免可申付事、

牢屋燒失之節放ち遣し立歸候もの之事、

一牢屋燒失之節、放ち遣し立歸、御仕置を宥候もの死罪を宥候分は、赦免難成、其餘は罪狀に應じ赦免可申付事、

金子横取、又は取逃等いたし候もの之事、

一金子横取、又は取逃等いたし、償相立、江戸拂、所拂、又は江戸に不能在様申渡候類、本罪死罪之分は赦免難成、入墨敲之ものは、拾壹ヶ年以上赦免可申付事、

依父之科御仕置相成候もの之事

一依父之科、遠島追放申付候もの、年數に不拘、赦免可申付事、

一同拾五歳以下に付、親類江預中之もの、年數に不拘、赦免可申付事、
　幼年もの當人之科に而、親類江預中、出家願いたし候もの之事、

一幼年もの、當人之科に而、遠島追放申付、親類江預之內、出家願出候とも難成事、

御赦心得方之事

一御赦之儀は、惡事およひ候段後悔致し、身分を愼候もの共之ために候間、赦免申付、却而世上之害に相成候類無之樣、科之始末得與評議之上、名目に不泥、赦免有無評議可致事、

當座御赦之事

一當座御赦に、過料、急度叱り等之ものは、相伺申間敷、御仕置以上之ものを相伺可申、尤引合之ものは、過料、急度叱をも、相伺可申事、○中略

朱書右赦律之條々、嘉永四辛亥年五月、阿部伊勢守を以被仰出之、前々被仰出之趣幷先例其外、評議之上、追々伺之、今般相定之、奉行中之外、不可有他見者也、

文久二壬戌年三月　　松平伊豆守　石谷因幡守　酒井但馬守

會赦議分

〔享保集成絲綸錄　六〕寶永六丑年六月

一將軍宣下○德川家宣付大赦被行之、就夫諸家中幷領分百姓等ニ至まで、公儀江伺申付候者勿論、自方ニ而罪科申付置候者共、差免候而も仕置障り不申分は、其品により相應に赦免、又は歸參等之儀も、主人心次第宥免被致可然候、

一當春御法事付、右之通相觸候、赦免被致候輩も有之候はゝ、赦免之人數書付可被出候、尤今度差免候もの有之候分者、是又追而書付可被出候、右之通可被觸候、

六月

〔日光御社參御祝儀赦帳〕日光山就御社參赦可被仰付候間、享保十巳四月之格ニ而可被書出候、尤

従日光還御以後當五月中、書付可被出候、以上、

三月〇享保十三年十二日松左近將監殿三奉行江御渡被成候

一四年以前、大納言樣〇德川家重御元服御官位之御祝儀御赦ニ、書上ニ成リ候內、御免無之者は、別帳ニ可書上旨、五月八日、左近將監殿被仰渡候、

一四年以前御書上ニ洩レ候分、幷其節東叡山、增上寺御法事之赦ニ附候者は、書上ニ除キ候ニ付、此內ゟも書出シ、正德四午年以來、去未年を除キ、御免被成可然者之分、不殘此度書上ニ成リ候、

一改易、追拂、無御構、御扶持被召放候類之者は、書上ゲ除之候、

一五月廿九日、御赦帳松左近將監殿江被差上候、

一八月廿六日、御赦免之者、御書付松左近將監殿御渡被成候、

此度日光御社參相濟候、爲御祝儀赦被仰付に付而、左之者共赦免可被申渡候、

評定一座掛リ

遠島赦免　朝倉中九郎納宿出羽屋源七〇中略

江戶徘徊赦免　麻布湖雲寺門前中村養伯店浪人德井治部左衛門

追放赦免　小石川眞言宗常泉院同宿覺巖〇中略

以上

八月

大岡越前守
諏訪美濃守　掛リ

此度日光御社參相濟候、爲御祝儀赦被仰付候ニ付而、左之者共赦免可被申渡候、

遠島赦免　元坪內能登守御役所掛元御賄六尺十次郎

大岡越前守掛リ

上野町理兵衛店　彌右衛門〇略中

遠島赦免

新材木町　庄三郎〇略中

江戸構赦免

諏訪美濃守掛リ

下谷六軒町小兵衛方ニ居候　今泉彌市郎〇略中

江戸構赦免

右之內流罪之者は、御勘定奉行江可被談候、以上、

申八月廿六日、被仰出候、

〔科條類典 上三〕元文三午年

赦之者書出候儀ニ付御書付

赦之者書出候節、唯今迄ハ生死之儀、遂吟味被書出候得共、左候而ハ手間取候間、向後ハ生死之儀、吟味ニ不及可被書出候、赦免之上相果候ものハ、親類又ハ由緒有之もの江、赦免之儀被申渡候樣に可被心得候、以上、

七月

〔寶曆集成絲綸錄 三十〕寶曆四年六月

三奉行江

父之科ニ而、其子遠島被仰付、拾五歲巳下ニ付、親類江御預ケ之內、遠島御免、出家願、只今迄御遠忌御法事之赦ニハ、難成旨被申聞候得共、向後御遠忌之赦ニも御免可被成候間、可被得其意候、

〔德川禁令考後聚 三十九 赦律〕寛政元酉年

御祝儀大赦之節書上候無宿之儀ニ付伺書　評定所一座

都而前々無宿者、追放并江戸拂ニ相成候分、御祝儀大赦之節書上、是迄御免被仰出候も有之候處、

行衞不二相知一、身寄之者も不二相分一儀ニ付、追而身寄相知候儀も有之候ハヽ、可二申渡一旨申上相濟來候、然處迚も容易ニ身寄不二相知一筋も無之事ニ付、以來ハ無宿ニ而、追放江戸拂ニ相成候分ハ、大赦書上ニ相除可レ申候哉、此段奉レ伺候、

朱書 無宿ニ而も、遠島いたし居候分は、是迄之通、書上候樣可レ仕候、

以上

酉 十一月

朱書 右太田故備後守殿江伺書上候處、御評議之上、御赦之事有レ之候儀ニ付、先是迄之通ニ可二致置一旨被二仰聞一、此伺書御返被レ成候、

〔德川禁令考後聚三十九赦律〕御書付類伺濟等之寫

寛政六寅年

御赦之儀ニ付伺書

書面私共より申達候樣可レ仕旨被二仰聞一、承知仕候、

寅 七月廿四日

評定所一座

都而大赦被二仰出一候節、前々より御仕置ニ相成候者共之內、御赦被二仰付一候分ハ相除、其外之分ハ、不レ殘書出置候儀之處、遠國奉行之內ニハ、近頃御仕置ニ相成候者、又ハ古き分ハ不二書出一類も有之哉ニ相見候、左候而ハ御赦ニ洩候者も出來いたし、區々可レ有之哉之旨御尋ニ御座候

此儀大赦被二仰出一候節、三奉行ニ而ハ、前々より御赦被二仰出一前月迄之分、不レ殘相認書出申候、勿論是迄御赦ニ相成候者、并御赦被二仰出一候後、御仕置ニ成候分ハ、其御赦ニハ相除候得共、其外ハ前書之通一同認入、掛々ニ而書出候儀之處、遠國奉行之分、以前之御赦書上之振合をも相糺候處、御尋之通、區々之樣ニ相見申候、左候而ハ御趣意ニも振、御赦ニ洩候者も可レ有之哉ニ御座候、以來ハ前書三奉行取計之通相心得書上候樣、遠國奉行銘々江可二被仰渡一候哉、又ハ私共より相達

候様可仕哉、奉伺候、以上、

寅七月

（徳川禁令考後聚三十九赦律）御書付類伺済等之寫

寛政九巳年
御赦申渡方之儀ニ付伺書

書面伺之通相心得可申旨被仰渡、承知仕候、

巳十二月廿三日

評定所一座

都而御赦申渡候節、遠國之者、御當地江呼出し候而ハ、却而難儀可仕候間、其度々伺之上、最寄御代官御預所陣屋江呼出し赦免申渡來候、然處最寄ニ御代官陣屋無之向も有之、其上武家之家來等、遠國ニ罷在候分ハ、其主人江相達、主人ニ而申渡可然儀、且寺社之分ハ、是迄觸頭江申渡候得共、以來ハ寺社之分、并百姓町人共、遠國ニ罷在候分ハ、御代官、領主、地頭江相達爲申渡、武家之家來之分ハ、其主人江相達、主人ニ而爲申渡候樣仕、可然哉ニ奉存候、依之相伺申候、以上、

巳十二月

（天保集成絲綸錄百一）文化八未年二月

遠國奉行江可被仰渡趣〇中略

火附盜賊改

一人殺疵附之類

右ハ相手有之品故、赦ニハ難相成候、然共相手ゟ不法を仕掛、無是非及刃傷人を殺候もの、其外怪我ニ而人を殺候類ハ、吟味之上、其品ニ寄、赦ニ可被申聞候、

一御法度を背、或ハ不相用類、

右御法度を背候類ハ、輕キ博弈いたし候ものにても、公儀江不拘とハ難申候得共、右ニハ輕重

次第も有之、御闘所を忍び通り候類、似せ金銀を拵候類、又ハ徒黨强訴を企候類ハ不及申、人之害とも成行、或ハ事を巧候類ハ、假令其罪狀ハ輕キ事にても、當座之赦成段、勿論之儀ニ候得共、博弈其外、兼而被仰出候御法度相背候もの、度々之儀ニも無之、輿風出來心にて相背候類ハ、吟味之上、赦ニ可被申聞候、

〔御仕置例類集一ノ二〕文化八未年御渡

所司代伺

一輕罪之もの御赦之儀ニ付評議

輕罪之もの御赦伺方之儀ニ付、本多大隅守ゟ別紙之通伺書差出申候付、當地町奉行共江も猶又爲取調候處、盜賊街之類ハ、御赦ニ相除候樣、寛政二戌年、太田備中守殿、當地勤役中被申渡候以後ハ、盜街いたし候もの、御赦ニ相伺候儀不相見候間、別段申渡等ハ無之候得共、御赦ニ相伺不申候心得ニ罷在候旨申聞候、然ル處、博弈いたし候もの、其御地ニ而ハ御赦ニ相成候例も相見候付、盜賊街之類ハ伺之通心得、博弈筋之ものハ、人之害ニ不相成類ハ、御赦ニ伺候樣可致旨、大隅守江及差圖候、然ル處私寺社奉行勤役中、大久保加賀守ゟ借寫致し候内ニ、別紙之通、寛政十午年、伊豆守殿被成御渡候、御書取之趣相見申候、右御書取之趣ニ准じ候得バ、當地ニ而も、不斗出來心ニ而輕盜致し候類之者ハ、御赦ニ相成候方ニも可有御座哉ニ存候得共、寛政二戌年各樣ゟ被仰下候趣を以、備中守殿被申渡置候儀ニ有之候間、以來共當地ニ而ハ、盜賊街之類ハ、御赦ニ相除候樣いたし候方ニ可有之候哉、又ハ貧窮ニ差迫り、全出來心ニ而世之害ニも不相成類ハ、吟味之始末ニ寄、以來御赦ニ申付候樣ニも可致候哉、午年御書付之趣も有之候得バ、是迄之仕來ニ而已相泥候も如何可有御座哉と存候付、此段思召相伺申候、尤此度之儀ハ、差掛候儀ニ付、前文之通及差圖相濟候得共、以來之儀、如何相

心得可ㇾ然候哉、則大隅守伺書寫、幷備中守殿被ㇾ申渡ㇾ候書付寫、午年御書付之寫とも、都合三通、入ㇾ御披見ㇾ相伺之ㇾ申候、

此儀當座之御赦心得方之儀、寛政十午年、日光正遷宮正遷座相濟候御祝儀ニ付、町奉行幷火附盜賊改差上候御赦伺書、伊豆守殿評議ニ御下ゲ之節、以來豫大概ヲ定置候樣、委細御書取を以被ㇾ仰聞ㇾ候間、御書取之趣評議仕候上、町奉行火附盜賊改ゟ御赦ニ相伺候もの共之儀、都合六人御免之積申上候處、右之內貳人、御祝儀之御赦ニ出牢被ㇾ仰付ㇾ候段被ㇾ仰聞、御書取之趣、評議仕申上候次第ハ、いづれとも御沙汰無ㇾ御座、治定不ㇾ仕候間、今般所司代伺之趣、取極候而ハ難ㇾ申上ㇾ候得バ、當座之御赦取調方、外ニ規格等無ㇾ御座、是迄御赦被ㇾ仰出ㇾ候節ハ、前書評議之趣、先目當ニ仕、取調相伺來候儀ニ付、以來當座之御赦心得方、別紙之通、夫々江申渡候樣所司代江被ㇾ仰遣、都而遠國奉行、火附盜賊改江も、同樣御沙汰被ㇾ成置ㇾ候而も可ㇾ然哉ニ奉ㇾ存候、

申二月

〔御仕置例類集二ノ二〕文化十三子年御渡

京都町奉行伺

一御轉任御兼任御祝儀當座御赦之儀に付評議

御轉任御兼任御祝儀に付、京都町奉行相伺候當座之御赦伺書、去月廿三日、致ㇾ評議ㇾ可ㇾ申上ㇾ旨被ㇾ仰聞、一座江御下げ被ㇾ成候に付取調候處、御轉任御兼任御祝儀に付而は、當座之御赦に可ㇾ相伺ㇾ旨之被ㇾ仰出ㇾは無ㇾ之、尤大赦被ㇾ仰出ㇾ候節、當座之御赦、遠國奉行等ゟ之伺書、評議に御下ヶ有ㇾ之候先例書留等も相見不ㇾ申候間、治定仕候而は難ㇾ申上ㇾ候得共、去月廿一日評議いたし可ㇾ申上ㇾ旨被ㇾ仰聞、御下ゲ被ㇾ成候京都町奉行相伺候、前々御仕置に相成候もの御赦伺帳に添候、別紙之趣に而は、安永九子年之書留は、燒失仕候分も有ㇾ之、碇と難ㇾ相分、寶曆十辰年、御轉任御兼任御祝儀之節、江戸上り之

赦帳江、在牢之内、重罪之もの御赦に奉伺候趣、留書相見候得共、當時在牢之内に、御赦に相伺候重罪之もの無御座候間、此度在牢之もの御赦相伺不申由認有之、其頃之留書相糺候處、寶曆十辰年、御祝儀之御赦に、右樣之例相見不申、然上は京都町奉行に而は、都而御祝儀之大赦にも當座之御赦相伺、所司代限に而差圖有之候仕來にも可有御座候哉、左候はゞ此度に限り、御沙汰不被及も如何に御座候間、御赦に可相成品之分は、所司代限に而差圖可有之品と奉存候、乍去書留等燒失いたし見合無之譯を以、御當地江被申立候儀に付、御免有無之儀評議仕候處、無宿新六外五人之內、新六は御仕置再々犯之ものに有之、東中筋松原下ル町與兵衛借屋清次郎は、一旦御赦に相成候上、惡事致候ものに而、尤一旦御赦に相成候もの御免に相成候先例をも相添伺候儀には御座候得共、右は所司代限に而差圖有之候古き例と相見、既に今般所司代被申立候書面之内にも、右清次郎は一旦御赦に成、又候惡事致候ものに付、赦に難相成者と被存候趣に有之候上は、新六清次郎は、御赦には難相成ものに有之候處、外四人之もの共も同樣之惡事に而、何れも一件之內之もの共と相聞候上は、御赦に難成もの加り候一件は、當座之御赦には不相伺儀に付、難相成段御差圖御座候方と奉存候、

子閏八月

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集二ノ二〕文化十四丑年御渡

所司代
大坂御城代　伺

一大赦之節當座御赦ハ不申付儀ニ付評議

去子十一月廿六日、御下ケ有之候大坂御城代差上候赦帳、同廿八日、御渡被成候所司代幷大坂御

城代より申立之書面之趣ヲ以、致評議可申上旨被仰聞候ニ付、右書面類一覧仕候處、所司代ニ而ハ、寶暦之頃迄ハ、御祝儀之大赦ニ當座之御赦伺候趣ニハ候得共、書留燒失等ニ而連續不致候ニ付、委細之儀ハ難相分、天明七未、寛政五丑、同九巳年、右三ヶ度大赦之頃、節々在牢もの赦ニ伺候趣不相見、伏見大津ニ而ハ、其度々伺候書留無之、奈良ニハ、寛保二戌年、大赦之節、在牢之ものも伺候樣、所司代より相達候ニ付相伺、其後ハ伺候書留無之、御城代ニ而ハ先例ヲ以、此度之大赦ニ當座之御赦、手限ニ而申渡候趣申上、且所司代より申立之書面ニ伏見奈良大津共、當座之御赦ハ不伺趣ニ相見候處、先達而御下有之候赦帳之内、京都町奉行、幷大坂町奉行堺奉行ニ而ハ、當時赦ニ可伺在牢之もの無之段申上候別紙も添有之候上ハ、右之向ニ限り、大赦之度々、當座之御赦相伺候仕來と相聞、尤先達而所司代より申立有之候、當座之御赦伺書江、都而御祝儀之大赦ニも、當座之御赦相伺、所司代限ニ而、差圖有之候仕來も可有御座哉、左候はゞ此度ニ限り、御沙汰不被及も如何ニ御座候間、御赦ニ可相成分ハ、所司代限ニ而、差圖可有之品と奉存候旨、一同ゟ申上候得共、今般御渡被成候御書抜之内ニも、寛保二戌年、御祝儀大赦被仰出候節、京都大坂町奉行掛ニハ、當座之御赦御下知有之、寶暦十一未年、御祝儀大赦被仰出候節も、京都大坂町奉行幷堺奉行ゟ同樣相伺候處、其砌大御所樣薨御ニ付、右之御赦ニ御下知有之趣ニ相見、其後大赦之度々、御下知之有無難相分候得共、御城代ゟ申立候書面之内ニハ、安永九子年、天明元丑年、兩度とも大赦之節、在牢死罪之ものハ御當地江相伺、御下知之上御赦申渡、其餘在牢輕罪之もの御城代江相伺候處、何レも追々病死ニ付、御赦有無之儀不申上事と相見候由ニ有之候間、取調候處、去酉〇酉戌誤年玉樹院樣〇文化十一年德川家齊子齊民生御誕生御祝儀之大赦之節ハ、出格之御沙汰ヲ以、當座之御赦も被仰出候儀ニ而、其餘大赦之節、當座之御赦被仰付候ハ無之、遠國奉行伺ニ前幷雖ニ御下有之候先例書留等も相見不申、所司代御城代之向ニ限り、大赦之度々、當座之御赦相伺候趣立之儀、聢と難相分、御當地と

遠國御赦之取計區々ニ有之候も如何ニ有之、其上大赦被仰出候ニ付、諸向ニ而右取調候ハ、餘程手數も相掛伺書差上、一座江評議等ニ御下ニ相成候上、尚又夫々取調、評議之上申上、夫々御下知ニ相成候事故、月數も相懸候を、在牢之もの一同相伺候而ハ、其內御下知之御沙汰も無之永々在牢之內ニハ、死失之もの可有之、左候而ハ却而御赦之御趣意を失、如何ニ御座候間、都而大赦之節、別段被仰出無之候はゞ、御當地同樣、當座之御赦ハ、不申付候積、相心得候樣被仰達候方、相當可仕哉に奉存候、且此度御轉任御〆任御赦ニ付、所司代幷御城代ゟ差上候御赦帳之內、いづれも當時入牢之內ニ赦ニ相伺候もの無之段申上候儀ニ付右赦帳之もの御赦有無之段、追而一同評議仕、申上候樣可仕候、

丑二月

御書面之通、所司代大坂御城代江被仰達候趣被仰聞、承知仕候、

丑三月十二日　　評定所一座

三月十一日十二日之次飛脚ニ達之

大久保加賀守
松平右京大夫　江申達候趣

御祝儀事之大赦被仰出候節、於其地ハ在牢之囚人之內、重罪之分ハ大赦伺帳之末江書載、當地江相伺、輕罪之分ハ、其地ニ而、當座之赦申付候例も有之由ニ候得共、當地ニ而ハ前々ゟ右樣之儀無之、區々ニ相成候而ハ不宜候間、已來其地於も、大赦ニハ在牢之囚人、當座之赦無之樣可被心得候、尤玉樹院樣御誕生之節、大赦幷當座之赦をも被仰出候ハ別段之事ニ候、此旨其地町奉行、幷伏見奉行、奈良奉行等江も可被達置候、以上、

三月十一日　　連名

大久保加賀守殿

同文言

其地町奉行并堺奉行江可被達置候、以上、

三月十一日　　　　　　　　　　　連名

松平右京大夫殿

〔新張紙留〕文政二卯年十二月下野守殿江主水正上ル

一下總國行德領、欠眞間村平藏外壹人、御留場內ニ而、鳥殺生いたし候一件、

右ハ本文過料ニ可相成處、淺姬君樣御婚禮御祝儀之御赦ニ、御免可被仰付哉之段相伺候處、是迄過料等之御仕置以上之もの取調申上候積り御答、御赦ニ相伺候例無之候間、以來當座之御赦ニハ、御仕置以上之もの取調申上候積、右伺書御下ゲニ相成候事、

〔御仕置例類集二ノ二〕文政九戌年御渡

大坂町奉行伺

一遠島御免出島致候もの、歸島相願候儀に付評議、

當月三日評議いたし可申上旨被仰聞、御渡被成候、大坂御城代相伺候、同所町奉行申立候、無宿專右衛門儀、不屆有之、先年隱岐島江遠島被仰付候處、去ル子年〇文化十三年御轉任御兼任〇德川家齊御祝儀之御赦に、此度御免被仰付候得共、親類近付等も無御座、老年および渡世も難致、右島方には年來罷在候儀に付、歸島いたし度願出候に付、勝手次第立歸候樣可申渡哉之段相伺申候、

此儀先例相糺候處、明和七寅年、牧野大隅守町奉行勤役之節、伺之上遠島申渡、伊豆國附新島江差遣候、無宿入墨淸次郎儀、天明二寅年、御元服御官位御祝儀之御赦に付、同八申年、山村信濃守町奉行勤役之節、御免被仰付候處、親類身寄之ものも無之、右島方には水汲女と唱候妻同樣之

もの、幷子供有之候間、歸島いたし度相願、其節信濃守伺之上、歸島申渡候例に見合伺之通勝手次第歸島可申渡段、大坂町奉行江申渡候樣御城代江被仰達可然哉に奉存候、

戌七月附〇略

扣

出羽守

八月九日之次飛脚遣之

水野左近將監江申遣候趣

御轉任御兼任に付赦之もの之内、隱岐島流人無宿專右衞門歸島之儀に付、其地町奉行共差出候書付壹通、幷口書寫壹通被越之到來、委細被申越候趣令承知候、勝手次第歸島申渡候樣可被達候、

八月九日　　連名

水野左近將監殿

〔德川禁令考後聚三十九赦律〕御書付類伺濟等之寫

文政十亥年遠島赦免被仰付候者、島ニ罷在度旨相願候節之儀ニ付評議、

書面評議いたし申上候通相心得、松平豐後守始、所司代大坂御城代江ハ、御別紙之通被仰達、候間、其外遠國奉行、大目付御目付江ハ、私共より申通置候樣可仕旨被仰聞、承知仕候、

亥十二月十九日　　評定所一座

御慶事等之御赦ニ、遠島御免被仰付、出島申渡候者共之内ニハ、數年島方ニ罷在、手馴候家業も有之、出島いたし候而も、御當地ニハ身寄之者も無之候間、歸島之儀相願候者ハ、是迄願之通歸島被仰付來候得共、遠境之往返ハ勿論、彼是難儀ニも可有之哉ニ而、御赦之詮も無之儀ニ候、今後ハ遠島赦免之儀申渡、其内島ニ罷在度と相願候者ハ、其儘差置、御當地ニ而請取候者無之候而も出島

致度と申者ハ、出島爲致候方ニ可有之哉、兼而其趣夫々江御達被置候而ハ如何可有之哉、尤元御扶持人ニ而も、其儘島ニ罷在度旨申立候ハヽ、出島ニハおよび申間敷哉、右之趣評議いたし、尤向向江達方等之儀も取調可申上旨、御書取を以被仰聞候、○中略

右評議仕候趣、書面之通御座候、被成御渡候御書取壹通返上仕候、以上、

亥十一月

所司代
御城代 江之御達

肥後國天草島、其外島々より遠島赦免之者、是迄出島之上、赦申渡候事ニ候得共、右申渡相濟候上、島方ニ而ハ手馴候業等も有之、國地ニハ身寄等も無之故を以、歸島之儀相願候得バ、願之通申付來候處、左候而ハ遠境之往返、其外彼是及難儀候儀も可有之儀ニ付、向後ハ遠島赦免之儀、島方ニおゐて申渡、其内島ニ罷在度と相願候者ハ、其儘差置、國地ニ而受取候者無之候而も、出島いたし度と申者ハ、出島爲致候間、以來遠島赦免之下知相濟候ハヽ、天草島、并隱岐島、壹岐島、薩摩島、五島之儀、赦申渡書、其奉行所宛之受證文相添、島ニ而申渡之儀、縣々より大坂町奉行江申達、夫より右島支配御代官、御預所役人、領主家來江相達、爲取計、候上申聞候趣を以、在島相願候者之名前、并受證文とも、縣々江大坂町奉行より申達候筈ニ付、其節赦申渡相濟候趣、并在島之もの名前等縣々より相届、且出島者ハ向々より便船次第爲差出、大坂着船之節、右奉行所江受取候上、引渡方之儀ハ、元縣々江通達之上、右掛々より之懸合ニ應じ取計候樣、兼而其地町奉行共江可被申渡置候、以上、

十二月十九日
松平豐後守

松平出羽守
松浦肥前守　江之御達
五島大和守

都而遠島赦免ニ相成候者、是迄出島之上、赦申渡候得共、以来ハ遠島赦免之節ハ、掛々より之赦免申渡書、并其奉行所宛之受證文相添、大坂町奉行より相達ニ而可ㇾ有ㇾ之候間、申達次第、島地ニおゐて赦爲ㇾ申渡ㇾ候上、其儘島方ニ罷在度旨相願候者ハ、糺之上願之通島方ニ可ㇾ罷在ㇾ旨申渡、出島人數相除、其餘出島相願候者人數名前取調、前書受證文相添、大坂町奉行江申聞、便船次第出島爲ㇾ致、同所着船之上、右町奉行共江引渡可ㇾ申儀と相心得可ㇾ被ㇾ取ㇾ計候、

十二月

〔牧民金鑑二十〕天保十二丑年、

其方共ニおゐて吟味相決、當時取調中之分、重科之者ニ而も、品ニ寄此度之御法事〇此年正月德川家齊薨ニ赦可ㇾ被ㇾ仰ㇾ付候條、尤逆罪并人殺疵付之類は、申迄ニも無ㇾ之、且盜賊再犯都而被ㇾ盜主ニ損失有ㇾ之分、其外事を巧候類は、赦宥難ㇾ相成ㇾ事ニ候間、右等之心得を以、早々可ㇾ被ㇾ申ㇾ聞、勿論申達候ニ付、赦ニ可ㇾ成者有ㇾ之候迚、吟味等可ㇾ取ㇾ懸ㇾ筋は有ㇾ之間敷候得共、若心取違混雜之義等無ㇾ之樣、可ㇾ被ㇾ取ㇾ計ㇾ候、以上、

二月十一日　佐　長門守
深　遠江守

評定所一座江

嘉永四亥年〇中畧

〔德川禁令考後聚三十九赦律〕御書付類伺濟等之寫

御祝儀之大赦と御法事之赦とハ、調方差別有ㇾ之ハ勿論ニ候得共、御法事之赦ハ、犯科年數共同

樣之者、或ハ一件之内、同罪ニ而兩山〇上野寛永寺芝増上寺之赦帳ニ附候者ハ赦免相成、左も無之分ハ相洩候段、御法とハ乍申不都合之儀、下より見候時ハ、偏頗之御所置ニ相成、却而御不仁惠ニも相當可申哉ニ付、平等之調方有之間鋪哉之事、

一赦律ハ、凡例迄ニ而、先ハ大綱を擧候儀と相見、犯科ハ追々異類之廉も殖、多端ニ候處、其罪狀書可見合箇條ハ無之事故、甚差支候、右ハ一概ニ赦律ニ引當候而ハ、調方不十分哉ニ相見、既文政十亥年、赦律之内、相増候儀も有之候間、綿密之取調方、兼而相極置度候事、

右伺差出候品、并手限申付候分とも、取調方篤と評議いたし可被申聞事、

〔牢獄秘錄〕御赦免有之時之事

一御法事之節御赦免ハ、牢内にて御赦と呼ぶなり、一説ニハ、牢内死罪科人計り、何人之内圖にいたし何人御赦免有之者之由、申傳ふと言へ共、是ハ世上之評判にて私之沙汰也、全く左にあらず、死罪人何々と書候帳面一面に四人ツヽ、帳面開き候時ハ、死罪ニ究る科人、八人ツヽ、有之と旨、出す共、又御仕置懸り之奥御祐筆より出して御覽ニ入る共いふなり、有之を、御老中方江出す是町奉行直ニ時に、此帳面之内、誰々御赦免可有之哉と申、其時御老中月番なり此帳面を取上、御手に當り次第に中をひらき御渡し有時に、其處に認め有る科人八人御赦免ニあふ事也、全く御老中方より誰彼と云御差圖ハ無之、帳面御ひらき有り、其處へ出ル名前八人之科人共、夜盗押込にても御赦免にあふ事也、

〔舊記拾要集三〕延寶六年午二月六日御用覺帳書拔

一於傳通院、天樹院樣〇德川秀忠女千姫拾三年忌、御追善ニ付、放赦之者拾壹人、依て此方ゟ吉田十郎兵衛、出雲守殿より蜂屋助大夫同心、一方ゟ三人宛、與力ハ明ケ六ツニ彼地江參着、同心ハ牢屋迄參候而、赦之もの召連、同刻ニ御寺迄參着申ニ付、傳通院代官、并名主相勤候中里平右衛門、相役名字は失念、勘右衛門兩人ニ申付、赦之もの之儀、御經過迄門前町之明キ店江入置、同心并帶刀は

町年寄手代前ニ差置、十郎兵衛、助大夫は傳通院玄關ゟ入、脇座敷御法事過迄罷在、寺社奉行衆板倉石見守殿、御勘定奉行松山五兵衛殿、御歸候故、拙者共申上候ハ、放赦之もの共參候由伺候得ば、石見守殿、五兵衛殿江御相談候へバ、前ニも放赦之もの江申渡候儀ハ、傳通院被致候由、御申候ニ付、石見守殿役者之出家衆江、拙者共御引合ニ而、諸事申合候樣と有之候而、御兩人ハ御歸候、其跡ニ而赦之者出シ候得と有之ニ付、本堂之前江申付出シ候處、傳通院ゟ斷ニ候ハ、放赦之申渡ハ、拙者共ニ致シ候へ、其上ニ而傳通院十念を給候由ニ候間、十郎兵衛赦之もの江申渡仕、壹人ニ錢三百文宛被下之、傳通院ゟ貳百文宛給之候、

右御役儀ニ罷出候樣子、委ニ帳面ニ記置、重而被出候衆心得ニ罷成候ため御座候旨、役人衆被申候ニ付、如此ニ候、以上、

〔最樹院殿御葬式之記〕十五日〇文政十年三月けふ非常の赦行はれて、死罪流刑に處せらるべきもの廿四人、あけはつる比より、山上〇上野にめしのぼせられ、根本中堂の西椽の下に、むしろ敷て居ならべられたり、宮の御所、執事の門の前に向ひて、黑緣のたゝみ二疊しきて、戒師の座とし、その傍に東南に向ひて、斜めに同じ疊しき、御目附の座としたり、午の時すぐる比、廿四人のものを戒師の座にむかはせ、北面にめし出し、囚獄のあづかり石出帶刀そのものどもの名つきをあらため了れば、壽昌院法印あかいろの衣に、僧綱たて、薄色のさしぬききて、役の座につけば、町奉行伊賀守政憲筒井これらの名簿をひらき、たれ〳〵と呼せ給へば、聞え奉るもあり、うれしさ胸にせまりてやあるらむ、やゝありても、いらへ奉らぬは、伊賀守をるか〳〵と尋ねもとめ、いらへ奉りて後、又その次々よび出し、己れ等こよなき罪にかしつき、死罪流罪にもせさせ給ふべきおきてなるを、此度の御作善〇徳川家齊父一橋治濟是年二月薨に、その罪をゆるし、あまさへ島目を賜りぬるぞ、おぼろげのことにな思ひそと、高らかに宣げしてのち、ひとやの同心、肩につけたる繩をときはなち、青ざしを

一人々々の前に置、伊賀守壽昌院に會釋すると、法印たちて十念をさづけ了れば、始めのごとく坐して町奉行に會釋す、奉行御目附に會釋して各退ぬ、

〔御赦調心得方〕差上申一札之事

津金新十郎知行武州幾瀬郡田中村
百姓兵左衛門後家もの悴

友五郎

右之者儀、先年不届有之、遠島被仰付候處、天保八酉年、將軍宣下御轉任御兼任御祝儀之御赦に、此度御免之上、出島被仰付、私共江被遊御引渡、且人別入之儀は、其筋江可申立旨被仰渡、承知奉畏候、仍御請證文差上申處如件、

右村役人總代
組頭　儀左衛門
長　藏

弘化四未年八月日

御奉行所

會赦年限

〔大赦律〕文化十三子年

御轉任御兼任御祝儀大赦之節より之追加

御免有無之罪狀調方之儀ニ付評議濟〇中略

一盜かたり等ニ而、御仕置ニ成候後、盜物怪敷品不正之品と乍存取扱候もの、

是ハ近來死罪ニ不成例も有之候ニ付、貳拾年以上ニ候ハヽ御免、

朱書
是ハ今般取調候、當時迄貳拾一ヶ年ニ、評議之上取直相認申候、

一同罪再犯之もの

是ハ不正唐物、又ハ盜之外ハ、年數貳拾年以上ハ御免、

但博弈ハ再犯之論無之事

一盗又ハ外悪事ニ而も所拂追放等ニ相成候もの御構場所江立入候計ニ而外悪事無之分ハ何ヶ度立入候とも御免之例有之候間七ヶ年以上ハ御免

朱書
是ハ右同斷

但凡例五ヶ年之例有之候得共不相用積り

朱書
是ハ右同斷

一御構場所ニ而あばれ候歟盗いたし候ものハ何れも死罪之御定ニ付難成外之悪事ニ候ハヽ前之御仕置より一等重キ之御定ニ而貳拾年以上ハ御免

朱書
是ハ右同斷

但盗ニ而も敲ニ當候分ハ貳拾年以上ハ御免

一牢番人牢抜を不存迄之ものハ貳拾年以上ハ御免

但囚人江内々世話いたし候ものニ而も鋸又ハ刃物類貸遣し候歟火氣抔入遣し右品ニ而牢抜いたし候ハヽ全牢抜之手段ニも相成候筋ニ付難成其外輕き品抔取次遣し候分ハ貳拾年以上ニ候ハヽ御免

朱書
是ハ御役筋ニ拘不届之取計いたし候もの品々有之候處悉く本文之通巨細ニ取調候而ハ都而事實を失ひ候儀出來いたし候間今般取調候箇條書五ヶ條ニ籠相認申候

一取逃引負等拾兩以上死罪ニ可成もの并使先之取逃壹兩以上同斷之ものも主人より助命相願候分ハ先例も有之儀ニ付拾ヶ年ニ候ハヽ御免

朱書
是ハ今般取調候箇條之内貳拾九ヶ條ニ評議之上取直相認申候

一主人方之もの盗取たとひ追而逃去とも露顯不及程過候分ハ取逃とハ難申其外盗いたし不逃去罷在候分とも主人より願候而も助命難立もの助命ニ成候分ハ一般ニ難成

但盗ニ而も、其當座心底改、有體申立、主人方損金も無之分ハ、取逃いたし候ものより、都而品輕キ方ニ付、貳拾年以上ハ、御免ニ而も可然歟、

此箇條ハ、〆リを固辭明、主人之品抔盗取候もの、助命相成候類ニ限相用、其餘戸明手元等之盗ニ可准ものハ、矢張前之箇條ニ准じ、十ヶ年ニ而御免、

朱書
是ハ右同斷、貳拾四ヶ條ニ糺申候、

一輕き盗いたし候もの六ヶ年ニ而、御免之例有之候得共、盗いたし候ものハ、都而拾ヶ年より御免、

朱書
是ハ右同斷拾三ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

一盗并博弈之外、輕き惡事ハ先例ニ見合、四ヶ年以上ハ、御免之儀可伺事、

朱書
是ハ右同斷貳ヶ條ニ、不相當之筋相認申候、〇中略

一御構場所不立去罷在候ものハ、同罪再犯ニ准じ、貳拾年以下ニ而ハ、御免難成、

朱書
是ハ右同斷、貳拾三ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、

一不正物買取、遠島ニ成候ものハ、貳拾年以上御免、

朱書
是ハ右同斷拾四ヶ條ニ、評議之上取直相認候、〇中略

一門訴之頭取、遠島ニ成候もの、貳拾年以上御免、

朱書
右同斷〇中略

一長脇差を帯し、惡事いたし候ものニ而も、文政九戌年御書付以前之儀ハ、差免可然筋ニ付、貳拾年以上ハ、御免之積、

但脇差を帯、惡事いたし候ものニ而も、本文ニ准じ貳拾ヶ年以上、御免之積、

朱書
是ハ今般取調候、箇條書拾貳ヶ條ニ取直し相認申候、

一帯刀いたし候共惡事無之候ハヽ、例見合之事、

朱書
是ハ長脇差黨ニハ無之、刀脇差等帯歩行候迄ニ候ハヽ、強而之惡事ニも無之、別ニ箇條立候ニもおよび不申候間、今般之箇條書ニ相除申候、

一寄場逃去候ものハ、博奕ニ而も、貳拾年以下ハ、御免難成、

但矢來等を乘越逃去候ものハ、外惡事無之候とも、貳拾年以下ハ、御免不相成積、

朱書
是ハ今般取調候、箇條書貳拾五ヶ條ニ、評議之上取直し相認申候、

一佐州逃去候ものハ、寄場逃去之律ニ見合、貳拾ヶ年以上ハ御免、

但御勘定奉行伺四ノ帳、日光御參詣之御赦より定、

朱書
是ハ文政七申年以來、佐州逃去候ものハ、一般ニ死罪ニ相成、其前佐州逃去、追放遠島相成候もの共も、差向不相見不用ニ付、今般之箇條書ニ相除申候、○中略

一所化僧之盗も、平人同樣、拾ヶ年より御免之積、

朱書
是ハ武家出家とも平人同樣ニ而、差別無之分、悉く同樣之譯箇條を立候而ハ都而紛敷、殊ニ所化僧之盗ハ、入墨敲なとも申付、一ト通りニ候得ハ、大數ニハ御赦之品無之候間、今般取調候、箇條書ニ相除申候、

一鶴殺生いたし候もの、十三年より御免之積、

朱書
是ハ強而之惡事ニも無之、別ニ箇條立候ニもおよび不申候間、右同斷、

〔赦律〕御仕置輕重に付赦免年數之事

一所拂、十一ヶ年以上、赦免可申付事、

一江戶拂、十四ヶ年以上、赦免可申付事、

一江戶十里四方追放、十七ヶ年以上、赦免可申付事、

一輕追放、二十ヶ年以上、赦免可申付事、

一中追放、二十三ヶ年以上、赦免可申付事、

一重追放、二十六ヶ年以上、赦免可申付事、

一遠島、二十九ヶ年以上、赦免可申付事

但格別品不宜分は、科之品評議之上、年數見計、赦免可申付事、

一非人手下、十ヶ年以上、赦免可申付事、

右之通といへども、其科難赦筋有之歟、又は事實品輕き類は、別段之事、

改易

御切米御扶持方召放

御暇

一御料所手代、事公構、暇差出、

武家奉公構、暇差出、

暇差出

役義取放

右十一ヶ年以上赦免、役筋ニ付候儀等に而、品不宜は、其品評議之上、御仕置赦免可申付事、

但品輕きは、六ヶ年以上、赦免可申付、尤赦免申渡候節、御仕置赦免と可申渡事、○中略

隱居

退院

一追院

一派構

一宗構

右十一ヶ年以上赦免、宗捉等に付候儀に而、品不宜は、其品評議之上、御仕置赦免可申付事、

但品輕きは、六ヶ年以上、赦免可申付事、

巧成儀も無之強而人之害ニ不相成もの之事

一格別巧成儀も無之、强而人之害ニ不相成類、大抵所拂ハ六ヶ年以上、江戸拂、江戸拾里四方追放は拾壹ヶ年赦免、輕追放、中追放、重追放、遠島ハ拾六ヶ年以上、赦免可申付事、

但不憚公議を趣意有之歟、御役筋ニ付候儀、又ハ主人親、其外目上之親類、支配役人、師匠等江對し候惡事之類ハ、其品輕く候とも、御仕置之輕重ニ應じ、赦免可申付、乍然全不念迄ニ而、至而品輕キハ、本文之趣を以、赦免可申付事、

三笠附、博奕、取退無盡等いたし候もの之事、

一三笠附、博奕、取退無盡、隱富等之類ニ而、御仕置相成、外ニ惡事之品も無之ものは、御目見以上は拾壹ヶ年以上、其餘は武家出家平人之無差別、六ヶ年以上、赦免可申付事、○中略

人を殺又は疵附候もの之事○中略

一口論等之上、可殺心底ニハ無之、怪我過チニ而、相手又ハ取扱人等、相果候次第ニ至候類、御仕置輕重ニ應じ赦免、口論等も不致、全之怪我過チニ而人を殺候類、所拂ハ六ヶ年以上、江戸拂、江戸拾里四方追放ハ拾壹ヶ年以上、輕追放、中追放、重追放、遠島ハ拾六ヶ年以上、赦免可申付事、○中略

附火いたし候もの之事

一幼年ニ而、無思慮附火いたし、遠島ニ相成候ものは、拾六ヶ年以上、赦免可申付、○中略

幼年もの之事

一幼年ニ而、惡事いたし、御仕置ニ相成候ものに候とも、遺恨物取等ニ而仕成候ハ、大人同樣之心

得を以、赦免有無評議いたし、子心ニ而無辨仕成候は、所拂は六ヶ年以上、江戸拂、江戸拾里四方追放は拾壹ヶ年以上、輕追放、中追放、重追放、遠島は拾六ヶ年以上、赦免可申事、○中略

度々御仕置相成候もの之事

一御構場所立入候迄ニ而、外ニ惡事無之もの、初度は江戸拂、江戸拾里四方追放拾壹ヶ年以上、輕追放、中追放、重追放、遠島は拾六ヶ年以上、赦免可申付、○中略

御仕置當不相當之もの之事

一御仕置當、不相當之もの、當然之御仕置當を以、赦免有無評議可致、尤入墨又は敲相當之もの、追放刑ニ相成候ハヽ、當然之御仕置、入墨敲ともに拾壹ヶ年以上、赦免可申付事、○中略

金子橫取又は取逃等いたし候もの之事

一金子橫取、又は取逃等いたし、償相立、江戸拂、所拂、又は江戸ニ不罷在樣申渡候類、本罪死罪之分は赦免難成、入墨敲之ものは拾壹ヶ年以上、赦免可申付事、

〔折たく柴の記〕中二月○寶永六年二日に、大赦の事につきて、封事を奉りたりき、其大要は、○中略近例を見るに、大法會行はるゝ事ある時に、犯しゝものゝ親戚等歎申す所を、その道場において帳に記るして奉る、これを赦帳といふ、其帳をもて奉行所に下され、赦すべく赦すべからざるかを議せしめられ、赦すべきものどもをば、法會の場にめし集て其事を行はる、されば、たとひ赦に遇ひて赦すべきものといへども、其親戚の歎申すべきものあらざれば、死に至るまで恩に潤ふ事あたはず、それもなほ奉行所において、其罪を決せしものども也、○下略

〔有德院樣御一周忌御赦帳〕此度○寶暦二年願出候人別科書

一江戸拂御免之願　山城町 玉川正右衛門

朱書 天明二寅年御元服御官位御祝儀御赦ニ御免

此者儀、玉川上水請負罷在候ニ付、數年水銀請取候處、一分之助成ニ遣ひ、上水滯、諸人及難儀ニ候得共、入用をいとひ賃銀不差出、剩水元見廻りも不仕、打捨置候儀共、不屆に付、江戸拂可申付旨被仰渡、元文四未年九月廿一日、江戸拂申付候處、此度御赦免願仕候、

是者御赦ニ難成者ニ御座候

（朱書）元文五申年十月　東叡山　　寛保二戌年四月　増上寺
延享元子年十月　増上寺　　同二丑年三月　東叡山
同五辰年四月　増上寺　　寛延三午年四月　東叡山
同四未年六月　東叡山　　寶暦二申年六月　東叡山
此度　東叡山

右九度赦帳ニ附申候

（惇信院樣御法事廻赦帳）遠島

一　大久保豐後守殿家來　土橋覺左衛門

右之者、大久保豐後守殿江相勤罷在候處、八年以前、戌年○寶暦四年九月廿五日、不屆之儀に付、於土屋越前守殿御吟味之上、同年十二月晦日、豆州新島江遠島被仰付候、此度御赦免奉願候、○中略

御改易

一　依田豐前守掛　元御水丸附一ツ橋小十人頭迄相勤候　小林彥十郎

右之者、又從弟木原五左衛門跡目之砌、親類之代りに立合、右五左衛門悴忠助、不調法之儀引請候段、能勢肥後守殿御掛りに而、御吟味之上、十四年以前、寛延元辰年、御改易被仰付、蟄居仕罷在候、此度御赦免奉願候、

御追放

伊奈半左衛門殿御代官所麻布領白金村先名主　新兵衛

一

右之者、同村出入之儀に付、於神尾若狹守殿御吟味之上、廿年以前、寛保二戌年十月六日、中之御追放被仰付候、此度御赦免奉願候、〇中略

右之者共、今度惇信院様〇徳川家重御中陰御法事爲御追善、願之通、被仰付被下候樣、奉願候、已上、

寶暦十一巳年九月　増上寺大僧正印形書判

〔文昭院様御法事廻赦帳〕遠島

一　西丸裏御門番秋山吉右衛門殿組　田邊德右衛門

右之者、寛延元辰年五月十九日、高井壽齡と申者之宅に而、賭勝負仕候場所に居合候に付、馬場讃岐守殿御掛に而、御吟味之上、同年七月廿五日、新島江遠島被仰付候、此度御赦免奉願候、〇中略

御追放

一　依田豐前守掛　元御小性組金田周防守殿組神尾平八郎悴　神尾長次郎

右之者、島田主計一件ニ付、寶暦八寅年三月九日、御評定所江被召出、御吟味之上、同年五月廿三日、於御同所、神尾備前守殿、依田和泉守殿、淺野内膳殿、御立合ニ而、重御追放被仰付候、此度御赦免奉願候、〇中略

右之者共、今度文昭院様〇徳川家宣五十回御忌御法事爲御追善、願之通、被仰付被下候樣奉願候、以上、

寶暦十一辛巳年十一月　増上寺大僧正印形書判

〔御神忌廻赦帳〕追放御赦願

元御代官　山中源四郎

此者不調法之儀有之、寶暦九卯年九月二日、輕追放被仰付候旨、於評席土屋越前守申渡候、老衰仕、遠國流浪及困窮候由、此度御赦免奉願候、〇中略

[illegible]赦宥

今般就御神忌、右之輩願出候、於赦免は、可為御追福者也、

酉〇明和二年 七月　　一品親王〇東叡山宮 御花押

〔常憲院樣百回御忌御赦帳〕追放御赦願

一根岸肥前守掛　　深川奥川町元講在候 平兵衛

此者金子出入之儀ニ付、池田筑後守掛りニ而吟味之上、寛政二戌年五月十八日、中追放被仰付候、

此度御赦奉願候、〇中略

今般就法會、右之輩願出候、於赦免者、可為御追福者也、

卯〇文化四年 十二月　　一品親王御判

〔御仕置例類集二ノ二〕文化十三子年御渡

一日光御門主被仰立候御宥恕之儀評議

書四月十一日、日光御門主被仰立候書付御渡被成、右書付之趣を以、評議仕可申上旨被仰聞、一覽仕候處、日光御厩別當若林半兵衛儀、飼料場ゟ出火之節、御神馬焼候段、等閑之儀に付、如何樣之御咎可被仰付哉も難計候處、是迄數代相勤候舊家之儀にも有之候間、何卒御憐愍を以、一等輕く相濟候樣被成遣度、殊更此節御大蔵之御時節にも御座候得ば、旁以御慈愍之御沙汰有之候樣被成度趣に御座候、

此儀、天明五巳年、阿部先備中守寺社奉行勤役之節、伺之上御咎申付候、貴樂山役住職一件之内山城國宇治貴樂山万福寺役僧太事外貳人儀、本光輪時龍門取計に随、右之もの共江任せ置候段不埒に付、三人共百日逼塞と相伺候處、日光御門主ゟ被仰立候趣も有之候間、伺書調直し、御咎之儀相伺候樣被仰聞、伺書御下被成候に付、則取調直、右太事外貳人共、三十日逼塞と相伺候處、伺之通御下知有之候例ニ見合、半兵衛儀も、百日押込ゟ格別輕く、三十日押込、

朱書本文若林宇兵衞御咎之儀、五十日押込ミ相伺、評議之上百日押込ミ申上候趣、書面日光御門主被ㇾ仰立候趣、尙又評議に御下げ有ㇾ之、三十日押込ミ申上候處、不ㇾ及ㇾ宥免、最初評議之通、御下知相濟候旨、追而被ㇾ仰聞候事、

〔文昭院樣御法事赦帳〕諸願

一　立花出雲守死

右之者儀、文化二丑年十二月廿七日、土井大炊頭殿宅ニ而、隱居之上、蟄居可ㇾ罷在旨被ㇾ仰渡候、然ル處文化六巳年十月中、致ㇾ死去候得共、右御咎御免被ㇾ成下候樣奉ㇾ願候、

一根岸肥前守掛　元御郡代 伊奈右近死

右之者儀、不行屆儀有ㇾ之、寬政四子年三月、板倉周防守殿掛ニ而、吟味之上、愼被ㇾ仰付、同年九月南部內藏頭殿江御預に相成、去寅年八月致ㇾ病死候得共、御咎中之儀故、死骸埋置候儘ニ付、此度碑石相建追善仕候儀、御免被ㇾ成下候樣、奉ㇾ願候、〇中略

柳生主膳正樣　永田備後守

別紙於增上寺文昭院樣〇德川家宣百回御忌就御法事、御赦帳貳冊幷松平右京亮殿廻狀壹通相廻し申候、御落手可ㇾ被ㇾ成候、右可ㇾ得御意、如ㇾ此御座候、以上、

五月〇文化八年

被召出

〔有德院樣御法事赦帳〕被ㇾ召出御赦願

仙石監物組元御徒

朝岡茂右衞門

西尾九右衞門

堀政之丞〇中略

右之者共、有德院殿御附御徒相勤候處、薨御に付御暇被下之候、尤御金等も被下候儀故、當分は如何様にも厄介共可致養育候得共、何も渡世可營様無之、大勢之厄介共、無程流浪可及難儀候由相歎、如何様にも被召返被下候様に奉願候、〇中略

今般就法會、右之輩願出候、於赦免は可爲御追福者也、

酉〇寶暦三年 九月　　二品親王〇東叡山宮 御書判

〔常憲院様御法事廻赦帳〕被召出御赦願

駿河大納言殿元御附人山縣權右衛門曾孫　山縣平四郎

此者曾祖父山縣權右衛門儀、駿河大納言殿江勤仕候處、逝去之砌權右衛門幷妻子共に、西郷若狹守江被成御預候、權右衛門儀は御預之内相果候、其後慶安四年七月廿日、妻子御預御免之儀、三枝攝津守江被仰渡候、此度如何様にも被召出候様奉願候、〇中略

今般就法會、右之輩願出候、於赦免者、可爲御追福者也、

丑〇寶暦七年 十二月　　一品親王御判

赦宥御教書

〔家忠日記增補〕慶長五年十月、大隅守嘉隆、〇九鬼其家人豐田五郎右衛門尉ガ宅ニ此比蟄居ス、豐田謀テ嘉隆ヲ斬テ、其首ヲ大坂ニ獻ズルニ、勢州曇崎ガ茶屋ニシテ、嘉隆赦免ノ御教書ニ行逢、是非ヲ絶ス、

大赦

〔折たく柴の記〕中二月〇寶永六年二日に、大赦の事につきて封事を奉りたりき、〇中略同き四日に、また封事奉りて大赦の事を議す、これ密かに問はせ給ひし御事あるが故なり、〇中略同き十日、大御臺所〇德川綱吉室鷹司氏御他界の御事ありしかば、近習衆して此御事を告知らせられ、同き廿日に、大赦の事仰下されし由、また告知らせらる、〇中略此時に前代の時の罪案どもをめしよせられて、夜ごとに御みづからこれを御覽せらるゝ、事曉に至り給ひ、其罪を赦除し給ひしもの、凡九百五十六人

そののちほどなく大御臺所の御事によりて、前のごとくにせさせ給ひて、御みづから其罪を赦除せられしもの、凡九十二人、天下の大名以下の家々にして罪赦されしもの、凡三千七百三十七人に及べり、五月朔日、將軍〇德川家宣宣下の儀行はれて同き廿三日、また天下に大赦行はるゝの由仰下さる、此時もまた前のごとくに、御みづから其罪を赦除せられし所、凡二千九百一人、天下大名以下の家々にして罪赦されしもの凡千八百六十二人、此年罪赦されしもの、總計八千八百三十一人也、それが中、大名以下の家々にて赦せしところ、五千五百九十九人に及べり、當家世をまろしめされしより此かた、いまだこれらの恩例は聞及ばざりし所なり、

〔京都御役所向大概覺書三〕赦之事

一寶永七寅年、家宣樣將軍宣下ニ付、大赦御免被成候、隱岐島流人、大坂著船候は、其向々江相達、流人相渡候樣ニと、秋元但馬守殿御指圖之由、御勘定奉行ゟ申來候處、右流人著船候間、請取ニ差越候樣ニと、大田和泉守、北條安房守方ゟ申來候ニ付、兩組同心貳人下雜色貳人、幷悲田院共相添、請取ニ差遣、五月廿三日京著ニ付、島御免之旨申渡候、

一下り過書船伏見ゟ上り過書船伏見迄、

一伏見ゟ角倉與一前迄高瀨舟、

一流人七人島御免之旨申渡、親類共江渡遣候、

一流人拾貳人、無宿者ニ付、島御免之旨申渡、身寄之もの有之候はゞ、勝手次第何方江も罷越候樣ニと申渡候、

一流人利右衞門伜半左衞門貳人、江戶板橋近所之者、島御免之旨申渡候、利右衞門相煩、行步不叶候間、養生之內、伜半左衞門致看病度由願候ニ付、養生之內、父子共揚り屋江入置候、其已後利右衞門弟、大坂ゟ罷登候ニ付、右貳人相渡遣候、

赦輕罪

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十二月五日、大赦ノ命ヲ國中ニ下ス、
周防守殿御渡書付　此度京都より厚き御趣意を以て、大赦被仰出候儀も有之候に付ては、銘々領分等に於て、皇國の御爲と存込み、其所業法憲に觸候て、死罪、牢死、幽閉等のもの有之候はゞ、其段委細に取調べ、名前等認め出候樣可被致候、
右之趣、万石以上以下の面々へ可被相達候、

〔大猷院殿御實紀五十一〕寛永十九年九月十五日、三緣山〇增上寺に詣給ふ、崇源院殿〇德川秀忠室十七回御法會万部結願によりてなり、〇中略輕罪の徒四百七人ゆるさるゝ事例のごとし、

〔京都御役所向大概覺書三〕赦之事
一寶永七寅年、當今〇中御門天皇御卽位ニ付、牢舍之者拾人、赦被仰付候、御目付津田外記、遠藤新六郎立會申渡候、出牢之者、罪依輕重、追放之場所相違有之、〇中略
一寶永七寅年、東山院崩御ニ付、正月廿六日迄、御法事相濟候、依之輕罪之者、赦被仰付候旨、松平紀伊守殿被仰聞候ニ付、吟味之上、三人出牢申付候、〇中略
一有章院樣〇德川家繼御法事ニ付、輕罪之者、御免可被成之旨、水野和泉守殿被仰聞、牢舍之もの拾三人、正德六申年五月廿九日、赦被仰付、御目付石丸數馬立會、追放申付候、尤罪之依輕重、追放之場所相違有之、先格之通、壹人江島日貳百文宛遣之候、
一正德六申年六月、享保と改元ニ付、輕罪之者、赦被仰付之旨、水野和泉守殿被仰渡、六月廿三日、於牢屋作法有之、四人四人、赦被仰付候、
但改元之儀、七月江戶ゟ申來、同六日願狀差出候、

〔寶曆集成綠綸錄六〕寶曆四戌年十一月
今度大納言樣〇德川家治御婚禮相濟候、御祝儀之赦ニ可成輕罪之者、可被書出候、

〔寶曆集成綵綸錄 七〕寶曆六子年三月

御簾中樣〇德川家重室御著帶ニ付、爲御祝儀、輕罪之もの赦被仰付候、遂吟味、可被書出候、

三奉行江

〔天明集成綵綸錄 十〕明和二酉年三月

今度於日光山、權現樣〇德川家康百五十回御忌御法事御執行ニ付而、赦被行候、輕罪之輩可致赦免旨被仰出候、其趣被存、可被書出候、此度者格別之御法會候條、少々重咎之者ニ而も、吟味之上可被相伺候、以上、

三月

〔天明集成綵綸錄 六〕安永九子年十二月

今度御卽位〇光格相濟候ニ付、爲御祝儀、輕罪之者赦被仰付候間、遂吟味、可被書出候、

三奉行江

〔天保集成綵綸錄 二〕文化十四丑年九月

今度御卽位〇仁孝相濟候ニ付、爲御祝儀、輕罪之もの赦被仰付候、遂吟味、可被書出候、

三奉行江

〔憲教類典 四ノ六評定〕元文四己未年正月

勝浦太郎兵衛

此者運船所持いたし、所々江運賃積せ稼ぎいたし候時、三四年以前、諸國難破候船多御座候節、此もの私より、破船不致候處、破船いたし候と僞、買人荷物代替候罪により、其節より牢舍被仰付罷在、去月廿二日、安治川に三日さらし、廿五日死罪獄門被仰付旨被仰渡候、

太郎兵衛妻

十六歳　同人養子　長太郎
十六歳　同人娘　いち
十三歳　同　まさ
八歳　同　さく
六歳　同人悴　初太郎

右六人、堀江橋通三町目表家に罷在候處、太郎兵衛牢舍被仰付候節々町預に成、番人附居申候處、廿二日、太郎兵衛御仕置被仰渡有之に付、

いち
まさ

右廿三日早天、佐々源左衛門御番所へ、兩人かな書之願書に、長太郎儀は、養子之事候に付御除き、いち以下四人之子共首御切被成、父太郎兵衛命を御助被下候樣に、あら〳〵書記、御番所江差上、泣かなしみ申上候に付、初之程は與力中、叱かり又はすかし被見候得共、中々歸り候所存無之間、是非に御差上被下樣にと、ひれふし居候に付、不及是非、美濃守申上候處、鳥目被下、罷歸候樣に達而申すかし候得共、鳥目は望無之候、何れにも聞入不申候に付、町内之者共被召呼、樣子御尋被成候處、彼兩人忍出、御番所江母にもかくし參り候に紛なく、段々御吟味御座候處、問詰候樣子無據相聞へ、御城代々も、兩町奉行所江御吟味之處、中々人々入智恵なども仕候譯にて、曾而無御座候事紛なく候に付、廿五日、太郎兵衛死罪御延引被成、今以牢に御差置、右妻には、町内へ大切にいたし置候樣被仰付、尤右之趣江戸江も御伺申上、猶又段々御吟味相濟、太郎兵衛命御助被成、所拂被仰付候、

〔科條類典下一〕寛保元酉年伺

赦宥例

沼津宿惣代彌惣左衛門、於評定所手鎖掛ケ預置候處、赦免之儀相願候儀ニ付、申上候書付、

書面之通、手鎖預共差免候樣、可仕旨被仰聞、承知仕候、

四　十月十日　　　　　　　　　　　　　　評定所一座

東海道沼津宿旅籠屋惣代　彌惣左衛門

沼津宿去十月燒失仕候ニ付、旅籠屋七拾壹人拜借之願、右惣代彌惣左衛門度々評定所前箱江訴狀入候依て、先月廿一日御差圖之通申渡、於評定所手鎖懸、江戸宿淺草茅町壹丁目三右衛門店平右衛門ニ預置候處、右江戸宿平右衛門度々赦免之儀相願候、明十一日迄日數廿日ニ罷成候間、重而訴狀入候ハヽ、可相咎旨申聞、尤當人ゟ重而訴狀入間敷旨證文取之、手鎖預共ニ差免可申候哉、奉伺候、以上、

十月十日　　　　　　　　　　　　　　評定所一座

〔御仕置裁許帳十一〕春宮中宮就宣旨赦免之者之類

天和三年戌十月三日

壹人はつ　是ハ本所袋町太郎兵衛店、てつへん長助抱之遊女、上り屋ニ入

右之者、今度春宮(○東山)中宮(○靈元后房子)就宣旨、亥三月七日赦免、

同日

壹人はな　是ハ同所柳原六町目、家主ハ不知、家主抱之遊女、上り屋ニ入、

右之者、今度春宮中宮就宣旨、亥三月七日赦免、

〔御仕置裁許帳十一〕御法事に付免赦之者之類

町内に而捨子を見出シ隣町江捨る者

貞享四年卯十一月廿日

壹人長助　是は非人、此者當歳計に相見江候女子を、南傳馬町壹丁目與兵衞店下江捨置候を、中番久兵衞、辻番角兵衞見出シ捕承候へば、鈴木町と南塗師町之間之廣路に罷在候非人に而候、右之捨子鈴木町に捨有之を持參捨候由申に付、召連來候間致僉議候へば、鈴木町に而朝夕立廻り、給物貰渡世送り候に付而、鈴木町之やつかひに成可申と存、南傳馬町江持參捨申候、少も人に被頼捨候儀に而は無之由申候、仕形不屆に付籠舍、

右之者、天樹院樣〇德川秀忠女千姬廿三回御忌御法事に付、辰〇元祿元年二月二日、於傳通院赦免、

〔御仕置裁許帳十一〕日光正遷宮に付赦免之者之類

元祿二年巳六月十四日

壹人七郞兵衞　是は無宿、此者儀昨夜八ッ時分、小傳馬町三丁目辻番所江參候而申候は、其身儀、奈良屋市右衞門手代に而候、欠落者町内に罷在候由承候に付、辻番所に付ヶ居申度よしねだりヶ間敷申候に付、月行持太郞兵衞出合、番所に入置、食など給させ候へば、彌怪敷體に相見江申に付、市右衞門方江其段爲知候へば、召連參り候樣ニと申付、引連參見せ候處、市右衞門召仕に而無之由に而、町人共召連訴來候に付、遂僉議候處、右之段無紛由申候、奈良屋市右衞門手代之由僞り言申候段不屆に付牢舍、

右之者、今度日光御宮御普請就出來、御遷宮に付、午八月十四日赦免、

〔當記拾要集三〕寶永元年申四月十一日御用覺帳書拔

一年號寶永ニ改元、元祿十七年申三月晦日改ル、尤御支配御觸有之、當日評定所御祝儀御用御番所公事相延ル、依之先年赦有之儀くり見可申旨被仰出、帳面くり候へ共、元祿之時分赦之もの、帳面ニ不相見、今度當御番所掛り、南傳馬町貳丁目忠左衞門店忠兵衞、本所菊川町茂右衞門店市郞兵衞、申四月六日評定所江被召出、出牢赦ニ成、都合七人赦有之、

右赦之もの島目三百文宛被下之、

〔京都御役所向大概覺書 三〕赦之事

一正德三巳年、家繼樣將軍宣下ニ付、牢舍之者、赦被仰出候、

牢舍之者八人、四月十一日出牢申付候、

預ケ之もの八人、御免之旨申渡候、

〔月堂見聞集 八〕一正德五年四月十五六日、大佛智積院三井寺等に、男女ともに御參詣をゆるす、是權現樣〇德川家康の百回忌法事故也、〇中略京都牢獄のもの十一人赦有之、

〔舊記拾要集 三〕享保九年辰九月廿四日御用覺帳書拔

一享保九年辰九月廿四日、諸掛在島之流人百六拾人御赦免被仰出候段、戸田山城守殿より人別書を以、大岡越前守殿、中山出雲守殿江被仰渡候、此儀は御祝儀之赦ニ而も、御法事之赦に而も無之候、四年巳前丑八月被仰出候は、島々江古來より遣被置候流人之內、存命之分科書吟味之上、科之輕重を分ケ、人別ニ可書上之旨、被仰出候ニ付、此方御組ニ而中村八郎左衞門、向組ニ而吉田政右衞門江被仰渡、右丑八月六日より、段々致吟味、每度御內寄合江罷出、兩御頭江逐一相窺、御指圖之上、翌寅年二月同四月兩度ニ、科書帳都合六册、此人數九百六拾五人、戸田山城守殿江被差上候處、其後寅十月、右六册之內島御免被遊候而も、可然者之分書出候樣ニと、山城守殿被仰渡、御吟味之上書拔帳、卯正月被指上候處ニ、猶又同年四月より、當辰之秋迄、度々帳面御好之趣有之上、若於御免ニは引取人有之分百六拾人、幷引取人無之もの無宿共に貳百五拾九人、吟味之上帳面貳册ニ認被指上候處、右之內引取人有之もの共、百六拾人、此度差免可申旨被仰出候、依之島々江其趣御證文參候ニ付、流人着船次第、銘々引取人江御渡シ可被成段、引取人御呼出シ掛之御役所々ニ而被仰渡候、流人科書帳は別に記置之、

右百六拾人之流人辰十一月より當巳〇此間有脱文段々着船致候ニ付、島御代官河原清兵衞殿江引取人遣シ、請取之段御役所江御呼出、御免之段被仰渡候、大島は向井將監殿より通達有之、右之通相濟候、御當地より西國島々江參候流人は、大坂表江致着船、於大坂彼地奉行所ニ而、請取候ものも有之、又は御當地江大坂奉行衆より被差下候者も有之候、此儀は流人科書帳之末ニ銘々記置候、遠國奉行衆之掛りは、直に其御役所ニ而引取人江御申渡、着船之儀は、京大坂奈良奉行之掛之ものは、大坂表江致着船、長崎奉行掛は長崎表江直に着船致し引取相濟候事、

〔御赦例書五〕
享保九年辰十二月廿七日
一遠島　松浦左兵衞知行武州清澤村　十三郎〇中略
享保十三申年、日光御社參御祝儀之御赦ニ御免、　年數五年

〔享保集成糸綸錄七〕享保十六亥年十一月
今度日光山御宮御靈屋御修覆出來、正遷宮正遷座ニ付而赦被行候、依之當時在牢之内死罪歟、又は遠島ニ可成程之者、其外輕罪之者をも相交、致了簡可被書出候、以上、
十一月

〔御赦例書四〕
享保十二未年十一月十八日
一八丈島江流罪　本郷衞坂町七兵衞店　治兵衞〇中略
元文二巳年、竹千代樣〇德川家重御誕生御祝儀之御赦ニ御免、　年數十一年

〔手限御赦例書八〕
寶曆十三未年正月廿五日
一藏之上江戶拾里四方追放　深川西町傳兵衞元店　藤八〇中略
寛政三亥年、孝恭院樣〇德川家治子家基十三回御忌御法事之御赦ニ御免、　年數二十九年

死後赦宥

〔手限御赦例書 一〕
天明三卯年十二月廿七日
一江戸拂　深川八名川町金平元店　市右衛門〇中略
寛政五丑年、若君様〇徳川家慶是年五月生御弘御祝儀之御赦御免、年數十一年

〔手限御赦例書 二〕
寛暦三酉年九月二日
一中追放　本石町壹町目傳右衛門元店　久兵衛〇中略
寛政九巳年、御元服御官位〇徳川家慶御祝儀之御赦に御免、年數四拾五年

〔牧民金鑑 二十〕文化十酉年閏十一月九日　近江守殿御渡富永三郎右衛門逹
此度竹千代様〇徳川家斉子御誕生御祝儀ニ付、赦被行候ニ付、万石以上以下諸家中、幷領分知行百姓等いたる迄、罪科申付置候もの共、差ゆるし候ても仕置障不申分ハ、其品ニより相應ニ赦免、又は歸参等之義、主人心次第宥免可被申付候、且又當時仕置可申付者も、逆罪等之外宥免可相成分者差赦、其内ニも罪科重ク、全く難差免ものは、一等も輕く可被申付候、難決儀は三奉行之内江可被承合候、
右之通可被相觸候
閏十一月

〔後赦錄 四十二〕松平伊豆守殿御差圖
寛政九巳年八月廿九日遠島申渡
同年十月三日
一三宅島江流罪　小出信濃守元手屬中間　妻助〇中略
朱書 右之者文化十三年子年、御轉任〇徳川家斉爲二右大臣一御兼任〇徳川家慶敍二右近衛大將一御祝儀之御赦ニ御免、年數二十年

〔徳川禁令考後聚 三十九 赦律〕別冊

評釋

一永蟄居　永御預　永押込　永牢

右年數相立候とも、赦免之儀申上間敷、勿論病死等いたし、子孫等より御咎御免、石碑取建等之儀相願候類、御仕置之節より拾ヶ年も相立候分は、御赦有之候節、赦免之儀可申上候、

是者先例赦免被仰付候も有之候得共、一體本文之御仕置相成候は、多分は身分柄故、追放遠島等に難相成類、左迄之身分に無之は、片輪に而、右御仕置難被仰付歟、又は難手放御趣意有之もの、或は亂心に而悪事いたし候類にて、いづれも一ト通に無之御仕置に付、其罪狀におゐては、强而不屆に無之候とも、御仕置之筋合、并刑名に對し候而も、存生之内赦免相成候而は、御咎半途に而被赦候趣意に相成候間、年數相立候とも、私共より赦免之儀は難申上御座候、尤右類相果候上は夫迄之儀に而、地下迄難被差免と申程之儀にも有御座間敷候に付、身分柄に而、子孫等より當人相果候後、御咎御免、石碑取建等之儀相願候類は、御赦有之候節、赦免被仰付候而も可然哉に候得共、當人相果候とも、御咎後間もなく石碑取建、表向法事營み等出來いたし候而は、御仕置輕々敷相聞候間、大抵御咎之節より拾ヶ年も相立候分は、御咎赦免被仰付候而も可然哉に付、評議之上相認申候、

〔天保集成絲綸錄百一〕文化八未年二月

遠國奉行　江可被仰渡趣〇中略
火附盗賊改

一死罪以上ニ可成分、吟味中赦被仰出候節、身分等ニ寄、死罪一等を被宥、遠島追放ニ伺候儀、前書之趣を以可被相伺候、〇下文不載、本書引ニ可参看

〔御仕置裁許帳十一〕御代替リニ付赦免之者之類

延寶八年申七月四日

壹人久三郎　是は湯島天神門前理左衛門出居衆、此者當六月廿四日之夜、本郷元町御中間新兵衛店八左衛門方に而油桶盗取、天神門前下町八藏店清左衛門方江賣渡候處、右之八左衛門方ゟ清左衛門に、盗物之由に而斷預ヶ申に付、此者之宿、理左衛門に清左衛門方ゟ相斷候故、理左衛門捕江召連來候に付籠舍、

右之者、今度御代替〇德川綱吉に付、申十二月廿二日赦免、江戸日本橋ゟ十里四方追放、

〔御仕置裁許帳十一〕御法事に付赦免之者之類

追放立歸り之者

天和三年亥九月廿三日

壹人日かげ四郎兵衛　是は無宿、其身方ゟ注進可仕由申出徒者捕候得共、其後徒仕候に付、當月朔日、江戸十里四方追放申付候處、立歸候由又三郎致訴人、今日目付片町に而、同心捕江來候に付籠舍、

右之者、寅〇貞享三年五月八日、嚴有院様〇德川家綱御七回忌之御法事に付、於上野赦免、但シ江戸十里四方追放、

〔御仕置裁許帳十一〕御法事に付赦免之者之類

博弈を打者

天和三年亥閏五月十三日

壹人ひんは五兵衛　是は田所町左兵衛店之者、此者當月十日、鐵砲町清兵衛店作兵衛所に而博弈打、此者頭取仕候由、

右之者、御老中江相伺、御法事に付、寅〇貞享三年五月八日、於上野江戸追放、

〔三ヶ度例書一〕享保十二申年十一月廿二日

一三宅島江流罪　　元赤坂壹丁目彦八店八兵衛召仕欠落 長兵衛
朱書 年數十四年

右之者、赤坂表傳馬町太左衛門店孫左衛門請に立、三年以前午八月、右八兵衛方へ年季奉公に出し、引負金五兩貳分有之上、主人之金十兩、并脇差壹腰致取逃、在所越後國新潟五ノ町、父吉兵衛方江相越、夫ゟ西國順禮に出、播州姫路姉聟松崎玄壽と申醫師方へ參り罷在、其後姫路を罷立、御當地江參、小舟町を通り候處、主人八兵衛見付捕、請人孫右衛門方へ召連訴出候に付、遂吟味候處、引負金有之上に而、主人之金子脇差取逃いたし、重々不屆に付、死罪可申付者に候へ共、日光御社參御祝儀之御赦に其科を宥、遠島、

〔科條類典下六〕享保十五戌年三月

島田豐前守掛 神田松下町代地小兵衛店 十郎右衛門

右十郎右衛門儀、山王御旅所門前甚兵衛と、賣綿出入ニ付吟味之内、於評定所手鎖をかけ、家主江預ケ置候處、手鎖をはづし、致欠落候科ニ依而、死罪可申付ものに候得共、去酉十月廿四日、池上御法事之御赦、遠島、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政元酉年二月

松平伊豆守殿御差圖　　御勘定奉行 根岸肥前守掛

一野州都賀郡村々ニ而召捕候盜賊無宿佐七外貳人一件〇中略

右例

去ル卯年六月、道中奉行伺之上申付候、無宿長五郎儀、飢渇ニ迫り候迚、板橋宿問屋市左衛門裏口開戸掛鐵有之處、固辭明ケ這入候段、不屆ニ付、死罪可被仰付儀之段可奉伺處、御法事之御赦ニ出牢門前拂申付候、

不赦

〔御仕置例類集二ノ十一〕文化十酉年御渡

甲府勤番支配伺

一無宿直吉盗いたし候一件

信州小縣郡上田在洗馬村文平忰當時無宿　直吉

右之もの儀、信州岡田宿問屋七左衛門方江忍入、金子千四百兩餘、反物衣類盗取、右金子ニ而呉服物類其外相調、又者酒食ニ遣捨候段、重々不屆至極ニ付死罪、

此儀吟味書之趣ニ而者、信州淺間温泉場ニ居候節、商人體之もの荷物附通り候を見請、岡田宿問屋江泊可申儀ト相察、問屋七左衛門居宅裏口江廻り見候處、右荷物有之候ニ付、窓下之壁落掛有之候を突破り這入、金子反物等盗取候と有之候間、家内江忍び人、或者土藏杯破候類、金高雜物之不依多少、死罪之御定ニ而、伺之通死罪相當ニ候處、此度御誕生御祝儀之御赦被仰出候ニ付、評議仕候處、淺間温泉場ニ居候節、商人體之もの之荷物を見受、岡田宿問屋江可泊ト相察し、右問屋江忍入盗いたし候儀ニ而、金高之盗ニ者候得共、拾兩以上之分、金高之多少ニ而、御仕置輕重可有之筋ニも無之、盗之始末數度之儀ニも無之、格別手強之譯も無之間、死罪ニ相當候處、一體身分者無宿ニ而、右之通大金盗取、右盗金を以身分を取飾り、大勢之ものを欺候儀、右ニ付而者、多人數之もの共、不埒不屆も仕、損金致候ものも有之候儀ニ付、全之御赦ニ難相成奉存候、死罪ニ可相成盗賊を、此度之御赦ニ遠島被仰付候例も有之候間、直吉儀も死罪一等を、此度之御赦に被宥、遠島、

朱書
評議之通濟

〔天保集成絲綸錄百一〕文化八未年二月

遠國奉行

火附盜賊改江可被仰渡趣

一盜賊かたり之類

右飢渴又ハ貧困ニ迫り、其外與風之出來心にて盜いたし候類、假令〆りを破り候而、死罪ニ可相成ものニ候而も、赦ニ可被相伺候、然共三度ニおよび、右及始末候もの、并一旦御仕置ニ相成、再犯之ものハ、出來心とハ難申間、赦ニ難成候、

但引合之內、質ニ取候もの、又ハ買取候もの有之、右不念之咎も、本人赦ニ相成候上ハ、御免之積、可被相伺候、然共右一件之內、盜物と乍存質ニ取、年來陰物等買候類ハ、赦ニ難成品故、右樣之もの一件之內ニ有之盜賊ハ、赦ニ難成候、且盜物質ニ取、又ハ買取候もの咎ハ無之候而も、質物取上、又ハ代金損失等ニ申付候儀則咎ニ候處、右之分御免有之候而ハ、被盜取候もの、全損失ニ相成候間、一件之內、右類有之分之盜賊ハ、是又赦ニ難成候、〇中略

一逆罪之もの

一邪曲ニ而人を殺候もの

一火附

一致徒黨人家江押込候もの

一追剝いたし候もの

一都而公儀之御法度を背、死罪以上之科ニ可被行もの

但役儀ニ付、私欲押領いたし候もの、

一惡事有之、永尋申付置候者、

右ハ赦ニ難成候

〔大赦律〕文化十三子年

御轉任御敍任御祝儀大赦之節より之追加
　御免有無之罪狀調方之儀ニ付評議濟

一かたりニ而御仕置ニ成候後之盜

一盜ニ而御仕置ニ成候後之かたり、
　右ハいづれも盜之刑ニ而、たとひ前科入墨無レ之候とも、盜之再犯ニ准じ、一般ニ難レ成、
　朱書
　是ハ右同斷、貳拾一ヶ條之内ニ、評議之上取直相認申候、

一固辭明之物不レ得レ取
　是ハ固辭明候而已ニ而、其身不レ立レ入候得バ、入墨重敲之先例ニ付御免之積り、其身立入候得バ、死罪之先例ニ付難レ成、
　朱書
　是ハ死罪入墨敲等、大赦ニハ御赦之品無レ之候間、今般取調候箇條書ニ相除申候、

一塀を乘越立入不レ得二物取一
　是ハ御免ニ成候例御座候得共、前書箇條ニ見競候得バ難レ成、
　但本文御免之例ハ不レ用之積
　朱書
　是ハ右同斷略〇中

一一寺住職之僧、盜いたし候分ハ、年數相立候とも、御免之儀ハ申上間敷事、
　朱書
　是ハ一寺住職之僧、盜いたし候ハ多分死罪ニ相成、大赦ニハ赦之品無レ之候間、今般取調候箇條書ニ相除申候、

一女犯僧、一寺住職ハ勿論、所化僧ニ而も難レ成、
　朱書
　是ハ今般取調候箇條書拾六ヶ條ニ、評議之上取直相認申候、略〇中

一強訴徒黨之頭取御免之例無レ之

朱書
是ハ右同断拾ケ條ニ、評議之上取直相認申候、○中略

一捕方役人江手向候もの之分ハ、永久御免難成、長脇差を帯候もの、并佐州等を逃去悪事いたし候ものハ、追而年限見計ひ之積を以、今般三ケ度御祝儀御赦ニハ難成、

朱書
是ハ捕方役人江手向候もの之儀ハ、今般取調候箇條之内拾壹ケ條ニ、評議之上取直し相認申候、其餘ハ永箇條ニ有之候間、右ニ基き取調申候、○中略

一疵受候もの、餘病ニ而相果候相手、遠島ニ成候もの之事、

是ハ科書之品ニ寄、御免ニも相成候積、

但疵ハ愈口ニ成候得共、餘病發し相果候歟、又ハ餘病ニ無紛段、見居附候科書之もの之類ハ御免ニも可相成、疵ハ愈寄候得共、全ク餘病ニ而相果候とも難見居趣之科書ニ而ハ、御免不相成、

〔赦手續錄〕土井大炊頭殿御差圖　小田切土佐守掛

朱書
是ハ今般取調候箇條書九ケ條ニ、評議之上取直し相認申候、

呉服町孫兵衛店彌兵衛方ニ居候
源七事
万之助

右之者儀、先達而不届有之、敲之上中追放ニ相成候身分ニ而、渡世薄候迚御構之地と乍弁、御當地江立入、御仕置ニ成候儀押隠し彌兵衛方ニ罷在候段、不届ニ付重追放、

享和三亥年十二月

右源七儀、再犯ニ付御免ニ不相成、右之趣御届有之候、

〔御仕置例類集一ノ四〕文政四巳年御渡

火附盗賊改長井五右衛門伺

一拾五歳已下ニ而致附火候もの御赦之儀ニ付評議

武州豊島郡下駒込村百姓辰右衛門娘
かね

右之もの儀、致奉公居候處、親之許江歸度存不快之由申、親之方江參候處、親共嚴敷叱候ニ付、主人方江立歸、相勤居候得共、奉公難儀ニ存、暇ニ相成候樣可致と、不計惡心發、出火有之主人方燒候は、ば居所無之、親元江被歸可申と存付、主人方竈之火を持出、隣家居宅庇井雪隱屋根上江、兩度迄致投火候段、幼年ニ而辨無之とは乍申、右始末不屆至極ニ付、火罪御仕置ニも可奉伺處、拾五歲巳下ニ付遠島申付、拾五才迄親辰右衛門江預ケ置、拾五才ニ相成候はゞ、火附盜賊改江訴出候樣可申渡哉と相伺申候、右者此度貞鑑院樣御法事之御赦御免ニ相成可然品ニ候哉、評議致し可申上旨、被仰聞候、

此儀子心ニ而無辨、火を付候もの、拾五歲迄親類江預置、遠島と有之御定ニ見合、御仕置當りは伺之通ニ而、振候儀も無之、然ル處附火いたし、幼年等ニ而遠島ニ相成候もの、御仕置ニ成候後大赦之節御免ニ相成候例は有之候得共、當座之御赦ニ御免ニ相成候儀は、享保之度日光御社參濟之御赦ニ、遠島ニ相成在牢中、段取ヲ以御免ニ相成候、書留有之候外相見不申、右體當座之御赦ニ、段取ヲ以御免ニ相成候儀は、去ル酉年、御誕生御祝儀ニ、出格之御赦被仰出候節之外、近例相見不申候間、別段之趣意と存、兼而現在御赦ニ段取之儀は、不申上心得ニ有之、依之寬政十午年、當座御赦之儀ニ付、一座江御渡被成候、御書取之趣ヲ以相含、勘辨評議仕候處、右御書取ニ付、其節一座評議之趣申上候內、舊惡御仕置御定ニ、舊惡ニ候共、御仕置可相伺と有之ヶ條之內、忍入盜人之外は、御赦ニは不申上儀と心得可然哉と申上、其後右之趣ニ相心得罷在、致附火候もの之儀は、前書舊惡ニ候得共、御仕置可相伺と有之ヶ條、第一之ものニ候處、今般之かねは、幼年ニ而火罪相當之御仕置ニも不相成ものニ付、おのづから差別も可有之哉ニは候得共、火を附候もの之儀、盜惡事等とも違ひ、品ニ寄り諸人之災不少次第ニも至り候事故、差別を附御赦

ニ相成候様ニ而は、一體之火罪御仕置之ゆるみにも可相成哉ニ付、かね儀御赦ニ御免不被仰付方可然哉ニ奉存候、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集二ノ二〕文政七申年御渡

日光御門主被仰立候

一人殺候もの助命之儀、御門主ゟ被仰立、差支有無之儀評議、

書面評議仕申上候趣ヲ以、上野執當江御達相濟候旨被仰聞、承知仕候、

申七月十五日　評定所一座

當月廿二日、評議仕可申上旨被仰聞御渡被成候、日光御門主ゟ被仰立候書付、一覽仕候處、牧野越中守足輕鈴木皆太と申もの、深川富川町續、百姓家長屋に罷在候繪師松林事、林藏を及殺害逃去、本坊門内江駈込、助命相願候に付、越中守方江被引渡候處、榊原主計頭方江差出に相成、當時吟味中之趣、御門主被及御聞、深不便に被思召、助命之儀、御聲掛被成遣度、右之通御聲掛有之候而も、御差支無之哉之段、御内談被仰入候旨に御座候、

此儀差當、先例相見不申、御定書に、

一相手理不盡之仕形に而、不得止事切殺候においては、　相手方親類名主等被殺候もの、平日不法ものに而申分無之、下手人御免申出、無紛候はゞ、　中追放

右之通有之、人を殺候もの助命之儀は、不容易儀に而、既に去ル亥年、輕罪之もの御赦之儀に付評議之上、申上候趣を以、遠國奉行、并火附盜賊改江も被仰渡候ヶ條之内、人殺疵付候類は、相手有之品故、御赦には難相成、然共相手ゟ不法を仕懸、無是非人を殺候もの、其外怪我にて人を殺候類は、吟味之上其品に寄、御赦に可申上と有之、何レ右體之儀、御門主御賴に候迚、助命相立候樣には難成筋に付、右被仰立之趣を以御取計之儀は、御差支有之段被仰達、御内談之書面は、御差戻相成候

方可然哉に奉存候、

申六月

〔折たく柴の記〕中 己丑の春〇寶永六年、中略、二月二日に、大赦の事につきて封事を奉りたりき、其大要は、古にいふところの赦は、其犯す所の罪、或ハ過誤に出、或は不幸に出し所を赦し、後世の事のごとくに、已發覺未發覺、已結正未結正、罪大小となく、こと〳〵くこれを赦除するにはあらず、近例を見るに、大法會行はるゝ事ある時に、犯しゝもの、親戚等歎申す所を、その道場において帳にしるして奉る、これを赦帳といふ、其帳をもて奉行所に下され、赦すべく、赦すべからざるかを議せしめられ、赦すべきものどもをば、法會の場にめし集て其事を行はる、さればたとひ赦に遇ひて赦すべきものといへども、其親戚の歎申すべきものあらざれば、死に至るまで恩に潤ふ事あたはず、それもなほ奉行所において、其罪を決せしものども也、其餘天下の諸大名、御旗本の家々において沙汰せし所のものは、此事にあづからず、しかるを稱して大赦行はるゝ、抔申すは、たゞ故事によりて其例を奉られしのみにて、實に其恩ひろく天下に霑れるにはあらず、これまたいかむぞ古にいはゆる欽恤の意たるべき、某近く前代の時の事を觀しに、法を奉ずる人々、務めて苛察を以て相尙び、一禽一獸の事の爲に、身極刑に陷り、族門誅に及び、その餘流竄放逐、人々生を安くせず、其父母兄弟妻子、流離散亡、凡幾千万人といふ事をしらず、今におよびて天下に大赦せらるゝにあらずんば、なにをもてか万姓來蘇の望をば慰せらるべき、また後漢の故事を按ずるに、赦は必らず國家變革と嘉慶の事あるに遇ふ時に行はる、近代のごとくに、凶喪等の事のために行はれし所にあらず、今の例のごとくならむには、凡天下の罪あるもの、ひそかに望むに國家凶喪の御事を以てせむ歟、古の諺に、一祝万詛に勝へずといふ事あり、もつともこれしかるべからず、しかりといへども此例また遽に擬すべからず、さらばまづ御中陰の御法事において、例によ

りて、常赦を行はれ、將軍宣下の儀行はれし時に當りて、天下に大赦せられ、宿弊改るべき漸をなさるべき歟、管仲のいひし、赦者小利而大害也、孔明のいひし、治世以大德而不以小惠、某此等のことを聞ざるにはあらず、苟悅またいひし事あり、赦者權時之宜、非常典也、天下紛然、百姓無邪、如此之比、宜爲赦矣、某が議申すところ、實にこれに取れりと申たりき、

〔寬の須佐美追加下〕元祿の初、中山勘解由、盜賊幷に遊俠のけひそたるを檢して、暴徒悉に靜りたるを、予〇松崎堯臣が幼年の比覺し、其頃向溝八左衞門と云俠客有て、其黨多かりければ、搜とられけるに、同名の者有てとらへられけるに、疑しくて、暫禁獄して、實否を糺んと待れける所に、彼俠客八左衞門始は、かげを隱しけるが、此よしを聞て、我故に科なき者を刑せられんやうなしとて、自に訴出て、某こそ御尋の向溝にて候へ、さきに同名の者有て、捕られしと承候て、忍がたく罷出て候、急彼者を免し給候へと申候程に、前に囚置候八左衞門を呼出し、問れけるに、我等こそ御尋の者に候なれ、只今迄は、何とぞ申逃んと陳じ候へども、かの者を罪におとしては本意ならず候、彌我等を刑せられ候へと申て、誠に無餘儀體なりければ、中山氏大に感じて申されけるは、八左衞門の舊惡免すべき者にあらず、然ども只今義を立、堅く守る所すぐれたる上は、以來惡事有べきとも思はれず、向後を愼めとて、二人ともに免し歸されける、匹夫といへども、羞惡の心ある事、おもひ志られぬ、

〔寬の須佐美追加下〕元祿の頃、牧野內匠頭、御小性組番頭にて、當番なりしが、御社參の前にて、忌服を禁せられしを、心得違たる事有て、職をけづられて、籠居すべきよし命せられければ、かき籠て三四年になりぬ、疾も出て、快事もなかりしかば、橫溝唯七と云士、年若きものなりしが、主君の年も老、若し此うちに變も有なば、家を滅さん事を深く悲、させる罪にもあらざるよしこまやかに書記し川越少將〇柳澤吉保の第に往きて、執事の人々に對面したきよし言入けるに、事六かしげに

聞へければ、ありあはざる由を云出しぬ、執次人云るは、我等に申おかれよと有しに、何とぞ執事の御方へ直に申度侍り、出仕有ん迄待申べき由云ける時、陪臣として、刀を携られし事、如何なるよしにやと咎めければ、召つるゝ者の無き故にて候へど、御咎めに逢ては迷惑の由言て、歸りつつ思けるは、主君の爲に志を盡さんとして、却て咎められぬれば、此事あしく沙汰ありなば、君の爲に罪をそへなん、口おしきわざ哉と思ひ定め、其由をくれ／＼と書つらねて、頓て自殺しけり内匠頭驚きて、大久保玄蕃頭は從弟なりしかば、如何せむと議じられければ、玄蕃頭、明けの日殿中にて、老臣達列坐の中にて、ことの由を細々と申されし時、川越少將もそこに在て、殊勝の若者哉、不便の事也、且少作の籠居も、程へぬる事也、御免有ても宜しかりぬべしとて、上聽に達して、ゆるさせ給けり、唯七が無二の志、大臣をも感せしめけるとぞ、

古事類苑

法律部五十三

下編下

訴訟上

名稱　四〇三
越訴　四〇九
直訴　四一四
駕籠訴　四一七
駈込訴　四二四
捨訴　四三〇
張訴　四三六
强訴　四三八
門訴　四四三
濫訴　四四六
箱訴　無名箱訴　燒箱訴狀　數度箱訴　駕籠訴之上箱訴　四四八
再訴　四六四
再吟味願　四六七
追訴　四六八

懲訴　四六九
先訴後訴　四七〇

古事類苑

法律部五十三

下編下

訴訟上

徳川時代ニハ、訴訟ニ關スル名目甚ダ多シ、卽チ訴訟ノ中ニ、別ニ訴訟ノ名アリ、原告初テ訴ヘテ未ダ被告ニ報ゼザルヲ云フ、又單ニ官府ニ請願スルヲモ訴訟ト云フ、公事ハ原被兩造ノ相對セシ後ノ謂ニシテ、或ハ之ヲ出入トモ云フ、法庭ニアリテハ、訴訟ト公事トハ各別ニ之ヲ取扱フ例ナリ、又帳外トハ、差紙指定ノ期日、官府ニ事アリテ之ヲ後日ニ展ベ、或ハ其事結シ難クシテ、一旦之ニ歸鄕ヲ命ズルヲ云フ、是モ亦特別ニ取扱ヘリ、又本公事、金公事ノ名アリ、本公事トハ質地、作徳、買預米、預金、給金等ノ如キ、利息ヲ生ゼザル金穀物品ノ訴訟ニシテ、金公事トハ、賣掛金、持參金、手附金、立替金等ノ如キ滯金スル時ニ、利息ヲ生ズベキ金錢上ノ訴訟ナリ、又裁判ノ方法ヨリ一般ノ訴訟ヲ式日公事、立合公事、内寄合公事ナド云フ事モアリ、又都テ刑事ニ關スル裁判ヲバ吟味物ト稱ス、

當時裁判所ハ各管轄アリテ、其部下ノ訟ヲ受理スル例ナリ、故ニ其順序ヲ經ズシテ、之ヲ上司ニ訴フルカ、若シクハ所轄以外ノ裁判所ニ訴フル時ハ、之ヲ越訴又ハ筋違ノ願ナド稱シテ、其訟ヲ受理セズ、且犯スモノハ罪アリ、直訴モ亦越訴ノ類ニシテ、將軍若シクハ領主ニ訴フルモノヲ云フ、駕籠訴ハ、老中等ヲ途ニ要シテ之ニ訴フルモノニシテ、亦越訴ナリ、駈込訴ハ、其所轄ノ裁判所ニ訴ヘズシテ、評定所若シクハ三奉行所、若シクハ幕府ノ重臣ノ家、領主

ノ館等ニ訴フルヲ云フ、亦越訴ナリ、捨訴ハ捨文トモ云フ、訴狀ヲ評定所、其他諸官衙若シクハ老中以下ノ門前等ニ陰ニ置クヲ云フ、張訴ハ捨訴ト其目的相同ジケレドモ、只其訴狀ヲ貼付スルニ由リテ其名ヲ異ニス、强訴ハ、黨ヲ結ビテ訴フルモノニテ、犯スモノハ其罪甚ダ重シ、門訴ハ、强訴ト同ジク、多人數相率井テ、領主、地頭、代官等ノ門前ニ至リテ訴フルヲ云フ、濫訴ハ、非據ノ事件ヲ訴フルコトヲ云フ、

以上ノ訴ハ、皆法ノ禁ズル所ナレドモ、享保六年ニ至リテ、幕府ハ評定所ニ匭函ヲ設ケ、訴訟ノ順序ヲ踐マズシテ投書セシム、是ヲ箱訴ト云フ、但シ姓名ヲ明記シテ其規則ニ據ラシム、若シ違フモノハ之ヲ燒棄シ、甚シキモノハ罪アリ、箱訴ハ、京都以下遠國奉行ノ裁判所ニモ亦之アリ、聽訟ノ下ニ詳ナリ、

再訴、再吟味願ハ、一旦却下セラレタル事件ヲ再訴スルモノニシテ、多クハ受理セザル例ナリ、サレド其理明白ニシテ、或ハ裁判官ノ過誤ニ出ヅルモノヽ如キハ、之ヲ拒マズ、追訴ハ、最初訴ヘシ事ヲ更ニ追加シテ訴フルノ謂ニシテ、多クハ受理セザル例ナリ、愁訴ハ歎願ノ類ナリ、先訴後訴ハ、同一事件ヲ甲乙二所ヨリ出訴セシ時、其前ナルヲ先訴ト云ヒ、後ナルヲ後訴ト云ヒテ、後訴ヲバ之ヲ却下スル例ナリ、若シ同時ニ出訴スル時ハ訴訟人ノ多キ方ヲ以テ、先訴ト看做ス等ノ事アリ、親屬相互ノ訴訟ハ、嚴禁スル所ナリ、サレド事情ニ依リテハ咎メザルコトアリ、主從ノ訴訟ハ、主人非理ナル時ハ、從者ノ訴ヲモ受理スレドモ、槪シテ主人ヲ訴フルコトヲ聽サズ、平民ノ武士ヲ訴フルコトハ禁ズル所ニアラザレドモ、多クハ內濟ヲ勸メテ、容易ニ差紙ヲ發セザル例ナリ、寺社官僧ノ訴訟ハ、多クハ本寺觸頭支配頭等ノ裁許ヲ受ケシメ、已ムヲ得ザルモノニアラザレバ受理セズ、寺社領ノ人民、其地頭ノ非分ヲ訴フル時ハ、先ヅ其寺社ノ人ヲ召喚シテ之ヲ吟味シ、其事情ニ由リテ受理ス、穢多非人ノ訴訟

ハ、平民ト其帳簿ヲ異ニシ、法庭ノ待遇モ亦異ナリ、訴訟人篇訴庭座次待遇條ヲ参照スベシ、家督相續ノ訴訟ハ、他ノ訴訟ト異ニシテ、幕府ノ直轄地ト他領トヲ問ハズ、其事件ノ起リタル場所ニテ、代官、領主ノ裁斷スルモノトス、直轄地ノ人民ヲ他領ニテ裁斷スルハ、此一事ニ止ル、土地用水ノ訴訟ハ、多ク實地ヲ檢査シテ之ヲ決スル例ニテ、當時ノ裁判制度中一ノ重要ナルモノトシテ認メラレタリ、質地小作ノ訴訟ハ、十年以上ノ永年季ヲ約スル質地幷ニ名主ノ加印ナキガ如キ違式ノ證文ハ證ト爲スヲ得ズ、又十年ヲ過ギテ後ニ訴フルモ受理セズ、小作ノ滯ハ、日ヲ限リテ辨濟セシメ、期ヲ過ギテ辨濟セザレバ、身代限ヲナサシムル等ノ法アリ、後ニ質地ハ借金ニ准ジテ、年數ニ關セズ辨濟セシメ、小作滯金ノ利息ノ高キモノハ、一割半ノ利息ニ改算シテ辨濟セシムルコト、爲ス、而シテ質地ノ訴訟ニハ、地主死亡スルカ、若シクハ逃亡スル時ハ、加判人ヲ訴フト雖モ受理セザル例ナリ、金銀訴訟ハ、卽チ金公事ニシテ、片濟口公事トモ云フ、原告ニテ内濟ヲ請フトキハ、別ニ被告ノ調印ヲ要セザルガ故ナリ、當時ノ制、金銀ノ關係ハ、訴訟中特ニ之ヲ輕視シ、評定所ニ在リテハ、他ノ訴訟ハ、毎月三回ノ立合ナルニ、此ハ二回ノミ裁斷シ、且實曆中ニハ、金銀ノ濟口ハ三奉行ニテ取扱フベカラザル事ト爲シ、寛政天保ニハ棄捐ノ命ヲ發シ、從前ノ事ニ係レルモノハ、其訴ヲ受理セザル事ト爲シタリ、又滯金ハ或ハ切金ヲ命ジテ、其元利ノ幾分ヲ漸次ニ辨償セシメタリ、度掛訴訟ハ、一二度掛公事トモ云フ、金公事中ノ一種ニシテ、卽チ切金ニ關スル訴訟ナリ、相訴トハ、金主兩人ニテ、一人ノ債主ヲ訴フルヲ謂フナリ、

〔政善集要〕訴訟之事

一訴訟ソツメイ、ウツツメウト訓す、俗、詔ニ書は非なり、詔はミコトノリ勅也ト同、〇中略詔に不ㇾ可ㇾ訢候、又訢キンタノシム、ヨロコブ也、訴不ㇾ可ㇾ訢候事、

〔舊記拾要集三〕元祿十年丑十一月十四日、御用覺帳書拔、

一元祿十年丑十一月十四日、柳澤出羽守殿江被爲成、○徳川綱吉御奉行衆、公事、訴訟御裁許之節、與力勤方、但川口攝津守殿御月番にて被仰渡候、

此方ゟ與力五人

安藤小左衛門

御白洲役人　佐久間傳右衛門

稻澤彌市兵衛

呼出し役人　三好新助

生田三郎左衛門

右前日、人指にて被仰付相勤申候、向方も組頭三人、平二人出申候、前日此方にて一同に被仰渡候、

向方ゟ與力五人

吉田十郎兵衛

御白洲役人　深澤重大夫

勝田八右衛門

呼出し役人　田中勘兵衛

板原五兵衛

一同心一方ゟ五人宛、組頭ゟ人差にて出し申候、此方ゟ笹岡彥助、寺岡文右衛門、布施半右衛門、岡本文右衛門、三田忠兵衛、向方ゟ桑原小兵衛、湯淺小右衛門、横川武兵衛、間木彌大夫、淺野伴右衛門、罷出申候、

一與力は染小袖麻上下着し申候、同心は羽織袴にて罷出申候、尤足袋はき不申候、

一公事十三、訴訟三ッ出申候、十四日之朝六ッ時前、雙方與力同心、此方御番所江相詰、公事訴訟之順、御書付之通委細相改、都合人數吟味いたし銘々懐中に、其節公事訴訟ニ入用之書物計爲持、其外不入もの丶分は、懐中爲致不申候、名主は常之通上下にて指出し申候、尤公事訴訟人足袋はかせ不申候、

一牢舍之者は手錠ニ仕、手鎖のものは、其儘出し申候、手錠は其節着物之外にて掛ヶ申候、

一地方御奉行衆ゟ出申候、公事人訴訟人出申候順前方御書付在之順を持、地方ゟ出申候分は、荻原近江守殿家來御屋敷江召連參り、此方江請取、右如順指出し申候、

一公事訴訟人十四日之朝、此方御番所ニて、白洲江入置、伊豆守殿御出御立合にて、出羽守殿御屋敷ゟ御左右可被成候間、公事人訴訟人召連可罷越旨、雙方與力江被仰渡候、六ッ半時過、御左右在之召連參、常磐橋之裏門ゟ入レ、出羽守殿御家來立合、馬場ニ筵を敷、順之通並置申候、尤同心付居申候、

一與力は出羽守殿御家來差圖にて、御殿近所之長屋、平岡宇右衛門と申仁之座敷ニ罷在、出羽守殿ゟ菓子等被下之、其後曾根權大夫江參會いたし、御白洲之様子權大夫同道にて前方見置申候、權大夫指圖にて、御殿近所長屋前ニ筵を敷公事人訴訟人如順繰入置申候、尤町人共江も菓子茶など被下之候、○中略

一公事訴訟、此次如何様のもの出候哉と、出羽守殿御出呼出し之與力江直ニ御尋被成候儀ニ御座候、

一公事人、牢舍又ハ手鎖に被仰付候ものも、御白洲ニては繩をかけ不申候、攝津守番所江參候得と被仰付、御白洲を出し、同心付居、不殘仕廻之時分、此方御番所江一同に召連參候、尤日切證文日延も、右之通被仰渡候、評定所掛りは評定所ヰ罷出候得と被仰渡候、○中略

一公事相濟候後、爲御褒美寺社奉行衆江御時服五ツ宛、町奉行衆江御時服三ツ宛、御勘定奉行衆江御時服三ツ宛、御吟味方江御時服貳ツ拜領之由、

月番　寺社奉行裏書〇中略

〔御定書百箇條〕目安裏書初判之事、

從前々之例
一寺社并寺社領、附八州之外私領、關八州之内ニても、寺社領より御府内江懸候出入、

享保二年極
但支配違江懸候出入ハ、評定所江可差出、〇下略

〔政要集乾〕公事訴訟之品、出入ニ唱候意味之事、

一公事訴訟之品、數多候得共、出入ニ唱候は、國郡村田畑之境論、山野秣場用惡水論、立木伐採、理不盡口論、疵附、不義誘引、出奔公人、婚姻、家督、跡式、座席、役儀、商賣、貸借、勘定、引負、祭禮、入院、引導、燒香、滯り、村仕來破候など、其外都而之公事出入、諸願奉行所方江之儀は、前々ケ條之通相心得可申候得共、一通り訴訟方江利害申聞、先方御代官亦は領主地頭江も訴訟之趣を以申遣、熟談にも可濟事に候はゞ、日數手間取不申樣埒明、其筋之奉行所江添簡致し、可差出候事、

〔內寄合帳三ノ三十一〕巳〇弘化二年九月六日　內寄合

帳外　三

訴訟　六

帳外

一　古筆了伴

朱書
月番挨拶　高野學侶方在番古義眞言宗　蓮金院
同在番同宗　定光院

在番代ニ付御目見御暇願

御序次第可被仰付（朱書）

一下ヶ上　　　　　　高野行人方在番古義眞言宗　本願院
　　　　　　　　　　同在番同宗　康德院

在番代ニ付御目見御暇願

御序次第可被仰付（朱書）

訴訟

一御用窺　　　　　　鳳閣寺病氣ニ付代　壽量院
　　　　　　　　　　深川天台宗　覺樹王院

無替儀（朱書）

一（大膳亮掛）

住居向、其外所々模様替、幷門前下水等、作事願之儀ニ付、

見分遣處、無障儀ニ付、願之通差免、追而印狀可遣、（朱書）

〔評定所格例〕每月四日、廿一日ニも、外公事裁許可致事、

天明八申年十二月

每月四日、廿一日ニも、外公事裁許可仕儀ニ付一座より書上、

每月四日、廿一日、借金銀公事訴訟裁許等相濟候跡ニ而、以前者、金銀出入外之初公事、幷裁許をも仕、其外濟口承屆、或用惡水堤川除出入、熟談申渡、且地改可遣旨申渡、歸村申付候類も、帳外江差出候處、近年外公事幷裁許者差出不申積、一座申合濟候、其外熟談幷地改歸村之申渡計、帳外江差出申候、右者御定書ニ、每月四日、廿一日、兩度借金銀公事訴訟計承之、裁許可申付ニ有之候故、金銀出入外之裁許も不差出義ニ相成申候、然ル處金銀外之公事、四日廿一日前、吟味相決候もの、右兩日を除キ、次之式日立合江差出裁許仕候而者日合も相延、無益に江戸逗留いたし、夫

丈之雜用相掛、末々之もの難義仕候ニ付、再應評議仕候處、四日廿一日兩日之金日ニ、外公事之差日者仕間敷義ニ候得共、借金銀公事訴訟裁許相濟候而も、當日時刻之餘分も御座候ニ付、金銀出入濟切候跡ニ而、差日差支有之延置候外、公事并裁許とも、別段ニ帳外江差出候ハヽ、金銀出入之妨ニも不相成義ニ付、以來四日廿一日ニ而も、金銀出入濟切候ハヽ、外公事裁許、并差日ニ延候公事合をも、別段帳外江差出候樣可仕事ニ存候、依之申上置、

申十二月

右書面松平伊豆守殿江進達致候處、申上候通相心得可申旨仰聞らる、

〔評定所書留帳三〕一文政八年四月廿一日

曾我豊後守殿懸帳外之内、

熨斗目着之由申立候　東叡山末世尊院領地方役人　金井直兵衛

右之者、今日帳外出席ニ而罷出候處、席之儀、先例無之候ニ付、寛政三年十二月廿一日根津權現社領、地方役罷出候例を以、落椽江差出可然哉之旨、留役中江申談候處、評議之上、下椽江差出候樣、留役中申聞候間、其通取計候事、

酉四月廿一日　由比義三郎
向方　米倉諸右衛門
服部新兵衛

〔公裁秘錄一〕一本公事金公事差別之事

本公事

質地　作德　買預米　預金　給金　店立　雜用金　讓金　家賃

鋪金　引負金　兩替金　魚場請負金　爲替金　夜具滯　小作滯

船床書入　紛失物買取置不返　家藏等賣渡金　水主雇前金　髮結床并廻り場
所　銀札引替 但最初金公事、後ニ本公事、　儲成質物を以金銀貸候類、
都而利足附候分は、金公事取捌也、
水主雇前金、文化五午年閏正月十一日、三ヶ年を限、取上候積、一應相談濟の處、近來年數立候
ても、事實次第取上候積、
身代金出入

金公事
賣掛金　持參金　手附金　立替金 年貢にても　先納金　書入金　官金　祠堂金
仕入金　店賃金　貸金　替請金　預ヶ金 利附　爲替金 利足定有之　仕送金　貸銀 米引當
年賦金　銀札引替 後ニ本公事　職人手間賃　地代金　損料金　米手附金　馬代金
飯料滯　手間賃前貸　紛敷給金 但手間賃前貸ニ准ず　諸道具預金銀借　諸道具預證文にて金
銀貸　諸物賣渡證文にて金銀借　拜領屋敷地代店賃書入金子借
〔憲法編年錄三十八〕享保五年八月朔日三奉行へ〇中略
一公事訴訟何によらず、立合公事を可差出候、式日公事とて撰出候儀、堅無用に候事、〇下略
〔聞訟秘鑑〕一公事出入と吟味物と差別之事
是は通例之訴訟は、返答書申付及吟味、火附人殺盜賊之類、重科ニ可相成者ハ、吟味物と唱、返答
書不申付手當致置、吟味可致事に候、密通も吟味物ニ候得共、是者夫疑相晴候得バ、內濟願下ゲ
ニも相成候ニ付、返答書申付候方も可然哉、都而御法度筋江拘り、願下ゲ內濟等ニ不相成儀ハ、
吟味物と唱候事、
〔御定書百箇條〕無取上願再訴并筋違願之事

從前々之例
一三奉行所江不訴出、直ニ評定所江出訴罷出候ものハ、其筋之奉行所にて、吟味之上落着之儀、一座相談之上可申付事、

〔御定書百箇條〕御料一地頭地頭違出入幷跡式出入取捌之事

享保六年極
一遠國奉行支配、御代官所、幷私領百姓地江相懸候出入、其所之奉行御代官地頭ゟ、断有之候上にて取上可及吟味、断無之内百姓訴出候はゝ、取上申間敷事、

同
一地頭之出入ハ、地頭ゟ断有之候共、地頭にて取捌可相濟由申聞、取上申間敷候、勿論地頭ゟ断無之、百姓訴出候分ハ、地頭江可相願旨申渡、是又取上申間敷候、猶又不相濟由、地頭ゟ申聞候はば、頭支配江申立候樣可相達、

但地頭非分之申付に相聞候はゝ、伺之上取上可申事、○中略

同
一御料所百姓出入ハ、其支配人ゟ添狀無之候はゝ、取上申間敷候、品により支配人江其趣申通、猶又相滯候はゝ、對談之上取上可申事、

從前々之例
一地頭にて寺社ゟ百姓江懸候出入も、一通地頭申達候上、不相濟候はゝ、取上吟味可致事、

同
一寺社ゟ領主江相懸候出入訴出候はゝ、一通地頭申達、於不相濟は、取上可致吟味事、

〔御定書百箇條〕無取上願再訴幷筋違願之事

享保六年極
一總て願之儀、筋違江申出候はゝ、其筋之奉行所江願出候樣申付候上、再應申出候はゝ、其筋江逵對談、難立願にて無取上旨に候はゝ、其筋之奉行所にて、相應之咎可申付事、

從前々之例
但難立願、奉行所にて無取上旨申渡候處、同役江右之願申出においてハ、寺院侍ハ押込、百姓町人ハ手鎖可申付事、

〔科條類典下一〕元文三午年三月十四日、彌此通定置、追而被仰出等此帳ニ可記儀は書記可申候、其節々其趣書付可差出旨、評定所一座江被仰聞候帳面之內、

享保六丑年御書付

(元)御料并一地頭地頭違之出入之事

一地頭違又ハ一地頭之百姓出入訴出候事

是ハ両様ともに、地頭より断有之上ニ而取上可申候、若地頭より断無之内、百姓訴出候ハヽ、取上申間敷候、且一地頭之出入ハ、地頭之取捌ニ而、事済可申儀は、其趣地頭江可申談候、其上ニ而も不相済候ハヽ、取上可申事、

但地頭より届一通りニ而、出入之品を申立候儀ニ而ハ無之事、

一御料所之百姓出入訴出候事

是ハ其所之支配人之添状無之候ハヽ、取上ゲ申間敷事、

一御料所之百姓、其所之支配人江願候時、何之譯も不申聞、久敷押置候歟、或ハ裁許之次第請がたく、再往願候而も取上無之節ハ、不得已奉行所江訴出候事、

是ハ非分之品ニ候ハヽ、伺候而取計候筈ニ兼而被仰出候、左程ニハ無之、心得違之趣ニ相聞候ハヽ、支配人奉行申談、宜取計候様ニ可申付候、其上ニ而も訴訟人得心不致候ハヽ、奉行所ニ而裁許可申付事、

一私領之百姓、地頭江願候時、久敷取上不申、或裁許之次第請がたく、再往願候而も取上無之節ハ、不得已奉行所江訴出候事、

是ハ地頭奉行申談、宜取計ハせ可申候、其上ニ而も訴訟人不致得心、地頭からも断有之におゐてハ、奉行所ニ而裁許可申付候、但格別地頭非分之申付ニ相聞候ハヽ、其品言上可致事、

右之通、向後可被相心得候、以上、

丑六月

〔舊記拾要集　一〕享保六年丑六月十二日、御用覺帳書抜

町奉行江

總て下ゟ訴出候儀、奉行所江早速不相達、下役所或は其所支配人之方にて、爲滯候儀も有之由に候條、隨分心を附可申候、若押置候故、越訴など致し候者有之節は、其筋之役人急度相糺可申事、

丑六月

丑六月十二日、於御列座、水和泉守殿御渡被成候由記之、

〔牧民金鑑　一〕無取上願再訴并筋違願ケ條之内〇中略

一總而願之儀、筋違江申出候ハヽ、其筋之奉行所江罷出候樣申付不取上、再應申出候ハヽ、其筋之奉行所ニ而、相應之咎可申付事、

但差立願、奉行所ニ而無取上旨申渡候處、同役江右之願申出ニおゐては、寺社侍は押込、町人百姓は手鎖可申付事、

一三奉行江不訴出、直ニ評定所江訴訟ニ罷出候ものハ、其筋之奉行所江罷出候樣ニ申渡、吟味之上、落着之義は、一座相談之上可申付事、〇中略

朱書寬政十二申年六月十三日、菅沼下野守ゟ、左之通書面、例有無之義、甲斐庄武助江相尋候處、認振朱書之通加筆いたし、下ゲ札を以、翌十四日申聞候事、〇下略

〔科條類典　下一〕享保六丑年書上

筋違之願咎之事

江戸西河岸町六兵衛店
廻船問屋臺兵衛

同神田鍋町樽六店
吉兵衛

大坂西横堀久兵衛作
久左衛門

同所東横堀柏屋卓兵衛手代 新兵衛
勢州津 平左衛門

右之ものども、大坂表湊江湊之儀ニ付、右五人連判之訴狀仕樣書を以、去ル頃、有馬兵庫頭方江願出候ニ付、筋違之願致候段、吟味可仕旨被仰出候ニ付、越前守御役所ニ而詮議仕候處、筋違之願ニ相極り候、査兵衛、吉兵衛儀は、江戸住宅之ものニ候得ば、町奉行所江可罷出處、右之仕形不屆に付、兩人ともに戶〆申付、久左衛門、新兵衛、平左衛門儀は、早々在所江可罷登旨申付候、尤右之段大坂町奉行、井藤堂和泉守方江も申達、急度叱り置候樣にと申達候、右之趣各樣江申上置向後も筋違之願事、申出候ものゝ類有之候はゞ、右ニ准じ答メ可申付旨被仰出候、依之申上置候、以上

丑十二月

中山出雲守 町奉行○時春、
大岡越前守 町奉行○忠相、

〔公案比事 二十三〕明和二酉年二月　一座掛

一奥州庄野村太郎左衛門、同人忰源五郎儀、同村役人百姓共を相手取、川除林之儀ニ付一件、

松平主殿頭領分 奥州信夫郡庄野村百姓太郎左衛門忰 源五郎

松平右京大夫殿御下知

右之者儀、親太郎左衛門願之趣は、一分にて可願筋ニ無之上は可差留處無其儀、名兵衛明長屋江預申付候處、木部屋江押込置、太郎左衛門病氣之處、氣絶致候由風聞之儀を糺も不致、大造ニ申立、其上下村役所ニて取上無之筋には無之處、村役人江も相屆、村方を出最初之願不取上、其外道中往來之儀而已吟味有之、出入之趣意吟味無之、太郎左衛門命危候由子細も有之、領主役人不念有之之趣ニ相違之儀を訴狀ニ相認、領主ニて吟味中、差越奉行所江駈込訴致し、取上無之候迚、度々箱訴、駕籠訴致候始末、親太郎左衛門難儀之儀を申立候儀とは乍申、不埒ニ御座候間、三十日手鎖可

直訴

申付處、數日入牢申付置候間、咎之不ㇾ及ㇾ沙汰、

〔公案比事十八〕寛政元酉年五月

根岸肥前守掛

一甲州心經寺村百姓代庄助外壹人訴狀差出候一件

平岡彦兵衛御代官所
甲州八代郡心經寺村百姓代
庄助
同
兵右衛門

鳥居丹波守殿御下知

右吟味仕候趣、書面之通御座候、右庄助外壹人申立候出入ハ、御代官吟味中之儀ニ御座候間、此度私方ヵ呼出、右出入共吟味仕候而は、庄助外壹人不法之越訴致候故、兩人願之通ニ相成、支配御代官以來吟味筋之差障に罷成候間、右出入御代官に而吟味請候樣申渡、大目付江致越訴候不埒は、兩人共三十日手鎖申付候樣可仕候哉奉伺候、御渡被遊候帳面壹冊返上仕候、以上、

酉四月

御仕置附

右
兩人

右差當相當之例相見不ㇾ申、都而差越願致候ものは急度叱り、又は其品ニ寄手鎖等申付ヶ來候處、此者共ハ訴狀を封じ候而大目付家來宛之書狀之體ニ上書致飛脚宿江相渡差出候仕形、品不宜間、兩人共三十日手鎖と御咎附仕候、以上、

酉四月

〔訴論判例下〕裁許破、掟背、御仕置大概、〇中略

一御代官地頭にて吟味之内、致直訴ハ過料、〇中略

一御成先に於て無筋直訴差上に於てハ所拂、〇年月闕

〔大坂物語上〕されば一天たいらかにして、國とみ民やすかなる事、つたへきくぎやうしゆんの御代、ゑんぎ天りやくのせいたいも、是にはすぎじとぞおぼえし、か丶る上にも、下のなさけ、上につうずる事かたければ、そせうあらんともがらは、直にそせうをさゝぐべしとおほせ下され、大御所毎年一度づゝの御たか野なさるゝ、これによつてそせうあるものども、ぢきそをとげ、上聞にたつせしかば、たちまちけんぼうのともし火をかゝげ、ゑうたんのやみをはらす、

〔佐渡風土記中〕慶長八癸卯、四奉行之內、川村、田中歸國ニ而、今年ゟ翌年迄貳年之間、

合澤主稅

吉田佐太郎

中使免、江料免引等有之、　右之衆中、七月五日、本斗ニ五割增被掛候、依之百姓致江戸詰、訴訟を上候、其人數、上新保村半四郎、羽茂白井勘兵衛、北方村豐四郎、此三人也、右訴之事ニ付、佐太郎殿不首尾、夫故當國ニ而切腹と申、主稅殿事不知、豐四郎は後法體して了雲と申て畑村に住す、

中川市右衛門

鳥井九郎左衛門

横目　板倉隼人

御上使

〔佐渡志略一〕慶長八癸〇癸下恐脱ニ卯字年、去年御代官之輩、私に御年貢割增を掛けし事、百姓共三人上新穗半四郎、羽茂勘兵衛、北方豐四郎、出國して愁訴を遂しによりて、吉田佐太郎は自殺し、中川主稅は改易せられ田中清六、川村彥右衛門は御暇給はると云、

〔東武實錄三〕元和三年三月十七日、公〇德川秀忠增上寺ニ御參詣アリ、途中ニ於テ大橋長左衛門重保剃髮シテ後龍慶ト號ス訴狀ヲ捧ゲ、攝州大坂ノ役ノ事ヲ、阿部備中守正次ヲ以テ言上シテ云ク、慶長十九年、

大坂兵亂ノ時、人皆片桐市正直盛叛逆アルノ由ヲ云フ、是ニ依テ秀頼心ヲ直盛ニ隔ツル故ニ、市正已ガ宅地ニ楯籠ル、弟主膳正貞隆、及畠山民部、毛利兵吉、天野十左衛門、西川八右衛門、永井助十郎、伊東伊左衛門、大橋長左衛門等、片桐ト好ミ有ニ依テ是ニ應ズ、然リト云ヘドモ其後秀頼其疑ヲ散ジテ直盛ヲ許ス、重保モ又其難ヲ免ル、大神君、公兩君、大坂御進發ノ時、市正、主膳正、台命ニ依テ備前島ノ陣ニ加ル、重保モ亦是ニ從フ、翌年大坂再亂ノ後、市正、主膳正、及畠山民部、毛利兵吉、天野十左衛門、西川八右衛門、永井助十郎、伊東伊左衛門等ヲ召シテ、麾下ニ屬シ、本領ヲ賜ル、時ニ重保ハ備前島ノ備ニ於テ疵ヲ蒙リ、是ヲ保養スルノ故ニ、其列ニ預カラザルノ由ヲ訴フ、阿部備中守正次此旨ヲ台聽ニ達ス、其後遂ニ重保ヲ召シテ麾下ニ屬ス、

〔人見私記〕寛永十二年正月廿一日、石川左京御目見、是去年上洛御下向刻、於路次捧訴狀、其旨趣被聞召届、被召出、石川日向守子也、

〔人見私記〕寛永二十年六月廿二日、未刻正盛別業ヘ渡御、酉刻還御、此日許定、　廿六日、去ル廿二日、正盛別業ヘ御成刻、於筋違橋田邊傳三郎訴狀上ル、是先年彼父理兵衛、神保三郎兵衛組小十人、七年前相果、總領彌太郎跡式被下、彼三年已前病死、遺跡相續ノ嫡子依無之、御切米被召上、彼弟傳三郎被召出、何樣ノ御奉公ヲモ被仰付候樣ニト自訴之、自然彼親類等、右訴ノ事令教訓ヤ否ヤ御吟味ノ所、其身一分ニテ申上タル旨也、兄ノ跡式被下、先例雖無之、爲幼稚御奉公ヲ心掛申出ルニ付被召出旨、老中申渡、

〔明良洪範十二〕紀伊大納言頼宣卿ノ頃、直訴スル者多ク有シ故、以來直訴ハ法度也、モシ法度ヲ破リ直訴スル者アレバ事ノ善惡ニ拘ハラズ、死刑ニ行ハルヽ旨仰出サレケル、其後頼宣卿御鷹狩ニ御出ノ途中、訴狀ヲ捧ゲ平伏シテ居ル者アリ、頼宣卿見給ヒ、何者ゾト問ハセ給ヘバ、御馬廻リ的場五左衛門ニテ候ト云、頼宣卿、先日觸廻ノ趣キ、覺悟ノ上ノ直訴カト問ハセ給ヘバ、五左衛門

勿論ノ儀ニ候ト云、此時五左衛門、衣服ノ下ニ經帷子ヲ着シ居タリ、賴宣卿御歸館ノ後御吟味有テ、五左衛門ハ赦免仰付ラレ、直訴死刑ノ事ハ止メニナリヌ、

〔三奉行取計書〕寛政九巳年五月

駕籠訴人駈込訴人取計方之儀ニ付伺書

書面伺之通、取計可申旨被仰渡、奉承知候、

巳六月十日　　小田切土佐守〇直年、町奉行、
村上肥後守〇義禮、町奉行、

駕籠訴人、并駈込訴人御引渡有之候節は、願之趣意一通相糺、其段翌日御屆申上、猶追々吟味仕、差越候願ニ付無取上、其筋江願候樣申渡、訴狀差戾候樣可仕哉之旨伺書差上、御差圖之上、其段申渡候儀ニ御座候、然處寺社奉行御勘定奉行ニ而ハ、駕籠訴人駈込訴人共、御引渡之節、一通之願ニ候得バ、支配又ハ領主地頭之添簡を以、其筋江可願出處、添簡無之差越候願ニ付、不取上旨申渡、右支配之役人領主地頭等之家來呼出、爲承置、訴狀願人江相返、御屆等も不申上仕來ニ御座候間、以來私共方ニ而も、願人御引渡御座候節、寺社奉行御勘定奉行同樣、翌日之御屆ハ勿論不及伺、訴訟人糺之上、可願出候ハヾ、町法之通御役所江可願出處、差越候願ニ付無取上旨申渡、訴狀差返、町役人又ハ其筋江引渡遣し、外ニ子細も無之候ハヾ、御屆等も不申上候樣仕度奉存候、尤願之趣ニより、難捨置儀ニ相聞候ハヾ、其仕儀ニ寄、取計等之儀、相伺候樣可仕奉存候、依之此段奉伺候、以上、

〔的例黃紙之寫〕獄門

安永二巳九月、右京大夫殿御下知　　手限　安藤彈正少弼〇惟要、大目付、

一御代官野村彥右衛門万年七郎右衛門申聞候、伊豫國宮ケ崎村太三郎駕籠訴吟味一件、

野村彥右衛門御代官所豫州越智郡宮ケ崎村百姓　太三郎

此太三郎儀、庄屋方ニ有之帳面、理不盡ニ取歸り、村役人私欲有之趣ニ取扱置、先達而吟味相濟候儀を、品々相違と申立、村役人私欲有之、支配役所江祝儀銀差上候抔、僞之儀を訴狀ニ認、奉行所江駈込訴いたし、無取上候迚、駕籠訴迄いたし候始末、右體謀書を以、欺扱之上、銀子可取巧いたし候段、重々不屆ニ付、引廻之上、獄門可申付哉、

問合、

〔公範異聞 上〕文化三寅年、町奉行小田切土佐守様江、〇直年家來之者、御老中様江駕籠訴致候ニ付、咎御問合、

内藤備後守家來下屋敷詰在候徒士以下小役人
鈴木甚右衛門

右之者、不埒之筋有之逼塞中、自分居宅之裏ゟ忍出、去十六日、牧野備前守様江御駕籠訴仕候處、差越之願ニ付御取上無御座、屋敷江御引渡ニ相成候、依之再應吟味仕候得共、全其身困窮ゟ事發、用人共之内壹人、取計不宜趣等訴狀ニ認候得共、一向取留候事無御座候、尤他之引合も相聞不申候間、手前仕置可申付候處、是迄右様之先例、手前ニ無御座候間、相當之咎、如何申付可然筋ニ御座候哉、右訴狀寫一通、申口寫壹冊相添、此段御問合申上候、以上、

内藤備後守家來
直井三右衛門

五月五日

御附札
書面鈴木甚右衛門ハ江戸を構、領分拂御申付候方と存候、尤御老中方江駕籠訴いたし、御引渡ニ相成候ものを、手前仕置申付候節ハ、御屆御申上之上、被取計候筋ニも可有之哉、右ハ御同席之先格も可有之義ニ付、猶被相糺候様存候、

〔公事方類例集〕丹後國間人村百姓磯次郎、御駕籠訴一件、呼戻之儀ニ付伺書、

私御代官所丹後國竹野郡間人村百姓磯次郎儀、同人親利左衛門、去戌七十六歳ニ罷成候處、去ル酉年五月中所拂被仰付、老年之もの、生死之程も難計、安心不致ニ付、御慈悲を以御免被成下度、右利左衛門所拂被仰付候趣意は、先々庄屋新右衛門太右衛門兩人役儀相勤候節、御年貢取込等有

之様相見候ニ付、惣百姓共惣代ニ被頼、親利左衛門儀、右両人を相手取及出入、文化六巳年中塩谷大四郎支配之節、再應久美濱役所江願出候處、吟味伺之上、年數相立候儀故、御取上無之段、水野若狹守殿御下知之旨申渡有之、恐入候得共、御年貢筋之儀ニ付難捨置、何國迄も願出與候様、又々百姓共惣代ニ被頼、利左衛門儀、無據江戸表江願出候積道中安心之ため、京都二條殿ゟ人馬帳等借用として京都江罷出、久美濱役所ゟ呼出有之候ても不罷出ニ付、右之咎にて同所ニおゐて入牢之上吟味中、私御代官所ニ罷成、支配相替り、去ル酉年五月中、親利左衛門儀、江戸拂、御仕置ニ相成、右一件中、牢番人賃郷宿飯料等、都合銀三貫五百目有之、私役所ゟ嚴敷取立有之候ニ付、利左衛門儀、一體惣百姓共ゟ惣代ニ被相頼候儀故、右入用銀は、惣連印のものゟ取立有之様申立候得共、磯次郎願ハ、一向に取用無之ニ付、無據同人ゟ差出、其外前庄屋太右衛門勤役中、親利左衛門方江借用いたし候銀子、元利共、五貫目有之候處、難澁之身分ニ付、太右衛門勤役中、御年貢之取込有之候分と差引勘定ニ致與候様、同人江相願候得共不聞入、先支配塩谷大四郎役所江太右衛門悴太右衛門ゟ願出候節は、吟味之上、證文之面怪敷、年季切ニ相成候ニ付、以來は反古同様ニ可相心得旨願人太右衛門江申渡有之候處、其後私支配ニ罷成候以來、又候太右衛門、右之銀子濟方願出候節は嚴敷濟し方申付候故、無據元利共相濟し候得共、太右衛門勤役中、拾四ヶ年之間、役所ゟ相渡候免状表と、小前のものゟ取立辻と引合見候得ば、多分之取込有之様相見候ニ付、是迄久美濱表、私役所江度々相願候儀有之候得共、一向取上無之ニ付、無據御慈悲相願候之旨申立、訴状ニ認、先前庄屋新右衛門悴幸左衛門、太右衛門悴太右衛門、當時庄屋七左衛門、小前百姓之内源大夫杢平、右五人のもの相手取、去戌十月中、青山下野守殿江御駕籠訴いたし候處、右は差越願ニ依而、御取上難相成、勿論親利左衛門不屆之筋有之、御仕置相成候、御免願は御沙汰難被及候得共、村方江對し、勘定合之儀は、磯次郎何歟不服様子ニ付、得と服し候様可取計旨被仰渡、去戌十一月六日當御奉

行所ゟ新江戸役所江御引渡ニ相成候ニ付、早速歸國之上、久美濱役所ニおゐて吟味可㆑請旨、再應利害申聞候得共、是迄右一件、度々相願候得共、取用無㆑之に付、いづれにも直ニ御奉行所江差出、相願候旨申立、一圓得心不㆑仕ニ付、磯次郎弟捴右衛門井村役人共、久美濱役所江呼出し、一通り相尋候處、磯次郎儀、村方罷出候節、親類組合之もの江も無沙汰ニ罷出、久々不㆓立歸㆒ニ付、何方江罷越候哉と不審ニ存居候處、右始末初而承り、驚入候儀にて、殊ニ右勘定合一件は、先支配鹽谷大四郎方ニ而吟味伺之上、親利左衛門御仕置被㆓仰付㆒候程之儀、今更可㆓申立㆒筋無㆑之、利左衛門申立候勘定合一件、去ル酉年落着後、村役人共方江も何ニても申聞候儀無㆑之處、私役所江願出候而も、叱り而已にて取上無㆑之抔、種々取拵候書面を以、御駕籠訴等いたし候段、恐入候旨申立候ニ付、弟捴右衛門井村役人共、出府之上、異見差加、召連可㆑歸旨申渡、既ニ捴右衛門井庄屋代松右衛門兩人、江戸着之上、再應歸國之儀申勸、江戸役所ニおゐても、再應利害申聞、久美濱表ニおいて、得と吟味可㆑請旨精申聞候得共、遠路之御駕籠訴いたし候程之儀、中々以此姿ニて歸國難㆓相成㆒、幾重にも直ニ御奉行所江差出相願候旨、强而申張、利害を拒、我意申募り、一圓納得不㆑仕ニ付、逆も私方吟味ハ不㆑請樣子ニ相見候間、當御奉行所江直ニ差出候樣仕度奉㆑存候得共、左候而は其身勝手ニ任せ自在ニ出訴相成候樣、自然と風儀押移り、御取締ニも相拘り候ニ付、此度出府罷在候、庄屋代松右衛門井弟捴右衛門爲㆓差添㆒、以後懲にも御座候間、途中手鎖腰繩付ニて、私方足輕壹人着添久美濱陣屋江呼戻し候上にて、願候趣致㆓吟味㆒候樣可㆑仕候哉、又は磯次郎願之通兩人之もの爲㆓差添㆒、直ニ御奉行所江差出候樣可㆑仕哉、依㆑之取計方奉㆑伺候、以上、

文化十二亥年正月　　田口五郎左衛門印

御附紙　甲斐印

書面磯次郎歸村之儀、再應利害申聞候而も不㆓承請㆒、且は伺之通足輕差添、道中手鎖腰繩ニて、庄

屋代、松右衛門并揔右衛門一同歸村可被申付候、以上

亥二月

〔政談秘書 三〕

牧野越中守家來日高浦甚作妻
とみ

右之者、甚作養子銀作代と申立、去ル四日、大久保加賀守様中○老へ別紙訴状を以、御駕籠訴仕候處、右とみ、土屋太郎三郎様御長屋ニ罷在候由申候ニ付、御小普請支配丹羽五左衛門殿ゟ、太郎三郎様江引渡、御同人より御通達有之候ニ付、越中守様江受取可申候、尤夫甚作、養子銀作共ニ一向不存、訴状、風と參り懸之者相頼認させ候由、文段間違多、難取用事ニ御座候間、察當仕候處無之段申聞、右とみ儀、如何様ニ咎申付相當可仕候哉、此段御問合申上候、以上、

四月十八日

乍恐以書付御訴訟奉申上候

牧野越中守領分奥州田村郡小野新町
郷士 日高浦甚作

江戸神田松永町家主源右衛門店
右養子
訴訟人 銀作

銀作煩ニ付代土屋太郎三郎屋敷内
養母 とみ

右銀作奉申上候、私養父甚作儀、於領分代々地頭所用向相勤、私祖父代迄、領主越中守江用金差出置、其上當甚作、尚又用向相勤、金千貳百兩程も用金差上、外ニ三百兩、小野新町小児養育心願ニよつて差上置候而、出生之度每、下ゲ金有之趣ニ付、御預ヶ金致候處、一向御下ゲ金も無之、私出金等も御下ゲ無之、度々相願申候處、四ヶ年已前、御召出し之上、勤功を以、拾兩三人扶持被下、中小性格被申付候得共、近年多病故難相勤、此段相願候得共、御免ニも無之、其上病氣相募候ニ付、去ル辰六月中、爲療治入湯仕度段相願候處、聞屆ニ相成、國元江罷下り、當正月晦日、江戸著致、未ダ全快も不

仕候間、此段相屆ヶ候處、廿日猶豫被申付、土屋太郎三郎屋敷罷在候、何分快方ニも趣不申、猶又相屆、聞濟相成、療治中、急ニ用向有之ニ付、上屋鋪迄押而可罷出旨申來候間、早速三月十九日罷出候處、如何之譯ヶニ候哉、長屋押込、宅番等付置、醫藥も不爲相用、國元江罷下り候旨被申聞候へ共、病中之儀故、日延願致し罷在候處、當五日、七ッ時に出立可致段被申付、病中之儀、甚以難澁至極ニ奉存候、將又母親大病ニ而、死生も難計差重り候間、生界之面談爲仕度、土屋太郎三郎用人を以、田村岩尾方江相願候處、實母病氣面談致度、門前迄罷越、死去致し候而も不苦、殊ニ養母之儀ニ候得バ、無異儀故、聞濟難相成段相斷、是非五日出立に而、國元可下段申付候、國屋敷迄、迯屆之役人罷越候趣、病中之上、於國元何樣之迯〔○迯下恐脫ニ亂字〕明被申候も難計、歎ヶ敷奉存候、壹人之養父之儀ニ候得バ、私方江引下ゲ、病氣養生遣し度候間、不顧恐御訴訟奉申上候、何卒以御慈悲願之趣御取上ゲ、地頭所役人共被差出、養父引下、養生爲致呉候樣、甚作へ御吟味之上、向後非道取計不致樣、嚴重ニも以御憐愍之上、被爲仰付被下置候ハヾ、偏御威光と難有仕合奉存候、以上、

右訴訟人儀作願ニ付代　養母

天保四巳年四月四日

〔政談秘書三〕天保七申年八月四日、夕七ッ時過、大久保樣〔○忠眞〕公用人中ゟ、左之通切紙到來、〔○中略〕

御領分上總國夷隅郡鋒治町　百姓　丈右衛門

右之者、今日致駕籠訴候ニ付、御引渡可申候間、其筋御役人中被差出候樣、加賀守申候、以上、

八月四日

一右御請相應差出之〔○下略〕

〔政談秘書三〕一天保七申年十月九日、夕八ッ半時頃、大久保樣公用方より、左之通切紙到來、右ニ准ジ御請手紙差出、

御領分丹波國船井郡下新江村　平野鼎之助

右之者、今日致駕籠訴候ニ付、御引渡可申候間、其筋之御役人中差出候樣、加賀守申候、以上、

十月

右ニ付、即刻不目立樣、左之通、加賀守樣御屋鋪御近所江差出候、

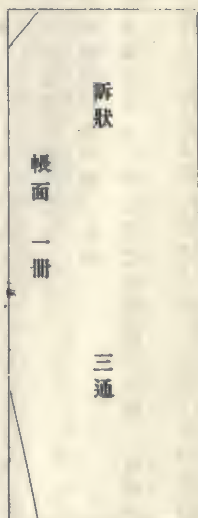
紺看板　合印着　小頭　壹人

同　足輕　兩人

法皮着　手明キ　中間　兩人

一自分事、御玄關江罷出、今日御駕籠訴仕候、領分者御引渡ニ付罷出候段申述、例席江扣居候處、無程公用方志谷彌源次方江罷出、左之通被相渡、當人ハ頭取ゟ引渡可申段被申聞、直ニ被引入候、

御封物上ハ書左之通、裏ニ〆之寫、



訴狀　三通

帳面　一冊

別紙半切認、左之通

丹波國下新江村使甫改名 藏之助

尤右之趣、在所信濃守江可申聞段申述候、直ニ頭取中罷出、中之口ニ而、當人引渡可申段被申聞被引入候、御取計被送出候、

一右ニ付御門前江罷出、小頭足輕共、表御門ゟ中之口江召連、御玄關上頭衆被罷出候處江罷出候處、引渡候段申聞被引入候、夫ゟ式臺羽織袴着用之仁被出候ニ付致會釋、當人召連、裏御門江出

駈込訴

候節、先様ニ而紺看板着用之御足軽両人、當人之前江相立罷越候ニ付、御門内ニ而請取候段申述、御門外ゟ先小頭共同道之體ニ而召連、一ッ橋御門外ゟ腰縄ニ致し召連罷歸り候、

一加賀守様、追而在所ゟ之御請使者相勤候事、

右小出信濃守様衆取計也

〔松平豆州言行錄〕一御成時分、御駕籠の御脇供の時に、町にて、御駕籠の左の方へ、近々と何者共なく駈よりて、御目安と言て、御駕籠の中へ書たる物を投入たるを、卽時に左の手にて、そとざまに拂ひ玉へば、目と鼻との間をまた、かに打せ玉ひければ、彼者倒ける、如此信綱公、少も御油斷なかりけると皆人感じけるとなり、

〔土浦大檢使〕伊勢守殿江直達

御駕籠訴之もの御引渡之節、取計方之儀ニ付、申達候書付、

寺社奉行

一御手前様方ゟ、御駕籠訴之もの御引渡有之候節、爲請取、是迄大檢使、小檢使、并小頭壹人同心六人差出候處、以來大檢使壹人、小頭壹人、同心貳人差出、小檢使并同心四人相減可申ト奉存候、右者追々被仰出候御趣意も有之候ニ付、仕來ニ不拘、前書之通省略可仕ト奉存候、依之此段申上置候、

月日

○按ズルニ、右ハ本書元治元年十一月ノ記事ノ最初ニアリ、

〔新張紙留〕文政七申六月十二日、野州藤岡村百姓太郎左衛門儀、評定所江駈込訴いたし候ニ付、右取計方之儀ニ付、筒井伊賀守〇政憲より、曾我豐後守〇助弼、勘定奉行、江掛合書并挨拶、

御勘定奉行衆　筒井伊賀守〇時爲町奉行、

伊奈友之助御代官所野州都賀郡藤岡村
百姓　太郎左衛門

右之者儀、昨十一日、評定所江駈込訴いたし候處、訴狀等も無之、其上御料所百姓之儀ニ付、御一座御評議等も有之、其節御談之上、先ツ拙者御役所江相廻し候ニ付、江戶宿之儀相尋候處、馬喰町壹丁目伊左衛門店、旅人宿吉右衛門方ニ止宿いたし候旨申立候間、則吉右衛門をも呼出し相糺候處、一昨十日、同人方江着いたし止宿いたし候旨申立候間、太郎左衛門ハ、宿吉右衛門江預ケ置申候、右ニ付先例取調候處、天明三卯年七月四日、評定所江駈込訴いたし候もの別紙之通、拙者共御役所ニ而取計候間、此度も右ニ准じ取計可然哉ニ候得共、例之方ハ、私領之ものニ有之、此度之太郎左衛門ハ、御料所之百姓ニ而、例同樣取計相當とも難申、且別段之譯ニハ候得共、燒捨訴狀御渡被成候節、呼出方之儀ニ付、寬政三亥年十一月四日、一座江評議濟之趣をも見合候得ハ、御料所百姓之儀ニも有之、各樣ニ而御取扱可然哉と存候間、前書太郎左衛門儀御引渡可申哉、此段及御懸合候、

六月十二日

御書面御懸合之趣致承知候、各樣御役宅江駈込訴いたし候ものも、御料所百姓之分ハ、拙者共月番江可罷出旨御申渡來、殊ニ此度ハ評定所江駈込願出候もの之儀ニも候上ハ、旁拙者方江可罷出旨、宿吉右衛門江御申渡、御引渡有之候方と存候、

申六月　曾我豐後守

〔模務覽要 二〕駈込願道中奉行宛ニ而差出候節取計

一道中奉行宛ニ而、駈込願人有之節ハ、以來不相伺、差越願ニ付、其向々呼出し引渡候樣可仕哉之旨、享和三亥十一月廿五日、土井大炊頭殿和○利奧御右筆布施內藏丞を以相伺候處、伺之通可仕旨、御同人を以被仰渡、同役一同其咄置、退出之上、用人儀左衛門申渡、尤願書等寫置、追而御用之

節、差上候積り申渡置、

右近將監殿、攝津守殿、侍座ニ而御渡し。〇中略

〔御書付留〕明和二酉年

一駈込訴之儀者、其支配御代官を差越候事ニ候間、御定之趣を以、取上申間敷儀ニ候處、近年御勝手方ニ而ハ、取上相糺候も有之候、右百姓共も、自然ニ其奉行所ニ而申付候儀を、押返相願やすきやうに可成行哉、是以如何之事候、向後御代官を差越、駈込訴いたし候類は、一切不取上之、御代官江引渡可被下候、若御代官幷手代等江拘り、難捨置品も候者、其節評議之上、取計候樣可被相心得候、

三月

〔公案比事十四〕安永四未年五月

太田播磨守懸

一備後國有木村丈藏駈込訴一件

松平右近將監殿御下知　會田伊右衛門御代官所備後國神石郡東有木村元庄屋　條藏

右之者儀、去ル寅年、御年貢不納致、身上限可相納旨申立候上は、諸帳面不殘花濟村文助其外之者共江可引渡處、無其儀、諸帳面不殘取隱致欠落、其上去ル丑寅御年貢米、木子村和惣治取扱を以、江戸買納幷石代納ニ相成、御不益有之抔申立候得共、三郡惣代として願出候上は、同人一分之願ニは無之處、惣代入用夥敷相懸り、且寅年旱損ニ付願之上、東有木村も外村同樣拜借貸渡有之處、取上無之抔申立、和惣治儀、木子村近田村にて三笠附致候由、其外品々無跡形儀共申立、猥ニ箱訴幷駈込訴致候段、不屆ニ付、存命ニ候得ば、所拂可申付處病死、

〔公案比事十五〕天明二寅年十月

桑原伊豫守掛

一武州川口村役人共、同村穢多甚右衞門儀を申立候一件、

黑田豐前守領分武州埼玉郡川口村穢多
甚右衞門

田沼主殿頭殿御下知

右之者儀、宗門人別帳印形致、難澁、三ヶ年以來、年貢相滯、剩穢多仲間門平娘ゆらを養女ニ致置候處、三左衞門連出、御關所を忍び通、野州邊江賣候由之風聞有之段、其外門平致盜、無宿に成候を内分にて村役人引戻候抔無跡形儀申立、村役人幷門平三左衞門馴合相掠候由、僞之義共、領主屋敷江駈込訴致候段不屆ニ付、所拂可申付處、相當之仕置可申付旨、穢多頭彈左衞門江引渡ス、

〔政談秘書　一〕

一私儀寺社御奉行所江駈込訴仕候次第御尋御座候

奧州御領分岩前郡鹽田村
正一位諏訪大明神神主
白土數馬
當午廿四歲
口上

此度私儀別紙願訴狀之趣、神谷御役所江奉願候、同所郷宿ニ逗留仕居候内、中濟人中、神谷村同職建津大明神神主佐藤大和と申者、取扱吳候得共、全私儀御役所江罷出候儀不埒ニ付、誤證文差出、御役所願下ゲニ可取扱旨申聞、都而私非分ニ相成候ニ付、餓之思立、同所〻七月廿四日出立仕、○中略廿九日馬喰町信濃屋江着仕、二日逗留仕、八月二日同町山形屋ニ逗留仕、同三日脇坂中務大輔樣江出訴仕候處、卽夕間部下總守樣江御引渡被成、御同所樣江、幸其日馬喰町三丁目旅籠屋升屋三右衞門罷出居候ニ付、宿被仰付候、其後八月十日御呼出しニ而、御同所樣江罷出候之處、差越願ニ付、御取上ゲ無之旨御理解御座候、又候九月十五日、右同樣御理解有之、同廿八日、御呼出ニ而罷出候之處、訴狀御差戻しニ相成候旨被仰渡候、尤其節ハ、御領主樣江も御沙汰御座候旨ニ而、御留守居樣御出席有之、夫〻宿屋三右衞門一同、御屋鋪樣江罷出、訴狀等差上申

候、

一村元罷出候節、神谷御役所、其外同職之者、并村役人親類等江も、申聞無之哉之御尋ニ御座候、

此段前條之仕合御座候而、何江も不相屆、一存ニ而出府仕候、尤親類等ハ無御座候、

一訴狀ハ誰認候哉、御尋ニ御座候、

此段私方江兼而懇意仕罷越、會津浪人之由、覺水と申陰陽師江相賴認貰申候、

一旅宿旅食等之拂方用意も無之儀、如何之譯ニ候哉、御尋ニ御座候、

此段私儀、鄕宿ゟ直出立仕候儀ニ付、漸金壹歩貳朱所持仕候處、追々遣捨八月三日ゟ差支難儀仕候、

一私儀御當地ニ而、面體見知之者無之候、身分之儀、僞ニ而ハ無之哉、御尋ニ御座候、

此段私儀、御領分鹽田村神主ニ相違無御座、亡父出雲之實子ニ御座候、僞ニ而ハ毛頭無御座候、

右申上候ニ付、被御聞候ハ、相手僧家御他領之者ニ付、江戸表江出訴致度候ハヽ、其段御領主樣御役場江申達、御役人方御添翰申請可罷出處、其儀無之候ハ、差越訴と申、天下之御法度ニ候を相破、御領主樣をないがしろニ致し、村江斷も無之他行、重々不埒之段得御理解、畢竟私慾吟味不案內故之儀ハ、今更心得、甚以恐入候、此上ハ一旦歸國仕、神谷役所江相窺、蒙御差圖候樣可仕と奉存候、以御慈悲、早々御差戻被成下候樣仕度奉存候以上

十月四日　白土數馬印

○按ズルニ、本書年號闕ケタレドモ、前後ノ文ニ據ルニ、蓋シ天保五年ノ書ナラン、

〔政談秘書　一〕天保九戊年　織田近江守養父山城守妾　ほの　六十一歲

一通尋之上、改織田

右同人召仕 まさ 三十歳
大和守家來江預ケ、

右近江守家來家老代 佐々敬泉 六十一歳
大目附 横田愼輔 四十一歳
同 高山八兵衛 三十八歳
留守居助 田村要左衛門 四十七歳
家老代 岡田五郎右衛門 四十歳
神田富山町貳丁目 七右衛門 五十八
同人妻 かよ 五十二

一通り尋上上、揚り屋江遣ス、出牢之上、有馬甚太郎家來之者ニ預ケ、

一通り尋之上、町役人江預ケ遣ス、

右於評定所、牧野備前守、○忠精 神尾豐後守、○守富 筒井紀伊守、○政憲 深谷遠江守、○盛房 柳生伊勢守立會、備前守渡之、

此譯織田近江守養父山城守子供共、在所丹州柏原表江罷越、居家之始、取計向非道ニいたし、妾ほの義も、在所江遣候得ども、家來共安心いたし、近江守女子貳歳ニ相成候間、右江聟養子いたし候心底ニ而取計候處、織田家政向、不取締廉書面ニいたし、當正月二日、ほの召仕しま義、出訴いたし候よし、一體祖父出雲守、養方弟織部と申者有之、右ニ家督相讓可申處、同人病死後、妾腹之男子、山城守江家督相續爲致候得共、同人、氣質强逵成ものニ而、不如意之勝手向を取直し度旨を以、家老始難澁いたし候之間、織部之子近江守年頃ニ付、早々隱居いたし候樣申出し、山城守を無理隱居爲致候ニ付、殘念ニ思ひ候哉、同人儀、淺草砂利場下屋敷ニ住居罷在、鳥を取り川獵等いたし不行跡之事共有之候を廉ニいたし、但州木之崎江湯治願爲致、在所へ山城守を差遣し、井同人子供を不殘差遣し、江戸表ニ而、近江守之奧方壹人、妾ほの計ニ相成候間、是非ニ山城守差圖のよしニ而、ほのを在所江遣候樣ニ嚴敷申渡候處、同人義、常々歎居、山城守之歸府相願候得共不相叶、剰當正

捨訴

月四日ニハ、丹州表江罷越候積ニ相成候を不便之事ニ而、しま自身ニ引續出訴いたし候後、先達而筒井紀伊守御役宅江、近江守家來一同呼出し相成、家來ハ愼居候樣、ほの、しま儀ハ、織田大和守江預ヶ相成、井京都町奉行江差圖ニ而、近江守家老生駒主鈴、其外召捕之上、近々出府いたし候得バ御吟味ニ相成候よし、專沙汰致し申候、大槻、近江守井家來共、不孝不忠之上、家政向取締不宜候ハヾ、仙石一件ゟ重きよし、世上風評いたし候、○中略

ほの事

書面ほの儀ハ、元來板倉内膳正家中之娘ニ而、幼年之頃ゟ織田家へ奉公濟いたし、山城守妾ニ相成、當時ハ實家も無之、江戸表ニ而緣者も無之よし、近江守奥方の母ニ付、西御殿と申所ニ住居いたし居候得共、近江守儀、勝手向先代ゟ不如意彌增、月々夫婦井貳歲之娘共、日々の小遣等迄省略いたし候程之儀ニ付、ほの江、一ヶ月金六兩貳分ヅヽ、雜事として相渡、山城守次男濟之助、娘すがハ、外召仕女之給金ニ至迄、万端爲取賄候ニ付、極難ニ暮方いたし居候處、當年正月四日丹州栢原江罷越候ニ相極、老年ニおよび歎居候を見兼候哉、召仕しま、身命を不顧、中務大輔殿江駈込願いたし候ニ付、御同人ゟ、ほの、しま兩人之手當向厚心付候樣、近江守家來江申渡候處、右ハ被仰渡を違背いたし、翌日ゟ兩人を明き長屋江入置、非道ニ取扱ひ、朝夕給物迄相飯同樣を宛ひ、其上三度之食事剋限外ニ遣抔いたし候事ども、今般御吟味相成候處、色々申立候儀、實定之よしニ相聞候、○下略

〔德川禁令考後聚三 前廣證〕安永五申年十一月十二日

捨訴狀之儀ニ付申上候書付

桑原能登守○盛貞、大目付、

去月晦日、東海道島田宿東之出離ニ、岩松直右衞門御用所と記有之候杉箱壹ツ、封印を附、捨有

之を見付、直右衛門陣屋江宿役人持參差出申候、

一駿州田中追手門先ニ、岩松直右衛門御用所と記有之候杉箱壹ツ、封印を附、捨有之由ニ而、當月二日夜、本多紀伊守より使者を以、直右衛門方江差越申候、

右取計方之儀、岩松直右衛門相伺、別紙御定書上巻ニ載候御觸書ニ准じ、申上ニ不及燒捨、其所ニ建札爲致候仕來御座候間、定例之通、直右衛門申渡、爲燒捨可申候、紀伊守より御屆申上候段承り候ニ付申上置候、以上、

申十一月○中略

去月晦日、島田宿東之出離、枡形ニ捨有之候杉箱幷當月二日、本多紀伊守より以使者差越候杉箱元之通、封を附、其方陣屋門前ニおいて燒捨、日數三日之内別紙案之通建札いたし可被申候、依之被差越候訴狀を封候而手代江相渡遣候、以上、

十一月十四日

別紙を以申達候捨訴、捨文之類ハ、封之儘燒捨候事ニ候、然共心得之ため內見致事も有之候、重而捨物有之候ハゞ手代共江不申聞、其方密々內見いたし、元之通、封を附、取計方之儀相伺、內見之趣ハ別段ニ可被申聞候、

一此度捨訴狀ニ認候趣ハ、寄々風聞承、若三笠附等有之候ハゞ、追而取計方可被伺候、以上、

建札案

去月晦日、當宿東之出離レ枡形ニ、岩松直右衛門御用所と上書いたし、捨有之候杉箱幷當月二日田中之城追手門先ニ、同樣上書いたし、捨有之候杉箱共、封之儘燒捨るもの也、

申十一月

〔的例問答三〕捨文張訴之事

享和七寅年二月朔日御書付

向後屋敷々々江捨文致候共、不及差出候間、燒捨可申候、此旨可被相觸候、

此書付之趣ハ、進達又ハ屆いたし候ニも不及、其屋敷一已ニ而、燒すて可申との事ニ候、屋敷內ニ而も同樣之事、

〔機務覽要二〕捨訴御老中方御名前有之節之事

一佐渡守〇久保田政邦門前江、無封ニ而板札ニ認、御老中方御名前不殘認候捨訴、文化二丑七月三日有之、西丸詰ニ付、出之番縫殿頭迄、用人を以御城迄爲持差越候ニ付、評議有之候ニ付、御老中方御名前有之候事、定例之通ニハ難相成候ニ付、此方ざつと紙ニ而包、御用番牧野備前守殿〇忠精江入御覽、定例同役宅江捨訴之節、封之儘直燒捨候儀ニ候得共、例と違、封も無之、其上御老中方御名前之宛所ニ御座候、一通り入御覽候旨申上候、御用部屋江御持入、御退出前ニ到、定例之通燒捨候樣被仰渡候、

〔徳川禁令考後聚三臨御席聚〕文化五辰年正月廿五日

評定所式日、箱不出前後ニ、捨訴状ノ儀ニ付規定取極書、

評定所一座

評定所式日、御箱不出以前、又ハ御箱出候後ニ而も、御箱臺、并評定所前或ハ腰掛等江捨訴状有之候節、取揚方手續區々ニ付、以來之規定御取極、御申聞有之候樣いたし度候、以上、

卯十月　松平兵庫頭〇信行、勘定奉行、

下ケ札

御書面、評定所前、并御箱臺、或ハ腰掛等江捨訴状有之節取揚方之儀、御箱不出申以前、御箱出候後之無差別、拙者共參着後ニ候得バ、支配向出役之者爲取扱候、平日ハ勿論、式日立會、臨時評定

之節ニ而も、拙者共參着以前之儀ハ、此方ニ而取扱不レ申候心得ニ候、此段及二御挨拶一候、

十二月　　服部久右衛門

式日御箱不レ出前、御箱臺、又ハ御箱出候後ニ而も、評定所前、或ハ腰掛等江捨訴狀有レ之節、取レ上方區區ニ付、以來式日立合、臨時之節とも、右體捨訴狀有レ之、御目付參着後は、評定所同心見付候とも、御小人目付江、見付候ものより直に申聞、都而御目付方ニ而取上候積り、

但御目付中江ハ、公事方御勘定奉行より及二懸合一候處、本文之通挨拶有レ之候ニ付、評定所同心共江も、右之通心得候樣、評定所番江可二申渡一候事、

右之通、文化五辰年正月廿五日評議極ル、

〔評定所張紙留坤〕辰〇文化五年六月七日、於二御殿一、御代官一同江可二申通一旨、瀧川小右衛門江及二御達一候寫、

捨訴捨文之類有レ之候節、封之儘自分共江申聞差出、其儘燒捨候事ニ候得共、心得之ため及二披見一、元之通封レ之、燒捨候上、封之儘燒捨候段掛札出置候振合候之間、以後右體之儀有レ之、被二相伺一候節者、捨訴、捨文等は印封ニいたし、伺書添、可レ被二差出一候、其外取計者、委細及二演說一候事、

〔的例問答三〕捨文張訴之事

捨文有レ之候得バ、門外之儀は、辻番廻り場之義に付、最寄御目付江相屆候得ば、當番御目付ゟ、爲二見分一御小人目付被二差越一、見分之者ゟ燒捨候樣申渡、左候へば於二辻番所一、年番月番家來立會燒捨候事、

但捨文張訴等ハ、相屆候へば直に燒捨候樣、屆候御目付ニ而差圖有レ之候處、近來は何れ見分被二差越一候上、差圖有レ之候事、

一御老若御姓名相認有レ之候得ば、其儘御用番江當番御目付ゟ差上ゲ、又御下ゲニ而、御小人目付立會、於二辻番所一燒捨に相成、尤御側衆ニ而も同樣之事、

一文政元寅年十二月、井伊掃部頭、外櫻田屋敷御堀端に而、土井大炊頭殿〇利和宛、油紙包有レ之、取寄

差上、翌日御下ゲニ而、燒捨ニ相成候事、

〔折たく柴の記下〕未の年○正德五年の春の比にやあるべき、老中の門前に落書あり、其記せし所は、攝河泉三州の者共、愁申す由にて、北條安房守氏英が事を訴し所也、詮房朝臣ひそかに此事をもて、我おもふ所を問はれたりけり、玄るせしところ事實ならむには、申狀をさゝげ訴ふべし、其名を匿すまでもあるべからず、必ずこれ姦邪の小人、私の怨を報いんための事也、此落書をもて安房守に被下なば、其人をば得べきか、都て是等の事をもて、奉行等の事御沙汰あらむ事、然るべからざる事の最也、たとひ奉行人等、事をあやまつ事あらむにも、たゞいかにも至誠の道をもて、其心を感せしむるこそ、向後のために然るべけれと申ければ、老中と議せられ、松前伊豆守して、彼落書を安房守が許に贈られしに、松前は、北條が親戚たれば也、果してあとかたもなき事共を玄るしてぞありける、いくほどなくて、又佐渡の國人の申狀の由にて、奉行の事を訴申せし落書あり、是も前のごとくにぞ奉行に下されたりける、河野勘右衛門に被下し也、

○按ズルニ、是時ハ未ダ匭函ヲ設ケズ、斯ル事數アリシニ由リ、享保六年ニ至リテ、遂ニ匭函ノ設アリシナリ、

〔德川禁令考後聚三前廣諭〕寶暦九卯年十月三日、左衛門尉殿江上ル、

評定所前腰掛ニ而見付候封物之儀申上候書付

稻生下野守○正英、勘定奉行、

小幡山城守○景利、勘定奉行、

御老中樣內ニ名有之候と認候封物を、去月廿七日、評定所前腰掛之內犬喰步行候を、評定所同心見付取之、評定所番小笠原万右衛門方江相渡候旨、右封物、昨二日万右衛門差出候ニ付、於評定所何も評議仕候處、評定所前箱之際、建札御文言、幷延享元子年十月廿一日、寶暦七丑年十二月廿一日

見付候封物、不ㇾ相伺ㇾ焼捨候儀有ㇾ之候得共、今般之例は引合不ㇾ申候ニ付、評議之上、右封物私共より差上奉ㇾ伺候、以上、

卯十月三日　　稲生下野守
　　　　　　　小幡山城守

前同日主殿頭殿江上ル

前件ニ付再伸書

昨朝評議仕候、去月廿七日、評定所腰掛内ニ而、犬喰、歩行候訴狀、昨朝差出候儀延引成取計方之旨、兩人にて小笠原万右衛門江相尋候處、前々より請取、式日立合之節差出候旨申聞候ニ付、其趣昨朝申上、猶又御退散後、万右衛門井甲斐庄武助江も相尋候處、武助江は不ㇾ申ㇾ聞、万右衛門、先格之通取計候旨申聞候ニ付、爲ㇾ念先格相認差出候樣申渡候處、享保九辰年九月二日、訴狀箱引ケ候跡、高札之先江箱封ニいたし、無名之壹封捨置候ニ付、其節即日、御勘定奉行江申聞候旨書留有ㇾ之候處、覺違不調法千萬之旨、万右衛門申ㇾ聞之候、昨朝申上候趣と相違仕候ニ付、此段申上置候、以上、

十月三日

〔公案比事 三〕明和三戌年八月

小野日向守掛

一越後國蒲原郡村々惣百姓と認候捨訴狀一件

松平右近將監殿御下知

岩出伊右衛門手代
森甚内

右之者儀、納屋之儀ニ候間、添輪致シ候はゞ、何村誰と相認可ㇾ申處、村名井名前をも不ㇾ相認故、右之者共、殿中帯刀いたし、岩出伊右衛門内、鈴木伴左衛門、森田甚内抔と荷札ニ相認候始末ニ相成候

段、不行屆義ニ御座候間、急度叱リ置、

〔科條類典 上一〕享保七寅年

評定所前箱之際建札

每月式日、訴狀箱出シ置、書付入候筈之處、去月廿一日、箱出し不申前、此所江書付はり置候もの有之、不屆ニ候、向後右之通之儀有之候ハヽ、早速役人封之儘燒捨可申者也、

寅二月

〔牧民金鑑 二十〕文化十一戌年六月申渡書付　小長谷長門守〇政長、勘定奉行、達

各役所陣屋等江、張訴捨訴有之節取計方之儀、封無之候迚、披見可致筋ニハ無之、假令封無之候而も一覽不致、其儘封候而差出、取計方可被相伺候、此旨同役中、幷岸本武八、吉川永左衛門江も不洩樣申達可被置候、

戌六月

大貫次右衛門殿

〔牧民金鑑 二十〕嘉永元申年二月

御代官方屋鋪、又は陣屋等江張訴捨訴有之候節、掛札認方之儀、中には封物上書江、願之趣意取摘候分有之候處、右之趣其儘認取掛札致、致來も有之候由、奉行所に而は、右體張訴捨訴有之候も、願之趣は相除、上と歟、又は御奉行所と歟、認有之候所而已相認、何方江張置、始末不屆之旨、掛札いたし候間、御代官に而も、右之振合に御取計候樣、無急度可及御談旨、公事方奉行衆御噂有之候事、

以一紙致啓上候、然ば張訴捨訴有之候節、掛札認方之儀に付、別紙之通、松井助右衛門申聞候由に而、各樣江は拙者ゟ御通達可及旨、大熊善太郞ゟ申越候間、此段御達申候、一紙御順達留ゟ御返却可被成候、以上、

二月十七日　　篠山茂左衛門

荒井清兵衛様

〔總類留〕文久三亥年五月

捨訴張訴等有之節取計方ノ儀、代官木村董平ヨリ伺ニ付、勘定奉行中評議并廻達書、

捨訴捨文取計方之儀ニ付而ハ、兼而被仰渡之趣も御座候間、捨訴張訴等有之候節は、訴狀印封ニ仕差出、取計方相伺、御下知之上、訴狀燒捨來候儀ニ御座候處、右ハ伺を經候得ば、乍纔日間も掛り、遠國陣屋等は、別而之儀、往返日數も相懸候故、御下知濟迄之間、不埒之及訴候もの共、自然申立之趣意、取用相成候哉と可心得も難計、且押晴難申上候得共、中には引續度々捨訴張訴有之、時々伺を經候上、數日相立、門前江掛札差出候も不都合と之心取より、遂には訴狀取入置候迄に而、伺候儀は勿論、燒捨も不仕、其儘打過候類も有之哉に相聞、左候而は彌申立之趣意取用候姿に相成、御取締にも拘り候儀に而、一體速に燒捨候方、取用不相成趣意、判然と仕、示にも宜可有御座哉と奉存候間以後捨訴張訴有之候はヽ、兼而被仰渡之通、手附手代共には不爲取扱、上封之樣子等、私共見屆、宛所違、又ハ仔細も有之候はヽ、是迄之通取計方相伺、一ト通無名等之訴狀に候はヽ、不及伺速に燒捨定例之通、門前江懸札いたし、尤燒捨以前、私共自身内見仕、御含にも可相成品は寫置、候上、印封に仕、御内覽に差出候樣取計候はヽ、敢而不取締之儀も有之間敷哉に奉存候間、御評議被成下候上、取扱振相改不苦儀に御座候はヽ、右之趣を以、同役共一同江被仰渡候樣仕度、當時追々簡易之御處置に御改御座候折柄、心附候儀ニ付、此段申上候、以上、

亥五月　　木村董平○中略

廻狀

御代官屋敷、又は陣屋等江、捨訴張訴有之候節は、其儘印封にいたし差出、取計方被相伺、及差圖候

強訴

上燒捨門前江懸札いたし來候處伺中日間も有之、別而遠國陣屋之儀は、往返日數相懸候に付、及差圖候迄之間、不埒之訴いたし候もの共、申立之趣意、其筋江貫通いたし候儀と心得違いたす間敷とも難申、自然取締にも拘り候間、以來捨訴張訴等いたし候節、手附手代等江は不相任、自分上封之樣子見屆、宛所違、又は子細有之分は、是迄之通相伺、一ト通無名等之訴狀に候はゝ、不及伺速に燒捨、定例之通、懸札いたし可申、尤內見之上、含にも可相成儀は、寫置差出候樣可被致候、依之申達候、以上、

亥八月

松　石見守〇康直、勘定奉行、
都　駿河守〇峯暉、勘定奉行、
一　山城守〇直温、勘定奉行、
竹　下野守〇保德、勘定奉行、

御代官
四十一人宛

評議所一座

〔法曹後鑑〕評定所表門張札一件

上　御箱訴

御目付中

酉八月廿一日朝、評定所表門ニ張置候封物、例之通燒捨申候、〇年號闕

〔御定書百箇條〕地頭江對し強訴、其上致徒黨逃散之百姓御仕置之事、

寬保元年極
一頭取　死罪

同
一名主　重追放

同
一組頭　田畑取上所拂
同
一總百姓　村高に應じ過料
　但地頭申付ニ非分有之ば、其品に應じ、一等も二等も輕く可相伺、未進無之においては、重咎に及ばざる事、
從前々之例
一村々百姓、結徒黨、令騷動、強訴或は逃散之者有之候節、名主は組頭にても、第一差働取鎮候はゞ、亦は組頭等差押、不爲加徒黨村方有之においては、名主にても組頭にても、御褒美銀被下之、其身一生致帶刀、名字は永可爲名乘候
　但其品輕きは、御褒美銀計可被下之事、
〔訴論判例下〕裁許破、掟背、御仕置大概、○中略
一難立義強訴に及び候者は、閉門、戸〆、田畑取上、所はらひ、○中略
一地頭又は支配頭之裁許をそむき、難立義及強訴においては、戸〆、所拂、過料、○年月闕
〔文化律中〕強訴徒黨、并逃散百姓御仕置之事
一強訴徒黨致候者　頭取　死罪
　引續候者　重追放
　肝入　同斷
　總百姓村應じ　過料
寛曆八年五月十一日例
一村一味連判致、本所入江寄セ及騷動候者、　頭取　打首
　企ヲ存居不指留所人　重過料
享保十六年六月十二日例
一訴訟之儀有之由に而、百姓三百人餘致徒黨、途中迄罷出候者、　頭人不相知重立候者共　重過料
同年三月十三日例
一前同斷　頭人ヶ間敷者　過料
寛曆四年五月廿六日例
一強訴頭人に等者　牢舍之上本所江相返、子共預、蟄居

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和四亥年閏九月

國々百姓、强訴徒黨、又は逃散候儀ハ、堅停止に候上、猶又寛延三午年、右體之者於有之は、急度遂吟味、願取并差續事を工候者、夫々急度曲事可被申付候旨相達候處、西國筋百姓共之儀ハ、我意强、今以御代官、并御預所役人、領主地頭ゟ之申付を拒、間々逃散致シ、他領江願出候儀も有之由、不屆至極に候、然ル處領主地頭ニも、心得違仕置等にも不申付候は、歸村可爲致旨由、難澁候義、粗有之趣相聞、不埒成事ニ候、以來右體之儀於有之は、其所ゟ早速致歸村候樣取計、暫も其所に差置候義有之間敷候、尤其元々江歸村之上、先達而相達候通遂吟味、急度曲事可被申付候、

右之通、西國筋領分知行有之面々江可被相觸候、

閏九月

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和六丑年二月

御勘定奉行江

諸國百姓共、願之筋有之候はゞ、名主村役人等ヲ以、定法之通可相願儀候處、大勢致徒黨候段、不屆に候、自今彌右之通相心得可申候、若心得違徒黨いたし候はゞ、可取上願たり共、理非之沙汰に不及無取上、急度仕置可申付候、右之趣兼而御料私領百姓共江、御代官領主地頭ゟ可相觸候、

二月

右之通可被相觸候

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和六丑年二月

御勘定奉行江

遠國百姓共願を含、所々にて寄合、手段企廻狀抔ヲ出し、外村々之者ハ、趣意ハ不辨して不得止事罷出、大勢集、村役人居宅、又ハ遺言〇言字恐恨誤に存候者共之家作、并諸道具を打損じ、吟味に相成

候上に而、數ヶ條之願ヲ申立候類も有之候得共、公儀を憚、領主に而申宥、穏便に取鎮メ候儀を専要ニ致シ候故、百姓共、がさつニ相成、及狼藉、不法之儀共有之候、百姓を憐み候儀ハ、勿論之事ニ候得共、右體徒黨を結び強訴を企、及狼藉候者共を、手よはく取扱候而は、外場所に而も、見習候樣に可成行哉、以來御料所之百姓共騒立候ハヽ、最寄之領主ゟ人數を出し、私領に而騒立候ハヽ、其領主又は其最寄領主ゟ人數を出し、手強打散し、手ニ當り候者共ハ、からめ捕、願之趣ハ不及理非沙汰取上不申、他所之引合有之差出一領限りニ候ハヽ、其領主に而遂吟味、仕置之儀可被相伺候、万石以下之知行所騒立候節も同樣可被相心得候、

二月

右之通、万石以上江相觸候間、万石以下に而も、知行所百姓騒立候はヽ、右ニ准シ、最寄之領主江早早騒合、申合可取計旨可被相觸候、右之趣相觸候間、御代官江も可被申渡候、

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和六丑年二月

上方筋、御三卿領知百姓共、若徒黨及強訴、難取鎮、向寄之領主江被相頼候節、直に領主江被申越候而は、領主に而取扱等、差支候儀も有之候而は、急成儀辨方相調申間敷候に付、向寄之御代官江被相頼、御代官ゟ譯合申達、被相頼候樣被致度由に候間、此段御代官江可被申聞置候、尤御三卿家老可被談候、

〔科條類典下二〕享保十四酉年閏九月廿一日、於評定所申渡、

㊄一奥州信夫伊達兩郡村々致強訴候百姓御仕置

一岡田庄大夫御代官所、信夫伊達兩郡之內、五拾四ヶ村百姓夫食貸、其外御取箇免合等之儀ニ付、難立願を大勢致徒黨、御代官陣屋江押込、私領城下迄相詰致強訴、公儀を不憚重科ニ付、伺之上、左之通申付、

訴訟之發端頭取いたし、村々江相觸、廻狀ニ謀判同意之儀いたし、陣屋江押込致強訴ニ付、

死罪獄門

立子山村 小左衛門

同村百姓 忠次郎

一村致頭取陣屋江百姓共を爲押込、福島城下江相詰、強訴致させ、其上逐電いたし候ニ付、

遠島

信夫郡關谷村百姓 惣左衛門

同郡下水原村百姓 太兵衛〇中略

青木村、此度之強訴、相名主支配百姓ハ願ニ出候得共、仁左衛門支配百姓ハ、強押留メ、壹人も不能出、奇特成仕方ニ付、

御褒美銀拾枚被下之

伊達郡青木村名主 仁左衛門

其身一代刀帶之、名字名乘可申候、但名字ハ子孫迄相續名乘可申候、〇下略

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政九戌年御渡

太田攝津守伺

一三州能見村觀音寺領文吉其外之者共、同寺吏船江對し及狼藉候一件、

本多中務大輔領分

三州額田郡能見村之内御朱印地觀音寺領庄屋

文吉

右之もの儀〇中略庄屋役之身分、別而不屆ニ付、中追放、

此儀御定書ニ、地頭江對し強訴、其上徒黨いたし逃散之百姓頭取死罪、名主重キ追放、組頭田畑取上所拂、總百姓村高ニ應じ過料、但地頭申付非分有之ば、其所ニ應じ一等も二等も輕く可相伺、未進無之ニおゐては重キ咎ニ不及事と有之、右強訴其上徒黨逃散と分而有之候御文義、強訴之儀、敢而多人數徒黨いたし候譯之御趣意ニも無之樣ニ候得共、既頭取等之御仕置も有之、

門跡

いづれ大勢相催及強訴候節之儀ニ可有御座、此ものは、人數相催罷越候儀ニは無之候間、右徒黨之意味は相離、地頭江對し及狼藉候迄之趣意ニ御座候、然ル處右體之先例差當相見不申、〇中略此ものも平百姓ニも無之、名主役之儀ニ付、一己之狼藉ニおゐては、例と强而輕重も無之候得共、此もの發言ニ而罷越同道いたし候利右衞門々、地頭とは不存候共、觀音寺を及打擲、乍聊疵付候次第ニも至候儀ニ付、例々は品不宜、輕追放ニ而相當可仕、尤例之方は、主人ニ非分等之筋相聞不申、今般之儀は、地頭觀音寺素々不如法之儀々疑惑をも受、事起候儀ニ候得共、右體地頭疵受候次第ニ相成候上は、御仕置相弛不申方ニ可有御座候間、輕追放、

朱書
評議之通濟

〔吟味伺進達留二ノ百八十八〕酉五月三日、大和守殿江直達之振ニ而、以北角十郎兵衞返達、〇中略私知行所、美濃國不破郡大石村小前百姓共、願筋有之候迚、多人數門前罷出、强訴仕候始末、最初爲注進罷出候村役人共は逃去、其上願筋不束之儀有之、多人數之儀、手限之吟味難相成、去申十二月、御奉行所御吟味之儀、御用番酒井右京亮殿江進達之仕候處、當御奉行所江御達ニ相成、御吟味中に御座候處、右百姓共、去申年、村方違作仕、難澁ニ迫、歎願罷出候折節、追々多人數ニ罷成、混雜仕候儀ニて、强訴等仕候心底には無之候旨、且又村役人共儀は、小前百姓共、不束の儀無之樣可心附と罷出候處、多人數ニ相成、不存寄儀にて、當惑仕候儀、右始末に至候由、一同心得違後悔仕候趣、御吟味御下ゲの儀願申出候、夫々事柄相分り、向後差支候儀も無御座候間、下々方願之通、御吟味御下ゲ被下候樣仕度、此段申上候、以上、

五月

御小姓組大久保喜右衞門組
長谷川與三郎

申十二月廿二日、大和守殿、以北角十郎兵衞、吟味いたし可申上旨被仰聞、御下ゲ、〇下略

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和八卯年五月

三奉行江

領主地頭屋敷門前江大勢相詰、強訴いたし候者御仕置、

一頭取　遠島

但頭取不相分候はゞ、門訴致シ候者共之内、宗門人別帳突合、筆頭之者遠島、

總代ニ出、門前江相詰候者、三十日或ハ五十日　手鎖

一總百姓　相違百姓共ハ　急度叱り

村高ニより　村過料

但頭取ニ差續候者有之、江戸拂、　頭取ニ候はゞ　遠島

一村役人、　門訴ニ加候はゞ名主　中追放

組頭　所拂

但門訴ニ不加、百姓共ヲ取鎮候者、不行届候とも咎ニ不及、

一門訴之内ニも、或は鎌などを指候はゞ、狼藉に候間、強訴徒黨之御仕置之通可申付候、

右之通、向後可相心得候、尤御定書江も可被書加候、

五月○又見ニ御仕置筋御書付留

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和八卯年五月

可願者、其村之村役人ヲ以支配之役所江相願可申儀、若村役人不心得之筋候はゞ、百姓總代一兩人ニ而可願出候處、近年百姓共、大勢申合、領主、地頭屋敷門前江相詰、致強訴候類多有之、右之通大勢御府内江立入、領主地頭屋敷之門前ニ集、剰往來をも妨候段、對公儀不屆之至ニ候、然共愚昧之者共、全心得違候而之仕業故、是迄重御仕置ニも不申付候、以來右體御府内江立入、領主、

地頭屋敷門前ニ相詰候はヽ召捕於奉行所吟味之上、理非之無差別、頭取之者ハ、重御仕置申付、其餘之百姓共も、縦門訴ニ不加候共、一同咎可申付候、若頭取不相分候はヽ、其村之宗門人別帳糺之上、門前ニ相詰候者ども之内、筆頭之者共、頭取之御仕置可申付候、

右書付村々寫取、名主之宅、又ハ高札場、村はづれ抔ニも張置、役人共、得と相辨、常々百姓共江委ク利害可申聞旨、御料は御代官、私領は領主地頭ゟ可被相觸候、

五月

右之通可被相觸候

〔文化律中〕強訴徒黨并逃散百姓御仕置之事

一御役人、并御代官地頭等江、大勢相詰、致門訴候者、　頭取　重追放

但頭取不相分候ハヽ、門訴致候者之内、宗門人別帳突合、筆頭之者、重き追放、

其外總百姓、急度叱、品ニ寄、村過料、

門訴ニ拘候ハヽ、肝入中追放、同組頭所拂、

但門訴不加、百姓共を取鎮候はヽ、不行届候共不及咎、

一門訴之内ニも、或ハ鎌抔指候はヽ、狼藉ニ候間、強訴徒黨之御仕置可申付候、

〔的例黄紙之寫〕中追放

安永三午三月、主殿頭殿〇田沼意次御下知、　安藤彈正少弼〇惟要、大目付、懸り

一下總國八木村百姓共名主役之儀ニ付、致門訴候一件之内、

松平與次右衛門知行下總國海上郡八木村組頭　次兵衛

此次兵衛儀、申爭ひ之儀は難取用、勘定合之儀ニ付、名主政右衛門、取計方不宜旨申立候得共、諸帳面江一同印形致置候上は、勘定合之儀ニ付、相違有之由之申分難取用、政右衛門江對し申分有之、

越訴

退役相願候迚、總百姓共を村内地藏院江呼集、其段右寄合ゟ事起り、百姓共申合、願書江連印いたし、門訴いたし候始末ニ相成候段、旁不屆ニ付、中追放、

〔御仕置例類集三ノ十八〕寛政十午年七月　御勘定奉行
安藤對馬守殿御差圖　根岸肥前守掛

一下總國大房村百姓共致門訴候一件

藪主計知行下總國相馬郡大房村百姓
拾四人

右之もの共儀、假名主五郎右衛門支配難受候迚、地頭ゟ申付候人別帳印形も、五郎右衛門取計ニ而は難致旨申張り、與三左衛門申談候ニ同意いたし、江戸表江出、地頭門前ニ相詰候段、一同不埒ニ付、過料錢三貫文宛、

右御答附

右明和八卯年之御書付ニ見合、三十日手鎖と可奉伺處、去ル子年、曲淵甲斐守御勘定奉行之節、手鎖伺之上御答申付候、下總國南中村外貳ヶ村百姓共、致門訴候一件、百姓共多人數ニも有之、其上百姓第一之農業手入時節ニも相成、差支可申儀ニ付、過料錢三貫文宛申付候例ニ見合、過料錢三貫文宛、

〔憲敎類典四ノ五 評定〕寛永十癸酉年八月十三日

公事裁許定　略○中

一申分不立、非據之儀訴申族之事、於其所死罪、又ハ籠舍之事、

〔憲敎類典五ノ十八 京町觸〕明暦元乙未年十一月廿六日

覺　略○中

一僞なる證文證據有之儀、乍存知申掠之、又ハ申分不立、非據之訴へ、又ハ禮物を受て、無實奸謀之

訴訟を作等之事、

右濫訴之輩、是皆政道之妨げ、万人之難儀、罪科ことに重し、爲世爲人、不可有不誡、違犯之輩は、或は死罪、あるひは籠舍、可依科之輕重者也、

〔被仰出留 六〕四年以前、丁亥十一月信濃國水內郡善光寺本願善心院智善訴申、大勸進幷衆徒中、構新儀背先例條々、既遂糺問之處、如戒善院慶運所答申は、違犯之失、還在本願歟、此故自去々年戊子九月至今年五月、召決及於度々之上、本願非據之濫訴、證據分明、而陳謝旨無其辭、自今以後、兩寺各宜相守慶長御朱印、幷寺領配分證文、慈眼大師解脫院宮之條目等、寺中一切之法例、一依先規、聊不可有違犯者也、

寶永七年庚寅閏八月　寺社奉行連名

〔御仕置例類集 六〕天明四辰年御渡

大坂町奉行小田切土佐守〇直年伺

一巧之訴狀差出候一件

安治川上一丁目播磨屋四郎兵衛支配借家
讃岐屋石松幼少ニ付代判
祖父　與兵衛

右之もの儀、困窮之餘り、取替銀取立度候得共、年古キ帳面ニ而、出訴難相成、嘉兵衛相賴、兵庫屋善右衛門、升屋儀兵衛と申名前之訴狀、幷預り銀證文に取拵、自分之名前を相手之內江書入認貰、有合之印判を訴狀證文幷訴狀之奥印迄に相用、善右衛門訴狀は、此もの差出し、儀兵衛訴狀に才兵衛を相雇差出させ、兩人とも善右衛門儀兵衛に相成罷出、尤吟味之上、忽可相顯儀に不心付段は、全老耄いたし候儀にも可有御座哉、併訴狀證文等取拵、有合之致印形、名前相僞願出候始末、御役所を不恐仕方不届ニ付、存命に候はゞ、中追放、〇評議書略

箱訴

〔享保集成絲綸錄 四十四〕享保六丑年閏七月

一此度日本橋江高札相建候、右之趣相心得可罷在候、右札に有之通、直訴場も相極り候上は、此以後捨文は勿論、外江致直訴間敷事、

右之通急度相心得候樣に、町中江可觸知者也、

閏七月

覺

一近き頃は、度々所々江、けみやう并住所等これなきすてぶみいたし、法外の事共も有之候、依之評定所におゐて、當八月ゟ、毎月二日、十一日、廿一日、評定所そとの腰かけの內に、はこ出し置候間、書付持參の者、右之箱江入申べく候、刻限の義は、晝九ッ時迄之內差出べく候、かくのごとく場所さだめ候うへは、ほかゑすてぶみいたし候とも取上これなく候間、其趣を存ずべく候、右之通一同に承知候ため、此所にたておく者也、

一御仕置筋之儀に付、御爲になるべき品之事、

一諸役人をはじめ、私曲ひぶんこれある事、

一訴訟これある時、役人せんぎをとげず、永々捨置におゐて、直訴すべきむね、相ことわり候上、出べき事、

右之類直訴すべき事

一自分ためによろしき儀、或は私之いこんを以、人の惡事申まじき事、

一何事によらず、自分たしかにしらざる儀を、人にたのまれ直訴いたすまじき事

一訴訟等の儀、その筋々の役所江、いまだ申出ざるうち、或はさい許いまだすまざるうち、此兩やう申出まじき事、

一總じてありていを申さず、すこしにても事を取つくろひ、きよせつ書のせ申間敷事、
右之類は取上無し、書物は則燒捨べし、尤たくみ事の品によりて罪科に行るべし、書物はかたく封じもち來るべし、訴人の名、幷宿書付これなくば、是又取上ざる者也、

丑閏七月廿五日

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保七寅年四月

訴狀箱江書付入候事、右は御仕置筋之儀に付、御爲に可成品、幷諸役人を始、私曲非分有之事、可致直訴候、且又訴訟在之時、役人不遂僉議、永々捨置候はゞ、直訴可仕候由、其役所江相斷候上に而、直訴致筈之段、去年日本橋江建置候、御高札御文言之内に在之候處、其筋々之御役所江可願出儀共をも、御役所江は不申出、每度訴狀箱江書付入候段、相違之事に候ゆへ、爲心得左に書付候、縱ば、

一町方其外に而も御救に可能成候間、何之品被仰付候樣にとの類之事、

一公事合之事

一自分願之事

右此等之類は、其筋々之御役所江訴出候得ば、吟味有之事に候處、一應も不申出、猥に箱江書付入候、就夫御吟味可有之品に而も、御取上ヶ無之間、右之趣相心得、其筋々江可申出候、若滯儀も在之候はゞ、相斷候上、直訴可仕候、依之猶又觸知セ候者也、

四月〇又見二科條類典一

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保十巳年七月

御家人之內、評定所箱江、書付入候者も有之候、右箱之儀は、町人百姓訴之ために出有之候處に、右之通に候上江相違儀候はゞ、頭支配江可申達事に候、萬一頭江對し、申出がたき儀も有之候はゞ、

御目付成共可差出筈之處、評定所箱江入候儀、心得違之事に候間、此趣組支配江可被申渡候、以上、

七月〇又見科條類典

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保十七子年七月

評定所前箱江訴狀入候者江戶宿付無之候共、所付有之候はゞ呼出申聞候儀、又は叱可申事等有之節、近鄕に而其日歸に罷成候程之處、呼出可申候、夫より遠國候はゞ、御料は御代官、私領は地頭江申達、於其所申聞、又は叱候樣に可仕候、

但遠國に候とも、品により、其もの呼出し可取計義は、只今迄之通たるべき事、〇又見科條類典

〔科條類典下一〕寬保元酉年伺

箱訴狀入候者之儀ニ付書付

向後書面之通可仕旨被仰聞、承知仕候、

酉八月廿二日　評定所一座

評定所前箱江難立願訴狀入候者、叱候上燒捨成候類、向後願出候はゞ、難立願申出候段叱候而手鎖懸預置候者、免訴之願可申出候、左候はゞ、其節重而訴狀入候ハゞ可相咎由申聞、尤當人より重而入間敷由證文取之、手鎖差免候はゞ、同樣之儀を度々箱訴仕間敷哉之旨被仰聞、何茂評議仕候處、右之通申付候はゞ、被仰聞候通、度々箱訴不仕可然奉存候、但寺院は本寺觸頭等、浪人は地主家主等江預置、免訴之願申出候節、是又前書之通申聞證文取之、差免可然奉存候、以上、

酉八月

〔享保集成絲綸錄四十四〕寬保三亥年十一月

箱訴狀吟味に相渡候節、見置候迄之事に而、取上に不及事は、委細答書差出に不及候間、其願之訴狀は、一覽いたし置、取上品に無之段、答書可出之、

右之通、寄々可被達置候、○又見前張紙

〔寳暦集成綸錄三十〕寳暦九卯年二月

御目付江

評定所江差出候訴狀箱、向後奉行退散遲候共、奉行退散にかゝはらず、只今迄之通り、九時に候はば、箱可被差出候、

右之通三奉行へ申渡候間、可被得其意候、

二月

〔天明集成綸錄四十八〕寳暦十辰年七月

三奉行江

盜賊筋、其外御法度を相背、且御仕置筋不相用類、或は人殺等之儀申立候、無名箱訴狀、先は遺恨ヲ以、箱訴人之名前を隱し、無跡形儀を申立候類多候ニ付、吟味に相渡候節、訴狀に名差候者共、其度毎呼出し遂吟味候而は、可及難儀事候、多分は在方之者共を名差候間、自今右之類は、御勘定所出役之御小人目付差遣、村々風聞爲承、箱訴之趣無相違相聞候はゞ、訴狀に名差候もの共呼出、吟味を取懸可申候、以來は訴狀相渡候節致一覽、吟味に不取懸以前評議いたし、其度々可被相伺候、

七月○又見三奉行取計書

〔公案比事十四〕寳暦四戌年閏二月

一座掛

一三州上大門村小兵衞御箱訴狀一件

水野織部正領分
三州額田郡上大門村
百姓 小兵衞

堀田相模守殿御下知

右之者儀、去々未八月、江戸宿引杵度山之儀、松平右京大夫宅江願出候旨、地改手代共方江罷出候處、心得違之山中立候間、出入裁許申付候然ル處村方々總代ニ被頼罷下り候處、願之趣難立を殘念ニ存、品々無證據之儀を相認、地改手代共非分之事も有之由、一己之了簡を以、致御箱訴旨申之ニ付、雙方差出候口書爲讀聞、小兵衛申分難立旨、利害申聞候處、無證據之事共申張願筋難立候而者、在所江難歸由我意申募、不屆ニ付、入牢申付、猶又糺明之上、吟味之趣を承候ては、相疑可申樣無之、心得違と申儀存付、先達而不法之儀共申立候段、誤入候旨申立候といへども、差越御箱訴致、其上地改手代共、非分も有之趣相認候段、不屆ニ付所拂可申付處病死、

〔公案比事三〕明和三戌年十二月

一座懸

一野州小林村利右衛門御箱訴狀一件

酒井左衛門尉殿御下知

大久保頼母家來
宇佐美左内

右之者儀、次郎左衛門方之呼出を、利右衛門難澁致候由、右下代共申越候はゝ、得と相糺シ、口書を江取、可差出旨可致差圖處、無其儀、不行屆致方、且利右衛門役義取上候由之儀も、吟味詰り候儀ニ者無之、不埒之至り、其上次郎左衛門下代共より、利右衛門村方之附合差留候と申儀、先達て不致差圖事ニ付、下代共江不審可申掛處、無其儀、麁略成取扱方、且又孫左衛門願出候貸地所之儀、吟味中、地面取上候段、旁不埒至極ニ付、江戸拂、

〔御仕置例類集一ノ五〕文政七申年御渡

御勘定奉行曾我豐後守〇輔助　伺

一下總國海上郡村々と認候御箱訴狀一件

大村五郎知行下總國海上郡權名內村
名主　粂次

外貳人

右之もの共儀、御箱訴狀致候より、無宿定心、其外之もの共、不屆之儀及露顯候とは乍申、榮次、太左衛門は、地頭贔手向、追々借財相嵩候は、通貳丁目茂八外壹人、賄方不宜故之儀と存候迚、全推量疑迄之儀を以、地頭江立入不相成樣可致と榮次重立、茂八外壹人金元に而、下總國於松本村ニ隱賣女致渡世候に付、村々難澀致候由、其外品々不取留儀をも書加、同國海上郡村々申立之趣ニ認差越シ御箱訴致、伊右衛門ハ、其身致御箱訴候儀は無之候共、右始末乍存差留も不致、却而相違之事共、榮次外壹人江咄聞候段、一同不埓に付、榮次は五十日手鎖、太左衛門は三十日手鎖、伊右衛門は急度叱、

一此儀榮次ハ、御仕置附ニ、豐後守申上候通、例と同樣之ものに付、伺之通五十日手鎖、太左衛門は右より輕く三十日手鎖、伊右衛門は不束迄に付急度叱り、

朱書 評議之通濟

〔張紙留〕辰朱書〇文化五年十月十一日、松平伊豆守殿へ靑木忠左衛門を以兵庫頭上、

評定所前腰掛內、變死人之儀に付、申上候書付、

柳生主膳正〇久通、勘定奉行、
小笠原和泉守〇長行、勘定奉行、
松平兵庫頭〇信行、勘定奉行、
水野若狹守〇忠道、勘定奉行、

今朝六時過、評定所同心共、同所腰掛內見廻り候處、變死人有之候段申聞候間、評定所番共、同心召連、早速罷越見屆候處、年齡四拾歲位に相見え候出家一人、同三拾四五歲位に相見え候出家一人、年齡四拾歲餘に相見え候百姓體之もの一人打臥居、其邊一體に血流有之、三人共自滅之樣子に

而、出家両人は絶命之體、俗之方は少々呼吸通ひ候様には候得共、一向言舌も相分り不申、右之ものゝ共臥居候前に、因州岩井郡湯村西法寺隱居澄流、奥州仙臺石巻村、稱法寺舍弟雷音、因州氣多郡小別所村百姓清左衛門、御訴訟と認候、白木之箱、臺に載有之候段、評定所番共申聞候間、醫師呼寄、右俗人並所等療養申付置候、依之見分之儀、御目付江被仰渡候様仕度奉存候、以上、

十月十一日

〔公案比事 二〕寶曆四戌年二月

一色安藝守掛

一常州城中村惣百姓と認候無名御箱訴一件

高階傳次郎御代官所常州筑波郡城中村
名主　彌五右衛門

西尾隱岐守殿御下知

右之者儀、去ル辰年御拂可成地所を除置、尤御年貢等は差出候共、隱地同意之仕方、殊ニ未年御年貢取立過、井百姓共江可割渡入足賃も不割渡、自分徳用ニ致し、其上吉郎兵衛、村方江立歸居候を篤其分に致し置候段、役儀勤候詮無之、旁以不届ニ付中追放、

〔德川禁令考後聚 一 評前廣聽〕延享元子年十月廿日

評定所建札江縫付置訴状之事

一評定所腰掛建札江、無名之訴状壹通縫付置、訴状上包江認候者、訴状持參いたし候得共、御箱出無之候間、御箱出候はゝ御入可被下候事、願候、御役人中と記し置候得共、不埒之仕形に付、例之通申上に不及、翌廿一日式日に、燒捨に成ル

右ハ萩原伯耆守申聞記置

〔張紙留〕寬政十午年九月廿一日

一評定所御門江、無名之訴状壹通張置候ニ付、下野守江、高山喜三郎差出候間、例之通一座江演説

之上、御目付佐久間左京江渡、即日燒捨ル、

〔法曹後鑑〕未三月廿一日、（十一年寛政）評定所訴狀箱之内ニ、

奉納

封

右封之内ニ、南鐐銀壹枚封入、訴狀無之入有之候間、右銀は町奉行所闕所銀之内江成共入置候樣、三月廿八日、備中守殿、中澤達之助を以、根岸肥前守（江〇鎭衛、町奉行、）被仰聞、銀は同人持參之由、肥前守申聞、

數度箱訴

〔御定書百箇條〕評定所前箱江度々訴狀入候者之事

（寛保元年極）一評定所前箱江、難立願訴狀入候もの、手鎖懸預置、宿仕候もの、免許之願再應申出候はゝ、宿并當人江、重て訴狀入候はゝ可相咎旨申聞、尤當人には、右之趣證文申付、日數無構手鎖可差免、

但寺院は本寺觸頭等、浪人は地主家主等江預置、免許之願申出候節、是又前書之通申聞、證文取之可差免事、

（同追加）一度々箱訴いたし、手鎖に成候處、差免候以後、又候訴狀入候もの、（從前々之例） 町在共 江戸拂

但宿預亦は手鎖中付候處、願不相止ものも、前同斷、

〔德川禁令考後聚〕（八 法曹事務）安永三午年十一月二日

度々御箱訴いたし候もの、咎申渡方、并赦免申渡方之儀に付、一座評議之事、

公事先帳外

申渡

誰領分何國何郡何村

誰

其方儀、難立願度々致箱訴段不埒ニ付、手鎖懸ケ預ケ置もの也、

右宿　誰

右誰を預ケ置もの也

月

式日

申渡

誰領分何國何郡何村　誰

右宿　誰

右誰手鎖預申付置候處、赦免之儀再應願ニ付、手鎖は差免し、箱訴狀は燒捨申付間、重而訴狀入候はゝ、急度御咎可申付もの也、

右申渡趣、證文申付ル、

月

〔科條類典〕下 一〕寛保元酉年伺

向後書面之通可相心得旨被仰聞、承知仕候、

酉五月廿三日

本多紀伊守〇正珍、寺社奉行、

木下伊賀守

評定所一座

下總國岩ヶ崎村百姓四拾壹人總代

清左衛門

七左衛門

右之者、度々難レ立儀を箱訴仕、咎も可二申付一旨申渡置候、又候訴狀入候に付、右咎之品、在方百姓ニ而も、江戸拂申付候例有レ之候故、其段申上候、畢竟江戸徘徊差留候儀、重而箱訴不レ仕ため之咎に付、右之段申上候、

一重〻咎之者ハ、江戸拂之上、住所之村方をも相拂候儀も御座候、以上、

酉五月　　評定所一座

〔科條類典下一〕寬保元酉年伺

沼津宿總代彌㧾左衞門、於二評定所一手鎖懸ケ預置候處、赦免之儀、相願候儀ニ付、申上候書付、

書面之通、手鎖預共に差免候樣可レ仕旨被二仰聞一、承知仕候、

酉十月十日　　評定所一座

東海道沼津宿旅籠屋總代
彌㧾左衞門

沼津宿、去十月燒失仕候に付、旅籠屋七拾壹人、拜借之願、右總代彌㧾左衞門、度々評定所前箱江訴狀入候、依レ之先月廿一日、御差圖之通申渡、於二評定所一に手鎖懸、江戸宿淺草茅町壹丁目三右衞門店平右衞門に預置候處、右江戸宿平右衞門、度々赦免之儀相願候、明十一日迄、日數廿日に罷成候間、重而訴狀入候者、可二相咎一旨申聞、尤當人より重而訴狀入間敷旨證文取レ之、手鎖預共に差免可レ申候哉奉レ伺候、以上、

十月十日　　評定所一座

〔御仕置例類集二ノ五〕文化四卯年御渡

甲府勤番支配伺

一甲州江草村新左衞門箱訴いたし候一件御仕置評議

甲州江草村新左衞門、度々訴狀入候一件、御仕置當り、評議仕可二申上一旨、御書付を以被二仰聞一、御渡し

被成候に付、甲府勤番支配申上候、書面之趣を以、科書并御仕置當りをも評議仕、取調候趣、別紙之通に御座候、依之別紙壹冊差上、御渡被成候御書付、并甲府勤番支配書面、箱訴狀共、返上仕候、

卯五月

甲州江草村新左衛門外三人科書并御仕置當り

野田松三郎御代官所甲州巨摩郡江草村
新左衛門

右之もの儀、村內無年貢之地所有之由、且村役人共押而隱居爲致、隱居料不相渡、或は年貢取立過有之、其外年貢二重に取立候抔、品々相違之儀申立、差越再三箱訴いたし候に付、叱り又は叱之上、手鎖に相成候後も、又候兩度迄箱訴いたし候始末不屆に付、居村并甲府を構、江戸拂、○中略

同村
佐源次
新之丞
宇源次

右取計方、不行屆不束迄に御座候間、三人とも急度叱り、

朱書
右評議之通り濟

駕籠訴之上箱訴

〔公案比事 四十四〕寶曆八寅年十二月

一金森兵部少輔領分濃州郡上郡村々駕籠訴狀箱訴狀一件○中略

同郡○略上保筋歩岐島村
百姓
四郎左衛門

右之者儀、領主ゟ檢見取申付候處、村々に切添田畑有之、悉ク取固付候ては難儀ニ存、領主申付を違背致、及強訴、太勢申合、駕籠訴入用之金錢取集ニ相廻り、根元迄致し、其上領主役人ゟ呼出し之節寅不罷出、形を隱し乍罷在、怪我人之名前を大造ニ認、箱訴總代之者江相渡候始末、一體不埒成願之頭取ニ相當、駕籠訴吟味申渡も無之內、箱訴致候段、公儀を不恐仕形、重々不屆至極ニ付、於郡

上獄門、

〔張紙留〕寶暦十二午年九月十四日、右近將監殿へ上ル、同廿三日承附ニ御下、翌四日返上伺之通向後取計可申旨被仰渡、承知仕候、

午九月廿三日　　評定所一座

焼捨訴狀御渡被成候節、願人遠國之ものに候得ば、御料ハ御代官所、私領ハ領主地頭江相達呼出、御附札之趣申渡、訴狀燒捨來、御料私領附無之分は、評定所腰掛において、式日之度々、四五ケ月も爲呼、訴狀入候もの不罷出候得ば、右訴狀返上いたし來申候、然ル處、享保十七子年被仰出候御書付、左之通御座候、

一評定所前箱江訴狀入候もの、江戸宿附無之候共、所附有之候はゞ呼出申聞候儀、又は叱り可申事等有之節、近郷に而、其日歸りに罷成候程之所者呼出可申候、夫より遠國に候はゞ、御料ハ御代官、私領は地頭江申達、於其所申聞、又は叱り候樣可仕候、

但遠國に候共、品に寄其もの呼出可取計儀は、只今迄之通たるべく候、

右之通有之候處、御代官地頭に而、爲申渡候留書も相見不申、勿論其後、遠國之ものに而も、呼出可申渡旨之御書付も無御座候得共、數年來いつとなく右之通取計來、右御書付に符合不仕候間、以來は前書享保十七子年被仰出候御書付之通、取計可申候哉に奉存候、依之奉伺候、以上、

午九月

〔法曹後鑑〕享保十七子年以來箱訴狀燒捨方取計方伺留

未〇天明七年十一月十二日

越中守殿江丹後守信濃守長門守立會御直進達、同十九日承付候樣御下ゲ札いたし、翌廿日御同人江三人立會御直ニ返上、

箱訴狀燒捨取計方之儀申上候書付

書面伺之通可仕旨被仰聞承知仕候、

未十一月十九日　　評定所一座

燒捨訴狀御渡被成候節、〇中略寶暦十二午年九月、松平右近將監殿〇江武元奉窺候處、伺之通、向後可取計旨被仰聞候以來、取計も區々に相見候趣、左之通御座候、

一御代官地頭之肩書無之分は、御勘定所に而、其支配御代官地頭等相糺、右御代官領主地頭江、御附札之趣申遣、訴狀も封じ候而差遣、於彼地申渡、訴狀爲燒捨候も相見申候、

朱書是は享保十七子年之御書付に、呼出申聞候儀、亦は叱り可申事等有之節、近郷に而、其日歸りに罷成候程之所は呼出可申、夫より遠國に候はゞ、御料ハ御代官、私領ハ地頭江申達し、於其所申聞、亦は叱り候樣可仕旨有之候得共、支配御代官地頭等不相知候はゞ、可相糺とハ無之、訴狀も差遣、彼地におゐて燒捨させ可申共無御座候間、訴狀も遣し、其所におゐて爲燒捨候は相當り申間敷候、

一燒捨訴狀は、地頭江遣候儀、本文伺之上被仰渡候以來、地頭高之差別に不拘訴狀遣し候得共、小高之地頭に而家來差遣候儀差支候趣に候はゞ、願人呼出候積り明和六丑年、一座申合之上、取計候趣も相見申候、

朱書是は訴狀遣し候儀も、前朱書之通相當不申候得共、彼地におゐて爲相渡候は、享保十七子年御書付之通御座候間、御代官地頭江申達、於彼地可爲申渡儀に候得共、小高之地頭は、家來差遣候儀、差支可申間、箱訴人呼出候儀は、是迄之通と有之候に准じ候間、呼出候而も、振候儀は有之間敷と奉存候、

一御代官地頭附有之候而も、五ヶ月程は評定所於腰掛、式日每爲呼、訴狀入候もの不能出候得ば、

前ヶ條之通、其支配御代官地頭江相達、於彼地爲相渡、訴狀爲燒捨候も相見申候、

朱書是は御代官地頭附有之候はゞ早速申遣、彼地におゐて申渡候否、承候迄爲呼申儀に候處五ヶ月程爲呼候上に而、御代官地頭江申達候而は、無益に手間取候に付、本文之取計相當り申間敷哉に奉存候、

一訴狀は評定所腰懸前に而燒捨、御附札之趣計、御代官地頭江申遣、於彼地爲申渡候も相見申候、

朱書是は享保之御書付に相當り候樣には御座候得共、御附札之趣、御代官地頭江申達、於彼地可申渡旨申遣、若箱訴名前之もの、村方に無之由申越候得ば、訴狀は返上可仕筋に御座候處、其否不承內、訴狀燒捨候は相當り不申候、

一書面之通、取計區々に相成、其度々申合次第取計候而は、自ラ治定不仕、却而享保之御書付并古來之仕來をも得と突合、此度評議仕候に付、以來之取計方、左之通相極可申候、

一江戶宿附、并御代官領主地頭之肩書無之訴狀は、右之御代官領主地頭は、名前不及糺ニ、古來仕來之通、五ヶ月程、評定所於腰懸式日每呼、訴狀入候もの不罷出候はゞ其旨申上、訴狀返上仕候、

朱書是は古來之仕來に而、享保之御書付にも振申間敷奉存候、

一御代官領主地頭之肩書有之候分は、訴狀評定所に差置、享保御書付之通、其日歸程に無之所は、御附札之趣、其御代官領主地頭江申遣、於彼地爲申渡、其否申越候迄は、評定所腰懸におゐて、式日每に爲呼、訴狀入候もの不罷出、於彼地申渡候段、御代官領主地頭ゟ申越候上、訴狀は評定所腰懸前に而燒捨可申、若爲呼候內、箱訴人罷出候はゞ、於評定所申渡爲見置、訴狀燒捨、其段御代官領主地頭江相達可申、若亦呼出候而も不罷出、彼地におゐても糺之上、地方に不罷在由申越候はゞ、尚亦評定所腰懸におゐて爲呼、都合五ヶ月程見合、彌箱訴人不罷出候はゞ、其上申上、訴狀返上可仕候、

朱書
是は享保之御書付に、訴狀も遣し、於其所爲燒捨可申とは無之間、本文之通評議仕候、

但遠國に候共、御代官其所に不罷在在府いたし候分、并私領も少高之地頭に而、知行に役所等無之、家來も罷在ず候分は、箱訴人呼出申渡、訴狀燒捨可申候、

一手鎖懸候類、品に寄、其もの呼出可取計儀は、近鄕遠國之無差別、取計可申候、

朱書
是は享保之御書付、但書之通に御座候、

右之通、以來極置取計可申候哉奉伺候、以上、

未十月

〔德川禁令考後聚三聽前欧驗〕天明四辰年七月廿一日

訴狀燒捨之件

式日相濟、三奉行退散後、いまだ箱不上内、腰掛箱之上江、木札一枚上包、折懸之内、書物七通、封無之、水引に而結、差置候を、御徒目付、出席之御目付安藤鄕右衛門江申達、鄕右衛門御城江持參、一通り申上、一座江も演說之上、同月廿五日立合之朝、御目付持參、於腰掛燒捨、猶又其段も御目付より一通り申上候、

但廿五日、鄕右衛門忌中に付、池田修理付⊙目出席演說、

〔張紙留〕天明五巳年三月十一日

一武州秩父郡伊豆澤村と認候訴狀壹封、訴狀箱之上江差置候に付、延享元子年十月、寶曆七丑年十二月廿一日之例を以、即日燒捨る、

但御出座前之儀に付、御退散後燒捨ル、

〔御仕置例類集二ノ四〕文化十酉年、牧野備前守殿取扱振可申上旨御渡、

一武州若兒玉村長吏武助名前箱訴狀取扱方之儀ニ付評議

書面武助名前之箱訴狀燒捨之儀、享和二戌年八月廿日被成御渡候、善七手下非人平八名前之箱訴狀燒捨之振合ニ取計可申旨被仰聞、承知仕候、

評定所一座

酉十月十日

當月十日、取扱方評議いたし可申上旨被仰聞、御渡被成候、武州若兒玉村長吏武助名前之箱訴狀下覽仕候處、若兒玉村外六ヶ村は、長吏共組合有之、十ヶ年以前迄ハ、小頭役有之候得共、當時ハ小頭無之、行事喜八、小組頭七平と申もの取計、武助願之筋、難相立樣取計候由ニ而、喜八、七平、幷彌助と申ものを相手取候書面ニ有之、一體願之趣意、何か難相分候得共、何れ穢多仲間ものゝ爭論ニ有之、穢多彈左衞門方ニテ吟味可致筋ニ候處、同人方江願出候得共、不取上趣ニ付、町奉行所江彈左衞門をも呼出相糺候處、度々願出候段無相違候得共、組合內之添書無之、駈込訴ニ付、定例之通取上不申由ニ御座候、彈左衞門方ニ而取上不申候はゞ、其譯申斷、町奉行江申出候得ば、其始末ニ寄、彈左衞門江引渡、吟味をも爲致候事ニ候處、無其儀定書ニ有之候、直訴可致ヶ條ニも無之上ハ、何レニも無取上、願筋御燒捨ニ可相成儀ニ御座候、然ル處、穢多非人之儀ハ、咎等之儀も、彈左衞門江申渡申付候事ニ候間、一座江御渡之上、三奉行立合、燒捨申渡候儀も相當仕間敷、彈左衞門江相渡爲取計候方ニも可有之哉、尤非人箱訴いたし候節、定例之通、燒捨申付候先例有之、且享保十巳年御觸書も、御家人之內、評定所箱江書付入候もの有之候、右箱の儀は、町人百姓訴のため出シ有之段之御文言ニ而、穢多非人之儀、訴狀入間敷と申趣意も無御座、殊前書之通、先例も御座候間、御附札を以、此度之訴狀も燒捨御下ゲ可被成候哉、併穢多非人之箱訴ヲ、平人之通取計候も如何ニ付、彈左衞門方ニ而、武助行衞相糺、願之筋有之バ、彈左衞門方ニ而爲相糺、訴狀入候段申立候ハヾ、重而訴狀入間敷旨爲申渡、訴狀は評定所腰掛前ニ而爲燒捨可然哉ニ奉存候、

酉七月

再訴

〔御定書百箇條〕無取上願再訴、幷筋違願之事、

享保五年極
一諸願申出候もの、一通吟味之上、難成願に候はゞ、難立趣申聞、重て願出候はゞ、咎可申付旨書付相渡、猶又願出候はゞ、過料可申付事、

享保五年極
但奉行所江願出、無取上義に付過料申付候處、遮て箱訴、幷御老中、若年寄中江訴訟に罷出候はゞ、奉行所江呼出、猶又遂吟味、彌於難立願は、再過料可申付、

同
一親子兄弟、其外之親類にても、咎御免之願は、再應願出候共不及咎事、

〔御定書百箇條〕諸役人非分私曲有之旨訴、幷裁許仕置之事、

元文三年極
一於奉行所に、諸役所幷私領、前々裁許有之候て事濟候儀を、年月を經、右裁許非分之由申立、再吟味願出候とも取上申間敷候、然ども訴訟方慥成證文等有之、相手方にてハ證據無之、先裁許、必定過失と相見候はゞ伺之上詮議取懸可申事、

但相手方不尋して不叶義も候はゞ、評議之上、其所支配人、或ハ地頭江一通り相尋可申候、猥に相手召寄申間敷事、

同五年極
一不願出候共、奉行所にて評議之上、先裁許改可然儀は、伺之上可申付事、

〔評定所覺書 上〕公事出入裁許仕置之事

最前裁許相濟候義、又々訴出候類之事、先達而被仰出候通り裁許致直シ可然と存候儀は、其旨相伺可申候、左樣ニも無之は不及伺候、

右御書付、子〇享保五年十月七日、河內守殿、三奉行江御渡、

〔科條類典 下 一〕(元)享保六丑年御書付

一諸役人を始、其所之支配人、非分私曲等之儀有之訴出候事、

一最前裁許相濟候儀、又々裁許いたし直候類之事、

右は訴出候節、先其旨相伺、御差圖次第取計、尤裁許之儀相伺可申候、

御掛紙

> 此ヶ條計、向後別紙之通可被心得候、其外は此書面之通たるべく候、

一重キ御役人、其外評定所一座之面々、領知等之出入之事、

　右は訴出候節、伺に不及取計、裁許之儀ハ相伺可申候、

御別紙

一奉行所并地頭に而、前々裁許相濟候儀を、其裁許非分之由を申立、再吟味願出候共、容易に取上ゲ申間敷候、然共前々裁許、憧に致し損じと相見候はゞ、伺之上詮議に取掛り可申事

　畢竟再吟味願候ものゝ方、十に七分以上之理分於無之は、不取上儀と可被心得事、

右は訴訟人之願に依て、再吟味之事に候、若奉行所に而評議之上、前々裁許改候儀は格別之事、

　辰正月

〔科條類典下一〕寛保二戌年十一月、大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、

　無取上願再訴、并筋違願箇條之内、

極

一諸願申出候もの、一通り吟味之上、難成願に候ハゞ、難立趣申聞、重而願出候ハゞ、咎可申付旨書付相渡、猶又願出候ハゞ、過料可申付事、

　但奉行所江願出、無取上儀ニ付過料申付候處、遮而御老中、若年寄中江訴訟に罷出候ハゞ、奉行所ニ而猶又遂吟味、彌於難立願ハ、再過料可申付事、

懸紙

> 箱訴并御老中若年寄中江訴訟ニ罷出候ハゞ、奉行所江呼出、猶又遂吟味、彌於難

極

> 立願ハ、再過料可申付事、
>
> 朱書
>
> 是ハ先達而伺相濟候得共、猶又評議仕候處、箱訴いたし候ものハ、不憚仕形に御座候間、書加可然奉存候ニ付、掛紙之通相認申候、

右寛保三亥年五月三日、伺之通御下知、但書極ル、

〔享保集成絲綸錄四十四〕慶安五辰年五月

一此以前も公事に罷出、さばき申付候處、重而理もなき義於申出ハ、急度籠舍可申付候、併右に相かわり、申出不叶儀候ハヽ、御評定所江うつたへ可申候、以上、

五月

〔德川禁令考後聚八法曹事務〕天明五巳年御渡

大坂町奉行伺

泉屋吉左衞門手代共、於江戸表再應訴狀差出候一件、

江戸諏訪町
宗主　新次郎

右之もの儀、理兵衞年來之取扱、本家押領之所存相見、難心得候ハヽ、縱本家江不立入候とも、其分ニ差置、取締方勘辨も可有御座候處、與一申合、吉左衞門江も不申聞、理兵衞、萬次郎、和融取持、本家爲致世話候と之申立、不都合之儀、幷此者勤居候而者、父子和談之障と存、萬次郎江相願、永暇乞受、餞別迄貰罷在候上ハ、吉左衞門差留候共、幾重ニも申斷、相退可申儀ニ御座候處、又々吉左衞門江手寄手代同事ニ相勤、江戸店家守ニ相成候段、畢竟身分之勝手ニ拘兩端之致方、彼是不埒御座候、其上理兵衞幷重手代共相巧、此度願之趣も、手段を以取扱候儀ニ而、實ニ吉左衞門を大切に存候ハヽ、此もの呼登候節、身分不厭早速罷出、右不埒之次第、於大坂表申立、吟味相願可申處、無其儀故障申立不罷登、却而此もの頭取、喜兵衞、又兵衞、甚左衞門、與兵衞抔申談、身分不束之筋者除置、理兵衞幷重手代共之内を名差、賄賂之手段を以、吉左衞門初、隨身手代共迄爲及難澁候旨、大坂表奉行所之取扱、非分も有之樣差含過去候儀、幷證據ニも不成書付帳面等を、儲成證據有之由、不輕品々申立、文段取飾、書取大坂表之吟味中乍存、於江戸御吟味相願、取上無之儀をも不請用、再三押而相願候始末、公儀を不恐仕方、不埒至極御座候間、存命ニ候ハヽ遠島、

再吟味願

此儀御定書ニ、御褒美可取巧ニ、偽之訴人いたし候もの、敲之上中追放と有之、此者ハ御褒美可取巧ニ、偽之訴人いたし候ニハ無御座候得共、其身之不束ハ除置、證據ニも不相成書付帳面を以、彼地奉行所之取扱、非分も有之様差含、奉行を替、於御當地再三御吟味相願候段、前書御定よりハ格別趣意不宜候間、差留例者相見不申候得共、伺之通存命ニ候ハヽ遠島、

（公事訴訟取捌）一奉行所、諸役所并於私領、前に裁許有之候而事濟候儀、經年月を、右裁許非分之由にて、再吟味願出候共無取上、然共訴訟方慥成證文等有之、相手方には證據無之、先裁許必定過失と相見候はヽ、伺之上詮議可取掛、若雙方證文證據於有之は、再吟味之願、取上なし但相手方不尋して不叶儀も候はヽ、其處之支配人、或は地頭江一通相尋、みだりに相手不召呼、

一再吟味之願、理分に相聞へ候共、雙方對決之上ならでは、理分難相決候、又は檢使不遣候而は不分明之儀は、慥成證據無之故に候條、再吟味取上なし右は總而訴訟人之願ニ依而、再吟味之事に候於奉行所評議之上、前々之裁許改候儀ハ格別也、

一重き御役人并評定一座知行所之出入は伺之上裁許申付、但大目付以上之質地借金公事は定法有之故伺ニ不及、

（公案比事三十一）朱書明和元申年五月廿八日、御奏者松平伊賀守を以、松平右京大夫殿江進達、即刻御差圖濟、伺茂不及差扣候、

松平伊賀守

奥州白川關川寺、并同寺弟子宗隨箱訴、貫之駕籠訴一件、再吟味之節、越生龍穏寺先住永平寺湛海、國府臺總寧寺先住却外、礼之儀ニ心付不申段、不念仕候、依之差扣之儀奉伺候、以上、

五月廿八日

松平和泉守
酒井飛驒守
依田豐前守

追訴

土屋越前守
安藤彈正少弼
牧野大隅守

右同文言を以、寺社奉行土井大炊頭江別段相伺候處、何レ茂不及差控候と、御附札ニて被仰渡候事、

〔聞訟秘鑑〕一追訴之事

是ハ都而出入返答書に、其出入に不拘儀共、品々申立候而も、訴狀外之儀ハ、追而別段可相願は格別、今般不及沙汰旨、裁許申聞候儀ニ付、相手方ゟ餘事を品々相認、追々書付差出候共、利害申聞相返、又訴訟方ゟ最初申立候趣意に、差而相替儀も無之事共種々申立、追訴差出候とも、夫を取上返答書爲致候而は、吟味入組候間、大概之儀は利害申聞、其趣意口書江認入、追訴は相返候方宜候、併追訴を不取上と申筋ニも無之候間、無據儀ハ取上候共、先は右之趣を以、取計可然事、

〔張紙留〕七月朔日、藤右衛門殿へ差出一覽之上、存寄無之旨之事、以上朱

都而公事出入御吟味中、一件之もの共、差出候追訴之儀、全訴狀外之儀、又は利害之上、一旦屈服いたし候儀を申替、品々我意之趣、取綴差出候類者、心得違ニ付、其段猶利害申聞、追訴差出候段、恐入候旨を以、下ゲ相願候においては、寫いたし置、右之趣掛り御奉行江申上、訴所より下ゲ遣、或は御奉行江申上候上、評席に而、直にも差返し來り、且奉行之もの糺方、非分之趣申立、又ハ吟味筋手掛りに可相成儀、并顯露に難申立筋、其外糺之節、口上に而申立候而は、年月等前後いたし、紛敷廉、書面にいたし差出候類者、素ゟ可差返筋無之、書付取上、其品に應じ、夫々取計候儀、前々仕來之處、右手續區々相成、追訴は一般に、不取上樣相心得候而は如何に付、前書之差別不紛樣、此度尙又一統申合置候事、

文化六巳年七月　　評定所留役

〔島田記俗三〕乍恐以書追訴奉願上候

信州伊奈郡向關村外三拾貳ケ村總代、右向關村名主與五右衞門、米村年寄兵次郞、三日市場村庄屋清兵衞、名主熊村年寄吉右衞門、奉申上候、私共村々之儀は、正德年中ゟ、中山道野尻宿、三留野宿、妻籠宿、馬籠宿、右四ケ宿江助鄉相勤候處、外助鄉村々は格別ニ而、元來私共、村々助鄉高少ク、壹宿ニ付勤高貳千六百石程相當り、其上私共助鄉相勤候、野尻宿外三ケ宿ゟ、福島宿外貳ケ宿江助高、壹宿ニ而七疋宛繰上、幷臨時當分助鄉等相勤、必至と困窮仕、此上助人馬相勤、急御用人馬御觸當之節、御差支可相成程之儀、甚奉恐入候、右ニ付、清內路越、幷大平越、遠近手明村々も數多御座候間、私共村々之儀は極困窮に落入候儀故、勤高之內半高、右手明村々江被仰付被下置度段、去戌十月廿二日差上候願面之通、何卒格別之以御慈悲、困窮村々御救願之通、御聞濟被下置候は丶、難有仕合奉存候、以上、

文化十二亥年正月

〔東武實錄三十一〕寬永七年八月十六日、大和國菩提山炎上スルノ時、大神君、公、（秀忠○德川）兩君、此寺ニ賜ル御朱印燒失ス、住僧江戶ニ來テ、是ヲ愁訴スルニ依テ、御朱印ヲ菩提山ニ賜フ、

〔東武實錄三十四〕寬永八年四月廿七日、駿河大納言忠長卿、比年病氣ニ依テ、此春ノ季ヨリ兩君ノ命ニ背キ閉居ス、公（秀忠○德川）忠長卿ノ家臣朝倉筑後守宣正ヲ召シテ、命有テ曰ク、宣正ハ始ヨリ忠長卿ノ後見トシテ附屬セラル、然ル處ニ忠長卿、近年病氣ニ依テ、其行儀正シカラズ、何ンゾ是ヲ諫言セザルヤ、其誤リ輕カラザルノ御旨ニテ、酒井阿波守忠行ニ預ケラレ、忠行ガ別墅ニ押シ籠メラル、忠長卿此コトヲ聞テ、大ニ悲歎シテ、尾張亞相義直卿、水戶黃門賴房卿、天樹院殿ノ御方ヲ以テ、宣正全ク是非ヲ知ラズ、唯忠長一身ノ誤リナリ、宣正ヲ宥免有テ、忠長其罪ニ行ハルベキノ旨ヲ愁訴アリ、此赴台聽ニ達ス、是ニ依テ忠長卿病氣養生ノ間、家臣鳥居淡路守ガ領內、甲斐國ニ

蟄居スベキノ由鈞命ニ依テ、忠長卿江戸ヲ發シテ甲州ニ赴ク、

〔折たく柴の記中〕前代綱吉○徳川の時、日光准后望み申されし、叡山結界の事によりて、八瀬の里人、其產業を失ふ由を以て愁訴す、其事いまだ決せずして、我代家宣○徳川におよべり、これらの窮民滯留の日、久しからん事不便なり、まづこの事を議し申すべしと仰下されたり、廿五日寶永七年六月の朝、まづ八瀬の事の議を奉る、やがて奉行所よりまゐらせし所の文書等を下し賜り、廿六日の朝、申すべき事共しるして奉る、廿八日に參りし時は、八瀬の里人愁訴の事、いはれなきにあらざれども、叡山の結界、今はた改廢すべからず、されば彼結界の地に代ふるに土田を以てして、その產業を得せしむるにはしくべからず、其さだめ文の草をまゐらすべしと仰下され、廿九日に其草を奉る、猶又仰下さるゝ事共ありて、七月五日に至て、つひに御みづから草し給ひしものを、しめし下されたりき、此事は、むかし叡山の結界ありしを、そのゝち八瀬の里人、みだりに山中に入て木をきりさり、國家鎭護の浄界、婦女牛馬のために穢さる、もつともしかるべからずと、日光の准后、前代に申し給ひしかば、戊子の年十二月に、京の奉行所、かしこにおもむきて結界の事あり、こゝにおいて里人等、薪をこりて產とせし地をうしなひ、多くの古文書どもをさゝげて證とし、その結界を改め廢せらるべき事を訴ふる事、年を經て今に至れる也、これによりて彼庄にある所の私領寺領等を推所にうつし替られ、その地をば八瀬のものゝざるもに下され、年貢諸役、一切に免除せられぬ、(中略)此年の冬、御使を奉りし時、叡山にのぼりて、歸る時、八瀬の里をすぐるに、召具のものどもの輩の休するほど、道のほとりなる家に入りて、縁に腰かけ居たり、あるじは老女にて、子なるものは京に出ゆきしといひけり、かのうたへの事を問ひしに、結界の後は、この人、世にわたるべきわざをうしなひしに、今の御めぐみによりてふたゝびいき出し心地しぬれば、人々この御代をば、万々歳とこそいのるなれ、されど今のほどは、はたうち田つくる事は、いまだならはぬわざなれば、いかにやあるべきなど申せど、つひにはしかるべき事なりと申事なりといびき、

先訴後訴

〔目安秘書乾〕先訴後訴相訴之事

本公事一口之出入、寺社奉行、御勘定奉行江同日願出候節取計、

安永二巳年□月、一座評議極、

土井能登守掛

一仙石越前守領分、但馬國氣多郡土淵、船持總代太郎右衞門外壹人相手、京極甲斐守領分、同國城崎郡豊岡町四郎兵衞外壹人、船差押候出入訴狀、

松平對馬持參

一平岡彥兵衞御代官所、但馬國養父郡細塲村庄兵衞相手、右同斷鹽荷物差留出入訴狀、

是ハ右二口同日同刻限訴出候ニ付、評議之處、私領訴訟人、人數多ニ付、能登守方之訴狀初判差出、對馬守方は同樣之出訴有之、相手呼出候間、及沙汰候迄、差扣罷在候樣申渡、追而能登守方江引渡候積り、

〔目安秘書 乾〕先訴後訴相訴之事

出訴斷を請候上、差急出訴いたし候は先訴ニハ不相立、左も無之分は、奉行所江早く出候を先訴ニ相立、裏書遲速ニは不拘候事、

文政十三寅年十一月　　月番留

曾我豊後守

內藤隼人正

町奉行衆

在方之もの共、御府內町方之ものを相手取、拙者共方江出訴いたし候得ば、訴狀受取相糺候上、追而七日目裏書差遣候儀之處、御府內町方之ものゟ、近在之もの相手取、各樣御役所江出訴いたし候得ば、卽日七日目裏書被遣、右相手方其以前拙者共方江出訴いたし候分は、先訴之趣意を以、御裏書御引上ゲ、願人は拙者方江御引渡ニ相成候も有之、又は最早裏書被遣候儀ニ付、拙者共方先訴ニ候而も、願人御引渡申候も有之區々ニ付、以來は裏書被遣候而も、其以前拙者共方江訴出候分は、先訴之趣意を以、裏書御引上、願人御引渡相成候樣いたし度、此段及御懸合候、

寅十月

御書面、先訴後訴之儀、假令裏書差出候而も、其以前相手方より出訴いたし、訴狀糺中ニ候ハ、先達而願出候方、卽先訴ニ可相立は勿論ニ候處、右之內ニハ、出訴斷を受乍罷出、差急ぎ出訴いたし候類も有之哉ニ付、右は姦曲之筋ニて不埒ニ候處、却而先訴ニ相立、存分通相成候而者如何ニ付、以來之儀ハ、出訴斷受候、有無相尋、左も無之分は、町在とも奉行所江先江出候方を先訴と極置候ハヽ、前後之論も無之、尤雙方同日之出訴之節も、是又出訴之早キ方を先訴ニ相立候はば可然哉ニ付、御存寄も無之候はヽ、諾否之御挨拶次第、右之通取極置可申と存候、依之及御答候、

寅十一月

榊原主計頭
筒井伊賀守

御書面之趣致承知、右之通極置候ハヽ、區々ニ不相成、別ニ存寄無之候、依之及御挨拶候、

寅十一月

曾我豐後守
內藤隼人正

〔法曹後鑑〕先訴之事

一先訴有之候得ば、先訴落着次第可願出と申渡、訴狀返、
一相手本人死失いたし、名跡無之歟、先訴人江身代限相濟、身上無之、同家人ニ成居候節、請人を相手取願出候得ば、請人江本人同樣濟方申付、
一本人身上限請取、殘銀請人江懸り願出候得ば、濟方申付、
一金銀出入ニ而相滯候節、身上限ニ可相成同樣之先訴有之候得ば、後訴不爲請候事、
一先訴跡式出入、合力出入、質物出入等に而、後訴は金銀出入に候得ば、先訴に不構、後訴も爲請候、
一先訴家質出入に候得ば、後訴何出入に而も取上不申、尤相手紛敷儀有之、直ニ吟味可及事は格

別之事、

一家質田畑質とも、質地に質地出入は、代物別々に付爲請、

一連判之內、先訴有之候得ば、相殘ものゑ濟方申付、先訴有之ものは、日限證文奢印に致置、追而先訴濟候上、連判申付候、尤濟方割賦ハ不申付候、

一當役所○大坂町奉行ゟ之訴狀請居候上、奉行所ゟ之訴狀附候得ば、奉行所之訴狀先訴に成、落着迄此方裁許のべる、

如此之定法に候處、奉行所に准じ候、御代官所之分、先訴不相立、如何之旨、岡部對馬守殿、奥津能登守殿ゑ、荻原藤七郎、內藤十右衞門、飯塚伊兵衞相伺候、御城代青山因幡守殿ゑ御伺被成候處、御代官所ゟ先訴有之ものゑ、奉行所ゟ訴狀附候得ば、其段村役人ゟ相斷、御代官所之分、先訴に可仕旨御下知相濟、

寶曆十年辰二月廿日

〔幕政秘錄乾〕先訴人相濟、後訴日順斷之事、

市場町
所之者

乍恐口上

一何町何屋何之助代判何助ゟ、町內大根屋瓜助相手取、何出入、何月幾日就願上候處、今日右願相濟申候處、瓜助義、左之通後訴御座候、

何月幾日願

雜喉場町
願人 綱屋海老藏

預ケ銀出入

右町內
相手 大根屋瓜助

右出入御引上ゲニ相成御座候

右之通、後訴御座候ニ付、爲請度奉存候、尤此外諸掛り合等一切無御座候、以上、

年號月日

年寄病氣ニ付月行司　何屋何作印

願人　鯛屋海老藏印

御先訴人濟口さ、右書付と、後訴人ゟ左之通之書付さ三通、目安方江差出ス、

〔幕政秘錄乾〕後訴人願直シ度御斷之事

乍ㇾ恐口上

一何町何屋何兵衞相手取何出入、去何ノ何月幾日奉ㇾ願上候處、先訴有之、私出入御引上ゲニ相成御座候、然ル處、今日先訴出入相濟申候ニ付、私來ル幾日之御用日奉ㇾ願上度奉ㇾ存候ニ付、乍ㇾ恐此段御斷奉ㇾ申上候、已上、

年號月日

何町　何屋何藏印

年寄病氣ニ付月行司　何屋何三郎印

御奉行樣

〔牧民金鑑一〕御勘定奉行支配國々之出入後訴ニ付、先訴有之方江引渡、

脇坂中務大輔殿〇安董、寺社奉行、　松平兵庫頭〇信行、勘定奉行、

野州小林村外六拾貳ヶ村總代、同村清左衞門外壹人ゟ、下總國久保田河岸五右衞門外拾五人を相手取、筏川下出入、別紙目安之通、拙者方江訴出候處、先達而御初判被ㇾ遣、去月廿五日於ㇾ評定所、初對決御吟味御座候、野州今市宿外貳拾ヶ村總代、右宿又右衞門外壹人ゟ、同國風見村與左衞門外三人を相手取、筏川下差障之出入趣意、全同樣に御座候間、其御掛に而、最早御吟味に相成候訴訟方江、別紙之もの共御差加、一同御吟味之上、御沙汰有ㇾ之候樣仕度、此段御掛合仕候、以上、

巳〇文化六年二月

御書面之趣、令ㇾ承知候、野州小林村外六拾貳ヶ村總代清左衞門外壹人ゟ差出候、目安令ㇾ一覽候處、

關東内御料私領之出入ニハ候ヘ共、拙者掛ニ而、當時吟味中之同國今市宿外貳拾ヶ村總代又右衞門外壹人と願趣意同樣に付、右之者共江差加、相手之者共をも呼出、一同拙者方に而吟味可致ニ付、候間、訴訟人共、御引渡有之候樣存候、御差越候目安致返却候、

巳二月

脇坂中務大輔

古事類苑

法律部五十四

下編下

訴訟下

親屬訴訟 四七七
主從訴訟 四八一
揩紳訴訟 四八五
訴武家 同
社寺盲僧訴訟 四八六
穢多非人訴訟 五〇〇
家督訴訟 五〇四
土地用水訴訟 五〇七
質地小作訴訟 五一〇
金銀訴訟 五一六
度掛訴訟 五三三
相訴 五三五

古事類苑

法律部五十四

下編下

訴訟下

〔憲教類典四ノ五評定〕寛永十癸酉年八月十三日

公事裁許定〇中略

一親子間之公事、親次第たるべし、雖然其親非分有之ば、依理非可申付事

〔聞訟秘鑑〕一親伯父等を相手取候出入之事

是は親子出入は勿論、伯父兄抔江對し候而は、右體之儀は、出入致間敷事ニ候得共、無據譯ニ而及出入候節は、可成丈內濟いたし候樣取計可然候、出入之品ニ寄、親伯父等を相手取候迚、別段御咎も難被仰付候ニ付、於御奉行所ニ、右體之出入、親類五人組等江被仰付、可成丈致內濟候樣御取計被成候御定法之由に候得ば、其心得を以取計可然候事、

〔新朝裁許律三〕子五月十六日和泉守殿、三奉行月番江御渡被成候、

寺社奉行　町奉行　御勘定奉行江〇中略

一親子兄弟、其外之親類ニ而も、御科御免之願、且又裁許之儀ニ付而之願、是ハ別段之事に候間、只今迄之通、奉行所ニ而不取上願、老中若年寄等江訴訟ニ罷出候節、奉行所江出候哉と相尋、いまだ不出由申候ハヾ、其筋之奉行所江可出旨可申聞候、若奉行所江出候得ども、取上無之由申候はヾ、訴訟取上、奉行中江可相渡候、其節相談之上彌不取上願ニ候ハヾ、再過料可申付候、萬一可

相立品茂候ハヾ、猶又吟味之上裁許可₂申付₁候、

〔人見私記〕寛永二十年六月十二日、評定寄合、此日勝屋次右衛門同長七郎屋敷ノ事達₂御聞₁、數年同屋敷ニ兩人令₂居住₁、雙方證據不分明ノ所論₂之、其上廣屋敷ニテ、兩人住宅有₂之テモ可₂然處、伯。父。甥。之。間、公事仕ル儀、不屆ニ被₂思召₁ニ付、屋敷被₂召上₁旨、大番頭、保科彈正少弼、中根大隅守、内藤石見守ヲ評定ヘ被₂召出₁、老中申渡、

〔窻の須佐美〕一〕備前の國の民、兄弟田をあらそひ、年を經てやまず、後には方人多くなりゆき、官人のむねにも從はず、光政朝臣〔松平新太郎從四位少將〕是は大事の政なれば、おろそかにならぬ事也、泉八左衛門〔與助弟〕是を斷せよと命せられぬ、泉は聖學に深く志ありける人也けるゆゑとぞ、何某其職にあらずして、斯る事あづかり聞申さむ樣なく候と度々辭しけれども、思ふむねありとてゆるしたまはざりければ、さらば某が宅にて聞申さんとて、兄弟を召寄、方人の申事は、とかくに聞じとて、悉く立さらせ、さて人を出していはせけるは、今日は俄に急用出來せり、よつて時うつるべし、打とけて待居よとて、兄弟をせばき一間に入置、終日出合ず、食物ねんごろに調じてあたへ、酒を强て醉しめ、寒天なれば湯あみせよとて、風呂を設て一つに入れけり、暮に及び又人を出して、こなたの事未だ終らず、更ぬとも今宵中に聞べしとて、二人が中に火鉢一ツを置て、夜半にいたるまで出あはず、兄弟の者、日中はものをもいはずしてありしが、一間なる所に終日面を合せて居しかば流石兄弟のよしみなれば、寒きに近く寄りてと言しより、いつとなく居ざり寄、火にあたり居るより、竹馬の鞭のふりわけ髮なりし親しみを思ひ出るまゝ、覺えずして親の世の事など、ふと語り出けるほどに、いつとなく難しく嘉はしく覺えければ、兄がいふ樣、つく〴〵思ふに爭の田は、誰がしが强ひける故に、事募りて訴訟に及びぬ、今よりはあらそひをやめて、二人して作りなんやと言に、弟も今より左あらば何の心かあらんと言ける、さらば此由を申てみんと云て、斯

くの如く存寄たる旨を言入れければ、八左衛門其まゝ出て、二人が申處理り也、めで度事此上あらじとて、親の遺體骨肉のさりがたき理り、渠等が知る樣にこま〴〵と說聞せしほどに、兄弟涙にむせび打連て歸りしが、終には類稀なる計睦しき兄弟となりけるとぞ、必ず訟なからしめんとは、かゝる心にこそ、

〔東湖隨筆〕駿河守、〇矢部定謙堺奉行タリシ時、堺ノ富商何某ヘ、其弟ナル者ノ由モテ合力ヲ乞ヘル者アリ、悉ク成果タル風情ニテ、外見モアシキ故、富商是ヲ拒ミテ、終ニ公訴トナル、矢部是ヲ吟味スルニ、富商ノ申スハ、某父ハ誰、母何氏ニテ、弟ハ無之候、某一人ノミニアラズ、某ガ一門親類、不殘御吟味有之候ハヾ明白ニ御分リ候ベシト事モ無ゲニ申ケル、弟ナル者イヘルハ、某ハ富商ノ父ノ末子ニテ候、サレドモ一門親類ヘ御尋ニテハ分リ不申候、其故ハ、父ノ晩年ニ某所ノ妓女ト狎レ染、終ニ妓ヲ後妻ニ引入レタリ、一門親類集リテ、堺ノ名高キ家柄モノ、氏筋モ分ラヌ妓ヲ引入レ後妻トハ何事ゾヤ、是非追出スベシトアリケルヲ、父强テ其妓ヲ留メタルニ、親類大ヒニ怒リ、家ノ一大事ナリ、扨ハ父ヲ別莊ニ隱居セシメ、家ヲ總領ニ讓ラズベシト議シ、遂ニ父ハ其妓ト共ニ別莊ニ逐ハレ、親類一同ヨリ絕交セリ、後ニ後妻ヨリ子一人ヲ生タリ、卽チ某ナリ、サレバ某富商ノ弟ニハ相違ナケレドモ、親類始ヨリ外聞ヲ耻テ、カク取計ラヒタルガ故、某モ是マデ他ヘ潛タルニ、活計盡キテ、不得止事、兄弟ノ名乘ヲセント思ヒシニ、ミス〳〵弟ト知リナガラ他人トスル、兄ノ心ノ憂タテサヨト嘆訴シケルヲ、矢部熟聞クニ、弟ノ申ス事、相違ナキニ決定シ、兄ヘイロイロト申ケルニ、兄ハ前言ヲ取テ白狀セズ、矢部容ヲ改メテ言ケルハ、古歌ニ、兄弟ノ情ヲヨミテカクカクトアリ、余不幸ニシテ兄弟ナシ、幼ナキヨリ物學ブ場ヘ出、他人ノ兄弟アル者、相與ニ睦ビテ、力ヲソヘ心ヲモ合スル風情ヲ見ル每ニ、兄弟アランニハ、サ、コソ賴母シクアルベキニ、扨モ羨シキコトヽ思ヒヌ、セメテハ同志ノ者ト兄弟ノ契リヲモ取結ビタキ者ト常々心ニ不忘、今汝ニ

人ハ、實ノ兄弟ニテアリナガラ、弟ハ兄ヲ不人情ナリト訴ヘ、兄ハ弟ヲ他人ニセント云、他人ダニ兄弟ノ契リヲ結バント思フノ心トハ、イトモ相違セリ、扨モ〱嘆カシキコトニアラズヤ、淺マシキコトニアラズヤト落涙シテ曉シケレバ、二人共ニ心服シテ、兄ノ言ケルヤウハ、恐入タルコトナリ、如何樣、此者ハ弟ニテ御座候ヲ、カヽル淺マシキコトヲ訴ヘ奉リシコト、心肝ニ銘ジ恥入リ申候、何卒吟味下ゲヲ願フ由ヲ嘆キ、忽チ事濟ミ、弟ヘ可然程ノ株式ヲ與ヘケルトゾ、

〔土津靈神言行錄上〕承應三年十月十八日、靈神降令曰、有子訟父、奴訟主者、則懲創子奴也、有父子相訟、主奴相訟者、則先懲創子奴也、

○按ズルニ、右ハ會津保科正之ノ制度ナリ、

〔會津家世實紀十四〕承應三年十月十八日、親と子出入有之候節、先子共を穿鑿致、道理次第ニ相揃、其上子共之方不孝之罪相當ニ可申付、主人と家來之訴も可爲同意旨被仰出、

御藏入田島村治右衞門井同村藤十郎妻不屆之儀有之、御藏入郡奉行、井郡奉行江爲致穿鑿候、帳面差上候處、其內甚五郎と子共金藏、父子爲致對決候義有之、依而親と子と出入有之時は、先子共を可成程致穿鑿、夫ともニ不分明ニ候ハヾ、又親をも可相糺候、主人と家來之出入も此通可爲同意候、親子公事いたし候ハヾ、裁許は、道理次第ニ相揃候義勿論ニ候へ共、子共之方ニ不孝之意味有之候間、其咎ハ追而相當ニ可申付候、此度田島村金藏儀、親甚五郎ニ僞を申懸、對決之節、親を拷問被成候ハヾ、白狀可致と申候處、不孝成義ニ候間、先金藏を可致拷問處、甚五郎夫婦を責候儀、逆成致方ニ候、同所藤十郎妻拷問之節、夫藤十郎を咎人ニ申立候義、實敷申分ニ候得共、藤十郎不致白狀、聊不存事之由申候上は、再藤十郎拷問ニ不及事ニ候、凡而穿鑿之義、依其品不分明之事有之、大切之糺ニ候ハヾ、數人嚴責ニ及候とも、可成程致穿鑿、又何程致吟味候而も、埒明間敷糺者穿鑿是迄と申時分可有之候、此一件、最初は藤十郎妻甚五郎夫婦、鍛冶藤作等、

總太郎殺候事相辨候由及白狀、後ニは此義毛頭不存事ニ候得共、田島村ニ而治右衛門ニ被問付候通申上候ハヽ可宜と心得、不辨義を辨候樣ニ申上候と申口變候而は、治右衛門を嚴敷可尋儀ニ候處、不入處ニ入念候故、糺も永引、數多之及難義、加判之者共も別而致苦勞候、是等之趣を以、已來之義能心得候樣被仰出、且郡奉行之義は代官并鄕頭名主等ニ至迄、百姓へ之手當如何樣ニ候哉、自然下々致迷惑候儀有之哉、折々不怠小百姓已下ニ相尋、善惡を承置候事肝要ニ付、兼而此旨被仰付候處、此度治右衛門不作法之次第、穿鑿之上相顯候、數年之惡事、御藏入郡奉行諏訪十左衛門曾而不存罷在候事、扨不審ニ思召候旨被仰出、委細申渡候へハ鄕村之義、內々無油斷、就中治右衛門事は、先年張文も致候間、奉行共へ申斷承合候得共、此者之惡事少も申出候者無之候故、其通ニいたし置候、御意之趣承知仕候而は、實と承糺樣も可有之義、不調法ニ而無其義、行當致迷惑、兎角可申上樣無之由、御請申上之、

〔憲教類典 四ノ五 評定〕寛永十癸酉年八月十三日

公事裁許定 ○中略

一主人と家僕との公事、勿論主人次第たるへし、但主人非分有之ハ、隨理非可裁斷事、○中略

一家僕に目安上らるゝ輩之事、侍中江ハ松平大隅守、牧野內匠頭、加々爪民部少輔、堀式部少輔狀可添之、御代官も松平右衛門大夫、伊丹播磨守書狀添之可遣候、町人目安之裏に書付可遣事、

〔牧民金鑑 一〕古主を相手取候心得

明和七寅年十月八日

暇差出候家來、給金滯之義致出訴候ハ、古主を相手取候筋に付、武家之家來ハ勿論、百姓町人ニ而も、勤候內之給金滯之義、申立願出候ハヽ、奉行所其外何方に而も、取上不申積相心得、一座江も可申達旨、昨廿日、松平右近將監殿○武元被仰渡候、

右之通、一座江も演說相濟、

寅十一月廿一日

〔大猷院殿御實紀二十三〕寬永十年三月十五日、黑木書院に國持幷に譜代の衆をめして、去年松平右衛門佐忠之叛逆の事、其家司栗山大膳がうたへければ、忠之香火院に蟄居し、しきりに冤狀を訴ふ、よてしば〱糺問ありしに、大膳が訴し趣非據なるをもて、忠之を御ゆるしある旨御直に仰ふくめらる、大膳幷にその子大吉は、南部山城守重直にあづけらる、世に傳ふる所は、大膳この事うたへたるははじめ、忠之をめして御前にて、對決せしめ、御檢斷あるべしとありしを、忠之承り、大膳がうたふる所の虛實は、とまれかくまれ、忠之が事は、すでに三箇の國恩に浴し、骨肉の親に違り、御家號をさへたまはり候身分なり、大膳は我奴なり、主と奴と對決せん事、君臣の道に於て、古今その例あるべき道理とも存じ奉らず候、ましてや御家號をけがし候身にて、奴と是非をあらそはん事、公に對し恐れあることなり、たゞ葉に切腹を仰付られんに於ては、子細あるまじきにて候と申上ける、これを尤と聞召分られて、この後忠之は內々にめして、御みづからたづねさせたまひ、大膳をば老臣して鞫問ありしに、はたして大膳が申旨不分明なりしかば、忠之遂に罪をまぬかれたり、忠之この御尋にあつく感じければ、島原一揆の天草城責にも、その身先鋒になつて士卒を指揮し、苦戰して、無二無三に城のりまたりとぞ傳へたり、　十六日、西城酒井雅樂頭忠世がもとに、井伊掃部頭直孝、松平下總守忠明、及諸老臣會し、松平右衛門佐忠之、及その家司等をめし、忠之不敬の罪なきにあらずといへども、叛逆の事、更に無根の飛語たるをもてその罪をなだめ、本領をかへし下さる旨をつたふ、

〔大猷院殿御實紀四十六〕寬永十八年三月十五日、加藤式部少輔明成が家司堀主水といへるもの、主を恨むる事にて、四年以前亡命し、こゝかしこにかくれすみけるが、明成これを憤り、討手をさしむくべきよし聞えければ、主水たまりかねて、この程大目付井上筑後守政重がもとにいでゝ、一封の書をさゝぐ、よてけふ評定所にめして尋鞫ありて、主水はまづ溝口出雲守宣直に預らる、世に傳ふる所、明成は父に似ず、世のあざけりを蒙ることども多かりしかば、主水これを諫る事しば〱なりしより、遂に君臣の間こゝろよからず、其頃主水が從者、他の從者と爭論せし事あり、こは全く他の從者が非論なりしを、明成兼て主水を惡みければ、遂に主水が從者を非議たるよしに決斷せり、主水おのが從者無實の罪に陷る事をなげきうつたへければ、明成大に怒て、主水が職をうばふ、主水やすからぬことに思ひ、弟多賀井又八郎、眞鍋小兵衞と共に三人、宗徒の從者八人、妻子從類すべて三百餘人を引具し、寬永十六年四月十六日寅の一點に、奧州若松の城を

出て、倉塚川をわたり、往来の橋を焼すて、去りぬ、明成このよし聞て益いかり、討手をさしむけしかど、主水が従類従者ははや遁げのびて一人も討得ず、これより所々手分して尋求る事急なり、主水は鎌倉まで逃のぼり、かくれゐたりしかど、討手むかふよしを聞て、高野山におもむく、よて明成より高野に使たてゝ、すみやかに主水以下のものをからめ取て出すべきよしいはせけれども、山にはさるもの来らずさのみ答ければ、明成[illegible]いきどほり、この上はおのが所領にかへて、彼家人を追捕せんよしをうたへ、既に軍兵を高野山にむけんとす、主水たまりかね、紀伊亜相の封内に来りかくれしが、明成また亜相へも此由申て、討手をさしむけんとしければ、主水そこをも逃いで、江戸に参り、おのが罪なきよしを申ひらかんとてうたへ出しとぞ、紀年録の説によれば、主水このさき、明成遂て反逆の志あり、元和の役に、大坂の城中に内通せし事あるよし、封事もてうたへし[illegible]なのすまこさにや、二十一日、加藤式部少輔明成が臣堀主水、訴ふる所みな非據たるにより、兄弟三人ともに明成に賜はり、罪に行はしめらる、書に訴ふる所は、主水訴へし所、ことわりあるに似たれども、其身彼家の臣にして、はせめに兵を擧て國をさり、火を放ち、橋をやく、君臣の禮すでに失ひ、國家の大法をみだる、其罪かろからざれば、主の請所にまたがひ、三人を賜はる、明成大に悦び、直に主水兄弟三人ともに芝浦の別業にして誅殺したり、紀年録には、主水主の反心あるよしうたへたるに、こは公より拷問ありとも主の事はいかにもして申開くべき處なり、明成が反心の有無は、重て糺さるべし、先主水ならば主の申まゝに引わたし、主の心にまかせ誅戮せしめ、君臣の禮法を正さるべしとて、かくは行はせられしと記しぬ、さることありしにや、二十五日、黒木書院に出まし、加藤式部少輔明成を召て、汝が父左馬助嘉明は、神祖、台德院殿二世の間、忠勤少からず、汝に於ては、いまだ當代にさせる勤勞あるにもあらざれど、こたび家臣等が訴訟をも懇に尋鞫を加へられ、主水等不義の罪狀を聞召分られて、汝に賜る所なれば、今より後、藩政の後鑑ともなるべき所をはかり、それ〳〵の罪科に行ふべきむね面諭し給ふ、譜代大名、皆御前に伺候して、其面諭を聽問し奉る、

〔大猷院殿御實紀 五十三〕寛永廿年五月二日、この日、酒井讃岐守忠勝のもとへ、井伊掃部頭直孝、土井大炊頭利勝、堀田加賀守正盛、其外諸臣會集して、奥州會津城主加藤式部少輔明成が所領四拾貳萬石收公せられ、その子內藏助明友、石見の國安濃郡山田にて一萬石たまはり、父明成を預けらるゝ旨をつたふ、又明成弟民部大輔明利、さきに死せしが、其狀よからずとて、所領奥州二本松三萬石を收公せられ、其子彌三郎明勝に新に三千石たまふ、

〔新張紙〕主人筋江相掛候出入訴出候節取計之事

御相談書　榊原主計頭

一上州新井村權藏相手、同國下增田村八郎兵衞外壹人、理不盡出入、
右出入、拙者方江訴出候ニ付、訴狀一覽いたし候處、訴訟方權藏倅十兵衞を、相手八郎兵衞方江奉公爲致置候由、然ル處八郎兵衞儀、十兵衞を猥に打擲いたし、往々農業渡世難相成體之由に有之、尤主人筋之もの相手取候段ハ、去ル亥年、岩瀨加賀守御勘定奉行之節、同人方江訴出候、常州手賀村惣吉ゟ、同國玉造村駒三郎外壹人江相掛り候、不法出入之儀、訴訟人惣吉ハ、相手駒三郎親玄甫下人幸吉之兄に候處、右駒三郎と、幸吉傍輩下女りん馴合、幸吉江毒藥爲給、同人存命無覺束由之申立ニ而、弟之主人筋相手取候出訴に候處、主人を相手取候とも譯違ひ候趣意を以取上、駒三郎りんとも、手當を以呼出候例有之、此度之出入も、相手方ハ右例同樣に候處、例之方毒藥相用、存命無覺束由之申立に而、主人筋に候とも不容易儀、今般之相手八郎兵衞ハ、下人を打擲いたし候迄之儀ニ付、時宜に寄、主人之場合に而は、不埒とも難申、主人親之惡事訴出候時之捌、公儀江かゝり候重き品ハ可遂詮議、若訴人之所申僞於無之ハ、本人之御仕置相當より一等輕く可相伺之、訴人ハ本人より猶又輕く御仕置可相伺事、但右之外、私事訴出候とも不取上事、主人親非道之品有之而、難儀之由申之、宥免之事願出候はゝ、名主五人組井親類之もの呼出、宜取計候樣可申付との御定も有之候儀故、容易に難取上、併訴狀之趣に而ハ、八郎兵衞取計も如何に相聞、假令召仕に候とも、百姓之身分、旁猥に手荒之及仕末候段無相違候得バ、吟味之上、御咎附可申儀に而、一般に不取上候も如何に可有之候間、裏判ハ不差遣、差紙を以呼出、訴狀ハ爲取上、出訴之趣打合、拙者手限に而吟味いたし候上、裁許にも可及品候ハゝ、其節評定所江差出候樣、取計候方にも可有之哉、及御相談候、以上、

寅六月

攝紳訴訟

右文政元寅六月十三日、相談相決ス、

〔被仰出留〕九 覺〇中略

一公家門跡方領地の公事訴訟等、兩傳奏衆、決し難き由を以て、其方迄相達せらるゝにおゐては、宜有裁斷事、〇中略

正德四年十月廿八日

戸田山城守

松平紀伊守

久世大和守

阿部豐後守

井上河内守

土屋相模守

水野和泉守殿

訴武家

〔聞訟秘鑑〕一武家江掛り候出入之事

是ハ御府内在之共、都而百姓ゟ武家江掛り候出入ハ、御奉行所江目安差出候而も、直ニ御差紙ニハ不相成事と相聞、其江戸役人江被仰通候而、得と掛合、實ニ不相濟候ハヽ、追而可申出旨被仰渡、訴訟御返、歸村被仰付候類有之候、右體之出入、御奉行所江差出候ハヽ、其心得を以取計可然事、

一陣屋詰之砌、支配所ニハ、最寄之大名方、勝手金差滯、其役人江濟方願出候間、添狀致與候樣相願候類有之候、右體之貸金ハ、表向添狀等致遣候筋ニは不相聞候間、御奉行所江願出候樣申渡、無據次第にて文通致候ハヽ、無乾度掛合候方可然事、

〔評定所留役覺書〕武家江掛本公事之出訴

社寺直僧訴訟

文化元子年三月

一武州川崎宿庄三郎外六人相手、細川長門守家來青木小膳外六人、不法出入、

是者細川長門守留守居呼出、如此申立候間、可濟義ニ候ハヽ掛合可相濟、若難濟事ニ候ハヽ其段早速可申立旨申達、訴狀渡遣ス、追而難濟段申立ルニおゐてハ、其段一座江演說之上、本公事日雙方評定所江差出候積り、

〔御定書百箇條〕寺社方訴訟人取捌之事

一享保六年極 寺社訴訟人、可屆所江不斷て願出、添簡無之類ハ取上申間敷候、强て相願候はヽ、本寺觸頭江相尋、本寺觸頭にて可致吟味と申筋ハ、本寺觸頭江吟味可申付事、

一同 本寺觸頭を相手取候歟、又ハ本寺觸頭江願出候ても押置候に付、不得止事願出候類ハ、添簡無之候とも取上可致吟味事、

一同 寺社領之百姓、地頭非分之儀を申出候類は、地頭寺院、或ハ神主等呼出し樣子相尋、品に寄取上可致吟味事、

一同 寺院加り候出入、裁許申付候節ハ、觸頭亦ハ本寺呼出し爲承、裁許狀之奧印爲致可申事、

一寛保元年極 一宗法儀に拘り候公事訴訟之儀ハ、取上申間敷候、尤本寺觸頭にて咎申付候ても及難澁候歟、亦ハ他宗俗人入交り候出入ハ、取上可致吟味事、

〔舊記拾要集 一〕享保六年丑六月九日、御用覺帳書拔、

寺社奉行江

一寺社之訴訟人、可屆所江不斷して願出候類は、取上不申候、强而相願候時は、否之儀を本寺觸頭江相尋、本寺觸頭方ニて致吟味度と申筋は、觸頭江吟味申付候、又は其品ニ寄、本寺觸頭江對し存寄有之訴出候分は、直ニ奉行所にて取上致吟味候、

一本寺觸頭江相願候得共、押置候故、不得已奉行所江願出候類は、本寺觸頭添簡無之共、取上吟味仕候、本寺觸頭ニ誤有之候得ば、其品輕重に隨ひ咎申候、

一本寺觸頭之惡事訴出候歟、又は非分之申付等にて再應願候ても不叶時、奉行所江願出候節は、本寺觸頭江願之樣子相尋、取上吟味之上、理非裁許申付候、尤其支配人主人江申付候、且又寺社領之外、訴訟之儀申出候得ば、取上吟味仕、裁許申付候、地頭幷御代官非分之申付有之段訴出候儀、只今迄無御座候、此上御座候はゞ可申上候、

右之趣宜候間、向後此通可被相心得候、以上、

丑六月

右酒井修理殿ゟ丑六月九日寫來候由、

〔公事方見合書物〕一百姓ゟ寺社江相掛り候出入、寺社ゟ百姓江掛候出入、寺社ゟ寺社江掛り候出入、私共御代官所手限之分は、不及伺吟味取掛、其段御屆申上置、濟口裁許とも、落着之儀奉伺候樣可仕候、宗法ニ拘り候出入之儀は、雙方御代官所内にて百姓加り候共、又ハ地所ニ付候ても、宗法ニ拘り候出入は、吟味不取掛、其度々御奉行所江相伺取計可申哉、且又寺社宗法ニ不拘儀に候共、都而寺院社人ゟ願出候儀は、本寺觸頭之添簡無之分ハ、取上申間鋪哉に奉存候、

但御朱印地之寺社にても、前書同樣取計可申哉、

一（朱書）雙方右近將監元支配所内にて、百姓ゟ寺社江掛、寺社ゟ百姓江掛り、寺社ゟ寺社江掛り候出入は、たとへ御朱印地ニても、寺社ゟ願出候分は、本寺觸頭之添簡有之候得ば吟味仕、手限落着申渡、咎等付候筋は、御奉行所江相伺候旨、小三郎家來申聞候、

但寺法社法に拘り候出入にても、添簡有之候得ば、取上吟味いたし候旨申聞候、

書面寺法社法に不拘出入は、伺之通たるべく候、寺法社法に拘り候出入は、相伺差圖可被請

候、尤寺院、社人之願、本寺觸頭等之添簡無之候共、村役人之添書有之候はゝ、取上可被申品ニ寄、村役人を相手取候出入は、村役人之添簡も難相成間、右之分は添書無之候共、取上可被申候、但書御朱印地之寺社にても、本文之通相心得可被申、尤格別重き寺格社格等之者ハ、其時時伺之上、差圖請可被取計候、

〔科條類典上二〕寛保元酉年七月、町奉行所ゟ書拔來候例書之內、

㊄諸宗公事訴訟之儀ニ付申上候書付

書面之通、可申付之由被仰聞承知仕候、

酉十一月十二日　　　寺社奉行

諸宗本末論、或者錄役、座階、法系、住番、世牌等、其外宗門法義ニ掛り候公事訴訟者、其錄所觸頭本寺ニ而遂吟味可致裁斷儀ニ候處、近年ハ都而奉行所江差出候ニ付、自錄所觸頭本寺を輕く存、申付をも不相請、如何ニ御座候間、宗門法義ニ掛候事者、自今其錄所觸頭本寺にて裁斷仕、若申付を不相請候ハヽ咎申付、其上ニ而も及難澁候ものハ、奉行所江差出候樣ニ諸宗江申渡可然奉存候、依之奉伺候、右申渡之書付、別紙相認入御覽申候、

十一月

諸宗江申渡候書付

書面之通、可申渡之由被仰聞承知仕候、

酉十一月十二日

諸宗之寺院本末論、或錄役、座階、法系、住番、世牌等、其外宗門法義ニ掛り候公事訴訟ハ、其錄所觸頭、本寺等ニ而、遂一途吟味、依怙贔負無之可令裁斷事ニ候、申付を致違背不相請候ハヽ、咎メ可申付候、其上ニも及難澁候ものハ、奉行所江可差出候、吟味之上急度可申付候、尤他宗又ハ俗入

江掛リ候出入ハ、只今迄之通、添簡を以可差出候、

右之通、諸宗一統可相心得候、

〔德川禁令考後聚十法曹雜務〕天明二寅年二月

出訴添簡之儀ニ付觸書

是迄寺院之出訴者、本寺觸頭之添簡を以、奉行所江罷出、社人之出訴者、添簡無之罷出候得共、以來地頭有之寺院之出訴者、御代官領主地頭と本寺觸頭兩添簡を以罷出、社人之出訴者、御代官領主地頭之添簡ニ而可罷出旨、寺院社人江申觸置、御代官領主地頭ニ而も、其旨可相心得候、

右之趣、万石以上以下共、不洩樣可被相觸候、

二月

〔評定所張紙帳〕御代官所御預所、一支配寺社之出入、其支配ニ而不相濟時、奉行所江差出方區々ニ候間、左之通極置可申候、

一一支配ニ而、百姓より寺社江掛候出入者、月番之御勘定奉行ニ而請取、可致吟味事、

但他支配、并私領之引合有之候共、同斷、

一一支配ニ而、寺社より百姓江掛候出入者、寺社奉行江爲差出可申事、

但右同斷

朱書
寺社より掛候出入者、寺社奉行初判、關八州御料私領、關八州之外、御料より御府內江相掛候出入者、御勘定奉行初判之御定ニ候、

一寺法社法之出入者、寺社奉行、地方江附候出入者、御勘定奉行と心得候も有之候得共、出入之趣意ニハ不拘、左之通極置可申事、

朱書
一宗法義ニ拘リ候公事訴訟御定之內、及難儀候もの、又ハ他宗俗人入交リ候出入ハ、取上

可致吟味と有之、氏子、檀家之百姓致出訴候得ハ、法儀ニ拘リ候而も、御勘定奉行初判致し候、

右之趣、御代官御預所役人江觸候ニ者不及、奉行所ニ而極置、寺社奉行江差出訴訟人江も、先ツ月番之公事方御勘定奉行江爲伺、致差圖候積リ、

〔評定所格例〕一領内之出入寺社奉行ニ而取計之事

寛政元酉年二月、一領出入取扱之儀ニ付寺社奉行松平右京亮伺、

是迄一地頭之出入、私共方江訴出候節ハ、御定書ニも御座候通、地頭ニ而可取捌旨申達、其上ニ而不相濟旨、地頭より申聞候節者、頭支配江申立候樣相達、且又寺社より、百姓江掛リ候出入も、一通リ地頭江申達候上、不相濟候得者取上吟味仕來候、然處一領之寺社同士之出入、又ハ百姓より寺社江掛リ候出入之儀ハ、御定書ニも、右之ヶ條者無御座候間、二ヶ條之趣ニ而可取扱處、是迄地頭ニ而不相濟旨斷有之、差出候節者取上吟味仕候も有之、區々御座候間、以來者御定書二ヶ條之趣ニ而挨拶可仕と奉存候、是迄私共方仕來之樣ニ相成候事故、御定書掛リ山村信濃守、曲淵甲斐守も申談候上、此段申上置候、

二月

御差圖

申上候通相心得可申旨、松平越中守殿〇定信被仰聞、

〔諸家礼明問答〕寺院取扱

文化四卯年三月廿日、寺社奉行阿部主計頭樣江〇正精伺、同月廿一日、御呼出御付札、〇中略

一領内之寺院、檀越之者と爭論有之、旦那之もの共ゟ役邊江其譯訴出候を、又寺院ゟ本山觸所江申達、役邊不拘、本山觸所ニ而も我儘ニ致吟味可否申付候樣之儀も御座候、右ハ旦那家共ゟ役

邊ニ訴出候事ニ御座候得者、役邊ニ而致吟味可否申付候心得ニ御座候、又者本山觸所立合吟味之上、役邊ゟ裁許可仕候哉、

御付札

書面寺院ニ旦家之者出入等之筋有之訴出候節ハ、本山觸所等之者立合ニ不及、吟味之上、他之引合も無之候ハヽ、夫々裁許御申付不苦事ニ候、若本山觸所等ゟ御領分百姓共を呼出、令吟味候儀も有之候ハヽ、其譯早々被申聞候上、取計方可及御挨拶候、

（問訟秘鑑）一出家社人諸願之事

是ハ出家社人、其法ニ不拘願ハ、本寺觸頭等之添簡ニ不及、支配內之分ハ訴狀取上、公事方御奉行所江屆候上ニ而、吟味取掛、爲引合、其外何ぞ差別之儀有之バ、其趣を以差出相伺可然候、寺院之加候出入ニ而も、一支配之分ハ、御奉行所江持出候而も一通吟味可致旨被仰渡、多分支配江御下被成、却而手戻ニ相成候間、屆置一應及吟味、差支之伺を以伺之、上差出候方可然事、

一出家社人吟味中手當之事

是ハ手鎖申付候ハヽ、百姓町人之事ニ而、出家社人之類、不埒之筋有之、吟味ニ及候節、其品ニ寄、たとへ入牢ハ申付候共、手鎖ハ不申付法之由承及候事、

（問訴秘鑑）一寺院呼出し其外取計之事

是は百姓之差紙文言ハ、若於不參は可爲越度者也と認メ候事通例ニ付、寺院も同樣ニ認メ可然哉之段、其筋江掛合候處、御代官之寺院呼度し差紙は可爲越度と申文言ハ除キ、可罷出もの也と計認候方可然旨挨拶有之候事

一手代廻村先ニ而吟味引合之寺院呼出候節ハ致遲參候歟、又ハ不參之儀共申越候共、大概之事ハ、寺院丈其分ニいたし可然旨、乍去不參いたし候か、又ハ支配役人江對し、不法之致方於有之

ハ、假令御朱印地之寺院候共、其分ニ難成ニ付、右體之節ハ、其寺院江掛リ、彼此取合ニハ不及候
間、不埒之始末、御代官ゟ支配江申立、御奉行同士の掛合ニ成候様致シ可然候、都而出家社人等、
寺社奉行所江出候節ハ、様之上ニ被差置候定メニ而、御吟味被成候方ハ、寺院候迚も叮嚀之取
扱ハ無之、手軽ニ御取扱被成候趣ニ相聞候、然レ共、是ハ一體公儀之御吟味とは乍申、吟味致候
人之身分ニも可被寄事ニ付、手代之取扱ハ先叮嚀之方可然候、然レ共、公事出入ハ格別之事ニ
付、都而口上向、ゐんぎんに取扱候筋無之候間、其心得を以取計可然事、

一御領百姓を、支配江無断、他ゟ呼出候儀は、譬堂上方ニ而も不相成候事之由ニ候處、寺格宜敷寺
院抔ゟハ度々直呼出致候類有之候、右體之義、役所江訴出候ハヾ、不及罷出旨申聞、差留候段、御
奉行所江相屆候方可然候、先年奥州伊達郡五十澤村百姓を、羽州米澤林泉寺ゟ直呼出し有之
候旨、村方ゟ訴出候ニ付、差留候處、右林泉寺役者、領主役所江訴出、領主役人ゟ掛合有之候ニ付、
御領百姓江尋儀有之候ハヾ、其筋江申立候様可被仰渡候、支配頭ゟ之申渡無之内は、差遣候儀
難成旨及挨拶候、其後も彼是申趣候得共、不取敢候故、其通ニ而相濟候、〇中略

右之通、萬石以下共、不洩様可被相觸候、以上、

二月

〔義演准后日記〕慶長八年七月五日、佐渡國大行院(山伏、當山方也、)金襴地ケサ、去年許了、然處、理不盡ニ本山ノ多聞坊、(播州住、)彼坊へ打入、同宿搦捕、剩諸道具取散云々、此先急御案内申入由注進　十八日、佐渡國大行院ケサノ事ニ付、今日始而聖護院(〇興意法親王)へ表白、使者(宰相、宗喜、二人也、)遣候キ、金地ケサ不謂間、可有御計由御返答也、此上者、可得上意心中、文殊院ヨリ大行院事如何、無心元由申來了、大行院始而召寄、非時賜之、　九月廿八日、大行院袈裟事ニ付、先達連署仕進上候、今日披トシテ公家衆、入寺之由也、但延引了、　廿九日、一條殿、(并)兩傳奏、(廣橋大納言、勸修寺中納言、)入寺、　十月八日、山伏袈裟之儀、豐光寺將軍へ昨日

披露、當山本山、各別之由被仰出、属理運、外聞大慶此事候、當山御再興、只此儀候、聖護院不慮之企、却面被失面目候、多聞坊召出、可有御糺明之由、同被仰出了、則兩長老ヨリ聖門江書狀遣之云々、東條紀伊守入道井圓光寺同取合申云々、仍使札遣了、

〔評定所格例〕於評定所高野山學侶方行人方公事吟味之事

一元祿年中月日其文等不詳

一座掛

高野山學侶方行人方ゟ出入、御老中御出座有之、評席左之通、

〔折たく柴の記中〕七月〇寶永七年十日南都兩門跡爭論の議二冊を奉る、その議によられて、一乘院殿門下の院家等召問はしめられ、尊勝院喜心院また大乘院殿門下の院家をも召下されて、問はしめられし御事共ありしに、松林院普門院一乘院門下の者ども、答申す所其詞屈しぬ、其後兩門相和らぎ、一山無事なるべき所をもて、其議を奉るべき由仰下されし程に、一乘院殿の院家ふたりともに病ひし居候、門主の使等、內侍所、刑部、喜多坊、駿河、御暇を給て罷歸らむ事を望申ければ、九月廿五日に、兩門の耆宿等に仰下さるべきもの、草を奉る、兩門下の輩共、其仰を承ておの／＼罷歸りたりけり、

〇按ズルニ、一乘院大乘院訴訟ノ顚末ハ、釋敎部興福寺篇ニアリ、

〔折たく柴の記下〕此年〇正德四年の春、攝津國西宮の神職告訴ふることあり、是は去年四月、白川の伯の中將、〇雅冬王かの神主祝部等改補のことによれるなり、中將の雜掌等召決せらるゝに及びて、雜掌等貨賂の事によりて、みだりに神主祝部等が罪七條を申行ひ、其所帶を沒收し、非分非職の者ども、或は其職に補し、或は其裝飾をあたへし事ども、陳するに其詞なし、中將傳奏に付て、其沙汰皆是我心に出て、雜掌等が申行ふ所にあらざるよしを披陳有ければ、かの雜掌等が罪を容て追放せられ、それに組せし社人等、或は追放せられ、或は召籠られ、もとの神主祝部等、其職に還補せ

られ、白川家西宮の社執奏の事を停められ、中將の事は、公家の御沙汰に任せらるべきよし傳奏して仰られしかば、やがて召籠られしとぞ聞えし、十二月十二日に至りて、傳奏和泉守忠之朝臣につきて、西宮神主告訴の事により、て此年の夏、白川中將をば召籠られ畢ぬ、今は、はや其程も經つ、内侍所御神樂等の爲、召出されん事いかゞ有べきにやと申されしかば、子細あらじとぞ答へられけるが、此事詮房朝臣、某が議をとひて其定文の草ども奉らしめられたり、神主は吉井宮内、祇部等五人、白川家雜掌は白井吉忠、去年四月神主の、闕に補せられしは、濱庄大夫と云者にて同十月に死したりき、或は神人の神主等を讒せし者、或は兩人の社人さしなされし者ども、其罪の輕重によりて追放せられ、其職を奪はれしもの凡五人、

〔有章院殿御實紀九〕正德四年七月廿八日、三寶院門跡の所管、醍醐寺の院家、報恩院寛順、理性院堯觀、無量壽院全海門跡の指揮違犯するにより、うたへられしかば、さきにかの三僧をめして糺問せられ上裁ありけるが黑木書院にて、老臣等、寺社の奉行に仰を傳ふ、上裁の御旨をば、さらに奥右筆組頭本目權左衞門親良して讀きかしむ、その令は醍醐寺法流のこと、座主の所職たる故によりて、慶長元和の間、その宗の法制條目をもて、三寶院門室になし下されしことたび〳〵に及ぬ、しかれば當家祖宗の御旨を奉せられ、かの山古今の事例に據られ、門下諸寺院、嚴重に沙汰せらるべし、醍醐寺領の事、慶長以來、三寶院門室に寄附の御判重疊たるうへは、凡事の大小に限らず、門室のさたたるべき事もとよりなり、しかりといへども、元和以來、醍醐寺領のうちをわかち領する寺院に、御朱印なし下されし御沙汰に於ては門主より、その領家に仰下され、領家おの〳〵その仰をうけて領分に下知あるべし、門下諸寺院等の事、門室のさたに決せられがたき事あらば、慶長以來の例のごとく、京職に就て其事告らるべし、御朱印を帶し、寺院領の事に至りても、あるは門室のさたに決しがたく、あるは醍醐寺領の外、他領にかゝることは、門室より京職に達せられてのち、その領家よりうたへしめらるべしとなり、また院家にしめさるゝ一通は、醍醐寺座

主職のこと、満濟准后このかた、三寶院門室にをいて拜任の例たるにより、慶長元和の間、その宗の法制條目をもて、彼門室になし下されぬ、しかれば、朝章といひ、國制といひ、すでに重疊なるうへは、三院家等、よろしくその儀を存すべし、慶長以來、醍醐寺の院家、不律の僧、門室申さるゝ旨に就て、その法に行はれ、並に院家其門室に隨身儀例等、其事證すでに分明なる上は、三院家等、みだりに異同を論ずべからず、醍醐寺領のうち、三院家等領分沙汰の事、元和以來、御朱印の旨に准じて、領家の進止たるべき事もとよりなり、しかりといへども、慶長このかた山上山下の寺領すべて是を三寶院門室に寄附の御判ある上は、何事も門室の仰を請て、各其領分に下知すべしとなり、翌日森川出羽守俊胤〇若年寄が宅に同職相會して、門跡の使臣、並に三僧に、この旨を令せしめ、また奉行よりしめすには、醍醐寺座主院家、路次禮節の事下さるゝ旨ある所、院家等、各承伏しぬ、されば今より後、是等の儀軌にをいて、乖違の事あるべからず、但院家等、その官階職任のある所を論せずして、これらの禮節を存ずべき事は座主の重職を恭敬の故によれば、門主より院家等接待の儀にをいても、かの年臈官職の高下淺深によりて、その禮數よろしき所あるべし、醍醐寺開山の祖、贈號宣諭使登山の時、集會あたはざる院家等、私聞の次第あるに就て、いまにをいてそのあやまちを悔るの詞なり、すべて法會の場にのぞみて、門下の僧侶、違失の事あらば、其僧侶の過誤のみにあらず、しかしながら、これ門室のためしかるべからず、今より後、かゝる事あるべきときは、兼てよりその類例を按せられ、衆議を會せられて、よろしく擇びさだめらるべし、〇中略その餘京職奉行所より下知すべき事にをいては門室まで申行ひ門下の諸寺院うたへ申すべき事ある時は、まづその事をもて門室に申さずして、京職奉行所にうたへ、領家の百姓、まづその領家にうたへずして門室に申すの類、一切に越訴の例をもて裁斷あるべし、〇中略しかれば則山上山下を論せず、醍醐寺領の事、三寶院門室にをいてこれを統領せられ、御朱印を帶する寺院領にを

いては、其領家これを進止し、御判といひ、御朱印といひ、その儀ふたつながら相妨る事あるべからず、しかるに近世以來、その儀分明ならさるによりて、異同の論やむ事を得ず、いまよりのち、御朱印を帶する寺院領のことに就て、門主よりさたあるべき事あるに於ては、其領家に仰下され、領家仰の旨をうけて領地に下知すべし、もし其領地の事に就て、領家の進止に決しがたきことあるときは、そのことの子細をもて門室に申し、その沙汰をあふぐべし、あるは其事門室のさたに決せられがたく、あるは其事醍醐寺領の外、他領に相かゝるに於ては、門主より京職に達せられて後、領家より奉行所にうたへ申べし、御朱印を帶する寺院領の百姓訴訟の事等、まづその領家に申さずして、門室に申すにをいては、越訴の例をもて沙汰すべし、領家をの〳〵此旨をもて、その領地にさとすべし、これは門跡の申さるゝ旨によて、かの僧等召くだし、糺問のうへ各承服しぬ、忍止は覚行の貴しとする所、怙終は國典のゆるさゞる所、その旨を得べきよし上裁せらるるとなり、○又見ニ折たく柴の記一

〔德川禁令考後聚十法曹事務〕文化八未年十二月落着

兵庫頭掛松平寺社奉行、○勘定奉行、

下總國窪野谷村儀左衛門外貳人相手、同村天福寺外貳ヶ寺離末出入、

内田近江守領分、下總國香取郡窪野谷村儀左衛門外貳人、菩提寺末寺を、久世三之丞知行、同村天福寺、無ニ謂離末いたす段及ニ出訴、裏判を以呼出令ニ吟味ニ處、右者寺法を以取計儀ニ而、權中俗家之もの共可ニ差綺ニ筋ニ無之ニ付、今般出訴之趣、不ニ及ニ沙汰ニ段令ニ裁許、證文申付、板倉伊豫守、内田近江守、内田帶刀、堀甚五兵衛、久世三之丞、石河金之助、各家來江も令ニ聞之、目安返答書繼合裏判消ニ遣ス、

御相談書　松平兵庫頭

訴訟方

内田近江守領分内田帯刀知行下總國香取郡高野谷村
新義眞言宗天福寺檀中惣代百姓　儀左衛門

久世三之丞知行同村同百姓代　重右衛門

村役人惣代組頭　茂右衛門

相手方

板倉伊豫守領分同國万歳村
新義眞言宗地蔵院宥嘉代兼右天福寺　宥芳

堀越五兵衛知行同國匝瑳郡米倉村同宗西光寺　快焉

吟味ニ付呼出候
石河金之助知行御朱印地
同國香取郡須賀山村同宗西福院　長巖

右出入吟味いたし候處、天福寺之儀ハ、前々仕來ニ而、何事ニよらず、檀中并村役人共一同、相談之上取計候處、同寺殿堂大破ニおよび、修復之手當無之ニ付、右手當として冥加金百兩受取、同寺末之内西福院と離末いたし候旨、宥芳申聞難心得、天福寺者、檀林職ニも有之、末寺壹ヶ寺たりとも相減候而者歎ヶ敷、殊ニ殿堂修復等之儀ハ、檀中江示談次第、無差支様取計可申を、相手方一同馴合、多分之冥加金受取、西福院を離末いたし、末寺相減候段歎ヶ敷候間、歸末相成候様いたし度旨、訴訟方申之、相手方にてハ、天福寺之儀、元來貧地ニ而、殿堂修復之手當ニ差支、尤祠堂金之儀、檀中より貸附ニ相成居候得共、修復之節も差出不申、捨置候而者廢寺ニ相成候間、西福院を離末いたし、冥加金百兩受取、勿論同院を離末いたし候段ハ、敢而冥加金請取候而已之儀ニ者無之、同寺者、開基由緒も格別之儀ニ付、離末之儀觸頭江願出、役寺ニおゐても夫々糺之上申付候儀ニ而、右者

法中仕來を以取計候儀、檀中ニ候とも、俗家之もの共より差障申立候段却而難心得旨申之、吟味ニ付呼出候西福院長嚴儀も、天福寺、西福院を離末いたし、冥加金請取候次第、夫々法中仕來有之取計、冥加金等を請取候ニ泥み、猥ニ離末いたし候筋ニ者無之、觸頭彌勒寺ニおゐても、舊記等再應糺之上、取計候儀之段、宥芳同樣申之候、

右吟味いたし候趣、書面之通ニ候、右者專寺法筋ニ拘り候儀故、先達而寺社奉行衆江及懸合、其節御挨拶之通、離末之儀ハ、法中仕來を以、於役寺夫々糺之上申付候儀ニ付、檀中俗家之もの共、可差綺筋ニ無之旨、今般出訴之趣、不及沙汰段、裁許可致哉及御相談候、

未十二月〇中略

前書天福寺宥芳外貳人江被仰渡之趣、拙僧儀も罷出承知仕候、依之奧書印形差上申候、以上、

新義眞言宗觸頭　彌勒寺

〔政談四〕出家程公事ヲ好ム物ハナシ、第一死罪ニ逢氣遣無、妻子ノ足手マトヒナシ、元來住所ヲ定メヌモノナレバ追放ヲ悲シマズ、法問談議ヲ仕ナレテ理强ク、我慢成者也、偖出家ノ公事ヲ能捌テモ、國家ノ治メノ益ニナラズ、惡敷捌テモ害ニモナラズ、詮モ無コト多シ、本末ノ公事、曹洞宗ニ多キコト也、觀請開山ト云フコト有ヨリ起ルコト也、觀請開山ト云コトハ、元來公事ヲ巧ミテ仕置タルコト成レバ僞リ也、宗派ノ祖師御影ヲ其寺ニ居置クコトハ可有、住持モセヌ人ヲ第一世ニ仕ルコト有間敷コト也、第一停止可有コト也、臨濟派ハ、宗派ヲ堅ク守リ、同宗派ノ寺ヨリ外ヘ直ルコトナラズ、何レノ派ヨリモ本寺ヘ輪番仕ル故、寺ノ高下ニ不構、僧臈次第ナル故ニ公事少シ、曹洞宗ハ伽藍相續ト云コトヲ仕テ、宗ハ亂レ居ル故、寺寺格ヲ守リ、僧臈ニ構ハズ本寺ヘモ直ル、是ニヨリテ寺法ノ害ニ成也、總ジテ寺ノ爭ヒ金銀ヲ貯ヘノ事ハ、佛法ニ背クコト成レバ、公事ニハ勝タリトモ、綸旨公帖ヲ專フテ平僧ト仕ル事也、其負タル出家ハ、徒刑タルベシ、斯テハ自ラ

出家ノ公事少タ成ルベシ、

〔評定所留書 三〕一寺社修驗等之訴狀糺方之事

寺院社人修驗等町人百姓ゟ買掛帳面證文、其外借金銀證文等讓請、及出訴候節、買掛帳面證文讓請致出訴候分は不取上、借金銀并質地作德之證文讓請候は、始末吟味之上可取上事、

〔諸例類纂 五〕寬政二戌年八月五日、評定所一座より達書并答書

但右達書、根岸肥前守より差越候間、答右同人江差遣候、〇中略

一盲僧と盲人ハ別段之ものニ而、盲僧ハ目之見へ候者ニ而、山伏之類なる者ニ御座候よし、尤京地ニ而ハ無之、他國ニも稀なる者ニ御座候處、九州邊ニハ御座候よし、

一盲僧、職屋敷之支配ニ而、官位之儀ハ、久我殿御取扱御座候よし、

但職屋敷と申候ハ、檢校之官ニ而、十老と唱候而、頭取十人御座候由、其內より經昇ニ而、右十老之上ニ、壹人職と申候而、總司御座候、此役を職と唱、彌張官ハ檢校ニ御座候、

一盲僧之儀ハ、士分以上、青蓮院宮支配、亦以下之盲人同樣、右職屋敷之支配ニ而、官位之取扱等も仕候よし、

但右之通、盲僧士分以下之分ハ、職屋敷ニ而支配仕候由ニ御座候得ハ、何分目ハ見へ候而も、盲僧も盲人ニ類し候ものと相見へ候、

一公事之一件ハ、安永寬政之頃、右盲僧之儀ハ、士分以上以下共ニ、青蓮院宮ニ而、支配有之度旨御望立御座候ニ付、職屋敷と公事仕來候處、其後前條之通、御取窮御座候よし、

以上

右之通申出候間、左樣御承知可被成候、尤右之趣ハ、今晩罷越返答仕候付、不取敢申上候處得と考量仕見候得バ、右盲僧ハ山伏之類之由ニ御座候處、左樣之者を、職屋敷ニ而、士分以下之支配

仕候段ハ、不得其意筋ニ奉存候、何共不審之儀奉存候間、右ハ久我家へ相尋候由ニ御座候間、尚取紮相變候事も御座候はゝ、後便之砌、又々可申上候事、

一盲僧一件之儀、先便申上置候處、其後職屋敷之方も承候由之處、下地申上置候通、何も相變候儀も無御座候由、尤職方ニ而支配致し候盲僧ハ、當時無御座候、至而人數少きもの、由ニ相聞候、扨盲僧ハ山伏之樣成者ニ而、荒神祓いたし候者之由申上置候處、盲人も本來琵琶を彈き、荒神祓致候者之由、相咄候旨申聞候、仍初而承知仕候處、當時ハ左樣之業向を致候者無御座候得共、往古ハ右樣之事ニ而、渡世を送り候事も御座候哉、世の中の變代ニより、種々委之相替候ものニ御座候、

〔聞訟秘鑑〕穢多非人取扱之事

是ハ穢多非人同士之出入ニ而、他領罷在候、頭分之者へ尋儀有之呼出候節ハ、其所支配領主地頭役人江掛合候上、呼出候方ニ候、且穢多非人致欠落、尋申付候節も、其者組井最寄ニ罷在候、小頭之分呼出申付、村役人江ハ不申付筋之由、是ハ不尋出時ハ、輕も御咎付候儀、穢多非人之事ニ、百姓江御咎付候も如何ニ付、可成丈、其類之者へ尋申付候方可然事、

但最寄ニ頭分之者無之時ハ、外ニ致方も無之ニ付、其村役人共江申付候方可然事、

一百姓と穢多非人と、同樣ニ不有樣書付等申付候へ共、一紙ニ不認、別帳ニ取候方宜樣、御奉行所ニ而も、右之趣御取扱被成候由之事、

一淺草彈左衞門ハ、關八州之頭ニ而、餘國ハ夫々ニ頭有之、其所々ゟ頭無之穢多非人も有之由、然處御奉行所ニ而ハ、頭無之諸國之穢多非人之儀ニ付、頭取可被仰付儀ハ支配ニハ無之候得共、彈左衞門ニ被仰付由ニ付、是等ハ御料役所ニ而ハ不用事歟ニ候得共、爲心得爰ニ記置候事、

〔牧民金鑑 一〕穢多ゟ穢多江相掛候出入

一穢多ゟ穢多非人江掛候出入、雙方評定所江呼出、返答書爲致候事、

是ハ町奉行衆ニ而、取扱之趣之由、甲斐守殿被仰聞候事、〇年月闕

〔問訟秘鑑〕一穢多非人之類出入ニ付呼出候事

是ハ穢多非人出入等ニ而呼出候節、直ニ差紙不遣、其所之村役人江召連可罷出旨申遣、白洲江入候節も、百姓を莚之上江指置候ハヽ、砂利之上トカ、又ハ跡江引下ケ置候トカ、差別いたし候迄ニ而、其外取計ハ替事無之候事、

〔目安秘書坤〕穢多ゟ村役人并穢多江掛ル出訴之例

御演說書　曲淵甲斐守

一武州源作村穢多平右衛門外一人ゟ、同村名主組頭并穢多江相掛候屋敷下畑被取放候出入、是者平右衛門外一人訴出候間、相手之もの呼出、宅ニおゐて吟味いたし、落着之節、評定所江差出裁許可致候、依之及御演說候、以上、

四月

〔目安秘書坤〕享和元子年十月廿五日一座評決

百姓と穢多相手取り候目安裏書等之事

御相談書　松平兵庫頭

一武州中奈良村久兵衛相手、同村紋吉外十人狼藉出入、

右出入、拙者方江訴出候處、百姓と穢多を一同相手取候儀ニ付、呼出方之儀、先例相糺候處、去ル未年、菅沼越前守御勘定奉行勤役中、初判差出候評定公事之內、上州玉村宿之内金次郎ゟ、同國新井村太郎兵衛并濱川村穢多九十外三人江相懸候出入有之、右出入者、太郎兵衛一人裏書を以呼出、穢多共者差紙ニ而呼出候上、返答書申付ルと相見、一通り之裏書文段ニ而宛所も同人

人并同人五人組名主組頭と而已認有之候得共、穢多共を相手取候出入者、爲致返答書、評定所ニ召連可爲致對決と裏書いたし、村役人江宛、裏書差遣候筈、安永九子年、一座評議之上極メ有之、百姓と一同相手取候とも、呼出方ニ差別者無之筋ニ付、以來者百姓と穢多を一同相手取候出入者、左之通裏書を以、穢多之分者、其村役人江宛、一同呼出、對決爲致候方ニ可有之哉、及御相談候、以上、

如斯目安差上候間、致返答書、來月日、評定所江罷出可對決、若於不參者可爲曲事もの也、

右之通、文化三寅年六月二日、一座評決、

〔目安秘書坤〕在方之穢多ニ而彈左衞門ゟ願出、町奉行初判、

文化十二亥還狀
一上總國土氣町穢多、松下肥前守知行、同村百姓共ニ打擲ニ逢候由、淺草彈左衞門願出、町奉行土屋越前守初判ニ而出、亥八月二日裁許、

〔牧民金鑑一〕穢多ゟ村役人并穢多江掛候出訴之例

御演説書　　曲淵甲斐守〇勘定奉行

一武州源作村穢多平右衞門外壹人ゟ同村名主組頭并穢多江相掛候屋敷下畑被取放候出入、是ハ平右衞門外十三人訴出候間、相手之者呼出、於宅吟味いたし、落着之節、評定所江差出裁許可致候、依之及御演説候、以上、

四月

穢多ゟ非人江掛候出入、御料私領一給ツヽニ付、寺社奉行江差出、

是ハ關外初判之部江入

訴訟人穢多ニ而一座連印之差紙難渡

長田喜左衞門知行相州鎌倉郡瀬谷村長吏小頭吉左衞門組下
訴訟人　八郎右衞門

一質地ニ植置候桑并麥理不盡ニ刈取候出入

眞田清左衛門知行岡村百姓
相手 甚藏

右出入訴狀江穢多頭彈左衛門致奥印町奉行根岸肥前守方江願出候右ハ評定所ニ而訴狀爲上一座連印之差紙相渡相手方呼出候上返答爲致公事合ニ差出候先例ニ有之候處穢多共江一座より之差紙相渡候ハ先例ニ候共相當致間敷義ニ付手限ニ而地頭家來江申達呼出致吟味裁許之義ハ評定所ニおゐて申渡可然筋ニ付以來共右之通取計候積今日一座評決

寛政十二申年七月廿一日

〔御仕置例類集二ノ四〕文化十酉年牧野備前守殿〇寺社取扱振可申上旨御渡

一武州若兒玉村長吏武助名前箱訴狀取扱方之儀ニ付評議

書面武助名前之箱訴狀燒捨之儀享和二戌年八月廿日被成御渡候書七手下非人平八名前之箱訴狀燒捨之振合ニ取計可申旨被仰聞承知仕候

酉十月十日　評定所一座

當月十日取扱方評議いたし可申上旨被仰聞御渡被成候武州若兒玉村長吏武助名前之箱訴狀一覧仕候處若兒玉村外六ヶ村ハ長吏共組合有之十ヶ年以前迄ハ小頭役有之候得共當時ハ小頭無之行事喜八小組頭七平と申もの取計武助願之筋難相立樣取計候由ニ而喜八七平并彈助と申ものを相手取候書面ニ有之一體願之趣意何か難相分候得共何れ穢多仲間もの之爭論ニ有之穢多彈左衛門方ニ而吟味可致筋ニ候處同人方江願出候得共不取上趣ニ付町奉行所江彈左衛門をも呼出相糺候處度々願出候段無相違候得共組合内之添書無之駈込訴ニ付定例之通取上不申由ニ御座候彈左衛門方ニ而取上不申候はゝ其譯申斷町奉行所江申出候得ハ其始末ニ寄彈左衛門江引渡吟味をも致候事有之候處無其儀御定書ニ有之候直訴可致ヶ條ニも無

家督訴訟

之上ハ、何レニも無取上願筋故、燒捨ニ可相成儀ニ御座候、然ル處、穢多非人之儀ハ、咎等之儀も、彈左衞門江申渡、申付候事ニ候間、一座江御渡之上、三奉行立合、燒捨申渡候義も相當仕間敷、彈左衞門江相渡、爲取計候方ニも可有之哉、尤非人箱訴いたし候節、定例之通、燒捨申付候先例有之、且享保十巳年御觸書も、御家人之內、評定所箱江書付入候もの有之候、右箱之儀ハ、町人百姓、訴之ため出シ有之段之御文言ニ而、穢多非人之義、訴狀入間敷と申趣意も無御座、殊前書之通、先例も御座候間、御附札を以、此度之訴狀も燒捨御下ゲ可被成候哉、併穢多非人之箱訴ヲ平人之通取計候も如何ニ付、彈左衞門方ニ而、武助行衞相糺、願之筋有之バ、彈左衞門方ニ而爲相糺、訴狀入候段申立候はヽ、重而訴狀入間敷旨爲申渡、訴狀ハ評定所腰懸崩ニ而、爲燒捨可然哉ニ奉存候、

酉七月

下ゲ札

本文武助義、欠落いたし、當時彈左衞門方ニ而尋申付置候ものニ御座候之段、彈左衞門申立候、

〔御定書百箇條〕御料一地頭、地頭違出入幷跡式出入取捌之事、

一（寛保二年極）跡式亦ハ養子等之出入ハ、他領懸り合訴出候とも、先方之地頭江可相願旨申聞、取上申間敷候、

若地頭之裁許不審之事も候ハヽ、地頭方江承屆候上、猶落着不致候ハヽ、可相伺候事、

一（同三年極追加）加判人有之儘成讓狀、幷加判人無之候とも、當人自筆にて印形無相違書面、怪敷儀も無之におゐてハ、讓狀之通、跡式可申付、尤格別筋違に候ハヽ、吟味之上、筋目之もの江可申付事、

〔聞訴秘鑑〕一家督出入之事

是ハ外出入ト違、御料私領共其株ニ付、地頭ニ而吟味詰、裁許申付候筋ニ付、御料ニ而可取計筋之出入、私領ゟ添狀ニ而申來候ハヽ、吟味伺之上裁許可申渡筋ニ候、私領之株ニ付候出入、不案

內ニ付、御料ニ而吟味いたし呉候樣賴來候共、不取敢事ニ候、御料之百姓を私領ニ而吟味いたし候は、家督出入ニ限り候ヘバ、私領ニ而裁許致候而も不苦由ニ候ヘ共、多分ハ不相濟者ニ付、差出之義ハ、外出入と違、訴訟方相手方之無差別、其株ニ付候方ゟ、其筋江致進達候筋合に候由に付、右之心得を以可取計候事、

〔享保令與永鑑四十四〕元祿十五午年閏八月〇中略

一跡式之出入訴出候節、以惡心僞之筋ニ候ハヾ、品ニより跡式相續不申付、家屋敷家財等ハ取上ゲ可被申候事、

〔目安秘書地〕家督出入之部

跡式又は養子等之出入は、他領懸合訴出候とも、先方之地頭江可願旨申聞、取上申間敷候、若地頭裁許不審之事も候ハヾ、可相伺旨御定書ニ有之、

一其跡式等之家筋町方ニ候ハヾ、町奉行手限ニ而可致吟味候、

一御料所之もの家筋ニ候ハヾ、其場所支配之御代官江可願出旨可申渡候、

但御代官吟味ニ而、御勘定奉行手限ニ而可致吟味候、

一寺社領之もの家筋ニ候ハヾ、寺社奉行手限ニ而、地頭之寺社存寄をも承り可致吟味候、

但京大坂支配八ヶ國ニ而も、町方と寺社領之もの家筋ニ候ハヾ、彼地町奉行江可願旨申渡、御料私領村方之もの家筋ニ候ハヾ、其御代官、或ハ領主地頭江可願出旨可申渡候、

右之通取計、或ハ領主地頭抔ニ而致裁許候後及出訴、地頭之取計不審之儀有之候ハヾ、其領主地頭江懸合承屆、難決候ハヾ、伺之上初判可差出候、

右之通評議相決候事

演說（家督出入、町奉行江引渡候、）　根岸肥前守

一野州栃木町四郎兵衛、相手淺草御藏前片町万平外一人家督出入、
是は淺草平右衛門町吉五郎店庄五郎方江万平悴文右衛門を養子ニいたし候處、離縁いたし度旨、庄五郎伯父之續を以、右四郎兵衛訴狀差出候得共、町方之もの家督出入ニ候間、其御役所江可願筋之旨申聞、願書下ゲ遣し申候、

右之趣を以、請證文取之、月番町奉行江演説、

月番町奉行　　出淵甲斐守

　　——御代官所——何村　誰
　　——何町——誰店　誰

一家督出入

右出入、町方江掛候、家督之儀申立候間、其御役所江可願旨申渡候、以上、

月

〔板倉政要　一〕從書○中略

一寺社平人町人百姓、跡式出入之事、法中之沙汰、聊雖爲無案内、先大略者宜任師之仕置、讓狀縱閣子師兄、對師弟、遺跡雖讓之、師之讓狀之面者雖別計、老師頓死、無常之煩ニテ於無讓狀者、其寺僧中之沙汰、且者於無緣所は、旦那中ノ以相談可定、至其時可相極也、社家平人町人百姓等之儀モ、大概如此、縱雖爲嫡子、無父之免、又不孝者之由ニテ、次男末子江成共於讓與者、宜任讓狀之旨、更ニ閣現在親之讓狀、爭デカ公義之沙汰可有之哉、不及是非歟、若又親頓死歟、或ハ無言之煩ニテ相果歟、於他國不慮ニ相果候者、讓狀無之事モ可在之、於如斯者、先嫡子可相継、但可任母之意、右爲繼母者、一門親類、隣家之者、談合ヲ以テ遺跡可相定、雖爲百姓地頭代官之者、不慮ニ相替義候時者、遺跡之取沙汰者、地頭代官モ難義成事歟、此上不相濟者、公義之可及沙汰事、

一無其子女人等夫死別之時は、縱雖爲壯年、於貞婦之儀者無異義、其家可令居住、死入後家、雙方

之親類、其町人隣家之者共以致談合可然、後夫相定家屋鋪無斷絶樣ニ令談合事、肝要也、併後夫之儀、可任後家之意、然者彼女令改嫁者、其屋鋪家并死人財寶雜具者、後家構中間鋪候歟、但親類以談合、一門之内可然人、彼家人之相續、右之財寶雜具、無殘後主之者ニ可相渡歟、但可依時宜也、

〔京都御役所向大概覺書四〕論所大檢使被遣候節、人馬御朱印并御扶持方之事、

御朱印　附郷村爲請取被遣候節、御朱印御文言、

人足貳人、馬五疋、從京都江州滋賀郡高嶋郡迄、上下可出之、是者彼地論所爲檢使平岡孫市、罷越ニ付被下之、此内壹人壹疋ハ召連候繪師江渡候者也、

寶永八年卯四月十三日　　右宿中〇中略

覺

今度論所爲檢使平岡孫市、松波五郎右衛門被遣之候間、人馬入用程、右兩人ゟ指圖次第出之、其外馳走用意仕間敷候、道橋掃除等、是又可爲無用候、若通路不自由成所は、依指圖相繕可申候、旅宿之儀、此書付之通順々相達、觸留ゟ檢使衆江可申渡者也、

卯四月　　攝津印

京
大津
衣川
和邇
木戸
大物　論所見分中逗留
小松

許戸（論所見分中逗留）　右宿中

覺

一拾八人扶持　（高六百石　酒井下總守組）松波五郎右衛門

一拾人扶持　（御切米貳百俵　御代官）平岡孫市

右貳人、今度江州之内論所爲檢使被遣候付而、道中上下彼地逗留中、書面五割增之積御扶持方被下候、但五郎右衛門儀、二條在番交代以後、在京中は、右之通被下候條、面々手形ニ在京之町奉行以裏判可被相渡候、以上、

寶永八卯三月廿六日　河内印

加賀印

但馬印

二條御藏衆

〔公裁秘錄〕論所吟味、評議等入念可申旨之事

一論所裁許之伺書付差出候節、不及其儀事に而茂、品を付候趣に付、御不審之上、無用之儀に相極被除候事共、近來間々有之由、先酉廣村大坪村、野論出入之儀ニ付、御尋ニ付例書付出候節、相應之近例在之處、初に書出候は、十七八年已前之例にて候、總而近例之蒙吟味、相應之者於無之は、遠例を可差出候所、吟味之仕方未熟、其上評議之次第も嚴密には不被思召候、向後急度入念可申旨被仰出候、

（享保十八丑九月御書付）

〔天明集成絲綸錄四十九〕明和元申年六月

三奉行江

論所之事、國境郡境にても雙方立合、繪圖ハ御國繪圖大概相違於無之は、不及檢使裁許可有之候、入組不申儀ニ猥檢使差遣申間敷事と御定書に有之候、田畑山林出入ニ付、地改差遣候儀も、右ニ准可申儀ニ候處、近年地改遣候儀、別而多有之樣ニ相聞候、尤繪圖書付ニて難相分ゆへ、無據地改差遣候事には可有之候得共、格別之譯も無之、無證據等之儀ニては、如何樣之裁許請候共、雙方共申分無之趣申聞候類も有之候、右體之儀などには取計方次第にて、地改ニも不及、相濟候品も可有之候、田畑山林出入之儀は、迚も地改不差遣候ては不相分事之樣ニ相聞候訴訟ニ出候節、委相尋、繪圖等申付相糺候は、相分候品も有之、其節は願出候者、自から願下ケ致候筋も可有之候、公事合ニ相成候節は、訴訟方糺置候上、相手方打合相糺候はゝ、強而申爭も致間敷候、斷を以申出候類は、猶以申募候儀も相成間敷候、田畑山林之出入と申候得ば、一通之吟味のみにて、兎角地改差遣候樣ニ成行候ては、如何に候間、右之趣を以て取計候はゝ、地改不差遣相濟候儀も可有之候、

但地所境之事にて及口論、理不盡之働いたし候旨訴出候節、地所境之儀ゟ事起候迚地改遣、其上にて口論等之儀、吟味有之候ては如何ニ候、先口論理不盡之吟味相詰、夫々之咎申付、追而地所境之儀は、別段ニ願出候樣にいたし候はゝ、無益に日數相懸り候儀も有之間鋪候、勿論願出候節は、是又本文之趣を以取計可然候、

右之通にて、差支候儀も在之間鋪候間、猶又致勘辨被取計候樣可被致候、

六月

〔公事訴訟取捌〕堤井堰用水論

一私領にて新田新堤取立候事、雙方地頭相對之上之儀ニ付、障り無之樣ニ可申合旨申談、願不取上、子細有之難濟儀は格別、

一用水懸引井路之儀、川中ニ井堰を立、水を引分候處、堰之仕方ニより川下の井水不足に旨不構

手前勝手宜樣ニのみ仕候故及爭論、或は兩類ニ井口有之場所、片類井口附替候時、雙方不申合、一方之任自由仕替候故、及出訴候之類有之候、右體之儀、雙方致對談、普請仕候節は、立會無障樣ニ可致、若滯儀有之歟、又は不法之事有之ば、其節ゟ十二ヶ月を限り於訴之は裁許有之、右期月過、於訴出は取上無之、

一御料私領組合普請、私領之分計、自普請於願は御免、

一當時用水雖不引之、古來ゟ之組合離候事禁之、

一往還橋普請組合、新規ニ申付例有之、

一用水人足諸式組合掛高ニ割合之、

一用水は田反別多少に應じ可爲割、水門之寸尺を定、

一壹領之時、水代雖不出之、於他領ニ分ルは新規ニ出之、

一用水論は容易ニ不取上之、雙方之役人立會、無滯樣ニ爲濟之、但十二ヶ月を過、於訴出は不及沙汰、

一新堤新田、雙方役人立會、於無障は爲取上之、

一畑成田用水ニ於障は禁之、

一堤重置於障有之は、禁之、

一用水引來ル證據障雖無之、溜井廻りに其村之田地取廻し有之地內地元たる上は、田高に應じ新規にも用水引之、

(公事訴訟取捌)質田畠論

一拾ヶ年季を越候、永年季之質地、幷名主加判無之勿論、名主置候質地は、相名主組頭等之役人、加判無之は無取上、是は名主加判無之、百姓相對ニ而倍金或ハ永代賣頼納賣等ニ付候、不法之質

地取引致候ニ付前々ゟ停止之、

一享保元申年迄年季掛り候質地出入は、取上有之候へ共、享保元申年ゟ元文二巳年迄、年數貳拾ヶ年餘相立、手入等致候得共、年數經候而は、質地取候者及迷惑、其上前々ゟ、右之類拾ヶ年以前之分、取上無之ニ付、元文二巳年二月ゟ、年季明ヶ拾ヶ年過訴出候質地金子、有合次第可請返旨、證文ニ書入候質地ハ、質入之年ゟ拾ヶ年過訴出は無取上、右兩樣拾ヶ年之內は、裁許有之、拾ヶ年過候分は無取上、

一知行田地質地ニ入させ、地頭用金爲借候事停止之、

一質地借金手形之分は、無取上之、

一質地小作滯日限りニても不相濟候得ば、小作人身代限り、諸道具不殘相渡し、田畑ハ、小作金之多少ニ應じ年數を限り、金主方江爲渡、年數過、小作人江爲返之、但小作人所持之田畑質地ニ入置候はゞ、田畑不持と同前ニ、諸道具は不殘爲渡、家屋敷は不可渡、

一質地借金は日限り

一金五兩 米五石 以下　三十日限り

一金五兩ゟ拾兩迄 米五石ゟ拾石迄　六十日限り

一金拾兩ゟ五拾兩迄 米拾石ゟ五拾石迄　百日限り

一金五拾兩ゟ百兩迄 米五拾石ゟ百石迄　貳百五十日限り

一金百兩ゟ二百兩迄 米百石ゟ二百石迄　十ヶ月限り

一金二百兩 米二百石 以上　十三ヶ月限り

一流地之直、小作之滯は、棄捐ニ申付べし、但別小作滯、如通例日限り可申付、

一享保十四年酉年已來、質地證文不宜借金ニ准じ候分は、別小作滯も借金ニ准じ、小作人江濟方

申付之、

一名田小作は、證文又は張面ニ印形無之は地主不念ニ付不取上、

一名主加印又は名所無之證文は無取上、質地證主名主之時は、組頭加判無之は無取上、但酉年巳来は、借金ニ准じ、本證文無取上分は、小作滯も無取上、

一水帳ニ相違之質地證文は不取用、借金ニ准ず、

一年々賦證文ニても、享保年中之年延添證文有之ニおゐては、定式之質地濟方申付ル、

一質入地或は他之小作地之稻等、理不盡ニ刈取、又は作付於致手入は戸〆或は過料、

一及出入ニ、肩書於書入は手鎖、

一名主證文等作存、於不差留は咎之、

一無證據不埒之證文を以於及出入は、地面公儀江取上之、

一宛所無之證文は不取用、年號無之も同斷、

一年貢未進於有之者、田畠質地ニ致どいへ共取上之、質拂代金を以地頭方江年貢未進皆濟殘金於有之は、金主江割付之、

一質地年季之内不請返候はゞ、可為流地候段證文ニ有之質地は、證文之通申付、但期月ニ至り、前かどニ訴出候はゞ為請返之、

一御朱印地田畑質地ニ取候事停止之、

一質地年季之内は、年貢諸役雙方相對之上極置候通為勤之、流地ニなり候節は、本百姓之並ニ勤之通例、

一質地年季之内請戻候儀、地主訴出候共、相對は格別、年季之内は無取上、

一質地證文ニ小作之儀書加へ有之候はゞ、書入借金ニ准じ候得共、一紙ニ認候迄之儀ニて不埒

無之間、元文三午年ゟ質地ニ相定裁許有之、

一證文ニ年季明不請返候はゝ永金主可爲支配と文言有之候はゝ、流地可致と申文言同意ニ付、可爲流地、

一質地證文、定法之文言ニ候はゝ、小作證文は、殘地等之不宜證文ニても、元金計裁許、小作取上候へば、本證文に殘地等之義無之候得共、小作證文ニ反歩之内、何程直小作ニ致し、此作德を以て、惣反歩之年貢諸役可勤と有之候はゝ、金主手作之分は、金主作德ニ成候ニ付、元文三午年ゟ右之類元金茂無取上、尤品々ゟ咎過料有之、

一證文ニ年貢諸役之分何程と員數を極メ、金子可差出由有之候は、縱年貢諸役之分は不足ニて、地主返納有之由申出候共、相對之儀ニ付、右證文を用ひ裁許、尤流地以後は、百姓并年貢諸役金主爲納之、

〔公裁秘錄〕質地出入一座申合覺○中略

一評定所一座、其外重キ御役人知行所出入之儀、窺候上裁許申付候得共、質地出入は、裁許之筋、兼而相極有之候事に候間、右之衆中知行百姓等に而も、伺に不及可致裁許事、

〔公裁秘錄〕元文元辰年九月

一享保十四酉年、質地證文名主加判名所等無之質地に難立分は、書入准じ候筈ニ候間、質地證文年季掛候共、借金ニ准候上は、年無構元利共、三十日切、濟方可申付候、但小作滯之儀は、高利に當候は、一割半之利足直シ可申付候事、

一質地證文に、年季明不請戻候は、可致流地由之文言在之分、年季明早速訴出候共、流地之旨申付、請戻候儀申間敷候、

但期月に至、前廉に訴出候は、取上可申候、

一右流地證文之直小作滯訴出候節、地面金主へ流れ地に爲相渡、小作滯棄捐可申付候、

但別小作滯は、加通例日限可申付候

一質地證文名前は名主加判等無之候而も、享保十四酉年以來之分は、借金准元金、小作共に三十日切に申付候間、別小作滯も是又借金に准、小作人に濟方可申付候、

但高利に當候はゞ、直小作、別小作共、一割半之利足に直、濟方可申付候、

一名田(ナダン)小作は、無判之帳面に記在之候而も、只今迄濟方申付候得共、證文又は帳面に印形無之は、地主不念に候間、向後取上申間敷候、

右之通評定、一座評議之上相極、

〔德川禁令考後聚十四 刑律條例〕弘化二巳年七月

質地小作之儀、借貸相對濟之御觸前後ニ依而取計方相談書、

質地名所、并位反別無之或ハ名主加印無之類之證文を以、及出訴候節、去々卯年、借貸相對濟(卷十五借金銀取捌類例第一項參觀)、不被仰出以前ハ、申論候上、書入ニ准し、金公事差日之初判差違候間、差支之儀も無之候處、當時右御觸前年月之古證文を以訴出候分、書入ニ准不取上候而ハ、自然地主ハ地所ニ相離、又者年季明候而も流地不致、水帳金主名前ニ不相成類出來、御定之御趣意ニ違ひ候儀ニ付、取調候處、安永十丑年、(安永十ハ、即チ天明元年ナリ、相談書前ニ掲載アリ、)先役共より一座江相談之上、作德出入訴出候節小作證文紏之上、字位反別水帳不引合、又ハ位反別等認無之分共、加判之名主、咎申付候も有之、又ハ不咎も有之、區ニ付、以來作德計、相願候節も、質地元證文、小作證文とも相紏、字位反別水帳ニ不引合、或ハ認無之分共、加判之名主御定之通過料之上、作德滯ハ借金之利足ニ准濟方申付、質地元金者、濟方之不及沙汰候得共、右體不埒證文ニ付、相對之上、證文可仕直旨、申渡候積り取極、右體之證文を以質地作德共願出候分ハ、素より質地ニハ不相立、書入ニ准、三十日限濟方申付候上、名主過

料申付候趣ニ而、いづれも裏判を以呼出、及裁許候儀有之、然ル處、寛政頃ニ至リ候而ハ、近來之取計同樣最初より金公事之取扱ニ相成候哉ニ而、同九巳年金銀借貸、相對濟被仰出候得共、別段之取計無之、其後も右御觸以前之證文を以、訴出候分も、一般に書入ニ准じ不取上儀と相聞、右不埒證文之故を以、及裁許候書留相見不申、御定書之趣者、

一質地名所、并位反別無之、或ハ名主加印無之不埒證文、（年季之無差別無取上、名主過料、尤名主質入之儀不存、證文ニ於不致加印ハ不及書、）

但右金主地主承屆、相對之上、地主を定、水帳可相改旨名主江可申渡、尤名主質地、相名主無之村方ハ、組頭加印於有之ハ、定法之通濟方可申付、

右之通ニ有之、科條類典をも相糺候處、別紙之通、最初者、年季明拾ヶ年過候ハヾ無取上、拾ヶ年内ニ候ハヾ、地面ハ地主江爲相返、書入ニ准、元金三十日限、濟方申付、地主過料と相伺、追而年季明拾ヶ年過候ハヾ、無取上旨申渡、雙方過料拾ヶ年内ニ候ハヾ、質入元金差出、地面爲相返候樣ニ申渡、雙方過料と伺直候得共、再應御尋之上、前書之通、年季之無差別取上、然共水帳之名前改不申候而ハ、末々混雜之基、出入も出來可仕との儀ニ而、金主地主承屆、相對之上、地主を定、水帳可改旨名主江申渡、名主過料と御定被置候趣ニ有之、專ら無取上御趣意ニ付、裏判を以呼出裁許致し候品ニハ有之間敷、併寛政九年後、相對濟御觸以前之證文、不取上振合ニ寄、取計候而ハ御定但書之御趣意ニ相振れ、是又相當不仕、尤貸金を手堅可致ため、質地證文取置候類、數多有之候間、一般同樣之取計ニハ難致、且又科條類典之趣合考致し候得バ、安永天明之頃、證文面不行屆迄ニ而、質地之取引ニ無相違分をも、三十日限、濟方裁許致し候段も、可然とハ難申、依之以來之儀ハ、目安差出、證文相糺候節、別小作ニ而證文有之、年貢諸夫錢受取書所持罷在、或ハ直小作ニ而も、小作證文宜、年貢等も金主方より相納、請取書所持致し、質地無相違相聞候分ハ、裏判不差遣、加印之名主、差紙を以

呼出相糺、外ニ子細も無之候ハヽ手限ニ而、御定之通夫々申付、願人江ハ出訴之趣不取上段申渡、一紙證文取之、右之外直小作ニ而、地主より年貢諸役相勤、年貢請取書不取置、都而事實紛敷類ハ相對濟以前之證文ニ候ハヽ、最初より不取上、訴狀下ケ遣、右御觸後之分ハ、是迄之通申論書入ニ准し、金公事差日之初判差出、勿論强而質地之由申立候ハヽ、御觸前後ニ不拘、加印之名主呼出、事實次第、右之趣を以取計、尤右訴狀不取上分幷金公事ニ相成候分とも、加印之名主、咎ハ不申付積、取極置可申と存候、依之及御相談候、

但本文呼出候名主之儀、當時病死、退役之有無、訴訟人江相尋、退役之分ハ當名主一同呼出、加判之名主ハ過料申付、當名主證文之趣乍存、其儘ニ致し置候儀ニ候ハヽ、急度叱り置候積、

巳七月

（御定書百箇條）借金銀取捌定日之事

一每月　四日　廿一日
延享三年極

右每月兩度、借金銀公事訴訟計承之、裁許可申付事、

（聞訟秘鑑）一公事出入濟口之事

是ハ金公事ハ片濟口と唱、訴訟方之印形計ニ而も、無申分、內濟致候旨申出候節ハ、承屆候得共、本公事ハ、片濟口ニ而ハ難成、雙方印形之濟口證文を以、內濟承屆べく候、尤濟口は雙方直印には候得共、訴訟方計罷出候ハヽ、略儀ニ付難承屆、然共遠方之村方相手を呼出候迄、差扣させ候而ハ、致難儀候事ニ付、右體之節ハ、願下ニ爲致候方可然候、左候得バ、訴訟方印形計ニ而も不苦候事、

但願下ケは、御奉行所ニ而ハ裁許ニ准じ候迚も、請證文を取候由ニ候得共、御代官所ニ而は、右之通急度取計候ニも及間敷、併右之心得を以可取計事、

〔享保集成絲綸錄四十四〕元祿十五午年閏八月

一公儀引負金銀之事
一拜借金之事
一爲替金銀之事
一當座雇日用賃職人手間賃之事
一家賃金銀之事
一田畑質金銀之事

右之分は、前々之通、年月ニ無構裁許有之事、

閏八月

〔享保集成絲綸錄四十四〕元祿十五午年閏八月

覺

一奉公人給金、巳年以前之出入共、請人只今迄之通可申付事、
一請人辨濟之上、下請人江掛候義、辨濟之分量程ハ、下請人江可申付事、
一大屋立替候金子、店請人江可申付候事、
一什物金銀、祠堂金銀は、出家出世金ニ准じ、年月之構なく可申付候事
一髮結床、船床金舊入候て、金銀出入申出候ハヽ家賃之類ニ相准可申付事、
一養子并妻持參金出入、父方ゟ養子相返シ候歟、夫之方ゟ妻ニ暇とらせ候ハヽ、持參金相返し可申候、養子又ハ妻女方ゟ暇を取候ハヽ持參金相對次第可仕由可申付候、

右者前々之通、向後共申付筈ニ相談之上相極候間、申上置候、以上、

閏八月

〔享保集成絲綸錄四十四〕正德二辰年十二月

覺

一家屋敷等を質に入させ候て用にたて候金銀返濟無之事、

一家屋敷之普請等、請負ニ仕らせ、作事出來候得共代金返濟無之事、

一知行物成米、御切米等を賣渡すべき由ニに前金を取り、其米をも渡さず、金子をも返濟無之事、

右之類、總じて借金掛りとハ違ひ候、金銀之事ハ、公儀御沙汰に及ぶべき筋目にてハ無之候、此等之子細、老中方其外且又支配方江相達候ハヾ、宜しからざる事に候間、返濟の次第ハ、いかやうにも相對を以て納得仕らせ、向後は右之類出入、評定所幷諸奉行所江訴出候はぬ樣可被仕候由、能能內意可被申達候、以上、

十二月

〔享保集成絲綸錄一〕正德六申年四月

評定一座可被相心得候條々〇中略

一評定所江召出し借金公事人、年々に其數多く候故に、此外之公事訴訟を僉議せられ候ために、事之妨に成來り候、自今以後ハ、式日三日之內にて一日、立合三日之內にて一日、凡一月に二日ヅヽ、借金公事人計召出し候日を相定め、其餘ハ此外之公事訴訟人等召出し、其理非分明に僉議之上、裁斷に及ばるべく候事、

〔科條類典下二〕寬保二戌年三月

金銀公事、評定所定日之儀申上候書付、

伺之通可仕旨被仰聞、承知仕候、

評定所一座

評定所江罷出候金銀公事、四月十六日、十一月十六日ニ、何も臨時ニ寄合、裁許可仕候哉奉伺候、

三月〇中略

金銀出入申付方之儀申上候書付

書面之通、取計可申旨被仰聞、承知仕候、

戌三月九日　　評定所一座〇中略

一只今迄、評定所并奉行所ニ而、日限申付候切金公事、此度伺相濟候以後、訴訟方願出候ハヽ、當四月定日之差紙、相手江可遣候、〇中略

右之通可申付候哉、奉伺候、

三月

〔三餘雜錄八〕寶曆九卯年四月十日

借金銀返濟相滯、金主ゟ及公訴、奉行所ゟ裁許申渡候上は、右裁許之通可相守筈之處、近來切金員數、甚不足ニ差出し、武士方掛合家來并寺社在町方借金之者ヘ、奉行ゟ差紙遣し候而も、其節之評定所ヘ家來不差出儀も有之由、不埒之趣、相聞ヘ候、唯今迄切金員數等之儀も、甚寬かなる申付方ニ候處、右裁許之通、不相用、猶不埒之取計有之間敷事ニ候處、旁以不埒之事ニ候得共、先只今迄之儀は不被及御沙汰、向後奉行所ニ而嚴敷取扱、其上ニも不埒之輩有之候ハヽ、武士方は奉行ゟ老中ヘ申達候筈ニ候間、其節可遂吟味候條、以來急度可被相心得候、尤寺社在町方之者は、奉行所ニ而急度咎可申付候、

右之通可被相觸候、

四月

〔續地方落穗集十六〕私共御代官所、羽州村々小作滯、奉公人身代金、并借金滯相濟方之儀、只今迄、前

前ゟ仕來にて、請人證人ニ濟方申付候ても滯候得ば、親類幷五人組江濟方申付來候、左候而は、大勢之難儀罷成候ニ付、向後は當人幷證人江計、濟方申付候樣可仕と奉存候、此段奉伺置度申上候、以上、

寶曆九卯年四月

川田玄蕃
辻六郎左衞門
平岡彥兵衞
風祭甚三郎
天野市十郎

御別紙

書面滯金之儀、當人ニ濟方申付候筋にて、萬一子細有之ば、證人ゟ濟方申付心得にて吟味いたし、其節可被相伺候、

同五月六日　廻しに出ル

〔記事條例八〕安永七戌年閏七月十一日、一座評議極、

借金銀出入代之出訴、又は讓受候出訴幷相手方取計方書付、

借金銀出入代之出訴

一御朱印地之寺院社人身分重く、役僧弟子家來抔、代ニ差出候出訴ハ取上可申候、
一並之寺院社人等ニても、同居之弟子、又は家來を代ニ差出候出訴は取上可申候、
一御用達町人之類、下代を代ニ差出候出訴ハ取上可申候、
一其外諸家之用達、或は並之町人百姓抔も、下代を代ニ差出候歟、又は下代も不持程之身分にても、忰抔を代ニ差出候出訴も取上可申候、

右之通ニ極證、都而他之ものを代に差出候出訴は、病氣快氣之上、當人可願出旨申渡、取上申間鋪候、

但吟味中、病氣ニて代を差出度旨相願、或は度掛りニ相成候ては、他之もの代ニ差出候とも不苦候間、其儘ニ差置可申候、

讓請候出訴

貸金銀幷賣掛金錢等讓受訴出、讓證文有之候とも、讓主呼出、讓候譯相糺、紛敷儀無之候はゞ取上可申候、若紛鋪筋ニ候はゞ、其品ニ寄無取上旨申渡、或は不埒之取扱等有之候趣ニ相聞候とも、其譯不及吟味、無取上旨可申渡候、

相手方之事

一證文宛所之家來を相手取候を、外之家來罷出候はゞ、右宛所之家來呼出し可申候、

但無據儀有之、當人難罷出段、主人ゟ斷有之候はゞ、其無據譯相糺、實々無據筋ニ候はゞ、外之家來ニて相糺可申候、

〔目安秘書坤〕讓請之出訴申合

天明八申年五月廿一日、丹波守殿江一座ゟ進達、

金銀出入讓請之出訴取計方申合之趣申上候書付

評定所一座

都而貸金銀、幷賣掛出入願出候內、貸金賣懸等之代り、又は好身を以證文帳面等讓請、及出訴候分は、右讓人は勿論、在方ニ候得ば、村役人も呼出、再應相糺、怪敷不相聞讓請候後、催促およひ候而も、不相渡段無相違相見、讓請證文等慥に候分は、在方は一座裏判を以相手方呼出し、吟味之上、定例之濟方申付、或は目安裏判相附候節、相對之上、滯高之內不足いたし、內證ニ而相濟候旨、訴訟人申

立候得ば、相手方不罷出候とも承屆來申候、然處其筋其筋功者なるもの共、在方等江參り、古證文帳面等買求、讓請之積り相對いたし、裏判申受、被相手取候もの之內ニは、至而古證文は、祖父親之代之儀ニ而、貸掛等一向催促も不請故、不存も有之、又は返濟いたし、請取書所持いたし、證文不取戾差置、吟味之上は不及濟方候得共、少分之儀御當地迄罷出、路用雜用相掛、其上農業之妨ニも相成候間、申分有之候とも、出府不致方勝手故、少々金銀差出、內濟いたし候儀を見込右證文帳面等讓請候類、近來相聞申候、依之以來親兄弟ゟ讓受候ハ格別、貸金證文帳面讓請願出候類、假令證文慥に候とも、當人ゟ直ニ不相懸分は取上不申、且親兄弟之外、親族之讓請も不取上積申合候、此段申上置候、

朱書
一貸金賣懸等之代り、證文帳面等不讓請候とも、直ニ相手取、其筋江濟方願出、若病氣之ものは代を以願出候得共、差支之筋相見不申候間、本文之通り相極候儀御座候、

以上、

申五月

〔勘定所公事〕一年貢諸夫錢出入捌之濟訴出候節、裏判不差遣、相手方呼出、手限ニ而相糺候積り、一座相談濟之事、

御相談書

曲淵甲斐守

松前若狹守領分
常州鹿島郡鉾田村村役人總代組頭
訴訟方　三右衛門

初鹿野傳右衛門知行
同村名主
相手方　平右衛門

一年貢諸夫錢出入

右者本公事之儀ニ付、滯高之員數ニ不ㇾ拘初判差出可ㇾ申儀ニ候得共、滯銭都合三百文餘ニ而纔之滯有ㇾ之、畢竟以後之爲を而巳以及ㇾ出訴ㇾ候事と相聞、一體は可ㇾ願出ㇾ程之儀ニ無ㇾ之、出入御一座裏判差出候も如ㇾ此、其上相手方當時江戸表江罷出居候趣ニ付、旁裏判不ㇾ相達ㇾ拙宅ニ而一通り相糺し、若不ㇾ相濟ㇾ候ハヽ、吟味いたし、追て御相談之上、評定所江差出裁許可ㇾ致哉、及ㇾ御相談ㇾ候、以上、

戌八月

右文化十一戌年八月廿五日、一座評決

〔評定物手形帳〕一私儀明四日片濟口御訴訟ニ而御評定所江可ㇾ差出ㇾ處相流、明後五日朝六時、濟口證文持參、家主五人組名主一同刻限無ㇾ遲滯御評定所江可ㇾ差出ㇾ旨被ㇾ仰渡ㇾ奉ㇾ畏候、尤差出し御用ニ相成候間、別段差出し入候ニ不ㇾ及旨被ㇾ仰渡ㇾ奉ㇾ畏候、爲ㇾ後日ㇾ仍如ㇾ件、

子〇文化十三年六月三日　深川御船藏前中右衛門店要助煩付代

願人　要　助

家主　半右衛門

五人組　利兵衛

〔公裁秘錄四〕一金公事吟味詰裁許手續之事

朱書 吟味物取捌之部初ヶ條、幷七十五ヶ條見合べし

武州鴻巣宿大助ゟ野州赤見村佐次兵衛を相手取候貸金出入

口書

伺書

申渡

請證文

奉　何之證

當御代官所
野州安蘇郡赤見村組頭

佐次兵衛申口（巳伺濟）

私儀鴻巣宿仙左衛門ゟ借請候金子返濟相滯候段、同人悴太助、御訴訟申上候ニ付、右始末御吟味に御座候、

此段私儀高拾石餘所持いたし、家内四人暮にて、農業之間、小賣酒渡世いたし罷在、然る處、去る卯年迄、太物商ひいたし候節、前書の仙左衛門ゟ、追々右代金立替相成、其後商賣相休、殘金返濟延引罷成、種々致手段候得共、彌困窮相增候ニ付、酒造并諸道具等書入證文差入、同年十月晦日迄、急度相濟可申對談にて、別紙證文入置候處、次第に困窮相增、返濟之手段無之、勘辨之儀、訴訟方江再應掛合候得共、不行屆內、先般出訴相成候儀にて、前書之次第に付、追々相濟申度段申上、

則證文金高、左之通、

一金拾兩　（文化十二亥年十二月ゟ當巳正月迄）六拾二ヶ月　但年一割五分

此利金七兩三分　（朱書）貳拾兩ニ付利金壹分之割也

元利金拾七兩三分

内壹兩　當五月六日相濟

殘金拾六兩三分

右之通相濟候段、相違無御座候段申上候に付、被仰聞候は、返濟滯候節は、書入置候諸道具、賣拂候ても返濟可致旨の證文入置候上は、及困窮候迚、追々濟方いたし度由之申分難御取用、御定法を以、濟方可被仰付筋之旨御吟味請、更可申立樣無御座候、

右之通相違不申上候、以上、

（○文政四年）巳九月日　佐次兵衛

何之譯樣御役所

前書御吟味之趣、私儀も罷出奉承知候、右金拾六兩三分、御定法を以、何樣濟方被仰付候共、可申立樣無御座候、依之奧書を以申上候、以上、

當御代官所武州足立郡鴻巣宿百姓仙左衞門代悴　太助

朱書
裁許申渡

武州鴻巣宿百姓仙左衞門代
訴訟方　太助

野州赤見村組頭
相手方　佐次兵衞

其方共出入、遂吟味候處、證文無相違間、右金子何拾兩何分、三十日限濟方申付ル、

巳九月

〔目安秘書 坤〕預金裁許申付方之儀ニ付申上候書付

書面伺之通、可及挨拶旨被仰渡奉承知候、

酉〇天保八年二月廿四日　内藤隼人正

預金出入裁許申付方之儀牧野左衞門方ゟ問合候ニ付取調候處、是迄預金出入裁許申渡候先例無之、右は質地作德家賃滯等之振合ニ准じ、日限濟方申付候上、身體限申付可然處、御定書ニ、質地金滯日限は、五兩以上拾兩迄六十日限、拾兩以上五拾兩迄百日限り、家賃金滯は、三拾兩以下四十日限之日限ニ有之、質地之儀は、百姓共成丈ケ地所ニ不離樣ニとの御趣意ゟ、日限も右樣寬ニ御定被置候儀ニも可有之哉、預金は右とも譯違ひ、素々預り主、自用ニ融通可致筋ニ無之候間、家賃金滯ニ准じ、日限濟方申付、猶相滯候ハヽ、身體限申付、相當可仕哉ニ付、右之趣、評定所一座江も及相談候處、存寄無之旨申聞候、先例も無之儀ニ付、此段奉伺候、以上、

酉二月

〔目安秘書坤〕給金出入死失跡相續人之事

天保九戌四月問合挨拶留

男女奉公人、身代金出入之儀訴出候節、是迄碇といたし候相談濟も無之候得共、國柄ニ寄、給金而已ニ而は、奉公人抱方差支給分之外、金子貸遣し、其段請狀江認入、右請狀を以、一般ニ抱置候故、改革もいたし兼候次第ニ而、文政度以來、裏判差出候處、一體身代金之儀は給金ニ准じ候品ニ付、利足定無之は勿論に候得共万一以後、利足定有之候請狀を以、申立候ハヽ、貸金證文ニ認替相願候ハ格別、右請狀ニ而給金身代金とも取立度と之儀は不相立積、且右不束之受狀ニ而も、奉公人不勤いたし候歟、又は異變有之節、請人人主難引請段申立候はヽ、右請狀之不束ニ不拘、本公事差日之初判差遣候積相心得取計可申、右ニ付阿部能登守家來問合書相添、此段御達可申旨、藤之進殿被申聞候、

四月　金井伊大夫

右問合挨拶下ゲ札略

〔目安秘書坤〕借金銀出入取捌箇條之內

一祠堂金　官金　書入金　先納金　立替金　職人手間賃金　手附金　持參金　賣掛金　仕入金　諸道具類注文ニ而金子借候類　諸物賣渡證文ニ而金子借候類　御家人又ハ御用達町人等、拜領屋敷地代店賃等書入、金子借候類、

右之分、延享元子年以來之滯は、每月四日廿一日呼出し、三十日限濟方可申付候、

一地代金、三十日限濟方可申付候、店賃金、右同斷、

一違判證文有之、諸請負德用割合請取候定、芝居木戸錢、無盡金、仲間事ニ付無取上、但證文借ニ候とも、仲間事ニ相決候而ハ取上申間敷事、

一日寄附込帳ニ記し候借金印形無之分無取上宛所無之年號無之證文右同斷家質金宛所違之證文を以於願出は取上申間敷事

一百姓を相手取候借金出入地頭借ニ相聞候とも地頭裏印役人奥印無之ニおゐては地頭借ニは不相立事

〔德川禁令考後聚十六行刑條例〕本人證人共相果候借金濟方之事

金子借主證人共相果跡株相續之もの江掛候而願出候節田畑家財讓請候相續人有之バ其ものより可差出筋ニ候得共田畑家財ハ不及申家屋敷迄外江質入書入ニ致し何ニ而も無之跡江名前計讓受罷在候相續人其借金可引受樣無之候間當人并證人共相果候上ハ金子濟方之不及沙汰積吟味詰相伺可然事

養子之借金濟方願之事

養子借金有之欠落いたし候歟又ハ相果候以後養父を相手取濟方願出候節家督相續爲致候養子ニ候ハヾ養父引受可相濟筋ニ相聞候家督不相讓親掛にて罷在候内之借金ニ候ハヾ相對之事ニ付養子病死いたし候ハヾ濟方之儀不及沙汰欠落ニ候ハヾ見合掛之積吟味詰相伺可然事

先住之借金濟方之事

一先住借金有之段當住不存本寺觸頭より其段不申聞於致入院ハ後住不及返濟先住之弟子并證文より爲濟之古例

一先住借金當住不存旨申之といふとも先住借金も有之バ入院致間敷旨不斷ニおゐてハ當住又ハ證人より爲濟之

〔德川禁令考後聚十六行刑條例〕元治元子年五月評決

金銀錢合高壹兩以上ニ相當之分ハ取上以下ハ不取上積相談書

一色丹後守
本多加賀守

去ル卯年評議ニ御下ゲ有之候、鳥居甲斐守町奉行之節、借金銀裁許改革之儀ニ付、相伺候書面徜條之內貸金銀賣掛等之出入滯高之儀少分之賣掛借金、多人數相手取、目安裏判願出候類不少、在方之もの共、難儀可致候間、以來五里內ニ而、七日目裏判書差出候場所之もの、相手取候出入ハ、金壹分、銀錢右同斷、以上ハ取上、五里外ニ目安裏判差遣候場所ハ、今般定相場、金壹兩六拾目錢六貫、五百文以上ハ取上、右以下ハ目安掛ハ爲相除可申哉と相伺、評議之上伺之通と申上、其通相濟候趣ニ見合、譬バ一人ニ而、金貳分、錢三貫五百文程借受居、金錢相束候而ハ、壹兩以上ニ相當之類迄滯出入願出之分、町奉行衆ニ而ハ取上無之、拙者共方ニ而ハ、右樣金銀錢相束候而も、御改革之節被定候錢相場六貫五百文之高ニ詰り候得バ、則壹兩以上ニ相當候譯を以取上來り、是迄區々ニ相成居、是以錢六貫五百文と相場相定居候ハ、壹兩以上ニ相當戾有無も見分安ク候得共、右定相場相止、其時々之相場ニ被任候樣相成候上ハ、日々入狂有之、金壹兩ニ相當候有無、見分ヶ方、至而紛敷候間、以來ハ町奉行衆同樣、金銀錢束候儀ハ不致、銀ハ六拾目、錢ハ六貫文以上、都而一品ニ而金壹兩ニ相當之分而已取上、其餘ハ爲相除候樣可致と存候、依之及御相談候、

子五月

〔評定所張紙留　坤〕寛政四子年八月二日極ル

一深川永堀町孫平願、松平陸奥守滯金出入、是は滯金拾九万九百四拾九兩壹分餘之處、切金申付方之儀、切金定は壹万兩迄にて、壹万兩にて之切金ハ八拾兩ニ付右之割合を以申付候得ば、千五百貳拾兩餘ニ相當り候得共、右より減じ候方可有之哉之旨、一座評議之上貳拾万兩近キ滯高ニ付、切金千兩申付候積極ル、

但先達而、武州千住橋戸町彌太郎相願候、佐竹右京大夫滯金六万貳千八百四拾九兩貳分之切金は、壹万兩ニ付八拾兩之割合を以、五百拾兩申付候得共、此度陸奥守滯高は、格別大金之儀ニ付、本文之通相極ル、

〔政談 二〕借貸ノ道、塞ルト云ヘルハ、近年借貸ノ公事、多クハ相對ニ成テ、大形ハ捌カヌコトニ成タル故、金銀持之手前ニ固マリ居テ、世界ヘ流通セヌ故、金銀ノ德用薄ク成テ、世界困究シタル筋アリ、

〔寶曆集成綵綸錄 三十〕延享三寅年三月

三奉行へ

覺

一借金銀賣掛等之出入は、人々相對之事故、近來壹ヶ年兩度之裁許ニ申付候得共、向後三年巳前、子正月より之金銀出入は前々之通取上、裁許可申付候、四年巳前、亥十二月迄之金銀出入、只今まで奉行所ニて、壹ヶ年兩度之裁許に日切等申付候分共、向後奉行所ニては不申付候間、相對を以無滯急度相濟べく候、

一只今迄、金銀出入付、奉行所より呼出候節令不參、又は濟方申付候得共、金子不差出輩有之由相聞不埒ニ候、右之通今度相改候上、奉行所ゟ呼出候節致不參候歟、又は濟方申付候ても不埒之輩有之ば、武士方は、奉行所ゟ老中江申達候筈ニ候、寺社在町方は、奉行所ニて急度咎可申付候、

右之趣可被相觸候

三月

〔新朝裁許律 三〕覺

一近年金銀出入段々多成、評定所寄合之節も、此義を專取扱、公事訴訟ハ、事之末に罷成、評定之本

旨を失ひ候、借金銀買懸り等之儀は、人々相對之上之事ニ候へバ、自今ハ三奉行所ニて、濟口之取扱ひ致間敷候、併欲心を以、事を巧み候出入、不屆を糺明いたし、御仕置申付候事、

但不屆と在之候ハヽ、身體限り申付候旨之儀之事、

一只今迄、奉行所ニて取上、日限ニ申付候段之濟寄候金銀出入も、向後罷出間敷由可申付候事、

已上

亥十一月

右御書付、十一月九日、御列座にて、山城守殿、三奉行へ被成御渡候、

(目安秘書坤)金銀出入御改正

寬政九巳九月十日、對馬守殿御直御渡、　三奉行江

覺

一延享元子年以來之金銀出入、奉行所ニ而取上候儀、同三寅年相達候以來、已ニ五拾年餘、追々金銀出入數多ニ成行候、元來人々相對之上貸借ニ候得ば、取上裁許ニも不及事ニ候間、是迄之分、裁許は不申付、自今出訴之分、吟味之上取上、夫々可申付、尤買懸諸職人手間賃ニ至迄、同斷之事、

但只今迄取上、裁許日限等申付置候分も濟方、向後は奉行所ニ而取扱申間敷候、

一金銀貸借之儀は、年古キ儀ニ而も、相互ニ實意を以相對に候得ば、容易ニ出訴、裁許請候ニも不及事ニも候處、返濟方も貸方も、不實ゟ、多は出訴および、風俗不宜候、此度限相改候而も、只今迄之借金銀、棄捐ニ可致樣心得候ハヽ、尤不埒之次第ニ而候、又欲心を以事を企、出入ニおよび、或ハ全利德ニ而已拘り、不埒成出訴之類は、吟味之上、夫々急度咎可申付事、

一以來濟方可申付分、申渡之金高不足いたし、毎度不束ニ候ハヽ、糺之上急度可及沙汰事、

右之通相觸候間、延享之度、被相觸候箇所江、右之趣可被申渡候、尤以來裁許ハ、事實相當、銘々厚吟

味有之樣可被致候、今般取上無之ニ相觸候分とも、不埒之次第有之ハ、其所を以吟味之上、咎は可被申付候、裁許之限、銀を不足ニ差出候分も、いつ迄も申渡ゟ不足之儀は不埒成儀ニ而、畢竟裁許を等閑ニ而已心得候ニ相聞候間、右之類をば、重而ハ其筋江可申立段被申聞、其後迄も同樣ニ候ハヽ始末書付候而可被申聞候、其上は急度可令沙汰候間、右之趣を以、猶可被相談候、

朱書
一金銀出入、是迄貸借之儀は、裁許不申付、自今出訴之分ハ取上、裁許之積被仰渡候ニ付、當八月晦日迄、借貸出訴之分は、取上候積、境を相立可申積り相心得候樣可致哉之段、對馬守殿江右京亮、土佐守、肥前守立合、尾島鍋三郎を以相伺候處、伺之通御聞被置候間、其通可致旨、同人を以被仰聞候、

右被仰渡候ニ付、寬政九巳年九月十三日、一座申合之書面別錄、

朱書
本文之通被仰渡候ニ付、一座申合之書面別錄、

(評定所新張紙留)借金銀并買掛り、諸職人作料手間賃等之出入、是迄之分裁許不申付、且只今迄取上ゲ、裁許日限等申付置候分も、向後奉行所にて、取扱いたす間敷段被仰出候ニ付、評定所公事申渡方、其外左之通、

一三奉行懸り候而、吟味中之出入、并日限濟方申附置候分、且切金度懸り公事共、銘々懸り宅にて、右御觸之趣を以、左之通可申渡事、

借金銀并買懸り、諸職人作料手間賃等之出入、是迄之分、裁許不申付、只今迄取上ゲ、裁許日限等申付置候分も向後は奉行所にて、取扱いたす間敷段被仰出候ニ付、當時吟味中之もの、并日限濟方切金ニ申付置候分とも、以來不及沙汰間、相對にて可濟、且內濟之分も、濟口證文差出ニ不及候、

一初判差出候分は、當日に雙方不出候節、前書之通申渡、目安取上可申事、但右目安并內濟いたし

候分も、目安は取上、銘々評定所江持參、於内座可致消印事、

一遠國之分、御代官御預所にて、切金取遣爲致置候分は、彼地ニおゐて、御書付之趣を以申渡、御代官御預所役人江、日限證文取上可差越段、御勘定奉行より可申達候、

但寺社奉行懸り之分は、取調御勘定奉行江可相達事、

一相渡置候押切書付日限證文は、銘々懸り宅江爲致返納、取集評定所より可遣事、

但銘々内寄合公事手限之分も、右ニ准じ可申渡事、

一三十日限之上、切金ニ可成御定ケ條之外、家質書入、奉公人給金滯、諸色成質物を以借候金銀、爲替金、井質地、且買預ケ米等之類は、御觸以前之分ニても取上可申事、

但質地井買預ケ米は、吟味之上、質地且買預ケニ難立借金ニ准じ候書入等之分、御觸以前之證文ニ候はゞ、濟方之不及沙汰段可申渡事、

一地代店賃は、寬政九巳年、伺濟之通相心得、御觸以前之分にても取上可申事、

一以後出訴之分、當十二月三日迄之貸借之分は不取上、同月十四日より之貸借出訴之分は取上ケ可申事、

一公儀御貸附金は勿論、御三家方、堂上方、宮方、其外重き寺社御手當貸附金井道中宿方助成金貸附右之分は、御書附以前ニても、取上濟方可申付事、

但右之名目を以、自分之金子差加、貸附候抔之儀は御書付之通、事實相當之所を以巨細に吟味いたし、評議之上可致裁許、其品ニ寄、相伺候樣ニも可致事、

一是迄濟方申付候分、古證文ハ取上置候故、金主ニ證據無之間、以來相對濟之致方ニ差支候故、證文書替可申儀之處、借方にて書替申間敷段申候旨、金主願出候節は、相對濟之御觸有之上は、書替可申筋之旨、借方江利解申聞、其上にても難澁いたし候はゞ、評議之上呑可申付事、

但書替候共、當卯（天保十四年）十二月之日附ニは爲致間敷、右借之譯相立候樣爲書替可申事、

一借金銀出入、以後出訴之分は、當四月御書付之趣、并其筋取扱方申合候通相心得、取計可申事、

右之通申合候事

都筑駿河守

〔評定所書留 三〕御相談書

一御政事向御改ロニ付、〇中略式日立合御用向取扱順立、寛政二戌年二月申合候趣、其頃ハ何分金公事多く、訴訟ニも度掛り公事訴訟差紙願等、品々取計振有之候得共、當時ハ右體之廉々、先ハ無之候間、訴訟可致爲、注進狀差出候前、別段ニ評席江出候ニも及間敷候間、當分之內、式日立合ニも別紙之通相心得、追而金公事相殖、右之上ニ而不都合之義も候ハヽ、其節相改可然、〇中略

右之通存候、別紙申合書相添、及御相談候、

戌（嘉永二年）十二月

〔評定物手形帳〕一私共儀、今四日、度掛訴訟ニテ、御評定所江可罷出處、相流候ニ付、明五日、御聞被成候ニ付、同日朝六時、御評定所江可罷出旨被仰渡奉畏候、尤差出御用ニ相成候旨、是又被仰渡奉畏候、爲後日仍如件、

丑（文化十四年）九月四日

木挽町二丁目家持甚之丞代
願人 佐兵衛
五人組 市右衛門

相手
大久保玄蕃

二口 青木九十郎　日根野權十郎　菅沼新三郎
小室庄九郎　齋藤伯耆守

相手
織田大和守

葺手町家持太郎兵衛代
藤　藏
五人組 清兵衛
〇下略

〔目安秘書坤〕度懸公事訴答之內、欠落跡日限證文不書替、

御相談書　池田筑後守

一書入金出入

伊勢崎町
嘉右衛門店
願人　清八

菅沼安十郎御代官所
　　　　　　　村
相手　藤七

右藤七儀、欠落いたし候ニ付、過料之上、承尋申付候間、去月廿五日及御演說候、然ル處、願人清八願出候は、藤七儀、欠落いたし候處、外ニ借用金有之、貸方のもの江、右妻子ゟ濟方いたし候ニ付、拙者掛り、度掛り之分も、右之もの共引受、致返濟候樣申付相願候得共、欠落もの妻子江日限證文書替等申付候例も無御座、いづれ欠落ものゝ儀ニ付、書替は不申付、日限證文は取上爲相納可申と存候、右は訴訟方相手方之無差別書替願出候とも、難取上旨申渡候樣可致候哉、以來之取極いたし度、此段及御相談候、

右は寬政六寅年八月四日、一座評議決、

〔目安秘書坤〕度掛殘金讓渡

松平伊之允知行
下總國千葉郡大元村安兵衛煩ニ付代　藤助

芝源助町家主　金右衛門

朱書
此張紙不用ニ成、主人ゟ之讓請は不取上積、委細は張紙朱書入有之候事、

右安兵衛ゟ、本堂大和守江掛、貸金出入、去ル丑年日限濟方申付置候處、度掛殘金、安兵衛召仕金右衛門江讓渡度旨相願候ニ付、願之通申付、名前書替遣、尤金右衛門儀は、町方住居之ものニ付、以來町奉行掛ニ而、取遣可致旨申渡、大和守家來江も申聞之、

右は辰三月十一日、一座評決、

〔目安秘書 坤〕度懸之訴訟人下手人御仕置ニ成候跡

甲斐守掛

一神田久右衛門町一丁目藏地勘兵衛店平十郎ゟ、佐竹次郎、并野州高輪村利兵衛、外大勢江懸候貸金度懸公事有之候處、右訴訟人平十郎、下手人御仕置ニ相成候間、取計方評議、

是は下手人御仕置ハ、欠所附不申、平十郎跡株之ものゟ、別段可願出は格別之旨申渡、先達而渡置、押切書付日限手形とも取上候積、

右之通、天明六午年四月廿一日、一座評決、

〔目安秘書 乾〕金銀出入相訴取計

右同断之内

一相訴は、對決之上、雙方江濟方申付、訴訟人兩人ゟ、壹人を相手取、金銀出入出訴いたし候はゞ、二口合高を以、日限極、濟方申付、身代限之儀は、金高割合、濟方可申付候、

○按ズルニ此前條肩書ニ、天保十四卯年、鳥居甲斐守伺一座評議濟之內トアリ、本文肩書ニ右同断之内トアルハ、之ヲ指スナリ、

古事類苑

法律部五十五

下編下

訴訟人

訴訟人規則	五三八
訟庭席次待遇	五四三
差添人	五五六
代人	五五九
證人	五六四
引合人	五六七
訴訟費負擔	五七四
公事人欠落	五七七
不參違期	同
病氣不參	五八〇
公事宿及茶屋	五八一
雜載	五八三

古事類苑

法律部五十五

下編下

訴訟人

訴訟人ト云フハ、原告人ノ稱ナレドモ、今此ニ擧グル所ハ、被告、其他關係者ヲモ包含セリ、凡德川時代ニ在リテハ、務メテ健訟ノ風ヲ遏絶スルノ主旨ニ本ヅキテ、漫ニ訴訟ヲ起スモノハ罪アリ、又訴訟ヲ勸メ、訴狀ノ代書ヲ爲ス等、凡テ世上ノ害ヲ爲スモノモ亦罰アリ、而シテ訴訟人ノ法庭ニ出ヅルヤ、身分ニ因リテ其待遇ヲ異ニス、卽チ士分以上、若シクハ神官僧侶檢挍等ノ如キハ、板敷ニ坐シ、平人ハ都テ白洲ニ居ルノ類ナリ、訟庭ニハ代人ヲ用キルコトヲ禁ズレドモ、其情狀ニ由リテハ、之ヲ聽スコトナキニアラズ、又訴訟者、若シ老幼、病者ナルトキハ、特ニ扶助者ヲ附スルヲ聽ス、之ヲ差添人ト云フ、又出庭者ニハ、必ズ名主五人組等ノ同伴ヲ要スル例ナリ

證人ハ、原被兩造ノ論辨ヲ證言スルモノナリ、而シテ此下ニハ貸借證書等ニ署名セル證人ヲモ併セ出セリ、引合人トハ、其事件ノ關係者ニシテ、事實ノ理非ヲ判決スルノ資料ニ供セラルヽモノナリ、

訴訟ノ費用ハ、原被各自ノ負擔スル例ニシテ、其一村一鄕ニ關スルモノハ、所有ノ田地ノ石高ニ應ジテ、之ヲ分擔セシム、

訴訟者ハ、召喚狀ヲ受ケテ之ヲ拒ミ、若シクハ期ニ違フモノハ罰アリ、但シ病氣不參ハ此例

ノ限ニアラズ、又有司ニ向ヒテ賄賂ヲ行使シ、禮物ヲ贈遺スルコトハ、堅ク禁制スル所ナリトス、

〔評定所留書一〕一奉行所ヲ掠候もの之事　過料

一願立候事を願捨いたし、在所へ立歸り候者、　過料

一相手相果候を押隠、相手取候もの、　過料

一不埒を申立、相手大勢呼出候者、　過料

一立會繪圖、久敷滯候もの、　牢舍

　但訴訟ニおゐては御免

一他村之もの、其村之者江申合、出入ニ携訴出候者、　戸〆

〔御當家令條二十一〕京都町中可令觸知條々

一諸人訴訟之事

　右裁許之時、論所雙方之外、奉行所江不可來、但親子兄弟者、非制之限、此外一切令停止之、若雙方可為證據人者、同前可罷出候、兼又去元和五年以前之訴訟、不可申來事、○中略

以前條々所相定也、町中不殘可令觸知者也、

　寛永六年十月十八日

〔享保集成絲綸錄四十四〕慶安元子年六月

一此以前茂、如相觸候、公事仕候ものは、證據人五人組召連れ、罷出可申事、

一公事訴訟人有之候共、證據人五人組之外、見舞ニ壹人も罷出申間敷候、若相背候者於有之は、急度可申付候事、

一公事仕候者、家持は町中并五人組ニ斷、棚衆は家主ニ屆可申事、

六月

〔正寶事錄十〕午〇元祿十五年閏八月廿八日

樽屋藤左衞門殿江、町中名主、并名主無之町々者月行事被呼、左之御書付之趣、此度被仰渡、尤御書付御見セ被置候段、被仰渡候旨被申渡候、〇中略

一公事訴訟をすゝめ、目安を認メ、たくみ成義を致、諸事出入之儀ヲ取持、禮金を取、いとなみニ仕候者、常々遂吟味、町々ニ不差置候樣ニ可被申付候事、

一難立公事訴訟ニ、遠國之者ヲ目安裏判、并指紙を以呼集候ハヽ、向後訴候者、過怠牢又は過料出させ候樣ニ可被申付候事、〇下略

〔享保集成絲綸錄四十四〕寶永三戌年正月

一訴訟公事ニ評定所江罷出候者共、腰掛江酒致持參給候儀、堅無用ニ可仕候、若酒醉罷出候ハヽ、可爲越度候間、此旨町中可相觸候、以上、

正月〇又見正寶事錄

〔享保集成絲綸錄十八〕寺社奉行、御勘定奉行、大目附々、寺社方御料私領江相觸候書付、

公事訴訟有之者共、奉行役人中、并其家來之末々といふ共、內緣を求め、音物を相贈り候義、制禁有之候、違犯之輩に至ては、たとひ理運之公事、其理ある訴訟といふ共、一切に許容不可有、若又裁許之後、年月を過ぎ相聞え候といふ共、急度其沙汰に及ばれ、罪科に行はるべき者也、

右今度如此被仰出候間、宜敷相心得べく候、以上、

七月〇正德五年、又見正寶事錄

〔正寶事錄十四〕喜多村ニ而町々名主江被申渡

申渡

御評定所、并三御番所江、公事訴訟ニ附罷出、待合候内、給物之儀、何ニ而も輕クいたし可二相濟一事ニ候處、結構成提重辨當抔持出候もの有之由、無益之事ニ候、向後給物かろく致し、畢竟飢をたすけ候迄之事たるべく候、尤酒一切停止可レ仕旨、從二町御奉行所一被二仰渡一候間、其旨急度可レ被二相守一候、以上、

未〇正德五年　七月廿日

〔舊記拾要集　一〕覺

自今訴訟人罷出候はゞ、其訴訟人之家主名主五人組、右相手、并家主、名主、五人組立合、來ル幾日迄之内ニ可二相濟一候、若不二埒明一候はゞ幾日雙方召連可二罷出一旨、差紙遣申候、

一惣體願事ハ、願人罷出候はゞ、其支配名主方へ差紙願人ニ爲レ持遣可レ申候、右文言ニ如レ此願出候町中にて、障之有無遂二吟味一大勢之者難儀不レ仕儀ニ候はゞ、來ル幾日願人召連可二罷出一旨、差紙遣可レ申候、

右之趣、向後可レ被二相心得一候、以上、

〔享保集成絲綸錄　四十四〕元文五申年五月

奥向之面々、奉行役人江訴訟人願人等之儀、賴ヶ間敷事無レ之樣にとの段ハ、前々より心得有レ之事候得共、若左樣之儀有レ之歟、且又老中若年寄、其外御役人之家來等より、願人等之事ニ付て、賴ヶ間敷義候はゞ、老中又ハ支配迄、無二遠慮一可二申聞一候、

右之趣可二相達一之由御沙汰も有レ之付而申達候、此段可レ被二申通一候、

五月

右之趣、西丸御目付江も可レ被レ達候、

〔法曹後鑑　二〕寛政十二申年七月八日、松平伊豆守殿〇信明江、青木忠左衞門を以上ル、

御勘定奉行

松平肥後守家來、吟味筋ニ而町奉行所江呼出候節、同道いたし候、家來帶劒之儀ニ付、小田切土佐守〇直年、町奉行、申上候書面、井肥後守家來差上候書付、當六月十九日御渡被成候、是迄私共宅ニ而之取計方、井以來町奉行所ニ而取扱方、存寄も御座候ハヽ可申上旨被仰聞候、

此儀評定所、井私共宅江、私領之裁許等申渡候節、出席之家來、御三家御兩卿之家來之外ハ、御家門井溜詰、其外之家來ニ而も、帶劒ハ爲致來不申候、私共懸リニ武家之吟味筋ハ、邂逅ニ而、溜詰之家來吟味ハ、猶更近來無御座候間、同道人江預證文之印形取候節之取計、先例相見不申候、溜詰之外、諸家之家來吟味受候身分之ものを同道等いたし候もの江預之節ハ、無劒ニ而評席江差出、私共直ニ申渡候上、請書之儀ハ留役共取計候故、不爲致帶劒、請書讀聞候而、印形爲致、品ニ寄預ケ替等申付、請書申付候節、私共家來、御用向ニ懸置候ものより應對爲致候節ハ、使者之間ニ而、帶劒之儘印形取候儀も有之、溜詰之家來ニ候とも、差別ハ不仕心得ニ罷在候、且町奉行所ニ而、以來取扱方之儀ハ、御役宅之儀ニ而、組與力同心取扱候儀故、私共宅取扱とも違候間、何れニ而相當可仕と之存寄無御座候、此段申上候、以上、

申七月

寛政十二申年八月三日、戸田釆女正殿〇氏敷、尾島鍋三郎を以、御勘定奉行ニ而一覽、緒附いたし候樣御下ゲ、菅沼下野守〇定喜、受取、即刻緒附ニいたし返上、

緒附

申八月三日
一覽仕候　御勘定奉行
申八月朔日
一覽仕候　松平周防守
申七月晦日

一覺仕候　　小田切土佐守

覺

町奉行所ニおゐて、家來共を與力吟味之節、差添之家來帶刀之事、右ハ奉行差圖を以、與力共吟味等致候儀ニ而、場所とても御役所ハ一體之事ニ候間、奉行吟味も同樣之儀ニ候、殊諸家之家來差添之ものも右場所江ハ無刀ニ而罷出候由ニ候、奉行所之作法を以、改而達も有之事ニ候得ハ、其通ニ相心得可然儀と存候、且又別紙御判物改之節之例も、肥後守方ニ限り候儀ニハ無之、尤吟味物等之見合ニハ難相成事、

〔板倉政要三〕一訴訟人、以其身理運得勝利輩、爲其禮儀奉行所へ參入仕事、堅令停令訖、彼者以道理、此方者糺明理非申義事也、奉行之役儀ニ候之間、更以可請禮物無其覺悟候、猶以背此旨、爲禮儀參入之族爲過代籠舍可申付事、

〔天保新政錄一〕同月三〇天保十年四月十二日、於南御番所被仰渡、

南北小口年番　名主共
市中取締掛　名主共

訴訟公事人共刻限無遲滯相揃、病氣之者代願等差支ニ不相成樣可致旨、度々申渡置候處、猶又近來致遲刻、且呼出刻限等茂遲く、差支ニ相成、右は當日罷出候者共之內、病氣等有之、自然手間取候義ニも有之哉、右樣之節は、町役人共之內早速罷出可屆出義ニ有之候處、其心付茂無之打過候は、畢竟町役人共等閑ニ心得候故之義ニ付、急度も可申付處、先此度ハ令宥免不及沙汰候條、以來訴訟公事人は勿論、吟味又は糺ニ付、日延當日罷出候者共、刻限遲滯不致、急度罷出候樣可致、若此上遲刻致ニおゐては、聊無用捨町役人共迄咎可申付間、右之趣、此者共ゟ精々申聞置候樣可致、

〔聞訟秘鑑〕一親籠ニ而呼出し候公事人之事

設題席次符號

是ハ公事人病氣ニ而難罷出節、駕籠ニ而呼出歩行難儀ニ付、駕籠を白洲ニ入度由相願候ハヾ

可為入候、御奉行所ニ而左樣之節ハ御免被成由之事、

〔記事條例 八〕二條殿諸大夫御役所評定所江出候例

呼出　二條殿家司　津幡民部少輔

差添　植野修理

右者野田文藏御代官所、武州多摩郡南秋津村百姓善五郎地借、醫師八卷運朝儀、二條殿許容を請候由に而醫學館取建之儀、申勸候御吟味一件に付被仰上は無之、御一座か直に禁裏附江被仰遣御呼出有之候由、寛政八辰年六月十五日着、民部少輔所勞之由、修理壹人出、翌十六日兩人同道出ル、兩人とも平服刀を持候て上ル、用人金子源左衛門面談、玄關之取計ども、諸事御目見以下御家人之通、差添候ものも、取次のもの迄等不致候、

源左衛門面談之節、是迄例有之哉と尋候處、奈良奉行所江出候儀は有之候得共、外奉行所江出候儀は例無之、外攝家方淸花の方にも振合無之由、民部少輔修理申立候、

一同月廿五日、評定所江出候ニ付、前日御使遣、修理呼出、評定所江出候樣金子源左衛門達ス、尤本石町四丁目德左衛門貸坐鋪に罷出候ニ付、其所江御使遣、德左衛門江は不拘直ニ修理江申達、

一廿五日、評定所江出ル、民部少輔麻上下、奧樣江出、御尋之上同道人江預被仰付候、同道人植野修理、是又麻上下、脇差取候而出ル、諸事陪臣之通り、

〔御仕置例類集二ノ二〕文政五午年御渡

永井肥前守申上候

一堂上方家來、吟味筋有之節、吟味掛場之儀評議、

去月十九日御渡被成候、永井肥前守申上候書面別紙共一覽仕候處、攝州磯島村之儀、高四百三拾

石餘有之、右之內九拾七石餘ハ、肥前守領分、貳百四拾三石餘ハ、日野家家領ニ而、其餘給ニ入會有之、寬文年中、肥前守領分幷領之節ハ、百姓家拾壹軒之處、當時五軒ニ相成、宗門人別改等、肥前守ゟ其筋江相屆來、且日野家家領之分も、御屆井撿使等之儀迄、同家ゟ願ニ付、肥前守方ニ而引請取計來候處、肥前守領分之もの共、畑成田之儀ニ付、不埒之取計いたし、去巳年中、吟味之上、夫々咎申付候儀有之、其節日野家江懸合も不致、右之通取計候段難心得旨、同家ゟ掛合越候得共、一給錄之儀ハ、手限ニ取計候筈、寬政之度、日野家と懸合濟之趣も有之候間、其段及挨拶置候處、當七月中、日野家家司、磯島村江罷越、肥前守領分名主孫四郎儀、吟味筋有之由ニ而、番非人江申付繩爲掛、京地江連歸り、其外百姓四人ハ、他參留申渡、右孫四郎江家財不殘土藏江入封印いたし、帳面類ハ京都江持參、殘候書物類ハ、家領分庄屋甚右衞門江預置、是迄賴來候諸屆等之儀ハ、以來不相賴、且正德年中ゟ領分江建置候制札も、取拂候樣申越、殊ニ右一件之儀、日野家ゟ傳奏衆江相達、武邊江申立候趣、同家家司ゟ肥前守家來江申越候由をも、同人ゟも吟味之儀相願候趣ニ有之、然處日野家ゟも吟味之儀被申立、右書面をも御渡被成、何之向ニ而致吟味可然哉、評議致可申上旨被仰聞候、

此儀攝州ハ、大坂町奉行支配國ニ候間、孫四郎其外之もの共、致吟味相決候儀ニ候得者、同所ニ而吟味可致筋ニ可有御座候得共、一體武家之家來ゟ、堂上方家來取計之儀を申立、右之者共をも吟味不致候而ハ難決儀ニ付、先例相糺候處、寬政元酉年、評定所一座ニ而致吟味、可申上旨御渡被成候、松平石見守、大坂町奉行勤役之節申上候、永井日向守領分、攝州梶原村外貳ヶ村と、烏丸家領、同國上牧村外三ヶ村池之儀ニ付而之出入雙方井烏丸家家司をも呼出、吟味伺之上、夫夫裁許申渡候例有之、右ハ雙方共大坂町奉行支配之出入ニ候處、堂上方家來ハ、右奉行所ニ而吟味不相成故を以、一座評議ニ相成候儀と相聞候間、今般之一件も、日野家家司等致吟味候趣意も、例同樣之儀ニ付、評定所一座ニ而、吟味いたし可然品ニ可有御座哉ニ奉存候、

午十一月

〔記事條例 三〕明和五子年五月十七日、書面之趣、松平大膳大夫家來吉川監物家來江相達ス、

松平大膳大夫留守居添役 張半藏

坂本町和助ゟ、吉川監物家來江相掛候金子出入吟味之儀に付、監物家來呼出之儀、先達而大目付衆江承合候上、松平大膳大夫家來江相達候處、以來監物家來江申達候樣に致度旨、前々右體監物家來、奉行所江呼出有之候節之例書等被見せ候ニ付、前條之通、先達而大目付衆江問合之上相達候儀に候得共、右之趣被申聞候間、猶又大目付衆江承合候處、都而監物江大目付衆ゟ相達候義者、大膳大夫江相達候由、又候大目付衆ゟ例書等差添被申聞候間、彌此以後も、監物家來江相達候儀は、大膳大夫家來江可相達候間、左樣可被心得候、

五月

〔記事條例 八〕朱書寛政二戌年八月十四日、御目付曲淵勝次郎、平賀式部少輔江達ス、

初鹿野河內守

池田筑後守

評定所江出者、上椽下椽江差出候差別幷附添承人等帶刀無刀之譯、御承知被成度旨、右差出方之儀、左之通相心得申候、

一御家人陪臣共、熨斗目着のもの、幷寺院且許狀有之社人、幷許狀無之候共、配下ニ供僧有之社人、且獨禮席江罷出候程之社人、檢挍勾當、

右上椽江差出申候

一御家人熨斗目着以下、幷陪臣共同斷、

右下椽江差出申候

一御家人之附添人承人ハ、御役筋にて罷出候故、上様下様とも、帯刀にて差出候、

但陪臣者、上様江罷出候ものも、無刀にて差出申候、

一御三家方家來、地方等の儀に付罷出候節、目見以上に候ハヽ、上様舗居内、儒者之前江帯刀にて差出申候、

右書面之趣ニ候得共、金銀出入にて、武家之家來、毎月四日廿一日評定所江多人數罷出候處、其度度熨斗目以上以下礼致し候ては、繰入等混雑致し候間、熨斗目以上以下之差別にて、上様下様之高下を分け候は、御詮議等にて、重立候其者身分之吟味ニ拘り候ニ相限り、且御代官手代も落着承人、其外役儀に付出席之節は、上様江差出來、身分に拘り御詮議等之節は、下様江可差出筋に候得共、御勘定奉行にては、仕來にて、是迄は、上様江差出申候、

右之通御座候、以上、

戌六月

〔評定所書留 二〕根岸肥前守御渡

一山境出入出ものの内

溜間詰 松平越中守家來 八木庄左衛門

右平服にて罷出、麻上下着替候に付、内々御徒目付江承合候はヽ、留守居加藤吉藏江聞合、着替候由申候ニ付、同人江承り候得ば、御懸江伺候處、是迄溜間詰家來、平服にて罷出候義不覺候間、麻上下爲着候樣被申候由申聞候事、

寛政五丑年八月廿五日

出役 後藤斧太郎

向方 佐久間安次郎

仁杉五郎八郎

〔記事條例九〕(朱書)文化元子年三月廿四日
釆女正殿江御直上ル、同月晦日御同人秋山松之丞を以伺之通承付候様被仰聞、御下ゲ承付いたし、同四月朔日、布施内藏之丞を頼、秋山松之丞を以返上、

吟味者評席差出方之儀ニ付、奉伺候書付、

書面伺之通取計可申旨被仰渡、奉承知候、

子
三月晦日　　小田切土佐守
　　　　　　根岸肥前守

私共於御役所徒士足輕評席江差出方之儀、都而主人之格式ニ不拘、徒士以上は下椽江差出、足輕中間之類、右之外家風にて品々之役名等有之候も、徒士格ゟ以下は砂利江差出候仕來ニ御座候、然處前々ゟ御三家方同心水主之類、土佐守御役所ニては砂利江差出、肥前守御役所ニては下椽江差出來申候、右同心水主之類、他家之足輕に相當候も有之候處、是迄名目而已ニ拘り、都而下椽江差出候は不相當之儀、其上兩御役所之取計區々有之候儀、如何成儀、且朱書ニ申上候通、差支も御座候間、此度私共評議之上、以來御三家之同心水主等、且御兩卿方は、御附人之外御手前抱之同心、其外之者共、吟味筋ニ付呼出候節は、同道致罷出候役人江、當人之身分相尋、徒士ゟ以上に相當候とも、熨斗目着用不致旨申聞候分は、下椽江差出、足輕中間ニ准じ候旨申聞候分は、役名等ニ不拘、砂利江差出候様可仕と奉存候、仕來相改候儀ニ付、此段奉伺候、
(朱書)本文之通、是迄下椽江差出候分、砂利江差出候はゞ先例抔と申立、彼是難澁可申間哉、左候迚、砂利江差出候仕來を相止、都而下椽江差出候様相極候儀は、不相當之儀ニ御座候間、本文之通相伺候儀ニ御座候、

以上

子三月　小田切土佐守
根岸肥前守

〔公範異問下〕寛政十二申年、浪人者吟味之儀ニ付御問合、

一内藤豊後守領分、越後國桃崎濱へ、六月十三日、浪人體之者三人罷越、庄屋八郎兵衛方ニ而、爲目ねだり候ニ付、五拾文差遣候處、不足申立、彼是申募及狼藉、組頭五兵衛、井八兵衛下男江手疵爲負候付、村中駈集、棒或ハ苅杭等ニ而打防、三人共召捕、在所役所江早速注進申出候、右體之者、平人同様、白洲ニ而致吟味候而不苦儀ニ御座候哉、

但苗字帯刀之者ニも御座候得ハ、縁頬江着座爲致候義ニ御座候哉、

一右ニ付入牢申付候而も不苦義ニ御座候哉

但揚り屋入申付候筋ニ御座候哉、

七月二日　内藤豊前守家來　遠藤甚口衛門

御附札

御書面、由緒正敷浪人ハ格別、都而一ト通之浪人ハ、苗字を名乘帯刀致候共、平人同様白洲ニ而吟味被成、入牢御申付可然、縁頬江出シ、揚り屋入御申付候ニは及不申候、且御糺之上、他領引合等有之候ハヽ、奉行所吟味之義、御進達可被成筋ニ御座候、以上、

申七月

〔公事方見合書物〕一苗字帯刀之者吟味心得之事

是者寛政二戌年、上州德川郷正田隼人正と、利根川向武州村々小境出入有之、見分爲吟味、江戸地廻り御代官方、井大御番衆被相越候之節、取計伺之內、隼人取扱方御下知左之通、

朱書
一訴訟方正田隼人儀取扱方は、場所案内之節、腰物帯候儀は不差障、吟味口書等申付候節脇差不

帶、椽類に差置可申心得にて御座候得共、自然難澁いたし候ては、却て吟味妨に相成候間、右之趣隼人江被仰渡御座候樣仕度奉存候、

御附紙

書面正田隼人吟味口書等申付候節ハ、帶劍ハ不爲致、椽類ニ差出場所案内一通之節ハ、帶劍いたし候共、差障被申間鋪勿論、右場所見分いたし候節ニ而も、相尋候儀有之候歟、書付等取候儀有之、應對いたし候砌は、帶劍致させ申間鋪候、右之趣隼人江申渡置候、

〔牧民金鑑 一〕寛政十二申年

釆女正殿〇大留守居戸田氏教　御書取

書面苗字帶刀格式等申付有之私領ハ、百姓取扱方之儀、領主地頭ニ而家來ニ召抱、格式差免有之者を、一般ニ百姓並之通取扱候義不穩筋ニ付、其事情ニより侍分不相應之筋も有之者ハ、必格式之通取扱候ニも不及事ニ而、是迄之仕來區々ニ付、一定之取扱ニ而ハ、却而相當を失候ニ至可申候得バ、以來も其時之事實次第ニ而、百姓並ニ而、相當可致ものハ、假令吟味半ニ而も、其段申聞、改而押おろし吟味仕、差支之筋も有間敷義ニ付、是迄仕來之通相心得、時宜次第、相當之取扱いたし可申旨被仰聞、承知仕候、

申十二月廿一日　評定所一座

〔牧民金鑑 一〕苗字帶刀御免之百姓を相手取候出入目安裏書之事

御演說書　根岸肥前守〇鎮衛、町奉行、

上野新黑門町家主　願人　久右衛門

井上瀧吉領分　下總國相馬郡加納新田地主　相手　加納久右衛門

一貸金出入

外貳人

右目安差出候間、久右衛門身分之義相糺候處、加納新田之儀ハ、久右衛門壹人之持分ニ而、文化三寅年迄ハ、加納爲次郎と申、御普請役相勤、同年十月願之通御暇申渡、明跡江忰加納彥助御抱入ニ相成、爲次郎義ハ、加納新田ニ罷在、當時加納久右衛門と相名乘候由、柳生主膳正申聞候、領主井上瀧吉方相糺候處、右久右衛門義ハ、寶暦十三未年、御代官所ゟ加納新田引渡之節、苗字帶刀致し來候由ニ而、領主ゟ差免候義ハ無之段、右家來書付差出申候、尤領主ゟ給米給扶持差遣候儀も無之、役筋等申付候儀も無御座、徒格ニ而取扱來候由申聞候、然ル上ハ領主家來ニも無之、加納新田ニ住居致し百姓幷浪人も同樣之儀ニ付、目安ハ書面居置、加納新田久右衛門と計、裏書ニ認、對決之節ハ、白洲江差出吟味可致と存候、〇中略

戌〇文化十一年二月

〔天保集成絲綸錄百一〕文化八未年二月

御書取

公事合ニ而呼出候節ハ、牧士之身分ニ付候儀ニ而も、目安裏判請可申候、吟味筋ニ而呼出候節ハ、野馬懸り江相達儀も可有之候、尤吟味之節ハ、以來板椽江差出筈候得共、百姓之身分ニ付候出入之節ハ、白洲ニ而吟味致候儀も可有之事、

〔記事條例九〕天保四巳年五月十二日

常州鹿島神官檢非違使　栗林惠織

右之者儀、馬喰町幸助ゟ相懸候、貸金出入公事合ニて罷出候處、座席之儀分り兼候間、寺社奉行衆にて罷出候席之儀相尋候處、惣席江罷出候由、且當二月中も貸金出入公事合ニて、此方御役所白洲上椽江罷出候旨申立、座席大槩ニも鹿島書取之神官、吉田白川江不寄候とも上椽、但書ニ輕キ社人

下樣と有之、輕キ社人共不ㇾ聞候間、旁上樣江差出候事、

〔法曹後鑑〕寛政十二申年六月、松平周防守江〇康定、寺社奉行、曾沼下野守〇定寛、勘定奉行、問合、

曾沼下野守　神子

右ハ吉田家白川家ゟ神子之許狀受、又ハ田村八大夫配下之神子ニ而も、各樣ニ而御吟味有之候節ハ、上樣江罷出候哉、下樣江罷出候哉、承知仕度候、

御書面神子と申ハ男ニも有之、本文之趣ハ巫女杯如之類ニ可有之、右ハ一統吟味之節ハ、浪人臺江差出來候、

申六月　　　　松平周防守

〔公裁秘錄二〕吟味之節、身分に寄、座席并出席之事、

一宗旨順之事

天台　淨土　眞言古義新義　禪五山黄檗　濟家曹洞　時宗

日蓮　一向　社人　修驗

〔政談秘書二〕天明四辰年二月十日、小笠原佐渡守樣〇長行御留守居十河鄕右衛門、堀田相模守樣江差出候處、同十九日、以御附札被仰越候、

一御朱印無之寺院吟味之節鋪居外江差置候而不苦哉、

御附札

御朱印有無ニ不拘、吟味之筋ニ依て、敷居外ニ差置不苦候、〇中略

一寺院吟味之節ハ、重キ仕置申付候節、日切時脫衣之上、繩掛入牢申付、追而本寺觸頭江相斷可申哉、

重咎筋及白狀、入牢申付候節ハ、袈裟を取、入牢爲致候儀ニ而、脫衣とハ不申、脫衣と申者、咎之

名目ニ而脫衣申付候上、其法用公用不相成候事ニ候間、脫衣御申付候節ハ、本寺觸頭江御斷之上、御申付候方と被存候、

一寺院繩目ニ申付候上、寺院同道不及、白洲ニ而吟味可仕候哉、

入牢御申付候ハ、咎寺院不及同道、未咎不相決候ハ、白洲ニ而吟味不相成候、〇中略

一寺院吟味之節、同道之僧、同末寺無之候ハヽ、同宗之寺院、同道申付可然哉、

寺院吟味之節、同道之僧、末寺無之候ハヽ、同宗之寺院、同道不苦候、

一同宗之寺院、領分ニ無之節ハ、他宗寺院江同道申付候而も不苦候哉、

同宗之寺院最寄無之候ハヽ、組合ハ格別、他宗同道ハ難申付筋ニ候之間、其時之村役人等差添申付候方と存候、

〔諸家禮明問答〕寺院取扱

文化四卯年三月廿日、寺社奉行阿部主計頭様江〇正精伺、同月廿一日御呼出御付札、〇中略

一領内社人出家江吟味筋有之、役掛江呼出吟味之節、三衣着之儘吟味可致哉、三衣爲脫吟味相濟候上爲着可申哉、

御附札

書面出家社人吟味之節、袈裟又は麻上下等爲脫候筋には無之候、

〔政談〕四出家ノ公事ニ出ルニハ、三衣ヲ着セザルコト律ノ古法也、公事ハ元來佛ノ制誡ナル上、奉行所ニ出テ俗人ノ捌ヲ受、法ノ通取行スル子細ナル故、衣ハ着セヌコト也、出家ヲ流罪ニモ申付ル時ハ度牒ヲ收擧テ、還俗サセテ後申付ルコト也、出家ハ徒罪流罪等ニ申付ル法無故、還俗サスルコトニテ、還俗ノシルシニ、度牒ヲ取上ルコト也、當時脫衣追放ト云コトアレドモ、脇ヘ行テ心儘ニ衣ヲ着ス、出家ハ住所ヲ定メヌ者ナル故、追放ニモ困ラヌ者也、寺法ニ背ク時ハ、其派ヲ擯出

シ、國主ノ法ニ背ク時ハ、其國中ヲ追出スコトハ有事也、六十餘州ハ、皆公儀ノ御預分成ニ、追放ト云コト、元來聞ヘヌコト也、度牒ヲ奪テ還俗サセテ、本在所ヘ返シ民トスベキ也、夫ヨリ輕キハ、律ノ古法ニ、百日苦使ト云コト唐律ニモ有、百日之間困シメ使フコト也、是ハ仕方有ベシ、夫ヨリ輕キハ退院サセ、或ハ綸旨公帖ヲ奪テ、平僧トスル仕方可有、出家ノ淫行ヲ磔ニスルコト、餘リニ過タル刑也、還俗サセテ徒罪タルベシ、

〔公裁秘錄〕二 一一向宗、幷修驗之母妻子、梓神子、神事舞大夫吟味座席之事、

一一向宗修驗之母妻子

是は一向宗之出家之妻子は、吟味之節、評席上椽、梓神子は下椽江差出來候處、修驗神職等之儀は、取極候申合も無之、一體妻母等之儀は、倅夫之身分江付可申儀に付、以來左の通、

一修驗之妻母は　上椽

一娘は　下椽

但親掛りの娘にても、聟養子等にいたし、修驗受樂いたし候はゞ、其者之妻者上椽江出す、

一配下に社僧等有之一社別當之娘は　上椽

一許狀請候神職之母妻は　同斷

一夫倅とも許狀不請者之妻幷娘は　下椽〇下略

〔公裁秘錄〕二 一修驗吟味席之事

一三衣を着候分は　上椽

一三衣を不着物貰ひ體之ものは　砂利

右文政三辰年、石川左近將監掛り、當山修驗常福院女房まつを下椽江出候例有之、

一羽黑修驗町方裏店住居にても上椽江差出、文化元子八月中川飛驒守ゟ堀田豐後守江問合挨拶、〇下略

〔公裁秘錄 一〕一修驗女房出訴之事

朱書
文政十二丑年、修驗欠落後、女房ゟ娘を遊女奉公に差出、其外申立、地頭添翰を以、曾我豐後守

殿江願出、松平伊豆守殿寺社奉行先勤之節、掛合挨拶、

御書面之趣令承知、別紙訴狀をも致一覽候處、修驗道相續方之儀申立、其上修驗之身分にて、跡相續可爲致娘を遊女奉公に差出候段は、不埒之筋に付、拙者共方にて吟味いたし候方にも可有之哉に相聞候得共、眞如院出奔いたし帳外に相成候ても、跡相續人取極置候迄、仲間修驗共、新願檀家等之儀引請取計、右助成を以、猶取續罷在候儀に候はゞ、同人病氣に候共、眞如院跡引請居候修驗代に相成、其筋觸頭之添翰をも申請可願出處、觸頭江は不拘、領主役人之添翰を以、なを代、百姓與八及出訴候上は、なを儀は、農業其外餘業を以、渡世を送罷在、觸頭配下は離れ候ものと相聞、素ゟ院跡等有之修驗に候はゞ、相續人無之候迚、右樣之取計は有之間敷儀、然る上は、眞如院跡は、退轉いたし候趣意に付、修驗相續方之儀申立候共、右はなを一己之存念と相聞候間、矢張各方にて御取上之方に可有之哉、猶御勘辨有之候樣存候、依之被差越候訴狀壹通令返却候、

丑九月　　松平伊豆守

〔評定所留役覺書〕大山寺領師職を相手取候出入目安裏書認方之事

大山寺領相州大山町師職之ものを相手取候出入、目安裏書認方越度と認、又者曲事と認候も有之、是迄區々候處、師職者、白洲下椽江可差出身分ニ付、以來越度と認候積、文化八未六月四日一座談判之上極ル、

〔評定所書留 五〕鉦打之事

時宗ニ而沙彌と唱、道心者之類也、砂利へ出ス出家並之通、寺社奉行ニ而取扱候間、御仕置之儀

は、百姓町人之通申付候、村役人支配之時ハ差別可有之候、
一穢多寺之事
是は砂利江出ス、脇坂中務大輔懸之内ニ有之候、
一火葬寺之事
是は上椽、寛政十二未年松平周防守懸吟味之節、上椽ニ出し候由、調役西田金次郎申聞候、
〔法曹集〕座頭席順
砂。利。
牢打掛　丸打掛　歌仙打懸来分
落。椽。
在名　四度野官
上。椽。
歌仙勾當　百引勾當　おくりもの勾當　懸目勾當　立寄勾當　大座勾當　權野勾當
小別當　總別當　檢校官
〔諸例類纂六〕天保十一子年三月六日、町與力谷村源左衛門江問合、同九日下札答、
御役所ニ而、檢校勾當之御取扱振、爲心得相伺度段、在所役人共ゟ申越候間、御問合申候事、
三月六日　酒井修理大夫内　赤見五左衛門
下ケ札
御書面、檢校勾當ハ、上椽と相唱へ候疊敷之椽へ罷出、右上椽へ罷出候ハ、御家人武士方家來ハ、熨斗目着候程之もの、且一寺住職之僧、許狀受候神主等ニ而、孰も同等ニ御座候、
〔島田記傳三〕一文化十二亥年正月四日、村々庄屋共并三日市場村清兵衛、島田村源三郎御代官所

差添人

江御召出御尋有之候、此節源三郎之病氣ニ而不出、○中略

右之通申上置候處、同十五日、御代官所江七人御召出シ之節、源三郎儀病氣之段、御斷御屆申上候處、病氣ニ候ハヽ、駕籠ニ而も可罷出段被仰付候ニ付、則迎ひ人足遣シ、駕籠ニ而御代官所江罷出候、

〔公範異聞下〕寛政八辰年、穢多非人も御奉行御直御吟味有之哉、御勘定奉行曲淵甲斐守様○景漸御用人迄問合候處、

落合佐和右衛門様　　増田鄕八

御手紙拜見仕候、如仰不同之氣候御座候得共、彌御安泰被成御座、珍重義奉存候、然ハ穢多非人之類、奉行所ニ而糺等之後、奉行直吟味致候哉之旨被仰聞、致承知候、右ハ吟味之始末、平人と違候義ハ無御座候、奉行直吟味致候義ニ御座候、御仕置之儀ハ、平人と譯違申候、此段貴答早々申上候、以上、

四月七日

〔公裁秘錄一〕一穢多と百姓一同相手取候訴狀

是は、裏書文段之内、穢多共江も返答書爲致、幾日召連、可爲致對決と認入可申候、尤村役人宛之裏書に可致候、白洲江出候節は、百姓を筵の上江差出候はヽ、穢多は砂利之上江歟、又は跡江三尺計り引下ゲ置候と歟、差別可致事、

〔公談秘密集上〕公事訴訟罪科之者取捌大概○中略

一公事人ニ介添ハ、老人若輩、幷病者之外ハ停止、縱御直參之輩たり共、刀脇指帶すべからず、公事人之親類、縁者、知音之好身たりとも、評定衆取持べからず、○單月閏

〔聞訟秘鑑〕差添人之事

是ハ公事出入吟味之節、無謂差添人相願候共不取用、老人女若輩之者病身等ハ格別之儀ニ付、支配所之者ニ候ハヽ、爲差添候而も苦ヶ間敷、尤支配違之者差添候而ハ、御代官手限之吟味ニハ難成候間、其段申上、御奉行所江差出候方可然事、

〔享保集成絲綸錄四十四〕天和三亥年五月

一評定所江公事訴訟ニ罷出候者共之內、見舞と名付、用なきもの大勢罷出候、向後ハ其公事訴訟にたづさはり候者、井老人病人女わらべ不口上物之かひぞへ之外、無用之者、一人も不可罷出、若相背罷出候者於有之ハ、吟味之上、急度曲事可申付者也、

五月〇又見正寶事錄

〔正寶事錄一〕一公事ニ罷出候時ハ勿論、御差紙附候刻、其主ハ不申及、五人組へ相斷、五人組自身可罷出候、若手代出候ハヽ如何樣之曲事ニも可被仰付候、五人組之內、幼少者、又病人、女家主抔ハ、御斷可申上候、自然臆病をかまへ、手代出候はヾ、是又可爲曲事、

八月二〇承應二年

右ハ巳八月廿五日御觸、町中連判、

〔正寶事錄二〕於其町々公事訴訟人有之候はヾ、先家主五人組承屆、內々ニ而可相濟義ハ、名主相談之上、落着すべし、未濟之義有之候ハヽ、家主訴訟人も召連出べし、若申分有之店之者抔、押へおくニ於ては、家主可爲曲事者也、

明曆二年申極月九日

右御觸町中連判

〔享保令典永鑑四十四〕萬治四丑年三月

一町中公事訴訟之者ニ差紙、名主五人組方江遣之所ニ、五人組計罷出、名主不罷出候間、向後差紙

遣候ハヽ、雙方名主五人組可罷出候、縦差紙不越候共、公事訴訟ニ罷出候ハヽ、名主五人組召連可罷出候、名主無之町は、前々之通五人組可罷出候、借屋店がりの者之出入ニ候はヽ、家主五人組可罷出候、自今以後、此旨急度相守可申候、若違背仕候ハヽ、急度曲事ニ可申付事、

三月

〔享保集成絲綸錄四十四〕正德四午年二月

一町中之者公事有之、御番所江罷出候刻、名主付罷出候筈ニ有之處、近頃ハ大方名主不罷出、不屆ニ候間、向後雙方共、名主付候而可罷出候事、

一公事有之罷出候刻、前々被仰付候通、本人計、向後も可罷出候、老人病人抔ニハ、介添之者可罷出候、其外見廻之者、堅罷出間敷候、

二月〇又見正寶事錄ニ

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保四亥年八月〇中略

一公事訴訟ニ罷出候者、家主五人組之外、近き親類にても、贔屓ヶ迄も見廻り候事、堅可為無用候、并給物等持參候ハヽ、隨分輕き品を用ひ可申候、酒肴等持參候之儀、堅可致無用事、〇下略

〔享保集成絲綸錄四十四〕元文五申年十二月

一諸願之者罷出候時分、家主五人組付添出候儀有之候處、近頃ハ無其儀、殊ニ願人仲ヶ間之内ニ而、家主五人組と申僞り、罷出候族有之、不屆至極候、自今左樣之者於有之ハ、吟味之上、急度可申付候、條彌以家主五人組江申達、一所ニ可罷出候、左樣無之候ハヽ、何樣之願ニ候とも不取上候、此旨町中可觸知候、

十二月

〔憲教類典四ノ六〕評定年號不知子五月十四日

代人

一遠國之町人百姓及出訴刻は、當所之宿、同道候樣ニ申聞、同道ニ而參上取上ゲ吟味、但預ケ金ハ手形、賣掛金ハ賣掛帳訴狀ニ引合、初判出し候事、

〔牧民金鑑二十〕文政元寅年五月廿三日申渡

各支配所之もの出訴其外都而吟味筋ニ付、奉行所江被差出候節、幷差紙を以呼出ニ成、又は他支配他領之ものニ被相手取罷出候節等も、差添人無之罷出候ものも有之候、右體ニハ有之間敷事ニ付、以來各〻被差出候分ハ、都度々々差添へ有無相糺、若差添之もの無之候ハヽ、村役人之內、早早呼寄、爲差添候上被差出、且都而吟味筋ニ付、奉行所江村方之もの罷出候度々、村役人壹人急度差添可罷出段、支配所村々役人共江、不洩樣兼而申渡可被置候、是迄迚も右之通之事ニ候得共、以來之儀、尙又申達候、以上、

寅五月廿三日

土　紀伊守〇勘定奉行土屋廉直

榊　主計頭〇大目附榊原忠之

〔御定書百箇條〕無取上願再訴幷筋違願之事

從前々之例

一親類緣者之由にて訴狀差出候節、當人難願出譯も無之候はヽ、當人に爲願可申旨申渡、取上申間敷事、

〔訴論判例下〕裁許破、掟背、御仕置大概、

一當人難罷出障も無之所、親類緣者之由にて、訴狀指出し候共、當人に爲願可申旨に付、無取上、〇年月闕

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保四亥年八月〇中略

一公事訴訟ニ罷出候者、近來當人不罷出、名代計差出し、不屆至極ニ候、自今は不申及、家主五人組之內、差添可罷出候、於不參は急度可申付事、

但度懸り之公事ニハ、當人ゝ家主計可ㇾ罷出ㇾ候事、〇下略

〔御仕置例類集一〕天明元丑年御渡

所司代伺

一金銀出入吟味之節、當人病氣ニ付代人差出候儀ニ付評議、

當月三日御渡被ㇾ成候、牧野越中守書面一覽仕候處、九條殿ゟ松平越後守江之貸附金返濟相滯候ニ付、右證文宛所之もの、寺社奉行月番江可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候處、當時病氣ニ罷在候ニ付、懸り平野多仲と申もの被ㇾ差出ㇾ度段、九條殿家司差出候書付、傳奏衆ゟ被ㇾ差越ㇾ候ニ付、如何可ㇾ相達ㇾ哉之段、相伺申候、

此儀、都而之公事出入、身分江附候出入ハ勿論、其外も多分は、代之出訴ハ取上不ㇾ申候得共、金銀之出入は、當人病氣ニ而難ㇾ罷出ㇾ旨、主人ゟ斷有之候得ば、代之もの差出來候間、九條殿貸附金證文宛所之もの病氣ニ候上は、掛り平野多仲差出候而も不ㇾ苦候間、其段傳奏衆江可ㇾ相達ㇾ旨、所司代江被ㇾ仰渡ㇾ可ㇾ然哉ニ奉ㇾ存候、

丑十月

朱書 評議之通濟

〔目安秘書乾〕神職は百姓之代ニ難ㇾ成

寛政十午年五月　古集十七

安藤對馬守殿御差圖　御勘定奉行 菅沼下野守掛

一武州大谷澤村伊兵衛外三人儀、同村馬之助儀を申立候一件、

武州高麗郡大谷澤村 三嶋明神神主 横田筑前

右之もの儀、市太郎代ニ成、伊兵衛外二人一同元名主十兵衛、井同人悴馬之助、不正之取計有ㇾ之趣

地頭江申立候處、神職之身分ニ而、百姓之代ニ罷出候儀は、筋違之旨申聞候儀を、願之趣不取上儀と心得、奉行所江駈込訴いたし候段、不埒ニ付三十日押込、○御書附略

〔天保集成絲綸錄百四〕文政五午年正月

大目付江

貸金銀賣掛等之出入出訴之節、公事馴候ものを同居之親類、或ハ召仕と申成し差出、又ハ相手方江得と掛合も不遂訴出候故、相手死失、幷欠落もの、或ハ名前違等毎度有之、其上纔之滯高ニ而、在方之もの相手取候得バ、出府路雜用を厭ひ、實ハ滯之覺、全無之ものニ而も、相應ニ濟方いたし候を見込、猥ニ出訴いたし、其外貸金を愚昧貧窮之處ニ付込、質地之積り證文取置、又ハ高利ニ而貸附候を、小作米之名目ニ直候類も間々有之哉ニ相聞、近來出訴之儀、猥ニ相成、奉行之裏判を輕々敷相心得候段、不埒之事ニ候、依之素より同居之親類召仕ハ格別、出訴におよび候節ニ至、公事馴候ものを代ニ差出候儀、決而不致、相手方之もの死失欠落、又ハ斷絕名前違等無之樣、相手當人ハ勿論、其村役人等江も得と遂掛合候上可願出候、若公事馴候ものを親類或ハ召仕之由僞候歟、其外不埒之出訴ハ、本人ハ勿論、村役人共迄も、吟味之上急度可申付候、

右之通可被相觸候

正月

〔法曹後鑑〕相手方之事

一證文宛所之家來を相手取候を、外之家來罷出候ハヾ、右宛所之家來呼出可申候、

但無據儀有之、當人難罷出段、主人ゟ斷有之候ハヾ、其無據譯相糺、實々無據筋ニ候ハヾ、外之家來ニ而、相糺可申候、

〔法曹後鑑〕寶暦十二午年、相州高座郡國分村國分寺相手同村市左衛門外四人、借金銀出入出訴代

を以之相手方取計ひ方於一座評議、

借金銀出入代之出訴

一御朱印地之寺院社人、身分重ク、役僧弟子家來抔、代ニ差出候出訴ハ取上可申候、

一並之寺院社人等ニ而も、同居之弟子、又ハ家來を代ニ差出候出訴ハ取上可申候、

一御用達町人之類、下代を代ニ差出候出訴ハ取上可申候、

一其外諸家之用達、或ハ並之町人百姓抔も、下代を代ニ差出候歟、又ハ下代も不持程之身分ニ而も、悴抔を代ニ差出候出訴も取上可申候、

朱書 悴ニ不限、同居之親族ニ候ハヽ取上可申候、近き親類ニ而も他ニ罷在、請合候村役人不罷出候ハヽ、取上申間敷候、

右之通極置、都而他之ものを代ニ差出候出訴ハ、病氣快氣之上、當人可願出旨申渡、取上申間敷候、

但吟味中病氣ニ而、代ニ差出度旨相願、或ハ度懸りニ相成候而ハ、他之ものを代ニ差出候共不苦候間、其儘ニ差置可申候、

〔聞訟秘鑑〕一名代之者咎之事

是ハ當人無據差支有之、名代を以吟味相願候節ハ、其出入之御咎ハ、當人江可被仰付候處、名代之者心得違、本人ハ差而存寄も無之儀を、強而申立候ハヽ、名代引替候樣申渡、若外ニ可差出代之者無之、當人幼少歟、又ハ病氣等ニ而、押而も吟味難受、當人快氣カ、生長致候迄難差延出入ニ付、達而其者名代致、吟味詰度旨相願候ハヽ、得と利害を申聞、訴狀外之儀ハ、追而別段可相願旨申渡、其出入ニ付、無筋儀共於申募ハ、當人咎之外、名代誰儀、本人都而存寄も無之處、我意を以、縦令利害を不聞入、何々之事ニ付、難立儀を申募、其外誰江對し、疑ひを以、何々之重き申掛致候段不屆ニ付、別段、相當之御咎可被仰付哉と、本人之咎と混雜不致樣、相伺可然事、

〔聞訟秘鑑〕一他支配之者出入之名代ニ願候事

是ハ出入名代として、他領支配之者、地頭役人添狀持參、吟味願出候共、其出入之品ニより、咎ヱも可成節は、支配違ニ而ハ指支候間、容易ニ他之者名代ニ願、指出候共不取上、然共至而輕き事、又ハ出入之指添ニ出候抔ハ苦ヶ間鋪事、

〔評定所留役覺書〕安永二巳年月日一座評議

土岐美濃守掛り

一日向國延岡德右衞門相手、大坂吉野屋町久左衞門外四人、炭仕送り問屋銀子取込出入、

是者訴訟人病氣ニ付、召仕善兵衞代ニ而、訴訟相附候樣いたし度旨相願、無據相聞候ニ付、願之通申渡候積り、

〔牧民金鑑〕一他國之者代を兼候出訴

安永九子年　戸田因幡守〇寺社奉行掛

一勢州桑名宿淸右衞門外貳人相手、濃州室原村年寄貳拾壹人貸米銀錢出入、

是ハ訴訟人之代兼、上州瀧眼村金藏召出、淸左衞門壹人ハ、他國之者ニ候得共、證文ハ連名之宛所ニ付、金藏訴訟人ニ而、裏判差出候積、

〔目安秘書乾〕惣代ニ而願出候分、目安糺之節、賴一札有無可糺事、

天保十四卯年　廻狀

糺目安之內、村々又は小前惣代ニ而願出候分、是迄賴一札有無之儀、先ヅハ不相糺候處、追而吟味成候節、訴狀肩書村々、其外小前之內、其願筋ニ不拘旨申立、又は兼而助鄕惣代ニ出候もの等は、別段小前之もの共ゟ賴一札も不取置、追而願入用高割合之節ニ至り、彼是混雜いたし候儀等も有之哉ニ相聞、右は願人共之不埒ニ付、取締ニも拘り候間、以來地方幷道中方とも、都而惣

證人

代之目安は、右一札有無相糺候樣、助左衛門殿被申聞候間、此段御達申候、

卯十月廿一日 大森

〔享保集成糸綸錄四十四〕慶安元子年六月

一此以前も如相觸候、公事仕候ものハ、證據人五人組召連罷出可申事、

一公事訴訟人有之候共、證據人五人組之外、見舞ニ一人も罷出申間敷候、若相背候者於有之ハ、急度可申付候事、

一公事仕候者、家持ハ町中并五人組ニ斷、棚衆ハ家主ニ届可申事、

六月

〔享保集成糸綸錄四十四〕慶安二丑年正月

一町人公事仕ニ付而ハ、證據仁、入候出入於有之ハ、證據仁を召連可罷出候、若證據仁出間敷由申に付而ハ、公事定日之前日ニ、御奉行所江御訴訟可申上候事、若油斷いたし、御奉行所江不申上、證據仁召連可罷出候公事をば、御呵有間敷御定ニ候間、油斷不申、公事之出入ニ入候者、必召連可罷出候事、

正月

〔正寶事錄一〕一此以前も被仰付候、公事出入候而、相手方ゟ斷者御座候はゞ、當人之義ハ不申及、證據人迄引揃、家持之出入之時分ハ、名主五人組召連罷出可申候、店借借屋之者出入は、家主召連可罷出候、證據人之儀ハ、右同前ニ相斷罷出可申候、自然證據人罷出間敷之旨申候者、御寄合之前日、御番所江可申上候、證據人之外、又ハ公事之見舞などに無用之者、差出申間敷候、〇中略

丑〇慶安二年十月

右十月廿日御觸、町中連判、

〔訴訟判例下〕裁許破掟背御仕置大概

一僞之儀を存ながら、證人に立候者ハ追放、〇中略

一證人に知る人の名を記し、外之印判を押し候者ハ、重き追放、〇年月闕

〔牧民金鑑一〕證人を相手取候訴狀之事

一貸金之外も、小作滯濟方願之一條ハ、證人相手取候義無益ニ付可レ爲レ除事、〇年月闕

〔地方公裁錄〕分散之割合を不レ請取、當人死後證人を相手取事

一分散之節、割合少分之由にて不レ請取ものより、借主病死いたし、跡相續人無レ之由にて、證人辨濟可レ致旨之證文有レ之に泥み、證人を相手取及二出訴一とも、右證人相掛り候ハ不相當之事、〇年月闕

〔牧民金鑑一〕證人江濟方申付候義ニ付問合

安藤彈正少弼殿〇惟要、大目付、　牧野大隅守〇成賢、大目付、

借主病死又ハ跡株無レ之、證人を相手取出訴いたし候節、右證文に本文滯候ハヽ、證人より辨濟可レ致旨之文言有レ之候ハヽ、證人江濟方可二申付一候得共、右辨濟之文言無レ之證人を相手取候節、濟方申付候例之事、

丑〇天明元年五月

書面證人掛之義、證文ニ辨濟之文言無レ之候而も、吟味之上、證人ニ相立候義相違無レ之、外ニ子細も無二御座一候得バ、拙者御役所ニ而ハ、濟方申付來候義ニ御座候、

丑五月　牧野大隅守

〔古張紙〕文政二卯年十一月

借金出入、借主病死、或ハ跡株無レ之證人を相手取出訴之節、取扱相談書、

十一月二日町奉行存寄書之通評議極ル

御相談書

石川主水正
遠山左衞門尉

借金銀出入之內、借主病死、又者跡株無之證人を相手取訴出候節、證文ニ本人滯候はゝ、證人より辨濟可致旨之文言有之候得バ取上、證文ニ右文言無之候而も、吟味之上、證人ニ相立候儀相違無之、外ニ仔細無之候得バ、是又濟方申付來候儀ニ有之、然ル處本人滯候はゞと之文言ハ、本人存在ニ而濟方差支候節之儀ニ可有之、本人出奔いたし、相續人等無之由申立候分は、本人住所相知次第可掛期も有之、尙更之儀ニ付、以來本人故障有之候はゝ、證人より辨濟可致旨之文言有之證文者、本人出奔いたし證人江相掛訴出候とも、取上濟方申付、右文言無之證文を、借主病死、又者跡株無之候迚、證人相手取訴出候分は、都而不及取上方相當ニ可有之哉と存候、依之及御相談候、以上、

卯十一月

石川主水正殿
遠山左衞門尉殿

岩瀨伊豫守
榊原主計頭

借金銀出入證文ニ、本人滯候ハゝ、證人可引取と之文言有之候得バ證人江濟方申付、右文言無之候而も、吟味之上、證人ニ相立候儀無相違、外ニ子細無之候得バ、濟方申付候儀ニ有之、然ル處本人滯候はゞと之文言者、本人存在ニ而濟方差支候節之儀ニ可有之、本人出奔いたし、相續人等無之分ハ、本人住所相知次第可懸期も有之、猶更之儀ニ付、以來本人故障有之候はゝ、證人より辨濟可致旨之文言有之證文者、本人出奔いたし證人江相掛訴出候共、取上濟方申付、右文言無之證文を以、借主病死、又者跡株無之候迚、證人相手取候分は、都而取上ニ不及方相當ニ可有之旨、御相談之趣、承知いたし候、一體證人掛之儀、金銀貸出し候もの共、右返金滯候節者、如何樣とも取計可申爲

引合人

メ之證人ニ可有之引請之文言無之候迚、濟方不申付候而ハ、證人取置候詮無之、尤證人者、其身一代切、借主ハ病死出奔等いたし候而も、家株有之候得バ、其子孫迄も相掛、相續人無之分、證人引受可申との文言無之候とも、證人ニ相立候節之趣意相糺、可引請筋ニ候ハヾ、濟方申付候方可然哉、且家藏書入金之儀、貸金銀同様之裁許ニ可申付旨、先前町觸有之、此度右之通引受之文言無之候得バ不取上方ニ相成候ハヾ、金銀貸出し候もの之心得も可有之候間、先年之振合を以、町觸ニ而も無之バ、金銀貸出候もの共難儀可致、併右之通相成候ハヾ、世上貸金銀融通差支候様成行可申も難計、不穩儀ニ候間、是迄從來取扱候通、本人滯候ハヾ、本人故障有之候ハヾ之文言ニ無差別、假令證人引請之文言無之候とも、吟味之上、濟方申付候方可然と存候、依之別紙書拔相添、拙者共存寄之趣、御挨拶および候、猶寺社奉行衆江も御相談之上、御取極之儀と存候、以上、

卯十一月

〔政普集乾〕請人證人之事

一請人と云は本人之變有候時ハ、本人ニ相替り、諸事ヲ引請と言儀ニ而重し、

一證人と書時ハ、本人之若異違と云事有時、相違無御座と證據ニ成迄ニ而、請人と書ゟは輕るし、

〔牧民金鑑一〕寶曆十四評議三十四番

遠國奉行掛吟味ニ引合候武家家來取計、

阿部伊豫守右〇正差上候書狀之趣を以、評議仕申上候書付、

江戶表ニ罷在候、渡邊城之進家來江相尋候趣、委細相認、寺社奉行江可差越、於當地吟味之上、口上書爲差登候樣、寺社奉行江被仰渡候、尤打合不相糺候而ハ、難相濟義ニ候ハヾ、猶又可申上段被仰聞、承知仕候、

申二月三日

去ル未年十二月廿九日御渡被成候、阿部伊豫守書狀之趣を以、吟味ニ付江戸表より武家之家來等、京都江爲差登候類例等有之候哉、例無之候ハヽ、御取計方之義、評議仕可申上旨被仰聞候、此儀吟味ニ付、武家之家來ニ不限、町人百姓ニ而も、遠國之奉行所江差遣候例、相見不申候ニ付、評議仕候處、御定書ニ、山城大和近江丹波、雙方共右四ヶ國之者ニ候ハヽ、京都町奉行ニ而取捌、支配違、又ハ餘國江掛候出入ハ、寺社奉行月番可致初判旨有之、尤今般伊豫守申上候趣ハ、京都町奉行ニ而吟味仕候、箱訴一件ニハ御座候得共、右引合ニ而渡邊城之進江戸表ニ罷在候家來を、京都町奉行所江爲差登候而ハ、以來京都ニ不限、遠國奉行掛之吟味もの引合ハ町人百姓も爲差登候樣ニ相成可申哉、左候而ハ、御定之趣とも相違仕、如何ニ奉存候間、城之進家來江相尋候趣、委細相認、寺社奉行江差越、於御當地吟味之上、口上書爲差登、勿論打合相糺不申候而ハ難相濟候ハヽ、一件於江戸表吟味仕候方ニ可有御座哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、伊豫守書狀返上仕候、以上、

〇明和元年申正月

〔張紙留〕天明四辰年閏正月十八日

權門方領分之者、盜賊引合取計評議、

盜賊御仕置伺書之朱書ニ而、御咎申付候、輕引合之分、權門方領分知行之もの有之候共、一體伺物ニ無之分ハ、引合迄ニ而、可伺筋ニ無之間、以來不及伺、御咎申付候積り、右當日評定所內寄合ニ而評議極ル、

〔評定所格例〕天明八申年八月

一都而囚人吟味之引合ニ而、遠國之もの、又は多分之村々有之、右之もの共突合不申候而も、囚人

之申口、慥ニ相決候節ハ、引合之もの共、呼出相揃候上、吟味詰候迄は日數相掛り、其内ニは肝要之囚人病死いたし候儀も有之、御仕置之詮も薄く候間、全引合迄ニ而、輕キ御咎之もの又は強而突合ニも不及類は、先ツ肝要之囚人之申口相分次第、伺書差上、引合之もの共は、吟味決次第相伺候樣、其時宜ニ隨ひ取計可申哉、且右體遠國又は多分之村々等、全引合迄ニ而輕キ御咎ニ相成候ものを呼出候而、路用も相掛り、難義之儀ニ付、右類御代官所ハ勿論、私領之ものも、最寄御代官江申達、右陣屋ニおゐて吟味詰口書取之爲差出、最寄御代官陣屋無之類ハ、其時宜ニ寄、領主地頭ニ而相尋、口書取候義無差支分は申達、於彼地口書爲申付、又は小給之地頭ニ而、其義も難成分は、呼出候樣ニも仕、彼地ニ而口書爲申付候ハヽ、落着之節、惣代壹兩人呼出、申渡候樣可仕哉、但落着之節、呼出ニも不及類は、彼地江申遣爲申渡候義は、寶暦十二午年被仰聞候通、相心得罷在候段、一座ゟ牧野備後守殿江申上候處、伺之通取計可申旨被仰聞、

〔御仕置例類集一〕寛政十午年御渡

關東郡代中川飛驒守伺

一附火并盜いたし候引合之者、吟味仕方之儀ニ付評議、

附火并盜いたし候一件、吟味仕候節、出火有之候場所之ものをも呼出、附火いたし候もの申口之趣を以、出火之始末吟味之上、口書申付、盜ニ逢候ものも同樣ニ吟味仕、伺書江右申口之趣、委細朱書ニ認相伺候、公事方同役共、仕來ニ御座候處、右體災ニ逢候上、江戶表迄呼出有之、路用雜用等遣ひ候而者、村方之もの難儀仕候儀ニ付、以來出火いたし候場所之もの、并ニ盜ニ逢候もの江囚人申口之趣を以、其始末尋書、宿村次ニ而差遣、答書印形書付取之、尤囚人申口と聊ニ而も齟齬仕候儀御座候ハヽ、呼出吟味仕、符合仕候分者、呼出ニ不及、右書付之趣を以朱書ニ認、相伺候樣可仕候哉、此段奉伺候、

此儀火附幷盗賊吟味ニ付、右火を被附候もの、又は被盗主呼出吟味仕、窺書江右申口之趣認申上候ハ、公事方御勘定奉行ニは限り不申、三奉行は勿論、火附盗賊改迄も一統之儀ニ有之、〇中略都而引合ニ而呼出吟味仕、申口相分り候得者、早速口書申付、即日ニも帰村申付、可成丈難儀不仕様、前々奉行所ニ而勘辨之上取計候儀ニ付、火を被附候もの、又者被盗主ニ候とも、尋書宿村継ニ而差遣し、印形書付取候儀ハ不仕、唯今迄之通相心得、格別遠國ニ候ハヽ、最寄御代官領主地頭江申達、彼地ニおいて吟味之上口書取之、相伺候様被仰渡可然哉ニ奉存候、

午三月

朱書評議之通済

〔御仕置例類集〔一〕〕寛政十一未年御渡

甲府勤番支配伺

一遠國引合之内、無構もの申渡方之儀ニ付評議、

都而私共吟味伺之上、御下知御座候御仕置もの一件之内、吟味仕、不埒之筋相聞不申ものは、落着迄留置候而者難儀可仕儀ニ付、口書取之、一先帰村申付、無構旨可申渡哉之段相伺、其通御下知御座候得共、一件落着之節、銘々呼出申渡候先格ニ而只今迄格別遠國之もの、無構旨申渡候先格も相見不申候、然ル處一件之内ニ遠國之もの有之、無構段可申渡哉之旨相伺、其通御下知有之、呼出申遣、到着迄も日数も相懸り、其内重キ御仕置之もの迄落着見合能在、御届も延引仕、其上無構段申渡候而已ニ而、遠國之もの呼出候而者、路用雑用等も相懸り、難儀可仕儀ニ付、一件御下知御座候内、無構旨可申渡もの遠國ニ御座候ハヽ、其支配領主地頭等江懸合、態々呼出候ニは不及間、序次第右之段可申渡旨、申達候様可仕候哉之段相伺申候、

此儀吟味筋有之引合之ものハ、一座幷手限ニ而も口書之上帰村申付、落着之節無構旨申渡

候ものハ、呼出候而は無益ニ路用雜用相懸、難儀可仕儀ニ付、一件之内、宿村役人ゟ可申通段申渡、又者御代官領主地頭ゟ、序次第可申渡旨申達候儀者、前々ゟ之仕來ニ付、右ニ見合、伺之通取計可申旨被仰渡、可然哉ニ奉存候、

申正月

朱書
評議之通濟

〔法曹後鑑〕未〇寛政十一年十月廿二日伊豆守殿江〇松平信明、老中、御直上ル

同十二月七日承附候様、御同人青木忠左衛門を以御渡、承附いたし下野守〇菅沼定喜、勘定奉行、上ル、

吟味もの引合之内、輕御咎之儀ニ付相伺候書付、

書面伺之通可仕旨被仰聞承知仕候、

未十二月七日　　　　評定所一座

都而吟味もの一件之内、可伺もの有之候得バ、右引合ニ而盜物と不存貰受、或ハ受合人無之もの、又ハ欠落ものと不存止宿爲致候もの、受合人も不取置店貸候もの之類、其外右ニ准じ候輕キ御咎も、是迄吟味書墨書ニ而伺來候得共、いづれも過料叱り等之ものニ而、先例數多有之、盜賊吟味一件ニハ、右之類多分有之、本人ハ壹人ニ而も引合人數多之節ハ、取調認方も手間取候故、入牢之日數も相重り、其内ニハ本人病死等いたし、御仕置之詮も薄く相成候間、少も品替り候分ハ、是迄之通相伺、左も無之一通り差定候分ハ、安永六酉年御沙汰も有之、一座ゟ申上其通被仰渡候、盜物と不存買取候もの、又ハ質屋共之振合を以、同様以來朱書ニ而申上候様仕度奉存候、依之此段相伺申候、以上、

未十月〇中略

菅沼下野守伺書之内、朱書ニ而輕罪之もの先例等見合、定例之通可申付旨相認候處、安永六酉年、

盗物と不ㇾ存買取、或ハ賣拂遣候もの、井質屋共咎之儀、黄紙ニ而ハ不ㇾ申上、吟味書ニ、落着之節定例之通可ㇾ申付段申上候積り、右近將監殿江〇松平武元伺之上相極、其後去々未年、盗物と不ㇾ存預り候もの、井貰受候もの、請合人も無ㇾ之もの、井欠落ものと不ㇾ存止宿爲ㇾ致候もの、請合人不ㇾ取ㇾ置店貸候ものハ、是又黄紙ニ而御答之儀不ㇾ申上、朱書ニ而申上候積り、伊豆守殿江一座伺濟も有ㇾ之、右類ニ限り候儀ニ而、其餘之分ハ、黄紙ニ而申上候事と御心得之趣、對馬守殿〇安藤信明江青木忠左衞門を以て、被仰聞候由、依ㇾ之安永六酉年、去々未年伺濟之ヶ條之分、朱書ニ而申上候得共、是迚も品替候歟、又ハ子細有ㇾ之分ハ、元文五申年之御書付之趣も候間、墨書ニ而相伺候心得ニ有ㇾ之、尤前書安永六酉年、去々未年伺之ヶ條ニ准じ候儀ハ、同樣ニ朱書ニ而も可ㇾ申上、勿論未年御答書ニ、右ニ准じと有ㇾ之ハ、可ㇾ訴出儀を不ㇾ申立類、或ハ取計方不行屆迄之もの、急度叱り過料御定、又ハ先例有ㇾ之申付候分ハ、朱書ニ申上候積と有ㇾ之、右ハ何々と限り候而、兼而極置候而ハ、却而紛敷儀も可ㇾ有ㇾ御座、一體質物、其外都而定法有ㇾ之儀、又ハ取計來候定例有ㇾ之分、別段之子細無ㇾ之ハ朱書ニ申上、聊ニ而も趣意替り候類ハ、墨書ニ相伺候積り之心得ニ候段申談候處、此度下野守伺ハ相直り、御差圖相濟候間、別段一座ゟ右心得を相伺候とも、前書之通之心得ニ候はゞ、伺ニ不ㇾ及候とも可ㇾ相濟哉と、享和元酉年五月四日、一座評議之上不ㇾ及ㇾ伺積りニ決、

〔御仕置例類集二ノ三〕文化十酉年御渡

甲府勤番支配問合

一引合多之一件、落着申渡方之儀ニ付評議、

書面伺之通挨拶可ㇾ仕旨被ㇾ仰聞、承知仕候、

戌三月八日　　評定所一座

甲府勤番支配ニ而召捕候、無宿直吉、盗致候一件伺書差上置候間、御下知有ㇾ之節、遠國引合之もの

多く、一日ニ御仕置申渡候義雖相成、重キ御仕置之もの共計申渡、其外之もの共呼出し、參着次第申渡候方ニも可有之哉、又ハ一同着揃候上可申渡候哉、引合之もの共申渡之節、御代官手代、領主家來出席爲致可申哉、遠國之儀ニも御座候間、差添罷出候村役人、又ハ差添之ものども江申渡候而已ニ而可然哉、彼地舊例等も無御座候旨ニ而、問合申越候ニ付評議仕候處、落着之節引合之もの二而も呼出し候分ハ、其支配御代官手代、領主地頭家來、出席可致儀ハ勿論之儀ニ付、最寄陣屋等有之、日歸りニも可相成場所ハ出席爲致、格別相隔候分ハ、御仕置申渡相濟候上、右之段書面ヲ以、夫々返達いたし候樣挨拶可仕候、然ル處、重キ御仕置之ものども計申渡引合之もの共、參着次第落着申渡方之儀ハ、先例も無御座、併遠國輕き引合之もの共呼出し候而ハ、難儀可仕儀ニ御座候間、右ハ天明八申年、吟味引合之もの之儀ニ付伺濟ニ落着之節、呼出ニも不及、引合之類ハ、彼地江申遣爲申渡候義、寶暦十二午年被仰聞候通り相心得候旨申上、其通御差圖有之、右ハ道中奉行懸、東海道見附濱松兩宿外壹ヶ宿問屋年寄共、不埒有之、過料叱り等御咎申付候節、右申渡之儀、彼地御代官江申遣爲申渡候樣、道中奉行相伺候處、伺之通御差圖有之、右之類三奉行ニ而ハ、間々可有之儀ニも候間、其度々相伺候樣、三奉行江可相達旨被仰渡候儀ニ有之、此度之直吉一件、遠國輕キ引合之もの多分御座候上ハ、過料又ハ叱り等之義ハ、御代官所ハ勿論私領之もの二而も最寄御代官江申達、爲申渡候樣可仕候哉之段、甲府勤番支配々相伺候樣、挨拶可仕候處、左候而ハ無益ニ日數も懸り候間、前書伺濟之趣を以取計候樣、私共々伺相濟候旨申達置、以來右類ハ、其度々伺候樣挨拶可仕候哉、此段相伺申候、

酉閏十一月

(前々張紙)寛政三亥年十一月廿五日

吟味引合之内、權門方領分知行之者有之節之儀ニ付、一座評議之事、

肥前守〇町奉行根岸鎮衛掛り

一上州西岡村忠七外二人相手、同村源左衛門御普請金割合出入、

是者御普請金割合之儀ニ付及出入、小前總代忠七外二人儀、名主源左衛門を相手取訴出、吟味之上、裁許幷御咎之儀ハ、伺ニ不及ものニ候得共、右御普請下請負いたし候、武州埼玉郡須影村喜右衛門不能出候而ハ、勘定合難相分儀ニ付呼出候處、本多彈正大弼殿領分之もの故、一體ハ伺ニ不及出入ニ候とも、彈正大弼殿領分之もの加り候上ハ、伺候方にも可有之哉之段及相談候處、右喜右衛門江ハ、裁許之趣申渡候ニも無之、咎等附候者ニハ猶更無之、畢竟同人申口を以、一件之始末相分候迄ニ而、伺物ニ無之候間、喜右衛門を呼出候とも、伺ニハ不及積り、尤時宜ニ寄候儀ニハ候得共、前書之振合之ものハ、以來不及伺積り、

右ハ寛政三亥年十一月廿五日、一座評議相決ス、

訴訟費負擔

〔御定書百箇條〕追加村方出入に付、江戸宿雜用、幷村方割合之事、

寛保三年

一都て公事或ハ願之儀に付、江戸宿江詰居候內之雜用ハ、雙方共一村江掛候儀ハ銘々持高割に可申付、其身一分之出入ハ、當人より可為出、若難差出身上候ハヾ、親類割合に可申付候、然共邪成不屆之儀願候を、五人組之者共、乍存異見をも不加、其分に捨置為相願候はヾ不埒に候間、右之類ハ、五人組江も割合可申付事、

同

一公事合又ハ願等之儀に付吟味之內、江戸宿預に成候雜用、一村江掛候儀ハ、村高之割合可申付、其身一分之儀ハ、當人ゟ可為出候、其者御仕置に成候はヾ、身體限に可償之、

同

一都て村方ゟ猥藉、亦ハ不屆者之類、百姓心付召捕出候節ハ、路用幷江戸逗留中之入用、公儀ゟ可被下之、若又他所ゟ差口、或ハ外ゟ願出候て、奉行所幷御代官所ゟ捕に遣候類、不心付捨置候儀不念候間、村中割合ニ可申付事、

享保四年極

一公儀井地頭江相納候役掛り、其外村入用、公事出入之入用等之儀可ㇾ為二高割合一事、

但入作百姓共に、一同割合可二申付一事、

一同 山方、野方、浦方、或は鹽濱等無高亦は小高にて家數多き場所は、家抱下人共に、人別割に可二申付一事、

但妻子は、人別割に可ㇾ除之事、

一同 山林野原之類、入會地を割取候節は、入作百姓共一同、可ㇾ為二高割一事、

一同 祭禮入用、勸化奉加等之儀は、申合可ㇾ為二心次第一事、

一同 前々割合極置、出入無ㇾ之所は、可ㇾ為二只今迄之通一事、

〔科條類典〕上二 元文三午年三月十四日、彌此通定置、追而被二仰出一等、此帳ニ可ㇾ記儀ハ書記可ㇾ申候、其節々其趣書付可二差出一旨、評定所一座江被二仰聞一候帳面之内、

享保四亥年

(元)御代官江不二相届一訴訟に出候者之儀ニ付御觸書

總而御代官所之百姓公事訴訟等、何事によらず江戸江出候儀、御代官江不二相伺一候而、猥ニ江戸江出候百姓共之儀ハ、道中往來井江戸逗留中之宿拂等之諸入用不ㇾ殘、右罷出候もの共之自分入用ニ申付候而、村中懸り之割合ニ一切致させ申間敷候、若右之旨、違背之族於ㇾ有ㇾ之は、可ㇾ為二曲事一者也、

亥十二月

右之通、御代官所村々江相觸候事、

〔地方公裁錄〕寛政五丑年

公事出入諸入用之儀一座評議之事

公事又ハ願筋ニ而罷出候節之宿賃飯料、其外諸雜用割合方滯出入訴出候節、雙方共一村ニ懸候儀者、持高割可申付、一分之出入者、當人より可差出儀ニ候得共、若當人難差出身上ニ候はゞ、他領之ものに候共、親類江割合可申筋ニ候間、支配所限之出入者、右之趣を以吟味詰、三十日限濟方申付候心得ニ而、裁許之儀可相伺、江戸宿又は他領より支配之者江懸候、宿賃飯料出入は、添簡無之候而も願書取上、相手方江申渡、爲相拂、若不相濟候はゞ、其筋江可願旨訴訟人江申渡、其段可被相屆事、

但其身不埒有之、手鎖宿預ヶ申付置候節、其者之飯料宿賃は、當人より差出、添人之飯料宿賃者、村高割可差出、邪成儀願出候を、五人組之者共、異見不差加、爲相願候はゞ、五人組江も割合可申、此外共前々より定置候割合者、如仕來可被取計候、吟味引合等ニ而、差紙を以江戸表江呼出候、右賃錢之儀者、天明七未年相觸候通可被取計、右一支配所之内之儀、御代官御預所役人手限ニ而可致吟味筋ニ候得共、關八州之御代官ハ、多陣屋牢屋無之ニ付、吟味中入牢申付候程之儀者、奉行所江差出ニ相成、京大坂町奉行支配國、其外遠國奉行支配所之ものは、地方ニ付候儀、又者輕引合ニ而、一ト通申口承屆迄之儀者格別、都而遠國奉行直支配之ものを、御代官御預所江呼出、可致吟味筋ニ無之間、打合可致吟味、一件之内、右奉行所直支配之もの有之バ、其時之取計方可被相伺候、奉行所直支配ニ無之候而も、御三家御三卿領知、重キ御役人領分知行江引合候儀、不差懸候儀者、掛合方被相伺、其外他支配他領之もの呼出候儀、重立候分ハ自分共江被申聞、差圖之上可被呼出候、支配所限之出入者、前書申立候通取計、先屆いたし置、不及伺吟味詰可被申聞候、

右本文但書とも、寛政五丑年四月六日、根岸肥前守〇鎮衞宅、於内寄合評議極ル、

〔聞訟秘鑑〕一出入雜用之事

是ハ出入差添ニ出候村役人之雜用、其所之仕來ニ取計、雙方之內、不承知之者有之、出入ニ及候ハヽ、仕來ニ不構、村入用之積、吟味を詰可相伺事ニ候得共、其所仕來を破候而ハ、品により指支も有之事ニ付、先ハ利害申聞、和談爲致、實々不相濟時ハ、右之心得を以取計可申事、

公事人欠落

〔公事方見合書物〕一公事人欠落之事

是者公事人、吟味中欠落いたし候分、御奉行所江先届に不及、日限尋申付、六ヶ月詰候ても不相知時は、其趣を以落着不苦由之事、

不參違期

〔憲敎類典四ノ五評定〕寛永十癸酉年八月十三日

公事裁許定〇中略

一目安之裏判日數を積り、書付遣候上、不能出輩ハ能舍、但日數五十日、其後可爲對決事、

〔享保集成絲綸錄一〕寛永十二亥年十二月

定〇中略

一裏判井召狀をうけ遲參之者、勘其所之遠近、積日數依輕重、或籠舍、或可爲過料事、〇下略

〔正寶事錄一〕一御番所ゟ御差紙被遣候者、互ニ不能出候ニ於者、御穿鑿之上、急度曲事ニ可被仰付候事、

丑〇慶安二年十月

右十月廿日御觸、町中連判、

〔正寶事錄十三〕一遠國之者、公事合ニ付罷下り候もの共、公事合之日限ニいたり、不參候者共も有之候間、此以後右之族於不參仕者、江戸宿江預置、急度可申付候間、不參不仕候樣ニ可申付候、右之趣、其町々名主共、公事合之者ども江急度申渡、不參井、切金相增差出候樣ニ、兼而嚴敷可申付候、

右之趣、從町御奉行所被仰渡候間、可被得其意候、以上、

巳（○正徳三年）正月廿九日

正月廿九日

右者同日奈良屋ニ而、町々名主江被申渡寫之、

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保四亥年七月

覺

金銀之出入ニ付而、武士方之家來、奉行中より評定所江呼寄候而も、不差出者多有之由相聞、不屆之至ニ候、向後奉行所より呼寄候節、於不差出者、主人可爲越度候間、此段向々江可相達候、組支配有之面々は、其頭々より急度申渡候樣可相達候、

七月

右之趣、向々江可被相觸候、

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保四亥年七月

一評定所并兩御番所（○南北町奉行所）訴訟人有之、差紙差遣、相手呼出候節、右日限致不參候者多有之、不屆ニ候、向後無遲滯可罷出候、此上不參之者於有之者、急度可申付候、右之趣、町中不殘可觸知候、

七月（○又見ニ憲法編年錄）

〔諸家礼明問答〕寺院取扱

享保三亥年之頃、脇坂淡路守樣江伺候之由、

一領分之寺院、在所役所江訴書差出置、右一件吟味中、屆をも不仕、他參仕候者呼戻候上、如何取計可然哉、

御附札

書面、一件吟味中ニ候共、日々呼出吟味茂有之間敷事故、呼出無之節者、他行いたし候共、相答候ニ不及筋と存候、併他國出いたし候歟、又者近郷へ罷越止宿等いたし、呼出候節、差支ニ相成候ハヽ、其品ニ寄、急度叱り、又者三十日過塞等、御申付方と存候、

一出入吟味ニ付呼出候節、度々致不參、一件落着迄不指延、一先答可申付哉、如何之答可申付哉、

御附札

書面、呼出候、度々不參いたし候ハヽ、退院程ニ相當り候者ニ候得共、出入之品ニ寄、一件落着迄不指延、答申付候、相當之儀も有之候間、出入之趣意不承候而ハ、取極難及御挨拶候、

〔訴論判例下〕裁許破掟背御仕置大概、

一度々差紙を請、不參之者ハ、其品輕ハ過料、或ハ過怠として宿預、或ハ牢舍、〇中略

一無證據義及强訴、剩差紙を以呼出し候者を、致相對、不差出、奉行所を蔑如に致すにおいては追放、訴訟人と相對之上、不能出相手者過料、〇年月闕

〔彈正凡例乾〕吟味難澁差越願等之部

子〇安永九年二月十六日承付、采女正殿、

評定所一座掛

一星合齋宮家來差日不參之儀ニ付吟味

小普請組坪内式部支配星合齋宮家來　森幸右衞門

宇田川數馬

右之もの共儀、正月廿一日之差紙ハ、十右衞門ゟ相附候節、數馬受取、病氣ニ付、幸右衞門江渡置候ハヽ、主人江も可申聞處、無其儀、幸右衞門義、病氣ニ而、差日ニ評定所江不能出、其上去ル酉年、先家來渡邊右内暇出候儀を、訴訟人江不申聞、右暇出候後も、右内數馬之名前之差紙受取罷在候段、旁

病氣不參

不屆ニ付、兩人共江戸拂、〇御仕置附略

〔聞訟秘鑑〕一公事人病氣見屆之事

是ハ公事人吟味中、縱令訴訟方病氣之由申立、呼出し之節不罷出、相手方之者相疑、見屆願候ハヾ、願之通申付、若シ見掛は病身之體にても無之、全く虚病と相聞候間、吟味相願候旨申之候ハヾ、足輕にても差遣爲見屆、爲差儀にも無之ニ於ては、押而も罷出、吟味可請旨申付、實ニ氣分惡敷候間、達而日延相願候旨申之候ハヾ、面江相願、大病にも有之義に付、願人江利害申聞、差延置致他出候か、其外不埒之事共有之候ハヾ、願人江不拘、書付取置出入中ハ其分ニいたし、追而別段咎メ候方可然事、

〔纂政秘錄乾〕三ヶ度目刻限延引斷之事

乍恐口上

一何町何屋誰ゟ、私相手取、何出入、先月幾日被願上、當月幾日對決被爲仰付候處、病氣御斷奉申上候、同幾日刻限延引御斷奉申上候處、今日對決被爲仰付奉畏候、則罷出候處、最早刻限延引相成奉恐入候、依之右延引相成候始末御糺ニ付、乍恐左ニ奉申上候、

此段今日早朝ゟ願人申合罷出候途中ニ而、私儀急病差發候ニ付、無是非一旦歸宅仕、代人差越罷出候處、右彼是仕候內延引相成、重々奉恐入候、全御差日を疎略ニ奉存候義ニ而も無御座候ニ付、何卒此段御憐愍ヲ以、御赦免被爲成下候はヾ、難有奉存候、

右之通無相違次第、御聞濟被爲成下候はヾ、難有仕合奉存候、以上、

年號月日

相手

月行司

願人

月行司

御三ヶ度対談候、及ニ遅参ニ候歟、又は不参之節は、御印元目安方江差出
御伺を請、不調法候段御詫書付上ル、次ノ御用日御決被仰付候、

〔記事條例三〕一深川御船藏前町家主十兵衞申上候、私組合家持善四郎と申者、同所六間堀町家主源藏後見人文次郎方ゟ相掛候、貸金出入ニ付、今日公事合ニ御座候、然處右相手善四郎儀同人親病死仕、未忌中ニ御座候得ば、相愼罷在候、尤も代之者差出候而も無心元存、恐奉存候間、自身罷出公事合仕度旨申ニ付、此段掛り方文次郎江申通、公事合之儀、御日延相願呉候樣、達而相賴候得共、一圓承知不仕、何共難儀至極仕候段、善四郎申之候、依之無是非御願申上候、何卒御慈悲を以被爲聽召譯、今日公事合之處、善四郎忌明候まで差扣呉候樣、右願人文次郎江、此段被仰付被下置候樣奉願上候、右願之通被仰付被下置候はゞ、難有仕合奉存候、以上、

寬政七卯年四月廿六日

深川御船藏前町家持
善四郎
組合
十兵衞
願人
忠兵衞

右之通訴狀差出候處、前々窺と致候書留者無之候得共、重き忌中に候上は、日延御聞屆被成候方に可有之哉之旨、落合太右衞門江申談候處、同人ゟ相伺候得者、最早日數も餘程相立候上は、當人罷出候儀、不苦旨被仰聞候由、同人申聞候ニ付、其段申渡候得ば、願人當病之由代願いたし、御聞濟有之候事、

朱書
右落合太右衞門儀は、小田切土佐守殿目安方に有之候、

〔享保集成絲綸錄四十四〕元祿十五午年閏八月

一在々之もの、公事訴訟、其外江戶江罷出候節、宿仕候者、永々逗留致させ、金銀つゐやし候樣、相聞候間、向後百姓宿仕候者、久々逗留致させ候ハヾ、大屋又は名主方ゟ樣子承屆、吟味可仕事、

一公事訴訟、其外出入之儀を取持、たくみ成儀をおしへ、禮金など取候者有之由相聞候、常々簡樣之營仕候體之者、大屋方ゟ吟味可相改候事、以上、

閏八月

〔評定所新張紙留 坤 朱書〕天保十三寅年七月十八日、播磨守御役所内寄合おゐて、同人立合、能登守申渡、

差上申一札之事

私共儀、前々ゟ三組にて、銘々渡世筋之儀ニ付ては、追々被仰渡之趣も有之候處、今般仲ヶ間組合等、御停止被仰出候ニ付、猶又左之通被仰渡候、

一私共渡世筋取締向之儀ニ付、前々被仰渡之趣、彌堅く相守、都而公事人共逗留中、無益之入用不相懸樣精々心附、公事出入之儀ニ付、賄賂音信等取持ヶ間敷儀、決而仕間敷事、

一公事出入ニ付、逗留いたし候もの共之内、身分不相應之金銀取扱、或ハ不都合なる荷物持參り候ものも有之候ハヽ、御懸御奉行所江、密々申立候樣可仕事、

一御預之もの有之候はヽ、急度爲相愼置、尤御呼出之節は、下代共ニ不任置、自身差添罷出候樣可仕事

一臨時御預之もの、并御差紙御渡方之儀、寛政十一未年以來、日々罷出候三組行事共江被仰付候處、今般仲ヶ間組合御停止被仰出候ニ付、以來行事名目は相止、私共同渡世之もの共申合、日々惣代之者壹人ツヽ罷出相伺、尤御差紙御渡後取計方之儀は、都而是迄之通相心得可申事、〇中略

天保十三寅年七月十八日　　三組惣代共　名前

御奉行所

〔新張紙留〕町奉行衆　　石川主水正　曾我豐後守

拙者共懸り、公事人呼出差紙之義、腰懸江相詰候茶屋共江相渡、江戸宿江差遣候節、御用と記候提灯先年相渡置、是迄相用來り候處、此度之御觸ニ付、名主共ゟ相尋、右起立茶屋共方ニ而難相分由ニ而伺出候間、右ハ向後とも相用候樣申渡、且評定所腰懸江相詰候茶屋共ハ是迄式日立會日、其外御用使、又ハ出火之節等評定所御用と認候提灯相用候間、是又仕來通り相用候樣申渡候、爲念此段及御達置候、以上、

酉十月　　　榊原主計頭
　　　　　　筒井伊賀守

御書面之趣承知いたし候、〇中略

酉〇文政八年十月

〔聞訟秘鑑〕一公事人旅宿ニて相果候節之事

是は江戸宿ニ罷在候公事人、病氣并變死等致候節ハ、寺社掛公事方掛共、其掛江檢使を被遣、御吟味之上、取片付被仰付候間、御代官手限之公事人相果候ハヽ、爲渡見屆、取片付申付可然候、尤六ヶ月屆無之出入之者病死いたし候節ハ、御奉行所江御屆ニハ不及由之事、

一右死骸見屆ニ遣候ハヽ、宿預以上之者ニて、通例之公事人致病死、怪敷義も無之由、親類村役人申之候ハヽ、屆ニ不及、御代官聞置ニいたし、見屆ニハ不及由之事、

古事類苑

法律部五十六

下編下

訴訟文書

訴狀	五八七
目安	五八九
添翰	同
差紙	五九一
拒差紙	五九七
呼出狀	同
手當呼出狀	六〇〇
心附呼出	六〇二
目安裏判	六〇三
削裏判	六〇七
目安裏書	六〇九
七日裏書	六一四
三十日裏書	六一六
八判裏書	六一七

十判裏書　六二三
拒裏判　六二四
訴狀前後矛盾　六二八
僞造訴狀　同
却下訴狀　六二九
出庭請書　六三一
證據物　六三二
僞證文　六三八
白紙手形　六三九
取痛證文　六四〇
不埒證文　六四三
讓證文　六四五
口上書　门書　六四七
吟味伺書　六五〇
演說書　相談書　六五一
申渡　六五三
裁許證文　六五五
請證文　六六五
上證文　六七〇
訴訟帳　六七五

御仕置濟帳 六七六
黃紙 六七七
印狀 六八〇
預證文 同

古事類苑

法律部五十六

下編下

訴訟文書

訴狀ハ、一ニ目安ト云フ、卽チ訴訟人ノ申狀ナリ、裁判所ニテ、訴狀ヲ受ケテ後ニ被告ヲ召喚スルニハ、差紙、呼出狀等ヲ以テス、差紙ハ日ヲ期シテ召喚シ、之ヲ拒ムモノハ罰アリ、呼出狀ハ亦差紙ノ類ナリ、サレド差紙ニ比スレバ稍寬ナルモノナリ、而シテ呼出狀ヲ發スル時、對手人逃走ノ恐アル時ハ、豫メ其地ノ吏員ヲ警メテ、暗ニ之ヲ監守セシム、其時ノ呼出狀ヲ、手當呼出狀ト云フ、又心附呼出ト云フコトアリ、手當呼出ノ輕キモノナリ、

又裁判所ニテ、訴狀ノ裏面ニ、出庭期日等ヲ錄シテ被告ニ送ルモノアリ、是ヲ目安裏書ト云ヒ、奉行ノ記名シテ判ヲ施セルヲ裏判ト云フ、而シテ其出庭ノ期日ヲ、目安裏書發送ノ日ヨリ起算シテ、七日ヲ限ルヲ七日裏書ト云ヒ、三十日ヲ限ルヲ三十日裏書ト云フ、評定所ヨリ發スル裏書ハ、三奉行ノ連署ヨリ成リテ、八判裏書、十判裏書ト云フコトアリ、八判裏書トハ、三奉行八人ノ捺印アルモノニテ、十判裏書トハ、十人ノ捺印アルモノニ係ル、共ニ評定所管轄ノ訴訟ニ關スル訴狀ノ裏書ナリ、而シテ訴狀ノ前後予盾セルモノヲ出シ、又ハ他ノ訴狀ヲ僞造スルモノ等ハ罪アリ、又違式ノ訴狀ハ之ヲ受理セザル例ナリトス、

訟庭ニ於テ證據ニ備フベキモノニハ、將軍ノ朱印ノ書、父祖等ノ讓狀、古證文、古水帳等ノ類ニシテ、寺社ノ緣起ノ類ハ、濫ニ用キルコトヲ聽サズ、

故意ニ僞造シタル證文ヲ僞證文ト云ヒ、之ヲ犯スモノハ其罪甚重シ、又借用證文ニ、金額金主等ヲ記入セズシテ、借用者ノ捺印ヲ求メ、後日ニ至リテ、適宜ニ金額ヲ増加スベキ手段ニ出デタル證文ヲ白紙手形ト云ヒ犯スモノハ罪アリ、又取拵證文ト云フモノアリ、白紙手形ニ類似シタルモノナリ、又違式ノ證文ヲ不埒證文ト云ヒ、之ヲ犯スモノハ罰セラル、讓證文トハ、父兄、祖父等ヨリノ金錢財產讓與ノ證文ナリ、讓證文ハ法庭ノ證據品トナルモノナリ、

又口上書、口書ト云フアリ、訴訟關係者ノ法庭ニ於ケル口供ノ筆記ニシテ、寺社士人ニハ口上書ト云ヒ、其以下ニハ口書ト云ヘリ、

裁判終結スル時ハ、主任ノ官衙ヨリ上司ニ裁許ヲ請フコトアリ、之ヲ吟味伺書ト云フ、又主任奉行ヨリ裁判ノ件ニ就キテ、他ノ奉行ト協議スル時、其協議ノ要件ヲ記シタルモノヲ演說書ト云フ、相談書モ亦同一ノモノニシテ、演說書ニ比スレバ其體ヲ具ヘタルモノナリ、

裁許決定シテ原被兩造若シクハ罪人ニ宣告スルコトヲ申渡ト云ヒ後日ノ證據ヲ要スル論地等ノ裁判ノ申渡ニ、證書ヲ下付スルコトアリ、之ヲ裁許證文ト云フ、

原被兩造、裁判ノ宣告ニ服スル時、上ル所ノ證文ニ、請證文ト、上證文トノ二種アリ、而シテ上ゲ證文ハ、請證文ヨリ詳細ナルモノナリ、

又訴訟帳ト云フハ、訴訟關係者ノ姓名、幷ニ出訴年月等ヲ記載セルモノニシテ、御仕置濟帳トハ、裁許終結ヲ記載シタル帳簿ナリ、又黃紙ト云フアリ、聽訴吏員ヨリ、老中ノ指揮ヲ仰グ書ナリ、又印狀ト云フモノアリ、奉行ヨリ裁判上ノ件ニ就キテ代官ニ照會スル等ノ書狀ナリ、又預證文ト云フハ、奉行ヨリ爭訟者ヲ、其町村、若シクハ親屬等ニ預ケテ保管セシムル時、徵收スル所ノ證文ナリ、

〔政善集乾〕目安、訴狀、同事之事、

一目安、訴狀、同事也、本名ハ解狀と云、支那ニ目安と云ハ同じ案之字之下を取、目安ニ作る、

但其願人ハ、目安とは言へからす、

〔正寶事錄四〕訴狀書樣之覺

乍恐書付差上申候

今度何屋誰と何之

出入ニ付書上　　何町　誰

一

年號月日　　何町　誰印

御奉行樣

上包認樣

上何之出入　　訴訟人　何町誰

相手　何町誰

右之通、以來訴狀認メ可申旨、於御評定所被仰渡候旨、今日喜多村にて、町々名主江被申渡候、

寛文十年戌十二月廿五日

〔幕政秘錄乾〕御訴訟之節直之物有之、書振之事

乍恐口上

一何ノ何ノ守樣御代官所御領分何州何郡何村百姓何兵衞相手取、何出入、今日奉願上候處、證文面ニ何兵衞肩書ニ、何州何郡北之何兵衞と御座候儀御尋ニ御座候處、右之何兵衞儀は、北何村ニ御座候處、右何郡と認メ有之、取引之節無何心、先方より相認證文うけ置候儀ニ御座候、御尋ニ付、乍

恐此段御斷奉申上候、已上、

年號月日　何町　何屋何右衞門印

御

〔牧民金鑑〕一文化十酉年九月　長門守〇小長谷政長、勘定奉行、掛

一女之出訴ハ、訴狀面口之名前ハ壹人ニ居置、末之名前ハ爪印、幷差添人名印可加事、

是ハ原村さは相手同村金左衞門其外之もの江相懸候、理不盡出入目安札ニ極ル、

〔牧民金鑑〕一訴狀放之事

享和元酉年四月六日、下野守殿〇菅沼定喜、勘定奉行、御宅ニ而札之上、訴狀三通ニ限候得共、爲引分候分ハ、四通ニ而も御制出可然由、

〔評定所留書〕三一訴狀一人ニ而願數之事

是は三奉行にては金公事本公事は訴狀三本迄は取上、吟味いたし候事ニ候得共、御代官ニ而は其定も無之哉ニ付、金公事は格別、本公事ハ先一口取上、吟味相濟候歟、落着いたし候上、訴訟狀取上候而も、極次第ニ可有之事ニ候、

〔牧民金鑑〕一文化十酉三月六日評決　訴訟方同領同支配之相手方有之候訴狀之事

一以來は相手方之內、訴訟方同支配同領之もの、凡三分一位出入有之候分ハ格別、夫より餘計に候ハヽ、同支配同領之者共ハ、別段相手取、支配領主地頭江可相願旨申聞、爲除候積、

〔牧民金鑑〕一御直支配之義は、家來呼出訴狀渡遣、頭支配有之分は、支配江訴狀相達、御目見以下ハ、當人呼出訴狀可相渡事、

右ハ天保三辰年閏十一月六日、豐後守殿〇曾我、勘定奉行、御宅內寄合之節、用人申聞候由、

〔牧民金鑑〕一天保五午年正月廻狀留

目安

訴狀不行屆、下ゲ切等ニ相成候節ハ、其奉行所を離候趣意ニ付、追而願出候とも、最初之出訴ニ不レ拘、月番之奉行江及二出訴一候積、

〔三餘雜錄 四〕燒捨訴狀御下ゲ之節、武家之家來幷私領は、町奉行ゟ呼出し、寺社は寺社奉行、御料所は、御勘定奉行ゟ呼出、江戶着之上、町奉行へ演說致し、前日預け申付、當朝評定所へ差出可レ申事、

〔御當家令條 二十三〕覺〇中略

一地頭之義申上事、其鄕中を可二立退一覺悟ニ而可レ申二上之一、さもなくして地頭之身上、直ニ目安を以申上義御停止事、

一免相之事、近鄕之所を以可二相計一之、附年貢高下之義、直に目安仕候事、曲事ニ思召候事、

一總別目安之事、直に差上義堅御法度たり、但人質をとられ、せんかたなきニ付而は不レ及二是非一、先御代官を以可レ申二上之一、幷奉行所へ再三差二上之一、無二承引一に付ては、其上直ニ目安を以可レ申上、不レ相屆して於二申上一ハ、可レ爲二御成敗一事、

一御代官衆之儀、非分於レ有レ之者、屆なしに直ニ目安を以て可レ申上事、〇中略

右條々、依レ仰執達如レ件

慶長八年三月廿八日　內藤修理亮

青山常陸介

〔御當家令條 二十六〕國廻衆江被二仰渡一覺〇中略

一公事訴訟目安一切被二請取一間敷事、〇中略

寬文七年閏二月十八日

添翰

〔政書集 乾〕公事訴訟諸願添簡等心得之事

一萬石以上は添使、萬石以下は添簡に候得ども、何茂書付持參、使者を以、訴訟人願人召れ候節は、

同様之振合に候得共、萬石以上は家來之口上書可差出、萬石以下は知行所何國何郡何村誰ゟ御代官所歟、何之守御預り所、亦は誰領分知行所何國何郡何村誰外何人ヲ相手取、何之儀ニ付出入、訴出候處、他領ヲ相手取願に付、一通先方へ度掛合候得共、不相濟候ニ付取上有之様致度、則訴訟人使者を以差出候段添簡を以主人之口上書に而、使者之名前書付、其筋之奉行所月番江持參致し、差出候儀と可心得、

（幕政秘録乾）御添翰願之事

乍恐口上

一何ノ何守様（御代官所　御領分　御領知所）何州何郡何村何太郎相手取、何出入、京都、伏見、南都、堺、御役所江御願奉申上候、依之御添翰奉頂戴度奉存候ニ付、乍恐此段御斷奉申上候、何卒御聞屆被為成下候はゝ、難有奉存候、已上、

年號月日

御

願出度旨御願奉申上候處、御添翰壹通御渡被為成下、難有仕合ニ奉請取候、已上、

（勘定所公事）大坂町奉行支配國之ものニ而も、御料所之ものハ御代官添簡計ニ而出訴いたし候事、

文化十一子年五月八日、寺社奉行ゟ問合大坂御代官相糺、下ゲ札を以、同月十三日及答候事、

大坂町奉行支配國御料所之ものより、餘國江相懸候出入出訴及び候節、支配御代官より添翰いたし差出候義は勿論之義、町奉行ゟも各方江差出候哉否、承知いたし度旨、石川主水正殿江可承合事、

御書面之趣、大坂御代官相糺候處、別紙之通、岸本武大夫申聞候

差紙

間、右書面之趣を以御承知可被下候、此段御挨拶仕候以上、

午五月　　石川主水

〔書留〕差紙

尋儀有之間、早々罷出可相届、若於不參は可為曲事もの也、

尋儀有之間、村役人其之內壹人ヅヽ、來未二月六日迄ニ罷出可相届、

尋儀有之間、赤松次郎知行分村役人之內壹人、檢地帳割附持之、來月五日迄ニ早々罷出云々、

尋儀有之間、關東在々取締出役之ものより、其村方ェ預ヶ置嘉平次召連、早々罷出可相届、若於不參は云々、

尋儀有之間、附洲一件證據書面類持之、早々罷出云々、

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保六丑年五月

申渡覺

一自今訴訟人御奉行所ェ罷出候ハヽ、左之通御差紙可被遣候間、無滯遂吟味、日限無相違可罷出候事、

御差紙文言

如此訴出候間、双方家主、名主、五人組立合、來ル幾日迄之內ニ可相濟候、若不埒明候はヽ、同幾日九ッ時、雙方召連可罷出者也、

五月　　誰御番所

何町
訴訟人　誰
家主
名主

五人組
何町
相手　誰
家主
名主
五人組

〔科條類典下一〕享保六丑年

町方出入差紙等之事

覺

一自今訴訟人罷出候はゝ、其訴訟人之家主、名主、五人組立合、來ル幾日迄之内ニ可相濟候、若不埒明候ハヽ、幾日雙方召連可罷出由、差紙遣可申候、

一總體之願之事ハ、願人罷出候ふハヽ、其支配名主方江差紙、願人ニ爲持遣可申候、右文言、如斯願出候、町中ニ而障之有無遂吟味、大勢之者難儀不仕儀ニ候者、來ル幾日、願人召連可罷出旨、差紙遣可申候、

但町中障リ無之旨ニ而、名主附添罷出候とも、願之品ニより、猶又町年寄江も申付、吟味爲仕可申候、

右之通伺之上相極候、以上、

丑六月

享保六丑年

一右之通伺相濟候、夫ニ付江戸之內寺社奉行支配之ものふ、町奉行支配之もの江懸り候出入ハ勿論、江戸町はづれ御勘定奉行ふ初判出候近在ふ、江戸之もの江懸り候出入共、自今ハ裏判出

ニ不レ及、雙方之家主名主組頭五人組立合、來ル幾日迄之內可二相濟一、若不二埒明一候ハヾ、幾日雙方召連、誰方江可二罷出一旨、月番より裏書遣、內證ニ而不二相濟一、差日ニ罷出候ハヾ、遂二吟味一、其上ニ而評定所江差出可レ致二裁許一事、

但此日數之儀伺、相濟候通、六日之內ニ不レ濟候ハヾ、七日目ニ訴出候樣可レ仕候、

右之通、三奉行相談相極、

丑五月

〔憲敎類典四ノ六評定〕寛保二壬戌年

訴訟

一總而相手有レ之、始而訴訟ハ七日目裏書、

但店請人無レ之店立類ハ、翌日指紙、

一同度懸り訴訟者差紙〇中略

一裏書差紙遣候はゞ、相手之者、逃可レ申趣ニ相聞候出入、其訴狀留置、追而不意ニ呼使遣ス、

〔官裁秘書十三〕安永八戌年六月廿一日評議極

金公事之指紙、御用日延之節、一度ハ爲二持置一、貳度延候得バ、差紙取上候得共、向後ハ何ヶ度延候而も、其儘爲二持置一候積、

〔牧民金鑑二十〕天明七未年七月

奉行所吟味引合等ニ而、在方之者呼出候節之差紙者、江戶宿江相渡し、江戶宿ゟ飛脚を以、村々江遣し相屆ヶ、右差紙を受候者ゟ、飛脚賃錢、其所ニおゐて請取來候處、近來贋差紙を持參、江戶宿飛脚之由僞り、飛脚賃かたり取候もの有レ之趣相聞、村々難儀之事ニ候、依レ之以來ハ、其所ニおゐて飛脚賃錢不二相渡一、差紙受候もの江戶着之上、右差紙取次候江戶宿江掛合、右之趣者江戶宿江も申渡

候條可得其意候、

但全怪敷差紙と心附候ハヽ、右之指紙持參候者を所ニ留置、其筋江可訴出候、

右之趣、御料ハ御代官、私領ハ領主、地頭、寺社共、不洩樣可被相觸候、

〔牧民金鑑 二十〕文化十二亥年六月廿六日

奉行所吟味引合等ニ而、在方之者呼出候節之差紙ハ、江戸宿江相渡、江戸宿ゟ飛脚を以差立賃錢、於其所受取來候處、近頃贋差紙を持參、江戸宿飛脚之由僞り、飛脚賃錢かたり取候もの有之趣相聞、村々難儀之事ニ候、依之以來者、其所ニおゐて飛脚賃錢不相渡、差紙請取候もの、江戸着之上、右差紙取次候江戸宿江掛合、御當地ニおゐて、賃錢可相渡、右之趣者、江戸宿共江も申渡置候條可得其意候、

但全怪敷差紙と心附候ハヽ、右差紙持參候ものを、其所ニ留置、其筋江可訴出候、

右之通、天明七未年相觸候處、近來又候贋差紙取拵、賃錢かたり取候もの共有之趣相聞候、右者畢竟村方之もの共油斷ゟの事ニ付、差紙持參候もの路用差支候抔申候とも、其所ニおゐてハ賃錢決而不相渡、先年相觸候趣、急度可相心得候、

右之趣、御料者御代官、私領者領主、地頭、寺社領とも、不洩樣可被相觸候、

亥六月

右之通可被相觸候

〔道中留書 二〕奉行所差紙を持、致出府候百姓町人、人馬遣方之儀ニ付、尾張殿御城付よりの問合、

尾張殿御城付問合

評定所幷諸御奉行所江呼出、差紙等持參、出府致候百姓町人等ハ、御用人馬ニ而、道中往來致候哉、致承知度候事、

但差日之差紙付候節も、同樣ニ有之候哉之事、

御書面百姓町人等、差紙を請、出府之節、道中ニおいて人馬入用之節ハ、但書ともに相對雇可致筋ニ有之候、依之及御挨拶候、

申〇文政七年 二月　　岩瀨伊豫守〇氏紀、道中奉行、

石川主水正〇忠房、道中奉行、

〔島田記 川一〕元文四年二月五日罷出、松波筑後守樣御印頂戴、則牧野樣へ罷出、御判揃之御禮申上、然處左之通三通御書御渡被下候、

三奉行連印之差紙相渡候間、早速相手者江相渡、爲致返答書、來月九日、相手之者致同道、雙方無間違可江戶着也、

牧野越中守

割印　二月五日　役所

信濃國伊奈郡
庄屋　淸左衞門

同　金右衞門

組頭　金左衞門

同　伊平次

百姓代　留兵衞

〔記事條例 三〕明和五子年七月九日

一品川千住之外、町奉行所〻在方江差紙遣候儀、例無之處、左之差紙は、領主板倉佐渡守殿江御掛合相濟、旅人宿行事呼出、差紙在方江持參候樣申渡候事、

尋儀有之間、早々罷出可相届、病氣に候はゞ、親類にて成共可罷出者也、

大隅番所

子七月九日　御番所押切

上州松井田宿上町　吉藏

右吉藏女房　ふり

右五人組

名主

〔書留〕裏判ハ不遣、差紙手切、

一是は相手牧太女房たみハ、訴訟方松太郎姉ニ而、離縁之儀掛合中、右たみ變死いたし、相手のもの共取計疑敷由之出訴ニ付、裏判ハ不差出、訴狀爲上置、一座江演說之上、相手のもの共差紙を以呼出、手限ニ而及吟味候積、

〔牧民金鑑〕一〕穢多ゟ村役人幷穢多江掛候出訴之例〇中略

長田喜左衛門知行相州鎌倉郡上瀨谷村長吏小頭吉左衛門組下

訴訟人　八郎右衛門

一質地ニ植置候桑幷ニ麥、理不盡ニ刈取候出入、

長田濟左衛門知行同村百姓

相手　甚藏

右出入訴狀江、穢多頭彈左衛門致奧印、町奉行根岸肥前守方江願出候、右ハ評定所ニ而訴狀爲上、一座連印之差紙相濟、相手方呼出候上、返答爲致、公事合ニ差出候先例ニ有之候處、穢多共江一座より之差紙相渡候ハ、先例ニ候共相當致間敷義ニ付、手限ニ而地頭家來江申達、呼出致吟味、裁許之義は於評定所申渡可然筋ニ付、以來共右之通取計候積、今日一座評決、

寬政十二申年七月廿一日

〔幕政秘錄〕乾〕御差紙請取書之事

乍恐口上

一家賃銀出入、何ヶ度目追訴、今日奉二願上一候處、相手方御召出、御差紙壹通、難レ有儀ニ奉二請取一候、已上、

年號月日

何町
何屋何右衛門

御

相差紙

〔御定書百箇條〕裁許并裏判不レ請者御仕置之事

從二前々一之例
一裏判并差紙不レ請者　所拂

〔科條類典〕下一㊞裁許并裏判不レ請もの御仕置之事

一極
裏判并差紙不レ請もの　所拂

朱書
●是ハ元文二巳年、甲州松留村三光院、同村百姓離檀之出入之儀ニ付及二出訴一、裏判遣處、名主七兵衛、其外百姓四人、彼是難澁いたし、裏判相違不届ニ付所拂、

懸紙
●是ハ右同斷〇只今迄之取計を相認申候

右寛保二戌年二月廿九日、伺之通御下知、本文極ル、

呼出狀

〔憲教類典〕四ノ六評定寛保二壬戌年

訴訟〇中略

一名主又者主人親兄を相手取候出入は、裏書差紙不レ遣呼出遣ス、

〔牧民金鑑〕一與力屋鋪守呼出達

牧野織部殿

御組與力
河部權三郎

菅沼下野守〇定喜、勘定奉行、

右濕數守
善右衛門方ニ罷在候
吉五郎

右之者、善右衛門差添、來ル幾日、拙者方江可差出旨、權三郎、安右衛門、慶助、八十五郎、嘉十郎江、御申渡有之候樣存候、以上、

申〇寛政十二年十一月

〔御仕置例類集二ノ一〕文化四卯年御渡

日光奉行伺

一日光本坊家來呼出方之儀ニ付評議

鰭付

書面評議仕申上候通、日光奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

卯六月廿八日　評定所一座

書面呼出方之儀、前々之通相心得可申旨被仰渡、奉承知候、

卯六月廿六日　馬場讃岐守

於日光表、私共掛吟味筋有之候節、本坊家來支配向之もの共呼出方之儀、去ル子年十一月、高尾伊賀守勤役中、野州今市宿博奕一件引合ニ付、本坊小人其外呼出之儀申上、御下知濟を以、上野執當江申達候上、本坊留守居江呼出之儀相達、吟味仕、御仕置相伺候儀ニ御座候、然ル處、右之通ニ而ハ、日數相懸、吟味も手間取、其仕儀ニ寄、逃去候ものも出來可仕、自不取締之儀も可有之哉ニ奉存候間、以來本坊留守居支配之内、一坊樂人、其外輕者ニ而も、配當米頂戴仕罷在候ものは、留守居江懸合、呼出相尋候上、其段御屆申上、勿論御仕置之儀、相伺候樣仕候はゝ、御取締も宜と奉存候、且本坊

家來之分は、御家人とも譯達候間、同所留守居江呼出之儀相達、吟味詰、御仕置相伺候樣仕度奉存候、遠國之事故、往返日間も相懸候上、呼出等之儀ニ而不益ニ吟味手間取候樣ニ成行、且ハ御取締之儀ニも御座候間、前書之通、取計候樣仕度奉存候、依之此段相伺申候、

此儀日光本坊家來、吟味筋有之節ハ、假令輕キものニ而も、御門主江入御聽候上、差出候仕來ニ相聞候間、いづれも執當江不相達候而ハ、差支可申儀ニ付、是迄之通相心得可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

卯六月

附箋

書面評議仕申上候通、馬場讚岐守江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

卯九月十九日　評定所一座

書面伺之通相心得、たとへ一ト通相尋候迄之ものニ而も、最初呼出之儀ハ、寺社奉行江相達候樣可仕旨被仰渡、奉承知候、

卯九月十四日　三橋飛騨守
馬場讚岐守

日光本坊家來、吟味引合之もの呼出方之儀、寛政四子年、高尾伊賀守日光奉行之節、伺之上、日光奉行より直ニ上野執當江達置、本坊留守居江懸合呼出、其後も右之通取計來候處、外奉行所より右家來呼出候節ハ、月番寺社奉行江相達候定例ニ付、日光奉行所之儀も、外同樣いたし度旨、此度脇坂中務大輔より懸合有之、日光表ニおいても、差支無御座候間、以來右家來廉立候吟味引合ニ而呼出候節ハ、外並同樣不及伺、月番寺社奉行江相達、呼出候樣仕度奉存候、尤被盗主、其外一ト通相尋候迄之儀ハ、是迄之通留守居江懸合、呼出相尋候樣可仕候、依之此段奉伺候、

手當呼出狀

此儀日光本坊家來呼出方之儀、先達而評議之節申上候通、軽きものニ而も、御門主江入御聽候上差出候仕來之由ニ付、假令一ト通リ相尋候迄之ものニ而も、最初呼出之儀、寺社奉行江可相達旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

卯九月

〔牧民金鑑 二〕心付呼出、當時吟味ものゝ外ニハ無之、

安永六酉年八月

都而目安裏判願出候節、訴訟人糺之上、訴訟文段發輝と無之候とも、疑鋪相聞候得ハ、相手方御代官幷領主地頭家來江手當申付、初判差出候も有之候得共、地頭難儀之節ニ候間、以來ハ相手方死罪ニも可成科訴狀文段ニ有之候ハヽ、手當呼出いたし、是迄之通初判差出文段疑敷迄ニ而候ハハ、手當ニ不及、初判差出候積、評議相濟、

〔御仕置例類集 二〕天明六午年御渡

御勘定奉行伺

一御代官万年七郎右衞門召仕中間を、御料所地内ニ而、松平內藏頭家來及殺害候一件、吟味之儀ニ付評議、

當月九日御渡被成候、御代官万年七郎右衞門召仕中間を、同人御代官所備中國都宇郡下庄村地内往還ニ而、松平內藏頭家來及殺害候一件、奉行所吟味之儀、御勘定奉行申上候、右者何レニおゐて吟味可仕筋ニ可有御座哉、評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀差當リ例相見不申、御勘定奉行申上候書付之趣ニ而ハ、御料所之地内ニ而、御代官召仕中間を、松平內藏頭家來及殺害、引合之內ニ者、御代官手代、御料所百姓共も有之候一件ニ付、於一座吟味可仕筋と奉存候、然處右殺害いたし候家來を手當申付、遠國より御當地江呼出

候儀、小身之（地頭抔、右體之儀有之候節ハ、手當呼出之儀、差支之筋も可有御座、公事出入共遠
候吟味もの之儀ニ付、最寄奉行所ニ而、吟味仕候而も差支候儀無御座候、左候ハヽ大坂町奉
行ニ而、吟味仕可申上旨被仰渡候而も可然哉ニ奉存候、

午二月

（朱書）評議之通濟

〔目安秘書乾〕密通之女房迎之母とも、相手方江留置ニ付、引取遣し方手當裏判村觸腹書演說書、

一武州瀨山村權右衞門悴粂次郎相手、同國彌藤吾村伊大夫外一人不法出入、

是ハ訴訟人粂次郎女房みよ儀、相手伊大夫悴幸五郎と密通之上家出いたし、同人方江圍置候ニ付、爲懸合粂次郎母とよ罷越候處、同人をも引留置、不差戻趣之出訴ニ付、相手方地頭家來呼出し、みよとよは早々可引渡旨申渡、其旨相心得、無差支樣可取計旨訴訟方江申渡、請書取之、尤みよ手當之儀、領主江申達、幸五郎は宿村繼ニ而爲差出、右之趣一座江演說之上、其外之もの共は、本公事差日之初判差出候積り、

松平大和守殿（留守居）　　　戸川播磨守

御領分武州榛澤郡瀨山村百姓權右衞門悴粂次郎女房
みよ

右之もの、當時遠山半左衞門知行、同國幡羅郡彌藤吾村伊大夫方ニ罷在候趣ニ付、瀨山村役人江可引渡旨、半左衞門方江申達候間、みよ請取次第、不取逃樣手當いたし、江戸着前日、拙者方江可被申聞候、以上、

寅八月（天保十三）　　戸川播磨守

遠山半左衞門殿

心附呼出

〔目安秘書 坤〕手當もの訴訟人一同評定所江差出

御演説書　根岸肥前守

一太田運八郎知行、相州相甲郡八管村縫殿右衛門兄彦左衛門宅江、當月十九日夜中、五六人押込、同人江手疵爲負逃去候處、右之内川崎權之助知行、同郡熊坂村彦右衛門を見留候間、同村役人江懸合、預置候段、縫殿右衛門外一人訴出候ニ付、初判差出可申處、外ニ相手も無之ニ付、初判は不差出、彦右衛門は、地頭川崎權之助江懸合、手當ニ而呼出、着次第入牢申付置、訴訟人一同評定所江差出、相糺可申と存候、依之御演説およひ候、以上、

子八月　根岸肥前守

川崎權之助殿

〔袖珍民事秘書 張紙留 上〕明和八卯年十二月廿二日

周防守殿、美濃守、大隅守、對馬守江御渡し、

評定所一座江

道中奉行相伺候、奥州白川宿ニ而召捕候無宿榊原刑部左衛門一件吟味之内、

橋本町四丁目藤右衛門店　彌五兵衛

七郎右衛門を召連可罷出旨差紙を請、請書差出候上ハ、不取逃樣可心付處、其儀なく、七郎右衛門致欠落、其上尋申付置候處、不尋出、旁不埒ニ付過料三貫文、

右之通申渡候間、以來一座ニ而も其趣可被心得候、

〔目安秘書 乾〕訴答之內、不埒不屆、其外異例之事、

一相手方目安を請出奔

寛政十二申年十月下野守掛

一奥州中倉村佐兵衛外壹人相手、同國小平村法性寺、并字源次外四人、內濟議定相破候出入、

是は相手方法性寺儀、先達而目安裏判相附候處、出奔いたし候由申立候ニ付、又々可逃去も難計候間、法性寺ハ領主江達、不取逃様心附呼出、其外之もの共は、本公事差日之初判差出候積り、

朱書 此心附呼出、當時吟味物之外、先ヅハ無之、

〔人見私記〕寛永十五年九月廿日、關東中在々所々、野山境相論有之旨、目安差上ル所々ノ儀、番頭組頭逐穿鑿可相濟之、若滞儀有之バ、目安致裏判、今度被差遣候、檢使ノ衆ヘ可相渡之旨、遠江守、對馬守申渡、○又見三憲法編年錄

〔牧民金鑑 一〕安永四未年九月、一座都而申合ヶ條之內、

初判差出候儀、差掛候分知行之外無構初判差出候積、

但質地并借金銀出入ハ、定法有之候ニ付、差掛ニ而も差出候積、

〔評定所格例〕三奉行御役替之節、目安裏判取計之事、

天明八戊年五月一座評議極

一天明元丑年閏五月、土岐美濃守○定經御役替、太田備後守○資愛寺社奉行被仰付候ニ付、御勘定奉行桑原伊豫守○盛員初判差出候目安、備後守美濃守加印取殘候分初判出し直、消印之儀は、評定日評定所江相廻し、於內座消印之積り、

但御勘定奉行山村信濃守○良旺加印計相濟候分ハ、內寄合ニ而消印、

一同六午年三月廿日、寺社奉行五人之節、井上河內守○正定病死ニ付、河內守名前相除、同月廿三日初判差出、加印未取揃內、翌廿四日、土井大炊頭○利和寺社奉行被仰付候得共、大炊頭寺社奉行不被仰付以前初判差出候分ハ、其儘加印廻爲相廻候事、

右之通、先達而一座申合之上相極候ニ付、以來も右之通相極、初判差出、いまだ三奉行之內加印

不濟內、御役替致し候分者、初判出直し可申、初判差出候翌日、三奉行之內被仰付候分者、其名前書入候ニ不及、やはり前日初判差出候儘ニ而、加印爲取揃可申事、

但初判差出候當日之內、御役替被仰付候分者、其名前書入させ、初判出直し可申事、

〔評定所格例〕相手方遠國もの出府いたし居候節取計之事

天明四辰年十二月一座評議極

一遠國之もの、江戶表ニ罷出居候を、町在之ものゟ相手取、目安差出候節、定例之通、裏判差遣候も有之、又は直ニ呼出、返答書申付、吟味詰、評定所江差出、裁許いたし候も有之、區々ニ付以來江戶表ニ出居候ものは、直ニ呼出、村役人等は呼出申遣懸り宅におゐて吟味詰候上、裁許之節、評定所江差出候積り、

〔評定所格例〕寬政八辰年十月一座申合

一前々目安初判差出候段、いまだ連印不致、御役替等有之節ハ、欠印ニ相成候間、目安爲認直、裏書いたし相渡候申合之處、辰九月、根岸肥前守初判差出ス目安、坂部能登守連印不致以前、御役替有之、跡御役村上大學被仰付候ニ付、右目安取上認直させ、大學名前書入可相渡處、板倉周防守、青山下野守、曲淵甲斐守連印も相濟候義ニ付、不及認直、能登守名前に轉改ニ付、無加印と肩書いたし相渡、連印取揃候間、以來右之通取計候積り、

〔牧民金鑑〕訴訟方宅江居込候者

寬政十二申年下野守〇菅沼定喜、勘定奉行、懸

一上州緣埜村四郞兵衞相手、同村源藏外三人、及狼藉候上、難澁申出候出入、

是ハ訴訟方誰宅江相手方誰、居込不立去由ニ付、相手方地頭家來呼出、誰ハ早々可爲引取旨申渡、訴訟人江ハ、右之通相手方地頭家來江申渡候間、其旨相心得、無差支樣可取計旨申渡、受書取

之引取相濟候段申出候ハヽ、本公事差日之初判差出候積、

酉八月廿七日極

〔牧民金鑑一〕一旦目安裏判を請致出奔候者

申○寛政十二年十月下野守懸

一奥州中倉村佐兵衛外壹人相手、同國小平村法性寺、并宇源次外四人、内濟儀定相破候出入、

是ハ相手方法性寺義、先達而目安裏判相付候處、出奔いたし候由申立候ニ付、又候可通去も難計候間、法性寺ハ領主江達、不取通樣心付、呼出其外之者ハ、本公事差日之初判差出候積、

此心付呼出、當時吟味物之外、先ハ無之、

〔德川禁令考後聚八法曹事務〕寛政十二申年十月

近在其日歸之場所裏判遣方之事

町方より近在を相手取候出入、安永五申年四月六日之申合ニ而、其日歸ニ相成候場所江者、目安裏判ニ不及、七日裏書差遣し來候處、其日歸之場所と計ニ而者、里數之日當も、其時々區々ニ而治定不致、其中ニハ不相當之儀も出來致し候間、以來者片道五里迄之内者、評定所裏判ニ不及、定例之通、七日裏書差遣し、六里より以上者、評定所裏判ニ相成候積、寛政十二申年十月六日、小田切土佐守○直年、町奉行、於内寄合、根岸肥前守○鎭衛、町奉行、相談之上極ル、

〔牧民金鑑一〕格式無之地頭家來分

下野守○菅沼定喜、掛、申○寛政十二年十二月、

一常州岡本下町兵藏相手、同國藤ヶ谷村勝右衛門外六人、年貢立替人之出入、

是ハ相手方勝右衛門身分之義、別紙書付之通り、地頭ゟ苗字帶刀差免候迄ニ而、家來分ニ致、格式等申付候儀とも不相聞候間、金公事差日之初判差出候積、

〔牧民金鑑 一〕旅籠屋ニ無之諸人等ゟ食賣女取戻出入裏判差出方、

一武州越谷宿安右衛門相手、同國神明下村常次郎女子取戻出入、

是ハ食賣女取戻出入、道中方江願出候所、主人ゟ願出候節ハ、旅籠屋渡世筋ニ付候義故、道中方ニ候得共、主人方手切ニ不相成、奉公人ニ候共、取戻方道中ニ拘候義無之間、評義公事差日之初判差出候積、

朱書
享和三亥年閏正月九日談判之上、同月十一日、評定所一座とも演説濟、但此類江戸町方之もの之願ニも可有之義ニ付、助合等宿々附候身分之者願無之は假令道中方之事ニ候共、地方之取扱ニ可有之事、

〔三餘雜錄 四〕大坂表之もの、江戸に罷出居候を江戸町方之もの見當り、相手取訴出候節は、裏判は、不差出、直ニ呼出し、右町役人は大坂町奉行へ申遣し呼下し、吟味詰、評定所へ差出、裁許致候積り、

〔目安秘書 坤〕理不盡之趣有之ニ付、熟談ニ不及裏判、

演説書　　根岸肥前守

一武州芝山新田外壹ヶ村相手、同國柏木村圍堤、理不盡ニ切崩出入、

一相州長尾臺村相手同國内谷村外壹ヶ村惡水除土手切崩出入、

右は惡水井堤江も拘り候儀ニ付、熟談をも可申渡處、二口とも土手井堤切崩及理不盡候趣之出入ニ付、熟談之義不申渡、裏判直ニ差出可申と存候、依テ及御演説候、以上、

亥九月

熟談疑似

下野守掛

一上州北大嶋村伊左衛門外一人相手、同村清八外一人、田歩埋立屋敷ニ相構井用惡水路築留候

出入、

是は訴狀文面ニ據代と有之、名前肩書ニハ據代之趣無之候處、肩書認入候ニ付、用惡水出入ニは候得共、一體引取方、又は水行之利害を論候出入ニは無之、全理不盡ニ築留候趣ニ相聞候間、伺之上不及熟談、本公事差日之初判差出候積、

〔目安秘書 抄〕熟談申渡訴訟方之內、一ヶ村整、一ヶ村は不整、

一上總國田中村大豆谷村ゟ、同國臺方村、東金町、川場村、押堀村、堀上村江相懸候、用水出入、

右出入場所熟談可致旨、於評定所申渡候處、追而同國福俵村も加度段申立候ニ付、是又同樣熟談之儀申達候、然ル處、大豆谷村之儀は、用水引取方之儀、熟談相整候得共、田中村之方は、右用水路江汲上ゲ水いたし度段強而申張、熟談不相整、右は一紙目安之儀、殊ニいづれも組合用水路之儀ニ付、村々引分れ、熟談可整筋ニ無之候間、於場所濟口證文差出とも、可請取筋ニは有之間敷、右次第奉行所江伺之上、取計可然筋ニ候、依之右濟口證文は相下遣候間、評定所江呼出之節、場所熟談不行屆旨申立可然筋と存候事、

右之趣、巳八月廿日、隼人正宅おゐて、清水殿地方役、其外領主家來江留役ゟ申給候事、

但右一件、相手方江戶詰ニ付、裏判不遣吟味ニ成、

借金例

〔評定所格例〕寬政九巳年九月、一座申合、

一借金銀、幷買掛、諸職人作料、手間賃等之出入、是迄之分、裁許不申付、且唯今迄取上、裁許日限等申付置候分も、向後は奉行所にて取扱いたす間敷、○中略

一初判差出候分は、差日ニ雙方罷出候節、前書之通申渡、目安取上可申事、

但右目安幷內濟いたし候分も、目安は取上、銘々評定所江持參、猶內座ニ而可致消印事、

〔德川禁令考後聚 八法書事務〕寬永五子年

遠國之者、目安裏判申受之後、雙方御料所ニ相成節、目安取上方評議書、

仙石讃岐守領分、但州養父市場村より、望月新八郎御代官所、同國高田村江相掛り候出入、松平豐前守方江訴出、裏判差遣候後、右養父市場村上知ニ而、雙方新八郎御代官所相成、追而者同人方ニ而吟味可致品ニ付、訴訟方之もの共、出府之上其段申立、目安返上可爲致處、格別遠國之事故、新八郎方ニ而、右目安取上、同人手代を以評定所江可差出哉之段、一色丹後守方江新八郎より相伺候處、是迄右樣之先例無之、豐前守掛之儀ニ付、同人より右之趣一座江相談およひ候處、訴訟方、遠路出府を厭遣候者、何れも存寄無之候得共、未タ鄕村引渡以前之儀ニ候上ハ、讃岐守方ニ而目安取上、同人家來より豐前守方江返上爲致、相當之儀ニ有之、併差掛候儀、右等之往返ニ手間取居鄕村引渡濟相成候而は、又々混雜ニ付、先ツ此度ハ新八郎伺之通、同人より目安返上爲致、尤右目安評定所江差出候者不都合ニ付、丹後守方江持參爲致、同人より豐前守方江相返し、追而式日立合等之節持出し、消印之積評決、

〔島田記川二〕一七月〇元文四年二日〇中略

一訴狀返答書共御渡し被遊、雙方立合、御判消ニ可相廻旨被仰付候、御裏書之御文言、

表書之出入、今日於評定所、繪圖裏書を以裁許畢、依之順々判形消、初判へ可持參、但返答二通繼合遣之、

右ニ付越中守樣へ早速御禮罷出、御書判御消被遊被下候、其外段々相廻り、御裏判不殘消揃、三日迄ニ相濟、

〔德川禁令考後聚十法曹事務〕裁許例

寛政十一未年十月二日落着

下野守掛

美作國西々條郡下原村新森原村と同國同郡宗枝眞壁吉原古川村地所出入裁許之事〇中略

右出入村境ニ付、爲檢使御代官野村權九郎被差遣、吟味伺之上、太田備中守殿依御差圖、繪圖裏書を以裁許之、且下原村之もの共儀、吟味中不得心之儀を内濟相願、又者差越、御箱訴いたし候段、不埒之至り、新森原村并相手方宗枝村外三ヶ村之もの共も、治定不致儀を、一旦内濟相願段、不埒に付、下原村庄屋ハ過料錢五貫文、年寄者同三貫文、總百姓共者急度叱り、新森原村并相手方宗枝外三ヶ村庄屋年寄共者、一同急度叱り、總百姓共者叱り置、證文申付、早川八郎左衛門手代齋藤彌左衛門、松平仙千代家來河内志津馬江も令聞之、目安返答書繼合、裏判消ニ遣、

繪圖左之もの共江下置

早川八郎左衛門御代官所
作州西西條郡下原村年寄
訴訟方　久右衛門
百姓　甚兵衛
新森原村庄屋　與十郎
松平仙千代領分
宗枝村組頭
相手方　瀬助
眞壁村百姓代
儀兵衛〇下略

目安裏書

〔鵜飼左十郎寬御儀定〕一訴狀裏書之事

是は都而貸金賣懸等、廻し差紙相願候節は、相手百姓町人計ニ候得者、如此目安差出候間、埒明事候得ば、其地ニ而可相濟、濟子細有之ば返答書認、何月何日雙方罷出可對決、若於不參は可爲曲事者也と認、相手に神主寺院等加り候節は、可爲越度者也と申文言之差紙遣候由ニ候得ば、御代官ニ而も、其心得を以取計可然事、

〔牧民金鑑 一〕穢多江掛候出入目安裏書金公事

武州多摩郡是政村四郎兵衛ゟ、同村穢多清五郎、谷戸村穢多權左衛門江相掛候、賣掛金滯出入之義訴出候、其地ニ而埒明事ニ候ハヾ可相濟、若滯義有之バ、右之者共召連、來月廿一日可罷出、若於不參者、可爲曲事者也、

寅八月十八日　對馬

國郡村　名主

組頭

百姓代

右同斷本公事

安永九子年十一月二日一座評議極ル

如斯目安差上候間、穢多共ニ爲致返答書、來ル何月幾日、評定所江召連可爲致對決、若於不參者、可爲曲事者也、

月日　一座連印

何村　名主

組頭

〔評定所格例〕寛政八辰年十月一座申合

一前々目安初判差出候段、いまだ連印不致御役替等有之節ハ、欠印ニ相成候間、目安爲認直、裏書致し相渡候申合之處、辰九月根岸肥前守〇鎭衛初判差出候目安、坂部能登守〇廣吉、町奉行連印不致以前、御役替有之、跡御役村上大學〇義禮、町奉行被仰付候ニ付右目安取上認直させ、大學名前書入可相渡處、板倉周防守、青山下野守、曲淵甲斐守、連印も相濟候儀ニ付、不及認直、能登守名前江轉役ニ付、無加

印と肩書致し相渡、連印取揃候間、以来右之通取計候積り、

〔牧民金鑑〕一〕寺社并修驗等之部附座頭御用達町人之類、

檢校を相手取候出訴

長田阿波守知行
武州幡羅郡玉井村名主半兵衛煩ニ付同人倅
訴訟方　小右衛門

戸田數馬知行
同州同郡同村名主
相手方　勘左衛門

長田阿波守知行
同州同郡同村龜田檢校組頭
佐吉

一年貢村入用相滯、難澁申掛候出入、

右之通、下野守〇菅沼定喜、勘定奉行、方江目安差出候處、是迄檢校を相手取候出訴は例無之候間、裏判之義、若於不參者曲事と可認哉、越度と可認哉之段、於一座評議致し候處、檢校之義ニ付越度と認候方ニ決、

寛政十二申四月五日

〔牧民金鑑〕一〕大山寺領師職を相手取候目安裏書認方

大山寺領相州大山町師職之者を相手取候出入目安裏書、越度と認、又は曲事と認候も有之、是迄區之所、師職ハ都而白洲下椽江差出候身分ニ付、以来越度と認候積、

文化八未年六月四日、一座談判之上極ル、

〔牧民金鑑〕一〕在方ゟ御府内寺院江懸候出入目安裏書

如斯訴出候間、來ル廿六日迄之内可相濟、若不埒明候ハヽ、翌廿七日朝五ツ時可罷出者也、〇年號闕

〔記事條例 三〕明和七寅年十二月

折上附札

淺草花川戸町平八店修驗正膳妻取戾之儀に付願出、町方人別にも加り候者に付、七日裏書可遣處、支配違之者に付、取計之儀、寺社奉行江及相談候處、別紙附札に而、寺社方江願出可然旨申來に付、寅十二月七日、右之趣於白洲申渡、訴狀返ス、

折上

牧野大隅守

町方に店借に而、人別にも加り罷在候修驗、町人共を相手取、出入願出、拙者共ゟ裏書遣候例、相糺候處、五年以前、修驗願出、裏書差遣候例有之候得共、右之例計に而、書留等相見不申候、右者店借に而町方人別にも加り罷在候ものゝ儀故、裏書遣候方ニも可有御座候哉、又は其筋江可相願旨申渡、訴狀差返可然候哉、此段及御相談候、

十一月五日

下札
御書面修驗町人別ニ入罷在候而も、配頭有之身分に候得ば、配頭添簡等を以、拙者共方江可願出事に存候、

寅十二月

土屋能登守

〔矢城町傳馬書付〕乍恐謹而御訴訟申上候事

一北國海道信濃之內、矢城より追分迄之御傳馬次之町々、御訴訟申上趣者、信州河中島御領所、其外御給所より出申候萬駄賃荷物、前々より本道罷通り申處ニ、近年松代領分之內、仁連井村と申所より、上州沼田領大篠村と申所へかゝり、山中と云わき道を通、小諸領くつかけと申所へ罷出候、然者本道馬次へ參候、駄賃荷物不罷通候事、

一權現様御朱印頂戴仕、御傳馬御役儀相勤申所ニ、右之わき道駄賃荷物罷通り、本道へ者、荷物通不申ニ付、御傳馬次之町々、人馬もち申候儀、幷北國筋御大名衆御上下ニ、人馬さゝこほり可申と奉存知、迷惑仕候事、

一仁連井村大篠と申所ハ、南所ニ而家數百計御座候、只今御訴訟申上候、拾貳ヶ所之御傳馬次之もの共、とせいを送り申儀罷成申間敷候、殊ニ田畠ハ無御座候間、御傳馬前ニ罷在候儀、難成奉存知候間、下ニ而断申候得共、埒明不申迷惑仕候、乍恐被仰付可被下候、委細御尋之剋可申上候、

以上、

松平越後守領分矢城本町同新町下戸倉町　右馬助
同　上戸倉町　理兵衛
同　坂木町　安兵衛

慶安三年寅三月十八日

仙石越前守領分上田原町　助右衛門
同　同海野町　八右衛門
同　本海野町　五兵衛
同　田中町　左大夫
青山因幡守領分小諸市町　善左衛門
同　古町　斎市
追分町　市右衛門

御奉行様

如此目安上候間、返答書仕、罷出可對決、若於遲參者、可爲曲事者也、

寅三月廿六日

源左衛門〇勘定頭曾根吉次

內藏允〇勘定頭杉浦正友

紀伊守〇勘定頭酒井忠吉

出雲〇寺社奉行松平勝隆

右京〇寺社奉行安藤重長

右御裁許御繪圖面、助右衛門方預り來候、

〔島田記雜八〕享保十一年　御裏書之寫

如斯之訴狀差出候間、致返答書、來ル廿五日、會所江罷出、雙方可致對決者也、

午七月十八日

黒卯太右衛門

高源八

杉所左衛門

上飯田村之内羽場之者共

山村

島田村

毛賀村

名古熊村

一色村

七日裏書

〔憲教類典四ノ六評定〕寛保二壬戌年

訴訟

一總而相手有レ之、始而訴訟ハ、七日目裏書、

〔牧民金鑑 一〕寺社幷修驗等之部

在方ゟ御府內寺院江懸候出入裏書

享和三亥年、左近將監殿〇忠居、石川掛ニ而近例無レ之、組頭其外ゟ及二談合一、定例七日裏書差出、

但越度と可レ認事

〔牧民金鑑 一〕七日もの相手多人數ニ付差日を延候事

文化十亥年二月十一日一座評決

御相談書　石川主水正〇忠房

今般拙者掛ニ而、七日裏書差遣候者、相手數ヶ町多人數故、右日限之內、不レ殘持廻行屆兼、其段申立、無二餘儀一筋ニ付、先達而評定公事ニ而、目安持廻差支、差日を延、右之趣致二添書一、相渡候先例ニ見合せ、此度も差日を延候、添書いたし相渡候得共、一體數ヶ町多人數相手取願出、七日之內、不レ殘江目安持廻、行屆兼候を見極候分をも、七日裏書差遣候ハ、相當共難レ申、幷願書二三通ニ爲二引合一候而も、最初之一通不二相濟一內ハ、殘之分裏書差遣候義も難レ成、左候得バ一事之義ニ數日相懸候筋ニ付、旁以來ハ人數之程合ニ寄、其節之勘辨いたし、差日を延し裏書差出候義と取極置候方ニ可レ有レ之哉、及二御相談一候、

〔牧民金鑑 一〕在方之ものゟ品川歩行新宿之者を相手取候出入、本公事差日之初判差出候事、

享和酉十二月

右相手方ハ品川歩行新宿貳町目之者ニ付、七日裏書ニ而可レ然、地改歸村中同樣之訴答外出入中立候節之目安、

文化十四丑二月

一下總國中野村十大夫相手、同村三郎左衛門外八人突合省出入、右出入訴出候處、拙者掛先達而御相談之上、地改之者差遣候積を以、歸村申付置候、立木伐採出入、訴答共同人ニ而、當時吟味中之者ニ付、目安ゟ爲ㇾ上置、相手方之者共ハ、差紙を以呼出、手限ニ而吟味之上、追而評定所江差出、裁許可ㇾ致と存候、依ㇾ之御演說およひ候、

〔牧民金鑑 一〕道中方目安之事

一道中方七日ものハ、道中方七日裏書差出候積と腹書認候事、○中略

一道中ハ何海道何道中と爲ㇾ認、地方ハ何州何郡と爲ㇾ認候事、○年月略

〔公事方手留〕朱書七日ものと唱へ、在方ゟ御府內江懸り候出入、御府內ゟ近在江相懸り候出入裏書、如ㇾ此認候事

如ㇾ斯訴出候間、雙方家主、五人組、名主立合、來ル十九日迄之內可ㇾ相濟、若不ㇾ埒明候はヽ、翌廿日五時、雙方召連可ㇾ罷出もの也、

隼人

役所印

三十日裏書

〔憲教類典 四ノ六 評定〕寬保二壬戌年

訴訟

一家藏諸道具買留出入、町人ども江相掛り候訴訟ハ、三十日目裏書、

但當人欠落訴人掛りハ、二季之裁許、平日無ㇾ取上、

〔張紙留〕明和九辰年十一月十三日一座評議極ル

一十二月十一日、臨時ニ極、本公事、金公事とも目安差いたし、右臨時相延候はヽ、臨時之節、雙方差出候積り、

八判裏書

一正月廿一日金公事臨時ニ極、十二月四日不參之ものハ、正月廿一日之差紙遣、右廿一日ニ差紙
願候ものハ、二月四日之差紙遣候積リ、
但十二月四日ニ、三十日切申付候ものハ、正月廿一日初切申付候積リ、
一正月廿一日ニ、三十日切申付候分ハ、三月四日ニ初切申付候積リ、
〔憲教類典四ノ五評定〕享保六辛丑年
内寄合〇中略
目安訴狀之裏書ハ、支配々々之月番、初判相濟、其後ハ奉行之判形を取、右之内に御勘定奉行之
公事方之兩人計令₂判形₁候之當時ハ八判也、
右八判之裏書を相手前江渡之〇下略
〔島田記中三〕寶曆十二年十月十七日、御會所江被₂召出₁被₂仰渡₁候趣、
御奉行　野村善左衞門樣
御代官　辻元鄕右衞門樣
御手代　大澤嘉左衞門樣
同　熊谷恒右衞門樣
從₂御公儀₁中馬稼之儀、古來より致候哉と御尋被₂仰付₁候由、古來より有來候處、相違無₂御座₁候段印
形差上ル、中馬通行道筋、御尋被₂仰付₁候由、
浪合海道、山村、北方、大瀨木、上飯田、飯田町、帶川海道と、飯田道筋、山村、島田、毛賀、駄科、桐林、上川路、
右之通ニ庄屋與次印形差上ル、〇中略此度ハ御八判御證文ニ而御出被₂遊、去年より者、重く相見え
申候、此度御吟味御用場は、信州、甲州、遠州、三州、尾州、御廻村被₂遊₁候との御事ニ御座候、
御名、

御普請役元〆米倉幸内様　外ニ御用人工藤傳兵衞様　供貳人
御普請役　高橋八十八様　是ハ御同役ニ御座候　清兵衞
長十郎

寶暦十二年四月廿日

島田村
中村
山本村
中關村
村々總代

〔島田記川一件〕乍恐書付を以御訴訟申上候

堀大和守領分信濃國伊奈郡島田村
庄屋　清左衞門
同斷　金右衞門
病氣ニ付不參　同斷　源次郎
組頭　金左衞門
同斷　伊平次
百姓代　留兵衞
相手　同國同郡　知久平村
同　虎岩村
同　伊久間村○中略

右三ヶ村立合、古川を堰留、新川を相立、舟筏通候を村境と相極、御水帳之田畑、他村へ被取候而者、

拙者共、御地頭御拜領高相減、御水帳之百姓、地面ニ相離申候、〇中略右之段々被レ爲二聞召一譯、相手三ヶ村之もの共被レ爲二召出一、御吟味之上、先規之通被レ爲二仰付一被レ下置候ハヾ、難レ有奉レ存候、以上、

元文四未年四月

堀大和守領分信濃國伊奈郡島田村
庄屋　清左衛門印
同　金右衛門印
同　源次郎印
組頭　金左衛門印
同　伊平次印
百姓代　留兵衛印

御奉行所様〇中略

訴訟御裏書左之通但裏一ぱいに御書被レ遊候

如レ斯訴狀差上候間、致二誓詞一、論所ニ立會、場所無二相違一樣ニ、壹枚繪圖仕立、返答書相添、來月十三日、評定所へ罷出可二對決一、若於二不參一者、可レ爲二曲事一、但雙方百姓、幷繪師誓詞案文者、島田村庄屋清左衛門、金右衛門、組頭金左衛門、伊平次、百姓代留兵衛へ渡二遣之一者也、

未二月三日

越中印ひゞや御門前八萬石　牧野越中守〇貞通御在城日向國延岡
越前印外櫻田壹萬石　大岡越前守〇忠相
紀伊印一ッ橋外五萬石　松平紀伊守〇信岑、寺社奉行、以上三
寺社奉行
中國公事方
御用方無レ加印
河內印小日向七百石　櫻井河內守〇政英
對馬印御臺所町千九百石　水野對馬守〇忠伸道中奉行兼
御用方無レ加印
若狹印神田橋五百石　神尾若狹守〇春央
町奉行

豊前印 愛宕下千石
志摩印 飯田町五百石
土佐印 常盤橋内二千七百石
筑後印 すきや橋内五百石

新田御検地御奉行衆
河野豊前守〇通術
神谷志摩守〇文敬、以上五人勘定奉行、
石河土佐守〇政朝
松波筑後守〇正春、以上二人町奉行、

右之通八月分之覺

江戸總町
公事方

信濃國伊奈郡
和久平村
虎岩村
伊久間村
右村々
庄屋
組頭
百姓代

〔科條類典下一〕寛保二戌年十月申渡

遠江國佐野郡奥野村長松院と同國同郡日坂林境論裁許之事

長松院訴趣、長松院山林境内と、掛川領山ハ相續、從往古古谷川大境ニ相定所、右境を越、松木大分被伐採、迷惑いたす旨訴之、〇中略右論所取上、向後雙方より不可差綺、然共四畝十九歩之荒田ハ、本高に結び高懸傳馬國役金相納上ハ、掛川領之飛地たるべし、右之趣、衆議之上裁斷畢、仍爲後鑑繪圖面引墨筋、各加印判、令裏書、雙方江下授條、永不可違失者也、

寛保二戌年十月二日

木伊賀〇木下信名、勘定奉行、
御用方無加印　水對馬〇水野忠伸、勘定奉行、
御用方無加印　神若狹〇神尾春英、勘定奉行、

（島田記中三）一明和元申十二月、総代入用、上伊奈御検使入用、下伊奈三拾八ヶ村割合出金不致、自
上伊奈総代、御評定所江願出候ニ付、御裏御判持參ニ而、當飯田御役所江罷出候始末如左、

神志摩（○神谷久敬、勘定奉行、）
島長門（○島正祥、町奉行、）
石土佐（○石河政武、町奉行、）
山因幡（○山名豐就、寺社奉行、）
大越前（○大岡忠相、寺社奉行、）
本紀伊（○本多正珍、寺社奉行、）
堀相模（○堀田正亮、寺社奉行、）

御裏御判之文言

如斯目安差上候間、其地ニ而埒明事ニ候ハヽ可相濟、滯儀有之者返答致、來酉二月廿一日評定所
江罷出可對決、若於不參者可爲曲事者也、

申閏十二月七日

大隅印（○牧野、勘定奉行、）
御用方無加印
日向（○小野、勘定奉行、）
彈正印（○安藤、勘定奉行、）
加役無加印
佐渡
越前印（○土屋、町奉行、）
御用方無加印
安藝（○一色、勘定奉行、）
豐前印（○依田、町奉行、）

飛驒印〇酒井、寺社奉行、
美濃印〇土岐、寺社奉行、
伊賀印〇松平、寺社奉行、
大炊印〇土井、寺社奉行、

外ニ御書添一通、如レ斯目安裏判、願人相手方江裏判付候節、裏書差日前日、相手之者江、江戸着致、相届候樣、其村々名主組頭迄申談、村役人〻請書可レ取レ之、於二在所一出入內濟之者ハ、訴訟人と對談之上、可レ爲二格別一候、相手方之者共、若心得違無レ之樣、此書面寫取、銘々可二相達一、若違背之者於レ有レ之者、雙方越度急度可二相達一者也、

明和元年申十一月

〔德川禁令考後聚十法書事務〕裁許例

寛政十一未年十月二日落着

下野守掛

美作國西西條郡下原村薪森原村と、同國同郡宗枝眞壁吉原古川村地所出入裁許之事、

下原村薪森原村訴趣、先年字中川滿水にて村內江切込、古川敷ハ川向ニ成、荒地附寄洲ハ年來進退仕來處、相手方高受地之由申紛段、難二心得一旨申レ之、宗枝村眞壁村吉原村古川村答趣、古川敷之由訴訟方にて申立る場所ハ、領主高內之地所にて雜木生立有レ之、年來相手方にて進退仕來段無二相違一旨申レ之、〇中略以後川瀨附替るとも、今般之境筋不レ紛樣いたし、且川除水刎等、相互ニ川向村々江懸合、不レ差二障樣一令二普請一、字鳴津江仕付る水刎は、當時有形之通居置、同所上鮎簗ハ、水行に差障上ハ、以來差留申付る條、裁斷畢、仍爲二後鑑一繪圖面黑筋を引、令二裏書一、各加二印判一、雙方江下授間、永不レ可二違失一者也、

寛政十一年十月二日

御用方無ニ加印

松岩見〔○松平、勘定奉行、〕
菅下野〔○菅沼、勘定奉行、〕
石左近〔○石川、勘定奉行、〕

御川方無ニ加印

中飛騨〔○中川、勘定奉行、〕

同

柳主膳〔○柳生、勘定奉行、〕
根肥前〔○根岸、町奉行、〕
小土佐〔○小田切、町奉行、〕
植駿河〔○植村、寺社奉行、〕
脇淡路〔○脇坂、寺社奉行、〕
松周防〔○松平、寺社奉行、〕
土大炊〔○土井、寺社奉行、〕

〔憲教類典四ノ六評定〕寛保二壬戌年

訴訟

一在方江相掛り候出入、江戸より十里餘ハ十判裏書、
一近在江相掛り候出入ハ、御代官江添手紙遣ス、
一在方之もの、公事訴訟ニ付逗留中、雜用金滯出入、平日十判裏書、
一店がし、并出店之もの、遠國者江相掛り候出入、訴訟人所之人別に不入候は、十判裏書不遣、

〔德川禁令考後聚十法曹事務〕嘉永二酉年十二月廿二日

淡路守掛

豆州加茂郡伊濱村と、同郡雲見村地境出入裁許之事、

伊濱村訴趣、雲見村と之池覺者、宇高そふり山峯筋より、海岸宇長ツ崎鼻迄、水分れ境ニ守來處、相手方之もの共、境を越立入、雑木伐採る段、難心得旨申之、○中略今般衆議之上、相極趣ハ、訴訟方ニ而下木場、相手方ニてこふで山之段と申立る場所より、海面觀音島江見通し、南方伊濱村、北方雲見村地内と心得、向後境を越不立入、令和融、及再論間敷旨、裁斷之畢、仍爲後鑑繪圖面に引墨筋、令裏書、各加印判、雙方江下し授る間、永不可違失もの也、

嘉永二酉年十二月廿二日

池播磨 ○池田、勘定奉行、
久佐渡 ○久須見、勘定奉行、
松河内 ○松平、勘定奉行、
石土佐 ○石川、勘定奉行、
井對馬 ○井仁、町奉行、
遠左衛門 ○遠山、町奉行、
松紀伊 ○松平、寺社奉行、
本中務 ○本多、寺社奉行、
脇淡路 ○脇坂、寺社奉行、
土采女 ○土屋、寺社奉行、

拒裏判

〔憲教類典 四ノ六 評定〕年號月日不知

諸裁斷大概

一目安并指紙不請取者之事

是ハ裏判在之目安、并判形有之指紙付候節、墨付候由、或ハすれ目有之旨申、不請取者ハ、指紙を以呼寄、爲過怠手錠申付事、尤三四十日相立候得バ免し候、

〔訴訟判例 下〕裁許破、掟背、御仕置大概、○中略

一目安裏判似せもの、よし申候て奪取ハ、田畑家財取上之上、所拂、○月年闕

〔科條類典 下 一〕元文二巳年申渡

一甲州都留郡松留村修驗三光院儀、同村百姓と離檀之儀ニ付及出訴、裏判遣處、相手之內拾壹人、及難澁旨訴之、吟味之處、十一月六日、三光院目安致持參節、名主七兵衛陣屋江罷越、留守ニ付、組頭茂右衛門、平右衛門江預置、然處翌七日、七兵衛罷歸、相手方印形揃可請取旨申觸、同八日、組頭共江右之段達候處、最早三光院江目安相返、同九日、三光院江戶江出候由難申之、六日ゟ九日迄、日數有之儀、彼是申譯趣、一向難立、裏判難澁之段不屆付、左之通申付、

所拂　名主　七兵衛

長百姓　新左衛門　外三人

戶〆申付　小百姓　源四郎　外五人

左之五人組之もの共ハ、先達而當人共江、裏判請取候樣異見加之候得ども、不致得心旨申之間、宥免を以不及咎、宿預赦免申渡、

平右衛門　外拾貳人

〔彈正凡例 乾〕安永五申年

水戶殿領分常州茨城郡成澤村ニ罷在候　加倉井兵左衛門

同村名主　四郎右衛門

播磨守掛

右兵左衛門儀、貸金滯致、催促候而も、不相濟候ハヽ濟方可願出者、各別申分ケニ參リ候、高見山、浮島、三次、三ヶ村之もの共を、十二月七日ゟ、翌二月中迄差留置、其上右三ヶ村ゟ相掛目安裏判差遣候處、墨附よごれ有之由を申、右裏判不請、四郎右衛門儀、目安裏書之宛所ニ、村役人と有之間、兵左衛門請不申候ハヽ、其旨可訴出處、庄屋役乍勤、裏判不請段、不屆ニ付、兩人共所拂、

〔御仕置例類集六〕享和元酉年十二月

戸田采女正殿〇氏教御差圖

寺社奉行脇坂淡路守〇安董掛

一駿州大岩村奥右衛門、地頭申付相拒候一件、

大森鎮之助知行駿州富士郡大岩村
百姓　奥右衛門

右之もの儀、親伊右衛門不屆有之、地頭より村拂ニ相成候ニ付、跡株相續之儀相願候樣、親類幷ニ組合之者ども申聞候を、其砌奉公いたし居、伊右衛門仕置に相成候譯不辨故、親不屆之趣申立、跡株相續之儀ハ、難相願旨我意申張、再應申聞候とも不承受、人別帳等之印形も差滯、地頭より呼出差紙到來いたし、罷出候樣、村役人申聞候を相拒、其上伊右衛門折々罷越候ハヽ可差留處、親之儀とハ乍申、其分ニ致し置、止宿等爲致候始末不埒ニ付、五十日手鎖、

右當十月、松平周防守手限伺之上、御咎申付候、上州山田郡二渡村、猿田彥神社神主森下佐渡儀、地頭へ呼出し差紙到來ニ付、相越候樣村役人ども申聞候節、兼而不和合之儀も有之候ニ付、僞申聞候儀と相疑、神事繁多之趣斷ニ付、地頭家來召連罷越候由承り、身分之難儀ニ可相成と押量り、不存體ニいたし成、地頭屋敷江罷出、吟味受候節も、品能申譯罷在り、殊ニ影之身分ニ而、無沙汰ニ歸村いたし候段不埒ニ付、五十日逼塞申付候例有之、此ものハ、村拂ニ相成候伊右衛門

を止宿爲致候、不埒も御座候得共、右者親之儀ニ而、難默止趣意ニ有之、地頭より之呼出難澁いたし候段、重モ之儀ニ御座候、右例ニ見合、五十日手鎖、

朱書
評議之通濟

演說書　　松平兵庫頭〇信行、勘定奉行、

一武州下次戸村音右衛門外壹人、相手同國眞名板村甚藏外九人狼藉出入、

右出入、拙者方江訴出候ニ付、當月十一日差日之初判いたし遣候處、相手之者共大勢申合、裏判目安奪取、右持參候者を打殺候抔申之、人氣强立、裏判目安難相渡旨申立候間、目安ハ取上置、相手之者共差紙を以呼出、追而評定所江差出吟味可致と存候、依之及御演說候、以上、

〔牧民金鑑 二〕相手方强立、目安難渡旨申立、

五月二日

裏判出候後、同樣之下物有之、

演說書　　水野若狹守〇忠道、勘定奉行、

一野州田村助右衛門相手、同國大光寺村彌八外三人、馴合を以難澁申掛候出入、

右出入、拙者方江訴出候ニ付、當月廿五日、差日之初判、去月廿四日差出候處、同廿八日、相手之內彌八外貳人之地頭遠山半吉ゟ、吟味之儀相願候書面、下野守殿〇菅沼定喜被成御渡候間、趣意一覽致し候處、田村元百姓庄之助儀、大光寺村幸右衛門江疵付候ニ付捕置、同村之者共番いたし逃去候由、全同人逃去候ハ、助右衛門仕業ニ相聞、他給江引合候旨申立、吟味願候書面ニ有之、助右衛門ハ、庄之助江荷擔いたし、爲逃去候儀ニ無之、無謂難澁被申掛候趣、訴出候儀ニ而、一事を申爭候趣意ニ相聞候間、右御下被成候書面之趣を以、夫々呼出、此上手切ニ而吟味いたし、目安ハ取上、消印可致と存候、依之及御演說候、以上、

訴狀前後矛盾

辰（文化五年）十月
〔公案比事十八〕安永七戌年十二月
牧野豐前守懸
一信州山口房山兩村と生塚村外五ヶ村山論一件
松平周防守殿御下知
松平伊賀守領分信州小縣郡　山口村
房山村
右兩村之者共儀、山口、房山、常田、踏入、堀、國分寺、上ヶ澤、黒坪、八ヶ村、井海野町外四ヶ町を訴訟方と認、願書差出候處、最初領主江願出候趣は、山口房山貳ヶ村之願ニて致相違、其上領主吟味中、再應利害申聞有之候をも不相用、我意を立候始末、不埒ニ付、村過料、

僞造訴狀

〔公案比事十五〕天明二寅年八月
桑原伊豫守掛
一野州田間村彌右衛門訴狀取拵候儀ニ付一件
久志本左京知行野州都賀郡田間村
百姓　彌右衛門
朱書
米倉丹後守殿江伺書差出御下知、御老中元帳ニ留落、
右之者儀、荒地年貢納方之儀を地頭江同村又兵衛願出候得共、取上無之ニ付、願之趣相立候樣、了簡致呉可申旨被相賴、願書認遣候ハヽ、又兵衛名前に認得と爲讀聞可申處、一旦取上無之儀ニ付、迚茂同樣之願ニては取上有之間敷、萬一直訴等致候ては如何に候迚、又兵衛江も不申聞、同人願之趣を、先達而致欠落候同村武八利助名前之願書ニ認、爪印致シ右差札に、日光御本岩本外記と作名を認、宿々無滯可繼送旨、外記名前之添書致、有合判を押、宿送を以、地頭江差出候段、私欲之筋は無之候得共、品々取拵候始末、不屆ニ付、中追放、

却下訴狀

〔御仕置例類集二ノ八〕文化四卯年御渡

火附盗賊改荒尾但馬守伺

一麴町隼町源助初筆不埒之取計致し候一件

麴町隼町清五郎店
源助

右之もの儀、預同様申付置候彌八、欠落いたし候ハヽ、其始末早速可訴出處、無其儀、取逃し候咎受可申儀を恐、可成丈尋出で申迚、數日押隱置、其內、外引合ニ付町奉行所江呼出ニ相成、病氣ニ付代之もの差出候砌、家主清五郎江、前書彌八欠落之段申聞候處、右訴延引致し候旨相咎候ニ付驚入、家主立歸候ハヽ可訴出と存候得共、際取候儀も難計、五人組源左衛門も、他行いたし、訴翌日にも相成候而は、猶又不念之日數相重り可申儀と彼是取昇、當惑いたし候迚、家主留守中、右訴書ニ存を以相認、家主五人組の名前を書載せ、宅ニ差置候金八印形又は自身之裏印を押、訴狀取拵右金八を差添人之體ニいたし、一同彌八欠落之始末訴出候段、役所向を欺候致し方不屆ニ付敲之上、家主清五郎江引渡、

此儀家主五人組を拵、訴訟ニ出候もの敲、但似セ家主五人組ニ成候もの同罪と有之御定ニ見合、伺之通、敲之上家主清五郎江引渡、

（朱書）評議之通濟

〔法曹後鑑〕寛政十二申年六月十三日、菅沼下野守〇定喜ゟ、左之書面例有無之儀、甲斐庄武助江相尋候處、認振朱書通加筆いたし、下ゲ札を以、翌十四日申聞候事、

表書之趣、難立願ニ付不取上候、重而願出候ハヽ、咎可申付者也、

（朱書）誰とはづし認候

（朱書）何
何月幾日（朱書）
誰役所

表書之願、難成事ニ候、重而願出間敷者也、

朱書　何

何月幾日　朱書　誰役所

下ケ札　御書面、御定書ニ、諸願申出候もの、一通り吟味之上、難成願候ハヽ、難立趣申聞、重而願出候ハヽ、咎可申付旨、裏書相渡、猶又願出候ハヽ、過料可申付事と有之候ニ付、諸願申出、一通り御吟味之上、難成願に候得ハ、其段請證文被仰付、右願書江本文之通裏書被成、請證文年號之所と、右裏書月日之所を重チ、御役所之押切御印被成、願書御返被成候儀ニ御座候、松平對馬守殿、公事方御勘定奉行之節、明和九辰年、土屋長三郎知行、常州鹿島郡武井村名主與平方ニ居候平太儀、魚獵運上願、一通り御吟味之上、難成願ニ付、同年四月二日、願書江、表書之願難成事ニ候、重而願出候ハヽ、咎可申付者也と裏書被成、請證文江押切いたし、御返被成候例御座候、明和以前ハ、間々右之御取計有之、安藤彈正少弼殿、○惟要　公事方御勘定奉行之節、本文初ケ條之通、裏書被成候儀有之候と相覺罷在候得共、留帳燒失ニ付、何村誰何之願と申儀、不分明ニ御座候、勿論願之品、御糺等之始末ニ寄、本文貳ケ條目之通、重而願出間敷と計、認候も有之候と覺罷在候得共、留帳燒失ニ付、聢とハ難相分御座候、然處明和後ハ、右之御取計有之候儀、尙も相見不申、當時ハ多分御糺之上、難立願之旨、願書江御吟味詰之奥書印形被仰付、請證文計被仰付候儀ニ御座候、然共御勝手方ニハ、本文之御取計、近頃も間々有之哉ニ奉存候、以上、

申六月　　甲斐庄武助○又見ニ牧民金鑑

〔牧民金鑑　一〕東慶寺江駈込候女取計

大久保安藝守殿○忠眞　　松平兵庫頭○信行、勘定奉行、

一武州川崎宿兵五郎ゟ、御作事方棟梁世話役井口勘次郎を相手取、別紙之通拙者方江訴出候處、右ハ勘次郎娘ぬいを兵五郎女房ニ貰請、里歸いたし不立歸、彼是掛合中、ぬい鎌倉東慶寺江駈

入候を取戻度旨申立候得共、右東慶寺寺法書御寫同役方江先達而被遣候書面をも一覽仕候處、兵五郎出訴之趣右寺法江對し難取上哉ニ存候得共、猶又思召被仰聞候樣仕度、及御掛合候、以上、

寅五月〇政四年　寺法書ハ張紙留ニ有之、爰ニ略ス、

御書面御見込之通、東慶寺寺法も有之候間、外ニ子細無之、駈込一ト通之女戻度願之趣は、御取上難成と存候、被差越候別紙訴狀令返却候、以上、

六月　大久保安藝守

〔評定物手形帳〕一私共儀、今四日御帳外初而公事合ニ而、御評定所江可罷出處相流、明五日朝六時、願人ハ證據ニ可相成書物、相手方者返答書持參、家主、五人組、名主村役人、江戸宿一同刻限無遲滯御評定所江可罷出旨被仰渡奉畏候、尤差出し御用ニ相成候旨、是又被仰渡奉畏候、爲後日仍如件、

丑〇文化十四年九月四日

本小田原町一町目
願人　三郎兵衛
家主　清兵衛
五人組　藤次郎
名主助右衛門預候　彌兵衛
安房國平郡舟形村
相手　三右衛門
差添人　平右衛門

〔評定物手形帳〕一私共儀、明四日、初日公事合ニ而、御評定所江可罷出處相流、明後五日朝六ツ時、願人者證據書物、相手方は返答書持參、家主五人組名主村役人、江戸宿一同刻限無遲滯御評定所江可罷出旨被仰渡奉畏候、尤差出し御用ニ相成候間、別段差出シ入候ニ者不及旨被仰渡奉畏

候、爲後日仍如件、

〇文化十三子年六月三日

神田鍛冶町一丁目次平店利七煩候代
願人　清兵衛
家主　次兵衛

羽州村山郡藤内新田村醫師畫作事
相手　玄養
差添人
組頭　儀助

右江戸宿馬喰町二丁目
家主　十兵衛

〔評定物手形帳〕一私共儀、二度目公事合ニテ今四日雙方一同御評定所江可被出處相流、明五日、又又相流候ニ付、來ル廿一日曉七時、先達而頂戴仕候押切御書付持參、御評定所江可被出旨被仰渡奉畏候、尤右之趣、相手方江申通、刻限無遲滯可被出旨被仰渡奉畏候、且廿日差出持參可仕旨、是又被仰渡奉畏候、爲後日仍如件、

文化十二年亥三月四日

麻布福田町家持佐吉代
喜三郎
五人組
佐右衛門

相手
柘植左京

證據物

〔御定書百箇條〕裁許可取用證據書物之事

元文五年

一御朱印ハ不及申、讓狀、古證文、古水帳、或ハ地頭出置候書付等、其紙面疑敷義於無之ハ、證據取用可申、私に書記置候もの、或寺社緣起之類、猥に不可取用候事

〔官中秘策二十八〕重御役人知行出入之事

一重御役人、評定一座知行所出入は、伺之上、裁判申付候、但大目附以上なり、質地借金公事は、定法有之故不及伺、論所見分裁判伺帳證文之內、文言又は古き帳面を以、證據ニ引候事、員數或ハ古き

繪圖ニ而極候儀ハ、右繪圖入用之處計、繪圖記之、見分繪圖ニも、白紙附紙之肩ニ、訴訟方相手方抔と、モ々之趣を書記すべし、

〔公事訴訟取捌〕一論所見分裁許之伺帳、下證文之內、文言又は古き帳面を以證據に引候はゞ、其年之員數、或は古き繪圖面にて極候儀は、右繪圖入用之處計、小繪圖に記之、見分繪圖に而も、白紙附紙肩書に、訴訟方相手方と、夫々之題號を書記ス、〇中略

國郡境論

一國郡境に、川附寄之例は不用之、

一國郡之境ハ、官庫之繪圖、あるいは水帳次第、

一官庫之繪圖に、國郡境之山を雙方々書載之、雙方共、外ニ證據無之においては、論所之見通し可為境、〇中略

一官庫之繪圖に論所を半分載之といへども、一方には全く載之外にも證據於有之は、勿論全く裁方之理運たり、

一國郡境山論、水分之嶺通り、限り境たり、

一先年之裁許繪圖朽損し、仕直度由於訴出は、相手方之繪圖相渡可為寫旨、訴狀裏書一座　令印形遣之、何れ之裁許書ニも右同斷、

山野入會村境論

一雙方證據於無之は、大道筋或は川之中央、又は峯通り、谷合見通し、水帳次第、右田畑等境たり、

〔御當家令條〕二十一京都町中可令觸知條々〇中略

一諸證文判形之事

右諸證文及對決、或印判或自判持申出といふとも、他人慥に見知ざる判者、尤非無不審難立證

據、自今以後、京都居住之町人者いふにおよばず、借屋之者たりと言共、町人互判形可見知置事、

一就賣買書物取置事

右當時いだしおくにはがきといふ事、及相論時、爲證文奉行所に持來といへども、不分明難義

定、於向後、卽時代銀をわたさず、證文取かはす事有之者、僅ニ一札可取置事、○中略

以前條々書相定、町中不殘令觸知者也、

寛永六年十月十八日

〔享保集成絲綸錄四十四〕元祿十四巳年九月

覺

一家屋敷書入之儀、名主五人組加判無之、相對之證文を以、手附金請取之ニ付、二重ニ書入候も有之、旁不實に相聞候間、向後名主五人組加判無之、相對之家質證文之類ハ、公事ニ相成候共、裁判及間敷事、○中略

右之趣堅相守之、令違背候ハヾ、可爲曲事者也、

九月

〔科條類典上二〕享保九辰年

用水論、其外無筋出入之儀ニ付御觸書、○中略

一郡境村境山野之論、又者質田地等之儀、其外奉行所江訴出候事ニ付、證據無之、非分之儀をも何角申紛かし、又證據有之儀も、年經候得者、其事を申掠、及出訴、相手村方之難儀に及せ、其上雙方村々困窮之元ニ成、不届候條、向後如此之筋不可訴出、若此類之事訴出詮議之上、巧みのわけ相知候ニおゐてハ、其咎可申付事、

閏四月

〔科條類典下 一〕享保十六亥年

縁起讓狀古證文等を以、裁許之儀ニ付伺書、

一寺社領爭論、縁起讓狀を以申出候時、御朱印之面ニ、寺社領縁起之通と有之歟、或ハ縁起讓狀、御國繪圖ニ名所符合仕、書面も疑敷無之候得者、取用申候、

一山論境目秣場出入、井田畑論、先奉行裁許仕候書付、古水帳、且又古來御代官所之時、裁許仕候書付、或ハ地頭拵置候書付差出し候節、吟味之上、御國繪圖等ニ符合仕候歟、又ハ地所無相違候得者、取用申候、

一寺院後住爭論ニ、先住遺狀讓狀、慥成書面ニ候得者取用候、將又百姓町人家督出入ニハ、讓狀正敷書面候得者用之候、

一總而古キ書物差出候節、印形無之候而も、慥成書付ニ而、水帳又ハ地面符合候書面、將又扱證文、山手證文、名寄帳、印形有之、年貢等納方相違無之ハ取用申候、

右只今迄之通、向後共相心得可取計旨、伺之上被仰渡候事、

亥七月

〔聞訟秘鑑〕一村指出明細帳之事

是ハ出入有之、雙方之内、右帳面を證據ニ申爭候節、相當之儀ハ取用ニ相成、不相當之儀ハ、何拾ケ年以前より認出候事ニ而も、一體村方勝手を以差置候帳面ニ付、察當申聞、取潰候而も不苦事

〔公事訴訟取捌〕證據證迹用ひ不用

一先領主地頭之帳面書物、其外古來之書付、印形無之といへども、於慥成は取用ル、

一名所之字無之證據は不取用之、

一他之水帳書物等、論所之證據ニ、僞之字等書替るにおゐては、死罪或は遠島、

一憶成書物有之所ニ、不埒之證文等取之、爲證據於差出は、戸〆或は所拂、

一證據に致すべき巧を以て、不埒之書付等取之差出におゐては、戸〆或は名主庄屋之役儀取放ス、

〔聞訟秘鑑〕證據無之出入之事

是ハ無證據申爭ひ而已之出入ハ、何々之願之内ニ、裁許可成事有之節ハ、無證據申爭ひは難取用、何々之義ハ、ケ樣〳〵可致旨、裁許可申渡儀ニ候得共、何ニ而も裁許可成事無之出入ハ、品ニ寄不及御沙汰積ニハ難相伺、縱令金錢貸借等之類ハ、如何程申爭ひ候とも、無證據ニ付不及沙汰旨、吟味を請候而も不苦候得共、何ニ而も裁許可成儀無之、盜致とか、火付候とか、都而御法度筋ニも拘り候一筋之出入ハ、右之通ニ付難相伺、御奉行所ニ而も、右之類出入ハ、雙方入牢被仰付、御吟味有之候由ニ付、御代官所ニ而も、右體之出入ハ、雙方支配所内之出入ニ候得共、ケ樣ケ樣との儀を申爭ひ難捨置候、私方之吟味ニ而ハ、行屆不申候間、於御奉行所御吟味可被成下旨、相伺可申事、

〔島田記中二〕巳十一月晦日ニ指上候證據物、尾州三州ゟ松本迄之付通候送り狀、幷相手村ニ繼合致候送り狀帳面ニ付、差上候口上書之引渡、

乍恐書付を以奉申上候

一私共中馬出入之儀、段々御吟味ニ御座候所、相手村之者共、是迄中立候趣者、去ル卯年、平出松島之兩村と木下出入ニ付、格別ニ被仰渡候由を申、中馬稼之者共を相掠メ相障候付、右之趣者、私共方ゟ逸々申上置候儀ニ御座候處、相手之者共、右出入之砌、何樣之御下知を奉蒙罷在候哉、卯年出入以前ゟ今年迄、執取〆候規矩も無之、都而我儘之繼合等仕、或ハ賃錢等ニも、粗私之高下

有之、卯年以来、別而相手村之者共、一己之勝手を取用候致方、何とも難得其意奉存候、依之右證據ニも可相成儀ニ付、相手村ゟ継合仕候送状、次ニ私共是迄申上置候荷物敷金證文等、國元ゟ今般飛脚を以參着仕候ニ付、則奉入御覧候、右始末何ト相手村申立候趣とハ者、万端符合不仕、卯年出入之儀者、彼等急ニ企置、全以中馬荷物之分、一圓ニ可奪取巧ニ紛無之奉存候、尤巨細之儀者、尚又御吟味之節口上ニ而申上度、此外中馬稼賣買等ニ付、私共所持仕罷在候間、以上之儀も其節ニ至、巨細申上候而差上奉入御覧度、右之趣奉願上候、以上、

寶暦十一年巳十一月

信州伊奈郡八十六ヶ村總代

北久出村　宗左衛門

北小野町　長十郎

島田村　長四郎

山本村　源五右衛門

横川村　七右衛門

新澤村　清兵衛

大出村　八左衛門

鹽井村　万右衛門

松本總代　勘兵衛

御奉行所様

右口上書、相手方松島村ゟ出し候送状七枚、其外名古屋一枚、飯田ゟ出候送状二枚、〆拾枚差上候、送状帳ニ張付差出候證據物付札左之通、

さげ札

僞證文

松島村日野屋久左衞門儀者、私共相手松島村問屋仲間同士ニ而有之、飯田町中馬荷問屋傳左衞門方ゟ出候荷物引請、彼等申立候繼合場四ヶ所を打越し、中馬荷問屋松本町太郎兵衞方へ繼送り候送り狀、書面之通ニ御座候、

さげ札

右松島村久左衞門、手前買荷物之下ニ有之候處、彼等申立候趣ニ候ハヽ、次之問屋宮木迄送り可ㇾ遣處、此外四ヶ所を打越し、松本町へ送候段、難二心得一儀ニ御座候、

右始ヶ條ニ同斷

右者殿村吉右衞門買請候、三州立茶荷物、松本迄付通し荷物を松島村久左衞門引請、則松島村之手馬を以、松本町迄付通候送り狀、書面之通ニ御座候、

右始ヶ條ニ同斷

右二ヶ條ニ同斷

右者彼等出入已前、中馬仕來候趣、書面之通ニ御座候、

此三枚者、名古屋敷金仕候送狀、飯田荷問屋ゟ出候送り狀ニ御座候、

右之通送り狀ニさげ札致候、十一月晦日ニ差上奉ㇾ入二御覽一候寫、

〔目安秘書 坤〕證據物無ㇾ之候得共、馬代金之儀ニ付、其儘初判出ス、

文化四卯年二月六日　兵庫頭懸

一野州藥師寺村與惣左衞門相手同國藤井村源吉外壹人、馬代金出入、

是ハ證文は勿論、何ニ而も證據物無ㇾ之處、馬代金之儀ニ付、其儘金公事ニ差出候積、

〔御定書百箇條〕僞之證文を以、金銀貸借いたし候もの御仕置之事、

享保十七年極

一金銀借用之證文、及二露顯一候とは難ㇾ立筋、又ハ支配頭、或ハ願候て申分難二相立一もの之名を僞、文言

白紙手形

之内江書入、金銀借候もの、　死罪

但右之趣乍存貸候におゐては、貸候ものも同罪、

〔科條類典下三〕元文五申年九月牧野越中守、石川土佐守、水野對馬守伺之內、

享保十七子年

㊞偽との事乍存、金銀致貸借候もの御仕置并同罪之儀御書付、

一此度西丸火之番野口兵三郎儀、支配御目付高山安左衛門名を偽、手形文言ニ認、二宮官治と申浪人より借金いたし、侍ニ不似合仕方ニ付、死罪被仰付候、官治儀も、偽との事乍存貸候儀ニ付、死罪ニ罷成候、自今も右之通之儀有之におゐては、貸候ものも可為同罪候條、此旨末々に至るまで可相心得候、

十月

朱書　未年伺候懸紙

偽之證文を以、金銀致貸借候者、御仕置之事、

一偽之證文を以、金銀貸借いたし候儀、貸候者も、偽と申儀乍存貸候ニおゐては、可為同罪事、

〔御定書百箇條〕倍金白紙手形にて、金銀貸借いたし候もの御仕置之事、

寛保元年極

一倍金并白紙手形にて、質地借金等取遣仕候もの、不埒ニ付、済方之不及沙汰、雙方并證人共、過料可申付事

但金主借主過料員數之儀ハ、例に不拘、身上に應じ重く可申付事、

〔科條類典下三〕享保三年戌閏十月

白紙手形ニ而金子借候者之儀ニ付被仰出之書付

取拵證文

白紙手形ニ而借シ金等仕候もの有之候節、證文ハ破り捨、過料三拾兩、又ハ貳拾兩出させ可申候、尤右之員數ニ不限、其者之身上ニ應じ、過料多少可有之事、

〔德川禁令考後聚刑律十八行刑條例〕享保三戌年

白紙手形御仕置例

北品川新町　藤七
三右衛門
平助

右三人ともに構無之、但藤七ハ堀田源右衛門方より先達而闕所いたし置候金四百兩之内、爲過料三拾兩取上、殘金藤七江遣之、

〔享保集成絲綸錄四十四〕正德三年巳十一月

一此間於町方、立合金等出入有之相掛候得者、其引請筋之者大勢申合、金子少々充出し合、其掛り方江ハ相對ニ而爲致、不足相濟、申合之仲ヶ間ニ而ハ、元金ニ而相濟候由之證文順々取替し置、留り之者より、店請或ハ下請江相掛り候節ハ、不足金引落不申、元金ニ而相掛り候仕形いたし候族有之、家主共致難儀候之由相聞候、此度遂詮議候處、右仕形致候、木挽町七丁目清右衛門、赤坂裏傳馬町久兵衛、三十間堀六丁目理左衛門、同五丁目金左衛門、山王町源左衛門、淺草猿屋町八右衛門、本石町壹丁目又兵衛、同二丁目次左衛門、同所十軒店治兵衛、大傳馬町貳丁目理兵衛、榑正町七郎兵衛、右拾壹人之者共、仕形不屆至極ニ候、深川蛤町半兵衛、同所黑江町孫兵衛、惣兵衛儀も、望候とても不請取金子請取候段、致證文遣、是又不屆ニ付、拾四人牢舍申付候間、向後右類之拵事無之樣ニ、名主家主五人組より相改可申候、此已後左樣之儀於有之者、當人ハ急度曲事ニ申付、名主家主五人組、應其品咎可有之候、○中略

一事公人井金銀貸シ借リ之儀ニ付、工成致非道之證文を取、出入拵候族有之由ニ候、非道之證文取候者ハ勿論、不致得心證文ニ而も、當分手前々々勝手ニ成候儀も有之候得ハ、先方好之通認遣候由、不屆至極ニ候、左様之儀有之候ハヽ、雙方共急度罪科可申付候、○中略

右之通名主共不殘召呼、委細申渡、名主共より其支配々々之町人江、申合候樣可申渡者也、

十一月

〔德川禁令考後聚十八行刑條例〕比罪例

文化十二亥年御渡

大坂町奉行伺

攝州鷹合村常次郎取拵之證文を以出訴いたし候一件

重田又兵衛御代官所攝州住吉郡鷹合村　常次郎

右之もの儀、彌助、喜右衛門申合同意いたし、宛所井借主名前も無之印形計押有之、銀子借用證文を藤兵衛井藤吉先代判、太助實印之由、承候迄ニ而、素々紛敷證文と乍相辨、銀子取立候ハヽ、可致配分との欲心に迷、無跡形も銀主之妾ニ相成、此もの宛名爲書入、致出訴、對決之上、糺受候節も、元銀主名前等迄、申僞候段、巧成仕方、其儀可相顯儀を可遁ため、掛與力江金子致持參、取扱宜賴候旨申掛候段、賄賂ニ相當、重々不恐公儀仕方、不屆至極ニ御座候得共、右巧之儀は、吟味之上相顯不遂事を、賄賂之金子も、不致受納差戻候儀ニ付、重追放、

此儀出訴之趣、奉行所ニ而、吟味之上、相顯候上ハ、事を不遂と、難申、先例相糺候處、寛政元酉年評議ニ御下ゲ被成候、大坂町奉行相伺候、丹波屋正藏儀、光雲寺祠堂銀貸附支配致し候龜之助、安次郎方江被雇罷在候内、伊助庄七兩人とも、貸附之證文仕法之通不取計、右寺先住原叟申談謝禮金遣し、年號銀目借主名前明畫、本文計認候證文ニ、兼而押切裏印申請、殊右印形紛敷儀と

乍心附、承糺不申、其上庄七所持之銀子、并他借銀をも差交、名目銀ニいたし貸附、剰先訴之出入有之もの共より被頼、謝禮金銀を取、右出入爲可引上、名目銀貸附置候委ニ取組、種々巧成證文取拵候儀迄、伊助庄七ニ同意ノ上、倶々世話いたし、右謝禮之内をも貰受、毎々支配人之名代ニ相成、濟方滯候旨僞之筋願出、先訴之出入口々引上候段、雇主伊助庄七ニ隨居候身分とハ乍申、公儀を不恐仕方、重々不届ニ付、遠島と相伺、評議之上伺之通と申上、其通相濟候例ニ見合遠島、

但科書之内、末之文段、不恐公儀を仕方不届ニ付と相直し、其餘ハ相省可申渡、

評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十二〕文政七申年御渡

一中山道高崎宿ニおゐて召捕候伏見宮家來今井主殿、不筋之取計いたし候一件、

松平右京大夫領分中山道高崎宿百姓　市左衛門

道中奉行伺

右之もの儀、同國東國分村勝藏親文七江親市左衛門貸置候米金、相滯居候處、右は寛政九巳年以前、相對濟被仰出候以前之貸ニ付、奉行所之申立候儀茂不相成、取計方ニ差支居候迚、同國萩原村六之助申ニ任セ、宮方貸附金之積證文取拵取立可貰と、伏見宮ゟ親市左衛門儀、安永度、金三千両借用いたし候旨之證文相認、同宮家來今井主殿江差出候處、同人儀、右勝藏呼出、早速返金可致旨之書付爲差出候次第ニ至り候段、不届ニ付所拂可被仰付哉之段可奉伺處、全心得違之段相辯、前非後悔いたし、關東在々爲取締差出候、御代官手代旅宿江訴出候ニ付、一件之もの共、不届之始末も相顯候儀ニ付、無構、

此儀、安永二巳年、評議ニ御下ゲ被成候、大坂町奉行相伺候、上魚町小倉與三右衛門儀、借方之ものの難澁を見込、大坂表に於て、出訴可仕筋之貸銀證文を借銀之替りニ讓渡候趣、取拵候一札相

不埒證文

添、喜七相頼、五郎右衛門江引渡、僞之目安を以、三奉行裏判願受、銀子取立貰候、相對仕候段、不屆ニ御座候得共、與三右衛門發意仕候儀ニハ無御座、其上右證文銀之儀ハ、此度之願ニ相渡、事を不遂儀ニ御座候間、攝河兩國拂と相伺、評議之上、居町拂と申上、其通相濟候類例ニ見合、伺之通所拂相當之ものニ候處、自訴いたし候一件之もの共、不屆之儀も及露顯候儀ニ付、惡黨のもの訴人之御定をも見合、無構、

朱書 評議之通濟

〔德川禁令考後聚十四 行刑條例〕安永七戌年四月

太田播磨守掛

下總國中峠村儀兵衛相手、同村所左衛門質地出入、

書面之出入、證文被相糺候處、切畝分ニ而、檢地帳江不引合上ハ、質地ニハ難立、元金三兩、早々所左衛門方江差遣、地所ハ儀兵衛致所持、組合孫左衛門事、當時百姓嘉右衛門儀、右體證文江致加判段不埒ニ付、急度叱り置、證文取之可被差出候、以上、

〔德川禁令考後聚十四 行刑條例〕村方五人組帳前書

一田畑屋敷、年季を定、質物に入、金銀等借り候ハヽ、名主五人組加判之證文取之、所持可申候、勿論年季ハ拾年を限り、永年季に書入申間敷候、田地質物書入候儀、雙方致合點候而可埒明儀を、名主五人組私曲を構へ、證文に加判不仕、相滯迷惑仕候ハヽ、其段可申上候、名主五人組無加判、相對にて證文仕候ハヽ、雙方曲事に可被仰付候事、〇中略

一田畑質地證文に、名主加判無之證文、又ハ名主置候質ハ、相名主年寄組頭等之役人、加判無之證文、其外地主より年貢諸役を勤金主ハ年貢諸役を不勤質地之類ハ、從前々御停止ニ候處、右之通不埒成證文を以、訴出候も有之候間、彌質地證文相極候節入念、右體之儀無之樣ニ可仕旨被

仰渡奉畏候事、

〔德川禁令考後聚十四 行刑條例〕天明元丑年三月

質地作德出入之儀ニ付相談書

御相談書　桑原伊豫守
山村信濃守

質地作德出入訴出候節、吟味之上、質地證文ニ、字位高反別等認無之證文ハ勿論、水帳と不引合證文ニ加印致し候名主ハ、過料可申付御定ニ候處、作德計濟方相願候節、小作證文札之上、位反別等水帳ニ不引合、又ハ位反別等認無之分ハ、加印之名主、咎申付候も有之、又ハ不咎も有之、區々ニ付、以來作德計相願候節も、質地元證文、小作證文共相糺、字位反別水帳ニ不引合、或ハ認無之分共、加判之名主、御定之通過料之上、作德滯ハ、借金之利足ニ准じ濟方申付、質地元金ハ、濟方之不及沙汰候得共、右體不埒證文ニ付、相對之上、證文可仕直旨可申渡と存候、依之及御相談候、以上、

右丑三月四日、一座評議極、

〔德川禁令考後聚十四 行刑條例〕天明二寅年三月

質地出入取捌方、公事方吟味役江坂孫三郎江問合、并挨拶、

年季内之質地請戻度願之事

質地年季内請戻度旨申出候得共、相對ハ格別、請戻申付候筋ニハ有之間敷、乍去不埒證文候ハバ、借金ニ准じ取計可申哉、

年季内之質地請戻度旨申出候ハヾ、年季明、滯儀有之候ハヾ可訴出旨申渡候筋ニ而、尤不埒證文ニ候ハヾ、質地ニハ不立候、借金證文ニ爲認候方可然候、金主訴出候時ハ、借金之濟方可申付筋ニ候、

但本文之質地、相對ニ而請戻ハ、勝手次第之事ニ候、

〔御定書百箇條〕御料、一地頭、地頭違出入、并跡式出入取捌之事、

寛保三年極追加
一加判人有之儀成譲狀、并加判人無之候とも、當人自筆にて印形無相違書面怪敷儀も無之におゐてハ、譲狀之通跡式可申付、尤格別筋違に候はゞ、吟味之上、筋目之もの江可申付事、

〔牧民金鑑〕一借金銀證文、并賣掛帳面等譲受、及出訴候分ハ、以來假令證文儀ニ候とも、親兄弟ゟ譲受候ハ格別、其外之者、譲請候出訴ハ不取上樣ニ座ゟ申上置、

天明八申年五月

〔德川禁令考後聚行刑條例十六〕文政九戌年二月廿八日

譲證文を以出訴之儀ニ付、町奉行組與力申立候書付、

本所清水町吉兵衛店喜市代嘉兵衛儀、信州更級郡丹波島村彦五郎外拾壹人相手取貸金出入、主計頭殿御役所江及出訴候處、祖父より金子相譲候趣、親より之譲狀ニ而、御裏判願出候ニ付、右振合御問合御座候間、先例取調可申上、尤先例無之候ハゞ、取計方をも評議仕可申上旨被仰渡候ニ付、別紙訴狀并證文寫一覧仕、種々先例取調候得共、類例も見當不申、御見合可相成書留等も無御座候、依之評議仕候處、願人喜市親幾作より、右喜市江差入置候譲狀之趣ニ而ハ、祖父惣兵衛儀、貸附置候金子證文を相譲候趣ニハ無之、金子ニ而祖父より孫喜市江相譲候處、親幾作儀、右金子、兩名又ハ一名ニ而夫々貸附、右證文を悴喜市江相譲候趣之文段ニ有之候間、天明八申年、御一座被仰合之、親子兄弟之外、貸金賣掛等譲證文を以願出候共、御取上無之旨之取極とは趣意違ひ可申候間、此度及出訴候、喜市一名之證文者勿論、幾作喜市兩名、幾作一名之證文も、外ニ故障も無之候はゞ、御裏判被遣候方ニ可有御座哉ニ奉存候、依之御下ケ被成候書物返上、此段申上候、以上、

二月　　仁杉八右衛門

原善左衛門
佐久保彦大夫
中田與一右衛門
安藤源五左衛門
德岡榮藏
仁杉五郎八郎

〔德川禁令考後聚十六 行刑條例〕嘉永三戌年九月

家質讓證文之儀ニ付伺 原書指令チ闕ク

北新堀町家持三七郎方同居同人兄弘三郎より、深川大和町家持與右衛門外四人方江相掛候、家質金出入取調候處、右者元御金改役後藤三右衛門娘死失らく、幷後見人金三郎兩人宛の證文、らく弟願人弘三郎江、祖母高性より相讓候旨之讓狀を以、願出候出入ニ而、讓證文之儀ハ、親子兄弟之外、御取上無之との天明度被仰合之趣ニ、全相當仕候品とも相聞不申候、手續相糺候處、元來右之金子ハ、元三右衛門勤中、娘らく江遺置候養育金を、同人より相手のもの共江貸渡、三右衛門弟ニ而、元深川町ニ罷在候金三郎儀、後見名目ニ相成、前書之證文取置候內、らくは病死いたし、其後三右衛門儀ハ、不屆有之御仕置被仰付、家財其外欠所相成候ニ付、其節一旦右家質證文も御取上有之候處、妻子名付之品ニ付、猶又御渡相成候間、其頃親類相對之上、弘三郎儀讓受候得共、らく母儀も先年死失之事故、無餘儀祖母高性より右樣之讓狀渡置、金三郎後見名目ハ相離候趣之事實ニ而、當人存生中讓受候譯ニハ無御座候得共、素より兄弟姉妹ハ同樣之儀ニ而、らく弘三郎ハ全之姉弟ニも相違無之ニ付、然上ハ死後之無差別、矢張天明度被仰合ニ基、祖母より之讓狀ニ不拘、此儘取調濟方申付候樣可仕哉、尤三右衛門名跡者、先頃及斷絕、其後改、三七郎儀、名前人ニ相成、弘

口上書
口書

三郎後見いたし、當時町家之遺跡を新規ニ立候事ニ而、其以來らく法事書等も、勿論三七郎方ニいたし候由ニ付、左候得バ自然らくは當時ニ到候而ハ、先ヅ三七郎厄介姉之妻ニ相成居候故、其もの所持之證文等、死後當主之弟引受候共、筋合相立候ハヾ、不相當之儀も有之間敷哉ニ付、今般之證文も右三七郎方江爲引受、尤去ル寅年、家質證文御仕法替以前取引之儀ニ而、所持致居候儀ニ付、右も其頃町觸被仰渡之趣も御座候間、三七郎宛名ニ相改、弘三郎後見之方、都合も宜候ハヾ是又書加ヘ、證文書替候上ニ而可願出旨申諭、一ト先下ゲ遣候方ニも可有御座哉、差向例も無之儀ニ付、先ヅ出入ハ浮置、則右證文寫、其外書類相添、一應此段奉伺候、

戌九月　　　　中村次郎八

〔政書集〕口上、口書之事、

一寺社侍以上は口上書、足輕以下、并百姓町人ハ口書と唱へ、吟味取掛り候はヾ、左之通申口之趣取調可申事、

一何國何郡何村御朱印地と肩書ニ認メ、何家何寺實名年付、

同斷村所御朱印地と肩書ニ認、何神主社家何之誰年付、

一何國何郡何村何方末寺と肩書認、何家何寺實名年付、

同斷村所何神主社家肩書ニ認メ、何之誰年附何國何郡何村罷在候、地代官歟、家來と歟、肩書ニ認メ、何ッ之誰年付、右之分口上書之口ニ認メ、實姓名之下ニ口上と認、兩三人も一體之口上書取候はヾ、名前順々認、末々何も江用腹書ニ右口上と認メ、

一百姓町人何國何郡何村歟、何町名主と願長百姓代などゝ肩書可認、亦は村役人總代は名主誰と、頭誰々、百姓代誰、右總代兼名主歟、組頭歟、百姓代與肩書ニ認メ、誰年附組分ケ、出入等ニは、百姓拾何人總代誰年付、名前の下ニ申口と認候、大勢一體口上書申付候節ハ、右口上書と同斷、大

勢江用ひ、腹書ニ右申口と認メ、尤右初筆之名前之上ニ、訴訟方相手方と部分ヶ書認メ、吟味引合ニ而呼出候もの之口上書口書共に、口々何々之儀御尋ニ付被召出、御吟味ニ御座候、認答は此段何々之申口之趣逸々順々認、

一雙方之口書、本文は問答と認メ、振合如左、

御領分歟御知行歟　何國何郡何村

訴訟方　百姓　誰　年

相手方　誰　年

右申口

私共儀、誰ヲ相手取歟、私共相手と訴答ニ而、問文言違ひ、何様之儀御訴申上候ニ付、御吟味ニ御座候、

此段、誰儀は、田畑高何程致所持、家内何人相暮、農業之間、商ひ渡世歟、致し罷在候、然ル處、何之儀は、何れも追々書面之通りと認之、末ニ吟味詰と差當之趣を以、何々申上候ニ付、被仰聞候ハ何何ニ而、何様之旨御吟味請可申立様無御座候、

右之通少茂相違不申立候、以上、

年號月日

右　誰印

誰印

宛所

但引合ニ而吟味詰可申品無之分は、口書口上書共何々之儀ニ御座候、何分御聞濟奉願上候、

右之通少茂相違不申上候と可認候

〔聞訟秘鑑〕一口書認方之事

是ハ口書別通ニ不認候而差支有之節ハ格別、通例之出入ハ、雙方共ニ口書一通宛ニ取候儀宜候、ヶ條出入ニハ、雙方一紙ニ認候方宜候、認方振合左之通、

何國何郡何村
訴訟方　誰　何才
相手方　誰　何才
右雙方申口

一何々之出入、雙方御吟味御座候、

此向ハ申口を引出し候迄ニ付、随分短キ程宜、間長候得バ察當之文言を出し、先々申口を委敷認、可詰儀ハ末々ニ到リ詰候方宜候、自詰候儀を、察當詰ニ致し候もの、甚嫌ふ事也、

此段訴訟方申上候、ヶ樣々々、

一相手方申上候、ヶ樣々々、

右之通申上候ニ付、無證據申爭ひは難取用、何々儀は訴訟方カ相手方カ不埒之旨御吟味奉請候而ハ、可申立樣無御座候、

訴狀貳ヶ條目

一訴訟方申上候、ヶ樣々々、

一相手方申上候、ヶ樣々々、

右之通申上候ニ付、無證據申爭ひは難取用、訴訟方カ相手方カ誰儀、何々之取計不行屆不埒之旨奉請御吟味候而ハ、可申立樣無御座候、

訴狀三ヶ條目

一訴訟方申上候、ヶ樣々々、

一相手方申上候、ヶ樣々々、

右之通申上候ニ付、ケ樣々々、

右之通相違不申上候、以上、

月　日　　誰印

誰樣　　誰印

御役所

〔聞訟秘鑑〕一神主等口書認方之事　但下司不認候事

是ハ吉田白川家ゟ許狀を請、何之守と名乘神主ニ而も、吟味書ニハ守をば不用、譬ば何之伊豆、何之相模と口上書ニ認、若其者何之守と不認候而ハ、印形難致由申之候はゞ、其趣を以、印形不爲致候而も不苦由之事、

〔御例追加〕但右難澁書付、奥書ニ成候共、別紙ニ成候共可取之、尤此方ニ而取候奥書ニ候へバ、下司認候事も難致候間、別紙書付を取候而可然哉之事、

〔彈正凡例　乾〕安永八亥年十月、松平周防守殿御下知、

桑原伊豫守掛

一下總國都部村佐次右衛門品々申立候一件

小川遠林知行下總國相馬郡都部村
百姓　佐次右衛門

右之者儀、名主跡役幷入札地頭ニ而申付有之候處相滯、利右衛門跡名主之支配難請抔申張、地頭吟味之節、口書印形致難澁候段、不埒ニ付、三十日手鎖、

〔評定所格例〕御仕置もの等評議之趣申上方、簡易取計之事、

寛政六寅年二月

演說書
相談書

一諸向より差上候吟味伺書、評議ニ御下被成候節、評議仕申上候書面之義、右伺書と、下札を以評議之趣申上候はゞ、手數も少く可有之旨、太田備中守殿、尾嶋鍋三郎を以、一座江御達ニ候、評議之上、右之通申上ル、

一評議之上伺候趣と、御仕置振候分は、其者名前之下毎江、評議之趣下ゲ札仕、其外伺之通、振候義無之分は、右下ゲ札ニ申上候外は、振候義無之段、伺書末江下札仕、差上可申、

一不殘振候義無之候はゞ、其段下ゲ札仕、差上可申、

一御仕置咎等之黄紙無之公事出入裁許之伺書、評議之節ハ、別紙を以可申上、

一評議之趣振候分は、表紙江、誰々は何々と被仰付候、其外は評議之通相濟候趣御認被成、不殘評議之通相濟候分も、是又同樣御認メ、御下ゲ切被成被下候樣仕度候、

右之通申上候處、書面之通取計可申旨、同月廿四日、備中守殿被仰聞、

一諸向より差上候御仕置等伺書、一座江評議ニ御下ゲ被成候節、掛合不申候而難分筋有之候砌ハ伺來候處、以來右伺書之銘書計相認、懸合之義は、口上ニ而申上候樣寬政五丑年三月三日、松平伊豆守殿一座へ被仰渡候、

〔書留〕相談、演說、書取、○中略

演說　根岸肥前守

先達而御相談之上裁許申渡候、何國何村誰外何人ゟ、何町何丁目誰外何人を相手取何出入一件之內、何町誰店誰儀出所茂不相糺買受賣拂候何之儀、質先不相知間、代金何程誰方江償申付候處、金子出來兼候由ニ而、去ル幾日迄日延いたし置候處、誰儀欠落いたし候旨、町役人共訴出候間、日限尋申付置候、不尋出候ハゞ、定例之通可申付候、依而及御演說候、以上、

何何月

〔評定所留役覺書〕演説書

根岸肥前守

一上州矢田堀村四郎右衛門外壹人、相手同國仲ノ鄕村清吉外三人、理不盡出入、

是は如何之訴狀面ニ付、不及裏判、先達而御演説之上、相手方之もの共呼出之儀、夫々地頭江相

達候處、相手方之內、淸吉外壹人ハ欠落いたし、行衛不相知由ニ而、兵藏外壹人并欠落いたし候

兩人之親類組合、村役人差出候間、兵藏ハ手鎖申付置候、依之訴訟方之もの共、一同今日評定所

江差出可致吟味と存候、依之及御演説候、以上、

辰九月

〔書留〕明和七寅年七月廿五日

一伏見奉行本多對馬守、奈良奉行小菅猿右衛門出席有之ニ付、銘々懸り吟味演説無之、

但一座懸相尋上、谷澤村搦兵衛母すま箱訴吟味一件之內、口書讀之、

〔評定所張紙留坤〕一村拂ニ相成候もの、他村住居いたし、元居村之ものを相手取候、本公事目安取

計之事、

御相談書

小長谷長門守

一對談違變出入

春日左太郎知行
武州足立郡柏座村儀左衛門借家
訴訟人
又左衛門

榊原左衛門知行
上総國山邊郡北幸谷村名主
相手
市右衛門

外十九人

右出入、拙者方江訴出候ニ付相糺候處、訴訟方又左衛門は、元北ノ幸谷村百姓ニ候處、相手方之もの共馴合、又左衛門身分之儀、惡樣申立候付、地頭ニて吟味之上、村拂申付有之、相手方取計難心得

申渡

旨有之候ニ付、去申正月中、松平兵庫頭御勘定奉行之節呼出、御一座裏判を以呼出、吟味中、相對之上、夫々規定いたし、無申分出入内濟いたし候、相手方のものども、右對談を違變いたし候間、不得止事、猶又今般及出訴候旨申候、前書之通、兵庫頭初判差出候例茂有之候ニ付、今般茂初判差出し、御一座も過半御調印有之候處、町奉行衆ニ而は、取拂ニ相成ものより、元居町居村之ものを相手取候本公事之類ハ、目安裏判は不差出、差紙を以、相手方のもの共、呼出御仕來之由ニ有之、且享和二戌年取拂之もの元居町ニ貸銀有之、濟方之儀願出候節、取計方之儀大坂町奉行より掛合有之由ニて、町奉行衆御持參、御一座にて評議之上、取拂ニ相成候もの、元居町に、貸銀有之、濟方願出候節、右町江願人難立入儀ニ付、其所之ものを相手取願出候共、取上不申筋は無之、然共親類下人抔、由緒有之候もの江、讓受人より願出候はゞ取上、吟味之上裁許いたし候積相極候ニ准じ候得共、相手方之もの共は、差紙を以呼出候方、穩ニ可有之哉、然ル上は、右目安裏判相濟候分は、於内座消印いたし、相手之もの共は、差紙を以呼出、返答申付候上にて、雙方評定所江差出、爲致對決可申候哉、此段及御相談候、以上、

酉八月

右文化十酉年八月十三日、一座評決、

〔書留〕申渡、尋書、

申渡

評定所ハ如斯

誰御代官所何國何郡何村
訴訟方 何誰

申渡

手限ハ如斯

訴訟方 何國何村 誰

一何出入

評定所ハ如斯　　誰領分何州何郡何村　何誰
　　　　　　　　相手方　何州何村　誰

手限ハ如斯　　相手方　何守　誰

吟味ニ付呼出

評定所手限右同断　　誰知行何州何郡何村　何村　誰

其方共出入遂吟味之處、誰儀黄紙不埒ニ付、

何　黄紙不届ニ付死罪申付間、其旨可存、

一誰儀何々ニ付、過料錢何貫文申付、

三日之内可納と申儀と認不申候事

右之外先達之吟味ニ付呼出もの共ハ、不埒之筋無之、一同無構、今般不罷出もの共へ者其旨申可通、

右申渡趣、請書并證文申付、

〔三條雜錄四〕評定所にて、遠島申渡候もの、其日ハ町奉行證文ニ而在牢致居候得共、其餘都而手限ものに聊も相違無之事、

評定所ニ而、入墨之もの申渡相濟、牢屋敷江は例之通町奉行證文ニ而出入共相濟、其外溜預證文、又は時宜ニより寄場江遣し候證文等、都而手切物之通候事、

〔公裁秘錄四〕一裁許申渡方之事

申渡

上州土出村戸倉村村役人惣代　年寄　倉右衛門
訴訟方

申渡掛

花吹村針山新田村役人惣代　年寄　新左衛門

相手方　越本村役人惣代
年寄　藤右衛門

吟味ニ付呼出

同國郡地村役人惣代
名主　誰

其方共出入逵吟味候處、無證據申爭迄の儀は、一同無御取用、依之以來訴訟方の儀は、字不如院、馬渡、向ひ、五ヶ所の田畑東西縁、當時畦畔に相成居る分、前後の溝に引付堀立、右溝筋を地境と心得、其外字向ひの木立畑荒畑と申立る二ヶ所は、訴訟方申立通り、土出村にて進退いたし、右溝廻り東西縁に有之、土出村肥作場の儀は、相手方江相談の上是迄の通りいたし置、越本村地境の儀は、分間初杭ゟろの印九番杭、夫ゟ同印杭木通りを杭四番杭迄押廻し、はの印六番杭江移、同印一番杭江戻、同杭ゟいの印一番杭江引付、夫ゟ十八番杭江取付、雙方地境と心得、寺の作と申立る場所は、越本村ニて進退いたし、訴訟方江預り置、鎌は相手方江可差戻、一戸倉村役人土出村内のもの共、心得違を以論所江手入いたす段、畢竟申付方不行屆不埒に付急度叱り置、

右申渡趣、證文申付る、

午　月　日

〔御定書百箇條〕裁許繪圖裏書加印之事

從二前々一之例

一　國境郡境　　御老中加印
　　裁許繪圖　　三奉行連印

但右之外、繪圖裏書を以裁許之分ハ、三奉行連印、

〔牧民金鑑二十〕安永二巳年六月御觸

前々評定所、并奉行所ニおゐて裁許有之、御領私領寺社領等之村方ニ致所持、御裁許裏書、繪圖裁

許書下、裁許證文御料ハ御代官、私領ハ領主地頭江其村方ゟ寫を爲差出、本紙相添、當巳年中ニ取集、江戸着次第、寺社奉行月番江致通達、差圖可申請候、右裁許證文、古來ハ爲取替證文と認メ有之候間、是亦同樣取集可被差出候、

右之通可被相觸候、

六月

〔張紙留〕寛政元酉年十一月

一評定所公事裁許繪圖書下し之儀、裁許當日朝、奉行衆連印いたし、闕座之分者、銘々宅江持參いたし、印形可取旨雙方江申渡遣し、其段懸り奉行ゟ右闕座之衆江手紙ニ而可致通達事、

右者寛政元酉年十一月廿五日、肥前守、甲斐守江甲斐庄武助相伺極ル、

〔張紙留〕寛政十一未年十月評議極

繪圖裏書幷書下し三奉行連印之事

評定所公事繪圖裏書幷書下し裁許之節、當日朝、三奉行連印之儀、三奉行之内、兼而病氣ニ而引籠罷在候節も、當朝差懸り御用、又ハ當病等ニ而闕座之節之通、右闕座之分者、宅江持參いたし、印形可取旨雙方江申渡、判所江附札いたし、繪圖書下し等相渡、掛り之奉行ゟ右闕座之奉行江、右之段手紙を以可申遣積り、

是者三奉行、裁許當日、差懸り御用有之、又ハ當病ニ而出座斷之儀ハ、寛政元酉年十一月廿五日、一座評議極り有之候得共、兼而病氣ニ而引籠罷在候節之儀ハ評議無之、右之分者煩ニ付無加判と名前肩へ書認、黑筋江も印形除候先例も有之處、寛政十一未年十月二日、作州下原村外壹ヶ村と宗枝村外三ヶ村、地所出入繪圖裏書裁許之節、松平周防守者、當朝病氣斷ニ候得共、根岸肥前守者、兼而病氣ニ而引籠罷在候付、及評議候處、目安裏判もいたし候儀、其上裁許者、跡々江

殘候儀ニも候を、印形相除候而も如何ニ付、やはり宅ニ而印形いたし候方可ㇾ然趣を以、本文之通評議極、依ㇾ之周防守へハ例之通掛り菅沼下野守ゟ手紙遣す、

但度掛り金公事差紙連印之儀者、三奉行之内、外御用、又は病氣ニ而闕座之節者、其譯肩書いたし、連印相濟候儀者、是迄之通ニ極置、

〔張紙留〕裁許繪圖、又ハ裁許證文等致ㇾ燒失ㇾ候旨申立候節、訴訟方ニ而も、相手方ニ而も、燒殘候繪圖、或者證文爲ㇾ差出ㇾ寫いたし、燒殘候方江ハ、白紙を繼足、左之文言を認、評定所押切いたし相渡候事、

前書之裁許繪圖歟裁許證文歟、何方出火之節、何村ニ歟何寺ニ歟、所持之方、致ㇾ燒失ㇾ候付、猶又寫之令ㇾ與ㇾ書、雙方江下置者也、

評定所押切

年號月日

〔科條類典上二〕上總國市原郡西廣村と同國同郡大坪村野論裁許之事

西廣村訴趣、六原野之內、向原向ひよ原と、當村內野にて相殘野場者、大坪村と入會候處、大坪村より致ㇾ家作ㇾ地內之由申掠段訴ㇾ之、大坪村答旨、六原野者、往古より大坪地內にて念佛塚を築、且八幡江之往還故、笠待坂通の道普請、前々大坪村仕來候居屋敷、川欠にて居所無ㇾ之、百姓三人、去亥年小屋掛いたす由答ㇾ之、右論所就ㇾ難ㇾ相決、御代官原新六郎差遣遂ㇾ見分ㇾ處、西廣村之者共、內野の向原向ひよ原と、大坪入會野者、境土手有ㇾ之由雖ㇾ申立ㇾ一面之芝地にて、土手形曾而無ㇾ之候、名所之儀も、論所最寄に有ㇾ之、西廣村田畑の字にて、野場之證據に難ㇾ取用ㇾ候、且又六原野者、大坪村と入會候而堀普請土取場秣を刈作物干場ニ仕來由申といへども證據無ㇾ之、いづれも西廣村申分不ㇾ相立ㇾ候、大坪村者、右野場江五拾年以前、念佛塚を築、郡本村寶積寺を相賴令ㇾ供養、今以大坪村龍興寺支配之由申ㇾ之、西廣村も念佛塚立會築立由申ニ付、寶積寺龍興寺召出相尋候處、寶積寺四代以前之住持

致供養、其以後年忌法事等共ニ、大坪村仕來、西廣村者、一切不差構旨、兩寺申之候、次ニ往還道笠待坂通普請之儀、前々大坪村より人足出し、地境故山倉村名主立會、普請仕來由申ニ付、山倉村名主江相尋處、大坪村申段無相違旨申之、西廣村も此道筋普請仕來由雖申爭不分明候、依之今般評議之上、裁斷之趣、雙方口上而已にて、書物等之證據者無之候、然共大坪村にて念佛塚を築、笠待坂通道普請仕段、兩寺井山倉村名主申立上者、大坪村地元之野場に相決候間、論所不殘、大坪村可進退之、西廣村一切不可立入候、仍爲後證、各用印判、雙方江書下授條、永守此旨、不可違犯者也、

享保十八癸丑年八月廿五日

筑後〇松波正春、勘定奉行、

御用方無加印
兵藏〇松平政澄、勘定奉行、

右同斷
丹波〇細田時以、勘定奉行、

右同斷
佐渡〇杉岡能連、勘定奉行、

播磨〇筧正鋪、勘定奉行、

下野〇稻生正武、町奉行、

越前〇大岡忠相、町奉行、

隱岐〇西尾忠直、寺社奉行、

河內〇井上正知、寺社奉行、

豐前〇黑田直邦、老中、

〔科條類典下 一〕郡境裁許繪圖御加印之例

見分

大御番　飯田吉十郎

御代官　黑澤直右衛門

一美濃國不破郡梅谷村と、同國池田郡中村外拾壹ヶ村、山論、井郡境裁許繪圖裏書、御老中不殘御

加印、左之通、

元文二丁巳年十一月四日

神五郎三郎〇神尾春尹、勘定奉行、

河豊前〇河野通躬、勘定奉行、

神志摩〇神谷久敬、勘定奉行、

杉佐渡〇杉岡能連、勘定奉行、

松筑後〇松波正春、町奉行、

稲下野〇稲生正武、町奉行、

大越前〇大岡忠相、寺社奉行、

松紀伊〇松平信岑、寺社奉行、

牧越中〇牧野貞俱、寺社奉行、

中務〇本多忠良、老中、

伊豆〇松平信祝、老中、

左近〇松平乘邑、老中、

〔德川禁令考後聚九法曹事務〕文政十年十二月廿一日落著

伊豆守掛

作州大庭郡西原村と同國眞島郡垂水村境論裁許之事

西原村訴趣、字馬乘岩より臼岩、夫より山岩通り、字大谷へ引付、同所より向津矢村内山裾、岡山道通を、荒神の森上手、夫より寶曆度、同村と赤野村裁許郡境西緣、古川入口の場所へ見通し、久世川西緣ニ而、東ハ大庭郡西原村境ニ、守來川敷とも進退いたす處、出水之度每川瀨附寄、二瀨ニ成、流水いたし、中洲之地所を、享保の度、垂水村と及爭論、雙方石取場、物干場等ニいたす筈ニ而、內濟いたす後、同附の一瀨を〆切、中洲の地所へ追々家居取建、水刎川除いたす故、荒地ニ成、剩へ作付之

地所をも古川敷の由、又は天明の度、雙方作付播散す地所ハ、當時水中ニ相成居を、論内芝地の由申紛段、難心得旨申之、相手方垂水村答趣ハ、字笠岩より疊岩、夫より水中境、柳の場所より大谷へ引附、高田川西縁ニ有之處、垂水村地内へ川瀬附替り、荒地ニ相成地所を西原村地内の由申紛、古來より田畑家居有之地所を、古川敷、又ハ荒地の由申掛る段、都而難心得旨及爭論、郡境ニ拘る間、御代官荒井平兵衞被差遣處、向津矢村も引合ニ相成、垂水村申立る、水中境柳の場所より、字赤剣へ引付、夫より寶暦度、赤野村と向津矢村裁許郡境、古川入口の場所へ見通し、往古川敷西縁、郡境の旨申立る間、一同遂糺明處、字馬乘岩より大谷の邊、久世川西縁ニ有之上ハ、論内市場河原、中河原等の地所を享保天明之度、石取場、又ハ雙方作付地播散す筈ニ而、内濟可致謂無之、村明細帳ニ、川幅記有之とも、其村限の品ニ而、他村へ對す證據ニハ難成、久世川魚獵ハ、訴訟方而已相稼、渡船ハ雙方進退之由も的證無之、論所一圓進退致し度との訴訟方申分難立、相手方の儀も、字笠岩より疊岩境、柳と申場所より大谷へ引付、古川西縁の由難申、論内河原の儀ニ付、享保天明兩度爭論およぶ節内濟いたし、或ハ西原村作付地を垂水村より出作いたし居候上ハ、右申分難取用、西原村向津矢村申爭之趣も、互ニ心得違ニ而難成信用、其外雙方より爲證據品々雖差出、不足取用、因茲今般衆議之上定趣ハ、訴訟方ニ而、久世川相手方并引合向津矢村ニ而高田川と申立る川筋、西縁ハ下市瀬村境、惡水路東縁より川口落合川縁通を備中川落合際、水刎枠元江引付、夫より字大谷、同所より向津矢村地内、字倉谷より、ふ印分間貳拾三番杭の涯下川縁へ引付、寶暦度裁許有之、古川入口へ見通し、大庭眞島兩郡境と心得、垂水川除普請所最寄川浚いたす節ハ、同村爲立合、西原村ニ而浚立、魚獵ハ雙方入會相稼、垂水村水刎出ハ、是迄之姿を以取繕、根園の蒔石ハ川表貳間、備中川落口、水刎枠ハ、長貳拾間限り相仕立、右普請ニ訴訟方不差障、後年水行ニ隨ひ、危難之場所ハ掛合之上取計、渡船ハ垂水村進退ニ而、川東船著場ハ、西原村ニ而取繕、川幅ハ前後ニ見平均、享

保天明之度議定いたす地所ハ、右川敷の内と心得、雑木等不ㇾ生立樣可ㇾ致旨裁許畢、仍爲ニ後鑑ㇾ繪圖面江引ㇾ墨筋、各加ニ印判ㇾ雙方へ下置條、永不ㇾ可ニ違失ㇾ者也、

文政十年十二月廿一日

曾豐後〇曾我助弼、勘定奉行、

遠左衛門〇遠山景晋、勘定奉行、

石主水〇石川忠房、勘定奉行、

村淡路〇村垣定行、勘定奉行、

筒伊賀〇筒井政憲、町奉行、

榊主計〇榊原忠之、町奉行、

堀大和〇堀親寚、寺社奉行、

太摂津〇太田資始、寺社奉行、

松伊豆〇松平信順、寺社奉行、

土大炊〇土井利位、寺社奉行、

周防〇松平康任、老中、

和泉〇松平乗寛、老中、

加賀〇大久保忠眞、老中、

出羽〇水野忠成、老中、

下野〇青山忠裕、老中、

右出入郡境ニ拘ニ付、御代官荒井平兵衛被ニ差遣ㇾ見分吟味之趣を以伺之上、青山下野守殿依ニ御差圖ㇾ繪圖裏書を以裁許之、松平越後守家來松浦平介、三浦備後守家來神原三作へも合ㇾ聞之、目安返答書継合、裏判消ニ遣ス、

繪圖左之もの共へ下置

松平越後守領分作州大庭郡西原村總代同村庄屋兼帶平松村
曾市

西原村 年寄
小平

三浦備後守領分同國妻木村總代
庄屋
吉五郎

年寄
逵太郎

〔諸例類纂 六〕天保九戊年十二月十一日於評定所御出席

寺社奉行
稲葉丹後守殿
牧野備前守殿
青山因幡守殿
松平伊賀守殿

町奉行
大草能登守殿
筒井紀伊守殿

御勘定奉行
深谷遠江守殿
遠山左衛門尉殿

御目付
一色主水殿

御呼出

松平美濃守家來
守田守左衛門

松平肥前守家來
羽室平左衛門

同梅崎忠兵衛名代
大橋藏橋

同中橋左内名代
六角橋左衛門

同三好左馬進名代
大渡官之丞

屹度叱り

同

背振山論所畫圖ニ御奥書有之、青山因幡守殿御渡、左之通受書差出、

請書

羽室平左衛門、守田守左衛門儀、美濃守領分、筑前國早良郡、板屋村外二ヶ村ミ、肥前守領分、肥前國神崎郡久保山村國境、元祿六酉年十月十二日、御裁許之上、双方村方へ被下置候、御裏書繪圖

面之内、久保山村へ被下置候分、村方より願上、領主役場江預、右役場ニおゐて居城二丸土藏へ入置候處、去ル未年五月十日、二丸納戸役所ゟ出火之節焼失いたし候ニ付、板屋村外二ヶ村繪圖面を以御寫被下置、右之趣双方村方之者共御呼出可被仰渡所、遠路出府いたし候も難儀可仕候間、其段彼地ニおゐて、夫々村方之者共へ申渡、繪圖相渡可申旨被仰渡奉承知候、則繪圖面奉請取候、

一梅崎忠兵衛、中橋左内、三好左馬進儀、主人領分、肥前國久保山村へ、元祿之度渡置、國境裁許繪圖、右村方ゟ領主役場へ預り仕廻置、非常之節、取扱等心得乍罷在、役場焼失之砌、急火殊ニ風烈ニ有之候迚、持退方不行屆、右繪圖焼失いたし候段不束ニ付、急度御叱被置候、

右被仰渡之趣、一同奉承知候、依而御請書差上申處如件、

松平肥前守家來　羽室平左衛門
梅崎忠兵衛名代　大橋藏橘
中橋左内名代　六角橘左衛門
三好左馬進名代　大渡官之丞
松平美濃守家來　守田守左衛門

御許定所

筑前國早良郡板屋村脇山村椎原村百姓と、肥前國神崎郡久保山村百姓、兩國境論所裁許之條々、

一筑前國百姓訴趣、筑前國早良郡背振山上宮東門寺之由來ハ、三代實錄、朝野群載、元亨釋書、并舊記有之而、爲筑前國由申聞候、右三郡之書、其外之證文、筑前國背振山之名雖有之、上宮東門寺辨才天ハ不載之、肥前國百姓所持之舊記證文、自上古至近年、背振山之號數多有之、溪嵐拾葉集、江

州竹生島義軌ニ、背振山在肥前國、且亦日本六辨才天、其一ヶ所在背振山、然則兩國名雖有背振山之名、辨才天之義、肥前國百姓所答、證義慥也、井東門寺古跡之礎有之由、筑前國百姓訴之、肥前國百姓答るは、辨才天參詣之者爲參籠、往年小堂有之處、年久敷令破壊旨申、檢分之上、縱九尺二間之所、小石相殘、〻寺院之礎、且東門寺之證文、筑前國百姓雖差出之、一向不正條、所訴不謂事、

一論所炭竈等所々有之、筑前國百姓令進退由雖申之、證跡聊無之、肥前國百姓所出之帳面、鍛冶炭收納之事載之、證據爲慥條、筑前國百姓所訴非分也、又論所之內、同證跡有之、筑前國百姓申候ハ、此爲筑前國之領分、然ニ肥前國之者、廿年以前依令開發、早速押止らせ申之、肥前國百姓申候ハ、此處佐賀領無紛候、雖然用水不足故、不致耕作旨申候、檢分之上、時形歴然ニ有之、二三年作來田地相見候ニ付、遂吟味處、筑前國百姓不及異儀上ハ、肥前國百姓申旨有謂事、

一論所筑前國百姓所指申之境、肥前國田品之畔ニ隨、或ハ山之半腹、或ハ谷を横切、榜示不正、全國境之差別不相見、肥前國百姓申所之境ハ、北山岸續絕頂通り高障子迄引之、自其谷川を下り、久比利ニ到り、榜示相立段、檢使檢見之上、尤相見事、

右爲檢使、佐久間小左衛門、設樂勘左衛門、被差遣之、遂糺明處、筑前國百姓所訴不慥、段々申分無之旨、筑前國百姓證文差出之候、且又正保四年、佐賀領主、公儀へ所差出候、官庫ニ有之一國繪圖ニ、上宮嶽辨才天堂之圖記之、福岡領主所上之繪圖ニ不載之、剩百三十年餘、中宮多聞坊辨才天堂守之、中宮下宮坊中江寺領五百八十石餘、佐賀領主寄附之造營修復等、是又佐賀領主致之條、旁以肥前國百姓所答理運也、依之肥前國百姓所指之榜示用之、各加印判、兩國境相定畢、自今以後、永守此旨、不可再犯者也、

元祿六年癸酉十月十二日

稻伊賀守印　勘定奉行、稻生正照、
松美濃守印　勘定奉行、松平重長、

能勢出雲守印○能勢頼稠、町奉行、
北條安房守印○北條氏平、町奉行、
本多紀伊守印○本多正永、寺社奉行、
戸田能登守印○戸田忠眞、寺社奉行、
松浦壹岐守印○松浦任寺社奉行、
相模印○土屋政直、老中、
山城印○戸田忠昌、老中、
豐後印○阿部正武、老中、
加賀印○大久保忠朝、老中、

前書之裁許繪圖面、佐賀領所持之方燒失いたすニ付、福岡領所持之方を以寫之、令奧書、雙方被下置もの也、

天保九戌年十二月十一日

〔書留〕請證文

是は出入裁許之趣申渡、證文申付、本書ハ奉行所江取置、下タ方ニ而ハ右寫所持居候儀ニ候事、

但本文請證文寫を、今般猶寫いたし、元とも一同可差出事、

〔聞訟秘鑑〕一請證文認方之事

是ハ欠落者不尋出、御咎等、御叱、急度御叱リ迄ニ而、以後ヶ樣々々可致との儀無之分ハ、被仰渡趣、一同承知奉畏候と認、欠落者歸住等之類、不埒之御咎付候上、以來農業出精可致との文言杯有之類ハ、何々之儀不埒候付、急度御叱被置、以來ヶ樣々々可致旨被仰渡、一同奉畏候、若相背候ハヽ、御科可被仰付と認、夫々重く、過料所拂、追放等ニも相成候類之請證文ハ、若相背候ハヽ、重

科可被仰付と認候方可然候、振合左之通、

指上申一札之事

私共出入、再應御吟味被遂候上、銘々左之通被仰渡候、

一何々之儀、誰々不埒ニ付、過料錢何程被仰付候、

但過料錢ハ、三日之内、當御役所へ可指納旨被仰付候、

一何々之儀、誰致方不行屆ニ付、所拂追放被仰付候、

但御構之場所、徘徊致間敷旨被仰渡候、

一先達而御吟味ニ付被召出候者共、不念之筋も無御座候間、御構も無之間、其旨私共ゟ可申通旨被仰渡候、

右被仰渡之趣、一同承知奉畏候、若相背候はゞ、重科可被仰付候、仍御請證文、指上申處如件、

年號月日

〔評定所格例〕地改差遣候評定所公事相談書ニ不及事

寛政九巳年六月一座評議極

一評定公事、地改差遣し候出入、地改相濟候上、内座ニ而、分間繪圖を以、手代申立委細之趣意承り候上、手代ハ爲引、裁許申渡之趣相談書、留役ニ讀セ、上證文裁許之分ハ、相談書ニ不及、右證文を爲讀來候、然處申渡裁許ニ候とも、手代申立之趣ニ而、出入之趣意相分り候間、評議書簡易之手續ニ准じ、以來不及相談書、請證文を留役ニ爲讀裁許之義可致相談候、

〔德川禁令考後聚九法曹事蹟〕寛政十午年十一月二日落着

下野守（菅沼定喜勘定奉行）掛

越後國小島谷村與右衛門外壹人相手、同村太右衛門外二人、開發差障出入、

山田茂左衛門御代官所、越後國三島郡小島谷村與右衛門外壹人訴候者、沼地開發之儀を、稲葉新

太郎知行、同村太右衛門外壹人、差障旨申出ニ付、裏判を以呼出、令吟味處、地所之儀難決、地改さして、鈴木喜左衛門、瀧川小右衛門手代差遣、遂糺明處、沼地と申立ル場所ハ、檢地帳井割付ニも字無之、右場所ハ、享保年中、御料私領立會、浚御普請相願、溜井之旨引合金次郎組之もの共も申立、既ニ田方江水引取、江筋も歴然有之、相手方檢地外書ニ相載、溜井之段無紛、同所を開發いたし度由ハ、訴訟方申分難立、依之用水引取之儀、是迄之通相心得、新開之儀ハ、出訴之趣不及沙汰、以來溜池不埋樣、浚普請之儀、前々之通可取計、且池縁地所之內、訴訟方一支配村內ニ而、申爭論所ハ、訴狀外之儀ニ付、支配役所江可申立ハ格別、是又今般不及沙汰筋ニ無之旨申渡、證文申付、山田茂左衛門手代望月軍藏、稻葉新太郎家來山岸勝右衛門江も令聞之、目安返答書繼合裏判消ニ遣ス、

地改　鈴木喜左衛門手代　市川丈助
　　　瀧川小右衛門手代　福田兩助

差上申一札之事

私共出入御吟味之處、地所之儀難御決、爲地改御代官鈴木喜左衛門樣、瀧川小右衛門樣兩御手代中被差遣、再應被爲遂御糺明候處、訴訟方ニ而ハ、延寶六午年之御檢地帳外書ニ、荒田下田壹反四畝歩と御記有之候筆ハ、字後谷沼地之儀故、安永年中より、蘆間冥加永をも相納、當時眞菰立ニ而有之候ニ付、今般開發之儀を、相手方之もの差障候旨御訴申上候處、相手方ニ而ハ、同所者天和三亥年之御檢地帳外書ニ、三町壹畝廿歩四ヶ所と認有之候、溜井內ニ而、御料私領田高百六十石餘之用水元ニ有之、前々浚普請等いたし候節之證據も有之候旨、雙方申爭候得共、訴訟方御檢地帳井御割付ニハ、荒田之字無之、的證も無之間、申分難成御信用、字後谷溜池ハ、享保年中、御料私領立會、浚御普請相願、其砌雙方連印ニ而、脇野町御預り役所江差出候帳面も有之、其外村繪圖、明細帳等も記置、引合金次郎組之もの共も、論所ハ溜井之段申立、既ニ田方江水引取候江筋も歴然有之、

其上論外之溜池をも御改之處、異議立論所を差加候而も、相手方御檢地帳外書、溜池反別ニ御見合、不足相立候上ハ、論所者、右溜池四ヶ所之内ニ無紛同所を開發いたし度由ハ、訴訟方申分難相立、依之用水引之儀ハ、是迄之通相心得、新開之儀ハ、出訴之趣不被及御沙汰ニ候間、以來溜池不埋樣、渡普請之儀、前々之通可取計旨被仰渡、且池緣東西地所之內、訴訟方御一支配村内ニ而申爭候論所ハ、訴狀外之儀ニ付、御支配御役所江可申立ハ格別、今般可被及御沙汰筋ニ無之段被仰渡之趣、一同承知奉畏候、若相背候はゝ、御科可被仰付候、依而御請證文差上申處如件、

寬政十午年十一月二日

山田茂左衛門御代官所越後國三島郡小島谷村
訴訟方　組頭　與右衛門
名主　彌右衛門

相手方　稻葉新太郎知行同村
名主　太右衛門
百姓代　忠兵衛

御吟味ニ付被召出候
山田茂左衛門御代官所同村金次郎組
庄屋　孫右衛門

御評定所

〔德川禁令考後聚十法曹事務〕文化十四丑年七月廿一日落著
主計頭(榊原忠之大目附)掛

上州沼之上村と武州八町河原村渡船出入

松平大和守領分、上州那波郡沼之上村進退いたし來ル烏川渡船を、高城清右衛門知行外壹給、武州賀美郡八町河原村差障段申出ルニ付、裏判を以呼出、再應吟味之上、渡船之儀者、從來訴訟方勤來儀ニ而、其段先裁許ニも有之上者、相手方ニ而、橋代リ之由申立ル渡船者相止メ、訴訟方仕來リ之通、渡船相勤、尤川瀬相變、船著場最寄替等いたす節ハ、相手方江得と示談之上取極メ、以來和融いたし、往來差支ニ不相成樣可致旨令裁許、證文申付、松平大和守家來河合安五郎、高

城清右衛門家来星龍之助、諏訪七左衛門家来三好郡司江も介聞之、目安返答書継合裏判消ニ
遣ス、

差上申一札之事

一私共出入被爲遂御吟味候處、訴訟方之儀、往古より渡船進退いたし候得共川瀬ニ随ひ、いつれ之場所江も、相手方江無聞合船着仕来り候由ハ勝手儘之申分ニ有之、相手方之儀も、寛政年中、本庄宿免除願書ニ、橋代り渡船いたし候由ハ聢無之、金久保村より毘沙土村ニ願り候出入済口證文ハ論外之儀、殊ニ金久保村作場通ひ而已、地元村ニ而いたし候趣之儀ニ候上者、三國往還渡船之引當ニ者難相成、元禄年中國境出入御裁許御裏書に渡船之儀者八町河原村之もの共不可妨と記有之、其節とは當時川瀬相違いたし候とも、川面進退之儀者瀬違ニ可拘筋に無之、其餘無證據申争芯之儀者、雙方共御信用難相成、依之渡船之儀従来訴訟方勤来候儀ニ而、其段元禄年中御裁許ニも有之候上者、相手方ニ而橋代り之由申立候渡船者相止メ、訴訟方仕来之通、渡船相勤、尤川瀬相變、船着場最寄替等いたし候節者、相手方江得と示談之上取極メ、以来和融いたし、往来之差支ニ不相成様可致旨被仰渡候、

右被仰渡之趣、一同承知奉畏候、若相背候ハヽ御科可被仰付候、仍御受證文差上申處如件、

文化十四丑年七月廿一日

松平大和守領分上州那波郡堀之上村役人惣代
名主　小文治
年寄　次郎右衛門

高城清右衛門知行武州賀美郡入町河原村役人惣代
名主　十次郎

諏訪七左衛門知行同村役人惣代
名主　勘右衛門

御評定所

(仕置吟味)差上申一札之事

上證文

越後國爲御取締御廻村被成候御手代中御出役先ニ而被召捕候常盤町無宿吉五郎外貳人不屆之取計いたし候一件再應御吟味之上左之通被仰渡候

一吉五郎長藏松藏儀吉五郎發意ニ同意いたし越後國麓村重右衛門宅江押込同人幷女房やひを持合候繩ニ而縛り吉五郎は帶居候脇差を拔聲立候ハヽ可切殺旨申威右側ニ罷在其内長藏松藏は家搜いたし金錢衣類盜取候始末一同不屆ニ付吉五郎は獄門長藏松藏は死罪被仰付候

一盜物御取上御預被置候分其儘御渡被遊候

一右之外御吟味ニ付被召出候もの共は御構無御座旨被仰渡候

右被仰渡之趣一同承知奉畏候仍御請證文差上申所如件

天保九戌年五月二日

松平右京亮領分越後國蒲原郡麓村
百姓　重右衛門印

村役人惣代
庄屋　國之助印

青山九八郎様
御役所

常盤町無宿吉五郎外二人不屆之取計いたし候一件御仕置相濟候御屆書

獄門　常盤町無宿　吉五郎

死罪　小石村無宿　長藏

與板町無宿　松藏

右之通御印狀を以御下知相成候ニ付當月二日夫々申渡御仕置相濟申候依之受證文一通相添此段御屆申上候以上

戌五月　青山九八郎印

〔書留〕上ゲ證文

是は裁許之趣申渡候請證文寫を、其奉行所ニおゐて認、年月日、幷繼手印ニ押切いたし、相認候品品ニ候事、

增田〇作右衞門曰、書下しハ、請證文不申付故、下タ方ニ而裁許之趣難澁いたし、拒候儀等不相成意味有之、縱令不伏ニ候とも、別段願出候儀ニ付、其節ハ手限ニ而吟味いたし追而評定所江差出ニ相成候、上ケ證文ハ、近頃〇天保絕而無之、都而受證文ニ而相濟、當時ハ心得候ものも無之、尤同人奉り野州半田村檢地之節、先裁許上ケ證文寫下タ方所持いたし候を取上ケ、右一件元袋江入置候間、認振りハ相分り候得共、上ケ證文ニ可成ものと、受證文ニ可成ものとの差別難相分候ニ付勘考いたし候處、事長歟、或ハ入組候儀は上ケ證文にいたし、下タ方江も寫下ケ置候儀ニ可有之、尤上ケ證文ニ相成候得バ、奉行衆申渡ニは雙方裁許之趣可承由被申渡候計ニ而、裁許之趣ハ、證文を以奉り讀聞候儀に有之、手厚キ取計ニ而、體裁も宜敷、請證文ハ事短ニ而入組候儀ニも無之分、奉行衆申渡之趣を承り、請いたし候筋ニ付、寫ハ下タ方ニ而いたし候、いかにも手輕き取計故近來一般ニ請證文ニ成候事と相見候、

但道中方ニ而は、當時も事短く不入組分は請證文、事長キハ上ケ證文ニ相成、

井上新右衞門云、祇〇祇恐祠誤部職掌八百卷程之書物、松平右京亮編集ニ而、寺社方ニ有之、右之内ニ、裁許書之儀、委敷記有之、尤右は江坂孫三郎取調之由、

〔聞訟秘鑑〕上ゲ證文之事

是ハ御奉行所ニ而、公事出入御裁許之節、被仰付候證文を、都而上ゲ證文とハ不唱、上ゲ證文振合、左之通、

差上申一札之事

一何々之出入、ケ樣々々訴上之候、

一ヶ樣々々、答上之候、

右出入、被遂御吟味、ヶ樣々々被仰渡、一同承知奉畏候、若相背候ハヾ、御科可被仰付候、仍爲後證連印一札指上申所如件、

右之通、最初訴答之趣を認候を上證文と唱、其外通例之儀ハ、御裁許受證文と唱候事、

但地所出入抔ハ、多分上ゲ證文裁許ニ相成候事、

〔地改役心得書〕繪圖引方幷裁許裏書之事

一繪改裁許之儀、先年者大體繪圖裏書墨引裁許、又ハ書下し等ニ候處、其後上證文裁許と相成、地改定出役ニ成候頃より、寛政五六之頃迄ハ、大方上證文を用、其後根岸肥前守御勘定奉行之砌、存付ニ而、諸證文よみ渡し裁許と申ニ成、猶又申渡裁許ニ成、夫より一通り之地改之もの者、諸證文取之品ニ寄、場所杭木違候樣成、尤諸證文裁許ニ相成候一件者地改之もの、諸釋相濟候上、相談書直之候處、諸調物備爲ニ可致事ニ相成候砌、寺社方調役羽田藤右衛門存付を以、諸釋ニ而相分候上ハ、相談書ニ不及積、一座評議之上相止、

上證文ハ、繪圖ニ訴答之中立を外題ニ願し、初吟味之處、地處之儀就糺御決、爲地改種々樣之御手代中被差遣、再應被遣御糺明候處、訴訟方ニ而ハ何々と申、相手方ニ而者何々と申趣、夫之夫證據物等を以、夫より吟味筋を記候上、何々之儀裁許有之、再論及間敷旨承知之趣、連判一札差出さ申候、上々程村紙ニ三通認、評定所へ取置候江ハ一件之もの共連印取之、訴答江例渡し候分ハ、年號之上之處ニ而、右評定所江取置候分江、訴訟方を上、相手方を下ニいたし、大判三切押切ニいたし、繼手江も大判を押、割字江ハ小丸印を押相渡ス、皆附候得者、別受證文取之、三方渡、四方渡り抔申、口口江渡候分も有之候事、

一上證文、止ニ成候元ハ、寛政七八之頃と覺、繪後圖大石金殿と申、評定公事山論有之、根岸掛りニ而、兵右衛門、左文次、地改之上、上證文を以、裁許相濟候後、一方之儀主より彼是申立幷證據見出し候由ニ而、再論ニ成、吟味仕直しニ付、雙方評定所江呼出し、一旦相渡置候上證文取上、再地改吟味之上、裁許改り候より證文ニ相成候、此件村明細帳、用不用等之論有之候、

右繪圖裏書幷書下しハ、奉行所より申渡候趣之文意故、候と申文字不認、てにをはも其意にて、の之字、の之外不認樣いたし、にもに之字也、上證文ハ、下より請いたし候意ニ取調候事、

一評席ニ而讀之、裁許狀、繪圖裏書書下し、上證文、初對決公事、目安返答書とも、儒者ニ而相勤候處、
寛政以來相止、留役讀之、〇月年闕

〔御仕置例類集一ノ三〕文化十二亥年御渡

大坂町奉行伺

一播州眞守村外壹ヶ村と同國少分谷村井堰用木伐採出入裁許之儀評議

土井大炊頭殿領分丹羽和泉守領分入組 播州加東郡眞守村 庄屋 年寄 百姓代
訴訟方
酒井河内守領分同州同郡黒井村 百姓代 庄屋 百姓代
同断
松平右近將監領分同州同郡少分谷村 庄屋 年寄 百姓代
相手方

右ハ井堰用木伐取之儀、及爭論候ニ付、一件吟味仕候上、去ル辰年、松平能登守御城代之節、先役佐久間備後守御用召ニ付參府中、信濃守ゟ相達、爲地改、石原庄三郎、木村周藏、手代兩人差遣候處、於場所右手代共吟味仕候趣、口書幷繪圖諸書物差出候間、裁許之趣、別紙上證文案伺之通可申渡候哉、依之一件書物目錄之通差上、此段相伺申候、

此儀出入裁許之趣、評議仕候處、別紙上證文案見込之趣、振候儀も相見不申候、然ル處右證文案ニ、訴訟方ゟ相手方江可相渡代銀割合、巨細之内譯、一打ニ記有之、右ハ腸リ見込迄之儀ニ候を、

上證文ニ認候儀ハ如何ニ付、右譯書之廉者、三口とも相省可ニ申渡一、

但本文上證文案登通、委過候哉ニも相見候得共、彼地仕來と相聞、得と遠國ゟ相伺候義ハ、其時々樣子、所之風俗も有レ之候ニ付、寬政元酉年御渡之御書付をも相含、評議仕候儀ニ御座候、

上○證○文○案○

差上申一札

一播州加東郡貞守村長井村ゟ、同州同郡少分谷村江掛り候井堰用木理不盡伐採出入、寬政十二申年閏四月十八日願上候ニ付、訴狀御裏印を以、同年七月二日對決、被ニ仰付一、御札中對談內濟仕度、又は病氣之もの茂有レ之、追々雙方御日延願之上ニ候得共不ニ相濟一候ニ付、場所御見分御吟味之上、雙方口書被ニ仰付一候上、今般左之通被ニ仰渡一候、○中略

尤巳來川表欠崩出來之節は、貞守村長井村より、早速普請可ニ仕旨被ニ仰渡一候、

右御裁許之趣奉レ畏候、爲ニ證據一仍如レ件、

年號月日　　雙方村役人連印

奉行所宛

附箋御書面之通、大坂御城代江被ニ仰遣一候旨被ニ仰聞一、承知仕候、

亥六月十日　　評定所一座

扣伊豆守

松平右京大夫江

播州加東郡貞守村長井村、同州同郡少分谷村井堰用木伐取出入一件、裁許上證文案、平賀信濃守水野因幡守差出、裁許之儀相伺候ニ付、一件書物繪圖等、先達而大久保加賀守勤役中差出候、右上證文案之內、訴訟方より相手方江可ニ相渡一、代銀割合、巨細之內譯一打ニ記し候廉は、三口と

も相省、其外伺之通可申渡旨可被相達候、

亥六月

○按ズルニ、右ノ上證文案ハ原書二十枚ニ過ギ、訴訟人相手方ノ口書、及ビ裁許ノ理由ヨリ一件落著ノ顛末ヲ詳記セリ、今ハ煩ヲ厭ヒテ之ヲ引カズ、

〔評定所格例〕評定所公事訴訟之手帳認方之事

安永三午年正月、一座評議極、

一公事訴訟手帳、幷帳外書付、是迄懸り奉行ゟ、席順ニ認候得共、向後着帳之先次第、席順ニ不構認候積り、

〔法曹後鑑〕天明七未年十二月十一日

一訴訟之帳ハ、例之通町奉行より進達、帳外書付貳通ハ、御勘定奉行より進達、尤帳外ハ例之通美[illegible]紙を用ひ、継手幷文字等心付候事、

但大目付江、帳外書付留役より遣、尤御出座案内之節、直ニ遣置、

一一座幷御目付江之帳外書付ハ、御料理之内、例之通　席江配り置、

〔牧民金鑑 一〕訴狀札心得之事

一訴訟人ハ當人ニ候哉、又ハ代ニ候哉、

一相手方届書、地頭國郡村幷名前等、無相違哉、死失名違等無之哉、若相違有之候得バ、御答を請候事ニ付、其段申聞候事、

一出訴を差留候筋ニ無之、尤吟味いたし候趣意ニもなく、利害申聞、自然と出訴止候得バ一段之事、

右雙方名前、公事銘、月日等、帳面ニ可記置事、

御仕置書寫

但御國役之帳面、互ニ留置、札之節、若奉行所を替候事無之哉、留帳見合、左様之出所有之候ハヽ、咎候筋ニハ無之、其道理を申聞候事、〇年月闕

〔公儀秘密集 上〕公事訴訟科之者取捌大概〇中略

一遠國ゟ来る公事人ハ、在江戸久備ゟ承之、當地之公事人ハ、其日之帳面之先次第承之、但不承して不叶儀か、急用ハ格別也、

〔記事條例 三〕一評定所公事訴訟留帳配り、月々其月番之寺社奉行町奉行江、評定所ゟ差越候儀、以来相止可申事、〇中略

右之趣、寛政四子年三月廿一日、一座評議之上相極、

〔憲教類典 四ノ六 評定〕元文三戊午年十一月十八日

當春相觸候、御代官所にて遂吟味伺之上致落着候出入、并御仕置もの伺相濟候者、其度々伺書寫致、公事方内寄合之節、被差出候様相觸候通、彌無遅滯、其度々寫差出候様可被相心得候、尤御勘定奉行ニ而吟味之上事濟候分ハ、申渡之趣書記可差出候、先達而一通書付被出候以後、寫不差出候ニ付、猶又相達候、尤只今迄御仕置相濟候分者、來月十八日までに書付可被出候、

右者此度計之事ニ者無御座候、向後書面之通御心得可被成候、以上、

十一月十八日

中山平左衛門

齋藤又七郎

〔公儀秘密集 上〕公事訴訟科之者取捌大概

一公事裁許以後、其節之役人、裁許之始末留書可致之、

〔寶暦集成 續條三十〕寶暦三酉年正月

三奉行江

黄紙

只今迄御仕置被相伺候分、御仕置相濟候上、西丸江も書付被差出候得共、向後西丸へハ被差出ニ不及候間、可被得其意候、此段遠國奉行、并火附盗賊改江も可被申通候、

正月

〔寶暦集成絲綸録三十〕寶暦二申年五月

御仕置伺書本文ニ、名所一所ニ寄、相認メ候節之黄紙、向後左之通相認可申候

黄紙認方

此誰儀、何々之致方、不屆御座候間、何々可申付候哉

一此誰儀、何々之致方、不屆御座候間、何々可申付候哉、

名所一所ニ相認メ候而、御咎ハ別々ニ相伺候者ハ、右之通黄紙之内ニ、一小打仕、認可申候、

黄紙認方

此誰々儀、不埒成儀も不相聞候間、御構御座有間敷候哉、

同斷

此誰々儀、何々之儀不屆御座候間、兩人共何々可申付候哉、

右之通御構無御座者、又ハ同樣之御仕置ニ相伺候ものハ、只今迄之通、名前一所ニ相認可申候、

〔御書付留〕寶暦八寅年九月十日

右近將監殿、伊賀守江御渡、

三奉行江

向後御仕置被相伺候節、御定ニ相當候御仕置之分は、黄紙ニ御定之通、何ト可申付哉與書加可被差出候、

右之通可被得其意候

九月

〔三條雜錄 二〕寶暦十辰年四月十二日

右近將監殿御渡

三奉行江

御仕置相伺候節、御定書ニ相當候御仕置之分は、黄紙ニ御定之通何可ㇾ申付ト書加ヘ可ㇾ被ㇾ差出ㇾ旨、去ル寅年相達候、自今ハ御定ニ當り候分は勿論、例ニ而相伺候と申儀、并評議ニ而相伺候分も、如何樣之評議ニ而相伺候と申儀、書付可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、

四月

〔官裁秘書 十三〕寶暦十辰年十二月廿六日松平右近將監殿御渡

三奉行江

御仕置相伺候節、御定ニ的當致候例も有ㇾ之、御定之例與、御咎之品、一事兩樣ニ候ハヾ、都而御定之方を相用、向後御仕置相伺候樣可ㇾ被ㇾ心得ㇾ候、

十二月

〔官裁秘書 十三〕寶暦十一巳年十一月廿三日秋元但馬守〇涼朝殿 酒井飛驒守 土屋越前守 安藤彈正少弼 御渡

三奉行江

御仕置被ㇾ相伺ㇾ候節、御定ニ相當候御仕置ニても、其內少品有ㇾ之候得ハ、御定ゟ御仕置作略有ㇾ之候類例を以、被ㇾ相伺ㇾ候も有ㇾ之候、御定書之內ニ有ㇾ之分ハ、御定ニ引當被ㇾ相伺ㇾ候儀ニ候處、御定ニ相當候ものを、少し品有ㇾ之、御定ゟ御仕置作略有ㇾ之候例を以、被ㇾ相伺ㇾ候而ハ、いつとなく御定消候樣相成候間、右之所心を附、不ㇾ然樣可ㇾ被ㇾ相心得ㇾ候、

十一月

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和八卯年四月

三奉行江

大目付御目付立合吟味物伺書ニ添被差出候御仕置附書付懸リ奉行之名前計ニ而被差出候も有之大目付御目付連名ニ而差出され候も有之道中奉行懸リ吟味物伺書ニ添被差出候御仕置附ハ道中奉行之大目付御勘定奉行連名ニ而被差出仕來區々候間以來御仕置附書付并尋等有之候節之答書御定之趣相認候ハ奉行計之名前ニ而差出候樣可被致候尤伺書黄紙ニも御定之通と申儀不相認御仕置附書付ニ御定之通御仕置附仕候段相認候樣可被致候

四月

〔天明集成絲綸錄四十八〕明和九辰年十月

評定所一座江

都而御仕置被相伺候節仕來之通御定書之名目ニ致相當候分御定之通與相認元例ニ致相當候答ニ而も御定書之名目ニ違候分ハ御定之通與不認評書を以可被相伺候

右之通一統相心得區々不相成樣可被致候

十月

〔官裁秘書十五〕亥〇寛政三年 二月九日和泉守殿〇松平乘完 近藤吉左衛門を以一座江被仰聞候

以來伺書之儀事短く書面ニても都而帳面ニ認御仕置附并例書も右帳面之末江合冊ニ綴入指上可申事

〔吟味伺書進達留二ノ百七十七〕淺草幡隨院寮主調書不如法之趣相聞風聞爲相糺候處無相違候ニ付呼出吟味仕候趣左之通御座候

淺草淨土宗幡隨院寮主

調書 戌三十歲

預證文

印狀

此觸書儀、寺院取締之儀ニ付ては、兼て嚴重之申渡も有之候處、濟信孫寮主にて外所化共之指揮致導をもいたし候身分、新吉原江戸町壹丁目家持六兵衛抱遊女薫を買揚、遊興之上、度度女犯および候始末不屆ニ付、遠島可申付候哉、〇中略

右吟味仕候趣、書面之通御座候、御仕置之儀、黄紙附札を以相伺申候、

戌〇嘉永三年十二月

〔評定所留役覺書〕一甲府勤番知行ゟの出訴者、地頭ゟ印狀を以、月番奉行江申來先例、文化十四丑年正月、紀伊守擬、稻葉左衛門知行、常州柏熊村金四郎難澁出入之節も、印狀ニ而來ル、

〔書留〕印狀

無宿三太郎盜、又は親江對、及不法候始末、吟味詰被相伺候趣、令承知伺之上、太備後守殿〇寺社奉行依御差圖御仕置之儀、左ニ申達候、

無宿　三太郎

右之もの儀、不屆ニ付遠島、

一右之外、吟味ニ付、被呼出候もの共は、無構、

右之通申渡、三太郎ハ科書計認、與之名前相除き、證文取之、右證文相添御仕置申渡相濟候月日早早被申聞、三太郎御仕置申渡相濟候ハヽ、自分方江可被差出候、以上、

子〇安永九年月日

山本大膳殿〇代官

深谷遠江守〇勘定奉行

〔享保集成絲綸錄四十四〕元祿十四巳年九月

覺

一總而出入ニ付、當人を家主に預ケ捨にいたしおき、程過公事ニ相成候節、互ニ預ケ候證文不ㇾ分明、違論及候之條、向後ハ預ケ候分、名主、五人組江相斷、家主方ゟ證文取可ㇾ申候、但シ夫共打捨置候はゝ預り置候家主方ゟ奉行所江可ㇾ訴出事、

右之趣堅相守之、令ㇾ違背候はゝ可ㇾ爲曲事者也、

九月

〔享保集成絲綸錄四十四〕寶永四亥年八月

覺

一出入有之者を其所江斷り預ケ候ハゝ、家主ゟ預り證文取可ㇾ申旨、去ル午十五年〇元祿八月中相觸候處、頃日ハ猥ニ成候、向後彌預り證文取可ㇾ申候、若預らざる筋之儀ニ候ハゝ、其節早速、月番之番所江雙方可ㇾ申來候、斷り候者預り證文無之出入ハ、取上申間敷事、

但僉議之品ニより、其時之沙汰有べき事、

八月

〔享保集成絲綸錄四十四〕寶永七寅年五月

一店之者、幷出入有之者を、見出候而も、預ケ計ニ致置、預り證文無之出入ハ、裁許不ㇾ申付段、前々相觸候處、頃日ハ猥ニ罷成、預ケ候而も證文取不ㇾ申族有之候、預ケ證文取不ㇾ申出入ハ、評議之上、取上不ㇾ申候間、預ケ證文取置可ㇾ申候、若預り證文いたし不ㇾ申候はゝ、見出候當人を直ニ月番之番所江召連可ㇾ申候、被ㇾ預候者も、可ㇾ預筋之者ニ無之と存候共、先預り置、筋違候ハゝ番所江可ㇾ訴出候、吟味之上、預間敷者を無理ニ預ケ候譯候はゝ、當人ハ勿論、家主、組合、名主迄、可ㇾ爲越度候間、此旨可ㇾ申觸知候、以上、

江川太郎右衛門當分御預所武州多摩郡新町村
名主　文右衛門

其方儀、箱江訴狀ヲ入る哉、

右之通尋有之處、入候覺無之段申開候ニ付、宿預被申付、御退座相濟而、日下部七之助柳道太郎率ニ成ル、

但宿預證文は、書役江申談、於證文所爲取候事、尤帳面ニ而、定例之通ニ付、略之、

五月〇文見ニ正寶事錄一

（書留）申渡

〔市尹秘録〕一吟味方勤方之事、

寛政十午年書〇中略

一御詮議中、同道人江御預ヶ之節、同道人御目見以上ニ候得者、御預之旨被仰渡候迄ニ而、預ヶ證文ハ取不申候、

一大名、御旗本江御預者有之節、預人之家來、人數召連、御番所迄罷出扣居候間、評定所江呼寄、御詮議相濟候上、重立候家來白洲御椽側江差出御預之趣、大目付衆被仰渡、御玄關ニ而吟味方並出役與力御徒目付御小人目付立合、御預當人を、右家來江引渡、大小懷中物も相渡申候、御預當人之供廻りは、最初ゟ評定所公事人出入口之中庭江入置、出役同心、御小人目付番致申候、御預之家來引取候時刻を見合、御預當人之供廻り引纏召連引取候樣、同道人江被仰渡候、

古事類苑

法律部五十七

下編下

告訴

告犯罪 六八三
親屬告訴 六八六
知而不告 六八八
賞訴人 六九六
自首制度 六九九
自首例 七〇三
雜載 七一〇

古事類苑

法律部五十七

下編下

告訴

徳川氏ノ例、告訴セラレタル者ヨリ、告訴人ノ罪ヲ擧グルトキハ、容易ニ受理セザルヲ以テ例トス、又賞ヲ懸ケテ人ノ罪ヲ告ゲシムルアリ、是ハ放火犯、及ビ天主敎ノ徒ヲ告訴スルニ限ル、或ハ凶荒ニ際シ、密カニ酒麹ヲ釀造スル者ヲ告ゲシムルガ如キハ特例ナリ、

又自首スルモノヽ、罪ヲ赦宥シ、若シクハ減罪スルコトハ、古代ニ異ナラズ、サレド盜賊等ノ中ニテ、之ヲ既往ニ徵シ、悔悛ヲ將來ニ望ムベカラザルモノハ、其罪ヲ減ゼザルコトモアリキ、

告犯罪

〔御定書百箇條〕諸役人非分私曲有之旨訴幷裁許仕置之事

一享保六年極諸役人を初、其所之支配人、非分私曲等之儀有之旨訴出候節、其役人支配人え一通申達、猶又不相濟由願出候はゞ、先其旨相伺、御差圖次第取計、尤裁許之儀は相伺可申付候、

〔御定書百箇條〕惡黨もの訴人之事

一元文三年極惡事有之ものを召捕差出候歟、亦ハ訴出る時、右訴出候者にも惡事有之由、惡黨もの方より申掛候とも猥に相糺間敷候、若本人より重き惡事を證據慥に申においては、雙方可致詮議事、

但總て罪科之ものを於訴出は、同類たりといふ共、其科を被免候事に候條、其趣を以可致差略事、

〔聞訟秘鑑〕一喧嘩一件先届之事

是ハ及口論被致打擲其身は歩行難成由ニて、村方ニ罷在、親兄弟等吟味願出候共、檢使願ニ無之分は、御奉行所江先届致候ニ及不申、早速相手方呼出し、手鎖或は宿預ヶ申付置、吟味いたし、其内當人快氣ニ趣候はヾ、呼出し、相糺、吟味中、内濟致候はヾ、御代官承屆候由之筋合之由、若シ吟味差支之儀有之歟、又は裁許伺差出候はヾ、檢使願は無之、雙方呼出し、吟味願致候間、先届は不致候段、御奉行所江申上候へば、差支無御座由ニ付、其心得ニて取計可申事、

〔當代記〕慶長十九年二月二日、大久保相模守、罪科已糺定テ、今日江州ヱ自京都下、是ハ近年拜領ノ地也、是從駿府依下知也、小田原領五萬石被召上、抑此人ハ譜代相傳、殊十三ノ年ヨリ、家康公ヱ御奉公自愛成シ、今年六十三、今カヽル仕合如何ト人皆成不審思、舊冬十二月三日、大御所立江戶給於路次、馬場八左衞門ト云不肖者、上目安事兩度也、專相模守巧謀叛之由言上、誠無跡形虛言成ケルヲ信給事、偏相模守盡運時節歟、　三月朔日、大久保相模守于時在江州駿府上目安、是ハ無跡略旨言上、南光坊取次之披露、大御所雖見給之無其驗、

〔武蔭叢話〕大久保相模守忠隣ハ、小田原の城主也、幼少にてハ新十郎と云、家康公御寵臣なり、殊更大久保七郎右衞門忠世が子なれば、一入御心安第一成しがいか成事か有けん、慶長十八年の冬、家康公關東御鷹狩の砌、十二月六日、中原にて大久保相州預りの人、馬場八右衞門一通の訴狀を上る、是相州隱謀の企あるよしを申上て、此段本多佐渡守正信に御相談有、〇下略

〔會津家世實紀十四〕承應三年三月廿六日、西名子屋町久七致盜候ニ付誅伐、且久七欠落、百姓數多致訴人候を以、親甚右衞門一命御助被成、妻子は荒久田村百姓ニ被下、

久七儀、町方於湯風呂屋刀脇差度々盜候儀相觸候ニ付、召捕及穿鑿候得は、拷問之上致白狀候節、如此致盜候上者、身之可遁樣無之候得共、親井妻子共之一命御助被下候ハヾ、他領江欠落い

たし候百姓共之在所訴人可仕由申候間、數人之在所申出候ニ付、此段郡奉行ニ申付致吟味候處、久七申口之通相違無之、親甚右衛門歳七十餘、妻は高久組上荒久田村百姓筋之者ニ候、男子辰之助右馬助、女子とら、五人一命御助、荒久田村百姓共ニ成とも、妻之親類共ニ成とも可被下哉、荒久田村之者も屆候旨、加判之者評議之趣及言上候處、久七急度誅伐可申付候、親甚右衛門儀は、久七欠落百姓數多訴人いたし候間、一命御助被成候久七妻は上荒久田村百姓之娘ニ付、女子男子其身ともに村方肝煎總百姓望之通被下置候、久七家屋敷田地共ニ相渡し、作立可爲致由被仰出之、

〔會津家世實紀十五〕明曆元年二月、南青木組德久村所左衛門、かたり之統領に候處同類之者共致訴人候ニ付、助命之上御扶持給被下、惡黨目明ニ被召抱、訴人被致候八人之者共誅伐梟首、

近年所々ニ而かたり致候者共、德久村所左衛門、同村長助、高田組高田村庄八、十藏鹽川組別府村半十郎、太左衛門、井悴左內、同組鹽川村四郎右衛門、仙道三代田村半兵衛、都而九人之者共、去年十一月廿一日ゟ廿三日迄、追々召捕入牢申付相糺候內、所左衛門致訴人候を以、速ニ糺相究、其段及言上候處、誅伐可申付旨、御下知被仰下候ニ付、當月五日長助、庄八、半十郎、此三人御道具樣物ニ申付、且樣候場所江成瀨主計罷越能見候而、其樣子、御供番頭杉田五郎兵衛登之節申上候樣被仰下候ニ付、主計儀、五郎兵衛一同其場江罷出、見屆之、且太左衛門儀、吉利支丹宗門ニ付、井上筑後守樣江被及御懸合候處、思召次第可被仰付旨御返答有之、左內儀は、其身御咎も無之、吉利支丹ニも無之候得共親太左衛門重罪之上、誅伐被仰付候者ニ候間、同罪ニ申付候樣被仰下候ニ付、同九日、太左衛門、左內、十藏、半兵衛、四郎右衛門儀誅伐申付之、其內所左衛門儀かたり之統領ニ候得共、仙道關東筋迄之惡黨と附合、徒者を能存候間、一命御助被成、少分之御扶持切米被下、御領中日市所々祭之時分諸方ゟ惡黨共參徒仕候、其目明被差置候ハヾ、可井御領中之

誣罔告訴

徒者之儀ハ不及申、他所々も參候事罷成間敷旨委曲去十二月中、一同及言上候處、所左衛門儀、此度速ニ致白狀、其上申所少も相違無之、又牢内々訴狀を以同類共申上候儀ニ候條、言上之通、一命御助被成、少分之御扶持切米可被下候、此者かたり之統領と申、諸親類迄誅伐可被仰付候得共、品々之譯を以一命御助被成、剩御扶持切米迄被下候、其御恩賞難有奉存、其身之及候程は御忠節可仕由可申渡候、此上少成共惡心を存、尤對上不屆之儀仕候ハヾ、乾度從類まで強き誅伐ニ可被仰付候、此段能々可申含旨被仰出候付、其通申渡諸同心並之御給分ニ而、目明ニ被召抱之、

〔人見私記〕萬治二年七月晦日、御鷹師長田金平事、構非據ノ公事、欲捧目安、御タカ師頭ドモ、度々異見スレドモ聊不承引、然ル所、彼ガ伜三大夫、金左衛門兄弟、相謀テ禁錮之、父金平於獄中此儀達上聞、御吟味之所、不緯之由雖陳謝、終ニ以實事露顯ス、仰曰、假雖爲父、依或企反逆或令亂心ハ、其旨明ニ可申ノ處、濫藏之ヲ及私問、嚴重白狀ス、頗非士ノ道云々、爰ヲ以テ、大ニ達于台慮、誠ニ子ニシテ令禁獄父事、未曾有之大虐ノ至、喩ルニ無物、依テ彼等并方人等被處罪科條々、老中ヨリ朽木民部少輔へ達、所謂切腹、三大夫、金左衛門也、金平ハ、眞田伊賀守へ御預也、

〔千載之松〕同年(〇寛文三年)耶麻郡(〇陸奥)小田付村宗四郎の訴御裁斷あり、宗四郎亡父平右衛門の遺言に依り、弟共守立、名跡爲續積りなりし處、平右衛門後家ハ、五左衛門と云ふ者入夫し、己が實子を寵愛し、五左衛門も己が子に家督させ度仕方もあり、因りて宗四郎より無據訴出たるに付、郡奉行等穿鑿を遂げたるに、訴の趣紛れなし、是に於て宗四郎母義、入夫五左衛門に愛著し、實子を憎み、繼子を寵愛すること、珍敷不屆者なり、夫五左衛門義も、先夫の實子を憎ミ、己が實子を家督とし度仕方、是又徒者なる故、誅代可被仰付筈なれども、御慈悲にて身命を助け、五左衛門夫婦、并五左衛門實子

三人、此五人の者、惡所へ送越し、百姓に可申付、宗四郎養子として母の耻辱惡事を訴出たれ共、總て父母の恩、母より父重し、然れば亡父平右衞門の遺言を背き、實子を捨たる母なる上、一己の身上に拘はらず、弟共すたる所を悲み、平右衞門の遺言證文相違の所に迷惑し、不得已訴出たる者にして、尋常子として親の事訴出しとは格別に被思召、無構差置、且平右衞門下女下人家財共に、弟市兵衞に取らせ、親子兄弟其道を明に仰付られたり、

〔御當家令條 三十五〕謹而言上

一於江戶對國持大名我慢侈事

附名代之使者於殿中座配之事付而令行死罪事

一知行未進有之百姓に、從先年高利之米を借り、領內を亡所になし候事、

一百姓未進之刻、足輕中間等に申付、賣取申候事、〇中略

右之條々被遂高聽可被下候、已上、

寛文六年四月日　京極安智家臣　高廣判

進上御奉行所

京極丹後父子 江 申渡覺

京極丹後儀、家督相續以後、對父安智不孝之由、雖被及聞召、御宥免之處、今度從安智方捧訴狀、從去冬至當春、用書之儀に付而、數度遣書狀候處、兎角令難澀、其上ニ一類中或不和、或不通、井家中之輩、領內百姓等困窮、仕置惡敷候、依之領知被召上之、丹後は南部大膳大夫 江、近江は藤堂大學頭 江 被成御預者也、

寛文六年午五月三日

知而不告

〔刑罰集拔萃〕夫之訴人に出る妻女

貞享四卯年四月廿一日

壹人女いち　是ハ中山丹波守組同心柏木源兵衛女房、此者其身の母と、夫源兵衛令密通仕候段訴出候、此者不屆候付、牢舍申付候由、御老中御差圖ニ而、丹波守家來久保澤之右衛門召連來付、揚リ屋ニ入、

右之者翌辰年三月十一日、大橋庄兵衛方へ奴に渡ル、

〔御定書百箇條〕倒死幷捨物手負病人等有之を不訴出もの御仕置之事

寛保二年
延享元年極

一倒死幷捨物等有之を押隱不訴出においては

店借地借家主　過料五貫文
五人組　過料三貫文
名主　過料五貫文

但右地主、家主、名主、五人組、於不存候ハ無構、在方も右同斷、

同同

一變死幷手負候ものを隱置不訴出、其外病人等、隣町え於送遣候には、

店借地借家主　過料五貫文
五人組　過料三貫文
名主役儀取上　過料五貫文

但右同斷

〔科條類典下五〕倒死幷捨物手負病人等有之を不訴出者御仕置ケ條之内

同

一倒死幷捨物等有之を押隱し不訴出においてハ

見せ先屋敷内ニ有之候を隱候店借地借　過料五貫文
地主家主五人組　過料
名主　戸〆

掛紙
○極

店借地借家主	過料五貫文
五人組	過料三貫文
名主	過料五貫文

但地主、家主、名主、五人組、不存ニおゐてハ無構、

朱書
是者先達而伺相濟候得共、在方戸〆ハ不申付候間、此度御好之趣を以、町在共御仕置同樣書改申候、

此所懸紙
在方も右同斷

極
一變死幷手負候者を隱置不訴出、其外病人等、隣町江送遣候ニおゐては、

見せ先屋敷内ニ有之候を隱候、店借地借　江戸拂
地主家主五人組　所拂
名主江戸十里四方　追放

掛紙
△極

店借地借家主	過料五貫文
五人組	過料三貫文
名主 役儀取上	過料五貫文

朱書
是ハ先達而伺相濟候得共、御仕置附、町在と兩樣ニ相成候間、過料ニ而可然哉ニ奉存候ニ付、

但右同斷

懸紙之通書改申候、

右同月十七日伺之通御下知、本文極ル、

〔御定書例書〕火を附候ものを不訴出、内證にて爲殺候もの御仕置之事、

延享元子年六月御仕置之例

下總國新石下村　孫左衛門

此孫左衛門儀、村内ニ居候道心者直心、火を附、度々盗いたし候悪黨ものニ相決候得共、村方ニ而捕候節、孫左衛門名主乍勤、地頭江不申立、川江打込殺候様ニ致差圖候段、不行屆仕形ニ御座候間、所拂可申付哉と相伺、其通御仕置被仰渡候事、

〔御定書例書〕抱之食賣女首縊相果候處、僞成儀共取拵候もの御仕置之事、

延享四卯年五月御仕置之例

品川歩行新宿旅籠屋
五左衛門

此五左衛門儀、抱之食賣女ぎん相果居候を、傍輩女共、見付爲知候處、御定を背、過人數抱置候儀を相包、下男九兵衛見付候由申立、殊ニぎん御法度之衣類着いたし候故、木綿物ニ着せ替、首縊候縮緬腰帶も取除ヶ、蚊屋之釣手を差置、見分を請、其上ぎん死骸之様子、首縊候をおろし候哉と評議もいたし候上ハ、終始有體ニ申立、吟味可願處、自分江も吟味懸り候故、ぎん白キ衣類を着し相果候由、ぎん客喜兵衛と相對死いたし候趣ニ追訴差出、様々僞成儀共取拵召仕どもへも口を合候様申含、公儀を掠候段、巧成仕形、重々不屆ニ候間、輕追放可申付哉と相伺候處、御仕置不相當之旨御尋有之、猶又評議之上、遠島可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔御定書例書〕一所ニ臥り候食賣女首縊相果候を、吟味之節申僞り候男御仕置之事、

延享四卯年五月御仕置之例

芝濱松町釜屋権右衛門召仕
喜兵衛

此喜兵衛儀、品川歩行新宿旅籠屋五左衛門抱之食賣女ぎんと三四年以來相馴染、去寅六月廿六日夜罷越、其夜ぎんと口論いたし候處、喜兵衛熟睡いたし候內、ぎん首縊相果居候を見付候ハヾ、早速五左衛門江爲知可申處、左候而ハ宿江歸し申間敷と、ぎん死骸引下し、臥り候體ニ拵罷歸、先達而吟味之節、一向不存旨僞候段、重々不屆ニ付、重追放可申付哉と相伺、其通被仰渡候事、

〔御仕置例類集十六〕天明三卯年御渡

日光奉行伺

一野州刈生田村庄兵衛、人を殺盗致候一件、

日光御領下野國河内郡大室村百姓
平右衛門
外四人

右之もの共儀、去ル亥年七月六日、用水堀之内ニ死骸有之候段、同村百姓久左衛門爲知候ニ付、五人之者申合、死骸見屆候處、日數過、崩候死骸ニ付、墓所ゟ犬堀出候儀と存、怪敷儀にハ無之と心得、大堀川端江埋置候段申候得共、假令墓所より犬堀出候儀と存候共、名主年寄江も早速申達、目代役所江相伺、差圖可請處無其儀、五人申合、死骸取片付候段、全相隱候趣ニ而、不埒之至ニ付、過料三貫文宛、

此儀御定書ニ、變死并手負候ものを隱置不訴出もの、店借地借家主過料五貫文、五人組過料三貫文、名主役儀取上過料五貫文と有之候處、吟味書之趣ニ而ハ、日數相立候死骸を引上埋置、早速不訴出、百姓共ニ而、隱置候趣意ハ不相聞、殊ニ其後村役人迄申聞候と有之、品輕き方ニ御座候間、一同急度叱り、

同村名主
五右衛門
年寄
平右衛門

右之もの共儀、去ル亥年七月六日致他出、同月十一日罷歸候處、同村百姓平右衛門、十次郎、久次郎、太郎右衛門、助左衛門、申聞候ハ、同月六日、頭無澤用水堀之内ニ死骸有之候ニ付、見屆候處、日數過候樣子ニ而、面體手足不相分、死骸ニ付、墓所ゟ犬堀出候儀と存、大堀川端江埋置候段相屆候旨、右死骸最初内分ニ而、取片付候儀、不埒之取計とハ存候得共、屆後ニ相成、致方無之儀と相心得、其儘

ニ致置候段申候得共、右五人之もの相屆候ハヽ早速相糺、目代役所江可申出處無其儀、全致一同相隱候趣ニ而、村役不相應之取計、不埒之至ニ付、名主五右衛門儀過料三貫文、年寄平右衛門儀ハ急度叱り、

此儀御定書ニ、變死幷手負候ものを隱置不訴出もの、店借地借家主過料五貫文、五人組過料三貫文、名主役儀取上過料五貫文と有之ニ見合、用水堀ニ而見當り候死骸を引上埋置候段、日數過候而、百姓共より申聞候趣ニ候處、不訴出段不埒ニ候得共、是以隱置候趣意にハ不相聞候間、右御定ゟ輕く、名主ハ過料錢五貫文、年寄ハ同三貫文、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集十六〕寛政元酉年御渡

大坂町奉行伺

一人違ニ而池江突はめ候死骸不訴出、火葬いたし候一件

角倉與一郎御代官所牧野備後守預分入組
河州石川郡山田村庄屋
傳右衛門
外壹人
年寄
彌兵衛

右之もの共儀、村內溜池ニ而溺死いたし候源七死骸、親丁兵衛、従弟與右衛門見屆、全狐狸之仕業と存、無申分死骸引取度段申候共、變死之事ニ候得ハ、何れにも訴出、差圖を請可申處無其儀、丁兵衛、與右衛門儀、死骸早く葬送致度旨申之候迚、存命之姿ニ取繕、內證ニ而死骸引渡遣候段、旁不行屆取計、不埒ニ付、過料三貫文宛、

此儀御定書ニ、倒死幷捨物等有之を押隱不訴出ニおゐてハ、店借地借家主過料五貫文、五人組

過料三貫文、名主過料五貫文、但地主家主名主五人組不ㇾ存においては無構、在方も右同斷と有ㇾ之候ニ准じ、庄屋ハ過料錢五貫文、年寄ハ同三貫文、

朱書
評議之通濟

同村百姓
吉兵衛

右之もの儀、假令丁兵衛、與右衛門、死骸引取度旨申候共、變死之事ニ候得バ、何れにも訴出、差圖を請候樣、俱々心附可ㇾ申處無ㇾ其儀、丁兵衛、與右衛門任ㇾ賴、内證ニ而死骸引渡候儀、掛合候始末、不行屆取計、不埒ニ付、急度叱り、

此儀不行屆不念迄ニ御座候間、伺之通急度叱、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政四子年三月

鳥居丹波守殿御差圖　町奉行　池田筑後守掛

一三浦志摩守家來大柳伊助致ㇾ盜候一件

三浦志摩守家來大柳伊助妻
くみ

右之もの義、夫大柳伊助任ㇾ申聞候、得と出所も不ㇾ相糺、盜物を賣拂遣、其後縮緬綿入羽織引解致候節、相尋候得者、同人盜取候品之由申聞、驚入候得共、夫之儀、致方も無ㇾ之候迚、其分ニ致置候段不埒ニ付、三十日押込、

右御咎附

右天明五巳年八月、山村信濃守町方勤役中、伺之上御仕置申付候、藤堂柔次郎元家來森川清吾妻つよ儀、去年二月已來、夫森川清吾義、所々ゟ借受候金子不ㇾ殘返濟致、其上衣類家具過分に相求、不審ニ存承候處、實父五郎右衛門、其外親類共ゟ借受候旨申候故、强而承糺候儀難ㇾ致、清吾儀、主人土

藏江遣入、金子盜取隱置遣捨候を不心付罷在、女之儀とは乍申不行屆ニ付、親類共江相渡、三十日押込申付候例ニ見合、三十日押込、

〔御仕置例類集三ノ十六〕寛政六寅年十一月

戸田采女正殿御差圖　　御勘定奉行　根岸肥前守掛

一河州加納村又兵衞儀同村伊右衞門を及殺害候一件　　岩佐鄕藏御代官所河州若江郡加納村庄屋　太兵衞

右之もの儀、大坂表ゟ罷歸候節、此ものハ船ニ而先江歸、又兵衞・伊右衞門ハ跡ゟ陸を歸、同夜中又兵衞立寄候間、伊右衞門も同道いたし候哉之段相尋候處、途中ニ而後れ候內、侍體之ものニ出合、口論之上、打擲ニ逢、所々疵受候段相咄候ハヽ、早速可申出處、伊右衞門變死之趣、早速相知候而ハ、又兵衞儀、疑を可請間、外ゟ知らせ候迄捨置呉候樣、又兵衞相賴候迚、外村役人江も不及相談、其分ニいたし置、翌日爲知來候上ニ而、外村役人江も及通達候始末、庄屋役相勤候身分不埒ニ付、過料錢五貫文、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、又兵衞立寄、外より知れ候迄ハ捨置呉候樣相賴候ハ、廿二日明七ツ時頃之儀ニ候處、同日四ツ時頃爲知來候間、外村役人江此者より及通達、御代官江も訴出、吟味之筋も、最初又兵衞立寄候節、賴候趣をも考合疑敷段、伊右衞門弟淺右衞門同樣申立、右申立を以吟味仕、又兵衞及白狀候趣ニ付、同人と馴合隱置候筋には無之候間、變死之ものを隱置、不訴出名主之御定ニ見合候而ハ品輕く、去ル亥年評議ニ御下ゲ被成候、京都町奉行相伺候、江州田井村庄屋與右衞門儀、伯父作右衞門村方之ものヽ被敲殺、從弟作兵衞儀も疵負候得共、淸左衞門三右衞門任申旨、內證ニ而取扱事濟いたし置、最初地頭役人尋之節、有體申立、追而吟味相願候とは乍申村方一同相糺候節、病死之旨申僞候段、庄屋役不相應之儀共、後闇いたし方不屆之至

ニ付、近郷相構、輕追放と相伺候處、評議之上、過料錢五貫文と申上、其通濟候類例ニ見合、伺之通

過料五貫文、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集二ノ十八〕文化二丑年御渡

駿府町奉行伺

一無宿金五郎盜いたし候一件

東海道駿州丸子宿家持旅籠屋
忠兵衛

右之もの儀、紛失品有之候者、聊之品ニ候とも宿役人江申聞、可訴出處、無其儀不行屆不念ニ付叱、

此儀不念迄ニ付、伺之通叱り、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集二ノ十八〕文化十一戌年御渡

甲府勤番支配伺

一無宿丑五郎盜いたし候一件

右衛門督殿領境甲州山梨郡落合村
八十郎

右之もの儀、被盜候馬幸八方ニ有之候段承り、孫右衛門を頼遣し、馬請取來候得ば、得と承り糺可申處、無其儀、孫右衛門任申、其儘請取候段、不念ニ付叱、

此儀盜人を召捕贓物取返、內證ニ而逃遣し候もの、御定ニ准じ伺之通叱、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ二十二〕文政五午年

佐渡奉行伺

賞訴人

一越後國無宿要藏盜いたし候一件

松平阿波守領分阿州名東郡鑰島山梨屋岩吉下代
源助

右之もの儀、儀兵衛ゟ多分之金子預り候上は、不取締之儀無之樣可致處、無其儀、等閑に致置、被盜取、外々之ものゑも難儀相懸候段、不埒に付、過料三貫文、

此儀不念に付、急度叱り、

朱書
評議之通濟

佐州羽茂郡小木町問屋大坂屋
六郎右衛門

右之もの儀、旅人之致宿候上は、夜中取締入念可申處、無其儀、旅人之金子被盜取候儀をも不存段、不念に付、急度叱り、

此儀享和三亥年、道中奉行伺之上、御答申付候、東海道沼津宿旅籠屋與兵衛儀、座敷床脇之寘は、往還續之場所にも有之、殊に致御用宿候節は、別而〆り等念入可申處、等閑故、右寘より無宿喜代松這入、大坂爲在番罷越候、內藤虎之助所持之衣類、其外盜取候始末に相成候段、不念之至、不埒に付、急度叱り置候例に見合、御用宿致候には無之候間、强而不念共難申候得共、掛り見込之儀に付、伺之通急度叱り、

朱書
評議之通濟

〔經濟錄八〕姦人ヲ搜索シテ得難キニハ、都門ニ金ヲ懸コトアリ、異國ニテ購ト云、アガナウハ求ル義也、此方今ノ俗ニ囑託ト云ヘリ、囑託ハ人ニアツラヘ賴ム意也、アガナウノ義ニ非ズ、誤レル名目也、凡金ヲ懸テ購スルハ、センカタナキトキノ事也、

〔人見私記〕寛永十五年九月十二日

一伴天連門徒、累年雖爲御制禁、無斷絕、今度於九州惡逆を企畢、依之彌諸國相改、彼宗門有之候而、

致訴人族ハ、縦同宗門成共被宥其科、公儀より御褒美可被下旨被仰出之、此趣在國之諸大名へ從老中奉書井御褒美之覺書相添被差遣之、在江戸の大小名ハ、昨日土井大炊頭宅江家老中召寄被傳之、御旗本之面々ハ、今日於殿中遠江守對馬守被申渡、

〔憲法編年錄七〕覺

一ばてれんの訴人　　銀子二百枚
一いるまんの訴人　　同　百枚
一きりしたんの訴人　同　五十枚、又ハ三十枚、訴人ニよるべし、

右訴人いたし候輩ハ、たとひおなじ宗門たりといふ共、宗旨をころび、申出ニおゐては其咎をゆるし、御褒美御書付のごとく可被下之旨被仰出者也、

寛永十五年九月十三日

〔被仰出留一〕覺

一當年〇寛文十年は八木不足候間、於諸國在々所々、何によらず八木不費樣ニ急度可被申付事、
一當秋中迄、新酒造之義、堅可爲停止之旨可被相觸事、
一辻賣井振賣之酒、一切可爲無用事、

右之通急度被申付之、若違背之輩於有之者、訴人に出べく、御穿鑿之上、御褒美可被下之旨可被相觸者也、

戌五月七日

〔被仰出留三〕囑託

一當正月廿六日の夜、麻布坂下町庄兵衛所持之赤白ぶち犬、首際ニ切疵一ヶ所有之事、
一當正月廿七日、いさらご町野道に、白黑ぶち犬切疵ニて死有之事、

右二疋之犬切候者存候ハヽ申出べし、生類あはれみの儀、度々相觸候處に、不屆之至ニ候、縦同類たりといふ共、其科をゆるし、爲御褒美此金子可被下候、其上以來あたを不仕樣ニ急度可及沙汰者也、

亥〇元祿八年二月日

〔科條類典上一〕定

一火を付る者をしらば、早々申出べし、若かくし置においては其罪重かるべし、たとひ同類たりといふ共、申出るにおいては其罪をゆるされ、急度御褒美下さるべき事、〇中略

一火事場其外何れ之所にても、金銀諸色拾ひ取らば、奉行所迄持參すべし、若隠し置、他所より顕はるゝにおいては其罪重かるべし、たとひ同類たりといふ共、申出る輩者、其罪をゆるされ、御褒美可被下事、〇中略

右條々可相守之、若於相背者、可被行罪科者也、

正德元年五月日　奉行

〔憲法類集七〕文政十二丑年十二月増山河内守殿御渡

切支丹宗門之儀、從先々雖爲御制禁、今度上方筋ニ於而、右宗門之由ニ而、奇法行ひ候者有之、即被處嚴科、就而者右宗門之義、彌可被遂御穿鑿之條、銘々無油斷相改、自然疑敷者有之者、早々其筋江可申出、品ニより御褒美被下、其者より仇をなさゞる樣ニ可被仰付候、若見聞及びながら隠置、從他所あらはるゝに於而は、其所之者迄も罪科ニ可被行候、

右之趣向々江可被相達候、以上、

十二月

〔教令類纂初集五〕享保八卯年三月十二日

自首制度

火附訴人ノ儀ニ付觸書

此度本所吉田町より怪敷者之由ニ而、源七と申者を召連訴出候間遂詮議候處、火附ニ相決候、依之兼而御定之通、吉田町三郎兵衞と申者江爲褒美白銀三拾枚被下置、且又右一町之公役十二月分、其町江被差免候、總而火附、又は怪敷者召捕可訴出旨、段々相觸、去十二月、日本橋江火附之儀ニ付、高札建置候得共、火附捕へ訴出候得ば、其所江詮議相懸り、難儀いたし候と下々にて心得違候者も有之と相聞え、夫故歟、火附等召連訴出候事稀ニ有之候、自今十一月相達候、日本橋高札之趣、井町々江建置候札之趣、能々相心得、怪敷者ニ有之候ハヾ、早速召連可訴出候、如斯再應相觸候之上、火附類見のがしに仕候ハヾ、其所江其科を可懸候間、末々迄行届候樣ニ可觸知候、

三月

〔會津家世實紀十一〕慶安四年二月四日、他邦者傳右衞門、遊女小槇を致殺害候ニ付、磔、○中略去冬天寧湯本江罷越候道筋、瀧之上ニおいて、遊女を殺候者有之、何者之仕業ニ候哉、囑託を被懸、御吟味被仰付候得共、于今手筋不相知候處、傳右衞門所爲之疑も有之、尤同類も可有之と拷問いたし候得共、其段ハ一向不存由、傳右衞門申述、小槇を殺候段ハ、悉及白狀候ニ付、磔ニ被行之、

〔公案比事三十朱書〕寬政三亥年十一月十二日松平和泉守殿江御書取相添曲淵甲斐守進達

去月廿六日御渡被成候

自訴いたし候盜賊之儀ニ付、評議仕候趣、申上候書付、　評定所一座

去月廿六日御渡被成候御書取一覽仕候處、〆り有之處明ヶ置入盜致、右品賣拂質入等致候後右盜物吟味有之趣承、後悔致、盜ニ入候所之名主江、右惡事申立、自訴致候者、右體死罪ニ可成盜人自訴致候ニ付、御仕置ゆるみ候例有之候哉、但親兄弟之難儀を承、自訴致候例は有之候段被仰聞候、

此儀〆り有之處、明遣入盜致、右品賣拂質入等致候後、吟味ニ相成候を承、自訴致候者の例、差當相見不申候得共、親兄弟主人等之難儀を存、自訴致候共譯違ひ、盜物賣先等之儀ゟ吟味ニ相成候を承訴出、たとひ後悔致候由申立候共、御仕置ゆるみ候はゞ、盜致候共自訴仕候得ば、重き御仕置には不相成儀と存候樣罷成候はゞ、右類自然と出來可仕、其上舊惡定ヶ條之内ニ茂、人家江忍入候盜人は、舊惡心に候共、御仕置相伺可申と有之、舊惡にてさへ御仕置ゆるみ不申候間後悔致候由にて自訴仕候共、御仕置ゆるみ候筋には有御座間敷哉と奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被成候御書取壹通返上仕候、以上、

亥十一月

〔評定所張紙寫〕寛政四子年

盜賊自訴之儀評議

一盜賊者自訴致し候而も、御仕置弛不申事、

右長谷川平藏伺、無宿久五郎御仕置評議ニ有之候、

〔書留〕寛政九巳年五月六日

博弈自訴之者取計方之事

土佐守〇町奉行三村吉兵衛江被仰渡候趣傳達

博弈打候もの自訴之儀、自訴より起吟味ニ相成候ものハ、御仕置も輕く可相成は勿論之儀ニ候、吟味取懸候節欠落いたし、吟味中自訴いたし候ものにも、假令バ最初ハめくり博弈と申立候處、自訴ニ而鑿博弈之儀顯候抔と申樣成類、何れにも自訴故吟味も明白に分り、御仕置も相立候もの抔ハ、仕儀次第自訴ニ相立、御仕置輕く可相成候得共、一通捕方之節逃去、吟味中自訴いたし候類ハ、自訴には不相立、御仕置輕くハ不相成方に相心得候樣被仰渡候、

〔評定所張紙留〕巳〇寛政九年閏七月十二日、對馬守殿江、秋山松之丞を以、肥前守上ル、同月十九日、御同人、同人を以承付候樣、一座江御下ゲ、肥前守受取、承付いたし、翌廿日、同人を以返上、

書面先例茂有之候間、是迄之通、都而右類自訴相立候積相心得可申旨被仰聞、承知仕候、

巳閏七月十九日　評定所一座

先達而評議仕申上候、大久保甚兵衛火附盜賊改之節相伺候、深川永代寺門前仲町文次初筆博弈一件之内、同町卯之助外貳人、自訴は難立、御仕置ゆるみ候筋には有之間敷旨申上候處、自訴ニ難立譯御尋有之、右之もの共は、吟味ニ相成候を承り自訴いたし候儀ニ付、自訴ニは難相成趣申上、其通御仕置相濟候、然ル處、去ル寅年、長谷川平藏相伺候、武州下高輪村新左衛門店八五郎儀、廻り筒之博弈いたし候段不屆ニ付、敲と相伺、一座評議之上、本罪は重敲之ものニ候得共、自訴いたし候ニ付、一等輕く、五十日手鎖と申上候例も有之候間、今一應評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀自訴いたし候もの、御仕置寛候儀は、御定は無御座候、盜物質ニ取、又は買取候もの之御定ニ、町觸之節訴出候ニおゐては、其品取上、不及咎と有之候得共、右は自訴之引當ニは難相成、詮議事有之、同類又は加判人之内より、早速白狀いたし、謀計之もの共相顯ニおゐては、本罪相當より一等輕く可申付旨之御定も御座候間、自訴いたし候もの有之節、右自訴ニ付、外不埒之もの相顯候類は勿論、其趣意、右御定ニも引合候ものは、自訴之もの御仕置之儀は、一等輕申付候心得ニ罷在候、然ル處、博弈之儀は、御法度之儀、相辨罷在、右御法度を背、博弈いたし、右手合之内より、露顯可致樣子ニ候得ば、追々右手合之もの共、自訴さへいたし候得ば、御仕置ゆるみ候儀と存、量、訴出候樣相成候ては、ゆるかせにも相成可申候、近年別而過料手鎖之分をも、敲、重敲に申付候積、嚴重ニ被仰出候御趣意ニも相違仕候間、都而博弈之儀は、自訴之もの申口より吟味ニ相成、或は重立候もの之御仕置相立候類は、右御定ニ見合取計、吟味ニ相成を承り訴出候分

は、自訴には難相立方、御取締にも可然と評議仕申上候儀ニ御座候、

但去寅年、長谷川平藏相伺候、武州下高輪村新左衞門店八五郎儀、廻り筒之博奕いたし候を自訴仕候ニ付、一座評議之上、一等輕く五十日手鎖と申上候例書をも御渡被成候、然ル處、右は一座評議之書上相添、御下ゲ之吟味書返上いたし、其後右吟味書御下ゲ無之故、八五郎自訴之次第、吟味不相成以前訴候哉、同人自訴ニ付、手合之名前相分り候哉、外ニ別段之趣意有之哉は難相分候得共、其節之評議之趣、別段之趣意も無之、自訴と申所而已ニ泥み、一等輕申上候とも、今般再應評議仕候處、博奕之儀は、外惡事と違ひ、自訴いたし候得ば、御法度相背候とも、御咎をも不蒙と末々之もの心得ゆるみ候而は、御嚴制之趣意も相立申間敷儀ニ付、自訴は難立積被仰渡可然哉と評議仕候儀ニ御座候、以上、

巳閏七月

〔法曹後鑑〕寛政十一未年十一月廿四日、對馬守殿江上ル、同廿八日承附ニ御下同廿九日返上、

盜物質ニ取候質屋、并置主置人御咎之儀ニ付、申上候書付、

書面伺之通可仕旨被仰聞、承知仕候、

未十一月廿八日　　評定所一座

質取方不念之質屋共、去々巳年九月御渡被成候御書付之通、訴出候分ハ、有科無科之無差別、質代損失申付候迄ニ而、過料者差免し候、然處町方之儀ハ在方と違、盜賊被召捕候得バ、直ニ自ら右之沙汰相聞候故、其盜賊共、直ニ引合候ハ勿論、手を越質ニ取候ものども、其掛々之御役所江其品持參訴出候故、質屋共御咎ニ相成候儀、先は無之、遁逅之儀ニ御座候、尤右不糺之段者、度々町觸も有之候處、今以盜物等、質取候儀者不相止、右者假令盜物等質ニ取候とも、盜賊吟味之節訴出候得バ、質代損金迄ニ而、事濟候儀と推量り候故之儀、其上質物糺方等之儀、町觸ニハ嚴敷申付、吟味之上

ハ、毎度同樣、咎之沙汰不及段申渡候も失體ニ而、甚如何ニ奉存候、依之再應評議仕候處、質屋訴出候ゟ、盜賊相知候ハ勿論、盜賊不被召捕以前、町觸之節等訴出候歟、或ハ外々之取沙汰等承り、訴出候質屋者、質代損失迄ニ而、咎ハ不申付候積り、其外盜賊被召捕候以後訴出候分ハ、質代損失之上、一判或無判、夫々定例之咎申付、且質置主證人ニ罷成候者共も、是又右質屋ニ准じ、夫々咎申付候はゞ、旁以來之取締ニも相成可申哉ニ奉存候、依之相伺申候、

但在方質屋共之儀ハ、江戸表と違、質物札方之節々、村觸等致し候ニも無之、場廣之事故、盜賊被捕候儀承り訴出候得バ、咎ハ無之儀と推量り候類も無之筋故、在方之儀ハ、去ル巳年御書付之通ニ而も差支候筋有御座間敷奉存候、

〔新張紙留〕武家之家來、盜物と不存取扱、自訴いたし候もの御咎當り之事、

武家之家來ニ而
一盜物と不存、質置主證人ニ相成候もの、自訴いたし候節、

徒以上ニ候はゞ、五十日押込、　足輕中間ニ候はゞ、三十日押込、

同斷
一盜物と不存、質入之口添いたし候迄ニ而、禮物不取もの、

徒以上ニ候ハゞ、武家奉公構、暇差出、　足輕中間ニ候はゞ、五十日押込、

但禮物取候ものハ、質置主證人ニ相成候もの同斷、

同斷
一同自訴いたし候節

徒以上ニ候ハゞ、三十日押込、　足輕中間ニ候ハゞ、急度叱り、

右ハ文政三辰年、荒尾但馬守伺、諏訪新之丞家來小松市右衛門外壹人、盜物取扱候一件ニ付、一座評議相決、伺之上相極候事、

〔人見私記〕慶安四年七月廿七日、由井正雪ト號スル浪人、累年令在江戸、今度於當地構虚言、諸浪人申合、結徒黨ノ所、從彼列ノ中訴人有之、去廿三日、丸橋忠也、河原十兵衛、永山六郎右衛門ト云者捕

之、其段承之、正雪ト黨者ノ中十人、其身方ヨリ申出、此者ドモハ身上可相濟ノ由申聞候條實儀ト存ジ、令一味ノ所、今度正雪御穿鑿ニ付、黨入申出ル由訴之、正雪儀ハ、駿府江相越由ニ付、彼地ヱ申遣シ候所、駿府梅屋町太郎右衛門所ヱ一昨廿五日到著、早速爲可召捕取卷ノ處、正雪井黨類、已上八人一所ニ令自殺、此外坊主一人生捕ノ趣、駿府定番ノ面々駒井右京ヨリ注進ス、

〔政談四〕丸橋忠彌ヲ訴人シタル者ニ、今モ御奉公不被仰付ト云コト、ツマラヌコト也、總シテ武家ノ風俗ニテ、訴人ヲスルヲ大ナル臆病トスル、夫ハ己ガ有意趣人ヲ討果ス事ハ命ガ惜ケレバ、其人ノ悪事ヲ訴人シテ、上ヨリ殺サスル故、臆病トスルコト也、忠節ノ訴人ハ、夫ニ混ズルコトニ非ズ、去ドモ愚成風俗ニテ、何ノ差別モ無、兎角訴人ハ臆病ノ所爲ト云ヨリ、武家ニ不限、町人百姓モ、訴人ハセヌコトニ覺テ居、依之其時分、何レモ我ヲ立タル事故、力ヲ一所ニ不置ヨリ、喧嘩ヲ氣遣ヒ、其時ノ御老中ノ申付タルヨリ、今ニ至ル迄御奉公不被仰付可成、總シテ訴人ヲ臆病ト云ハ、私ノ義理也、右ノ訴人ハ大成忠節也、戰國ノ時分ハ幾人モ可有、何レモ皆忠節ニ立テ、其子孫今ニ大名ニモ御旗本ニモ可有、總シテ私ノ義理ト、公ノ義理忠節トハ食違者也、國ノ治ニハ私ノ義理ヲ立ル筋モ有ドモ、公ノ筋ニ大ニ違テ有害コトニ至テハ、私ノ義理ヲ立ヌコト也、忠彌ノ如キハ、此イゴ迚モ有間敷コトニ非ズ、御僉議有テ、御奉公被仰付可有コト也、

〔公案比事三十一〕安永元辰年八月大坂町奉行相伺候

一浪人細川恰訴出候儀ニ付一件御仕置之儀評議

松平右近將監殿御渡

當時浪人　細川恰

右之者儀、一止申聞候儀者、上も無之恐多キ申事ニ付、不取合可訴出處無其儀、假にも同意仕、奉公之有付、心底ニ不叶、期ニ至リ後難を存、訴出候段、一筋之訴人とは違、不屆ニ御座候間、中追放可被仰付候哉、乍然恰訴出候故、不敬之雑談申聞候者も相顯候儀御座候間、無構出牢可申付哉と相伺

一座評議之上、相應之御褒美可被下置と申上、其通濟、御下知書左之通、

辰十二月廿日松平右近將監殿一座江御渡

評定所一座江

先達被差出候、大坂町奉行、同御目付相伺候、浪人細川恰訴出候儀ニ付、一件御仕置、

一細川恰儀、病死ニ付、存命ニ候得ば、相應之御褒美可被下旨、一件之者江可申渡候、

一止捨札之趣

此者幼年ゟ虛言多キ生得ニ候處、別而近來奇怪成儀申之、元來播州、西新町町人之忰ニ無相違處、秀賴落子之末杯虛談大言申之、不屆至極ニ付、磔ニ行旨、捨札相建可申候、

右之通ニて、何も一座評議致し、被申聞候通相濟候、

〔公案比事四十三〕寬政三亥年八月曲淵甲斐守掛

一常州小目村治十儀を申立候無名御箱訴一件

松平和泉守殿御下知

水戸殿御領分常州久慈郡小目村百姓　治十

右之者儀、出生之村方、并御領所共、兩人別ニ入、年來居村を離、外出江罷出仕居致、宮地其外辻博弈致歩行、其上卯兵衛外壹人任賴、賣女逃去候節之世話致遣、商物を貰請、剩松平陸奥守領分にて、同領桂村長右衛門江疵爲負、其外不屆方有之、其節無宿之旨申立、同人領分長濱江流罪ニ相成候處、島を逃去、居村江立戾罷在候段不屆ニ付、御定之通死罪可申付處、致自訴候者之儀ニ御座候間、遠島、

〔御仕置例類集二十五〕寬政六寅年御渡

火附盜賊改長谷川平藏伺

一寄場人足御仕置一件

元寄場人足平三事
安五郎

右之もの儀、當七月朔日、無罪之無宿ニ付、寄場江差遣置候處、同月廿五日、御地所内、新擣ニ罷出候處、不斗惡心發、矢來を乘越、佃嶋渡船ニ乘逃去、此儀相糺候處、本文之通相違無之由、寄場元〆役申之候、近在所々立廻罷在候得共、足を止メ可罷在所も無之候ニ付、全心得違と存、私方江自訴いたし可申と罷越候砌、本所相生町ニ而被召捕候由申之候得共、自訴いたし可申と心懸候由申立候得共、證據ニ可相成儀も無之候上者、右體之申譯難取用、其上數日無宿ニ而徘徊いたし候上は、此外惡事も可有之と再應嚴敷吟味仕候處、右之外惡事無之由申之候得共、寄場逃去候段、不屆之旨吟味詰、無申披誤入候由申之候、依て寄場へ呼出、不屆之始末申渡、外人足共江爲見置、寄場ニおゐて切縄を懸、牢屋敷江差遣、死罪可申付哉、右之もの儀、全自訴いたし可申心懸と者相聞候得共、本文之通、證據ニ可相成筋無之候ニ付、死罪御仕置相伺申候、

此儀吟味書之趣ニ而者、當七月廿五日、寄場矢來を乘越逃去、近在所々立廻罷在候得共、足を止可罷在所も無之、全心得違と存、長谷川平藏方江自訴可致と罷越候砌、本所相生町ニテ被召捕候と有之候得共、自訴いたし候心底の由者、被召捕候上之申口ニて、一通ニ而者難取用候得共、吟味之上、全自訴いたし可申心懸と者相聞候段、無相違と見込、懸平藏申上候儀に有之、然ル上は、證據無之候迚、死罪申付候而者、相當仕間敷儀ニ付、死刑之外、寄場定例之御仕置可申付、

朱書
御差圖、寄場入墨之上重敲、

（御仕置例類集 六）寛政八辰年七月

安藤對馬守殿御差圖　町奉行 小田切土佐守掛

一尾張無宿勝之進致盜候一件

尾張殿家來徒士
吉田市藏

右之もの儀、勝之進持參、質入相類候品者、盜物ニ候處、其儀者不存候共、出所も不相糺、質屋江之手紙認、勝之進ニ爲持遣し、盜物之質置主ニ相成、質入致遣し候段不埒ニ付、江戸拂と相伺可申候得共、右品紛失物之由及承、早速支配請候役人迄相屆候ニ付、百日押込、

〔太平將士美談〕成瀨隼人正正成、升二樣遣ひ、悔て自訴せし商人裁斷の事、

成瀨隼人正領分の町人、米屋八郎兵衞と云もの、親より富り、隼人正領分になりたる後、政事正しく人歸服しければ、自分親より二つ升をつかひ候て、如此富有になり候、如此御政事正しくなり候ては、大に恥恐て候、一日も早く白狀に及び、御裁判を請たき由訴へけり、隼人正、大に感歎せられ、親よりの無道を申出、非を改候に免じ、罪は申つけざる間、當年より七年の間、又穀類に二升をつかひ、自出す處は多く、入より取所は少くいたし、外に呉服諸品類商賣いたし候樣にと申付あり、富る者なれば、大に歡びて領掌しぬ、此事他領迄かくれなく、此店にて穀類を賣買ふもの多く、呉服諸品も調ければ、都而前々より利倍多くなりて、ます／＼富たりぞなり、

〔記事條例 二〕（朱書）文政三辰年七月廿六日下ゲ札付、即刻返却、同組同心差添引渡、

石川主水正殿

榊原主計頭

大原四郎右衞門御代官所武州埼玉郡尾曾根村
百姓 松次郎

右之もの儀、昨夜九時頃、同國越ヶ谷新町立廻り候知ル人無宿三次と申もの、私方江罷越、金貳拾両貸有之候間、相返候樣申聞候に付、借請候儀無之旨相答候得は、子細不申聞、理不盡に打掛り候に付、心外に成、打合及口論候上、庖丁を以三次額三寸程之疵付候處、其儘ニ相果候ニ付、其場ゟ逃去、自訴仕候、何分御慈悲相願候由、

右之通申立、今日拙者御役所江駈込願出候處、支配違之者にも有之、殊に駈込願之儀、其上少々取昇候樣にも有之候間、利解申聞、差返可申候得共、前文之通、不容易儀申立候に付、定例之取扱にも

致がたく候間、御引渡可申哉、此段及御掛合候、

七月廿六日

御書面松次郎儀、不容易儀申立、貴殿御役所江駈込願いたし候處、右は御支配違之儀に付、御引渡可被成哉、御懸合之趣致承知候、拙者方江御引渡有之候樣存候、依之下ゲ札を以及御答候、

辰 七月廿六日　石川主水正

〔御仕置例類集一ノ三十〕文政五午年御渡

山田奉行伺

一無宿吉兵衞盜いたし候一件　勢州度會郡山田河崎町四郎兵衞娘 さほ

右之もの儀、盜物とハ不存候共、出所も不相糺、無宿吉兵衞任相賴候ニ木綿衣類三品質入之致取次遣、乍纔之品もの貰受候段不埒ニ付、貰受候品物取上、過料錢三貫文可申付處、訴出候ニ付、咎ハ差免、

〔公事方手留〕未〇天保六年　五月廿五日

隼人正還　柴田善之丞出ス

一甲州上小河原村百姓彥市儀、廻り筒鑿博奕三度いたし、召捕之風聞及承、村方欠落いたし、永尋中、村方江立戻り、自訴いたし候一件、自訴ニハ不相成、御定之通、中追放被仰付候、

朱書 本文逃去候後、立戻り候もの、自訴にハ不相立事、寛政十二申年之評議濟有之候、

曾我豐後守殿　榊原主計頭

〔舊幕時代屆申渡抄錄〕　御小人頭柳田勝太郎組御徒目付　花井虎一

其方儀、去々酉年十月頃、阿部友之進方へ參り候節、金次郎に出會、知人に相成、無人島渡海之咄致

し、友之進へも罷越、藥草植付等致度旨申聞、同意之ものに候處、其段は勿論、同人名前も不申立罷在、渡海之儀願立に不及、船等之手當出來次第出帆致し度旨、齋藤次郎兵衞申聞候を雑談と存候迚承置、友之進願宜は願濟之上に無之候ては難成心得にて、金次郎、秀三郎心底は、一定不致候處、同樣申合候旨申立、無人島に異國船懸り居候哉、渡海中漂流いたし、外國へ參り候哉、浦賀洋中にて、諸國廻船之妨致し候ては差支候由、又は金華山之邊に異船懸り居、右見物出來候趣は、金次郎秀三郎渡邊登等ゟ聞候旨申立、右はいづれも推考迄之雜談に可有之候得共、不輕義に候處、其事之實否糺方も不致閑捨置、今般に到、治定之趣に申立、其上金次郎ゟ繪圖取戻に差越、又は次郎兵衞儀、五月節句後、順宜方へ參り、直談いたし候由に付、船手當出來次第出帆可致、左候はゞ順宜ゟ順道へ申通、金次郎秀三郎も一同の申合に可有之と推量致し、五月六月は渡海時節に付出帆可致、大内五右衞門は、順宜同意にて、所持の船に武器糧米等を入、渡海之用意いたし罷在候旨、相違之義申立、探索之爲めとは乍申、最初ゟ其筋へも不申立、右體不屆之儀相企候ものどもと出會對話いたし、又は願も不致、秀三郎一同旅行いたし候始末、輕も御扶持被下候ものゝ身分に有之間敷儀不屆に付、重追放可申付處、發起以前、及密訴候に付、身分は是迄之通居置、御仕置宥恕申付之、

○中略

天保十亥年十二月十八日

〔安政秘錄二〕一安政七庚申年三月三日、於櫻田騷動有之候處、左之通、水野大監物樣御家來儒者、當時御用人相勤居候鹽屋甲藏ゟ主人へ差出、上邊江相達候書面之由、○中略

一拾七人之者共、亂妨とは乍申、内八人、尋常ニ自訴仕、同意之者姓名申立候而、御大法を相尋候程之者に候間、其外水戶表ニ罷在候同志之者、或は上より言付候哉抔と御吟味は御無用之義と奉存候、藪をセヽツテ蛇を出す無レと諺にも申通り、餘り之御吟味有之時は、水戶ニ殘居候勇士、忠

雜載

臣之氣を動かし、却而事を生じ候樣にも相成可申、扨右之御仕置に至り候而は、尋常に自訴仕候廉を以、磔に被行候を獄門と申付、御慇可被相加、罪一等を被減、出格之御仁惠被相示候樣有御座度奉存候、事は少しの事にて相違仕候得共、赤穗四拾七人御預中も、評定所御吟味無之、畢竟自訴致、大法を相待候者共に候得ば、固より其事明白に相分り候始末に付、御吟味不及候樣ニ奉存候、切腹之節も、陪臣之切腹には、檢使に被相附候大法之處、御直參同樣に、御徒目付御檢使被下候は、不屆とは乍申、其主人ニ忠義を盡し候所を以、御大法御斟酌を付候ものと奉存候、晋之謝安が事を陶侃稱美して、謝公は法外之意を得たりと申、總て法ニ拘泥いたし候は、凡俗之役人ニ御座候、法外之心得を以て、人を刑して、情實を察し、處置を付候處、誠の仁義の宜と可申、此度之一件も、法外之心得を以、御仕置無之而は、水戸御一家のみに無之、天下の士氣を損し、終には御武運を損し候樣ニ相成可申哉ニ奉存候、

○按ズルニ、右ハ安政八年七月、斬罪ニ處セラレタリ、

〔經濟錄入〕民ノ姦惡ヲ禁ズルハ、首告、連坐ノ法ヨリ便ナルハナシ、先王ノ道ニハ非ズ、秦ノ商鞅ガ法ニテ、嚴刻ナル法ナレドモ、末世ハ便利也、首告ハ俗ニ云訴人也、犯人與黨ノ中ヨリ、其姦ヲ告ルヲ首ト云、他人ヨリ申ヲツゲルト云、皆訴人也、連坐ハ俗ニ云卷ゾヘナリ、一人ノ罪ニ、數多ノ人、罪ヲ受クルヲ連坐ト云、凡下民ノ姦惡ハ、上ニテ知難キ者ナリ、上ヨリ號令ヲ出シ、數多ノ小吏ニ命ジテ搜索シテモ知難キ所ヲ、下ヨリ首告セシ者ヲバ賞セント法令ヲ出セバ、必知易シ、扨首告ノ者ハ、犯人ノ與黨成トモ、其罪ヲ赦シテ、犯人ノ財產ヲ與ヘテ賞トス、家財產ハ、農人ノ田園、商賈ノ貨物ナリ、犯人ノ財產ヲ二ニ分テ、半分ヲ訴人ニ與ヘ、半分ハ沒入ス、沒入ハ今ノ闕所也、犯人貧者ニテ財產ナケレバ、上ヨリ金銀ヲ出シテ首告ニ與フ、是古法也、是民ノ姦惡ヲ知ル術ニテ、則姦惡ヲ止ル術也、當代ニ天主敎ヲ禁ジテ、伴天連、イルマン等ヲ自ラツゲセシ者ニハ、許多ノ銀ヲ賜ヒ、

其黨ナリトモ、罪ヲ赦サントノ命ヲ立玉ヘリ、是首カウノ法也、天主教、海內ニ絶テナキハ此法ノ効也、連坐ノ法ハ、何ニテモ嚴禁スベキコトニ此法ヲ立テ、犯人ノ隣伍、其所ノ父老迄、輕重ノ罪ニ行フ、隣伍トハ、今ノ五人組也、貸房ノ者ナラバ、其宅主地主ニモ罪ヲ係ベシ、總シテ民ノ奸惡ヲバ、近所ノ者ナラデハ知コトナシ、此法アレバ、隣伍ノ中ニ老實ノ者有テ、其姦ヲ知レバ教訓シテ其姦ヲ止也、教訓ヲ聞ザレバ、止コトヲ得ズシテ上ニ言上ス、若シ言上セザレバ、姦ヲ隱ト云罪ニテ、犯人ノ罪ニ連坐ス、是又姦ヲ知リ姦ヲ止ムル術也、此首告、連坐ハ、戰國ノ時、商鞅ガ創タルコトニテ、先王仁恕ノ政ニハ有ラネドモ、衰世ヲ治ムルニハ便利ナル術也、首告セル者ヲバ、法ノ如ク賞ヲ行ヒ、姦ヲ隱ス輩ヲ少モ宥免ナク、定タル如ク連坐ノ刑罰ヲ受シム、是法ノ信也、法ノ立タルノミニテ、實ニ行ハザレバ、法ニ信ナク、上ヨリ民ヲ欺クト云者也、上ヨリ民ヲ欺ケバ、民又上ヲアザムク、上下相アザムケバ、政ノ行レザル端ニテ、國ノ亂本也、民無信不立ト孔子モ曰ヘリ、悉ク信ヲ立ベキ也、

〔栗山上封下〕日本の古、王代にても強盜と申科は、十惡の內に入候て、謀反人と同罪に申付候事に御座候、先達而御仕置被仰付候、日本左衞門、楯之進など申類之強盜、只今にても、田舍には所々に御座候而、平生手下者へ恩澤を施し、金銀を遣し置候故、徒黨大勢有之、交る〴〵其內にて義理を立合、一命を捨合申候て、一頭には五百人も七百人も御座候と承り及申候、ケ樣者は、面向は、一通り百姓町人之樣に仕り居申候、手下之者を他國江働に遣し、其上米を取候て、夫にて渡世仕居申候、よし其所之者は、其譯をこと〴〵く存居申候得共、其一郡一村之內にては、惡事不仕、其上御公儀江申出候得ば、殊之外物入に御座候故、御上江も訴出不申候、總て百姓は前にも申上候通り、御公儀江訴出申候得ば、過分之失却仕候間、身に懸り合候事にも、大體は堪忍仕居申候事多く御座候、上州邊御旗本之知行所にて、百姓の家江夜分盜賊壹人踏込、金子を無心申掛候處、折節近所に

浪人参り合申居、直に引縛り申候得共、御公儀江奉訴候得ば、過分物入も御座候故、少々金子を遣し、逐放し可申候と評議に仕候處、

盗賊の事に御座候間、只追放し、金子を遣し候に及申間敷筈に御座候得共、重て盗賊御公儀へ召とられ、御詮議に相成候節、何某方にて捕へられ候得共、內證にて追放され申候抔白狀仕候得バ、其追放申候者は御詮議に相成、御科被仰付候間、其口を留可申爲、却て盗人に金子を遣し、機嫌を取申候事に御座候、

近所之者、最早聞付候て、大勢かけ付候間、穩便に內證にて相濟候事も相成不申、是非なく申出候處、其入用七十兩餘り失却仕り、夫にて百姓は身體をつぶし申候、大體左樣の事御座候ては、其盗人に、金子之五六兩も遣し、追放し申候得ば夫にて相濟、御公儀江訴出候よりは、却て物入も無御座候故、少々之盗賊橫領に逢候ても、內證にて相濟せ申候事多く御座候よしにて、身に掛り合不申候事は、可申出樣も無御座候、御代官抔は、前に申上候通り、只年貢之取立計、御役儀之樣に覺居申候て、是又その所にて惡事を致し不申候得ば、吟味も無御座候故、右之盗頭共、絕不申、農業も商賣も不仕、只人の金銀を掠め取、一生無事安穩に送り、何之御とがめも無御座候もの、所々に御座候よし承り及び申候、この者自親手を下し、盗賊火附は不仕候得共、其手下之者、八方江相散、人家之財寶をかすめ取、旅人を脅し、火付を仕、万民を惱し申候得ば、畢竟自親手を下し惡事を仕候よりは、其惡逆百倍增に御座候、其上世上豐かにて、給物も澤山御座候時分は、また御上之御威光をも可奉畏候得共、若五年三年、水旱續き申候て、世上給物無之候抔申樣之事も出來申候はゞ、大勢徒黨召集め、或は百姓餓人を誘ひ、頭立候て出て、出入仕り、御公儀之御役人江手向ひ仕べくも相知れ不申候、〇下略

〔公裁秘錄 二〕一訴狀一覽の上、返答書不申付、直ニ召捕可致吟味物、

人殺　變死　金子奪取疵付　盜賊筋
強婬疵の多少次第　夫有之女密通　追放もの立入

右の類は、召捕吟味物、併訴狀は、大造に申立候もの故、勘辨の上、取計可申候、尤變死疵人も治定不致、疑敷迄の出訴は、召捕に不及、裏書を以呼出吟味可致、強婬出入は、兎角密通いたし居候も、強婬と大造に申立候もの故、一通の密通に分候はゞ、直に出牢可申付、能々事實考べし、

〔記事條例〕寶曆五亥年正月町觸

總體町々ゟ訴出候事、早速不申出、及延引候儀數多有之候、寺社奉行、御勘定奉行加役方懸りに而吟味之事、其外出入有之名主町人、其向々江度々被召呼候而も訴出不申、預ヶ又者手鎖牢舍にも相成候筋と、外々洩聞えべき心當りも有之儀は、訴出候事も有之に付、如何致、訴及延引候哉之段、吟味致候得ば、心得違仕候抔と申まぎらかし候、尤右體之儀、早速申出候町々も有之候得共、多分不訴出候もの有之、不埒之事に候、

一加役方組與力同心之宅江、町人共呼寄せ候儀は不致事に候、以來右體之儀、申渡候者有之候はば、早速可訴出候、

一出火有之、屋根上ゟ燒立候を、往來之もの見付爲相知、早速消留候事も有之候得共、出火之體、怪敷有之候はゞ、訴可出候處、手あやまちと申なし、訴不申出候、怪敷體に候はゞ、小火たりといふとも、早速可訴出處、無其儀不埒に候、

右體之事ども、訴及延引候而は、吟味も行屆不申候間、向後右之類、早速可訴出候、若及遲滯候はゞ、名主月行事乾度可申付候、

右之趣、自町御奉行所被仰渡候間、總體訴事不及延引候樣可致候、此以後遲滯致候はゝ、乾度御吟味可有之候、以上、

亥
正月

古事類苑

法律部五十八

下編下

聽訟上

裁判管轄 七一七
評定所 七三一
裁判諸制度 七三六
裁判法 七四八
評定所式日　立合　內寄合定日 七五二
吏員誓詞 七五七
吏員訓誡 七五九
老中出座 七六二
側用人側衆出座 七六五
目付出座 同
式日立合裁判 七六七
三奉行立合裁判 七六九
奉行宅吟味 七七一
奉行內寄合裁判 七七三

臨時三奉行立合裁判	七七五
評定所內座會合	七七六
一座掛	七七八
大目付町奉行勘定奉行目付立合裁判	七八一
大目付町奉行目付立合裁判	七八二
奉行手限裁判	七八三
寺社奉行裁判	七八五
町奉行裁判	七八九
町奉行宅目付立合裁判	七九二
勘定奉行裁判	七九三
勘定所附支配所裁判	七九八
道中奉行裁判	八〇二
火附改方吟味	八〇四
內吟味	八〇七
留役吟味	同
老中裁判	八〇八
若年寄裁判	八一五
將軍直裁	八一六
公事上聽	八二八
老中障內視裁判	八三五

古事類苑

法律部五十八

下編下

聽訟上

德川時代ノ聽訟ニハ分轄アリ、卽チ寺社奉行ハ、全國ノ寺社及ビ寺社領ノ訴訟ヲ受ケ、又關八州ノ外ノ他領、若シクハ關八州ノ內ノ寺社領ヨリ府內ノ人ニ對スル訴訟ヲ處理ス、町奉行ハ、總テ江戶ノ市街ノ訴訟ヲ受ケテ、江戶ノ寺社領ノ町、寺社門前ノ町、寺社境內借地ニマデ及ブ、勘定奉行ハ、關八州ノ幕府ノ領地、及ビ他領ノ訴訟ヲ受ケ、又關八州ノ外ノ幕府ノ領地ヨリ府內ニ對スル訴訟ヲ聽斷ス、以上ノ三奉行ノ各自ノ裁判ヲ稱シテ、奉行手限ノ裁判ト云フ、勘定奉行ニハ、公事方、勝手方アリテ、事件ノ種類ニ隨ヒテ之ヲ分掌ス、此等ノ奉行ノ裁判ニハ、奉行出席セズシテ、留役ノミニテ、裁判スル事モアリ、

此餘幕府ノ領地ノ遠國ニ在ルモノハ、其地ノ奉行ニテ之ヲ裁判ス、京都、大坂、駿府ノ町奉行、伏見、山田ノ奉行ノ如キ是ナリ、又道中奉行ニテ判決スルモノアリ、五街道(東海、中山、日光、甲州、奧州、)ノ諸驛ニテ起レル、捕盜、殺人、變死ノ類ノ如キ是ナリ、此等ノ吏員ニテ專決シ難キモノ、又ハ決スルヲ得ザルモノハ、之ヲ評定所ニ送ル、

評定所ハ高等ノ裁判所ナリ、三奉行出席シテ、分掛ノ訴訟ニ就キテ互ニ相議シ、又大名、旗本ノ訟、及ビ越訴等ヲ聽ク、此所ノ會合ニ二種ノ定日アリテ、各每月三回トス、一ヲ立合ト稱シ、三奉行、大目付、目付出席ス、一ヲ式日寄合ト稱シ、式日ノ一回ハ、三奉行、兩目付ノ外ニ、老中出

席ス、此外又一種ノ會合アリ、之ヲ內寄合ト稱シ、三奉行各月番ノ役宅ニ於テ、其同役幷ニ部下ノ士ヲ會シテ之ヲ評定ス、是モ亦毎月三次ナリ、而シテ三奉行ノ評定所ノ內座ニテ評定スルヲ、內座寄合ト云ヒ、三奉行ト兩目付ト列座スルヲ一座ト云フ、此外ニ町奉行、勘定奉行ト兩目付ト集會スル事アリ、町奉行ト兩目付ト集會スル事アリ、訴訟ノ件ニ由リテ同ジカラズ、

老中、若年寄ノ裁判スルコトハ、初メハ式日ヲ定メ、老中ハ大名ノ訟ヲ聽キ、若年寄ハ旗本ノ訟ヲ聽キシガ如シ、然レドモ事跡ニ據リテ之ヲ考フレバ、老中ノ宅ニテ旗本ヲ裁斷セシ事アリ、若年寄ノ宅ニテ寺社ノ裁決ヲ宣告セシ事アリ、

又將軍ノ直裁ヲ爲ス事アリ、慶長元和ノ交ハ其例特ニ多シ、又三代將軍家光ノ時ニハ、聽訟ノ體ヲ障內ヨリ覽テ之ヲ評セシ事アリ、五代將軍綱吉ノ時ニ又此擧アリテヨリ以來、德川氏ノ末マデ屢、之ヲ行フ、又老中ガ障內ヨリ裁判ノ狀ヲ視シ事アリ、蓋シ將軍ニ倣ヒシモノナラン、

大名、旗本ハ、各領內ノ訴訟ヲ聽斷ス、若シ事ノ他領ニ涉ルトキハ、領主相議シテ之ヲ裁シ、決シ難キトキハ評定所ノ裁斷ヲ請フ、

聽訟ハ、幕府ノ最モ意ヲ用ヰシ所ニシテ、其吏員ニハ、特ニ誓詞ヲ上ラシメ、又屢、訓令ヲ發シテ之ヲ誡メタリ、而シテ尙ホ滯訟ヲ免レザルガ故ニ、寬保元年ニハ、十ケ月以上未濟ノ訟ハ、三奉行ヲシテ之ヲ上申セシムルコトヽ爲シ、寬延三年ニハ、六ケ月未濟ノ訟ハ、其未濟ノ理由ヲ上申セシムルコトヽ爲セリ、

當時ノ例、又裁判ニ服セザルモノ、若シクハ裁判ヲ經テ用ヰザルモノハ罪アリ、サレド十分ノ證憑アリテ、裁判吏員ノ過誤ニ出デシガ如キハ、之ヲ抗告スルモ妨ゲザル事トシタリ、又

別ニ惡意アルニアラズシテ、父祖等ノ時ニ於ケル裁許ヲ違忘セルモノハ、必シモ罪セザル事アリ、

〔德川禁令考後聚一法司備忘〕寛永十二年亥十一月十日之御書付

一國持大名御用幷訴訟之事

御老中土井大炊〇利勝 酒井讃岐〇忠勝 松平伊豆〇信綱 阿部豐後〇忠秋 堀田加賀〇正盛 五人ニ而壹月番ニ可承候、

一御旗本諸奉公人御用幷訴訟 若年寄土井遠江〇利隆 酒井備後〇忠朝 三浦志摩〇正次 太田備中〇資宗

阿部對馬〇重次 五人ニ而、壹月宛番致可承事、

一金銀納方 大御留守居酒井雅樂頭〇忠世 御留守居松平大隅 牧野内匠〇信成 酒井和泉〇忠吉 杉浦内藏丞〇正友 右五人ニ而可致事、

一證人御用幷訴訟、雅樂頭、大御留守居松平紀伊守、大隅、内匠、和泉、内藏丞、右六人可致候、

一寺社方御用、幷遠國訴人之事、安藤右京〇重長 松平出雲〇勝隆 堀市正〇利重 右三人、壹月宛番可致候、

自注累代武鑑杯いふものニハ、安藤右京進、松平出雲守、寛永十五寅十一月、寺社奉行ニ任ずる旨有之候得共、此御書付之趣ニ而者、此砌寺社奉行と相見候、

一町方御用幷訴人之事、加々爪民部〇忠澄 堀式部〇直之 壹月宛番可致候、

自注累代武鑑ニハ、亥十一月十日、堀式部少輔町奉行より寺社奉行ニ轉、跡役御作事奉行より酒井因幡守任ズル由ニ候へ共、此御書付を據とする時ハ、加々爪民部、堀式部、町奉行勤役之事と相見、

一關東中御代官方百姓等御用訴訟、 松平右衛門大夫〇正久 伊丹播磨〇勝長 伊奈半十郎、大河内金兵衛、曾根源左衛門〇吉次 右五人、壹月宛貳番致可承事、

自註是ハ御勘定奉行懸りと相見候處、右衛門大夫ハ、御側御用人より兼役、播磨守ハ、御留守居より兼役之由ニ候得者、半十郎以下三人、極りたる御勘定頭ニ而有之哉、其後伊丹藏人、村越次左衛門、松浦猪右衛門、二代目杉浦内藏允抔、勤役之砌ハ御留守居より之兼帶も無之、尤天和二戌十二月、叙爵以前ハ、京大坂町奉行等之次ニ連署有之候得者、當時之御役振とは様子も違可申哉、

一御作事方ニ付、萬事御用并御訴訟、佐久間將監〇眞勝、酒井因幡〇勝久、神尾内記〇元勝、三人ニ而壹月宛番可致候、

一萬事訴人 大目付 水野河内〇守信、柳生但馬〇宗矩、秋山修理〇正重、井上筑後〇政重、四人可承候、

自註大目付宮城越前守、高木伊勢守等、度々論地見分有之、

一目安裏判之儀、其役々可仕事、〇下略

〔御定書百箇條〕目安裏書初判之事

從前々之例
一寺社、并寺社領、關八州之外私領、關八州之内にても、寺社領より御府内江懸候出入、　月番 寺社奉行裏書

同延享二年
一江戸町中、寺社領之町、寺社門前、并境内借地之もの共ゟ御府内江懸候出入、　月番 町奉行裏書

從前々之例
一關八州御料、私領、關八州之外、御料ゟ御府内江懸候出入、　月番 御勘定奉行裏書

右雙方名主、家主、五人組立合可相濟、若不埒明候はゞ、七日目、雙方罷出候様裏書可遣事、

享保二年極
但支配違江懸候出入ハ、評定所江可差出、雙方一支配に候はゞ、其奉行所にて裁許可申付、在方國々江懸候出入ハ、何月幾日、評定所江罷出可對決旨裏書いたし、三奉行掛月番にて、初判一座加印、

〔聞訟秘鑑〕一關八州御料私領ゟ訴出候出入之事

是は關八州幷伊豆國ゟ訴出候出入者〇中略

但相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、關八州と云ふ、

伊豆國者準之候事

〔聞訟秘鑑〕一目安掛幷差出ニ成候出入差別之事

是者都而公事出入、雙方一支配ニ而吟味中、他領引合出來候節は、被差出、雙方之內、他支配他領掛り候へば最初ゟ目安掛ニ可致筋ニ候へ共、喧嘩人殺等之吟味ものは、前ヶ條にも記候通、是迄雙方立會吟味之上差出ニ致候而も濟來候へ共、一體私領ニ掛り候へば評定公事、御料支配違は內寄合公事と心得、最初ゟ目安掛ニ可致筋之由ニ付、其心得を以取計可然事、

〔評定所留役覺書〕一貸金賣掛出入目安札之節、御料私領に不限、訴訟人同支配同領之もの、相手方之內有之候得者、爲除候も有之、又者其儘御判出候も有之、目安札之面々、心得方區々候、除不申方、新古之例有之候間、證文帳面等紛敷筋無之分者、同支配同領之もの相手取候とも、外私領之もの大勢相手取候內ニ有之分者、初判差出候、右支配歟同領之もの計、內濟不致返答書差出候はゝ、雙方評定所江差出、內濟承屆、右不相濟分、其筋江可申出段被仰渡候樣可取計事、

但貸金出入之內、訴訟方御料之ものニ而、相手方ニ私領之もの、御代官所之もの等有之節、御料所同士ニ候ハヽ、內寄合公事ニ可相成候得共、引分候ニ不及、若私領之分、內濟口ニ相成節者、右內濟評定所ニ而聞濟、雙方御料同士ニ付、內寄合ニ而吟味可受旨申渡、夫ゟ內寄合公事ニ成候事、

右之振合

〔御當家令條三十四〕覺

箱根碓氷幷白川關を限、遠國之分、公事裏書寺社奉行、關ゟ內、勘定奉行裏書可被致之、但遠國ゟの

訴狀にても、御藏入方〻之上ゲ目安裏書は、御勘定奉行〻仕、寺社奉行江可相達事、

寛文八年申七月廿二日

〔公裁秘錄〕目安裏書初判之儀書附 享保十八丑年

覺

一關八州〻申出候公事、御領私領共に御勘定奉行、

下ゲ札 此内大岡越前守支配之分は、越前守方江願出、評定所江差出候同前候、

月番へ願出初判仕、評定所江罷出候、

但關八州之外は、御領分は御勘定奉行江願出、初判仕候、

一關八州之外、私領之分は、寺社奉行月番江願出初判仕、評定所江罷出候、

但シ關八州之內に而は、寺社領分は、寺社奉行江願出可申候、此外五畿內、近江、丹波播磨、此分

京大坂町奉行江訴出候、

右之通、初判之者掛りに而、於評定所に一座相談之上裁許、

丑九月

享保十七子八月、大坂町奉行松平日向守參府に付、作方出入之儀承合候所、京大坂町奉行江訴出候國〻之內、御領私領入組候出入之外、御代官一支配之分は、其御代官に而致吟味、御勘定奉行江相伺候共、

〔科條類典 下〕追而之伺、年月不知、

目安裏書初判之事

月番
寺社奉行裏書

一寺社并寺社門前、關八州之外私領、關八州之內ニ而も、寺社領より御府內江懸り候出入、

懸紙

極
一寺社并寺社領、關八州之外私領、關八州之内
ニ而も、寺社領より御府内江懸り候出入、
月番 寺社奉行裏書

一江戸町中より、御府内江懸り候出入、
月番 町奉行裏書

懸紙

極
一江戸町中寺社頂之町、寺社門前并境
内借地之者共、御府内江懸り候出入、
月番 町奉行裏書

右伺之通御下知、本文直ル、

〔被仰出留四〕覺

只今迄盗賊改、火附改方江訴出候類之儀、向後寺社領は、支配より寺社奉行江、町方は町奉行江、御料は御代官より御勘定奉行江可申達候、私領は地頭より支配方江可申出候、盗賊、ばくち打、火附等之儀、彌念入候樣に可被申渡候、以上、

十二月〇元禄十二年

〔科條類典下一〕延享二丑年御書付

寺社奉行江

寺社方江附候町屋之分不殘、向後町奉行支配ニ相成候間、可被得其意候、町奉行可被談候、

丑閏十二月

〔張紙留〕寶暦六子年九月廿一日

一今日於評定所、左之通一座申合、是迄關八州之外訴訟方、御料私領入交訴狀差出候節、御料村數多候得バ、御勘定奉行初判差出、私領村數多候得バ、寺社奉行初判差出候趣ニ申談候處、向後ハ村數之多少ニよらず、御料江重ニ拘リ候儀ハ、村數少く候とも、御勘定奉行方初判差出、私領江

重ニ拘リ候儀は、村數少く候とも、寺社奉行ゟ初判可差出候、御料私領同樣之願之趣にて、村數少く有之節は、村數多方之掛りゟ初判差出、御料私領願之趣意、村數も同樣ニ候ハヽ、御勘定奉行初判差出可申候、尤趣意不相分節は、訴狀評定所江持參、評議之上相極可申候事、安藤彈正少弼、〇又見ニ牧民金鑑、

阿部伊與守差上候書狀之趣を以、評議仕申上候書付、

〔目安秘書坤〕寶暦十四[illegible]二十四 遠國奉行懸吟味ニ引合候、武家家來取計

江戶表ニ罷在候、渡邊城之進家來江相尋候後、委細相認、寺社奉行江可差越、於當地吟味之上、口上書爲差登候樣、寺社奉行江被仰渡候、尤打合不相糺候而は難相濟儀ニ候はヽ、猶又可申上段被仰遣候旨被仰聞、承知仕候、

申〇明和元年　二月三日　評定所一座

去未十二月廿九日御渡被成候、阿部伊與守書狀之趣を以、吟味に付、江戶表ゟ武家之家來等、京都江爲差登候類例等有之候哉、例無之候はヽ、御取計方之儀、評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀吟味ニ付、武家之家來ニかぎらず、町人百姓ニ而も、遠國奉行所江差遣候例、相見不申候ニ付、評議仕候處、御定書ニ、山城、大和、近江、丹波、雙方とも右四ケ國之ものニ候はヽ、京都町奉行ニ而取捌、支配違、又は餘國江懸り候出入は、寺社奉行月番可致初判旨有之、尤今般伊與守申上候趣は、京都町奉行ニ而吟味仕候、箱訴一件ニは御座候得共、右引合ニ而、渡邊城之進江戶表ニ罷在候家來を、京都町奉行所江爲差登候而は、以來京都ニ不限、遠國奉行懸之吟味物引合は、町人百姓も爲差登候樣相成可申哉、左候而は御定之趣とも相違仕、如何ニ奉存候間、城之進家來江相尋度趣、委細相認、寺社奉行江差越、御當地ニおゐて吟味之上、口上書爲差出、勿論打合相糺不申候而は難相濟候はヽ、一件於江戶表吟味仕候方ニ可有御座と奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、伊與守書狀返上仕候、以上、
午正月
〔聞訟秘鑑〕寺社幷貸銀、其外品々出入取計方問答書、
一寺院社人ゟ百姓江懸り候地所幷貸金銀等之出入、一支配ニ候はゝ吟味詰相伺、たとへ俗人入交り候共、宗法社法等之出入者、直ニ其筋江差出可申哉、
書面之出入者、公事方月番之御勘定奉行江相屆可致吟味、且宗法社法等之出入ニ而、其筋江可願段申渡候得共、是又同樣相屆候方ニ可有之、
但兩添翰之御觸有之候間、右ニ不及樣添翰可致事、
此御觸書、天明二寅年二月、
一本寺觸書、末寺共一支配ニ而、末寺ヨリ本寺觸頭江懸、一宗法之儀ニ拘候出入者、直ニ其筋江差出可申候、たとへ宗法ニ拘り候共、一支配ニ候はゝ吟味を詰、相伺可申事、
一寺院より社人江掛り、社人ゟ寺院江懸り候、俗人不入交宗法社法等之出入、是又一支配ニ候はば、前條之趣ニ取計可申哉、
但都而右之類、御代官陣屋ニ而、落着申渡候節、本寺又者觸頭呼出爲承、裁許狀ニ奥書爲致候儀ニ奉存候處、右本寺觸頭、他領ニ候はゝ、其筋之役人懸合呼出可申候、朱書面貳ヶ條、一支配ニ而も、本寺觸頭末寺出入、宗法ニ候はゝ、其筋江差出候方ニ可有之、
〔牧民金鑑一〕公家衆家領江掛候出訴
安永六酉年　牧野大隅守貞成持參
一淺草阿部川町善右衛門店、町醫師青山佐大夫ゟ、今川家家領幷石川淸左衛門御代官所江掛預金滯出入、

是ハ公家衆家領江掛候出入、是迄不相知候得共、武家之領分知行江掛候も同樣之趣意ニ而、
裏判差出候積、

〔牧民金鑑 二〕私領高多ニ付、寺社奉行初判、
安永九子年　桑原伊豫守〇盛員持參
一戸田采女正御預所、戸田七内、織田權大夫知行、濃州本巣野村より、本庄伊勢守領分、同國西巣野村江懸候、理不盡ニ大勢申合、山林伐荒候出入初判願、右御預所役人伺ニ付評議、
是ハ私領方貳給ニ而、高も多、御料私領共同樣之趣意ニ付、兼而申合之通、寺社奉行初判之積、

〔牧民金鑑 二〕天明七未評議貳拾番、大坂町奉行伺、
支配國内之もの同士之出入引合ニ而、他國之もの呼出候評議之略書、評議之上、和泉、河內、攝津、播磨、四ヶ國之ものニ候ハヽ、大坂町奉行取捌、餘國江掛候出入ハ、大坂町人、并私領之分ハ、寺社奉行江添簡いたし、御料所之者ニ候ハヽ、御勘定奉行江添簡を以可差出旨被仰渡可然哉之段申上之通相濟候所、餘國江掛候出入取捌之儀、ケ條書ヲ以相伺、是又一座江御下ゲニ付、評議書之內、人殺抔ニ不限、大坂表ニ而不屆致シ、所之もの差押置、訴出候類之引合ニ而、支配國外之もの呼出候義ハ、目安を以、相掛候出入と違、私共手限ニ而も、他之支配之もの打合、吟味仕候義ニ候間、右之類ハ、餘國之もの呼出、吟味之上、落着申渡候義、大坂表ニ而可取計段被仰渡可然旨申上、其通相濟、同五子年、猶又取捌方之義、大坂町奉行より私共江承合候ニ付、伺之上挨拶仕候、書面之相尋も、豐前守伺書朱書ニ申上候通、譯ヶ有之、今般之出入ハ、大坂表之もの同士ニ候處、吟味之上、餘國之もの共、餘國ニ而不屆致候筋ニは御座候得共、右出入より事起り及露顯候筋ニ而、左候得ハ全引合ニ御座候間、右一件携候もの共、一同伺之上呼出、吟味詰可相伺旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

〔公裁秘密集 上〕一町奉行支配之町々出入ハ勿論、寺社奉行支配之寺社、并門前之者ゟ町方、支配之

町へ懸り候出入、御勘定奉行初判出ル、近在々ゟ町方へ懸り候出入共ニ裏判ニ不及、雙方家主五人組名主立會、可濟旨裏書出之、其上ニ而も不濟時ハ、評定所ニ而承之、

公事訴訟取捌ニハ、町奉行支配之町出入ハ勿論、江戸之内、寺社奉行支配之内ゟ町奉行支配之者江懸り之出入ハ、御勘定奉行初判出し、江戸町端近在々ゟ江戸之者へ懸り候出入共ニ、一座裏判出スニ不及、雙方家主組頭立會、來ル幾日迄ニ濟べし、不濟ニ於て幾日可罷出旨、其筋役所押切裏書致、其上ニ而評定所へ出ス、

公事訴訟同意ニ而、文談少しヅヽ違有之公事訴訟取捌ニハ、此次地頭違之ヶ條、書續ニ致し有之、

御仕置大概ニ、江戸町中ゟ御府内へ懸り候出入、月番町奉行裏書、〇年月闕

〔評定所格例〕關外私領之吟味物、最寄御代官ニ而吟味之事、

寛政九巳年六月、松平紀伊守申上候、奉行所吟味申立之義ニ付、寺社奉行松平右京亮伺、

去ル十六日御渡被成候、松平紀伊守差上候書付一覽仕候處、同人領分備中國玉島村磯兵衛義、板倉周防守領分同村長吉宅ニ而博奕いたし候、同村内ニ被切殺罷在、磯兵衛妻子等吟味相願候處、博奕手合之もの共は、御料所又は他領之ものニ付、奉行所吟味申上候趣ニ御座候、關外私領ニ而之一件ニ付、私共掛りニ而、呼出吟味可仕筋ニ御座候得共、博奕手合之もの共、紀伊守申上書面之内ニも多人數相見、猶相糺候はゞ、猶引合も追々相增可申、博奕之品ニ寄、村役人其外宿々組合百姓等迄吟味相懸り候義、博奕一條ニ而も多人數呼出可申、磯兵衛變死、携候もの共は、何程引合可有之哉難計、其上變死吟味ニ付候而は、博奕手合之もの呼出候ニも、先達中不取逃樣手當之義、夫々江不申達候而は不相成、引合之者共、遠國大勢出府いたし候段、甚難義可仕義と奉存候、依之博奕手合には、御料所之ものも加り候事故、右支配御代官野口辰之助役所ニ

おゐて、紀伊守周防守家來爲立合、辰之助江一件吟味之儀可申渡旨、公事方御勘定奉行江被仰渡、右書面御下被成候而は如何可有御座哉、博弈又は紛敷勝負いたし候もの、御料所之ものニ而も、其所之御代官江懸合之上、差圖次第、直ニ仕置可申付、他領之引合も、勿論其領主江懸合之上、勝手次第、仕置可申付趣、去ル寅年、諸向江被仰出候御書付も有之、今般之磯兵衞を殺候もの、當時不相分趣ニ候間、此上手掛り相聞候而も、遠國之義故、御代官領主江召捕之義相達、手間取候内ニは、逃去候儀等出來致間敷共難申、旁最寄ニ而吟味仕候方、便利宜可有之義ニ御座候、乍去關外私領之一件は、私共掛りニ而吟味可致筈は、出入初判之御定ニ准じ、前々より御規定ニ相成有之候事故、下々難義いたし候迚、私共手を離、御勘定奉行手先之吟味ニ成候而は、御規定相崩候様ニ而、如何と申義も御座候得共、今般之一件は、御料所之もの、博弈手合ニ加り隠在候故、御料所ニ引合も無之一件を、最寄御代官ニ而相糺候とも品違可申、尤關外遠國私領ニ而召捕候盗賊、他領引合有之、奉行所吟味申上、私共江御下被成候節、最寄御代官吟味之義、公事方御勘定奉行ト可被仰渡哉之段申上、其通相成候例、別紙之通ニ御座候、右は盗賊吟味ニ限候事故、此度之一件には難引當候得ども、前書之通、御料所之もの加り候譯を以、御代官ニ而吟味いたし候事ニ付、御規定ニ振候筋有之間敷哉ニ付、野口辰之助役所ニ而吟味之義、公事方御勘定奉行江被仰渡候方には有御座間敷哉、此段相伺申候、

朱書 本文之一件、私共持前之吟味ものニ付、御代官吟味之義、私より御勘定奉行江申達、夫より御代官江申渡、吟味書御勘定奉行江差出候を、私方江請取取調候而、相伺候方ニも可有御座哉と勘辨仕候處、御代官は支配も違候義、若吟味殘り候義等有之候砌、相尋度候ニも、御勘定奉行迄掛合、手を越候義、其上御仕置之義、私江御差圖有之候を、御勘定奉行江申達、夫より御代官江申渡候而は、差跨如何ニ付、迚も御代官ニ而吟味いたし候程ニ候はゞ、御勘定奉行ゟ直

ニ相伺候方便利之義、本文ニ申上候、別紙之例も其振合ニ付、御勘定奉行江被仰渡候方と奉存申上候儀ニ御座候、

六月

御差圖

伺之通相心得可申旨、安藤對馬守殿被仰聞、

但松平紀伊守、進達之書面は、追而返上、

〔張紙留〕御料私領組合願出候秣場出入私領高多付初判差出方之事

一三州鷲鴨村之内、西田新郷外壹ヶ村幷東鷲鴨村之内同國同郷村外八ヶ村秣場、幷都而之儀被押掠候由申立候出入、

右出入、御料私領組合願出候處、訴訟方之儀、御料所西田新郷外壹ヶ村は小高、私領東鷲鴨村は高多ニ付、村數ニ寄、初判雖差出、明和八卯年、御料所村數少く候而も、用水出入は、御勘定奉行初判差出候儀も有之候得共、秣場は用水とも譯違ひ、其上秣場は高之多少ニ寄候事故、高多之方江附、寺社奉行初判差出候積り、

右之通享和三亥年二月十三日、一座評議決、

〔牧民金鑑 一〕御料ゟ堺奉行支配江掛候出入

文化四卯七月三日　兵庫頭 〇勘定奉行 松平信行 懸

植村駿河守御預所
和州高市郡醍醐村
百姓伊兵衛後家
さき代
同人倅
善太郎
訴訟方

泉州堺北向井領町
ちよ
外壹人
相手

一不實出入

右出入、雙方御料所同士ニは候得共、御代官所同士とも譯違、御定書目定裏判初判之ヶ條、京大坂町奉行支配違、又は餘國ヱ掛候出入之趣意ニ而、内寄合公事ニ不成、御勘定奉行初判、一座裏判、本公事差日之積、

〔牧民金鑑 一〕上方八ヶ國内之御料ゟ、武家掛、

文化四卯七月廿四日　池田仙九郎御代官所

一播州御影村利助願、織田左衞門佐米引當貸銀滯出入、

是は織田左衞門佐家來呼出、定例之通訴狀相達、難濟段申立におゐては、金公事日、雙方評定所ヱ差出候積、

〔御仕置例類集 二ノ二〕文化十四丑年御渡

大坂町奉行伺

一過書船と船積荷物妨出入、吟味掛り場之儀ニ付評議、

去子十月朔日、評議致し可申上旨被仰聞御渡被成候、大坂町奉行相伺候過書船と、伏見船積荷物妨出入、吟味掛り場之儀ニ付、伺書一覽仕候處、支配國之もの共同士之出入ニ付、大坂町奉行ニ而吟味可仕見込ヲ以、吟味中、雙方とも痛ニ不相成樣、積方之儀申渡候處、船元〆坪井喜六、右之段及承、伏見奉行所ヱ愁訴いたし、右は同所之船法ニ拘り候儀も有之候得ば、伏見奉行ニ而も裁許可致心得之由申越候得ば、伏見船法ニ拘り候儀ニ而も、支配國之もの同士之出入は、元文寶暦安永之度、大坂町奉行ニ而、裁許又は内濟等いたし候例有之候處、其節々之儀は、大坂表限り之出入ニ而、喜六を呼出しニ及ばず、且享保七寅年、伏見船大川筋通船御免被仰付、其砌喜六ヱ申付置候御趣意も有之候由ニ而、過書船、伏見船、雙方船働船法之爭論ニ候得ば、伏見奉行所ニ而も致裁許候心得之由、既同十四酉年、大坂町奉行支配國之もの共同士及出入候處、喜六儀、伏見住居之ものニ

付、大坂町奉行にて取上無之、伏見奉行江願出、致裁許候例有之旨、猶申越候得共、右は糺之上、喜六を相手取候出入ニ付、伏見奉行江可願出旨申渡候趣之書留ニ而、全船法ニ拘リ、同所江差出候儀ニは不相見、伏見船法ニ拘リ候迚、支配國之もの共同士之出入を、伏見奉行所江引渡候先例、又は同所之取計と心得候樣ニと之御下知は勿論、書留申傳茂無之、併今般之儀、伏見奉行江同所住居喜六愁訴いたし候上は、同人を茂呼出し、承糺候上ニ無之候而は裁許難致、左候得ば、支配國外之もの入り交之出入ニ准じ候哉ニ付、天明元丑年、御下知之趣ヲ以、御當地江差出候樣可仕哉之段相伺申候、

一此儀伺書而已ニ而は、難相決廉も有之候間、伏見奉行、井大坂町奉行江懸合之上、見合書物類をも受取、一覽仕候處、享保七寅年伏見船大川筋通船御免被仰付、船法之儀、正敷相守、都而船法ニ拘リ候儀は、伏見奉行所江可訴出旨、其節喜六江申渡有之、今般及出入候、荷物船積之儀は、伏見船法ニ拘リ、船持共ニ而茂勝手儘ニ取計候儀難成、喜六ゟ差圖および船積爲致候事之由、且同十四酉年、神崎川筋、竹木筏川下ゲ之儀ニ付、大坂町奉行支配國之もの共同士及出入候處、糺之上、筏直下ゲ之儀、船法ニ拘リ候故ヲ以、大坂ニ而は不取上、伏見奉行江可願出旨申渡、右願書差戻候後、同所江願出、吟味之上、其節之所司代牧野河內守江伏見奉行ゟ相伺、裁許申渡候趣ニ御座候得共、元來大坂町奉行支配國之もの共同士之出入ニ而、勿論雙方支配國之ものニ候共、伏見船相稼候もの共同士之出入ニ候はゞ格別、今般之儀は、過書船と伏見船、荷物積方之爭論ニ有之、殊ニ伏見船法ニ拘リ候出入、大坂ニ而取扱候例茂有之候由、旁伏見奉行ニ而吟味仕候筋には有御座間敷、然共雙方支配國之ものとは乍申、相手方之儀、餘國之船稼いたし候事ニ而、右ニ付伏見住居之坪井喜六をも可相糺次第ニ候上は、一通り之引合と違、大坂町奉行申上候通り、支配國外之もの入交の出入同樣ニ付、伺之通、雙方共御當地江差出、寺社奉行月番江引渡候

樣被仰渡可然哉ニ奉存候、右之通被仰渡候はゝ、喜六呼出之儀は、寺社奉行より伏見奉行江申達候樣可仕候、

丑四月

鐺付

御書面之通、大坂御城江被仰遣候旨被仰聞、承知仕候、

丑四月廿九日　評定所一座

〔御仕置例類集二ノ二〕文政二卯年御渡

駿府町奉行伺

一駿州三保明神社領之百姓ヲ、榊原越中守組同心及殺害候一件、吟味掛り場之儀評議、〇中略此儀御定書目安裏判箇條之但書ニ、支配違江掛候出入は、評定所江可差出、雙方一支配ニ候はば、其奉行所ニ而裁許可申付、在方國々江掛候出入は、何月幾日評定所江可罷出旨裏書致、三奉行掛月番初判、一座加印と有之ニ見合候得ば、今般之一件、社領村方ニおゐて、同領のものと榊原越中守組同心口論之上、社領のもの殺害に逢、又は手疵受候儀ニ付、神主太田美濃より吟味相願、寺社奉行ニ而吟味可仕品ニ付、美濃儀、寺社奉行月番江吟味願申立候樣可申達段、井上左門江被仰渡可然哉ニ奉存候、

卯八月

朱書評議之通濟

〔目安秘書坤〕佐州ゟ他國江懸り候出入

一佐州澤根町七兵衛相手、越後國寺泊浦榮太郎外一人、預米不相渡出入、

是は佐州ゟ他國江懸り候出入、差當先例も無之ニ付、初判差出方、一座江も及相談候處、若狹守初判差出候積、文化四卯年六月八日、相手は松平越中守領分なり、

〔人見私記〕寛永十二年十二月二日、傳奏屋敷寄合被仰付、　三日傳奏寄合被仰付之、被席評定ノ場ニ被相定、　五日、今朝寄合被仰付、午刻出座ノ面々登城シ、申ノ刻退出ノ時、又候寄合被仰付、

〔科條類典上一〕元文五申年九月五日、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺候帳面之内、二ケ條御好有之、同月十一日帳面御下ゲ被成候ニ付、書面之通相認、翌十二日切紙添書相添、越中守、對馬守兩人ニ而上ゲ候帳面之内、

評定所始之事

一評定寄合者、寛永八年之頃より始る、寛永八年二月二日、町奉行島田彈正忠〇利政宅江老中寄合、公事沙汰有り、其以後ハ酒井雅樂頭〇忠世、酒井讃岐守〇忠勝、老中宅江寄合有之、寛永十二年十一月十日、評定衆被相定、十二月二日より於評定所始而寄合有之、毎月二日、十二日、廿二日を式日とす、

一元祿二巳年八月廿五日立合御目付出座始

青木新五兵衛

柴田七左衛門

〔科條類典上一〕享保四亥年差上候書付

(充)評定所古來之事

覺

一明暦三年之頃迄者、評定所立合江御老中御出座有之候處、稻葉美濃守御老中之節、評定一座江被仰聞候者、向後立合江奉行中計出座有之、寺社奉行をおもに致し詮議有之、其上ニ而落着無之公事者、式日江差出、御老中御聞被成候ハヽ、落着手間掛申間敷樣思召候由御申聞、夫より立合江御老中御出座無之樣ニ傳承候、

一立合江御老中御出座有之候時分、外之御用ニ而、御登城抔有之候儀者無御座、此時分者評定所

江上使有之、御菓子など被下候樣傳承候、

一御老中式日ニ御出座之節御聞候公事者、其御老中之御掛りに成り候儀者無之樣ニ傳承候、尤立合公事之內ニ入組候而伺ニも可罷成儀者、一座相談之上、式日江差出、御老中御聞被成、夫より式日每に、御老中銘々一通御聞屆、其上ニ而落着無之儀ニ候得者、伺に罷成候儀も有之樣ニ傳承候、

一元和年中之頃者、公事訴訟、酒井雅樂頭〇忠世宅ニ而裁斷有之候由、明曆三年大火にて、酒井雅樂頭宅類燒之節、龍之口傳奏屋敷無別條ニ付、大火以後者、傳奏屋敷之內仕切、公事訴訟、御老中、寺社奉行、大目付、町奉行、御勘定奉行出座ニ而裁斷、每月六日ツヽ有之候、寬文之頃より、式日立合と分れ、式日每月四日十二日廿二日、御老中御壹人ツヽ御出座有之、立合六日十四日廿五日、內寄合九日十八日廿七日、三奉行宅ニ而、公事訴訟承之候、其頃より評定所と申習し候、其以前者傳奏江出ルと申候故、今以傳奏と申ものも粗有之候、

右者先年評定所留役相勤候ものにも承合、如斯御座候、尤承傳候覺迄にて、碇と書留等有之儀ニ而者無御座候、評定所之儀、先年之樣子、碇と不相知候間、唯今之勤方と引合、いづれ違候哉、其段難申上候、以上、

十二月

〔德川禁令考後聚一法司諸廳〕享保四亥年差上候書付

評定所古來之事

覺

一明曆三年云々、大元(前條所載科條類典)ニ同ジ

自註此稻葉美濃守ハ、明曆三酉年九月廿八日、御老中被仰付、萬治元戌年閏十二月廿九日、加判列

被仰付候と相見候間、此被仰渡ハ、萬治年中之事と相聞候、

一立合江御老中同上

自註明和九〇安永元年類燒之節、享保二之頃之事、御賄頭江承合候處、内座ハ二汁五菜、皆魚類、御次一汁五菜、皆魚類と申來候間、古來ハ御菓子も被下候段者、相違有之間敷、朱御杖之ナツメハ御次江被下候御茶と申傳候、

一御老中式日同上

一元和年中之頃者同上

自註御定ニハ、寛永八年二月二日、町奉行島田彈正忠〇利政宅江老中寄合、公事沙汰あり、其後者酒井雅樂頭〇忠世、酒井讃岐守〇忠勝、幷老中宅江寄合と有之、然バ雅樂頭宅計ニハ無之事、

明暦三年大火にて、酒井雅樂頭宅類燒之節、

自註此頃者、雅樂頭忠清、御大老之節也、

龍之口傳奏屋敷無別條ニ付、大火以後、傳奏屋敷内仕切、

自註明暦三大火之翌年、萬治と改、萬治ニ評定所普請出來ニ付、此傳奏屋敷之寄合ハ、當分之事ニ可有之、

公事訴訟、御老中、寺社奉行、大目付、町奉行、御勘定奉行出座裁斷、毎月六日宛有之候、寛文之頃より式日立合と分れ、式日毎月四日十二日廿二日、御大老中、定書作老中、未知何是、御壹人宛御出座有之、

自註御定井古懸看板ニ、式日二日十一日廿二日とあり、此書面相違也、

立合六日十四日廿五日、内寄合九日十八日廿七日、三奉行宅ニ而訴訟承之候、

自註立合、内寄合之日限ハ、如此も可有之哉、外ニ記候書物無之、

其頃より評定所と申習し候、其以前ハ傳奏江出ると申候故、今以傳奏と申ものも粗有之候、

（自註）評定所と申ハ、古懸看板ニ有之、寛永十二年より之事也、寛文ハ二十六七年後之年號也、寛文之頃より、式日立合と分れ、評定所と申ハ大成違なり、傳奏江出るとは、于今町方抔申候さすれば明暦大火後、當分之事ニ無之、元之評定所ハ、傳奏屋敷之内ぞ相聞候、

右者先年評定所留役相勤候（同上）

十二月

右書付（前ニ掲ル條件ヲ指ス）評定所始りの元之樣ニ候得共、朱書（自註ト標スルモノ是ナリ）之通相違多候間、委き御糺ニ而、御定出來いたし候哉、此書付を元と心得候而者、却而紛敷故ニ、朱書を入置也、考ニ町奉行ハ、天正ニ始り候間、町方之公事裁斷者、町奉行ニ而可有之事ニ候、其餘之公事沙汰ハ元和之頃、御大老御老中之御宅ニ而有之候、寛永十二年十二月二日より、傳奏屋敷御家作之内を仕切、評定所として寄合有之、

（自註）寶暦七丑年、評定所留役御用達場之東壹間通、傳奏屋敷を園込度旨、御目付江懸合有之候處、古來之通、兩殿ニ成候節之障ニ相成、地面難減旨、御目付稲生下野守被申候、然者元ハ兩殿有之、内一殿を評定所にして寄合有之事にも候哉、

明暦三酉年、大火之翌年、萬治ニ改元也、評定所番幷同心之起立、萬治と有之間、全く右大火後、當時之評定所出來候ニ相違有之間敷哉、當時評定所地面も、元傳奏屋敷之内と申傳、

右之通ニ候間、評定所之始りハ、御定書ニ載候通、寛永十二年十二月二日よりと計、心得候而可然也、

右貳通（前條文幷後條寛永ノ令文ヲ指ス）之書面令參校處、古來ハ式日之外、三日九日十八日、御老中御出座有之候處、美濃守（○老中稲葉正則）口達以後、二日十二日廿二日計之御出座ニ相成候と相聞、右寛永十二年之御書付ニ、御作事奉行、其外御用訴訟承候儀も相見、且寛文之末迄ハ、裁許書目安裏判等ニ、諸

番頭之連署も數多相見、於評定所令裁斷旨之文段有之、其上右御書付ニ、役々訴訟承候日を定
られ、末ニ寄合日を載られ候得者、式日ニハ、評定衆不殘寄合、（懸看板御文言ニも、寄合之式日と有之、）裁許評定之儀
を專ニいたし、役々御用定日ニハ、訴訟詮議をむねと致され候事ニも可有之哉、然ニ御老中御
懸り之國持大名訴訟等ハ、常々御用少ニ可有之處前書御用日懸り々々之面々、公事詮議等手
聞取候間、美濃守右之通口達有之候儀ニも可有之哉、右美濃守口達之內、向後立合と有之候間、
立合と申名目、其以前より有之樣ニも相聞候、

但中古以來、懸看板御文言ニ、諸奉行之立合と有之ハ、御老中御出座無之、奉行中之立合と申
事ニ聞え候歟、御旗本諸奉公人御用、幷訴訟承候日も被定候上者、其砌若年寄衆も御出座有
之候事と相聞、（寬永中、若年寄朽木民部少輔加印之裁許共有之、）慶安之頃より、しばらく闕役ニ而、御老中より御兼帶、
以後若年寄之御出座相止候儀ニも可有之哉、右掛看板御文言ニ、公事役者之所ニ而承候內
寄合場江可出之、於公事ハ、證人證跡相揃出之、無滯樣可有之と相見候得者、其頃より宅吟味
も有之儀と相聞候間、同役寄合評議之筋も勿論可有之、日限等極り候事者後年之儀ニ而可
有之哉、（此寄合場と有之候は、評定所之事と相聞候、）

○按ズルニ、是ハ江坂孫三郎ガ享保四年ノ書付ニ注シタルモノニテ前條ト異同アレバ、附記
シテ參照トス、

〔甲子夜話五〕評定所ノ起リハ、國初ノ頃町中出入コト有トキ裁許ヲ願フニヨリ、老職以下諸役人
ノ出會ヲ賴ンデ設ケタルユヱニ、食物等モ皆町中ヨリ持運ビ、役人方ノ給仕ニハ、ミナ遊女ヲ出
シタリ、然ニ官家ノ御制度モ漸々ト詳備スレバ、官ヨリ作事モアリ、飮饌モ出テ、給仕ハ御城ノ坊
主ヲ以テ爲ルト云、又遊女ヲ評定所ヘ出ストキハ、船ニ乘セテ往來セシメタリ、其船屋根ハナカ
リシガ、夏月ハ日景ニ苦シミテ、屋根ヲ願ヒテ作レルヨリ、屋根舟始レリ、遊女ノ稱ヲサンチヤト、

裁判諸制度

云、因テ屋根船ノ舊稱ハ、サンチヤ船ト云シトナリ、今ハ知ル人サヘ稀ナリ、又今評定所ノ脇ノ岸ニ船ノ着場アリ、コレヲ吉原ガンギト云、古昔遊女ノ船ヲ繋ギシ處ナルユヱナリトゾ、

〔洞房語園上〕吉原開基の砌より、寛永年中まで、吉原町の役目として、御評定所へ大夫遊女三人宛御給仕に上りし也、此事由緒故實も有る事にやと、或とき予が老父良鐵にたづねとひしに、良鐵が申けるは、慥に此故とは申難きことなれども、私に是を考思ふに、扨御奉行と申は、日々に諸方の公事訴を御裁判被成、御政務の御事繁く、平人と違ひ、年中に私の御暇有る事稀也、然ども遊女などの艶色を御覽の爲にはあらざれ共、遊女はもと白拍子なり、されば御評定所の御會日の節、白拍子などを御給仕に御召あり、公事御裁許以後、一曲ひとかなでをも被仰付、御慰に備へられん爲に、上様より被仰付しものか〇中略といひしを、一向所詮なき物語りにもあらねば捨置がたく是を記し侍る、

〔折たく柴の記中〕封事を奉りて、某が師〇木下順庵なるもの、申せし事あり、評定所は天下の是非定りぬる所、其關係最大なりと申き、近世以來、衆中其職に怠りて、其權下に移りぬ、もつともこれ然るべからず、又大名より以下の人々借り用ひし金銀の事ども、評定所の沙汰に及ぶ國體ニおいて然るべからずなど申す事ども論じ申したりければ、七月〇寶永七年五日、評定衆に仰下さるゝ事どもありて、また然るべき人々の借り用ひし金銀沙汰の事ども評定の人々の異見進らすべきよし仰下され、某が議をも奉らしめられしかど、此事は其御沙汰に不及してかくれさせ給ひたりけり、すべてこれらの事議し申せし草はなほ有べければ、こゝにはたゞ其大要をしるし侍りつ、

〔御當家令條三十四〕公事裁許定

一町人跡職之事、存命之内、五人組江相斷、其上町年寄三人之所に而帳に付置べし、其子於不屆者、

重而可申斷之、及末期筋目違たる遺言立申間敷事、

一主人と家僕との公事、勿論主人次第たるべし、但主人非分有之者、隨理非可裁斷事、

一親子間之公事、親次第たるべし、雖然其親非義有之ば、依理非可申付事、

一家僕に目安上らるゝ輩之事、侍中江は松平大隅守、牧野内匠、加賀爪民部少輔、堀式部少輔狀可添之、御代官は松平右衞門大夫、伊丹播磨守書狀添之可遣候、町人は目安之裏に書付可遣事、

一目安裏判、日數を積、書付遣候上、不罷出輩は籠舍、但日數五日、其後可爲對決事、

一訴人之事、縱雖爲同類、其品により科を赦し、御褒美可被下事、

一田畑野山等隱置訴人之事、御褒美可被下之、隱置輩者、或死罪、或過料、可隨科之輕重事、

一遂成證文證據有之を乍存申掠、公事仕族之事、或籠舍、或過料、籠舍之日數、過怠之員數、可依科之輕重事、

一御代官所給人方、町人、百姓、目安之事、其所之奉行人代官、井給人等之捌可受之、若其捌非分有之ば、於江戸可申之、奉行人代官給人等江不斷訴申族者、縱雖有理不可裁許事、

一國持之面々家中井町人、百姓、目安之事、其國主可爲仕置次第事、

一寺社領之百姓目安之事、其所之代官江相斷、捌可受之、若其捌非義有之者、於江戸可申之、代官江不斷訴申輩は、是又不可裁許事、

一寺社方之公事、本寺之捌可受之、若本寺之捌、非義有之ば、於江戸可申之、本寺江不斷訴申族者、縱雖有理不可裁許事、

一申分不立、非據之儀、訴申族之事、於其所死罪、又は籠舍之事、

一刃傷之咎之事、其品により或籠舍、或過料、可隨罪之輕重事、

一殺害人之事、其時之品により或死罪、或可爲籠舍事、

一かりごとを申族之事、其品により或死罪、或籠舍之事、
一欠落之者、送たる輩、可ㇾ爲二曲事一事、
一欠落者之請人之輩、可ㇾ隨二科之輕重一事、
一屋敷境相論之事、其一町之者召出、證據次第可二申付一事、
一誂物諸色請取、如二約束一不二相調一輩、可ㇾ爲二曲事一事、
一科人雜物并妻子所從等之事、主人或其所之奉行改出捕來者、其主人共奉行之進退たるべし、但奉行所より居ㇾ有ㇾ之而、被ㇾ行二罪科一族者、奉行所江可二差出一事、

寛永十年酉八月十三日

〔享保集成絲綸錄〕一寛永十二亥年十二月

定

一寄合之式日、毎月二日十二日廿二日、若公儀御用有ㇾ之而式日及二延引一バ、翌日可ㇾ爲二寄合一事、
一評定衆寄合場江卯刻半時罷出、申刻可ㇾ有二退散一事、
一寄合場江役者之外一切不ㇾ可ㇾ參、勿論音信停止之事、
一公事人、老人、若輩、并病者之外、かいぞへ停止之事、
一公事ニ罷出者、縱雖ㇾ爲二御直參之輩一、不ㇾ可ㇾ帶二刀脇差一事、
一公事人雖ㇾ爲二親類緣者、知音好身一、評定衆於二寄合場一不ㇾ可二取持一事、
一從二遠國一參二公事一、在江戸久次第可ㇾ承ㇾ之、當地之公事ハ、其日之帳之先次第可ㇾ承ㇾ之事、
附不ㇾ承而不ㇾ叶義、并急用ハ格別之事、
一公事、不審掛儀ハ、其筋之役人可ㇾ勤ㇾ之、總座中よりも、無二遠慮一存寄之通可二申事一、
一公事裁許之以後、其筋之役人、公事之しめ留書可ㇾ致ㇾ之、伊豆守、〇松平信綱 豐後守、〇阿部忠秋 加賀守、〇堀田正

盛、以上三人老中、其日之公事之留書寫させ可被申事、

一公事其日落着無之儀ハ、其評定衆翌日寄合可被申付、不相濟儀ハ年寄中江談合仕、其上可致言上事、

一公事役者之所ニ而承候内寄合場江可出之、於公事ハ、證人證跡相揃出之、無滯之樣可在之事、

一爲過怠籠舍之者、評定衆相談之上定日數、其日限相濟候者、自籠可出之事、

附預者、永々數不差置、急度遂穿鑿可濟之事、

一裏判并召狀をうけ、遲參之者、勘其所之遠近積日數、依輕重、或籠舍、或可爲過料事、

右條々可被相守之者也、

寬永十二年十二月二日　讃岐守〇酒井忠勝、老中、

大炊頭〇土井利勝、老中、

〔撰述格例初編二ノ八十六〕評定所御用始之事、附式日立合奉行揃刻限并御用向順立之事、

一正月十三日、卯之半刻、服紗小袖半袴にて相揃、

但燒捨訴狀有之候得者、月番三奉行御目付立會、於評席町奉行申渡、例之通燒捨且椽側にて誓詞之面々有之候得ば、大目付御目付出席、判元見屆、

一五ッを打、御老中江御案内之儀、月番寺社奉行ゟ御目付江申談申遣、

但御定書上奏有之候享保五年之御書付に、老中出座五時可罷出旨被仰出候以來、見計御案内におよび候處、寬政二戌年二月、御出座刻限之儀、五時御出座可被成旨之御書付、鳥居丹波守殿、一座江御渡被成候以來、五ッを打、御案内申遣候事に極ル、

一何れも誓詞之間江相揃、御老中御出座之節會釋有之、着座之上、評定所番兩人にて、兼て評席之方衡立江立寄置候掛看板を御座敷内江横に差置、御右筆讀之候内口奉行一同手を附承之、讀

畢て評定所番罷出、掛看板を、評席末之方杉戸際へ引、右相濟、誓詞名前大目付進達、誓詞相濟、公事訴訟無之段、町奉行申之、

但前々は、掛看板之儀、評定所勤役之儒者讀之候處、寛政二戌年十二月八日、儒者相止、御右筆讀之、且評定所壹人之節は、評定所勤支配勘定之内壹人罷出相勤、

一内座、例之通着座、留役組頭留役一同罷出、評定所留役組頭ゟ、月番御勘定奉行江、留帳之初卷請取之、御老中之前江持參懸御目、一覽相濟、去年中之公事訴訟之數書付進達、右御勘定奉行復座にて、月番寺社奉行留役共、出精骨折候趣、取合にて御挨拶有之、留役一同引退、御料理出ル、御料理并薄茶相濟、御老中寺社奉行江多葉粉盆出、時節之挨拶相濟、御老中御退散之儀會釋有之、月番町奉行罷立、御障子を明、誓詞之間通御玄關迄先立いたし御案内、非番町奉行御勘定奉行は、勝手口ゟ御玄關江罷出、例之通並び、御會釋有之退散、

一式日跡立合に付、何れも平服に差替、注進狀差出、評議もの、并帳外之公事訴訟承之、

一天明六午年正月十三日、鳴物停止にて、御用始之式日無之、同廿一日、御老中御差支有之、御出座無之ニ付、式日相延、同廿五日、水野出羽守殿御出座、公事訴訟無之、御用始計にて、式日跡立合無之、

但右は明和五子年正月廿一日、御用始式日有之、當朝は例之通公事訴訟無之段申上候儀故、定例之廿一日式日には、退散後、金公事承候得共、御用始にて、公事訴訟無之段申上候事故、式日跡、金公事は無之樣評議之上申上置、

〔享保集成絲綸錄一〕正德二辰年九月

評定之面々江被仰出御書付

一寛永以後、御代々被仰出候、評定所法式、評定衆、卯半刻より會合候而、申刻退出し、其日ニ決し難

き事候はゞ、翌日再會候て、猶又決斷ニ及びがたき事ハ老中に申し、言上すべき由ニ候、近年以來、公事訴訟も其數多く成來り候處に、評定之面々、事ニ馴、功を積ミ、裁斷の次第滯る所もなく候歟、會合之間もなく退出候樣ニ相聞え候、若し每年其大法ニ任せて、其道理を盡すに不及して裁斷に至り候はゞ、尤以不可然事ニ被思召候事、

一評定所幷諸奉行所におゐて沙汰之次第、專其證狀を據として、道理之ある所をば推尋す、其本旨をすてゝ、枝葉の事をば穿鑿し候由風聞候、證狀の如きは、其據とすべき事、勿論ニ候といへども、すべて公儀之證にも引用ゆべき物に、大法に背候事はまるさしむべからず、又事の末なる所につきて、其本旨を知るべき事、勿論ニ候といへども、枝葉の事を論じて多事にわたらば、其本旨を失ふ事あるべし、然らば必其證をも據としがたく、其末を逐ひ難し、就中論地等之事、古來多くは評定所ニ而、僉議の上を以て事決し候所ニ、近年之例、御代官所ニ申付、檢使を以裁斷し候故に、不可然事共有之由相聞候、すべて此等之類、諸事につきて、其心得可有之事ニ被思召候事、

附近年以來、罪惡極重之輩を助ヶ置、目明し口開など〻名付候而、若罪の疑敷もの出來候時ハ、奉行中、彼輩ニ申付、或ハ搜求め糺明せしめ事の實否、罪之有無を決斷有之由に候、たとひ彼輩の申す所、其事をあやまらず候とも、奉行之面々、此等之輩の力をかり用ひ候て、天下之御政事を取沙汰候はん事、甚以て不可然候、況又彼輩の申す所、或ハ遺恨により、或は賄賂によりて、事の體引ちがへ、理を非となすの類、種々有之由風聞候、よろしく早く彼輩の本罪を糺し自今以後、此等不可然事共、停廢有べき事ニ被思召候事、

一評定所之法、公事訴訟の事、其筋之役人間難有之候而、一座之面々存寄も候へバ、其存寄候處を殘さず申出すべき由ニ候處、近年以來、大方ハ僉議にも及ばず、最初申出し候輩の沙汰に任せ、

事を決し候樣ニ相聞え候、若其事、實に有之候はゞ、評定之面々その人數多しといふ共、一人之沙汰ニ事決し候上ハ、古より僉議と申し、評定と申事ハ、其本義を相失ひ候、自今以後ハ、各其心力を盡し、僉議之上に、評定仕候樣ニ可仕の由被思召候事、

一評定所之法、遠國より訴來り候輩、其滯留の日久しからず候樣ニ可有之由ニ候、然るに、近年以來ハ、評定所并諸奉行所ニおゐて、公事訴訟相決しがたく、年月を經て滯留之輩有之由相聞え候、輕賤之者ども、其家業を抛ち、其在所を離れ、滯留の日久しく候ては、たとひ其本意の如く事濟候とも其費用の失却すくなかるべからず、況又申所かなひがたきものにおゐては、猶々迷惑に及ぶべき事、尤以不便之事ニ候、自今以後ハ、奉行の面々、此等の所をおもひめぐらし、沙汰之次第可有之由被思召候事、

附老中に申達し言上候事ニハ、再三思慮をも用ひ候故歟、毎事遲滯の事も有之、御尋之旨有之時、答申所其義相わかれざる事も有之候、すべて事之滯なく、申す所明らかなる心得可有之事に被思召候事、

一凡公事訴訟之事、或ハ權勢の所緣有之候輩、或ハ賄賂を用ひ行ひ候輩の類ハ、其志を得候而、其望を達し候者共有之由、世上に申沙汰し候所、すでに年久敷候を以、御代始の時、御目ニとまるし出され候といへども、其舊弊今に相改らざる由、猶々其聞え候、もし風聞の如くに候におゐては、御政事のよりてやぶれ候所に候へば、此上ハ其御沙汰に及るべき御事候、奉行之面々、其家中之輩ハいふに及ばず、支配の者共に至るまで、よろしく其戒め可有之事ニ被思召候事、

附牢屋の役人といへども、種々の私法をたて、牢舍の輩の賄賂をむさぼり候次第等相聞え候、此等の事共、奉行中ハいまだ承りも傳ず候故に、制禁ニハ及ず候歟、尤以不可然事ニ候、すべて如此の事等、急度嚴禁あるべき事、

右條々よろしく承知せしむべく候、諸奉行所の事ニおゐては、天下御政事の出る所ニ候上は、萬事の理非ハ、此所に相定事どもに候、然るに只今迄の如くに有之候ては、其奉行之越度と申ばかりニ而ハ無之、則御政事の明らかならずして、人民の不安所ニ候間、各其心得を以、沙汰の次第可有之由被仰出もの也、

正德二辰九月五日　　評定所一座　奉行中　○又見ニ科條類典一

〔憲法編年錄四十九〕元文五年五月

三奉行、大目付、御目付之儀者、相互ニ參會之刻も、遊興ヶ間敷事者有之間敷候得共、心を付、淨瑠理三味線等之音曲者有之間敷儀候、此段申達ニ不及候得共、彌右之趣可被相心得候、

〔御書付留〕寶暦九卯年二月十四日

於羽目之間、相模守殿一座江御渡し、

三奉行江

一一座掛り公事訴訟、并吟味中、最初評定所ニ而相尋、其後落着申付候迄は、面々懸り切相糺候、自今は最初評定所ニ而相尋、重而之寄合迄ニ、懸りのもの手切ニ糺明不相濟候は丶、貳度之寄合ニ而、右糺之趣、一座江申談及評議、猶又相糺、夫ニ而も難決候は丶、三度目之寄合一件差出、相糺候樣可被致候、

但公事訴訟吟味中、手間取、夜ニ入候は丶、先其日は相殘、追而可被致吟味候、若又、其面々懸り之公事訴訟等、數多溜り有之節者、申談無滞ニ呼出置候儀無之樣、可成丈可被心懸候、手間取候儀は、時宜寄候事ニ候得ば、若其日相殘り候而も尤不苦候、

一一座掛り箱訴狀、并吟味事評議等之儀、右受取候三奉行不相揃候而者、吟味評議共無之旨相聞候、右一座一同江相渡候品々候得ば、自今受取候三奉行、出席無之候而も、吟味評議共可被致候、

尤寄合之度々差出可被相糺候、

一訴狀箱向後奉行並散遅候共奉行退散ニかゝはらず、只今迄之通九ッ時ニ候はゞ、箱可被差出候、

一毎月上旬、日限を極、三奉行面々一座懸り公事訴訟等之内、自分手切之分、當時懸有之數、頭書致し、銘々可被差出候、右認方之儀は可被相伺候、

但三奉行一役切之吟味、并手切之吟味之儀も、不相濟分は、別紙ニ書付可被差出候、

右之通可被得其意候、

二月

〔天保集成絲綸錄 百〕寛政元酉年九月

三奉行江

公事裁許、其外御仕置の事ハ、一人之休戚ニ預り候儀にも無之、天下邪正勸懲に預り候儀ニ而、風俗をも變化いたし候本に候上は、奉行たるべきものは別而心を可盡至ニ候、正徳享保之頃被仰出御書付ニ載有之候ハ別而之儀、其餘被仰出をも厚く相守り、心掛可被申事ニ候、

一天下之御仕置筋ハ、此上なく重き儀候間、たとひ御直之御沙汰被仰出候事ニ而も、一座之評議念を入、當然之儀を以、無遠慮可被申上事、

一御定書之儀ハ、下より御仕置を伺ひ候曲尺にて候、定り無之罪狀を、定り候法に引當可申と強而附會候樣ニ而ハ、却而御趣意ニ背き候事も可有之故ニ付、一事ニとり、時勢寛急之樣子ニ付て、各見込趣意を以伺ひ被申候共、相當之儀無據事、且後弊無之ニおゐては不苦候事、

一總而吟味致し候儀、重き儀ニ候、御仕置伺候而、評議を盡、御定書等江引當候も、吟味之次第より起り候儀ニ而、實情ニたがひ候へば、何程評議を詰、紙面之論ハ盡し候而も、罪狀之實には遠

く成行候、枝葉に不走、事約に吟味詰、しかも實情ニあたり候は最上ニ候、口書等と申候ても、聊之文言にて、事之輕重ニも相成、愚昧之ものを尋候得ば、尋方之様子より、申口とても實意ニ無之事を申候類も可有之候へバ、品ニより下役等に吟味爲致候とも、隨分其始末、陰ニ而承り居られ、實意的中之儀、專一ニ心を用ひ可被申事、

一一座之評議、多分之方ニ決し候譯ハ、總而物之道理之よきとあしきは、辨論を不待してわかり候儀ニ候、八人之奉行、實ニ六七人も宜旨申候ハ宜にて候、然處右評議之際、下役ニ任せ置候歟、又ハ思慮を盡し候を、むつかしく存候歟、又ハ見識申出し候而も道理ニたがひ、又は御定に齟齬いたし、笑を得可申哉など、不束を以、銘々存意を不顯、理強く詞高き方へ同じ候ハ、多少ニ決し候と申譯ニハ無之儀ニ候、

一後來ニ殘り候儀、又ハ不輕御趣意等、其筋格別入組候御仕置評議筋ハ、銘々持歸り遂一見、存寄附札、又ハ覺書致し、追而寄合之節打合せ、論談有之可然候、右ニ而も難決節ハ、二筋ニも三筋ニも了簡付候而相伺候共、たまさかは不苦候事、

一公事出入、内濟事立ざるを專と致候ては、基本ニくらき事ニて候、尤事品ニより候而、一概ニ可申ニハ無之、内濟事不立して宜敷事も有之候得共、萬一内濟とゝのはせんが爲に、勝べき方を叱り、負べき方を引立候得ば、不正之負を得べき事を恐れ候而、可勝方より内濟を求め候得バ、一事ハ事不立様ニ候得共、邪正之糺し不行屆ゆへ、内濟ニ及び候ニ當り候得共、彌御訴訟ハ絕ざるべきニ候、總而公事出入、善ハ勝、あしきハ負候外ニ道理ハ無之、右之よきとあしきハ、鄕里中にてもわかりおり候へば、可負道理之方訴出、咎可受を存候もの無之、尤中ニハ巧ニ姦訟を企候類も、又ハ善惡を辨ざるも候へ共、其外ハ稀ニハ勝べき道理もち候方、不正之負を得可申を恐れ、又ハ遲滯物入を恐れなど致し、奉行所江出、負べき方内濟ニて、咎も無之濟候も有之、右

をたのみ候而、あしき方よりも、手強く訴出可申など申募り候事も有之間敷とも難申候、一人の邪正を糺し候へば、天下之邪正之勸懲ニ相成候儀ニ候得バ、當時はか行可申など計候而、其日其日ニ打流し候而、物事不滯をよろしきと申儀のみには有之間敷候事、

一遠國其外より伺出候御仕置之類、一座ニ評議下り候節、猶格別之評論是非書添可被出と申ニハ有之間敷候得共、總而紙面を以評し候ハ、實事かひなき事も有之、殊ニ遠國より伺候儀ハ、其時之樣子、所之風俗も有之、右ニ付而ハ、御定ニふれ不申、事之輕重、後弊ニもなり不申程之儀ハ、大抵は其奉行之見込ニ成候方、よく其情に徹し候事も有之儀ニ候へば、猶其心得も可有之事、尤遠國又は加役より伺出候御仕置等、評議書出し候節も、別之評議無之は、其儀計書出し、評議有之バ、其評議のみ書出し候、簡易ニいたし候樣可被心掛候、

一奉行と申ハ、下も近き心得に無之ては、鄙賤の情は得がたく候、然るに奉行の所作事重くなり、尊大ニ過候而ハ、おのづから下へのみ任せ候樣に成行候事可有之候哉ニ付、是又其趣可被存候事、

九月○又見ニ御書付部類ニ

〔天保集成絲綸録〕百 寛政五丑年十月

評定所之儀ハ、御場所がら、御威光ニも懸り候事に候得バ、各謹愼可被相勤儀、勿論ニ候得共、近來何となく相ゆるみ、裁許席ニ而、外咄なども有之哉ニ相聞候、若右體之儀も候はゞ、相互ニ厚被心付候樣可被致候、此段心得之ため、無乾度咄置候事、

〔評定所留書〕四 一吟味日延日數之事

日延願は廿日ニ可限、成丈日數縮可爲願、無據子細有之歟、又は歸村之上、金子調達等之譯有之候はゞ、里數往還之日數を除可承屆候、

一繼公事吟味之事

雙方吟味中、願人病死いたし候得ば、其段相手方江申聞、吟味之沙汰ニ不及段申渡候定例ニ而、相手方不殘病死、又は欠落等致候節も、同樣之取計有之引續跡之者願出候共、繼公事趣意ニ付、可取上筋ニ無之候、然る所、戌年七月、曲淵甲斐守掛に而吟味御渡ニ成候、常州筑波郡下河原崎村儀兵衞、同村名主を相手取候一件吟味中、儀兵衞病死いたし、悴作兵衞願ニ寄、伺之上引續吟味いたし候例、文政三辰年七月、石川主水正懸り評定所公事、武州久左衞門新田久左衞門病死、悴願ニ寄、一座相談之上引續致吟味候例有之、是は久左衞門一件は、濟口一條ニ成、夫成ニ致候而は、爭論之基ニ付、濟口證文引續爲上候、珍敷取計ニ付見合ニ出す、

〔天保集成絲綸錄百一〕寬政九巳年十二月

評定所式日立合、御用濟次第、退散勿論ニ候得共、大概平常退散之刻限を極置れ候而、右定刻前ニも、存之外早く濟候はゞ、重而可申談分をも差出、假令不差急御用向ニ候とも、右體餘暇ニ評議有之樣ニ而可然候、扨又右樣之類も無之時は、早く退散も可有之儀、其節は出席御目付江其旨申談可然候、尤御用多之節は、終日も可被在之事ニ候得共、大體式日は四半時、立合は九半時を退散刻限ニ申合有之候方と存候、

一御用有之節は、一座申談、登城之事に候得共、可成丈缺席無之樣被申合可然候、いづれ日々登城之儀ニ付、式日立合寄合之節は、專各之主事ニ候得共、不差懸次第ニは登城ニ不及儀勿論候、

一評定所は、御規定第一之御場所ニ候得ば、奉行中挨拶がらも可心配次第、勿論之事ニ候得共、以前は慇懃に過候哉にも承及候、當時右樣ニは有之間敷事に候得共、猶更右體之處も心掛ケられ候樣存候、尤和平之示談のみにて、實篤之儀ニうとき事無之樣、申合有之度候、裁許幷御仕置附等は、大切之品、當時は別而銘々實意に不等閑勘辨之事ニ候得共、前々は支配下役等に打任

裁判法

せ置候儀も有之哉に承及候、右體之儀ニ不流樣、何分當時之姿を以、面々直々に被取捌、後世迄無失弊樣申談置、彼是之趣とも能行屆候儀、肝要之事ニ存候、依之猶申達置候儀にて候事、

〔評定所書留二〕一評定所ニ而訴訟方相手方共、上椽又者落椽江罷出候もの之儀、是迄之出方區々ニ而、前々ゟ取極候出方も無之ニ付、以來は白洲出もの同樣、訴訟方は右之方、相手方者左之方江差出候積、

但出席家來觸頭等之出方は、是迄之通可取計事、

右之通享和二戌年六月十八日、土佐守殿御內寄合ニ而評議極ル、

〔評定所書留三〕一白洲繰入方之義、是迄訴訟相濟候後、御評議もの等有之、猶公事帳外、御聞被成候處、以來訴訟、公事、帳外とも、御一席ニ御聞被成候ニ付、改而右之通取扱可申旨、留守居市川虎之助を以被仰渡候間、爲御承知記置候事、

文久三亥年正月廿一日

小原清次郎
佐野八郎太郎
向方
金子恒三郎

〔聞訟秘鑑〕一裁許と落着差別之事

是ハ御奉行所ニ而は、公事出入之取扱を、一體ニ裁許とは不唱、縱令地所出入、其外以後之儀を被仰渡候出入ハ、裁許と唱、人殺喧嘩之類は吟味物と、落着と唱候由ニ付、吟味伺書差出候砌、其心得を以、取計可然事、

〔政書集〕公事合吟味取掛り候節之事

一公事合吟味取掛候はゞ、先訴訟方訴狀之趣、逸々承合、糺之內、訴訟方申口之趣、相手方江は無言ニ而爲聞置、彼是申爭候共、致混雜候間、承り候樣申聞押置、訴訟人を得と承糺、申口之趣、役人書

留之、大概訴狀趣意書取、申所之旨、役人聞取候上ニ而、相手方返答書之趣、逐一承糺書留、是亦訴訟方ゟ申爭候はゞ、同樣無言ニ致し、承居候樣押江置、相手方申所之旨、役人聞取候上、右雙方之申口、書留殘候處も無之哉、書留候之趣、雙方江讀聞せ、尙亦雙方ゟ申立、殘候事有之候旨申口ニ候はゞ、其趣不洩樣書留、右書面之趣を以、雙方之申分、大概ニ茂可相分儀ニ付、虛實之處探索、夫夫雙方吟味ニ取掛り、差當茂申聞、品ニより、問責候而茂吟味可致事と心得、一體之趣意、役人呑込不申內、書留中、不埒之申分等相聞候とも、權高ニ言葉咎、亦は叱り候儀は不致、隨分相慣候而、追々遂糺明、最初よりの書留、井右察當之上、吟味相聞候趣を以、役人寄合評議之上、雙方不埒之始末、實ニ吟味詰、可申品取極、亦々雙方申口、疑舖難決義は、對決申聞可承之、人證茂有之、爲引合呼出候儀相願候歟、或は右出入ニ立入候者ニ而も有之、呼出相糺可申引合有之候はゞ、雙方之內ゟ、名差不申候共、一領之ものは、早速呼出突合、可遂吟味、他領者ニ候はゞ、相給之分は、向方領主地頭江掛合、一通り承糺貰、書付ニ而茂差越、相分り候儀は格別、可成丈雙方之申口ニ而虛實を分ケ、一領之內ニ而、事可濟樣取計可申事ニ候得共、他領引合之ものニも、咎茂付可申程之品歟、實ニ他領もの得と不相糺候而は、一件吟味難成儀ニ相聞候はゞ、雙方申口、吟味之始末、大概取縮、書留ニ致し候、右他領もの引合吟味行屆不申候はゞ、於奉行所ニ吟味御座候樣仕度旨之進達書認之、其筋々江茂致談合、万石以上以下共、御用番之御老中方、亦は若年寄衆、其支配之分、井頭支配有之分は、其筋江御吟味願可致筈と可心得事、

但總方引合之もの迄、一支配之ものニ而吟味相決候はゞ、銘々口書口上書取之、裁許之見込、或は不埒之始末は、右口上書口書之末、差當ニ認メ、何々と吟味詰可申立樣無之旨之口上書口書共ニ印形取置不申、尤吟味日數相掛り不申樣、隨分心掛ケ可相糺事ニ而、畢竟領主地頭ニ而、無益ニ日數相掛候而は、百姓愚昧ゟ越訴をもいたし、品ニゟ、役人をも相手取、不法をも

申募り候樣ニ成、第一其領主地頭之威光衰不宜事、

〔市尹秘錄一〕與力同心役々勤方大概之事

吟味方勤方之事

寬政十午年書出

一公事出入吟味者、御渡被成候得ば、手續次第、幾口ニ而茂呼出、吟味之上、雙方熟談內濟いたし候へば、願下ゲ書付入御覽、思召も無御座候得者、白洲江差出、吟味下ゲ御聞屆有之上、濟口證文御番所江差出申候、且又不相分品有之候歟、利解不聞入候得者、其趣意申上、白洲江差出、御直御尋有之、夫々入牢手鎖預等被仰付候上、吟味詰口書取調、印形爪印取之差上、品輕者、口合ニ不及、落着被仰渡候、御仕置伺ニ相成候分者勿論、少茂入組候品は、一件口合御聽被成候上、落着被仰渡候、

但評定所式日、立合公事出入は、當時吟味方ニ而は取扱不申、調役方ニ而取計申候、○中略

一於御番所、御目付立合御詮議者は、御目付衆、御徒目付、其外出役相揃候上、出者上ゲ候樣御差圖有之、懸り吟味方、御徒目付、御小人目付立合、玄關ニ而、大小懷中者等、吟味方取上之、屛風圍江入、出役同心、御小人目付立合番仕、白洲御尋之節は、當番與力、御徒目付、出者之挾ミ致シ、吟味方は申口書留仕候、御尋相濟、同道人召連人江被仰渡相濟候上、出者可差返哉之旨吟味方相伺、御徒目付、其外立合、大小懷中物相渡差返、不殘出拂候得ば、其段申上候、且御吟味相分り、口上書口書取調候節は、日限相定、御目付衆は不被相越、御徒目付、御小人目付罷越、吟味方江立合申候、牢間之節茂同樣ニ御座候、口合之節は、御內座ニ而懸調役、一件口上書口書讀之、其上ニ而白洲江一件出者並置、吟味方口上書口書讀聞相濟、御徒目付立合、書判印形、爪印取之、御內座ニ而入御覽、畢而相伺、出者差返申候、

一評定所御詮議之儀は、御揃刻限以前、吟味方并雙方出役與力同心、評定所江相越、御徒目付江掛合、出者等取調置、御揃之上、御差圖次第、出者御玄關江上ゲ、吟味方、并出役與力同心、御徒目付、御小人目付立合、大小懷中物、御徒目付取計取上之、御座敷幷御廊下屛風圍江入置、御座敷圍は、出役與力同心、御徒目付、御小人目付立合番致シ、御廊下圍は、出役同心、御小人目付立合番仕候、御座敷ニ而御尋之節は、出役與力、御徒目付、出者之挾ミ致、吟味方は、御衝立之內罷在、書留仕出役與力、御徒目付は、御衝立外ニ扣居、出者出入仕候、口上書取調候節は、御座敷次ニ而、御徒目付立合、吟味方相尋、口上書案文仕候、

一評定所ニ而口合之節も、御番所御目付立合、同樣御座候、尤御座敷者は、口上書讀聞、直々其席ニ而名前江書判爲致、御見屆相濟、屛風圍江差返候上、吟味方御徒目付立合ニ而、繼判取申候、

〔御仕置例類集一ノ三〕文政ノ　年御渡

御勘定奉行石川主水正伺

一八王子千人同心、井家族共取扱方、其外之儀評議、○中略去ル八月廿八日、支配○伊奈友之助支配行八王子同心井家族共、身分之儀ニ付、被仰渡候御書付之趣奉承知、右御書付寫を以千人頭江申渡候處、右ニ付、已來取扱心得方伺書面差出申候、○中略然ル處去ル午年六月中、千人頭原半右衞門組中と申、無名之御箱訴仕、右訴狀水野出羽守殿ゟ安藝守江御下ゲ、內糺被仰渡候ニ付、追々風聞等相糺、同年八月中、內糺之趣申上候處、尙又去ル未年十二月、八王子千人同心、八王子住居同心と申、無名之御箱訴仕候趣ニ而、昨申年正月中、御同人ゟ同文之訴狀貳通、是又安藝守江御下ゲ、內糺被仰渡候處、右樣御箱訴度々申上候儀、不容易儀に御座候間、篤と相糺、同心共之內ニ茂、心得違之もの共も御座候はゞ穿鑿仕、急度御咎之御沙汰茂可申上心得ニ而、種種內糺仕候處、心得違之もの共茂不少相聞候間、同年八月十一日、內糺之趣申上候書面、外ニ別紙

を以、御內慮伺書共進達仕候處、同年九月廿一日、御同人ゟ、御內慮伺之通相心得、此上取締方之儀は、手限ニ而取扱候樣可仕旨、尤吟味之御沙汰ニは不被及候旨被仰渡候間、同役共評議之上取調、同年十二月廿三日、安藝守於宅、同役立會之上、千人頭呼出、千人頭、是亦心得違之趣意、幷已後取締方之儀、書面ヲ以嚴重申渡、同心共儀は、組頭世話役取放、平同心申付、愼、且次第ニ寄、身寄番代、或は叱り愼等申渡候、○中略

酉十二月七日　御鎗奉行

評定所式日
立合
內寄合定日

一寄合日

〔享保集成絲綸錄　一〕寛永十二亥年十一月十日○中略

二日　十二日　廿二日

寛永十二年亥十一月十日

〔享保集成絲綸錄　一〕寛永十二亥年十二月

定

一寄合之式日、每月二日、十二日、廿二日、若公儀御用有之而、式日及延引は、翌日可爲寄合事、○中略

右條々可被相守之者也

寛永十二年十二月二日　讃岐守

大炊頭

〔被仰出留　一〕每月寄合日

式日

四日　十二日　廿二日

立合

六日　十四日　廿五日

内寄合

九日　十八日　廿七日

右立合、又ハ内寄合ニ罷出公事訴訟之輩、差圖なくして式日に出べからず、若みだりに罷出ニおゐてハ曲事たるべき事、

申〇寛文八年　七月日

右ハ評定所江遣之

〔科條類典上一〕享保四亥年差上候書付

評定所古來之事

覺〇中略

寛文之頃より式日立合と分れ、式日毎月四日、十二日、廿二日、御老中御一人ツヽ、御出座有之、立合六日、十四日、廿五日、内寄合九日、十八日、廿七日、三奉行宅ニ而公事訴訟承之候、〇下略

〔德川禁令考後聚一法司諸則〕享保四亥年差上候書付

評定所古來之事

覺〇中略

寛文之頃より式日立合と分れ、式日毎月四日十二日廿二日御大老中定書作老中、未知何是、御壹人宛御出座有之、

自註御定并古懸看板ニ、式日二日十一日廿二日とあり、此書面相違也、

〔正寶事錄十一〕一御評定所十四日之御立合日、自今以後十三日ニ成候間、此旨相心得候様、町中可被相觸候、以上、

正月〔〇寛永二十年〕十九日　町年寄三人

〔正寶事錄十一〕覺

一四日之式日、二日ニ成候事、

一六日之立合、四日ニ成候事、

一九日之內寄合、六日ニ向後成候間、此旨町中可相觸候、以上、

丑〔〇寛永六年〕三月五日

右之通、御寄合日替リ候間、此旨町中可被相觸候、以上、

三月五日　町年寄三人

〔憲敎類典〔四ノ五〕評定〕正德三癸巳年正月七日

評定所、式日正月計ハ向後十二日ニ成候、外之月ハ、只今迄之通十一日ニ候間、可被得其意候、

正德三巳年正月七日

〔憲敎類典〔四ノ五〕評定〕享保六辛丑年〇中略

評定所立合

一每月四日　十三日　廿五日

御側衆壹人　御目付壹人

此外如例立合には、都而之公事訴訟之者出之、諸奉行立合、京都大坂、其外所々之奉行役人も、參府之時者出席す、〇又見二御警秘鑑、新朝議許律一、

〔憲敎類典〔四ノ五〕評定〕享保六辛丑年〇中略

評定所式日

一每月二日　正月ハ十二日　十一日　廿一日

右老中壹人　大目付壹人　御目付貳人

此外三奉行を初、相定役人、卯刻より罷出、御用之品、公事訴訟共に立合、替り有之歟、難決公事等有之時ハ不殘出席す、是を大寄合といふ、○又見二柳營秘鑑一

〔公議秘密集上〕公事訴訟罪科之者取捌大概

一評定所寄合之式日ハ　毎月二日　十一日　廿一日　諸奉行立會　四日　十三日　廿五日　廿三日　奉行之內寄合　六日　十八日　廿七日、但公儀御用是ある二於てハ延引、四日廿一日ハ借金公事日、

一式日卯刻半前、辰刻半前、同寄合ハ、巳之刻半前、式日立會ハ、御目付壹人ツヽ出席、

一十一日ハ、御老中出座、指合候時ハ、廿一日出座也、

但御老中出座之時ハ、大目付出席、

一評定所江、音信、并役人之外、參會停止、

但正月十二日初　十二月廿一日終

但七月十二日十三日ハ休日〔月○年闕〕

〔寶曆集成綿綸錄三十〕寛延四未年七月

覺

來ル廿一日、於評定所式日有之候、翌廿二日ゟ兩番所訴訟公事有之候間、此旨町中不殘可相觸候、

七月

南町奉行所

〔評定所式日立合止留二ノ百二十六〕享保元申年以來評定所式日立合相止候留

三十三回御忌○延享元子年徳川家宣十月十一日　中澤主稅助出座

但左近將監殿御用番明ニ候處、御法事懸り故御出座無之、

〔評定所格例〕主上仙洞法皇崩御之砌、公事吟味物之事、附御法事中申付候咎之事、

寶暦十二午年七月

一先帝〈櫻町〉崩御ニ付、評定所幷手限吟味物、死罪、遠島御仕置は、三十日程見合追放、敲等之御仕置は、此節ゟ無構申渡候樣可仕哉之旨、酒井左衞門尉殿江、月番三奉行相伺候處、於京都御法事相濟候以後、死罪以上之御仕置は申渡、其外伺之通相心得可申旨、同八月三日被仰聞候、

〔評定所格例〕評定所式日一ヶ月之內四日無之事

一安永十丑年四月十一日、御出座無之ニ付、同廿日、明廿一日御出座之義、松平右京大夫殿江相伺候處、廿四日相伺候樣被仰聞、然ル處廿二日被仰聞候者、式日四日有之候例有之哉之段御尋ニ付、例無之段申上候處、式日四日有之段如何ニ付、當月者御出座被成間敷、尤以來右之通相心得候樣、右京大夫殿、松平周防守殿、一座江被仰聞候、

〔評定所書留三〕子〈元治元朱書〉八月四日、和泉守殿江、柳澤勉二郎ヲ以、肥前守進達、

同十日、御同人、同人ヲ以承付候樣、一座江御渡、

評定所立合、幷私共宅內寄合、替日之儀ニ付、相伺候書付、

書面伺之通可相心得旨被仰聞、承知仕候、

子八月十日　　評定所一座

朝廷御忌日、重科は勿論輕罪之もの御仕置申付間敷、仁孝天皇御忌日六日、新朔平門院御忌日十三日は、例月相憚可申旨被仰出候ニ付、評定所立合、幷私共宅內寄合之儀、十三日立合は、以來十六日、六日內寄合は、七日と相改、依而は正月十三日式日御用始も、同月十六日と相改候樣可仕候哉、相伺申候、以上、

于八月

〔公事訴訟取捌〕一忌中之時、立合内寄合出座之儀は、父母之外忌中、縦ば廿日之忌中者、七日立候得ば出座之事、

〔御當家令條三十四〕公事裁許役人起請文前書

一奉對兩御所様、御後闇儀毛頭不可存事、

一雖爲親子兄弟、兩御所様御爲惡敷儀仕族、并背御法度輩於有之は、有樣に可申上事、

一今度大久保相模守、蒙御勘氣上は、以來相模守父子と不通可仕事、

一公事批判御定之儀、知音好之儀不及申、雖爲親子兄弟、無依怙贔負樣可申付事、

一於評定所批判相談之時、互に心底存寄之通、不寄善惡毛頭も不相殘可申出事、

一於御前被仰付候儀、就善惡無御意間は不可致他言、餘人に被仰付候儀、承と言共、當人就不申出は、他言仕間敷事、

一知音立を仕、申合一味仕者、入精承、言上可仕事、

一背上意候者、知音好身たりといふ共、入魂仕間敷事、

一此衆中、或は背法度、或は贔負偏頗いたし、就諸事惡事有之由御耳に立候者、御穿鑿之上、何樣にも可被仰付事、

右條々於相背者〇下文闕

慶長十九年寅二月十四日

酒井雅樂頭
酒井備後守
土井大炊頭
安藤對馬守

水野監物
井上主計頭
米津勘兵衛
島田平四郎
各血判

〔御當家令條三十四〕評定所誓詞罰文覺

貞永式目之罰文、今以被用之、依之不載于此、

○按ズルニ、右ノ罰文トテ、德川禁令考十八ニ、起請文罰文ナル者、諸記省キテ存セズ、今傳聞スル所ヲ左ニ錄ス、以下之ニ倣ヒテ看ルベシ、梵天帝釋、四大天王、日本國中大小神祇、殊伊豆箱根兩所權現、三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神、部類眷屬、頭罰冥罰、可罷蒙者也、起請仍如件トアリ、

〔德川禁令考十八誓詞〕文久二壬戌年閏八月十四日

誓詞日、其外改正ノ儀ニ付達、

三奉行江

評定所式日、老中出席、諸役人誓詞被仰付候處、向後は評定所ニおいて、誓詞之儀者被差止、每月四日、非番之老中一人、正四ツ時登城、於柳之間誓詞被仰付候間、大目付御目付出席可被致候、三奉行不及出座、

但御目見以下誓詞之儀も、柳之間椽頰ニおいて被仰付、誓詞見屆者、是迄之通可被相心得候、

一新部屋ニおいて誓詞被仰付、并老中若年寄宅ニおいて誓詞之儀者、唯今迄之通ニ有之候、

右之通相達候間、可被得其意候、

文久二壬戌年閏八月十七日

誓詞案文ノ儀ニ付達

若年寄支配之面々、評定所幷若年寄宅に於て、誓詞被仰付候向も、唯今迄誓詞前書案相渡候處、以來ハ不相渡候間、表御祐筆所江案文突合之上、其場所々々先格之通認、持參致候樣、若年寄支配之面々江可被達候事、

〔享保集成絲綸錄十八〕元祿八亥年九月

覺

一公事訴訟、念を入可申候、入組候公事訴訟ハ、たとへ一ツを一日に承切不申候共、とくと念を入、理非明らかに裁許有之樣ニ可仕候、尤御役義之事、油斷仕間敷候、〇中略

一奉行中振舞ニ參又ハ手前へ振舞之義、或婚姻、或無據子細有之候ハヽ各別、左樣ニ無之候而ハ、振舞之儀、向後堅無用ニ可仕候、ヶ樣ニ被仰出候も、御奉公專一ニ心掛相勤候樣ニと被思召候事、以上、

寺社奉行　御留守居衆　大目付　町奉行

御勘定奉行　御作事奉行　御普請奉行　御目付

荻原彥次郎　諸星傳左衛門

右之面々へ以書付申渡之

〔被仰出留八〕條々〇中略

一御料所大小の百姓訴訟之事有之時、或は御代官所の手代役人、或は其村の名主、庄屋等、其事の理非をも撰ばず、一切に差押へ置き、御代官に申達せず、剩巡檢の御使等差遣され候時も、御代官所によりて、諸百姓訴訟の事等、一切に申出ざる樣に制止せられ候所も有之由相聞え候、若

其謂有之訴訟等の事も相違し難く候におゐては、末々の難儀も止時なく、事により候ては、御仕置ゆき屆かざる所も可有之候、自今以後、急度其制法ニ立られ、御代官中、その支配所を廻られ候時も、常に心を付られ、大小百姓訴申事、滯る所なく相違し候樣に申付られ、若訴訟の事有之におゐては、委細に申す所を聞屆られ、其理非につきて分明に裁斷あるべき事、○中略

正德三年三月　日

御代官中

〔被仰出留十一〕條々○中略

一公事訴訟有之者共、奉行役人中并其家來之末々といふとも、內緣を求め、音物を相贈り候儀、制禁有之候、違犯之輩に至ては、たとひ理運之公事其謂ある訴訟といふとも、一切に許容あるべからず、若又裁許之後、年月を過ぎ相聞え候といふとも、急度其沙汰に及ばれ、罪科に行はるべき事、

右條々嚴重に相守るべし、若音物等の儀無之に就て、御用之事、又は公事訴訟等難澁遲滯の煩有之に至ては、其子細を以て、大目付御目付中之間、いづれへなり共訴出べし、よろしく其御沙汰有べき者也、

正德五年七月　日

〔評定所張紙留坤〕各勤向之儀、公事出入吟味物等取調候儀は不輕儀にて、銘々油斷有之間敷候得共、寬政元酉年、越中守殿○松平定信御渡之御書付、一座心得ニ可致御趣意ニて、各公事出入吟味もの被取調候上は、右御趣意厚可被心得居候得共、被仰出候御趣意齟齬不致候樣、精々可被心懸候、越中守殿御書付之內、公事出入御敎示之御箇條之內濟整せんが爲、可勝方を嚴敷叱り、出入下濟いたし候儀も可有之哉と之御論も有之、右等之儀も心得被居候儀、勿論ニ可有之候得共、吟味いた

し候ものは左而已嚴重ニは不及候とも、下方に取候而は誠に嚴敷叱り受可立と存候儀も立間敷哉と、一旦存込候ものも可有之、右等之下情厚被心得、御書付時々熟覧可被致候、都而公事出入、內濟いたし候樣との察當は有之間敷候得共、精々吟味詰候心得ニて、雙方屈伏いたし、內濟いたし候は、格別之事ニ候、且各方勤向之儀は不輕事ニ付、一己愼方ニ寄、御威光江も拘候儀、不容易事にて、寬政之度、万年三郞左衞門、其後中川又太郞、於宅不束至極之次第有之、夫々御沙汰之趣恐入候儀、其砌根岸肥前守、曲淵甲斐守、厚敎諭いたし候儀も有之處、猶又此度永田藤七郞、不輕御沙汰、重々恐入候儀ニて、向後右體之儀有之候而者、御場所柄之不取締ニて、御敎示を不被取用ニも相當、御場所柄理非を分候勤仕之ものニ有之間敷事ニ候條、心得違無之樣、猶厚被申合、若不愼之儀も見聞候はゝ、其人江申達、得心無之候はゝ、誓詞前書ニも有之通、組頭衆迄申達、品ニ寄自分共江も可被申聞候、

一遠國之もの、江戶詰長ク相成候ては、雜用不少儀、日數聊延候ても、夫丈ケ之難儀ニ相成候儀勿論ニて、無據手間取候出入等は、無是非事ニ候得共、可成丈ケ吟味物公事出入手間取不申、下方難儀不致樣可被心得候、

一評定所諸書物多之事ニ候得共、御仕置例、右書物繰出等之儀、入念候樣可被致候、

右之通被相心得、違失無之樣可被申合候、猶秋月備之丞より可申談候、

九月〇文化九年

〔御書付留〕寬政五丑年十月九日

采女正殿　右京亮　筑後守　肥前守　御直御渡し

評定所之儀ハ　場所がら、御威光ニも懸り候事ニ候得者、各謹愼可被相勤儀勿論ニ候得共、近來何となく相ゆるみ、裁許席ニ而、外咄抔も有之哉ニ相聞候、若右體之儀も候はゝ、相互ニ厚く

老中出座

被心附候樣可被致候、此段心得のため、無急度申置候事、

〔評定所新張紙留 朱書坤〕天保十三寅年七月十八日、播磨守御役所内寄合おゐて、同人立合、能登守申渡、

○中略

一下代共之内、公事出入御吟味物内濟、又は落着之節、祝儀と唱、公事人共より、金錢貰受候ものも有之趣、入御聽候由を以、向後心得違之もの無之樣、銘々下代共江可申付置、自然右樣之不屆および候歟、又は公事出入腰押ヶ間敷取計いたし候もの有之候ニおゐては、御吟味之上、夫々嚴重之可被及御沙汰旨被仰渡候事、○中略

右被仰渡之趣、一同承知奉畏候、仍御請證文差上申處如件、

天保十三寅年七月十八日　　三組總代共 名前

御奉行所

〔科條類典上一〕評定所始之事

一評定寄合者、寬永八年之頃より始る、寬永八年二月二日、町奉行島田彈正忠○利政宅江、老中寄合公事沙汰有り、其以後ハ酒井雅樂頭○忠世、酒井讃岐守○忠勝幷老中宅江寄合有之、○下略

〔享保集成絲綸錄十八〕享保五子年八月

覺

三奉行江

一評定所式日寄合之節、老中出座之儀、向後一月ニ一度ツヽ出座之筈ニ候、刻限も五時罷出、奉行中、公事之取さばき見分之爲ニ候條、當日之公事不相濟内ニも登城可申候、時により御城ゟ相越儀も可有之候、左樣之節ハ、前日可申達候事、

一公事訴訟何によらず、立合公事を可差出候、式日公事とて撰出し候儀、堅無用ニ候事、

一式日ハ、十一日ニ可有出座候、若差合之節ハ、廿一日可有出座候事、以上、

八月

大目付ヘ右同文言〇又見ニ科條類典一

〇按ズルニ、市尹要覽ニ、右ノ文ヲ引キテ、右者若年寄水野和泉守殿、三奉行江被仰渡候、二月廿一日ニも式日彌有之候者、明ケ六ツ半時相揃、立合公事之內、何にても致裁許候樣可仕候、尤御老中御出座之儀は、十一日計有之候之よし被仰聞候事、テ八月トアリ、卽チ享保五年ナリ、

〔科條類典上一〕享保六年丑七月七日

井上河內守〇正岑、老中、三奉行江申渡

式日老中出座有之候而も、公事無之、濟口等計ニ而候得者、前度同意に候、立合之公事之通可仕旨、先達而も申達候處、公事無之候間、公事有之日ニ出座可有之候、十一日ニ相極り候事も無之候、二日成共、廿一日ニ成共、三日之內、公事有之日ニ出座可有之候、公事無之候ハヾ、十一日より前ニ申達候樣ニ可仕候、尤立合ニ罷出候、入組候公事、式日ニも一ツ二ツ程出し候樣ニ可仕候、〇又見ニ新類裁許律

〔寶曆集成綠綸錄三十〕寶曆九卯年二月

三奉行ヘ

評定所式日、老中出席之節、登城刻限相成候得バ、評定所より直ニ登城可致候、右跡ニ而も、三奉行公事訴訟可被致吟味候、〇中略

右之通可被得其意候

二月

〔天明集成綠綸錄二十三〕明和六丑年八月

主頭殿〇田沼意次

三奉行江

向後評定所式日、老中打込出座有之候、只今迄式日立會之節、折々出席有之候得共、此儀者相止候事、

右之通可被得其意候

八月

明和六丑年八月　主殿頭

大目付江

向後評定所式日、老中打込出座有之候、右出座之節、誓詞宛所も主殿頭宛所ニ可相認候事、

右之通可被得其意候、

八月

〔法曹後鑑〕式日御老中方御出座之節、當日之公事被差出旨被仰渡候ニ付取計方、

天明七未年十二月十日

一唯今迄式日御出座之節、訴訟計差出趣ニ候得共、左様ニハ有之間敷候、公事其外何ニ而も、當日出候分差出可被申候、假令右不相濟內、御登城刻限ニ至リ候ハヽ、半ニ而も御登城被成候間、向後右之趣可相心得旨、越中守殿御直、右京亮信濃守長門守江被仰聞候、

〔評定所格例〕御出座之節公事訴訟差出方之事

同〇天明八申年四月十二日

一御出座之節、訴訟帳外、公事、右之順ニ差出候處、帳外不濟切內、御登城時節ニ相成候得者、當日重重公事、御聞殘ニ相成候間、以來者、右之處差略いたし可申、尤公事差日者、御出座之日ニ當候とも、差略致間敷旨、牧野備後守殿、山村信濃守江被仰聞候ニ付、一座評議之上、左之通極、

御出座之節、以來者、訴訟、公事、帳外、右之順ニ差出、訴訟計ニ而、公事無之節者、訴訟之跡江帳外

差出可ㇾ申、尤帳外書付者是迄之通、着帳町奉行差上候節、御勘定奉行差上可ㇾ申、公事差日者、御出座日ニ而も差略不ㇾ致積、

〔評定所書留 三〕酉二月廿五日式日立合御寄合ニ而、水野出羽守殿中○老御出座御座候處、前日諸向ゟ達無ㇾ之ニ付、御帳仕立不ㇾ申候得共、當朝ニ到リ、爲ㇾ念向方同役評議之上、御帳無ㇾ之趣ヲ留役三輪滿藏江問合候處、石川主水正殿掛濟口壹口有ㇾ之候間、御出座江差出候樣、同人申聞候ニ付、俄ニ御帳仕立、外御帳不ㇾ殘相直差出候、尤御帳書中野三四郎呼出候事、

文政八酉年二月廿五日　由比八十大夫組合ニ付　中村又右衞門

稻澤縫右衞門

向方　米倉作次郎

御側用人側衆出役

〔常憲院殿御實紀 三十〕元祿七年十一月廿五日、評定所式日に、御側用人柳澤出羽守保明始て出座せしめらる、

〔文昭院殿御實紀 三〕寶永六年七月四日、けふより御側森川出羽守俊胤、評定所に出座すべしと命せられ、はじめてまかる、これも古は御側一人づゝ出座せしに、先代よりとゞめられしを復古せられしなり、

目付出座

〔科條類典 上一〕評定所始之事

一元祿二巳年八月廿五日、立合御目付出座始、　青木新五兵衞

柴田七左衞門

〔公裁秘錄〕式日立合江御目付出座之事

一評定式日に御目付壹人、立合日兩人、代々唯今迄罷出候得共、向後壹人宛、月切に人を相定罷出候樣、奉行役人之公事訴訟裁許、其外諸事取捌之次第、委細見屆置、御尋之節、具に申上候樣可ㇾ相

心得候、若公事訴訟之譯、見聞候迄に而、奉行役人之取扱、委細難相知儀は、目安訴狀等奉行中江申達シ、得と一覧、出入之譯、奉行中江茂其子細具に承屆可申候、

一非番之御目付之中、隙に而在之者、立合日は壹人宛相加り可罷出候、病人差合等在之、難出節は不及其儀候、

一御徒目付、向後式日立合共に、壹人宛罷出候樣可致候、尤御小人目付茂右に准じ相減可申候、

亥〇享保五年十二月

〔德川禁令考後聚一法司諸例〕寛政八辰年十一月十六日

一座評議之節、御目付退座之儀ニ付上申書、

曲淵甲斐守

評定所式日立合之節、御目付闕席ニ而、評議相談演說等仕候儀者、一座井御定懸別席之談者、勿論之儀、一役限之談も、差掛候儀者、右兩樣ニ付、別席或は居殘り申談候儀、度々有之、尤一座相揃、別席談之儀は、邂逅ニ者御座候得共、前々より之仕來ニ而、明和八卯年四月者、一ヶ月之內、兩度有之、其後も兩三度談し有之候樣、覺罷在候得共、公事裁斷、井評議もの等之儀ニ無御座候間、評定所留帳に者相記不申、其節々別席之申談いたし候段、御目付江相達、席を替候歟、又者御目付退座いたし候儀も御座候、然ル所、伊豆守殿被仰渡候、評議もの之儀ニ付、去ル四日、相談之儀有之、闕席之儀、松平田宮江申談、承知之旨ニ而、同人者誓詞之間江相披、右申談相濟、猶又同人江申達、何も退散仕、同十一日、前書一件ニ付、又候談有之候間、其段田宮江申達候處、同人申聞候者、去ル四日闕席之儀、同役江も申聞候處、評定所相談之節、御目付闕席之儀、是迄何も覺不申候ニ付、伊豆守殿井御手前樣江も申上候旨ニ而、闕席斷申聞候、邂逅之儀故、當時之御目付闕席覺候もの無之候はゝ、一座江相尋候は格別、仕來を相止候段、仕間敷儀ニ候得共、御役柄ニ而申聞候儀を強而申談候も如何敷、特ニ至而御急之相談ものニも無御座候間、十一日は、右相談延引仕候儀ニ御座候、併右之通、度々

例モ有之候儀を、當時之御目付ニ而覺不申候迚、相止候段、如何ニ有之、縱令此上新規之儀ニ候とも、御作法ニ相背ヶ不申儀ニ候はヾ、御目付一通り申談、取計候心得ニ罷在候儀故、御度之儀も御目付江申談候上、品ニ寄入御聽可申と、一座同樣申合ひ罷在候內、御尋ニ付、此段申上候儀ニ御座候、以上、

辰十一月

追書

天保八酉年八月二日

大坂市中及亂妨候大鹽平八郎一件ニ付、式日跡評議之節、御目付退座爲致候ニ付、右爲見合寺社奉行衆ヨリ借請寫之、

但御勘定奉行申上ニ者候得共、評定所ニ留無之、

〔憲敎類典〕四ノ五評定 享保六辛丑年

評定所式日立合相定一座之役人

一寺社奉行　町奉行　御勘定奉行　御勘定吟味役

但寺社奉行、町奉行、御勘定奉行、是を三奉行と唱ふ、

同所江相詰諸役人末々之者

一御祐筆　儒者目安讀　評定所留役　御勘定衆

御徒目付　御臺所方　御料理方　御坊主

御小人目付　評定所留守居幷附同心、月番方町與力貳人、非番方より三人、月番方同心六人、非番方より三人、

石出帶刀幷附同心　町大年寄

右大概如此○又見新朝裁許律

〔科條類典上一〕享保七寅年

㊄評定所立合剋限伺之事

評定所一座

一評定所立合、只今迄ハ卯半剋揃何も罷出候ニ付、御賄方役人、前夜より相詰、蠟燭燈し、所々に相立、又ハ書物吟味仕候ニ付、役人居殘リ候故、御湯漬等、丼事により、夕御料理も相廻し、其上公事人も夜中ゟ相詰難儀仕候間、自今者五ッ半時揃寄合、夕御料理計相廻可然奉存候、左候得者、公事人等ためにも宜候間、旁右之趣奉伺候、以上、

寅六月三日○又見ニ新朝裁許律

〔評定所格例〕京都所司代參府之節評定所式日立合江出席之事

一寛政七卯年二月十一日、評定所式日立合江、所司代出席有之、評議之趣も被承候而、差支無之哉之段、松平伊豆守殿、○信明一座江御尋ニ付、差支之儀無之段、同十二日申上、尤御內意伺相濟候段、所司代堀田相模守より達有之、尤出席之節、注進狀端書ニ認入可申哉と相伺候處、伺之通可仕旨被仰聞、內座者寺社奉行之上ニ着座、評席ハ御老中出席陰間之通障子を建、右障子横骨際、少し切明ケ、右內ニ着座、

但奉行御目付評席江出候跡より、評定所番先立にて、本文之座江被相越、

〔評定所書留一〕明和五子年正月廿一日、式日始之儀ニ付、前日一座江存寄申談候覺、

子正月廿日

一當十三日御成に付、式日立合相延候間、明廿一日、御出座之儀、今日例之通相伺候儀に付、自分存寄候趣有之、左之通申談候、式日初には、前之例にて、當朝公事訴訟無之段申上候儀に有之候、乍然十三日は、立合日に有之候間、式日跡にて立合仕候に付、何も平服に相成、立合の注進狀も差

三奉行立合裁判

出、公事訴訟承り候事故、別段之事に候、廿一日は式日にて、金日在之、中興金公事も、御老中御出座之節は御聞被成候處、近來は又候古來之通、金公事は御聞不被成、御老中御退散跡にて金公事承候間、明日金公事有之候ても、御出座ねは出し不申候、然ども古例之通、當朝公事訴訟無之段申上候處、公事訴訟有之候ては、右申上候と符合不仕、如何に候何れにも十三日相延、明日式日始に在之候間、當朝公事訴訟無之段、古例之通申上候儀に在之上は、金公事は相延可然哉と申談候處、寺社奉行衆、幷越前守、御勘定奉行、尤之由被申候間、其通相極、○下略

〔享保集成絲綸錄 一〕正德二辰年六月

定

一寄合之式日、毎月二日、十一日、廿一日、諸奉行之立合、四日、十三日、廿五日、但公儀之御用於有之ハ、可為延引事、

一寄合所江、評定衆卯刻半時致出座、御用隙明次第可有退散事、

一評定所江、役人之外、一切不可參、勿論音信停止之事、

一公事人にかいぞへは、老人若輩幷病者之外停止之事、

一公事訴訟に罷出もの、たとひ御直參之輩たりといふ共、刀脇差を帶すべからざる事、

一公事人雖為親類縁者、知音之好身、寄合場において、評定衆不可取持事、

一遠國より來る公事人ハ、在江戶久しき次第可承之、當地之公事人ハ、其日之帳面之先次第可承之、但不承して不叶儀歟、また急用ハ各別之事、

一公事人江不寄申かくる義、其筋之役人可勤之、勿論總座中ゟも、遠慮なく存寄之通可申事、

一公事裁許以後、其筋之役人裁斷之始末、可被致留書事、

一公事其日に落着無之儀ハ、重而被致寄合、其上ニ而不相濟義ハ、相談之上可致言上事、

一役人宅ニ而承之公事訴訟、評定所江可出儀於有之ハ、證文證跡相揃、寄合所江出之、無滯樣可被致之事、

一過怠として牢舍之者、評定衆相談之上、日數を定、其日限於相濟ハ、牢より可出之事、

附預りもの、長々不差置之、急度遂穿鑿可濟事、

一裏判并召狀を受、遲參之ものハ、其所之遠近を考、日數を積り、輕重により、或牢舍、或可爲過料事、

右條々可被相守之者也

正德二年辰六月日

豐後守○阿部正武、老中、
河內守○酒井忠擧、老中、
加賀守○大久保忠增、老中、
但馬守○秋元喬知、老中、
相模守○土屋政直、老中、

〔寶曆集成綠綸錄三十〕寶曆九卯年二月

三奉行へ

一座懸リ公事訴訟并吟味事、最初評定所ニ而相尋、其後落着申付候迄ハ面々掛リ切リニ相糺候、自今ハ最初評定所ニ而相尋、重而之寄合迄ニ、懸リ之者手ニ而糺明不相濟候はゝ、二度目之寄合ニ而、右糺之趣、一座へ申談及評議、猶亦相糺、夫ニ而も難決候はゝ、三度目之寄合ニ、一件差出、相糺候樣可被致候、

但公事訴訟吟味事、手間取、夜ニ入候はゝ、先其日ハ相殘、追而可被致吟味候、若又面々掛リ之公事訴訟等、數多溜リ有之節ハ、申談無益ニ呼出置候義無之樣、可成丈ヶ可被心掛候、手間取候義ハ、時宜ニ寄候事ニ候得バ、若其日相殘候而も尤不苦候、

奉行宅吟味

一一座掛箱訴狀、并吟味事評議等之義、右受取候三奉行不相揃候而ハ、吟味評議共無之旨相聞候、右ハ一座一同江相渡候品ニ候得バ、自今ハ受取候三奉行出席無之候而も、吟味評議共可被致候、尤寄合之度々、差出可被相糺候、

一訴狀箱、向後奉行退散遲候共、奉行退散ニかゝわらず、只今迄之通、九時ニ候はゞ、箱可被差出候、

一每月上旬、日限を極、三奉行面々、一座懸リ公事訴訟等之內、自分手附之分、當時懸リ有之數、頭書ニ致し、銘々より可被差出、尤認方之義ハ可被相伺候、

但三奉行一役切リ之吟味、并手切之吟味之義も、不相濟分ハ、別紙ニ書付可被差出候、

右之通可被得其意候

二月〇又見三憲敎類典一

〔御定書百箇條〕公事吟味銘々宅にて仕候事

享保六年極

一公事吟味之儀、式日立會江差出、即日不相濟儀ハ、懸リ奉行宅にて、日數不懸樣吟味を詰、一座評議之上、裁許可申付事、

但御代官手代、懸申間敷候事、

〔科條類典下一〕元文五申年八月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

享保六丑年伺書

㊀公事吟味、銘々宅ニ而仕候儀伺之事、

一公事吟味物之儀、式日立合江差出、評定所ニ而吟味仕候ニ付、公事多キ時、又ハ銘々かゝりの公事差出、順々致吟味候故、公事數差つどひ申候間、日數かゝり、百姓長逗留いたし、難儀罷成候、

一右之通ニ候付、入組候公事ハ、評定所ニ而承候間々にも、吟味いたし可然分は、面々宅にて吟味、并證文書物等をも相しらべ、其上を評定所一座におゐて、猶又遂吟味候得者、吟味も一入詰り、

日數も懸り申間敷哉と奉存候、且又相伺可申筋之分ハ、最初被仰聞候趣を以、伺之上裁許可申付候、其外只今迄評定一座にて事濟し候分ハ、直ニ裁許申付候樣ニ可仕候、勿論銘々宅ニ而も、御代官手代を懸ケ申儀ニ而ハ無御座候、

右之通、伺之上相極候事、

享保六丑十月

懸紙

（朱書）先達而相伺候懸紙

（綠書）是ハ奉行共より伺候書付ニ而候條、其儘ニ而差置可然候、張紙取退可申事、

公事吟味、銘々宅ニ而仕候事、

○

一（極）公事吟味之儀、式日立合江差出、即日不相濟儀ハ、懸り之奉行宅ニ而、日數不懸樣ニ吟味を詰、一座評議之上、裁許可申付候、

但御代官手代、懸申間敷候、

元文五申年八月、牧野越中守〇成貞　石河土佐守〇政朝　水野對馬守〇忠伸　伺之內、

公事吟味物、銘々宅ニ而仕候事、

一右者享保六年丑十月伺書を最初ハ書記、其後伺書之大意計を綴り候而懸紙を以相伺候處、元來伺書之儀ニ御座候間、初發認上候通、張紙取退可申由、綠色之御下知書奉承知候、尤張紙取退候得者、猶以委細ニ書記可然儀ニ御座候得共、文言之內、相伺可申筋之分ハ、最初被仰聞候趣を以伺之上裁許可申付段、此箇條之內有之候而ハ、何故を以認候譯不相分候付、掛紙之分可然哉と奉存候、

（朱書）掛紙之文言用可申事

右同月廿八日、御書入之趣、相心得可申旨御下知、○又見二新朝銓許律一

〔享保集成絲綸錄十八〕享保十巳年十月

一近來ハ御勘定吟味役を被相招、調等爲致被申由、地方江付候儀ハ、左樣ニも可有之候得共、公事訴訟裁許之義、談合可有之節ニ無之候間、同役中相談難決事ハ、於評定所一座之奉行中相談可有之事ニ候、地方江付候儀も、評定所ニ而談判有之可事濟事ニ候、宅江吟味役等被相招ニ及申間敷儀候事、○下略

〔天保集成絲綸錄七十四〕天明八申年三月

三奉行江

唯今迄、式日、立合、內寄合之外ハ、何も御城江被罷出候得共、於宅吟味物詮議物、又ハ取調候御用向多キ節、御城ニ御用無之候はゞ、月番之外ハ、見計ひ御城江罷出ニ不及候、尤其段ハ月番同役江相屆可被申候、右ニ付而ハ、吟味物等之儀、手間取不申候樣可被致候、

三月

奉行內寄合裁判

〔憲教類典四ノ五評定〕享保六辛丑年

內寄合

一每月六日　十八日　廿七日

三奉行、銘々月番之宅にて、同役計寄合有之、其支配下之公事訴訟を裁判す、目安訴狀之裏書ハ、支配々々之月番、初判相濟、其後ハ奉行之判形を取、右之內に御勘定奉行之公事方之兩人計合判形、依之當時ハ八判也、

右八判之裏書を相手前江渡之、其日限に雙方內寄合に出る也、遠國方之公事ハ、大方寺社奉行之引受也、其外之支配下替り之時ハ、評定所江罷出る、町奉行內寄合ハ、與力同心囚獄、町年寄相詰る、

御勘定奉行內寄合には、御代官、御勘定、評定所留役等陪席、寺社奉行內寄合ハ、銘々家來之寺社役人、壹人宛召連る也、此外之役人も內寄合有之族ハ、大方右之日限を用る也、〇又見二柳營秘鑑一

〔新朝裁許律 三〕內寄合

一每月六日　十八日　廿七日　三奉行、銘々月番之宅ニて、同役計寄合在之、其支配下之公事訴訟を裁判す、〇中略只今迄取扱候金銀懸、日限之內金銀相濟、評定所へ不罷出候ハヾ、負方貸之方々、其品奉行所へ早速相屆候樣ニ可申聞置候、

右屆無之分ハ、尤極之通評定所へ可罷出儀ニ候間、其旨金銀出入之者へ可申聞置候、新規ニ出候儀ハ、少々品も在之候間、先取上候儀、無用たるべし、

〔憲教類典 四ノ五 評定〕寶永三丙戌年四月朔日

立合、內寄合、只今迄外曲輪江御成之節者相延候得共、向後御成之道筋障り不申候ハヾ、不及延引候、以上、

寶永三戌年四月朔日

〔近世政秘錄 天明七年〕未〇天明八月七日申渡

御勘定　永田藤助

稻守安之進

瀧又右衞門

橋弥良助

荻野傳右衞門

花田仁兵衞

支配勘定　猪俣要右衞門

柳田次郎左衞門

中村丈右衛門
栗原禮助
岩尾次郎右衛門
齋藤彌兵衛

常々勤方不宜趣御沙汰ニ付、小普請入被仰付旨、松平越中守殿〔○定信、老中、〕被仰渡候段、御勘定奉行桑原伊豫守〔○盛員〕於御宅御勘定奉行幷吟味役不殘列座ニ而、伊豫守申渡之、

○按ズルニ、是ハ同役立合裁判ニシテ、卽チ内寄合ノ事ナリ、

臨時三奉行立合裁例

〔評定所書留 三〕天保八酉年七月十六日、於評定所臨時御寄合有之、御一座懸、此方御持、大坂町奉行跡部山城守組與力大鹽格之助父隱居大鹽平八郎、大坂表及亂妨候一件、御詮議出役之覺、

揚屋ゟ下椽〔大坂町奉行跡部山城守組同心〕吉見九郎右衛門

一通尋之上、改揚屋入申付、直ニ出牢之上、細川越中守江預、〔○中略〕

一臨時御寄合は、前々ゟ物書同心共も罷出候仕來之處、今日は罷出不申候ニ付、右當番之者一人、早々評定所江差出候樣、御番所江申遣、物書同心森本與三郎罷出候事、

御列座

寺社奉行衆　〔朱書〕井上河内守殿御持

町奉行衆

御勘定奉行衆　〔朱書〕内藤隼人正殿御持

御目付衆

御勘定吟味役

〔朱書〕三奉行衆、其外留役、御徒目付、名前略之、御用覺帳ニ記之、

懸リ　留役貳人

懸リ　御徒目付貳人

出役　御徒目付二人

御小人目付

御使之者

出役與力　佐野十郎左衛門

原小太郎

中田仲五郎

向方　嶋喜一郎

服部新兵衛

都築金之助

此方物書同心　壹人

出役同心雙方　六人

此節出役向方　秋山久藏

東條八太郎

佐野十郎左衛門

朱書　臨時御寄合は出役人數立合御寄合之通ニ有之候處、今日は御頭御差圖ニ而、本文之通罷出候事、

天保十一子年九月十三日

朱書　右者御預御引込ニ而、御欠席ニ有之候事、

評定所內座會合

〔公裁秘錄〕忌在之之者、立合內座寄合へ出座之事、正德六申年

一忌中之時、立合內座寄合出座之儀、父母之外、忌中は日柄立候はゞ可致出座、縦廿日之忌中は、七日立候はゞ出座致候樣可相心得伺之上相極候事、

正德六申二月

〔公裁秘錄〕評定所內座相談之時申合享保五子年

一評定所內座相談之儀、向後內座江出候御用共、ケ條書相調、段々遂相談、一ケ條宛相極可申候、右內證不濟內、たとへ御用に而茂、外之儀堅く申出間鋪候、但し急御用之節は、評定所相談之事、其內は相止メ、先急御用相達シ、濟次第內座之儀は可申談候事、

一掛り々々御用、一座々々存寄申談候得共、猶以掛り之方江、無遠慮一座心底を不殘可申談候事、

以上

子正月

〔有德院殿御實紀二十一〕享保十年十月三十日、この月、寺社奉行へ令せらるゝは、官事により、前に注記して捧しごとく、今より後は、評定並に內座の席たり共、有來りの座席を用ひ、あらたに評定所のごとく、裁斷所つくるべからず、もし火災にかゝり、屋舍構造す共、常用座席のみつくり、別席總席等、特さらに設べからず、有來り座席の中を屛風もて、へだて用ゆべし、官事にあづかる家士も、こたびえるし出せしより多くは命ずべからず、大身たりといふ共上に同じ、且あらたに家人めしかゝゆべからず、前々官事なき時は、詰番の外は御所へまうのぼらざりしに、近き頃は、官事の有無にかゝはらず、日ごとにまうのぼり來る、今よりのち詰番壹人の外はのぼるべからず、一座の輩へ、よしなき贈遺、あるは同僚と際たち、ことさらにせる音信もあるよし聞ゆ、さる事かたくすべからず、近き頃は勘定吟味役をまねき商議するよし聞ゆ、地方にかはりし事はさもあるべし、出訴裁斷の事によりては、はかりあふべきごとにあらず、同僚會議して決しがたきは、評定所にて事を決し、居宅へ招くべからず、官事により雜費多からざるやうはかりあひ、今よりのち、職事命せらるゝ輩へも、この旨傳告すべしとなり、

一座掛

〔評定所書留三〕一今日於評定所立合御寄合跡引續御一座掛、此方御持御詮議口合相成候、出者名前、

朱書
揚座敷より口上書爲讀聞差通ス　甲府勤番醫師桃貞養方叔父　木村庠三郎

是より白洲もの上出もの壹人、砂利同十一人、名前略之、

寺社奉行　土屋釆女正殿
脇坂淡路守殿
本多中務大輔殿
松平紀伊守殿
町奉行　鍋島内匠頭殿
御勘定奉行　久須美佐渡守殿
牧野駿河守殿
御目付　戸川中務少輔殿

右御詮議シタ掛　御勘定評定所留役　三橋貫之進
内匠頭殿出役與力　水野正大夫
谷村官太郎
同出役同心　松原晋三郎
四人
御徒目付　大濱佐次右衛門
御小人目付　本嶋鍬太郎
三人

御使之ゟの貳　人
兩　名
出役同心四人
中村又右衛門
中村源四郎

右之通御座候、以上、
月日

前書之通取計候間、以來爲見合記置候事、
中〇嘉永元年十月廿五日

〔評定所格例〕萬石以上御詮議之事、附一座掛ニ而、御目見以上之悴吟味之事、〇中略

一天明八申年五月六日一座懸
伏見町人、九助外一人差出候訴狀吟味一件落着之節、元伏見奉行小堀和泉、於評定所、大久保加賀守江永之御預被仰付候節之義、三奉行月番、明日例刻御城江罷出居候樣、五月五日鳥居丹波守殿被仰聞候ニ付、六日内寄合相止、一座不殘登城之處、一件落着御下知書、丹波守殿御渡、小堀和泉永々御預被仰付候、監物御書付、大目付松浦和泉守江御渡、夕七時揃、一座其外評定所江出席、繪圖左之通り、

和泉申渡畢而、悴小堀主水出ル、出方狭とも和泉同斷、尤兩人共、大目付申渡、右畢而同道人遠藤下野守、松平下野守、△此印之所江出る、和泉主水江申渡之趣申聞、和泉家來共引纏召連歸候樣、是又大目付申達、畢而大炊頭、信濃守、長門守計殘、外一同内座江引、又同道人兩人、以前之通出、和泉屋敷取締、其外取計之義信濃守より申達、心得之ため書取いたし渡、

○裁ニ記有之

屏風

小堀主水

小堀和泉

松平下野守

遠藤下野守

同道人

御徒目付四人

町與力兩人

奉行衆出座之上

和泉主水ニ申渡濟奉行内座へ引

畢而兩人御受書此所ニ而留役讀聞書付取之

町與力

御徒目付

○○

留役 兩人

留役組頭

稲葉丹後守 寺社奉行

松平右京亮

牧野備前守

土井大炊頭 ツイタテ

松平紀伊守 大目付 仕切

松浦肥前守

山村信濃守 町奉行 誓詞之間

柳生主膳正

桑原伊與守 御勘定奉行

柘植長門守

桑原六兵衛 御目付

甲斐庄武助 留役組頭

羽田熊藏 留役

服部十三郎

御徒目付

町與力

▽▽

御徒目付

小堀和泉

町與力

ツイタテ

評定所番[illegible]人

屏風

床

大目付町奉行勘定奉行目付立合裁判

〔近世政秘錄 地〕同日〇天明八年五月六日申渡覺〇中略

小堀和泉無罪之家來中

其方家來共、無罪之者、路頭に迷ひ候儀、可ㇾ爲ㇾ難儀ㇾ に付、無事之間、身分片付候迄、飢渇爲ㇾ請候扶助之儀、御手當之事に候、右之段可ㇾ申聞ㇾ候、

申五月六日

右於ㇾ評定所ㇾ、寺社奉行土井大炊頭、大目付松浦和泉守、町奉行山村信濃守、御勘定奉行柘植長門守、御目付桑原善兵衛立合、和泉守申ㇾ渡之ㇾ、

〔近世政秘錄 地〕同日〇天明八年五月六日申渡之覺〇中略

伏見奉行久留島信濃守家來　穗谷丈右衛門

秋山五郎四郎

右小野三十郎、小林小十郎押込之儀、吟味中預置候振合を以、爲ㇾ愼可ㇾ置候、

右於ㇾ評定所ㇾ、土井大炊頭、松浦和泉守、山村信濃守、柘植長門守、桑原善兵衛立合、信濃守申ㇾ渡之ㇾ、

〔近世政秘錄 人〕同〇寛政元年六月二日、御仕置夜に入、

申渡之覺

御勘定　福嶋又四郎　酉四十二歲〇中略

死罪

右は松平越中守殿御差圖、依而被ㇾ仰渡ㇾ候段、右於ㇾ評定所ㇾ、大目付桑原伊豫守、町奉行山村信濃守、御勘定奉行久世丹後守、根岸肥前守、久保田佐渡守、曲淵甲斐守、御目付平賀式部少輔立合、伊豫守申ㇾ渡之、

酉六月二日

〔近世政秘錄 地〕同月〇天明八年七月十一日御仕置

大目付町奉行目付立合裁判

申渡之覺〇中略

稻生猪三郎妻　きち　申二十八歳

其方儀、夫有之身分ニ而、猪三郎供侍久藏と密會致、〇中略不屆至極に候、依之死罪申付者也、

申七月十一日

右於評定所、大目付牧野大隅守、町奉行山村信濃守、御勘定奉行柘植長門守、御目付神保喜内立會、大隅守申渡之、

〔近世政秘錄天〕同年〇天明七年十二月六日

申渡之覺〇中略

小普請組天野山城守支配　松本伊豆守　未四十九歳

其方儀、御勘定奉行勤役中、御買上米御用申渡、御買上米代之儀は、越後國御代官所御預に而可相渡旨申渡、御普請役石田儀右衛門、同役赤井豐前守役所、御預所ゟ可相渡旨申渡、儀右衛門印鑑相渡、右體之御用、輕キ者壹人へ申付候儀、先格をも不相糺、其上北國米飛脚問屋孫兵衛外二人引請、御藏米之儀申出候に付、其方幷豐前守兩人に而、御買上米之儀相伺候、右引請身元幷引當之株式家屋敷等、再應糺爲致、慥成引當有之旨、相違之儀申立候段、旁々不埒之至に候、依之知行百石被召上、逼塞被仰付之、

未十二月六日

右於評定所、大目付牧野大隅守、町奉行山村信濃守、御目付井上助之進立合、大隅守信濃守申渡之、

〔近世政秘錄地〕同年〇天明八年十月廿五日〇中略

表御臺所頭支配表御臺所人加藤彌太郎母　そせ　申四十四歳

御駕籠之者　志村十次郎　申廿二歳

一通り尋之上相返ス、

右於評定所、大目付松浦和泉守、町奉行初鹿野河内守、御目付菅沼新三郎立合、和泉守河内守申渡之、

申十月廿五日

〔近世政秘鑑 人〕同月〇天明八年十二月廿九日

一通り尋之上揚座敷へ遣ス　高四百五拾石 小普請組戸田安藝守支配 柴田勘左衛門 申四十九歳

右同断　高三百俵餘 大御番白須甲斐守組 井上半十郎 申四十九歳

右同断　高三百石 小普請組松平信濃守支配 坪内清之助 申廿九歳

右同断　同妻木佐渡守支配島村鐵五郎方居候同人弟 島村長四郎 申三十歳

右同断　同松平但馬守支配鴨田宮次郎方ニ居候同人弟 鴨田金藏 申三十一歳

一通り尋之上揚屋へ遣ス　高百五拾石 同阿部越前守組 重田金八郎 申三十歳

一通り尋之上同道人ニ預遣ス　小石川養生所肝煎 小川又右衛門 申五十二歳

一通り尋之上預ケ遣ス　右柴田勘左衛門妻 きん 申卅三歳

右同断　同人下女 とよ 申十三歳

右同断　同人中間 次郎兵衛 申二十五歳

右於評定所、大目付桑原伊豫守、町奉行山村信濃守、御目付曲淵勝次郎立合、伊豫守信濃守申渡之、

申十二月廿九日

〔御定書百箇條〕盗賊火附致詮議方之事

享保三年極
一盗賊火附詮議之儀、盗賊改、火付改江不相渡、其手限に可致詮議事、

〔憲法編年錄 二十九〕享保六年閏七月

松平讃岐守
松平隱岐守 方へ相達候書付

覺　○中略

一公事訴訟裁許申付候儀、格別之儀ハ、御勘定所へ可被相達候、大概之義ハ、手前ニて可被申付候、但右何程迄ハ手前ニ而可申付哉との事、幷御領所ニかけ置候家來員數之義ハ、追而可被相達候事、

閏七月

〔享保集成絲綸錄四十四〕寛保三亥年十月

三奉行江

向後老中若年寄支配之分、金銀出入之儀願出候得共、其願出候向々ニ應し、三奉行所江直願候樣ニ申聞候筈候間、可被得其意候、

十月

〔天保集成絲綸錄百〕寛政五丑年四月

一吟味物之時宜ニより、輕き責問之事ハ、銘々之白洲ニ而有之候ても可然候、尤吟味之度毎と申に相成候而は不可然候、罪之輕重、事之淺深ニよるべき事ニ候、

○按ズルニ、銘々ノ白洲ニ於テ裁斷スルハ、卽チ手限裁判ナリ、

〔三餘雜錄四〕評定公事相手方、江戸へ出合居候ニ付、初判不差出、手切ニ而致吟味、追而評定所江可差出之旨演說之上、手切ニ而相糺候一件裁許は格別、濟口吟味下ゲ等ニ相成候得ば、其段演說之上、手切ニ而承屆、評定所江は不差出事、

〔目安秘書坤〕對決可致廉無之直ニ手限吟味

一武州福生村重兵衞外貳人相手、同村千人同心横田佐市不法出入、右出入、拙者方江訴出候ニ付、横田佐市呼出、定例之通對決可申付處、右訴狀之趣ニ而は、品々不法之取計有之、對決可爲致廉

も無之候間、直ニ呼出、手限ニ而吟味いたし、追而落着之節、評定所江差出可ㇾ及御相談ㇾと存候、

隼人正懸

天保四巳六月

〔鳩巣手簡三〕六月十八日書

一金地院事、權現樣以來、寺社之事は、代々掌り候て、寺社公事等には、御老中、又は京諸司代抔連名致來り申候、大猷院樣〇德川家光御代に至り候て、南光坊被ㇾ申候歟、金地院寺社役御指除被ㇾ成、始而寺社奉行と申者被ㇾ仰付ㇾ候、〇下略

〔望海每談〕一金地院は、元來五山派の司たる南禪寺の地にありし館中の號なり、其館中は大業和尙の開基なり、江戶西久保の金地院の院室は、傳長老を初とす、日本の諸寺の司を總錄と呼て、足利時代より相國寺にて是を持、故に大閤時代には、相國寺の館中なる豐光寺の承兌長老是を司る、また關東の事は、足利の學校より、三要長老を江戶へ召し、寺社のことを司らしめ玉ふに付て、太閤薨後には、佶長老を相加へ玉ふ、其後兌長老遷化し、佶長老も老年に及べるを以て、駿府に圓光寺の地を玉ふを以て、諸事時々出仕にて、傳長老壯年にして、才智有故、其始は名代の如く諸事を任せたるゆへ、每度御前へ出るに御旨に相叶ひ、總錄を玉ふにより、當時に至るまで、公邊の其代替りと云へども、其職を勤むるに依て、是より總錄は南禪寺にて持、寬永の末年遷化す、

〔明良帶錄一〕寺社奉行御奏者番ヨリ出役

寬永十二年、堀市正、始て勤む、此比は評定所無ㇾ之、奉行の第宅にて、金地院出座、寺社の訴訟を聽けり、

〔吏徵別錄上〕寺社奉行

寬永十二年乙亥十一月九日、安藤右京進、〇重長松平出雲守、〇勝隆堀市正、〇利重諸國寺社方訴訟之儀

承屆、可致言上旨被命、

〔享保集成絲綸錄 一〕寛永十二亥年十一月十日

一寺社方御用、并遠國訴人之事、右京、○安藤重長出雲、○松平勝隆市正、○堀利重右三人壹月番可致候、○下略

〔寶曆集成絲綸錄 三十〕寶曆九卯年正月

寺社奉行へ

同役代リ候公事訴訟、先役之者、吟味仕懸置候分ハ、跡役之者へ受取候ニ付、新役之者、評席等出來不仕內ハ、吟味取懸リ不申、彼是手間取相延候間、以來ハ先役之者、吟味仕懸置候分ハ、古役之者へ割合受取、新役之者ハ、月番相勤候以後より之公事訴訟、取扱候樣可被致候、

正月○又見ニ憲敎類典一

〔寶曆集成絲綸錄 三十〕寶曆九卯年二月

御勘定奉行へ

公事訴訟吟味事ニ付、只今迄寺社奉行宅へハ、評定所留役之者不相越候得共、今度吟味仕方相改候付、已來ハ評定所江差出候公事訴訟吟味事之節ハ、留役之者、寺社奉行宅へも罷越候樣可被致候、尤御勘定奉行申談、一人ヅヽ罷越候樣可被致候、

右之通寺社奉行へ申渡候間、得其意可被談候、○又見ニ憲敎類典一

二月

〔諸家礼明問答〕寺院取扱

文化四卯年三月廿日、寺社奉行阿部主計頭樣江、同同月廿一日御呼出、御付札、

一領內之小寺院、領主ゟ兼而申付置候、法度相背候僧御座候節、吟味之上、彌非分ニ相極候節、兼而領主ゟ申付置候法度之儀ニ御座候得者、祿石ニ不拘、役掛おゐて、脫衣追院退寺等可申付心得

ニ御座候、乍去罪相極候上、其儘ニ領內之本山錄所江引渡、寺法ニ爲取行可申哉、
但罪之依輕重、脫衣追院退寺等之差別可有御座哉ニ奉存候、
御付札
書面御領主ゟ、兼而御申付有之趣、相背候寺院、糺之上、不屆之次第吟味相決、他之引合等無之候者、御自分仕置御申付、落着之上、本寺錄所江通達有之可然筋ニ候得共、仕置差當リ之儀者、其仕儀ニ寄、格別之輕重有之事故、吟味之趣、巨細不承候而者、兼而取極難及御挨拶候、且御領主御申付等引渡候筋ニ者無之、御自分仕置難成類者、奉行所吟味之義、御申立可有之筋ニ存候、
但寺院仕置輕重之差別者、兼而取極難及御挨拶候、
一寺檀申論有之、宗旨替等願出候節、家主掛役人共致吟味、可否申付候上、本山錄所江相達可申哉、
御付札
書面寺檀爭論有之候迚、宗旨替者難成事ニ候、爭論之趣吟味詰、夫々裁許答等可申付筋ニ候得共、吟味之趣不承候而は、取極難及御挨拶候、〇下略
〔御仕置例類集一ノ二〕文化九申年御渡
所司代伺
一水無瀨家ゟ攝州東大寺村之もの共、吟味之儀被申立候ニ付、取計方評議、
去月十六日御渡被成候、所司代相伺候書面一覽仕候處、水無瀨宮用水之儀、水無瀨川を以、非常手當之處、隣村東大寺村と水論有之、其後ハ水不足ニ候處、水無瀨川上ニ而東大寺村之もの、水車相懸、彌水勢惡、右村方江水車相止候樣、水無瀨家ゟ被掛合候得共、不得心故、大坂町奉行江被申立候處、右水車ハ正德年中ゟ有之儀ニ而、安永之頃ゟ、年々冥加銀差出、新規之儀ニも不相聞候間、吟味

不致候而ハ不相決、然共堂上方ゟ之申立而已ニ而、右體之儀、吟味いたし候先例無之候間、其筋江被申立候儀は格別、大坂町奉行所ニ而ハ取扱難致旨ニ候得共、東大寺村ゟ用水差支候節ハ、車相止可申旨、證文等有之候上ハ、用水手當無心元、水車之儀、相止候樣被致度、依之吟味之儀、水無瀨家家司申立候ニ付、其段傳奏衆ゟ被申達候趣ニ而、別紙水無瀨家家司差出候書付寫并水車之儀ニ付、證文寫壹冊相添、取計方所司代相伺候處、右ハ吟味被仰渡候筋ニ候哉、吟味いたし候節ハ、何れ之向ニ而吟味いたし可然哉、評議いたし可申上旨被仰聞候、〇中略

十一月廿二日之次飛脚ニ遣之

酒井讃岐守江申遣候趣

水無瀨宮用水之儀、水無瀨川を以、非常手當之處、隣村東大寺村と水論有之、其後ハ水不足ニ候處、水無瀨川上ニ而、東大寺村之もの共、水車相懸、彌水勢惡、右ニ付水車相止候樣、水無瀨家ゟ被懸合候得共、得心不致候由、右水車之儀ハ、用水差支候節ハ相止可申旨、證文等も有之候ニ付、此上吟味之儀、水無瀨家家司申立候書付、并證文寫被越之到來、被申越候趣令承知候、右ハ寺社奉行ニ而、吟味可致筋ニ候間、水無瀨家家來之內一人、當地江罷下り、月番寺社奉行江、吟味之儀申立候樣可被達旨、傳奏衆江可被相達候、以上、

十一月廿二日　連名

酒井讃岐守殿

〔評定所覺書上〕寺社奉行勤方之事

就御役義先達而被差出候書付之通、向後ハ評席內座之席共有來座敷を用、新規ニ如評定所裁許場被建候義無用候、類燒等ニ而家作仕候共、可被建座敷を評席ニ可被相用候、且又別席總席等も別段ニ被建ニ不及、有來座敷之內を屛風等を以其席を隔候樣ニ可有作略候事、〇中略

一近來は御勘定吟味役を被相招しらべ等爲致被申由、地方江付候義は左樣ニ茂可有之候得共、公事訴訟裁許之義請合可有之筋ニ無之候間、同役中相談難決事は、於評定所一座之奉行中相談可有之事ニ候、地方江附候儀も、評定所ニ而談判有之、可相濟事ニ候、宅江吟味役等相招ニ及び申間敷義ニ候事、〇中略

以上

巳十月

右御書付巳十月廿二日和泉守殿御渡被成候、

〔享保集成絲綸錄一〕寛永十二亥年十一月十日

一町方御用、幷訴訟人之聾、民部、〇加々爪忠澄式部、〇堀直之壹月宛番可致候、〇中略

一町方公事承候日

九日　十九日　廿七日〇中略

寛永十二年亥十一月十日

〔正寶事錄十一〕覺

一來ル四日ゟ式日有之候、尤六日立合有之事、

一同五日ゟ、三番所訴訟承り候間、町中可相觸候、

右之通、來四日ゟ式日、六日立合之御寄合有之候、同五日ゟ三御番所ニ而、訴訟公事御聞被成候間、公事有之もの者、五日ゟ可罷出候、此旨町御奉行所ゟ被仰渡候間、町中不殘可被相觸候、以上、

三月〇寶永六年朔日　町年寄三人

〔正寶事錄十三〕覺

一來十一日ゟ式日御寄合有之、同十二日ゟ、三御番所ニ而、訴訟公事御聞被成候旨被仰渡候間、此

段町中不殘可被相觸候、以上、

十二月（○正徳二年）九日　町年寄三人

○按ズルニ、三御番所トハ、評定所及ビ南北町奉行所ヲ云フナリ、

〔御仕置例類集一ノ二〕文化七年御渡

町奉行 小田切土佐守 根岸肥前守 伺

一牢溜拔出候もの吟味之儀ニ付評議

緖附

書面町奉行伺之通被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

午七月晦日　寺社奉行

御勘定奉行

書面伺之通相心得可申旨被仰渡、奉承知候、

午七月廿九日　小田切土佐守

根岸肥前守

前々ゟ牢溜之儀ハ、都而私共一手之持場所ニ而、懸リ役人之儀も、囚獄初與力同心共、不殘私共組支配之ものニ而、夫々掟も有之、私共主役之儀ニ御座候處、先年溜拔仕候ものを、火附盜賊改ニ而吟味仕、一體之罪狀を束、御仕置相伺、評定所一座江評議ニ御下ゲ被成、評議之上、伺之通と申上、其通相濟候例、別紙之通、天明八申年之書留相見候得共、溜を拔候吟味之儀ハ、如何之譯ニ而、右之通相濟候哉、委敷譯、評定所井兩御役所ニも書留相見不申候、然ル處、五年以前寅年、溜を逃去候もの共召捕候節、引渡之儀ニ付、大林彌左衛門申上候書付御渡被成候ニ付、私共評議仕申上候處、是又別紙之通御差圖も御候座間、何れ之懸り之囚人ニ而も、牢溜逃去候吟味ハ、私共方ニ而仕、吟味相濟候上、御仕置重キ方之懸リニ而、束落着申渡候積、相伺候心得ニ罷在候得共、碇といたし候元極

も無御座候間、向後右寅年之御差圖之通、加役方ハ、勿論、寺社奉行、御勘定奉行、懸り之囚人ニ而も、牢、溜拔出候吟味ハ、私共方ニ而仕、吟味相濟候上、落着之儀ハ、御仕置重キ方之懸りニ而、束申渡候樣、相心得候樣可仕候哉、依之奉伺候、

（朱書）但去巳十二月十四日、評定所一座江、御差圖振申上候樣被仰聞、御渡被成候、大林彌左衛門相伺候、元火附盗賊改荒尾但馬守懸ニ而、引廻之上、死罪可申付哉之段伺、品川溜預申付置候、川邊村無宿平藏、溜拔出候を、大坂町奉行ニ而召捕、彼地ニ而も重キ惡事有之、獄門程ニも可相伺ものニ御座候由、大坂町奉行ゟ申越、御差圖振之趣、當時一座評議中ニ有之、右ハ遠國奉行所ニ而召捕候ものゝ儀ニ御座候得共、本文之通、私共支配牢溜拔出候もの、江戸內ニ而召捕候節之取計方、相決不申候而ハ、私共存寄も居り兼候間、本文之趣、相伺候儀ニ御座候、

此儀牢溜を拔出候もの、追而被捕候節、牢溜逃去候吟味ハ、町奉行ニ而仕候上、元懸り加役方江引渡候例而已ニ而、私共懸り之ものニ同樣之例ハ差當相見不申候得共、牢溜之儀ハ、都而町奉行一手之持場ニ有之候上ハ、加役方ハ勿論、私共懸り之囚人ニ而も、追而召捕候節、牢溜逃去候吟味ハ、町奉行ニ而仕、吟味相濟候上、御仕置重キ方之掛りニ而、束申渡候而も差支ハ無御座候間、伺之通相心得可申段被仰渡可然哉ニ奉存候、

午七月

〔目安秘書 坤〕穢多ゟ穢多江相懸り候出入

一穢多ゟ穢多非人江懸候出入、雙方評定所江呼出、返答書爲致候事、

是は町奉行衆ニ而、取扱之趣之由、甲斐守殿被仰聞候事、

〔機務覽要 二〕自分家來於町奉行吟味

一享和二戌年正月四日、年始勤途中、小川町本郷大和守殿屋敷於前、跡供之もの共、水戸殿奥女中

駕昇幷物持之者共及口論、自分引馬口之もの、幷草履取等疵請、水戸殿人足之内、壹人疵請候付、御吟味願、同五日伊豆守殿江申上候處、二月廿三日落着、供頭中小姓森源藏、押足輕伊東七兵衛乘而主人申付も有之處、取鎮方不行屆ニ付、急度叱リ、牽馬口之者竹五郎、草履取善藏押込、右之通町奉行根岸肥前守○鎭衛申渡候ニ付、翌廿四日御屆、其節之御用番松平伊豆守殿江出し、御番佐渡守を以進達、自分差扣伺之儀、當月御用番安藤對馬守殿同人御用有之、縫殿頭を以進達致候處、御附札ヲ以、不及差扣之旨御同人被仰渡候、

町奉行宅目付立合裁判

〔近世政秘錄地〕同月○天明八年十二月廿五日御仕置

獄門　御仲間頭三浦彌五左衛門組御使者　高橋富八郎　申二十五歳

江戸十里四方追放申付候　同松崎新右衛門組　小泉長市　申廿七歳

一同押込申渡ス　同羽田五郎右衛門組御中間　林八郎次　申二十三歳

右同斷　同　石掛清九郎　申廿五歳

右同斷　同　富山文平　申廿九歳

右同斷　御小人頭川村喜三郎組御小人　鈴木七郎次　申二十二歳

右同斷　同　荒井辰次郎　申十八歳

右同斷　御中間頭　羽田五郎右衛門　申六十九歳

右同斷　同　松崎新右衛門　申六十七歳

右同斷　同　三浦彌五左衛門

右町奉行山村信濃守○良旺於御役宅、御目付神保喜内立合、信濃守申渡之、

申十二月廿五日

〔近世政秘錄人〕酉○寛政元年五月十九日

町奉行山村信濃守組同心　堀井平助
酉廿五歳

江戸橋

外ニ大勢町人共御仕置在之

右町奉行初鹿野河内守(○信貞)於御役宅、御目付坂部十郎右衞門立合、河内守申渡之、

〔聞訟秘鑑〕一雙方御領一支配之出入之事

是ハ吟味伺之上、御代官ニ而裁許可致義ニ候得共、支配役所ニ而難取計、子細有之時ハ、其趣を以相伺、月番御勘定奉行江差出、是を手限ものと唱候由之事、

〔聞訟秘鑑〕一在々ゟ御府内江懸り候出入之事

是ハ關八州在々御領ゟ、江戸町人江懸り候出入ハ、七日目之差日ニは御呼出有之、是を御勘定奉行懸り七日物と唱候由、右在々ゟ千住板橋新宿江懸り候出入ハ、通例之公事方懸り私領ゟ懸り候へハ、目安掛之評定所公事に成候由之事、

一品川宿ハ、町奉行懸と、伊奈半左衞門御代官所と兩樣ニ付、右在々ゟ町方支配之者江懸り候出入ハ、前條之通、七日物ニ相成、半左衞門支配江懸候分ハ、通例之公事方懸ニ相成候事、

一右四ヶ宿ニ有之候飯盛下女ハ、御傳馬宿爲助成御免被仰付候ニ付、飯盛等ニ拘り候出入ハ、道中奉行掛ニ相成候事、(○年月闕)

〔聞訟秘鑑〕一關八州御料私領ゟ訴出候出入之事

是は關八州幷伊豆國ゟ訴出候出入者、御勘定奉行初判評定公事と唱へ、私領不加雙方御料支配之出入は御勘定奉行兩判之內寄合公事と唱候事、

〔公裁秘錄〕一御勝手方公事方之內江可出吟味物之事

(朱書)寛延二巳三月九日、相模守殿江上ル、同十三日承付に御下ゲ、

吟味取扱の儀に付申上候書付

伺之通取計可ㇾ仕旨被ㇾ仰渡ㇾ奉ㇾ畏候

申三月十三日　　　　　　　　御勘定奉行

御勝手方公事方共、御代官井御預所出入訴訟等之儀、支配限に引請吟味仕候處、御勝手方、公事方、相分候詮無ㇾ御座ㇾ入交候に付、向後左之通吟味可ㇾ仕候、

御勝手方にて吟味可ㇾ仕分

御取箇筋江拘候儀、又は地方役人村方江引合、私欲ヶ間敷儀、都て御入用向井村方勘定筋江拘候願訴訟、御勝手方にて吟味可ㇾ仕候、

公事方にて吟味可ㇾ仕分

野論、山論、境論、質地、借金、喧嘩、口論、人殺、都て御勝手向江不ㇾ相拘出入訴訟は、公事方にて吟味可ㇾ仕候、

右之通雙方引分ヶ、遂ㇾ吟味ㇾ候樣仕度奉ㇾ存候、尤御箱訴井駕籠訴等、吟味仕候樣無ㇾ仰渡、御下ゲ被ㇾ遊候節も、前書之趣を以、取計可ㇾ申候、依ㇾ之奉ㇾ伺候、以上、

巳三月　　　　　　　　神谷志摩守
　　　　　　　　　　　神尾若狹守
　　　　　　　　　　　松浦河内守
　　　　　　　　　　　曲淵豐後守
　　　　　　　　　　　遠藤六郎右衛門

〔御書付留〕明和二酉年

右近將監殿攝津守殿、侍座ニ而御渡し、

御勘定奉行江

御勝手方御勘定奉行之儀者、御取箇筋、幷御普請所、金銀納拂、知行割、御代官所割之儀者勿論、郡而御勝手向江拘リ候諸願等者吟味いたし、雙方打合相糺候類は、公事方御勘定奉行可致吟味事ニ候所、近年は、用水論、山論等も、御料所加リ候得ば、御勝手方ニ而吟味いたし候樣相聞候、左候而は、公事方御勘定奉行者、地方不携之樣相聞、筋違之事ニ候、以來者如前々、御代官所御取箇、幷在々御普請之儀、金銀米錢納拂一件、知行割、御代官所割、新田、又者諸運上願之類、御勝手方ニ而吟味いたし、其內ニも若出入雙方打合相糺候類者、御勝手方ゟ引渡、公事方ニ而可被致吟味候、尤御代官ニ而吟味之上、奉行所江差出候出入者勿論、願筋ニ而も、出入立候事は、公事方ニ而吟味可有之事ニ候、○中略

二月

〔明良帶錄 二〕御勘定奉行 三千石高 老支 芙

慶長十四年、松平右衞門大夫正綱始て勤む、萬治の頃より、御勝手方公事方と分れ、御勝手は、一切御入用筋、國郡の事まで取扱ふ、○中略公事方は、御領の百姓の公事、御領計にてなく、總て百姓方の公事、關八州の分は、多く江戶へ差出す、地頭にて自捌難屆は、添翰添使者を以差出す、

〔吏徵別錄 上〕御勘定奉行 舊稱御勘定頭

慶長八年癸卯十二月、大久保石見守長安爲所務奉行、是今御勘定奉行也、○中略

寬永十九年壬午三月三日、始置三員、○中略

享保七年壬寅八月八日、御勝手方御用方兩人、公事方兩人、一ヶ年代可相勤旨被命、

〔天明集成絲綸錄 四十八〕明和八卯年二月

御勘定奉行江

只今迄、支配向不埒之筋相聞、致吟味候節ハ、相屆置吟味被致候得共、已來支配向不埒之筋相聞、吟

味懸候、吟味之儀相願候樣可被致候、

二月

〔法曹後鑑〕享和元酉年二月廿六日、對馬守殿江上ル、同日承付ニ御下ゲ、卽刻承付いたし返上、

知行所出入取扱之儀ニ付奉伺候書付

書面私知行百姓出入之儀、御勝手方同役非番之もの江差出可申旨被仰渡奉承知候、

酉二月廿六日　　菅沼下野守〇勘定奉行

私知行所百姓ゟ、他領之百姓を相手取、出入申出候節ハ、公事方同役江差出、同人初判差出、三奉行裏判を以、評定所江呼出、對決申付候儀ニ御座候、然處當時石川左近將監〇忠房、蝦夷地爲御用罷越留守中、私壹人勤ニ御座候處、私知行所、下總國匝瑳郡今泉村五郎兵衛ゟ、加藤傳兵衛知行所、上總國武射郡清水村五右衛門外貳人相手取、及出訴度旨願書差出申候、御役筋ハ一體之儀ニ付、御勝手方同役共江相達可申候得共、御勝手方同役人共儀ハ、公事出入目安、加印不仕、評定所一座江も出座不仕候間、私知行所出入目安計、加印仕、右一件吟味之節計、評定所江出座仕候例も無御座、明和元申年御詮議もの、町奉行故障之節ハ、公事方御勘定奉行安藤彈正少弼〇惟要取扱候儀も御座候間、私知行所出入之分ハ、左近將監留守中ハ、寺社奉行町奉行月番之內江差出候樣ニも可仕候哉、此段奉伺候、以上、

二月〇又見ニ牧民金鑑

〔近世政秘錄　人〕同日〇寛政元年六月二日夜

差扣被仰付　　藤本甚助 酉六十歲〇中略

其方共、遂吟味候處、申分相分リ、不埓之筋無之旨、一同構無之、

右御勘定奉行久世丹後守於宅、根岸肥前守、久保田佐渡守、曲淵甲斐守、〇根岸肥前守以下三人並勘定奉行御目付

平賀式部少輔立合、丹後守相渡ス、

酉六月二日夜

〔牧民金鑑 一〕御勘定奉行支配御用達町人より江戸町方之もの江相掛候出入之事、

曲淵甲斐守〇景漸、勘定奉行、

拙者共支配御用達町人ゟ江戸町方之ものを相手取、訴状差出候間、先例相糺候處、右體之例、差當不相見候、右ハ各樣江可願出旨、申渡候筋ニ可有之哉、尤御料又ハ關八州私領ゟ出訴之分、七日裏書差遣候振合ニ准、相手方呼出候義ハ、差支無之候得共、願方之もの、御用達にても町人同士之出入ニ候上ハ、拙者共方ニ而裁許申渡候筋ニハ有之間敷候間、右之通及御掛合候、以上、

文化十二亥十月

永田備前守〇正直、町奉行、

御書面之趣致承知候、都而御用達町人共相手取出訴いたし候節ハ、其支配ゟ拙者共江達有之罷出候間、右之振合ニ而、拙者共御役所江可願出旨、被御申渡候樣存候、以上、

亥十月

〔近世政秘錄 八〕同月〇寛政元年四月十三日

一通リ尋之上、揚座敷へ遣ス、　高百五拾俵　御勘定　福島又四郎　酉四十三歲

同人養母　照善院　酉五十三歲

一通リ尋之上、同道人へ預遣ス、　同人妻　いく　酉卅八歲

同人悴　福島久太郎　酉廿一歲

一通リ尋之上、相返ス、　同人次男　同平次郎　酉十二歲

右同斷　同人三男　同八三郎　酉三歲

一通リ尋之上、預遣ス、　同人家來　河島友平　酉四十三歲

勘定所附支配所裁判

右同斷

同人下女　いと　酉四十三歳
同　けん　酉十三歳
同人中間　和助　酉廿九歳
後藤庄三郎役人　永井武右衛門　酉五十三歳

一通リ尋之上、牢屋ヘ返ス、
一通リ尋之上、同道人ヘ預相返ス、
右御勘定奉行久世丹後守〔○廣氏〕於宅、根岸肥前守〔○鎭衛〕久保田佐渡守〔○政邦〕曲淵甲斐守〔○景漸〕吟味役高尾總十郎、松村十左衛門、御目付平賀式部少輔立合、丹後守申渡之、
　酉四月十二日

〔甲子夜話 二〕近頃ノ町奉行根岸肥前守〔○鎭衛〕ハ、御徒士ヨリ勤メ上リテ此役ニ迄ナリヌ、予〔○松浦清〕亦舊識ナリキ、此人勘定奉行公事方タリシトキ、或日自宅ノ白洲ニテ吟味ノトキ、罪人不平ヲ懷クコトアリシヤ、傍ニ侍坐セル留役某ヲ目ガケ飛カヽリテ、ソノ所ニ在ケル燭臺ヲ取テ、シタヽカニ打タルトキ、根岸起テ、ソノ罪人ヲ押ヘ、背ヘ膝ヲ掛テ動カサズ、ソノ中、人々馳集リヌ、根岸心ニ頗コレヲ自負シテ、或時事ヲ建言スルノ次ニ、松平豆州ニ〔○信明、老職、〕其狀ヲ申述タレバ、豆州挨拶ニハ、サテモ不用心ナルコトニ候ト計ナリ、根岸甚失言ヲ悔シトナリ、

〔被仰出留 八〕御代官支配所の中、或ハ國郡相隔り、或は方角相違ひ、常々の仕置、年々の撿見等、其吟味も及び難く、其支配所百姓共、公事訴訟有之時、雜儀の事も候由相聞え候、此等の事、御勘定所におゐて僉議の上、自今以後、其便不宜支配所無之樣に其心得有べき事、〔○中略〕
　正德三年三月日
　　御勘定奉行中
　　御勘定吟味役中

〔法曹集〕御勘定所附支配所公事取計

雙方御勘定所附支配所百姓と、寺社江相懸り候出入寺社ゟ百姓江懸ノ候出入、寺社ゟ寺社江懸り候出入、寺社領百姓ゟ懸り候出入共、支配所江孕り候分者、不及伺吟味取懸り、其旨御屆申上置、尤濟口裁許とも、落着之儀者奉伺候樣可仕候哉、

但宗法社法ニ拘り候出入者、吟味不取懸、本寺觸頭等之吟味可受旨可申渡候哉、

附札

書面支配所人別ニ加り候寺社領ニ而、宗法社法ニ拘り候一宗一社之內之出入者、本寺觸頭等之吟味可受旨可申渡、俗人加り候宗法社法之出入者、添翰いたし、寺社奉行江可被差出候、其外之儀者、本文幷但書共、可為伺之通候、

他支配幷私領ゟ出作百姓御年貢未進、其外右之もの出作高ニ拘り候筋者、其支配領主地頭江不及懸合呼出、本村百姓幷取扱品ニ寄手鎖入牢等可申付候者、其支配幷領主地頭江懸合置候樣可仕候哉、

但小給所等ニ而、最寄陳屋無之分者、掛合差支候ニ付、其儀ニ不及取計、江戶屋敷江私共ゟ相達候樣可仕哉、

寺社之分も、御年貢地所持致し候上者、未進有之者ハ、前書同樣取計、其品ニ寄、揚屋江差遣可申候哉、

附札

書面本文幷但書共、伺之通たるべく候、尤寺院社人者、其品ニ寄、揚屋江遣候儀者格別、手鎖者不懸儀と相心得可被申候、

但御三家方、御三卿、御老中方、京都諸司代、大坂御城代、若年寄衆、御側衆評定一座、領分知行之者ニ候ハヾ、其度々取計方可被相伺候、

一堂上方幷寺院抔ゟ、御勘定所附支配所之者、差越候樣申越候類、若有之節者、不差遣懸合相糺申上候樣可仕候哉、

但本文之趣、兼々村方江申含置、尤直ニ村方江申來候共不相越、早速可申出旨申渡置候樣可仕候哉、

附札

書面本文幷但書共、可爲伺之通候、

一跡式又者養子等之出入者、他領懸合訴出候而も、添簡者不仕、家督ニ附候支配御代官幷領主地頭之吟味可受旨申渡、其旨御代官幷領主地頭江懸合候樣可仕候哉、

但他支配幷私領ゟ添簡ヲ以出候節者、家督之儀不及伺吟味取懸、其旨御届申上候樣可仕哉、

一吟味仕候もの、不屆之筋相聞、其儘難差置者ハ、他支配幷私領之者ニ而も、村預手鎖入牢申付、其段御代官領主地頭江申通候樣可仕候哉、

尤御三家、御三卿、御老中方、若年寄衆、御側衆、評定所御一座、領分知行之分者伺之上取計候樣可仕候哉、

他支配ニ而吟味有之候分も、懸合有之候ハヽ、右同樣爲取計、裁許不審之儀候者、懸合承糺候樣可仕候哉、

附札

書面伺之通たるべく候、尤家督跡式出入ニ限り候事與可被相心得候、但書之儀も、支配所内家元ニ候者、伺之通たるべく候、手鎖入牢等申付候儀、重御役人領分知行之者ハ、前附札但書之通可被相心得候、尤吟味之上、咎可附者ニ候者、先方役人立合之上、吟味詰可被相伺候、

一雙方御料所内ニ而、地境出入者不及伺、私共之内、御用序能越見分吟味仕、其段申上候樣可仕候

哉、尤郡村境ニ拘リ候者、其度々相伺候樣可仕候哉、

附札

書面雙方支配所内、地境之出入、御用席有之候節迄、打捨置可申筋ニ者無之候間、彼地在住之手附之者ニ爲相糺、不致地改候而者、難分儀も有之候者、手附之ものニ地改爲致、吟味詰、吟味書繪圖面證據書物口書等取揃、裁許之儀可被相伺、郡村境ニ拘候儀者、伺之通可被相心得候、

一手附之者共、取計方、非分私曲等有之趣訴出候ハヽ、一通相糺、答書取之、申上候樣可仕候哉、

書面伺之通たるへく候

一人殺火附盜賊、其外逆罪相聞候者申陳候ハヽ、支配内之者ハ、痛候而も相尋可申候哉、

附札

書面伺之通たるへく候、尤痛候而も相尋候節者、醫師呼寄置、不致絶入樣可被取計候、○中略

一支配所之者を相手取、他支配幷私領ゟ添翰を以、公事出入訴出候者、相手者呼出、訴狀之趣相尋、分リ兼候儀も有之候者、訴訟人爲立合、一ト通相尋候上、相手之者ゟ訴訟人江對し、申立候趣意有之候者、訴訟人江相尋、申爭候者、難及吟味旨、訴訟人江申聞、訴狀相返、其段其支配江及通達可申候哉、

一但借金無謂滯候者、早々可相渡旨利害申聞、其上ニも滯候者、强而濟方不及申付、本文之通取計可申候哉、

附札

書面支配之者を相手取、他支配幷私領ゟ添翰を以、公事出入出訴候節者、雙方打合被相尋候筋ニ者無之間、被相手取候もの、幷村役人呼出、訴狀を爲見、訴訟人江致對談、可相濟事ニ候者、可濟旨申渡、訴訟人江も別段右之趣申聞、爲懸合、凡日數共、日程見合不相濟旨申出候者、其筋

江可願出旨訴訟人江申渡、訴状相返、其段其支配領主地頭江可被及通達候、借金銀出入も同斷たるべく候、以上、

一寅（〇寛政六年）三月（〇又見法曹後鑑）

〔牧民金鑑一〕地方道中方之辨別

五海道宿々ニ而捕候盗賊、又ハ人殺、行倒或ハ變死人之一件、道中方ニ而、多分取扱有之候得共、數多之內ニハ、地方ニ而ハ取計物も見、區々相見候、勿論宿場ニ而も、假令バ食賣女、或ハ止宿之旅人、或ハ旅籠屋渡世ニ拘候儀、都而往還宿場之事ニ携候分ハ、全道中方取扱ニ而可有之、一ト通之盗賊、其外道中ニ不拘一件ハ、地方ニ而ハ、取計ニ而可然哉ニ候、然所其度々評議とも相成、了簡を用、筋合を以、引分取扱候樣ニ相成、手間取候事ニも候間、右之無差別、以來ハ宿場ニ而捕候盗賊、又ハ宿內之人殺、疵付、行倒、變死人等之分も、道中方ニ而取扱候積奉存候、

右之通天明六午年三月十八日、於內寄合評議極ル、

前書之通、是迄五海道宿方之分ハ、道中方ニ而取扱候得共、以來ハ旅人、旅籠屋、飯賣女等之外、人足小揚等、往來繼立等ニ拘候義ハ、道中方と心得、宿方之もの同士、喧嘩口論、其外往來江不拘一件ハ、公事方月番江爲差出候積、

右天明九酉年正月廿七日、內寄合ニ而評議極ル、

〔書留〕五街道

東海道　品川より守口迄、佐屋路共、　中山道　板橋より守山迄、美濃路共、

日光道中　千住より鉢石迄、（例幣使道、壬生通、井御成道、其外水戸佐倉道共、）

甲州道中　內藤新宿より下諏訪迄、　奥州道中　白澤より白川迄

〔御仕置例類集一ノ〕文政八酉年御渡

道中奉行伺

一道中奉行掛一件之內、京都町奉行所ニ而、口上書取候もの御仕置も、同所ニ而可申渡哉之儀評議、

去ル廿三日御渡被成候、道中奉行相伺候、伏見宮家來今井主殿、不屆之取計いたし候一件之內、三木大藏權少輔外三人御仕置之儀、京都町奉行江申達、口上書申付候ものニ付、呼下不申、於彼地御仕置申渡候積、京都町奉行江相達候樣可仕哉之旨相伺申候、

此儀寶曆十二午年、道中奉行懸、東海道見附濱松兩宿之間、近道往來之儀ニ付、池田村井兩宿之もの共吟味仕申上候處、伺之上、池田村井濱松宿役人とも御咎之儀、夫々御差圖相濟、右申渡方之儀、彼地江申遣、御代官岩出伊右衞門方ニ而爲申渡候樣、道中奉行相伺候處、是又伺之通御差圖有之、其後一件之內、輕キ御咎附候分、引合落着申渡候、度々之先例ハ有之候得共、御仕置ニ相成候ものを引合、於遠國申渡候儀ハ、此度朱書を以、道中奉行ゟ申上、候例之外無之、右例之儀ハ、最初伏見奉行立合、京都町奉行江吟味之儀被仰渡、御仕置伺書差上候節、評議ニ御下ゲ被成候ニ付、夫々評議仕候趣申上候處、一座懸りニ而、御當地ニおゐて再吟味可仕、尤一件之もの不殘呼下ニも及間敷、重立不相尋候而難分分計、呼出候樣勘辨可仕段御差圖ニ付、重立候もの共ハ、江戶表ニ於て吟味仕、外引合之もの共ハ、京都ニ而申付候口上書相用、御仕置之儀相伺、御下知相濟候後、彼地ニおゐて申渡候儀ニ付、今般之一件とハ聊差別も有之候得共、彼地ニおゐて口上書申付候上ハ、右例ニ引當、伺之通可取計旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

酉五月

朱書 評議之通濟

〔目安秘書 坤〕地方、道中方之辨別、○中略

火附改方吟味

文政十一子年正月、主水正掛、

武州飯野町之内久下分村政右衛門ゟ、同國上尾宿平兵衛并同人抱食賣女きし外壹人を相手取、目安差出候趣意は、右政右衛門下男忠兵衛儀、商用ニ而上尾宿邊江罷越、相手平兵衛方江止宿いたし、食賣女きしを酒之相手ニいたし酒給、立出候後、平兵衛宅脇ニ而變死いたし候間、疑敷趣を以、同人を相手取候出訴ニ有之、變死いたし候忠兵衛ハ、旅人ニ有之、其上平兵衛は旅籠屋ニ而、食賣女も引合、宿方ニ而變死いたし候事故、道中方吟味ものニいたし可然旨、町田茂七郎、淺井金八郎相談之上、其通ニ相成候事、

旅籠屋ニ無之受人等ゟ、食賣女取戻出入裏判差出方、

一武州越谷宿安右衛門相手、同國神領下村女子取戻出入、

是は食賣女取戻出入、道中方江願出候處、主人ゟ願出候節は、旅籠屋渡世筋ニ付候儀故、道中方ニ候得共、主人方手切ニ不相成、奉公人ニ候とも、取戻方道中方ニ拘り候儀無之候間、評定方事差日之初判差出候積、

朱書
享和三亥年閏正月九日談判之上、同月十一日評定所一座江演説濟、但此類江戸町方之もの願ニも可有之儀ニ付、助郷宿ニ附候身分之もの願無之ば、假令道中方之事ニ候とも、地方之取扱ニ可有之事、

〔科條類典下〕一元文三午年三月十四日、彌此通定置、追而被仰出等、此帳ニ可記儀は書記可申候、其節ニ其趣書付可差出旨、評定所一座江被仰聞候帳面之内、

享保三戌年覺書

㊁火附之儀其筋之奉行ニ而詮議之事

覺

一只今迄町方より訴出候附火詮議之儀、伺之上火附改江相渡、詮議有之候得共、向後町奉行所江訴出候ハヽ、火附改江不相渡、其手筋ニ而遂詮議可申候、火附改方ニ而者、組之者廻し候節捕、又ハ改出し候火附計、吟味可仕候、總體詮議之筋、火附改方と申合候樣可仕候、

一盜賊改、火附改、博奕改共ニ、向後火附改方打込仕可相勤候、右之趣とも、火附改方江も被仰渡候間、其旨可相心得事、

戌十二月

〔憲法編年錄五十八〕寶暦九年八月

火附盜賊役江

加役相勤候者、唯今迄碇と致し候申送等も無之、先々取計候義及承、又者加役相勤候者、時々存寄をも相加取計候由、總じて取計候趣、區々相聞候、以來者致來候義にも如何と存付候義者相改、不相知義者奉行所取計をも承合、難決義も候ハヽ相伺、とくと取〆り候樣、規格取極置可被申候、〇中略

右之通相心得、後々被仰付候加役へも、まかと申送、以來取計區々ニ不相成樣可被相心得候、

八月

〔御仕置例類集一ノ二〕文化三寅年御渡

火附盜賊改荒尾但馬守章〇成伺

一松平中務大輔家來横井九平、吟味之儀ニ付評議、

松平中務大輔納戸藏ニ而金子盜取候、同人家來横井九平儀、荒尾但馬守吟味之上、及白狀候處、他向懸り合等も無之候はヽ、中務大輔方江請取、手前仕置申付度段、同人申上候ニ付、但馬守江右書付御下ゲ被成候處、九平儀ハ別紙之通、金子之儀ニ付引合之ものも御座候間、但馬守手限ニ而吟

味詰、御仕置可相伺筋之ものニも可有御座哉ニ奉存候旨、但馬守申上候趣、評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀去ル申年、松平肥後守元家來、自分仕置申付度旨申上候得共、他之引合有之候故を以、自分仕置ニハ難成旨、別紙之通申上、相濟候例有之、但馬守書面之趣ニ而ハ、尾張殿藏屋敷手代岡本左兵衞、其外町方ニも引合有之候之間、中務大輔自分仕置ニハ難相成ものと奉存候、依之金子捌方ニ他之引合有之候故、御引渡難成ものゝ段、中務大輔江被仰達可然哉ニ奉存候、且火附盜賊博奕吟味等之引合ニ而、武家之家來を吟味いたし候ハ格別ニ候得共、武家之家來主謀之本人を、假令盜惡事ニ候とも、火附盜賊改ニ而吟味仕候段、不相當之儀ニ而、既寛政二戊年、長谷川平藏火附盜賊改勤役之節、盜賊引合有之候倍臣之儀ハ、手限ニ而御仕置相伺來候、依之猶弥一通りニ而も伺來候倍臣之分、手限ニ而御仕置相伺候樣可仕哉之段相伺候處、伺之通被仰渡候旨、同八辰年、右書面町奉行爲心得御見セ被置候儀も有之、殊ニ今般之橫井九平儀、但馬守より呼出尋候趣、中務大輔書面ニ相見え、廻り先ニおゐて召捕候ものニも無之上ハ、町奉行江引渡候樣、但馬守江被仰渡候方ニハ有御座間敷哉、右之通ニも相成候はゞ、以來之儀、武家之家來惡事之始末及承、證據慥ニ候はゞ、右及承候趣を以、町奉行江申談、呼出吟味ハ不仕、若於廻先召捕候ものニ候とも、武家之家來主謀之ものニ候はゞ、町奉行江引渡、輕引合迄之ものハ、吟味詰候積相心得可申段、但馬守江被仰渡可然哉ニ奉存候、

寅九月

〔御仕置例類集一ノ一〕文化十三子年御渡

火附盜賊改松下河内守伺

一日光御領之もの、吟味筋ニ付呼出方取計之儀評議、

續附

書面評議仕申上候通、松下河内守江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

子二月廿八日　評定所一座

書面伺之通取計、彼地江相達落着爲申渡候節は、請證文取之、日光奉行より差越候樣、其時々懸合之上取計可申旨被仰渡、奉承知候、

子二月廿二日　松下河内守

内吟味

私掛、囚人吟味引合之者、是迄呼出、吟味仕來候處、日光御領之もの吟味筋有之節は、尋之趣意、日光奉行江申達、彼地御役所ニ於て吟味之上、口書取之差越、落着之儀茂、差支無之分は、於彼地申渡候樣致し度旨、小嶋安藝守、初鹿野河内申聞候、然ル處、盗取候品、質入賣拂、又は預置候分は、右ゝな取上、被盗主江爲見候上、吟味詰口書申付候ニ付、品柄ニ寄、呼出し突合、吟味不致候而は難相分節は、仕來之通取計、文面ニ而相分候分は、以來吟味之趣意、日光奉行江申達、糺之上口書取之差越、落着之儀も、差支無之分は、於彼地申渡候樣取計可申哉、此段奉伺候、〇下略

〔新朝裁許律 四〕子〇享保五年十一月廿一日、溜間ニ而、御老中列座、和泉守殿〇水野忠元被仰渡候趣、公事毎ニ而茂無之候得共、公事ニ而評定所江出候公事、手前ニ而内吟味仕候事有之候、向後致無用、評定所ニ而、一座之面々吟味可仕候、檢使ニ手代遣候儀致無用、御代官を可遣候儀、公事ニ寄評定所僉議ニ而埒明不申、内吟味不仕候而不叶節は、御老中迄相伺可申候、

右之通被仰渡、三奉行吟味役承之、

留役吟味

〔評定所書留 三〕三奉行江

評定所江奉行出席無之、留役計ニ而尋等致候節、向後御徒目付立合候樣可被致候、〇中略

老中裁判

右之通御目付江申渡候間、可被得其意候、

寶暦九卯年二月

〔享保集成絲綸錄 一〕寛永十二亥年十一月十日

一國持大名御用井訴訟之事

土井大炊、〇利勝酒井讃岐、〇忠勝松平伊豆、〇信綱阿部豐後、〇忠秋堀田加賀、〇正盛五人〇皆老中ニ而、壹月番ニ可承候、〇中略

一國持大名御用井訴訟承候日

三日　九日　十八日〇中略

寛永十二年亥十一月十日

〔東武實錄 二十九〕寛永七年二月二十一日、去年春二月、甲州久遠寺ノ住持日暹、宗論ノ事ニ依テ、武州本門寺ノ住僧日樹ニ對シテ、訴書ヲ奉行所ニ捧ル、此宗論今ニ果サズ、是ニ依テ日暹、日樹、及ビ同意ノ僧等、台命ニ依テ、酒井雅樂頭忠世〇老中ノ宅ニ召シテ其諍論ヲ聞ク、土井大炊頭利勝、嶋田彈正少弼利政、永喜、道春等、其外仰ニ依テ列坐ノ輩、數多是アリ、本門寺ノ住持日樹、宗論ノ返答書ヲ持シテ出坐ス、〇中略此諍論、午ノ上刻ニ始リ、未ノ后刻ニ畢ル、建部傳內、側ニ在テ其論ズル所ノ言ヲ以テ是ヲ記シ、後台覽ニ入ル、

〔人見私記〕寛永十二年十一月十八日、利勝〇老中土井宅寄合、且今日御用ノ儀、井訴訟承始、依之在宿也、

〔嚴有院殿御實紀 四十二〕寛文十一年三月廿七日、酒井雅樂頭忠淸〇大老の邸に、諸老臣幷に町奉行島田出雲守忠政、作事奉行大井新右衛門政直會聚す、これ松平陸奧守綱村が臣伊達安藝、その主の爲に伊達兵部少輔宗勝、幷に家宰原田甲斐、驕縱の事ども上書せしをもて、綱村が家宰甲斐古內志摩、柴田外記、蜂屋六左衛門を召て、雙方對決せしむるによりてなり、これより先、安藝、綱村が

叔父伊達式部が所領谷原邑境界檢斷せしむとて、兵部少輔宗勝より使をつかはし沙汰せし所、姦曲の事どもありしを證となして、安藝が訴ふる所なれば、そのよし逐一糺問ありしに、宗勝と甲斐が同謀せし非義、既にいちじるしきをもて、重く尋問あるべきよし、出雲守忠政令して各座を退く時、甲斐をのが姦惡露顯せし事を憤りしにや、申所いまだ殘りたりと申といへども、けふの糺問既に事はてたり、重て召れむ時申べしとて、新右衛門政直引つれ退座するに及んで、甲斐脱置し脇差を手にとると見えしが、直に拔ながら安藝に切付たり、安藝も拔合せしかど、遂にうたれたり、外記側より驚きてこれも脇差ぬきて甲斐に切かけしが、外記も深手負、六左衛門も切かけ、これも深手負たり、甲斐ハ手負ながら直に奥の間へすゝみ入らむとせし所を、出雲守忠政、幷に雅樂頭忠清家人石田彌右衛門、太田伊兵衛折合て、遂に甲斐を討取たりよて土屋但馬守數直は、まうのぼり、このよし聞えあぐる、又安藝甲斐が尸骸、幷に手負の者ども引とるべきよし綱村がもとへ令せしかば、綱村より騎士歩卒七十人迎に出して引とりしとなり、世に傳ふる處は、兵部少輔宗勝、心正しからぬものにて、田村隠岐守宗良と兩人、綱村が幼稚の時より後見の事命ぜられしかども、諸事宗良とは議せずして、おのれ一人我意にまかせ、驕縦のふるまひし、甲斐抔いへる姦曲のものをかたらひ、善人を誅戮し、惡人を薦擧し、民をくるしめ、日々月々、死刑の者多きをもて、里見十左衛門といへるもの、諫書をさゝげしを憤り、十左衛門をも死刑に處せんとはからふをもて、安藝は綱村が一門の者なれば、國のため家のためこれを歎き、宗勝と田村隠岐守宗良とをしばしば諫めて、政事をたゞさむとすといへども、宗勝を始め姦黨これを用ひず、其後安藝が所領谷原村境界の事たゞすとて、宗勝より檢使をたてゝ、暴横の擧動せしかば、安藝これを證とし、所訟上裁をへての亂さんとて訴訟をさゝげしなり、甲斐は宗勝が腹心の者なれば、姦計の露顯せしを憤り、かゝるふるまひに及びしとぞ、この事終りて後、何者か酒井が表門に落書せしは、兵部かた甲斐々々敷に安藝はてゝうたてや来の陸奥かしき哉、また陸奥かしや伽藍ものゝ出合に宿するからは雅樂てかりけり、これ等を見る時には、當時世の人の流言する處おもひやるべし、兵部少輔宗勝が子市正宗興は、雅樂頭忠清が婿なりき、　四月三日、伊達兵部少輔宗勝を松平土佐守忠昌にあづけられ、土佐國高知に配流せらる、其子市正宗興を小笠原遠江守忠雄にあづけられ、豊前國小倉に配流せらる、こはもとの松平陸奥守綱宗を、一門宗士等が願により隱退せしめられし時、今の陸奥守綱村幼稚により、兵部少輔宗勝と田村隠岐守宗良と後

見し、家宰とはかり、綱村を輔導せよと命せられしに、宗勝宗良と心和せずして藩政正しからず、年々死刑の者多きをもて、家士等心安堵せず、こと更原田甲斐が惡逆に及びしも、全く兩人のはからひ不良なるによれり、宗勝は老年にて、祖先の時よりの國體をもしりながら、一入ひが事ふるまひし罪をもてなり、宗良は多病にて國にも赴かず、萬事宗勝がはからひにのみ任せたるをもて閉門せしめられ、その子右京亮宗顯も、同じく閉門せしめらる、宗勝へは五百俵、宗興へは三百俵宛行ひ、宗勝ハ從者七人、宗興は六人たるべきむねなり、松平陸奧守綱村は、藩士等騷擾の事によて、封地收公せらるべしといへども、幼弱にて、何事も宗勝宗良、幷に家士等にまかせ、其身國政にあづからざるをもてなだめらる、すでに元服して出仕もすれば、今より後、後見の人は命せらるゝに及ばず、家宰等よくはかり合せ、家國の政事行ひ、もしとゞこふらば、近緣伊達遠江守宗利、立花左近將監鑑虎にはからふべき旨仰下さる、

〔在田利見抄二〕寛文十一年三月三日、出雲殿、(○島田忠政、町奉行)新右衛門殿、(○大井政直、作事奉行)右以手紙を、安藝(○伊達)方へ被仰越候者、可被相尋事候條、明四ッ時、板倉內膳正殿(○老中)御宅へ可被相越由申來ル、同四日、巳ノ上刻、內膳正殿御屋敷へ、蜂屋六左衞門案內にて、安藝家來亘理藏人ニ覺書爲持被罷出候處、土屋但馬守殿御兩人御列坐、安藝被召出、存念之通り覺書を以、未之下刻迄、品々申上候、安藝罷歸候時分、內膳正殿、但馬守殿、表迄御出、存出候事も候はゞ、無遠慮追々可申上由、色々御懇之御意共有り、　同七日巳ノ上刻、柴田外記、原田甲斐、內膳正殿へ被爲呼ニ付而、蜂谷六左衞門案內にて參上、但馬守殿御列座、兩人を壹人ツヽ被召出、品々被相尋候事、(○中略)　同廿七日、未明甲斐福田五郎左衞門案內ニ而、內膳殿御宅へ參上、乍憚直ニ披露申度儀御座候由、再三申上候處、後刻御老中御列座之砌可被爲聞由にて、御對面不被成候事、同日巳之上刻、內膳殿御宅へ安藝、外記、甲斐、志摩、(○古內)蜂屋六左衞門案內ニ而參上候處ニ、於雅樂頭(○酒井忠淸、大老)宅被相尋候ニ付、內膳殿も彼宅へ、

被相越候間、右四人も酒井雅樂頭殿江可参上由被仰渡候に付、彼宅へ参上候處、雅樂頭殿、大和守殿、美濃守殿、但馬守殿、内膳正殿御列座、島田出雲殿、大井新右衛門殿御出、於御書院、安藝、外記、甲斐、志摩、一人ヅヽ段々被召出被相尋、各退出、既ニ御老中御歸宅可被成由にて、表坐敷ニ、先安藝、外記、甲斐、六左衛門も列座、然處甲斐宗輔、再言上スベキコトアリト云テ、卒爾ニ坐ヲ起テ、安藝宗重ノ後ヲ過ル時、佩刀ヲ拔テ宗重ヲ切ル、宗重卽チ短刀ヲ拔テ、宗輔ガ股ヲ切ヲ果サズ、宗重卽時ニ沒セリ、宗輔直ニ進テ閣老ノ座席ニ入ントス、外記朝意之ヲ追詞ヲカケテ肩ヲキル、宗輔引回シテ朝意ガ額ヲ切ル、朝意進テ宗輔ガ乳ノ下ヲ二刀切ル、蜂屋六左衛門可廣、太刀打ノ聲ヲ聞テ、趁進テ宗輔ガ後ヲ切テ果サズ、乃チ組留テ腋ヲ串穿シ、遂ニ宗輔ヲ擊殺ス、然ルニ忠淸朝臣ノ家臣等、周章シテ朝意可廣ニ創ク、朝意創ヲ蒙ルノ後、忠淸朝臣ノ家臣ヲ以テ、公ノ第ニテ此事アルヲ聞バ、將ニ騷動スベシ、宜ク靜謐スベキ旨ヲ指揮シ玉ハラン事ヲ請フ、是ニ於テ閣老朝意ヲ見テ、情意懇到ナリ、朝意ガ云、公幼稚ナレバ、萬事眷顧ヲ願ヒ奉ル、我ヲシテ此處ニ死セシムベカラズ、速ニ乘輿ヲ許サレ、公ノ第ニ歸去ン事ヲ請、既ニシテ朝意書吏若生半右衛門、平澤七之丞趁來テ、仔細ニ事體ヲ問フ、朝意宗輔ガ所爲、宗重ヲ擊殺シ、自ラ創ヲ蒙ル事實ヲ詳ニ語ル、兩吏又遺言ヲ聞ンコトヲ請フ、朝意曰ク、公ノ爲ニナルベキ義ハ詳ニ告達セリ、少モ遺憾ナシト、其夜朝意可廣兩人、宇和島侍從宗利朝臣ノ第ニ往キ、朝意ハ其夜沒シ、可廣ハ翌廿八日死スト云々、

或記ニ、朝意可廣、宗輔ヲ擊テ創ヲ蒙ル、島田出雲守忠政、古内志摩義如、相進テ宗輔ヲ切殺スト云々、

〔伊達一件〕一伊達式部、伊達安藝、寬文八年、桃生郡遠田村、同郡深谷谷原境論之事、理非互前々之證據有之、内證之穿鑿難成、從式部不斷奉行油井善助、小人奉行靑木彌總左衛門、右兩人を以、其時之奉行職柴田外記、原田甲斐、古内志摩、右三人之衆へ、口上之覺書を以被申達候處、右三人之老中、自

分ニ相計候事依難成、伊達兵部、田村隱岐、兩人之後見江申上候上、兩後見立花好雪江內談、島田出雲殿、大井新右衛門殿、妻木彥右衛門殿、右三人之御申次衆江相達、相談を以、御老中江御內意、同曆九年、三人之御申次衆ゟ爲御使、其比在府之評定役目茂庭主水被差下、御下知之趣今時龜千世殿○伊達綱村御幼少と申、雙方之內、理非有之、互之鬱憤遂是非、及國亂事、龜千世殿御爲も不可然之條、先以雙方可被爲勘忍、依谷原之儀は、式部方江三ヶ二、安藝方江三ヶ一、濟ミ候樣被仰渡之趣、主水罷下、右雙方江依申渡之、雙方堪忍之事、

境目見分之者

歩小姓頭　志賀右衛門
同　濱田半兵衛
大橫目　今村善大夫
同　橫山彌次右衛門

右四人、其外歩目付、勘定方役人差添、彼論地江相下、境地之見分相定之、同年龜千代殿元服、官位迄依被仰付、爲御禮之、一門爲代官、式部江戶江罷登、首尾調下著、同十年二月病死、同年夏之比、安藝存念は、谷原見分之次第、三ヶ一、三ヶ二、境分不明ニ付、兼々齊家治國之仕置、依怙有之由見聞、折を以可及諫言存候得共、實義難定非其儀、且又今度於身之上、慥成證據雖有之、大分之谷原之儀、件之仕樣、況於小分之儀は、我儘之可爲仕置、陸奧守殿御爲不宜と自念、數年之見分有增、綱宗公隱居後、年年刑罰之族不絕、家中之輩第一不成安堵、其外惡敷仕置等五拾ヶ條餘書物認、三人之御申次衆江差上之處、三人之衆相談之上、又以其年も當番にて有合候、茂庭主水、江戶ゟ被差下、○中略

一同廿七日、○寬文十一年三月巳ノ上刻、內膳殿御宅江安藝、外記、甲斐、志摩、蜂谷六左衛門案內にて參上之處、酒井雅樂頭殿、於御宅被相尋付て、內膳殿假宅江被相越候間、右四人も酒井雅樂頭殿江可參上之由被仰渡、假宅江參上候所、雅樂頭殿、美濃守殿、大和守殿、內膳殿、御連坐、島田出雲殿、大井新右衛門、

殿御出、於御書院安藝、外記、甲斐、志摩、壹人宛、段々被召出被相尋、各退坐、既御老中御歸宅可被成由にて、御次之間表座敷ニ、先安藝、外記、甲斐、志摩、六左衛門列座、然處、大井新右衛門殿御出被成候と甲斐走寄、先頃より申上度儀も御座候得共、口無調法故、申上候も不相成候、口上之覺書持參申候間、懸御見度由申時、新右衛門殿被仰候は、何茂同事を申候て、不出來存候、我等取次は不罷成由被仰、御御入口御通被成候、其節安藝被申候は、同事幾度被申上段、老中には不似合由申候へば、甲斐御入口罷通樣にて立寄、己故にと只一言にて、脇指を拔、安藝を切、安藝も言を返し、甲斐少切、甲斐取直切、初手後手共ニ重手故、卽時ニ安藝臥、甲斐御入江翔入處、外記追懸、主に苦勞を懸る大惡人、比興者哉と言葉を懸、後ゟ甲斐を切、甲斐取て歸、外記額右之脇江懸切、外記も又切、六左衛門周章走寄、甲斐を後ゟ指通候處、志摩、島田出雲殿は列座對談有之居候後、噪にて走來、出雲殿志摩も甲斐二脇宛切留、志摩不翔寄、內ゟ坐中夥敷噪、侍共走集、頭人之無辨、外記、六左衛門を切、此兩人重手故、外記は少も不噪倒ル、六左衛門はかき出し、手水を遣直座、段々行步不叶臥、御老中御前江出雲殿御出、右甲斐不義之品々、安藝、外記、六左衛門手負候樣子、甲斐を打留之由御披露、脇指懸御目候、志摩儀も、首尾好仕候間、脇指御覽被下度旨、出雲殿被仰上候付、志摩被召出、脇指御覽被成、甲斐は、御城同然之處にて不儀仕候事、口惜被思召旨被仰、仍志摩儀、陸奥守屋敷江罷歸、家中之者、震動可仕候間、相靜申度候條、被相返被下度旨、再三御老中江被申上處、被相尋候儀有之間、在番可仕旨被仰付、四人之御老中は御退出被成、但馬殿直ニ御登城、右之趣意被奉言上由、依之爲御檢使御步目付衆壹人、雅樂頭殿宅江被差遣、安藝甲斐遣骸被見屆候事、

〔近世政秘錄 天〕同日〇天明七年十二月六日

御勘定奉行　桑原伊豫守〇盛員
名代　桑原平兵衛

御買上米、吟味不糺之義有之ニ付、差扣被仰付、

右阿部伊勢守殿〈老中、正倫、〉於御宅、御老中御列座、伊勢守殿被仰渡之、大目付戸川山城守出席、

佐渡奉行　久保田十左衛門〈政邦〉
名代　室賀圖書
御勘定吟味役　中野藤十郎

未十二月五日

〔近世政秘錄 地〕同年〈天明八年〉五月六日

元京都所司代　戸田因幡守〈忠温〉
名代御鷹匠頭　戸田五助

伏見町人、九助、九兵衛出訴御吟味之儀、於彼地久留島信濃守、丸毛和泉守へ被仰付候處、數年及延引、不行屆次第ニ付、於當地御吟味有之、夫々御仕置被仰付候、其方諸司代勤役中之義ニ候得共、右體無遲滯候樣、萬端可心付處、等閑ニ致罷在候段、不束之事ニ被思召候、依之差扣被仰付之、

右鳥居丹波守殿〈老中、忠意、〉於御宅、御老中御列座、丹波守殿被仰渡之、大目付牧野大隅守〈成賢〉出席、

〔近世政秘錄 人〕同〈寛政元年〉六月二日、御仕置夜ニ入、

申渡之覺〈中略〉

同日夜ニ入、差扣被仰付、　御勘定吟味役　大林與兵衛

御目通差扣被仰付、　御勘定奉行　柳生主膳正〈久通〉

右同斷　名代　久世丹後守〈廣氏〉

右同斷　根岸肥前守〈鎭衛〉

右同斷　久保田佐渡守〈政邦〉

右同斷　曲淵甲斐守〈景漸〉

若年寄支配

右同斷　　　　　　　　　　　　御勘定吟味役　高尾惣十郎

右同斷　　　　　　　　　　　　　　　　　　　村垣左大夫

右同斷　　　　　　　　　　　　　　　　　名代　松村十左衛門

右松平越中守殿（○老中、定信、）於御宅、御同人被仰渡之、大目付桑原伊豫守（○盛員、）出席、

〔享保集成絲綸錄〕一寛永十二（亥）年十一月十日

一御旗本諸奉公人御用、并訴訟、土井遠江、（○利隆、）備後、（○酒井忠朝、）志摩、（○三浦正次、）備中、（○太田資宗、）對馬、（○阿部重次、）五人ニ而、壹月宛番致、可承候事、○中略

一御旗本諸奉公人御用、并訴訟承候日、

右同（○三日、九日、十八日、○中略）十

寛永十二年亥十一月十日

〔近世政秘錄天〕同日（○天明七年十二月六日）

二丸御留守居　飯塚伊兵衛

其方儀、御勘定吟味役勤役中、午年九月、飛脚問屋孫兵衛外二人、北國米納之儀、松本伊豆守、赤井豊前守、相伺候ニ付、久保田十左衛門、中野藤十郎、一同吟味之上申渡候、銀安直段ニ付、信用難相成段申達之後、桑原伊豫守御勝手掛り被仰付、猶亦伊豫守、豊前守、其方共打合、評議可致と申渡之節、江戸米相場ニ者無之、北國筋其外餘國江取扱之直段ニ付、米直段不相當之義も無之候旨、并引請人身元株式等得と糺義心付、猶又不念之儀申立候段、再應評議爲致候、其詮議無之、等閑成儀共、不埒之至ニ候、依之差扣被仰付之、

父豊前守不埒之義在之候ニ付、御小姓御免、寄合被仰付、

御小姓　赤井兵庫頭

名代　赤井鐵太郎

將軍直裁

右太田備中守殿御宅ニおゐて、若年寄衆と御出座備中守殿被仰渡之、御目付曲淵勝次郎、牧野織部相越、

未十二月六日

○按ズルニ、正德四年裁許ノ三寶院ト醍醐三院家トノ訴訟ハ、若年寄森川出羽守俊胤ノ役宅ニテ裁許ノ旨趣ヲ令セラルル事ハ、訴訟篇寺社訴訟ノ下ニ、有章院殿御實紀ヲ引ケルガ如シ、

〔家忠日記增補〕天正十年十二月十二日、平原ノ某、本領ヲ賜ルベキノ處ニ、甲州ノ士是ヲ惡テ、先日笛吹川一戰ノ時ニ、一揆ノ本人、大村三右衛門尉ト平原同意スルノ由ヲ訴ル、又田村ノ鄕民等、此儀必定タルノ由ヲ頻リニ訟フ、是ニ依テ平原及ビ訴人ノ輩ヲ大神君〇徳川家康御前ニ召テ對決ニ及ブ、

〔朝野舊聞裒藁〕五百四慶長年錄云、正月、〇慶長九年水戸古おまん樣〇武田信吉御家老衆、帶金刑部少輔〇君松滿澤主稅之助、〇君基川方織部、〇永養馬場八左衛門〇忠時等と、蘆澤伊賀守、佐野兵左衛門、穗坂常陸、有泉大學と致公事を、於御城對決あり、是等は、甲州衆穴山信君存生之時よりの家老なり、然に近年御主御若年之間、家老共令談合、知行方萬事私慾仕、家中之儀、家老共贔屓次第に仕候ニ付、蘆澤伊賀申立、穗坂常陸は伊賀緣者故一味、佐野は若年故、一味仕候得共、此座へ不出、家老之方、負に成候て、帶金、滿澤、川方、馬場等、御改易被仰付、其身御預に成、穗坂常陸、有泉大學自注、此兩人、上總の小原領御代官被仰付、予孫後に有泉新右衛門、正甲源左衛門組之御土藏番也、は、旗本江被召出、自注、信吉公のつぼね之家老衆と不和故、御存生の時公事剏るゝ也、

〔當代記〕慶長十七年十一月廿八日、於江戸新城、越前國年寄本多伊豆守ト、今村掃部、清水丹後、〇何モ陪臣及對決、兩御所直ニ聞之給、追テ自將軍理非ノ旨急度可仰出ト也、

〔駿府政事錄〕慶長十八年霜月十八日、御放鷹於路次、百姓等上目安、于時代官深澤八九郎與百姓於御前〇徳川秀忠遂對決、直令聞訴給、頗代官私曲、則代官被召上、

〔諸家文書纂十三〕一父富田信濃守〈○知信〉御改易ニ被仰付候儀は、坂崎出羽守〈○成正〉召遣候、坂崎左門と申者、出羽所を立のき、出羽父宇喜多安信所へ参申候を、安信方より信濃ニ左門を預ケ申候、但安信は信濃えうとニて御座候、出羽守妹儀は、我等共〈○富田知信、子知義、〉ニは繼母ニ而御座候事、

一右之左門、信濃守所ニ罷在候由、出羽守承申候様ニと、信濃方江度々申候得共、えうと安信より預り申たるもの、儀に候へば、返し申事難成旨度々断申候へども、出羽守同心無之ニ付、安信と談合仕、信濃知行所を拂申候を、いまだ罷在候と存、是非返候様ニと申處ニ、右之仕合故、左門行方も不存候ニ付、其外ニ而差置申候得者、台德院様將軍宣下之御年、信濃は伏見ニ而兩上様〈○德川家康、秀忠、〉へ當座之御暇申上、在所伊勢津江休息ニ罷越候處ニ、其時出羽守申候ハ、未左門を信濃かくし置候と存、伏見より津江出羽守參候所に、同日に信濃は伊賀越ヲ伏見へ罷登申候、出羽守は本道を參候故、道に而行違申候、其刻信濃家來篠路左兵衛と申者出合、則左兵衛所へおちつき候て、出羽守申候は、彼左門、定而爰元に居可申候間、返候様にと申候所、左兵衛申候は、右より信濃守色々申候へ共、御同心無之に付、爰元を拂申候故、只今何方に罷有候も不存候由申候へば、左候はゞ是迄參候儀、伏見に而其かくれも有間敷に、其とをりに而歸候儀如何候間、さあらば其方を召つれ可罷歸旨申候、左兵衛申候は、他人之儀に候はゞ貴様と信濃守は、兄弟同意之儀に候まゝ、某其を埒明申候儀に候はゞ、何様にも心得申候とて、翌日出羽守と伏見へ罷上り候、其段信濃守は伏見ニ而承候間、急左兵衛を可返由申候得共、出羽守同心不仕候付、此上は出羽守を打はたすべき覺悟候を加藤肥後守、淺野紀伊守など其聞何かと候所に、兩上様御耳に立、出羽守、りふじんの仕合と被思召候、利非之儀は、重而可被仰付候間、信濃ニ堪忍仕候様ニとの爲御上使、大久保相模守、榊原式部大輔、本多佐渡守、山岡道阿彌を以被仰付候、則左兵衛も返し申候、其後又榊原式部大夫爲上使被仰下候は、今度之一儀、伏見ニ而理非可被仰付候得共、御代始之儀ニ候間、江戸へ罷下候へ、

あなたニ而理非可被仰付候旨上意ニ付、違御之御跡ゟ罷下、御當地に四年相詰罷在候處、信濃理
運ニ被仰付、其年與州板島（○伊豫宇和島）へ三萬石餘之加增、都合拾壹万六千石餘拜領仕致入部候事、
一右之左門、出入より肥後へ參居申候處、肥後守死去之後、肥後を出、上方へ罷上候砌、板島より十
里餘口に、みつくへと申舟付御座候、折節それに普請申付、奉行山本總右衛門、渡邊九右衛門と申
者兩人罷在候所ニ、左門、肥州より上りに、みつくへへ舟をよせ、右兩人へ申ニは、永々之浪人、殿手
前、何共不被成候間、信濃女共（○知信夫人、浮田忠家女）は、我等伯母之事ニ候まゝ、少心附を仕くれ候樣ニと兩
人を頼申候、兩人申候は、其方儀、先年大キ成出入有之以後、行方をも信濃不存居申候ニ、左樣之儀
申儀罷成間敷候、達而申候得ば、手前曾而不罷成、大坂迄上り候儀も罷成間敷間、是非頼候由申候
故、渡邊九右衛門、板島へ參、信濃女共ニ申聞候、おい之儀ニ候へば不便ニ存、米百石程とらせ申候、
左門それより大坂へ參居申候内ニ、左門母方之おぢにて新兵衛と申者、左門召遣候不屆儀にて
追出申處ニ、御當地へ罷下、坂崎出羽守所江すぐニ參、みつくへニ而、信濃女共米とらせ候儀、出羽
守ニ申候へば、出羽守よろこび、新兵衛ニほうび仕、追付御老中方へ目安を差上ゲ申候、其剋信濃
在所ニ罷在候處ニ御奉書參、驚則駿府迄罷下相詰申候、權現樣、其年（○慶長十八年）之八月、當御地へ御下
向被爲成候御跡より罷下候、廿日計過、西ノ御丸ニおゐて、兩上樣御前ニ而對決被仰付候、出羽守
方ゟ、右之新兵衛罷出候、信濃方ゟは、山本總右衛門、渡邊九右衛門出シ申候、新兵衛申候は、左門ニ
みつくへニ而米とらせ候儀、信濃も能存じてとらせ候樣ニ申上候、信濃守申上候は、米とらせ候
儀、私一圓不存、坂崎目安差上ゲ申候由、在所ニ而承、則せんさく付候へば、女共方ゟ米とらせ候由
承、迷惑仕候由申上候、其時右之總右衛門、九右衛門申上候は、只今信濃守申上候通、曾而信濃は不
存候、女共方ゟとらせ申候所、少も僞ニて無御座候旨、達而申上候處ニ、權現樣御意ニは、左門ニ米
とらせ候事必定ニ候へば、出羽守申分、尤ニ被思召候との上意候處、又九右衛門申上候は、右ゟ再

三申上候へ共、女どもの米くれ候儀、不存儀有間敷との上意にて、重而理非之處は可被仰付候間、先罷立候へとの儀ニ而、御前罷立候、其後四五日過、爲上使神尾五兵衛、倉橋内匠を被下、左門ニ米とらせ候事、信濃不存儀有間敷と被思召候、其上先年、兩上樣、左門事落着被仰付候所、重而許容仕候段、不屆ニ思召之間、鳥居左京に御預ケ被成之條、岩城へ罷越候へとの上意ニ候、則彼地へ罷越、廿一年巳前ニ、信濃病死仕候、我等儀は、翌年御國御免ニ被仰付、御當地江罷出候事、

〔元和日記〕元和二年六月十日、上總殿〈○家康子忠輝〉御内衆花井主水と、安西右馬丞と申者、御目安を上候て、於御前〈○德川秀忠〉公事對決有、花井主水ハ、上總殿御母方ノ御爪の端をもけがし、御家老分の仁、右馬丞ハ、本ハ文右衛門と申候て、かろき小身者、上總殿の御意に入、此比ハ目付役にて、三百石計の身上也、公事ハ、安西ヨりかけ申候、今度上總殿、御陣へ御立之道、森山にて將軍樣へ御目見ノ爲ニ御出被成、町ニ御出御座被成候御旅宿の前にて、將軍樣ノ小十人衆、長坂六兵衛、富士太兵衛、伊丹彌藏、此三人と、上總殿衆致喧嘩、右ノ三人を打果し申候、其相手ノ本人ハ、石谷縫殿介預候、鳥見の衆壹人、富永大學預候、歩行衆壹人、山田將監組ノ者壹人、以上三人也、其外其場へ馳付申候者數多有之、然に此事、閏六月迄色々穿鑿候間、右の三人の相手欠落申候、今度上總殿御家來衆、江戸にて定而御陣中の儀、幷ニ右の喧嘩の儀御尋被成候はゞ、相手ハ三人ながら欠落申、定而奉行共に御かゝり可被成と致覺悟、せんかたなく存、此安西右馬丞ハ、上樣より御付被成候衆にもあらず、上總殿にて新座御取立の事也、其上横目仕、奉行衆私曲をも委く存候間、殊更皆々にくみ、何とぞ越後にて闇討にいたし捨、森山にての喧嘩の相手に候間、成敗仕候由可申と討手兩人申付候間、右馬丞ひそかに是を聞、越後を忍出、江戸へ參、奉行衆へ目安を捧申上ハ、自分の公事とハ不申、今度大坂表にて、主上總介殿遲成被成、手に御逢不被成候事、奉行共の曲事、就中花井主水が私故也、更に上總殿の御曲事にあらず、御身體ヶ樣に罷成候事、餘御笑止歎敷奉存と申上候間、將軍樣御直

に御聞被成候、

〔東武實錄〕元和四年八月七日、加藤肥後守忠廣ガ家臣等、相分レテ諍論アリ、甲方ハ加藤右馬允、下川久左衛門、並河志摩守、森下儀大夫、庄林隼人、加藤與左衛門、加藤平左衛門、中村將監、齋藤伊豆、及ビ棒庵等、乙方ハ加藤美作、其子丹後、加藤壽林、中川周防、和田備中、玉目丹波、忠廣外舅等三十二人、共ニ江戸ニ來テ是ヲ訴ル、此日公〇德川秀忠ノ命ヲ奉テ酒井雅樂頭忠世ガ家ニ於テ執事奉行人等列會シテ、其訴論ヲ聞ク、肥後國ノ檢使安部四郎五郎正之、朝比奈源六郎、其座ニ列ス、八日、此日モ亦忠世ガ家ニ於テ、忠廣ガ家臣等ガ諍論ヲ聞ク、執事奉行人相集テ是ヲ評議スト云ヘドモ、甲乙ヲ決シ難シ、是ニ依テ其訴論ノ兩詞ヲ記シテ台覽ニ入ル、十日、加藤肥後守忠廣及ビ其家臣等甲乙雙方ヲ御營中ニ召シテ各登城ス、公先ヅ安部四郎五郎正之ヲ召シテ、彼レヲ訴論ノ事ヲ問ヒ給ヒテ後、大廣間ニ出御有テ、其訴ヲ自ラ聞給フ、酒井雅樂頭忠世、本多上野介正純、土井大炊頭利勝、安藤對馬守重信、井伊掃部頭直孝、藤堂和泉守高虎、其外奉行役人等伺候ス、其餘ノ群士廣緣ニ列居セリ、忠廣及ビ家臣等ヲ御前ニ召ス、關齋永喜訴牒ヲ讀ム、甲乙左右ニ分レ、一牒讀ミ畢ル毎ニ諍論ス、甲方ガ云ク、美作守父子、猥ニ國務ヲ妨ゲ恣ニ貪ル、皆是私ノ爲メニシテ忠廣ガ爲メニ非ズ、乙方是ヲ辨ジ、屢詰シ屢辨ズル事、殆ド數回ニ及ブ、玉目丹波ハ、忠廣ガ外舅タル、故ニ忠廣丹波ト同意ノ思ヒ乙方ニ有リト云ヘドモ、年少シテ國ノ政事ヲ辨ヘズ、是ニ依テ終日默然タリ、甲方又云ク、丹波、新ニ大船二艘ヲ造リ、初ハ運送ノ用ナリト云ヘドモ、寅卯ノ兩年ノ大坂擾亂ノ時、兵船トシテ是ヲ大坂ニ合力セントノタメナリ、又齋藤采女ハ、秀賴ノ乳母ノ子ナリ、然ルニ采女肥後國ニ在テ、潛ニ彼レヲ大坂ニ遣ス、是內通ノ爲メナリ、又横江淸四郎肥後ヨリ大坂ニ忍ビ登リ、頓テ歸リ來テ肥後ノ諸士ニ語テ云ク、大坂ノ一戰ニ秀賴大ニ勝利ヲ得テ、東國勢悉ク敗走ス、故ニ家康公ハ京師二條城ニ退キ玉ヒ、秀忠公ハ軍ヲ引テ伏見ニ御籠城アリ、兩君ノ敗亡久シカ

ルマジキノ由ヲ告ル、丹後是ヲ聞テ甚ダ悦ブ、國中ノ諸士大ニ疑フ、此時奉行人等御前ヲ伺ヒ、頻リニ詰問ス、丹波父子等辨答ニアタハズ、安倍四郎五郎ガ言フ處、甲方ト異詞ナシ、右馬允捧庵等能ク訴フ、是ニ依テ彌勝タリ、公入御アリ、列居ノ面々皆退出ス、十一日、横江清四郎、及ビ其黨橋本掃部助、同作大夫、三人斬罪セラル、其餘乙方ノ黨、皆所々ニ配流セラル、忠廣年少シテ、未ダ政事ヲ辨フル事ナキガ故ニ其科輕シ、是ニ依テ赦免在テ領國ヲ除カレズ、甲方右馬允等ヲシテ、元ノ如ク國政ヲ聞カシメ給フ、

〔東武實錄〕寛永九年七月七日、是日松平中務大輔忠知ガ家臣蒲生源左衞門、福西吉左衞門、關十兵衞等、諍論ノ事アリ、御前〇徳川家光ニ於テ是ヲ御裁許有リ、其甲乙ヲ決セラレテ後、酒井雅樂頭忠世ガ宅ニ於テ其科ヲ申シ渡ス、福西吉左衞門ハ豆州大島ニ流罪セラル、關十兵衞ハ、關東八州、駿河、尾張、大津、伏見、大坂、堺、奈良、紀伊國、水戸、江戸ヨリ大坂迄ノ海道筋、右ノ所々ニ居住仕ルマジキノ由ニテ追放セラル、蒲生源左衞門ハ、中務大輔ガ領內ニ罷在ベキノ由仰出サル、〇又見ニ人見私記一

〔大猷院殿御實紀二十七〕寛永十二年三月十日、明日宗對馬守義成、其臣柳川豐前調興爭論を御前〇徳川家光に於て糺問あるべければ、國持幷譜第の大名こと〳〵く登營すべしとふれらる、けふ儒役林道春信勝、御前にて諸老臣と共に會議せしとぞ、十一日、大廣間に出まし、宗對馬守義成、幷家士柳川豐前調興を御前に召て、御みづから糺問し給ふ、よて三家諸大名こと〳〵くまう登り伺候す、十二日、黑書院にて諸大名を御前にめされ仰出されしは、對馬守義成が家臣豐前調興、其主に對し訴論する趣、こと〳〵く對決せしめられしに、調興が申所、一事として證據とせらるべきなし、よて、自殺命せらるべしといへども、國初以來、官事奉りし故をもて、一等を減じ、津輕土佐守政義にあづけられ、その地に配流せらる、調興が郎等松尾七右衞門、幷子一學は、對馬守義成、及び豐前調興が幼稚の時より非義の謀書をつくり來りしをもて、父子共に斬に處せられ、以酊

庵の僧玄方は、その草案をつくりしをもて、これも南部山城守重直にあづけられ、その地に配流せらる、對馬守義成は、こたびその罪をゆるされ、元の如く召仕はる、よりて此後彌朝鮮通交のことを正直に執行ふべし、もし壅蔽の舉動あらんには、速に家國除かるべしとなり、世に傳ふる所は、この訴論のおこり、其かみ神祖、台徳院殿の御時、朝鮮へなし下さるゝ國書に、日本國源御諱としるさる、これ僧承兌が草せしなり、その後元和三年に及び、南禪寺長老傳、國書の草かきて捧るとき、調興申けるは、前年の書に、日本國王としるされず候事、日本いまだ一統せずと覺ゆるなりとて、朝鮮の君臣疑惑を生じ、紛々の論ありき、今度も又そのごとくならんには、韓使等うけおさむまじきよしすでに内議すると聞及べり、今度に於ては國王となし下さるべきよし、あながちに論じければ、長老この事をもて、執政の人々と議し、高麗は夷狄の國なり、日本王と高麗王と書を相通ぜられし事なし、前年の國書を兌長老が草せし所、古の例によれり、此度に至りても、王の字用ひらるべきにあらずと申ける、よて一同に長老の說に歸し、國書の式を改め給はず、王の字をば加へられざりしにより、此事すでに議儀に及びしかば、調興せんかたなく、長老をかたらひ、日本國の下に王の字を書加へて、彼の使に渡しければ、信使も事ゆへなく受納めて歸りしとぞ聞えたり、志かるに寛永八年に至り、義成調興主從訴論に及び、今年に至りて、かく玄方までも罪蒙りしは、國書の式を私に增作せしことあらはれしによりて、主從たがひに其罪の歸する所をあらそひしものにや、されど調興が增作の罪、のがるべきにあらねど、ひとへに我國家のためを思ひ、兩國隣好のやぶれざらん様にとはからひしには、まがふべくもなければ、其罪をばなだめられしならんとぞきこえける、

〔兩足院朝鮮記錄二〕一柳川豐前守者、代々家老筋之者ニ而御座候故、朝鮮筋之御用向、彼者江申付置候處、公命と僞、御所丸と申船使者を彼國江差渡、其上通交ニ私いたし、都而高祖父對馬守私有之樣ニ公儀江訴申出候付、御前公事ニ罷成、豐前非儀ニ相極り、寛永十二年公事落着、豐前儀、津輕江流罪被仰付、配所ニ而相果申候、豐前家來松尾七右衞門父子、御當地ニ而御仕置被仰付候、

〔常憲院殿御實紀三〕天和元年六月廿日、明日松平越後守光長が家人を召れ、御みづから〇德川綱吉御裁斷あるべき旨仰出さる、抑この事は、光長が家の老に小栗美作といへる奸人あり、光長が妹を妻とし、其腹に設けし男子掃部といへるを光長が養子とせむことをたくみけるが、永見大藏、荻田主馬といへる老等を始め、忠あるともがら志を一致し、美作が積年奢侈にふけり、君に不忠し、民を苦しめけることどもを光長にうたへ、美作をおしこめけり、しかるに美作は、さる奸曲の者な

れば、かねてよりかゝることあらんとはかり、光長が長子三河守綱國をばたばかり、また時の元老酒井雅樂頭忠清、大目付渡邊大隅守綱貞などにも深くむつび、常々公の諸有司におのが財寶を盡し、苞苴を行ひ、請謁し置ける程に、綱國より忠清に指揮を請しかば、忠清も兼々美作は、たのもしきものと思ひければ、この事をきゝ、かへつて大藏主馬等始め、忠義のものをあしざまに裁斷し、こと〴〵く府に召寄、公の御沙汰といひて、みな所々に召預け、光長が家國の事をば美作が心まゝに行はしめき、これより家中二に分れ、少しも志あるものは、身のいとまこひ、國を立去もの、去年今年の間に八百人に及べりとぞ、當代御繼統まし〳〵、忠清職ゆるされて後も、猶光長が家中喧擾すること大方ならず、既にこたびつかはされし巡察使に、其所領の民訴狀をさゝげ、美作が虐政をなげくことも度々なり、またこの春其老岡島壹岐、本多七左衞門などいへるものいとまねがひけるに、かれらは公の見參にも入しものなれば、光長が心にまかすべきならずとて上裁を仰しかば、御不審少なからず、前代各所に召預けられし、大藏主馬などをも召寄、美作其外在封の家人等もあまた召のぼせ、評定所にて諸老臣三奉行會集し、しば〳〵鞠問におよびしかど、美作巧辯をふるひ、とにかく裁判しがたきをもて、廷決あるべきよし仰出されしとぞ聞えし、

廿一日、大廣間中段に、御座を設け、下段に三家幷に甲府宰相綱豐卿着座せらる、堀田筑前守正俊は、申次の事奉はる、御次に稻葉美濃守正則、大久保加賀守忠朝、譜第の諸大名番頭始め諸有司伺公、西緣に井伊掃部頭直該、松平讚岐守賴常、松平下總守忠弘、保科重四郎正容、次に少老、其後に儒役、小姓、小納戶、中奧のともがら、東緣に、奏者番、幷に黑木書院伺公の諸有司、目付、使番、落緣に阿部豐後守正武着座し、寺社奉行、大目付、目付も伺公す、かくて召預られしをもて、松平元千代は永見大藏、松平出羽守綱近は荻田主馬、松平越前守綱昌は小栗美作を召つれて出る、やがて大廳には寺社奉行水野右衞門大夫忠春、大目付彥坂壹岐守重紹、目付松平孫大夫重良、藤堂主馬良直差

添、主馬には寺社奉行松平山城守忠勝、大目付坂本右衛門佐重治、目付能勢總十郎元之、土屋市之丞正敬さしそひ、美作には寺社奉行稻葉丹後守正通、大目付內藤新五郎正方、目付田中孫十郎友明、近藤作左衛門用弘差添、このともがらを落緣に北面して蹲踞せしむ、時に中段に出御あり、御後に牧野備後守成貞、幷に御側小姓小納戶伺公す、其時筑前守正俊もて大藏に仰下されしは、美作が奢侈の樣聞え上べしとなり、大藏答奉るは、主人光長が家例にて、年々公より御鷹の鳥給はるとき、家司どもまで會集して拜賜せしむることあり、然るを去々年は、諸家司には告ず、美作父子のみ頂戴せり、この事小といへども、是までかれが奢侈の大凡を察せられ、恩裁をたれ給へといふ、よて美作に其事をとはせ給ふ、美作申けるは、こはみな大藏主馬等が嫉心より、かく何事も思ひたがへしなり、其時は內々にて宴をひらかれたるをもて、家長等を召出さず、愚臣父子はことさら懇遇をもて其宴にあづかりしにて、同僚のともがらを愚臣がおしとゞめたるにあらずと申、其詞も終らざるに、大藏申は、しからばなど同列の家司等さへあづからぬ程の席に、美作父子おのが家人まで召つれて、恩賜の鳥を頂戴せしめしや、すべてかれが巧辯をもて理非を申掠る事、皆此類なれば、先日より評定所にて諸有司に聞え上侍ることども、みないつはりならざるやう聞召給はるべしと申しければ、美作答ふる詞なし、其時正俊もて、主馬に美作が奸曲のさま申上べしとありければ、主馬答奉りしは、美作おのが子を主人光長が養子とせむことを結構せし子細、先日諸宰臣に聞え上しにたがはず、これをもて平日私慾ほしいまゝなる舉動を察したまふべしと申す、かさねて大藏主馬に、美作さほど奸曲なるさま明らかならんに、汝等君の爲を思はゞ、かれが奢侈を光長にうつたへ、光長聞わきまへざらんには、一族にはかり、ともかくも家國安泰ならむやうに鎭むべきを、かれが奸計の發見するまで、など等閑になし置けるやと御尋ありしに、兩人申ハ、美作が權威におそれ、たれも後難をはゞかり、しかとその事を申ものなけれ

ば、無證の事あつかひがたく、時を待候しと答ふ、次に美作に、汝同藩八百有餘の輩にうとまれしは、いかなる故ぞとありしに、美作御請せしは、其事某これまでは、しらずしてまかりありしなり、但し大藏主馬等、兼て諸宰臣に對し、主人光長老年懶惰にして、政事に倦しを幸ひとし、大小の事、某一人にてはかりしよし申といへども、それは全く空言なり、某在職の間、一事たりとも光長にうつたへず私にはからひしことなし、ねがはくは大藏等が妬心よりおこり、某に種々の寃を負しむるところを憐察給はるべしと申す、其時大藏主馬に、など汝等は平生美作に異見を加へざるぞと御尋ありしに、兩人申は、美作事、主人光長の詞だに用ひざるほどのものなれば、いかで臣等が申詞を用ゆべきならねば、みす／＼異見をも加へずと聞え上たり、其時御みづから大聲を發し給ひ、これにて決案す、はやまかり立と宣ふ、座中の輩、震懾せざるものなし、諸有司速に大藏主馬美作を引立て各退出せり、　二十二日、評定所に松平越後守光長が家人等を召出され、各罪を定め下さる、小栗美作、同大六、歷年奢侈につのり、不忠のふるまひなればとて自殺を命せられ、永見大藏、荻田主馬は、八丈島に、岡島壹岐、本多七左衛門は三宅島に、小栗兵庫、同十藏、安藤治左衛門は大島に配流せしむ、これらは美作が奸計の事ども速にはからはず、主人の家國擾亂せしめしとてなり、美作異父兄戸川主水安平は、小姓組の番士たりしが、これも南部遠江守直政に預らる、美作父子は、松平越前守綱昌が邸にて自殺するにより、大目付彥坂壹岐守重紹、坂本右衛門佐重治、目付戸田八郎兵衛忠利、松平孫大夫重良、宮城主殿和澄、土屋市之丞正敬して、これに臨ましめらる、僧一音は、此頃越後の藩士等騷動の事を演義し、越後記と名付、無根の空言を流傳せしをもて、是も八丈島に流さる、けふこのこと裁判終りし旨、三家幷に甲府へ使もて仰つかはさる、

〔江戸町奉行南廳御用覺帳〕天和元年六月二十一日、松平越後守殿家來、永見大藏、小栗美作、荻田主馬、右三人、御城において御直に御穿鑿遊され候由にて、役人として、此方役所〇南より永岡治左衛

門、原善左衞門、增田四郞左衞門、仁杉與兵衞、辻九兵衞、稻澤彥左衞門、向方○北役所中番關谷孫左衞門、村瀨淸左衞門、都筑庄左衞門、羽田長左衞門、大中番吉田十郞兵衞、宵番小原六左衞門、但し孫左衞門、十郞兵衞、六左衞門御差圖にて、同心壹組より十五人宛、雙方三十人、明日六半時、大手腰掛け前まで參着、兩御頭御出御差圖有之、右三人を御預けの家來より請取、百人番所まで召連罷越、御本丸より御左右これあり、右の者ども御玄關まで召つれ罷越、御詮議畢而右三人請取、大手腰掛まで召連罷出、御預けの家來へ相渡罷歸候、　二十二日、恒例の式日相延、俄に評定所に於て、御寄合有之、役人として、此方より安藤小左衞門、高梨善右衞門、佐久間傳左衞門、仁杉與兵衞、辻九兵衞、稻澤彥右衞門、增田四郞左衞門、向方より中番深澤十大夫、柴田十左衞門、中島江右衞門、中村八郞左衞門、大中番都筑庄左衞門、村瀨淸左衞門、羽田長左衞門、同心二十人、四ッ半時より罷出る、於平越後守殿家來、永見大藏、荻田主馬ハ八丈島、岡島壹岐、本多七左衞門は三宅島、小栗兵庫、同十藏、安藤治左衞門は大島、外に出家一番をも大島へ流罪、戶川主水を南部遠江守へ御預け、右之通被仰付候、大御目付內藤新五郞殿被仰渡候、御老中は御出座これなく、外の役人衆、例のごとく列座、御船大將向井將監、小笠原彥大夫、小島助左衞門罷出られ候に付、越後守殿家來には、與力同心附きまゐらず、出家一番には、當番の同心、雙方より二人ッヽ相添、小笠原彥大夫方までさし遣し候、

(伊達確執記)伊達遠江守政德、本家奧州侯ゟ出入之事、

一高拾万石　豫州宇和島城主　伊達遠江守政德

右豫州宇和島の城地は、往古太閤秀吉公の時代、戶田民部少輔領之、其後藤堂和泉守高虎も領之、慶長十三年より、富田信濃守領之、然處右信濃守殿は石州津和野の城主坂崎出羽守と訴論之事有之、信濃守非義に依而宇和島の城地沒收之、右之領拾万三千石、慶長十九年甲寅十二月廿八日、

伊達遠江守秀宗拜領之、十八歳、或廿五歳、右遠江守秀宗、童名兵五郎、仙臺中納言政宗卿の嫡子たりといへども、幼年より大坂へ人質心有之相越され、後に太閤秀吉公の養子と一端成り玉ふ故に、七歳にて從五位下侍從に敍任せらる、政宗卿家督には、次男忠宗卿を嫡子として、本家を相續せられし也、〇中略

權現樣、秀宗事御尋にて、大坂冬御陣後、豫州宇和島拜領之、是は冬御陣に、政宗軍忠の功を褒せらる、思召にて、兵五郎秀宗へ別に被下之けれは、本家よりの分知の譯にて無之、其上政宗卿之嫡男なれば、伊達家の嫡流なり、〇中略

右政德は、中將綱村卿の爲には玄孫にして、中將左兵衛督吉村卿の孫也、當陸奥守宗村卿の爲には甥なり、本家との血次子孫に至りて甚厚き儀なり、殊に寬延二年の頃計らざるに伊達の兩家出入の事出來す、其故如何となれば、伊達遠江守政德の祖父は、仙臺中將綱村卿の次男にして、遠江守家へ養子に差越し、夫よりして、本家の會釋甚落て、古代に替り、旗本の如き挨拶たりといへど、元より綱村卿は實父之事にて、もと本家のことなれば、此一代ば其分に而事濟けるなり、二代目遠江守村年は、中將吉村卿の聟なれば、是又此一代も右の格にて、既に二代右同前なり、先祖より右之格例とおもわれけるが、又は聟のことなれば、父よりの引續故、其分にて事濟來れり、當時遠江守政德事、既に吉村卿の爲には孫なり、陸奥守宗村卿の爲にも甥たりといへども、惜本家よりの會釋を察し思はれけるに、予が家は、元祖政宗の嫡流にして、豫州の地は別に秀宗拜領のことなれば、本家よりの挨拶、家老などより家老どもへ、殿附の書狀等、いかんとしても慮外の體たらく、誠に分知田村同格の會釋、旗下にひとしとて、古代の格例、悉く吟味穿鑿の上にて、其旨本家へ相達せられ、自今此例に有間敷儀と兼て存せられし折柄、今度遠江守政德より、打物幷虎皮鞍覆御免之儀、本家陸奥守方へ何の內談も無之、沙汰なしに公儀へ願はれしこと、本家隱居左兵衛

公事上聽

督被聞及候に付、本家の奉行役後藤孫兵衛、隱居附年寄役中島兵庫を以、遠江守家老共方へ、殿書を以申越候に、遠江守家老より、又殿書にて、右之返答を致候に、此儀は前々より無之例故、兩人も隱居へ伺候へば、其分にて差置候樣にとは有之候得ども、其巳後衆議評定之上にて難捨置、此儀に付、雙方共に、何角と段々の取遣り出入になり、遠江守、都而本家へ對し非分の致方、十三ヶ條書立、在國の陸奥守方へ窺候、得と此段陸奥守被聞屆、來四月、我等參府の節之儀に可被致候間、遠江守歸國御暇出候共、我等參府迄は滯府可被致儀、陸奥守方より被申候ニ付、遠江守より御老中迄願候へば、願之通り相濟、遠江守滯府被致、陸奥守にも參府之上、當四月に至り、兩家より段々の取遣り有之、兩家ともに、公邊之はむき手入有之、遠江守よりも、元來秀宗の由來委敷申上られ、旗下の挨拶、田村同格之譯には無之筈之よし、詳に訟られ、此儀急度御吟味被下度旨也とかや、是によつて御掛りの御老中堀田相模守殿より、遠江守訴訟之事、理の當然とは乍申、本家を片落の御裁許難被成由、先内々にて事濟樣にとの儀にて、伊達紀伊守殿懸り、被取扱といへども、政德中々得心致されず、本家の家老も同心無之、いひがゝりに成りしこと、旁以小事の大事にて、内々にて相濟がたく、依之御内證井伊掃部頭殿にも御取扱のよし、大御所樣〇德川吉宗よりも、御内意なども有之由、其上公儀御書付にて被仰渡、政德家之儀は、兼て公儀にても右之思召も無之間、本家とても其通り相心得、自今本家とも睦敷可仕旨にて、漸事相濟し也、右に付、當四月、〇寛延三年政德豫州への御暇被下といへども、右の一埒不相濟ニ付、滯府被致、事濟み後、本家と相方對面も相濟候上にて、宇和島へ發足致されしとかや、誠に家の中興、政德の器量のほど、是にて察し知るべしとかや、

〔武林玉露　一〕品川御殿而公事御裁許之事

正保二年乙酉二月二十六日、品川へ御成、御殿に於て將軍家〇德川家光公事を被聞召て、將軍家は御障子を被立、其陰に被成御座、廣椽には松平伊豆守信綱、阿部豊後守忠秋、阿部對馬守重次、此三老

並居て、公事人左右の申詞に付、或は子細を尋、或は申詞に不審し、理を盡して裁判する事を聞事四組、其内に二ツは落着し、二ツは先決し難くして流る、公事終る後、御膳を被召上、町奉行神尾備前守、朝倉石見守も其末座に連る、蹲居して折々に所存を申たり、既に御酒に成て、伊豆、豐後、對馬、幷に備前、石見と、此五人を被召出、於御前御酒を被下、此間に被仰出けるは、面々の公事の聞樣、不審の爲、體殘る所もなし、然共思召に少し相違の儀あり、如何となれば、面々上智の分別を以て、下愚の輩が心の不足所へ不審するの間、下臈と愚蒙なれば道理に詰りて、己がいふべき言葉を忘却す、分明に申得ぬ事多きと見えたり、案ずるに面々が不審の如く理をことはり、證據を可取事に證據とらるゝに何ぞ公事に及んや、無智愚鈍なる故に、可斷を斷らず、證據を可取を不取故に公事には及ぶ、唯公事人の口上を聞、其者の智惠の分限を推はかりて、此者が智惠の程にては、是程の義をば可斷者と察して不審し、又渠が智惠のほどにては、是ほどの行届は中々成まじきと推量して、其人の智惠の程に合せ、其程々に相應の不審をも打、其者の申詞の內、理と且始終詞に違なきと相違あるとを能心にあちはひて不審し、且裁判せば、然るべきにやと上意也、何れも承伏しては心付不申、誠に誤りたるに候と申上て退出すといへり、

〔評定所格例〕公事上聽之事

一元祿十丑年十一月十四日、柳澤出羽守宅江御成、於御前〇德川綱吉三奉行江公事裁許被仰付候、

出席御老中　大久保加賀守　阿部豐後守　戶田山城守
　　　　　　土屋相模守　小笠原佐渡守
若年寄　秋元但馬守　加藤越中守　本多伯耆守
寺社奉行　井上大和守　松平志摩守　永井伊賀守
　　　　　戶田能登守

大目付　神尾備中守　前田安藝守
町奉行　川口攝津守　松前伊豆守
御勘定奉行　松平美濃守　井戸對馬守　萩原近江守
御勘定吟味役　諸星傳左衛門
儒者　深尾權左衛門
目安讀　同　權十郎　坂井三左衛門

公事人白洲江出入、召連候もの町與力、麻上下無刀ニ而勤之、　但書記不詳

一此以前二九ニ而、公事上聽有之由之處、留書無之、年月不詳、大猷院樣御代と承傳、

〔舊記拾要集三〕元祿十二年卯十月廿六日、御用覺帳書拔、

一松平右京大夫殿江、御成之節、於御前奉行衆公事訴訟御裁許有之候ニ付、前々之通、兩組與力人指にて被指出候、此節松前伊豆守殿御月番にて、前日出役之與力被召呼被仰渡候、勤方之儀、前前之通、少も無相違相勤候樣にと被仰候、御書付は出不申候、〇中略

一先格之通、與力は染小袖麻上下着し、御前江詰候時は、大小、前之木戸口に指置申候、白洲にて、もも立取不申、手をつき罷在候、繰出し役人ももゝ立取不申、無腰にて相詰申候、同心は羽織袴にて、前之木戸外ニ罷在、木戸之內江公事人繰込申候、與力同心公事人共ニ足袋はき不申候、

一出役之同心組頭ゟ、人指ニ而、此方ゟ五十嵐五助、速永治兵衛、永井藤八郎、三田忠兵衛、速水總左衛門、供番之內ゟ人差にて、長崎藤七郎、山根太左衛門、兩人は御頭供に而相詰申候、向方ゟ太田吉右衛門、中川平大夫、高木孫右衛門、大盧團藏、横川武兵衛、供番之內ゟ、中村九郎左衛門、後藤村右衛門相詰申候、

一廿六日朝六ツ時、伊豆守殿御番所江雙方役人相詰、公事人帳面之通、人數吟味いたし、公事人當

人之外召連不申候、手錠之者、牢舍之もの、丑（〇元祿十年）十一月十四日、幷當閏九月廿一日、御前公事之格式之通、外ニ手鎖を掛ケ召連參候、當日五時前、右京大夫殿屋敷裏門ゟ入、出羽守殿御屋敷之通ニ筵を敷、公事人指置、同心付居申候、

一地方奉行衆ゟ出候公事人、前々之通、近江守殿家來召連參、此方請取、順之通並置、與力は長屋之內江入相待申候、尤出羽守殿格式之通、菓子等被下候、其已後御成前、御殿近所江案內付參り候後而、右京大夫殿用人淺井勝之丞、原田善右衛門江致參會、御殿前御白洲之樣子見申候而、其後差圖有之、公事人御殿近所江繰込、筵を敷差置申候、繰出し役人吟味仕候、

右之通、右京大夫殿ニても、出羽守殿ニ而も、相勤候通、相違無之、御裁許場樣子も前々之通、格式替儀無御座候故、委細記に不及、公事相濟候已後、伊豆守殿江罷越候得ば、前々之通料理被下候、

〔舊記拾要集三〕享保六年丑四月四日、御用覺帳書拔、

一享保六年丑四月四日、吹上御上覽場ニ而、公事訴訟可被爲聽（〇德川吉宗）之旨被仰付候留、

一四月朔日、中山出雲守殿、大岡越前守殿、年番松浦彌次右衛門、吉田十郎兵衛被召呼、被仰渡候は、吹上ニ而公事訴訟被爲聽候ニ付、公事訴訟人、三奉行掛不殘、今明日中、一所ニ書上候筈ニ候、如先例之、與力同心も被差出候旨、其心得仕候樣ニ被仰出候、（〇中略）

一四日五ツ時分、出雲守殿越前守殿、吹上江御出、御白洲江御呼候故、十郎兵衛、彌次右衛門罷越候得者、加納遠江守殿、御頭御立合ニて被仰付候は、公事人御白洲ニて混亂不仕候樣ニ相心得、公事壹ツ之內ニても、訴訟人と相手とは一間程も間を置、並置可申候、評定所之ごとく、並居候所あしく候はゞ、與力立候て差圖可仕旨被仰聞候、暫有之、又御呼候付、樋口次郎左衛門、滿田作左衛門、御白洲江罷越候得ば、右御三人被仰渡候は、公事人御簾之右角之柱之方江向候樣ニ、町人共ニも中間、與力も其心得ニて差圖可仕旨被仰候、追付井上河內守殿、戸田山城守殿、水野和泉

守殿、松平右京大夫殿、松平伊賀守殿、若年寄大久保長門守殿、石川近江守殿、御上り被成候、扨吹上御殿江四ッ時被為成候以後、無間も御徒目付近藤郷左衛門出役之方江參、公事之者入候樣ニ御列座衆御差圖之由申來候ニ付、初手ニ出候公事壹ッ、御白洲入口御幕際迄繰入、初手之公事御白洲江入候と、又跡を繰入、順々ニ溜置申候公事人入候樣ニと御案内有之候ニ付、樋口次郎左衛門、滿田作左衛門、三村傳兵衛、同心三人召連、被仰付候通間を置、壹間程明ヶ御奉行衆之方を向、同心を脇に壹人宛差置、つくばい罷在候、公事人共御白洲江出、並惡敷居候節は、見合立候て並能為仕申候、尤繪圖抔出候節茂罷立候而直し申候、御白洲詰之儀は、見合跡ゟ出候公事之節、二仕切程ニて、中田郷左衛門、松浦彌次右衛門、吉田十郎兵衛、同心三人召連、右之通相勤申候、段々代ル〳〵相勤候内、九ッ半時、御中入在之候、無間茂又公事人入候て、順々御白洲濟、八ッ半時過、公事不殘相濟候て、公事人四人共も、出雲守殿御番所江罷越、相待居候樣ニ申渡相返ス、出役之與力同心は、塀重門之外ニ薄縁敷罷在候得ば、御老中若年寄中御退出、其次ニ三奉行御退出之節、兩御頭仕廻候樣ニ被仰渡候故、何茂御跡ニ付、竹橋外迄罷出、與力は銘々御番所江罷越、御歸を相待候樣ニ被仰渡候故、右之通仕候得ば、越前守殿御歸、御逢被成候上、御料理被下候、同心は竹橋ゟ罷歸申候、出雲守殿方も右同斷、

〔舊記拾要集三〕享保十九年寅九月、大納言樣（○德川吉宗世子家重）於吹上御前公事被仰付候ニ付、兩御組與力同心勤方幷諸伺御下知相濟候一件、

覺

寅九月十一日、三好新助、仁杉幸右衛門、安藤源助、下村彌助、吉田十郎兵衛被召出、近日大納言樣於吹上御前公事御聽被為遊候ニ付、新助、幸右衛門、源助三人は、御白洲可相勤候、彌助、十郎兵衛儀は、繰出シ役相勤候樣ニ御頭被仰渡候、且又明十二日吹上御白洲、御頭方御見分被成候間、幸右衛門、

彌助幷下野守殿方出役兩人申合、四時、竹橋迄罷越、御頭方相待罷在候樣ニ被仰渡候、
一翌十二日、幸右衞門、彌助、向方中山源右衞門、片岡次郎右衞門、此方下役同心川口万右衞門、濱田九郎右衞門、寺澤元右衞門、向方下役同心渥美新兵衞、辻紋右衞門、伊藤儀左衞門召連、竹橋御門外腰懸迄罷越、相待罷在候處、九ツ時過、井上河內守殿、西尾隱岐守殿、仙石信濃守殿、筧播磨守殿、松平隼人正殿、兩御頭御同道にて御越被成、御一所ニ罷越候之樣ニ御頭被仰渡候間、御跡ニ附罷越、吹上御長屋御門ゟ御一所ニ入候處、小普請奉行山岡但馬守殿、御目付服部仲殿、吹上奉行石丸定右衞門、御徒目付秋野彥次郎、御小人目付兩人立合、御白洲御見分ニ付御壹所ニ相越候、其節與力同心居所、御頭御差圖被成候、尤脇指帶候而罷在候義、此方御頭被仰渡候、
一先年は與力股立不取罷在候由、此度茂其通相心得可申哉、且亦同心脇差之義、如何可仕哉と相伺候處、與力股立は、先年も取不申候間、此度も其通ニ可仕候、同心共儀茂、脇差不苦事ニ有之候間、帶候樣ニ爲仕可申旨、兩御頭被仰渡候ニ付、承知仕候段御請申上候、御奉行方御歸路ニ居殘、御徒目付立合、尙又得と遂見分、致申合等罷歸候砌、御番所江幸右衞門計御屆ニ相越、山本左右太江申談候、且又年番中村八郎左衞門江も、於御番所今日之首尾、具ニ申談致歸宅候事、○下略

〔書役勤方云合帳〕寬政二年戌十一月廿三日、於吹上御前(○德川家齊)公事有之ニ付出役書留、○中略
出御朝四時
一御白洲四時過始
一公事之內、河內守殿御懸、手鎖之者有之處、於御場所手鎖懸ヶ不申、證文も取不申、出役與力中ゟ向御番所當番中ヘ文通いたし、手鎖人江町役人御使相添差出候事、○中略
都合十七口之內、十口相濟、殘相流候事、帳面認方余准之、
夕七半時過御白洲相濟、還御、事時一同退散、

一御前公事ニ付、勤方心得、兩年番ゟ被二差出一候伺書之内寫、〇中略

一御前公事之儀、寬保年中ゟは年數も隔候儀ニ而、此度者、新規同樣之處、諸事手都合宜相濟候段、

一統江可レ申聞旨、同廿四日廻狀ニ而申來候事、

一廿四日御頭御時服御頂戴、談合之者江御酒被レ下候事、

一同廿九日、出役之者一同江、爲二御手當一金貳百疋宛被レ下候事、

一御前公事無レ滯相濟、一同御番所江相廻候得者、御酒可レ被レ下處、勝手ニ付御場所ゟ直ニ引取候間、

右爲二御酒代一金百疋宛、同晦日被レ下候事、

但與力中ニは御時服御頂戴之綿被レ下候由、

寬政二年戌十一月

〔續泰平年表〕天保十二年八月十八日、於二吹上一公事裁許上聽、何れも五ツ半時、場所出仕、年寄共、堀大和守、若年寄、御側衆、三奉行、大目付、御目付、御先手頭出仕、御裁許之場、用意宜旨、御側衆ゟ言上、於二吹上一十三間御門通り御臺部屋、內、御駕籠臺ゟ被レ爲レ成、此節年寄共、大和守、若年寄、御通懸御目見、直ニ上覽所御二階江被レ爲レ入、但大和守、若年寄ハ、御白洲ニ而御目見、大目付、御目付、通御之節罷出御目見、御玄關前の方矢來際江、三奉行其外諸役人罷出、板を敷、其上薄縁を敷て、三奉行罷出、少し間を隔、目安讀之留役罷出伺公、奉行後に留役、組頭、留役罷出、奉行之間合東の方江大目付、御目付伺公、御時分宜敷旨、御側衆御案內申二上之一、上覽所は御玄關內之御座敷、三の間通り江御簾懸レ之、御座敷內に而被レ遊二上聞一、御側衆之御前ニ、年寄共、堀大和守、若年寄着座、夫ゟ錠之手に打廻し、御側衆罷在、御廊下口に、御小納戸二人相詰、三奉行并諸役人等、次に公事人御覽御門ゟ出入、同心見合立番申付、御廊門內に筵を敷、公事濟置、御徒目付貳人勤番、御成前ゟ、半藏、田安、竹橋、清水口、御門々々人留、寺社奉行稻葉丹後守、戸田日向守、松平伊賀守、町奉行遠山左衞門尉、矢部駿河守、御勘定奉行佐橋長門守、松平豐前守取二扱之一、

〔於吹上公事上聽一件十六ノ七十二〕戌〇文久二年三月廿二日出　上聽懸達

於二吹上一公事上聽有レ之候節、囚獄取計之義申上候書付、

石出帶刀

近々於二吹上一公事上聽有レ之旨被二仰出一候に付、其節牢舍之者、御呼出有レ之候得共、取計方左之通御座候、

一囚人小手附候儘にて駕籠に乘せ、本人足にて御月番御役所江差出申候、尤刻限は前日御達有之候、

一附添候同心、袴羽織着用、囚人壹人ニ貳人宛之積差出申候、

一囚人駕籠ゟ出候場所は、當日御組出役ゟ差圖請、取計申候、繩取本人足貳人は、始終附置申候、

一囚人食事は握飯に致し、繩取ニ爲持申候、組同心辨當之儀も、懷中爲致申候、且敷物之儀は用意不致、於御場所薄縁御貸被下置候、

一附參候同心、御組出役ゟ差圖請、囚人并繩取共差配仕、御廣御門ゟ操入、差置候場所、是又差圖請申候、

一入牢并出牢之者有之候節は、假御證文被遣候、

一囚人往來之義、竹橋御門江御役所ゟ御斷有之候、

但囚人乘せ參候駕籠、并用意之品は、此御門に差置申候、

右之通、文化元子年、公事上聽有之候節迄、其都度々々奉伺取計申候處、右同年以來、其都度々々伺ニ不及旨、小田切土佐守殿被仰渡候ニ付、文政八酉年、公事上聽有之候節、別段不奉伺、前條之趣一通申上候、且私組同心江赤飯被下候儀も有之、又は燒飯被下候儀も御座候、組同心出役之者名前、并人足人數等は前日に申上候、且又御當日之總公事銘寫壹冊、前日御達被下候、依之申上候、以上、

戌三月　　石出帶刀

老中陣内親裁例

〔評定所格例〕寺社奉行掛吟味物、評定所ニおゐて御老中御陰聞之事、

寛政四子年閏二月十四日

一大乘院門跡取計方之儀、一乘院宮ゟ品々被仰立候一件、寺社奉行掛吟味之義被仰出、依之糺之義、松平和泉守殿御聞可被成間、於評定所先相糺可申旨被仰聞、尤町奉行御勘定奉行江寺社奉

行より前廣通達之、

一乘院宮坊官 二條法印

家司 中沼左京

大乘院門跡坊官 多門院法印

家司 多田長門

南都興福寺地中 普門院

外 三ヶ院

同元地中 松南院

清淨院

右呼出

和泉守殿、評定所江晝時過御出座、

但御玄關より內座次之間通、定例式日之節、三奉行通行通、內座江御着座、尤御退散之節も同樣、

是者、式日御出座之節と違、呼出もの、御玄關次之間ニ罷在候故、右之通、

寺社奉行 松平右京亮

牧野備前守

脇坂淡路守

板倉周防守

御目付 森川主膳

御勘定組頭格寺社奉行支配評定所留役 羽田藤右衛門

寺社奉行支配評定所留役
服部權之進
星野鐵二郎
平山六左衛門

御徒目付
御小人目付
町奉行組
與力同心

寺社奉行四人、御目付五人、評席御障子外正面江順々列座、和泉守殿者、御障子内書詞之間、例之通御衝立内ニ而御陰聞有之、勿論御障子横之界際少し切明る、

但留役四人者、例之席ニ而書留いたし、町與力者例之席江出、繰入等差引いたし、白洲蹲踞者町同心、殿立番劒ニ而兩人ヅヽ罷出、

右糺相濟、和泉守殿、又内座江御入、御料理等無之御退散、

但評定所留役組頭甲斐庄武助、其外留役、御勘定方書役等、定式之通、御用所江詰候得共、右糺中者、聞之戸建寄置、本文之御席江者不被出候事、尤評定所番者、定例之通出勤之事、

寛政四子年閏二月廿三日

一西本願寺門跡と興正寺門跡本末論、寺社奉行掛吟味之義被仰出、依之糺之義、松平伊豆守殿御陰聞可被成間、評定所ニおゐて、先相糺可申旨被仰聞、右次第、前條大乘院門跡取計方之義、一乘院宮々品々被仰立候一件之通、

西本願寺門跡坊官
下間兵部卿
家司
七里内膳

役僧 安楽寺

寒松寺

結番 廣泉寺

興正寺坊官 下間式部卿

家老 中川監物

役僧 實相庵

同 萬福寺

同 常願寺

右呼出

奉行并御目付、其外役人前條之通、

古事類苑

法律部五十九

下編下

聽訟下

遠國奉行裁判　八三九
京都所司代裁判　八四二
京都町奉行裁判　八四四
伏見奉行裁判　八六〇
大坂町奉行裁判　同
甲府勤番支配裁判　八七二
長崎奉行裁判　八七四
奈良奉行裁判　八七六
駿府町奉行裁判　八八一
山田奉行裁判　八八三
堺奉行裁判　八八四
浦賀奉行裁判　同
佐渡奉行裁判　八八八
日光奉行裁判　八八九

松前奉行裁判　八九一
郡代代官裁判　八九七
領主裁判　九〇七
頭人聽訟　九一〇
滯訟　九一一
拒裁決　九二〇
詞訟庭不敬　九三四
裁許遺忘　九三五
雜載　九三六

古事類苑

法律部五十九

下編下

聽訟下

〔京兆府尹記事 一〕拾壹所奉行職掌之事

諸州に奉行職を置るゝ事十一ヶ所、其一は伏見奉行、山城國伏見其二は長崎奉行、肥前國其三は京都町奉行、其四は大坂町奉行、其五は日光奉行、下野國其六は山田奉行、伊勢其七は奈良奉行、大和其八は堺奉行、和泉其九は浦賀奉行、相模國其十は駿河奉行、駿河府中其十一は佐渡奉行なり、一ヶ所の奉行と任せらるゝ事なれば、尤其人柄をえらみ給ふ事なり、

○按ズルニ、遠國奉行ハ、此後下田奉行、及ビ神戸、神奈川、箱館、新潟等ノ奉行アリ、

〔憲教類典 四ノ五評定〕寛永十二乙亥年十一月十四日

關東御代官并百姓等御用訴訟之事

一御代官方御用訴訟并百姓訴訟之事

是ハ樣子せんさく致、大形成儀者、濟可申候、不及分別儀ハ、御定之寄合場にて相談仕可申付候、其上不相濟儀ハ可言上事、

一御代官衆と百姓出入之事

是ハせんさく仕、御定之寄合江出之、裁許爲致可申付事、其上不相濟儀ハ可爲言上事、○中略

寛永十二亥年十一月十四日

○按ズルニ、御定寄合場トハ、遠國奉行所ヲ云フナランン、

〔評定所書留三〕一遠國之奉行、在府中、一兩度宛、向後評定所立合之節、出席可仕旨被仰渡、今日立合

御寄合江、山田奉行長谷川周防守、堺奉行桑山三郎右衛門御出座有之候事、

寶永三戌年四月廿五日

御用覺帳寫之候事

〔御定書例書〕遠國奉行所江武家之家來不差登事

寶暦十四申年二月

一江戸ニ罷在候武家之家來、遠國奉行所ニ而、相尋候儀有之ハ、尋之趣、懸り之遠國奉行より寺社

奉行江申越、江戸表ニ而吟味之上、口上書取之、遠國奉行江可差遣事、

但打合不相糺候而難分ハ、一件江戸江呼出、吟味可致候、

〔牧民金鑑二十〕天明元丑年二月

別紙之通、松平〇松右京大夫殿江御居之上、伏見、京、大坂、奈良、堺奉行中江掛合、いづれも承知ニ候

間、右之趣ニ相心得取計、此外之儀ハ是迄之通心得申合、區々不相成樣可被致候、以上、

二月三日

松　伊豆守〇松平秀持、勘定奉行、

山　信濃守〇山村良旺、江戸町奉行、

桑　伊豫守〇桑原盛員、大目付、

安　彈正少弼〇安藤惟要、大目付、

小堀數馬殿

外六人宛

一御料所村方ゟ、他支配之御料、井私領江掛り候諸出入ハ、訴訟方村方ゟ奉行所江出訴可致候、私

領出訴之出入も、同樣奉行所之取捌と存候、

一御料所村方ニ人殺疵付口論其外都而違變有之、私領之もの之仕業ニ候ハヽ、右私領之ものを相手取、御料所村方ゟ出訴可致間、奉行所之取捌と存候、

一御料所村方之もの、他所之ものを殺、或ハ疵付吟味可相願、親類他所ニ有之、他所ゟ出訴いたし候歟、無左候ハヽ御代官ゟ可差出間、奉行所之取捌と存候、

但口論其外違變も、同樣之趣意ニ御座候、

一御料所村內之人殺疵付口論、其外之違變ニ而、他所之者ハ引合計ニ候ハヽ、地頭江懸合、一件御代官ニ而吟味爲致可申候、

一御料所村方ニ而、盜賊火附等召捕候ハヽ、他領之ものニ而も、旅宿ニ而も、假令他支配私領等ニ引合ハ勿論、同類有之候共、御代官ニ而吟味爲致可申候、

一右御代官ニ而、吟味爲致候引合ニ、伏見、京都、大坂、奈良、堺町方之もの加候ハヽ、其所之奉行所江御代官ゟ可申達間、一件奉行所は取捌と存候、

是ハ拙者共方ニ而之吟味ニ而ハ、他之奉行所支配之ものも、互に呼出候事ニ御座候得共、御代官之役所江、奉行直支配町方之もの呼出候ニハ有之間敷ニ付、前々ゟ本文之通相心得罷在候、併御料所村方ニ出作地所持いたし候もの、出作地江附候御年貢等之儀ハ、奉行直支配町方之ものニ而も、其御代官ニ而爲相糺可申候、

一御代官吟味難澁いたし、奉行所江差出之儀、御代官ゟ相伺、候得ハ、假令一支配之ものニ而も、是迄其度々、其所之奉行江懸合、右奉行所江爲差出來候間、以來右類ハ、拙者共江不及伺、御代官ゟ其所之奉行所江直ニ爲差出可申候、

但御預所も、御代官所同樣御座候、

右之外、品替候儀有之候ハヽ、其度々時宜ニ寄、御掛合可申候、以上、

子十二月

○按ズルニ、是ハ遠國奉行所ノ規定ナリ、

〔天保集成絲綸錄七十五〕寛政三亥年九月

三奉行江

遠國奉行、評定所江出座之儀、寛永之度相達候趣も有之處、いつとなく發足前可致出座而已候樣ニ相成、見習之詮も無之候、以來寛永之度相達候通、在江戸之内、二三度程出席いたし、右度數之外ニも、見習度候ハヾ、伺候而出座候樣可被相達候、

右之通大目付江相達候間、可被得其意候、尤數度出座之儀ニ候間、評議物等之差支ニ相成候ハヾ、其節ハ別間江爲被候とも、爲致退散候共、可被致候、

〔新張紙留〕一見習之遠國奉行、退散後、評議物幷再席之裁許有之候例、

松浦伊勢守掛

一武州熊谷宿龜吉儀、領分拂之身分ニ而、右領分之ものを相手取、目安裏判申請候一件、裁許之積、雙方ゟ評定所江差出候處、浦賀奉行小笠原大膳出席ニ付、同人退散後、相談書讀之、評議相濟、一座再席之上、裁許申渡候事、

右文政四巳年十月廿五日一座評決

京都所司代裁判

〔被仰出留九〕覺

今度評定所の例に准せられ、京都におゐても、毎月式日を定め、京伏見の奉行中、在京の御目付中、和泉守水野忠之所司代宅に會合し、畿内近江丹波播磨八箇國の公事訴訟等、衆中僉議之上ニ裁許すへき由被仰出候、自今以後ハ、郡國等境論の事、公家門跡方に相かゝり候事、又ハ町奉行中、相談にて事決し難き事等ハ、式日に召出し、裁許あるへく候、此外の事に至てハ、只今迄の例のごとく、町奉

行所にて裁断を遂らるべく候、以上、

正徳四年十月廿八日

山城守〔○戸田忠眞、老中、〕
紀伊守〔○松平信庸、老中、〕
大和守〔○久世重之、老中、〕
豊後守〔○阿部正喬、老中、〕
河内守〔○井上正岑、老中、〕
相模守〔○土屋政直、老中、〕

山口安房守殿
諏訪肥後守殿

〔被仰出留 九〕覺

一式日に召出し可レ有二裁許一事共の例ハ、覺書にしるし候、猶又町奉行中被二申談一候て、よろしく議定有べき事、

一伏見奉行所の事ハ、御役所も程遠く候間、式日の度々會合可レ有レ之ハ、大儀の事に候間、此旨を以て被二申談一、一月に一度ツヽも會合有レ之候共、よろしく議定有べき事、

一地方等の事に就ては、小堀仁右衛門、其外御代官衆召集め候て、被二相尋一候事も可レ有レ之候間、これ又可レ被レ得二其意一事、

以上

午〔○正徳四年〕十月廿八日

〔享保集成絲綸錄 四十四〕正徳五年六月

一丹州龜山國恩寺、於二大坂一開帳之儀、願之通可レ仕旨被二申渡一候趣、京都所司代江申届候様ニ可レ被レ申

聞候、向後ハ五畿内近江丹波播磨、此八ヶ國之分ハ、於所司代公事訴訟をも被承候間、右之類之願等、京都ニ而相屆、其以後申出候樣ニ可被心得候、以上、

二月

先頃丹波龜山國恩寺、於大坂開帳之儀、願之通可仕旨申渡候趣、京都所司代江申屆候樣ニ可申聞候、尤向後ハ五畿内近江丹波播磨、此八ヶ國之分ハ、於所司代公事訴訟をも被承候間、右之類之願等、京都ニ而相屆、其以後申出候樣ニ可相心得由、御書付を以被仰聞候、右之趣ニ御座候得ハ、願人相手雙方共ニ、八ヶ國之内ニ候得ハ、京都ニ而裁許可有之哉、願人ハ八ヶ國之者ニ而、相手他國ニ候はヽ、京都江屆申候上、御當地江願出候ハ裁許可仕候哉、右兩樣之義奉伺候、當時も此類願出候も御座候、

六月

右付紙八ヶ國之内ニ候得ハ、京都にて裁許可有之候願人ハ八ヶ國之内之者ニ而、相手他國之者候ハヽ、所司代江相屆候上、御當地江願出候ハヽ裁許可有之候、

京都町奉行職掌

〔京兆府尹記事〕一京都町奉行職掌

千石以下、貳百俵位之方も、器量あれば台命を蒙り、御役中は千五百石高、御役料現米六百石、〇中略從五位下朝散大夫にて、芙蓉之間詰被仰付、兩人にて相勤る、西御役所東御役所と二ヶ所に分る、月番を以て政務を執行ふ、〇中略

一攝家宮方、淸華之御方、堂上方とも、都而御行跡、其外何によらず、所司代の御目にとゞめらるゝ事なれば、町奉行も平日其品を聞合せ、所司代江申す、尤諸願ひ萬事は、傳奏を以て所司代江申す、所司代より町奉行江調方被仰付、町奉行其品を糺し、尋て其善惡を所司代江告るゆゑ、攝家たりとも、町奉行を輕しむる事あたはず、おのづから威勢は遠國諸奉行の上に立て、高位高官

の人も恐れをなすの御役なれは、常に其身を愼み、政務の正路を專らとする事所要にして、則西國三十三ヶ國の手本と成義、御役の所詮にて、上方御代官を支配する事、御役の第六也、此任を蒙るは、十人御目付、幷奈良奉行、堺奉行、駿河町奉行等也、轉役する時は、大抵御勘定奉行となり、（此御役は三千石高なり）格別あしきにもあらずといふは、御作事奉行、御普請奉行等なり、（兩御役とも二千石高也）

〔憲法編年錄十七〕寬文八年十二月六日

宮崎若狹守殿、雨宮對馬守殿、始而京都町方支配被仰付候節御書付、

覺

一京都町中公事訴訟ニ付、板倉周防守、牧野佐渡守、被定置候數ヶ條、彌可相守之事、

一如前々、毎月二日、宿老町中無懈怠寄合、諸事可遂吟味候、從先規書出有之儀者、町中一同ニ可專其旨事、

一當申年以前之公事訴訟申出間敷候、縱當年之評論たりといふとも、牧野佐渡守承り、裁許幷裏判不被出之輩者、不可申來事、

右之通、京中可相觸者也、

寬文八年申十二月六日　　對馬守判

若狹守判

上京町代

右之通同文言ニ而、下京中江も被出置候、

〔憲教類典五ノ十八京町觸〕元和二壬戌年八月廿日

京都町中可令觸知條々

一諸人訴訟の事

右裁許之時、論訴雙方之外、奉行所江不可來、但親子兄弟ハ非制之限、此外一切令停止之、若雙方可爲證據人ハ同前可罷出、兼て又去元和五年以前之訴訟、不可申來事、○中略

以前條々所相定也、町中不殘可令觸知者也、

○按ズルニ、是ハ京都町奉行所ノ規定ナリ、

〔京都御役所向大概覺書四〕両組與力同心并雜色町代神文前書之事

公事方起請文前書

一公事方御役儀相勤候上者、御公儀之事不依何事、御後闇儀仕間敷候、勿論貴人親類緣者傍輩惡心申合、一味仕間鋪候、若惡事被頼候者、早速可申上候、兼而被仰出候御法度之趣違背仕間鋪事、

附相役は中惡鋪不仕、萬端不貽心底可及相談候、并雜色町代と申合、諸事依怙贔屓仕間鋪事、

一公事訴訟人取次并僉議等之儀、心之及程入念承屆、有體可申上候、勿論依怙贔屓なく、正路ニ可相勤事、

附申渡等之儀、入念不可挾私意事、○中略

右條々雖爲一事於致違犯者、

罰文

年號月日　　公事方

宛所用人中

〔武家嚴制錄二十〕京都所司代板倉氏父子公事扱掟條々

掟

一訴訟人作法之儀、不限晝夜、奉行所江參候は、不依貴賤高下、聊無其構、奉公人町人ニ而も、其身爲仁體衆をバ、遠侍所、或廣間江可呼入、凡下之者、土民等ハ、庭上ニ可差置候、此方訴人之口上、又者

不聞對決已前、彼公事之相手、此方家中之者雖爲緣者、贔屓爲事善惡之取沙汰、一言も仕ニおいては、曲事ニ可申付候、自然申次ニて相濟事をば、此方ゟ人差を以可申付候、其時或耽賄賂、又以贔屓之趣申掠候はゞ、已來聞付次第、以罪輕重、改易殺害之間可申付事、

一同訴訟人、心持之義、先奉行所ヘ可申旨を、町人は其町人、殊十人與、百姓は爲其在所人と令談合、少之以得失、於相濟義は、其身は不及申、一門親類、隣家之知音として致馳走、和平之調儀、肝要也、然を本人は不聞、他之異見傍より佞人出來候て、寄事を左右、以助言小事を大事ニ申成は、其根元を聞屆不及、殺害程之儀をば、過代之籠舍五十日、惡事助言之者をば過代之籠舍、其以可爲自由事、

付訴訟人之儀、以女人之內證致沙汰事、一切令停止畢、若以女人之口上企訴訟之由申唱候はば、注進可申候、尤可令褒美候、惣別對論之輩、不遂對決以前、片口上不可聞屆之間、兼而は其思案肝要也、

〔京都御役所向大概覺書 二〕公事訴訟日之事

訴訟日

二日　六日　十二日　十六日　廿一日

公事日

四日　九日　十四日　十八日　廿六日

先年者、右之通候處、雨宮對馬守、宮崎若狹守、御役之時分相改、

四日　七日　九日　十二日　十四日　十六日　十八日　廿一日　廿三日

廿七日

右十日、公事訴訟共承候、

元祿三午四月、前田安藝守、小出淡路守、御役之時分、

公事訴訟日

四日(裏判)　六日　九日　十一日(裏判)　十三日　十四日(西御丸前甲府様御鉄日ニ付除レ之)　十八日(裏判)　廿一日　廿五日　廿七日(裏判)

寶永六丑三月、安藤駿河守、中根攝津守、御役之時分、

公事訴訟日

二日　四日(裏判)　六日　十一日(裏判)　十八日(裏判)　廿一日　廿三日　廿五日　廿七日(裏判)

正德五未二月、水野和泉守殿幷山口安房守、諏訪肥後守、在役改、

式日

二日　十一日　廿一日

但京都所司代、同兩町奉行、伏見奉行、在京御目付、所司代於御宅立會、但松平伊賀守殿御所司代、享保三戌年五月式日相止、

公事訴訟日

四日(裏判)　七日　十二日(裏判)　十八日　廿三日(裏判)　廿七日

享保三戌年五月廿八日改、公事訴訟日、

二日　四日(裏判)　六日　十一日(裏判)　十八日　廿一日(裏判)　廿三日　廿五日(裏判)　廿七日

〔御定書百箇條〕目安裏書初判之事〇中略

享保七年極

一山城大和近江丹波　京都町奉行

但雙方共、右四ヶ國之者に候ハヾ、京都町奉行にて取捌、〇中略

從二前々一之例

右八ヶ國(山城、大和、近江、丹波、和泉、河內、攝津、播磨、)之內にても、京都大坂町奉行支配違、又ハ餘國(江)懸候出入ハ、寺社奉

行月番可致初判候、尤雙方共右同支配之出入ハ、御當地江訴出候はゞ、支配之奉行所江罷出候様申渡、取上申間敷事、

〔牧民金鑑 二〕京大坂支配國之辨

一山城大和近江丹波
右四ヶ國之御料私領より、四ヶ國之内江懸候出入、
　是は京都町奉行ニ而取捌

一山城大和近江丹波
右四ヶ國之御料より、大坂支配國之外、餘國江懸候出入、
　是は御勘定奉行

一京都より大坂并京都支配國之外、餘國江懸候出入、
　是は寺社奉行
　　大坂も右ニ准

〔目安秘書 乾〕京都町奉行、奈良奉行、吟味物之議定、其外仕來之儀、兩奉行ゟ差出候書面
子〇文政十一年十一月六日、下野守殿、一覽候様、一座江御渡、同月十四日一覽付いたし、神奈孫之丞を以、豐後守返達、

當地町奉行、奈良奉行吟味物、銘々掛り物之儀、兼而御承知被置度旨御定、并前々仕來とも、委細取調申進候様ニ思召候旨被仰下、致承知度段は先達而申進候、則町奉行奈良奉行江取調可申聞旨相達候處、別紙之通、夫々書付差出候間、寫貳通入御披見候、右ニ而御承知可被下候、以上、

十月廿五日　水野越前守〇忠邦、于時京都所司代、
　青山下野守様〇忠裕、于時老中、

吟味物懸り場之儀取調申上候書付

神尾山城守

私共吟味掛り場之議定、幷前々之仕來とも、委細取調可申上旨、御書付を以被仰渡候、此儀、私共掛場之儀、山城、大和、近江、丹波、四ヶ國之内、伏見之儀は、不依何事伏見奉行ニ而吟味仕、大和之儀は、同國寺社地方之外、金銀出入盗賊變死跡式等は、奈良奉行ニ而吟味仕候、

一支配國外餘國江懸り候出入は、先は打合吟味難相成筋と奉存候得共、支配國之ものと支配國外、大坂町奉行、堺奉行支配之もの打交有之候出入は、其所之奉行江懸合、當表江呼出、打合吟味仕來申候、

一支配國外之もの、其所之奉行、又は御代官添翰を以、當表之もの相手取、訴訟いたし候節は、打合吟味仕來申候、

一堂上方家來ゟ、支配國内之諸家、京住幷在所ニ罷在候分、相手取候出入、打合吟味仕來申候、

但、諸家家來ゟ、堂上方家來相手取候出入も、本文同樣仕來申候、

一支配國之ものゟ、支配國外之もの相手取候出入、其所之奉行、又は御代官江相願度、添翰願出候節、夫々差出申候、

但私領江相願度、添翰願出候節、先格ニ見合、私領家來江、組與力共ゟ添狀爲差遣候儀仕來申候、

一支配國外之もの、領主家來添狀を以、當地之もの相手取願出候節、先格有之分は、吟味仕來申候、

一大和國ニ而盗惡事いたし候もの召捕候得ば、當表ニ而吟味仕來申候、

一他之奉行支配之もの、當支配之外ニ而之盗惡事いたし候もの召捕、當地ニ引合之もの無之分は、其奉行江懸合、返書次第ニ而引渡候儀も有之、當地ニ而吟味詰候事有之仕來ニ御座候、

一奉行無之餘國之もの、盗惡事いたし、當地ニ而召捕、當地引合無之、全一領之儀ニ候はゝ、領主地頭江引合、前同樣取計、他領入組引合等有之分は、當表ニ而吟味詰候仕來ニ御座候、

一盗惡事いたし候もの召捕、支配國外ニ引合有之分、其奉行領主地頭支配江申達、引合之もの呼出、當地ニ而吟味仕來申候、

一召捕もの之儀、住所有無ニ不拘、手當いたし、支配國外江追込、手延ニも難相成節は、召捕候上、其所之奉行、又は御代官、私領は家來江一應引合候上、召捕候儀仕來申候、

但支配國内ニ而も、私領人別之もの、夫々領内ニ而召捕候節、跡ニ而一通り達置候儀も御座候、乍然井伊掃部頭領分江入込召捕之節、先度申立候趣も有之、召捕候以前、當地留守居之もの江内意申達置候仕來ニ御座候、

右之外、品替り候儀有之、又は其品ニ寄、舊例ニ引合取扱候儀ニ有之候、依之此段申上候、以上、

子九月

神尾備中守

松平伊勢守

〔評定所留役覺書〕吟味事掛り場

一京都支配國同國之出入者、公私領共、御定并天明七評議廿番之主意ニ而、京都町奉行取捌、

訴　四ヶ國
右之内　私領
御料

〇一貸金出入
訴　藤波三位
答　紀州田口村

出入

安永二巳年評議廿六番
寺社奉行初判

同評ニ而御勘定奉行初判

大坂町奉行支配
四ヶ國
伏見町方
奈良町方
堺町方

答

寛政九巳評議卅七番寺社奉行初判

〔徳川禁令考十五 御勘定奉行勘定吟味役〕享保十九甲寅年八月

京都代官所事務ノ儀ニ付達書

一京都町奉行支配御代官小堀仁右衛門、鈴木小右衛門、御代官所公事訴訟并自分江懸り候儀者、只今迄之通京都町奉行江相達、御取箇、在方御普請、夫食種貸、其外地方江附候御用向者、向後町奉行江不及相達、御勘定奉行江両人より直ニも相達、御勘定奉行取計可申事、

〔享保集成絲綸録四十四〕享保二十一辰年四月

御勘定奉行江

江戸より被遣候御目付、此已後年々京都大坂交代前、町奉行月番役宅門前江訴狀箱出し置候町方之義ハ、定日訴狀箱出し有之候間、市中ハ夫ニ而相濟候得共、百姓などは、右訴狀箱江入候儀ハ心付申間敷候、此度之義、先ハ町へもかゝり、第一在々百姓共致承知、御代官善惡并手代名主等、私曲有之候はゞ、其段訴候爲ニ候間、右之趣相心得、江戸江言上致度儀有之候はゞ、書付持參いたし、右之箱江入可申候、依之訴狀箱出し候前、所々江高札建之、日限等も記し候間、高札の趣ニ相心得可申候事、

四月

右之趣、五畿内御料村々江可相觸旨、御代官江可被申渡候、

（御仕置例類集二）安永九子年御渡

所司代伺

一禁裏御繪符紛失いたし候一件何れニ而可致吟味哉評議、

伊勢外宮一禰宜江安永四未年、禁裏御繪符相渡り有之、去亥九月、恒例御祓獻上之節、右御繪符相用、檜垣大和と申もの相勤、歸路於勢州關宿、右御繪符致紛失候儀ニ付、久世出雲守書面、幷書付寫四通、去月廿六日御渡被成、右一件何れ之於奉行所吟味可仕筋ニ御座候哉、評議仕可申上旨被仰聞候、

此儀評議仕候處、東海道關宿役人共、重之吟味ニ候ハヽ、道中奉行江呼出、相糺可申筋ニ候得共、檜垣大和を重ニ可相尋儀ニ御座候處、大和者、勢州住居之ものと相聞候間、山田奉行ニ而吟味仕、關宿之もの、其外懸り合之もの有之候ハヽ引合ニ而是又山田奉行江呼出、吟味可仕筋ニも可有御座處、今般之一件ハ、禁裏御繪符之儀ニ而、藤波家ゟ吟味之儀被申立、勢州者、京都之支配國ニ者無御座候得共、京都町奉行江吟味御下ゲ被成可然哉ニ奉存候、

朱書 但元文四未年、小林孫四郎御代官所但州朝來郡村々百姓共強訴徒黨之一件、京都之支配國ニ者無御座候得共、京都町奉行之吟味ニ相成候儀ニ御座候、

子四月

朱書 評議之通濟

（御仕置例類集一ノ二）享和三亥年御渡

所司代伺

一梅園右兵衛督被申立候、大坂住居之もの吟味之儀ニ付評議、

去月十七日、評議いたし可申上旨被仰聞、御渡被成候所司代伺書、其外書面とも一覽仕候處、梅園右兵衛督家來木村二万次郎、妻離緣之儀ニ付、大坂立賣堀南裏町富田屋七兵衛借屋ニ罷在候、姫路屋宇左衛門、不埓之取計いたし候旨ニ而、吟味之儀、京都町奉行所ゟ右兵衛督被申立、其後大坂町奉行所江も同樣被申立候得共、京都并大坂表ニ而も吟味難成筋之段、夫々町奉行ゟ申達候處、右奉行所之內ニ而吟味無之、江戶表江家來被差下候樣相成候而ハ、人少殊ニ逼迫ニ付、差支候由ニ而、京都町奉行所ニおゐて、吟味有之候樣被致度旨、右兵衛督被申立、所司代書面之趣も、彼地町奉行江吟味之儀可申渡哉、相伺候旨ニ御座候、

此儀御定書ニ、山城大和近江丹波、四ヶ國之ものに候はゞ、京都町奉行所ニ而取捌、支配違、又ハ餘國江懸り候出入ハ、寺社奉行月番可致初判と有之、梅園右兵衛督ゟ、大坂住居之もの、吟味之儀被申立候を、京都町奉行所ニ而、吟味仕候筋ニは有御座間敷、安永二巳年、評議ニ御下ゲ被成候、所司代相伺候、妙法院宮家司申立候、京都大佛殿修復銀之內、仙石越前守領分丹後國古澤村外四ヶ村百姓共江貸附候分、返濟相滯一件、御當地江吟味之儀可被仰立候得共、無人ニ付、京都町奉行所ニおゐて、濟方申付有之候樣被成度旨ニ候處、評議之上、右町奉行所ニ而ハ、吟味難成筋ニ付、妙法院宮家來之內壹人罷下り、寺社奉行江吟味之儀申立候樣可申達旨被仰達、可然哉之段申上、其通相濟、去ル辰年、評議ニ御下被成候、京都町奉行相伺候、西大路家家來ゟ、大坂表之もの共を相手取候、預金銀諸道具取戾願一件も、評議之上、寺社奉行江吟味可被仰渡筋之段申上候儀有之、右兵衛督被申立候趣、彼地町奉行ニ而ハ、吟味難成儀ニ付、右兵衛督被申立候趣ハ、不被及御沙汰筋ニ御座候、然共難澁之譯、無據相聞、江戶表江差下し候儀、實ニ難儀ニ候ハヾ、願相止候樣ニも可相成、遠國私領之もの、江戶表江不呼出、最寄御代官ニ而吟味被仰付候儀も有

之、右離滋之趣意ハ同樣之儀故、右兵衞督願ニ不拘、京都町奉行江吟味被仰渡、右兵衞督ゟ別紙を以、京都ニ而吟味有之樣いたし度旨之書面ハ差戾ニ相成候樣、所司代江被仰達可然哉ニ奉存候、

亥六月

貼附

御書面之趣、所司代江被仰達候旨被仰聞、承知仕候、

亥七月九日　評定所一座

下書

七月日次飛脚ニ遣之

青山下野守忠裕江〇申遣候趣

梅園右兵衞督家來木村二万次郎、妻離別之儀ニ付、〇中略右兵衞督儀、小身逼迫ニ而、人少之由ニ候得バ、當地江家來等差下候而ハ、萬事差支候趣も無餘儀筋ニ相聞、殊ニ申立之趣ニ而ハ、宇左衞門取計も法外之儀ニ而、若其地ニおいて吟味難成節ハ、願も難被致、其儘ニ成行候はゞ、却而風俗ニも拘り可申哉ニ付、今度右一件之儀ハ、其地於町奉行所吟味いたし候樣可被申渡候、尤以來右樣之儀、都而於其地吟味有之候と申筋ニハ無之、其次第ニも可寄事ニ候間、其段ハ程能御附之者迄被達置候方と存候、以上、

七月　連名

青山下野守殿

〔御仕置例類集一ノ二〕文化二丑年御渡

所司代伺

一攝州四天王寺聖靈會之節、關白殿御使と申僞候林三位外壹人吟味之儀ニ付評議、

去月七日御渡被成候稲葉丹後守相伺候、當二月攝州四天王寺聖靈會之節、關白殿御使と申偽、林三位後藤左七郎と相名乘、舞樂見物いたし候上、右役附書付爲差出候趣、樂人共ゟ關白殿達聞ニ候處、右兩人共家來は勿論館江入候ものニも無之、然ル處左七郎は、其後御當地江罷越候趣相聞候ニ付、已後右體紛敷儀有之候而は、御當職中御迷惑ニ被有之候旨被申立、無餘儀相聞、不取留儀ニは候得共、一件吟味可被仰付哉之段相伺申候、

此儀、聖靈會之節、關白殿使と申偽、舞樂致見物候林三位後藤左七郎と相名乘候もの共儀、林三位と申ものは、名住所も不取留ものニ有之、左七郎は其後御當地江罷越候由ニ付、小田切土佐守組之もの江申付爲相探候得共、行衛相知不申候、何れにも左七郎は主謀之ものと相聞、右之ものを吟味不仕候而は相決不申、同人儀は儒者ニ而、其節迄は京都衣棚ニ住居致し罷在候趣ニ付、其節之家主井請人等身寄之ものも可有御座儀ニ付、一件吟味之儀、京都町奉行江可申渡旨被仰達可然哉ニ奉存候、

丑七月

緒　附

御書面之通、稲葉丹後守江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

丑八月十八日　評定所一座

扣下野守

八月十八日之次飛脚ニ遣之

稲葉丹後守江申遣候趣

當二月於攝州四天王寺聖靈會之節、鷹司關白殿使之由申偽、林三位後藤左七郎と申もの罷越、舞樂見物いたし候趣相聞候、以後右體之紛敷儀無之樣被致度旨、鷹司殿ゟ吟味之儀被申立候ニ付、家司差出候書付寫井其地町奉行差出候書付寫等被越之、到來、被申越候趣令承知候、林三位と申

ものは、名前住所も不慥候得共、左七郎儀は、其後江戸表江罷越候由申聞置候由ニ候間、當地町奉行方ニ而相尋候得共、行衞不相知候、然ル處、同人儀は其地衣棚に住居之ものに有之候由ニ候間、其所之家主請人其外身寄之もの共をも相糺候はゞ、行衞相知候儀も可有之間、右之趣を以、於其地一件吟味致し申聞候樣、町奉行江可被申渡候、以上、

八月十八日　　　　　連名

稻葉丹後守殿

〔御仕置例類集一ノ二〕京都町奉行取計方

一怪敷もの召捕、糺之上、江戸表之ものニ而惡事いたし迯參り、京都井右支配國ニ而は惡事無之段相決候ものは、御當地江差下、町奉行江引渡、或は召捕候もの、江戸井支配國之ものニ無之、餘國御料私領之ものニ而、惡事も餘國ニ而いたし、京都井支配國ニ拘り合無之ものゝ取計方等、書面燒失ニ付難相分、關東之外私領之分、寺社奉行江引渡候例も相見不申候得共、品ニ寄懸合之上引渡候心得ニ而、尤引渡候は、奉行所有之場所ニ限り候儀ニも無之、餘國之もの、餘國ニ而致惡事候もの召捕候を承り、其領主江請取度旨申立候得ば、引渡候儀、間々有之、聊ニ而も他ニ拘り合有之候得ば、所司代江申達、吟味いたし候儀等、先格を以取計來、右體之者、御代官江引渡候儀は無之、尤京都ニ而召捕吟味詰候ものゝ內、遠國引合有之候得ば、呼出、又は不呼出可相濟程之儀は、夫々其所之奉行領主支配等江懸合相糺候儀ニ而、且從來無宿ニ而江戸其外ニ而之惡事及白狀、京都井支配國ニ拘り合無之節は、其品ニ寄、前書之趣ニ准じ、其所之奉行等江掛合之上於京都致吟味候仕來ニ而、勿論前書領主地頭より申立有之引渡候儀も、都而所司代江申達取計候由ニ御座候、〇中略

右京大坂町奉行江掛合承糺候處、書面之通ニ御座候、依之申上候、

寅〇文化三年十二月

〔御仕置例類集一ノ二〕文化四卯年御渡

所司代伺

一京都町奉行支配國外武家之家來吟味之儀ニ付評議、

去月七日評議致し可申上旨被仰聞御渡被成候所司代書面一覽仕候處、於京都町奉行所仙石越前守家來西山彌左衛門致吟味候處、有馬左兵衛佐家來今井彥三郎、落合平輔ニ引合候間、呼出吟味可致處、右平輔ハ大坂表、彥三郎ハ越前國丸岡ニ罷在、支配國外武家之家來之儀ニ付、御當地ニおゐて、左兵衛佐江可被仰渡哉、又ハ懸合呼出し、一件寄合吟味可致哉之旨京都町奉行相伺候處、差當例も相見不申候ニ付、如何相達可申哉之趣ニ御座候、

此儀京都町奉行支配國外武家之家來引合候一件ニ付、御當地江呼下し可及吟味品ニ候得共、格別遠國之儀、一件之もの共難儀可仕、〇中略京都町奉行ゟ、有馬左兵衛佐江懸合、彥三郎平輔共呼出、一件打合吟味可致旨、右町奉行江申渡候樣被仰達可然哉ニ奉存候、

卯六月

〔御仕置例類集二ノ二〕文政二卯年御渡

所司代伺

一京都町奉行支配國之出入、相手方領主家來ゟ品々申立候付、一件評定所一座江引渡方之儀評議、

當月三日評議致可申上旨被仰聞御渡被成候、所司代伺書、其外書物類繪圖等一覽仕候處、去々丑年、井伊掃部頭領分江州平方村ゟ、堀田豐前守領分同國宮川村相手取候、中島道普請出入、同十一月、對決申付候處、雙方品々申爭居候內、中島道損所致出來、假橋之儀ニ付、豐前守家來ゟ品々申立

候趣、枝葉而已之儀ニ無之、元來雙方百姓共之出入、領主ゟ之申立ヲ以、家來井雙方一同致吟味候
儀は、先例も無之候間、一件三奉行江引渡候樣可致哉之旨、彼地町奉行相伺候趣ニ御座候、
此儀中島道損所假繕之儀ニ付、豐前守家來ゟ申立候趣、枝葉而已之儀ニ無之、元來百姓共之出入に候を、領主ゟの申立を以、家來井雙方一同吟味致候義は、先例無之由ニ付、當卯正月、評議ニ御下ケ被成候、所司代相伺候、二條殿領知、丹波國細川村地内を、小出信濃守領分、同國柏原村之もの共、切開住居致候由之一件、京都町奉行心得ニ而ハ、吟味取掛り之儀、細川村ゟ爲致出訴候方ニ可有之由、見込之趣ニ候得共、素々村方ゟ申立候儀ニ無之、然上は、村方之者共のみ致吟味候ては相決申間敷、右は二條殿家來相糺、其趣ヲ以、信濃守家來をも可相糺儀ニて、京都町奉行支配國内之吟味物ニ付、二條殿井信濃守家來、村方一同打合吟味可致旨、京都町奉行江申渡、其段傳奏衆江可申達旨、所司代江被仰達、可然哉旨申上、其通被仰達候例有之、尤右例を二條殿被申立候趣を以、吟味取懸り、今般之一件は、平方村と宮川村、中島道普請出入吟味中、宮川村領主豐前守家來ゟ、陣屋役人呼出、尋有之候樣致度旨申立、書付差出候儀には候へ共、出入之品ニ寄候而は、其領主家來をも可相糺段、勿論之儀ニて、強而先例ニ可拘筋も有之間敷、京都町奉行支配國内之吟味物、遠路江戸表江呼下し候樣罷成候而も、支配國之詮無之不可然、素々平方村井筋淩土砂を、豐前守陣屋前、中島道江揚置候段、出入之起本ニ而、損所取繕之差支をも生じ候次第ニ至り候儀ニも相聞、然上は品ニ寄、右領主掃部頭家來をも不相糺候而は、難相決儀も可有之哉ニ奉存候、左候はゞ、右兩家之家來、雙方村方一同打合吟味可致旨、彼地町奉行江申渡候樣、所司代江被仰達可然哉ニ奉存候、

卯十一月

緒

御書面之通、所司代江被仰遣候旨被仰聞、承知仕候、

〔基量卿記〕元祿十年七月廿六日、賀茂社社司、氏人と有二相論一、氏人着二衣冠一參社之儀、爲二七家社司社法氏人着二衣冠一事無レ之訴、申二關白ヵ武家へ被レ達、去廿一日、相方二條町奉行へ召寄、氏人申分不レ逹、兩人閉門、（內日向一人、常春着二衣冠一參社、舊冬敍二四品一歟、依二此儀一急度愼可レ申由、又伊豫一人、此度者、諸家執聞頭申事、逹而申レ之、違背由閉門レ）

伏見奉行裁判

〔京兆府尹記事 一〕伏見奉行職掌

一萬石以上、以下ハ六千石位、世々其任を蒙り、たとへ萬石以下たりとも大名役なり、位は從五位下則朝散大夫なり、○中略

一御役所附御領村々御年貢取上、其村々幷伏見六地藏町中の政道公事裁判御仕置取行ふ、且又御城山支配する儀第四の御役なり、○中略

評曰、○中略伏見奉行の所司代にかわらざる事を百年計り以前の事なりしが、しばらくは京都町奉行三人に仰付られ、伏見表江一ヶ月替りに勤役せし事有けるが、西國の御備へゆゑ、いかゞなりとて、以前の如く大名役にぞ成ける、

大坂町奉行裁判

〔京兆府尹記事 二〕大坂町奉行職掌

一千石以下貳百俵位之人も有、又ハ三千石位の人も此任に進む、御役中千五百石高、御役料なし、（今ハ有二現米六百石一）從五位下朝散大夫にて、芙蓉之間被二仰付一、兩人にて相勤る、西御番所東御番所と二ヶ所ニ分て、隔月月番を以て政務を執行ふ、○中略

一攝州播州河州泉州の四ヶ國を支配して、公事裁判を取行ひ、非常ハ御城代の御下知を以て政務す、是御役の第四なり、御役向寺社の奉行は兼ずといへども、十人御目付、幷堺奉行、駿府町奉行等より昇進す、或ハ御使番より昇進も有、是は稀なる事也、○中略轉役ハ京都町奉行進み口と同じ、

〔御定書百箇條〕目安裏書初判之事

享保七年極
一和泉河内攝津播磨　　大坂町奉行

但右同斷、○雙方共右四ヶ國之者に候はゞ大坂町奉行にて取捌、

從二前々一之例
右八ヶ國之内にても、京都大坂町奉行支配違、又ハ餘國江懸候出入ハ、寺社奉行月番可レ致二初判一候、

尤雙方共右同支配之出入ハ、御當地江訴出候はゞ、支配之奉行所江罷出候樣申渡、取上申間敷事、

〔牧民金鑑　一〕吟味物掛場ニ付類集書抜

類集二之帳
一御代官万年七郎右衛門召仕仲間を、御料所地内ニ而、松平内藏頭家來及二殺害一候一件、

朱書
是ハ最寄ニ付、大坂町奉行ニ而吟味之積、

一支配國内之もの同士之出入引合ニ而、他國之もの呼出候義ニ付評議、

朱書
大坂町奉行所ニ而引合、一同吟味之積、尤十四番ニも可レ見合、

一大坂表之者より武家之家來江相掛候、貸金出入取扱之義評議、

朱書
取扱方、一旦江戸之通ニ相成、又候復古、

一大坂表ニ而惡事有レ之もの、他國ニ而相對死仕損候一件、

朱書
大坂町奉行ニ而吟味之積、○年月闕

〔享保集成糸綸錄　四十四〕享保十二未年九月　　酒井讃岐守

向後於二大坂一も京都之通、町奉行所屋敷前ニ、訴狀入候箱出し置候樣ニ被二仰出一候間、可レ被レ存二其趣一候、

町奉行月番御役宅門前江、訴狀箱出シ候日、

每月

二日　十二日　廿一日

〔享保集成絲綸錄四十四〕元文元辰年八月

建札文言

覺

江戶ゟ被遣候御目付、大坂發足前、町奉行月番役宅門前江、來廿七日訴狀箱出し置候間、江戶江言上仕度儀これ有バ、書付持參いたし、右の箱江入可申事、

一御仕置筋の儀ニ付、御爲ニなるべきしなの事、

一諸役人を始め、私曲ひぶんこれある事、幷御料村々にて、御代官又ハ手代庄屋等、私曲ひぶんの事、

一訴訟これある時、役人せんぎをとげず、永々捨置ニおゐては、直訴すべきむね、相ことわり候上出すべき事、

右之類直訴すべき事

一自分ためよろしき儀、或は私のいこんを以、人の惡事申間敷事、

一何事によらず、自分たしかにしらざる儀を、人ニたのまれ、直訴いたすまじき事、

一訴訟等の儀、その筋々の役所へいまだ申出ざるうち、あるひはさいきよいまだ濟ざるうち、此所やう申出まじき事、

一總じてありていを申さず、すこしにても事を取つくろひ、きよせつかきのせ申まじき事、

右之類は取上なし、かきものはすなはちやきすつべし、尤たくみ事のしなによりて、罪科に行るべし、かきものは堅く封じもち來るべし、訴人の名幷宿書付これなくば、これまた取上ざるもの也、

月日　奉行

於大坂御目付交代前、訴狀箱出シ候付、高札建候日、

二月十五日　八月十五日

訴狀箱出シ候日

二月廿七日　八月廿七日

高札建候場所

野田町端　天滿池田町端　曾根崎新地三丁目端　玉造平野町端　長町九丁目端

〔天明集成絲綸錄四十九〕寶曆十二午年五月

三奉行江

武家寺社相手取候金銀出入、於大坂町奉行所ハ濟方不申付候處、此度於大坂町人共ゟ爲差出候金子、追々町々江貸渡、其町々ゟ拜借金と名目を附、何れ江成共貸附候筈之間、武家寺社共、望之者江ハ、相對次第貸附候樣申渡候ニ付、若返濟相滯訴出候節ハ、右金銀出入計ニ限、武家寺社共ニ大坂町奉行所江呼出、濟方申付候樣相達候間、爲心得相達候、

五月

〔法曹後鑑〕大坂公事方取計一件

訴訟日　二日　十三日　廿二日

公事日　六日　十六日　廿七日

右公事訴訟日、左之通相改申候、

公事訴訟日、

二日　六日　十三日　十八日　廿一日　廿七日

○按ズルニ、本書年月闕ケタレドモ、蓋シ寶暦年間ノ規定ナラン、

〔天明集成絲綸錄四十九〕明和四未年七月

三奉行江

大坂表貸金銀出入取計方之儀、以來ハ當地ニ而貸金銀取計方之通、借用高ニ不ㇾ拘、三十日限濟方申渡、右日限不₂相濟₁候はゞ、高ニ應、切金ニ申付、尤先訴後訴之差別なく、幾口にても右之通取計候筈ニ候、委細之儀ハ、何も江承合候樣相達候間、可ㇾ被ㇾ得₂其意₁候、

七月

〔天明集成絲綸錄四十九〕安永三午年七月

大坂於₂町奉行所₁、金銀出入取捌方之儀、雙方共攝河泉播四ケ國之者ニ候はゞ、大坂町奉行所ニ而取捌、餘國江掛候出入ハ、寺社奉行、又ハ御勘定奉行江添翰を以差出、且大坂幷攝河泉播金銀出入、江戶表取捌之通、切金ニ申付候樣、九年以前戌年、八年以前亥年相違候處、其後借用金賣掛金之類、都而返濟方行屆兼、遠國金銀取引手狹ニ成、通用不ㇾ宜候、依ㇾ之大坂幷攝河泉播之金銀出入取計ハ勿論之儀、中國四國西國之者ニ而も、金銀出入之儀におゐては、享保年中、北條安房守大坂町奉行勤役之節、伺相濟候通、以來取計候樣、大坂町奉行江可ㇾ被₂申渡₁候、

七月

右之通、大坂御城代江申渡候間、其旨可ㇾ被₂相心得₁候、

〔御仕置例類集二〕安永三午年御渡

御三卿家老申上

一攝州播州領知之變事取計方之儀ニ付評議

當月五日御渡被ㇾ成候、御三卿家老差上候書付一覽仕候處、御三卿上方筋領知之內、攝州播州村々

之變事者、大坂町奉行ニ而取捌候處、他之懸合無之、一手限之分者、於大坂取計無之趣、先達而彼地ゟ村觸有之候間、關東甲州筋領知村々、公事出入吟味もの之通り、攝州播州村々之變事も、領知向役人共相糺、難決節者、其度々家老ゟ申上、其筋之奉行所江、吟味之儀可被仰渡筋も可有御座哉之處、遠路之儀故、手延ニも相成候品可有御座候間、領知向役人共方ニ而難決品、或者入牢等申付候類者、其度々領知向役人共ゟ申達、於奉行所ニ吟味有之樣、大坂町奉行江被仰渡御座候樣仕度、此段申上候、

此儀去ル寅年伺之上、大坂町奉行江申達候、彼地支配國之ものゟ、餘國江懸り候出入等、取計方ヶ條之內ニ者、別紙之通有之、○別紙略一領一地頭之變事を、直ニ奉行所江請取、取計候筋ニ者無御座、領主地頭ニ而吟味難決類者、其度々於奉行所ニ吟味之儀申上、其筋之奉行所江御渡被成候儀ニ御座候得共、御三卿攝州播州領知者、遠國之儀ニ而、手延ニ難成品者、領知役人ゟ申達、大坂町奉行ニ而吟味有之候樣仕度段申上、兼而御差圖之上、彼地町奉行ニ而、直ニ請取吟味仕候ハバ、振候筋ニも有御座間敷候間、右之趣大坂町奉行江被仰渡、手延ニ難成品者、領知役人ゟ申達、大坂町奉行江差出、其度々御屆申上候樣、御三卿家老江被仰渡可然哉ニ奉存候、

午七月

〔牧民金鑑一〕京大坂支配國之辨○中略

一山城　大和　近江　丹波

右四ヶ國之御料より、大坂支配國之外、餘國江懸候出入、

是ハ御勘定奉行

一京都より、大坂井京都支配國之外、餘國江懸り候出入、

是ハ寺社奉行

大坂も右ニ准

一和泉　河内　攝津　播磨

右雙方共、四ヶ國之ものニ候ハヽ、大坂町奉行ニ而取捌、

一大坂町人より、同所寺院江懸り候出入、

一大坂寺院より同所町人江懸り候出入、

一和泉河内攝津播磨寺社之出入、

右類之出入、只今迄大坂町奉行添翰を以、寺社奉行江訴出候得共、以來一宗法義ニ拘り候義ハ、本寺觸頭江相願候樣申渡、其外出入、大坂支配國内ニ候ハヽ、大坂ニおゐて取捌、金銀出入、大坂支配國外江懸り候出入、幷寺社御咎等之儀ハ、吟味之趣、寺社奉行江掛合、存寄を承り、大坂ニおゐて裁許仕候樣被仰渡可然旨、子十月、一座より申上候所、其通り御差圖有之、

〔大坂表出入取計一件書〕天明元丑年七月

貸金銀出入取計方之儀ニ付、大坂御城代江被仰渡書、

大坂表貸金銀出入之取計、大坂三郷町中、幷攝、河、泉、播四ヶ國より、阿波、淡路、讃岐、伊豫、土佐、備前、備中、備後、美作、安藝、周防、長門、出雲、伯耆、石見、因幡、隱岐、筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、右貳拾八ヶ國江懸り候出入ハ、大坂幷私領之出入ハ寺社奉行、御料之出訴ハ御勘定奉行、月番初判、一座裏判目安を以、評定所江呼出、吟味之上、裁許可致儀ニ候得共、借金銀出入計ハ、仕來之通、大坂町奉行所ニ而取捌可申候、右之内、和泉一ヶ國ハ、是又仕來を以、堺奉行取計と可相心得候、

一大坂支配四ヶ國より、京都支配四ヶ國江相懸り候出入、幷京都支配國より、大坂支配國江掛候出入、京、大坂、伏見、奈良、堺町方、幷私領之出訴ハ寺社奉行、御料之出訴ハ御勘定奉行、月番初判、一

座裏判目安を以、評定所江呼出し、吟味之上、裁許可致儀ニ候得共、借金銀出入計ハ、大坂支配國
より、山城、近江、丹波江懸候分京都町奉行、右之内、伏見奉行支配場江掛候ハ伏見奉行、大和江懸
候出入ハ、奈良奉行ニ而取捌、京都支配國より大坂支配國江懸候出入ハ、大坂ニ而取捌、右之内
和泉一ケ國ハ堺奉行ニ而取捌候段、前々仕來之通、相心得可申候、

但京都、伏見、奈良、堺奉行支配之もの一紙に相手取候貸金銀出入も、同樣之趣意に相心得、仕
來之通、大坂町奉行ニ而取捌可申候、

一右之外國々江懸候出入ハ、借金銀之儀ニ而も、大坂幷私領之出訴ハ寺社奉行、御料之出訴ハ御
勘定奉行、月番初判と相心得、其筋江添翰いたし差出可申候、

右之通借金銀出入ニおゐて、都而前々仕來之通取計、借金銀出入ハ、去ル戌年之申渡、幷評定所一
座江申達候通ニ相心得、混雜不致樣取計可申候、併是迄評定所一座裏判目安を以、相懸候候出入
ハ、大坂表ニ告訴有之候得ハ、相手方差下不申候得共、以來大坂表ニ先訴有之候共、一座裏判目安
を以、呼出候相手方之もの共ハ、差日ニ急度可差出候、滯儀有之候はヽ、評定所一座江懸合可申候、
右之通大坂町奉行江可被申渡候、以上、

〔目安秘書〕乾 大坂表之もの同所幷京都伏見奈良堺等之ものを一紙ニ相手取候貸金出入、大坂町
奉行ニ而取捌、

天明二寅年評議

大坂町奉行伺、寺社奉行江添翰願出候節、取計方之儀評議、

評定所一座 ○中略

此儀去ル亥年十一月廿三日御渡被成候節、評議仕申上候通、山城、大和、近江、丹波、雙方とも右四
ケ國之ものニ候はヽ、京都町奉行ニ而取捌、和泉、河內、攝津、播磨雙方とも、右四ケ國之ものに候

はゞ、大坂町奉行に而取捌、右八ヶ國之内ニ而も、京都大坂町奉行支配違、又は餘國ニ懸り候出入は、寺社奉行月番、初判可致旨之御定ニ御座候間、大坂町奉行添翰ニ而、寺社奉行月番江出訴可仕儀ニ御座候、然ル處、去ル未年、大坂町奉行相伺候、大坂表借金銀出入、并京都、伏見奈良、堺奉行支配之もの加り候出入取計之儀評議仕、松平右近將監殿江申上候處、其通相濟候旨、去丑七月九日、松平右京大夫殿被仰聞候、右評議書之内、京都、伏見、奈良、堺奉行支配所之もの、一紙ニ相手取候貸金出入も、仕來之通、大坂町奉行ニ而、取捌可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

寅 七月

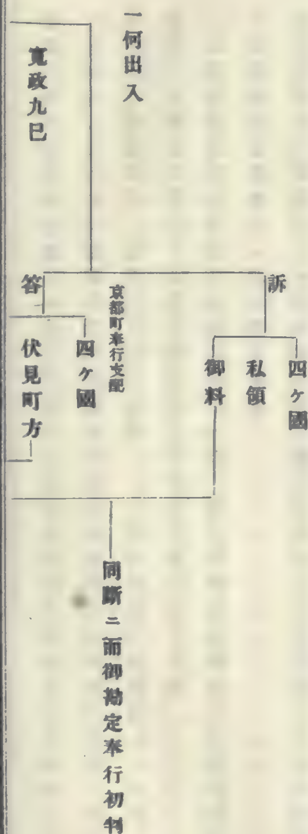
〔牧民金鑑 一〕吟味事懸り場○中略

一大坂支配國同士之出入は、御料私領共、御定并天明七未貳拾番之評議ニ而、大坂町奉行取捌、

〔評定所留役覺書〕吟味事懸り場○中略

一大坂支配國同士之出入者、公私領を不論、御定并天明七未廿番之評議ニ而、大坂町奉行取捌、

大坂町奉行支配



卅七番評議
寺社奉行初判
一何出入
奈良町方
堺町方
大坂町人
四ヶ國御料
同私領
右四ヶ國之外
國々江懸
同断ニ而御勘定奉行初判
大坂町奉行より寺
社奉行江添備を以
出ス天明七未評議
二十番

〔御仕置例類集一ノ三〕文化十三子年御渡

大坂御城代伺

一作州備中國両國江爲捕方大坂町奉行組之もの差遣候儀ニ付評議
去子十二月十六日、致評議可申上旨被仰聞御渡被成候、大坂御城代ゟ之書面一覧仕候處、作州備中両國ニおゐて、如何之風聞有之ものとも爲召捕、大坂町奉行組之者差遣候儀ニ付、右町奉行伺之趣取調候處、備中國之儀、人氣惡敷、至而不宜風聞ニ相聞候間、右風聞之趣、寛政十午年申上候處、右は支配國ニは無之候得共、手近之事ニ付、大坂町奉行より捕方之もの差遣、追々御仕置申付候上、尚又取締方之儀も、致勘辨相伺候樣可申渡旨、其節ニ至り、其向御代官領主等江も、取締方等之儀可被仰渡由ニ付、其段大坂町奉行江申渡、尚又勘辨仕候趣、其後追々申上、惡黨共召捕、吟味詰相伺候砌、此後迚も、如何之風聞有之候はゞ、御城代江申上、早速召捕として組之者共差遣候心得ニ候旨、併向後召捕候節、其度每吟味之趣相伺候而は、道中之日數茂相懸り、自然と落着延引仕候付

而は、一件引合差添之もの等、遠國罷出、難儀可仕哉ニ付、已來當表ニて差圖有之候樣仕度旨、右町奉行申聞候趣相伺候處、右御仕置筋難決事等は、定例之通相伺、其外之儀は、都度々々申上候ニ不及旨被仰渡候已來、去ル丑年、阿部播磨守御城代之節、大坂町奉行ニ而、風聞等相糺候處、又々相弛ミ、備中國ニ而は、隱留博弈等專ら致流行、京大坂ニ而入墨御仕置申付候盜賊抔も、多分入り込居候由風聞有之候ニ付、別段組之ものを可差遣處、例年讃州鹽飽島ヘ爲見分、組之もの差遣候時節ニ付、最寄之儀ニ茂有之候間、右往來之內、都合次第爲召捕可申旨、播磨守手限ニ而承屆、兩組之もの差遣、盜賊共召捕罷歸、夫々御仕置申付候趣之由、此度之もの差遣候儀、殊ニ年數茂相立候儀故、申上候上、差圖可然方ニ可有御座處、往返等日數相掛、手延ニ相成候而は自然相響、兼而當表手當之もののは、外惡黨共逃散候而は、町奉行共致心配候詮茂薄相成、前書丑年御用序ながらも、支配國外ニ而召捕もの致候儀は同樣之儀、旁町奉行伺之通、捕方之もの差遣候樣手限ニ而申達候由、備中國は勿論、右隣國等江惡黨共入込、或は博弈等相催候而は、專ら土地之風俗ニ拘り候儀ニ付、此已後迚茂、寬政度之趣、相心得可申儀とは存候得共、程經候儀ニ付、以來之心得茂尙又伺置申度、大坂町奉行差出候書付類相添、取計方相伺候趣ニ御座候、

此儀大坂町奉行相添候別紙之內、寬政之度備中國惡黨もの捕方之儀ニ付、伊豆守殿御書取又者御下知之趣茂有之候間、惡黨もの致增長候節は、支配國外ニ候共、捕方差遣候は格別之儀ニ而、大坂御城代幷同所於町奉行ニ茂、其心得ニは可有之候得共、備中國之外、支配國外江度々捕方之もの差遣候樣ニ而は、往々支配國內外の差別無之樣成行申間敷共難申、左候而は、目安裏判初判之御定ニ茂振候樣相成可申哉、夫々其所支配領主地頭等茂有之、其筋々ニ而取締方も可致儀ニ付、大坂町奉行より進而穿鑿不致候而も、支配領主地頭等ニ而可捨置筋茂無之、若格別ニ惡黨ども入込、不取締之儀茂有之候はゝ、其支配領主地頭江心付可申儀ニ有之、寬政三亥

年日光奉行相伺候日光近邊惡黨并怪敷もの捕方之儀、其節評議之上申上候處、御神領ニ而怪敷もの見掛、同心ども召捕候節逃去、近邊御料私領江立入候はゝ、其支配領主地頭江申達置、同心ども差遣、爲召捕可申、若申達候上ニ而は、手延ニ可相成ものは、直ニ附込召捕、其段跡ニ而可申達、尤右ニ引合候もの、御料私領ニ有之節茂、右之通心得、且近邊御料私領ニ潛被居候共、御神領江は不立入、并引合ニ而も無之ものは、容易ニ爲捕申間敷、右體之もの有之趣及承候はゝ、其節々早々可申上旨日光奉行江被仰渡候例茂有之候間、已來兼而捕方手當致し置候もの、或は支配國内に而怪敷もの見掛、組之もの召捕候節逃去、支配國外國々ニ罷在候類茂、其所支配領主地頭江申達、組之もの差遣召捕、若申達候上ニ而は、手延ニ可相成ものは、直に召捕、其段跡ニ而申達、且支配國外備中國、其外近國ニ而惡黨もの徘徊致し、惡事樣子増長致し候節は、其支配領主地頭江心付、其上ニ茂取締方不行屆、惡黨ども致増長候はゝ、捕方之儀相伺候樣、大坂町奉行江兼而申渡置、右町奉行相伺候はゝ、勘辨之上手延ニ難成義は、大坂町奉行江、大坂御城代手限ニ而及差圖、尤其節々前書之通、其所支配領主地頭江不洩樣通達可仕段申渡候樣被仰達可然哉ニ奉存候、

丑二月

御書面之通、大坂御城代江被仰達候旨被仰聞、承知仕候、

丑六月十九日　　評定所一座

（御仕置例類集二ノ二）文政七申年御渡

御勘定奉行　石川主水正　曾我豐後守　伺

一御家人加り候一件、大坂町奉行所にて吟味之儀評議、

去月十九日致評議可申上旨被仰聞御渡被成候、石川主水正、曾我豐後守申上候書面一覧仕候處、

大岡源右衞門御代官所、石州那賀郡温泉村之もの共、不正荷物取扱候一件引合之內、源右衞門手附幷銀山役人等も加り、御代官にて吟味難致、唐物拔荷之儀ニ付而は、文化之度、御觸も有之候儀ニ付、大坂町奉行江引渡候樣可仕哉之段相伺申候、

此儀不正之荷物取扱候ものは、御料所之者ニ而、御代官手附幷銀山役人共引合有之儀ニ付、一體は御勘定奉行江爲差出吟味可致品ニ候得共、遠路呼下シ候而は、一件之者共可致難義儀、拔荷不正之意味も有之、全く吟味ものに付、天明六午年評議ニ御下被成候、御勘定奉行相伺候、御代官万年七郎右衞門召仕中間を、同人御代官所、備中國都宇郡下庄村地內往還ニ而、松平內藏頭家來及殺害候一件、於奉行所吟味之儀申上、評議之上、御料所內ニ而、御代官召仕中間を內藏頭家來及殺害引合之內ニは、御代官手代御料所百姓も有之候一件ニ付、一座において吟味可仕筋之處、右家來を手當申付、御當地江呼出候儀、小身之地頭杯、右體之儀有之候節は、差支之筋も可有御座、公事出入共違、吟味もの之儀ニ付、大坂町奉行ニ而吟味仕可申上旨被仰渡可然哉と申上、其通相濟候例も有之、〇中略追々一件多人數ニも可相成、其時々遠路呼下候而は、吟味詰之期も遲々いたし、最初より出府のもの、長々致逗留候次第ニ相成、別而及難儀候儀ニ有之候間、旁大坂町奉行ニ而吟味いたし候方可然、尤右奉行ニ而、支配國外住居之御家人を吟味いたし候先例、差當相見不申候得共、素々御家人重モ之吟味ニ無之、全引合迄之儀、其上別紙書拔之通、佐渡奉行掛ニ而、御家人を致吟味候先例も御座候間、伺之通、右一件大坂町奉行江引渡候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

申
三月

朱書
評議之通濟

〔享保集成絲綸錄四十四〕元文元辰年八月

甲府勤番支配裁判

御勘定奉行江

江戸ゟ駿府江被遣候御目付、此已後年々甲府へ罷越し、逗留中甲府ニ而、御目付小屋門前へ訴狀箱出置候、甲府町中在々百姓共、役人御代官善惡、幷手代名主等私曲有之候はヽ、其段訴候爲ニ候間、江戸江言上致度儀有之候はヽ、書付持參いたし、右の箱へ入申べく候、依之訴狀箱出候前、所々高札建之、日限等相記し候之間、高札之趣相心得可申事、

右之趣甲州御料村々江可相觸旨、御代官江可申渡事、

〔法曹集〕甲府勤番支配

甲府拙者共御役所ニ而、甲府町方之者共、幷右町方之者江甲府村方之者引合之分者吟味仕來、町方引合不申、甲府在方之者共計、吟味も取捌不申、甲府在方私領之者計之吟味も取捌不申候事、

一於甲府召捕候盗賊差口之もの、幷右一件掛り合之者は、町方ニ懸合無之候而も、甲府在方之内者、呼出吟味仕來申候、

甲府近在之内ニ惡黨もの等有之節ハ、糺之上召捕、吟味仕候儀も有之候、

右之通御座候

十二月十七日（○寛政元年）

大久保近江守

永見伊豫守

〔御仕置例類集一ノ十四〕文化十二亥年御渡

甲府勤番支配伺

一無宿由右衛門盗いたし候一件

御代官

矢島松五郎支配所

甲州八代郡末木村

幸左衛門

右之もの儀、金銀有合無之、質物取不申候はヽ、其儀相斷可申處無其儀、盜物とは不存候得共、致麁任、類、久兵衛方江質入類遣シ候段、不行届不埒ニ付、急度叱、

此儀、質入之儀類遣し候不念迄ニ付、伺之通急度叱、

評議之通濟

長崎奉行職掌

〔京兆府尹記事 一〕長崎奉行職掌

千石以下貳百俵位の方も、其任に當る器量あれば相勤らる、台命を蒙り御役中ハ貳千石高、御役料千五百俵被下之、從五位下則朝散大夫、芙蓉之間詰被仰付、兩人にて一年替り交代にて相勤る、非番の年は、江戸に有て其御用向を執計ひ、評定所御式日には相勤る、御役料、今にては都合四千四百貳俵、中からゝ、

一異國の御備へを專ら相勤る所なり、○中略

此任を蒙るは、京都町奉行、大坂町奉行、或は十人御目付衆等より多分仰付らるヽ也、夫より多分御勘定奉行仰付らる、至て首尾宜しければ江戸町奉行、又は大御目付等なり、是轉役の最上也、

〔被仰出留 三〕覺

一長崎ハ異國人着船之地、諸國之者入込之所ニ候得ハ、御仕置彌入念、諸事正路仕、兼而被仰出候御條目之趣、急度相守候樣可被申付候、○中略

一公事訴訟之義、在役之奉行直ニ承之、相談之上可有裁許事、

一江戸江伺之ハ、前々之通可被相窺事、○中略

右之通、急度可被相守者也、

元祿十年八月日　小佐渡守○小笠原長重、老中

土相模守○土屋政直、老中

戸　山城守　○戸田忠昌、老中、
阿　豐後守　○阿部正武、老中、

近藤備中守殿
丹羽遠江守殿
諏訪下總守殿　○以上竝長崎奉行

〔被仰出留　十〕長崎表之儀ニ付爲上使仙石丹波守罷越候付而相渡書付　○中略
一地下人訴訟の事候におゐてハ、訴狀一見之上に、奉行御目付中へ訴申すべき由を以て申渡さるべし、其事の體によりて、訴狀の事ハ或ハ寫取置き、或ハ請取置き候て、歸府之時可被差上事、
附、もし海陸の道中筋におゐて訴訟人有之候はゞ、御料は其御代官に訴申し、私領は其領主に訴申すべき由を以て、訴狀を返さるべし、若又訴狀を差出し候て、訴訟人跡をくらまし候はゞ、其訴狀封のまゝにて、歸府之時可被差上事、
右條々宜被心得候者也
正德五年正月十一日
山城守　○戸田忠眞、老中、
紀伊守　○松平信庸、老中、
大和守　○久世重之、老中、
豐後守　○阿部正喬、老中、
河内守　○井上正岑、老中、
相模守　○土屋政直、老中、
仙石丹波守殿

〔被仰出留　十〕長崎御目付可被相心得條々

奈良奉行裁判

一自今以後は、舊例のごとく長崎奉行二人にて、在勤の奉行一人に定められ、御目付一人、半年ヅッの交替にて被差遣之候、然則御目付役儀の事はいふに及ばず、奉行急病等の事も有之候時、御下知を待合せ候間は、長崎表の事、御目付の沙汰たるべき事に候間、今度被仰出候御沙汰の次第、毎事に就て其旨趣を可被相心得候事、

一立山奉行所の地をわかち、御目付役所を構候樣に被仰出候事、○中略

一公事訴訟等はいふに及ばず、すべて御仕置に相かゝり候事に就て、地下人等奉行所に召出し候時は、御目付立合ひ候樣に可被仕事、○中略

右條々、宜被相心得候者也、

正德五年正月十一日　山城守○以下六人者中連名略之

長崎御目付中

〔被仰出留 十〕奉行所法制條々

一長崎地下人諸願公事訴訟等、自今以後は、町年寄に不任置、奉行所におゐて可有裁斷事、○中略

右條々、宜被相守者也、

正德五年正月十一日　連名右同

久松備後守殿

大岡備前守殿

〔牧民金鑑 一〕吟味物掛場ニ付類集書抜○中略

同三ノ帳之内
一長崎市中郷中々、九州諸家并私領江掛候、貸金出入濟方之義評議、
朱書
寺社奉行初判相當之所、遠國故、長崎奉行所ニ而濟方申付候積、○年月闕

〔京兆府尹記事 二〕奈良町奉行職掌南都町奉行之條に云

山田奉行に等しく、從五位下朝散大夫にて芙蓉之間詰御役なり、尤壹人役なり、諸事京都町奉行と示し合せ、所司代の御下知を請、政務を取扱ふ、〇中略

一南都町奉行ハ、大和一國の政務を勤む、尤大和ハ京都町奉行支配の國たれども、少事ハ奈良奉行取計ひ、其事入込時ハ京都町奉行へ引渡す、下方の者、遠路往來雜費をいとひ、成べき丈ケは京都へ相違せず奈良に於て取扱ふ、御役の第二なり、

此任を蒙るは、山田奉行に等し、轉役ハ、京都町奉行、或ハ新御番頭、御持弓頭、御持筒頭等也、首尾宜敷ハ、大抵京都町奉行なり、

〔法曹後鑑〕所司代牧野備後守殿〇貞通ゟ御尋書幷申上候書付共寫、前々ゟ京都所司代江被相伺、被申付候品、幷不及伺被申付候品共ニ頭書ニ被致可被差越候、尤所司代江不被達、直ニ江戸表江被伺候品も候ハヾ、是亦頭書ニ被致可被差越候、此段年寄衆ゟ被申越候ニ付相達候事、

延享元子年
八月

所司代江伺之上申付候品、幷不及伺ニ品申上候書付、

石黒但馬守〇奈良奉行

一御仕置之事

其時々所司代江相伺御仕置申付候、尤輕キ咎ニ而、過料錢等申付候儀ハ不及伺申付候、

一公事訴訟出入之事

入組候品ハ相伺裁許申付、入組不申候儀ハ不及伺裁許仕候、〇中略

右之通奈良町和州在方共、同然申付來候、且又所司代江不申上、直ニ江戸表江相伺候儀ハ無御座候、尤先奉行在役之内、直ニ江戸表江相伺候書留等相見不申候、以上、

延享元子年
八月

石黒但馬守

〔法曹後鑑〕寛政十午年奈良奉行江懸合之留

加藤伯耆守

菅沼下野守様

御切紙致拜見候、然ハ奈良町幷大和國御朱印有之寺社之分は、奈良奉行支配ニ而、大和國中之儀は、京都町奉行支配と御心得被成候、右之通相違之儀も無之哉、御承知被成度旨、御紙面之趣致承知候、右は前々ゟ支配仕來候儀ニ而延享元子年八月、石黒但馬守奈良奉行勤役中、南都御役所ニおゐて、前々ゟ取扱之品々書付差上可申旨、御老中方ゟ被仰越候段、所司代牧野備後守殿ゟ被仰渡候ニ付、取扱候品々書上候處、同年九月、向後も右之通取計候樣、御老中方ゟ被仰越候段、備後守殿被仰渡候、且又寶暦十辰年、山岡豐前守奈良奉行勤役中、所司代井上河內守殿ゟも、南都御役所支配之儀御尋ニ付、別紙之通申上候儀ニ御座候、則兩度之書付寫貳通致進達候、右ニ而御承知可被下候、右御報旁可得御意、如此御座候、以上、

十二月廿八日　　加藤伯耆守印

菅沼下野守様

〔御仕置例類集二ノ三〕文化四卯年御渡

奈良奉行伺

一於南都訴狀箱差出候儀ニ付評議

南都之儀、大坂御目付爲見廻罷越候節ハ、訴狀箱差出し、取入之上、立會錠明、訴狀有之候得ハ、上封合封印仕、御目付持參、御老中方江進達仕候定例ニ而、此外於南都、是迄訴狀箱差出候儀無御座候、京都幷大坂表ニ而ハ、毎月三度、町奉行所公事人溜腰掛江訴狀箱差出し、取入候上、錠〆候儀、所司代御城代江差出候儀之由承知仕候間、南都之儀も右ニ准じ、以來毎月、訴狀箱差出候樣仕度奉存候、然ル處、私儀已前相勤候、佐州御役所之儀ハ、毎月兩度、奉行封印ニ而訴狀箱差出し、訴狀有之節、

名印等も無之分ハ、其儘燒捨申付候得とも、其餘ハ奉行限ニ而披見之上、事品ニ寄、先内糺之上、表立吟味仕候儀も有之、不及其義候而も、心得ニ相成候儀も間々有之候儀ニ御座候、駿府町奉行所杯も、右之振合ニ而奉行限披見相心得候仕來之由、及承罷在候、南都之儀ハ、京都江も少々相隔候ニ付、訴狀箱進達之儀、如何可有御座哉、且壹人勤ニ而、頭役等も無之場所柄ニも御座候間、右駿府井佐州御役所等之振合ニ而、奉行限に披見相心得候儀ニも仕候ハヽ、心得ニ罷成候儀共も可有御座候哉と奉存、南都之義ハ多ハ京都之振合ニ准じ取計候得共、又相違之仕來共も相交、既右訴狀箱差出候儀も是迄ハ無之、京大坂仕來相替候儀ニも御座候間、兩所之振合ニハ相振候得共、前段駿府佐州等之振合ニ仕候はヽ、末々之人氣取締ニも相響、且ハ於御役所諸事取扱方勘考之一助ニ罷成候儀も可有御座と奉存候間、可相成ハ、以來毎月三度訴狀箱差出、訴狀有之節ハ、品ニ寄申上候義も可有御座候得共、先ハ奉行限ニ披見相心得、尤名印等も無之分、燒捨申付候樣仕度奉存候、乍去右體ニハ難相成儀ニも御座候はヽ、京都町奉行所之振合を以、訴狀箱之儀、進達仕候樣ニも仕度奉存候、前段申上候趣も有之、其上追々相考候處、一體下々之人氣疑念深、土地柄ニも相察候間、旁孰ニも以來訴狀箱差出義可然と存付候ニ付、此段奉伺候、

此義鈴木相模守相伺候義、尤ニハ相聞候得共、從來無差支濟來候儀、新規ニ訴狀箱差出候樣相成候ハヽ、外遠國奉行所江相響候儀も可有之、其上疑念深土地柄ニ候上ハ、新規之取計いたし候はヽ、都而批判をも生じ、末々煩雜ニも可相成、殊播磨守申上候通、今更事替り候はヽ、人氣ニ差障間敷共難申候間、旁唯今迄之通ニ被成置候方可然哉ニ奉存候、

卯八月

朱書評議之通濟

〔目安秘書〕乾京都町奉行奈良奉行吟味物之議定、其外仕來之儀、兩奉行ゟ差出候書面〇中略

吟味物掛場等之儀取調申上候書付

井上丹波守

私吟味物掛場之議定、幷前々之仕來とも、委細取調可ニ申上一旨被ニ仰渡一候、此儀奈良奉行支配國之儀は、奈良町幷和州拾五郡とも支配仕來候、尤他國ニ支配之場所無ニ御座一候、

一和州一國之寺社之出入は吟味仕、寺法ニ拘り候分は、寺社奉行江願出候樣申渡候仕來ニ御座候、

但和州御在住之一乘院宮、大乘院御門跡、圓照寺御所、中宮寺御所、法花寺御所、其外和州御朱印寺社之分、例年宗旨奈良奉行ニ而相改申候、尤諸御觸之儀も、其度々觸達仕來申候、

一和州之もの同州幷他國之もの打交訴訟いたし候節、其所之奉行、又は御代官領主地頭江懸合呼出、打合吟味仕來申候、

但地論水論之出入は、京都町奉行ニ而取扱來申候、

一他國之もの共、所之奉行又は御代官領主地頭添翰を以、和州之もの相手取訴訟いたし候節は、打合吟味仕來申候、

一宮門跡堂上方家來ゟ、和州之もの相手取候出入は、打合吟味仕來申候、

一和州之ものゟ他國之もの相手取候出入、其所奉行、又は御代官江相願度添翰願出候節は、先格ニ見合、添翰差出申候、

但私領江相願度添翰願出候節は、先格見合、組與力共ゟ添狀爲ニ差出一候儀仕來申候、

一盜惡事いたし候もの召捕、他國ニ引合有之分は、其奉行領主地頭江申達、引合者呼出吟味仕來申候、

一和州住御代官は勿論、他國住之御代官ニ而も、和州ニ支配有之、一支配之出入、御代官ニ而吟味

駿府町奉行職列

難行届分は、奈良奉行江差出吟味仕來申候、

一和州一國下り女御關所手形、奈良奉行ニ而相礼差出申候、

一奈良町幷和州在方出火之節、小火之分は、度々御注進不申上、三拾軒ニもおよび候はゞ、所司代江申上、百軒餘燒失仕候節は、御老中方江も直御注進申上候先格ニ御座候、

右之外、品替候儀有之、又は其品ニ寄、舊例ニ引合取扱候儀ニ御座候、依之此段申上候、以上、

子〇文政十一年九月　井上丹波守

〔京兆府尹記事〕二　布衣役　駿府町奉行職掌

千五百石高也、政務を取行ふなり、駿府町奉行壹人役なり、駿府御城代有といへども、是を經ずして諸事御老中支配也、〇中略

一駿府町中幷駿河一國、伊豆一國を支配し、公事裁判、御仕置等取行ふ、御役の第二なり、〇中略

此任を蒙るハ、御使番、御徒士頭、小十人頭、御進物番、西丸御目付衆等より進む、轉役ハ京都町奉行、大坂町奉行、或ハ遠國奉行等なり、大抵如斯なれどすぐさま御普請奉行、御作事奉行等へも昇進するもあり、

〔享保集成絲綸錄〕四十四　元文元辰年八月

江戸ゟ駿府江被遣候御目付、此以後年々罷越候節、逗留中駿府ニ而、御目付小屋門前江訴狀箱出し置候、駿府町中在々百姓共、役人御代官善惡幷手代名主等私曲有之候ハヾ、其段訴候爲ニ候間、江戸江言上致度儀有之候ハヾ、書付持參いたし、右之箱へ入可申候、依之訴狀箱出候前、所々へ高札建之、日限等相記し候間、高札之趣相心得可申事、

八月

朱書右之趣駿府町中へ可被相觸候、

覺

一御目付罷越逗留中、來ル幾日、御目付小屋門前江訴狀箱出置候間、江戶江言上仕度儀有之ハ、書付持參いたし、右之箱江入可申事、○此下御仕置筋の儀ニ付云々ノ七條、大阪町奉行條ニ揭ケタル元文元年八月ノ立札文言ト同ジ、故ニ略ス、

月　日　奉行

高札建場

花陽院門前町　江戶之方　東海道　横内田町　山中道

材木町　山中道　安西五丁目　山中道

新通川越町　京之方　東海道

〔御仕置例類集一ノ三〕文政七申年御渡

駿府町奉行伺

一駿州木切山村外壹ヶ村ニ而召捕候惡黨もの差出方之儀評議

駿州富士村山淺間領、同國木切山村神成村之儀、惡黨もの召捕候節之儀ニ付、駿府町奉行江差出度旨願出、右は寛政之度、本鄕大和守知行外拾五給、同國富士庵原兩郡都合三拾七ヶ村之もの共、惡黨もの召捕候節、御當地江差出候而は、其度々路雜用相掛、難儀およひ候間、最寄之儀ニ付、駿府町奉行所江差出度段、大和守方江願出、同人ゟ相伺候處、路雜用等相懸り候を厭候而は、おのづから惡黨もの捕方寛等閑ニ可相成、村方願之通、駿府町奉行所江可爲差出段、大和守江被仰渡、右奉行所江差出候はゝ、遂吟味、御仕置伺等之儀は、仕來之通可取計旨、其節之駿府町奉行江も被仰渡、其後大和守知行外拾六給、富士郡三拾六ヶ村之儀も、同樣大和守ゟ相伺、是又同樣被仰渡候儀候處、右村々之内ニ、此度之木切山村外壹ヶ村相見不申候ニ付相糺候處、寛政之度、給々村々願立候節之心得違ニ而相洩候間、已來前書富士郡三拾六ヶ村之内江加り、惡黨もの召捕候節は、駿府町

奉行所江差出度旨、右村々之もの共茂致連印相願候間、願之通可申渡哉之段、相伺申候、
此儀惡黨もの召捕方等閑ニ不相成御趣意ヲ以、寛政之度、富士郡三拾六ヶ村、追々願之趣、御下知濟も御座候上は、旁取締之ためにも御座候間、木切山村外壹ヶ村も、地頭存寄一通り承糺シ、差支之儀無之候はゞ、右貳ヶ村願之趣承屆、且吟味詰御仕置相伺候節之手續は、前書三拾六ヶ村振合ヲ以、可取計旨被仰渡、尤右は惡黨もの差押候節之取計ニ限り候儀ニ付、其外之筋不混樣可心得旨をも被仰渡可然哉ニ奉存候、

申 二月

朱書
評議之通濟。

(京兆府尹記事二)山田奉行職掌

諸事日光奉行に等し、從五位下朝散大夫にて、芙蓉之間詰御役人たり、尤一人役にて詰切、○中略

一伊勢志摩兩國および山田御神領の外は、皆當所奉行支配す、尤公事裁判取行ふ、是第二なり、○中略

此任を蒙るハ日光奉行に等し、轉役も江戸町奉行、御勘定奉行、御作事奉行、御普請奉行等也、大御目付被仰付ハ稀なり、

(御仕置例類集二ノ六)文化二丑年御渡

山田奉行伺

一無宿久藏事彌助盜いたし候一件

多羅尾四郎次郎御代官所
勢州度會郡有瀧村百姓平八事
太左衛門

右之もの儀、彌助を盜賊とは不存候へ共、同人任相賴、大湊兵助方洗濯女とわを一旦誘引出、自分

と土藏江隱し置世話致し遣、其上金子借受、貳朱判壹片貰受、金十郎方酒代雜用等、彌助ニ爲二相濟一候段不屆ニ付、神領徘徊差止、所拂、

此儀去午年、菅沼越前守御勘定奉行之節、手限伺之上御仕置申付候、野州上之川村百姓留七儀、無宿吉五郎のぶと密通致居候ニ付、誘引出候節は差置與候樣賴候後、同人を召連參り、吉五郎疵受罷在候はゞ、得と子細相糺、早速其筋江可二申立一を無二其儀一、村役人江も不二相屆一、止宿爲レ致候段不屆ニ付、所拂申付候例ニ見合、彌助任レ賴とわを連出、又は隱置、或は金子貰受候段、不レ宜候間伺之通、神領徘徊差留所拂、

朱書評議之通濟

堺奉行類例

〔京兆府尹記事〕二堺奉行職掌

奈良町奉行に等し、從五位下朝散大夫にて、芙蓉之間詰御役人なり、尤一人役なり、諸事大坂町奉行に示し合、御城代の御下知を請、政務を取扱ふ、○中略

一堺町中、和泉一國の政務を取行ふ、尤和泉ハ大坂町奉行支配の國たれども、少事ハ堺奉行取計ひ、入込時ハ大坂町奉行所江引渡す、是御役の第二なり、

此任を蒙るハ奈良町奉行に等し、轉役ハ大坂町奉行、或ハ新御番頭、御持筒頭、御持弓頭、又ハ御作事奉行等なり、大抵は大坂町奉行被二仰付一なり、

浦賀奉行類例

〔京兆府尹記事〕二相模國布衣役浦賀奉行職掌

都て堺奉行の如く、從五位下朝散大夫にて、芙蓉之間御役人の身分ニ在之、尤壹人役にて、彼地詰切政務を取扱ふ、御老中へ御下知をうかゞふなり、○中略

一相模一國、幷浦賀町中の仕置公事裁判を取扱ふ、是第二の御役なり、

此任を蒙るハ堺奉行に等し、轉役ハ御勘定奉行、或ハ御作事、御普請奉行、御持筒頭御持弓頭等な

り、

〔諸例類纂五〕一寛政二戌年八月五日、評定所一座ゟ達書幷答書、

但右達書、根岸肥前守ゟ差越候間、答右同人江差遣候、

仙石次左衛門殿　　評定所一座

浦賀御役所ニ而、公事出入幷吟味物之儀、御料所幷他領之者、引合有之候得ハ、呼出打合、御礼御咎御仕置等、御支配所之もの共同樣御申付有之候哉、右呼出方、幷御料所或ハ他領之もの吟味御取計之規定御差圖等有之候哉、亦ハ仕來を以御取計候事ニ候哉、

一都而御咎御仕置之儀、輕罪何程迄ハ伺ニ不及、何程ゟハ伺之上御申渡と申規定有之候哉、亦ハ輕重之無差別、伺ニ不及事ニ候哉、且御料所或ハ他領之もの引合候而も、伺ニ不及御申付有之事ニ候哉、御料所他領之もの引合有之、伺之上御申付有之事ニ候哉、

右貳ヶ條、元濟等之否取計方之儀、巨細致承知、御申聞有之候樣存候、以上、

戌八月

評定所御一座　　仙石次左衛門

浦賀御役所ニ而、公事出入、幷吟味有之、御料所其外他領之もの引合有之候へば、呼出し打合相礼、咎御仕置等、支配所之者共同樣申付候哉、右呼出方幷御料所或ハ他領之もの吟味取計方之規定御差圖等ニ而も有之候哉、亦ハ仕來を以取計候哉之旨、御紙面之趣承知仕候、

此義御料所ハ御代官所、私領ハ領主地頭江申遣、呼出候儀ニ御座候、御料所私領共、吟味取計方之規定等、兼而之御差圖と申義無之、前々之仕來を以取計候樣ニ御座候、

一都而御咎御仕置之義、輕罪何程迄ハ不及伺、何程ゟ伺之上申渡候と申規定有之候哉、又輕重之無差別、不及伺申付候事ニ候哉、且御料所、或ハ他領之もの引合候而も、不及伺吟味取懸り、御咎

御仕置等も不及伺申付候事ニ候哉、御料所他領之者引合有之候はゝ、都而伺之上吟味取懸り
御仕置等も輕重之無差別伺之上申付候事ニ候哉之旨、
此義御答御仕置、輕罪何程迄ハ不及伺、何ほどよりハ伺之上申渡候と申規定無御座、輕重無差
別伺之上申渡、御料所他領之もの引合有之候得ハ、伺之上吟味取懸り、御仕置輕重之無差別伺
之上申付候義ニ御座候、
右二ヶ條共、御答書面之通御座候、
戌八月
拙者共支配所御預所御役知共、御仕置筋之儀ニ付奉伺候處、入墨以上ニ當る御仕置相伺、其以
下者、手限にて可申付旨、尤右入墨以上以下之差別ハ、各樣方へ問合、右御心得之通取計可申旨、
青山下野守殿以御書付被仰渡候、依之右差別被仰付被下候樣いたし度、此段及御懸合候、以上、
申閏八月　小笠原彈正
内藤十次郎
御書面御仕置之儀、入墨以上之御仕置ハ、其時々相伺候、尤御下知有之、且亦不及伺、手限ニ而
申付候御仕置左之通、
但品ニ寄、相伺候義も有之候、
一敲之上非人手下ニ申付　　一敲之上甲府徘徊留
一敲之上所拂　　一敲但品ニより重敲
一甲府町拂　　一所拂村拂門前拂
一押込　　一過料
一叱り但品ニより急度叱り

右之通及御答候、以上、

九月七日　酒井大隅守
板倉筑後守

一浦賀奉行所ニ於て取扱候御仕置、幷右奉行御役知内之公事吟味物、取計之儀評議、
書面評議仕申上候通、浦賀奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

浦賀奉行伺

〔御仕置例類集一ノ一〕文政六未年御渡

申八月廿六日　評定所一座

浦賀奉行支配所御預所幷御役知村々御仕置之儀、是迄支配所内ニ而悪事いたし候もの、死罪は御差図之上申付、重敲所拂手鎖過料は、手限ニ而申付候例御座候得共、其外軽重共、御仕置筋申付候儀は、書留等無御座、相分兼、此以後何以上之御仕置相伺、何以下は手限ニ而申付候様相心得可申哉、此度無宿新五郎盗いたし候一件、吟味詰御仕置之儀、御勘定奉行江問合候處、入墨之上、重敲申付、相當之趣申聞候、然ル處前書申上候通、前々ゟ入墨御仕置申付候儀無御座候ニ付、外遠國之例承合候處、寶暦之度、佐渡奉行ゟ別紙を以申上候通伺相濟、依之浦賀奉行支配所御預所と唱は違候得共、御年貢納方其外共、同様ニ取扱來候場所ニ付、右佐渡奉行伺書之奉行附と申方ニ相當も可致哉、就而は以後入墨相當之悪事いたし候もの有之候はゞ、別紙繪圖面之通入墨可仕哉、例書相添相伺、此後御仕置筋伺手限之差別も御下知有之候様仕度、且御役知之儀、如何相心得取計可申哉之段相伺申候、〇中略

御書取

覺

浦賀表御仕置筋之儀、支配所御預り所共、同樣相心得、入墨以上ニ當候御仕置は相伺、其以下は手限ニ而申付、若先例等無之候はゝ、遠國奉行之內江先例承合可申、入墨以上以下之差別は、甲府勤番支配江問合、右心得之通取計可申候、且又御役知と、支配所御預所在町と、懸り合候出入は添簡いたし、月番之御勘定奉行江目安を以爲相願、品ニ寄、目安懸りニ難成儀は、奉行所吟味相願、御役知限之出入は、在勤之奉行吟味いたし、伺之上申付候樣可致候事、入墨形之儀は、伺之通申付候樣可致候事、

〔京兆府尹記事　二〕布衣役佐渡奉行職掌

萬事御勘定奉行の差圖を談じ、自分の計ひを以て御老中江伺ひ、政務を取行ふ、千石高なり、○中略

一當所一ケ國、幷離島四ケ所を支配する事、公事裁許仕置向等取計ふ、是第三の御役なり、○中略

此任を蒙るハ、御勘定吟味役、評定所留役、又ハ元方御納戶頭拂方御納戶頭、或ハ布衣御代官等々仰付らるゝ也、轉役は色々有之一決ならずといへども、多分御勘定吟味役等江暫時再役して、程なく御勘定奉行被仰付面々もある也、尤兩人にて壹人ツヽ、隔年交代にて相勤る事なり、

〔御仕置例類集　二ノ一〕享和三亥年御渡

佐渡奉行伺

一手限ニ而咎可申付旨申上候趣評議

別紙佐渡奉行相伺候、無宿久七牢拔致候一件之內、牢守ハ百日戶〆、下番貳人之內、當番之もの壹人ハ相川拂、非番之もの壹人ハ三十日手鎖之先例ニ見合、手限に而御咎申付候由申上候得共、都而右體之品ハ、輕御咎ニ而も、本人一同吟味詰、御咎可相伺儀ニ候を、手限ニ而御咎申付候ハ、兼而伺濟等も有之、取計候哉難計候間、佐渡奉行江懸合承糺候處、近例有之、前書之通御咎申付候由ニ而、例書等差越候得共、右體一纏ニ相成居候を引分候而ハ、一件見合ニハ不宜儀ニ付、

以來右體之類、御仕置相伺候樣、佐渡奉行ヱ被仰渡可然哉ニ奉存候、

亥十月

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三〕文政六未年御渡

佐渡奉行伺

一佐州水替爲人足差遣候無宿共之內、平人申付候儀評議、

元小田切土佐守掛無宿万吉改名入墨
万太郎
○中略

右之通格別出精之もの、平人申付候得ば、相殘候もの共彌無油斷出精仕、小屋內取締ニも相成候儀ニ御座候間、書面之もの共、一同平人申付、追而他國出相願候はゞ、是迄之振合ヲ以取計候樣可仕奉存候、依之奉伺候、

未七月　　佐渡奉行

此儀佐州金銀山爲水替差遣候無宿共之儀、科之次第ニ寄、一旦御仕置は相濟候而も、元住居近邊ヱ當分不立戻樣取計候類も有之候儀ニ付、私共銘々掛之分、凡拾ヶ年未滿ニ而、他國出申渡候節は、前以元掛ヱ申聞候積、去々巳年佐渡奉行ヱ申達置、則今般之無宿共、平人ニ申渡候儀も、佐渡奉行ゟ懸合申聞候間、取調之上、差支無之旨及挨拶候儀ニ而、一體水替人足共之勵ニも相成候趣申上候上は、旁伺之通被仰渡可然哉ニ奉存候、

未八月

朱書
評議之通濟

〔京兆府尹記事三〕下野日光奉行職掌

諸事大坂町奉行に等し、従五位下朝散大夫にて、芙蓉之間詰被仰付、尤兩人一年代り相詰、壹人ハ

江戸在府也、〇中略

一下野上野兩國を支配す、尤日光町中の政務を取行ふ、是第二之御役也、〇中略

此任を蒙るハ、十人御目付、御使番、西丸御目付、小十人頭、御徒士頭、御先手衆より昇進す、轉役ハ、御勘定奉行、御普請奉行、御作事奉行等なり、稀には大御目付仰付らるゝも有之、

〔御仕置例類集 一ノ二〕文化八未年御渡

日光奉行伺

一日光本坊留守居支配樂人吟味之儀ニ付評議

附箋

書面評議仕申上候通、日光奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

未五月廿六日　評定所一座

書面伺之通吟味可仕旨被仰渡、奉承知候、

未五月廿三日　小笠原大和守　小島安藝守

日光本坊留守居支配樂人伴周防介後家ちよ儀、相續方之儀ニ付、品々申立、本坊留守居安居院迄訴狀差出、當時吟味中ニ御座候處難相濟、右ニ付此上江戸表江差出ニ相成可申處、左候而ハ、困窮之樂人共、多雜及難澁候段、御門主御方被及御聞、不便之儀ニ被思召、私共御役所ニおゐて吟味之上、如何樣にも落着仕候樣被爲入御頼候之旨、安居院を以被仰聞候間、追々呼出吟味可仕哉、此段相伺申候、

此儀樂人之儀、安居院支配之ものニ候上ハ、寺社奉行ニ而吟味可仕筋ニ御座候得共、江戸表江差出ニ相成候而ハ、困窮之樂人共、多雜可及難澁段、無餘儀次第ニ付、〇中略以來之例ニハ難相成、其次第ニも可寄事之旨を以、日光奉行江吟味被仰渡候而も可然哉ニ奉存候、

未五月

〔御仕置例類集二ノ六〕享和三亥年御渡

日光奉行伺

一野州今市宿家持作兵衛初筆隠賣女渡世いたし候一件　日光御領野州都賀郡今市宿家持 作兵衛

右之もの儀、困窮ニ候迚、御法度之場所ニ而、同州楡木宿金右衛門抱之下女きよを月雇にいたし、金右衛門江は隠賣女にいたし候段は押隠し、隠賣女渡世いたし候段不届ニ付、身上ニ應じ過料之上、百日手鎖ニ而所預ヶ、隔日封印改、

此儀去丑年御書付ニは、隠賣女抱主、身上不殘建家とも取上、百日手鎖ニ而所江預、隔日封印改と有之候處、同年曲淵甲斐守御勘定奉行之節、手限伺之上御咎申付候、野州武州村々隠賣女いたし候もの共儀、右御書付之通可奉伺儀ニ御座候處、江戸町々と違在方之者ニ付、無身上ニ相成候而は、御咎中當地飯料迄茂差支、殊ニ多人數之儀ニ付、建家等取上候而は、旅人休泊ニも差障、其上木崎宿之儀は、例幣使道ニ付、旁差支可相成儀も難計奉存候間、御定之通奉伺候段申上、其通相濟候例ニ見合、多人數ニも無御座候へ共、在方之儀ニ付、伺之通、身上ニ應じ過料之上、百日手鎖ニ而所江預ヶ、隔日封印改、

（朱書）評議之通濟

〔御仕置例類集二ノ三〕文化七午年御渡

松前奉行

一於松前、目安箱差出候儀ニ付評議

鮨

書面評議仕申上候通、松前奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

附　午九月七日　評定所一座

書面松前奉行伺之通、目安箱差出候樣被仰渡、奉承知候、

午九月七日　小笠原伊勢守

松前御役所之儀、是迄目安箱無御座候處、長崎佐州等之振合を以、松前之儀も以來一ヶ月壹度ヅツ期限を定、目安箱差出候樣仕度奉存候、依之此段奉伺候、

此儀去ル卯年、評議ニ御下被成候、奈良奉行相伺候、南都ニおゐて訴狀箱差出候儀、評議之上、從來訴狀箱不差出、濟來、殊外遠國奉行所江相響可申、其外人氣ニも可差障趣ヲ以、仕來之通ニ被成置可然哉之段申上候得共、松前表之儀ハ、格別遠國ニ而、外ニ可願最寄も無之、長崎佐州ニ准じ候場所にも有之、南都とハ譯違可申、殊奉行所も新規ニ付、旁伺之通、一ヶ月壹度宛、目安箱差出候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

午五月

〔天保集成絲綸錄百一〕文化八未年八月

松前御役所之儀も、長崎佐渡等之振合を以、一ヶ月壹度宛定日を極、目安箱差出し候儀、去午九月、伺之通被仰渡候之處、初發之儀付、右取計手續、長崎奉行佐渡奉行江問合候處、長崎ハ隔月十一日壹度宛目安箱差出し、訴狀入候もの有之候得ハ、封之儘上封仕差上、訴狀入候もの無之候而も其段申上候由、佐渡にては、毎月三日十八日、兩度宛目安箱差出し、尤目安箱差出候初發之儀ハ、長崎佐渡とも、市在江相觸候趣ニ御座候、依之兩樣を見合勘辨仕候處、松前表之儀も長崎之振合等見合、隔月ニ壹度宛、十一日を定日ニ極、目安箱差出し、訴狀入候もの有之候はゝ、封之儘私共上封仕差上、訴狀入候もの無之候而も、其段申上候樣可仕候哉、依之市在江觸書幷目安箱書付案相添、此段奉伺候、

此儀訴狀箱之儀、隔月壹度宛差出し候段、長崎表之振合ニ候上ハ、右ニ准し候方相當ニ可ㇾ有ㇾ御座哉ニ付、伺之通可ㇾ取計ㇾ旨被ㇾ仰渡ㇾ可ㇾ然哉ニ奉ㇾ存候、然ル處、松前奉行差上候、觸書、并訴狀箱書付案ハ、箱訴可ㇾ致品と、不ㇾ取ㇾ上品と之箇條相分り兼候間、御定書上卷ニ載有ㇾ之候、評定所前訴狀箱ニ有ㇾ之御文言、并右箱江書付入候儀ニ付、御觸書之趣を以案文御渡被ㇾ成可ㇾ然間、取調別紙壹冊差上申候、

未八月

訴狀箱書付案

覺

一御仕置筋之儀ニ付、御爲ニなるべき品之事、

一諸役人をはじめ、私曲ひぶんこれある事、

一訴訟有ㇾ之時、役人せんぎをとげず、永々捨置ニおゐては、直訴すべき旨相斷候上出べき事、

右之類直訴すべき事

一自分爲によろしき儀、或は私之いこんを以、人の惡事申間敷事、

一何事ニよらず、自分慥ニしらざる儀を、人にたのまれ直訴致間敷事、

一訴訟等之儀、其筋之役所江いまだ不ㇾ申出ㇾ內、或ハ裁許いまだ不ㇾ濟內、此兩樣申出間敷事、

一總而ありていを不ㇾ申、少ニ而も事をとりつくろい、きよせつかきのせ申間敷事、

右の類は取上なし、尤たくみ事の品ニよりて罪科ニ行るべし、かき物はかたく封じ持來べし、

訴人の名并宿書付無ㇾ之は、是又取上ざるもの也、

未八月

市中村々江觸書案

向後隔月ニ訴状箱差出候間、左之趣相心得、直訴可致品ハ書付入可申候、右書付ハ封之儘、江戸表江差上候間、意趣遺恨を以、僞成儀申出ニおゐては、吟味之上、急度可申付候、小前末々迄、此旨可相心得候、右書付入候儀、松前江差箱館內所附村々之もの共ニ限候事ニ付、近國之もの共、心得違箱訴致間敷候、

一訴状箱江書付入候事、右ハ御仕置筋之儀ニ付、御爲ニ可成品、并諸役人を始、私曲非分有之事可致直訴候、且又訴訟有之時、役人不遂僉議、永々捨置候はゞ直訴可仕候由、御役所江相斷候上ニ而直訴可致、右之外、蝦夷地產物、拔荷筋ニ付、表立難申出儀有之候はゞ、是又直訴可致候、

一町方在方其外ニ而も、御赦ニ可罷成候間、何之品被仰付候樣ニとの類之事、

一公事給之事

一自分願之事

右此等之類ハ、御役所江訴出候得バ吟味有之事ニ候條、猥ニ箱江書付入候はゞ、御吟味可有之品にても御取上ゲ無之間、右之趣相心得、御役所江可申出候、若滯儀も有之候はゞ、相斷候上、直訴可仕候、尤訴狀封〆ニ印形可致候、名并宿書付無之訴狀ハ、御取上無之候、

右之趣可相心得もの也、

未八月

〔御仕置例類集二ノ一〕文化十酉年御渡

松前奉行伺

一松前表公事吟味もの取扱方之儀ニ付評議

私共儀、壹人宛松前在勤仕罷在候儀ハ、勿論之儀ニ御座候得共、若臨時之儀ニ而、兩人共在府仕、彼地ニ詰合不申節、公事出入之儀、一件吟味詰、支配吟味役より申聞候はゞ、重キ御仕置之分ハ、伺之

上、都而私共ゟ印狀を以吟味役江及差圖、彼地ニおゐて落着爲申渡候樣可仕哉、右振合、公事方御勘定奉行江間合候處、都而遠國ニ罷在候御代官、吟味詰申越候一件之儀、重キ御仕置ニ可相成ものゝ有之候とも、江戸表江呼出、落着申渡候筋ニハ無之、重キ御仕置之分ハ、伺之上、都而印狀を以及差圖、彼地ニおゐて爲申渡候儀と有之候段申聞候間、松前之儀も、右振合之通取計候樣可仕哉、左候はゞ、箱館之儀ハ、支配吟味役相詰候場所ニ付、是迄落着之節ハ、一件松前江呼出、在勤私共ゟ申渡來候得共、是又前書ニ准じ、箱館詰吟味役ゟ、一件吟味詰罷在候私共江申聞候はゞ、重キ御仕置之分は、伺之上、都而印狀を以差圖仕候樣可仕と奉存候、依之此段奉伺候、

此儀評議仕候處、松前奉行兩人とも在府之節、支配吟味役江印書を以申渡、公事吟味もの落着爲申渡候儀、御勘定奉行ゟ御代官御預所役人江差圖仕候振合を以相伺候得共、御代官御預所之儀は、銘々其支配所内之儀ニ有之、松前表ハ奉行直支配之場所ニ候を、支配吟味役ゟ爲申渡候段、相當とハ難申候、併奉行兩人共、暫く在府いたし候儀も有之候事ニ候ハゞ、其節永々落着延置候段、如何ニ可有御座、右ハ無據儀ニ付、伺之通被仰渡可然哉、且箱館詰支配吟味役吟味詰、松前奉行江申立候一件之儀ハ、松前表江呼出し落着申渡候段、仕來之儀ニも有之、殊ニ格別里數相隔候ニも無之間、松前奉行在勤中ニ候はゞ、是迄之通呼出し、落着申渡候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

酉正月

去月十四日評議仕申上候、松前奉行相伺候、松前表公事出入申渡方之儀、於箱館支配吟味役吟味いたし、落着之節計、松前江呼出、奉行申渡候儀ハ如何ニも可有之歟、乍然右樣之類例も可有之哉、今一應評議いたし可申上旨被仰聞候、

此儀松前箱館共、松前奉行支配所之儀ニ而、支配吟味役吟味いたし候と申ハ、内譯之取計ニ有

之、且松前奉行申上候趣を以相糺候處、相當之例も不相見、尤遠國御代官、公事出入吟味物、御代官ニ而吟味いたし、口書差出、取調之上難相分儀有之候得バ、呼出し御勘定奉行ニ而吟味いたし、相分候儀ハ口書之趣を以、重キ御仕置之分ハ伺之上、輕キハ不及伺、御代官江差圖いたし、彼地ニ而申渡來候儀有之、且御代官所より他領他支配拘り合候分も伺之上、其家來等爲立合、吟味爲致候類も有之候、右ハ遠國之もの大勢呼出候而ハ、無益ニ路用雜用等相懸り、村方難儀仕候趣意ニ付、右之處を以評議仕申上候得共、猶又御尋之趣を以再應評議仕候處、御代官之儀ハ、其所を支配いたし候ものニ有之候間、右ニ引當候バ相當も仕間敷、何れニも松前奉行支配地之儀ニ候間、公事出入吟味物ハ、奉行直々ニ取計可申ハ勿論ニ有之、然共聊之儀迄、隔候候場所ゟ呼出し、吟味仕候も如何ニ付、時宜ニ寄、輕儀ハ其掛之もの江差圖いたし、吟味爲致候ハ格別之儀ニ而、松前奉行兩人共在府いたし候と申ハ遲延之事故、是又別段之儀ニ而、壹人宛ハ彼地在勤可致事ニ候間、公事出入吟味物とも、直々取計候儀と相心得、万一兩人とも在府之節ハ、定例と違、別段之事ニ候間、其事實ニ隨、伺之上、又ハ差懸候儀ハ御屆申上、取計可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

酉二月

松前表公事出入落着申渡方之儀ニ付、松前奉行江可被仰渡趣、御書取御渡被成、箱館吟味物、輕儀ハ吟味役ニ爲取扱候程ニ候ハヾ、落着申渡も吟味役ニ而爲申渡候とも可然哉と思召候間、此所今一應評議いたし可申上旨被仰聞候、

此儀松前箱館とも、松前奉行支配所之儀ニ付、公事吟味物とも、直々に取計可申ハ勿論ニ御座候得共、聊之儀迄、隔候箱館より呼出吟味仕候も如何ニ付、輕キ儀ハ其懸りのもの江差圖致し、吟味爲仕候ハ格別と申上候儀ニ而、右ハ全内譯之取計ニ有之、輕キ事ニ而も落着之儀ハ、一件

裁判ニ而、吟味とハ譯違、殊是迄も落着ハ、都而箱館より松前江呼出申渡候儀、彼地仕來ニも有之候ニ付、輕儀ニ而も落着之儀ハ、いづれ松前江呼出し申渡候方ニ可有御座候間、今般御渡被成候御書取之通被仰渡可然哉ニ奉存候、

酉三月

箱館公事出入吟味物之儀、彼地詰吟味役ニ爲取計候由候得共、松前江呼出し、直吟味可被致筈之事ニ候、乍然聊之儀迄呼出候而ハ、難儀可致候間、時宜次第、輕儀ハ詰合吟味役ニ吟味爲致候而も不苦候、落着之儀ハ、いづれ松前江呼出し可被申渡候、

一奉行在勤無之節之儀ハ、公事出入、吟味もの落着とも、其品ニ隨ひ伺又ハ屆申聞候上、吟味役ニ爲取計可被申候、

〔憲教類典四ノ五評定〕寛永十癸酉年七月十九日

訴訟人可受裁許次第掟條々

定

一御代官所給人方町人百姓目安之事、其所之奉行人代官并給人等之捌を請べし、若其捌非分有之ハ、於江戶可申付之、奉行代官等ニ不理して訴申族ハ、假令雖有理裁許すべからざる事、

附田畑野山等隱置訴人之事、御褒美可被下之、隱置輩ハ、或ハ死罪、或ハ過料、可隨科之輕重事、

一寺社領之百姓目安之事、其所之代官江相斷、捌を請べし、若其捌非儀有之ハ、於江戶可申付之、代官に不理して訴申輩ハ、裁許すべからざる事、○中略

右可相守此旨者也、仍執達如件、

寛永十酉年七月十九日

〔法曹後鑑〕郡代支配所公事出入吟味物取計方之儀ニ付相伺候書付、

書面之趣、御勘定奉行ゟ兼帶之内ハ、伺之通可取計旨被仰渡、奉承知候、

中川飛驒守〇忠英、郡代、

酉〇明和二年十一月

郡中支配所公事出入吟味物取計方之儀ニ付ハ、去ル子年、久世丹後守郡代兼役被仰付候節、郡代支配御代官ニ而難吟味詰分、全御收納ニ拘候願ハ、郡代御役所ニ而吟味仕、其外諸願之儀ハ、御勝手方同役共江爲差出、出入立候分ハ、公事方同役共江爲差出候積り、別紙壹ノ印三通、松平越中守殿江伺濟有之、猶又其砌吟味ゟ取扱方之儀、丹後守ゟ公事方同役共江相談之上、郡代御役所ニ而吟味仕候而ハ、支配向之人數少ニ而差支候譯を以、御代官所ニ而吟味詰伺書差出候節、御仕置輕重之無差別、公事方同役共江爲差出候積り、別紙貳ノ印通取極候儀ニ御座候處、同年七月、松平和泉守殿御差圖ニ而、相州津久井縣、甲州都留郡邊徘徊いたし候盜賊共、組附之もの召捕候節、公事方同役共江可引渡哉之段、別紙三ノ印之通相伺候處、郡代御役所ニ而吟味詰可相伺旨、猶又御差圖有之、右一件御仕置相濟候後ハ、御差圖無之候而も、惡黨もの召捕吟味いたし候樣成行、御代官役所ニ而吟味詰相伺候品も、中追放以下之分ハ、公事方同役共江不差出、郡代手限ニ而差圖仕、最初之伺濟幷公事方同役共江相談之上取極候趣ニも齟齬仕、碇といたし候規定無之、郡代手限ニ而差圖可致品も、公事方同役共江爲差出、又ハ他之引合有之候分も、郡代御役所ニ而差圖いたし、或ハ他之引合有之譯を以、公事方同役共江爲差出候樣相成、取計方區々ニ而、おのづから規矩不相立、混雜仕、御用辨も不宜、御役所取締方ニも拘り候儀ニ付、以後取計方之儀勘辨仕候處、伊奈右近勤役中と違ひ、當時ハ火付盜賊、其外惡黨もの郡代御役所ニ而吟味仕、右引合之内ニハ、御料私領町方之無差別呼出、吟味仕候儀ニ付、支配所之出入、其外吟味物等、郡代御役所ニ而取扱候而も、聊差支候筋も無御座候處、支配所内之吟味物ハ、他江差出、火附盜賊、其外惡黨もの之類ニ限り、郡代御役所ニ而吟味仕候儀も其筋不相立、不相當之儀ニ奉存候間、別紙ニ申上候趣を以、以來取計方主

法相改、支配所公事出入吟味物等、道中方幷寺社法ニ拘候類之外ハ、郡代御役所ニ而吟味詰取捌候方、却而混雜不仕、取計方之規矩も相立、都而公事合吟味物等も捗取可申、御代官ニ而も、一件差出方之手數相減、旁可然哉ニ奉存候、尤右之通相改候得ハ、郡代御役所ニおゐてハ、格別吟味物相增候儀ニ付、只今迄之留役人數ニ而ハ、迚も手足り申間敷、此上兩人も相增不申候而ハ、差支可申哉ニ御座候得共、寺社奉行町奉行支配吟味物調役も、總體ニ而四人宛有之候間、右ニ見合候得ハ、公事數迚も無數儀ニ付、是迄之通兩人ニ而、如何樣ニも爲取計候樣可仕と奉存候、乍去格別御用向相嵩、實々差支候節、外御勘定方之內ゟ、當分助合爲取扱候樣可仕候、右之趣を以支配所吟味物取計方、別紙之通改正仕度奉存候、依之別紙書付壹通、壹冊相添、此段奉伺候、尤右之通取計候而も、此上留役兩人ニ而ハ、定式之儀、實々手足不申候時宜ニも罷成候ハヾ、其節猶又取調、增人之儀相伺候樣可仕候、以上、

酉七月　　　　中川飛驒守

郡代御役所公事方取計規定書

公事方同役共幷道中奉行江可差出分

一郡中支配御代官所ゟ、私領寺社領江懸り候出入、

是ハ評定所公事ニ相成候間、是迄之通、公事方同役共江爲差出候積、

一同御府內町方江懸り候出入

是ハ裁許之節、評定所江差出ニ相成候間、是迄之通、公事方同役共江爲差出候積り、

一同他之御代官所江懸り候出入

是ハ御勘定奉行內寄合ニ而、吟味いたし候品ニ付、是迄之通、公事方同役共江爲差出候積り、

一同五海道宿方ニ拘り候出入幷病人、繼送り、飯賣女、其外宿方ニ拘り候吟味物、

是ハ道中奉行江、是迄之通爲差出候積り、

一國境郡境村境ニ拘リ候出入

是ハ地改之節、大御番御代官被差遣候筋ニ付、是迄之通、公事方同役共江爲差出候積り、

一郡代支配御代官一支配所ニ而も、寺法社法拘候出入幷吟味もの、

是ハ其始末寺社奉行江懸合之上、全寺法、社法ニ拘リ候分ハ、寺社奉行江爲差出候積り、

一捨馬放馬取計方伺

是ハ御勘定奉行連名ニ而、村扇差出候儀ニ付、是迄之通、公事方同役共江爲差出候積り、

一札掛場內、變死人行倒人取計方伺、

是ハ芝口札懸場江、三奉行之內より札掛候儀ニ付、是迄之通り、公事方同役共江爲差出候積り、

郡代御役所ニ而吟味可仕分

一郡代支配御代官所違之出入

是ハ御代官立會吟味詰伺書差出來候得共、以來ハ訴訟方御代官之添書を以目安爲差出、目安之趣、一通り相糺候上裏書いたし、郡代本判幷御役所押切仕、差日ニ可罷出旨申渡、目安願人江相渡、郡代御役所ニ而吟味仕候積り、

但目安裏書ハ、公事方內寄合公事裏書之振合ニ認候積り、

一同御代官一支配所限之出入

是ハ仕來之通、御代官役所ニ而吟味詰、裁許幷御仕置之儀ハ、郡代御役所江爲相伺候積り、尤右出入之內ニ、口書難澁いたし候歟、又ハ裁許不受もの、或ハ格別入組吟味難決品ハ御役所江爲差出、吟味仕候積り、

一同御代官役所ニ而取扱候、六ヶ月以上不相濟出入、幷吟味もの、是ハ六ヶ月之届書、公事方同役共江差出候故、裁許幷御仕置伺願下ゲ內濟いたし候分共、是迄公事方同役共江伺、取計來候得共、以來ハ六ヶ月之届書も、郡代御役所江爲差出、裁許幷御仕置、其外願下ゲ內濟之分共、郡代手限りニ而差圖いたし、尤六ヶ月幷落着御届返共、郡代ゟ申上候積り、

一同御代官役所ニ而取扱候、重科之もの有之候吟味もの、是ハ吟味詰差出之儀相伺候節、重追放、遠島、死罪、以上ニ可相成分ハ、公事方同役共江爲差出來候得共、右之類も郡代御役所ニ而吟味仕候積り、

一郡代支配御代官迄ニ而引合有之候吟味もの是ハ御代官立會吟味詰伺書差出來候得共、以來ハ最初ゟ郡代御役所江一件爲差出、吟味仕候積り、

右之趣以來取計方改正候ハヾ、規定も相立可然哉ニ奉存候、勿論前書ヶ條之外、相洩候儀も御座候ハヾ、公事方同役共江相談之上取極候樣仕、若又難相決儀も御座候ハヾ、其節ニ臨ミ相伺候樣可仕候、以上、

酉七月

（朱書）子三月十七日越中守殿江御直上ル、同十八日承付候樣御下ゲ、承付いたし同廿日春阿彌を以返上、

〔牧民金鑑 二十〕明和四亥年閏九月廿九日

私領幷外御代官所御預所ゟ、銘々御代官所御預所之ものへ懸り候出入、向方ゟ添簡を以訴訟人差越候ハヾ、支配之百姓共へ右出訴之趣申聞、相糺利害申聞、不相濟候ハヾ、其筋へ訴出候樣訴訟

人江爲申聞、訴狀相返、其旨向方へ可申達筋之處、雙方吟味いたし、或ハ他支配之ものを度々呼出候類、右之外奉行所へ出訴いたし候而ハ、右取計方抔、訴狀書加へ差出、筋違成樣ニ相聞候も有之、如何ニ候間、以來打合、雙方致吟味、或ハ他支配之者を度々呼出し候儀ハ、被致間敷候、

但奉行所ゟ吟味ニ相渡し候類ハ勿論、銘々御代官所御預所内不埒之もの有之、吟味中他支配所之もの引合有之、其支配之役人江懸合呼出相糺候儀、幷銘々支配所内ニ候ハヽ、寺院社人ニ而も呼出致吟味候儀ハ不苦候間、本文之趣意と混雜不致樣可被相心得候、

右之趣相心得可被取計候、勿論趣意委細ニ分兼候儀も可有之間、寄々公事方奉行所江可被相伺候、以上、

閏九月

〔牧民金鑑二十〕明和七寅年六月

御代官所御預所内之公事吟味物、都而他之引合有之候得バ、奉行所へ可被差出儀ハ勿論之事ニ候得共、其品ニ不携、存念承候迄之ものニ而も、他之引合有之候得バ、奉行所へ被差出候哉之段、先達而相尋候處、仕來區々候、以來一件ニ携候他之引合有之候ハヽ、其節々奉行所へ願出候樣申渡、存念承り候迄之引合ハ、其支配所へ懸合、他之ものニ而も呼出相尋可被申候、是迄も右之通被取計候も有之候得共、此已後區々不成ため申達候、以上、

六月

〔聞訟秘鑑〕一吟味懸合之者名前年齡相違之事〇中略

一御料私領分鄕之村方、御料之地所を致所持候私領人別之百姓、目安懸り之出入致候歟、又ハ他支配江添狀相願候節、御料之百姓と申立候得バ宜敷事と心得違、其趣を以願出候類、時々有之儀ニ候、御年貢筋ハ格別、縦御料之地面を所持、其地內ニ住居致候者ニ候共、私領人別之者、御料

之添使添狀等不致儀ニ付、私領分鄕村之出入諸願等ハ、最初名前を宗門帳ニ爲引合可然候、尤是等ハ相知候事ニ候得共、筋違と乍存願出候も有之、又ハ筋合不辨願出候も有之、此間違ハ折節有之事ニ付、別而入念可然事、

〔聞訟秘鑑〕一他所ゟ添狀ニ而來ル出入之事

是ハ他所ゟ添狀ニ而、吟味之儀申來候出入ハ、其筋江可相願旨被仰渡候樣卽答致、直ニ相返候而も不苦儀ニ候得共、御料同士ハ勿論、私領ニ而も折角指越候出入を、直ニ押返候も如何ニ付、一應相手方呼出、利害申聞、迚も內濟相濟間敷趣ニ候ハヾ、永く不留置、其筋江可相願旨申聞、相返候方宜敷候得共、金公事、其外日延申付候得バ、內濟ニ可相成趣相見候出入ハ、縱令日數相掛候而も、日延承屆可相濟事ニ候、入組候事ニ而、迚も不相濟趣ニ相見え候ハヾ、永く差留置候而ハ却而不宜候間、其心得を以可取計事、

一出入添狀（○添狀一本作訴狀）之事

是ハ他支配他領江掛り候出入ハ、添使を以直ニ御奉行所江可差出儀ニ候へ共、差而入組候儀も無之旨、相手方江差紙さへ附候ハヾ、多分內濟ニ可相成ニ付、御奉行所江願出候而も大造ニ付、一應地頭役人江吟味相願度旨申出候類、先方御料ニ候得バ、如才無之候得共、私領小給所等者、右體之取計不案內ニ付、添狀之文言等ニ泥ミ、御料之百姓を手荒き取計に而も致し、萬一欠込訴等ニ而も致候得バ品ニ寄雙方不取計ニも相成候間、兼々心付、添狀之文言、何々之出入之御吟味願出度旨申出候間、訴狀爲持、則願人差遣申候間、相手方一通御糺被下候樣致度旨申遣候方可然候、尤是等者聊之儀ニ候得共、去ル私領方ニ而、右類之取計有之、內々差もつれ候由承及候ニ付記置申候事、

一御三家御三卿樣役人立會之事

是ハ何事不ㇾ依、在々ニ而御三家御三卿樣、地方役人と手代立會吟味致候樣、御奉行所ゟ被㆓仰付㆒候砌、上座致度旨申候カ、又ハ口書宛所、初筆ニ認候樣申ㇾ之候ハヽ、手代身分ハ輕く候得共、御料之儀ニ候得バ、左樣可ㇾ致筋ニ有ㇾ之間敷旨一應掛合、其上ニ而得心無ㇾ之候ハヽ、其段御奉行所江申上候間、左樣被㆓相心得㆒候樣斷置、任ㇾ望候方可ㇾ然候、此儀其筋江承候處、御家柄之役人ニ候得バ、强而申爭ひ候も不ㇾ宜候間、右之通和らかに取計候方可ㇾ然由之事、

〔聞訟秘鑑〕一出作百姓加り候出入之事

是ハ御料之百姓と私領人別之出作百姓加り候出入之儀、御年貢筋一通ニ候へバ、御代官ニ而取計、其餘之出入ハ御奉行所江可㆓差出㆒候得共、夫錢等之出入ハ、一應御代官ニ而吟味いたし、若私領人別之百姓江、御咎ニ而も附可ㇾ申樣子ニ候得バ、其趣を以差出候方ニ可ㇾ有ㇾ之哉之段、其筋江承合候處、都而其者身分ニ拘り候出入ハ勿論之事、夫錢等之出入ニ而、私領之者不念之筋等無ㇾ之相見候得共、御年貢出入之外者、御代官ニ而吟味不㆓取掛㆒、最初ゟ目安掛ニ致可ㇾ然旨挨拶有ㇾ之候事、

〔聞訟秘鑑〕一通掛之浪人願之儀有ㇾ之候節之事

是ハ御代官役所江通掛之浪人等、欠込訴致候節、無宿之類無㆓取上㆒ニ付、住所を定、江戸表ハ町奉行、在々ハ御勘定奉行江可㆓相願㆒旨利解申聞セ、通例之事ハ取上間敷儀ニ候得共、强而相願候歟、又ハ難㆓捨置㆒儀を訴出候節ハ、手當致置、相手をも呼出し吟味之上、御奉行所江可㆓相伺㆒事、

一人殺吟味掛之事

是ハ御料支配違之人殺ハ、御代官之席順ニ不ㇾ拘、被ㇾ殺候場所支配之御代官主ニ成、致㆓吟味㆒候筋之由、然共一件書物名前等ハ席順ニ認、都而御料同士之立會之吟味者、一體之取計ニ候得共、其場所支配之御代官主と心得取計可ㇾ申事、

一公事人欠落之事
是ハ公事人吟味中欠落致候分ハ、御奉行所へ先屆ニ不ㇾ及、日限尋申付、六ヶ月尋候而も不二相知一時ハ、其趣を以落着相伺候方可ㇾ然由ニ候事、

一公事人病氣見屆之事
是ハ出入吟味中、縱令訴訟方病氣之由申立、呼出之節不二罷出一、相手方之者相疑、見屆願出候ハヾ、願之通申付、若見掛ハ病氣之體ニ而も無ㇾ之、全く虛病と相聞候間、吟味相願候旨申ㇾ之候ハヾ、足輕ニ而も差遣爲二見屆一、爲ㇾ差儀も於ㇾ無ㇾ之ハ、押而も罷出吟味可ㇾ請旨申付置、實々氣分惡敷候間、達而日延相願候旨申ㇾ之候ハヾ、面江不ㇾ顧大病も有ㇾ之儀ニ付、願人江利害申聞差延置、若他出いたし候歟、其外不埒之事共有ㇾ之候ハヾ、願人ニ不ㇾ構書付取置、出入中ハ其分ニ差置、追而別段相咎候方可ㇾ然事、

〔聞訟秘鑑〕一御取上無ㇾ之出入之事〇中略
一都而仲間公事勘定出入ハ、濟方御沙汰ニ不ㇾ及儀ニ候得共、是も雙方一通致二吟味一、口書申付伺之上不ㇾ及二御沙汰一旨、裁許可二申渡一筋之事、

一裁許幷落着伺認方之事
是ハ公事出入ハ通例之通、最初ニ公事銘を出し、雙方幷吟味ニ付、呼出候者共迄之名前年齡を記し、右出入訴訟かた吟味仕候處ヶ樣〳〵、相手方吟味仕候處ヶ樣〳〵と認、前ヶ條ニも記し候通、公事出入之分ハ、奧文言ニ裁許申渡候樣可ㇾ仕哉と相認、吟味物之分者、最初ニ何月幾日、先御屆申上置候何々之儀吟味仕候趣意左之通ニ御座候と致し、夫々名前年齡を記、右誰吟味仕候處、右誰々吟味仕候處と、一應限ニ始而名前を出し、奧書文言ハ落着可二申渡一哉と認候方宜由之事、

但朱書を入置度候ハヾ、墨書ニ而分り兼候類、又ハ引合之申口、本文ゟ一字下ゲ而認、御咎之附候者之申口ハ、朱書ニハ不致候、尤朱書ニ致候分ハ、始ニ名前を不認、地頭國郡其者名前何人ニ而も書下ニ致候事、

〔評定所格例〕三千石以下知行四人呼出之事

寛政元酉年五月

小高之私領ニ而盗賊召捕候節、差出方之儀ニ付、御書取之趣、評定所一座評議、

小高之地頭知行ニ而、盗賊等召捕候共、不取逃様手當いたし、奉行所迄差越候而は、至而難儀成事ニ付、江戸表江不差越して難成節者、最寄御代官、或は御預り所等江請取送り越、其所ニ而吟味詰候而も可然分者、御代官御預所ニて吟味いたし、奉行所江伺候様いたし可然哉、○中略以來者、關東三千石以下之私領ニ而、盗賊を召捕候はヾ内藏ニ入、不取逃様いたし、村継宿送りを以奉行所江差出候様被仰渡、右之段其度之御勘定奉行道中奉行江も被仰渡、三千石以上之分は、是迄之通不取逃様手當いたし、地頭より呼寄、奉行所江差出、三千石以上ニ而も、遠國之分者、最寄御代官、又者御預所陣屋江爲受取吟味爲仕、吟味詰之趣、奉行所江相伺候様御極被置可然哉、○中略奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、以上、

酉正月

御差圖

評議之通たるべき旨、松平越中守殿、御書取を以被仰聞、

〔嘉永明治年間録十五〕慶應二年十月朔日、關東郡代宿村ニ建スル條々、

一關東郡代仰付られ、國分にて致支配、諸方便利の地へ郡代陣屋御取建に相成候御趣意ハ、近來

諸國とも不穩、在々へ無頼のもの立廻り、良民を辛苦め候者ども有之候に付、右御取締向ハ勿論、教育筋專ら御世話有之、何れも其職業を勉め、安穩に生活相成候樣との厚き御趣意に付き、上の御仁惠、親敷下々へ申聞せ、又下々の曲直邪正、明かに上へ申立、上下の情無隔樣取扱候御役儀に付、其邊等も相辨へ、左の件々小前末々迄も申聞置候樣致すべし、

一公事訴訟等、江戸表へ罷出相願候節ハ、諸雜費も掛り、小前末々に至り候てハ、其事柄理分有之候とも、入用行屆き兼候處より、空敷過去候者も可有之候間、郡代在陣にて、御料私領とも致取捌遣し候事、若し又在陣場所等相隔り候者ハ、廻村等の節、訴訟候とも苦からす、○下略

○按ズルニ、代官所給人モ其地ノ訴訟ヲ聽クコトヲ得、事ハ裁判諸制度ノ條下ニ引ケル、御當家令條ニ見エタリ

〔武家諸法度〕一私領百姓の訴論ハ、其領主の裁斷たるべし、事若他領に係るにおいては、或ハ兩地の領主互に相通じ、或ハ支配の頭人各相會して議定すべし、事尙一決し難きにおいては、評定所に就て裁決を請しむべき事、○中略

享保二丁酉年三月十四日

〔諸士法度〕條々○中略

一百姓公事、雙方自分之知行たるにおいては、其地頭可計之、相地頭之百姓と公事いたさバ、其類之番頭組頭以相談可捌之、無番頭者ハ、其なみの輩寄合可濟之、總而有滯儀ハ、達役者可請捌事、

○中略

寛永十二年十二月十二日

〔牧民金鑑　一〕張紙四百四十八ノ上 一村一體之出入ニ候得共、給々引分候ニ付、地頭ニ而吟味難相成譯を以、目安掛ニ成、

長門守○小長谷政長、勘定奉行、掛　文化十酉七月一座評議

一下總國井戸野村小前總代理左衞門相手、同村名主勘解由外三人勘定出入、
右村方ハ上原藤二郎、天野淸兵衞、山崎鎭次郎知行ニ而、相手も右三人之知行村役人ニ候處、一村御料所之節之勘定合を、三給ニ人別相分候以後申立候出入ニ而、一村一體之事故、一地頭限之糺難相成、假令訴訟方ハ、三給銘々引分出訴相成候而も、相手ハ是迄御料之節四組ニ分、村役人も四組候間、三給人別之村役人共一同之吟味無之候而ハ難相成間、則支配違江掛候出入ニ付、目安掛之積、

年貢諸夫錢出入、幾之滯訴出候裏判不差遣、相手方呼出、手限ニ而相糺候積相談濟、

相手ハ是迄御料之節四組ニ分、村役人も四組候間三組人別之村役人共、一同之吟味無之候而ハ難相成間、則支配違江掛候出入ニ付、目安掛之積、

年貢諸夫錢出入、幾之滯訴出候裏判不差出、相手方呼出、手限ニ而相糺候積相談濟、

〔諸例類纂五〕文政六癸未年七月廿五日、御勘定奉行石川主水正殿忠房江〇差出候處、同廿八日御附札濟、

領分之者、御料私領村方之者と、金銀貸借致、濟方差滯候節、先方ニ而、證文面を以可相糺候間、領分之者差出候樣申來候節ハ、差出候而も宜筋ニ御座候哉、又ハ御奉行所幷御代官所御預所之外ハ、御下知無御座候而ハ、難差出筋ニ御座候哉、

一領分之者、御三家樣、御三卿樣、宮方御領知村方之ものと金銀貸借いたし、濟方相滯候節、先方ニ而逐吟味度ニ付、差出候樣申來候節ハ、差出候而も宜筋ニ御座候哉、取計方如何相心得可然哉、

右之趣、兼而相心得罷在度奉存候、以上、

七月廿五日　諏訪伊勢守家來　渡邊三右衞門

御附札

書面御領分之者、他領村方之者と金銀貸借致し、済方相滞候節、先方領主地頭ニ而可相糺由申來候共、奉行所之外ハ、御代官御預り所ニ而も、御領分之者可差出筋ハ無之、尤他領より御領分之者へ相懸り、先方領主地頭添簡を以、御領分之者糺之義申出候ハヽ、訴訟之趣を以、御領分之者共計別段呼出、一通御糺、利害ニ而可相濟筋ニ候はヽ、日數凡二十日ほどハ見合、夫ニ而も不相濟候はヽ、其旨先方領主地頭江御申達候樣存候、

一御三家、御三卿、宮方領地拘合も前書同樣之事ニ候、併水戸殿一領之者計江他領ゟ懸り候金銀出入、最初水戸殿役場ニおゐて、同領分之もの一通糺有之積、兼而取極も有之間、御領分之者、水戸殿一領之者計江懸り、金銀出入訴出候はヽ、一應水戸殿役人江及懸合、挨拶被承候上ニ而、奉行所へ可被差出義と御心得候樣存候、以上、

未七月

〔牧民金鑑一〕万石以下小家之知行之者より、水戸殿領分之者而已江掛候目安、

水戸殿役人江之挨拶

御書面之趣致承知候、万石以下小家之知行之者ゟ、御領分之者而已江相掛候出入訴出候節、訴訟方之地頭より、御役人中江掛合可濟事哉ニも相見候分ハ、去ル子年、石川左近將監御勘定奉行中、御挨拶およひ置候通、掛合之儀可申達候、尤迚も對決之吟味ニ無之候而ハ難相決筋之一件、又ハ御料其外他領之者をも一同ニ相手取候出入ニ候はヽ、直ニ取上候積取計可申、其旨御心得候樣存候、

申正月〇年紀闕

右ニ付秋月備之進ゟ留役江之達

御挨拶書ニ掛合ニ而可相濟哉ニも相見分と有之候ハ、

本公事之内ニ而、質地作德、預金、給金、又ハ打擲等之不入組出入計と御心得可被成候、

〔御當家令條 一〕條々〇中略

一知行境、野山水論、幷屋敷境、於何事茂、私之爭論致べからず、若申分あらば、番頭組頭ニ可令相談、番頭なきものは、其なみの輩に談合ニおよび可濟之、滯茂あらば役者ニ達し、可受其旨事、〇中略

一百姓公事、雙方自分之知行所たるにおゐては、其地頭可計之、相地領之百姓と公事いたさば、其類之番頭組頭以相談さばくべし、番頭無之ものは、其なみの輩寄合濟すべし、總而滯義あらば達役者捌を可請事、〇中略

寛永十二年十二月十二日

〔御當家令條 一〕條々〇中略

一百姓訴論之事、雙方之番頭、組頭迄穿鑿、其組之荷擔不致之、相互令相談可捌之、頭なき者は、其並之輩寄合可濟之、滯義あらば達役者可受其捌、然上者、地頭者勿論、番頭組頭幷其列之輩不及出評定所事、〇中略

寛文三年八月三日

〔享保集成絲綸錄 四十四〕正保三戌年三月

一御小性組番頭、御書院番之番頭招詧中、此以前より如被仰出、組中百姓之公事訴訟等、番頭寄合、内證ニ而可相濟之事にも不能成儀、公儀江出間敷候段、上意之旨、朽木民部少輔申渡之、〇又見大成令

〔享保集成絲綸錄 四十四〕寛文六午年十月〇中略

一壹町之出入有之バ、名主五人組雙方江異見いたし可相濟候、亦他町之ものと出入有之ば、雙方名主五人組寄合、以相談可相濟候、滯儀有之ば、町奉行所江可罷出事、

右之通、名主、家主、店之者共迄、不殘可被申聞者也、

滯訟

十月

〔享保集成絲綸錄四十四〕元祿八亥年十二月

覺

一組中支配之面々、金銀出入之儀訴出候はゞ、向後其頭々、支配々々ニ而遂吟味、相濟候之樣可被致候、無據子細有之而、頭も存寄程之儀ハ格別、左樣にも無之、分限相應ニ大分借金等有之候段ハ、不宜事候之間、左樣無之樣ニ可被申聞候、以上、

十二月〇又見二被仰出留一

〔享保集成絲綸錄一〕正德六申年四月

評定一座可被相心得候條々

一公事訴訟人、遠國ゟ罷越候ものハ申ニ及ばず、當地之ものも、裁斷遲滯ニ及び候而ハ、本人どもの外、其所の費迄も、内外の物入も、日を逐ひ候而ハ多く、これに付ては、內緣秘計を廻らし、其事を取持候もの杯も出來、種々不宜取沙汰も有之候、又ハ此等之物入をいとひ候もの共ハ、おのづから公事訴訟もなりがたく、道理有之ものも、非道の事におしかすめられ、迷惑し候ものも可有之候、すべて如此の事ハ、御仕置のために甚不可然候、然共其事によりて、理非疑はしく、又ハ一座の評議もまち／＼にて事決しがたく、裁斷延引し候事も可有之候、自今以後ハ、公事訴訟等、百日に過候て事決しがたく候をば、其事の始末分明に書記し、何も存寄の所をば、二筋にも三筋にも附札にしるし可被差出候事、〇中略

右條々、評定所奉行所之事ハ、天下之理非の相定候所にて、其上又世の人之安堵し候も、迷惑し候も、公事訴訟も裁斷に相懸り候、たとひ一旦ハ、其時之奉行之沙汰ニ候故ニ、理を以て非とせられ、非を以理とせられ候共、違背には不及候といへども、年月を經候後に至て、其事破れ候ては、最初

裁斷の時、一座の衆中のために不ㇾ可ㇾ然事に候、すべて此等の道理ハ不ㇾ及ㇾ申候へども、御仕置のため、大切の御事ニ候を以て相違候間、能々可ㇾ被ㇾ存ニ其旨ㇾ候、以上、

正德六年申四月日（○又見ニ科條類典、憲教類典ㇾ）

〔科條類典上二〕享保六丑年

公事出入訴下役所等ニて滯候儀ニ付御書付

總而下々訴出候儀、奉行所江早速不ニ相達ㇾ下役所、或者其所支配人之方ニ而滯らせ候儀も有ㇾ之由ニ候條、隨分心を付可ㇾ申候、若押置候故、越訴など致候もの有ㇾ之節者、其筋之役人、急度相糺可ㇾ申事、

六月

〔享保集成糸綸錄四十四〕寬保元酉年十二月

三奉行江

一公事訴訟并諸願事

一僉議事

右十箇月以上未ニ相濟ㇾ分、何國何郡誰何之事、何年何月より承候段、例年春中、前年之御仕置者人數書付出候節、別紙書付差添可ㇾ被ニ差出ㇾ候、并前年春十ヶ月以上、未ニ相濟ㇾ公事訴訟諸願僉議事書付候分、其年中ニ落着候はゞ、去春申上候何々之義、何月幾日、何樣ニ裁許申付候との義も書付可ㇾ被ニ差出ㇾ候、

但借金出入公事之義ハ、被ニ書出ㇾ不ㇾ及候、（○又見ニ科條類典ㇾ）

〔寶曆集成糸綸錄三十一〕寬延三午年九月

三奉行へ

一公事訴訟諸願事

一僉義事

右六ヶ月不㆓相濟㆒有㆑之候はゞ、何故不㆓相濟㆒有㆑之候譯、誰掛りニ而、未相濟不㆑申候段、其度々ニ書付可㆑被㆓差出㆒候、尤其以後右相濟候はゞ其段可㆑被㆓相屆㆒候、

但借金出入公事之義ハ、書付被㆓差出㆒ニ不㆑及候、

九月

公事訴訟、并諸願事僉義事、甚手間取、日數相懸り候も有㆑之、下々及㆓困窮㆒、在牢之者ハ病死等も多相成、如何成儀ニ候、裁許落着等、早く相濟候樣ニ吟味可㆑有㆑之候、從前之吟味事、早く落着候樣取計申義勿論之事ニ候、無㆓據譯㆒有㆑之ハ格別、可㆓相成㆒丈ヶ吟味手間取不㆑申、日數不㆓相懸㆒樣ニ可㆑被㆑致候、

右之通可㆑被㆑得㆓其意㆒候、且又遠國奉行、并火附盜賊改江も、右之趣可㆑被㆓相達㆒候、

九月〇又見㆓科條類典㆒

〔寶暦集成絲綸錄三十〕寶暦八寅年六月

三奉行江

公事訴訟、并諸願事僉義事、甚手間取、日數相掛り候も有㆑之、下々及㆓困窮㆒、在牢之者ハ、病死等も多相成、如何成義ニ候、裁許落着等早々相濟候樣吟味可㆑有㆑之候、從前之吟味事早く相濟候樣取計申義勿論之事候、無㆓據譯㆒有㆑之ハ格別、吟味手間取不㆑申、日數不㆓相懸㆒樣可㆑致旨、先達而も相達候處、今以相延候も有㆑之候、最前も相達候通、無㆓據譯㆒有㆑之、相延候義ハ致方も無㆑之候得共、差而中立ニ相成候程之譯も無㆑之相延候も有㆑之候、吟味事手間取不㆑申樣ニとの義ハ、從㆓前々㆒度々被㆓仰出㆒候事候、既寛永巳後、御代々被㆓仰出㆒候、評定所法式にも、評定衆卯半刻ゟ會合候而、申刻退出、其日決しがたき事ハ、翌日寄合、猶亦不㆓相濟㆒義ハ、老中江申達可㆑致㆓言上㆒旨被㆓仰出㆒、正德年中ニも、近年公事訴訟、其數多成來候處、評定所之面々事ニ馴、裁斷之次第無㆓滯㆒候歟、會合之間も無㆑之退出候樣相聞、若每事其大法

ニ任せ、其道理を不盡及裁斷候而ハ不可然事之旨、被仰出も有之事ニ候得バ、面々右之心得ハ可有之事ニ而、吟味事致油斷候義ハ有之間敷事ニ候得共、近頃ハ評定所寄合之節も、退散早き趣ニ候、左候而ハ吟味事日々評義等申談之間も無之、自然と日數も相懸り、銘々手切吟味も右ニ准じ可申事候間、右之趣相心得、猶亦銘々手切吟味ハ勿論、一座吟味評義等之義も無油斷、延々に不相成樣可致候、左候得バおのづから早く落着可申事候條、自今急度申合可取計旨被仰出候、以上、

六月

〔憲教類典四ノ六評定〕寶曆九己卯年正月

寺社奉行江

同役代り候節ハ、公事訴訟、先役之者吟味仕掛置候分ハ、跡役之者江受取候ニ付、新役之者評席等出來不仕内ハ、吟味取掛不申、彼是手間取相延び候間、以來ハ先役之者吟味仕掛置候分ハ、古役之者江割合請取、新役之者ハ、月番相勤候以後より之公事訴訟取扱候樣可被致候、

正月

〔天明集成絲綸錄四十八〕寶曆十一巳年四月

三奉行江

公事吟味物手間取、其内ニ者永々入牢申付置候者も有之候、右者吟味不決故之儀ニ可有之候得共、其内ニ者一體之吟味者相濟、總之引合ニて落着不致義も可有之候、依之以來公事吟味之事、及六ヶ月候はゞ、例之通被相屆、其後彌不相決、又候六ヶ月ニも及候はゞ、何之吟味ニ而何程迄ハ吟味相濟候得共、何之譯ニて吟味落着不仕とのぎ書付可被差出候、右之通ニ候とて、吟味不詰ものを、差急落着仕候樣ニとのぎニ者無之候條得と無間違樣可被相心得候、尤吟味もの入念致吟味候儀勿論之事ニ候、

四月〇又見ニ科條類典

〔天明集成絲綸錄四十八〕寶暦十一巳年四月

先達而相達候、公事吟味事、及六ヶ月候はゞ、例之通被相屆、其後彌不相決、又候六ヶ月ニ及候はゞ、何之譯ニ而落着不仕段書付被差出候儀、是迄六ヶ月以上被相屆置、當時又候六ヶ月以上ニ相成候分、此節不殘相調書付被差出、此以後者、月々公事吟味物頭書被差出候節、別紙ニ認差出候樣可被心得候、

〔天明集成絲綸錄四十八〕寶暦十一巳年四月

演說之覺

公事出入裁許之儀、前々より手間取、永牢或ハ遠國近在之もの、永々御當地ニ留置候事無之樣、奉行江被仰出有之、無油斷吟味有之事ニ候得共、吟味大形ならず相濟候得而も、遠國等之懸合、又其品ニ寄、今少シニて裁談難決、不得止事日間掛り候事も可有之候間、今少シニて難決筋者、先其趣何も江內聞有之候而も、裁許之助ニも相成可申筋ニも可有之候、御仕置伺吟味書繪圖、凡而書面之儀、其筋書面相分候得者、認違落字等ハ書添消補、文字之大小ニ不構、認可被申候、吟味裁許之趣相分候得者、書面等之儀者、如何樣ニ候而も不敬之筋ニ者無之候之間、其趣得ト承知、無益之日間掛り不申候樣可被致候、左候はゞ伺被差出儀、手廻被致能方ニも可有之候、且又被差出候節、奉行或ハ相掛り申合被差出候砌、詰合無之候而も、書面伺書名前有之候間、詰合不申候趣被申聞可被差出候、何も退出前、品ニより被申合候而被差出候事間ニ合不申候節ハ、何之御仕置吟味伺被差出候段、退出差掛り候得而も、御同朋頭ヲ以可被申聞候事、

右之趣ニ被心得候得バ、無益之日間有之間敷候、唯今迄御役筋仕癖ニ候共、無益ニ日間掛り候筋之儀ハ、各被申談被致勘辨、品ニより可被申聞候、〇又見ニ三奉行取計書

〔天明集成絲綸錄四十八〕安永四未年十月

公事訴訟諸願事、詮議事、手間取候故、下々及困窮、在牢之者病死等も多、如何候間、無據儀ハ格別、可成丈手間取不申様、先年も被仰出候、其頃ゟ六ヶ月以上ニ成候分、其譯書付差出候、其後猶又精々被仰出、毎月上旬、公事銘井十二ヶ月以上ニ及候公事出入之書付も被差出、油斷ハ有之間敷候得共、今以手間取候公事有之候、公事出入吟味物等、日數相掛候而ハ、下々及困窮候儀、歴然之事ニ而、其上入牢永キ內ニ者、自然牢死之者も致出來事ニ候、尤爲入念自然手間取候儀ニ而、麁末ニ可致儀ニ者有之間敷候得共、入念候ニ程も有之事ニ候間、以來別而心附、可成丈不手間取様可被致候、

右書面之趣、承知迄之事ニ不被致、一座申合心付、違失無之様可被申合候、

〔天保集成絲綸錄七十五〕寛政三亥年三月

三奉行江　口達之覺

公事吟味物等、六ヶ月以上不相濟屆書、井落着いたし候屆書、以來一通宛可被差出候、

右之趣、遠國奉行、井火附盜賊改江も可被申通候事、

〔天保集成絲綸錄七十五〕寛政三亥年三月

三奉行江

評定所一座掛り公事訴訟、井三奉行一役限、又ハ手限吟味物等、銘々掛リ之分頭書ニいたし、毎月被差出候得共、當時何も出精致し、吟味事遲滯ニ及候品も無之候間、以來書付被差出ニ不及候、

一十二月以上不相濟公事吟味物等譯書も、以來被差出ニ不及候、

〔聞訟秘鑑〕一六ヶ月屆之事

是ハ公事出入、六ヶ月屆いたし候へば、翌月ニ至、御月番へ御書上に相成、一件相濟候得バ、御屆

返を致候迄ニ而、再六ヶ月御屆ハ無之由、然ル上ハ御代官ゟ御奉行所へ之御屆も、初六ヶ月限ニ而宜候得共、念入候ハヽ、再六ヶ月ハ屆候方も可然旨、尤右屆ハ、訴狀ニ認候出入之重立候趣意計、荒增認、相手方之答ハ、委敷不認候而も相濟候事、

但質地并小作滯出入、都而金公事之分ハ、六ヶ月屆ニ不及、然共右之類ニ而も、入組候出入ニ而、不法之取計等有之分ハ、六ヶ月吟味致候内ニハ可相分候付、右之分ハ見計、六ヶ月屆可致候、先者通例之金公事者不屆ニ及候事、

六ヶ月屆振合左之通

誰御官所
何國何郡何村
訴訟方　誰 外何人
同村
相手方　誰 外何人

何ノ何月吟味取掛
一何々之出入

是ハ訴訟方、ヶ樣々々申立候ニ付、相手方呼出吟味仕候處、彼是申爭ひ、未決着不仕候、

右出入六ヶ月以上不相濟ニ付、御屆申上候、以上、

何ノ何月　誰印

右之通、何ノ誰殿江御屆申上候ニ付、寫を以申上候、以上、

如斯相手方申候ハ、委敷不相認指出候事、

月番之御奉行所へハ、一ト通物ニ而本紙壹通、寫壹冊添指出ス、月番無之御奉行所へハ、寫計壹冊指出ス、

〔牧民金鑑二十〕公事訴訟、并諸願事、詮議事之儀、六ヶ月以上ニ成候分ハ、何故不相濟譯、其度々被書出候樣、先達而申達候處、是迄段々被書出候得共、巨細に無之故、旨趣分り兼候義間々有之、其譯尋申遣候而ハ、遠國ハ月數相違ニ相成、如何ニ候、右六ヶ月以上之儀被申聞候得者、其度々御老中方

江申上候事ニ候間、左之趣を以、向後可被書出候、

一何出入

誰御代官所
誰御預所
何國何郡何村
訴訟方　誰
　誰
右同斷
何國何郡何村
相手方　誰
　誰

右者何月幾日、何之義申上候ニ付、吟味有之候處、如何樣之子細ニ而手間取、六ヶ月以上ニ成候譯、巨細ニ無之候共、其旨趣分り候樣可申出候、

右者訴出候月ゟ六ヶ月、月上旬ニ可被申聞候、

○按ズルニ、本書年月闕ケタレドモ、前後ノ書ニ據リテ考フルニ、蓋シ文化年間ノ規定ナラン、

〔公裁秘錄 一〕一六ヶ月御屆に不及公事之事

都て金公事、幷奉公人給金滯出入は、六ヶ月屆に不及候、右之內給金出入、又は金銀出入にても、六ヶ敷長引可申趣之出入は、六ヶ月屆いたし候て宜候旨、天明元丑年十二月五日江坂孫三郎申聞候由及承申候、右は御代官之心得方ニ候、

私に云、一座ゟ御老中方江、每月六ヶ月御屆いたし候公事合之內、金銀出入は御屆は不致候、是は金公事は裁許之定法有之故と存候、

〔折たく柴の記 下〕是も此ほどの事なり、流人等配所にわかち遣すに及びて、こゝより十里ばかりが程隔たりし是政といふ村の者共、流罪の事をもて、奉行の人に申す事あり、その志るせし所を見るに、去年の七月、〇正德五年彼村の者共、千四五百人相催して、下小金井村にみだれ入りて、竹木田

毛刈どりし事によりて、其張本三人共罪に決し、獄中に繫置しに、此年の春、獄舍燒し時に、にげうせしものの有、其餘のものをば、此たび配所に遣すべきなりと見えたり、いかに、かほどの事、今迄は申さるゝ事もなくてやあらむ、よく〱其事の由を問はるべき事なりと申す、〇中略當時其事も申されざりし事の由を問はれしに、御料の事なれば、伊勢伊勢守〇貞數が許に告來りし所なり、（勘定奉行の月番たる故也）八月四日に、評定所に召して、衆中と相議せしに、あまりに其人多くて、悉くに皆罪せん事も叶べからず、たゞその張本人等、流刑に處するにしかじと議定して、十一月四日に、張本三人流刑に決す、かゝる事の例を評定の留役人といふもの共召問ひしに、流刑に處せられしものをば、流しつかはす時に至て申給ふ事也と申せしかば、當時其事を以て申すには及ばず、今此仰を承り、彼留役人等召問ふに、其中所各同じからず、せんする所伊勢守があやまちにこそ侍れと申す、〇中略前にしるせし事のごとく、近き比ほひ評定の人々、評定所留役人といふもの共に打任せて、訴論の事も禁獄の者も、多くの年を歷れど事決せず、かくては世の人のため、いかにぞやあるべきといふ事共つぶさにしるして、今よりして後、評定の衆中、訟聽かるべき事例を議し申ければ、まづ彼留役人ども其職召放されて、公事訴訟百日を過て事決せざらむには、其事を申べき由の事等、奉行の人々に仰下されたりけり、

〇按ズルニ、此令ハ、正德六年四月ニ發シタルモノヲ云フナリ、

〔紀州政事鏡上〕一家中之家來、町人、百姓、科人等有之時は、右詮義數月不掛相片付候樣、公事方役人へ可申付候、長ク及詮義候而は、其向懸合之者可及困窮ニ候間、早ク相濟候樣、明白に出精可爲致候、夫共及死命程之義は、隨分念入可申候、少たり共、贔屓無之樣可爲致候、兼而申付候通爲聞番、家老共壹人、側廻り兩人爲相詰可申候、非分之取噯き無之樣第一ニ候、右詮義口書、揃而差出次第披見可申候、

相裁決

〔御定書百箇條〕裁許并裏判不請者御仕置之事
従前々之例
一裁許不請者　中追放
同追加　〇中略
一裁許相濟候儀を内證にて不用破候者、　中追放

〔公事訴訟取捌〕裁許破掟背其外御仕置大概、
一裁許難澁之者は、牢舍或は手鎖、裁許請可申旨於申出は赦免之、
一難立儀及強訴は、閉門戶〆、田畑取上、所拂或は追放遠島、
一先裁許を於申紛は戶〆、手鎖、或は過料追放、
一先裁許を疎致候ニ付、於再訴は、名主取放、戶〆或は過料、
一地頭又は支配頭之背裁許、難立儀於強訴及は、戶〆所拂過料、
一立會給圖久敷於滯は牢舍、致訴訟御赦免、
一追放所拂之御仕置於請ざるには、遠島或は追放、

〔科條類典下一〕寬保元酉年十一月、牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之内、
㊀裁許并裏判不請もの御仕置之事
一極
裁許不請もの　中追放
朱書
是ハ元文五申年、信州飯田村長久寺儀、同村吉右衛門と境論出入ニ付、裁許有之處不請ニ付、脫衣追放之例、
懸紙
是ハ只今迄之取計を以相認申候
〇中略
右寬保二戌年二月廿九日、伺之通御下知本文極ル、

〔憲敎類典四ノ六評定一〕年號月日不知
諸裁斷大概〇中略

一裁許破之事

是ハ裁許相濟候儀を破候者は、詮議之上、五十日、或ハ六十日過怠申付、誤り申候得バ、令赦免之事、

（官裁秘書十三）裁許不請もの、幷裁許相濟候儀を內證に而不用、破候者之御仕置伺候も有之、不及伺御仕置申付候も有之、區々に候、右兩樣共、中追放之御定有之、其上元文五申年之御書付に、死罪遠島重追放可申付者之儀ハ、前々之通可相伺候、右之外之御仕置ハ不及伺と有之、則御定書上卷に載候間、中追放ハ伺候筋に無之候條、御指圖にて裁許致候品ハ、是迄之通相伺、其外評定所公事、內寄合手限者共に、已來不及伺御仕置申付候積、

右安永八亥年九月廿一日、評議極ル、

然處評定所にて之心得、是迄違候間、不及評議伺候筋には無之段、同十月四日、再評にて極、

（張紙留）寬政九巳年八月廿五日、一座申合、

裁許難澁いたし候もの以來其席に而入牢申付候儀等之事

一評定所公事於一座裁許、幷銘々手限もの共、裁許難澁いたし候もの、是迄入牢ハ不申付、其品に寄、宿預ヶ等申付置、再應利害申聞候而も不致得心申張候ものハ、中追放申付候得共、以來ハ裁許致難澁候ハヽ、直に其席に而入牢申付、利害申聞候儀ハ、是迄之通取計可申候、

但一座之もの之儀ハ、難澁之始末に寄、格別不屆之事も有之候ハヽ、即日評議之上、直に中追放申付候樣にも可致、

右寬政九巳年八月廿五日、一座申合候事、

（科條類典下一）元文五申年伺

（元）信州伊那郡上飯田村長久寺境論裁許違背ニ付御仕置伺書

伺之通可申付旨被仰聞承知仕候、

申十月十一日

評定所一座

申九月二日評定所より入牢

堀大和守領分
信州伊那郡飯田村
訴訟人　長久寺

同領
同國同郡同村百姓
相手　吉右衛門

長久寺訴出候は、享祿年中、諏訪大明神致勧請、慶安二年、諸役免許之御朱印頂戴仕來、相手吉右衛門居住之地所、元來境内社地に無紛處、鳥居前之芝地致開發、剩境内江井筋を付、水車仕懸候得共、古來之山境井筋、今以分明之處被取掠、迷惑之旨申之候、吉右衛門相答候は、祖父大宮諏訪大明神之神主之處、延寶年中、出入之節、神職被取上、長久寺支配に相成候、境内之鎭守は、稲荷之小祠ニ紛無御座候、此度吉右衛門居屋敷田畑共に、境内之由申候得共、水帳に相載、年貢幷諸役等勤來候處申紛候、殊山境井筋を相違之旨申立候得共、先年出入之後、雙方立合、杉並木植置、社地境慥に有之候、井筋ハ村方之用水に而、先規之通相違無御座候處、田畑可奪取巧之由申之候、右出入吟味仕候處、先達而領主堀大和守方に而、一旦裁許申付候處、長久寺難澁申不相請候ニ付、領内寺院二十ケ寺取扱、長久寺心得違之由申之相侘候故、延寶年中、境目相立候よりは、品も附裁許申付、雙方請書迄差出候處、領主之裁許不得心之由にて訴出、諏訪明神社地境、吉右衛門田畑居屋敷共に、長久寺境内に無紛爲證據、中興之住持自筆詩之前書に、古松澤氏社西南之境内に卜居、縦令爲神職と有之を以、地所相爭候得共、右田畑屋敷ハ、先領主脇坂淡路守附送り、寛文九年之水帳に、名所高共致符合候上は、長久寺爲證據差出候、住持自作之詩文は難取用旨申聞、口上書申付候處、右詩文住持自筆に而、證據に不相立候者、水帳も領主に而申付候帳面故、證據には罷成間敷

旨申、口上書に印形不仕候、右之通水帳を申消し相爭、地所難決候付、御代官大久保內藏助、大塚孟六兩人之手代差遣、地改爲仕候處、長久寺境內と申場所、水帳に引合、相手吉右衞門持地に相違無御座候、長久寺分御朱印六石之地面相改候得者、當時拾八石程有之候、井長久寺井筋社地境江附替候由申立候得共、元來村方之用水に紛無之、且石橋向に古井筋有之由申候得共、西井筋際に作場馬道有之通路仕、古井筋とハ不相見候、地所悉相分り、少も紛敷儀無之、長久寺申分一向不相立候付、地改之もの口上書申付候處、願之趣不相立候而は、印形難仕旨申、是又印形不仕候、右之通にて再往吟味之上、長久寺申分不相立候故、一座評議之上、繪圖裏書を以裁許申付候處、裁許を不請不屆に付、入牢申付置候、最初領主に而裁許申付、一旦請書迄差出候處、不得心之由に而及出訴、反古同前之詩文前書を證據に差出、水帳を申消、兩度之口上書に印形不仕、我意を立、剩裁許を不請、重々不屆に御座候間、脫衣追放可申付候哉、奉伺候、

申九月

右出入、地改吟味之上、當九月二日、繪圖裏書を以令裁許處、長久寺及難澁に付、伺之上、元文五申年十一月十三日、長久寺脫衣中追放申付、繪圖裏書、左之もの共江下置、但長久寺後住極候迄、觸頭江渡遣、目安返答書繼合裏判消、評定所に納置、

〔科條類典下一〕寛保三亥年裁許

一相州赤羽根村滿藏寺相手同國室田村仁兵衞外貳人社木伐採出入

相州高座郡赤羽根村御朱印地滿藏寺訴候ハ、同國室田村八王子權現末社等迄、滿藏寺支配に而、祭禮之節、注連祈禱執行致來候處、宅間伊織知行、同村名主仁兵衞儀、日蓮宗故、右社を檀那寺妙蓮寺支配に可致と企候に付、滿藏寺元住僧昌代、享保十三申年及出入處、右社滿藏寺支配いたし、祭禮注連祈禱相勤、宮林祭免畑作德之儀ハ社用に遣、百姓助成には一切致間敷

旨裁許有之處、仁兵衞儀、近年裁許を相背、社地雜木伐採、私欲にいたし、剩社木を以、日蓮宗新地を建立いたし、其以後傳昌儀、同國梶原村等覺寺江移轉いたし、無住之間、社地大木夥敷伐採賣拂、木之根上掘崩、社地悉荒候間、吟味願旨申之、

一相手仁兵衞外貳人答候ハ、日蓮宗新地致建立段、滿藏寺申立候得共、室田村妙行寺之儀、往古鎌倉小町村に有之候處、七年以前、本寺池上本門寺ゟ寺社奉行所江相願、室田村江引移、新地之筋に無之、且方之事故、仁兵衞世話いたし、方々材木相求致建立候得共、造作不殘ハ不致出來候に付、去秋中、村中相談を以、社木拾本餘伐採遣候、二十年以前も、室田村永生寺客殿入用に右社木伐用、末木枝葉ハ賣拂、普請入用にいたし、私用に遣候儀一切無之、尤祭禮之節は、注連祈禱滿藏寺江相願、裁許相背候筋無之旨申之、

右出入遂吟味處、享保十三申年裁許證文に、宮林之儀、社用に遣可申候、百姓助成ニハ一切仕間敷旨有之候處、寺用に遣候と申儀難立、先裁許相背不屆に付、頭取候名主仁兵衞中追放申渡、并百姓共村中相談之上伐採候段不埒に付、先達而吟味之上書出候木數百本餘、此代金五兩、村中より差出、雙方立合封印に而村中江預り置、社用有之節遣可申旨申渡、右之趣證文申付、目安返答書繼合裏判消、評定所ニ納置、

〔公案比事十八〕安永六酉年正月、一座掛、

一越後國須原村善右衞門跡式出入領主裁許難澁ニ付一件

關川庄五郎當分御預所
越後國魚沼郡下長島新田
百姓　喜兵衞

松平右近將監殿御下知

右之者儀、善右衞門跡式出入之儀ニ付、領主松平豐三郎裁許之趣、非分之筋も無之、親類共一同請致候處、我意申張、請印滯候段、心得違之至不埒ニ付、三十日手鎖、

〔御仕置例類集 二〕安永七戌年御渡

京都町奉行赤井越前守伺

一地頭限之出入吟味を拒候百姓共取扱方之儀ニ付評議

去月廿二日御渡被成候赤井越前守相伺候、南金岐村外貳ヶ村百姓共出入之儀、一給切之事ニ候間、奉行所吟味ニ不及方には有之間敷哉、又は御當地於奉行所吟味いたし候方に可有之哉、致了簡可申上旨被仰聞候ニ付、書面一覧仕候處、佐々又四郎知行、丹州桑田郡南金岐村外貳ヶ村百姓共、地頭家來井庄屋年寄共相手取、餘米不相戻、不筋之取計有之段申立、京都町奉行所江度々願出候間、地頭江可相願旨申渡候得共難澁仕候に付、取計ひ方之儀相伺候趣に相聞申候、

此儀御定書に、一地頭之出入は、地頭ゟ斷有之候共、地頭に而取捌可相濟由申聞、取上申間敷候、勿論地頭ゟ斷無之、百姓訴出候分、地頭江可相願旨申渡、是又取上申間鋪候、猶又不相濟由地頭ゟ申聞候ハヽ、頭支配江申立候樣に可相達候、但地頭非分之申付に相聞候ハヽ伺之上取上可申事と有之、本文之出入は、地頭家來も相手取候得共、地頭非分之申付共相見不申候間、致難澁候もの共呼出、差越候願に付無取上間、於地頭ニ吟味可請旨嚴鋪申渡、地頭家來江引渡可遣旨被仰渡可然哉に奉存候、

朱書一地頭之吟味請不申趣に相聞候間、地頭に而不相決、奉行所吟味之儀申上候ハヽ、丹波は京都町奉行支配國に付、彼地町奉行江御下ゲ被成、御當地に罷在候地頭家來江引合候儀は、彼地町奉行ゟ寺社奉行江懸合、口上書取之差遣、一件於京都吟味詰相伺候筋と奉存候、

戌十一月

朱書評議之通濟

〔彈正凡例 乾〕安永八亥年

下總國笹原村
權之丞
彌兵衛

此權之丞義、質地取遣候義ニ付、地頭ニ而糺之上、所持之田畑、村役人江差出ニ可致旨申渡候處、母所持之地所有之抔申紛、吟味之節、我意を申、右糺中致欠落候始末不埒ニ付、五十日手鎖、

一彌兵衛儀、地頭吟味不行屆樣ニ心得候迚、奉行所江致駈込訴、地頭之糺振候儀も無之處、我意を立、地頭申付致難澁候段不埒ニ付、五十日手鎖、

〔彈正凡例乾〕丑〇天明元年六月十四日山村信濃守掛

一武州小ヶ谷戸村圓次外壹人地頭申付難澁いたし候一件

太田八十郎知行
武州入間郡小ヶ谷戸村
百姓
圓次
同人母
まさ

此圓次、まさ儀、出入中、取扱人幷村役人雜用、其外入用共二ツ割ニいたし、仁兵衛と半分宛差出候筈之一札差出致內濟、金子才覺之心當無之迚、圓次まさ一旦致欠落、立歸り候後、地頭ニ而右雜用濟方幷年貢未進、村入用勘定も申付候處、雜差出抔、我儘之儀申之、村拂ニ成候後も、雜用割合之義、幷村方住居いたし度旨申立、度々差越願いたし候段不屆ニ付、兩人共江戶拂、

〔御仕置例類集一ノ三〕文政元寅年御渡

田沼玄蕃頭〇意次御內慮相伺候

一万石以上領分之百姓、領主之吟味相拒候に付、奉行所吟味申上候評議、

當五月十七日、評議仕可申上旨被仰聞、御渡被成候、田沼玄蕃頭、御內慮相伺候書付一覽仕候處、同人領分、奥州下鳥村定六ゟ同村倉右衛門江相懸候、地境出入、於領主雙方糺中、倉右衛門儀、吟味相

拒、度々差越願いたし、我意强に而、何樣利害申開候而も不承受、吟味に懸置候家來取計方をも相疑、殊に地所出入之儀、手限之取計難行屆、於奉行所吟味有之候樣仕度由申上候書付に有之、右書面之趣取調申上候樣、先達而榊原主計頭江被仰渡候に付、其節同人申上候趣ハ、小身之地頭に而達手限之吟味難出來筋とは相聞不申、取計方決兼候儀ハ寺社奉行江問合、挨拶之趣ヲ以取計候はゞ、事濟可申儀と奉存候段申上、且水野左近將監江御下被成候節、同人申上候存寄之趣ハ、領主之吟味相拒候上は、手限之吟味難出來筋に而、此上問合候とも、取極難及挨拶儀に御座候間、領主之吟味相拒候趣意ヲ以、奉行所吟味之儀申上候樣被仰渡可然段、例をも相添、此段申上候趣に御座候、

此儀一領内之出入に候とも、奉行所吟味に相成候儀は間々有之候得とも、田沼玄蕃頭書面之趣に而は、定六ゟ倉右衞門江相懸候、境出入之儀、居屋敷境ヲ申争候事に而、格別入組候儀共相聞不申、領主役場吟味中、度々致差越願候迄に而、領主吟味之次第口書ハ未申付候得とも、裁許之見込も不相決事故、倉右衞門我意と而已も難見極、口書印形致難澁候とは違、全に吟味相拒候ものとも難申、假令口書印形難澁いたし候とも、小身之地頭とは差別有之候事ニ付、倉右衞門難澁申立候廉、無謂儀に候はゞ、仕儀に寄、入牢をも申付、利害申開候而も可然、尤倉右衞門之儀は、玄蕃頭申上候書面之趣而已に而は、治定之挨拶難相成儀に付、雙方申口委細認取、吟味詰方、裁許見込之次第をも取調、奉行所江問合可然義に而、既に去ル未年、大岡主膳正御内慮相伺候、同人領分上總國白木村より同國宿戸村江相懸候、山境出入裁許受印致難澁候由に而、奉行所吟味之儀、主膳正申上、右書付松平兵庫頭御勘定奉行之節、取調可申上段被仰渡御渡被成候處、受印致難澁候迄、奉行所吟味可申上筋には無御座、裁許之次第も不相分候に付、受印相拒候もの、仕置申付可然共難決候間、問合之上、挨拶之趣を以取計候はゞ、可事濟儀之旨被仰渡候方

と申上、其後主膳正より兵庫頭江再應問合候處、裁許之趣相當にも無之、右ニ付而ハ、奉行所吟味申上候方可然旨、挨拶および候例も有之、旁奉行所吟味申上候場合ニも未至一件に相見候間、其趣ヲ以、先達而榊原主計頭より申上候得共、吟味掛置候家來取計を、倉右衛門相拒、非分之趣訴狀に認、去ル亥年七月中、松平右近將監方江駈込訴致シ、其節訴狀之趣に而は、領主家來、非分之趣可有之哉も難計候間、右近將監方江右家來呼出、吟味取計方手續等相尋候處、倉右衛門儀、論所案內、又ハ利害之趣相拒、見分之節、存寄に不叶儀有之候得バ、居宅江立入不罷出、領主家來蔑にいたし、尋之趣請答も不致候間、嚴重吟味いたし候趣申立、非分之取計とも不相聞候に付、定例之通、訴狀差戾、倉右衛門は玄蕃頭家來江引渡遣候處、猶又吟味非分之趣申立、去々子年五月中、松平和泉守方江駈込訴いたし、再應之儀にも有之、玄蕃頭家來呼出、是迄吟味取計方、委細可申聞旨申渡、取調申聞候趣に而も、倉右衛門吟味を拒み候段無謂儀に相聞、右家來申聞候次第、不相當にも不相聞候間、是又訴狀差戾、引渡遣候儀之處、又候同年九月中、御駕訴をも致、右體寺社奉行より兩度迄、領主家來をも相尋候儀に御座候得バ、於領主も品々勘辨之上、致吟味も候儀に可有之候得共、手限に而は行屆兼候儀と相聞、然上は勢を厭ひ吟味相願候類とは譯違、後弊にも相成申間敷、寛政四子年、私領出入、又は領主地頭之吟味を致難澁候もの、其外取扱方之儀、評議仕可申上旨被仰聞候御書取ヶ條之內、總而私領之出入、領主地頭之吟味を致難澁候之趣を以御吟味相願候得ば、三奉行之內江御渡被成、一件之もの呼出、吟味仕候事に而、右之外、奉行所江駈込訴いたし候類も、是又奉行所ニ而事譯候樣相成、或ハ品に寄候而之勢を厭候間、吟味願いたし候向抔も可有之、おのづから領主地頭を不恐樣に成行候而は、已來次第に寄、右體之吟味もの繁多に可至哉、依之以後右類吟味之儀被仰聞候はゞ、領主地頭之致方を承合、非分之筋も不相見分は、吟味を拒候もの而已呼出、第一ニハ拒候所之趣意を責問、申口に寄候而

ハ、領主地頭江懸合、一件書物等取寄、領主地頭、格別如何敷取計も無之候はゝ、可相成丈ケ領主地頭之吟味を立、此上我意申募候はゝ嚴敷可相咎間、地頭之吟味を請可申段申渡、其家來呼出引渡、一旦御吟味願をも致し候事に候得共、吟味詰之上ハ、伺之上落着可申付段をも申渡、吟味書返上之節、右之趣縮書にて御届申上候樣に相成候はゝ、如何可有之哉之段被仰聞、評議之上、私領に而は吟味筋致馴不申儀故、吟味行屆不申所より、領主地頭之吟味ヲ拒候類、是迄粗有之、奉行所吟味に相成候而は、一件打合不申候而ハ、全く吟味行屆候樣には相成不申間、自ヲ右吟味を拒候もの計責問候はゝ、屈伏いたし候樣には難成類、多御座候得共、右にも限不申、其內には領主地頭之吟味事分り候ヲ、我意申張候類も可有御座間、已來御書取之通取計、可然哉に御座候得共、万石已下之儀ハ、別而吟味筋事馴候家來召抱置候儀も難行屆、小給之向ハ、猶更之儀に而、落着之儀相伺候にも、吟味書行屆候樣には難相成儀も可有之、却而地頭迷惑之筋に相成可申候得ども、其內には全く地頭之吟味行屆候を相拒候類も可有之間、其分ハ其節之始末次第、奉行所に而相心得罷在、取計候樣可仕、万石已上之儀ハ、已來吟味相拒候由ヲ以、奉行所吟味之儀申上、御下被成候はゝ、先ツ吟味を拒候もの計呼出相糺、申口に寄、領主江吟味之始末承糺、口書等も取寄一覽仕、右吟味相殘候儀も無之行屆候を相拒候類ハ、御書取之通取計、領主之吟味不行屆類ハ、尙又其段申上、其始末に寄、取計候樣可仕、可然哉と申上候儀も有之候間、吟味に御下被成候ハゝ、前書評議之趣を以取計可申儀候に付、立番頭申上候趣、寺社奉行月番江吟味に御下ゲ被成可然哉に奉存候、

寅七月

朱書評議之通濟

〔憲敎類典四ノ六評定〕年號月日不知

諸裁斷大概〇中略

一地頭を背候者之事

是は詮議之上、御老中江相伺、品により追放遠島死罪にも申付候、地頭へ被下、自分之仕置可申付旨被仰渡候儀も御座候、

〔德川禁令考後聚十ノ行刑條例〕寛政十二申年二月

安藤對馬守殿〇老中信明、御差圖

御勘定奉行菅沼下野守〇定喜掛

上州坂田村惣八外壹人儀、村役人等を相手取、品々申立駈込訴いたし候一件、

織田主水知行上州邑樂郡坂田村元百姓孫八兄　惣八

百姓　源兵衛

右之者共儀、先達惣八弟孫八外二人、并源兵衛も、地頭林之立木伐採候に付、於地頭夫々仕置申付、事渡候處、其節豐八事、市郎左衛門外二人儀も、一同立木伐採候に付、其段申立候得共、村役人共申合押隱、全く非分之取計いたし候由推量疑を以、不留儀共訴狀に認、地頭家來取計方之儀も疑敷趣、品々我意申張、地頭之吟味を拒候始末不屆に付、兩人共所拂、

右去ル辰年、根岸肥前守御勘定奉行之節、手限伺之上、御仕置申付候、武州白岡村百姓七郎右衛門悴利右衛門儀、親七郎右衛門住居之地所は、地頭より名主江預置候除地に付、家作引拂之儀は、地頭より申渡有之處、疑推量を以、地頭家來と村役人馴合、非分之取計致し候旨申立、其外事濟候儀、又は不取〆之儀共、品々申立、差越駈込訴致し候段不屆に付、所拂申付候類例に見合、兩人とも所拂、

評議之通濟

〔德川禁令考後聚十一行刑條例〕享和二戌年十一月

戸田采女正殿○老中、氏教、御差圖

御勘定奉行石川左近將監○忠房、掛

武州上奈良村清吉地頭在番留守預、親類之吟味を拒候一件

大岡[illegible]壽太郎知行武州幡羅郡上奈良村名主

清吉

右之者儀、物成渡候趣之證文等先年相渡候は、地頭承知之由、又ハ田崎武大夫呼出候而も、不及罷出旨、地頭相番之殘役申聞候由、其外無證據申口迄之儀ハ取用がたく、武大夫呼出し之節々、不參之上、可罷出所存無之旨書付差出、地頭在番留守預親類より呼出し候而も不罷出、不取留儀等訴狀ニ認、地頭江駈込訴致し、又ハ驅込訴致し候積之由に桀敵爲見候訴狀江加筆いたし、月番之番頭江差出候樣及差圖ニ、篠澤郡大夫と申、地頭用役相勤候內、村用者清吉名前に而取計、地頭之祖父短慮之趣に申觸し、地頭之同家江差出候書付ニも相認、或ハ地頭之下知狀を不受、又ハ貸附金利足難取立由相違申立、此者井小前百姓より用立置候金子と差引、武大夫者、私慾盡候之由手扣ニ記置、或ハ同人を奉行所江差出べき處、嚴科又ハ暇可遣旨、地頭之親類江書付差出、物成渡候趣之證文等、地頭江無沙汰に勘左衛門外壹人江渡置、其後可書替處、延置候迚、巳午未年之證文を、酉七月に至り、元次郎に爲認相渡、年貢未進金之內にて、定式可受取分差引、殘分可相納旨請書差出乍置、森勇助を差越候ハヾ可相渡、左も無之候而ハ難納旨書付差出、不相納年貢米貳俵三斗餘も不納致し、借金手當として預り置候米之內、御代官所より貸附金之利足に差出候者、無餘儀候得共、飯米を無沙汰に、勘左衛門外壹人江預、或ハ集福寺江相渡シ、此もの用立候飯米代金之內江も受取、其外取立置候夏成井夫金、又ハ地頭より受取候金子ハ除置、他借を以地頭勝手向相賄、或ハ留守預親類吟味中手鎖宿預に相成、手鎖外レ候迚逃去、御老中方江駕訴いたし、猶又右親類に而

吟味之節、吟味を拒候始末共不屆に付、輕追放、

右寛政元酉年、根岸肥前守御勘定奉行之節、手限伺之上御仕置申付候、下總國長萱村百姓九郎兵衛忰彌市儀、親九郎兵衛老衰ニ付、諸事引受乍罷在、年貢不納致し、右始末ニ付罷越候家來江手向致し、地頭非分之儀も無之處、我意を以、品々之儀申立、地頭支配江駈込訴致し、地頭ニ而も等閑に差置、吟味無之抔申立、差越願訴いたし候段、旁不埒ニ付、江戸拂申付候例に見合、此ものハ家來江手向致し候儀ハ無之候得共、名主之身分ニ而、呼出之度々不罷出、其外品々不埒有之、一體之始末、格別品不宜、然處御定書に、利欲に拘り候類は、田畑家屋敷共闕所、尤年貢未進有之候はゝ、家財とも闕所と有之、此ものの儀、年貢未進有之候得共、地頭江用立置候金子と差引候得ば、却而此ものの方江可受取分有之候儀ニ付、家屋敷家財共不及闕所、輕追放、

評議之通濟

〔公範異問上〕文化二丑年、御用番戸田采女正樣（○氏教）江、領分之者、家柄之義ニ付及出入、其後大目付安藤樣（○惟要）へ駈込訴致、御引渡相成、其後吟味を拒候ニ付御差出、

一私領分濃州厚見郡六條村百姓治左衛門義、元文子年同村檢地之節、同人祖父十内地引役案内之頭百姓ニ候處、並百姓之取扱致候段難心得由、村役人幷百姓共を相手取、去ル申年、在所表江願出候間、相糺候處、檢地帳に、長百姓名前ゟ半字下り、治左衛門祖父十内名前認、肩書に平百姓ト有之、頭分百姓ニハ無之段、村役共申立、檢地帳糺之上、申立趣就符合、右之趣治左衛門江再應利解申聞候を不承請、外村々檢地帳ニ、案内之者名前肩書無之、六條村に限肩書有之、疑敷など申募候間、領分内近村之役人共相糺候處、檢地帳名前肩書等之義ハ、其節檢地役人之取調ニ而、村役人共取計候儀ニハ無之旨申之候間、不取留儀願出、治左衛門不束之次第ハ、急度叱置候處、願不相立儀を彼是申立、安藤大和守大目付勤役中之節、去々亥三月、駈込訴仕候處、私方江引渡

に相成、倘亦相糺候得共、治左衛門頭分百姓之由ハ無證據ニ而、同人親類助市、助十、丈助、十内、彌平次、新十郎、金蔵、勇八、勝右衛門、四郎儀も、治左衛門同様之趣申立、追々相糺候内、助市儀ハ、理解之趣屈伏仕候得共、治左衛門義、無證據之儀を以吟味を拒、領分村々取締にも拘、其上吟味之次第口書申付候處、願筋難立趣に而ハ印形難致旨、次左衛門其外親類共一同申張罷在、一領限出入候得共、手限之取捌難行届御座候間、於奉行所吟味御座候様仕度、此段申上候、以上、

十一月廿九日　　永井出羽守

右書付差出候處、同晦日御呼出、右御吟味寺社御奉行大久保安藝守様江被仰達候段御達有之、十二月二日、御同所様江、右一件之者共差出に相成候由、

〔新張紙留〕亥（文政十年）六月

松平中務少輔

一地頭吟味を相拒候節取計方問合（曾我豊後守）

御別紙書類一覧いたし候處、御知行武州下小鹿野村九組總代組頭總兵衛々組頭源次郎父安次郎を相手取、同人義、約定違變いたし、組頭九郎右衛門宅、村入用割合勘定之場江不立會、差支候旨之出訴ニ有之、安次郎返答之趣は、去々酉年、源次郎年番之節、組々にて世話可致義を、源次郎壹人ニ而可取計旨、右九郎右衛門申聞、不差構儀有之候間、此度立會之儀難澁いたし候由、其外認有之、且御手限地改一件、諸入用出銀、一村高割之儀も、可差出筈議定はいたし候得共、格外多分之入用相掛り候處、源次郎組下之もの共、右出銀難澁いたし、安次郎ニおゐても同様、難差出旨ニ有之、右源次郎年番之節之儀は、素々議定以前之事ニ付、右體之儀を申立、難立會と之義は無謂申分ニ而、難御取用筋ニ有之、高割出銀之儀も、既歸村之上、差出可申筈之議定ニ候を、組下小前之もの共不承知申立など申之、彼是難澁いたし候段、是又難立申分ニ而、殊ニ安次郎義は隠居之身分ニ付、如

此出入筋ニ可ㇾ預ものに無ㇾ御座ㇾ候間、源次郎御呼出し、同人を御吟味之上、安次郎同樣不筋之儀申立候はゞ、前書申分難ㇾ立段之落度を以、御吟味詰口上御申付、印形雖ㇾ澁いたし候はゞ、其節奉行所吟味之義御申立可ㇾ然義と存候、彌右體吟味之義被ㇾ仰上ㇾ候樣ニ相成候はゞ、右振合之儀は、其砌懸ㇾ御目ㇾ候樣可ㇾ致候、以上、

亥六月

〔憲教類典四ノ六評定〕年號月日不知

諸裁斷大概〇中略

一御代官を背候者之事

是は御代官申付を背に相決候得ば、牢舍申付、日數相立、誤り候由申旨、御代官伺候得者、爲ㇾ致ㇾ出牢ㇾ事、

〔御仕置例類集三ノ十八〕寛政元酉年二月

松平伊豆守殿御差圖　御勘定奉行根岸肥前守掛

一武州上大崎村仙五郎無株ニ而致ㇾ酒造ㇾ候一件〇中略

同人（仙五郎）兄百姓利左衞門

右之もの儀、弟仙五郎、心得違之儀有ㇾ之候はゞ、異見を（脫）可ㇾ差加ㇾ處、同樣不束之儀共申立、地頭吟味中、我意申張候段、不埒ニ御座候間、三十日手鎖、

御差圖　五十日手鎖

右御咎附

右安永四未年、評定所一座ニ而、伺之上御咎申付候、丹波國馬路村神事能小屋場吟味一件之内、丹波國桑田郡馬路村小番組名主文平儀、神事能小屋場床高く、裁許通り切下之儀、兩番組ゟ申談候

裁許違忘

は〻、早速切下可ㇾ申處、彼是難澁いたし、切下不ㇾ申段、裁許を等閑に相心得、其上地頭ニ而申聞候儀を不ㇾ相用、評定所ニ而裁許有ㇾ之儀ニ付、罷出相伺度旨地頭江申立候段、不埒ニ付、所拂申付候例ニ見合、此もの共儀は、村役人共申渡之趣、地頭之申付ニは無ㇾ之儀と相疑候迄之心得違ニも有ㇾ之、品輕御座候間、仙五郎は五十日手鎖、利左衛門ば地頭吟味中駈込訴等いたし候儀も無ㇾ之、猶又品輕御座候間、三十日手鎖、〇下略

〔御定書例書〕親之代裁許有ㇾ之儀を忰共忘却いたし候咎之事

延享元子年三月御仕置之例　野州馬場村網戸村同國間々田町

右馬場網戸兩村へ、思川附寄水下村々、圍堤危成候に付、享保四亥年及出訴、吟味之上、間々田町地内古川浚、横川〆切水除普請之儀、右兩村并水下七千石餘之村々より人歩出ㇾ之、仕立候筈裁許有ㇾ之處、兩村共川浚怠り、間々田町之儀も、水帳に載り候古畑川瀬違川敷に成、古川筋は干上り候故、潰地之代り、御代官へ相願畑取上、御年貢は納候得共、御代官へ願候節、裁許之譯は不ㇾ申立、裁許繪圖村方に所持いたし罷在、雙方共々先裁許背候仕方不屆候得共、三ヶ村共、裁許之節は、親々共役儀相勤、當時其者共不ㇾ罷在候に付、三ヶ村共、名主輕き追放申付、馬場網戸兩村高千五百石餘に候間、過料錢七拾貫文、間々田町は高九百石餘に候間、過料錢四拾貫文餘可ㇾ申付哉と相伺、

右之伺之儀に付御書付

裁許不ㇾ請もの、事、最初より一向裁許之品を不ㇾ用候か、或は一端は受候ても、後に如ㇾ元に仕直候を可ㇾ申候、此三ヶ村之儀、名主共裁許不ㇾ受と申にては無ㇾ之、最初は裁許之通相勤、其後怠り、猶只今は忘却致たると申にて候間、追放之沙汰には及間敷候、殊更御裁許親共、名主相勤候節にて之由、彌無相違候は〻、三名主重過料可ㇾ然候、村中咎之事も不ㇾ及、過料、浚之入用相掛候より、重

雜載

く相掛候樣に申付可ㇾ然候、若其通難ㇾ申付ㇾ候品も候はゞ、輕く過料申付可ㇾ然事、
右之通御書付を以被ㇾ仰渡ㇾ候に付、名主一人に付、過料拾貫文宛申付、浚方入用重く掛候儀は、人夫凡三萬人程掛り候ニ付、此上尙重く掛候時は、彌人夫相增、夥敷き人足數に相成候間、馬場網戸兩村にて過料三拾五貫文、間々田町へ二十貫文申付、浚之儀は、先裁許之通可ㇾ仕旨可ㇾ申渡ㇾ哉之旨、尙又申上候處、其通被ㇾ仰渡ㇾ候事、

〔公案比事十九〕安永五申年二月、評定公事、
一越後國三條町と同國田島村家業障出入
内藤紀伊守領分越後國蒲原郡三條町
大庄屋
年寄
町代
百姓代
松平右近將監殿〇武元、老中、御下知
右三條町之者共儀、田島村にて家數相增候はゞ、早々可ㇾ訴出ㇾ處、一旦內濟致候屆も不ㇾ致、其後も打捨置候段、先裁許致ㇾ忘却ㇾ候ニ相當り不埒ニ付、村過料錢四貫文、

〔山論鐵火裁許之譯書〕柴山運上は、大坂御料之節、究り證據の書物等も無ㇾ之、唯雙方申爭而已にて、利非不ㇾ相分、御裁判に成兼、慶長十四年より元和五年迄、拾ケ年餘、其儘にて裁許無ㇾ之候、〇中略其頃石原村〇近江ニ角兵衞と云浪人有ㇾ之、讀書等も相應ニいたし、才智ある者故、村方にて扶助いたし留置候、此者或時庄屋宅ニ而申候は、柴山論之事、當年迄及ㇾ凡十ケ年ニ候へども、今以何レとも不ㇾ相分、此末とても中々急ニ濟候事とは不ㇾ被ㇾ存候、昔應神天皇の御時、甘美內の宿彌、武內の宿彌を讒言する事あり、天皇其實否を爲ㇾ知ん、兩人ニ熱湯を探し給ふ、是より湯起請火起請と云こと始り、火起請と云は、鐵を火にして、是を掌へ受るなり、今度之一件も、長々數御裁許を御待被ㇾ成候よ

り、神慮に任せ、綿向の神前ニ而鐵火を取、無事ニ取徹たる方を利とし、不取得方ヲ非といたし候はゝ、早速落着可致候、若此義ニ極り候はゝ、私義數年當村之御憐愍を受、御世話に罷成候御恩報として、鐵火を取候役相勤可申と申候ニ付、西郷村役人、内々談合いたし、角兵衛の申出し候事は秘し置、無何氣體ニ而、一兩人東郷江來り、物語りの序に鐵火の咄しをいたし、柴山爭論の儀も、今ニ何の御沙汰無之、徐延々ニ相なり、御互に迷惑ニ存候間、綿向の神前にて鐵火を取、決着致し候ては如何、御評議可被下と申置歸りける、依之東郷ニても村々寄合評議いたし候へども、誰有て鐵火の役勤んと云もの無之、左かればとて此義を辭退いたし候はゝ、僞言有故、恐れ候と可被申、扨々無是非次第なりと各々歎息いだし居候處、其頃年寄役勤居候村口横町九郎左衛門と申もの、○中略生得律儀なりけるが、此評議を聞、氣之毒ニ思ひ申出けるは、九ヶ村之内ニ此役勤候もの無之、夫ゆゑ非分に陷り候と申ては、外聞旁甚以殘念ニ存候、神は正直を照し給へば、何の恐れか候はん、私相勤可申と無恐氣も申候ニ付、評議極り、鐵火之事可宜と西郷江申遣し、此段雙方より北見五郎左衛門殿へ内々相窺候處、不容易儀ニ付、此方にて申附候事には難相成、江戸表窺之上、沙汰ニ可及旨被仰聞、元和五年未五月御窺被成候處、早速御聞濟ニ相成、追而檢使のもの可差遣と御下知有之候趣き、五郎左衛門殿より被仰渡、一同難有御受申上、村々御檢使之時節を相待ける、爰に東郷之内、音羽村庄屋喜助と申者、右山論に就ては、役所向は勿論、村掛合等も、總而此もの應對致し候故、西郷之者、妬思ひ居候哉、或時喜助に向ひ申けるは、是迄は何事も利口ニ言廻され候へども、鐵火は取れ申間鋪と嘲笑ければ、喜助大ニ憤り、正路ニして何か恐ん、望ニ候はゝ、拙者鐵火を取り見せ可申と答へ、直ニ日野町江來り、歎樣之譯故、鐵火之役は、是非とも私し可勤と申候ニ付、其筋難默止、九郎左衛門と代り、喜助ニ究りけり、西郷にては角兵衛の咄候事は能々隱し置、表向は外ニ勤候もの無之、角兵衛義は、石原村ニて數年世話いたし、憐を掛置候ものニ付相賴

候處、此者恩義を思ひ、鐵火之役勤候と申居候よし、此角兵衛と申者、増田村にも暫之内住居致し候と見えたり、依而増田角兵衛とも有也、元和五年九月、御檢使御着被成、村々被召出、鐵火之事被仰渡候、○中略彌九月十八日鐵火と定りけり、其日になりければ、綿向大明神の神前に棚を飾り、喜助角兵衛兩人、白木綿之衣裳を着、鐵を斧の形ちに爲作、雙方より是を持出し、右之棚に載置、夫より五間程南へ隔、東西二ヶ所に炭火を燒し、時刻前、鍛冶職に申付、御見分之上、右之鐵を雙方一同燒赤め、能々火になり候を掌に口を敷是ヲ受候なり、時に御檢使御役人被仰候は、東鄕より持出候を西鄕之者に渡し、西鄕より持出し候を東鄕江可渡と被仰付候、是は若鐵に仕かけにても有んかとの用心也、此時喜助鐵火を受取、三間計走り寄、元の棚へ投上ければ、棚板を燒拔、鐵火は下江落たりけり、角兵衛も鐵火は受取候得ども、忽掌燒爛り候ゆゑ、其處江投捨逃出けるを、御役人衆急に追懸搦捕、翌日町中を引廻し、西之野仕置場ニて磔に行れける、○中略西鄕より持出候鐵ニは、何を交せ候哉、一同に燒赤め候へども火氣薄候よし、是は角兵衛の工夫ニて、何か仕法をいたし置候事と傳候、○下略

〔良將達德鈔〕六一正則○福島家中の士、夫銀取過たりとの事にて、廣島より百姓共目安を齎、六人同道にて江戸へ下り正則屋敷へ詰、正則聞て、臺所にて成程馳走すべし、遠路罷下候間、隨分馳走せよと云付、百姓共悅び、士共は夫銀取過たるが定成れば片唾をのみ居る、四五日過、彼六人の百姓を白洲へ呼て首を刎ける、正則いふ、銀五百目や六百目の事にて、正則が先途をみんとて江戸へ詰、不便なる妻子を捨る侍共を迷惑させん事、思ひもよらず、扨々憎くき百姓共哉と云はるゝに付、諸士皆淚を流すとなり、武邊雜談

〔良將達德鈔〕三一大猷院樣御代、黑田筑前守家老栗山大膳と申者、主人の事訴候に付、大事に及び候時、色々御評議有之、筑前守不屆に相聞、既に御潰し可被成由上意之處、直孝申上候は、さして栗山大膳訴訟之内に、筑前守御潰し被成程の御科は不相見候、大船之事、勿論小濱民部切手を取不

申、私に作り候段、御掟を背き候得共、親代よりの作り懸に御座候、其上謀叛の事、第一僞と存候は、訴狀に大膳色々異見申ニ付、隱謀難遂存、城へ呼寄、僞頭に毒を入れ殺し可申由、筑前守致候由書付候、家來を自由に下知仕候儀不相成、食物に毒を入、漸く殺し申手立仕程の腰拔にて、天下の逆心罷成者に御座なく候、乍然筑前守、夫程の者とは不相見候へば、此一ヶ條を以て、大きなる僞相知れ候由申上候處、上意には、掃部頭は筑前守を贔屓仕候と思召候由上意に付、毛頭贔屓の沙汰無御座候、私は還て意趣有之者に候、子細は蜂須賀蓬庵と意趣有之、不通に御座候得ども、對御意毛頭心底を殘し可申道理無之に付、申上候由言上仕候處、御尤に被思召候由にて、筑前守御免被成候樣に相極候、其時酒井讃岐守被申候は、大膳不屆に極候へば、對主人大不忠の者に候、死罪に可被仰付候哉と被申候に付、直孝申上候は、死罪には及び申間敷候、何程の僞にても、上へ對し主人の逆心を訴候へば、以來の御仕置の爲に候間、命を被助流罪可然由申上、南部へ御流し被成候由、大膳と申は黑田家代々の家老にて御座候、（井伊家覺書）

〔千載之松〕公事訴訟の穿鑿、諸士奉公人と、百姓町人出入の儀は、公事奉行の裏判に定め置かれ、町奉行郡奉行支配所の出入は、其奉行等穿鑿の上裁許せられ、公事奉行と云ひて、公事裁許專任の役を置かれ、是非曲直判決を委任したる事は、他に關及ざる事なり、慶安三年、公事奉行等、御家人と町人と爭論せし時、對決せしめしが、御家人自分の威勢に任せ、壓抑無理なる事を言ひ、無作法の所爲ありし由、公（〇保科正之）に達せし時、仰せられしは、元來公事を委任せらるゝものは、何事に心得る哉、無作法なる所爲をなす者は、まづ公事の是非を不論、不屆の品々吟味の上、急度言渡すべし、裁許に預りたる役人、第一自分の仕方を正しくして、同心共迄も作法よく召置、見分いかにも威儀ある樣致すべし、町奉行郡奉行等は、雙方ともに町人百姓の出入ならば、一方かさ押、理不盡の儀はあらざるべきも、諸事仕方能き樣にせざるべからず、此段奉行共兼て心得、役人共へ可申

聞旨仰せらる、穿鑿の帳共、江戸表へ差上す時は、毎度近習の者に爲讀聞召し、思召ある箇所々々、紙を貼置候にと仰せられて、先始終聞せられ、貳度目には大方裁斷せられたり、其中穿鑿の足らざる所あるか、又は不審の所あるときは、かく〳〵穿鑿すべしと再び詰問仰付られし事も數度あり、其情實大方は思召に相違せし事なし、穿鑿の始末、明細記憶せられし故、うかとしたることなど陳ぶれば、種々不審を起され、決して不明の事など爲すことを得ざりしとぞ、

〔日新館童子訓 上〕梶原景信景久兄弟は、甲斐國の人也、代々武田家に仕ふ、勝頼ほろび給ふに及て、退て民間に隱れ、牢浪の身となる、家甚まつしくて朝夕の烟繼べき樣なし、景信弟景久に相謀て申けるは、我家衰へ、貧しき事かくのごとくならんには、親をして飢渇に及ばしめむ、われら百方に心を盡し奉養すとも、終には飢をすくひ難し、不孝の罪いかゞせん、たゞ我身を殺しても親を養はむにしかず、今幸に天下耶蘇宗を禁じ給ひ、其徒黨を訴出たらんものには金銀を賜はるべきよし高札のおもてにみえたり、さらばわれ僞て耶蘇の徒とならん、汝我を訴出て金多く給はらば、奉養ともしからじ、はやく我を訴へよと、弟景久いはく、もし身を殺て奉養せむに、兄を訴て、弟世にあらん事望む所に侍らず、兄早くわれを訴へ給へとて、兄弟爭てやまず、景信いかりて、我は年老たり、つとめて父母につかへむ事を思ふとも、力ひさしきにたゆべからず、汝は齡わかし、永く父母を養て、天年を終しめ奉ん事こそ誠の孝といふべけれ、其上父母の身は我身にして、我身は則父母の身也、我身ほろびぬとも、父母やすく世にあり給はんは、我猶世にあるがごとし、我身世にありとも、父母の飢をだに救ふことなくば、猶亡たるがごとし、各其當れる所をつとむるにしかじと理を盡して申ければ、景久辭するに辭なくして、なく〳〵江戸にいたりて評定所に訴ふ、時の奉行某、此兩人を召出して對決せしめ給ふに、景信しばらくは耶蘇の徒にあらずと云て、かたく陳じ申けれど、訴人つよくあらそひて是を證しければ、終に其罪に伏しけり、かくて獄

につかむとするに及て、景久聲をのむといへども、しきりに涙くだりて頭を擧る事能はず、時の奉行あやしみ給ひ、此訴人爭ひ證して勝ぬる身の深く歎くこそ心得ねと、猶再應糺し給へども、二人ともに耶蘇にまぎれなきよしを申て變せず、猶疑はしとて、甲州の役人幷に其わたりのものども召呼て、委く尋訊給ふに、何れも耶蘇なる事をしらず、耶蘇の師を問るゝにも答申こと能はず、親を養はむためのはかりごとなる事、やがてあらはれにけり、時の奉行深く感じ憐給ひて、則上聞に達しければ、黃金多く賜はりて其至孝を顯し給ふ、誠にためしすくなき事ならずや、土津神君○保科正之此事を聞召、厚く賞歎ましく／＼て、寬永十九年の夏、徵給ひて知行賜はり、親を養はしめ給ひけり、

〔千載之松〕寬永十九年五月、甲斐國武田家の浪人梶原傳九郞○景信召出されしは難有思召なり、傳九郞兄弟、是よりさき殊に貧窮にて、親を養ふべき手立なき程に行詰りし故、身を殺しても親を可養と存窮め、折節切支丹改に付、其訴人せし者は褒美銀數多下賜せらるゝ旨、高札に記し建られしを見て、傳九郞其弟に言ふ樣、我等伴て切支丹宗の者となり、其許訴人すべし、然らば褒美銀下賜せらるべし、夫にていか樣にも孝養すべしと、○中略如斯兄弟相談せし始末段々顯れ、去とは奇特なる志、珍敷事故、忽ち達上聞、褒美として金子下賜せらる、公も此旨聞及ばれ、家來に召出され、追ては悴彌三郞迄切米下され、親子にて奉公したり、

〔折たく柴の記中〕此年○正德元年七月四日に召れて、越後國村上の領、八十五村の百姓四千百十六人、濫訴の次第、事よのつねにあらず、此上は領主に仰せて、嚴刑を行はるべしと聞ゆ、奉行所勘定奉行よりまゐらする所のものを下さるゝ、所なり議し申すべしと仰下さる、奉行所より奉れる狀を見るに、去年松平右京大夫輝貞、村上の城を賜りし時、三島蒲原等の郡四万石領といふ所の百姓等、其地を以て御料になさるべき事を來り訴ふ、此等の事、其望む所をゆるされざる事の由を申せ

しにつきて、彼等は其在所に歸れり、然るに彼村々のものども、御代官の下知にしたがはず、また去年の貢をも納めず、此たび其張本五十餘人を評定所にめして、其事の由を問ふに、御料の百姓たらん事を望請ふ由を申す、其事ゆるされがたきの由を申す事、度々におよぶといへども、其返答にも及ばず、此上は別に御使をなされて召問はるべき歟、但し彼張本五十餘人をば禁獄し御使二三人を彼國に下され、(御代官をもて、御使さすべきこと也、)其餘黨は早く領主に渡され、下知にしたがはざらんものどもをば、領主の沙汰として其罪の輕重にしたがひ、或は死罪、或は追放、或は禁獄し、其田畑屋敷等は、領主の進止に任せらるべき歟の由をしるして、彼國の御代官所、五月廿一日の注進狀を副て奉れり、(御代官所ハ黑川といふ所にあり、御代官ハ河原清兵衛といふなり、)また其狀を見るに、風聞の事共をしるして、今度張本五十八人を召れしにつきて、其餘黨等以の外に骨張し、數通の起請文をかきて、おの〱其約を堅くし、召れしものどもに相隨ひて出づるもの百餘人、もし五十八人のものども罪せられば、百餘人のものども出訴ふべし、百餘人のものどもまた罪せられは、四千餘人のものども能上りて訴ふべしと議定し、すべて御代官所を見ること仇敵のごとく、去年の貢米はしいまゝにうり米となして船に積出し、庄屋これを制すといへども、敢て用る所あらず等の事をしるせり、○註略その明る日、封事をまゐらす、其大要は、きのふ下さるゝ所の物ども、これを見訖りぬ、○中略特に御使を差遣されて、その來訴ふる事の由を召問はるべし、但し此御使の事仰蒙らん人は、いかにも温柔にして、哀矜ある人を撰ばるべきに候と申す、やがて横田備中守、鈴木飛驒守、堀田源右衛門三人、別の仰を奉りて、此たび奉行所に召よせしもの共を召問ふに至て、(七月十一日よりの事なりき、)はたして訴申す所、そのいはれなきにしもあらず、又此訴松平右京大夫が所領となされしより事起れるにもあらず、六十年の前、松平大和守直矩、村上の城を賜りし時、三島蒲原等の郡にして、四万石の地を加らる、これよりして土俗其地を稱して四万石領とはいひけり、去々年本多中務大輔

忠良彼城を賜ひし時、時に五万石かの四万石領の地、こゝかしこをわかちて、二万石の地を以て御料となされ、其餘をもて村上の領となさる、然るに本多が領となされし所に、村上の城をさる事、或は二十里、或は三十里に及びて、また信濃川をはじめて、大河三つを隔て、又十五六里餘の堤ありて、毎年春秋の水のためにやぶらる、これら修築の事、また其勞費はかるべからず、それにまた彼四万石領の地、もと大庄屋といふもの十人ありて、年頭これらがためにくるしむ事共多かりしに、此たび彼十人が中、八人をわかちて村上の領に附せらる、これらの事によりて、村上の城のほとりにある所の地と引かへられんことを黒川の御代官所に歎申しけれど、其沙汰に及ばれず、これらの事共、八十五村の百姓歎訴する所、こと〴〵くそのいはれあり、前代の御時より此かたは、譜大名御旗本の人々、所領替のある時に、その土田の沃饒なるもの、又は山林川澤の利ある所所をば皆々御料となして、其餘をもて私領に附らるゝ事なれば、ひとり百姓共のうれへ申す事のみにあらず、その領主もまたこれがためにくるしむ事、すべてかくのごとくなり、去年四月、百姓共の中、三人を撰びて奉行所に來り訴へしむ、〇略 註 これも亦その沙汰に及ばざりしかば、四月に至て、河内守正岑出仕の路を遮りて訴ふ、奉行の人々、其越訴の罪をことわりて、彼三人を召預く、五月の末、三人の輩を奉行所に召て、此たび松平右京大夫、村上の城を賜れり、汝等申す所有べからず、急ぎ罷歸るべしといひしかば、望請ふ所のゆるされぬと心得て、本國に馳歸る、村村の百姓等悦ぶ事大かたならず、されど彼二万石の地、村上領に附られし事は、猶又もとのごとく、三人のものども、心得ぬ事におもひて、九月の初にまた來訴せしをやがて禁獄す、それらが父子兄弟も召よせて禁獄せしに、獄中に死せしもの二人、〇略 註 村上の百姓等、いよ〳〵心得ぬ事におもひて歎き申す所、いまだ御裁許あらず、さらば此年の貢、御代官にまゐらせんも、又村上の領主にまゐらせんも、其事決しがたしとて催促に之たがはず、此年の二月、奉行の人々、彼所の百姓等召問ふべしと申して、其張本と聞えしものども五十八人を召したるなり、此度別の仰を奉りし人々、彼等が申す事どもを聞て、たとひ申すところいはれありとも、今はた望請ふ所をゆるさ

れんに、これらの事、後來の例となりなん事しかるべからず、たゞいかにも奉行所の下知にしたがふべしといひしを聞て、此上はいかで仰にそむき候べき、されど今迄のごとくに候はんには、つひには大庄屋小庄屋など申すもの、ために、父母凍餓し、兄弟妻子離散すべきにてさふらへば、本國のものどもいかにや思ひ候べき、あはれこゝに候もの、中、二三十人許御いとまを給らんには、罷歸りて此仰の旨を傳へて、彼等が所存を承りてのちに答へ申すべしと申す、彼等をゆるし歸されん事、もつともしかるべからずなど議し申す人々も多かりしかば、かさねて此事を以て某に仰下さる、虎を野にはなつなど申事も、事にこそより侍れ、かれらを本國に歸されんに、何條事の候べき、彼等歸りて此たびの御德惠を申傳へざらんには、本國に候ものども、誰によりてか此等の御事をば承るべき、又彼等が訴申す大庄屋の事、御糺問の事なくしてもかなふべからずと申ければ、其請ふ所をゆるされて、三十二人を本國に歸され、彼大庄屋小庄屋等を召れ、八月の半、横田鈴木堀田等して御糺問の事等あり、九月の初、奉行の人々また御代官所注進の狀をまゐらす、其狀には、はじめ召れしものどもの中を歸されしより、村々の百姓等うちより〳〵申す事ありと聞ゆ、また此年の作毛をも、私に刈取りて殘りなしなど見えたり、程なく彼八組の百姓等十二人參りて、御德惠のかたじけなき由を申す、（入組とは四万石領の地、大庄屋十人の下に屬したれば、十組といひしを、前に見えしごとく大庄屋二人を御料の庄屋になされしかば、殘れる八人に屬せしものどもを八組とはいひしなり、）そののちかれらを始めて、はじめ奉行所にて禁獄せし三人のものどもを召て、庄屋どもの事を問はしめられ、かさねて庄屋どもにも問はしめられし事共ありしに、庄屋ども陳じ申すに詞なし、（たとへば去々年十月の末よりして、正月の中に至るまで、八十日の間、御代官二人黒川に來りとゞまりし時に、大庄屋等、その用度として、金九百五十兩を村々の百姓に出させし事の類、いくらもありしを、こと〴〵く申ひらくことばなかりし事どもなり、）十月十二日に至て、此事御沙汰の次第ありて、自今以後、庄屋共不法の事共を禁ぜられ、彼二万石の地、八十五ケ村の百姓四千百十六人を以て、村上の領主に引渡さる、（此時に領主へも御下されし御旨ありき）此年十二月廿

六日に至て、寅卯兩年の貢こと〴〵く皆其領主に納め入れしとこそ聞えたれ、

〔翁草二〕古老閑談之說

一江州滋賀の浦一ッ松の陰に小き宮あり、是山王の末社なりとて、古より叡山の牓也、しかるに近年參詣多く繁昌するに仍、所之者申けるは、志賀に在る神社を叡山より支配すべき道理なし、自今此里より支配可ㇾ致と云、比叡山よりは舊例を以不ㇾ聞ㇾ之、公事に成て京都所司代板倉周防守重宗の前へ出る、防州被ㇾ聞、前々より叡山の支配なるを、只今何故に斯は申ぞと被ㇾ聞ければ、里人申候は、代々の和歌にも志賀唐崎の一ッ松とこそは詠置れ候へ、叡山の一ッ松と申事は不ㇾ承ㇾ及、其陰に祀ひ初し社なれば、唐崎の宮に窮り候と申す、又叡山よりは古例の正敷事ども具に申達しければ、里人申候は、兼平の謠にも、さゞ浪や志賀から崎の一ッ松とうたひ候へば、古來の證例に候と申ければ、防州其謠の次の文句は如何にと有ければ、里人礒と行當りながら、七社の神輿の御幸の梢成るべしと申上る、防州聞ㇾ之て、しかれば山王の影向の松に相違なしとて、叡山の牓示に成りしとかや、

〔甲子夜話四〕大岡越州（〇忠相）ノ山田奉行ヨリ徳廟（〇徳川吉宗）の御鑒ヲ蒙リ、寺社奉行マデニ陞リシコトハ、世ノ人知ル所ナリ、其人才智モ衆ニ勝レタリシガ、常ニ儕輩ニ對シテ、松平左近將監計ハ、其才智ノ敏捷ナルコト、梯シテモ及ブベカラズト云シトナリ、ソノ故ハ、事モツレテ入組、イカントモ斷案シガタキ公事訴訟ノ類ヲ、數日ヲ費シテ調ベ漸條理貫通スルヤウニナリタルコトヲ持出テ、左近將監ヘ申セバ、其半ニモ至ラヌ內ニ、此事ハカク〳〵移リテ、カク結局スベシ、サレバカクハ斷案セラルヽ心得カト、先ヨリ申サルヽコトノ、イツモ露違フコト無リシトゾ、左候ト云ヘバ、夫ニテヨシ、今日ハ事多ケレバ、詳ニ承ルニ及バズナドアリシコト常ノコトナリシト云、カヽル神妙ノ才亦世ニ出ベシトモ思ハレズト人ニ語リシトナリ、

〔見聞雜記三十一〕土屋越前守公事裁許覺書

尾張町家主太兵衞と云者の店に、庄兵衞と云大工有、永々病氣にて甚難儀して、店賃大きにたまりて、終に店替して木挽町五丁目の裏へ引越けり、大屋五郎右衞門と云者の店なり、然るに庄兵衞氣分も快候へ共、仕事にも不出、ぶら〳〵と遊んで計居けるゆゑに、家主五郎右衞門、件の大工を呼、其元は唯遊びて計居らるゝは、いか成ゆゑぞと申ければ、いかにも迷惑ながら仕ごとも不致候、其子細は、道具箱を最前の家主尾張町の太兵衞かたへ店賃の代りに留られ候、依之仕事成兼候といへば、今の家主五郎右衞門、夫は氣の毒なり、何程の家賃殘り候やと聞ば金貳兩なりと云、今の家主五郎右衞門、金子壹兩貸し、是にて道具相貰ひ來るべし、殘壹兩は仕事に出、追々返金いたさるべしと申され候へとて、大工を遣しける處、尾張町の太兵衞、壹兩にては合點せず、道具箱を返しくれず、爰に於て木挽町五郎右衞門大きにいきどほり、大工庄兵衞を召連、町奉行土屋越前守へ其旨を願ひければ、越州聞屆て、頓て尾張町太兵衞を呼出し、壹兩にては道具箱渡され間敷やと申給へば、地主方へ相立不申候と難澁に及べり、其時越州申されけるは、木挽町の家主は、きどくなる者也、逆ものことに今壹兩借、貳兩にして尾張町の方へ遣し濟し、道具箱を取戻して、仕事に出して遣はすべしと申されけり、家主迷惑ながら町奉行の申付ゆゑ、金貳兩出して尾張町の方を濟しけり、扨大工へ尋給ふは、其方道具箱を押へられしは、何日程の間なるとたづね給ふ、大工申けるは、百日餘りと申、大工の手間を安き時は一日いか程づゝなるやとたづね給ふ、答へ申けるは、隨分安き時三匁ぐらゐと申ければ、越前守聞屆、三匁ヅヽ百日に三百目の銀子、大方尾張町の家主方より返濟すべし、急度今日中に遣し候樣にと申付られ候ゆゑ、無是非右之通遣はし、大工は其金にて今の家主方へつぐのひ仕舞けるとなり、

〔新井白石先生秘書〕一板倉伊賀守殿、訟を決行あるに、まけたるものも、腹だゝぬ樣にありけり、事

にはよるべけれど、奇特なる事也と心ある人の語し、

〔板倉政要續篇九〕一時ノ鐘ノ入用割付、先規ヨリ町々ヨリ差出ケル、或町ノ者申ハ、鐘撞堂、又ハ其近邊凡聞ル程ノ所ノ者ドモハ割付出シ尤也、此町ナドヘハ、晝夜共ニシカ〳〵鐘モ聞ヘザルノ間、右入用金、ワリ付ノ通リ出スマジト云ヨリ公事ニ成、右出スマジト申ス者ドモヘ、重宗公、〇板倉今日ハ殊ノ外取込タリ、明日四ツノ頭ニ出ベシ、裁許是有ベクトテ皆々返サレヌ、翌日雙方公事場ヘ相詰ル、割付ヲ出スマジト云フ者ドモ呼出サレ、四ツノ頭ニ出ヨト云ヒ付タルニ、モハヤ何ン時ト思フゾト重宗公申サレケレバ、拙者ドモ五ツヲ承ルト直ニ罷出候、左程日ハタケマジト申上ル、然ラバ太儀ナガラ前々ノ通リニ出セ、五ツヲ承レバ、申分ハ何ゾ有ベキト仰ラルレバ、承伏シテ退ヌ、何レモ當意即妙ト感ジケルトナン、

〔板倉政要七〕下女ヲ懷姙スル事

京師ノ商民、夫アル女ヲ拘置ケルガ、手ヲ付テ懷姙スル、依之夫聞付テ、殊ノ外ニ子ダレ、內證ニテ金銀ヲ以テ侘ルトイヘドモ承引セズ、所司代ヘ訴ヘケル、伊賀守殿、〇板倉仰ゴトニハ、總ジテ奉公人ハ、男女トモニ祿ノタメニ身命ヲ賣ルナレバ、殺害セラレテモ、主心次第相計フコトナルゾ、況ヤ目ヲカケテ懷姙スルコトハ、無是非コト也、大切ノ女房ナラバ、向後奉公ニ出スベカラズ、乍去年季明候テ、夫ノ手前ヘ暇ヲ遣シ平產サセバ、今主人ヨリ養育扶助スベシ、產レ子ハ主人ノ子ナレバ、父ヨリ初、後マデ苦勞エ致スベシトノ仰ゴト也、是ヨリ以後ハ、下女ニ目ヲ掛ルコト氣遣ナシト、京童太悅シケル、

〔菅茶山筆のすさび二〕一堀田筑州金言　麾下の士何某の町奉行になられし時、堀田筑前守殿の、必らず相手にならぬやうにあれかしと申されしに、何某其時は合點ゆかざりしが、訟を聽にいたりて、始めて心付しといはれしとぞ、訟を聞は公の事ながら、惡しとおもひ、むつかしとおもへ

ば、必其人を我が相手と思ふやうになる者なり、我闘するごくなれば、其人言を盡すことあたはず、必かたぎゝになりて、取さばき平かならず、相手になるなど言れしは金言なりと、子孫にもいひ置れしとなり、

〔市尹要覽三〕享保三戌年中町奉行三ヶ所之訴訟公事扱之覺

一四万七千七百三拾　訴訟數

一三万五千七百九拾　公事數

内

三万三千三拾七　金公事

貳千七百五拾三　外公事

右公事二口之内、壹万千六百五拾壹濟

一壹万千七百三拾九　當座公事

一六百武家方奉公人給金滯り斷

同四亥年町奉行二ヶ所公事訴訟數覺

一三万四千五拾壹　訴訟數

一貳万六千七拾　公事數

貳万四千三百四　金公事

千七百六十四　外公事

右二口之内、貳万五千九百七拾五濟

一壹万八百七拾貳　當座訴訟數

一五百拾七　武家方奉公人給金滯り斷

右は御尋ニ付、享保五子年正月、兵庫頭殿江上ル、

（肥後物語 一）經界ヲ正シ農民安堵セシ事

肥後田舍ノ治メ可行屆ト存ズルハ、一郡ニ郡代ヲ兩人立テ、郡內ニ郡代屋舖ヲ構ヘ、一人ハ郡ノ屋舖ニ出張シ、郡內ノコト一切聞屆テ、一人ハ城下ニ居聞次、兩人交代ニテ勤ム、其上役ハ郡方奉行ナリ、是ハ十四郡ノ郡代廿八人ヲ手ニ附ケ、一切ノ事ヲ承ハル、加之公事訴訟アレバ刑法方ニ渡シ、此方ノ世話ニナラヌコトナレバ、郡役人ハ郡內ノ政教行屆ナリ、左ナクテハ、役人城下ニ居、庄屋ドモガ申出ルコトバカリ取捌キ、其上公事訴訟迄モ聞クナレバ、中々手ノ屆カヌコトナルベシ、

古事類苑

法律部六十

下編下

拷訊 斷罪附

牢問方法 九五二
牢問制度 九六〇
牢問例 九六三
拷問方法 九六八
拷問制度 同
拷問例 九七六
婦女拷問 九八〇
駿河問 同
水責 木馬責 九八一
火責 九八三
鉛責 九八四
詰問 同
口供 九八五
誤證文 九八七

拷器　九八八

断罪

断罪方法　九九〇
據定書断罪　九九一
據先例断罪　九九四
参酌定書先例而断罪　九九五
断罪不據定書先例　九九七
違圖断罪制度　一〇〇四

和解

和解制度　一〇〇六
和解例　一〇〇八
内済異變　一〇一六
済口證文　一〇一八
済口留帳　一〇二二

古事類苑

法律部六十

下編下

拷訊 斷罪附

德川氏ノ拷訊ニハ、牢問アリ、拷問アリ、牢問トハ囚人ニ手鎖ヲ施シ、吟味所ノ砂利ノ上ニ坐セシメ、初ニ口問ヲ爲シ、或ハ問書ヲ讀ミ示スト雖モ、服罪セザルトキハ、手鎖ヲ解キ、太繩ニテ面縛シ、打役ハ其縛シタル兩手腕ヲ背ノ上ノ方ヘ押シ上ゲ、猶ホ服セザルトキハ、更ニ手腕ヲ押シ上ゲテ、項ノ邊ニ至ラシメ、打役兩人ニテ、箒尻ト稱スル棒ヲ以テ、兩方ヨリ毆ツナリ、但シ揚リ屋入ハ、初ニ手鎖ヲ加ヘラレ、緣頰ニテ審問ヲ受ケ、縛セラルヽトキニ及ビ、緣ヨリ落サルヽナリ、斯クテモ服セザルトキハ、石ヲ抱カス、其法ハ拷訊ノ爲ニ設ケ置ク所ノ柱アリ、其柱ノ下ニ、薪ノ三角形ノ木ヲ並ベ置キ、罪人ヲ引キテ柱ニ縛シ、薪ノ上ニ坐セシメ、其膝上ニ石ヲ上セ、次第ニ疊ネテ五六箇ニ至レバ、罪人頭ヲ低レ、沫ヲ吐キテ氣絶スルナリ、斯クテ少時間ヲ經テ、牢醫ヲシテ之ニ藥ヲ與ヘテ醒覺セシメ、之ヲ牢ニ送ル、此ノ如クスルコト數度ニシテ、終ニ白狀スレバ白狀書ニ爪印ヲ捺セシム、或ハ誤證文ヲ書セシムルコトモアリ、而シテ誤證文ニハ民事訴訟ニ關スルモノモアリテ、今此ニハ之ヲ併セ出セリ、

拷問ハ、拷問藏ニテ行フコトニテ、或ハ罪人ヲ縛シタル繩ヲ、柱ノ下上ノ兩鐶ヨリ梁ノ鐶ニ貫キ、罪人ヲ釣リ、罪人ハ其足下垂シテ地ニ至ルヲ得ザラシメ、或ハ海老責ト云ヒテ、罪人ヲシテ兩手兩足ヲ屈セシメ、之ヲ縛シテ、其狀海老ノ如クナラシム、而シテ牢問ハ固ヨリ拷問

牢問方法

ナレバ、通ジテ之ヲ言ヘルコトハ常ノ事ナレド、今ハ文字ニ就キテ之ヲ別テリ、凡ソ拷問スベキ罪人ハ、殺人、放火、盜賊、關所破、謀書謀判等ニ限リテ、其他ハ時宜ニ依リテ之ヲ行フナリ、

〔法曹後鑑〕牢問致方之事

一牢問致方ハ、囚人江再應利解申聞、相陳候得者、痛メ可申旨申威し候上、後ロ手ニ縛リ申候、其上ニも相陳候得者、箒尻ニ而兩肩を敲申候、

但縛リ方ハ、後ロ手に縛リ、左右之手首を兩肩之下迄〆上申候、右體いたし候得バ、兩之肩江肉集候間、其上を敲申候、痛ハ強候而も、骨江當リ不申候ニ付、骨之痛ニ相成不申候、

一其上にも相陳候得者、薪六七本並、後ロ手ニ縛リ候儘ニ而兩膝をまくらせ、右薪之上江居らせ、縛リ繩之餘ニ而、後ロ之柱江縛リ付、膝江石を載申候、

右石二三枚膝江載置、其上にも相陳候得者、段々石を相增し、七八枚乃至十枚程も積申候、

但只薪之上江居らせ、膝江石を載候而ハ、石ニ而胸を打候ニ付、後ロ之柱江縛付、少し後ロへ反リ候程ニ仕、石を載申候、

一一應ハ薪江載候而も相陳候得バ、薪よりおろし、猶又利解申聞、又ハ再應縛リ敲、或薪江載吟味仕候、

一右體ニ仕候而も相陳候得バ、海老に懸ケ申候、

右海老と申候ハ、胡床をかゝせ、兩足首を一ツニ結、右足首ゟ首江繩を懸、前之方江段々〆寄せ申候、

但海老之致方ハ有之候得共、右體仕候儀先ハ無之儀ニ御座候、

一右體ニ仕候而も相陳候得バ、伺之上拷問仕候、拷問ハ後ロ手ニ縛リ釣しに懸申候、

是ハ安永二巳年飛州江罷越候節、江坂孫三郎曲淵甲斐守江内々問合候ニ付留置、

(刑罪大秘録)穿鑿所略圖

石ツイ
石ツイ
石ツイ
此三本ノ柱ェ囚人縛リ付ル
此筋押廻シ出ヒサシ
賄所後ロ通リ
囚人
穿鑿所
此所ハ當時見廻リ同心詰所
同
御小人目付
御徒目付
押入
イロリ
牢屋同心詰所
藥煎所
イロリ
源兵衛やしき
イタマイ

〔刑罪大秘録〕

伊豆石　目方拾壹貳貫目
長サ三尺幅一尺厚三寸

五枚積候得バ腮をもたせ候程ニ成る

囚人動き候ても石の落ざるやうに太縄ニて結ふ



松槇三角かどを少し取り五本並へ三寸貫ニ打付る

○按ズルニ、前圖穿鑿所略圖中ニ源兵衛やしきトアルハ、小使部屋ノコトナリ、小使ヲ源兵衛ト稱スルハ、牢屋ノ通語ナリ、朱書ニ見エタリ、

〔刑罪大秘錄〕牢問之事

一吟味方與力同心、牢屋敷江罷越、御徒目付、御小人目付立會與力問之、

一穿鑿所砂利之上江筵を敷、囚人を引居ル、尤囚人江手鎖を掛ケ、牢屋打役同心差添、下男引連来ル、

一囚人身分ニ寄、穿鑿所疊之上江出候節者、打役兩人左右ゟ挾之、揚り屋之ものハ椽側江出ル、打役囚人臺江罷出候節ハ、打役囚人臺江罷出ル、

一最初口問、又ハ問書讀聞せ候も有之、彌申陳居候得バ、筵之上江引おろし、下男手鎖をはづし、直に打役椽より下り、太縄ニ而如繪圖之、○圖略打續ケ、又石にもかける、

一白狀及び候得者縄を解、醫師藥を用ゆ、水を呑セ、其座ニ而白狀書江爪印をいたさせ、アンダに乗セ、縒ヲリダイニヲナワ牢内江歸す、○中略

一箒尻ニ而打候節、囚人動き、又ハ轉び候へば、苧縄の先を下男兩人にて前後よりひき居る、

〔牢獄秘錄〕於牢屋敷拷問之事本役加役ヘ、自分屋敷ニ而拷問する也、

一拷問之儀ハ、總而牢屋敷にて有之事也、牢内にて拷問之儀を牢問といふ也、

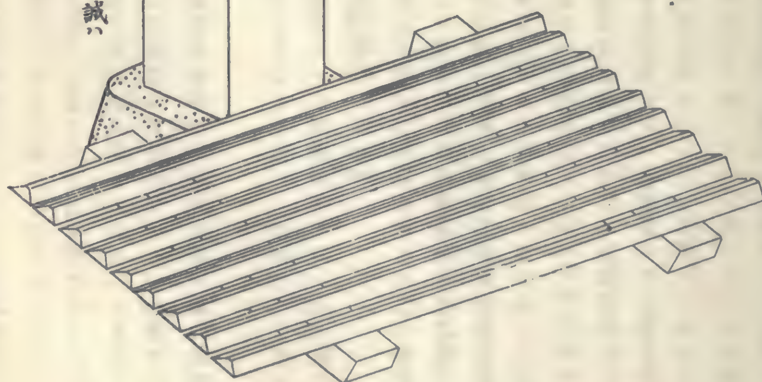
一揚り屋者之拷問ハ、吟味所椽頬にて、薄べり敷て上に居させ、吟味方の役人ハ敷居之内に居る也、段々聞糺候處、その罪に服する時ハ、吟味計りにて拷問に不及、服せざる時にハ、迚も是にてハ不相成、サア〱下り候へとて、則椽ゟ下へおろされて手錠を取拷問所之吟味之時ハ、皆々手錠にて吟味也、手錠を取るハ張番之役也、縄にて後ロ手にしばり、打役まづ縛りしまゝ、兩手を上へこぢ上ゲて、委細に可申上といふといへども、矢張不申上故、又々打役兩人兩方ヨリ手を首之方江押上置、打棒ホウキウリトイフ

柱
柱
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
牢屋同心打役
非人
入口
出役
口書
書役
御徒目付

拷問之時石を抱かせ候時に
此ごとくのまきの上にすわ
らせ膝之上に石を乗せ候事
なり

此柱に寄りかゝらせ縛り付て板之上にすわらせる也

抑此まきの上にすわらせる事世上にて三角のまきと云へ共誠ハ
角をとりし三角にて△如此之小口の木九本ならべありと云

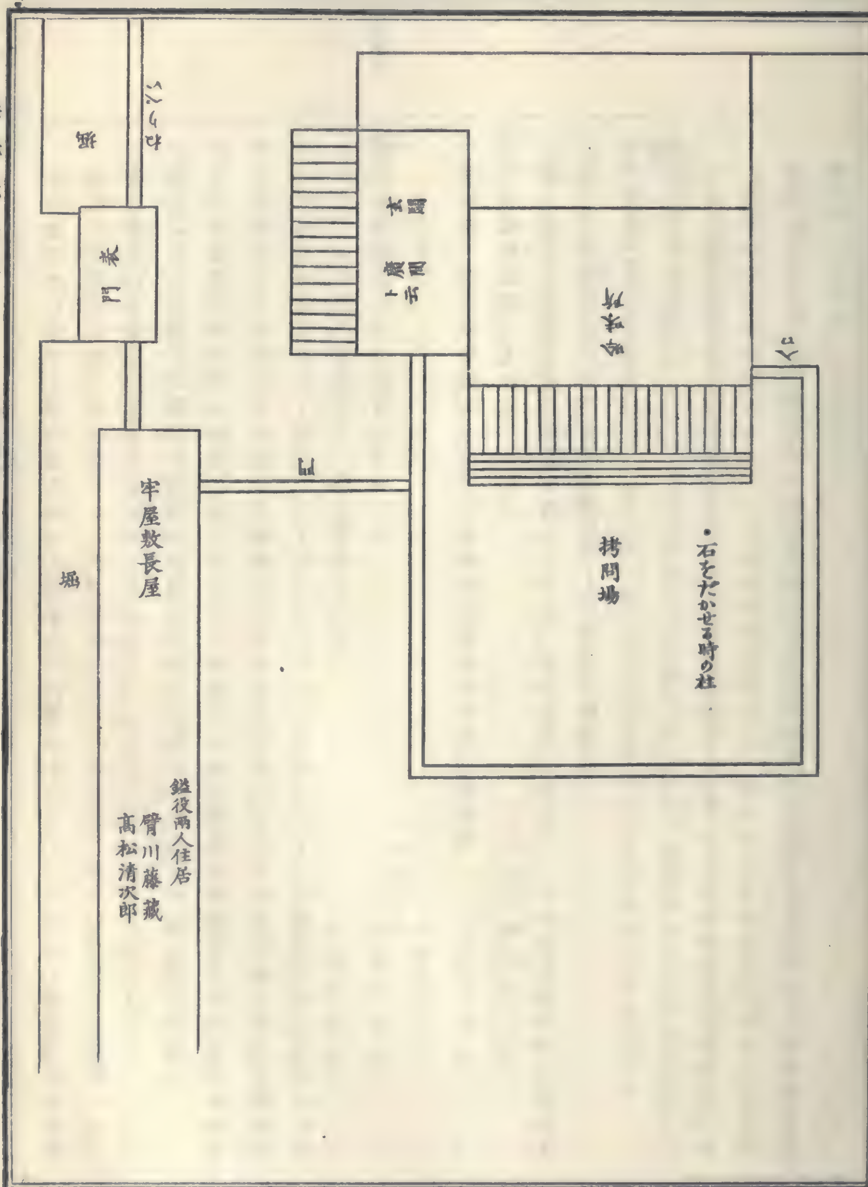


にて兩方ゟ敲くなり、此時白狀之旨申時ハゆるし候得共、彌强情にて白狀に不及者には、石を抱せ候事なり石を抱かせ候ニ　、吟味所に二本の柱あり、此柱に寄かゝらせ、まきの上に（まきさへいへ共、わりたる木にもあらず、三角の角を落したる木を九本ならべ打たる板なり、）居わらせ、後ろの柱に縛り付、張番之者石を持參り、膝之上ニ一枚宛のせ候事大概五枚六枚位迄のせ、暫く有内、科人首をたれ候よりあわを吹なり、此時氣絶する也、氣絶しても暫く見合せる、是を見て張番ニ申付、石をおろさせ、醫者に申付て氣付を口に入させ、つり板（戸板之樣なるもの也）に乘せて、張番之者牢江持行也、此節ハ如何成科人にても氣絶する也、

一拷問之時ハ、大概人數（科人之人數）四人に限る、多人數ニて五人位也、此内にも吟味所にて、或ハ打、或ハ石を抱かせ候科人ハ、四人之内ニても貳人位也、跡貳人ハ只嚴敷問糺すのみ也、又貳人ゟ外、吟味所にて石を抱かせ候事ハ、柱少きゆへ出來ぬ也、（寄りかゝらせ縛り居柱の事なり）

一科一ト通りならず、外に惡事も可有歟と思ハるゝ科人ハ、重々責問、其上何も申上る事無之と申時ハ、則打役ニ申付て、兩手をくゝり、四五十も敲かせ見るに、大概可申惡事も無之樣子ニ見へ候事故、吟味役人、彌其方可申上事無之哉、此段を奉行衆へ可申上候得共、御聞濟有之共宜敷歟、先々可申上と申時、打役敲を見合せると云也、決而見合せよと吟味役ハ申さぬこと也、吟味之口振にて、打役之者敲を止ること也、扨又此後ハ此科人之吟味無之也、（此段ハ外惡事も有之故さ責問ふ事なり）

一石を抱かせ氣絶して牢内へ入るに、間もなく正氣付なり、其後又々呼出し、如斯拷問にかける事五六度に及びて、有體を不申、的面に證據有之死罪之者也といへ共、强情にて不申上時ハ、外に輕き科の譯合を以、爪印致させる也、科人もはや重科は申ぬけしゆへ、死罪にハ成まじと思ひ居るといへども、矢張死罪ニ申付らる也、科人共仰天して驚くものも間々有なり、强情成科人、死罪申ぬけ致時は、遠島に相成ると心得、輕き科之爪印ゆへ、先是にて命助りしと思へ共、科



堀
表門
玄關
吟味所
門
牢屋敷長屋
堀
拷問場
石をだかせる時の柱
鎰役兩人住居
曾川藤藏
高松清次郎

牢問制度

之次第たとひ不申上候共、衆々外々之調有之て、死罪に究らずといふ事なし、愚昧なる科人共、強盛にて拷問に度々苦痛すといへ共、重科申ぬけさへ致す時ハ、命ハ助る事と心得、苦み損をする事、愚かなるもの也といふ、〇中略

一拷問之節ハ、上席に御徒目付羽織着ながし出役し、其跡に口書いたし候もの扣へ居る事也、牢内之者拷問牢内之科人共牢問さいふ也有之時ハ、右科人に氣張りを付て、何事も決而言な、いかなる重罪も申ぬけ歸れ、たとひ石を十枚抱く共、責殺されしためしはない、又まきの上に居り様、足を重ねぬやうにすわる時は、跡にて足はいたまぬとて、このわり木の上にすわり様までをしへ、精々白狀いたすなど牢内の者共をしへ出す事也といふ、

〔寶暦集成絲綸錄三十〕寶暦九卯年二月

三奉行江

一牢屋敷ニ而牢問致候節も、是亦向後、御徒目付立合候樣可被致候、

〔天保集成絲綸錄百〕寛政五丑年四月

一銘々懸リ之内、牢問有之節抔、心得ニ可相成與被存候儀ハ、邂逅ニハ牢中被見廻候而も苦かるまじく、勿論其度々繁々被相越候様ニとの事ニハ無之候、

〔市尹秘錄一〕吟味方勤方之事

朱書寛政十午年書出〇中略

一牢問之儀ハ、牢屋敷於吟味所、囚人江再應利害申聞、相尋候上、申陳候得者、牢屋鋪打役同心江申付、爲縛、箒尻ニ而爲敲、其上ニも白狀不致候得ば、槇之上江居江、膝上江切石を三四枚、又者五六枚位迄積、責問仕候、尤評定所御詮議者、御目付立合、御詮議者は、申口之次第、即日能出御届申上候、

一拷問は、拷問藏ニ而取扱申候、

一御。一。座。掛。牢。問は御徒目付立合、寺社方掛者、寺社奉行家來立合、御勘定方掛は、御小人目付立合申候、

但當時は御手限牢問ニも、御徒目付御小人目付立合申候、

朱書一寛政八辰年、町奉行支配吟味者調役被仰付、牢問之節ニ、調役共罷越候處、御役所御用向多ク候ニ付、同十午年十二月、松平伊豆守殿江伺之上、以來は御用透を見合罷越候樣相成候事、

〔新張紙留〕朱書文政五午年十二月ゟ牢屋懸り出來ニ付來ル

御勘定奉行衆

御徒目付
蒔田又三郎
上村吉兵衛
松田雄右衛門

御小人目付
畔柳權九郎
内田鎌五郎
渡邊悦次郎
久下米藏
川村吉三郎
金井伊大夫

右者牢問幷敲御仕置有之候節ニ、定式立會候樣被仰渡候ニ付、此段御達申候、以上、

神尾市左衛門
本多彌八郎

〔新張紙留〕拙者共懸リ四人共牢問之儀、及御達候節、御支配向之もの江御申渡、御小人目付立會、牢内ニおゐて嚴敷吟味有之候節、格別之惡黨共ハ、身體勞候ハ不相厭、御仕置を可相遁と、證據慥ニ有之候惡事をも申陳、再牢問之儀及御達候而も、最初之吟味ゟ日數相隔候得ハ、又候、身體健ニ相成候故、前書同樣申陳、度々牢問有之候とも同樣之次第ニ而、自ラ數月在牢申付置候樣成行候間、以來再牢問之儀及御達候節ハ、早速吟味有之候樣いたし度、尤御支配向も、御用多ニハ可有之候得共、御繰合前書之趣ニ御取計有之候樣ニハ相成間敷哉、御相談旁、此段及御懸合候、以上、

午十月

〔諸例類纂　五〕一未十月〇文政六年二日、御勘定奉行石川主水正殿江差出、同六日、御附札濟、御用人原信田紋藏申付候ハ、御附紙之內、嚴敷痛メバと有之候、其ものを縛り置、敲候而痛候事ニ而、是ハ奉行所ニ而牢問と申候、拷問ハ容易ニ不被用、幾度ニ而も、牢問ニ而痛メ候、世間ニハ拷問、牢問無差別見候得共、奉行所ニ而ハ差別有之事故、右體之罪狀之ものハ、拷問不致事と御附札ニ有之候、勘辨致候樣被申聞候、

領分之百姓三人打寄、於河原輕き賭錢ニ而、紋附賭勝負いたし候旨、右手合之內、壹人白狀いたし、手合之名前を差申立候付、右兩人呼出相糺候へ共、兩人共、決而覺無之旨申陳シ、白狀不仕候間、双方實否相分り兼、罪科難取極、依之申陳候兩人を嚴敷拷問可致筋ニも可有御座哉、都而拷問之儀ハ、其品ニも寄可申儀ニ而、右體輕き賭事ニ而、双方實否相分りがたき節ハ、如何取計可然筋ニ御座候哉、御問合申上候、以上、

十月二日　　石川主水正家來　岡田衛士助

御附札

書面手合之內、壹人白狀いたし候者之儀、外貳人遺恨等有之、申掛いたし候儀等ニも無之、全賭

一事いたし候ニ無相違段、吟味之上相決、兩人共申陳候儀ニ候ハヽ、嚴敷痛メ候而、吟味いたし候ハ不苦筋ニ候得共、右體之罪狀之もの拷問ハ不致事ニ有之候、已上、

未十月

〔書留〕申渡、尋書、○中略

牢問

上封ニ左ノ通、封目ハ〆、

。。。牢問書付

非番町奉行殿　　何之誰

若懸合有之時ハ、月番ニ而も遣之、

何國何郡何村誰問書但再問之節ハ、何國何村誰再問書、

何何月幾日入牢　何之誰懸何之誰御代官所何州何郡何村何誰江可尋趣何何誰

其方儀、何々ニ付召捕、令吟味處、何々之由誰申之、何村誰令吟味處、何々與申立、何々ニ候上は、何々之段無相違處、品々申紛申陳條不屈ニ候、依令問間、何々之始末、眞直ニ可及白狀、若於不陳は、再問は幾度も嚴敷猶又嚴敷可令問もの也、

何何月

〔御仕置例類集二ノ一〕文化八未年御渡

御勘定奉行松平兵庫頭伺

一密夫ニ無相違相聞候得共白狀不致もの之儀ニ付評議

去ル子十月晦日御渡被成候、武州埼玉郡騎西領據百姓共と認、神田數馬知行、同郡外田ヶ谷村百姓唯七事、甚兵衞儀を申立候、御箱訴狀之趣、最寄御代官江申渡、風聞爲承糺、訴狀之趣無相違相聞

候處、其節甚兵衛村方ニ居合不レ申、密々行衛爲ニ相探一候內、翌丑二月、同村長左衛門ゟ甚兵衛を相手取、私方江及ニ出訴一、右訴狀之趣ハ、長左衛門女房きせと甚兵衛密通之上、誘引出、兩人とも行衛不ニ相知一候處、甚兵衛を見當り候旨申立候ニ付、早速爲ニ召捕一入牢申付、御箱訴狀、又ハ長左衛門出訴之趣を以、引合之もの共をも呼出し、打合吟味仕候處、人を集、博弈を渡世同樣にいたし、子分と名付、惡黨ものを止宿爲レ致、金子押借抔申懸、人之娘を誘引出し賣女にいたし、或ハ人之女房を連出し隱置候儀、幷きせを誘引出候上、品能差戻度間、一旦離緣狀相渡候樣、長左衛門江懸合貰度旨同郡砂山村修驗金藏院江相賴、又ハ同郡加羽ヶ崎村庄右衛門方江、きせを預置候儀等無レ之旨申之候得共、金藏院を賴候も、全く欺き候而、離緣狀可レ取巧ニ無ニ相違一相聞候を、惡事いたし候儀、一向無レ之旨申陳候ニ付、再應嚴敷吟味仕候內、去ル寅三月四日、牢屋類燒ニ付、一旦放遣候處、立歸候間、猶又吟味仕、是迄都合三十四度牢問申付候得共、野田等におゐて、名住所不レ存もの共手合ニ加り、廻り筒鑿博弈度々いたし候趣而已、追而申立、其餘之惡事ハ、何分白狀不レ仕、然共右體放遣し立歸候もの之儀、旁拷問可ニ申付一品にも無ニ御座一、依而ハ猶牢問申付候外無レ之候得共、吟味取懸りゟ、最早七ヶ年ニ相成、餘り際限も無ニ御座一候ニ付、品々勘辨仕候處、御定書ニ添候例書之內、武州青梅村平藏女房とわ儀、平藏店子淸八と密通有レ之由ニ而、平藏儀、淸八を切殺、とわにも手疵爲レ負候ニ付、度々嚴敷遂ニ吟味一候處、平藏も致ニ牢死一、密通之儀不ニ相決一、白狀も不レ致候得共、密通も有レ之趣ニ相聞候ニ付、とわ親類江預け押込置候樣可ニ申付一哉と相伺、御差圖輕追放と有レ之、尤右ハ女之儀、殊ニ本夫平藏、幷密夫之由相聞候淸八とも相果候儀之處、此度ハ長左衛門女房きせ、今以行衛も不ニ相知一事故、的當には無レ之候得共、密通いたし候妻男とも死罪之御定ニ付、密通之科ニ而、死罪ニ當り候もの、不レ致ニ白狀一趣意ハ同樣ニ御座候間、右例ニ見合候得バ、甚兵衛儀、廻リ筒鑿博弈度々いたし候方、重も之不屆ニ而、中追放ニ相當り申候、然ル處牢屋燒失之節、放遣立歸り候ものゆゑ、本罪相當ゟ一等輕可レ

申付旨之御定ニ而、中追放ゟ一等輕、江戸拾里四方追放相當ニ付、江戸拾里四方追放被仰付候上、佐州江水替人足として差遣候樣取計候方にも可有御座哉、是迄吟味手間取候而已ならす、密通之始末、此上白狀之期相見江不申候ニ付、先ツ御內意奉伺候、

此儀惡事いたし候もの牢問之上、白狀不仕分ハ、拷問可申付手續ニ御座候得共、拷問可申付品ハ、御定書ニ人殺、火附、盜賊、關所破、謀書、謀判と有之、密通いたし候もの之儀ハ無之、勿論右御定ニ、詮議之內不決、外ニ惡事分明ニ相知れ、其科ニ而死罪ニ可被行もの、右之外にも、拷問申付可然品も有之候ハヽ、評議之上可申付と有之候處、密通之儀ハ、拷問可申付品之內ニ無御座候上ハ、拷問可申付惡事ニ無之間、一體之詮議筋、外ニ而相知候密通之分ハ、猶以拷問申付候筋ハ有御座間敷儀故、詮議之內不決、外惡事と有之候ハ、最初よりの吟味筋ハ、拷問可申付品ニ無之候得共、外ニ人殺、火附、盜賊、關所破り、謀書、謀判之惡事相知れ、死罪ニ可被行罪狀分明之もの江引當候御定ニ可有御座、此度之甚兵衞儀、品々惡事相開候內、聊無紛趣之不屆ハ、長左衞門女房きせを誘引出し候一條ニ付、拷問可申付品ニハ有御座間敷、殊ニ密通之科ハ死罪ニ候とも、牢屋類燒之節、放遣立歸候事故、本罪相當ゟ一等輕可申付旨之御定ニ相當、死刑可相宥ものニ候を、拷問申付候儀ハ、旁相當仕間敷、然ル上ハ、牢問申付候外無御座候處、三十度餘も牢問之上、白狀之期相見不申候上ハ、最早牢問ニ不及、松平兵庫頭見込之通、江戸拾里四方追放申付、尤一體惡黨もの之趣ニ付、手放し置候ハヽ、此後彌惡事仕出し、諸人之難儀ニ相成可申事故、御仕置申渡相濟候上、佐州江水替人足ニ差遣候旨別段申渡、追而佐州江差遣候迄ハ溜預申付置、相當之ものと奉存候、依之伺之通相心得、此上黃紙科書等取調、猶相伺候樣被仰渡、可然哉ニ奉存候、

未八月

朱書
評議之通濟

（刑罪大秘錄）拷問圖



海老責圖

青細引ニテ圖ノ如ク縛りをへたく



拷問方法

〔刑罪大秘錄〕拷問之事

一都而牢問之通、先ヅ穿鑿所ヱ囚人呼出し、白狀不致候はゞ、拷問申付ル旨利害申聞、夫ヨリ掛リ役人立會共一同、拷問藏と唱候場所ヱ罷越着座、囚人ハ手鎖之儘、跡ヨリ拷問場所ヱ引連、再應利解申聞候上ニ而、如圖掛ル、打役取計ひ、下男手傳之、

拷問制度

〔御定書百箇條〕拷問可申付品之事

享保七年極
一人殺

同
一火附

同
一盜賊

元文五年極
一關所破

同
一謀書謀判

右之分、惡事いたし候證據慥ニ候得共、不致白狀もの、幷同類之內、致白狀候得共、當人不致白狀もの之事、

享保七年極
一詮議之內不決、外之惡事分明に相知、其科にて死罪可被行者之事、

同
右之外にも、拷問申付可然品も有之候はゞ、評議之上可申付事、

寬保三年極
延享二年極追加
但拷問口問之節、立會之もの差越、吟味之樣子申口得と承糺候樣可申付事、

〔御定書百箇條〕輕き惡事有之もの出牢之上不及咎事

延享二年極
一敲御仕置可成もの、吟味之內、拷問於申付候にには、追て不及咎事、

〔官中秘策二十六〕一拷問之事、惡事致候證據慥ニ候得共、當人屈服不致候もの、又ハ未決候得共、外ニ有之分、明ニ相知れ、其科計ニ而も可被行罪科者、右之外ニも僉議之上、其品少ニ而も、手筋

相決候品ニ寄、拷問申付、

但差口計ニ而、證據慥ニ無之、又ハ怪しきものと存候分ハ、一通ニ而不及拷問、

〔御定書百箇條〕追加詮議事有之時、同類又ハ加判人之内ゟ、早速白狀に及候もの之事、

延享元年極
一總て詮議事有之時、同類又ハ加判人等之内ゟ早速致白狀、依之謀計之者共於相顯にハ、右早速白狀之ものハ、自本罪相當一等輕可申付事、

〔科條類典下六〕享保七寅年

筋違之もの拷問申付候儀ニ付御書付

一房州大里村藤七下人左兵衛儀、同國滑谷村源太郎伜源內、丑六月四日之夜、藤七宅江忍入候節、追懸ヶ出、源內に手疵負セ相果候儀ニ付、仕形怪敷候故を以、左兵衛拷問申付候、右源內手疵負セ候節、忍入候樣子、藤七下人ども、并泊合候ものの、又は藤七向隣、其外近所之者共出合、大勢之證據も有之、其上藤七下人庄三郎は、源太郎從弟之由、此ものも右之通申候得者、旁證據も有之候得者、拷問申付間敷處、初發之存所、何方違候故ニ候、此上左兵衛出牢申付候時、拷問申付候事を可申聞品モ有之間敷候、就夫向後拷問申付候者之分、怪敷存候、一通ニ而ハ拷問申付間敷儀ニ候、詮議之上其品少々も手筋聞候歟、又は人數等ニ而其譯決候得共、右之詮議ニ付、外ニ盜抔之事疑敷儀候歟、并公儀江對し、不屆之儀有之品は、拷問可申付事ニ候、

寅
二月

〔御仕置書三〕拷問可仕筋之事

一重き科之者、并盜人之類、僉議之上、一通申候得共、紛敷儀と怪敷筋有之難決者、

但其科之品、一通は白狀仕候得共、紛敷事共申、僉議之筋不殘決定不仕者、或者對公儀候御儀か、或は難差置儀申出候事有之、怪敷候而、決定不仕候、拷問致候樣ニ可仕候、

一慥成差口有之候得共、白狀不仕者、

一惡事之差口有之、僉議仕候而證據も無之、拷問仕候筋には無御座候得共、右僉議之內、外之事ニ付、重筋〔萬〕相聞候者、

但縱ば盜人之差口有之候得共、無證據ニて拷問難仕所、此者兩方人殺候とか、火を附候科、其外重き惡事仕候旨申者有之、其段承候而も爭候はゝ、拷問可仕候、

右之通自今相心得拷問可仕候、此外可仕哉否、一座相談仕候而も難相決儀は、其節に至奉伺候、以上、

享保七年寅三月

一總而拷問申付候儀、人殺、或は火附、或は盜賊、ケ樣之類、畢竟死罪に被行候科之末、不相決節之儀にて、輕科人白狀不致候迚、拷問ニ及間敷候、重き科人にても、證據無之猥ニ拷問申付間敷候、依之拷問可申付品、左之通、

一惡事致候證據慥ニ候得共、白狀不致者之事、

但差口計にて、證據慥ニ無之者、拷問致間敷事、

一同類之者致白狀候得共、當人は白狀不致者の事、

但同斷

一僉議有之、科は未相決候得共、外ニ惡事有之、分明に相知、其科にても可被行死罪者之事、

右之外にても、事品ニ寄、拷問申付可然趣も候はゝ、奉行中相談之上可被申付事、

享保七年寅四月

同八日水野和泉守殿、三奉行江一通り宛御渡相成候、御口上にて被仰渡候者は、牢內囚人抔も承り候ては、左樣に可心得哉に候、ゆるみ候譯にては無之候樣ニ、拷問之次第を立置可然儀ニ

付被仰出候、遠國御役所江は、若間違も可有之哉ニ付、不被仰出候、三奉行幷山川安右衛門計り
被仰渡候旨、口上にて被仰聞候、

〔地方落穂集十二〕拷問之事

一拷問ハ無下知して自分には不成儀也、公儀ニ而も無差圖ては拷問有事なし、惡事の證據慥ニ候得共、不致白狀者、又同類之者は、白狀申候へ共、當人不致白狀幷に詮議之科は未相決候得共外に惡事等有之、分明に相知れ、其科計ニ而も可被行罪科者、是等之類は拷問被仰付候儀也、但差口計ニて證據無之は拷問致す間敷との御事也、拷問不致候て不叶者ハ、右之趣を以て伺ひ御下知を請取行ふ儀なり、

〔御書付留〕寛政五巳年四月五日
和泉守殿出雲守江御渡、但急度被仰渡候、〇中略

一吟味物之時宜ニより、輕き責問之事は、銘々之白洲ニ而有之候而、責可然候、尤吟味之度毎にと申ニ相成候而者不可然候、罪之輕重、事之淺深ニよるべき事ニ候、

〔游藝園隨筆抄〕松平三河守作州津山家來より、罪人責問の事、尋に依り、左の通、三河守家來栗原玉城へ相答へたり、

御領内寺社百姓共取扱方之内、嚴敷責問いたし方、左に申述候、尤其科に依り、拷問可申附ものも有之候得共、其差別は、奉行之職掌にて、拙者共預り不申候間、一通り大要而已を擧げ候事に候、

一犯科之もの有之候節、其罪科分明にて引合のもの共申口も符合いたし、歷然無相違は不及申、尤其申口之趣怪敷、若尋之旨陳ずるに辭なく、只々不分明之遁辭而已申ながら、無相違罪狀を不申立類は、隨分責問いたし、石をも用ゐ、打もいたし候得共、疑敷存候迄のものは、猥り

に責問不致候事にて、其譯は吟味いたし候役人とて、外ニ術之有之候ニは無之、罪人之申口を能く味ひ、情を以て察し當候迄之儀に付、万一見込違ひ有之、徒らに疑を以て嚴重に取計ひ、罪人苦痛に堪へ兼、なき罪を申立させ候類の無慈悲之なき爲に可有之候、然れども吟味役人其研究粗にして、是も疑ひ迄、彼も疑ひ迄に止り候と申樣申し欺かれ、遂に罪科あるものを遁し候類之義には無之候、併し右之邊所謂妙所にて變化窮りなく、中々書傳には難相成候得共、疑敷罪狀を重きに附候義は、古來より無之事と御承知相成候はゞ、多分間違有之間敷と被存候、

一罪人其身の惡事は申立、縱令ひ死に及び候罪科まで逐一白狀いたし候とも、同類之義は輕き科をも押隱し候類を研究し、又巧みにて犯し候罪と、過にて犯し候罪との見分にて、寃罪を相救ひ候義、所要之事に候、勿論申迄も無之候得共、惡黨にても、御領主の下の赤子なれば、骨を傷め、或は水火を用ひ候類にて、忽に病を生じ、又は永久の癈人に相成候類の責問は、仁政之上に有之間敷と存候、素より御私領内御仕置之義も、公儀御仕置に準じ取計ひ候樣との義、先年諸侯へ御觸も有之候間、若審かに御問合被成度義有之候はゞ、奉行へ御問合可然候、左候得者委細御承知可相成存候、

〔寶暦集成秘錄三十〕延享二丑年二月

寺社奉行
御勘定奉行　江

拷問者有之剋、立合之義、去々亥七月相達候、向後於牢屋吟味者有之節、拷問にかぎらず口問等之節も、立合之者差越、吟味之樣子申口、得ト承届候樣ニ可被致候、

二月

〔天保集成絲綸錄百一〕享和元酉年十一月

根岸肥前守御仕置相伺候、無宿小助儀、盜いたし候證據分明ニ候處、申陳不致白狀候間、不及拷問御仕置可申付哉與申聞候、此もの儀ハ、盜之證據顯然之事、其上入墨以後之盜ニも候得バ伺之通死罪ニ申付候得共、一體吟味筋之儀ハ、大切之事ニ而、拷問之品、御定書ニ被載候趣も有之候得バ、たとひ罪狀明白候とも、當人白狀不致候を、拷問ニも不及、御仕置申付候段は、容易ならざる事ニ候條、以來此例を引用候儀は不可然候、各此趣を被相心得、後來之流弊ニ不相成樣ニ可被致候事、

○又見ニ御仕置伺御下知留

〔御仕置例類集一ノ一〕文化十三子年御渡

水野主殿頭
永田備後守
筒井佐次右衛門　伺

一御目見以上之もの、親を殺候由相聞候得共、證據無之節、拷問申付儀ニ付評議、

當十九日、評議仕可申上旨御渡被成候、水野主殿頭、永田備後守、筒井佐次右衛門、御內意相伺候書面、井備後守差上候別紙とも一覽仕候處、元御鐵炮御簞笥奉行內方鐵五郎夫婦、變死一件、當四月朔日、御詮議被仰渡候ニ付、鐵五郎養子㥁領內方與八郎、井家來下女共、評定所江呼出吟味仕、風聞等相糺候處、與八郎儀、藏宿江罷越、鐵五郎名印之證文ニ而、金拾兩借受候趣相聞、藏宿淺草大護院門前、泉屋茂右衛門相糺候處、鐵五郎ゟ預り金貳百拾兩有之、與八郎江拾兩相渡候段も相違無之旨申立、右體預ケ金も有之處、別段金子借受候ハ、鐵五郎申付候儀共不相聞候ニ付、與八郎相尋候處、申口疑敷相聞候間、揚座敷江差遣、再應吟味仕候處、養父鐵五郎、取扱嚴敷難遂居、實家江も難歸、自害可致と存詰、實父西丸御切手番之頭長崎半七郎家來葛野良助江相咄候處、差留、左樣存詰候事ニ候はゞ、立退候方可然旨、良助申聞候得共、其儀ハ相斷、毒藥を呑可相果と存、毒藥調、呉候樣良助江相賴候處、金子差出候はゞ、砒礵石可調遣旨申聞候故、與八郎儀、鐵五

郎印判取出、白紙江印形致し候跡ニ而、金子借用證文ニ相認、藏宿茂右衛門方江持參、金拾兩借受、右之金子、良助江相渡候由申立候付、良助も召捕吟味仕候處、右之趣意申口符合仕、右毒藥相調候ニハ、四五日も日合有之、若其內藏宿ゟ金子借受候儀露顯致し候節ハ立退、良助兼而懇意ニ致し候、御小納戶竹本九八郎元家來丹羽專藏在所、濃州深萱村江罷越候積申合、其節路用ハ鐵五郎所持之金子取出し、立退可申旨、與八郎申聞候儀も有之候處、良助儀ハ、吟味中病死仕、專藏行衛之儀も、先達而申上、向々江相達穿鑿仕、備後守組同心共江、召捕方手當申付、精々相尋候得共、行衛相知レ不申、一體手續ニおゐてハ、與八郎疑敷相聞候ニ付、於牢屋敷度々嚴敷相尋候得共、鐵五郎夫婦を殺害致し候儀無之旨申張罷在候處、當八月下旬ゟ、與八郎儀熱病相煩、重體ニ而呼出等も難相成候ニ付、手當申付置候處、此節少々快方ニ罷成候得共、未嚴敷痛メ相尋候儀ハ難相成候間、此上全快致し候はゞ、猶嚴重相尋、理害等も申聞候上、彌白狀不仕候はゞ、御家人等例ハ是迄無御座候得共、此ものハ、謀書之儀白狀仕候もの之儀ニ付、前書之始末察斗申聞、拷問申付、若其上ニも鐵五郎夫婦變死之始末不申立候はゞ、無證據之儀ニ而、察斗詰ニも難相成候間、謀書之證文を以、藏宿より金子借受候始末吟味詰、吟味書差上候樣可仕哉之趣、幷備後守差上候別紙之趣ハ、鐵五郎夫婦變死ニ付、取留候證據無御座、容易ニ拷問ハ難仕候之處、與八郎儀、藏宿ゟ金子借受候節、前日鐵五郎ゟ之似せ手紙、葛野良助ニ爲認、無據要用之儀有之、金子拾兩程借用致シ度、一兩日中、證文爲持、侍可遣間、相渡候樣文通ニ而申遣置、翌日與八郎儀、謀書之證文持參、金拾兩借受候次第、養父子之間柄ニ而も、巧成致し方ニ御座候、御定書ニ、拷問可申付ヶ條之內、詮議之內不決、外ニ惡事分明ニ相知、其科ニ而死罪ニ可被行もの之事と有之候間、與八郎全快之上、疑敷次第察斗申聞、拷問申付候樣可仕候哉之趣相伺申候、

此儀御定書ニ、拷問可申付品ハ、人殺、火附、盜賊、關所破、謀書、謀判、右之分惡事致し候證據慥ニ

候得共、不致白狀もの、并同類之内致白狀候得共、當人白狀不致もの之事と有之、右御定書ニ、詮議之內不決、外ニ惡事分明ニ相知れ、其罪ニ而死罪可被行もの、右之外ニも拷問申付可然品も有之候はゝ、評議之上可申付と有之、然ル處、是迄御家人等、拷問申付候先例も無之、今般之鐵五郎養子惣領內方與八郎ハ、御目見以上之ものニも有之、殊ニ鐵五郎夫婦を殺害いたし候證據慥成儀、同類之內、白狀いたし候ニも無之、尤養父鐵五郎、取扱嚴敷難遂居、實家江も難歸、自害可致と、一旦存詰候得共、葛野良助差留候ニ付、毒藥を呑可相果と存、毒藥調與候樣同人江相賴候處、金子差出候はゝ、砒礵石可調遣旨申聞候故、鐵五郎印形取出し、白紙江致印形、跡ニ而金子借用證文相認、札差茂右衞門方江持參、金拾兩借受、良助江相渡候由ハ、良助も吟味之上、申口符合致し候趣ニ付、先例相糺候處、寬政九巳年、評議ニ御下ケ被成候、池田筑前守、火附盜賊改之節相伺候、小日向無宿平藏儀、盜致し候上、祖父之印形盜出し、右盜品質入致し候ものニ候處、評議之上、祖父壽清、質主之由申僞、錢壹貫三百文之質物ニ入候段、致謀書候ものにも似寄候得共、元來壽清ハ祖父之儀、他之印形を盜出し相用候ニも無之故を以、盜之本罪伺之通入墨之上重敲と申上、其通相濟候例有之、尤右例ハ盜物質入可致ため、祖父之印形盜出し相用候儀、此度之與八郎ハ、身分も違、殊ニ金子借受可申ために候上ハ、格別品不宜候得共、父子之間柄致し成候段ハ、聊右例ニも似寄、全之謀書謀判とも難申、併札差ゟ金子借請候儀及露顯候節ハ、立退候積、良助と申合、其節路用ハ、鐵五郎所持之金子取出し可申旨、與八郎申聞候儀も有之由、良助病死以前申立之趣等、一體之始末、疑敷相聞候得共、必定拷問可申付品とも難見極、去ル未年、評議ニ御下ケ被成候、松平兵庫頭御勘定奉行之節、御內慮相伺候、密夫ニ無相違相聞候得共、白狀不致、武州外田ヶ谷村甚兵衞儀、同村長左衞門女房きよと密通致し候段、無紛相聞、牢間都合三十四度申付候得共、野田等ニおゐて、名住所不存もの手

合ニ加リ、廻リ筒籤博弈、度々致し候趣而已申立、其余之悪事ハ白狀不致ニ付、廻リ筒籤博弈いたし候不届ニ而、中追放ニ相當候處、牢屋類燒之節放遣シ、立歸候ものニ付、本罪相當より一等輕く、江戸十里四方追放被仰付候上、佐州水替人足として差遣候樣取計可申哉之段相伺、評議之上、伺之通相心得、黃紙科書等取調、猶相伺候樣申上、其通相濟候例も有之候間、旁不及拷問、猶又此上得と利解爲申聞、彌白狀不致候はゞ、鐵五郎印形取出し相用金子借受、又ハ同人似せ手紙を良助ニ相認させ金子借用いたし、若露顯致し候節ハ、鐵五郎所持之金子取出、立退可申旨申合候、不屆之次第を吟味書差上候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

子十二月

朱書
評議之通濟

〔政談秘書三〕一人殺火附盗賊博弈一件之外、逆罪ニ相聞候者申陳候ハヾ、痛候テも相尋可申哉、

但人殺火附盗賊一件ニ而も、他支配私領引合候分ハ、其度々伺之上、私方江引請、吟味相伺候積りニ御下知有之候分も、其度々別段不及伺、痛候而も相尋候樣可仕事存候、

一出家社人虛無僧座頭之類ニ而も、前同樣、人殺火附盗賊博弈一件ハ、其品ニ寄、揚り屋遣置、私方ニ而吟味詰候分ハ、其度々不及伺、痛候而も相尋候樣可仕事存候、

御附札

書面本文但書貳ケ條とも、可爲伺之通候、〇年月不詳

〔東遷基業二十四〕板倉伊賀守勝重、去比より京中に觸て、他所より來る者僉議し、訴人する者は金銀を與ふべしと定めける故、國村彥左衛門と云者訴が、ゑかと、あやしき他所の者來るよしを申により、早速雜色を遣して、逐一に搦捕て拷問しければ、皆白狀して、大御所〇德川家康去十八日御出馬あるべしと聞えしかば、其御跡にて洛中を燒拂の支度なりしに、御出馬御延引故、かく露見し

ぬと也、

〔慶長日記〕慶長十七年六月八日、大鳥井逸兵衛と申かぶきもの有て召捕候、是は二三年以來江戸中の若キ衆、ならびひぢをはる下々迄、皆一味同心して、逸兵衛組と號し、一同の思ひをなし、互の血判の起請文書、其趣は、此組中何樣の事有レ之共、互に身命を捨、見つぎ可レ申候、縦親類父主にもおもひかへ、兄弟より顏母敷可レ有レ之と申合候、大將の分は、大風嵐之介、天狗摩右衞門、風吹散右衞門、下々組頭ハ、大橋摺右衞門と申者、江戸中に充滿して、所々に辻切不レ堪、破喧嘩及二數度一之間、御法度被二仰付一、下々左樣ノ者有レ之ば、召捕斷罪可レ被二仰付一由被二仰出一、爰ニ柴山孫作と申者ノ家來、右ノ組ノ小頭也、孫作聞て大に驚、脇ヨリ訴人無レ之中に令二成敗一可レ然と申、家來ノ者二三人に申付置、彼者を呼出し、手討ニ可レ仕と用意候へば、殘家來共、皆彼者ノ組に成、主にもかへまじきと申合、誓紙を書ければ、家來寄合候て、主ノ孫作を打切、欠落仕候間、是ヨリ猶以御法度强候也、方々の路次に關をするゝ、在々所々迄御穿鑿有、六月ノ末ニ、神田の町にて、夜五ツ過に、月夜に笠をきて通る者有、ふしぎと申て、町よりとらへて曳て來ル、見れば彼主を殺したる者也、則宿を尋て道具を取寄穿鑿候へば、一味の惡黨の名を書たる帳有、其類五百人餘也、大將ノ大鳥井逸兵衛を御尋候へば、宿は八王子に有、則召捕に遣候へば、高橋と云所ノ不動堂ニ相撲見物ニ行候間、則大久保石見守、八王寺の町奉行内藤平左衞門と云者、高橋へ行、謀て召捕ける、平左衞門も大力にて、逸兵衛も相撲の達者、互に取合、上下へかへすを、大勢寄繩を懸候て江戸へ引て參、青山權佐所に被二召置一、色々御穿鑿水火の責に及といへ共、同類を一人も白狀不レ申、此逸兵衛ハ、元來本多百助が小者にて、勘解由と申ていたづらなる悴也、〇中略江戸へ來、かぶき者の組をたて棟梁と成、終には如レ此、本多佐渡守、土屋權右衞門、米津勘兵衛方にて、色々推問いたし候へ共、一度申まじき由申候間、何ほど强御せめ候共、同類を申まじきとて一圓不レ申、水問又ハ臘をひしぎ候ても不レ申候間、米津勘兵衛、餘に申衆

候はゞ、屎をくれて問候へと申候へば、逸兵衛大に怒、侍たる者に左樣の拷問は前代未聞也、いかに罪科のおもき者成共、官人の尸は平土の上に不ㇾ置と聞に、是に依官人は、かばねの號有、侍は又侍の法にて、推問の作法有、扨々物を不ㇾ知奉行かな、左樣の問樣あらば、其方の子息勘十郎、我等同類也、勘十郎にも、屎水をくれて、とへと申て、其後閉口、聞人扨々此逸兵衛は、只者にあらずと皆舌をまく、其後逸兵衛は、江戶中引渡、磔に懸、同類皆成敗、三百人計被ㇾ切、此内無體に死ル者も有、

〔鳩巣小說中〕一權現樣御時、米津勘兵衛ト申人町奉行ノ時、山中源左衛門ト申者罪有ㇾ之捕へ候テ、同類御吟味ニテ、勘兵衛色々糺問致候ヘドモ、右源左衛門申候ハ、士タル者、糺問ニ臨ミテ同類ヲ白狀致物ニテハ無ㇾ之トテ、如何樣ニ糺問シテモ一言モ不ㇾ申候、最早手盡候ユヘ勘兵衛申候ハ、其分ニ仕置候ヘ、明日ハ糞問ニ可ㇾ仕ト申候得バ、源左衛門申候ハ、扨々其方ハ是非ナキ事ヲ申者ニテ候、士タルモノ糞ヲ食候テハ如何ニシテモ忍バレヌ事ニ候、此上ハ無ㇾ是非ㇾ事ニテ候、同類ヲ申スベク候、其方モ其心得ニテ如ㇾ此申モノト存候、同類ハ元第一其方ノ嫡子何某ニ候ヨシ申、其外同類ヲ差申候中ニ大庭殿トテ有ㇾ之候、(大バ樣大バドノト其時分申候、是ハ於ウバ殿ノアヤマリニテ可ㇾ有ㇾ之ヤト、新井氏申サレ候、)台德院殿下ヘ乳ヲ上申人ニ候、常々殊ノ外念比ニ、如ㇾ母被ㇾ遊候、此女中ノ子モ同ルイニテ、何卒御宥免ナサレ度被ㇾ思召候ヘドモ、御法ヲ破ラレ候コトナサレ難ク候故、右勘兵衛嫡子モ、大場ドノヽ子モ流罪ニ被ㇾ仰付候、

〔慶長日記〕慶長十八年十月朔日、諸大名大御所へ御禮有ㇾ之、同日自㆓大御所㆒里見讚岐守御改易、安房守伯父也、弓削多源七、久貝忠左衛門御勘當、これハ先年中村一角死去ノ時、爲㆓上使㆒被ㇾ遣、遣跡諸道具いかゞ可ㇾ仕旨江戶へ言上、幸大久保石見守、石州ノ金山へ下向ノ時分ニ候間、石見ニ可㆓相渡㆒旨、公方樣被㆓仰付㆒候由、自㆓老中㆒狀來間、大久保石見ニ渡、此事曲事ニ成、如ㇾ此、鵜殿兵庫助、就㆓此儀㆒改易、其身ヲ厩橋に被㆓預置㆒、種々拷問有けれ共白狀せず、繩にて身をからげ、上よりおろしあげ攻けれ共

不ㇾ申

一同月廿七日、兵庫日比懇志仕候、小野寺と申者申達けるは、侍たる者拷問に逢、命生て恥なしと申達る間、尤と存、兵庫自害して相果候、

〔窻の須佐美 三〕延享三年の冬、內藤越前守殿の組小普請土岐勘之助訴出けるは、本多縫殿右衛門と申者、大勢徒黨し逆心を企候よし申ければ、則召捕られし面々、御簞笥奉行高林鄕助、遠山三大夫、町奉行能勢肥後守殿一類宅へ呼て、尋の上揚り屋へ遣はし、本多縫殿右衛門が浪人にて、本多左京殿由緒有もの丶よしにて、扶持を助成して下屋敷に置れけるが、剛强の士なりければ、同心三十人押入しに、妻子を立退かせ、捕手三四人を投打けるが、終に捕はれ禁獄せられ、加納杢右衛門、横山定四郞、三好孫次郞、四谷安谷寺、高田馬場下楠戶宗本抔云醫師、日影の由にて、日々に礼明有りけれ共、曾て異心なしと申ける程に、拷問甚强かりける、楠戶宗本言けるは、斯ては近日死申べし、願はくは此事申出たる訴人と對決させられたまはるべしと申ければ、富士見御寶藏番永田權左衛門、並に土岐勘之助を召出して、引合せられし時、宗本高聲にて、權左衛門盜人めと呵りければ、恐れ隨體なりける程に、如何と尋られければ、宗本答て、彼は縫殿右衛門と某、多年合力仕、やうやう勘定役いたさせ候、唯今着用の服二ッながら、縫殿右衛門が服にて御座候、帶は某がのにて候故、とても御吟味可ㇾ被ㇾ下、其外合力相願候節、上下の紋所、地合等の注文、帶の地合、且異の事迄いち〳〵と申、數年合力の上、近頃又合力を賴候へ共、あまりおげ〳〵の事故、えせずして置候をうらみに存候て、無實の訴狀仕候と存候、亦某に徒黨を結びし段申候、然らば其者共の中、頭立候徒黨連署の者、姓名御聞下さるべく候と言しほどに、推問せられ候得共、無實の事なれば、壹人の名もこたへず、斯有て後訴人權左衛門、勘之助、兩人は斬罪、縫殿右衛門、同氏三郞父子、遠島に處せられ、其余は盡く免しかへされぬ、無實の故と聞えし、

〔嘉永明治年間錄 四〕安政二年三月廿七日、贋金製造ノ罪人明吉、獄中謹愼ニ依テ、罪一等ヲ減ズ、

越中國堀岡新村百姓傳吉伜明吉卯三十二御仕置、右明吉儀、贋金致し候に付、弘化三年入牢、二十四箇度拷問、一昨年終に白狀、不屆に付、死罪可申付處、於牢內囚人をいたはり、病人介抱行屆、死人も少く、且牢內取締も行屆候に付、宥免を以て遠島に行はる、

婦女拷問

〔牢獄秘錄〕於牢屋敷拷問之事木役加役ハ、自分屋敷ニ而拷問する也、

一女之拷問者有之といへ共、兩方ゟ敲かれ候事にて、大概者申上るもの也、石を抱候程の强盛成科人者少き也、此節之事なりしに、御代官三河口八歲妻とみといふもの、强盛にて委細に不申上、石を三枚迄抱、氣絕すといへ共、何事も不申上、餘程まれ成る强盛之女なりと其頃言あへり、

〔政談秘書三〕一文政五午年八月九日、御勘定奉行石川主水正樣江差出候處、同十一日御附札、

逆罪死罪ニも及不申與存候程之惡事致候女、一通之吟味ニ而ハ白狀不致候、然ル處右女懷妊仕居、月數五ヶ月ニ滿申候、右體之者、拷問吟味仕候而も不苦儀ニ御座候哉、又ハ出產爲致、肥立候後、拷問吟味仕候義ニ御座候哉、且出生之小兒ハ、領分中ニ候ハヾ、村預申付置可然候儀ニ御座候哉、此段御問合申上候、以上、

黑田豐前守家來　大森惠助

御附札 書面懷妊之女、嚴敷責問候儀、出產致し肥立候上ニ而御申附可然、且出生之兒養育之儀ハ、身寄等引等之者引受、養育致度旨申立候もの有之候ハヾ、格別、左も無之候ハヾ、孰れ責問肥立候上之事故、小兒も母ニ添、入牢等御申付被置可然儀と被存候、

駿河問

〔消閑錄〕曾根甚六と云へるものゝ妻は、至て美貌にして淫婦なりしが、其事あらはれて罪せられたり、其ことを問はるゝとて、南町の屋敷にて、駿河問狀にかけられたり、此するが問と云へるは、縛したる繩を高く木の枝に引下げ、よりかけてはなす時は、くる／＼とまはりてより返るゆゑ、苦しみ堪がたき事とぞ、終に其事に連坐せる者二十餘人罪せられ、淫婦ハ袴塚に梟首せられ

水責
木馬責

しに、髮長くして獄門臺より地にいたりしといふ、

○按ズルニ、曾根甚六ハ、水戸藩ノ士ニシテ、寛永頃ノ人ナリ、

〔慶長見聞集〕六大島一兵衛組の事

見しは今、大島一兵衛と云若き者有、士農工商の家にもたづさはらず、當世異樣をこのむ若黨と伴ひ、男のけなげだて、たのもし事のみ語り、常にあやうき事をこのんで、町人にもつかず、侍にも非ず、へんふくの人なり、○中略爰に逢坂九兵衛と云人、たくみ出せる駿河ざひとて、四ッの手足をうしろへまはし、一ッにくゝり、せなかに石を重荷にをき、天井より繩をさげ、中へよりあげ一ふりふれば、たゞ車をまはすに似て、總身のあふらかうべへさがり、油のたる事水をながすがごとし、一兵衛今ははや目くれ玉しゐもきえ果ぬと見えければ、すこしいきをさすべしと、繩をおろし、ひとひへ水をそゝぎ、口へ氣藥を入、扨もかひなし、一兵衛同類をはやく申せ、いはずんば又あぐべし、なんぢせめ一人にきすといへば、其時一兵衛いきの下より、あらくるしや、かなしや候、いかなるせめにあふとても、おつまじきとこそ存ずれ共、此駿河ざひにあひて、いかでいはでは有べきぞ、それがし知人數しらず、先紙を百枚帳にとぢ持來り給へ、同類殘なく申上書付べし、云、望のごとく帳をとぢ筆取出て、扨同類はと問は、一兵衛が存知の人々を殘なく申べしとて、日本國の大名衆をかぞへたつる、御奉行衆聞召とふにたえたるいたづら者、先禁獄さすべしと引立篭に入る、もんせんの言葉に、むかでは死に至れどもうごかずといへるは、此者の事也と諸人云あへり、

〔切支丹來朝實記〕切支丹宗門は、永祿十一年より天正十三年迄、凡十八年之間繁昌しけるが、秀吉公の天下と成り、終に此宗門を破滅し給ふ、○中略其後寛永三年の比、近江丹波などにて、六十六部のやうに出立て、鏡を見せ物をあたへなどして、此宗旨を勸めありくもの有り、依之又此宗旨の

者多く成けり、其比京都にて板倉伊賀守勝重、吟味を懸らるゝといへども、命を捨ておもひ入たる愚人共多し、然に關東ゟ大久保相模守、切支丹吟味役として上洛有、彼の宗門の者共を悉く捕へ、俵に入れ五所縄にて結び、首計り出し、四條五條の河原へ出し、改宗するものは助くる也と役人共一々申聞せけれども、初の程は聞き入れず、〇中略扨て大坂にて改宗せざるもの三人有、内一人ハ、富田にて錺屋七兵衞逆はりつけ、八右衞門同罪、高麗橋のもの青物や惠七、〇惠七、南蠻寺興廢記作德吉、水責にて死す、

〔今井彥右衞門家之覺書〕關原御陣前上總介樣〇松平忠輝ト陸奧守正宗御緣組相調候事

一秀吉公御他界之以後、御大名之婚姻停止之旨御遺言之由、然處權現樣御內意ニテ、上總介樣ト正宗緣組之義、宗薰相調候ヘト被仰付候故、畏御請申上、則首尾相調申候、此義隱無之候付、大坂之五奉行前田德善院、淺野彈正、增田右衞門、石田治部少輔、長束大藏、宗薰ヲ召出之、僉議之上被申候は、太閤御遺言ニテ、諸大名之嫁娶堅御制禁之處、汝其規戒ヲ破リ、此度緣組調候事、極罪難計、但汝一人之智惠ニ不可有之、指圖之方相談之徒可有之、具ニ可申上之由被申候、其時宗薰申候ハ、無正體老法師之義ニ候得バ、御法度之義モ不辨、故障ヲモ不存申調タルニテ候、御差圖之方相談之徒一人モ無之候、此義老法師之罪過ニ候ハヾ、如何樣共可被刑罰候由申候、滿座口々ニ被詰問ケレ共、其後ハ無言ニテ垂頭罷在候、其時石田治部少輔怒曰、宗薰、汝僞ヲ構實事ヲ於不申ハ、水ヲクレ可令拷問之條、早速白狀候得ト被申候、宗薰承リ、始ハ敬而跪在ケルガ、膝ヲ廣ゲ平座シテ申候ハ、治部、汝我ニ水ヲクレヨ、我汝ガ爲ニ呑ベシ、抑侍タルモノ、云間敷事ヲ、水ヲクレタレバトテ云モノカ、汝ハ言ヲ失セル者哉、汝我ニ水ヲクレヨト、手ヲ膝上ニ置、肱ヲイカラシテ申ケレバ、其時列坐ノ衆中、內々宗薰贔屓之方有之人立隔、宗薰不申々々トテ、手ヲ執リ引起被申候故罷出、直ニ伏見ヘ忍登リ申候、

大貴

〔月堂見聞集 十一〕閏十月〇享保三年十九日朝六ツ半に、大坂御屋敷にて、今度長崎表抜買之者に被ㇾ爲ㇾ仰付候趣、〇中略

長崎安右衞門

右ハ當四月、國元へ被ㇾ送候由、大坂にて水せめ、木。馬。せ。め。、さまゞ〵のせめにあい候へ共、おち不ㇾ申候由、

京 堺屋權右衞門
大坂 小西又兵衞
同 小倉や善右衞門
同 あかしや彌兵衞

右四人之者共、一二度ヅヽ、水せめにあい申候由、

〔邪蘇天誅記 下〕一寛永二乙丑年、肥前ノ國高來郡島原ノ城主松倉豐後守重政、私領高來ノ村々吉利支丹宗門稠シタ詮議セシメ、札明ノ上ニテ、本宗ニ立復ル輩ヲバ赦宥シ、邪宗ヲ故路備(コビ)ザル族ヲバ、種々重刑ニ行フ、〇中略深江村庄屋甚平、是モ溫泉ノ熱湯ニ沈メラルベキニ究リタル處ニ、此程灸籠ニ載セテ强ク責ラレ先達テ死タリトゾ、

〔邪蘇天誅記 下〕一寛永四丁卯年、長崎御奉行水野河內守、長崎表ニテ吉利支丹宗門詮議アル處ニ、彼宗門ニ拘泥シ、本宗ニ立復ルマジキ由申ス奴曹三百四十二人アリ、關東ノ御下知ニ依テ、肥前島原ノ城主松倉豐後守方ヘ相渡サレ、責懲ヲ加ヘシム、重政仰ヲ奉、水問、拷問、火攻、牛攻、品々ノ攻具ヲ用ヒ、種々ノ縊責ヲ加ケレバ、民賊ドモ各宗門ヲ故路備テ本宗ニ復シ、助命セラル、

〔蘭使日本紀行 十一〕殊ニキリスト徒、或ハ懺徒、裁判所ニ於テ拷問スルトキ、或ハ足ヲ掛ケ、身ヲ倒ニシテ井中ニ低レ、血ヲ擠ル爲ニ足ヲ井上ノ柰ニ繫ギ、柰傍ニテ一方ニハ火ヲ燒キ、一方ニ

ハ吹流ヲ飄ス、此旗ハ夜ハ退ケ、晝ハ之ヲ出ス、而シテ罪者死スルカ、或ハ燒クルニ至ル、更ニキリスト徒ノ近鄰左右各三家共ニ死ニ處セラル、婦女小兒タリトモ敢テ許サズ、多クハ左肩ヨリ右臂ニ向テ斜ニ劊スルナリ、

鉛責

〔甲子夜話　一〕吾師皆川子ノ話タルハ、天川屋儀兵衞ト淨瑠璃本ニアルモノハ、其實尼崎屋儀兵衞ト云テ、大坂ノ商估ニシテ、淺野内匠頭ノ用達ナリ、大石内藏助復讐ノ前、着込ノ鎖帷子ヲ數多ク造タルコトニ預リシガ、町人ノ武具用意ト云風聞アリテ、官ノ疑カヽリ、呼出テ吟味アレドモ、陳ジテ言ハズ、後ハ拷問スレドモ言ハズ、終ニ其背ヲサキテ、鉛ヲ流シ入ルニ至レドモ白狀セズ、アマリニキビシキ拷問ニヨリ、死セジトセシコト幾度モ有シトゾ、然レドモ白狀セザレバ、久シク囹圄ニ下リ居シガ、江戸ニテ復讎ノコトアリト牢中ニテ聞及ビ、儀兵衞改メテ申ニハ、追々御吟味ノコト白狀仕度トナリ、乃呼出テ申口ヲ聞ニ、ソノ身淺野家數代ノ出入ニテ、厚恩蒙シ者ナリ、彼家斷絶ノ後、大石格別ニ目ヲカケ、一大事ヲ某ニ申含、江戸ニテハ人目有トテ、此地ニテ密ニ鎖帷子ヲ造リタリ、全ク公儀ヘノ野心ニ非ズ、ハヤ復讎成就ノ上ハ、何樣ニモ御仕置奉願ト云ケル、之ヲ聞テ奉行ヲ始メ其場ニ有リアフ人々、皆涙ヲ流サヾルハ無カリシトナリ、因テ赦サレテ、獄ヲ出テ家ニ歸リ、殊ニ長壽ニテ、年九十許ニテ沒セシトゾ、時人往時ヲ語ル序ニハ、是見ラレヨ迚、肌ヲ脱グニ、背ニ鉛ノ殘リタルモノ一星二星ヅヽ、肉ヲ出テ有リ、觀ルモノ身毛タツヤウニアリトナリ、

詰問

〔家忠日記增補〕慶長七年、車丹波守、其子所左衞門尉、馬場和泉守、其子新助、大窪兵藏等首將トシテ、佐竹浪人ヲ招集、一揆ヲ企、水戸ノ城ヲ窺フ、于時大窪兵藏ガ家人、潛ニ城中ニ忍入ラントス、松平五左衞門尉ガ番所ニ於テ、是ヲ生捕テ詰問スル所ニ、彼レガ懷中ヨリ一揆ヲ企ルノ回文ヲ索メ得タリ、

〔聞訟秘鑑〕一口書詰文言之事

是ハ御叱り、急度御叱り、手鎖過料等ニ可成と見込候分ハ、不束或ハ不埒と認、所拂追放等ニも可相成ものハ、不屆之旨と認、死罪ニも可及ものハ、不屆之旨事請御吟味候而ハ無申披奉誤入候と認候由、其餘重キ御仕置ニ可成者ハ、其節詰方可承合事、

但不埒詰ハ、勿論不屆と認候者も、重々抔とは容易ニ不詰事、

〔聞訟秘鑑〕口書詰文言ニ重々と認候事

是ハ盗可致工ニ而所々江火を掛候カ、又ハ死罪にも可相成悪事を致逃去、又は先々ニ而重キ悪事を致候者吟味之節ハ、重々不屆と認、都而一旦之咎ニハ、重々とハ不相認申之事、

但輕キ悪事ニ而も、罪數有之節ハ、旁不埒と認可然事、

〔牢獄秘錄〕爪判之事

一町奉行所にて委細白状に及び、口書差上候時、爪判致候者有之、又強盛にて委細に不申上故、吟味所にて拷問にあふ事也、右拷問にて委細白状に及び彌右之口書ハ相違無之哉と吟味役ゟ申候時、科人相違無之と申時ハ、右口書相認メ、其末ニ只今迄御公儀之御仕置を遁んと存、申隙し候得ども、此度白状に及候通、少も相違無御座候と書、年月日の下へ名を認メ、此下へ爪判手錠之儀にて、おやゆびの爪判を押也、押し候事也、又横道なる科人ハ、一日も此爪判を遁んと存、爪判相済候時は、間もなく死罪に行るる事ゆへ、一日もおそく爪判を致さんとする也、白状ハ仕候得ども、今日ハ爪判ハ不仕といふ時、吟味役、何故判を致さぬやと言、科人今日ハ不仕と答ふ、此事三四度に及ぶといへども、先今日ハ不仕といふ故、其日ハ爪判を遁す也、是爪判致候得バ、其次之呼出しハ死罪に成る故に、成丈のがれんと存、爪判も其日ハ申ぬけし也、其次之呼出しにハ、爪判是非いたし候はねば成らぬ事ゆへ、依之一日之呼出しハ、先病氣と稱し僞り、彼是と十四五日も爪判を延し、生延んと工夫する也、

一死罪、遠島之外、敲之罪位にてハ爪判に及ばぬ也、

〔書留〕申渡、尋書、○中略

口。合。

其方儀、申口之趣、口上書口書江印形いたし差出候通、相違無之哉、

但歸村申付ル

其方儀、牢屋敷ニおゐて差出ス口書江奥書申付處、爪印いたし差出通相違無之哉、

何
何月

〔市尹秘錄 一〕吟味方勤方之事

寛政十午年書出

一公事出入吟味者御渡被成候得者、手繰次第、幾口ニ而も呼出、○中略品輕者、口。合。ニ不及、落着被仰渡候、御仕置伺ニ相成候分者勿論、少も入組候品は、一件口合御聽被成候上、落着被仰渡候、

〔市尹秘錄 二〕雜人口書ニ掛リ奉行、殿文字認來リ候處、樣文字ニ相成候事、

一雜人口書前科等、誰殿懸と認來候處、以來樣文字相用候積、寛政十午年十二月六日、根岸肥前守於內寄合極ル、

〔御仕置例類集 二ノ二〕文政二卯年御渡

一火附盜賊改ニ而武家之家來吟味之儀ニ付評議

大貫次右衛門御代官所、武州荏原郡北品川宿地內におゐて、當六月廿六日、松平出羽守家來黑谷源助幷ニ中間與助致變死候段、右宿役人共ゟ次右衛門方江訴出、同人方ニ而相糺候上、申口符合不致儀有之、土屋讃岐守御勘定奉行之節、同人方江差出候儀、次右衛門申聞候處、同郡品川步行新宿一丁目ゑひ下男半七儀、怪敷筋相聞候由ニ而、長井五右衛門廻之もの、召捕糺の上、出

誤證文

羽守家來武井源助儀、外一人を及殺害候哉ニ相聞候由ニ而、五右衛門方江、右源助呼出、吟味取掛り候趣に付、宿方江預ヶ置候品、并ニ檢使之節取置候口書類引渡方之儀、讃岐守相伺候處、右は五右衛門より申上置、吟味取掛候ニ付、宿方江預置候刀脇差、并口書類引渡、已來之儀、一座評議之上取極可申上旨、讃岐守江被仰渡候、

〔公事手留〕奥書

前書於場所、吉川榮左衛門樣御手代中江差出候口書、猶又御讀聞被遊候通、少茂相違無御座候段申上候ニ付、被仰聞候者、親久左衛門手前ニ罷在候砌、同町清左衛門娘みと密通いたし候上、同人を誘引出候所、追手之ものに被差押、兩人共一旦宿元江立歸候得共、右體面皮ヲ失ひ、土地之住居茂難相成候迚、猶又壹人欠落いたし、上州邊江罷出候途中、松井田宿小間物商人金藏と名前僞、同國高崎宿旅人宿善五郎方ニ留守中、同宿爲泊合候、小間物商人和之助持參之荷箱を夜中竊ニ持出し、右箱ニ入有之候金四兩、并鼈甲櫛簪笄類、都合百一品盜取逃去、右之內四拾一品者、代金拾四兩貳分餘ニ賣拂、酒食等ニ遣捨、殘之品者、すぎ外一人江與遣、又者所持いたし罷在候始末、不屆之旨御吟味、更無申披奉誤入候、依之奥書を以申上候、以上、

未二月朔日　　久藏

御奉行所

榊原遠江守殿留守居　　石川主水

〔御定書百箇條〕誤證文押て取間敷事

元文五年極

一相手不致得心、押而誤證文取間敷候、假令誤證文差出候とも、其證文に不拘、理非次第に裁許可仕事、

〔科條類典下一〕享保五子年八月

誤證文之儀御尋ニ付申上候書付　評定所一座

公事相ニ付、誤リ證文爲致候儀、其公事相之道理決斷いたし、得心之上、裁許申付儀候得者、向後ハ誤リ證文ニハ及間敷哉と思召旨、奉承知候、

一只今迄公事相詮議之口書之内ニハ、吟味詰候所を誤リ候旨、文言に書入申儀も御座候、誤リ證文と申儀者、奉行所ニ而ハ取不申候、

右之通ニ御座候間、誤證文、向後彌取間敷候、尤相障候儀無御座候、以上、

八月　評定所一座

〔享保集成絲綸錄四十四〕享保七年二月

三年以前子七月、大御番稻垣長門守與力隱居鄉町源里儀、質之取扱いたし、中責などの樣成儀致候故、侍ニ不似仕方と申候て、源里追放之節、誤證文申付候處、追而御吟味之品有之候節、源里誤無之品ニ相成候、就夫畢竟吟味能詰候得者、誤證文ニハかゝはらざる儀ニ候との御事ニ而、左之通三奉行江申渡候、

向後誤證文取申間敷候、若御代官などの類、其外支配方ゟ出候誤證文ニもたれ不申候樣ニ出候而も見不申、理非次第ニ候、文言之末ニハ有之候共、誤證文ハ取申間敷候、其段御代官などへ知せ候樣ニとの御事ニ候、

右之通ニ向後被相心得、證文取申間敷候、以上、

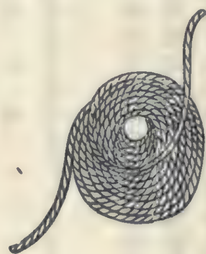
二月

右之通向々江可被達候

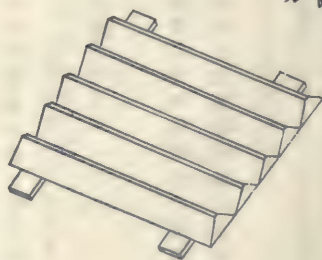
〔刑罪大秘錄〕牢問之事

〔律諸用秘集〕

苧縄太サ壹寸五分廻り程
四尋半程



松薪三角之角ヲ取五本並如圖
三寸貫へ打付ル

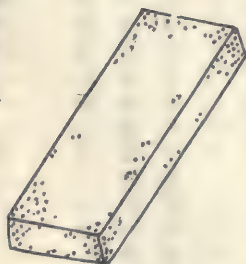


箒尻

持所三寸餘白かは巻中へ
割竹二本入如此麁苧より
みて巻



伊豆石
目方拾壹貫目程



一苧縄 太サ一寸五分廻リ程、長サ四尋半ホド、

一箒尻 太サ三寸廻リ程、長サ一尺九寸程、

但眞ン割竹二本、麻苧ニ而包ミ、上を觀世よりニ而卷、持所江ハ白革をまく、

〔牢獄秘錄〕敲棒之事

一敲棒ハ、ホウキジリトいふ、敲拷問之時打棒也、年々彈左衞門ゟ獻上すと云、去ながら彈左衞門ゟ獻上之棒ハ役にたゝぬゆへ、打役之者、自分入用にて是を拵る也、此棒中へ竹をわり入、革にて包卷、その上をかんぜよりにてまく也、昔ハたかぼうきのしりにて打候故、當時も是をほうきじりといふならんと聞たり、

附斷罪

德川時代ノ斷罪ハ、極メテ委曲周到ニシテ、其行決ニ當リテハ、定書ニ據リ、先例ヲ考ヘ、或ハ二者ヲ參酌シテ之ヲ定メ、其疑獄ニ係レルハ、或ハ之ヲ學者ニ問ヒ、有司再三審議シテ、然ル後上司ノ指令ヲ請フ例ナリトス、

〔棠蔭秘鑑貞朱書〕寶曆十辰年四月十二日、松平右近將監殿御渡、

三奉行江

御仕置相伺候節、御定ニ相當候御仕置之分ハ、黄紙ニ御定之通何可ㇾ申付と書加可ㇾ被ㇾ差出旨、去ル寅年相達候、自今は御定ニ當リ候分は勿論、例ニ而相伺候と申儀、幷評議ニ而相伺候分も、如何樣之評議ニ而相伺候と申儀、書付可ㇾ被ㇾ差出候、

四月

〔德川禁令考後聚八法曹事務〕裁許例 ○中略

律ニ明文ナク、類例ニ準則ナク、亦先例ニモ比況ヲ見ザル裁斷ノ如キハ、蓋和漢古典ニ準據セ

評定所斷罪

シ也、

〔棠蔭秘鑑 貞 朱書〕明和九辰年十月十二日、田沼主殿頭殿、能登守 大隅守 對馬守 江御渡、評定所一座江

都而御仕置被相伺候節、仕來之通、御定書之名目致相當候分は、御定之通と相認、元例ニ致相當候科ニ而も、御定之名目ニ違候分は、御定之通と不認、譯書を以可被相伺候、

右之通一統相心得、區々不相成樣可被致候、

〔彈正凡例 乾〕寛政二戌年十一月、丹波守殿御下知、

評定所一座掛

一上州山田橋村次郎右衛門相手、同國藥地村吉五郎外三人變死出入吟味、

加藤取貢知行 上總國市原郡藥地村 名主 忠藏 ○中略

御仕置附

右御定書ニ、變死幷手負候ものを隱置不訴出、其外病人等隣町江送遣候ニおゐて者、店借、地借、地主とも、過料錢五貫文、五人組過料錢三貫文、名主役儀取上、過料錢五貫文と有之、此もの儀、豐次郎變死之樣子疑敷候處、吟味願も不致、其上次郎右衛門より吟味願之儀掛合候節も、等閑ニ致置、死骸見出候節、取計不行屆、段々不埒も御座候間、右御定ニ准じ、役儀取上、過料錢五貫文と御咎附仕候、

〔御仕置例類集 一ノ三十六〕文政三辰年御渡

火附盜賊改蒔田八郎左衛門伺

一元非人、當時無宿彌兵衛事源藏、人ニ疵付盜いたし候一件、

元非人當時無宿彌兵衛事 源藏

右之もの儀、先達而敲相當、穢多頭彈左衛門江引渡相成候後も、盜不相止、本町通ニ而、往來之女差居候、銀髮差拔取、賣拂代金錢不殘遣捨、剩久兵衛儀、金子多分所持候趣及承盜入、若見咎候はゞ打殺可申と、往來端ニ有之鬭石を拾取、手拭ニ包持參、雪隱屋根江傳ひ上、板塀忍び返之釘を折曲、物干江出、緣頰障子押外シ這入候處、同人悴萬吉、幷女房ひさ、目覺見咎候迚、右石ニ而、百會ゟ面部江懸、數ヶ所打切疵爲負、品者不得盜候得共、右始末不屆至極ニ付、獄門、

此儀、先達而致盜敲相當、穢多頭彈左衛門江引渡相成候後、途中致盜候科も御座候へ共、久兵衛方江盜ニ入、若見咎候はゞ打殺可申と、欠石を手拭ニ包立入、萬吉外壹人江、右石ニ而疵付逃去、品者不得盜ものニ有之、

御定書

一　盜ニ入、刄ものに而人江疵付候もの、　盜もの持主江取返候共　獄門

一　盜に入、刄ものに而無之、外之品に而人に疵付候もの、　右同斷　死罪

右之通御座候間、科條類典をも相糺候處、外之品ニ而疵付候もの之儀者、巨細之譯不相分候得去、刄物ニ而疵付候者、家內之もの可切殺心底ニ候間、疵之多少ニよらず、此類は獄門と有之、今般之源藏儀、見咎候はゞ可殺心底ニ而、欠石を手拭ニ包持參、右石ニ而疵付候上者、刄物ニ無之候迚、御仕置弛可申筋ニ無之、尤品者不得盜候得共、前書御定肩書ニ准、是又無差別伺之通獄門、

去辰十二月廿二日、評議仕申上候、壽田八郎左衛門相伺候、元非人當時無宿源藏御仕置當之儀、疵付候品、刄物ニ者無之候得共、可殺心底ニ而、欠石を持參候上者、刄物ニ而疵付候もの、御定之通獄門と申上候處、御別紙奧州田口村吉次郎儀、最前ゟ人を縊殺、金子可盜取と、杭木を以打掛、又者繩ニ而首を卷可〆殺と迄致候心底者、此度之源藏、若も見咎候はゞ、可打殺との心底ゟも不屆ニ有之候處、死罪に相成候、盜ニ入、刄物ニ而無之、外之品ニ而人ニ疵付候もの、死罪の御定も有之、人殺

之ヶ條ニ、自分之惡事可顯を厭ひ、其人を可殺と致疵付候もの死罪、切殺候はゞ獄門と有之、其外可殺所存ニ而疵付候もの、不得殺時者、一等弛ミ候御定も有之、尤事實心底ヲ以可論者勿論ニ候得共、此度之源藏も、致手強方とは乍申、前書之吉次郎とも可見合ものニ者有之間敷哉、今一應評議仕可申上旨、例書御添被仰聞候、

此儀御書取之御趣意ヲ以、再應厚評議仕候處、御別紙例之奥州田口村吉次郎者、隣家利右衛門を縊殺、所持之金子可盗取と仕成候得共、利右衛門儀、幸ニ疵も請不申候間、右御仕置附ニ、疵付候も同樣之趣意ヲ以、盗可致と存、人ニ疵付候もの死罪之御定江引付候趣ニ有之、今般之元非人、當時無宿源藏者、先達而敲相當穢多彈左衛門江引渡ニ相成、盗惡事不相止、其上久兵衛方江盗ニ入、見咎候はゞ可殺心底ニ而、欠石を拾ひ取、手拭ニ包持參、雪隱屋根江傳ひ上り、板塀忍返し釘を打曲、物干江出、障子を押外し這入被見咎、久兵衛女房ひさ江、數ヶ所疵付候ものニ而、品者不得盗候共、忍入之所業而已ニ而も、死罪者難遁ものニ有之、剩ひさ江數ヶ所疵爲負候始末、深キ巧無之候共、盗ミ再犯之ものニ付、不斗之出來心と者難申、併可殺心底所を以論候時者、似寄候ものニ付、御定前ニ、自分之惡事可顯ヲ厭ひ、其人を可致殺害としつゝ、疵付候もの死罪、切殺候はゞ獄門と有之候御定江寄、御仕置決定可仕哉之處、人を殺致盗候もの、引廻之上獄門と之御定ニ付、盗筋ニ寄リ候御仕置者、自然差別有之、其外可殺所存ニ而疵付候もの、不得殺時者、一等弛み候御定も御座候へ共、是又盗筋ニ而之罪狀江者難引當、右二ヶ條之御定江寄り候而も決定仕兼候、猶先例相糺候處、相當之例相見不申、前書吉次郎儀、疵者不附候得共、疵付候もの同樣の御仕置ニ相成候儀ニ付、今般之源藏、刃物ニ而無之候共、可殺心底ニ而疵付候上は、刃物ニ而疵付候もの、御定ニ准ジ候方、吉次郎御仕置と趣意は同樣ニ可有御座哉ニ付、先達而評議仕申上候通、科條類典之御趣意ニ基キ、獄門ニ而相當可仕哉ニ奉存候、

據先例斷罪

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ十二〕寛政十午年

加藤玄蕃掛　　鐵砲洲無宿　五助

死罪

無宿ニ成、淺草御藏前ニ而町人體之もの江行當口論いたし掛ケ、右紛レ懐中之羽折拔取、右品所持いたし、又は同所觀音地内ニ而金錢入候鼻紙袋拔取、其外所々人立場ニ而、腰錢袂錢拔取候分とも、都合金壹兩、南鐐銀七片、貳貫五百文程途中之盗いたし、不殘酒食ニ遣捨候段、不屆ニ付、敲與相伺、

評議

此儀吟味書之趣ニ而は、夜中往來にて、町人體之もの懐中之羽折拔取可申ト存、行當口論いたし掛ケ、右紛レニ羽折拔取候者ニ御座候、明和九辰年評議ニ御下ゲ被成候、石野藤十郎火附盗賊改之節申上候川越無宿捨助事馬次郎儀、非人小屋欠落いたし無宿ニ成、所々人立場ニ而腰錢、袂錢拔取、又は町屋鄽先ニ而度々錢盗取、其外本所六ッ目邊ニ而、在方ゟ物買ニ出候體之ものゝ江突當口論いたし掛、度々錢を奪取候段、重々不屆至極ニ付、獄門ト相伺、評議之上死罪ト申上、其通相濟候例に見合、死罪ト申聞之、〇下略

〔御仕置例類集一ノ十〕文政七申年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一淺草福富町貳丁目與兵衛店傳藏盗致候一件

淺草福富町貳丁目與兵衛店　傳藏

右之もの儀、當七月以來、盗可致與町家居宅境之開戸錠おろし有之候ニ付手を掛引拔明ケ道入、

参酌定書先例而斷罪

又は板囲を引放立入、両度共家内寐鎮り候様子を考、居宅後ロ壁を木切ヲ以突破り、手を差入木舞竹を折、内ニ有之反物其外共五拾七品盗取、右之内五品は取落シ、貳拾七品者所持いたし、貳拾五品質入又は賣拂、都合金四兩壹分貳朱錢百六拾文、不殘暮方雜用等ニ遣捨候始末、不届ニ付、死罪、

此儀御仕置附ニ、榊原主計頭申上候例、并寛政六寅年曲淵甲斐守御勘定奉行勤役之節、伺之上御仕置申付候、無宿長次儀、百姓家裏庭口ゟ有之戸之板を引放、手を差入、半櫃之内有之候木綿衣類三品、錢五百文餘盗取、壹貫三百文餘ニ賣拂遣捨、又者板鼻宿ニ而旅人酒ニ酔致熟睡居候を見請、右之もの帯居候脇差盗取、其外商人屋鋪ニ差置候草鞋盗取候段、不届ニ付、死罪申付候例をも見合伺之通死罪、

朱書
評議之通濟

（御仕置例類集一ノ九）文政三辰年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一松島町十兵衛店龜次郎方ニ居候鐵藏儀、金子を添貰受候小兒を殺候一件、

松島町十兵衛店龜次郎方に居候
鐵藏

右之もの儀、困窮ニ而難給續候迚、金子を添小兒を貰請、右養育料暮方手當ニ可致と、女房たけを乳は出不申候得ども、金子添かねを貰請養育致罷在候處、猶養育料可貪取と、かね養育候儀は押隠、無間も粂松江金壹兩壹分相添貰受候處、同人義持病ニ虫氣有之、晝夜共泣叫、相宥候得共不相止候ニ付心憎く存、時々火吹竹等ニ而強致打擲、面部其外疵付候處、當正月二日粂松義熱氣有之泣叫候間、同人を殺候上小兒を貰受、養育料可致德用と、拳ニ而粂松顔ゟ頭江懸強致打擲候上押殺、右養育料不殘暮方雜用ニ遣捨候始末、人情ニ有之間敷不仁之至、不届ニ付、死罪、

此儀御仕置附ニ、榊原主計頭申上候例之森本吉左衛門は、小太郎江金子を添貰候共、右は八年已前之儀ニ而、實子出生致候ゟ事起、小太郎を殺候者ニ付、猶先例相糺候處、明和六酉年評議ニ御下被成候、大坂町奉行相伺候河州久寳寺村茂兵衛女房よね義、養娘とら病身ニ而養育難仕、其上腹瀉致、度々腰湯爲致候處、面倒ニ存候迚、病氣差發相果候樣ニと、とらを熱湯ニ漬、既相果候處剰怪我之趣ニ申僞候段、不屆至極ニ付、獄門と相伺、評議之上死罪と申上候例有之、右例之よね義、とらを差戻病身ニ無之女子を貰可申と存候得共、養料可相返手段無之故殺候趣ニ付、最初ゟ養育料德用可致と貰請候儀とは不相聞候處、此者吟味書之趣ニ而は、兼松を貰請候節證文差入候得共、素々養育料德用可致と仕成候儀ニ而、既かねを養置候儀は押隱、兼松江金子を添貰請候者ニ付、養育之上、往々介抱可受ため貰請候とは譯違ひ候間、於實事ニ實子養子を殺候親方之もの、利德を以殺候はゞ死罪と有之御定ニ見合可然とも治定難相成、兼松を殺候段は、金子を添捨子を貰ひ、其子を捨候もの引廻之上獄門、但切殺〆殺候ニおゐては引廻之上磔と有之御定但書ニも紛敷候間、得と勘辨評議仕、猶又先例をも相糺候處、去々寅年荒尾但馬守大坂町奉行之節相伺候、無宿辨吉儀、小兒を貰養育料錢掠取可申と、最初ゟ相巧、藤八申合、卯兵衛當歳之娘たみを、一生不通之相對を以藤八ニ爲貰請、養育料錢分取候上、同人倶ニ右たみを捨候段、不屆ニ付、死罪と相伺、評議之上、捨子を貰候而捨候とは聊差別有之可然旨を以、獄門と申上候例有之、今般之鐵藏も、捨子を貰候ニは無之、金子を添貰候子を殺候ものニ付、例之辨吉引廻シニ不及獄門ニ相成候ニ見合、前書御定但書とは差別有之可然義、殊ニ養育料は德用可致と貰請候儀ニ候得共、最初ゟ可殺心底ニ而貰請候儀共不相聞候間、右御定本文同樣引廻之上獄門可申付處、致病死候間、其旨可存段一件之もの共江可申渡、

朱書
評議之通濟

斷罪不論定書先例

〔決獄考〕

聟伊兵衛ヲ殺シ候者　　武州川越領駒林村百姓　甚五兵衛　六十五

父と申合伊兵衛ヲ殺候者　　四郎兵衛　四十二

當春ヨリ竹本彌左衛門長屋ニ罷在、七月四日ヨリ本所勘左衛門と申者方、常分罷出候、　伊兵衛　三十九

伊兵衛妻甚五兵衛娘　ムメ　三十一

右伊兵衛妻ムメ、川越ニおゐて訴出候者、夫伊兵衛義七月十六日、四郎兵衛同道仕、駒林村ヵ罷越、同廿日、又四郎兵衛計り江戸江罷越、ムメ江申聞候者、伊兵衛儀者生國信濃江罷越候、其方も亡母の墓參り候爲、川越へ參候樣ニと申候ニ付、廿一日、駒林村へ參り候處、伊兵衛儀、信濃より罷歸ラズ候樣子、親甚五兵衛ニ相尋候得者、廿八日頃ハ可歸由申候ニ付、八月朔日迄相待候得共、伊兵衛儀不罷歸、內川流之者有之由承之、其外甚五兵衛家內之樣子茂不審ク存候儀有之、同二日、所之名主役人江相斷、右流死之者川より引揚、五人組幷自分ニも參り見申候處、夫伊兵衛に紛れ無之由申ニ付、見分のもの遣し見せ候得ども、數日川中に在之死骸故、樣子相知がたく、依之甚五兵衛、四郎兵衛、其外家內のもの、駒林村の名主五人組、川越江呼寄、僉議遂候處、甚五兵衛、四郎兵衛、申口不分明、伊兵衛衣類雜具、家內に有之上は、申分難立、稠敷相尋候處、甚五兵衛申者、伊兵衛と七月十八日夜、口論仕候を、悴四郎兵衛見兼打倒シ、兩人ニ而〆殺し、川江捨候由白狀致し候、四郎兵衛儀者、父と一所ニ伊兵衛と口論仕、シメ殺し候由、是又白狀致し候、尤殺シ候節、外に手傳候もの無之旨申候、伊兵衛事、生國信濃松代の者と計妻承り傳へ、親類等覺不申候、

卯八月　　秋元但馬守

女有リ、其父ト兄トガ我夫ヲ殺セリ、女ソレヲ知ラズ、既ニシテ水中ニ人死シアルヲ見ルニ、我夫

ニ似タリ、里長ニ告テ其屍ヲ検視スルニ、我ガ夫ナリ、官是ヲ糺問セシニ、其父ト兄トノ殺セルナリ、官此ノ獄ヲモテ公ニ申ス、此女、父ヲ告ルノ罪有ルベシヤ否ヤ、

右

謹テ按ズルニ、人倫ノ大變ナリ、常理ヲ以テ決スベカラズ、此獄ヲ決セントニハ、第一ニ、人倫ノ綱常ヲ明ニスベシ、所謂君ハ臣ノ綱ナリ、父ハ子ノ綱ナリ、夫ハ女ノ綱ナリ、是人倫ノ綱常タリ、先此三綱ニ附テ、君父夫ノ三ツ相共ニ尊クシテ、其差等無キ事ヲ能々ワキマフベシ、第二ニハ、古ノ聖人、喪服ヲ制シ玉ヒシ所ヨリ、凡女子タル者ノ、父ト夫ヲミル事、何レカ親シク、何レカ從フベキトノ事ヲ、能々ワキマフベシ、周公ノ喪制ヲ按ルニ、女子既ニ許嫁スト雖モ、尚其室ニアルトキハ、父死シヌレバ、其父ノ爲ニ斬衰三年ストアリ、

是既ニ縁組シテ、夫ト定メヌ、レドモ、未ダ夫ノ家ニ行カザル時ハ、其親ヲ天トシテ、未其夫ヲ天トスルニ逮バズ、此時ニ當リテ、其夫ヲミル事、其父ニ及バザル事明カ也、

既ニ嫁シヌル後ニハ、其父死シヌレドモ、齊衰不杖期ヲ服ス、

既ニ夫ノ家ニ嫁シヌレバ、其天トスル所、夫ニアリ、是ヲ以其父トイヘドモ、只齊衰ヲ服シテ杖ヲモツカズ、一周年ニシテ喪ヲ除ク、此時ニアタリテハ、其父ヲミル事、其夫ニオヨバザル事亦明カナリ、

但シ既ニ嫁シタル女子ノ、其父ノ爲ニ服スル所ノ輕キ事ヲ、後代ノ人ノウタガヒヲモフ所有ベキガ故ニ、其傳ニ此事ヲ明カニシテ、女子家ニ在テハ父ヲ天トシ、嫁テハ夫ヲ天トス、父ヲ天トセザルハ、天ノ二ツ無ガ如シトミヘタリ、サラバ人ノ妻タル者ハ、ソノ父ト雖モ、是ヲミル事其夫ニ逮バザル事ハ、是聖人ノ義制アル事ヲ知リヌベシ、第三ニハ、人倫ニハ人倫ノ常ト變トニ附テ是ヲ論ズベシ、君、君タリ、臣、臣タリ、父、父タリ、子、子タリ、夫、夫タリ、婦、婦タリハ人倫ノ常ナルナリ、君、君

タラズ、臣臣タラズ、父父タラズ、子子タラズ、夫夫タラズ、婦婦タラザルハ、人倫ノ變ナルナリ、君君タラズト雖モ、臣臣タラズト云事無ク、父父タラズト雖モ、子子タラズト云事ナク、夫夫タラズト雖モ、婦婦タラズト云事ナキハ、人倫ノ變ニ處シテ、其常ヲ失ハズト申ベシ、凡人ノ臣タル者、其父我君ヲ殺シ、人ノ妻タル者、其父我夫ヲ殺スノ如キハ、人倫ノ變ニシテ、其變ノ最大成モノナレバ、其臣タルモノ、我ガ君エ忠ナラントスル時ハ、其父ニ孝ナラズ、其婦タルモノ、我夫ニ貞ナラントスル時ハ、其父ニ孝ナラズ、是等ノ事、其臣トナリ、其婦タルモノヽ、不幸ニシテ、其不幸ノ最大成モノト申スベシ、左アラバ、イカヾカ人倫ノ常ヲ以テ論ジ決シ申スベキ、古ノ人、其臣タルモノ、賊臣ヲ以テ父トシテ、我君ニ忠ナリシ者、既ニ其人アリ、○中略古人其死ザル故ヲ以テ、其節ヲ薄シトハセズ、サラバ此女ノ死セザルヲ以テ議ルベカラズ、大禹謨ニ、五刑明カニシテ、五教ヲ弼クト見ヘタレバ、凡獄ヲ決スル事、必其條理ヲ論ズベキ事成ルガ、君ト父ト夫ノ三ヲ以テ、人倫ノ三綱トスル時ハ、何ヲカ尊トシ、何レヲカ尊カラズト撰ビ申ベキ、サラバ女子ノ未嫁セザル者ハ、其父ヲ天トナシ、既ニ嫁テハ其夫ヲ天トスベキ事、則男子ノ未仕シテハ、其父ニ孝ナルベク、既ニ出テ仕ルニ及テハ、其君ニ忠成ルベキ事ニ相同ジ、倘シコヽニ人ノ臣タル者、不幸ニシテ、或ハ其父我君ヲ既ニ弑セシヲ告申ス事候ハンニ、其君ニハ忠ナリトモ、其父ニ不孝テリトテ、父ヲ告ル事ノ律ニ任セバ、誠ニセラルベキ故アランニハ、此女モ父ノ事告シニ似タリトテ、罪ニモ決シ玉フベシ、モシ君ヲ弑セントシ、君既ニ弑セル父ノ事ヲ告ル事、唐ノ李璀石演芬ガ如クナルモノ、忠臣義士タランニハ、此女ヲ罪セラルベキ理、某ハ存ズル所ニ候ハズ、

○按ズルニ、右ハ新井白石ノ論議ニシテ、折たく柴の記ニモ見エ、正徳元年ノ事ニ係レリ、

〔游藝園隨筆抄〕久須美六郎左衛門が、某○州書誤路と同じ寺社奉行吟味物調役たりし頃、淺野内匠頭が家來共の事、與風物語せしに、彼者共御仕置の事、人々の異論もあれど、何れにも生し置事は

ならぬなり、忠の心ありとて、死を免し候とも、中には年若き者もあり、四十六人のもの、悉く節を全する事いかゞあるべき、何はともあれ、御府内にて徒黨横行之沙汰に及び、特に重き身柄の吉良氏をも殺しぬ、其廉々を以て切腹被仰附は、尤至極のことにて、外ニ御處置はなきことなり、夫故彼者共の志も立、節も全くせしなるべし、御仕置はかゝる所に心附べきことなりと云り、六郎左衛門は、寛政の頃より天保迄、刑名のことに與り、某が敎授を受しこと少なからず、

〔板倉政要 六〕密通公事

京六條門跡ノ前ニ、筑前博多ヨリ浪人シタル士アリ、始ノ程ハ奴婢モ多ク扶持シケルガ、段々ニヲトロヘ、其比ハ僕一人ノ體ナルニ依テ、夫婦トモニ淺間敷渡世ヲイトナミケル處ニ、近邊ニ有德ナル町人有テ、少々イタワリケルガ、心安クナリユクマヽニ、彼浪人ノ妻ト密通ノ由アルニ依テ、浪人聞付テ、或時大坂ヘ用ノコト有トテ、老人ノ召仕一人ニ、火用心ナド云付ヲキ宿所ヲ立出ケルガ、近所ニ忍ビ居テ、彼間男ノ宿所ヘ來入スルヲ見テ、立歸リケレバ、彼有德人モ女房モ周障シケル處ヲ、卽席ニ間男ヲ切殺シ、其上ニテ妻女ヲモ刺殺シ、彼召仕ノ老僕ヲモ、付置タル處ニ、不義ノコトヲ吾ニ告知セザルハ、不屆千万ナリト云ヤイナヤ手討ニシタリ、去程ニ近處ノ者ドモ聞付テ、此儘ニテ差置ベキニアラズトテ、則板倉殿ニ訴ヘケル、依之彼浪人ヲ召寄セラレ御尋ノ處ニ、右之段々ヲ申上ケル、其時近隣ノ者ドモヲ召寄ラレ、右ノ段々紛ナキ間男カ、又子細アルコトカ、明白ニ申ベシト仰ケレドモ、有德人ノコトナレバ、誰在テ存知タルト申ス族モナケレバ、不審ニ思召シ、其先浪人ヲバ、町人ドモニ預ケ置ノ條、重テ御沙汰アルベキ旨也、依之彼有德人ノ一類ドモ、理不盡ニ殺害ニ逢タル由愁訴ニ及ビケル、勿論手討ニ逢タル老僕ノ子ドモ、是又理不盡ノ由種々ニ申シ掠メケル、去程ニ町ノ年寄十人組等ニ仰付ラレ、右ノ間男ニ无紛カト御穿鑿有トイヘドモ、有德人ニテ、殊ニ親類歷々ナレバ、口ヲ閉テ誰知タルト云人モナケレバ、彼ノ老僕ガ子

ドモ、間男ヲコソ切殺サルベキニ、半季ノ奉公人ヲ理不盡ニ殺害セラルベキ道理ナシトテ、是又愁訴ニ及ビケルユヘ、彼浪人ヲ召寄ラレ色々御穿鑿有トイヘドモ、隣家ノ者ドモモ不存由ナリ、證據ニナルベキ召仕ヲモ卽座ニ手討ニシタレバ、死人ニ口ナシトテ、彼浪人ニ切腹仰付ラレケル、京童ドモ聞之、无是非次第哉、常々ハ間男ナリトサヽヤキケルガ、此期ニ至テハ、有德人ノ歷々ニ恐レ、皆不存ヨシ申ニ依テ、アツタラ士ニ切腹仰付ラレタリ、誠ニ貧ハ諸道ノ妨ゲトハ、係ルコトヲヤ申ベキト私語ケル、

〔御仕置例類集一ノ一〕文化十三子年御渡

長崎奉行伺

一唐船江盜ニ入唐人を殺候もの御仕置場之儀評議

去亥八番唐船江罷越盜賊いたし、其上唐人壹人海中江投入爲溺死候一件之者共吟味仕、別紙御仕置伺奉差上候、右ニ付勘辨仕候所、是迄右樣之始末に而、可奉伺程之一件無之、唐人共よりも頻而吟味相願候儀に御座候間、可罷成儀ニ御座候はゞ、右唐船當湊在津中、御仕置御下知御座候樣仕度奉存候、尤舊例取調候處、寶永四亥年八月、永井讃岐守佐久間安藝守長崎奉行勤役之節、拔荷密買筋ニ携候もの共、伺之上於唐人屋敷門前、磔或は死罪等ニ申付候書留も相見申候、此度之儀茂、死罪之儀は牢屋敷ニ而御仕置仕、獄門之儀は和漢見懲シ之ため、唐人屋敷門前ニ懸ケ候樣可被仰付哉、此段奉伺候、

此儀先例相糺候處、可引當例は相見不申、彼地定り候御仕置場ニ於て御仕置申付候共茂、唐人共江モ爲相心得候儀ニは可有御座候得共、唐船江乘附荷物盜取候而已ならず、外國人を海中江投込爲致溺死候段、唐人共茂無據之儀ニ存、頻而吟味相願候趣相聞候間、犯科之もの共嚴刑に被處候を、在館之ものども及見候はゞ、御政務之行屆候を感伏可仕共奉存候、御定書御仕置

仕形ヶ條之內、磔、獄門、火罪等之御仕置は、淺草品川ニ於而申付、在方は惡事いたし候處江差遣候儀も有之、與之御文段も有之、惡事之品ニ寄候而は、於其所御仕置被仰付候儀、幷密買筋之一件ニは候得共、長崎奉行より申上候例も御座候間、旁伺之通り獄門之儀は、唐人屋敷門前江懸候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

子二月

朱書 評議之通、濟

〔御仕置例類集一ノ一〕文政三辰年御渡

松前奉行伺

一松前表刑名之儀評議

附箋
書面申上候通、松前奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

辰八月廿四日　評定所一座

文化三寅年、戸田筑前守羽太安藝守箱館奉行勤役之節、箱館市中拂は江戸拂に准じ、箱館市中鄉中拂は江戸十里四方追放ニ准じ御仕置申付度旨奉伺候處、伺之通被仰渡候、然ル處、松前上地以後、同所奉行所ニ相成、去ル午年荒尾但馬守松前奉行之節、同所ニ而申渡候追放もの御構場所之儀奉伺候處、伺之通被仰渡候、右伺書之內、松前箱館江差之內ニ而仕成候惡事ニ無之候とも、松前ニおゐて吟味之上、追放申付候節は、其住所之國之外、松前幷同所附村々迄相構候段は、箱館市中鄉中拂ニ相當り、右より一段輕く、松前市中而已相構候は、箱館市中拂ニ相當候筋ニ付、松前市中拂は江戸拂ニ准じ、松前市中鄉中拂は江戸十里四方追放ニ准じ、以來右二刑刑名を極置、御仕置申付度奉存候、新刑名之儀ニ御座候間、此段奉伺候、

此儀評議仕候處、松前市中拂は、箱館市中拂ニ見合、江戸拂ニ准じ松前市中而已相構、松前市中

郷中拂は、箱館市中郷中拂ニ見合、江戸十里四方追放ニ准じ、松前幷同所附村々迄相構候積極設、不相當之儀も相見不申候間、伺之通相心得可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

辰八月

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政九戌年御渡

太田攝津守伺

一三州能見村觀音寺領文吉、其外之者共、同寺夷船江對し及狼藉候一件、

本多中務大輔領分三州額田郡能見村之内
御朱印地觀音寺領庄屋

文吉

右之もの儀、〇中略庄屋役之身分、別而不屆ニ付中追放、

此儀御定書ニ、地頭江對し强訴、其上徒黨いたし逃散之百姓頭取死罪、名主重キ追放、組頭田畑取上所拂、總百姓村高ニ應じ過料、但地頭申付非分有之ば、其所ニ應じ、一等も二等も輕く可相伺、未進無之ニおゐては、重き咎ニ不及事與有之、右强訴其上徒黨逃散與分而有之候御文義、强訴之儀、敢而多人數徒黨いたし候譯之御趣意ニも無之樣ニ候得共、既頭取、末之御仕置も有之、いづれ大勢相催、及强訴候節之儀に可有御座、此ものは、人數相催罷越候儀ニは無之候間、右徒黨之意味は相離、地頭江對し及狼藉候迄之趣意ニ御座候、然ル處、右體之先例差當り相見不申、候得共、此もの發言ニ而罷越、同道いたし候利右衞門〻、地頭與は不存候共、觀音寺を及打擲乍〇中略此ものも、平百姓ニも無之名主役之儀ニ付、一己之狼藉ニおゐては例と强而輕重も無之聊疵付候次第ニも至候儀ニ付、例〻は品不宜、輕追放ニ而相當可仕、尤例之方は、主人ニ非分等之筋相聞不申、今般之儀は、地頭觀音寺素〻不如法之儀〻疑惑をも受事起候儀ニ候得共、右體地頭疵受候次第ニ相成候上は、御仕置相弛み不申方ニ可有御座候間、輕追放、

遠國斷罪制度

朱書
評議之通濟

〔吟味伺書進達留二ノ百七十八〕

右淡水(江州稱名寺住職)元下男
伊助

右元主人之難儀を推量、差圖ニ任、俱に逃去候段は、全く主從之場合ニ付、喧嘩口論、當座之儀にて人を殺候もの、右科人同類には無之、義理を以被賴、住所を隱、或は爲立退候分は、急度叱り置可申事と有之御定にも可准ものニ付、主人之儀ニ候上は、猶又輕み可申處、淡水は奉行所吟味之上、御仕置申渡相濟、本山江引渡ニ相成候ものニ付、一ト通之不屆もの、住所を隱候類とも譯違、右御定江茂難引當、先例相糺候處、的當之例相見不申、〇中略前書之通、奉行所おの〳〵御仕置申渡、引渡相成居候もの任申、俱々逃去候段、品不宜候間、三十日手鎖と御咎附仕候、

〔營中御日記〕一伊勢國三方年寄之者御呼出趣書付、老中渡之、

右書付之寫

覺〇中略

一山田におゐて、にせばんをいたし、其上町中へ火をも付候はんとたくみを仕候惡人出來ニ付而、籠者之由尤ニ候、成敗之儀者、其元御代官可被仰付候間、其節御代官と相談之上可及沙汰事、

〇中略

寛永元年三月六日

山田三方年寄へ

〔享保集成絲綸錄四十三〕元祿十丑年六月

覺

一逆罪之者仕置之事

一致付火候者仕置之事

右之科人有之ば逆僉議、一領一家中迄に而、外江障於無之は、向後不及伺、江戸之御仕置に准じ、自分仕置可被申付候、但他所江入組候はゝ、月番老中迄可被相伺候、遠島に可申付科は、領内に島無之においては、永牢或は親類縁者等江急度可被預置候、

六月

右書付、万石以上江計相觸之、

和解

和解ハ、和談、扱、吟味下、願下ナドアリテ多少其趣ヲ異ニセリ、而シテ官ヨリ諭シテ和解セシムルモノト、原被兩造、互ニ和熟シ、官ニ請ヒテ之ヲ爲スモノトノ二種アリ、但シ火附、盜賊、殺人、人勾引、惡逆等ノ刑罪ハ、和解ヲ聽サヾル例ナリ、

〔御定書百箇條〕目安裏書初判之事○中略

右雙方名主、家主、五人組立合可相濟、若不埒明候ハヾ、七日目、雙方罷出候樣裏書可遣事、

〔御定書百箇條〕出入扱願取上ざる品幷扱日限之事

元文五年極
一公事扱願候節、日數廿日可限、但遠國え懸り合候出入ハ、往返日限を考、其節々日數相極可申付事、

〔三餘雜錄四〕評定所式日立合共、御吉凶等ニ而、二日續相流候へば、都而濟口之分、宅ニ而承届候事、尤一座演說之事、

〔科條類典下〕元文五申年伺

公事出入取扱之儀申上候書付

奉行所ニ而、訴訟等扱と申事、親類か、寺社ニ候得者、本末抔ハ可有之、夫も三十日か、五十日とか、日切ニ候はヾ可申付候、他人之扱と申儀者、奉行所江出候以後ハ、取上申間敷哉之旨被仰聞奉承知候、

右扱之儀、御當地之出入訴出候得者、前々ゟ之御定ニ而、取扱候之上不相濟候はヾ、可罷出段、目安致裏書相渡候、在方ハ金銀出入之外ハ不及其儀、呼出し吟味仕候内にも、親類又ハ其所之もの共、江戸宿等取扱度旨申出候節、雙方江相尋、扱之筋、怪敷儀も無之候得者、出入之品ニ寄、願之

通、十日又ハ廿日程之日限ニ而、扱申付、出入相濟候儀も御座候、親類扱之外、他人之扱相止候得者、出入も多、扱ハ雙方得心之上、相濟候事ニ御座候得者、公事も數少ク、公事人之爲ニも宜敷御座候間、只今迄之通り取計可然哉と奉存候、尤盜賊人殺勾引等之類ハ、向後とも取扱申付間敷候、

申三月

〔科條類典下〕一出入扱願不取上品并扱日限之事

一火附　一盜賊　一人殺　一人勾引　一逆罪のもの　一名主等私曲非分

一博奕、三笠附、取退無盡、　一隱賣女　一巧事

元文五年極

右之外にも公儀江懸り候出入扱之儀願出候共、爲扱申間敷事、

〔聞訟秘鑑〕裁許伺差出候上、內濟ニ成候出入之事、

是ハ伺指出候上ニ而、出入相濟、未御下知無之內ニ候はゞ、早速其段申上、內濟承屆可然候、尤六ケ月之內之出入ハ、右之通一旦伺指出候上ハ、內濟ニ成不及御屆、御代官聞置ニ致、相濟來候、伺御下知以後、內濟致候分ハ、強而相願候共不取上、可然裁許之事、

〔評定書新張紙留〕朱書天保十三寅年七月十八日、播磨守御役所內寄合おゐて、同人立合、能登守申渡、〇中略

一公事出入御吟味中、熟談內濟いたし度旨を以、願之通日延等被仰付候節、最寄水茶屋等借受、打合及懸合候もの共も有之哉之趣入御聽、右は公事人共、無益之失却も相懸、其上御用辨も不宜故を以、雙方之宿江打寄候歟、又は御腰懸江罷出、懸合候樣、其時々公事人共より可申聞旨、文政三辰年中被仰渡候處、近年右類之取計および候もの間々有之哉ニ付、猶又厚心附、自然私共取計不行屆之もの共も有之候はゞ、其段可申立旨被仰渡候事、〇中略

天保十三寅年七月十八日　三組惣代名主　名前

御奉行所

〔言經卿記〕慶長八年七月十九日癸酉、當番代ニ内藏頭(○言經子、書籍)參了、八時分ニ退出了、道ニテ八條町之侍、民部ニカタナ拔之カヽリ了、去十四日夜、不謂口論之宿意也云々、則板倉(○重勝)ヘ人ヲ遣了、侍二人其外百人計來了、則八條殿町遣候處ニ、本人チクテン也云々、先返ス々々、無念ノ至也、其後近衞殿ヨリ進藤入道御使ニ被參、無心元之由也、其外方々ヨリ人ヲ給了、アタリ衆各被來了、勸酒了、其外彼町衆役人衆來、アツカイタキノ由有之、奉行衆へ理候而、其次第之由申了、　廿日申戌、八條殿町衆アツカイ度之由申、然共奉行次第之由申了、　廿五日己卯、民部八條町衆口論之事、各來了、相濟了、廣橋亞相アツカヒ也、則彼町衆禮ニ來了、廣(○橋兼勝)ヨリ侍相添也、此方ヨリモ使者遣了、

〔島田記(雜六)〕島田村名と清水井論噯之事

思ひ川より中津へ通候井筋、延享元子年、清水ゟ波候迄及出入候處、三ヶ所役人中、中和ニ而、雙方被致得心、井筋中程ゟ伏木八ヶ所ニ被致候處、少々間違有之、清水ゟ御願申上、被爲遊御吟味候處、御役所ゟ御内意被仰付、取噯候事、(○中略)

右之通噯雙方得心被致、和談相濟候上者、自今已後、相互ニ右井筋ニ付、少も違亂相成間敷候、爲後日私共噯狀致印形、雙方へ相渡し申候、以上、

寛延四年未五月(○中略)

毛賀村庄屋　源左衞門印

關村長百姓　清次郎印

島田村長百姓　五郎左衞門印

〔耳囊 上 三〕兩國橋幾世もち起立之事

幾世餅は、淺草御門內藤屋市郞兵衞方元祖ニ而、兩國橋之方松屋は、元來橋本町邊ニ住居せし輕き餅賣成しが、新吉原町之遊女幾世といへるを妻となして、夫婦にて餅を拵、毎朝兩國橋へ持出、欒市之者へ賣渡しける、年も盛過たる女ながら、吉原町の幾世〳〵と申觸し、殊之外商もありしに、今の店に九尺店有しを買、右の所へ引移り、兩國橋幾世餅と妻の名を名代にして商をせしが、幾世、曲輪に在し比の馴染の客抔、追々世話致し、暖簾を染させ抔して、右世話人共思ひ付にて、日本一流幾世餅と染て掛渡しけるにぞ、藤屋より障りを申立ける、其比の町奉行大岡越前守○忠相方へ訴出けるは、幾世餅之儀は、本來藤屋一軒にて、則暖簾も藤丸の印を染、相用候處、近所に同樣之商を初、暖簾も藤の丸を染、相用候事、難心得旨申立候故、松屋を呼出し吟味有しに、松屋申立しは私の妻は、元遊女にて幾世と申候故、自然と幾世餅と人々唱候儀ニ而、紋所は前々より用候品に有之、暖簾看板は何れも巳前幾世客より給りしと答、是又申所其謂なきにも非ず、双方申處ヲ以、自分存寄有、右存寄に隨ひ可申哉と越前守尋し故、何レも可奉畏旨答ける、双方共一所に居候故事やかまし、されば迚松屋が幾世餅といへるも其名を用る事商賣筋之儀、藤屋ハ古よりの事の由、又可致樣なし、然るに双方共江戸一と看板に印候間、江戸の入口に、右江戸一之譯を印可然、藤やは四ッ谷內藤新宿に引越、江戸一の看板を懸可申、松屋ハ葛西之新宿へ引越商可致、何れも新宿と唱ふる所なれば、汝等が同名を爭ふ所も相立可然旨被申ければ、双方共邊鄙へ引越之儀は、大に當惑して、熟談之上、願下ゲ致し、今の通商ひ致しけるとなり、

〔評定所留役覺書〕朱書手當もの公事合ニ不成以前、熟談之上、訴狀下ゲ相願候節之取計、文化三寅八月吉岡、

演說書

松平兵庫頭

一武州中野田村伊八外一人相手同國辻村彥三郞外五人疵付出入、

右出入、拙者方江訴出候ニ付、裏判者不差出、御演說之上、相手方呼出、雙方評定所江差出、吟味いたし候積之處、疵受候もの共、疵所平愈いたし、片輪者勿論、農業渡世之差障ニ不相成、雙方無申分、熟談內濟いたし、訴狀下ゲ度段願出候ニ付、疵所見屆候處、申立候通無相違候間、願之通訴狀下ゲ遣候樣可致候、依之及御演說候、以上、

寅八月

（御仕置例類集一ノ三）文化十一戌年御渡

町奉行根岸肥前守衛○鎭　伺

一武家之家來ゟ、御家人之儀を申立候一件、吟味下ゲ、承屆有無之儀ニ付評議、

當八月廿八日御渡被成候、前田大和守申上候、奉行所吟味願書付、幷大和守家來ゟ御勝手江差出候由之書付、且火消役大久保采女より差出候書付、京極周防守相渡候ニ付、打合一覽仕取調候處、大和守家來ニ而、町宅致居候、醫師石原玄昌儀、采女組同心竹內郡藏娘くわを、十一ヶ年以前くわ八歲之節、養女ニ致し候處、當六月、玄昌留守之節、くわ儀與風罷出候ニ付、所々相尋、麴町壹町目彌三郞店、清兵衛悴丹次郞留置候由ニ付、掛合之上取戾候處、其後郡藏儀、養女離緣之儀申談候處相濟、郡藏ゟくわ江面會之儀申入候、而も、玄昌不承知ニ而、當八月十七日、玄昌留守江、實父郡藏、其外同組同心三人罷越、玄昌家內之もの等手荒ニ取扱、くわを奪取連歸候間、再應取戾之儀、對談致し候得共不相返段玄昌申立之、郡藏其外實方ニ而、くわ儀玄昌方江罷歸候得ハ、自殺之外無之由申之、人命ニも拘り難歸旨ニ御座候、然ル處、大和守采女ゟ申上候書面之內、玄昌儀、養女くわ江不義申懸、無道之取計致し候儀有之趣も御座候間、不容易儀、玄昌儀も、幼年ゟ養育致候儀、右體之儀可

有之樣も無之、右之段相違ニ候得ハ、くわ儀、養父に對し、重キ申懸ニ相當リ、是又不安儀ニ御座候、其上采女組同心共も、武家之家來之宅江罷越、假令理不盡之儀無之候とも、玄昌留守之節、同人江對談も無之、くわを連歸候段ハ、不法之至ニ御座候、然ル處其砌鳴物停止、且御法事中、諸吟味物不仕節故、玄昌郡藏其外とも呼出し、預ケ申付置、麴町壹町目清兵衞悴丹次郎ハ溜預申付、其段去月廿九日申上置、右一件未吟味ハ不仕候得共、此節追々取調候處、雙方とも掛合等不行屆より事起、今更後悔いたし候趣ニ而、熟談之上、吟味下ケ度段、大和守在邑ニ付、口上之趣、使者を以申聞、大久保采女よりも同樣申聞、同人組與力共、幷大和守家來をも、得と承糺候趣、左之通御座候、

麴町壹丁目ニ致町宅ニ居候前田大和守家來醫師　石原玄昌

火消役大久保采女組同心　竹內郡藏

和田錠左衞門

中村金五郎

石川太右衞門

預ケ

右郡藏娘ニ而玄昌養女　くわ

麴町壹町目清兵衞悴　丹次郎

大久保采女組與力　吉田宇兵衞

前田大和守家來　胡川與市

戌八月廿九日溜預

同九月十一日出ニ溜預ケ

右之通申付置、双方掛合之行違も有之趣故、右一件取計候、采女組與力、大和守家來共も呼出し相尋候處、玄昌申聞候趣を以、養女くわをも、得と不相糺、大和守江之申聞方不行屆、采女組與力同心共も、是又采女江申聞候趣不相屆、故、兩人ゟ申上候書面、不都合之儀も出來仕、此節ニ相成、甚恐入、其段大和守、采女江も申聞候儀之由申之、其外一件一通り相糺候處、玄昌儀、養女くわ江

不義申懸ヶ候由之儀ハ、幼年ゟ養育いたし候もの之儀に而、右體之儀可有之樣無之候得共、愛憐之餘り、小兒同樣ニ存、戯れ事等申候儀も可有之哉、くわ儀、年頃ニハ相成候得共、一體愚成生質之上、當六月致家出候後ハ、家內不熟ニ付、實方江立戻度存心ニ有之、其上[illegible]頃病氣ニ而、取昇候儀も御座候故、一旦家出いたし候由、實方江差戻候儀も可有之と、麹町清兵衛悴丹次郎ハ、兼而玄昌方江出入いたし心安候間、同人を頼欠落いたし候處、丹次郎ゟ同人親類共方江連參り預置候得共、密通いたし候儀ハ無之、丹次郎ハ、くわを執心ニハ存候得共、承知も不致故、是迄致密通候儀無之旨申之、那藏其外、釆女組同心共、玄昌方江罷越、くわを連歸候節、手荒ニ及不法候由申立候儀ハ、玄昌歸りを相待候樣申候得共不聞入、くわを連歸候故、手荒ニ及不法候由ニ申候得共、別段手荒と申筋も無之由、一同申之、此上右一件、双方行違之儀ハ、熟談之上無申分、くわハ玄昌方江差戻し、一件吟。味。下。ゲ之儀相願候間、大和守在邑ニ付、右家來呼出し、大久保釆女江も懸合候處、右之通一件之もの熟談いたし、願下ゲ之儀申立候上ハ、兩人とも存寄無之、右願下ゲ之趣、聞濟候樣致度段申聞候間、願之通承屆候樣可仕奉存候、此段奉伺候、

此儀石原玄昌留守之節、竹內那藏外三人罷越、くわを連歸候段、假令手荒之儀ハ無之候とも、玄昌歸宅を不相待連歸候段ハ、御家人ニハ有之間敷儀ニ候得共、親子之愛憐ニ而、仕成候儀と相聞、町人百姓と違、其身分ニも寄候儀ニ而、其上趣意も不輕始末、吟味下ゲ承屆候先例相糺候處、差當相當之例相見不申、去酉年中、永田備後守伺之上、吟味下ゲ承屆候、觀世座役者、梅若庄右衛門聟養子ニ致し候積ニ而、同人方江引取置候、梅若新三郎儀、平日酒を好給、酔候節ハ情弱成儀も有之、殊ニ庄右衛門娘ひで異見をも不相用、其上申爭候砌、脇差を抜、諸道具等江切付立騷候故、ひで庄右衛門とも、親類共方江立退候次第ニ相成、右體之儀故、庄右衛門ゟ吟味相願候處、吟味中新三郎後悔いたし、庄右衛門江相詫候趣を以、吟味下ゲニ相成候儀も

有之候間、身分ハ違候得共、今般之一件も、一體娘取戻し一條之儀ニ而、公儀江拘リ候始末ニも無之、双方とも至愛憐迄と相聞、其上當座之憤、又ハ行違等も相聞、尤吟味詰ニ至候而ハ、品ニ寄、玄昌くわとも揚屋江差遣し、吟味不仕候而ハ、容易ニ相決申間敷哉、然ル所素々深キ子細も無之、彼是行違等ゟ事起候儀を穿鑿強而吟味致、右ニ付吟味中、万一死失之もの等出來候次第ニ至候も不穏、養實とも、互に一旦差縺候迄之一件ニ候上ハ、吟味下ゲ相成候とも、後弊を生じ候と申程之儀ニも有御座間敷、殊ニ的例ニハ無之候得共、御家人引合候一件、吟味下ゲ承屆候先例も御座候間、伺之通、吟味下ゲ承屆可申旨被仰渡候而も可然哉ニ奉存候、

戌十月

（朱書）評議之通濟

〔新張紙留〕葬式滯出入目安差出候節取計方之事

（朱書）寅六月廿三日御相談相決ス、周防守、左近將監、備後守欠席、

御相談書　　榊原主計頭

一上總國芝山村幸八代兼次郎儀相伺、觀音寺不法出入、

右出入、拙者方江訴出候ニ付相糺候處、訴訟方幸八女房まち儀、當月十六日出產之上母子共相果候ニ付、相手觀音寺は菩提寺故、假埋いたし候上、拙者方江可訴出旨其筋江被仰渡有之候樣、寺社奉行衆江御達仕、訴訟人も一先歸村申付置候處、於國元觀音寺心得違相辨へ、早速取置相濟、然ル上は、聊願筋無之候間、訴狀下ゲ度旨、訴訟人ゟ願出申候、右之通申立候上は、此上強而吟味いたし候筋ニも無御座候間、觀音寺御呼出之儀も、寺社奉行衆江御折返仕、願之通訴狀下ゲ遣申候、依之及演說候、

寅七月

松平右近將監殿　　榊原主計頭

先達而御相談之上御達仕候、上總國芝山村天台宗觀音寺儀、同村幸八女房まち死骸、葬式之儀相滯候段、全心得違之由を以、早々取扱相濟、願人ゟ訴狀下ゲ願出候間、訴狀下ゲ遣申候、依ㇾ之此上觀音寺儀、拙者方江罷出候ニおよび不ㇾ申候、此段其筋江被ㇾ仰渡ㇾ候樣奉ㇾ存候、以上、

寅七月〇文政元年

〔勘要記〕文政十二亥年

曾我豐後守〇助郷、勘定奉行、掛

酒狂之上戸障子等破、其上疵爲ㇾ負候一件、吟味下ゲ伺、

書面庄八、次郎兵衞、疵所平愈いたし、片輪ハ勿論、農業渡世之差障ニ不ㇾ相成、龜吉、權次郎身分も平右衞門、庄吉引取、一同吟味下ゲ相願上ハ、願之通下ゲ遣、且龜吉儀、酒輿とは乍ㇾ申、善兵衞外壹人宅戸障子打破立騷、殊ニ其節乍ㇾ聊も、庄八外壹人ニ疵爲ㇾ負候始末不埒ニ付、急度も可ㇾ申付ㇾ處、一件吟味願下ゲをも相願候ニ付、宥免を以手鎖申付、權次郎一同、平右衞門、庄吉江引渡遣、證文取ㇾ之差出、龜吉手鎖日數三十日相立候ハヽ、不ㇾ及ㇾ伺可ㇾ被ㇾ差ㇾ免候、以上、

亥五月

〔目安秘書坤〕遠國ニ付、御代官陣屋ニおゐて、濟口爲ㇾ聞屆、

演說書　　曾我豐後守

一備中國勇崎村次左衞門相手、同國□□村傳次郎貸金出入、

右出入吟味中之處、夫々對談相整、金子調達中、雙方立戾歸村之儀相願、然ル處、遠國之儀、出訴も難儀可ㇾ致候間、取引相濟候ハヽ、訴訟方支配御代官古橋新左衞門江濟口證文可ㇾ差出ㇾ旨申渡、同人江は、右之趣承屆候樣及ㇾ差圖、追而新左衞門ゟ申越次第、目安は內座におゐて消印可ㇾ致と存候、

天保三辰九月

（德川禁令考後聚九法曹事務）慶應元丑年十一月落着

信濃守掛〇中略

爲取替濟口議定證文之事

野州都賀郡箱森村地內、字沖五町田ニ而、四反四畝拾五歩之處、古田開發之儀、御支配幷御給々樣より被仰付候ニ付、先年掛來候通、堰相仕立候趣申之、川下四ヶ村ニ而者、新規〆切之趣申之、及雙論、右箱森村より沼和田村外三ヶ村相手取、內藤隼人正樣江奉出訴候處、沼和田村外三ヶ村ニ而者、巴波川通り、年々川浚仕來、用水引取候川筋、箱森村ニ而、新規堰伏込樋幷堀割いたし候ニ付、右之分元形之通ニいたし、以來新規之儀不致、用水無差支、御田地相續相成候樣被仰付度旨、同御奉行所樣江奉出訴候處、箱森村先訴も有之候趣ニ而、返答書を以可申立旨被仰渡、御調中噯人立入、掛合之上、雙方憤り之儀貰請、熟談內濟仕候趣、左之通、

一箱森村當時開發之場所、幷畑形之分ともニ、下田四反四畝拾五歩之分、用水樋口之儀ハ、巾六寸、高四寸ニ相定、水引取方之儀者、往還際通、土手形堀共ニ、床地巾三尺ニ相病、用水乘候程ニ割上、差支無之樣相仕立、尤床地之分、上下川形ニ隨ひ、川巾不狹樣、寄洲之分切流、右地面之儀ハ、別紙繪圖面之通、東西道內、幷樋口之邊畑通、卯之木境地幅之外、開發者ハ勿論、切添等決而不致、且用水之儀者、外堀江捨水無之樣いたし、巴波川江相流、以來新規之儀者不致、水下村々用水川筋、差障不相成樣可致筈取極、雙方聊無申分、熟談內濟仕候處相違無御座、然ル上者、右一件ニ付、雙方より重而御願ヶ間敷儀仕間敷候、依之爲御念噯人一同致連印、濟口證文、幷繪圖面爲取替置申候處如件、

伊奈友之助御代官所横山伊豆守竹本寅之吉知行所
野州都賀郡箱森村小前村役人總代名主
訴訟人　甚五左衛門

天保四巳年四月

同　組頭　谷左衛門

土岐大學頭知行所同州同郡沼和田村
市川出雲守土屋左京平塚谷大郎知行所同州同郡川連村
能勢主殿頭熊倉小野右衛門知行所同州同郡牛久村
高井數馬知行所同州同郡土與村
右七拾四ヶ村小前村役人總代右沼和田村年寄

相手方　傳左衛門
同　牛久村　同　安左衛門
同　川連村　同　藤兵衛
右役人片柳村名主　三之丞
半五左衛門
柏木村年寄　重右衛門
組頭　六郎左衛門

〔目安秘書坤〕雪消迄熟談出入

演說書　菅沼下野守

一越後國下小森村外六ヶ村と、同國正善寺村外五ヶ村、堤上設出入、

是は松平越前守御預所、松平和泉守領分村方も相加、同人預分、其外御預所村方をも相手取、間宮筑前守方江訴出、當閏七月廿五日、差日之初判差出候處、同人病氣ニ付延設、同九月十三日、雙方評定所江呼出、肥前守初對決承り、追々致吟味候內、歸村之上、於場所雙方立會、熟談いたし度由相願候間、願之通承り屆、其後拙者方江引渡ニ相成候處、雪國故、此節雪降積、場所立會相成兼候間、雪消次第、熟談內濟いたし度段願出候由、松平越前守御預所役人幷松平和泉守家來申聞候間、承屆置候、依之及御演說候、以上。〇年月闕

〔目安秘書乾〕內濟異變出入、奉行轉役後は、月番奉行初判、金公事は裁許後濟切候迄、株筋持切之積

り、

一何事ニよらす、願出、相手方江差紙遣し及吟味候処、取扱等有之、内證ニ而相済度旨雙方願候得者、済口承届為差出候、右之出入、其當座ハ勿論、程過候而も、兎角内證ニ而不相済、又々願出候節は、非番月ニ而も、最初之懸りニ而請取、可遂吟味候、

右之通申合有之内済違變出入、又は先裁許之儀を、又々申爭候類も、最初懸りニ而吟味可致ハ勿論之儀ニ御座候、然ル処、内済承届、又は裁許等申付候奉行、轉役被仰付候後、内済違變出入、又は先裁許之儀を申爭訴出候節は、懸り取極方申合無之區々ニも相成候間、以来轉役被仰付候後、右轉役致し候奉行懸りニ而、内済承届候一件、又は裁許申付候出入、或は申分有之出訴之節は、跡株ニ而必引請、其時々月番懸りニいたし可申候、

但金公事之分、三十日限、裁許申付候後、済切候迄、是迄之通、株附ニいたし可申候、

右之通享和元酉年四月二日、於御城申合極候事、

（目安秘書乾）済口を改度との願ニ付、元懸奉行江可願出旨申渡、

一奉行所江済口差出候次第を、改度段申立、左候而は、奉行所を替候ニ當り候間、一旦済口差出候者、心得違之段申立、元懸り之奉行所江可願出儀之旨、利害申聞、元懸り江達書遣ス、右は文化三寅年十月、武州中野村往來差留出入、

左近將監

武州多摩郡中野村
村役人惣代名主　四郎兵衛
年寄　仙藏

兵庫頭殿

濟口證文

右之もの共儀、別紙之通願書差出候處、御懸り御吟味中、內濟いたし候節、取極候趣を相改度由申立候儀ニ付、向貴様江可願出旨申渡、右願書は下遣し可申と存候、依之及御懸合候、以上、

寅十月

〔島田記中三〕濟口證文之事

一中馬總代入用、我等分、是迄皆濟無御座候、數ヶ村之儀故、取〆相談相調不申候間、無據御願申上、來酉二月廿一日、御評定所へ可罷出、御裏判頂戴相付候處、此度內々ニ而皆濟被成、慥ニ受取、出入相濟申候、然者我等方ニ而濟口證文差上、其御村方へ少も御苦勞掛申間敷候、爲後證仍而如件、

南北小野村之内
中馬總代　雨澤清兵衛

明和二年酉二月

拾九ヶ村

〔德川禁令考後聚十四行刑條例〕安永九子年二月

桑原伊豫守掛

小作滯出入

一下總國鎌ヶ谷村文左衞門相手同村作右衞門外拾壹人、質地小作滯出入、

書面之出入、質地證文に、田畑位反別も無之、質地ニハ難立間、借金ニ准じ、元利合金貳拾三兩三分、銀七匁餘、三十日限、文左衞門方江可濟旨彌十郎江申渡、證文申付、文左衞門江渡置、日限迄ニ不相濟候はゞ、切金貳分貳朱ニ申付、毎月定日を極、其方役所ニ而取遣爲致、日限之度々濟切候はゞ、濟口證文取之可差出候、

〔德川禁令考後聚十八行刑條例〕天保二卯年

借金銀裁許分散濟方之事

秋山久藏様　　山崎助左衛門
高橋吉右衛門様　　中村次郎八
下村彌助様

御紙面致拜見候、各様彌御安全被成御勤仕、珍重奉存候、然者金銀借方之もの、身體分散配當之儀掛合候得共、貸方之もの不承知ニ而出訴致候節、相手方より右之趣申立候節、配當帳之趣、一應取調之上、分散相違無之、御配當割付、不得心ニ候はゝ、追而身上持次第、相掛候様願人江申渡、熟談之上濟口相成候はゝ、御承届之御見込ニ候得共、此方御役所振合御承知被成度、且又右様之出入濟口ニ相成候先例御座候はゝ、可申進旨御掛合之趣致承知候、素より御同様之見込ニて、是迄右様之取扱も有之候間、差向壹例見當候間、書抜差進申候、猶取調見當候はゝ、差進候様可致候、右御報可得御意、如此御座候、以上、

三月十四日

書抜
差上申濟口證文之事

一南本所元町御用屋敷吉五郎店平八煩ニ付代半次郎奉申上候、村松町家持小兵衛儀ハ、祖父之代より懇意仕、殊ニ身上向宜敷ものニ付、去文政六未年中、姉うた手當金百貳拾兩、翌申年中、金六拾兩、兩度ニ金百八拾兩相預ケ、壹ケ月金四拾兩ニ付、金壹分之利足ニ而取極候處、其後内金貳拾兩請取、殘而金百六拾兩相預ケ置候處、右小兵衛儀病死仕、當時忰小兵衛代ニ相成候ニ付、其旨相斷置申候、然ル處私儀、右金子入用之儀御座候ニ付、相返呉候様催促仕候得共、一向埒明キ不申、去寅八月中罷越、右小兵衛江面會仕度段申候得者、旅行致候趣ニ而取敢不申、其後迚も不當之懸合のみ仕候ニ付、度々同人方江罷越候得共、未ダ旅行中之旨申之、乍恐難澁至極仕候、畢竟小兵衛僞を申聞、返金相延候事と乍恐奉存候間、無是非當正月廿六日、御訴訟奉申上候得

者、同三月二日、雙方可罷出旨、御裏書頂戴相附、公事合當日雙方罷出、相手方より返答書差上、御吟味に相成、度々御日延奉願上奉恐入候、然ル處今般以取扱熟合、滯金百六拾兩有之候處、相手小兵衛身上難立行候間、家財賣拂、右代金を以、借財方分散仕候程之儀ニ付、右配分金七兩ニ、親類共より金拾八兩足シ、都合當金貳拾五兩請取、殘金百三拾五兩之儀者右小兵衛當時旅行中ニ付、歸宅之上、家內暮シ方相付次第可爲相濟旨、親類加判之新規證文取之、以來雙方聊無申分、右出入熟談、內濟仕度段奉願上候得バ、願之通被仰付、偏ニ御威光と難有仕合ニ奉存候、依之爲後證濟口證文奉差上候處仍如件、

天保二卯年四月十五日

吉次郎店平八煩ニ付代
願人　半次郎　印
家主　吉次郎　印
五人組　德右衛門　印
名主友太郎煩ニ付代　治兵衛　印
村松町家持小兵衛旅行ニ付
同人妻ふき煩ニ付代
相手　万吉　印
五人組　彌七　印
名主源六煩ニ付代　茂兵衛　印

御奉行所樣

〔濟口證文帳十二ノ七〕差上申濟口證文之事

四谷愛染院門前五人組持店友吉奉申上候、私儀去戌年中、四谷忍町家主九右衛門方ニ同居罷在候處、同年十一月中、同町家主八五郎媒人ニて、九右衛門も里方ニ罷成、內藤新宿作兵衛店吉兵衛

娘たき方江、聟養子ニ相成候處、吉兵衛家業體は、同宿旅籠屋家持庄次郎手代ニ而、日々通勤之身分ニ有之候間、私江は元手を與江、何商賣ニても相應之渡世を存付、往々見世差出呉候筈ニ御座候處、時節柄差急ニ金子も出來兼候趣申ニ付、便々養父方ニ厄介相成居候も如何と存、私之才覺にて、金子他借致、當六月中、四谷愛染院門前五人組持店江轉宅致、舂米渡世相始候處、養父吉兵衛義、當七月中病氣ニ付、妻たき義を看病として差遣し置候處、吉兵衛義、當九月十四日病死致候ニ付、私義ゟ罷越、萬端世話致、跡仕舞仕候上、私義は歸宅仕、妻たき義は養母すみ方に殘し置、尤同人義は、當八月晦日、親元ニ逗留中出產致し、女子出生仕、此節肥立候得共引留置相歸し不申、夫而已ならず、同宿又兵衛地借重吉と申者、吉兵衛存生中より懇意合之譯にて、此度養母すみニ被賴候由を以、掛合罷越、私江申聞候は、吉兵衛倅松五郎ゟ若年にて、母之養育も出來兼候間、たきを離緣請、母之許にて聟養子致し、始終可掛所存ニ付、離緣狀差出呉候樣致度、强而拒み候得ば、御出訴ニも可及旨申威し、案外之申聞方ニ有之、强ち養母すみの一存にも無之、畢竟重吉ゟ內心に見込有之、右樣無體を申掛、勵押致し候義に有之、私義當節召仕にも無之、只壹人にて家業向差支難澁罷在候間、妻幷出生之女子共相歸呉候樣、媒人八五郎江相賴候處、同人ゟ病死吉兵衛と元より懇意之間柄故、養母すみ幷重吉方江睨み、却て私に不筋之異見申聞、更ニ媒人之詮無之、一同馴合罷在、心外至極ニ奉存候間、無是非當十一月廿四日、御訴訟奉申上候得ば、同十二月三日、雙方可罷出旨之御裏書頂戴相附候處、公事合當日相流レ、追而御沙汰之旨被仰渡奉畏候、然ル處扱人立入、雙方立合之上、及掛合候得ば、御出訴已前掛合方行違之廉も有之、右體御出訴相成候次第ニて奉恐入候、依之得と示談之上、願人友吉妻たき義は、改而及離緣、出生之小兒ゑげ義は、父友吉方、今般引取可申之處、乳も無之ニ付、同人七歲ニ相成候迄、離緣之妻たき幷同人母すみ方江相預ヶ養育致し、右年限ニ至り候得ば、無異儀友吉方江引取候筈碇と規定取極、以後聊違論爲無之、雙方一札爲取

替仕候上は、外に御吟味可奉願上筋も改無御座候、以來雙方無申分、右出入御裏書中、熟談内濟仕、偏ニ御威光と難有仕合奉存候、依之爲後證御裏書壹通相添、濟口證文奉差上候處、仍如件、

文久三亥年十二月

四谷愛染院門前五人組持店　友吉　印

五人組　喜右衛門　印

同　與吉　印

名主　次右衛門

外御用ニ付代　卯兵衛　印

相手　四谷鹽町家主　八五郎　印

五人組　藤五郎　印

名主篤入院煩ニ付代　忠兵衛　印

木村敬藏様元御代官所武州豊島郡内藤新宿又兵衛地借　直吉　印

家主　又兵衛　印

五人組　定助　印

同宿作兵衛店吉兵衛後家すみ方ニ居候同人娘　たき揃　印

家主　作兵衛　印

五人組　安兵衛　印

名主高松喜六煩ニ付代　善四郎　印

御奉行所様

〔張紙留〕評定所公事訴訟人急病ニ而江戸宿代ニ而濟口聞届之例、

明和九辰年八月廿五日

一武州廣瀬村貳人總代武左衛門相手同村六人總代利兵衛外貳人、地所江手入いたし候出入、
是者彈正少弼懸ニ而、評定所江呼出、濟口承屆候積之處、訴訟人武左衛門急病之由ニ而、江戸
宿代リニ罷出候得共、於評席評議之上、濟口承屆、
但相手利兵衛外貳人罷出、双方訴之旨、濟口之留帳ニ記、

編修總裁	正三位男爵	細川潤次郎
編修長	正七位文學博士	佐藤誠實
編修副長	文學博士	松本愛重
編修副長心得		石井小太郎
編修		廣池千九郎
編修兼校合員		加藤才次郎
編修		山本信哉
編修		村尾節三
編修	正七位	佐伯有義
編修兼校合員		三浦千畝
校合員		馬瀨長松
校合員		坂倉廣胖

編修顧問　正四位文學博士　黒川眞頼

編修顧問　從四位　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　正七位　井上頼圀

明治三十五年十二月二十日印刷
明治三十五年十二月二十五日發行



神宮司廳

（白石製本所　製本）

昭和十年三月一日印刷
昭和十年三月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

東京市芝區金杉新濱町十二番地
發行者　川俣馨一

印刷者　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一〇五四番　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

